福島県文化財調査報告書第85集

国営総合農地開発事業

母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ

西原遺跡
佐平林遺跡
（Ⅶ，Ⅷ区）
谷地前Ｃ遺跡

１９８０年３月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化センター

福島県文化財調査報告書第85集

国営総合農地開発事業

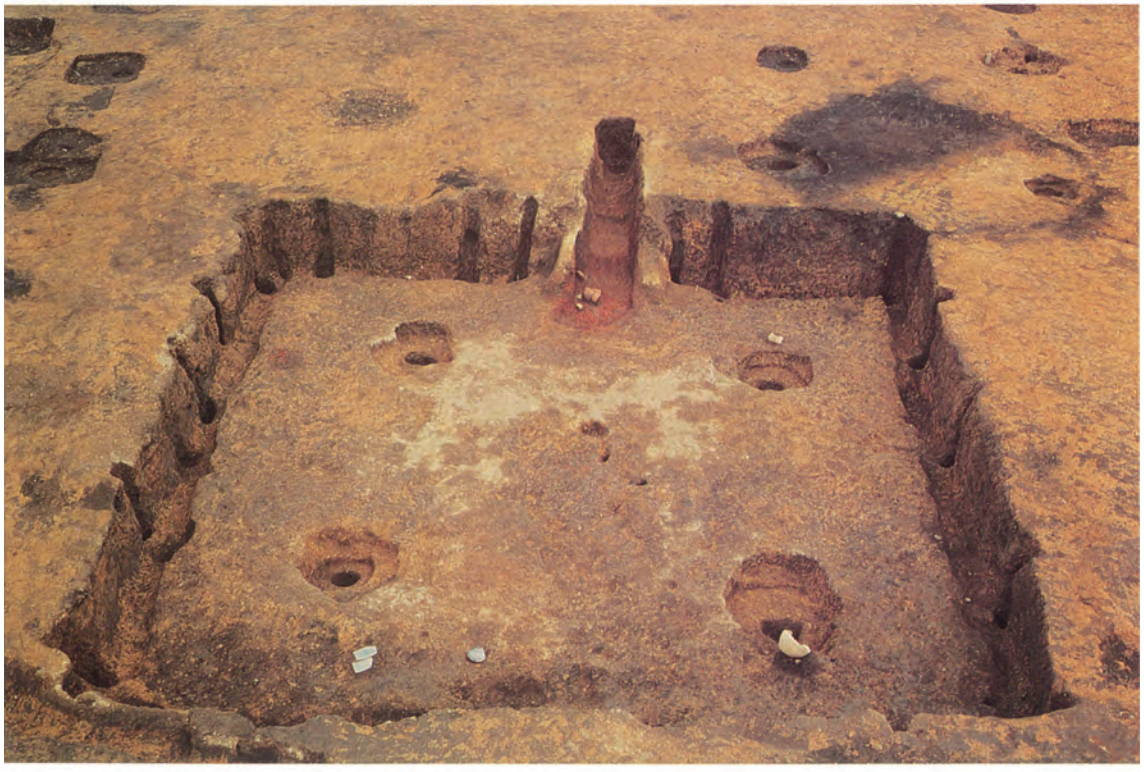
母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ

西原遺跡
佐平林遺跡
（Ⅶ，Ⅷ区）
谷地前Ｃ遺跡

1　西原遺跡全景（南から）

2　佐平林遺跡（Ⅷ区）全景（東から）

3　谷地前Ｃ遺跡全景（南から）



4　谷地前Ｃ遺跡27号住居跡全景（南から）

序　　文

国営総合農地開発事業である母畑（ぼばた）地区開拓建設事業は，福島県中通り地方を貫流する阿武隈川の上流右岸を対象とし，農業近代化を図るための開発事業であります。その範囲は，郡山市・須賀川市・玉川村・石川町・中島村・東村の６市町村にまたがり，長さにして約30㎞，面積は4,379haにおよぶ大規模な事業です。

阿武隈の流れは，その流域に豊かな耕地を形成し，政治・経済・文化の中枢となる都市の発達をうながし，県民生活の大動脈となっております。この傾向は現代に限らず古代にも及び，その流域には古墳・官衙跡・寺院跡，さらにそれらを支えた集落跡・生産跡など貴重な遺跡を数多くのこしております。当母畑地区もその一部であり，数多くの遺跡の存在が知られております。

これらの遺跡の保存と開発事業の調和を図るため，昭和54年度の開発に際しては，22遺跡の試掘調査を行い，東北農政局と事前協議を行いました。

協議の結果に基づき，東村の西原遺跡，佐平林遺跡Ⅶ・Ⅷ区，谷地前Ｃ遺跡，石川町源平Ａ・Ｃ遺跡，十三塚塚群，須賀川市下小山田古墳群，山田Ｂ遺跡の８遺跡９地区について福島県教育委員会が，（財団法人）福島県文化センターに発掘調査を委託し，ここに調査成果を報告書として刊行することができました。本書が埋蔵文化財の活用に，さらにほ学術研究に役立つことを念願いたします。

最後にご協力いただいた地元有志，須賀川市・石川町・東村各教育委員会関係者，市町村関係者，東北農政局母畑開拓建設事業所および開発関係各位の埋蔵文化財に対するご理解に深く感謝の意を表します。

昭和55年３月

福島県教育委員会

教育長　辺　見　栄之助

序　　文

昭和40年代前半から大規模な面積を対象とする総合農地開発事業母畑地区が計画され，昭和50年代に入り，事業は開畑・圃場整備等の画工事に着手いたしました。

福島県教育委員会では，こうした開発事業の展開と埋蔵文化財保護との調和をはかるため，事業に先行して遺跡の分布調査を実施してきましたが，保存を必要とする埋蔵文化財は膨大な数量となり，また事業の性格から日常生産活動を行っている農地そのものが開発事業の対象であるため，埋蔵文化財の調査は非常に困難な問題になってきました。

このような状況の中で昭和52年度に当福島県文化センターは，県教育委員会の委託を受けて，埋蔵文化財の調査を行うため，事業第２部に遺跡調査課を附設し，逐年人員増を重ねて，調査体制を増強してまいりましたが，急増する調査量に追いつけず，ともすれば開発事業の隘路になっております。

本報告書は，昭和54年度に記録保存をするために行った国営総合農地開発事業母畑地区の遺跡発掘調査の成果を報告書として刊行するものです。

山積する課題の中での調査報告ですが，本書が埋蔵文化財理解のために多くの人達に利用されることを，更には学術研究の一助となって失われた遺跡が甦ることを念願いたします。

昭和55年３月

財団法人福島県文化センター
館　長　高　橋　哲　夫

例　　言

1　この報告書は，国営総合農地開発事業母畑地区にかかる遺跡の，昭和54年度発掘調査した報告である。

2　この報告書には，昭和54年度発掘調査を実施した９遺跡のうち，東村に所在する３遺跡・４地区を収めた。

3　この母畑地区事業の促進にあたっては，東北農政局（母畑開拓建設事業所）と福島県教育委員会（文化課）とが埋蔵文化財についての協議を行い，埋蔵文化財の保存を図るとともに，事業計画上保存困難な地区について発掘調査を実施し，記録保存に努めている。

4　昭和54年度の発掘調査費は，国庫補助・県費と東北農政局の負担金からなる。

5　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。福島県文化センターでは，54年度は次の職員を配して調査にあたった。

遺跡調査課長	目黒吉明(福島県教育委員会出向)	文化財主事	寺島文隆(文化センター職員)
専門文化財主査	日高　努(　〃　)	〃	鈴鹿良一(　〃　)
文化財主査	佐藤博重(　〃　)（８月１日より福島県教育委員会に復職）	〃	橋本博幸(　〃　)
文化財主事	高木和夫(福島県教育委員会出向)	〃	山内幹夫(　〃　)
〃	阿部正行(　〃　)	〃	石本　弘(　〃　)
〃	大越忠士(　〃　)	〃	芳賀英一(　〃　)
〃	玉川一郎(　〃　)	〃	安田　稔(　〃　)
〃	大越道正(文化センター職員)	嘱　託	阿部俊夫(　〃　)

6　本報告書は下記により分担執筆し，目黒が監修した。

序　　章	日高，玉川
第１編　西原遺跡	高木，大越(忠)，鈴鹿，橋本，山内，安田
第２編　佐平林遺跡Ⅶ区	日高，大越(道)，芳賀，安田
第３編　佐平林遺跡Ⅷ区	日高，大越(道)，橋本，安田
第４編　谷地前Ｃ遺跡	阿部(正)，玉川，橋本，芳賀，安田，阿部(俊)，仲田

凡　　例

1　本報告書は各調査員による分担執筆によっており，用字，用語についてはできるだけ統一を計ったが，時間的な制約から細部については不統一な点がある。

2　報告書執筆の基準は次のとおりである。

（1）　実測図中の方位は磁北を示し，本文中に記した方位角度は磁北からの偏度である。

（2）　実測図中および本文中のP_1・P_2は，１号ピット・２号ピットを表わす。

（3）　遺構実測図は原則として１/30，１/40，１/60，１/80，１/100縮尺で採録し，それぞれにスケールを付してある。

（4）　遺物実測図は原則として石器を2/3，鉄器・拓影を1/2，土器を1/3で採録し，それぞれにスケールを付してある。

（5）　土器実測図および拓影断面において，縄文土器・弥生式土器・土師器は白ヌキ，須恵器はベタ黒にして区別した。なお土師器内面のスクリーントーンは内黒土師器を表わしている。

（6）　写真は各調査員が撮影・焼付け・レイアウトしたが，一部版元が焼付けたものがある。

（7）　遺物写真は任意の大きさでレイアウトした。

3　各編での引用文献については，執筆者の敬称を省略し，参考文献として各編の最後にまとめた。

4　発掘調査の資料は次の略記号の組合わせにより整理し，福島県文化センターにおいて保管の予定である。

（市町村略号）

東村　ＨＩ

（遺跡略号）

西原遺跡　ＮＨ	佐平林遺跡Ⅶ区　ＳＢ・Ⅶ
佐平林遺跡Ⅷ区　ＳＢ・Ⅷ	谷地前Ｃ遺跡　ＹＭ・Ｃ

5　本文中で使用した遺構略号は次の通りである。

竪穴住居跡　ＳＩ	掘立柱建物跡　ＳＢ
土坑　ＳＫ	溝跡　ＳＤ

目　　次

序　　章……3
　第１節　調査経過……3
　第２節　遺跡の位置……8
　第３節　遺跡周辺の自然的環境……9
　第４節　遺跡周辺の歴史的環境……10

第１編　　西原遺跡……13

　第１章　調査経過……15
　　第１節　位置と地形……15
　　第２節　調査経過……15

　第２章　遺構と遺物……18
　　第１節　竪穴住居跡……18
　　１号住居跡(18)　２号住居跡(22)　３号住居跡(26)　４号住居跡(31)
　　５号住居跡(33)　６号住居跡(37)　７号住居跡(40)　８号住居跡(45)
　　９号住居跡(48)　10号住居跡(51)　11号住居跡(54)　12号住居跡(57)
　　第２節　掘立柱建物跡……58
　　１号建物跡(58)　２号建物跡(58)　３号建物跡(60)　４号建物跡(62)
　　５号建物跡(62)　６号建物跡(66)　７号建物跡(66)　８号建物跡(70)
　　９号建物跡(70)　10号建物跡(70)　11号建物跡(71)　12号建物跡(72)
　　13号建物跡(73)
　　第３節　土坑・その他……74
　　土　坑(74)　　溝　跡(83)

　第３章　考　　察……86
　　第１節　遺物について……86
　　１　第１群土器の編年的位置づけ(86)　　２　第２群土器の編年的位置づけ(97)
　　３　第３群土器の編年的位置づけ(97)
　　第２節　遺構について……99

第２編　　佐平林遺跡（Ⅶ区）……107

第１章　調査経過……109
第１節　位置と地形…… 109
第２節　調査経過…… 109

第２章　遺構と遺物……113
第１節　竪穴住居跡…… 113
１号住居跡(113)　２号住居跡(117)　３号住居跡(121)　４号住居跡(126)
第２節　掘立柱建物跡…… 127
１号建物跡(127)　２号建物跡(129)
第３節　土坑・その他…… 130
土　坑(130)　溝　跡(133)　その他(135)

第３章　考　　察……136
第１節　遺物について…… 136
第２節　遺構について…… 137

第３編　佐平林遺跡（Ⅷ区）……141

第１章　調査経過……143
第１節　位置と地形…… 143
第２節　調査経過…… 144

第２章　遺構と遺物……146
第１節　竪穴住居跡…… 146
１号住居跡(146)　２号住居跡(149)　３号住居跡(151)　４号住居跡(159)
５号住居跡(162)　６号住居跡(170)　７号住居跡(172)　８号住居跡(183)
９号住居跡(185)　10号住居跡(190)　11号住居跡(193)　12号住居跡(196)
13号住居跡(200)　14号住居跡(204)　15号住居跡(207)　16号住居跡(209)
17号住居跡(210)　18号住居跡(211)　19号住居跡(212)　20号住居跡(214)
21号住居跡(214)　22号住居跡(223)
第２節　掘立柱建物跡…… 223
１号建物跡(223)　２号建物跡(223)　３号建物跡(225)　４号建物跡(227)

５号建物跡(228)　６号建物跡(231)　７号建物跡(231)　８号建物跡(233)
９号建物跡(234)　10号建物跡(236)　11号建物跡(237)　12号建物跡(239)
第３節　土　　坑…… 240
第４節　その他の遺構・遺物…… 264
Ｅ－６グリッド土師器密集地点(265)　溝　跡(266)　表土出土の遺物(267)

第３章　考　　察……271
第１節　遺物について…… 271
古墳時代後期の遺物(271)　奈良・平安時代の遺物(275)
第２節　遺構について…… 284
竪穴住居跡(286)　掘立柱建物跡(291)　土　坑(293)
各期における遺構相互間の関係について(294)

第４編　谷地前Ｃ遺跡……299

第１章　調査経過…… 301
第１節　位置と地形…… 301
第２節　調査経過…… 301

第２章　遺構と遺物……304
第１節　旧石器時代の遺物包含層…… 304
第２節　竪穴住居跡…… 322
23号住居跡(322)　24号住居跡(325)　25号住居跡(328)　26号住居跡(333)
27号住居跡(336)　28号住居跡(340)　29号住居跡(342)　30号住居跡(344)
31号住居跡(347)　32号住居跡(352)　33号住居跡(356)　34号住居跡(357)
35号住居跡(358)　36号住居跡(360)　37号住居跡(362)　38号住居跡(366)
39号住居跡(368)　40号住居跡(372)　41号住居跡(375)　42号住居跡(377)
第３節　掘立柱建物跡…… 378
３号建物跡(378)　４号建物跡(380)　５号建物跡(383)　６号建物跡(384)
７号建物跡(386)　８号建物跡(386)　９号建物跡(389)　10号建物跡(391)
11号建物跡(392)　12号建物跡(393)　13号建物跡(395)　14号建物跡(395)
15号建物跡(397)　16号建物跡(397)　17号建物跡(401)　18号建物跡(401)
19号建物跡(403)　20号建物跡(403)　21号建物跡(406)　22号建物跡(406)
23号建物跡(407)　24号建物跡(408)

第４節　土　　坑…… 409
第５節　その他の遺構と遺物…… 415
掘立柱柱列(415)　溝跡(416)　黒色土遺物包含層(416)　中央区遺物包含層(416)
西南区遺物包含層(418)　その他の遺物(420)
第３章　考　　察……424
第１節　旧石器時代の遺物包含層と遺物について…… 424
1　遺物の分布(424)　2　石器群の編年(426)
第２節　縄文時代の遺構と遺物について…… 428
第３節　古墳時代の遺構と遺物について…… 429
第４節　奈良・平安時代の遺構と遺物について…… 430
1　奈良・平安時代の遺物の分類(430)
2　土師器・須恵器の組成と編年的位置づけ(434)
3　土師器に見られた墨書・線刻文字(438)
4　鉄器・その他の遺物(438)
5　奈良・平安時代の遺構について(438)

挿図・表目次

序　　章

〔図　目　次〕

第１図　母畑地区位置図……４
第２図　母畑地区開発計画図……５
第３図　調査遺跡位置図……（折込）

第１編　西原遺跡

〔図　目　次〕

第１図　西原遺跡地形図……16
第２図　西原遺跡遺構配置図……（折込）
第３図　１号住居跡……19
第４図　１号住居跡出土土師器……21
第５図　２号住居跡……23
第６図　２号住居跡内土坑……24
第７図　２号住居跡出土土師器……25
第８図　２号住居跡出土紡錘車……26
第９図　３号住居跡……27
第10図　３号住居跡カマド……28
第11図　３号住居跡出土土師器……30
第12図　４号住居跡……32
第13図　４号住居跡出土土師器……33
第14図　５号住居跡……34
第15図　５号住居跡カマド……35
第16図　５号住居跡出土土師器……36
第17図　６号住居跡……38
第18図　６号住居跡カマド……39
第19図　６号住居跡出土土師器……39
第20図　７号住居跡……41
第21図　７号住居跡出土土師器……43
第22図　７号住居跡出土土師器……44
第23図　８号住居跡……46
第24図　８号住居跡カマド……47
第25図　８号住居跡出土土師器……48
第26図　９号住居跡……49
第27図　９号住居跡カマド……50
第28図　９号住居跡出土土師器……51
第29図　10号住居跡……52
第30図　10号住居跡カマド……53
第31図　10号住居跡出土土師器・須恵器……54
第32図　11号住居跡……55
第33図　11号住居跡出土土師器……56
第34図　12号住居跡……56
第35図　12号住居跡カマド……57
第36図　１号建物跡……59
第37図　２号建物跡……60
第38図　３号・10号建物跡……61
第39図　４号建物跡……63
第40図　５号建物跡……64
第41図　６号・13号建物跡……65
第42図　７号建物跡出土土錘……66
第43図　７号建物跡……67
第44図　８号建物跡……68
第45図　９号建物跡……69
第46図　11号建物跡……71
第47図　12号建物跡……73
第48図　１号土坑……74
第49図　２号土坑……75
第50図　３号・11号土坑……75
第51図　４号土坑……76
第52図　６号土坑……76
第53図　５号・８号・12号土坑……77
第54図　９号土坑……78
第55図　10号土坑……79
第56図　10号土坑出土土師器……79
第57図　７号・13号・14号・15号土坑……80
第58図　16号・17号・18号・19号土坑……82
第59図　佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区出土杯分類図……89
第60図　板倉前Ｂ遺跡・上高野遺跡出土杯分類図…91
第61図　杯形態変遷模式図……93
第62図　遺構時期区分図……（折込）

〔表　目　次〕

第１表　土坑一覧表……84
第２表　第１群土器分類表……86
第３表　住居跡別土器組成表……87

第４表　板倉前Ｂ遺跡出土杯分類表……90
第５表　杯形態変遷試案……92
第６表　第３群土器分類表……97
第７表　竪穴住居跡一覧表…… 103
第８表　掘立柱建物跡一覧表…… 104

第２編　佐平林遺跡（Ⅶ区）

〔図　目　次〕

第１図　佐平林遺跡（Ⅶ区）周辺地形図…… 110
第２図　佐平林遺跡Ⅶ区遺構配置図…… 112
第３図　１号住居跡…… 114
第４図　１号住居跡カマド…… 115
第５図　１号住居跡出土土師器・羽口…… 115
第６図　１号住居跡出土遺物拓影…… 116
第７図　２号住居跡…… 118
第８図　２号住居跡カマド，P_1・P_2…… 119
第９図　２号住居跡出土遺物…… 120
第10図　３・４号住居跡…… 122
第11図　３・４号住居跡カマド…… 123
第12図　３号住居跡出土遺物…… 124
第13図　４号住居跡出土羽口…… 126
第14図　１号建物跡…… 128
第15図　２号建物跡…… 129
第16図　１～３号土坑…… 131
第17図　４号土坑…… 132
第18図　１・２号溝断面図…… 133
第19図　３・４・５号溝断面図…… 134
第20図　表土出土土師器…… 135
第21図　佐平林遺跡Ⅴ・Ⅶ区遺構時期区分図…… 138

第３編　佐平林遺跡（Ⅷ区）

〔図　目　次〕

第１図　佐平林遺跡（Ⅷ区）周辺地形図……（折込）
第２図　佐平林遺跡（Ⅷ区）遺構配置図…… 145
第３図　１号住居跡…… 147
第４図　１号住居跡出土土師器…… 148
第５図　２号住居跡…… 149
第６図　２号住居跡カマド…… 150
第７図　２号住居跡出土土師器…… 150
第８図　２号住居跡出土帯金具…… 151
第９図　３号住居跡…… 152
第10図　３号住居跡カマド…… 153
第11図　３号住居跡出土土師器…… 154
第12図　３号住居跡出土土師器…… 155
第13図　４号住居跡…… 160
第14図　４号住居跡カマド・貯蔵穴…… 161
第15図　４号住居跡出土土師器・砥石…… 161
第16図　５号住居跡…… 163
第17図　５号住居跡カマド…… 164
第18図　５号住居跡出土土師器・須恵器…… 166
第19図　５号住居跡出土鉄製品…… 168
第20図　５号住居跡出土瓦・石器…… 169
第21図　６号住居跡カマド…… 170
第22図　６号住居跡…… 171
第23図　６号住居跡出土土師器・須恵器…… 172
第24図　７号住居跡…… 173
第25図　７号住居跡カマド・貯蔵穴…… 174
第26図　７号住居跡カマド…… 175
第27図　７号住居跡周堤部…… 175
第28図　７号住居跡出土土師器…… 178
第29図　７号住居跡出土土師器…… 179
第30図　７号住居跡出土土師器・須恵器・土製品・
　石製品…… 182
第31図　８号住居跡…… 184
第32図　８号住居跡出土土師器…… 185
第33図　９号住居跡…… 186
第34図　９号住居跡出土土師器・須恵器…… 188
第35図　９号住居跡出土鉄製品…… 190
第36図　10号住居跡…… 191
第37図　10号住居跡出土土師器・鉄製品…… 192
第38図　11号住居跡…… 194
第39図　11号住居跡出土土師器・紡錘車…… 195
第40図　12号住居跡…… 196
第41図　12号住居跡カマド…… 197
第42図　12号住居跡出土土師器・須恵器…… 198
第43図　12号住居跡出土鉄製品…… 200
第44図　13号住居跡…… 201
第45図　13号住居跡カマド…… 202
第46図　13号住居跡出土土師器…… 203
第47図　14・15・16号住居跡…… 205
第48図　14号住居跡出土土師器…… 206
第49図　15号住居跡出土土師器・須恵器…… 208
第50図　16号住居跡出土土師器…… 210
第51図　18号住居跡…… 211
第52図　18号住居跡出土土師器…… 212
第53図　19号住居跡…… 213
第54図　19号住居跡出土土師器…… 214
第55図　21号住居跡…… 215

第56図　21号住居跡カマド…… 216
第57図　21号住居跡張り出しピット(P_1)…… 217
第58図　21号住居跡出土土師器…… 219
第59図　21号住居跡出土土師器…… 220
第60図　21号住居跡出土土師器…… 221
第61図　１号建物跡…… 224
第62図　２号建物跡…… 225
第63図　３号建物跡…… 226
第64図　３号建物跡出土土師器…… 227
第65図　４号建物跡…… 228
第66図　５号建物跡…… 229
第67図　６号建物跡…… 230
第68図　７号建物跡…… 232
第69図　８号建物跡…… 233
第70図　９号建物跡出土土師器…… 234
第71図　９号建物跡…… 235
第72図　10号建物跡…… 236
第73図　11号建物跡出土土師器・須恵器…… 237
第74図　11号建物跡…… 238
第75図　12号建物跡…… 239
第76図　１号土坑出土土師器…… 240
第77図　３号土坑出土土師器…… 242
第78図　10号土坑出土土師器…… 243
第79図　13号土坑出土土師器…… 243
第80図　15号土坑出土土師器…… 244
第81図　16号土坑出土土師器…… 246
第82図　17号土坑出土土師器…… 246
第83図　27号土坑出土土師器…… 247
第84図　31号土坑出土土師器…… 247
第85図　36号土坑出土土師器・須恵器・鉄製品… 249
第86図　36号土坑出土土師器・須恵器…… 251
第87図　39号土坑出土土師器…… 254
第88図　１・２・５・11・37号土坑…… 256
第89図　３・12・13号土坑…… 257
第90図　15・31・35・36・39号土坑…… 258
第91図　４・６～10・14・16号土坑…… 259
第92図　17～25号土坑…… 260
第93図　26・27・29・30・32・33・34号土坑…… 261
第94図　38・40～44号土坑…… 262
第95図　Ｅ－６グリッド土師器出土状況…… 265
第96図　Ｅ－６グリッド出土土師器…… 265
第97図　１号溝…… 266
第98図　３号溝…… 267
第99図　表土出土土師器・須恵器…… 268
第100図 表土出土瓦…… 270
第101図 佐平林遺跡(Ⅷ区)遺構時期区分図…… 285

〔表　目　次〕

第１表　５号住居跡壁柱穴深度表…… 164
第２表　主な土坑内堆積土…… 262
第３表　土坑形態分類表…… 263
第４表　土坑一覧表…… 263
第５表　第Ⅰ群土器分類表…… 273
第６表　第Ⅲ群杯形土器分類表…… 279
第７表　遺構時期分類表…… 284
第８表　竪穴住居跡一覧表…… 287
第９表　掘立柱建物跡一覧表…… 292
第10表　掘立柱建物跡重複関係…… 292

第４編　谷地前Ｃ遺跡

〔図　目　次〕

第１図　谷地前Ｃ遺跡周辺地形図…… 302
第２図　谷地前Ｃ遺跡遺構配置図……(折込)
第３図　谷地前Ｃ遺跡層序…… 305
第４図　Ｂ列における遺物垂直分布図…… 306
第５図　旧石器時代遺物出土平面分布図……(折込)
第６図　旧石器時代の石器(ナイフ形石器，彫器，
　削器，ドリル) …… 310
第７図　旧石器時代の石器(剝片)…… 311
第８図　旧石器時代の石器(剝片)…… 312
第９図　旧石器時代の石器(石核・剝片)…… 313
第10図　旧石器時代の石器(石核)…… 314
第11図　旧石器時代の石器(石核)…… 315
第12図　旧石器時代の石器(石核)…… 316
第13図　旧石器時代の石器(石核・剝片)…… 317
第14図　旧石器時代の石器(石核)…… 318
第15図　旧石器時代の石器(磨石・たたき石)…… 319
第16図　旧石器時代の石器(磨石・たたき石)…… 320
第17図　旧石器時代の石器接合資料…… 321
第18図　23号住居跡…… 323
第19図　23号住居跡出土土師器・鉄製品…… 325
第20図　24号住居跡…… 326
第21図　24号住居跡出土土師器・鉄製品…… 328
第22図　25号住居跡……(折込)
第23図　25住居跡カマド…… 329
第24図　25号住居跡出土土師器・須恵器・砥石… 331
第25図　26号住居跡…… 333
第26図　26号住居跡出土土師器・鉄製品…… 335
第27図　27号住居跡……(折込)
第28図　27号住居跡カマド…… 337

第29図　27号住居跡出土土師器・須恵器・砥石… 339
第30図　28号住居跡…… 341
第31図　28号住居跡出土土師器・須恵器…… 342
第32図　29号住居跡…… 343
第33図　30号住居跡…… 345
第34図　30号住居跡出土土師器…… 346
第35図　31号住居跡…… 348
第36図　31号住居跡出土土師器・鉄製品…… 350
第37図　32号住居跡…… 353
第38図　32号住居跡カマド…… 354
第39図　32号住居跡出土土師器・鉄製品…… 354
第40図　33号住居跡…… 356
第41図　34号・42号住居跡…… 357
第42図　35号住居跡…… 359
第43図　35号住居跡出土土師器…… 360
第44図　36号住居跡…… 361
第45図　36号住居跡出土土師器・須恵器・鉄製品 362
第46図　37号住居跡…… 363
第47図　37号住居跡出土土師器…… 365
第48図　38号住居跡…… 367
第49図　38号住居跡出土土師器…… 367
第50図　39号住居跡…… 369
第51図　39号住居跡出土土師器・砥石・紡錘車… 371
第52図　40号住居跡…… 373
第53図　40号住居跡出土土師器・須恵器・
　　鉄製品…… 374
第54図　41号住居跡…… 376
第55図　41号住居跡出土土師器・鉄製品…… 377
第56図　42号住居跡出土土師器…… 378
第57図　３号建物跡…… 379
第58図　４・５号建物跡…… 381
第59図　４号建物跡…… 382
第60図　５号建物跡…… 384
第61図　６号建物跡…… 385
第62図　７号建物跡…… 387
第63図　８号建物跡…… 388
第64図　８号建物跡出土土師器・鉄製品…… 389
第65図　９号建物跡…… 390
第66図　９号建物跡出土鉄製品…… 391
第67図　10号建物跡…… 392
第68図　11号建物跡…… 393
第69図　12号建物跡…… 394
第70図　13号建物跡…… 396
第71図　14号建物跡・２号溝跡…… 397
第72図　15号建物跡…… 398
第73図　16号建物跡…… 399
第74図　17号建物跡…… 400
第75図　17号建物跡出土鉄製品…… 401
第76図　18号建物跡…… 402
第77図　19号建物跡出土土師器・鉄製品…… 403
第78図　19号建物跡…… 404
第79図　20号建物跡…… 405
第80図　21号建物跡…… 406
第81図　22号建物跡…… 407
第82図　23号建物跡…… 408
第83図　７号土坑…… 409
第84図　８号土坑…… 410
第85図　９号土坑…… 410
第86図　９号土坑出土土師器…… 411
第87図　10号土坑…… 411
第88図　11号土坑…… 412
第89図　12号土坑…… 413
第90図　13号土坑…… 413
第91図　14号土坑…… 414
第92図　15号土坑…… 414
第93図　16号土坑…… 415
第94図　中央区遺物包含層土層断面…… 416
第95図　中央区遺物包含層出土遺物…… 417
第96図　西南区遺物包含層出土遺物…… 419
第97図　その他の遺物…… 420
第98図　調査区東端部遺物包含層出土の
　　縄文土器…… 420
第99図　竪穴住居跡時期区分図…… 439
第100図　掘立柱建物跡時期区分図…… 441

〔表　目　次〕

第１表　中央区遺物包含層出土土師器破片数
　　一覧表…… 418
第２表　西南区遺物包含層出土土師器破片数
　　一覧表…… 419
第３表　谷地前Ｃ遺跡検出住居跡一覧表…… 421
第４表　谷地前Ｃ遺跡検出掘立柱建物跡一覧表… 422
第５表　出土石器種類別組成表…… 426
第６表　出土石器石質別組成表…… 426
第７表　遺構別伴出土器一覧表……（折込）

序　　章

序　　章

第１節　調　査　経　過

１．昭和53年度までの経過

国営総合農地開発事業母畑地区は，福島県の中通り地方を南北に貫流する阿武隈川の上流右岸沿いに，南北約30㎞にわたり細長く展開する丘陵台地で，郡山市・須賀川市・玉川村・石川町・中島村・東村の６市町村にわたる，面積4,379haにおよぶ大規模な開発事業である。阿武隈山地の西縁に展開するこの地域は，多くの開発可能地を抱えながらも開発が遅れ，地域住民からの開発に対する期待は強かった。

東北農政局は，この地域の総合開発事業を計画し，昭和35年度から国直轄の調査を開始した。水源として，阿武隈川支流，北須川の上流石川町大字母畑に千五沢ダムの築造を計画し，昭和43年３月から国営総合パイロット事業に着手した。その後，昭和45年度から始まった米の生産調整を含む農政転換があり，開田予定地が畑地灌漑に切り変わる等の事業内容の変更はあったが，現在では昭和63年度に事業を完成させることを目標にして，事業が進められている。

この開発事業の進展にともない，福島県教育委員会では昭和44年から母畑事業地区内の遺跡分布調査を実施し，昭和51年時点で母畑事業地区内で147箇所の遺跡の所在を確認した。同年から母畑事業での開畑・圃場整備等の面工事が開始されるに及び，県教育委員会と東北農政局母畑事業所との間で，埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられた。一方，協議が継続されるなかで国庫補助および東北農政局の暫定的な費用負担をうけて次の調査を行った。

試掘調査石川町（15工区）赤羽地区の11遺跡

『母畑地区遺跡試掘調査概報Ⅰ』（福島県文化財調査報告書第61集）

発掘調査　上森屋段遺跡　　石川郡石川町大字赤羽字上森屋段

『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報』（福島県文化財調査報告書第60集）

昭和52年度には，財団法人福島県文化センター内に遺跡調査課を新設し，県教育庁からの出向職員を中心に５名の職員を配置し，母畑事業区内の埋蔵文化財に関する調査体制を整えた。昭和52年度の事業は，母畑地区の19遺跡の試掘調査と7,400㎡の発掘調査を県文化センター遺跡調査課が行った。

表面調査　東村（16工区）　上野出島地区　100ha

試掘調査　石川町（15工区）　赤羽地区　４遺跡，　沢井地区　10遺跡

　　東村（16工区）　上野出島地区　５遺跡

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第66集）

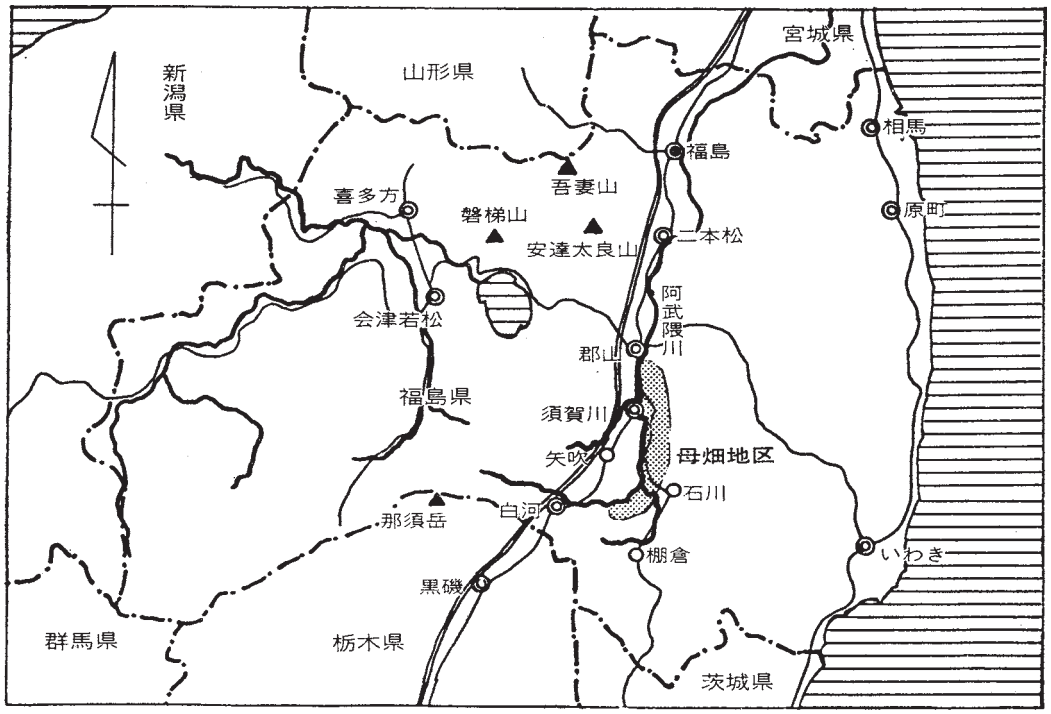
発掘調査	佐平林遺跡（Ⅰ～Ⅳ区）	西白河郡東村大字上野出島字谷地前	2,500㎡
	佐平林遺跡（Ⅴ区）	西白河郡東村大字上野出島字佐平林	800㎡
	谷地前Ｃ遺跡	西白河郡東村大字上野出島字谷地前	1,600㎡
	赤根久保遺跡	西白河郡東村大字上野出島字赤根久保	2,500㎡

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第67集）

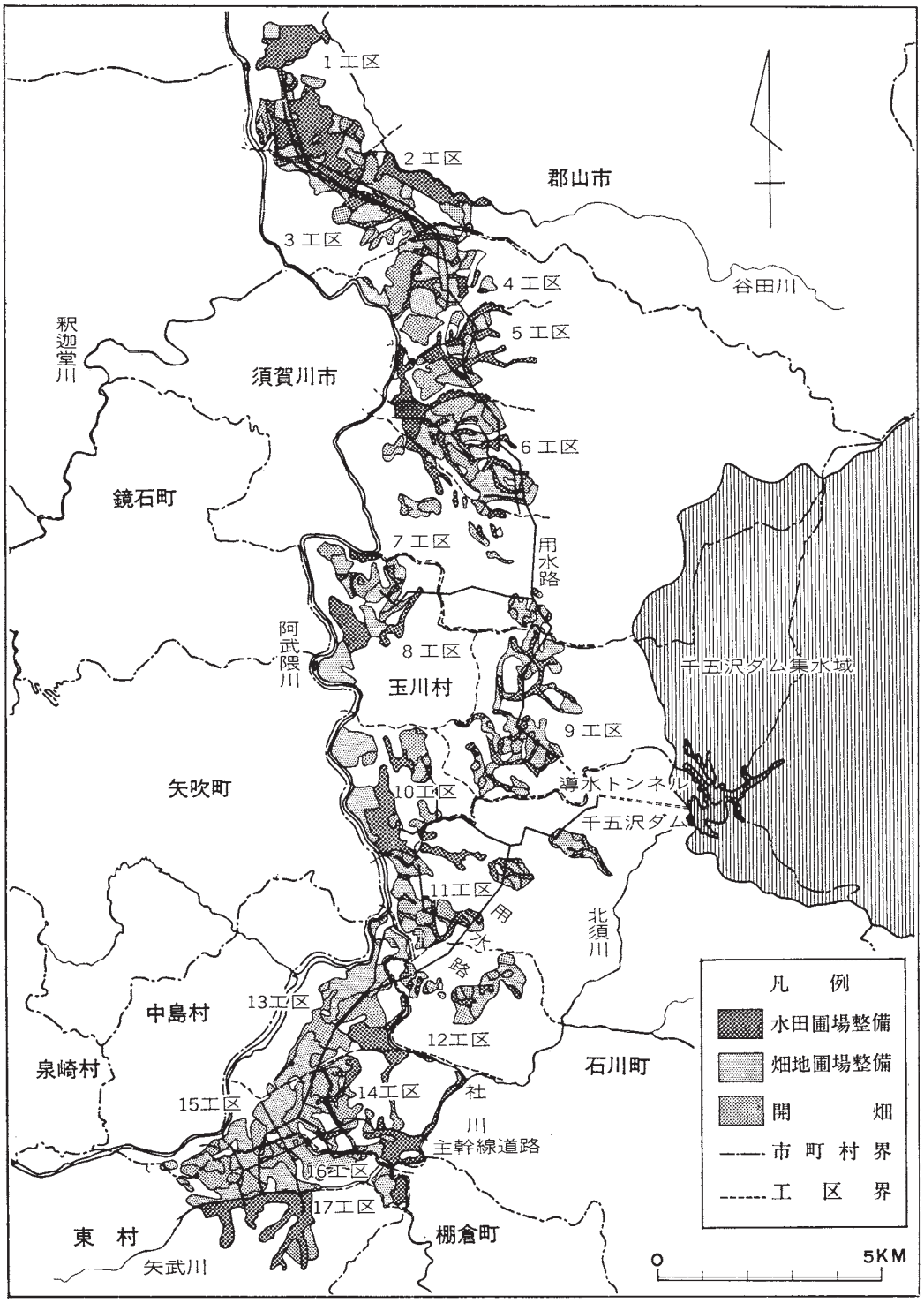
昭和53年度は，母畑事業の進展とともに開畑・圃場整備などの面工事実施面積が拡大した。これと同時に遺跡の調査面積も増大した。また53年度以降の事業計画を推進するためにも早期に事業区内の埋蔵文化財の実態を把握する必要があった。事業地区内の遺跡数は多く，総合農地開発という事業の性格から，広大な面積にわたり遺跡が壊滅的な影響を受けるために，開発と文化財保護の調整が大きな問題となった。この問題は単に県教育委員会と母畑事業所の二者だけの問題だけではなく，早期の開発を要望する各地権者にとっても切実な問題であった。

昭和53年度以降の母畑地区開発事業の施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて，事業及び埋蔵文化財調査の円滑な推進を計るため，福島県教育長と東北農政局建設部長との間に覚書が交換された。(54・１・12)

こうした経過のなかで県教育委員会ほ，県文化センター遺跡調査課に４名の職員を新たに出向



第１図　母畑地区位置図



第2図　母畑地区開発計画図

させて調査体制を強化し，年間1,000haの表面調査，20遺跡の試掘調査，10,000㎡の発掘調査を前提として母畑事業所との間に埋蔵文化財保存協議を行い，調査を県文化センターに委託した。

昭和53年度の分布調査は，54年度までの工事予定地域を含む工区を主対象にして，当該工区全域の表面調査を計画し，須賀川市（５工区）・石川町（11工区・15工区）・東村（16工区・17工区）の５つの工区1,008haの表面調査を完了した。調査の結果，新発見の遺跡106箇所を確認した。

試掘調査は，昭和53年度工事実施予定地域の須賀川市（５工区）９遺跡，石川町（11工区）３遺跡，東村（16工区･17工区）５遺跡，計17遺跡と，昭和54年度工事予定地区の須賀川市（５工区）７遺跡，石川町（11工区・15工区）２遺跡，東村（16工区）１遺跡の計10遺跡，その他４遺跡を試掘した。

『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第73集）

上記の分布調査の結果をもとに，昭和53年度工事予定地内における埋蔵文化財保存協議が行われ，開発工法などによる遺跡保存対策を含め，４遺跡について記録保存のための発掘調査を実施した。調査面積は当初の予定面積を大きく上回り最終的には13,000㎡を数えた。

発掘調査	佐平林遺跡（Ⅵ区）	西白河郡東村大字上野出島字佐平林	3,000㎡
	板倉前Ｂ遺跡	西白河郡東村大字上野出島字板倉前	1,000㎡
	笊内古墳群	西白河郡東村大字上野出島字笊内	3,300㎡
	達中久保遺跡	石川郡石川町大字赤羽字達中久保	5,700㎡

『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第74集）

２．昭和54年度の調査経過

昭和54年２月８日，母畑事業所から54年度の工事実施予定地区の説明がなされ，これに伴う埋蔵文化財の保存について，県教育委員会と母畑事業所との間で協議が行われた。53年度の試掘調査の結果から54年度工事実施地区内における遺跡の要発掘面積は，約100,000㎡を推定していたが可能な限り盛土工法等で遺跡の保存を計るという方向で協議が進められ，８遺跡・９地区について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととし，県文化センターに調査を委託した。

県文化センター遺跡調査課では，４月から新たに６名の専門職員を採用し，調査体制の強化を計り，母畑地区の遺跡調査に併行して，阿武隈地域広域農業開発事業，国営総合農業開発事業矢吹地区の埋蔵文化財分布調査を行うこととした。

昭和54年度の母畑地区発掘調査は，須賀川市・２遺跡，石川町・３遺跡，東村・３遺跡４地区が計画された。年度内の調査箇所も多く，地域的に遺跡が分散しており，加えて工事の実施時期は，早い地区では７月の工事発注が予定されていた。特に工事着工が７月～８月に予定されていたことは，作物の状況，農繁期における作業員の確保等で調査を実施する際の困難が多かった。

そのために遺跡調査課では，調査期間･作付の状況･作業員の募集等の諸問題を検討し，全体の

調査計画の中で各遺跡の調査計画を調整し，発掘調査を予定している遺跡を三つのブロックに編成し，ブロック単位の調査計画を作成した。各遺跡の調査期間・面積は次の通りである。

下小山田古墳群	須賀川市大字下小山田字山田	1,000㎡	５月21日～６月29日
山田Ｂ遺跡	須賀川市大字下小山田字山田	500㎡	６月18日～７月６日
源平Ａ遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	800㎡	５月15日～６月１日
源平Ｃ遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	1,200㎡	５月15日～６月１日
佐平林遺跡（Ⅶ区）	西白河郡東村上野出島字佐平林	700㎡	６月18日～７月17日
西原遺跡	西白河郡東村上野出島字西原	2,000㎡	７月16日～９月７日
谷地前Ｃ遺跡	西白河郡東村上野出島字谷地前	4,000㎡	７月10日～９月25日
佐平林遺跡（Ⅷ区）	西白河郡東村上野出島字谷地前	2,500㎡	９月６日～11月７日
十三塚塚群	石川郡石川町大字沢井字十三塚	500㎡	10月22日～10月30日

須賀川市の下小山田古墳群と山田Ｂ遺跡は，両遺跡の間が約100ｍ程度の近距離なので，この２遺跡を一つのブロックに組み入れ継続して調査した。石川町は３遺跡のうち源平Ａ遺跡・源平Ｃ遺跡を一つのブロックとした。これら二つのブロックは工事発注予定が７月に予定されていたため，５月から調査を開始した。石川町の十三塚塚群は，隣接する東村の遺跡群を調査する合間を利用して調査を実施する計画を立てた。東村は３遺跡４地区を一つのブロックに設定した。このブロックは面積の上でも今年度調査予定面積の約70％を占め，遺跡の全面が畑地で作付されており，作付状況も桑・タバコ・コンニャク等作物補償額の算定が困難なものが多く，他の作物についても収穫時期に差があるため，発掘承諾についての地権者との交渉が難行し，同一遺跡を数時期に分けて調査しなければならなかった。

発掘調査する遺跡数が８遺跡９調査区を数え，工事実施時期の関係で調査期間も６ケ月の短期間で終了させるため，遺跡の全体測量，一部の遺構測量は航空測量で行うこととし，８月29日に第１回の航空測量を行い佐平林遺跡Ⅶ区・西原遺跡・谷地前Ｃ遺跡（東部分）の航空測量を実施した。第２回航測は10月16日に行い，佐平林遺跡Ⅷ区，谷地前Ｃ遺跡（西部分）について航空測量を行った。

調査日程の関係などで，各遺跡ごとに現地説明会を開催することはできなかったが，昭和52年度から継続して発掘調査を実施してきた東村において，佐平林遺跡Ⅷ区の発掘現場を会場とし，調査現場の見学を通して埋蔵文化財についての理解を深め，郷土の歴史を考える機会を持つことを目的として，東村教育委員会の協力を受け遺跡見学学習会を開催した。９月５日には東村立小野田小学校５・６年生約60名を対象にして第１回の遺跡見学学習会を行い，10月16日に東村立東中学校・同村立釜ノ子小学校の生徒児童約80名が参加して第２回遺跡見学学習会を開催した。

11月初旬で54年度に予定された発掘調査を終了し，引き続き55年度工事予定地内の遺跡の試掘

調査を実施し，須賀川市の５工区２遺跡と６工区１遺跡，石川町（11工区）11遺跡・東村（16工区）４遺跡の試掘調査を行った。

本書には，前述の発掘調査８遺跡９地区のうち，次の３遺跡４地区の調査結果を収録した。

第１編　西　原　遺　跡　古墳・平安時代集落（竪穴12棟，掘立柱建物跡13棟）

第２編　佐平林遺跡Ⅶ区　奈良・平安時代集落（竪穴４棟，掘立柱建物跡２棟）

第３編　佐平林遺跡Ⅷ区　古墳・奈良・平安時代集落（竪穴22棟，掘立柱建物跡12棟）

第４編　谷地前Ｃ遺跡　奈良・平安時代集落（竪穴20棟，掘立柱建物跡26棟），旧石器

なお，須賀川市・石川町所在の５遺跡については，『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ（福島県文化財調査報告第84集）』に収録した。概要は次のとおりである。

第１編　下小山田古墳群（須賀川市）　後期古墳２基

第２編　山田Ｂ遺跡（須賀川市）　奈良時代住居跡１棟，弥生式土器

第３編　源平Ａ遺跡（石川町）　平安時代住居跡１棟

第４編　源平Ｃ遺跡（石川町）　縄文時代早・前期遺物，弥生時代遺物

第５編　十三塚塚群（石川町）　中世以降の塚４基

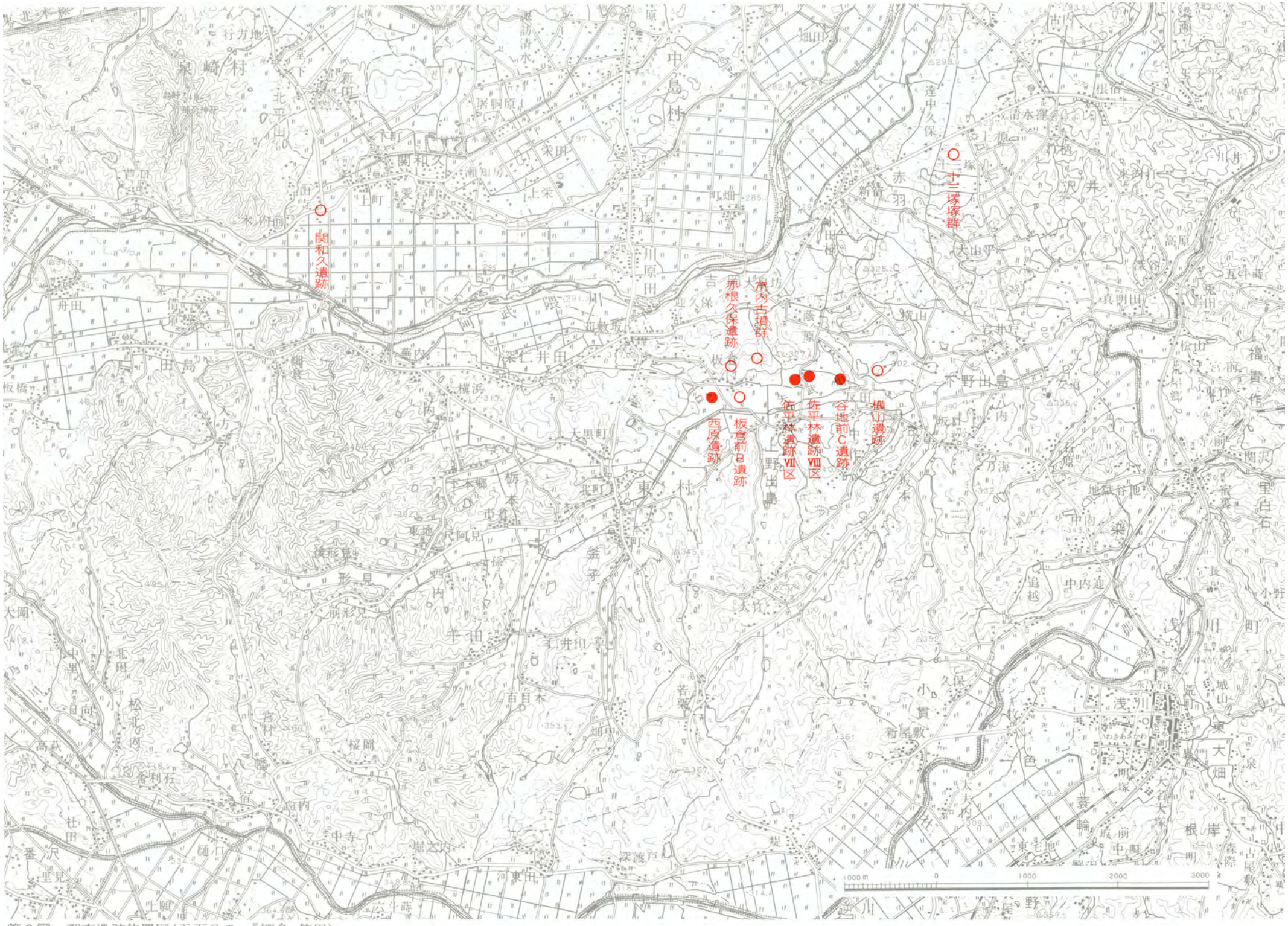
また，分布調査の結果については，『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅳ（福島県文化財調査報告書第83集）』にとりまとめた。

第２節　遺跡の位置

国営総合農地開発事業母畑地区の開発対象地域は，福島県南部の阿武隈川右岸を中心としている。中通り中央低地帯を貫流する阿武隈川は，奥羽山脈の西白河郡西郷村を水源とし，宮城県岩沼市で太平洋に注ぐ１級河川であるが，流域には県民の政治・経済・文化を支える豊かな耕土を形成し，県民生活の大動脈として不動の地位を保ち続けている。

那須火山帯に源を発した阿武隈川は，西郷村・白河市域を東流し，中島村に入って流路を北東方向に変え，さらに石川町新屋敷において社川を合わせ，北方へ流路を変えて中通り地方を貫流する。一方，東村・表郷村の境界の丘陵等に源を発する矢武川は，東流して社川に合流するが，これら三河川によって囲まれた地域には，東西方向にのびる標高300～320m前後の洪積台地と標高290m前後の河岸段丘面が形成されている。

昭和52年度以降継続した調査の続けられている西白河郡東村所在の遺跡群は，この台地および段丘面の矢武川北岸部に帯状に点在する遺跡群であり，今年度調査した西原・佐平林・谷地前Ｃの各遺跡は，ほぼ同レベルの段丘面南端部に立地している。これらの地域は，行政区画上は西白河郡東村大字上野出島地区に包括されるが，福島県全体から見れば，この地域は中通り地方でも



第3図　調査遺跡位置図(五万分の一『棚倉』使用)

南端部に位置し，栃木県境に隣接する地域ということができる。

第３節　遺跡周辺の自然的環境

阿武隈川流域には鮮新世より洪積世にかけて形成された丘陵や台地が発達しており，特にその上流域にあたる白河市周辺は，石英安山岩質熔結凝灰岩（いわゆる白河石・須賀川石）を基盤とする白河丘陵の所在する地域として知られ，さらに東北日本・西南日本の地質を２分する東北最大の構造線の１つである棚倉破砕帯が貫く地域としても重要な位置を占めている。

遺跡周辺の地質学的研究は，阿武隈川第四紀研究グループによって断片的ながら行われているが，中通り地方の中では第四紀の地質調査が不十分な地域であり，『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ・Ⅲ』では，図上対比によって地形区分した小池一之による見解（小池1965）を拠りどころとして，周辺の自然的な環境について触れてきた。

小池によれば，矢武川北岸の東西に連なる丘陵は，矢吹丘陵として対比されている。これらの所見から，この丘陵の中の標高300m以上の部分を矢吹丘陵として，300m以下の面については矢武川流域の沖積面を除いて郡山面に比定される河岸段丘面であろうとの見通しで，遺跡の立地を理解してきた。しかし，昭和53年度に調査した笊内古墳群の立地した標高320mの丘陵部の露頭観察の結果，これらの見通しに一部変更すべき点が生じたので，この付近の地質学的所見に改訂を加えておく。

当初，矢吹丘陵に比定した標高300m以上の丘陵は，石英安山岩質熔結凝灰岩（白河石）ＤＩ層を最上位にのせ，下層には小池のいう凝灰質・浮石質砂層を主とした矢吹層が古い時期の白河石上部に堆積したものと考えていたのであるが，笊内古墳群の立地する丘陵の標高310m付近の露頭には，郡山層に比定される層厚の薄い礫層が，いわゆる矢吹層の中位に認められ，上位に白河C_2ロームが不整合堆積していることが鈴木敬治によって指摘された。

したがって，当初，矢吹丘陵として考えたこれらの丘陵は，以上の所見から，郡山面に比定できる公算が大きく，笊内古墳群の横穴群が掘削された白河石ＤＩ層とした凝灰岩は，実は郡山層に比定される礫層群の堆積した後に形成されたパーライトであると考えられることになった。

標高300m以上の丘陵が，以上のように郡山面に対比される残丘状段丘面と考えると，この周辺に形成されている標高300m前後の段丘面は，郡山盆地における西の内面以下の河岸段丘面に比定せざるを得ないが，現在のところ西の内面に比定するのが妥当なようである。

今回調査した西原遺跡・佐平林遺跡・谷地前Ｃ遺跡は，この区分に従えば西の内面比定の段丘面に立地しているわけであるが，この面の地質構造は，谷地前Ｃ遺跡の調査区内深掘りグリッドの所見から見ると，厚さ20㎝前後の沖積層下に約２ｍほどのローム層をはさみ，段丘面を構成す

る砂層へと堆積している。砂層上部に堆積するローム層についても，当初は白河Ａロームを最上層とし，Ｂ・C_1・C_2・Ｄロームの基本的な堆積状況を想定していたが，鉱物組成などから見て，全体を白河C_2ローム層に比定すべきものと考えられるに至った。谷地前Ｃ遺跡ではC_2ローム下部にパミス層がはさまれており，これを手懸かりに北関東地方とのテフラの対比が今後の重要な課題となった。

遺跡調査課では，母畑地区開発事業に伴う継続した発掘調査に備え，周辺の基本層序を，現表土から基盤のローム面まで４層の層序区分を行っている。Ⅰ層は現表土層を一括する。Ⅱ層は有機質を多量に含む黒色土である。丘陵斜面・凹部などに分布するが，中間にバミスの散在帯が認められ，今後細分される可能性がある。このパミスは火山ガラスを多量に含み，沖積世以降の火山灰を主成分とするものである。Ⅲ層はⅣ層ローム上部に堆積した粘性に富んだ茶褐色土で，層厚は薄い。これらの基本層序の中では，奈良・平安時代以後の遺構は明らかにⅡ層の大半を切り込んでおり，この時期にはⅡ層上面付近が生活面であったことを物語っている。さらに谷地前Ｃ遺跡では縄文前期の土器片が，Ⅱ層下部に包含されており，Ⅱ層全体の堆積が，縄文時代ごろから進行した可能性を把握できるようになった。

また今回検出された谷地前Ｃ遺跡における旧石器時代の遺物は，ローム最上部に含まれており，これが鈴木敬治の指摘するように白河C_2ローム上面に比定することができれば，これらの石器群に対して，地質学的な年代づけも可能であり，石器群の比較研究が進展すれば，逆に付近のローム層の年代に関して考古学の側からの年代づけが可能となろう。

第４節　遺跡周辺の歴史的環境

遺跡周辺の歴史的環境については，断片的な知見しかなく，全時代・各時期にわたってその背景を詳述できない。特に弥生時代以前の周辺地の様相は，ここ数年の調査の成果からも，明らかにできる資料の増加が少なく，依然としてヴェールに包まれた状態にあるが，古墳時代以降の社会環境は，相当に解明された部分がある。

旧石器時代の遺跡が，今年ようやくにして１遺跡確認された。谷地前Ｃ遺跡がそれであるが，ナイフ形石器を含み，その組成や技術論など，後期旧石器時代における位置づけが推進されれば阿武隈川下流の矢吹町成田遺跡出土の石器群との技術系統・編年の問題などが解明されるであろう。

縄文時代の遺跡はわずかに東村横山遺跡，石川町上森屋段遺跡・達中久保遺跡（一部）が知られる程度である。横山遺跡からは多量の打製石斧が出土している。上森屋段遺跡は総合農地開発事業母畑地区開発工事に先立って昭和51年度に調査された縄文時代早期末葉から前期にかけての

落遺跡集であり，住居跡が検出されている他，早期末葉の大畑Ｇ式土器が発見されている。周辺には資料的にまとまった遺跡は少ないが，表採資料の中には，縄文前期から中期にかけて東北的な大木系の土器の他に，浮島系・阿玉台系の土器などが散在的ながら確認されており，縄文時代においては東北系の土器と関東系の土器が伴出する地域として，両者の編年的関係を追求する上で重要な地域である。

弥生時代の遺跡数は非常に少ない。しかし阿武隈川の約3.5㎞下流の段丘面に立地している石川町鳥内遺跡は，福島県における弥生時代初期の再葬墓跡として広く知られた遺跡であり，東海地方の土器が搬入されている点から，弥生時代の文化の交流経路を考える上で問題となる遺跡である。また，前述の上森屋段遺跡からは，碧玉製管玉を埋納した南御山２式前後の小竪穴墓が１基検出されており，横山遺跡には小規模ながら弥生式土器の散布が知られるなど徐々に資料が増加しており，縄文時代同様今後の調査に期待がもてる。弥生時代後半の天王山式土器を出土した天王山遺跡は，西方10㎞の白河市久田野豆柄山にある。

古墳時代に入ると東村管内でもかなりの遺跡が知られる。現在のところ最も古く位置づけられる古墳に石製模造品を伴出する横山古墳群，桝形古墳群などがあるが，前者は子持勾玉が出土した遺跡であり，後者は矢武川の約１㎞上流に位置する前方後円墳を含む比較的規模の大きな中期古墳として知られている。後期の古墳は昭和52年度に発見された笊内古墳群があるが，佐平林遺跡と赤根久保遺跡の中間の丘陵斜面に立地していて，７世紀から８世紀にかけて築造されたことが判明している。当母畑地区開発事業に関連して，昭和53年度に古墳群全体の調査が実施されており，高塚古墳と横穴の関連や，横穴の地域的変遷が明らかになった他，隣接する集落遺跡との関連も当然ながら推定され，矢武川流域におけるこの時代の社会構造を総合的に分析する上で，極めて重要な遺跡である。

この時期の集落遺跡は，今回調査した佐平林遺跡をはじめ，矢武川両岸の段丘面に濃密な分布をしている。特に東村板倉前・佐平林・栃本などの現在の集落地周辺からはこの時期の遺物が採集されており，古墳時代には矢武川北岸に大規模な集落が形成されていたものと思われる。これらの古墳群および集落遺跡の分布状況は，この付近が古墳時代には相当な経済力の蓄積された地域であったことを物語っている。

奈良・平安時代に入ると，遺跡周辺は東北で逸速く律令体制に組み込まれた地域にあたる。東北地方唯一の大郡である白河郡の郡衙擬定地である泉崎村関和久遺跡は，ここより阿武隈川の対岸北西に５㎞離れた地点に所在している。関和久遺跡の昭和54年度の調査では郡院ブロックの構造が明らかになり，奈良・平安時代の地方行政機構も今後急速に解明されるものと思われる。この時代の集落遺跡は，52年度以降調査した遺跡のほとんどが何らかの有機的関連を有していると考えられる他付近の河川に沿った段丘面上に古墳時代の集落と重複して濃密な分布をしている。

特に石川町赤羽周辺のこの時期の集落は相当大規模なものであったものと，遺物散布状況などから推定される。律令体制を支えた集落とその上部機構との関連もようやく把握されつつあるといえる。

このように遺跡周辺の歴史的環境については内容の豊かなものを含んでいる。そうした背景の中で重要な点は，付近が種々の意味で関東地方との接点にあたっていることであろう。縄文・弥生時代における土器様式に現われた関東地方的特色は，棚倉付近を分水嶺として南流する久慈川を介在させた常陸地方からや，あるいは，那須地方を介在させた，東北へ通じるルートを考慮せずには解明できないし，古墳文化の浸透および，古代における中央集権国家体制の東北地方への浸透過程を解明するためには，正しく白河関を関門としてその過程を論じねばならぬものであろう。古代における常陸街道も恐らくは遺跡周辺を通り白河郡衙に至るものであったろうし，そのような意味からは原始時代から古代にかけて交通史的に見直されるべき極めて重要な地域でもある。

第1編　西　原　遺　跡

遺跡記号　ＨＩ－ＮＨ
所　在　地　西白河郡東村大字上野出島字西原
時代・種類　古墳・奈良・平安時代集落跡
調査期間　昭和54年７月16日～９月７日
発掘担当者　目黒吉明
調　査　員　日高　努　　大越道正
高木知夫　　橋本博幸
阿部正行　　山内幹夫
大越忠志　　芳賀英一
鈴鹿良一　　安田　稔
協力機関　東村教育委員会

第1章　調　査　経　過

第1節　位 置 と 地 形

西原遺跡は西白河郡東村大字上野出島字西原に所在する。この地域は東流する阿武隈川と矢武川（社川と合流後阿武隈川に合流）とに挟まれた標高320m前後の矢吹丘陵面の南裾部に発達する洪積世の段丘面で標高298m前後で矢武川の沖積面より比高２ｍであり，遺跡付近は特に舌状張り出し部で，南側への緩やかな傾斜面である。

同段丘面には，東側から谷地前Ａ～Ｃ，佐平林（Ⅰ～Ⅷ区），笊内下，板倉前Ａ・Ｂなど，古墳時代から平安時代に営まれた集落跡が連続して立地している。背後の矢吹丘陵面に立地する遺跡は，洪積世のパーライト質火山性堆積層に構築された54基の横穴と４基の高塚古墳からなる笊内古墳群，縄文時代前期前半の包含層と平安時代の集落跡の赤根久保Ａ，経塚跡の赤根久保Ｂ遺跡が立地している。

昭和54年度の試掘の結果，基本層序はⅠ層（表土）・Ⅱ層（黒色土）・Ⅲ層（茶褐色土）・Ⅳ層（ローム層）の４層が確認されたが，今回の本調査区域は段丘面のわずかな高み部分が対象となっており，後世の開畑による削平もありⅡ層・Ⅲ層が欠層し，直接Ⅰ層がⅣ層を被う地層堆積状態であり，遺構検出面はⅣ層の地山ローム層上面であった。

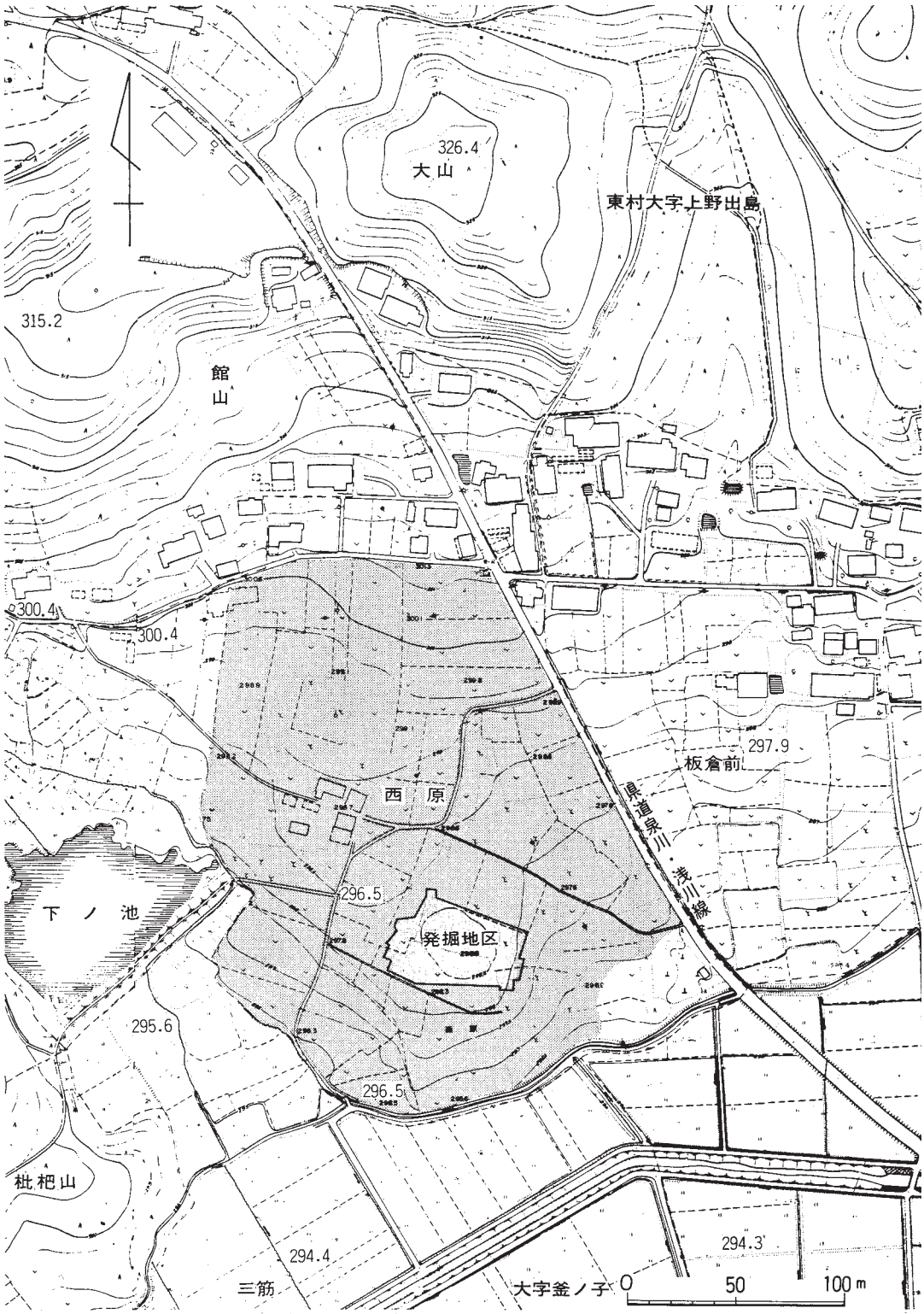
第2節　調　査　経　過

西原遺跡は，昭和52年７月に県文化センター遺跡調査課が福島県教育委員会の委託により実施した表面踏査により発見された遺跡で，古墳時代から平安時代にかけての土師器片・須恵器片が散布し，遺物散布面積は約40,000㎡であった。

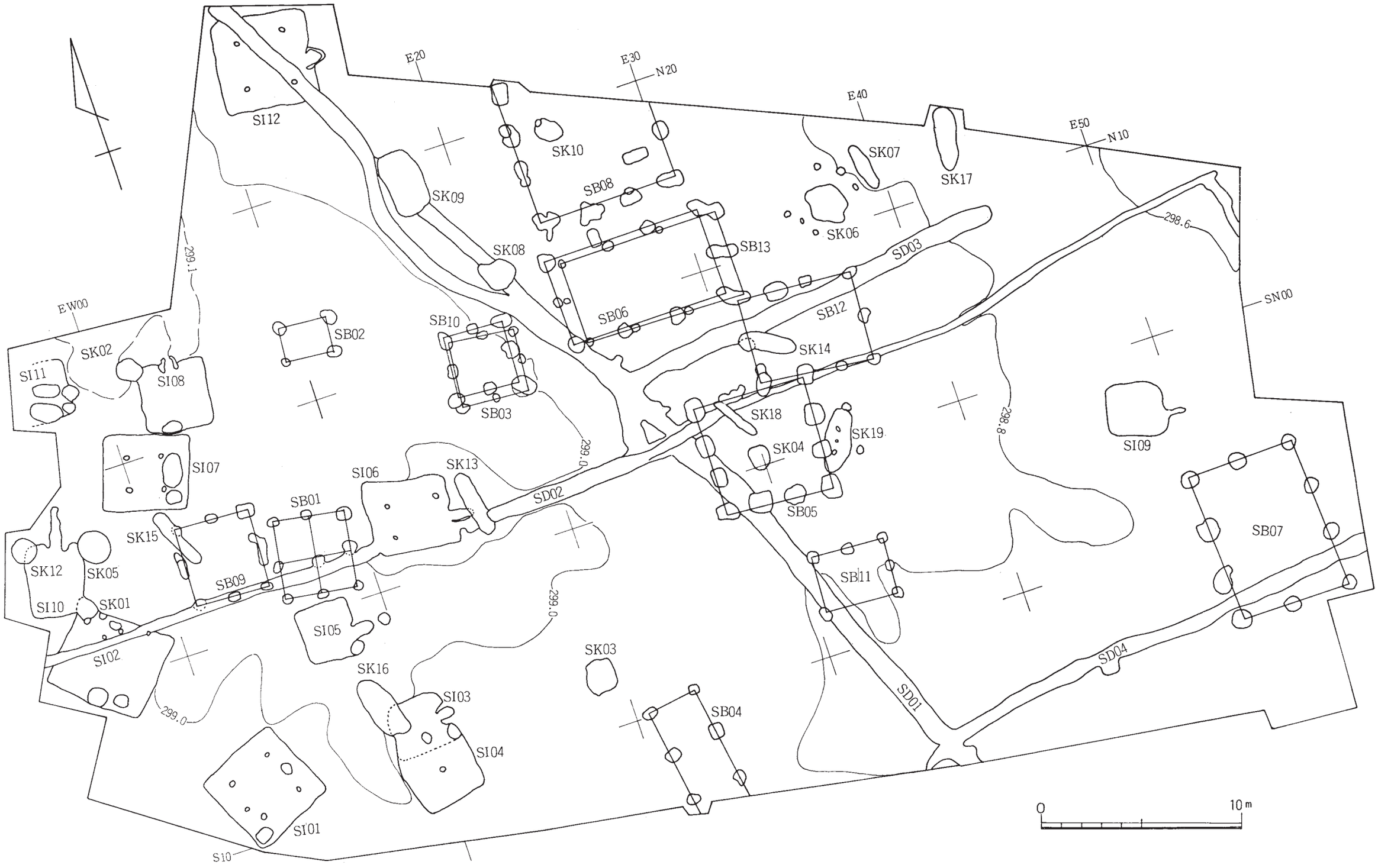
昭和53年１月に東北農政局から福島県教育委員会へ昭和53年度の施工区が提示され，本遺跡全体が施工区内に含まれていたが工法については未定であった。

昭和53年５月22日～25日の４日間で県文化センター遺跡調査課が遺跡保存協議のため試掘調査を実施した。合計13本のトレンチを設定し，古墳時代に営まれた竪穴住居跡１軒，溝跡２条，土坑３基が検出され，古墳時代から平安時代にかけての土師器片・須恵器片が伴出し，同時期に営まれた集落跡の遺存が確認され，遺跡面積は約40,000㎡と推定された。

昭和54年７月６日，東北農政局より本遺跡付近の工法が提示され，本遺跡の大部分は盛土工法による盛土保存が可能であるが，中央部付近のわずかに標高の高い約1,700㎡が工事計画上削平



第1図　西原遺跡地形図〔1：3000〕



第2図　西原遺跡遺構配置図

しなければ施工困難であり，発掘調査による記録保存が要望された。

県文化センター遺跡調査課は，昭和54年７月16日より９月７日までの延べ34日間の日程で，本遺跡面積の約20分の１にあたる削平予定地について本調査を実施した。

７月16日に発掘調査区域を設定したが，谷地前Ｃ遺跡の表土剝ぎ作業が雨天のため遅滞し，予定を順延し，７月18日より重機を導入して，桑の摘み取りが終っていない北側半分を除き，南西隅より表土剝ぎ作業を開始した。それと併行して地山ローム面での遺構検出作業を展開し，竪穴住居跡と想定される方形プランの落ち込みやカマド施設の焼土を次々と検出し，数軒以上の竪穴住居跡の存在が想定された。７月19日は残りの桑の摘み取り後の北側半分と，当初設定した調査区域の東側の地形的にやや高みをもつ区域まで重機による表土剝ぎ作業を行った。

掘り込み調査は検出された遺構のうち重複関係にある竪穴住居跡を先行して精査することに決定し，４号住居跡を切っている３号住居跡，２・６号住居跡を切っている２号溝跡部分から掘り込み開始し，掘立柱建物跡の掘形や土坑の検出作業精査は随時行うことにした。

７月20日，標高299.00ｍのベンチマークを設定し，３号住居跡内堆積土層セクションより実測を開始した。７月26日，10ｍ×10ｍのグリッドを設定し，７月30日より遣り方を組んで３号住居跡，２・６号住居跡を切っている２号溝跡の平面実測に着手した。今回の調査原則として調査区域に竪穴住居跡・掘立柱建物跡の一部が確認された場合，拡張して全体プランの規模を確認し精査することにした。西側部に竪穴住居跡が集中して検出され，10号・11号・12号住居跡が拡張によって全面を検出したことにより，調査区内の竪穴住居跡の検出作業は終了し，ついで掘立柱建物跡と土坑の検出作業に重点を移し，掘立柱建物跡７棟を確認した。８月７日，ローリングタワーを設置し遺構撮影に備えた。８月20日より掘立柱建物跡の検出作業・精査に主力を注ぎ，１号建物跡の掘形・柱痕の平面実測，掘形内堆積土のセクション断ち割りから開始した。８月29日の航空測量予定日に合せて，竪穴住居跡の写真撮影・平面実測・遺物収納，掘立柱建物跡のプラン規模の確定，土坑・溝跡の精査を優先し，８月29日午前中遺跡全体を清掃後，アジア航測による航空測量を実施した。その後の調査は，残った掘立柱建物跡の平面実測と掘形の断ち割りによる柱痕の確定，竪穴住居跡のカマド袖部の断ち割りによる構築方法の確認，貼り床の断ち割りによる竪穴住居跡の構築方法の確認などを継続し，９月７日で予定の全日程を終了した。

今回本調査した面積は最終的には約2,000㎡となり，調査した遺構は，竪穴住居跡12軒（古墳時代中期３軒，奈良時代３軒，平安時代６軒），掘立柱建物跡13棟，土坑19基，溝跡４条であった。竪穴住居跡は西側半分に11軒が集中し，東側部には９号住居跡（平安時代）が離れて１軒だけ分布していた。掘立柱建物跡はほぼ中央部に密度が高く分布していた。土坑は，溝状土坑が中央部に密に，そして円形土坑は西側に多く分布していた。溝跡は東西方向に３条，北北西から南南東に走る１条が認められた。

第2章　遺 構 と 遺 物

第1節　竪 穴 住 居 跡

西原遺跡の南半部に位置する約2,000㎡の調査区から，12軒の竪穴住居跡が検出されている。住居跡の大半は調査区の西側部分に集中して分布するが，１軒だけ離れて東端寄りの位置から検出されている。住居跡の形態は，カマドをもたない約４m四方の方形プランを呈する住居跡と，カマドをもつ規模の比較的大きな住居跡と，規模の小さな住居跡の３グループに分けられる。

それぞれの形態の住居跡配置をみると，カマドをもたない方形プランのものは調査区の西南隅にあつまり，さらに西側ないし南側にその分布が広がる可能性が強い。現にそれらにほぼ近い時期の住居跡が，1978年の試掘の際に検出されている。次いでカマドを有する住居跡群は，調査区の西半部に多く検出され，さらに西側へ広がるものと考えられる。

各住居跡の検出は，表土の耕作面から地山ローム面までの堆積土が浅いため，他の遺構と同様に地山ローム面で認められた。以下，12軒の竪穴住居跡について報告する。

１号住居跡　ＳＩ01

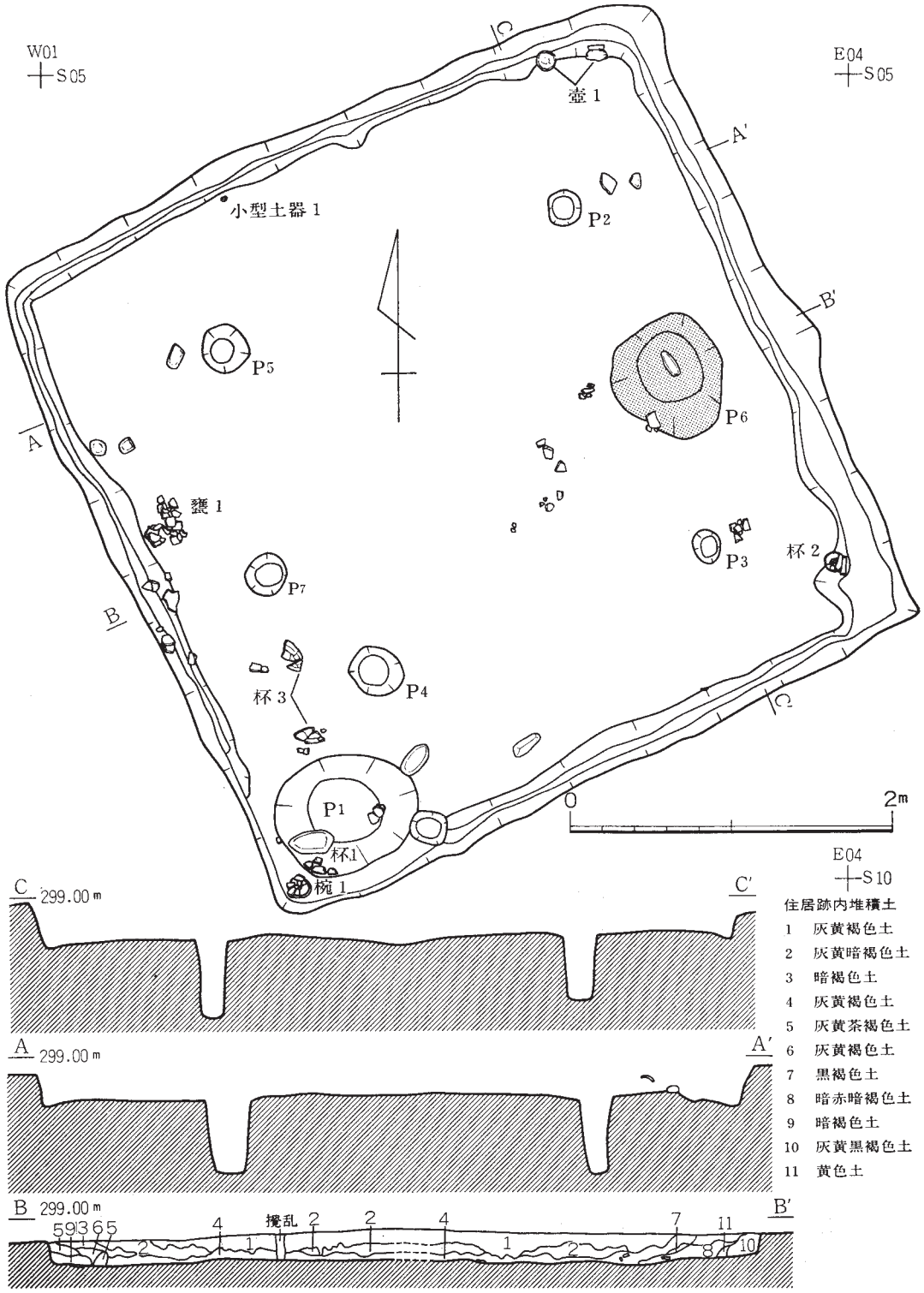
遺　　構（第３図，図版５～９）

調査区の南西隅から検出された住居跡である。他の遺構との切り合いや撹乱は認められず，ほぼ良好な検出状況である。

住居跡内の堆積土は，各方向の壁際より将棋倒し状にややこまぎれな堆積がなされた後，４層のように床面を広く薄く覆う流れ込みがみられ，その上に２・１層が重なるという，ごく自然な状況が観察された。各堆積土をみると，床面を覆うものやそれに近い土は，くすんだ褐色土や暗褐色土で，しまりが良い。１層など，上位の大量に流れ込んだ土は，黄色味を帯びてくすんだ暗褐色土である。

住居跡の平面プランは，約4.4m四方の方形を呈し，その形は２・７号住居跡とほぼ共通している。しかし，南北線を中心とした軸の傾きは，本住居跡が西に寄っているのに対し，２・７号のそれは東へ寄るなどの違いも認められる。

各壁ともカマドの存在は認められなかった。床面は，掘り込んだ竪穴の底面を平坦にならして形成しており，４本の柱穴に囲まれた面は，特に硬く踏みしめられた状況を呈していた。地床炉と考えられるP_6の西側付近もそれが著しい。その状況をさらに詳しく観察すると，上面に密に


W01
S05
E04
S05
壺1
小型土器1
P2
P5
P6
甕1
P7
P3
杯2
杯3
P4
P1
杯1
椀1
A
A'
B
B'
C
C'
0
2m
E04
S10
C 299.00m
A 299.00m
B 299.00m
攪乱
住居跡内堆積土
1 灰黄褐色土
2 灰黄暗褐色土
3 暗褐色土
4 灰黄褐色土
5 灰黄茶褐色土
6 灰黄褐色土
7 黒褐色土
8 暗赤暗褐色土
9 暗褐色土
10 灰黄黒褐色土
11 黄色土

第3図　1号住居跡

各周壁に沿って周溝状の窪みがまわるが，その掘形がはっきりせず，床形成の際に残された跡形とも考えられる。壁は，約20cm前後の高さで残されており，南西部を除いてほぼ垂直に近く立ち上がる。

ピットは計７ケ所検出された。うちP_2～P_5は，四隅を結ぶ対角線上にのり，整った方形の配置であることや，約50cm近くも掘り込んでいることなどから主柱穴と思われる。P_1は楕円形に深く掘り込まれたピットで，貯蔵穴の可能性が強い。P_6は浅く掘り窪められており，内部に焼土・炭化物などが堆積し，底面も火熱を受けていた。当然そこでの火の使用が認められ，地床炉のようなものと考えられる。

遺　　物（第４図，図版57）

遺物は土師器がほとんどであり，図示した８点の資料は床面ないし床面直上から出土しており，明らかに本住居跡に伴うものである。

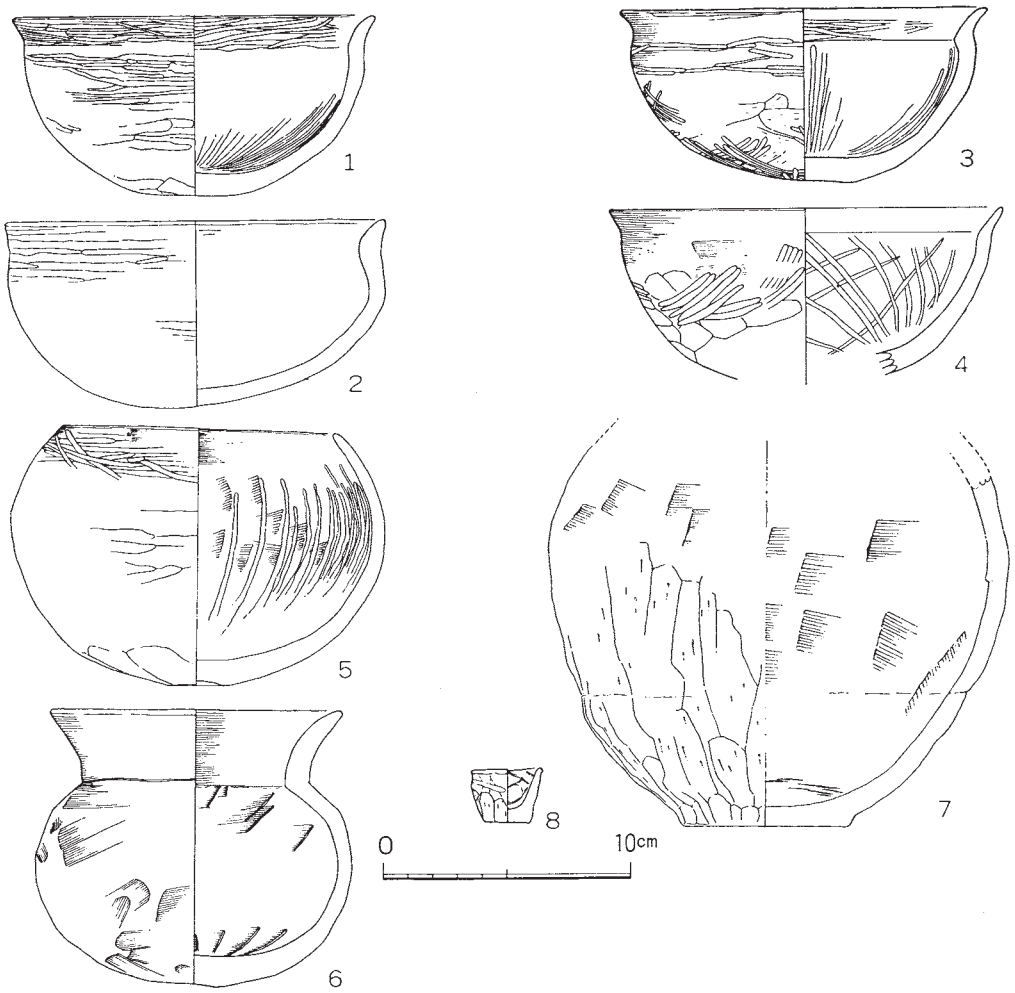
〔土　師　器〕

杯１（第４図１）　貯蔵穴状ピットであるP_1の堆積土上面より出土し，全体の約1/2を復元実測した。口径は14.6cm，高さは7.3cmを測る。底部は丸底で，体部は膨らみをもって立ち上がり，外反して口縁部に至る。外面の括れは弱く，内面には稜があらわれている。器面調整をみると，体部外面から底部にかけてはヘラケズリ後ヘラミガキが加えられている。底部周辺にはヘラケズリの痕跡が残されている。口縁部内外面には横方向のヘラミガキ，内面には放射状のヘラミガキが施される。色調は赤褐色を呈し，体部下端に黒斑がみられる。胎土は密で焼成は良好である。

杯２（第４図２）　東南隅部より検出され，ほぼ完形である。口径15.3cm，高さ7.5cmを測る。体部は，丸底の底部から膨らみをもって立ち上がり，わずかな括れをもって口縁部に至る。内外面ともに摩滅が激しく，外面は，体部と口縁部，および内面の口縁部に横方向のヘラミガキが施されていることが観察される。その他は，器面調整をみることは困難である。

杯３（第４図３）　P_1の北側に２ケ所に分散して検出され，ほぼ完形になる。口径14.8cm，高さ7.0cmを測る。底部は丸底を呈し，体部は膨らみをもって立ち上がり，ゆるく括れ，口縁部は外反する。器面調整をみると，外面は体部がヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁はヨコナデ後部分的にヘラミガキが施されている。底部周辺にはヘラケズリ痕が残存している。内面は底部から体部にかけて放射状のヘラミガキ，口縁部は横方向のヘラミガキが加えられている。色調は内外面とも赤褐色を呈し，内面はいささか暗い。胎土は密で焼成は良好である。

杯４（第４図４）　P_1の堆積土内から検出された。底部周辺が欠損しており，口径は15.8cmを測る。体部は張りをもって立ち上がり，若干括れ，口縁部は外傾する。内面には軽い稜が形成される。器面調整は，外面口縁部から体部上半にかけてヨコナデ，体部がヘラケズリ後まばらにヘラミガキが施されている。内面は，口縁部が横方向のヘラミガキ，体部は向きが異なる底部から



第４図　１号住居跡出土土師器

のヘラミガキがまわされ，崩れた暗文状である。色調は赤褐色を呈する。

椀１（第４図５）　P_1の南側の壁際に検出され，口縁部の1/4を欠損している。口径11.0cm，胴径15.0cm，高さ10.3cmを測る。凹部を有する底面から，球状に立ち上がる体部は，そのまま内攣して口縁に至る。器肉は口縁部で４㎜と薄く，体部から底部にかけて厚くなり10㎜前後を測る。

外面は底部から体部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁部はヨコナデ後ヘラミガキが加えられる。内面は体部がヘラナデ後放射状のヘラミガキ，口縁部はヨコナデが施されている。

壺１（第４図６）　北東隅の壁際に，底部と体部がそれぞれ分かれて出土した。ほぼ完形である。口径11.7cm，胴径12.7cm，高さ11.1cmを測る。丸底の底部から，胴部はつぶれた球形を呈し，強くくびれ，口縁部は外反する。頸部内面には明らかな稜が形成される。調整は，内外面ともに

底部から体部がヘラナデ，口縁部がヨコナデである。色調は，外面が暗褐色で一部に黒斑があり，内面は明淡褐色を呈す。胎土は砂粒を含み密であり，焼成も良好である。

甕１（第４図７）　西辺の壁際中央部にて検出され，口縁部が欠けている。胴径18.4㎝，残存高15.3㎝を測る。外面の体部下半がヘラケズリ，体部上半および内面の底部から体部全面はヘラナデである。色調は内外面とも赤褐色を呈し，使用中における加熱のためかもろい。

小型土器（第４図８）　北辺の壁際中央部よりの床面直上から出土した小型手捏ね土器である。口径2.9㎝，高さ2.2㎝を測る。外面はヘラケズリ，内面は指でナデツケされている。

ま　と　め

１号住居跡は，今回の調査区内では規模の大きな部類に属する。カマドや張り出しピットなどは認められなかった。主柱穴は４本，方形に配置され，南西コーナー部に貯蔵穴状ピットが検出されており，全体としては整った形の住居跡である。

出土土師器の特徴をみると，２・７号住居跡出土例との強い類似が認められ，ほぼ同じ時期の所産であると考えられる。古墳時代中期後半に位置付けられる。

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（第５・６図，図版10・11）

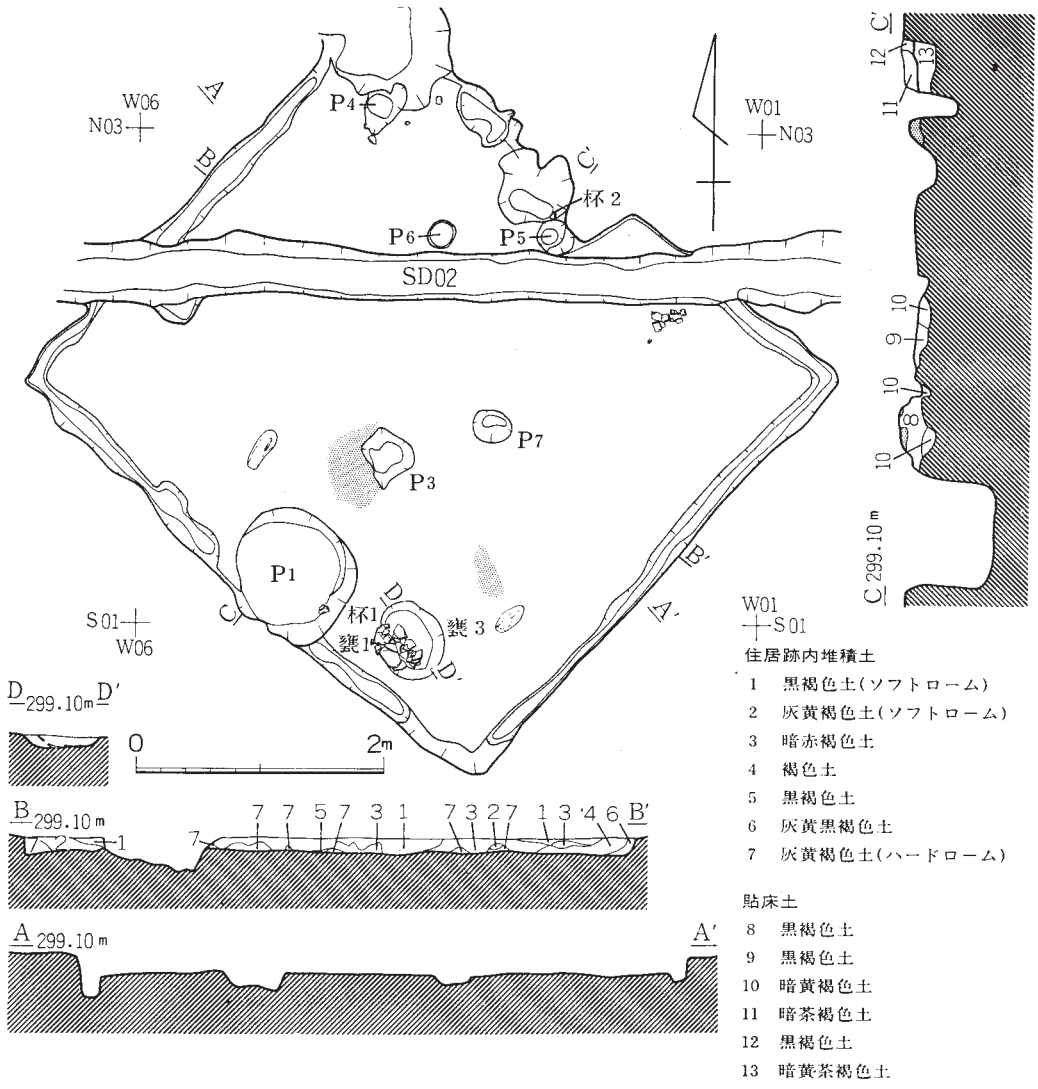
２号住居跡は，調査区西南隅から，１号土坑・２号溝と切り合って検出されている。検出面は地山ローム面であり，切り合い関係をみると，明らかにそれらが２号住居跡埋没後に掘られていることが認められた。

住居跡内の精査を進めていくにしたがい，壁の立ち上がりが低く，検出面から少し掘り下げただけで床面が認められ，後世の畑耕作などでかなり削平されているものとみられた。

内部の堆積土状況を観察すると，各方向からの自然な流れ込み堆積であることが確認された。堆積層は７層に分けられる。壁際や，床面を薄く覆っている３～７層の流れ込みの後に，大量の１・２層が順序よく堆積している。１・２層は黒色土を多く含む土質であるが，壁際や床面に接する３～７層には，ロームブロックが多く含まれている。壁の剝落土が多量に混じり合ったためとみられる。

住居跡の平面プランは，一辺が５ｍ前後の方形をなしている。主軸の方向は７号住居跡同様Ｎ42° Ｅを示す。西・南・東辺はほぼ整っているが，北辺西半部にやや入り組みがみられる。壁の残存高は約15～20㎝である。

北壁の中央部において，最初はカマドの跡ではないかと考えた灰褐色の粘土の堆積が認められたが，後に断ち割りを行った結果，焼土や炭化物の堆積および燃焼部の検出が認められず袖構築状況なども確認し得なかったため，カマドとは判断されなかった。



第５図　２号住居跡

床面積は約21㎡を測る。床面は，所々貼り床が認められ，おおむね平坦に形成されている。壁際には北辺の西半部を除いて周溝が回っている。その幅は10～20cm，深さは約15cmであり，溝の掘形はほぼ明瞭である。

ピットは全部で７ケ所検出されたが，柱痕と判断されるピットは確認されなかった。P_1は径90cm，深さ70cmを測り，暗褐色土の堆積土は３層に分離された。この堆積土内より土師器杯（第７図３）が出土しており，床面出土の遺物とほぼ同時期と考えられるP_2は径55cm，深さ14cmを測り，底面より土師器杯・甕片が出土しており貯蔵穴ピットとみられた。P_3は径40cmの不整形を呈

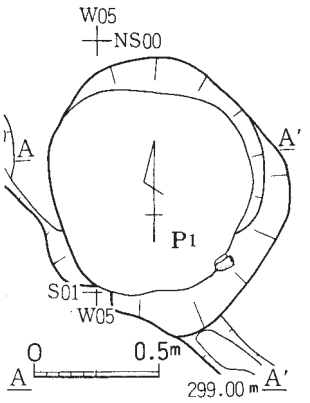
し，深さは７cmと浅く窪み，上面には焼土塊が確認された。P_4～P_7は径20～30cmを測り，深さはP_5の30cmを除き，いずれも10cm前後と浅いものであった。

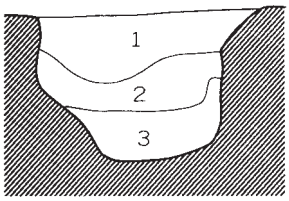
遺　　物（第７・８図，図版58）

出土遺物は，主として土師器であるが，他に石製紡錘車が１点ある。土師器は図示可能なものが，杯３・甕３の計６点であり，この他に小破片として壺の口縁部・杯口縁部などがある。また南壁面寄りには床面直上より径30cmの礫が２点出土している。

〔土　師　器〕

杯１（第７図１）　浅い皿状ピットP_2内より出土し，全体の約1/2が現存する。推定口径15.2cm，高さ6.0cmを測る。丸底風の底部から，体部は丸味を帯びて立ち上がり，頸部で括れは見られず内面に軽い稜をつくり，外傾して口縁部に至る。調整は外面の底部がヘラケズリ，体部がヘラミガキ，口縁部はヨコナデである。内面は底部が摩滅のため不明であり，頸部から口縁部にかけてはヘラミガキである。内外面とも赤褐色を呈し，胎土も緻密であり焼成も良好である。





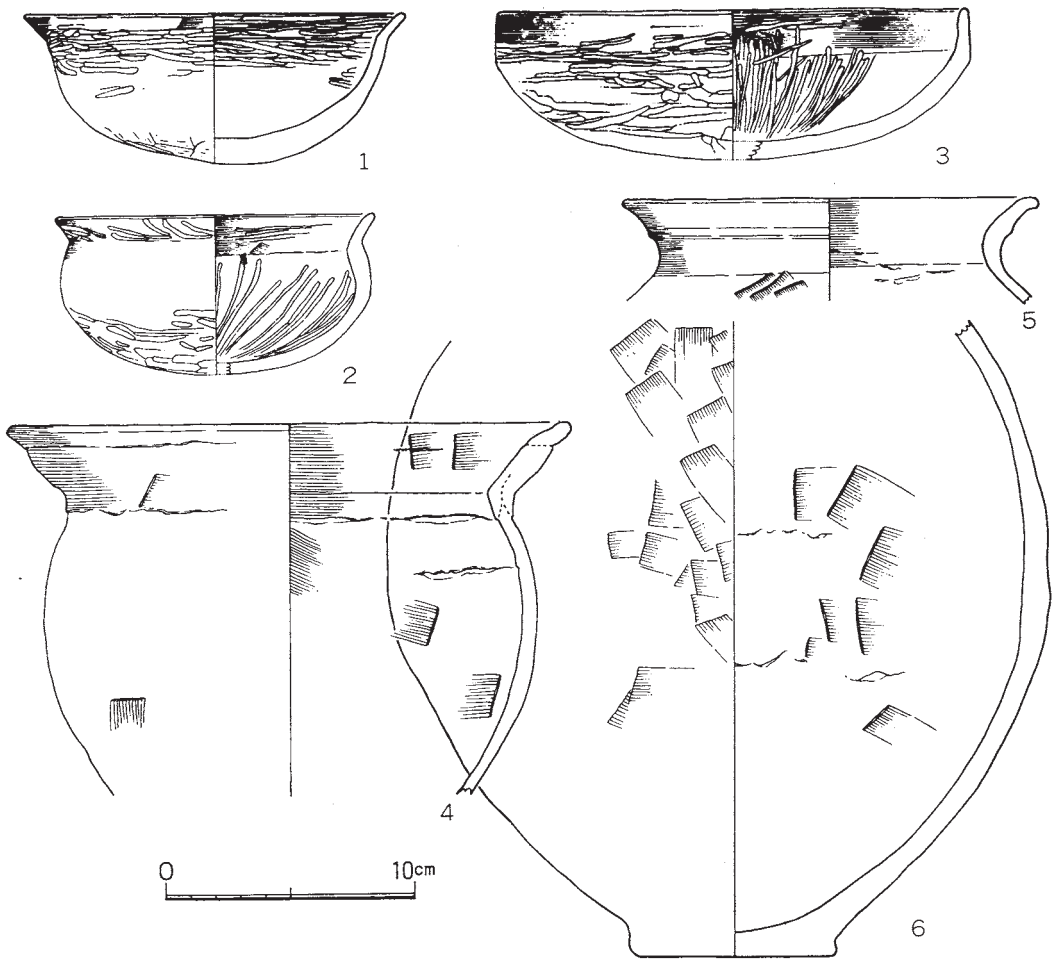
P1 内堆積土
1　暗褐色土（黄褐色粒を含む）
2　暗褐色土
3　暗褐色土（黄褐色粒・小ブロックを含む）

第６図　２号住居跡内土坑

杯２（第７図２）　P_5寄りの床面より出土し，全体の2/3を復元実測した。推定口径12.8cm，推定高さ6.3cmを測る。丸底風の底部から，体部は強い膨らみをもって立ち上がり，頸部で括れて内面に稜をつくり，外傾して口縁部に至る。調整は外面の底部がヘラケズリ，体部がヘラミガキ，口縁部がヨコナデ後ヘラミガキである。内面は体部が疎らな放射状のヘラミガキ，口縁部がヨコナデ後ヘラミガキである。内外面とも暗茶褐色を呈し，胎土，焼成とも良好である。

杯３（第７図３）　P_1の上面から出土し，全体の1/3が現存する。推定口径18.8cm，高さ6.0cmを測る。丸底風の底部から，体部は丸味を帯びて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の底部から体部はヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁部はヨコナデである。内面は体部が放射状のヘラミガキ，口縁部はヨコナデ後ヘラミガキである。内外面とも赤褐色を呈し，胎土も緻密で焼成も良く堅緻である。

甕１（第７図４）　浅い皿状ピットP_2内より出土し，口縁部から体部にかけての1/4が現存する。推定口径22.5cm，推定胴部径19.7cmを測り，高さは不明である。胴部の膨らみは弱く，頸部の括れた部分には接合の際についたとみられる圧痕を有し，外傾して口縁部に至る。調整は内外面とも胴部がヘラナデ，口縁部がヨコナデ後一部ヘラナデである。外面が黄褐色，内面が赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含み，やや脆い。



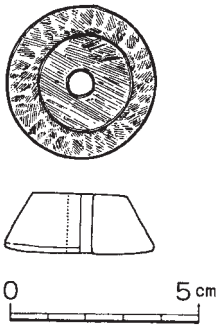
第７図　２号住居跡出土土師器

甕２（第７図５）　浅い皿状ピットP$_2$内より出土し，口縁部の1/2のみが現存する。推定口径は16.6cmを測り他は不明である。胴部は球形を呈するものとみられ，頸部で括れて内面に稜をつくり，外反して口縁部に至る。外面の口縁部中段には軽い隆線が一巡する。調整は，内外面ともヨコナデが施されている。色調は外面が黄褐色，内面は黒褐色を呈している。一部，二次加熱を受けて赤褐色を呈し，脆い。

甕３（第７図６）　浅い皿状ピットP$_2$内より出土し，胴部から底部にかけてのみが現存する。胴部径26.3cm，底部径8.2cmを測り，他は不明である。平底の底部から，やや直立したのち膨らんで胴部に至る。調整は内外面とも胴部はヘラナデである。色調は内外面とも黄褐色を呈し，胎土は砂粒を含み，やや脆い。

〔石　製　品〕

紡錘車（第８図）　住居跡内堆積土のℓ－２より出土した完形の石製紡錘車である。上面で2.5cm, 下面で3.9cm, 厚さ1.6cm, 重さ40gを測り，截頭円錐形を呈する。石質は蛇紋岩である。



第８図　２号住居跡出土紡錘車

ま　と　め

本住居跡は２号溝跡に切られているものの，ほぼ全体のプランをつかむことができた。東西5.0m，南北4.5mを測り床面積にして21.0㎡である。またカマド部が検出されなかったことなど，１号・７号住居跡と類似する。しかしP_4～P_7の４個のピットは北側に片寄って配置されており，P_5を除いていずれも浅く，１号・７号住居跡に確認された４個の柱穴状ピットは検出できなかった。

床面および土坑内出土の遺物より，本住居跡は古墳時代中期後半に属するものと考えられる。

３号住居跡　ＳＩ03

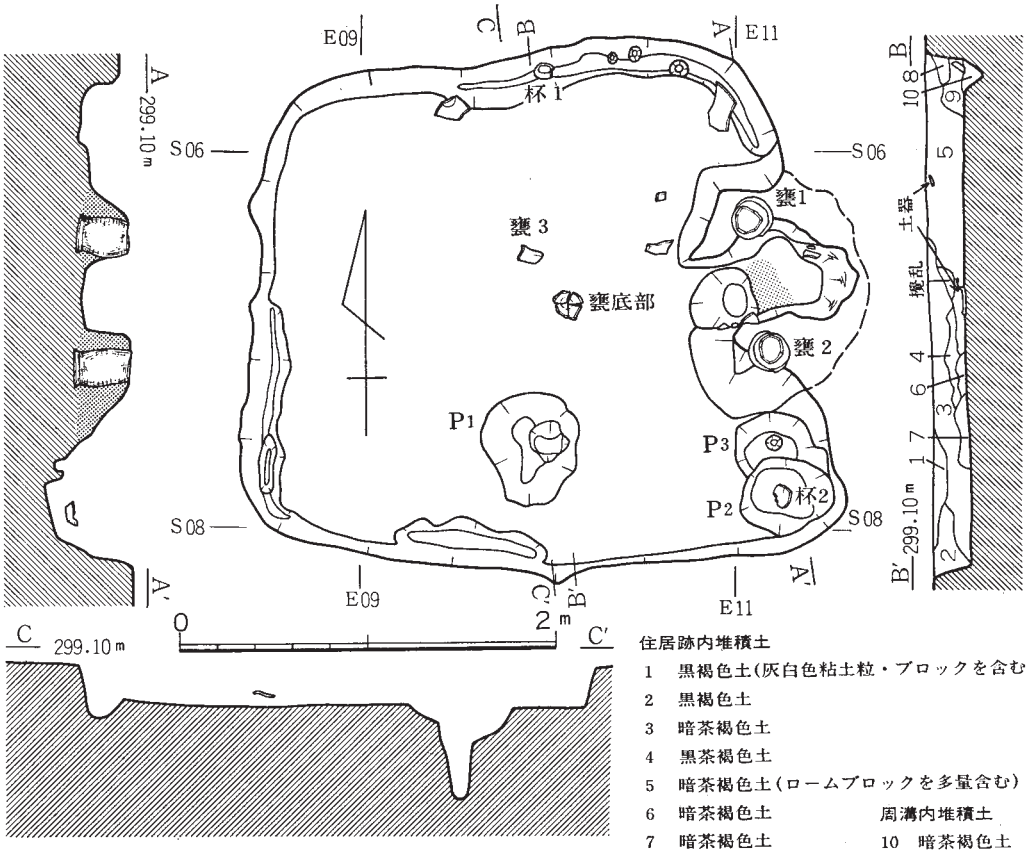
遺　　構（第９・10図，図版12～14）

発掘区南西部に，４号住居跡および16号土坑と重複して検出されている。検出面は地山ローム層上面である。検出面表出の段階で４号住居跡・16号土坑を切ってプランが確認されたので，本住居跡から掘り込みを始めた。

遺構内堆積土の状況は，北から南へ向かって，流れ込んだように順次堆積している。基本層序は４層で，下層から順に北壁際の壁剝落土状の堆積土，北壁から中央部に流れ込んだような堆積層，中央部から南壁にかけて同様に流れ込む層，南壁付近の最終堆積層である。下層から上層まで，黄褐色ローム粒子，ないし小ブロックを含むのが特徴である。

住居跡の平面プランは，隅丸の不整台形を呈している。大きさは南北主軸上で2.77m，東西主軸上でカマド部も含めて3.25m，現存壁高は20cmから26cmを測る。壁は若干傾斜して立ち上がり，しっかりしているが，凹凸が激しく整っていない。プランの方位はカマド側主軸がN87° Eを示す。床面はローム面に形成されており，平坦であるが，南へわずかに傾斜している。この傾斜は，地山ローム層の傾斜とほぼ同じである。床面の状態はしっかりしている。また北東コーナー部・西辺・南辺の一部の壁際には，幅８～10cm，深さ２～10cmの周溝が認められる。柱穴状のピットは南北軸線上の中軸交点と，南辺のちょうど中間点の径22cm，深さ48cm（P_1）と東辺カマド袖右の貯蔵穴状のピット（P_3）の中に確認されたが，浅い方のピットは擂り鉢状に窪んでおり，柱穴かどうか判別できなかった。

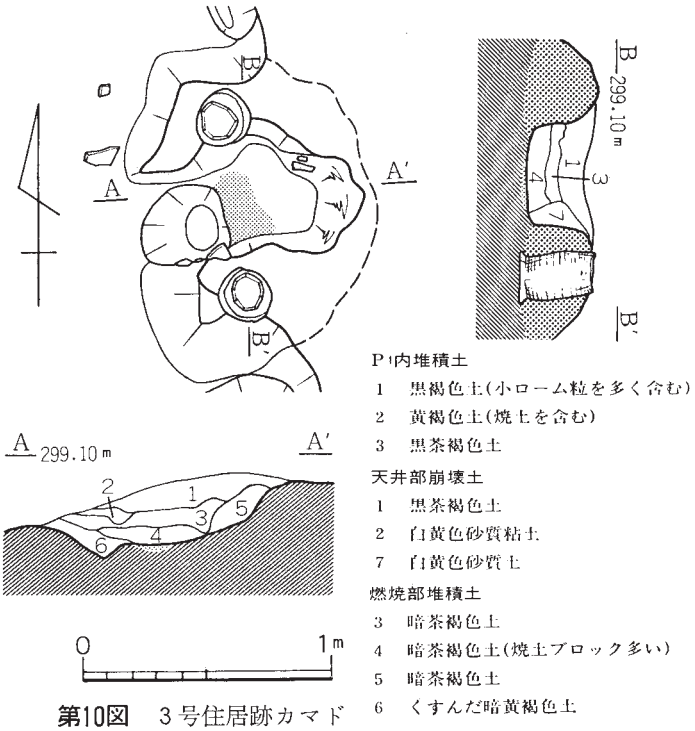
本住居跡内のカマドは，東辺中央に位置し，袖幅130cm，焚口部から外縁奥行きは100cmを測



第９図　３ 号 住 居 跡

る。煙道部は未発達である。燃焼部は，奥行75cm，幅35cm，焼土の範囲は30×20cmの狭い範囲で，焼土の厚さは５cmを測り，よく焼けている。焚口部から燃焼部中央にかけて，擂り鉢状の窪みがあり，燃焼部奥壁はゆるいカーブで立ち上がっている。両袖の遺存状態は良好で，暗灰色粘土・黄褐色ロームで構築されているが，もともとは竪穴構築面の，地山ロームを使用して構築され，それが焼土化して暗灰色系に変色するのであろう。また両袖内には，土師器長胴甕（第11図４・５）が左右それぞれの袖に倒立した状態で立てられ，粘土でかためられていた。両方とも底部付近が欠損状態であったが，カマド内堆積土，及び，住居跡内堆積土出土のものと接合したものがあり，右袖のものは一部底部も復元できたので，当初は両方とも，完形品に近いものが，袖部の芯材として使用されたものであろう。

その他の付属施設としては，カマド右脇のコーナー部に，二つの貯蔵穴状のピットが切り合った状態で検出されたが，当初１つのピットと判断して掘り込んだために切り合い関係は確認できなかった（P_2，P_3）。



第10図　3号住居跡カマド

遺物（第11図，図版59・62）

堆積土上層から下層まで出土し，床面，カマド内からも検出された。出土遺物は最も多い方で，全体で100片近く出土している。出土したものはロクロ土師器の杯・甕，須恵器の杯・甕などである。全体を推定できるものは，次の杯２点，および甕３点である。以下に，それらの遺物についての説明を行っていくことにする。

〔土　師　器〕

杯１（第11図１）　住居跡北辺・壁際，床面直上の壁の剝落土中から検出された小型の土師器杯である。口縁部の一部を欠くが，ほぼ完形で保存状態もよい。器形は平底の底部から，底部縁辺に明瞭な角を有し，内攣ぎみに立ち上がり口端に至る器形で，口径9.5cm，底径5.9cm，器高2.4cmを測り，底径に対して口径・器高が小さく扁平な感じがする。成形・調整は右回転のロクロにより成形され，底部切り離しは糸切り，その後回転ヘラケズリによって，体部中位から底部まで再調整する。内面は底部に，細めのヘラ状工具によって一方向の密なヘラミガキを行い，さらに直交するように，同様のヘラミガキを施している。色調は外面灰黄褐色，内面は黒色処理されている。胎土は非常に緻密で，微砂を少量含むだけである。焼成はよく，全体的につくりは丁寧である。

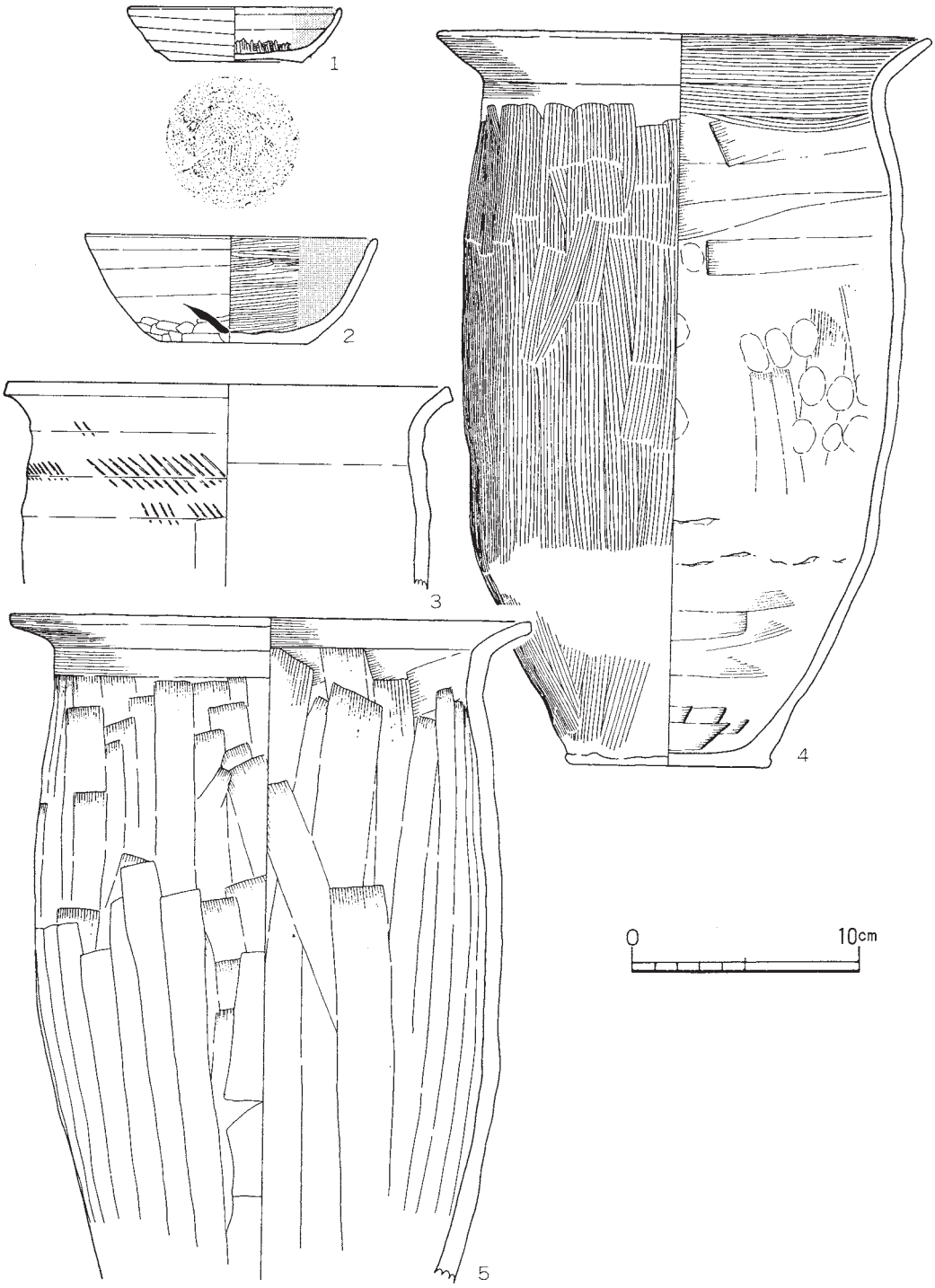
杯２（第11図２）　カマド右脇のP_2の部分に，住居跡床面とほぼ同じレベルで住居跡堆積土中より検出された。底部から口縁部にかけて全体の1/2程を残す。保存状態は良い。器形は平底で，底部周縁で外面が鋭く屈曲し，体部に膨らみを持たせながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。口径13cm，底径6.4cm，高さ4.7cmである。ロクロ成形により，さらに底部は異方向の手持ちヘラケズリ，体部下半は小きざみな横方向のヘラケズリによって調整されている。体部中位から口端部までは，ロクロ痕を明瞭に残す。内面は底部に一定方向の細いヘラミガキが密に施され，体部は口端部まで水平方向のヘラミガキが，現存部分では４回に分けて施されている。１回のヘラミガキは，底部から体部にかかる屈曲部から口端まで一気に行われ，さらに器体を60°ほ

ど回転させて同様の調整をし，それをくり返して１周させる。１回のヘラミガキの長さは６㎝内外である。色調は，外面暗黄褐色，内面は黒色処理が施され，また，口縁部内外に部分的に，黄色味を帯びた付着物がある。胎土は緻密で焼成も良い方である。体部下端には墨書がみとめられる。しかし，きわめて薄く，全体的に消えかかっているために判読は不可能である（図版62）。

甕１（第11図３）　カマド左袖部の粘土内から，甕２と共に検出された口縁部破片である。口縁部一周の1/4程を残すのみで，体部以下を欠く。器形は胴部中位から，わずかに内彎しながら口頸部に至り，口端にかけて強く外反し，口唇部が角ばって稜を有し，上面がやや窪むのが特徴である。口径は，推定19.5㎝を測る。成形は輪積みによるものと思われ，断面にその痕跡がわずかに観察される。調整は外面に規則正しいタタキ目を残し，さらにロクロによって，ヨコナデが胴上位から口端まで施される。内面も胴上位から口端まで，ロクロによるヨコナデ，口唇上面にもヨコナデが加えられている。従って，輪積み→タタキしめ→ロクロによる内外面ヨコナデ調整の成形工程が推定できる。色調は，明茶褐色で器表面にところどころ黒斑が観察される。胎土は石英，長石などの粗砂，細角礫などを多く含み，器表はザラついた感じがする。焼成は良好で堅い。全体に甕としては調整の良い土器である。

甕２（第11図４）　カマド左袖部粘土中に，倒立の状態で検出されたもので保存状態は良い。底部付近の一部を欠くが，全体がわかる資料である。器形は，胴部がゆるく膨らむ長胴甕である。胴上部はやや内彎傾向を示し，口頸部で外へ強く屈曲し口端に至る。底部外角は外に張り出している。口径22.0㎝，底径は推定8.8㎝，高さ32.3㎝を測る。成形は輪積みによったものと思われ，器壁に横方向のうねりがあり，胴部裏面に粘土積み上げの痕跡が認められる。調整は，外面が体部全面に縦方向の浅いハケ目が上から下に向けて加えられ，口縁部にはヨコナデが加えられる。裏面は底部と体部の境目に，指でナデつけた痕跡が認められ，胴部下半は横方向のヘラナデ痕，胴部中位は縦方向，上部は横方向のヘラナデ痕が認められる。口縁部は外面胴部と同様のハケ目を横方向に施し，さらにヨコナデが加えられる。また，胴部中位に数列横方向に指で押した痕跡があり，これは外面胴部のハケ目を施す時に，裏面からささえたあとではないかと思われる。従って調整工程は，内面底部付近のヘラナデ→内面胴部のヘラナデ→内面口縁部のハケ目→内面口縁部ヨコナデ→外面胴部のハケ目（内面指頭痕）の順序が観察できる。色調は，外面が暗赤褐色，内面は，淡褐色を呈し焼成は良い。胎土は細砂を多量に含み，粗砂が若干混じり，器表はザラついている。

甕３（第11図５）　カマド右袖部粘土内に，甕２に相対した位置に検出された土師器の長胴甕である。胴部下部から底部にかけてと口縁部の一部を欠く。器形は，胴部はゆるやかな膨らみ，口頸部が若干内彎し，口縁部が急激に外側に屈曲する。口唇部上面は平らにケズリ落とされている。内面は，口縁部と口頸部の境目に，わずかに稜線が見られるが，意識して付けられたもので



第11図　3号住居跡出土土師器

はなく調整の際に横ナデによって稜を形成したものであろう。口径23.2㎝，現存高29.5㎝を測る。成形は，輪積みと思われ，器表に粘土紐痕跡と思われる横方向のうねりが見られる。調整法は，外面床部から胴部中位に下から上へ向かって明瞭なヘラケズリ痕を残し，口頸部から胴部中位にかけては，上から下へヘラナデが施される。最後に口頸部から口端までヨコナデが加えられる。内面は，胴部全体に縦方向のヘラナデを加えた後，口縁部にヨコナデが施される。色調は，灰黄褐色～黒色を呈し焼成は良である。胎土は粗砂，細砂が多く含まれる。全体に雑な作りで，器表面がザラついている。

〔須　恵　器〕

北東コーナー部の床面直上から，大型の甕の破片が１点検出されている。残存部は25×15㎝，厚さ15㎜である。外面はタタキ目，内面はヘラナデが加えられる。胎土は細砂，粗砂を多量に含み，色調は青黒色を呈し，焼きは非常に良い。その他，杯・長頸壺の破片が覆土中から８点検出されているが，いずれも細片である。

〔そ　の　他〕

破片で土師器の甕が多く出土しているが，全体をうかがえるものがない。ほとんど長胴の甕であろうと思われる。中に床面から覆土下部に検出された特徴ある甕がある。この甕は，胴部下半と底部，口縁部の破片のみであるが，底部がすぼまる平底で，胴部下半が膨らむ器形を呈し，胴部から口頸部が内彎して，高さに対して口径の大きな形であろう。口縁部が外側に90°屈曲し，ほぼ水平の口縁部と「冂」形の口唇部を持つのが特徴である。屈曲した口縁部は，幅2.2㎝と狭い。外面は，胴部下半がヘラナデで調整され，胴部上部から口縁部は，ヨコナデが加えられている。内面は，底部から口頸部まで丁寧なヘラミガキが加えられ，口縁部はヨコナデ調整をしている。内面は黒色処理である。

ま　と　め

本住居跡は，カマドに特徴がある。煙道は未発達であるが，両袖部の芯材として長胴甕を，それぞれ粘土中に埋め込んでいる。竪穴の所属時期は，上記の長胴甕や，ピット内出土の杯，その他の床面出土土器など，全てロクロ調整の土器であり，９世紀に位置づけられている土器である。従って，住居跡もほぼ同じ時期のものであろう。当遺跡で確認された竪穴住居跡の，最も新しい時期のグループの１つである。

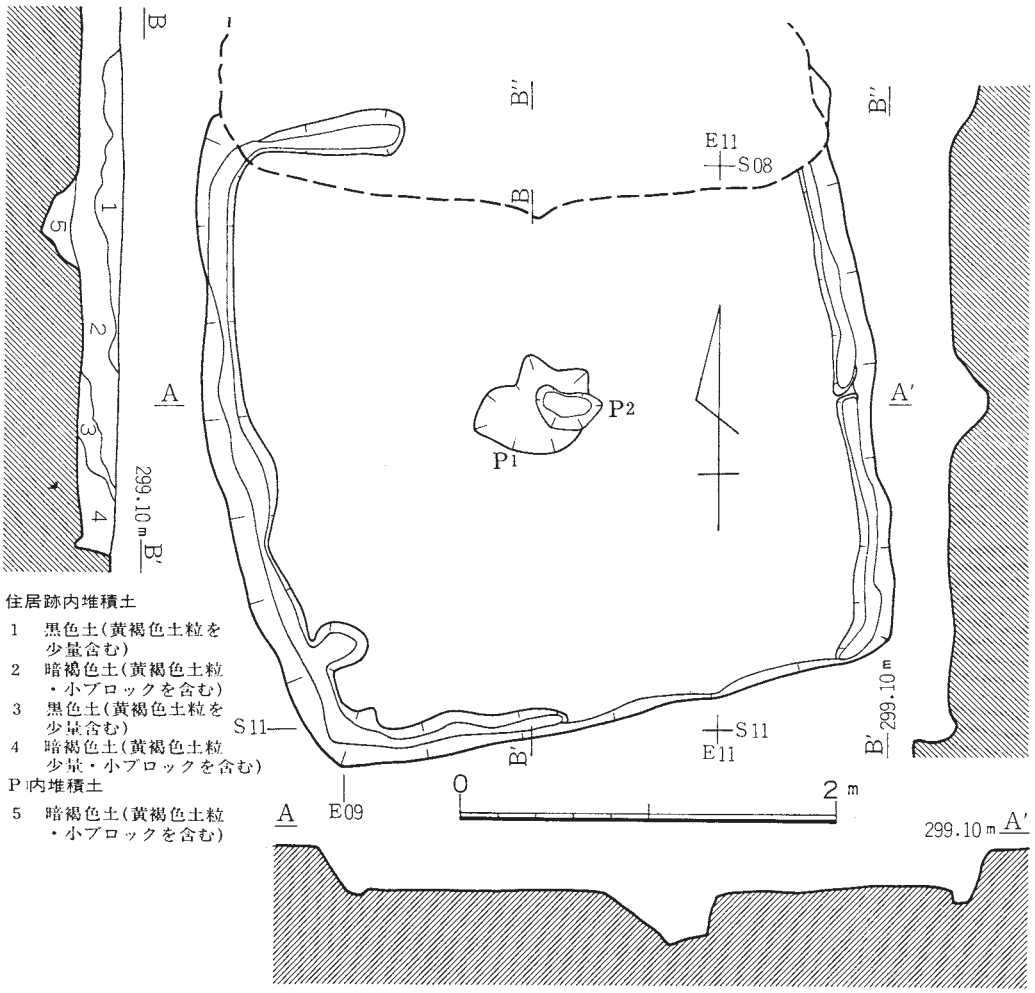
４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（第12図，図版14）

発掘区の南西部に，３号住居跡と切り合って検出された。検出面は耕作土直下の地山ローム層上面である。検出面において，３号住居跡に切られていることが確認されたため，それを完掘後

に掘り込みを開始した。切り合いの状態は，３号住居跡によって北辺の大部分が切られ，東･西･南の３辺しか残存していない。床面レベルは３号住居跡とほぼ同じで，３号住居跡の周溝が一部４号住居跡に入り込んでいる。

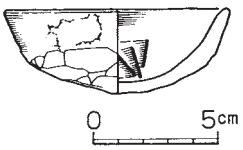
土層の堆積は，北辺の切られた部分を除き，壁際は将棋倒し状の堆積を示し，中央部はレンズ状の堆積となり，自然な堆積状態を示している。土質はシルト質で黒色土～黒褐色土であり，全体に黄褐色ローム粒子・小ブロックが混じるのが特色で，他に大きな変化は見られない。平面プランは残っている３辺から推して，いくぶん張りぎみの方形を示すものと思われる。壁の立ち上がりは緩いが，構築状態はしっかりしている。住居跡規模は，東西主軸線上で3.55mあり，南北は3.60mと推定される。現存壁高は18～20cmである。方位は南北主軸がN10°40′Wを示す。床



第12図　４号住居跡

面はローム層に構築され，平坦であるがやや軟調で，踏みしめられたような状態ではない。床面壁際には，幅５～15cm，深さ４～８cmの周溝が巡るが，南辺の東半分には認められず，北辺は３号住居跡に切られているので不明である。

検出されたピットには，南西コーナー付近の浅い窪みと，中央に擂り鉢状に20cm掘り込んだものがあるが，柱穴とは断定し難い。カマドは存在せず，あるいは北辺にあったものが，３号住居跡によって破壊されている可能性もある。



第13図　４号住居跡出土土師器

遺　　物（第13図，図版59）

出土量が少なく床面からの出土品はない。大部分土師器で須恵器片が数点ある。堆積土の上層から下層まで出土しているが，下層の方が多く，主なものは土師器の小型杯のほぼ完形品が検出面から出土し，東壁の剝落土と思われる層から，ロクロ土師器の破片と須恵器杯の破片が，まとまって出土しているが細片である。

〔土　師　器〕

杯１（第13図）　住居跡検出面から出土したもので，当遺構唯一の全体形がわかる遺物である。小型の杯形土器で口唇部をわずかに欠損するだけでほぼ完形である。口径9.0cm，高さ3.4cmを測る。器形は，丸底の底部からゆるく内彎しながら立ち上がり，口縁部でかすかに外反する。口縁部にはヨコナデを施し，体部以下は雑なヘラケズリを加えている。ヘラケズリが雑なために，体部以下の器厚が上部より不自然に薄くなっている。内面はヨコナデを施すが凹凸が激しい。底部付近はヘラナデが雑に施されている。胎土は粗く，細砂，粗砂の含有が多い。焼成も脆く，黒色の付着物が全体に見られる。全体的に粗末なつくりである。

ま　と　め

切り合い部分以外は，保存状態のよい住居跡である。床面の状態，柱穴のあり方，カマド，焼土などのないこと，床面遺物のないことなどを考え合わせると，短期間しか使用されていない住居跡であるかも知れない。時期を決定する遺物はないが，検出面から出土した杯１は，栗囲式以前のものであろう。ただ壁剝落土中からロクロ土師器の杯で，内面を入念なヘラミガキ調整をしているものや，須恵器杯の破片が出土しており，住居跡の年代としては，奈良時代～平安時代の幅を持って考えておきたい。

５号住居跡　ＳＩ05

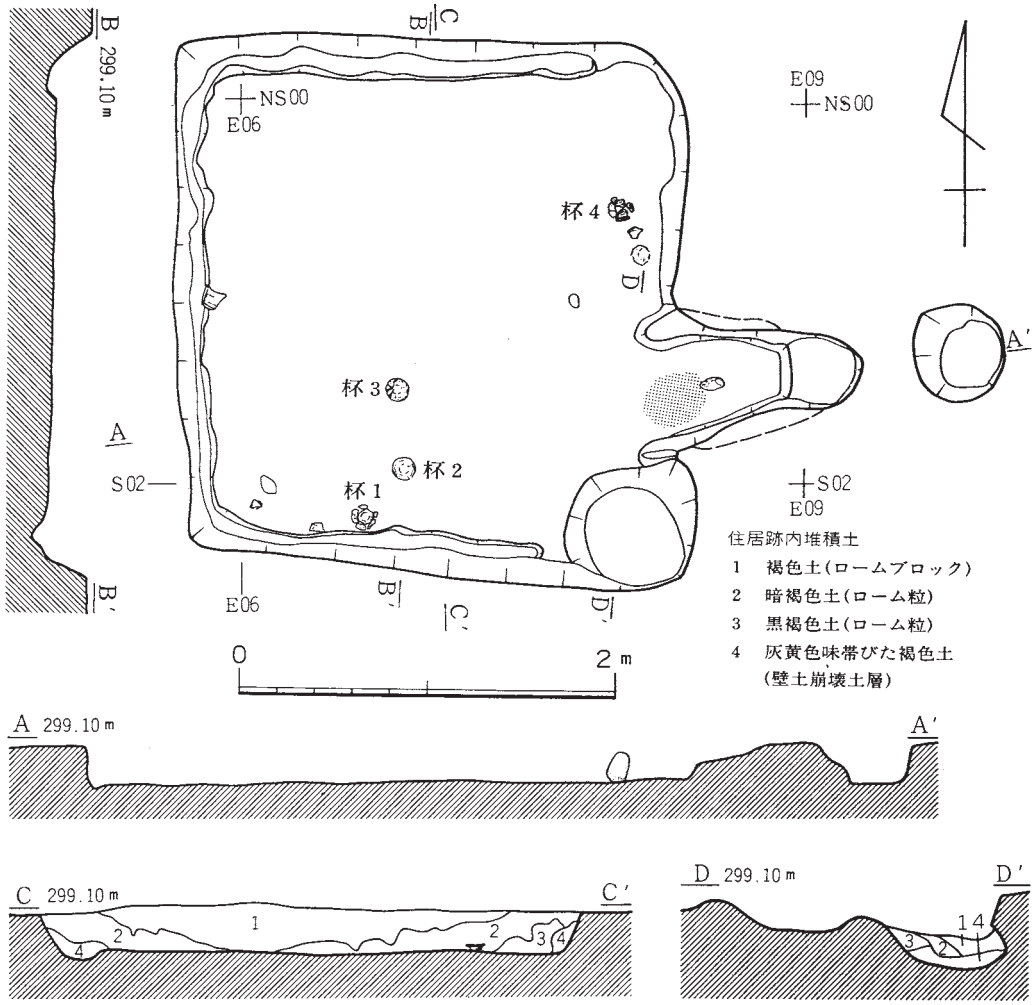
遺　　構（第14・15図，図版15～18）

本住居跡は，西側の中央部寄りに検出され，他の遺構との切り合い関係はなく，全体のプラン

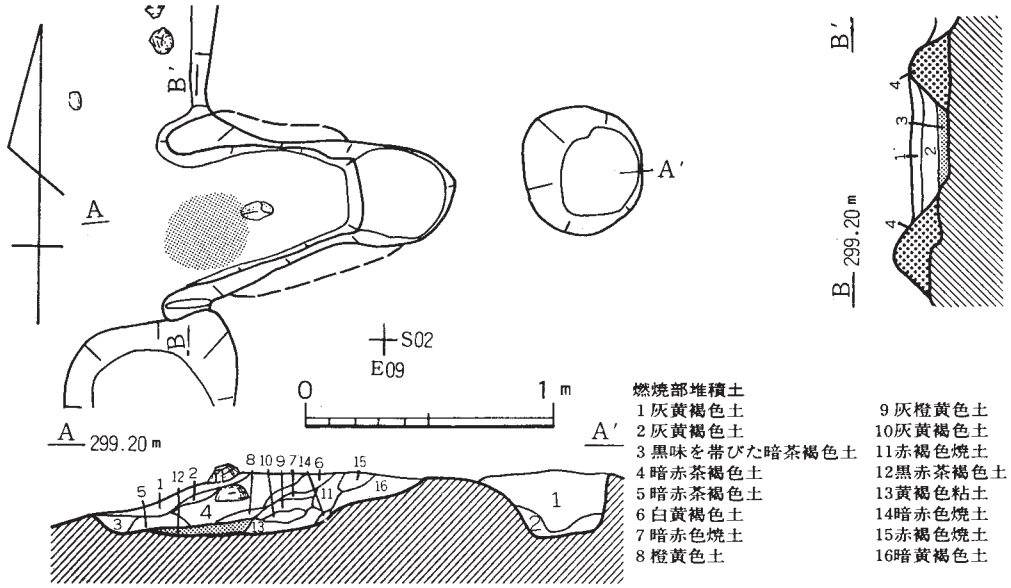
がよく確認され，良好な検出状況であった。

住居跡内の堆積土は４層に分離され，25cm前後を測る。将棋倒し状の土の流れ込みがみられ，自然堆積と判断される。プランはやや歪みのある方形を呈し，東西2.7m，南北2.84mを測り，床面積にして7.7㎡である。床面は竪穴底面を平坦にして形成しており，硬くしまっている。各壁に沿って，周溝状の窪みが東壁を除いて三方にまわるが，その掘形は明瞭でなく，壁面形成の際に残された跡形とも考えられる。残存壁高は20cm前後を測り，西辺のみは直に立ち上がるが，他の３辺はなだらかに立ち上がる。

柱穴と考えられるピットは検出されなかった。カマド部の右袖寄りに，径約60cm，深さ約20cmのピットを有するが，これは貯蔵穴ピットとしてとらえて良いと思われる。主軸はカマド部を中心に見れば東へ90°傾いている。



第14図　5 号 住 居 跡



第15図　５号住居跡カマド

カマドは，東壁の南側寄りに構築されており煙道を有する。カマドの左右袖部，および煙道部は一部削平されているが，焚口部の幅は50cmを測り，支脚として径約10cmの川原石を使用している。

遺　　物（第16図，図版59・61・62）

本住居跡内より出土した遺物は，土師器・須恵器である。図示されるものは，床面およびカマド内より出土した杯６点，甕１点であり，特に南壁寄りから集中して出土した完形の須恵器，杯３点（第16図１・２・３）は新知見の資料として注目される。

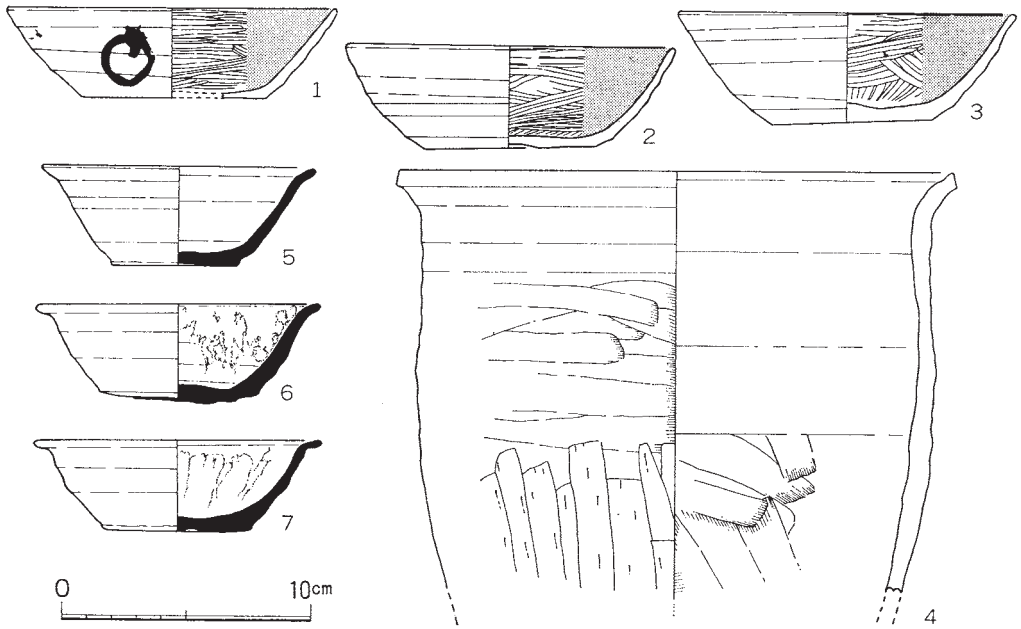
〔土　師　器〕

杯１（第16図１）　カマドの左袖部寄りから出土し，全体の1/3を復元実測した。口径13.1cm，底径7.3cm，高さ3.6cmを測る。ロクロ成形による杯であり，体部下半から底部全面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。平底の底部から，体部は直線的に外傾して口縁部に至る。

内面はヘラミガキが施され，黒色処理されている。外面の体部には「〆」の墨書を有する。

杯２（第16図２）　カマド内堆積土より出土し，全体の約1/2を復元実測した。口径13.1cm，底径6.8cm，高さ4.1cmを測る。平底の底部から，体部はやや膨らみをもちながら立ち上がり口縁部に至る。ロクロ成形による杯であり，底部から体部下半にかけて右回転のヘラケズリ再調整が施されている。底部の中央には，わずかながら回転ヘラ切り痕がうかがえる。内面は底部が一定方向のヘラミガキ，体部は横方向のヘラミガキで，黒色処理が施されている。

杯３（第16図３）　カマド内堆積土より出土し，ほぼ完形である。口径13.4cm，底径6.3cm，高



第16図　5号住居跡出土土師器

さ4.4cmを測る。ロクロ成形による杯であり，体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。平底の底部から，体部はやや膨らみをもって立ち上がり，口縁部に至る。内面は底部が放射状のヘラミガキ，体部が不定方向のヘラミガキで黒色処理されている。

甕１（第16図４）　カマド内堆積土より出土し，口縁部から胴部にかけての約1/4のみが現存する。ロクロによる成形で，胴部はやや膨らみをもつ長胴形を呈するものとみられる。頸部で強く外方に屈曲し，口縁端部はほぼ垂直に立ち上がり，面取りされている。推定口径22.0cm，残存胴部径20.8cmを測る。

〔須　恵　器〕

杯１（第16図５）　南側の壁際より出土し，ほぼ完形で，口径10.9cm，底径5.0cm，高さ4.0cmを測る。ロクロ成形による杯で，内外面ともに灰黄褐色を呈する。底部切り離しは回転ヘラ切りで再調整はみられない。体部は直線的に外傾し，口縁部近くで強く開いている。以下の杯２・３ともにほぼ同様の器形を呈する。

杯２（第16図６）　南側の壁寄りの床面より出土し，ほぼ完形で，口径11.4cm，底径6.3cm，高さ3.9cmを測る。ロクロ成形による杯であり，内外面とも明黄褐色を呈する。平底の底部から直線的に外傾し，口縁部近くで強く外方に屈曲し，朝顔状を呈する。底部切り離しは回転ヘラ切りによるもので，再調整はみられない。ヒダ状のヘラ切り痕がみられるが，ヘラの挿入角度が水平でなかったためであろう。内面には煤状の付着物が，口縁部に４ケ所観察される。

杯３（第16図７）　杯１・２同様，南側壁面寄りの床面から出土し，完形であり，口径11.5cm，底径5.9cm，高さ3.7cmを測る。ロクロ成形による杯で，器形，色調，焼成とも杯１・２とほぼ同じである。底部切り離しは回転ヘラ切りによる。内面には煤状の付着物が器面の約1/2ほど覆っている。

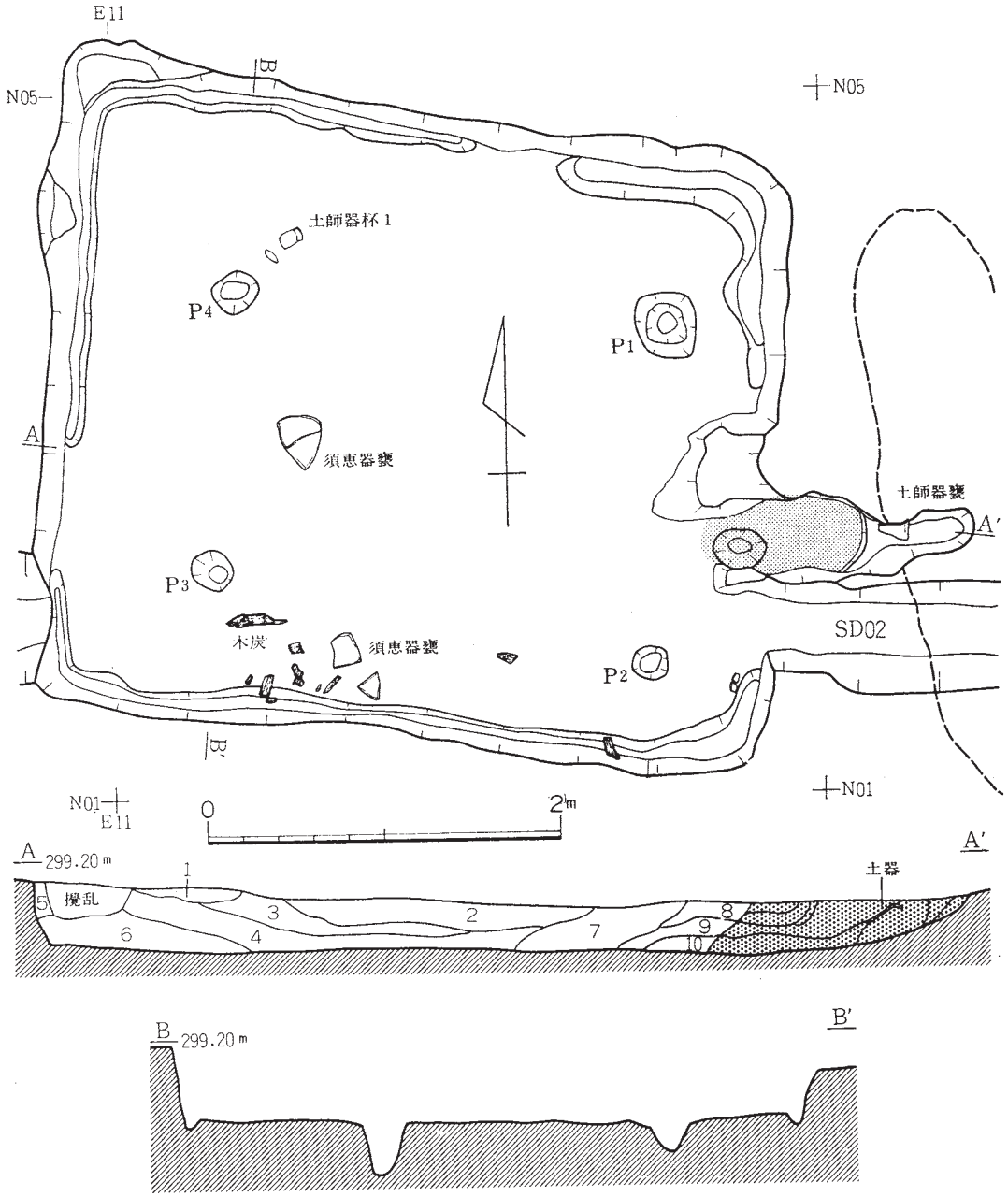
ま　と　め

本住居跡は比較的小型の住居跡である。出土遺物はすべてロクロ成形による土師器・および須恵器であり，なかでも床面から出土した須恵器の杯１・２・３の３点が得られたことは成果であった。この種の器形が，内黒土師器杯１・２・３と共伴することは注目され，他地域との関わりをも含めて今後追及せねばならない。本住居跡は，これらの出土遺物からみてほぼ平安時代に属するものと考えられる。

６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構（第17・18図，図版19～21）

発掘区中央西寄りに検出され，竪穴住居跡集中地域の東縁に位置する。検出面は耕作土直下の地山ローム層上面である。遺構は部分的に撹乱を受けてはいるが，全体的に保存状態は良い方である。遺構内堆積土は，部分的な撹乱を除くと大きく分けて，壁際の将棋倒し状の堆積層と，中央部のレンズ状の堆積層の２層に分かれ，自然な埋没経過を示している。土質は，上層から下層まで黒色ないし茶褐色のシルト質で，床面，壁面との分離が容易である。両壁付近に木炭がまとまって流れ込んだ状態で検出され，北壁近くに床面より浮いた状態で，わずかな焼土が見られた。平面プランは方形を呈し，主軸上に東西4.0m，南北3.48mを測り，その南辺内側を走る２号溝跡によって，東壁，西壁とカマドが一部破壊され，北西角とそのやや南の西壁も撹乱を受けている。壁面は各辺とも急激な立ち上がりを示し，残存壁高は20～40cmある。方位は，カマド側主軸がＮ99° Ｅ傾いている。床面状態は東壁付近が前述の２号溝跡によって，床面とほぼ同レベルまで掘り込まれているが，床面まで達してはいない。検出状況は後述するカマド焚口部から，中央部の４本の主柱に囲まれた範囲内が堅く踏みしめられており，堆積土と明確に分離する。それ以外の周辺壁際は，やや湿った感じで軟調である。壁際には，カマド付近と西壁，北壁の一部を除いて，幅約10cm，深さ４～６cmの周溝が認められる。カマドは東辺の中央やや南寄りに，煙道を付属して構築されているが，右袖部は前述の溝によって破壊を受け，わずかに残るのみである。煙道は，一部13号土坑を切って構築され，焚口部から燃焼部奥壁まで120cm，煙道先端まで180cmを測る。残存している左袖部は，横に大きく羽を広げたような形を呈し，燃焼部は，奥行が非常に広く，煙道部の方へくい込み燃焼部奥壁の位置が，住居跡の壁より50cm外へ張り出し，火床には焼土の厚い堆積が見られるが，床面のロームは若干焼土化しているだけである。燃焼部から煙

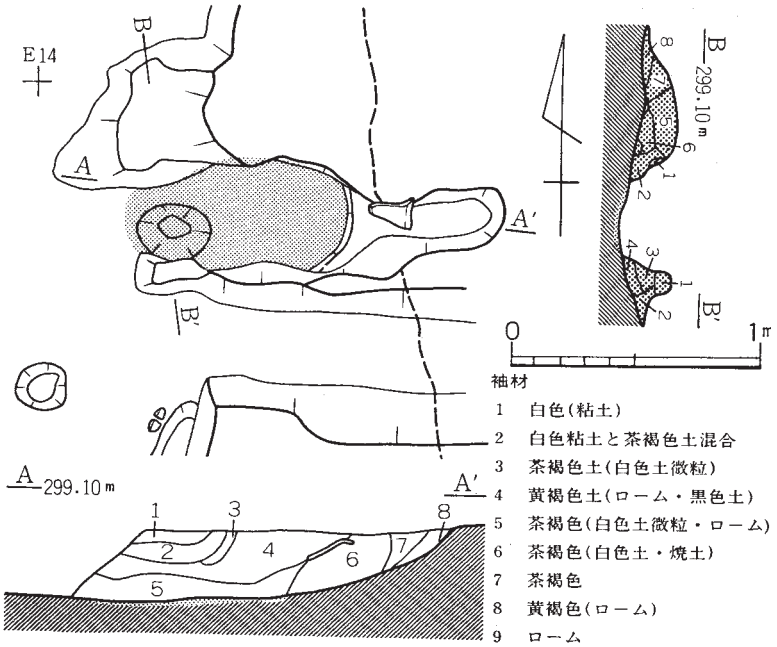


住居跡内堆積土

1　黒褐色土(シルト質・ロームブロックを含む)
2　茶褐色土(シルト質・黒色土・ロームブロックを含む)
3　茶褐色土(シルト質・ロームの微粒を含む)
4　茶褐色土(シルト質・黒色土・ロームブロックを含む)
5　茶褐色土(シルト質)
6　茶褐色土(シルト質・黄褐色の小ブロックを含む)
7　茶褐色土(シルト質・ロームブロック大小を含む)
8　黒褐色土(シルト質・ロームの小ブロックを含む)
9　茶褐色土(シルト質・黒色土とローム微粒を含む)
10　茶褐色土(シルト質・白色の粘土を少量含む)

第17図　6 号 住 居 跡

道にかけての天井部には，白色粘土が使われ，煙道部天井の一部は土師器甕の大型破片によって，土止めされている。柱穴は，主柱穴と思われるものが各コーナーに対比して，中央寄りに４本見られ，径20～42cm，深さは北辺の２本（P_1，P_4）は27cm，南辺の２本は，P_2が７cm，P_3が14cmと，北辺と南辺とでかなりのひらきがあり，また，北辺の２本に対して南辺の２本は，南壁寄りに構築されている。



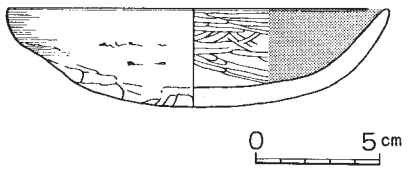
第18図　６号住居跡カマド

遺　　物（第19図，図版61）

堆積土から床面にかけて，遺物の出土量は少ない。堆積下部から床面より若干浮いた状態で，南壁寄りの所に流れ込んだ形跡の認められる大型甕の破片と，床面のP_4付近に2/3個体分の土師器杯が出土した。また，カマド煙道部において須恵器甕の大破片が出土している。

〔土　師　器〕

杯１（第19図）唯一の床面検出土器である。1/3が欠損しているが，口縁部から底部まで残存しているので全体をうかがうことができる。口径14.9cm，高さ4.0cmの扁平な丸底の杯である。体部下端でゆるく立ち上がり，口縁部外側が削り取られたように内彎する。口唇部上面は稜状にとがる。器画調整は外面の体下半部がヘラケズリ，それより上は口端部までヨコナデが施される。調整はそれほど良くなく，粘土紐の痕跡が部分的に残る。内面はヘラミガキが施され滑沢をもっているが，黒色付着物が認められ，底面中央部は擦痕状の使用痕が楕円形に残り，その周囲もところどころ斑点状に剝落している。内面黒色処理が施されたらしいが，その



第19図　６号住居跡出土土師器

後の再酸化によって暗赤褐色に変色している部分が多い。胎土は精良で密であるが微量の細砂が混じる。

〔そ　の　他〕

堆積土下部から，小型の杯の1/4個体分が検出されているが，底部を欠くので全体は不明である。口径は推定12.6㎝で体部下半から内彎しつつ口端に至る丸底であろう。杯１の器形を小型化したものであるが口唇部の内彎傾向がより強い。外面器表はヘラケズリの後，細いヘラミガキを丁寧に施し，内面にも同様なヘラミガキを施している。内外面とも黒色処理が施されており，焼成は極めて良い。また，長胴甕の破片と思われる口縁部破片が，煙道部から検出されている。胴下半部が膨らみを持ち，口縁部が外反する器形となるものの様である。器面調整は，外面口縁部はヨコナデ，それ以下は，擦痕状のハケ目，内面はヨコナデ，及びナデが加えられている。内外面とも煤が付着している。胎土は粗く粗砂が混じる。

図版61の甕は住居跡平面図に記入されているが，南壁から床面中央部にかけて，堆積土下部から検出された，丸底の甕の底部から胴下半部にかけての破片である。外面はタタキ目，内面はヘラナデが加えられている。二次的に酸化を受けて暗赤褐色を呈する。

ま　と　め

本住居跡は２号溝跡による破壊部分を除き，良好な保存状態を示している。堆積土下部に見られる木炭及び少量の焼土は，床面より浮いた状態であり，出土遺物に二次的な酸化現象の認められるものがあることから，火災あるいはそれに類するものを受けているものと考えられるが，その時期は住居廃絶時ではなく，住居跡の埋没がある程度進んでからであろう。主柱穴の南辺と北辺の深さの違いが，上屋構造を考える上で良い資料となろう。所属時期は，出土杯の特徴から国分寺下層式と推定され，奈良～平安時代初頭と見ることができる。

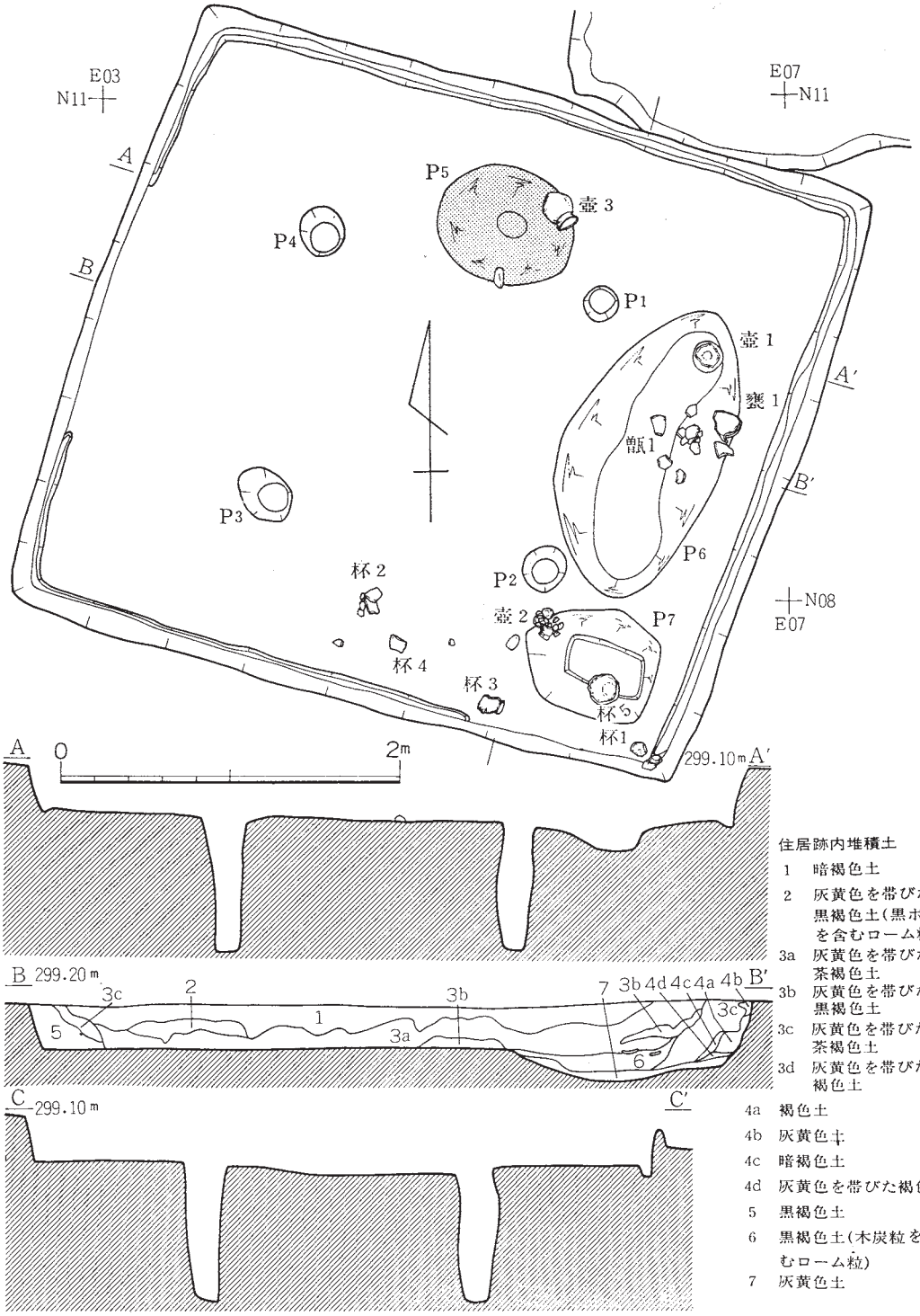
７号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（第20図，図版22～27）

本住居跡は，西側中央部の８号住居跡に接して検出され，ほぼ全体のプランが確認された。住居跡内の堆積土は厚い所で25㎝を測り，将棋倒し状の土層堆積がみられることにより自然堆積と判断された。

平面プランは，南北3.7m，東西4.1mの長方形を呈し，床面積にして約15.2㎡であり，主軸は東側に約18°傾いている。残存壁高は25～30㎝を測り，西側の壁を除き直に立ち上がる。周溝は西側で一部途切れるが，ほぼ全周する。カマドは検出されなかった。床面は，地山ローム面を床面とし，比較的平坦でしまっている。

ピットは合計７ケ所検出されP_1～P_4は径約30㎝，深さ75㎝前後を測り，主柱穴と考えられた。


E03
N11
E07
N11
A
B
A′
B′
P5
壺3
P4
P1
壺1
甕1
甑1
P3
P6
杯2
P2
壺2
P7
N08
E07
杯4
杯3
杯5
杯1
A
0
2m
299.10m
A′
B
299.20m
B′
C
299.10m
C′
1
2
3a
3b
3c
3d
4a
4b
4c
4d
5
6
7
住居跡内堆積土
1　暗褐色土
2　灰黄色を帯びた黒褐色土(黒ボク土を含むローム粒)
3a　灰黄色を帯びた茶褐色土
3b　灰黄色を帯びた黒褐色土
3c　灰黄色を帯びた茶褐色土
3d　灰黄色を帯びた褐色土
4a　褐色土
4b　灰黄色土
4c　暗褐色土
4d　灰黄色を帯びた褐色土
5　黒褐色土
6　黒褐色土(木炭粒を含むローム粒)
7　灰黄色土

第20図　7 号 住 居 跡

P_5は径70～80cmの楕円形を呈し，深さ９cmと浅く緩やかに掘り窪められており，底面には硬質な焼土面が確認された。P_6は東壁面寄りに検出され，径90～180cm，深さ20cmの楕円形を呈し，堆積土内より，壺・甑・甕が各１点ずつ出土している。P_7は南東隅部より検出され，径65～80cm，深さ35cmを測り，底面は長方形を呈している。これは貯蔵穴状ピットと考えられる。

遺　　物（第21・22図，図版60）

本住居跡内において検出された遺物は，すべて土師器である。遺物は主にP_5～P_7の各ピット部に集中し，主柱穴で囲まれた内部からは検出されず，片寄りが見られた。このうち図示できたものとして，杯５・壺３・甑１・甕１がある。以下，各器形に関して説明を加える。

〔土　師　器〕

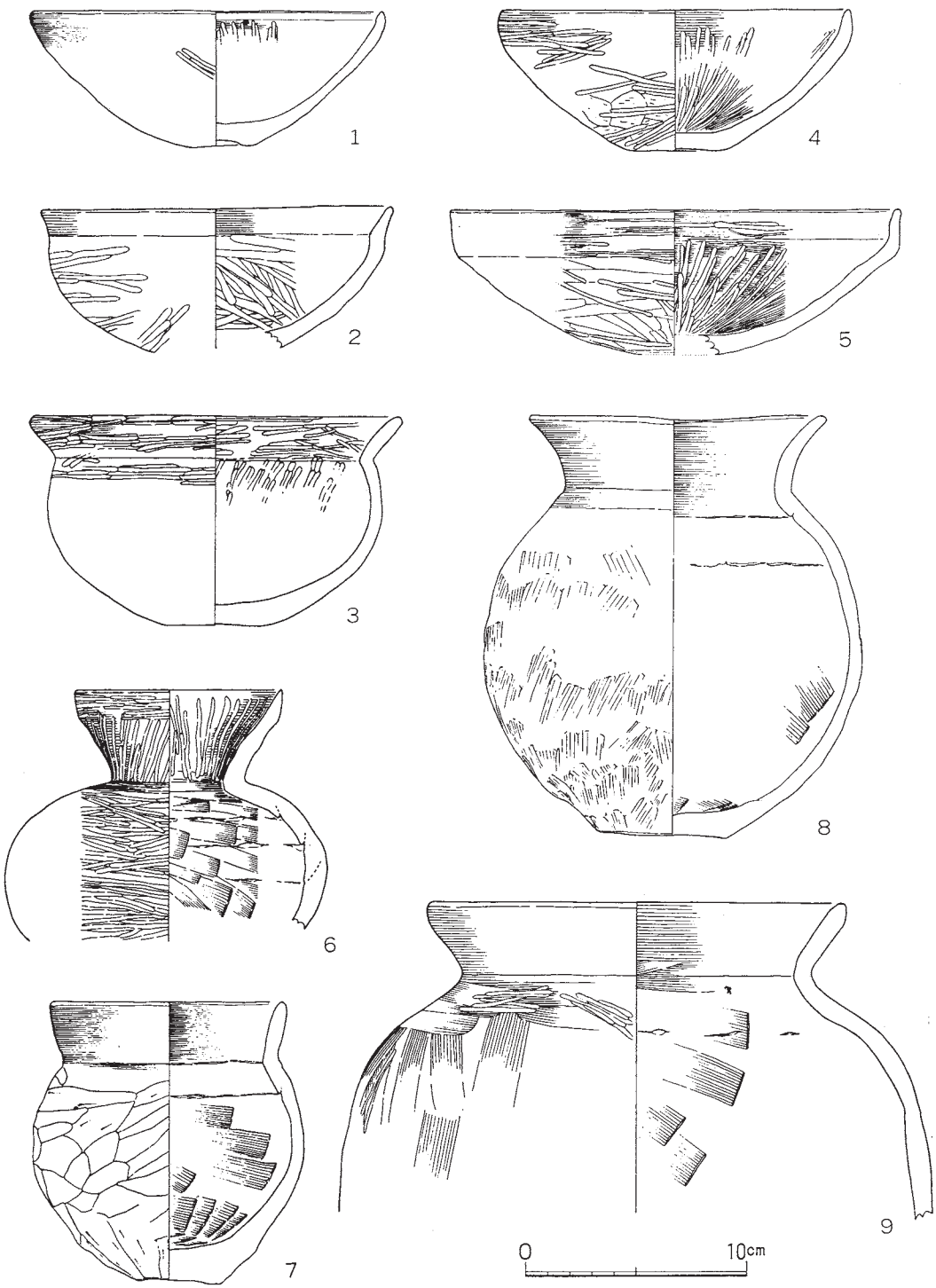
杯１（第21図１）　住居跡の東南壁隅部の床直より出土し，全体の約2/3を復元実測した。推定口径16.0cm，底径2.8cm，高さ6.0cmを測る。底部には凹を有し，体部は直線的に外傾し，口縁部は短く立つ。外面の体部上半がヘラミガキ，口縁部がヨコナデ，内面の口縁部がヨコナデ後ヘラミガキであり，その他は内外面ともに摩滅が進んでおり不明である。色調は内外面とも赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含みやや脆い。

杯２（第21図２）　南壁面寄りの２層より出土したものであり，全体の約1/3を欠損している。口径15.9cm，推定高さ6.7cmを測る。底部は欠損しており，体部は丸味を帯びて立ち上がり，頸部でわずかにくびれて内面に軽い稜をつくる。口縁部は短く外傾する。外面体部がヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁部はヨコナデであり，内面の底部から体部にかけては不定方向のヘラミガキ，口縁部はヨコナデである。色調は内外面とも赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含み，焼成も良く堅緻である。

杯３（第21図３）　南壁面のP_7寄りの床直より出土し，全体の約1/2を復元実測した。推定口径16.7cm，底径4.3cm，高さ9.4cmを測る。平底の底部から，体部は丸味を帯びて立ち上がり，頸部でくびれて内面に稜をつくり，口縁部は外反する。外面の体部がヘラケズリ，頸部から口縁部にかけてヨコナデ後ヘラミガキ，内面の頸部は縦のヘラミガキ，口縁部は横のヘラミガキが施され，他は摩滅のため不明である。内外面とも赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含み，焼成も良く堅緻である。

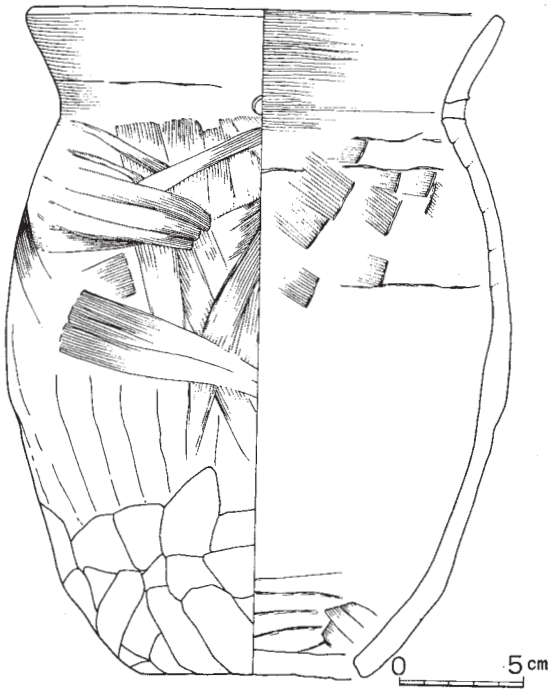
杯４（第21図４）　南壁面のP_7寄りの床直から出土し，全体の約2/3を復元実測した。推定口径16.0cm，底径4.2cm，高さ6.3cmを測る。平底の底部から，体部は直線的に外傾し，口縁部は直立する。外面の底部はヘラケズリ，体部がヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁部はヨコナデ後ヘラミガキである。内面は，底部から体部にかけて疎らな放射状のヘラミガキ，口縁部はヨコナデである。色調は外面が赤褐色，内面が黄褐色を呈し，胎土は緻密で，焼成も良好である。

杯５（第21図５）　貯蔵穴状ピットP_7内より出土し，底部をわずかに欠損しているが，ほぼ



第21図　７号住居跡出土土師器

完形である。口径20.3cm，底径4.0cm，高さ6.5cmを測る比較的大型の杯である。平底風の底部から，体部は直線的に外傾し，口縁部は直立する。外面の体部から底部にかけてはヘラケズリ後ヘラミガキ，口縁部は，ヨコナデ後，ヘラミガキである。内面は，底部から体部にかけて疎らな放射状のヘラミガキ，口縁部はヨコナデ後一部ヘラミガキである。内外面とも赤褐色を呈し，胎土はわずかに砂粒を含むが緻密であり，焼成も良い。



第22図　7号住居跡出土土師器

壺１（第21図６）　P_6の床面より出土し，底部を欠損している。推定口径9.3cm，推定高さ13.0cm，最大胴径14.5cmを測る。胴部はつぶれた球形を呈し，頸部で強くくびれ，口縁部は長く外傾し端部で短く立つ。外面の胴部はヘラケズリ後横方向の均一なヘラミガキ，口縁部はヨコナデ後縦のヘラミガキ，端部がヨコナデ後横方向のヘラミガキである。内面は胴部がヘラナデ，頸部から口縁部にかけてがヨコナデ後疎らな縦のヘラミガキである。内面の胴部には三段階にわたっての接合痕があり，粘土紐積み上げによる成形で，一段階ごとにヘラナデを行っているものと観察される。色調は内外面とも暗赤褐色を呈し，胎土も緻密で焼成も良好である。

壺２（第21図７）　貯蔵穴状ピットP_7の上面より出土し，ほぼ完形である。口径10.7cm，底径3.8cm，最大胴径12.2cm，高さ12.6cmを測る。底部は平底でわずかに中央部は窪み，胴部は強い膨らみをもって立ち上がり球形を呈する。頸部でのくびれは弱く，外傾して口縁部に至る。内面には軽く稜が形成される。外面の底部から胴部にかけてはヘラケズリ，口縁部はヨコナデであり，内面は底部から胴部にかけてヘラナデ，口縁部はヨコナデである。色調は内外面とも暗赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含みやや粗く，胴下半部は二次加熱により赤化しており脆い。

壺３（第21図８）　北壁寄りのP_5上面より出土し，ほぼ完形である。口径13.4cm，底径5.8cm，最大胴径17.0cm，高さ18.5cmを測る。平底の底部から，胴部は張りをもって立ち上がり球形を呈する。頸部でくびれて内面に稜をつくった後，外反して口縁部に至る。外面の胴部がナデ，口縁部はヨコナデであり，内面の胴部はヘラナデ，口縁部はヨコナデが施される。色調は内外面とも

暗茶褐色を呈し，外面の胴部から口縁部にかけては煤状の付着物がある。胎土は砂粒を含みやや粗いが，焼成は良好である。

甕１（第21図９）　P_6の堆積土内より出土し，口縁部から胴部にかけての約1/4が現存する。推定口径は18.8cm，推定胴部径26.5cmを測り，他は不明である。やや肩の張った胴部から，頸部でくびれて「く」字状を呈し，外傾して口縁部に至る。内面には軽い稜が形成される。調整は内外面とも胴部がヘラナデ，口縁部はヨコナデである。色調は内外面とも暗黄褐色を呈し，胴部は加熱されており，赤化し脆い。

甑１（第22図）　P_6の堆積土内下層より出土し，全体の約1/2が現存している。口径19.1cm，底径9.0cm，高さ26.5cmを測る。無底の甑で，頸部に径0.6cmの穿孔が２ケ所にみられる。調整は外面の胴部下半がヘラケズリ，胴部上半がヘラナデ，口縁部はヨコナデである。内面は胴部がヘラナデ，口縁部はヨコナデである。色調は外面が黄褐色，内面は明赤褐色を呈し，胴下半部は加熱されており，やや脆い。

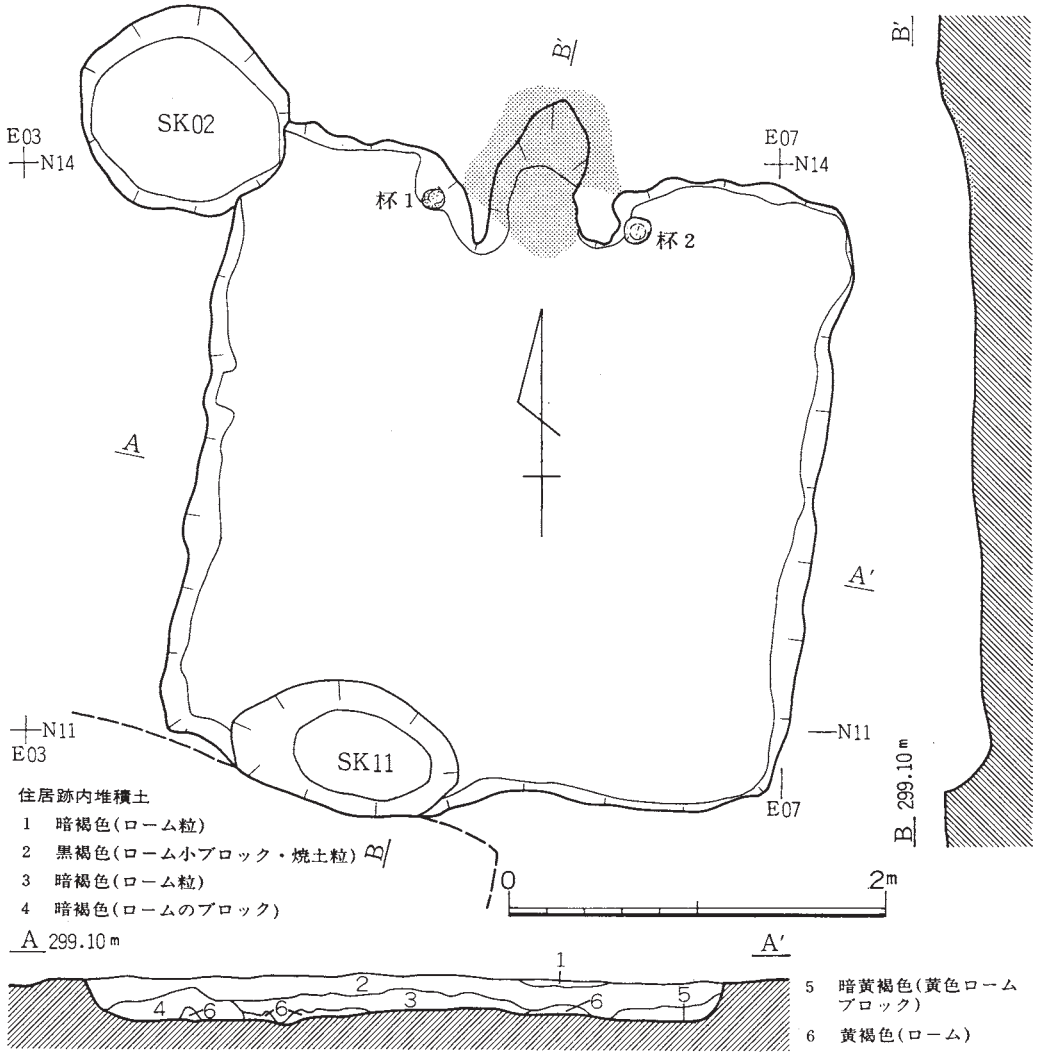
ま　と　め

本住居跡は，東西にやや長い長方形のプランを呈し，床面積にして15.2㎡を測る。カマド部は１号・２号住居跡同様検出されていないが，北壁面寄りに検出されたP_5の底面に硬質な焼土面があり，炉跡かと考えられた。P_1～P_4の４個の柱穴は1.6m間隔で，対角線上に整然と配置されており，また東南隅部に検出された貯蔵穴状ピットP_7の位置も，１号住居跡と類似する。遺物の出土量は，今回検出された竪穴住居跡のうちでも最も多く，器形も４種類を数え，杯５，壺３，甑１，甕１の計10点が実測できた。本住居跡は床面直上，および各ピット内からの出土遺物より，古墳時代中期後半に属するものと考えられる。

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（第23・24図，図版27～29）

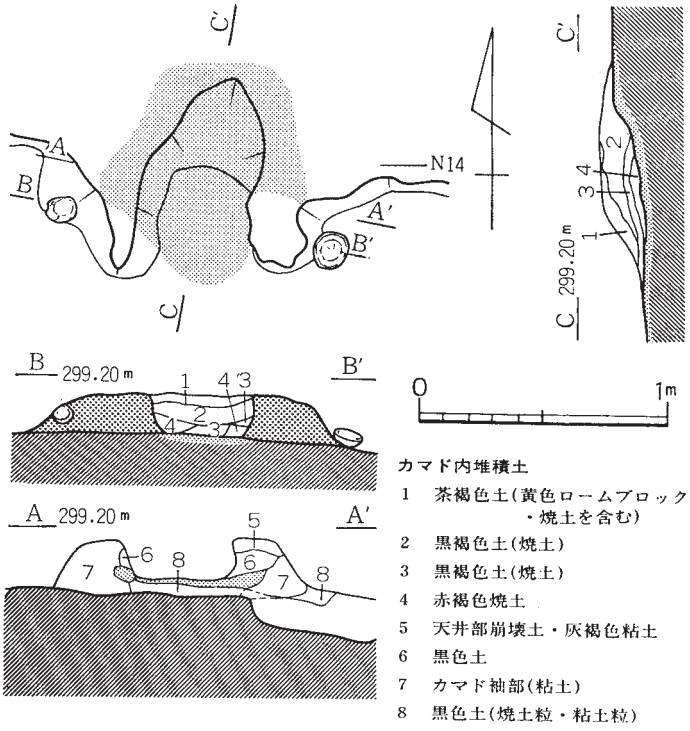
調査区西部の住居跡集中区域の地山ローム層上面で検出された竪穴住居跡で，７号住居跡と壁をほとんど接し，また，２号・11号土坑とも重複して検出された。この段階で，当住居跡が７号住居跡よりも新しく，２号土坑よりも古いという切り合い関係をもって，プランが観察された。11号土坑は住居跡床面に達した段階で検出され，床面の状態から当住居跡よりも，11号土坑の方が新しいものであることが確認された。遺構内堆積土の状態は，壁際に壁剝落土と観察される堆積層があり，中央部は，レンズ状の堆積層が大まかに上下２層に堆積している。堆積土全体に，ローム微粒及び小ブロックを混入している。平面のプランは，角のやや丸味を帯びた方形を呈すが，北西コーナーは不明である。大きさは南北主軸上で，カマド部分を含んで3.81m，東西主軸上で3.21mを測るが，竪穴自体は，東西，南北ほぼ等しい長さを持つ。壁高は15～24cmあり，



第23図　8 号 住 居 跡

床面からの立ち上がりが緩く，だれた感じがする。方位は，南北主軸の傾きがN 7°30′ Eである。床面中央部は，地山であるローム層中に構築され，南壁，北壁寄りは竪穴構築時の掘形の上に約15～20cmの黒色土とロームの小ブロックの混土を盛土して床面を構築している。床面盛土部はやや軟調であるが，中央付近は堅くしまっており，レベルは東壁カマド前面が高く，縁辺部へ行くほど低くなっている。最大レベル差は10cmである。また柱穴と思われるピットは，住居跡内外とも検出されていない。カマドは，東辺中央にカマドの主軸と竪穴部の東西主軸とが，ちょうど重なり合うように構築されている。このカマドは燃焼部が竪穴の壁より外側へ突き出しており，煙道は未発達である。袖部は灰黄褐色の粘土で構築されているが，もともとは地山のロームを使用

したもので燃焼によって酸化変色したものと思われる。両袖部の裾部に密着して対称する位置に，土師器杯が各１点ずつ検出されている。燃焼部底面は，奥壁方向になだらかに立ち上がり，奥壁の傾斜に続いている。底面はかなり加熱されており，長く使用されていたようである。法量は，袖幅が45cm，奥行85cm，焚口部の幅は約35cm，焚口部から奥壁までは45cmを測る。その他の住居跡に付属する遺構は検出されていない。



第24図　８号住居跡カマド

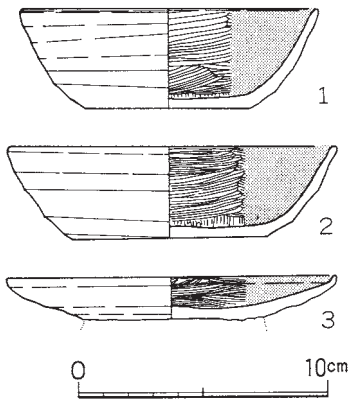
遺　物（第25図，図版61・62）

総数で約20片出土したにすぎない。須恵器の甕の破片が１片あるが，他は全て土師器である。そのうち全体をうかがえるような資料は，カマド袖部検出の土師器杯２個体と，台付皿１個体のみである。

〔土　師　器〕

杯１（第25図１）　全体の約1/4程を欠損し，カマド左袖の裾部に密着した状態で出土した中型の杯である。器形は，平底から丸味を帯びて立ち上がり，体部下端から真っ直ぐに伸び，口縁部はかすかに内彎する。口径・高さに対して底径が比較的大きい。法量は口径11.9cm，高さ4.0cm，底径6.5cmである。ロクロ成形であり，底部切り離しは回転糸切りによる。回転方向は右である。調整は，外面底部から体部下半まで回転ヘラケズリを加えているが，底部中央付近には調整が及ばず糸切り痕を残している。内面は，底部が一方向の細かいヘラミガキ，体部は４単位に分けて横方向のヘラミガキが施されている。色調は赤褐色から灰黒色で，内面は黒色処理が施されているが，部分的に再酸化を受けている。胎土は密で焼成は良い。

杯２（第25図２）　カマド左袖部の杯１と対称の位置に，密着して置かれたような状態で出土した。ほぼ完形である。平底で，ゆるく内彎しながら口縁部に至る。口径に対して，底径が大きく，やや扁平な感じがする。法量は，口径13.0cm，底径7.8cm，高さ3.7cmである。ロクロ成形で，外面底部から体部中位まで，回転ヘラケズリ再調整を加えている。ロクロの回転方向は右回転で



第25図　8号住居跡出土土師器

ある。内面は，底部が一方向，体部は一周を５単位に分けて横方向の入念なヘラケズリ再調整が施されている。胎土は密で少量の粗砂を含む。焼成は良好である。色調は，灰黄色ないし灰黒色を呈し，内面黒色処理を施すが，再酸化により，内面も部分的に灰黄色を呈する。

台付皿１（第25図３）　カマド左袖上面に貼り付いて，個体の1/5程が検出された。体部は広く浅く開き，口縁部でほぼ直立する。台部は剝落しているが，接合痕が明瞭に認められる。口径は推定13.2cm，底径7.3cm，現存器高2.7cmを測る。ロクロ成形により，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリを加えている。内面には，底部から体部下半にかけて放射状のヘラミガキを加え，その後横方向の細いヘラミガキを丁寧に施している。内面には黒色処理を施している。胎土は密で，焼成は良好で灰黄褐色を呈している。

〔須　恵　器〕

甕の胴部の小破片が，カマド内より１点検出されている。外面平行タタキ目が施されている。

ま　と　め

土坑によって２ケ所切られて，壁の状態が良好ではないが，プランは整っている住居跡である。カマド部からの２個の土師器杯の出土状態が注目される。所属時期は，上記の土器が表杉ノ入式の範疇に入るものであり，平安時代初頭のものと思われる。従って住居跡の時期もほぼ同時期と見てよいであろう。

９号住居跡　ＳＩ09

遺　　構（第26・27図，図版30・31）

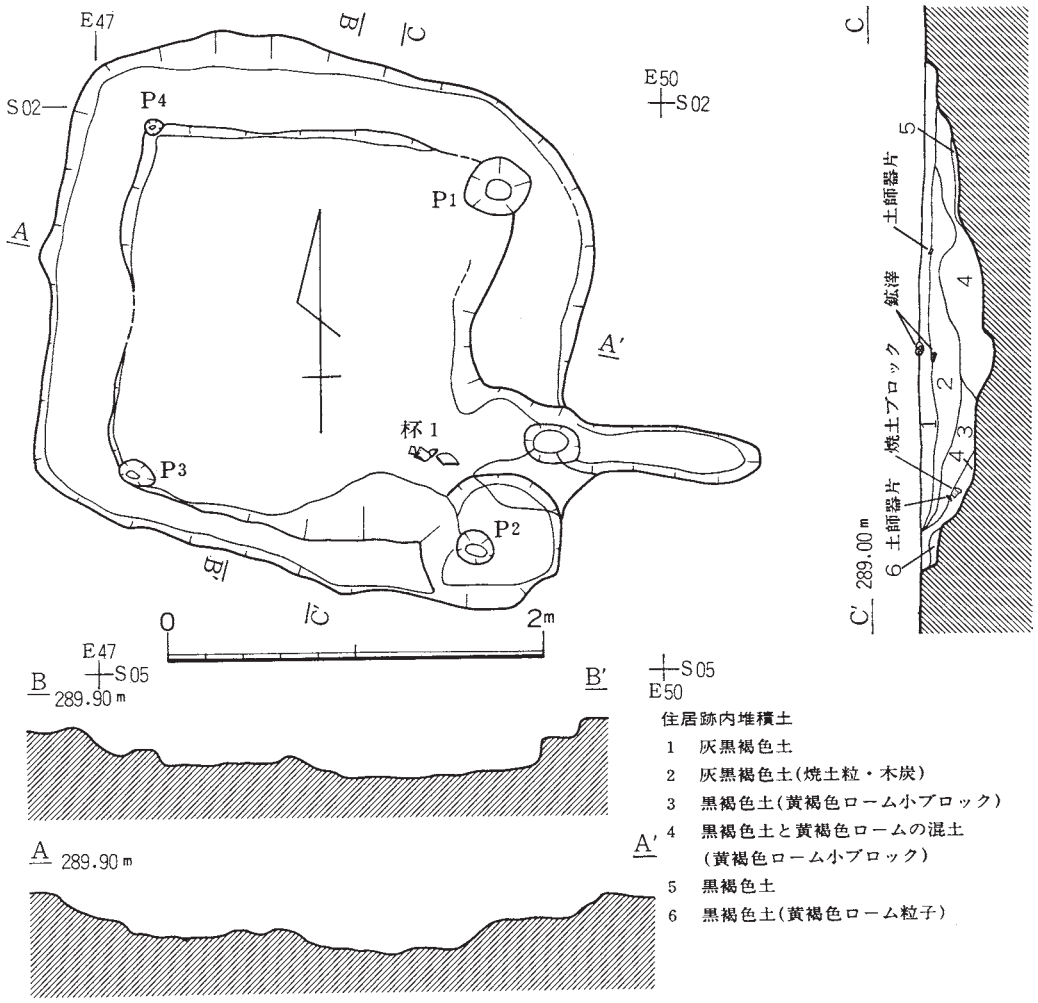
発掘区の東部に位置し，西部の竪穴住居跡密集区から，30m東に孤立した状態で１軒だけ検出された住居跡である。検出面は耕作土直下のローム層上面である。遺構内土層堆積状況は，大きく２つに分けられ上層に灰黒褐色土，下層に黒褐色土と黄褐色ローム粒子の混合土が，レンズ状に落ち込んで堆積している。検出面付近に30×60cmの範囲で焼土粒の分布が見られたが，流れ込んだような堆積状況であった。

平面プランは東西2.70m，南北2.80mのほぼ方形であるが，北東コーナーがかなりくずれた形をしている。主軸の方位はＮ16° Ｅである。床面には平面プランに沿った形で段がついており，外側の平面プランと切り合った２つの住居跡とも考えられたが，平面及び土層観察による切り合いの痕跡は確認できなかった。さらに，カマドは焚口部底面・レベル・焼土の堆積状況などから

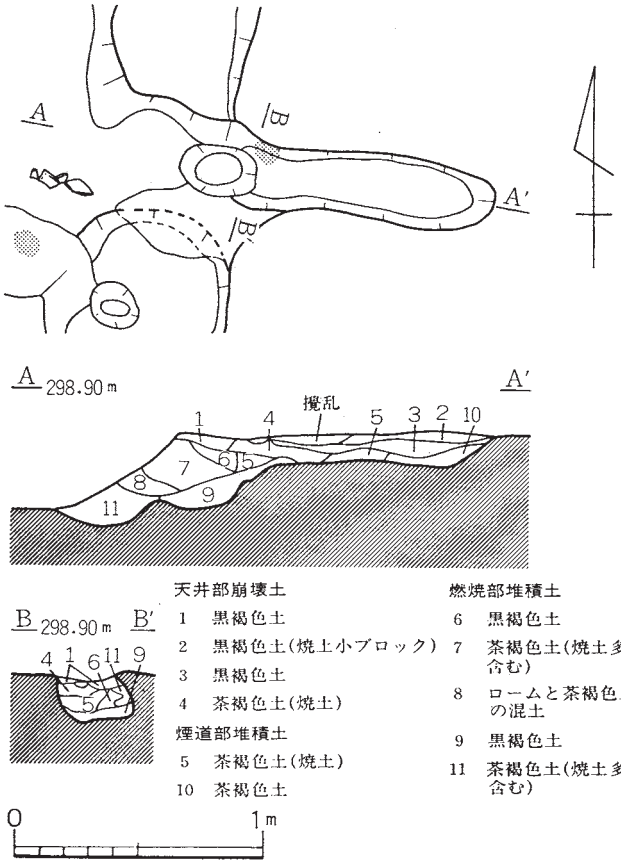
判断すると，内側の段に付属しているので，この段は外側の方形プランの付属遺構と思われる。壁高は10～20cm，内側の段差は14～30cmを測る。周溝はない。床はロームであるが，全体に軟調であり，踏みしめたような部分はない。全体として凹凸が激しく，中央部は擂り鉢状にゆるく落ち込んでいる。さらに，焼土粒・木炭粒が全体に散布している。柱穴は底面の段の四隅に各１個ずつ検出され，大きいP_1で長径36cmの楕円形を呈し，深さ11cmである。小さいP_4で径８cm，深さ11cmと貧弱である。

カマドは，東壁中央よりやや南側につくられている。焚口部の幅は35cm，右袖は粘土がよく残っていたが，左袖は粘土の堆積が少なく判然としていない。燃焼部はほとんど焼けておらず，燃焼部壁付近の側壁が若干焼土化しているにすぎない。煙道は長さ100cm，幅20～23cmである。

その他カマド右脇に，径70cm，深さ55cmの円形を呈する貯蔵穴状のピットが１ケ所検出されて



第26図　９ 号 住 居 跡



第27図　9号住居跡カマド

いる。このピットは，カマド構築前に掘り込んだもので，ピットの上に部分的にカマドの袖が張り出している。

遺　物（第28図，図版61）

堆積土中からは，土師器片が出土したが，小片が多く量的にも少ない。推定して全体を復元できるものは，以下の杯３個体と甕１個体であるが，杯と思われる破片は全てロクロ使用の内面黒色処理された土器である。そのほか鉄滓が中央部からまとまって出土している。床面からは，カマド焚口部付近にロクロ痕のある内黒杯の破片が数片検出され，中に１片，杯の底部に墨書のあるものが存在する。

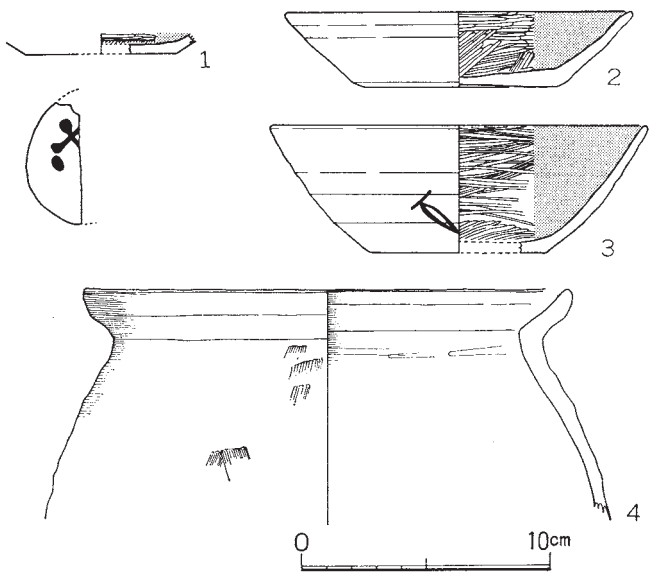
〔土　師　器〕

杯１（第28図１）　カマド焚口部前の床面に一括土器として出土した杯の底部破片である。全体の器形は不明である。底部は回転ヘラ切り痕がみとめられ，わずかにナデ調整し，体部下端は回転ヘラケズリで再調整している。内面はヘラミガキが施され，黒色処理されている。墨書は不鮮明で判読できない。

杯２（第28図２）　住居跡検出面から堆積土上部にかけて，まとまって出土し，個体の2/3ほどが復元された。推定口径13.9cm，底径7.6cm，器高3.0cmで口径に対して高さが低く，扁平な感じの器形である。ロクロ成形により口縁部は直線的に伸び，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整を施している。内面はヘラミガキが加えられ，黒色処理されている。色調は外面暗茶褐色を呈し，胎土は精良で微細砂粒を含む。焼成は良い。

杯３（第28図３）　堆積土上部に，ややまとまって検出された土器片のうちの１つである。全体の約1/5を残すのみで，口径15.1cm，底径7.0cm，器高5.1cmと推定され，やや大ぶりな杯である。器形は底部から体部中位にかけて，若干内彎ぎみに立ち上がり，口縁部にかけて直線的に伸びる。ロクロ成形の後，体部から体部下部にかけて，ヘラケズリ調整が加えられ，内面はヘラミ

ガキの後に，黒色処理が施されている。色調は淡茶褐色，胎土は密である。外面体部下端に墨書が有るが，大半が欠損しているため判読はできない。



第28図　９号住居跡出土土師器

甕１（第28図４）　堆積土上部に口縁部の1/4ほどが出土している。他に甕の破片は２～３あるが全体をうかがえるようなものはない。器形は胴から口頸部にかけてゆるく内彎し，口頸部で「く」字形に外へ屈曲する。推定口径19.5cm，他は不明である。成形はロクロ成形で，口縁部はヨコナデ，胴部はナデ調整が施される。胎土はやや粗く，長石などの粗砂を多く含み，アズキ粒大のものまで混入され，器表がザラついている。色調は外面淡茶褐色，内面暗褐色で焼成は良い。

ま　と　め

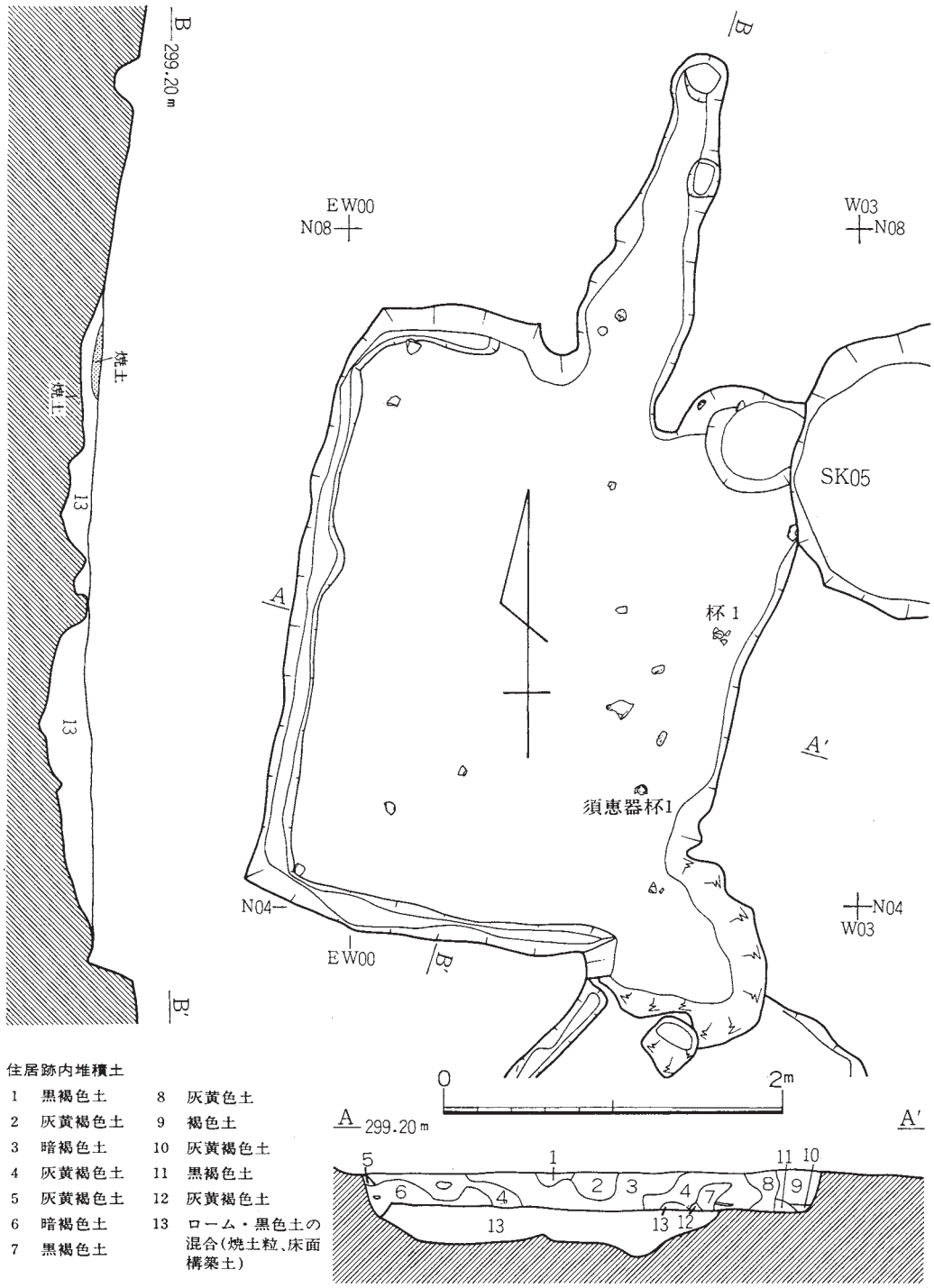
本住居跡の特徴をみると，遺跡の中で，住居跡群からひとつだけ飛び離れていることや，構造が内側に方形の段を有していること，堆積土上部ではあるが，この住居跡からだけ鉄滓が検出されていることなどがあげられよう。さらに床面の凹凸が激しいことなどを考え合わせると，何か特殊な，たとえば常住しない作業所跡であるかもしれない。所属時期は，床面出土の土器３個体分が全てロクロ使用の土師器であり，平安時代と考えられる。

10号住居跡　ＳＩ10

遺　　構（第29・30図，図版32～34）

本住居跡は西端の中央部で検出され，１号・５号・12号土坑とそれぞれ重複している。検出状況から新旧の順は，１号・５号土坑→10号住居跡→12号土坑となることが確認された。住居跡内の堆積土は20cm前後を測り，将棋倒し状の堆積状況より自然堆積と判断された。プランは，東西2.7m，南北3.6mの長方形を呈し，床面積にして9.7㎡であり，主軸は東側へ約Ｎ10°Ｅ傾いている。

残存壁高は，15～20cmを測り，各壁ともゆるやかな立ち上がりである。西壁から南壁にかけて



住居跡内堆積土

1	黒褐色土	8	灰黄色土
2	灰黄褐色土	9	褐色土
3	暗褐色土	10	灰黄褐色土
4	灰黄褐色土	11	黒褐色土
5	灰黄褐色土	12	灰黄褐色土
6	暗褐色土	13	ローム・黒色土の混合(焼土粒、床面構築土)
7	黒褐色土		

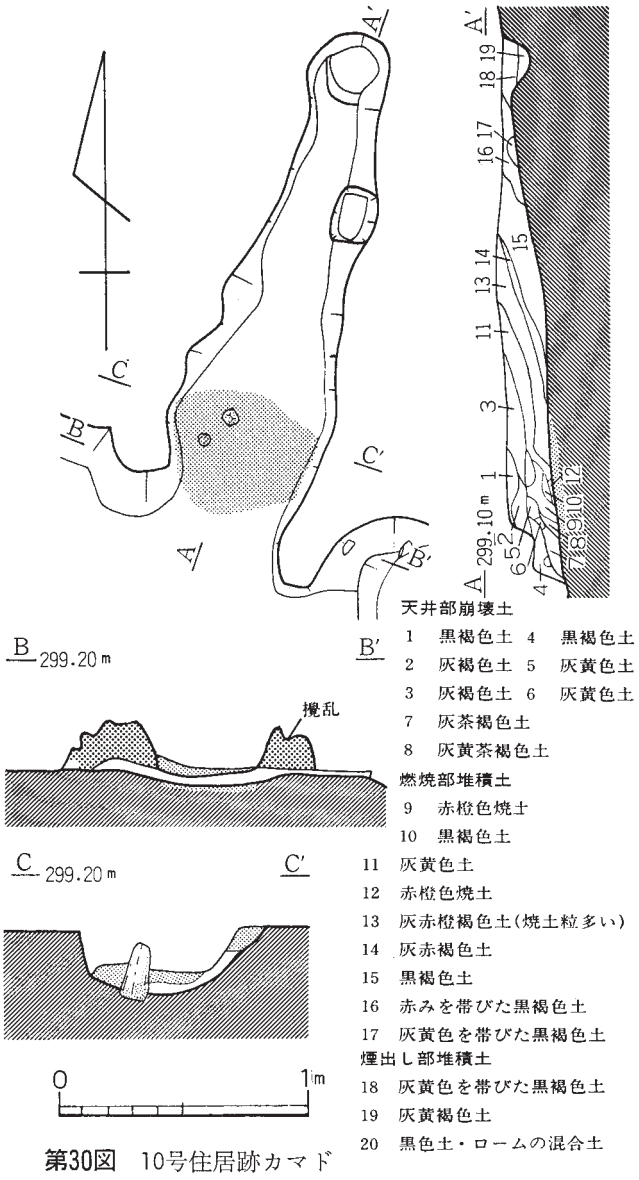
第29図 10号住居跡

は，ゆるやかな周溝状の落ち込みを有し，壁面構築の際の掘形とも考えられた。床は貼り床されており，平坦で硬質である。床面下にロームと黒色土の混じりあった層が，深さ20cmほど確認された。

カマドは北側に位置し，長い煙道を有する。燃焼部には支脚として川原石を使用しており，北壁面より外方に突き出て構築されている。また燃焼部の下層より，もう一層の焼土面が確認された。カマドのつくり替えの可能性が強いと考えられる。

遺　物（第31図，図版61・62）

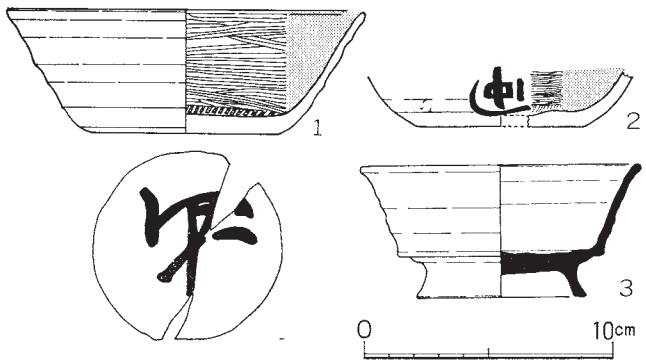
本住居跡内より出土した遺物は土師器・須恵器・木器である。遺物は床面のほぼ全面から小片として検出され，このうち図示できたものは土師器杯２点，須恵器高台杯１点である。木器は漆塗りの椀形を呈するものと考えられるが，復元は非常に困難である。



第30図　10号住居跡カマド

杯１（第31図１）　東辺寄りの床面から出土し，全体の約1/3が現存する。推定口径14.3cm，底径7.4cm，高さ4.9cmを測る。平底の底部から体部は直線的に外傾して口縁部に至る。ロクロ成形による杯で，体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。内面は底部が一定方向のヘラミガキ，体部が横のヘラミガキで，黒色処理されている。底部には「午」の墨書を有する。

杯２（第31図２）　住居跡の堆積土内より出土し，底部から体部にかけての1/4が現存する。推定底径6.6cmのみを測り，他は不明である。ロクロ成形による杯で，体部下端から底部全面にかけて，回転ヘラケズリ再調整が施されている。内面は底部が一定方向のヘラミガキ，体部が横へ



第31図　10号住居跡出土土師器・須恵器

のヘラミガキの後，黒色処理されている。外面の体部下端には「刑」の墨書が見られる。

〔須　恵　器〕

高台付杯１（第31図３）

東辺寄りの床面直上より出土し，全体の約2/3が現存する。推定口径11.1cm，底径6.8cm，高さ5.3cmを測る。高台部は外方に広がり，底径に比べて大きく，安定性がある。底部と体部の境界は直角に近く屈曲して明瞭である。体部は直線的に外傾し，口縁部ではわずかに外反して，口端部は丸くおさめられている。内外面ともに底部から体部にかけて，ロクロによるナデが認められる。色調は内外面とも青灰色を呈し，胎土も精選されており，焼成も良く堅緻である。

ま　と　め

本住居跡は，１号・５号・12号の各土坑と重複して検出されたが，ほぼ全体のプランを確認することができた。床面積は約9.7㎡であり，ロクロ土師器を伴う３号・５号・９号住居跡同様比較的小型である。カマドは，８号住居跡と同じく北側に構築されている。住居跡内より出土した遺物は，ロクロ成形による土師器，須恵器の他に，漆塗りの木製椀などが出土している。このうち高台付の須恵器杯は，この地区での類例がなく，注目される遺物である。本住居跡は，床面より出土した遺物により，表杉ノ入式期に属するものと考えられ，平安時代の遺構と推定される。

11号住居跡　ＳＩ11

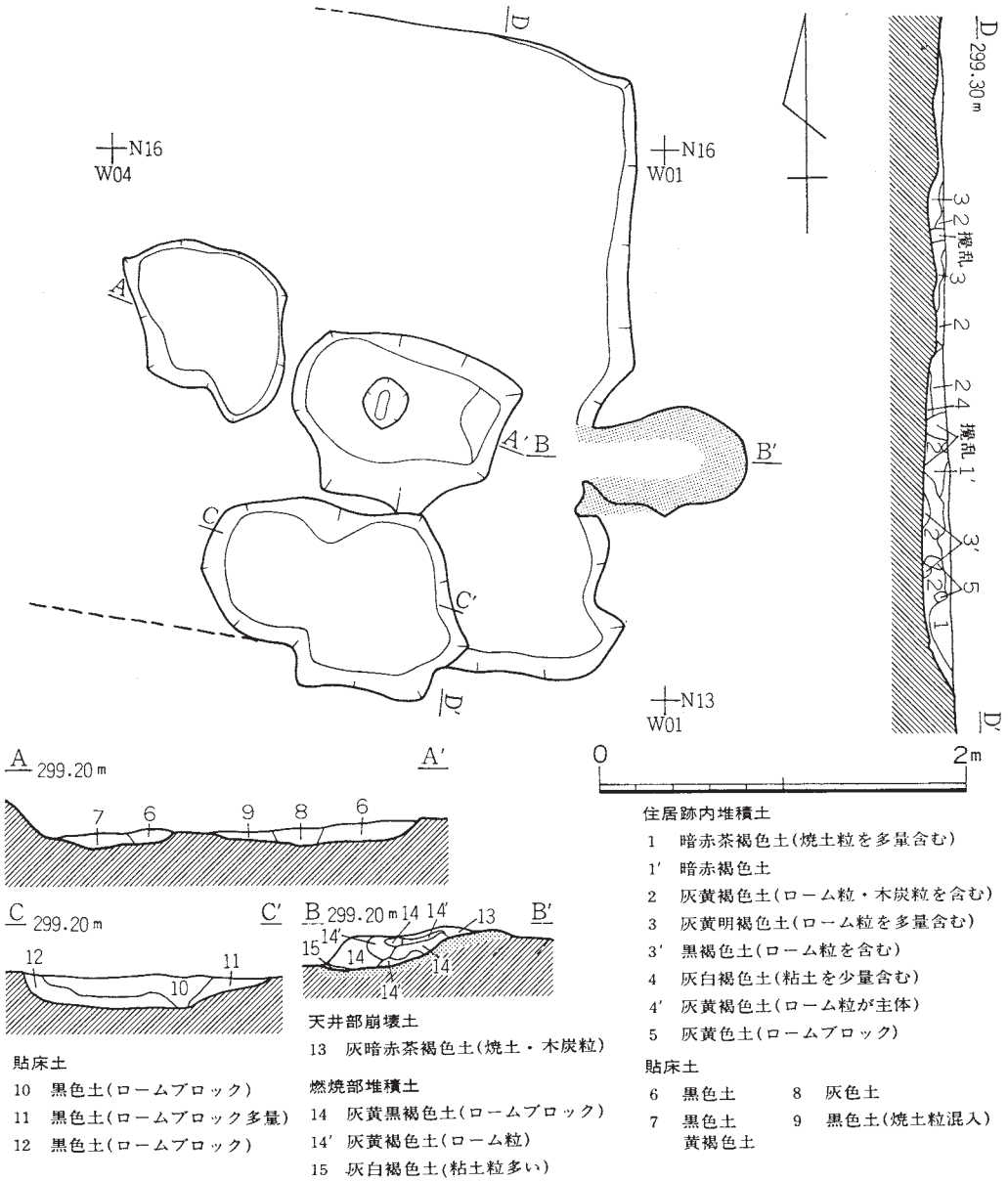
遺　　構（第32図，図版35）

本住居跡は，調査区西側の最端部より検出され，プランの約1/2が確認された。表土が薄く，住居跡の西側の半分はこわされ，また住居跡内の堆積土も薄く，床面も一部で削平されていた。

床はやや硬質の貼り床で，この床面を構築する前に掘り込んだとみられる楕円形の浅い窪みが，３ケ所から検出された。柱痕，および貯蔵穴状ピット・周溝等は確認されなかった。カマド部は，東壁の南側寄りに片寄って構築されており，壁面より外方に張り出した状態で，残存状態は良くない。主軸はカマドを中心にして東側に90°傾いている。

遺　　物（第33図）

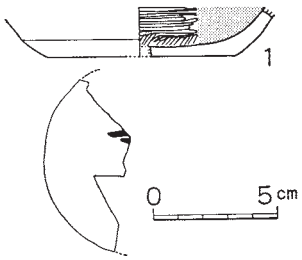
本住居跡内より出土した遺物は，土師器杯の１点のみである。



第32図　11 号 住 居 跡

〔土　師　器〕

杯１（第33図）カマド内の堆積土より出土し，底部から体部にかけての約1/3が現存する。調整は体部下端から底部全面にかけて，回転ヘラケズリ再調整が施されている。内面は，底部が一定方向のヘラミガキ，体部が横のヘラミガキ後黒色処理されている。推定底径7.5cmを測るが，その他は不明である。底部には墨書があるが判読できない。

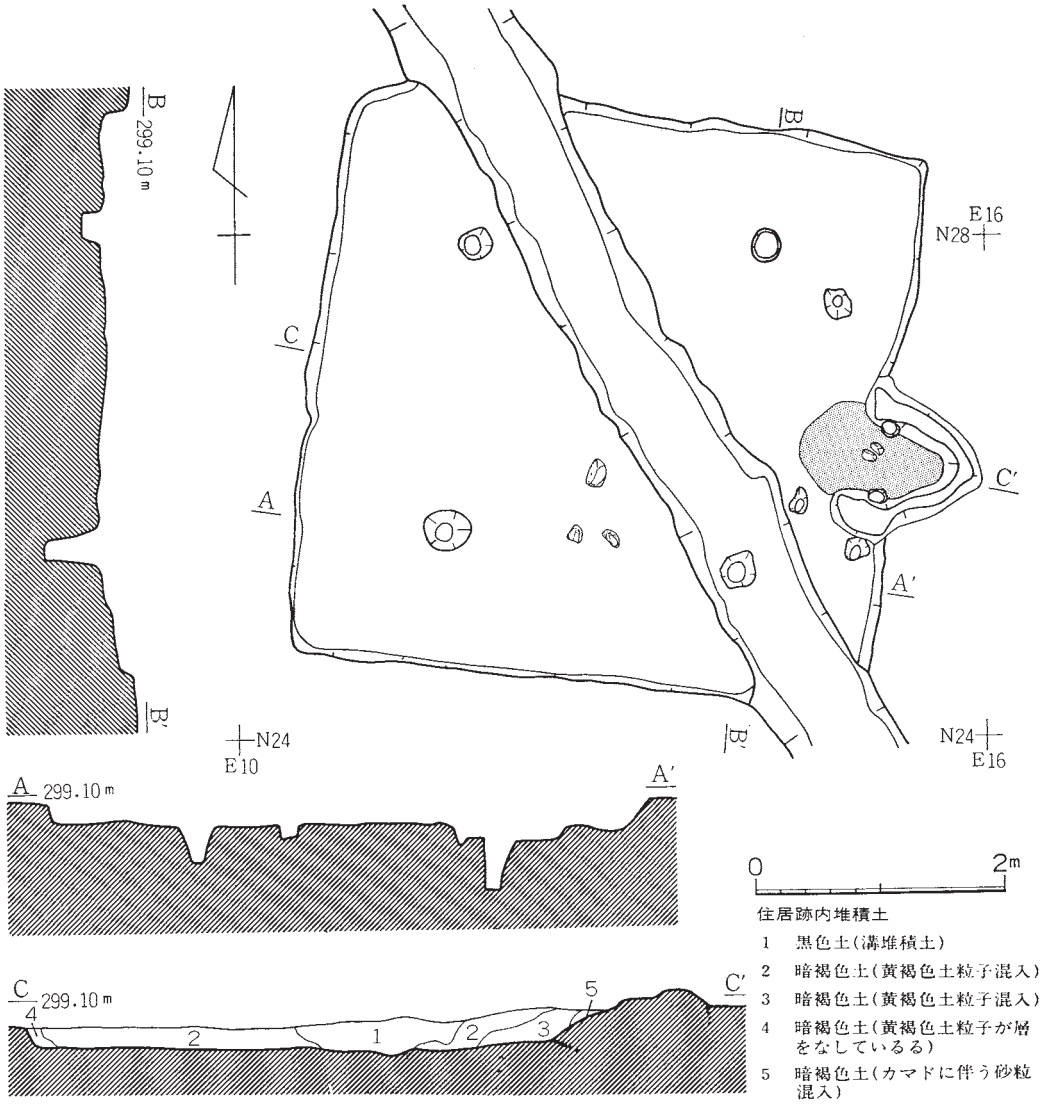


第33図　11号住居跡出土土師器

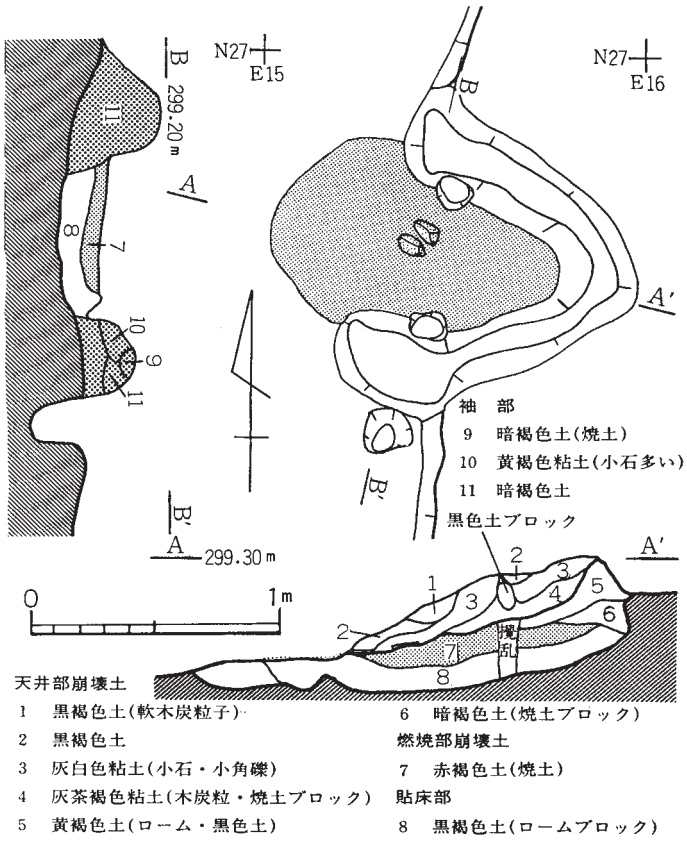
ま と め

本住居跡は，削平により，全体のプランを確認することはできなかった。南北で3.2mを測り，ロクロ土師器を出土した３号・５号・９号住居跡同様，床面積にして10㎡前後の小型の住居跡になると思われる。カマド部は，３号・５号・６号・９号・12号と同じく東壁に構築されている。

住居跡の所属時期は，カマド内堆積土より出土した土師器杯から判断して，平安時代に位置付けられるものと思われる。



第34図　12 号 住 居 跡



第35図　12号住居跡カマド

12号住居跡　ＳＩ12

遺　構（第34・35図，図版36）

本住居跡は調査区北東隅より検出され，１号溝跡に切られている。住居跡内堆積土は将棋倒し状堆積から自然堆積と判断された。プランは一辺が4.7ｍの正方形を呈し，床面積にして22.1㎡と，比較的大型である。

残存壁高は10～20㎝を測り，直に立ち上がる。この住居跡の周囲はローム層が薄く，当遺跡で１軒だけローム層下の凝灰岩風化粘土層に床面が構築されている。床面には凝灰岩の風化礫が散布しており，しまりぐあいもやや軟質であった。柱穴は四隅を結ぶ対角線上にのり，整った方形の配置である。貯蔵穴とみられるピットや周溝は確認されなかった。

カマド部は東辺のやや南側よりに構築されており，左右袖部の灰白色粘土内に多量の凝灰岩の風化礫が混入し，床面の粘土と同質である。おそらく住居跡あるいはカマド部を掘り込んだ際の余った地山の粘土によってカマドを構築したものが，熱を受けて灰白色に変色したのであろう。焚口部の幅は60㎝を測る。燃焼部の下には，構築時の掘り込みがみられ，その上に約10㎝の盛土をして燃焼部としている。煙道部は未発達である。

遺　　物

遺物の出土量は少なく，わずかにカマド内堆積土より土師器甕の胴部破片が出土した程度である。

〔土　師　器〕

カマド部内より出土した甕片は，小片であり図示できないが，胴部で強く膨らみをもち，球形を呈するものとみられる。調整は外面の胴部が縦方向の粗いハケ目，内面はヘラナデである。輪積みによる成形痕が内面に明瞭に観察される。

ま と め

本住居跡は，東側にカマドを有し，床面積も22.1㎡と大型のプランを呈し，本遺跡内で確認された竪穴住居跡では最大の床面積である。主軸の向きは，カマド部を中心とすればN98°Eを示し，また柱穴は対角線上に４本有しており，６号住居跡と類似している。

出土遺物は少なく，わずかに器形のわかるものとしてカマド内より出土した土師器甕破片がある。この甕片は，佐平林Ⅴ区において検出された奈良時代に位置づけられている１号住居跡出土の甕に類似している。本住居跡の年代は，不確実ではあるが，奈良時代として位置づけておく。

第２節　掘立柱建物跡

調査区内で13棟検出されている。これらの建物跡は調査区のほぼ中央部に集中し，他は東側に１棟，西側の竪穴住居跡が集中する地区に３棟が検出されている。

１号建物跡　ＳＢ01（第36図，図版38）

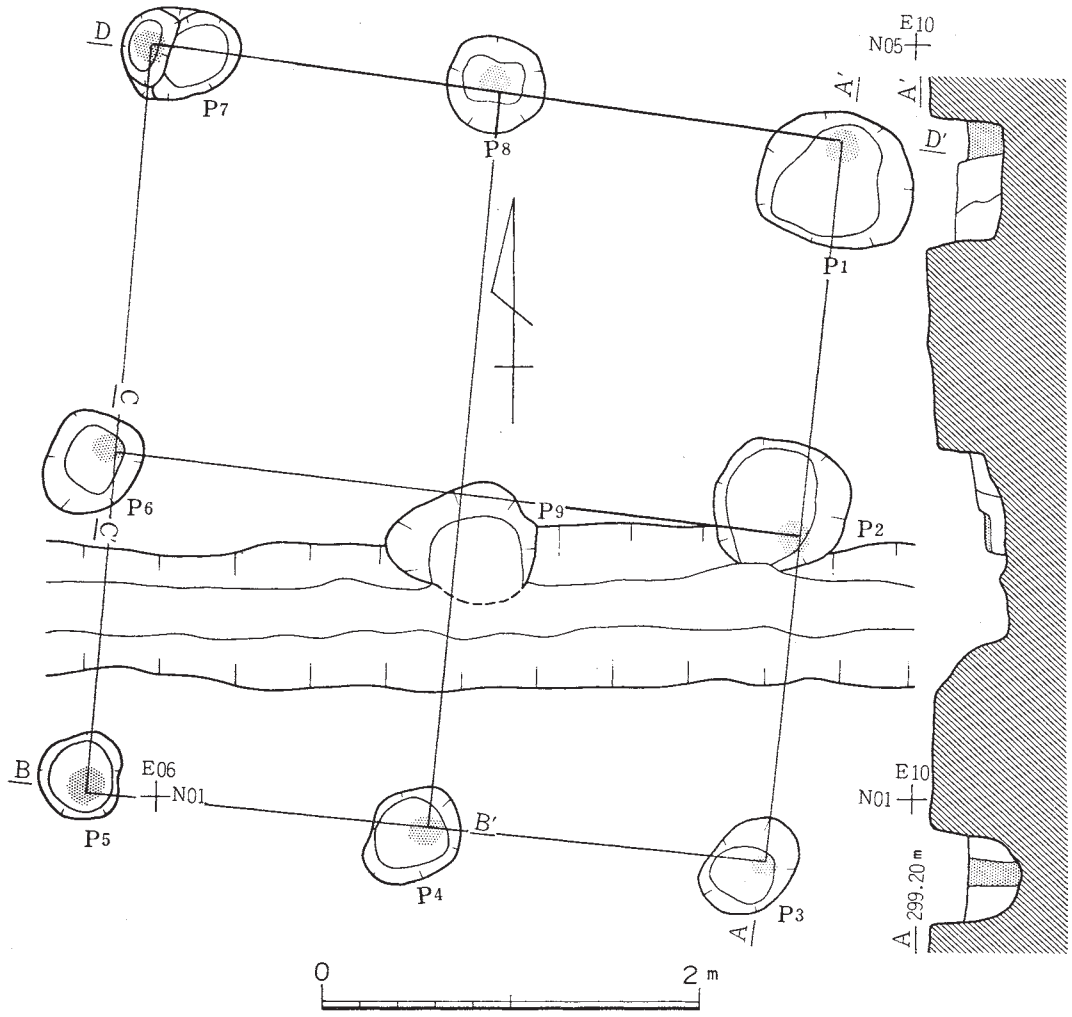
調査区西部の竪穴住居跡群の中に囲まれた建物遺構である。地山ローム層上面で検出され，東西２間，南北２間の建物跡で束柱を有する建物である。東方中央のP_2と束柱と思われるP_9が２号溝跡によって切られている。北辺3.68m，東辺3.91mを測り，柱痕のわかるものの間尺の平均値は1.88mである。西側柱列を通る軸線の傾きは，Ｎ４°50′Ｅである。各掘形は，平面プランが径40～60㎝の楕円，ないしは不整の円形を呈し，断面形は底面が水平に近い「凵」状と，「Ｕ」状をなすものの２種類があり，統一性がない。深さは28～46㎝と不揃いで，概して断面「Ｕ」字形の方が深い。

構築時期を決定する遺物は出土しておらず，切り合い関係からは２号溝跡より古いといえる。柱痕跡は径10～20㎝の円形のものが，P_9を除く全てに認められる。掘形埋土の状況は，掘形によって１～３層に堆積しているが，ローム粒および小ブロックを含み，硬くしまっている。

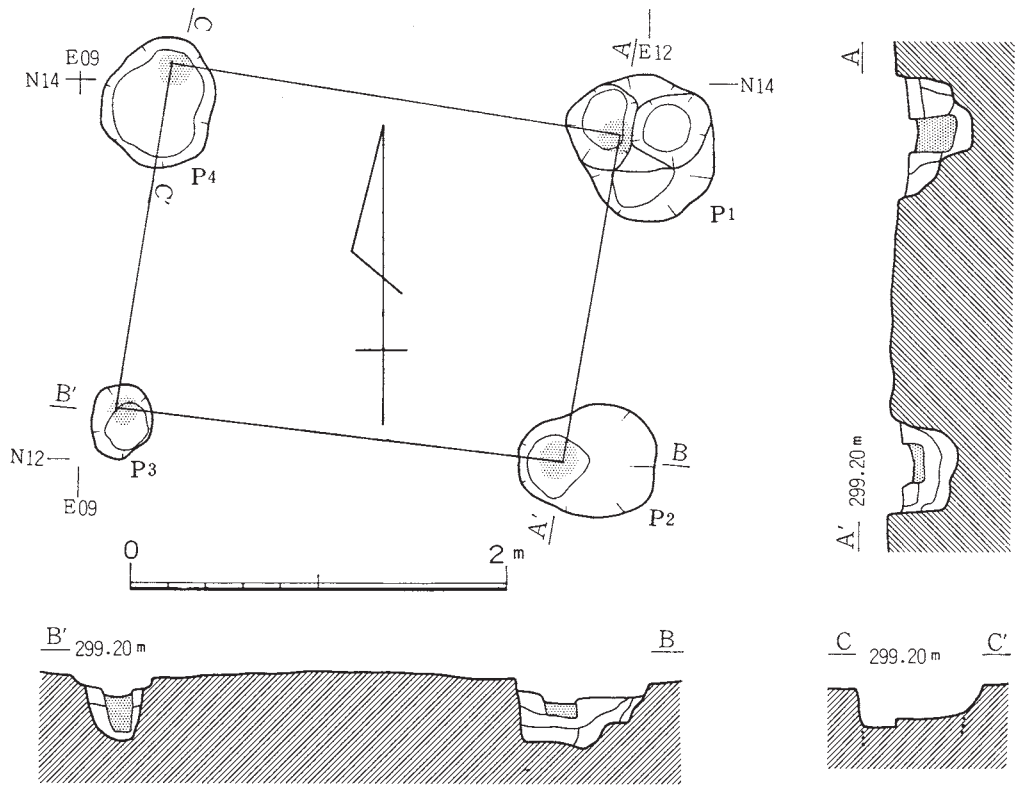
２号建物跡　ＳＢ02（第37図，図版39）

調査区北西部，掘立柱群の中でも北西のはずれの位置にある。耕作土下ローム層上面で検出され，東西・南北，１間×１間で東西に長い建物跡である。P_1は重複したような平面プランであるが，この建物跡に接したような建物跡は検出されておらず，さらに他の３個の掘形も，プラン断面とも不整な形を示すので，他の建物跡との重複とは考えられない。したがって一時の掘り込みか，この柱だけの建て替えであるのかも知れない。

前述のように掘形のプランは，不整形・円形ないしは楕円形を呈し，大きさもかなり不揃いで


D
P7
P8
P1
A'
A'
D'
E10
N05
C
C
P6
P9
P2
B
E06
N01
P5
B'
P4
P3
A
A
E10
N01
299.20m
0
2m
D
299.30m
D'
B
299.30m
B'
C
299.20m
C'

第36図　1　号　建　物　跡



第37図　2 号 建 物 跡

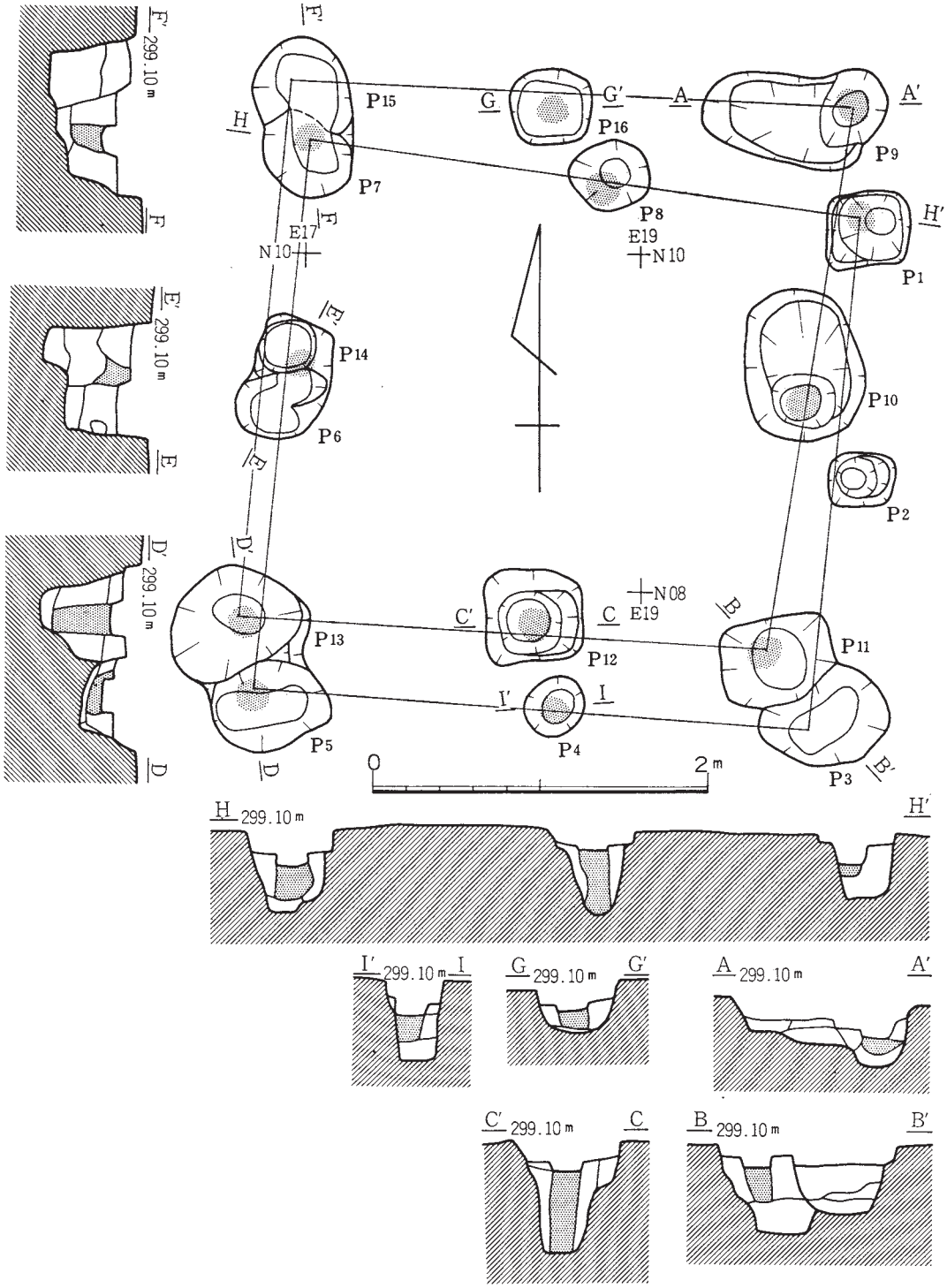
ある。断面形も同様に不整形で統一性がない。柱痕跡は径16cm前後の円形である。埋土は，黒褐色土とローム粒および小ブロックの混土でしまっているものと，軟調のものとがある。掘形の規模は径がP_3で35cm前後で最小，P_1・P_2が56×72cmと大きいものである。深さは検出面から34～40cmとほぼ似通っている。間尺は東辺・西辺の平均が1.78m，南辺・北辺の平均が2.33mと長く，２種類の間尺で構築されている。建物の方位は東側柱列を基準としてＮ６°Ｅである。

この建物跡は掘形の重複関係も認められず，また遺構に伴う出土遺物もなく具体的な時期等は不明である。

３号建物跡　ＳＢ03（第38図，図版40）

この建物跡は，中央部掘立柱建物跡群の西端より検出され，全体の規模をとらえることができた。10号建物跡との重複があり，埋土の状況より３号建物跡の方が新しいことが確認された。建物の方向は東側柱列を基準として磁北よりＮ10°Ｅ東に傾き10号建物跡の建て替えともみられた。

規模は東西２間，南北２間の方形を呈し，各々3.3×3.3mを測る。各柱間の計測値は，北側柱



第38図　３号・10号建物跡

列では西から1.5m＋1.8m，南側柱列では西から1.5m＋1.8m，東側柱列では北から1.5m＋1.5m，西側柱列では北から1.5m＋1.8mを測り，５～６尺を基準にしたものとみられる。掘形は径30～40㎝の不整形を呈し，断面は直に落ち込む「凵」形のものと，なだらかな鍋底形のものが見られ，10号建物跡の掘形に比べて貧弱である。埋土はロームの含み具合いにより２～４層に分層され，柱痕部を除きやや硬質であった。柱は柱痕より推定して径18㎝前後の丸柱であったものとみられる。

遺構に伴う出土遺物はなく，時期は不明である。

４号建物跡　ＳＢ04（第39図，図版41）

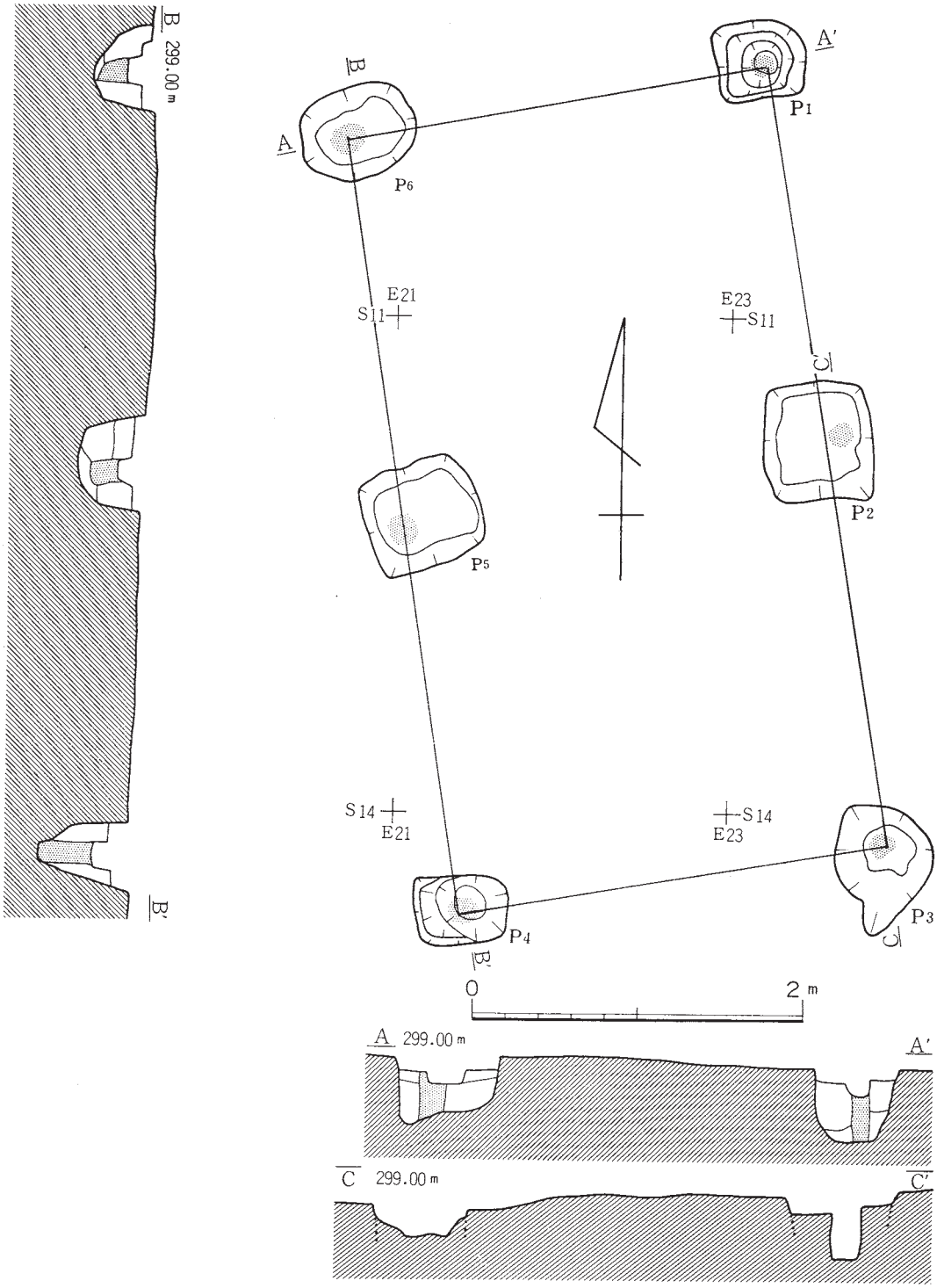
調査区中央の南はずれに位置し，掘立柱建物群の最南端である。耕作土下，ローム層上面で検出された。南北２間，東西１間まで確認されたが，建物自体調査区外の南側にさらに延びる可能性もある。

掘形の形状は，方形ないしは長方形であるがくずれた形のものもある（P_3）。平面に比べて断面は，不整形を呈しているものが多い。掘形の規模は長軸×短軸が，最小のもので56×42㎝，最大が72×66㎝，方形のものの平均は64.8×54.4㎝，深さは38～50㎝である。柱痕は全ての掘形に確認され，16㎝内外の円形である。掘形内の堆積土は１～３層に分離されるが，黒色土がベースで下へ行くほどロームの混入が多い。全体の規模はこの建物跡が，１間×２間であるとすれば，北辺が2.52m，西辺が4.72m，平均間尺は2.40mである。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ９°30′Ｗを呈している。時期を決定づけるものはない。

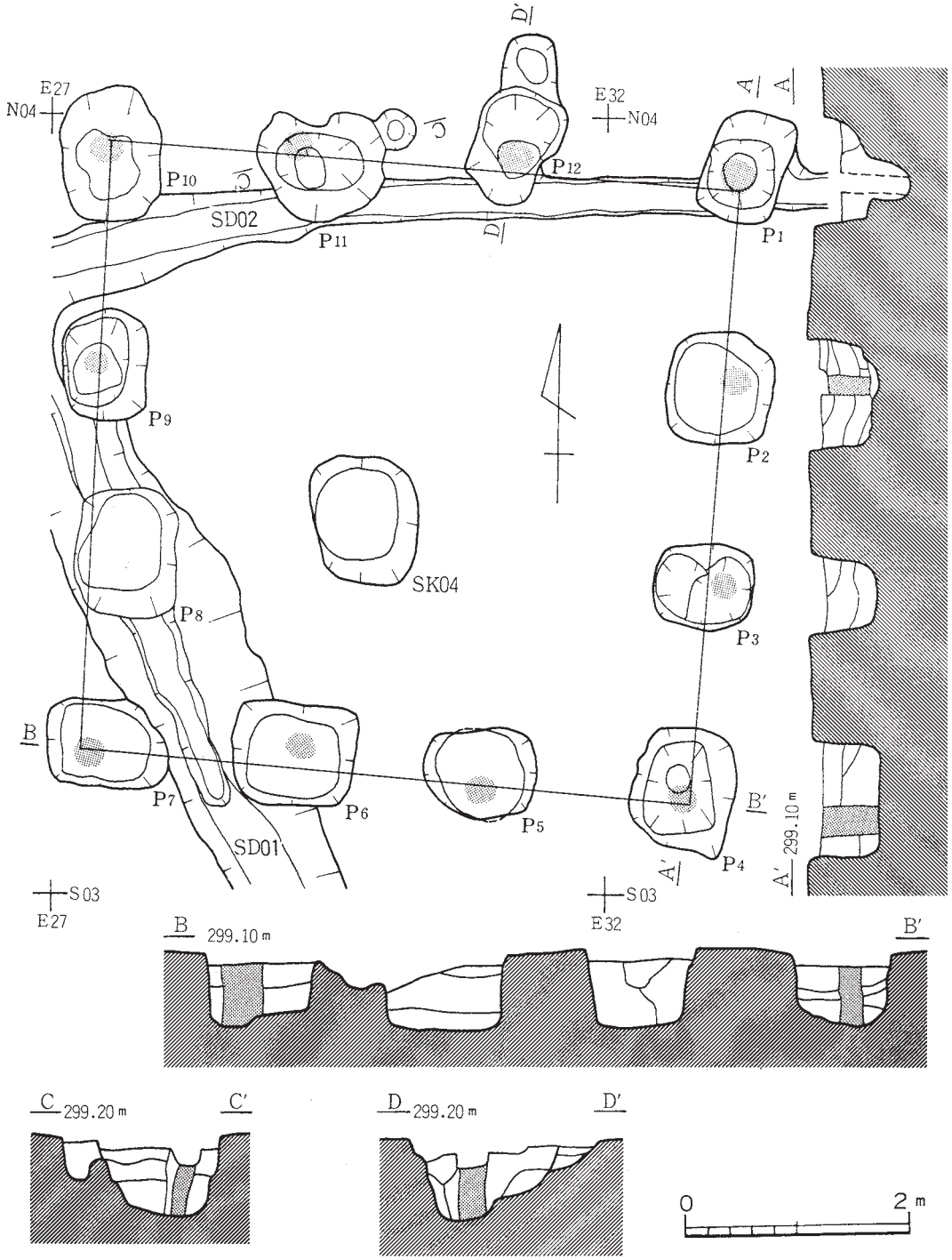
５号建物跡　ＳＢ05（第40図，図版42）

この建物跡は調査区中央部の掘立柱建物群の南側寄りに検出され，12号建物跡・１号溝跡・２号溝跡・および19号土坑とそれぞれ重複している。これらの新旧関係は，１号・２号溝跡が５号建物跡の各掘形を切っており，１号・２号溝跡が新しい。また12号建物とはP_{12}で重複し，埋土の堆積状況より５号建物跡の方が新しいことが確認されている。したがって新しいものから，１号・２号溝跡→５号建物跡→12号建物跡の順となる。

全体の規模が確認され，東西３間・南北３間で各々5.4×5.4mを測り，方形を呈する。建物の方向はほぼ磁北に一致する。各柱間の計測値は，北側柱列では西から1.8m＋1.8m＋2.0m，南側柱列では西から1.9m＋1.7m＋1.8m，東側柱列では北から1.8m＋1.9m＋1.8m，西側柱列では北から1.9m＋1.7m＋1.8mを測り，概ね６尺を基準にしている。掘形は１辺が70～100㎝の長方形を呈し，他の掘立柱建物跡に比べて掘形は深く，断面は直に落ち込み，底面は平坦で整然としており特に丁寧である。柱は柱痕から推測して径20㎝前後の丸柱である。

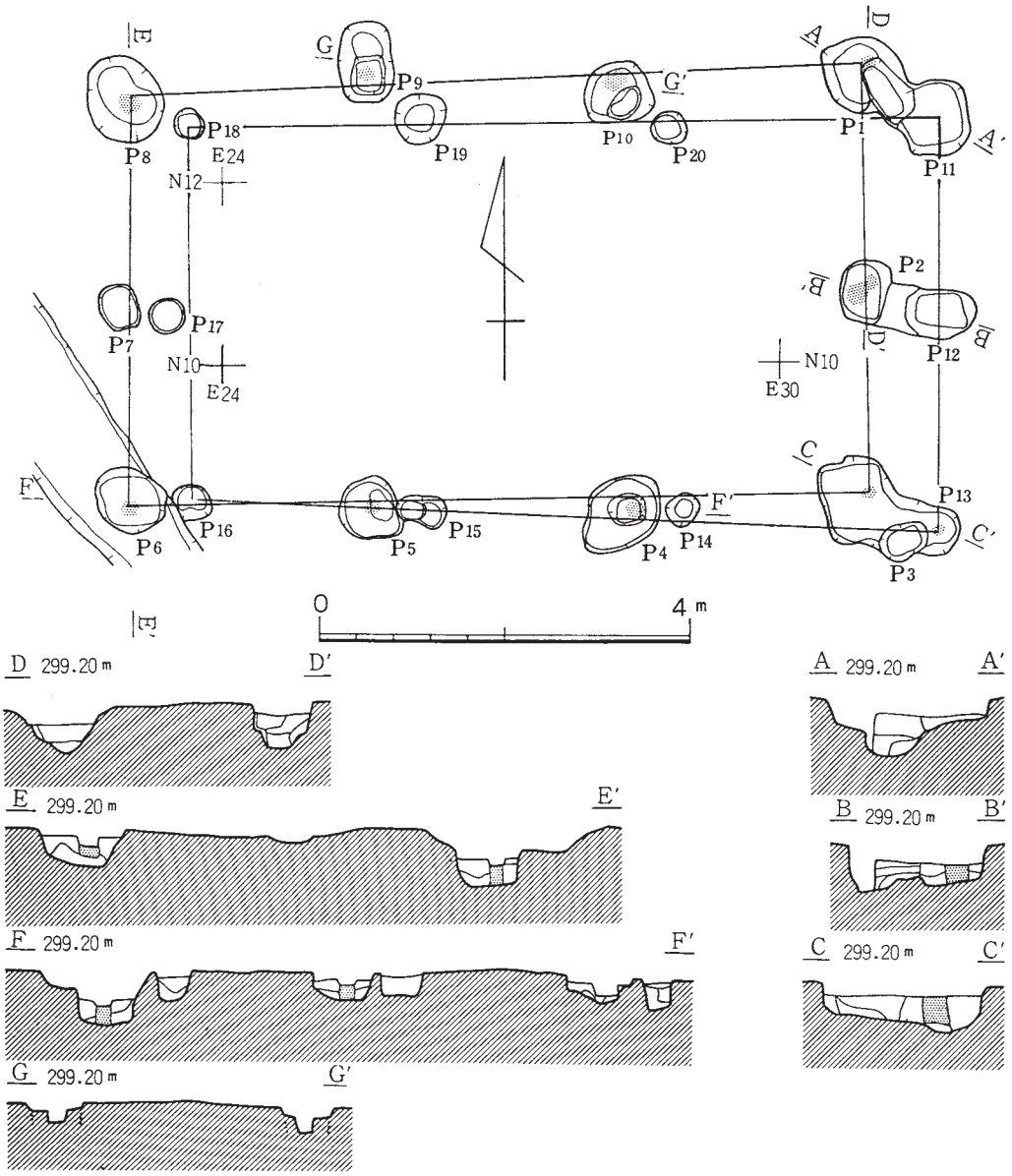

B
299.00m
B'
A
B
A'
P1
P6
E21
S11
E23
S11
C
C'
P2
P5
S14
E21
S14
E23
P3
P4
B'
0
2m
A
299.00m
A'
C
299.00m
C'

第39図　4 号 建 物 跡


E27
N04
E32
N04
P10
P11
P12
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
SD02
SD01
SK04
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
S03
E27
S03
E32
299.10m
299.10m
299.20m
299.20m
0
2m

第40図　5 号 建 物 跡

各掘形の埋土内より土師器・須恵器片が多数出土している。なかでもP7の埋土内より出土した土師器杯は，佐平林Ⅰ～Ⅳ区の３号住居跡から出土した体部が内彎しながら口縁部に至る杯に類似する。このことからすれば本遺構は，佐平林期（６世紀中頃）以降のものと考えられるが，掘形構築の際に偶然入り込んだ可能性もあり，また１号・２号溝跡の時期も不明なため，その時期は古墳時代後期を降る時期から大きく幅をもって考えておきたい。



第41図　６号・13号建物跡

６号建物跡　ＳＢ06（第41図，図版43）

この建物跡は調査区中央部の掘立柱建物群の中心部に位置し，全体の規模をとらえることができた。１号溝跡および12号・13号建物跡との重複が見られ，検出状況より新しい方から１号溝跡→13号建物跡→６号建物跡→12号建物跡の順になることが確認された。

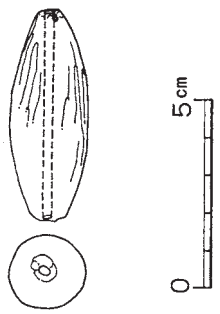
建物の方向は磁北にほぼ直交し，東西３間・南北２間で各々8.0×4.56ｍを測り，東西に長い歪んだ長方形を呈する。各柱間の計測値は，北側柱列では西から2.6ｍ＋2.6ｍ十2.7ｍ，南側柱列では西から2.6ｍ＋2.8ｍ＋2.6ｍ，東側柱列では北から2.4ｍ＋2.2ｍ，西側柱列では北から2.2ｍ＋2.2ｍを測り，７～８尺を基準にしているものとみられる。掘形は径70㎝前後の楕円形を呈し，埋土はロームブロックの含み具合いにより黒褐色土と暗黄褐色土とに分層され，互いに敲きしめられている。柱は，柱痕から推定して径18㎝前後を測る丸柱とみられる。

遺構に伴う出土遺物はなく時期は不明であるが，13号建物跡は本建物跡との建て替えともみられる。この建物跡のすぐ西隣りに位置する３号・10号建物跡も同様の建て替えがあったものとみられている。また掘形を比べても，建て替え前の６号・10号建物跡のは大型で整っており，建て替え後の建物跡と思われる３号・13号建物跡は小さく貧弱である。これらから考えて，この６号建物跡を含むこれら４棟の建物跡は，相互に関連性のあった可能性も考えられる。

７号建物跡　ＳＢ07（第43図，図版44）

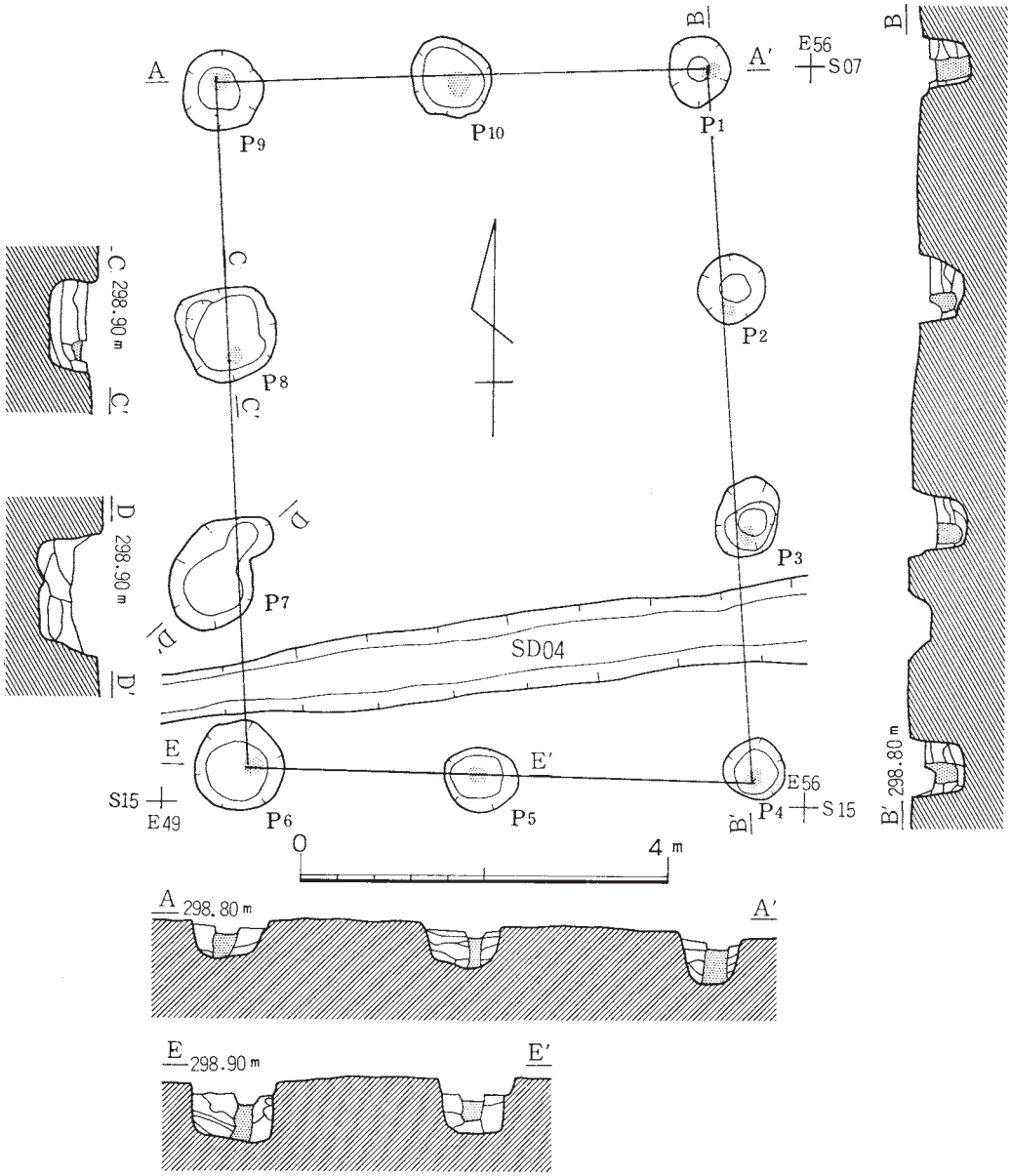
調査区の東南端に位置し，調査区中央部の掘立柱建物群から飛び離れて検出された建物跡である。全体の規模が確認され，東西２間×南北３間を測る。検出面は耕作土下，ローム層上面である。南側柱列に並行して４号溝跡が横切っているが，掘形と掘形の間を抜けているので遺構間の切り合い関係はない。

掘形の形状は，基本的には円形であるとみられる。断面形は底部がゆるい円形をとる。大きさは整った形のもので測ると66×62㎝～100×100㎝で平均が84×78㎝，残存部の深さは58～42㎝である。掘形内の堆積土はローム粒および小ブロックを含む層が２～６層ほぼ水平に堆積している。柱痕跡は，暗茶褐色土で分離が明瞭である。全体の規模は，東辺7.68ｍ，西辺7.44ｍと差が大きく，北辺5.33ｍ，南辺は5.38ｍである。間尺はP_7～P_8が1.85ｍ，P_8～P_9が3.1ｍと差が大きいが，他はほぼ同尺である。平均間尺は2.57ｍである。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ３°40′Ｗを示す。



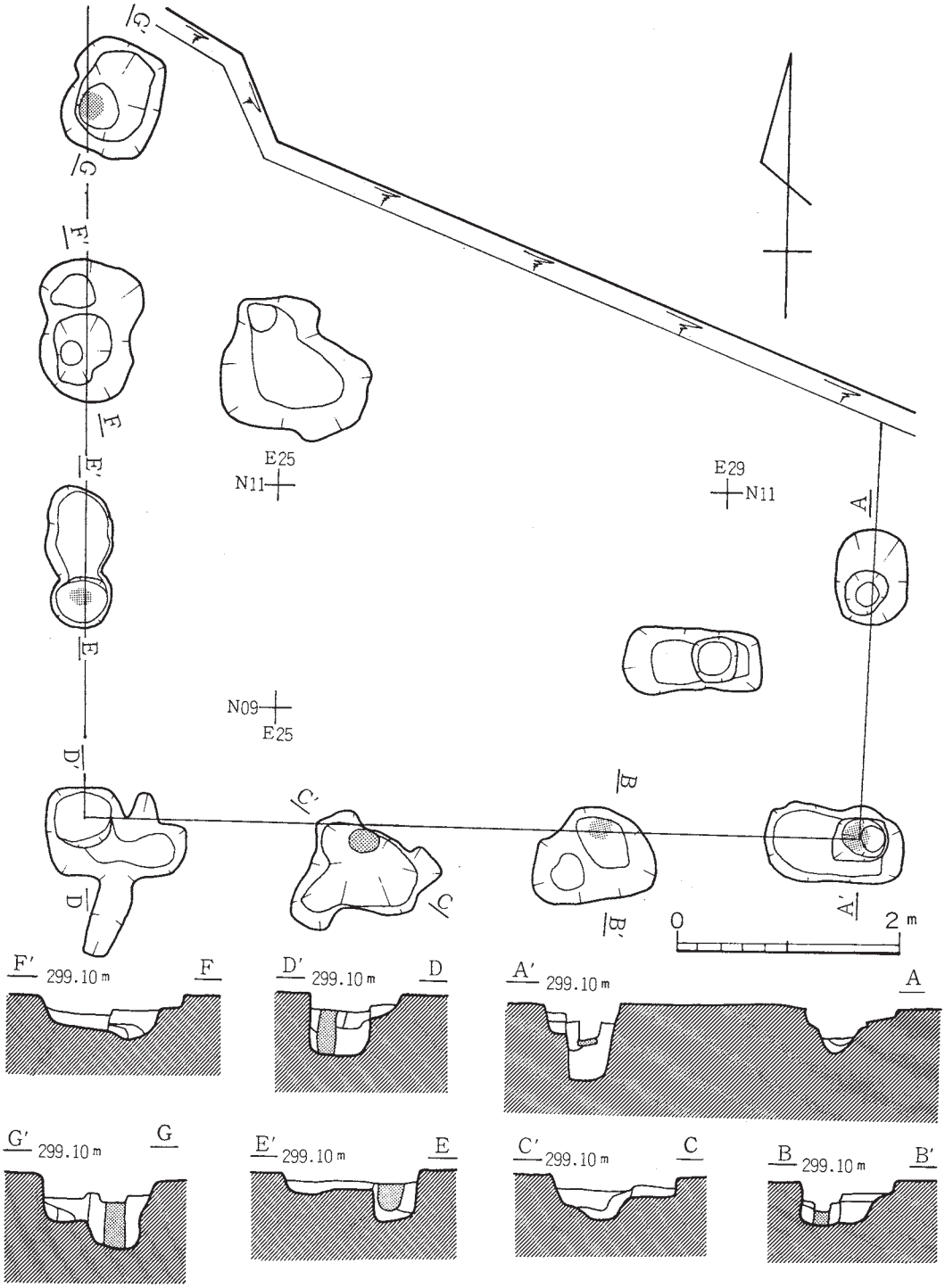
第42図　７号建物跡出土土錘

遺物としては，建物区画内での検出面で土錘（第42図）が１個出土し

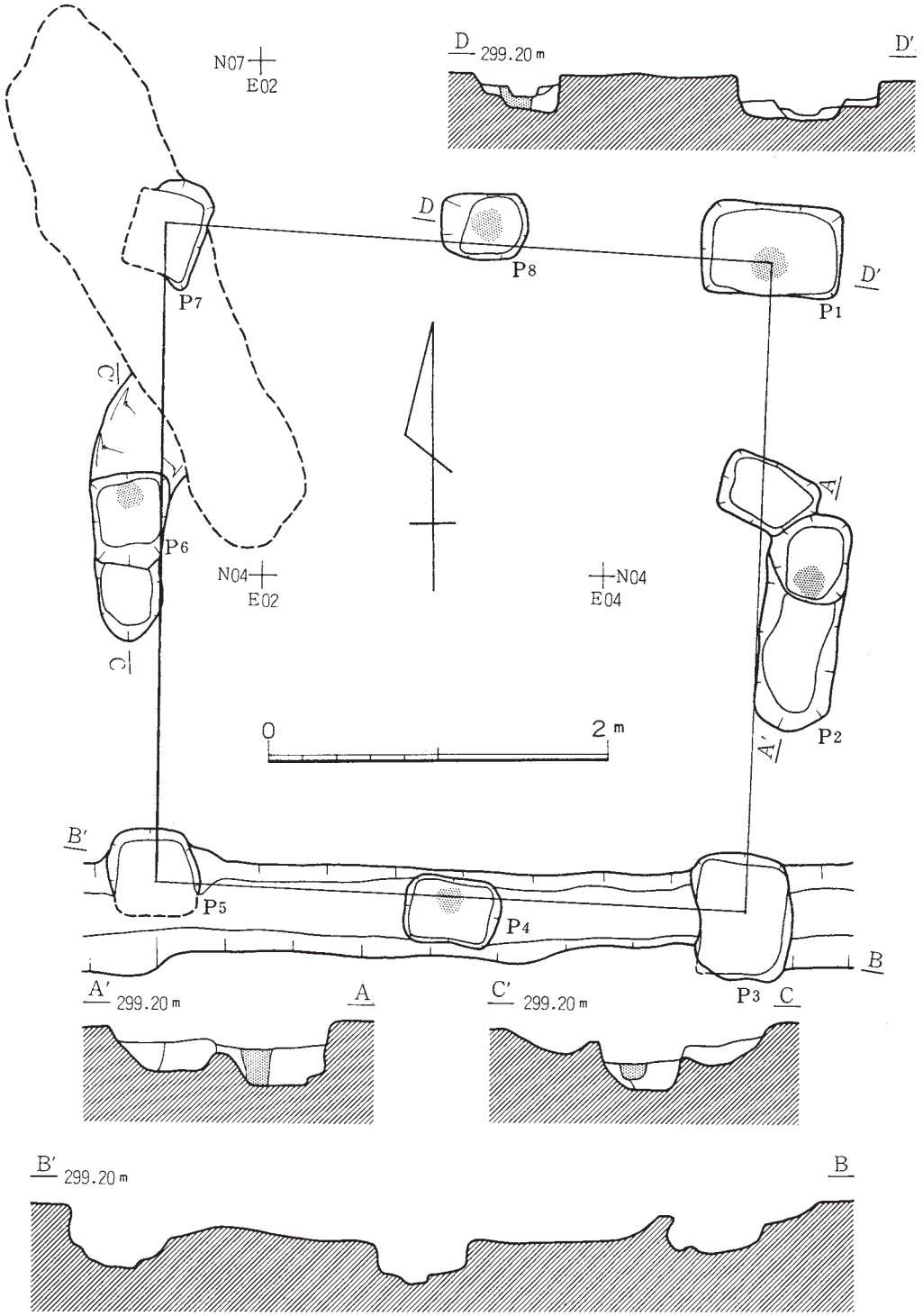


第43図　7 号 建 物 跡

ているだけである。この土錘はほぼ完形で，5.5×2.2cmを測り，明灰褐色を呈し器表に細いヘラケズリ調整が大まかに施され，焼成の良いものである。時期については不明であり，他に建物跡に関しても時期を決定する資料はない。


G'
G
F'
F
E'
E
D'
D
C'
C
B'
B
A'
A
E25
N11
E29
N11
N09
E25
0
2m
F' 299.10m F
D' 299.10m D
A' 299.10m A
G' 299.10m G
E' 299.10m E
C' 299.10m C
B 299.10m B'

第44図　8 号 建 物 跡


N07
E02
D
299.20m
D′
P8
P7
P1
D′
C
C′
P6
N04
E02
N04
E04
A
A′
P2
0
2m
B′
P5
P4
B
A′
299.20m
A
C′
299.20m
P3
C
B′
299.20m
B

第45図　9 号 建 物 跡

８号建物跡　ＳＢ08（第44図，図版45）

この建物跡は調査区中央部の掘立柱建物群の北端に位置し，一部調査区外のため北側の柱列をつかむことができなかった。他の遺構との重複はなく，建物の方向はほぼ磁北に直交する。規模は東西３間，南北は３間まで確認されたが，さらに北に延びる可能性もある。

各柱間の計測値は，南側柱列では西から2.5m＋2.1m＋2.3m，東側柱列では北から2.2mのみ，西側柱列では北から2.3m＋2.2m＋2.0mを測り，概ね７～８尺を基準にしているものとみられる。掘形は一辺が80cm前後の不整形を呈し，断面は中心部よりずれて一部が深く段型を呈し，この部分に柱痕が見られる。この様な掘形は９号建物跡にも見られる。埋土はロームブロックを含み暗褐色土と黒色土によって敲きしめられており，柱は柱痕より推定して径20cm前後の丸柱であったとみられる。この遺構に伴う出土遺物はなく，時期は不明である。

９号建物跡　ＳＢ09（第45図）

調査区西部の竪穴住居跡群の中央に，15号土坑，２号溝跡と重複関係をもって検出された小規模な掘立柱建物跡である。検出面は耕作土下ローム層上面である。15号土坑との切り合いでは，北西角柱P_{17}が15号土坑を切って作られているが，掘形西半分は明確でなかった。２号溝跡とは，南辺P_3～P_5が重複しているが，P_3～P_5を切って２号溝跡が構築されている。したがって15号土坑→９号建物跡→２号溝跡の新旧関係が成立する。間数は，東西２間×南北２間である。掘形はほぼ長方形を基本形とし，切り合いによって大きさは明確でないが，P_1，P_2，P_6，P_7で測ると，最大82×54cm，最小50×40cmで平均60×46.5cmを測る。断面形は不整で一様ではない。検出面からの深さは22cm内外と，40cm位の２種類ある。掘形内堆積土は，黒褐色土をベースにしてローム粒子及び小ブロックを含んでいる。柱痕跡は浅いためにあまり明瞭ではない。全体の規模は推定で，東辺3.84m，南辺3.48m，西辺3.80m，北辺3.54mで，東・西辺の方が，南・北辺より長い。間尺は，東･西辺では1.56mから2.26mまであり一様でなく，平均1.92mを測る。南･北辺では，1.66mから1.74mで差は少なく，平均は1.75mである。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ１°30′Ｅと推定される。時期を示す資料は検出されていない。

10号建物跡　ＳＢ10（第38図，図版40）

調査区中央部の３号建物跡と重複して検出され，全体の規模が確認されたものである。建物の方向は，東側柱列で磁北よりＮ10°Ｅ東に傾く。新旧関係は重複している掘形（P_1～P_3）の埋土状況より10号建物跡の方が古く，３号建物跡の建て替え前のものともみられる。

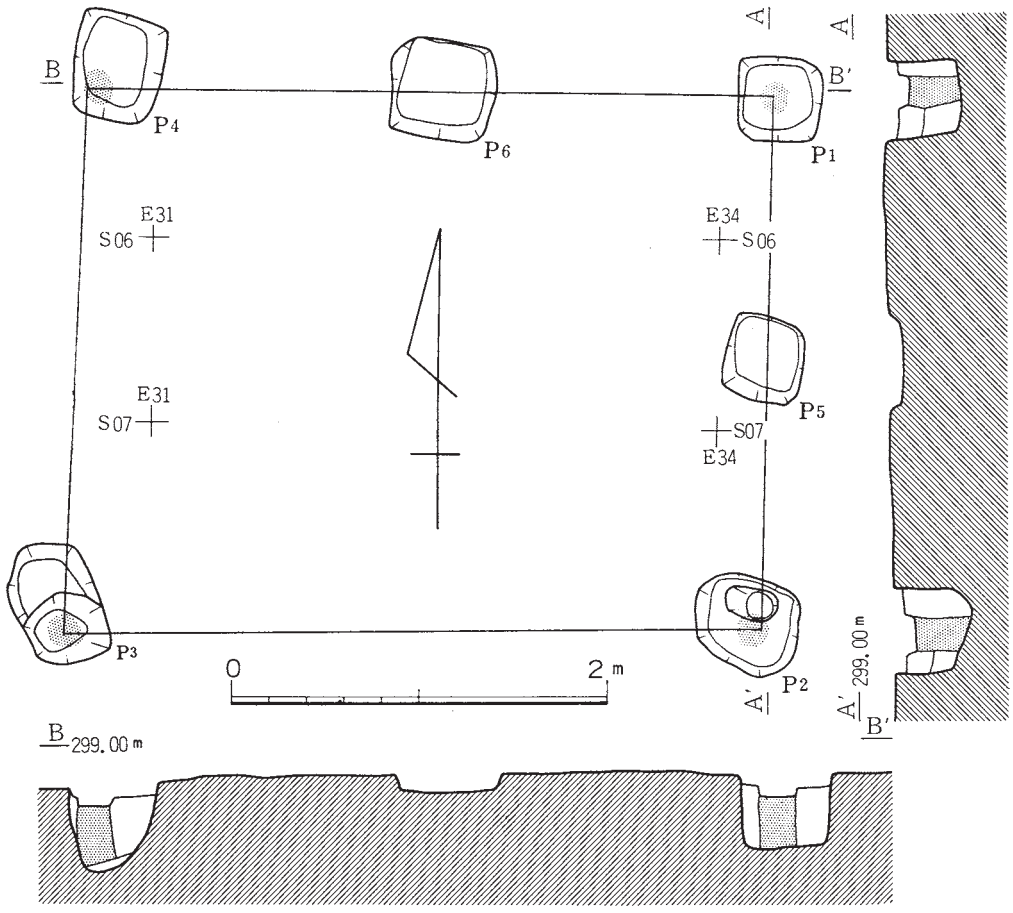
全体の規模は東西２間南北２間で，各々3.2×3.2mを測り，南北方向につぶれた方形を呈する。

各柱間の計測値は，北側柱列では西から1.5m＋1.8m，南側柱列では西から1.7m＋1.4m，東側柱列では北から1.8m＋1.5m，西側柱列では北から1.5m＋1.8mを測り，５～６尺を基準にしたものとみられる。各掘形は，１辺が80cm前後の不整形を呈し，断面は深い所で60cm，浅い所で40cmを測り，底面が段形になるものと鍋底形になるものがある。埋土はロームを少量含む黒褐色土とロームを多量に含む暗黄褐色土が互層に敲き込まれている。柱は柱痕から推定して径20cm前後の丸柱であったものとみられる。

遺構に伴う出土遺物がなく，この建物跡の時期は不明である。

11号建物跡　ＳＢ11（第46図）

建物跡群の南より，５号建物跡の南東に同じ方位で検出された小規模な掘立柱建物跡である。検出面は地山ローム層上面である。掘形は４個検出され，他に２個，北辺・東辺のそれぞれ中央



第46図　11 号 建 物 跡

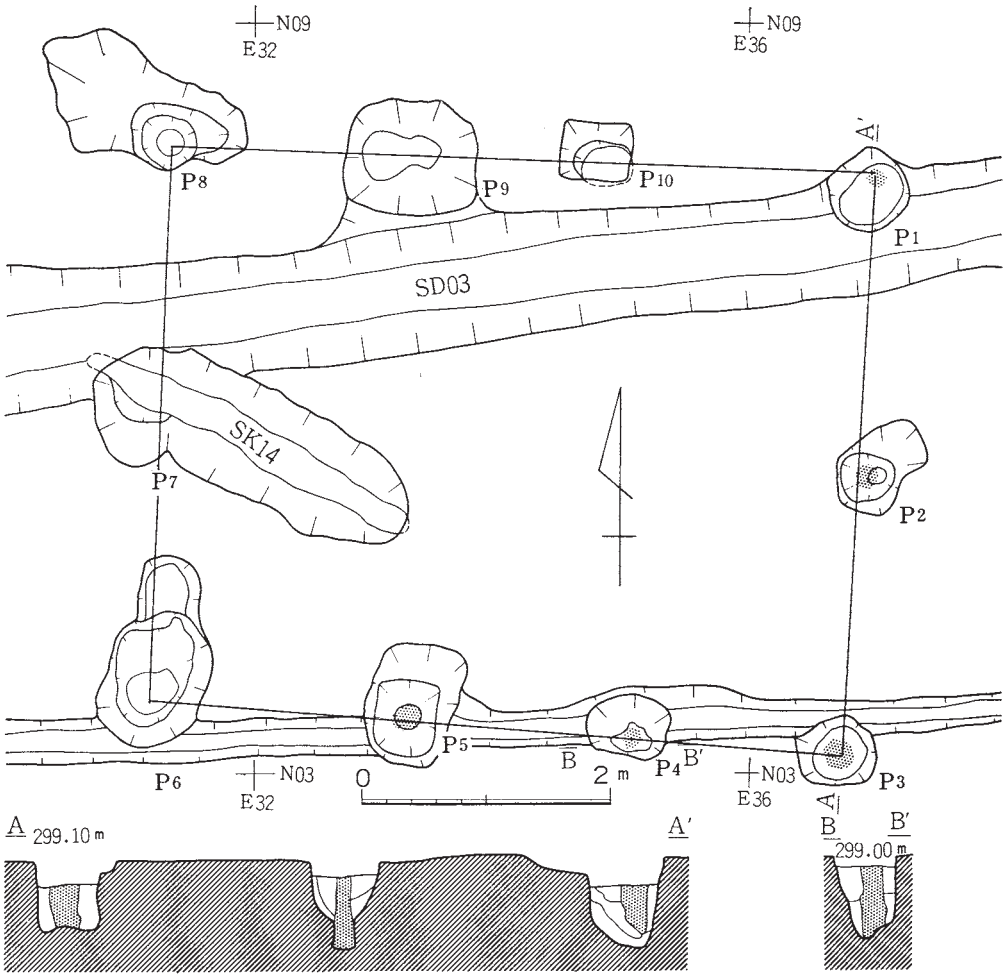
に浅いピットが検出されているが，当建物跡に付属するものとは考えられない。また，西辺の１個は１号溝跡によって一部破壊されている。間数は１間×１間であろうと思われる。掘形は方形を基本とし，断面は「凵」状のものと，「U」状のものとがある。大きさは，破壊されたものを除けば，最大57×48㎝，最小48×44㎝で，平均53.7×46.7㎝である。掘形内の堆積土は暗褐色土とロームの混土である。柱痕跡は黒色を呈して，分離が容易である。柱痕の平面形は円形で，径17～22㎝平均20㎝である。P_5・P_6の堆積土は黒褐色土とローム小ブロックの混土で他の掘形と異なり，柱痕跡も認められない。全体の規模は，北辺と南辺が長く，平均3.62m，東辺と西辺の平均が2.89mで，今回検出された建物群の中で一番長い。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ１°15′Ｅを示す。

時期決定のできる遺物は出土していないが，１号溝跡以前の構築物である。

12号建物跡　ＳＢ12（第47図）

調査区の掘立柱建物群の中に，５・６・13号建物跡，２・３号溝跡，14号土坑と重複して検出された中規模の掘立柱建物跡である。検出面は耕作土下ローム層上面である。重複関係は，10個の掘形のうち，８個までが重複している。南辺の西側２個の掘形（P_5・P_6）が５号建物跡のP_1・P_{12}と切り合い，その新旧関係は平面及び土層断面の観察により，５号建物跡が当建物跡より新しい時期のものであることが確認された。また６・13号建物跡との重複は，６号建物跡のP_3，13号建物跡のP_{13}，と当建物跡のP_8とが切り合い，その新旧関係は古い傾から12号建物跡P_8→６号建物跡P_3・13号建物跡P_{13}となる。２・３号溝跡との重複は，12号建物跡及び重複している他の３棟の５・６・13号建物跡のいずれよりも新しく掘り込まれていることが認められ，14号土坑との重複は，P_{17}が３号溝跡によって半分近く切られ，判然としなかったが，他の同様の形状の13・16・19号土坑等が竪穴住居跡及び掘立建物跡などより古いことが確認されているので，この土坑も，当建物跡よりも古い時期のものと思われる。掘形の平面プランは，切り合いによって，不明確であるが，方形に近い形と円形に近いものとがある。大きさは全体をつかめるもので，43×38㎝と29×24㎝で，他もほぼこの程度の規模の小さめの掘形であったように推定される。断面形は不整形でまとまりがない。深さは37㎝内外である。堆積土は１～４層に分かれ，全体的にローム層ないしローム小ブロックを含んでいる。柱痕は明瞭である。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ30°50′Ｅを示す。間数は東西３間×南北２間で，3.02×4.95mと推定される。間尺に切り合いなどで柱痕が検出できないものが多かったので，正確な数値は出せないが，柱痕の認められるもので測ると，東辺P_1-P_2が2.37m，P_2-P_3が2.20m，南辺P_3-P_4が1.65m，P_4-P_5が1.79mと東西辺と南北辺に違いがあるのがわかる。

この建物跡の時期を決定する出土遺物はなかったが，切り合い関係から，当遺跡の建物跡群の



第47図　12 号 建 物 跡

中でも，最も古い部類に属するといえよう。

13号建物跡　ＳＢ13（第41図，図版43）

調査区中央部の掘立柱建物群の６号建物跡と重複して検出された。東側柱列のP_1～P_3が重複しており，埋土の状況より13号建物跡の方が新しいことが確認され，６号建物跡の建て替えともみられる。建物の方向は，磁北にほぼ直交する。

規模は東西３間，南北２間で，各々2.1×4.0mを測る。各柱間の計測値は，北側柱列では西から1.25m＋1.35m＋1.5m，南側柱列では西から1.2m＋1.45m＋1.4m，東側柱列では北から1.05m＋1.2m，西側柱列では北から1.0m＋1.0mを測り，４尺から５尺を基準にしていたものと見られる。各掘形は，東側柱列でやや大きく70cm前後を測るが，他は30～40cmと小さく貧弱である。

断面形は鍋底型を呈し，P_{15}，P_{17}ではわずかに窪みが見られる程度であった。

遺構内からの出土遺物はなく，時期は不明である。

第３節　土坑・その他

今回の調査で，土坑19基と溝跡４条が検出された。土坑は西側の竪穴住居跡群と中央部北側寄りの掘立柱建物跡群に集中して見られる。また溝跡は，１号・２号溝跡が各々南北・東西方向に縦走している。以下これらについて土坑・溝跡の順に報告する。

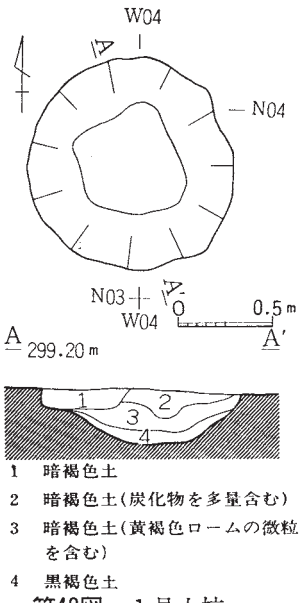
土　　坑

土坑は，形態上おおまかに６つに分類される。溝状土坑８基，円形土坑４基，楕円形土坑３基，擂鉢形土坑１基，隅丸方形土坑１基，不整形土坑２基である。これらの土坑は時期・機能とも異なると考えられるが，明確な判定資料はない。以下，分類された各グループの代表的なものについて説明を加える。個別の特徴は最後の一覧表に示すことにする。

１号土坑　ＳＫ01（第48図）

調査区西部で，10号住居跡の南東隅の壁と２号住居跡の北西隅の壁を切って検出された土坑である。上面プランは東西110cm，南北113cmの円形である。底面は東西55cm，南北60cmの円形プランの平坦面である。壁面は約30°～45°の傾斜で立ち上がる。検出面から底面までの深さは28cmを測る。断面は擂鉢形を呈している。堆積土は４層に分層され，中央が窪んだレンズ状の堆積状態が観察され，自然的な堆積である。２層に多量の炭化物が含まれているが，炭化物の性格は不明である。遺構内検出遺物は２層より土師器甕口縁部小破片１点である。この土師器は，内外面ヨコナデが施され，黒褐色の色調を呈し，胎土に石英・長石・雲母粒を含む焼成の良好なものである。

本土坑は，10号住居跡と２号住居跡の一部を壊して造られているので，遺構が機能した時期は平安時代を遡ることはないが，明確に遺構に共伴する遺物はなく正確な年代・性格は不明である。

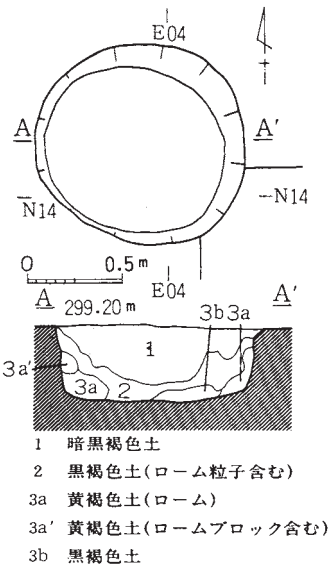


第48図　１号土坑

２号土坑　ＳＫ02（第49図，図版46）

調査区北西部の８号住居跡の北西隅の壁を切って検出された土坑である。底面は，東西95cm，南北87cmの円形で平坦である。壁面は急峻な立ち上がりである。検出面から底面までの深さは40cmを測る。断面形は「凵」形を呈する。堆積土は５層に分層でき，

壁付近には壁の崩落土と判断されるロームブロックを含む層，および中央部には砂粒を含む層が堆積している自然的な堆積である。遺構内出土遺物は皆無である。本土坑は，平安時代以降のものではあるが，８号住居跡を壊して造られているので，明確な年代を決定する手懸りがなく不明である。

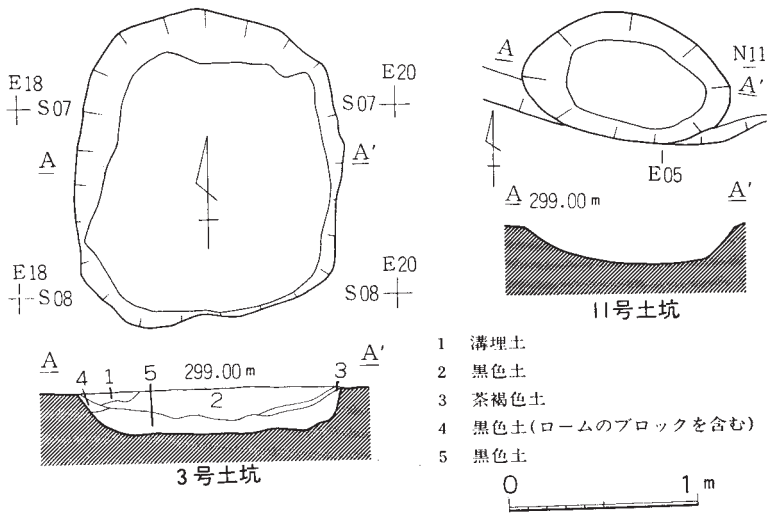


第49図　２号土坑

３号土坑　ＳＫ03（第50図）

調査区中央部南側で，４号建物跡の北西側に地山ローム上面で検出された土坑である。上面プランは，東西162cm，南北141cmでやや南西部が張り出しているが，ほぼ楕円形を呈している。底面プランは，東西105cm，南北103cmで西辺に張り出し部があるがやや南北に長い隅丸方形を呈している。底面はわずかな凹凸がみられるがほぼ水平である。壁面は，東壁と南壁が急な立ち上がりに比べて西壁と北壁はやや緩やかな立ち上がりである。断面形はほぼ箱形を呈する。検出面から底面までの深さは24cmを測る。長軸線の傾きはＮ０°Ｅである。堆積土は５層に分層され，将棋倒し構造を示す自然的な堆積である。遺構内出土遺物は土師器杯・甕の口縁部破片が数点である。土師器杯は小破片であるが，口縁部は短く外反し，頸部内外面に稜があり，外面は細かい単位の横方向のヘラミガキ，内面も口縁部は横方向のヘラミガキ，体部には縦方向のヘラミガキが施されている。赤褐色の色調をした胎土の精選された焼成の良好なものである。その他にロクロ成形の土師器片が認められる。

これらの遺物は本遺構との関連がないものと判断され，したがって，この土坑の年代・性格は不明である。



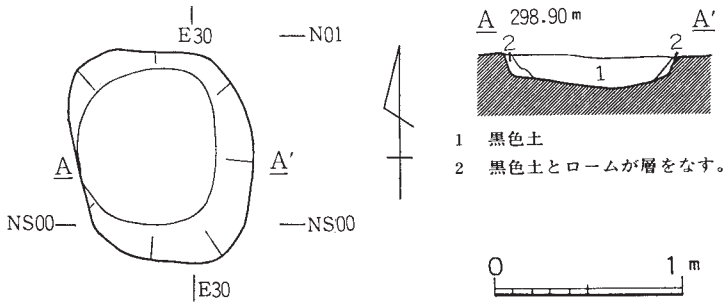
第50図　３号・11号土坑

４号土坑　ＳＫ04

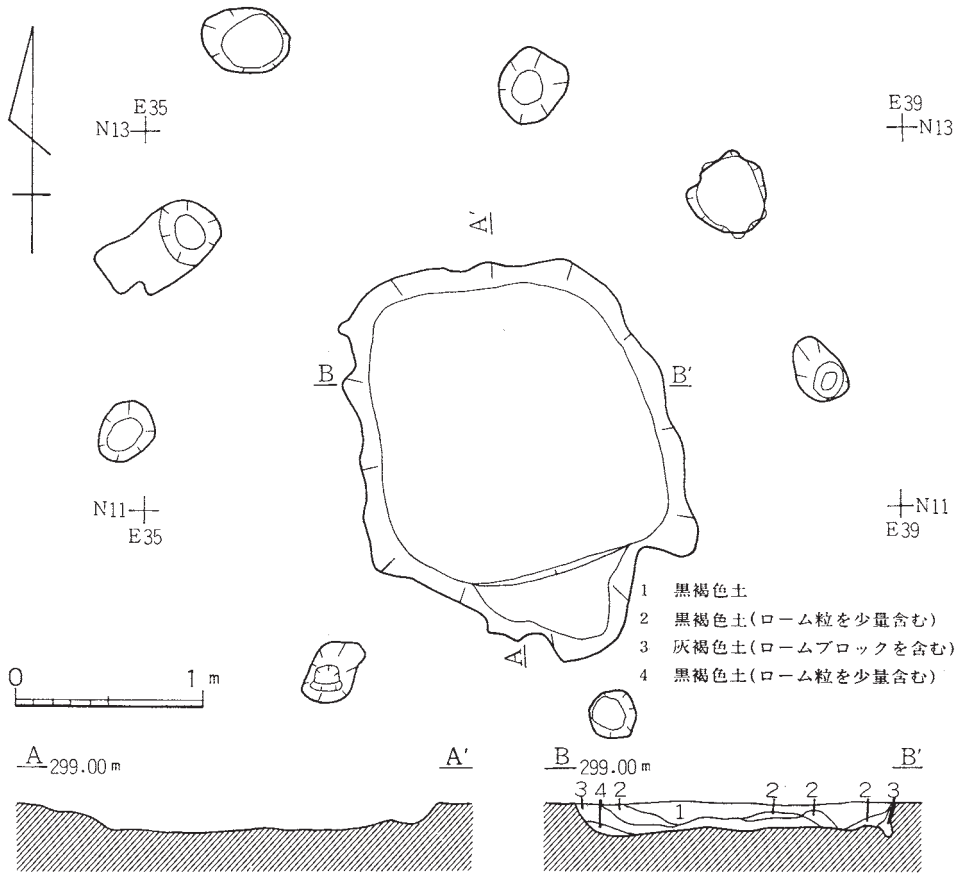
（第51図，図版47）

調査区中央部の５号建物跡プラン内に地山ローム面で検出された土坑である。上面プランは東西92cm，南北110cmで，南北にやや

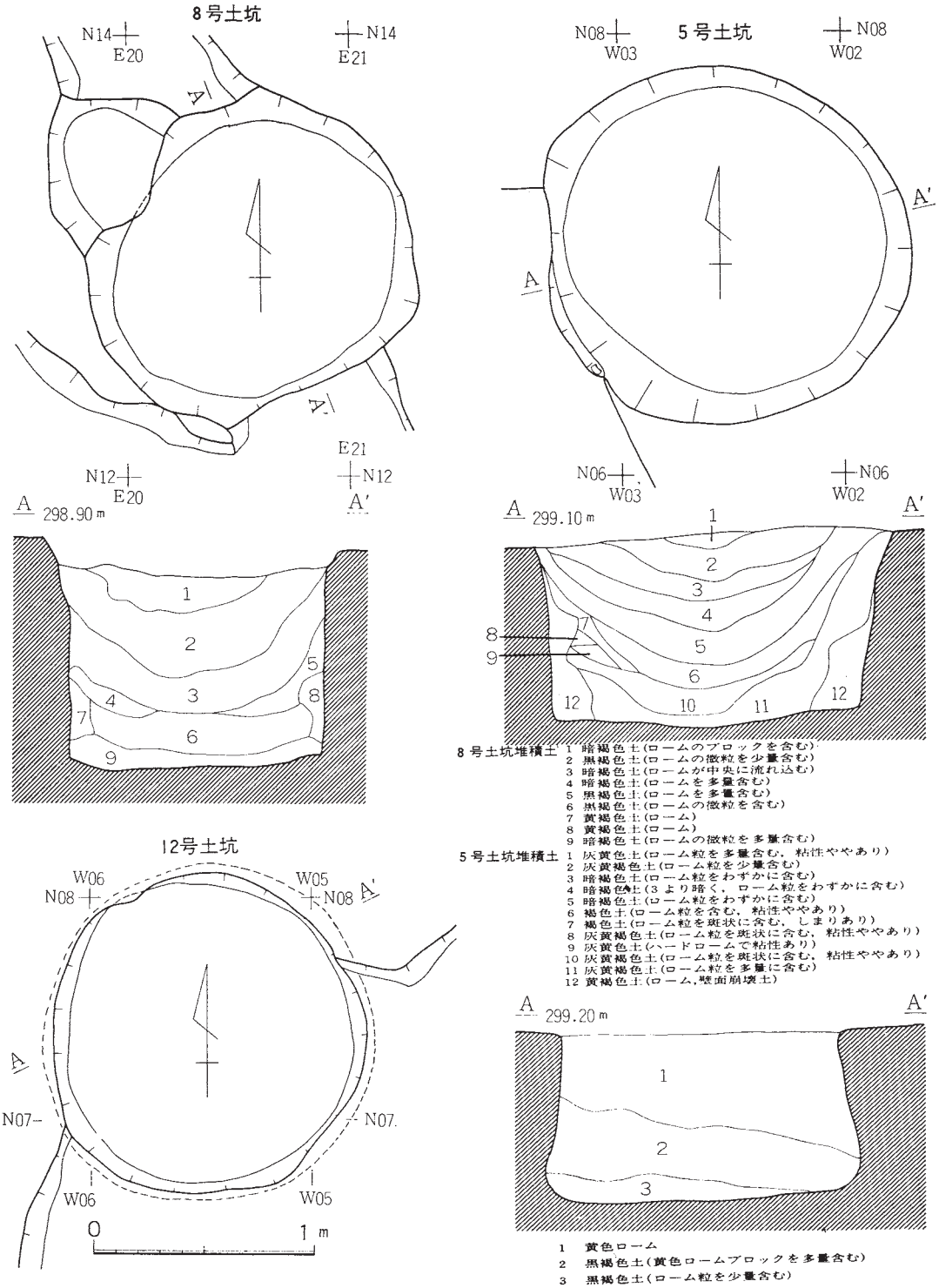
長い隅丸長方形である。底面プランは，西側に片寄って東西84cm，南北73cmの隅丸方形を呈している。壁面は西壁が急峻な立ち上がりをもち，他の壁は緩やかな立ち上がりを呈する。底面は中央部がやや窪む鍋底形の断面形を呈している。検出面から底面までの深さは15cmを測る。長軸線の傾きはＮ０°Ｅである。堆積土は２層に分層され，壁付近に壁崩落によるロームブロックを含む層が堆積している自然的なものである。遺構内出土遺物は検出されず，年代･性格は不明である。



第51図　４号土坑



第52図　６号土坑



第53図　５号・８号・12号土坑

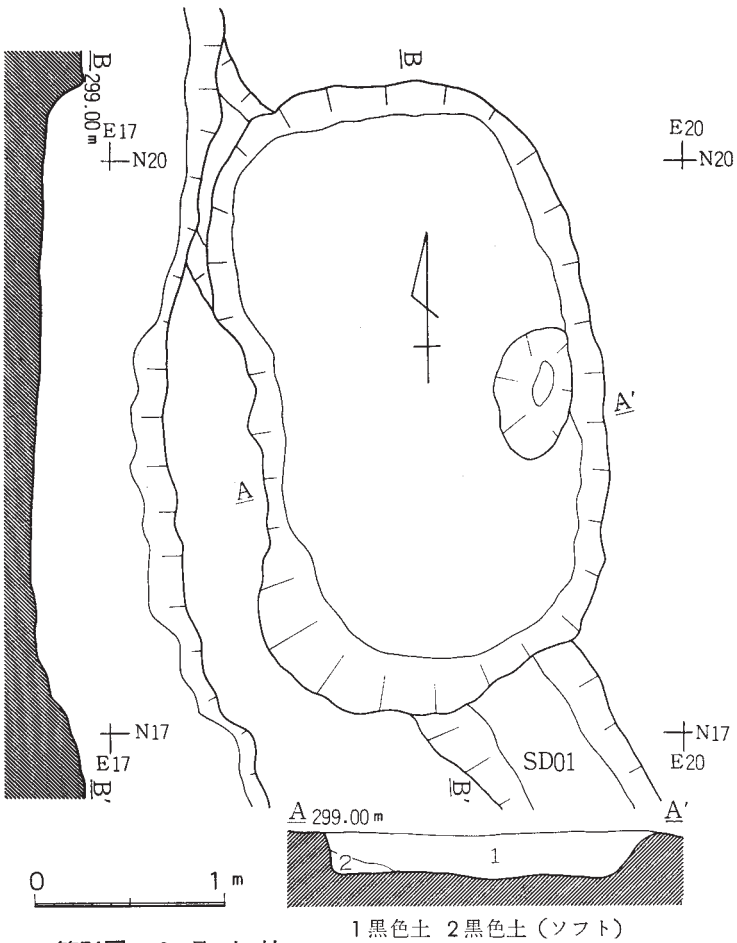
６号土坑　ＳＫ06（第52図）

調査区北部で，６・10号建物跡の東側に地山ローム面で検出された土坑である。上面プランは東・西・北辺はわずかな出入りがあるが直線的ラインなのに比べて，南辺の中央部付近は弧を描いて張り出している。長軸214cm，短軸170cmで，長軸線の偏きはＮ17°Ｗである。底面プランは隅丸方形に南側が半円形の段が付設する形態である。底面はわずかに波状を呈している。壁は長軸方向の東･西壁と南壁は傾斜度約45°で立ち上がるが，北壁はなだらかな立ち上がりをしている。検出面からの深さは15cmを測る。堆積土は薄く４層に分層され，流れ込みの自然堆積である。遺構内出土遺物は皆無であり，年代・性格とも不明である。

また，本土坑を中心として，直径25～50cmのほぼ円形の小穴８個から成る小穴群がサークル状に検出されているが，この小穴群が本遺構に付設するものかは不明である。

10号土坑　ＳＫ10（第55図）

調査区北部の８号建物跡プラン内に，地山ローム上面で検出された土坑である。平面プランは不整形で東西134cm，南北124cmを測る。底面は北壁部にピット状の窪みがあるがほぼ上面プランに沿ったラインである。壁面はやや急峻な立ち上がりで，底面はわずかに窪む鍋底形の断面を呈している。検出面から底面までの深さは30cmを測る。堆積土は８層に分層され，焼土・木炭粒をわずかに含む５層が挟まれているが，この堆積状態は自然的なものと判断される。本道構内堆積土中から実測可能な土師器杯破片１点と須恵器小破片が出土している。須恵器片は

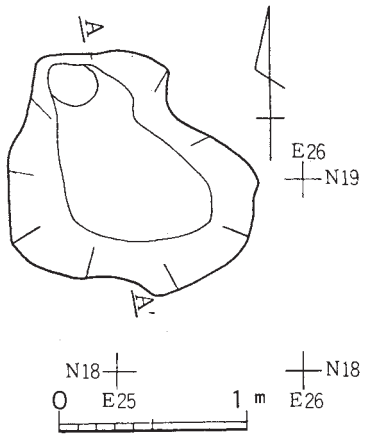


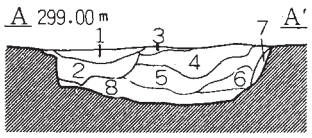
第54図　９ 号 土 坑

外面にタタキ目が施されている。

〔土　師　器〕

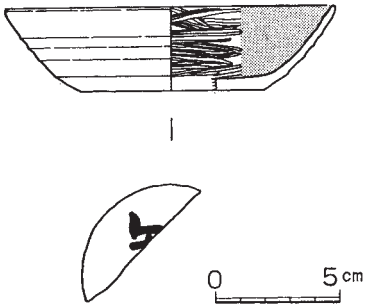
杯１（第56図）　出土層位不明であるが約1/6が現存している。ロクロ成形で，底部切り離し技法は不明である。底部全面から体部下端部にかけて回転ヘラケズリ再調整が加えられている。体部は回転ヘラケズリが加えられている部分までやや直線的に外傾している。内面は底部に細かい単位の一方向の平行なヘラミガキ，底部周辺はやや斜め方向のヘラミガキ，体部は不定方向のヘラミガキ後横方向のヘラミガキが施され，ヘラミガキ後黒色処理されている。胎土は緻密でわずかに長石などの微粒を含み，焼成は良好なものである。底部に「午」の墨書がされている。推定口径13.3cm，推定底径7.3cm，器高3.4cmである。





1　黒褐色土
2　暗褐色土(ロームのブロックを多量)
3　茶褐色土
4　黒褐色土(ロームのブロックを少量)
5　暗褐色土(ロームブロック・焼土・炭化物を少量)
6　暗褐色土(ロームの大ブロック)
7　暗黄褐色土(ロームを多量)
8　黒褐色土(ロームを多量)

第55図　10 号 土 坑

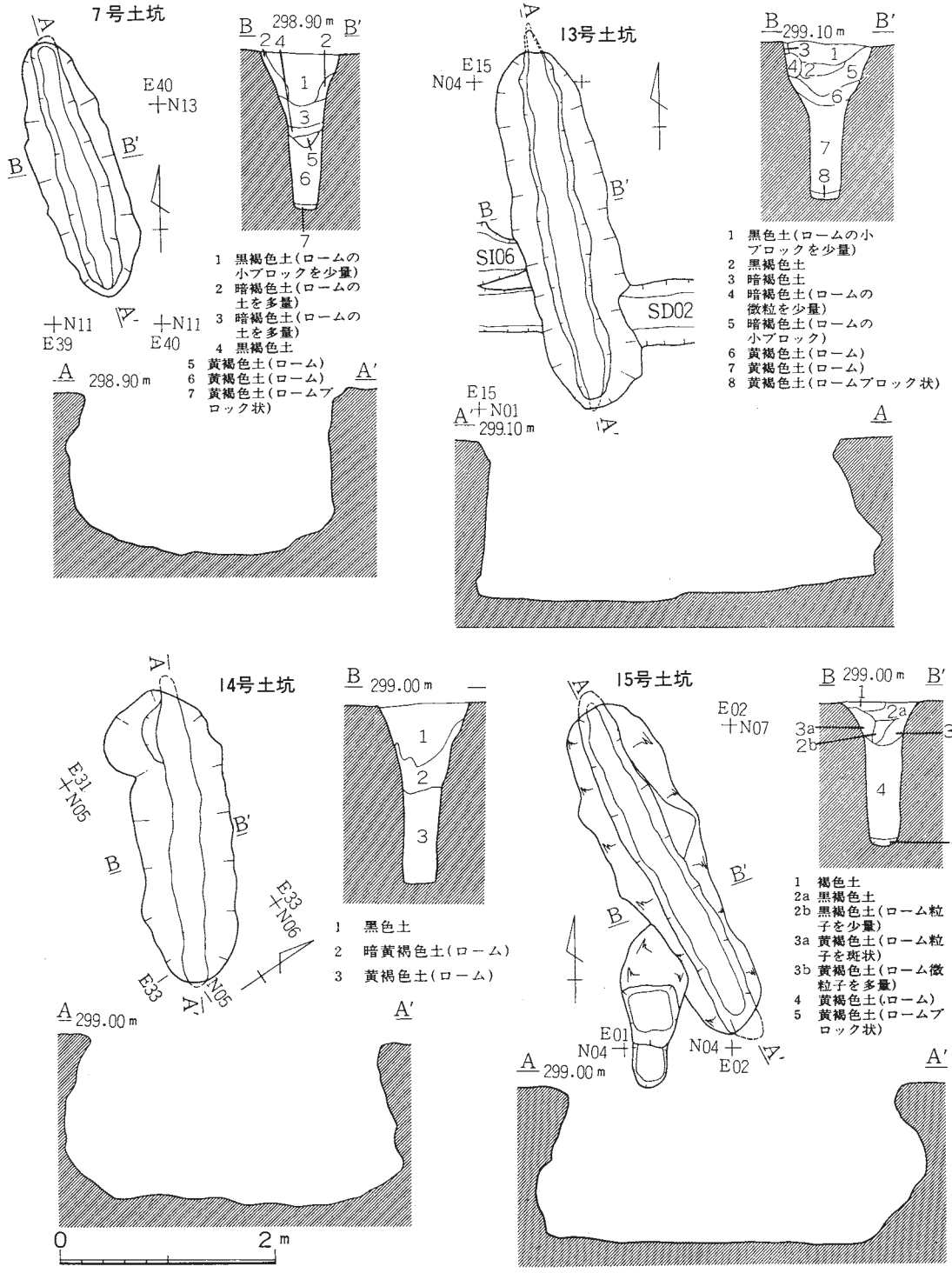


第56図　10号土坑出土土師器

これらからして，本土坑は平安時代以降のものと考えられる。

12号土坑　ＳＫ12（第53図）

調査区西部で，10号住居跡の北西隅の壁に切られて検出された土坑である。平面プランは東西142cm，南北144cmの円形である。壁面は一部オーバーハングがみられるが，ほぼ垂直の立ち上がりをしている。底面プランは上面プランに沿って，東西129cm，南北134cmの円形である。底面は西側部へやや傾斜しているがほぼ平坦な面である。断面は「凵」形である。検出面から底面までの深さは地山ローム面で75cm，10号住居跡床面で35cmを測る。堆積土は３層に分層され，ロームブロックを含む黒褐色の３・２層の上にローム主体の黄褐色の１層が堆積している。土層観察によると，人為的な埋土の可能性もある。本遺構内からの遺物は検出されなかった。この土坑は10号住居跡に壊されていることにより，平安時代以前に機能したものであるが年代・性格は明確な判断はできない。



第57図　7号・13号・14号・15号土坑

13号土坑　ＳＫ13（第57図，図版51）

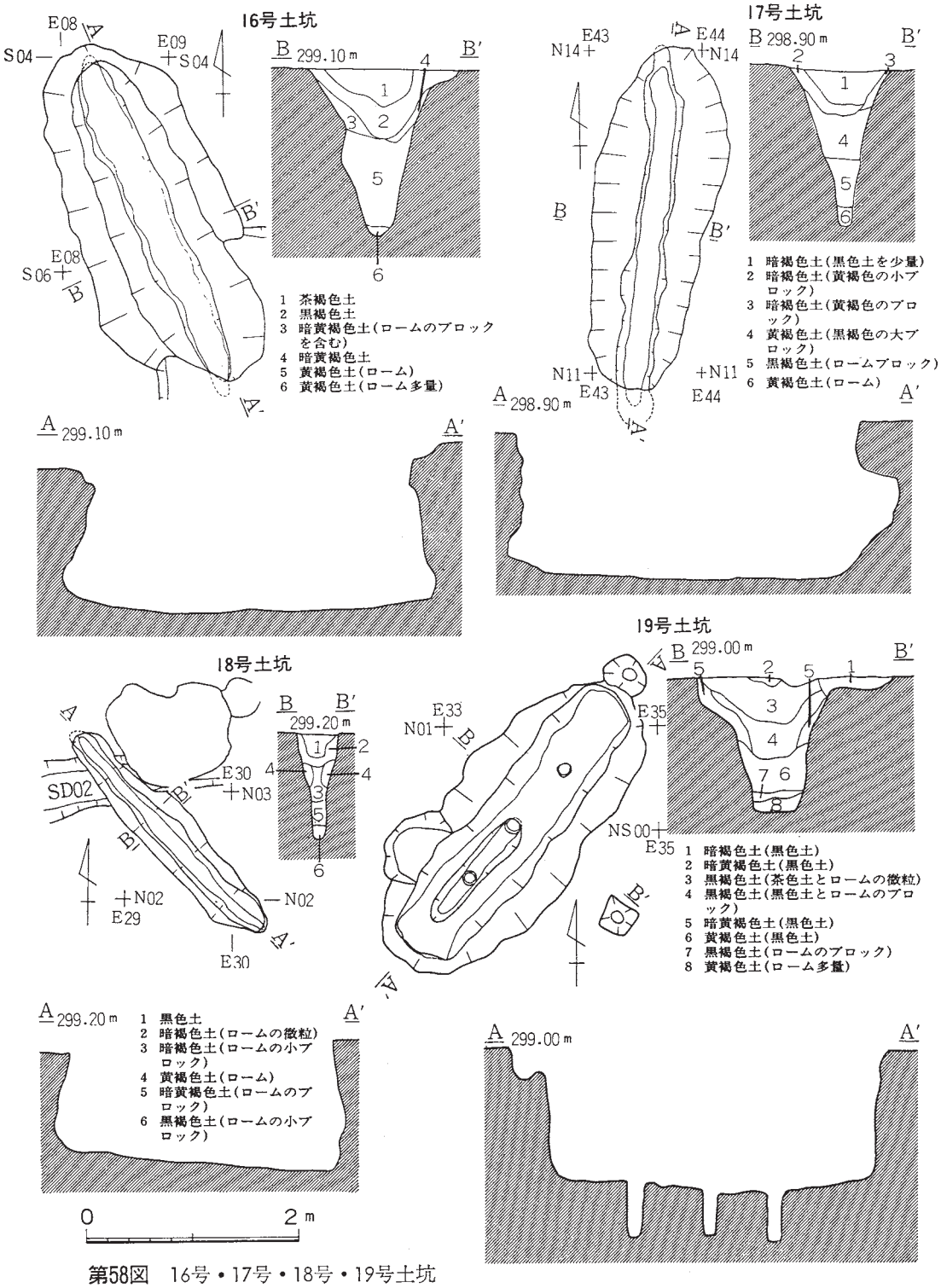
調査区中央部で，６号住居跡の煙道部と２号溝跡によって切られて検出された土坑である。上面プランは狭い長方形を基調としたもので，長軸336cm，短軸84cmを測る。底面プランは狭い溝状を呈し，長軸347cm，短軸22cmを測り，先端部は尖っている。長軸方向の断面形は，南壁はわずかにオーバーハングしているがほぼ垂直に掘り込まれ，底面近くで強い抉り込みが見られる。北壁は上位から傾斜度約60°でオーバーハングして掘り込まれている。底面はわずかに南側に傾斜する平坦な面をもつ。短軸方向の断面形は両壁とも約70°で中位まで傾斜し狭くなり，その部位から底面までほぼ垂直に掘り込まれた左右対象形の漏斗状を呈している。検出面から底面までの深さは中央部で144cmを測る。長軸線の偏きはＮ９°Ｗである。堆積土は７層に分層され壁の崩落したロームブロックを主体とした黄褐色土が下部に堆積している自然的なものである。本遺構内からは遺物は検出されなかったが，６号住居跡の煙道部によって一部壊されているので奈良時代以前に機能したものである。

16号土坑　ＳＫ16（第58図）

調査区西南部で，３号住居跡に切られて地山ローム上面で検出された土坑である。上面プランは，長軸340cm・短軸141cmの長楕円を基調とした溝状を呈している。底面プランは長軸348cm，短軸30cmの狭小な溝状を呈している。長軸方向の断面形は，南壁が開口部から約80°の傾斜度で底面まで，北壁は約70°の傾斜角で底面までオーバーハングして掘り込まれ，底面は平坦な面を呈している。短軸方向の断面形は，開口部から両壁が急峻に底面まで傾斜し徐々に狭くなり，底面がゆるく窪み全体は「Ｖ」字形を呈している。検出面から底面までの深さは135cmを測る。長軸線の傾きはＮ22°Ｗで15号土坑と類似している。堆積土は６層に分層され，下部に壁の崩壊土と考えられるローム主体の黄褐色土が堆積している自然的なものである。本遺構内に遺物は検出されなかったが，３号住居跡に壊されているので平安時代以前に機能した土坑である。

19号土坑　ＳＫ19（第58図，図版55・56）

調査区中央部で，５号建物跡の東側柱列の掘形に切られて検出された土坑である。上面プランは北東部が小ピットで撹乱されているが，長軸320cm，短軸133cmの長楕円形の溝状を呈している。底面プランは，長軸300cm，短軸40cmの細長い長方形である。本遺跡から検出された他の溝状土坑と異なり，底面の長軸方向に直径17cm前後で，深さが底面より43～52cmのピット３個が65cm前後のほぼ等間隔で一直線に並んで穿たれていて，南西部に位置する２個のピット部分はさらに一段低く浅い溝状に掘り込まれている。長軸方向の断面形は，両壁ともほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦な面をもつ。短軸方向の断面形は，南東壁が北西壁より急峻な傾斜をもって立ち上がり，底面の幅長は他の溝状より広い「Ｖ」字形的形態を呈している。検出面から底面までの深さは125cm前後を測る。長軸線の傾きはＮ39°Ｅである。堆積土は８層に分層され，下部に壁崩落



第58図　16号・17号・18号・19号土坑

によるローム主体の黄褐色土が堆積している自然的なものと判断される。遺構内からは年代決定の資料となる遺物は皆無であるが，５号建物跡が使用された年代より古い時代に造営された土坑である。

ま　と　め

今回の調査で検出された土坑は19基で，形態上大別すると次のようになる。

溝状土坑（７・13・14・15・16・17・18・19号土坑）　８基ある。長軸長が243～340cmで短軸長が40～133cmの平面形の細長いものを一括した。深さが99～161cmの深い土坑である。遺構内堆積土は，自然堆積である。断面形の特徴によって，さらに細分することができる。

a　長軸方向の両壁が上位からオーバーハングして掘り込まれているもの。　４基
　短軸方向の断面形が「Ｖ字形」を呈するもの。　16・18号土坑
　短軸方向の断面形が「Ｙ字形」を呈するもの。　14・15号土坑

b　長軸方向の片壁がほぼ垂直に，片壁がオーバーハングして掘り込まれているもの。　３基
　短軸方向の断面形が「Ｖ字形」を呈するもの。　７・18号土坑
　短軸方向の断面形が「Ｙ字形」を呈するもの。　13号土坑

C　長軸方向の両壁がほぼ垂直に掘り込まれ，底面に小ピットが穿たれているもの。　１基
　短軸方向の断面形が「Ｖ字形」をしている。　19号土坑

円形土坑（２・５・８・12号土坑）　４基あり，平面は円形を呈し，壁面がほぼ垂直ないしややオーバーハングして掘り込まれ，底面が平坦で，断面形がほぼ「凵」形の土坑である。直径142～161cm，深さ75～116cmの深いものと直径110cm前後，深さ40cmの浅いものがある。

楕円形土坑（３・９・11号土坑）　３基あり，長軸長110～344cm，短軸長68～190cmの平面形が楕円形を呈する土坑で，底面形は楕円形と隅丸方形に分れる。深さは15～24cmと浅い。

擂鉢形土坑（１号土坑）　直径110cm強の円形の平面形で，底面は平坦な面をもち，壁が40°前後で立ち上り，断面形擂鉢形を呈している。深さは40cmと浅い土坑である。１基のみである。

隅丸方形土坑（４号土坑）　長軸長110cm，短軸長92cmの隅丸方形の土坑１基で，断面形が鍋底形を呈している。深さが15cmと浅い土坑である。

不整形土坑（６・10号土坑）　上記のいずれの形態にも属さない平面形をもつもので，深さが15～30cmの浅い土坑である。２基を数える。

溝　　跡

溝跡は，耕作土下ローム層上面で，１～４号溝跡まで４条検出されている。これらの溝跡を平面的に見てみると，調査区中央で，東西方向に走るものと，北西から南東方向に走るものとが交差し，また，東南部を東西に走るものとがあるが，基本的には２方向に配置されている。幅は50cm

から１ｍ位まで，深さは検出面から10～30cmあり，横断面形はナベ底状にゆるく落ち窪む。他の遺構と何ケ所かの重複関係をもつが，全て他の遺構よりも新しいものであることが，検出面精査の段階で確認されている。溝相互の重複関係は，３号溝跡→１号溝跡→２号溝跡の順で，１号溝跡と４号溝跡は同時期という新旧関係が観察されたが，各溝跡とも，それほどの時間差がないように見受けられた。従って，時期的には他の検出遺構よりも後出するもので，それほど時間差をもたず何度か掘り替えられたものと思われる。溝跡の性格については，１号溝跡・４号溝跡は同時期内で捉えられないかもしれないが，一区画を構成するような配置が見られる。これらのことから４本の溝跡の性格を同一のものと見れば，地境のような意味を持っていたと思われる。また，底面のレベルを測ると，１号溝跡は北から南へ，２号溝跡は西から東へ，３号溝跡は東から西へ，４号溝跡は東から西へ，ほぼ平均してゆるく傾斜しているので，水路としての機能も無視することができない。

第１表　土　坑　一　覧　表

土坑番号	平面形	断面形	大きさ（cm）上面（底面）	深さ（cm）	長軸方向	出土遺物	重複関係	時期	図番号
１号	円形	擂鉢形	110×113（55×60）	28		土師器甕口縁部破片	２・10号住居跡を切る。	Ⅳ期以降	48
２号	円形	凵形	110×106（95×87）	40			８号住居跡を切る。	〃	49
３号	楕円形	凵形	162×141（105×103）	24	N0°E	土師器杯・甕口縁部破片，ロクロ土師器破片		〃	50
４号	隅丸方形	鍋底形	92×110（84×73）	15	N0°E		５号建物跡プラン内に検出される。	〃	51
５号	円形	凵形	161×161（143×139）	87			10号住居跡を切る。	〃	53
６号	不整形	凵形	214×170（195×145）	15	N17°W			〃	52
７号	溝形	Ｖ字形	243×732（42×22）	145	N15°W			Ⅰ期	57
８号	円形	凵形	147×150（127×113）	116			１号溝跡に切られる。	Ⅳ期以降	53
９号	楕円形	凵形	344×190（300×150）	27 ピット−13	N8°W	土師器杯・甕破片，須恵器破片，ロクロ土師器破片	１号溝跡に切られる。	〃	54
10号	不整形	鍋底形	134×124（75×90）	30		ロクロ土師器杯 墨書銘「午」	８号建物跡プラン内に検出される。	〃	55
11号	楕円形	鍋底形	110×68（74×43）	21	N79°W		８号住居跡を切っている。	〃	50
12号	円形	凵形	142×144（129×134）	75			10号住居跡に切られる。	Ⅲ期	53
13号	溝形	Ｙ字形	336×84（347×22）	144	N9°W		６号住居跡２号溝跡に切られる。	Ⅰ期	57
14号	溝形	Ｙ字形	270×83（314×30）	161	N62°W		12号建物跡・３号溝跡に切られる。	〃	57
15号	溝形	Ｙ字形	310×95（296×25）	135	N25°W		９号建物跡に切られる。	〃	57

土坑番号	平面形	断面形	大きさ（cm）上面（底面）	深さ（cm）	長軸方向	出土遺物	重複関係	時期	図番号
16号	溝形	V字形	340×141（348×30）	156	N22°W		3号住居跡に切られる。	I期	58
17号	溝形	V字形	321×95（307×10）	146	N5°E			〃	58
18号	溝形	V字形	245×40（245×10）	99	N44°W		2号溝跡に切られる。	〃	58
19号	溝形	V字形	320×133（300×40）	126 ピット43～52	N39°E		5号建物跡に切られる。	〃	58

第３章　考　　察

第１節　遺物について

今回の調査による出土遺物は，土師器・須恵器・紡錘車・土錘・鉄釘・木器などである。主体をなすのは土師器であり，古墳時代から平安時代にかけての土師器研究上，見逃すことのできない資料が含まれている。また，平安時代の土器に関しても新知見が得られている。したがって，以下に土器を中心にして，その編年的位置づけについて検討していくことにする。

出土土師器は，おおむね３群に大別される。それぞれ，各時期の編年上の問題を内包しているため，細かな分類・検討が要求される。したがって本節では，各群ごとに，住居跡出土の資料を中心として検討を加えることにする。

１．第１群土器の編年的位置づけ

１・２・７号住居跡から出土しており，杯・椀・壺・甕・甑などの器種が認められる。さらに各器種はいくつかのタイプに分かれる。以下，その分類作業を行っていく。

第２表　第１群土器分類表

（杯）

ＡⅠ類　上半部に張りのある膨らみを有する体部と短く外傾する口縁部をもち，内外面とも明瞭な「く」字状の括れが認められる。底部は丸底ないしやや平坦な面をもつ例がある。（２号住２）

ＡⅡ類　口縁部・体部の特徴はＡⅠ類とほぼ同様であるが，底部は明らかな平底を呈している。（７号住３）

ＡⅢ類　体部の立ち上がりは，ＡⅠ類のように張りがみられず，口縁部はゆるく括れて外傾する。内面には稜があらわれる。（１号住１・２・３・４，２号住１，７号住２）

ＢⅠ類　Ｂ類の特徴は，直立する口縁部にある。本類は体部の立ち上がりが張りをもち，やや広口で，底部は平底風ないし丸底である。（２号住３，７号住５）

ＢⅡ類　口縁部が短く直立し，底部は平底のものである。（７号住４）

Ｃ類　Ｂ類にみられるような直立する口縁部が認められず，端部がわずかに内彎する。底面には小さな凹部が存在する。（７号住１）

（椀）

底部から体部を経て，内彎する口縁部に至るまで，ほぼ整った球状につくり上げられている。底部には小さな凹部がある。（１号住５）

（壺）

Ａ類　球をつぶしたような胴部と，強く括れた頸部から朝顔状に開く口縁部が特徴である。口縁部は端部付近で短く直立する。（７号住６）

Ｂ類　胴部は，ほぼ球形で，底部は丸底。頸部は「く」字状に括れ，口縁部は外反する。Ａ・Ｃ類と共に小型壺の１群に含められる。（１号住６）

Ｃ類　球形に近い胴部に，やや直立気味の口縁部が付けられている。（７号住７）

Ｄ類　Ａ～Ｃ類と比べると，比較的大きな壺である。倒卵形に近い球形の胴部に外反する口縁部が付けられている。頸部内面には顕著な稜はみられない。しかし，外面の口縁部立ち上がり部分には，明

瞭な屈曲線があらわれている。（７号住８）

（甕）

Ａ類　肩がやや張り，口縁部は外反する。胴下半部が欠損しているが，やや寸詰まりの長胴形をなすものと見られる。（７号住９）

Ｂ類　口縁部が外反し，胴部は上位でやや膨らむものの，さほど張りをもたずにつぼまる形を呈する。したがって口径は胴径を上回っている。（２号住４）

Ｃ類　口縁部に，調整の際形成された隆帯をもつ。肩の張る胴部形が予想されるが，欠損のため不明。（２号住５）

Ｄ類　倒卵形を呈する長胴甕である。口縁部は欠損のため不明。（２号住６）

（甑）

口縁部が外反し，やや肩が張る長胴形を呈する無底の甑である。（７号住）

（小型手捏土器）

鉢形を模した器形である。ナデツケなどにより簡易な調整が施されている。（１号住８）

各器種ごとの分類は，前表のようになされるが，次いで，各住居跡ごとにどのような組成がみられるかを観察し，その特徴をまとめていくことにする。まず，前表の分類項目の共伴例を並べていくと，次のようになる。

第３表　住居跡別土器組成表

住居跡	土器組成内訳　　（　）内は出土点数を表している。
１　号	杯ＡⅢ（4）・椀（1）・壺Ｂ（1）・小型手捏ね土器（1）
２　号	杯ＡⅠ（1）・ＡⅢ（1）・ＢⅠ（1）・甕Ｂ（1）・Ｃ（1）・Ｄ（1）
７　号	杯ＡⅡ（1）・ＡⅢ（1）・ＢⅠ（1）・ＢⅡ（1）・Ｃ（1）・壺Ａ（1）・Ｃ（1）・Ｄ（1）・甕Ａ（1）

まず，杯ＡⅢ類が各住居跡に普遍的に出土していることがあげられる。その中で，１号住居跡が最も多く４点出土している。それと対照的に７号住居跡にはＢ・Ｃ類が集中して出土している。ＡⅢ類も伴っているが１点のみである。２号住居跡も杯Ａ類とＢ類が共伴している。１号住居跡はＡⅢ類のみであるが，堆積土中からＢ類の口縁部破片が出土しており，共伴の可能性が強い。各住居跡ごとに，出土類型の片寄りがみられるようであるが，時期的な大差はなく，杯Ａ・Ｂ・Ｃ類は互いに共伴するセットと考えてよいだろう。

杯とともに，当土器群の性格を考えるのに重要な資料として，朝顔状の口縁部をもつ壺Ａ類がある。具体的な姿で出土しているのは７号住居跡のみであるが，球をつぶしたような形の胴下半部破片が１号住居跡の床面直上から，また，朝顔状に開いて端部が直立する口縁部破片が２号住居跡の堆積土中から出土しており，それぞれ伴っていた可能性がある。

このような遺物出土状況から，３軒の住居跡は，ほぼ同じ時期に属していた可能性が強い。すなわち，これらの住居跡から検出された器種は，一型式内における組成の一部として考えてよいだろう。

今までに分類した西原遺跡第１群土器と時期的に近いものとされる資料に，1977年の西白河郡東村における国営総合農地開発事業に伴う発掘調査で数多く検出されており，既に報告もされて

いる。さらに，本県の他の地域や，隣接する宮城県でもいくつか調査例が認められている。

本遺跡の資料を編年上に位置付けるため各遺跡出土例との比較検討を加えたい。西原遺跡と同じ矢武川北岸に立地し，相互に近く位置している東村の佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区・Ⅵ区，板倉前Ｂ遺跡出土例との比較を行い，次いで県中部の大玉村上高野遺跡２号住居跡出土資料との比較をも行っていきたい。

佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区

1977年の発掘調査で得られた資料である。報告のなかで第１群とし，「佐平林式」を提唱した土器群である。まず，杯の比較から行っていくことにする。

当遺跡の杯形態は，多くのバラエティがみられる。報告の中ではＡ～Ｈ類に大別，さらにいくつかの種に分けている。その中には，新旧諸要素がさまざまに含まれており，もちろん西原の類型の一部に近似するものも存在する。「杯形土器では，全般にやや浅いものが多く，若干体部の膨らみが強く口縁が多少長めとなる。」「口縁が長めになるのに対応して，頸部稜線が下降するものがある（Ｂ・Ｃ類）」などという指摘は，この遺跡の杯の特徴を大まかに捉えたものである。

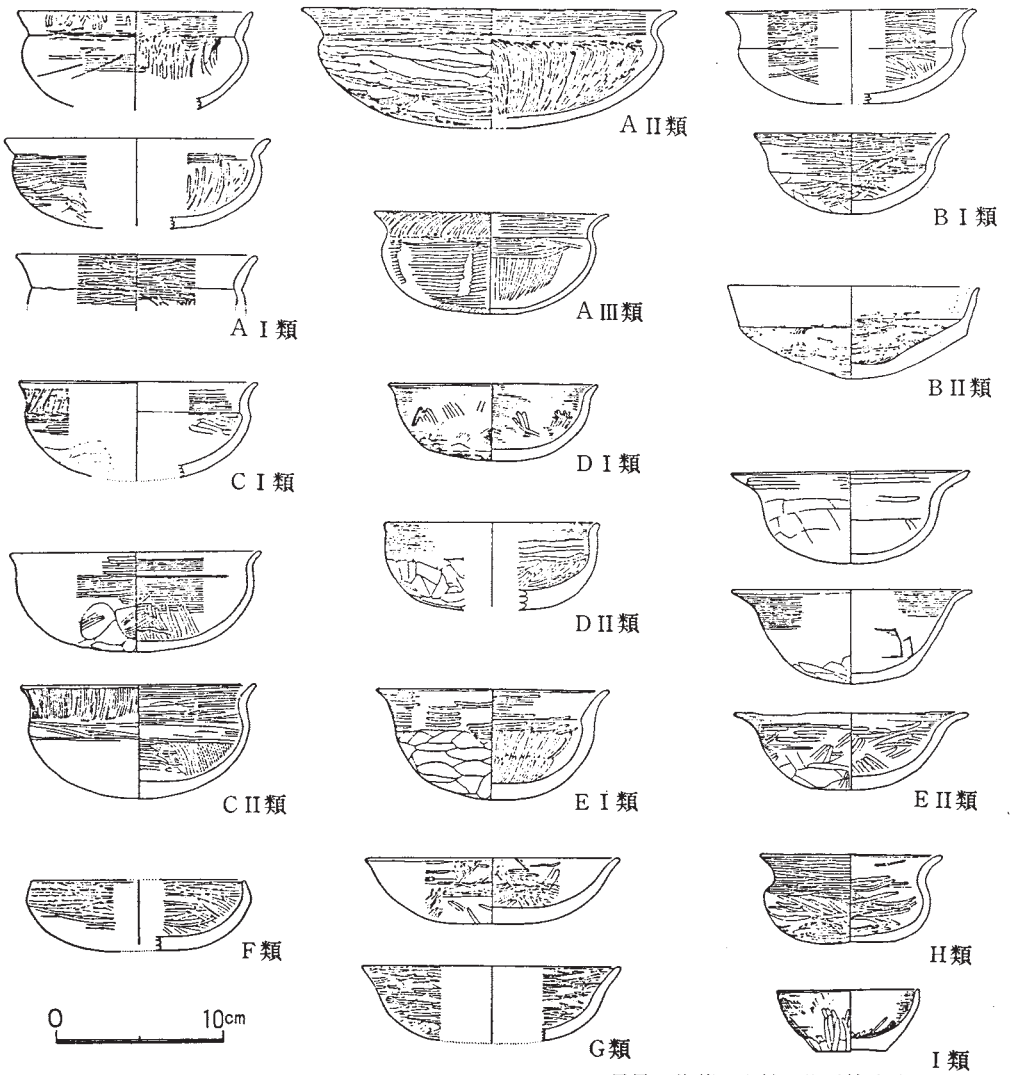
佐平林４号住居跡出土のＡⅠ類や５号住居跡出土のＡⅢ類などは，西原ＡⅠ類と比較的近似する。しかし，西原ＡⅠ類により類似するものは，後述する板倉前Ｂ遺跡に多くみられ，そのような類型を介在させることにより，形態変化が理解し易くなると考える。同じく後述する大玉村上高野遺跡資料の中には，佐平林ＡⅡ・Ⅲ類，ＣⅡ類などに結びつくような類型がみられる。上高野遺跡２号住居跡は，西原１号住居跡とほぼ同じ杯の様相を呈しているが，さまざまな変化系列の一端をうかがわせるものである。

佐平林３号住居跡出土のＤⅠ類や４号住居跡出土のＥⅠ類などは，西原ＡⅢ類に近似するものである。ＥⅡ類は，そのような類型から派生して変化しているのかも知れない。もちろん西原ＡⅢ類から直接的にではなく，間に介在するタイプが予想される。いずれにしても，以上のような事実は，佐平林式の土器の形態変化の方向が多様化していることを示していよう。

ＡⅡ類と分類され，６号住居跡から出土した口径の広い杯は，西白河郡東村栃本遺跡から出土し，氏家和典がいわゆる「引田式」の範疇に含めた資料に酷似する。このタイプはＡⅢ類なども含めて，内面黒色処理が普遍化する段階にまで引き継がれていくような後出的なものと考えられる。上記したＤ・Ｅ類各グループの中にも，後の時期へ継がれていくものが存在する。

次いで，ＢⅠ類とされた，括れの下端が外側に張り出す稜線となってあらわれるものは，今まで取りあげた各類とは別な変化を持つものと考えられる。このタイプは，次期の型式，すなわち内面黒色処理が普遍化しつつある段階でその稜線が特に強調され，口縁部が長く外反するという変化をたどっていく。

杯以外の遺物を比較してみると，西原壺Ａ類や椀のような資料は全く認められない。比較的類



第59図　佐平林遺Ⅰ～Ⅳ区出土杯分類図

目黒・佐藤・大越「佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区」1978より転載

似しているものは，甕Ａ類や甑にみられる。甑は，佐平林６号住居跡出土資料のなかに西原例に類似するものがみられる。しかし，口縁部が一度直立してから外傾するなど，佐平林の甕の特徴を反映している。このタイプの他には，球形の胴部を呈したものや，小型の単孔甑などが存在している。甕は，口縁部形こそちがうものの，３号住居跡出土のＢ類が，西原Ａ類の復元形を想定させるような資料である。

以上のように，佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器と西原第１群土器とを比較すると，前者の方がより後出的であると考えられる。おそらく，後続する内面黒色処理普遍化の段階へつづく器種がほぼ出そろった，新しい変化を画する時期の型式と言えるだろう。

佐平林遺跡Ⅵ区

1978年の調査で得られた資料である。４号土坑において杯１点が須恵器杯に伴って出土している。杯形態は西原ＡⅠ類に近いと言えるかも知れないが，括れ部はより鋭く，内外面の稜は明瞭で，口縁部はかなり短く外傾している。体部は強い張りをもって膨らみ，その径は口径を上回る。時期的には，西原遺跡第１群土器に近いものと考えられるが，組成をもって出土したわけではないので，断定し難い。しかし，佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区第１群土器よりは前出的なタイプとみて良いかも知れない。

板倉前Ｂ遺跡

1978年の調査で得られた資料である。２・３・５号住居跡より該当する資料が出土している。報告によれば杯は３類に分けているが，比較・検討の必要上再度分類を試みることにする。

第４表　板倉前Ｂ遺跡出土杯分類表

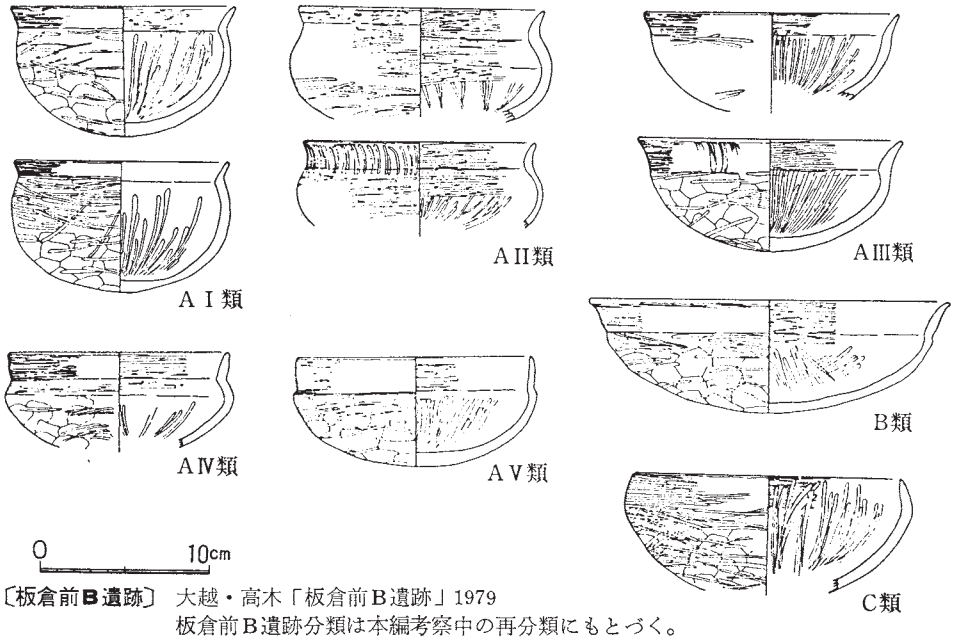
ＡⅠ類　口縁部が外反して，張りをもった膨らみの体部を持つ括れ部は明瞭で，内面の稜は鋭くやや突き出た形のものも存在する。
ＡⅡ類　口縁部がやや短く外反し，括れはゆるい。体部は強い張りをもち，幅が広く浅めに形成している。概して体部の最大径が口径を上回る。
ＡⅢ類　体部は強い張りをもたず，ゆるく括れて外傾する口縁部に至る。
ＡⅣ類　口縁部がやや直立気味に外傾し，体部はＡⅡ類のように強い張りをもった膨らみを形成している。
ＡⅤ類　ほぼ直立し，端部が内彎気味の口縁部に，やや膨らみをもつ体部が形成されている。体部上端と口縁立ち上がり部との間に若干の段差が認められ，内側へわずかに括れているのが特徴的である。その体部上端には稜線が認められる。
Ｂ類　広くつくられている。外反する口縁部に，やや膨らみをもつ体部が形成されている。体部と口縁部の間にはわずかであるが，括れの名残りが観察される。
Ｃ類　体部から口縁部にかけて内彎するものである。

本遺跡の場合，ＡⅠ類の１部すなわち口縁部が短く外傾するものや，ＡⅢ類などが西原ＡⅠ類・ＡⅢ類に類似する。しかし，ＡⅠ類でも口縁部が長めに外反し，内側に強い稜を形成するものやＡⅡ類などは，佐平林ＡⅠ類・ＡⅢ類に比較的近い形態と言えよう。この比較を取り上げれば，西原から佐平林に至るまでの変化が追及できそうである。型式的な問題としてはさらに検討が必要であるが，ひとつの形態変化のケースとして取り上げてよいかも知れない。

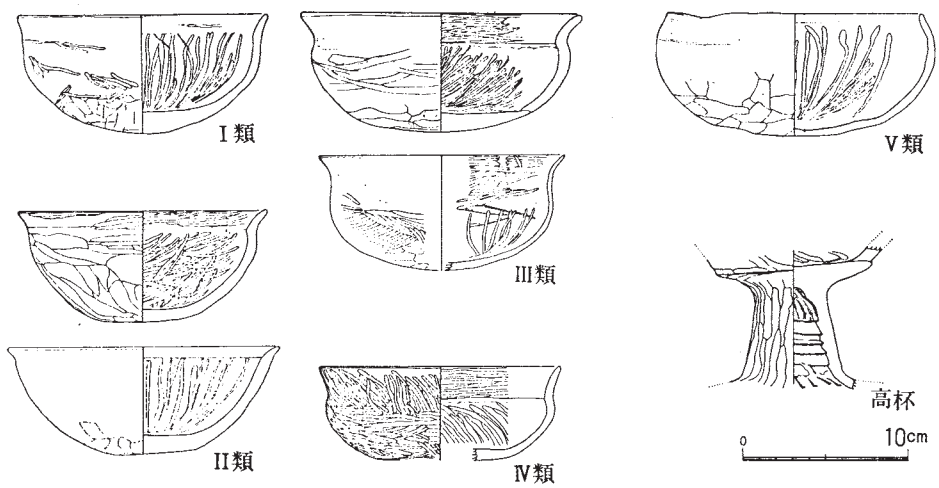
杯Ｃ類は，後述する上高野資料の中に類例が含まれている。しかし，本類のように体部上半で屈曲するように内彎する形態は，佐平林分類のＦ類により近いものと考えられる。

杯以外の器種を観察すると，無底の甑や甕が出土している。甑は長胴のもので，３号住居跡から２点出土している。そのうちの１点は西原例に近いものであるが，他の１点は口縁部・肩部が広く，下部に移るにつれて急にすぼまる形につくられている。このような形態は，長胴の甕形を呈する甑の中でも古い形態であろう。

甕は，体部が倒卵形を呈し，口縁部の立ち上がりが明瞭で，やや外傾する口縁の形態のものが



〔板倉前B遺跡〕　大越・高木「板倉前Ｂ遺跡」1979
板倉前Ｂ遺跡分類は本編考察中の再分類にもとづく。



〔上高野遺跡〕　玉川・大越「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討」1978

第60図　板倉前Ｂ遺跡・上高野遺跡出土杯分類図

佐平林Ｂ類としたものに類似する。

以上が，矢武川北岸に立地する３遺跡出土資料との比較である。これらの遺跡の資料は，地理的にも相互に近接した位置にあり，相対的な系統関係を述べるにも，最も有利な条件であると言わねばならない。次いで，安達郡大玉村上高野遺跡２号住居跡出土の資料を取り扱うことにする。

上高野遺跡

1972年に調査の概報が発表され，1978年に２号住居跡の杯を中心として分類・検討が行われている。

杯はⅠ～Ⅴ類に分類されているが，それらの中には，西原で行った分類各例にあてはまるものが多くみられる。すなわち，Ⅱ類は西原ＡⅢ類，Ⅲ類は西原ＡⅠ類とそれぞれ同類型とみることができよう。しかし，西原・ＢＣ類にあてはまるものが出土せず，当２号住居跡出土の杯は，西原１号住居跡のもつ様相に似ていると言わねばならない。

杯の他には，高杯・壺・甕などが出土しており，さらに須恵器杯も伴っている。高杯はいわゆる南小泉式とされる資料の中に類似するものが存在するようである。

以上の県内資料群をまとめてみると西原・上高野・佐平林Ⅵ区・板倉前Ｂの各資料群と，佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器とに大別されよう。西原１号住居跡資料と上高野２号住居跡資料とは類似する様相を呈している。しかし，西原２・７号住居跡の各資料は，１号住居跡のそれとほぼ同時期の所産であると考えられることから，両遺跡の土師器組成は，同じ時期に位置付けられよう。さらに，高杯や椀・坩など，南小泉式とされる資料の中に類例が存在するものを互いの組成の中に持ちあわせていることなども，その裏付となろう。今まで各遺跡単独では不明瞭だった該期の土師器組成の在り方を複数の遺跡の検討により明確にすることができれば，型式編年上の位置付けの有力な根拠ともなり得よう。

佐平林Ⅵ区４号土坑出土資料は，杯１点のみである。西原杯ＡⅠ類に近い形態ではあるが，その組成は明らかでない。しかし，佐平林Ⅰ～Ⅳ区資料のなかには存在しない類型であり，それより前出的なものとされる可能性が強い。

板倉前Ｂ遺跡第１群土器には，西原・上高野各遺跡にみられるような古い様相をもつ器種が伴っていない。しかし，杯の形態は上記の２遺跡資料により近いものがそろっている。ただ，佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器へ直接系統的につながる要素を有していることも忘れてはいけない。

ここで，板倉前Ｂ遺跡第１群土器の位置付けをより理解し易くする意味も含め，今までの比較作業の成果として，以下に杯の形態変遷を追及した表を記載する。これは，いくつか考えられる系列の中で，具体的資料をもって追える流れの可能性を示したものである。

第５表　杯形態変遷試案（第61図参照）

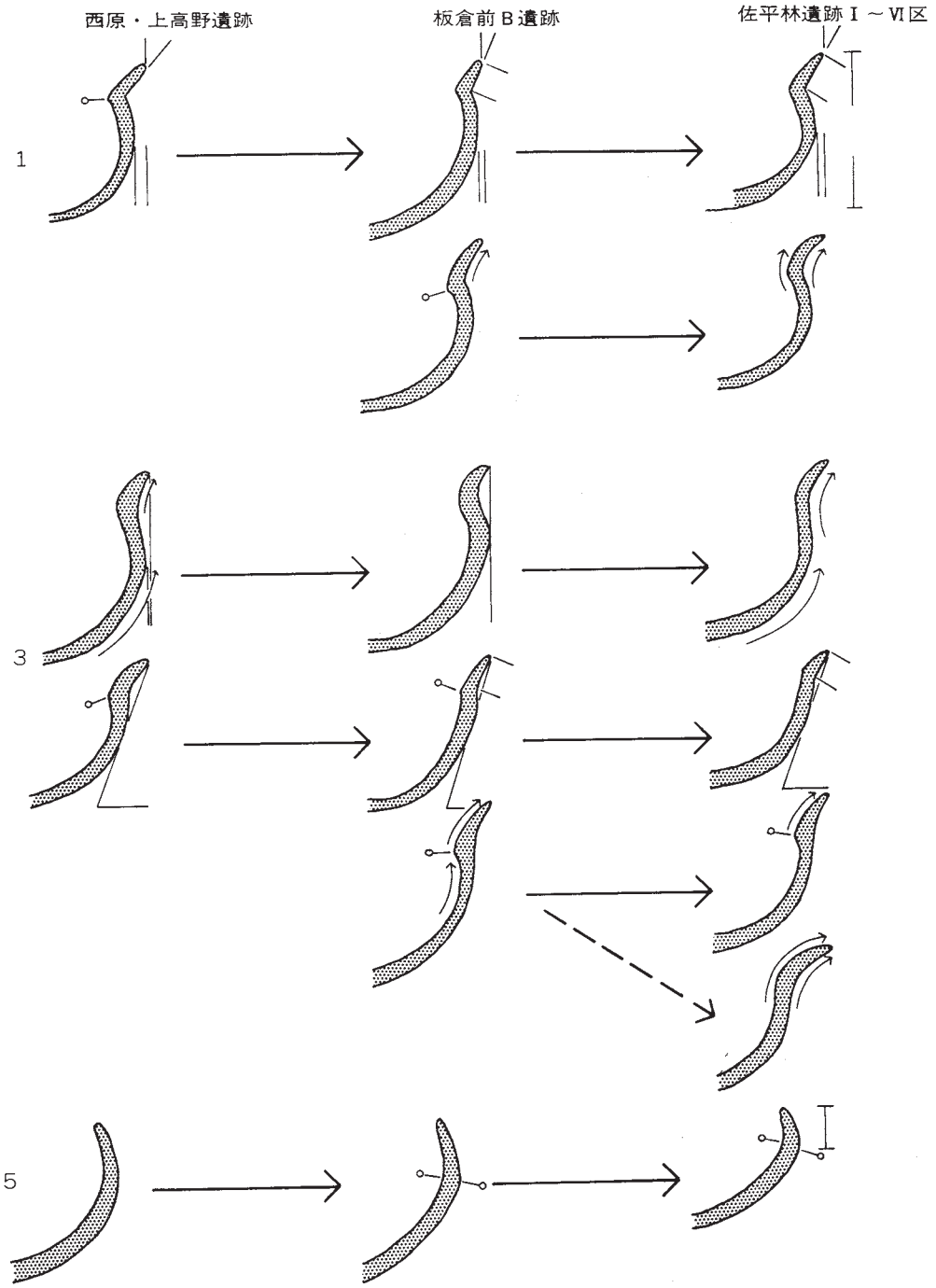
1．西原ＡⅠ・上高野Ⅲ→板倉前ＡⅠ→佐平林ＡⅠ・ＡⅢ

2．上高野Ⅳ→？→佐平林ＡⅡ（？）

3．西原ＡⅢ・上高野Ⅱ→板倉前ＡⅢ→佐平林ＣⅡ・ＤⅠ・ＥⅠ
　　→佐平林ＥⅡ（？）

4．西原ＢⅠ・ＢⅡ→？→佐平林ＢⅡ

5．上高野Ⅴ→板倉前Ｃ→佐平林Ｆ



第61図　杯形態変遷模式図

上表に従って，各関係を概観してみよう。１番目は，体部上半が張りをもって膨らむタイプであるが，新しくなるにつれ，体部が浅くなり，口縁部が長く外反してゆく。板倉前ＢのＡⅠ類の段階は最も体部に張りをもち，括れ部内面の稜も顕著である。しかし，その中に口縁部が長めに外反するきざしが見えてくる。

２番目は，佐平林Ⅰ～Ⅳ区６号住居跡出土のＡⅡ類へ変化する過程の存在を予想したものである。体部上半の強い張りと外反する口縁部を有するが，括れ部に稜はつくらない。このようなタイプは６号住居跡出土例のように広口のものばかりではないだろう。

３番目の系列は最も出土数が多い。体部上半で外側に張り出さず，口縁部が短く外傾・外反するものである。上高野・西原の段階では，このタイプが最も多く，斉一的な様相を強く持っている。その影響は板倉前Ｂにまで及んでいるが，この頃から，括れ部内側に厚めの稜がつくられ，口縁部が長く外反するものが現れ，佐平林ＥⅠ類などへ変化してゆく。その他，体部下半の膨らみが強く，括れが弱いものは佐平林ＣⅡ・ＤⅠ類などへ変化してゆくものと考えられる。佐平林ＥⅡ類は，このような系列から生ずるタイプではないだろうか。

４番目の口縁部が直立するタイプは，佐平林でＢⅡ類とされ，１点しか出土していない。新しい時期になると数少なくなるのかも知れない。

５番目は，体部から口縁部にかけて内彎するタイプである。板倉前Ｂの段階から，内彎に移る際に屈曲状になる傾向が出てくる。

他にもいくつかの類型が存在するが，関係の確証が得られず，省くことにした。

今まで述べてきた杯の変遷試案からすると，板倉前Ｂ遺跡第１群土器の杯のグループは，西原・上高野資料と比較した場合，新しい要素が現れたり，佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器へ移行する要素への変化がみられ，より後出的な様相を呈している。しかし，その素地には，西原・上高野資料の特徴が濃厚に影響している。

杯以外の資料では，西原・板倉前Ｂ遺跡出土の甑は，長胴化したものの中で古い様相を呈している。甕は，佐平林Ⅰ～Ⅳ区３・４号住居跡出土のＢ・Ｃ類に近い形態がみられる。しかしこのような形態は，西原・上高野の段階に既にその素地が形成され，徐々に変化してゆくものと考えられる。

総合的にみれば，板倉前Ｂ遺跡第１群土器は，西原・上高野資料が属する時期のなかでも新しい方に位置し，その後に佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器が現れるものと考えられる。

佐平林Ⅰ～Ⅳ区第１群土器の段階になると，前に掲げた表に載せられている各類型の他に，さらに多様な形の杯が出現する。そのなかでも最も特徴的な類型は既に述べたＢⅠ類である。この土器群以後に内面黒色処理の普遍化がみられる。そして，そこに存在する各器種の類型がほぼあらわれた段階として当土器群が位置付けられ，ひとつの変化を画する型式としてみなされよう。

次いで，西原遺跡第１群土器を中心として，主に東北地方南部の土師器型式編年に対する位置付けを考えてゆくことにする。

西原・上高野両遺跡の土師器の組成をみると，いわゆる南小泉式として位置付けられている資料に類似する。南小泉式は・宮城県南小泉遺跡出土の土師器の中で，関東地方の和泉式に類似する土器を標式として提唱された型式である。しかし，このタイプの土器が住居跡などに伴って，明らかな組成として報告された例は非常に少ない。

宮城県では・岩切鴻ノ巣遺跡第１・２号住居跡出土例が明らかな組成としてとらえられ，福島県内では，白河市南堀切遺跡の資料が住居跡内の一括資料の可能性があるのみである。また，この時期の土師器は，祭祀遺跡より石製模造品を伴って出土する傾向がある。宮城県富沢窯跡，福島県国見町矢ノ目遺跡のそれぞれの出土状態がそうである。

岩切鴻ノ巣遺跡第１号住居跡からは，西原杯ＡⅠ類・ＢⅡ類・壺Ａ類や，上高野杯Ⅲ類に類似する資料が出土している。さらに，同遺跡包含層からは西原杯ＡⅢ類･Ｃ類，上高野杯Ⅰ・Ⅱ類･高杯などに類似する例も出土していることも付け加えておきたい。また，富沢窯跡の一括出土遺物の中に含まれている土師器杯の中には，西原杯ＡⅠ類，上高野杯Ⅰ・Ⅲ類に類似する例が存在している。

南小泉式の特徴を最もよくあらわしている器種の中に，高杯がある。上記の各遺跡出土の高杯を観察すると，脚部が中膨らみ状を呈するグループとそうでないグループとに分かれる。南小泉･南堀切各遺跡出土資料などは前者の例であり，岩切鴻ノ巣・矢ノ目各遺跡出土資料は後者に含まれる。ちなみに，関東地方では，後者のタイプに多くの杯を伴っているグループは，前者と比較して後出的に位置付けられているようである。

ここで，上記の観点から南堀切遺跡出土資料について考えてみることにする。当遺跡は，1962年，２×3.5mの狭い範囲のトレンチ調査が行われている。報告によると，「驚くほど多量の土器の出土と，２ケ所の柱穴・焼土など」の存在が検出されている。おそらく，狭いトレンチであったため，住居跡のプランを把握せぬまま一括資料を掘り当ててしまった可能性が強い。出土遺物をみると，脚部が中膨らみで屈折して裾が広がるタイプの高杯と共に，朝顔形の広く開く口縁部をもつ，いわゆる坩形の壺，複合口縁の甕，揚げ底気味の平底で球形の体部と短く外反する口縁部を持つ椀形の土器などが出土している。これらの器種は，関東地方でも，和泉式の古い段階とされる組成のなかに類例が認められる。

南堀切遺跡出土の各器種のグループと，杯の多様化・高杯の変化・長胴の甑をみるグループとは時期的にも分離される可能性が強い。前者のグループにみられる器種は，南小泉遺跡に多く出土している。しかし，これは明確に住居跡に伴って発掘され，報告された例をみない。後者のグループには，岩切鴻ノ巣遺跡１・２号住居跡，富沢窯跡一括遺物，矢ノ目遺跡一括遺物など，出

出土状態の明らかな例が多い。また，氏家和典が引田式の中に含めた，引田遺跡出土の資料もこの後者のグループに入るものであろう。それぞれの新旧関係を述べれば，前者は後者よりも古く位置付けられよう。

西原・上高野各遺跡の土師器組成は，上記の考え方からすれば，南堀切遺跡資料より時期的に降るものとされよう。しかし，南堀切遺跡資料のグループの直後に位置するというのではなく，杯の形態などを観察すると，間に介在するタイプが予想される。

現在の段階では，南小泉式を型式的に分離するには根拠が貧弱であるが，既に述べた分類により，ここで，南小泉・南堀切遺跡資料を含めて南小泉式第１段階とし，それ以降の西原遺跡第１群土器・上高野遺跡２号住居跡出土資料などのグループをもって南小泉式第２段階として，今後の研究に備えたいと考える。

南小泉式の第２段階は，各遺跡出土資料をみると，さらに新旧関係が認められるようである。岩切鴻ノ巣遺跡第１・２号住居跡出土資料や，それに類似する同遺跡遺物包含層から出土している杯の中には，西原杯ＡⅠ・ＡⅢ・Ｂ・Ｃ類に類似するものの，より前出的な要素もみいだされる。たとえば，底部が平底または上げ底風平底を呈するものや，括れが鋭く，口縁部が短く外傾する形態などは，比較的古い要素と考えられる。さらに杯のみでなく，同じく岩切鴻ノ巣１号住居跡出土の小型壺や杯部下端が外側に張り出す高杯，倒卵形の長胴を呈し鋭い括れ部を有する甕，把手付きの長胴の甑などは，西原や上高野資料の組成に比べて前出的な様相を呈しているといえよう。

次いで，板倉前Ｂ遺跡第１群土器は，南小泉式第２段階の中でも，最も新しい時期に位置する可能性が強い。ここで，今までの検討の結論に変えて，既述の関係を序列として並べると下のようになる。

〔南小泉式第１段階：南堀切遺跡資料・南小泉遺跡資料の一部〕→〔南小泉式第２段階：（岩切鴻ノ巣遺跡１・２号住資料・同包含層資料の一部・矢ノ目遺跡資料→西原遺跡第１群土器・上高野遺跡２号住資料→板倉前Ｂ遺跡第１群土器）〕→佐平林式

最後に，西原遺跡第１群土器を中心として，実年代を検討してゆく。検討の資料としては，上高野遺跡２号住居跡および佐平林遺跡Ⅵ区４号土坑出土の須恵器杯がある。上高野遺跡２号住居跡出土の須恵器杯は，1966年に報告された『陶邑古窯址群Ⅰ』に記載されている編年の第Ⅰ期に含まれる可能性が強い。さらに，体部上半部に張りをもち，受部内面には顕著な屈曲が見られず，口縁端部が舌断面状を呈する形態をもつことや，口縁部が内傾するという特徴は，ＴＫ216窯跡出土資料の中に類例が認められる。しかし，上高野２号住居跡出土例の１点のみでは確かな比定は困難である。また，佐平林Ⅵ区４号土坑出土の杯は，それよりやや後出的な形態である。

以上の検討に基づけば，上高野２号住居跡資料は，５世紀後半に位置付けられる可能性が強いといえるだろう。さらに西原遺跡第１群土器に対しても，同様の可能性が与えられよう。

２．第２群土器の編年的位置づけ

６号住居跡より杯１点，12号住居跡より甕破片が出土している。杯はロクロを使用せず，器高が低く丸底を呈するものである。外面はケズリ調整が顕著にみられ，口縁部にやや雑な感じのヨコナデが観察される。内面はヘラミガキが施され，黒色処理されていたと思われるが，二次的な焼成を受けてとんでいる。甕はロクロを使用せず，やや球形を呈すると思われる胴部の破片で外面には１㎜～２㎜の間隔を持つ粗いハケメ調整がみられ，体部下半部にあたると思われる部分にはケズリ調整もみられる。内面には広い単位のナデ調整がみられ，全体的にみて雑なつくりの土器である。

杯はその特徴から国分寺下層式に比定されるものであるが，内外面に段が形成されないことや外面においてケズリ調整が主となっている点などから，国分寺下層式においても後半期にあたるものと思われる。甕については破片であるために，明確にその時期を捉えることはできないが，間隔のある粗いハケメは，佐平林遺跡Ⅴ区１号住居跡より出土しており，奈良時代の年代が与えられている。

以上のように第２群土器は，点数が少ないため年代について限定はできないが，８世紀代のものと考えておきたい。

３．第３群土器の編年的位置づけ

３・５・８・９・10・11号住居跡より出土したロクロ成形による土師器杯を主体とするグループである。杯に関しては再調整，切り離し痕の有無によって大きく４類に分類され，法量によってさらに若干の細分ができる。甕に関してはロクロ使用，未使用によって２類に分類され，形態からさらに細分することができる。なお分類にあたっては，全体の器形が判断できるものだけにとどめて行うことにする。

第６表　第３群土器分類表

(杯)

ロクロを使用したもので，再調整技法，切り離し痕の有無によってＡ～Ｄの４類に分類される。

Ａ類　体部中央または下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリを施したもので，器高の高いものA_1類と低いものA_2類に細分される。（A_1類：９号住３，10号住１，A_2類：５号住１・２・３，８号住２）

Ｂ類　体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施し，底部中央を手持ヘラケズリするものである。（９号住２）

Ｃ類　体部下端から底部全面に手持ヘラケズリを施したものである。（３号住２）

Ｄ類　体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリ再調整を施し，底部中央に回転糸切り痕を有するものである。大型のものD_1類と小型のものD_2類に細分することができる。（D_1類：８号住１，D_2類：３号住１）

（甕）

ロクロ未使用のものと，ロクロ使用によるものの２類（Ａ・Ｂ）に分類することができる。

Ａ類　ロクロを使用せず，最大径を口縁部に有する長胴の甕である。ハケメ調整主体のものとケズリ調整主体のものがある。（３号住４・５）

Ｂ類　ロクロを使用し，最大径を口縁部に有する長胴甕B_1類と，体部に最大径を有する肩の張ったものB_2類がある。B_1類にはケズリ，ナデ調整主体のものと，タタキを有するものがある。（B_1類：５号住４，３号住３，B_2類：９号住４）

次いで，各住居跡での共伴関係から，分類した土器の組み合わせを考え，さらに須恵器との関連から年代についての考察を行いたい。

杯A_1類は10号住居跡において，回転ヘラケズリ後体部下端を軽く手持ヘラケズリする須恵器杯と，体部下端に明瞭な稜を有する須恵器高台付杯と共伴し，９号住居跡においては，杯Ｂ類と甕B_2類と共伴している。杯A_2類は５号住居跡において，ケズリ調整を持つ甕B_1類，回転ヘラ切り無調整の須恵器杯と共伴し，８号住居跡においては，杯D_1類と土師器高台付皿と共伴している。杯Ｃ類は３号住居跡において杯D_2類，甕Ａ類，タタキを有する甕B_1類と共伴している。このことをまとめると次のようになる。

10号住居跡　杯A_1類　須恵器・回転ヘラケズリ後手持ヘラケズリ杯　稜を有す高台付杯

９号住居跡　杯A_1類　杯Ｂ類　甕B_2類

５号住居跡　杯A_2類　甕B_1類ケズリ　須恵器・回転ヘラ切り無調整杯

11号住居跡　杯A_1か杯A_2類

８号住居跡　杯A_2類　杯D_1類

３号住居跡　杯Ｃ類　杯D_2類　甕Ａ類　甕B_1類タタキ

以上のことを基に，各類，またはまとまりのある類ごとに，年代についての考察を行ってみたい。

A_1類は先にも述べたように回転ヘラケズリ後，体部下端に軽い手持ちヘラケズリを施した須恵器杯と体部下端に稜を持つ須恵器高台付杯が10号住居跡において共伴している。杯はその特徴から多賀城で分類された１ｂ類に比定されるものと考えられる。体部下端に稜を持つ高台付杯は，宮城県長根窯跡，伊治城跡，亀岡遺跡などで出土しているが，形態，調整の面から比較してみた場合，伊治城跡で分類された高台杯Ⅰ類に近い要素が指摘できる。このことからすればA_1類には伊治城跡の８世紀後半～９世紀中頃の時期が与えられるが，１ｂ類杯の共伴を考えれば伊治城跡前半期の８世紀後半頃の年代が考えられよう。

A_2類は５号住居跡において回転ヘラ切り無調整の須恵器杯と共伴している。この須恵器杯は，形態，色調などの面で他の例とやや異なるものであるが，切り離し技法からみれば，多賀城分類の６ｂ類に比定されるものである。またA_2類は谷地前Ｃ遺跡13号住居跡でも６ｂ類との共伴関係が知られ，このことを考えあわせてみた場合９世紀初頭頃の年代が考えられる。

Ｂ類は９号住居跡堆積土内より出土したものであるが，底径が大きいことや，手持ヘラケズリの下に回転ヘラケズリの痕跡が認められるなど，基本的にはＡ類と同じ調整技法を用いており，年代的にもＡ類に大きく前後するものではないと思われる。

Ｃ類は３号住居跡においてD$_2$類，甕Ａ類，甕B$_1$類が共伴している。甕Ａ類はハケメ調整を主体とするものとケズリ調整を主体とした長胴のものであるが，これらは国分寺下層式によくみられる甕の特徴を備えており，８世紀代の年代が考えられる。しかし甕Ａ類は住居跡カマド袖材として用いられたもので，床面より出土したＣ類，D$_2$類，甕B$_1$類よりも時期的に遡る可能性を持つものである。また，谷地前Ｃ遺跡６号土坑においてＣ類は，多賀城分類の６ｂ類に比定される須恵器杯と共伴しているが，Ａ類などに比べ，Ｃ類，D$_2$類は再調整が省略化されたものと考えることができ，６ｂ類でも後半期の９世紀前半～後半の範疇で考えられると思われる。

D$_1$類は８号住居跡においてA$_2$類と共伴し，調整的にもA$_2$類に近いものである。しかしD$_2$類ほど明瞭ではないが，底部中央に糸切り痕を有し，回転ヘラ切り痕を持つ高台付皿と共伴していることを考えればA$_2$類の後半期からそれ以降の年代が与えられると思われる。

以上のことをさらにまとめるならば次のようになる。

A$_1$類	→	A$_2$類・Ｂ類・D$_1$類	→	Ｃ類・D$_2$類
８Ｃ後半～10号住居跡		９世紀初頭頃 ９・５・11号住居跡，８号住居跡		９世紀前半～後半 ３号住居跡

西原遺跡における変遷は上記のようになると考えられるが，ロクロ土師器全体を通して考えるならば，A$_1$類にはロクロ未使用のものを含めた，ロクロ使用土師器への過渡的なものとのからみが考えられ，D$_1$類～D$_2$類の位置には，金重谷地遺跡出土のような手持ちヘラケズリ調整を施し，底部に糸切り痕を有すものの介在または後続が当然考えられるであろうし，さらに細かい分類基準を設けることによって，年代的にスムーズな移行を捕えることができるかもしれない。しかし今回の調査では遺物の出土量が少なく，実測できたものも一部に限られたため，分類基準も遺跡内のみで通用するものである感が強い。今後さらに資料を増やして検討を進めたいと思う。

第２節　遺構について

西原遺跡の今回の調査では，竪穴住居跡群・掘立柱建物跡群・土坑群などが検出されたが，それぞれ調査区外へ，その分布範囲が広がることが予想される。したがって，遺跡全体から見れば，その一部分を調査したに過ぎず表面調査の結果でも，全体に遺物の散布が少ないため，遺跡内遺構群の中心部であるのか，縁辺部であるのかさえ把握できない状態である。このような制約された条件の中で全体のまとめをしてみたい。遺構全体を時期区分すると，不明なものが多いが以下のごとく分類される。

Ⅰ期……溝状土坑として分類した７・13～19号土坑

Ⅱ期……１・２・７号竪穴住居跡

Ⅲ期……４・６・12号竪穴住居跡，12号土坑

Ⅳ期……３・５・８・９～11号竪穴住居跡

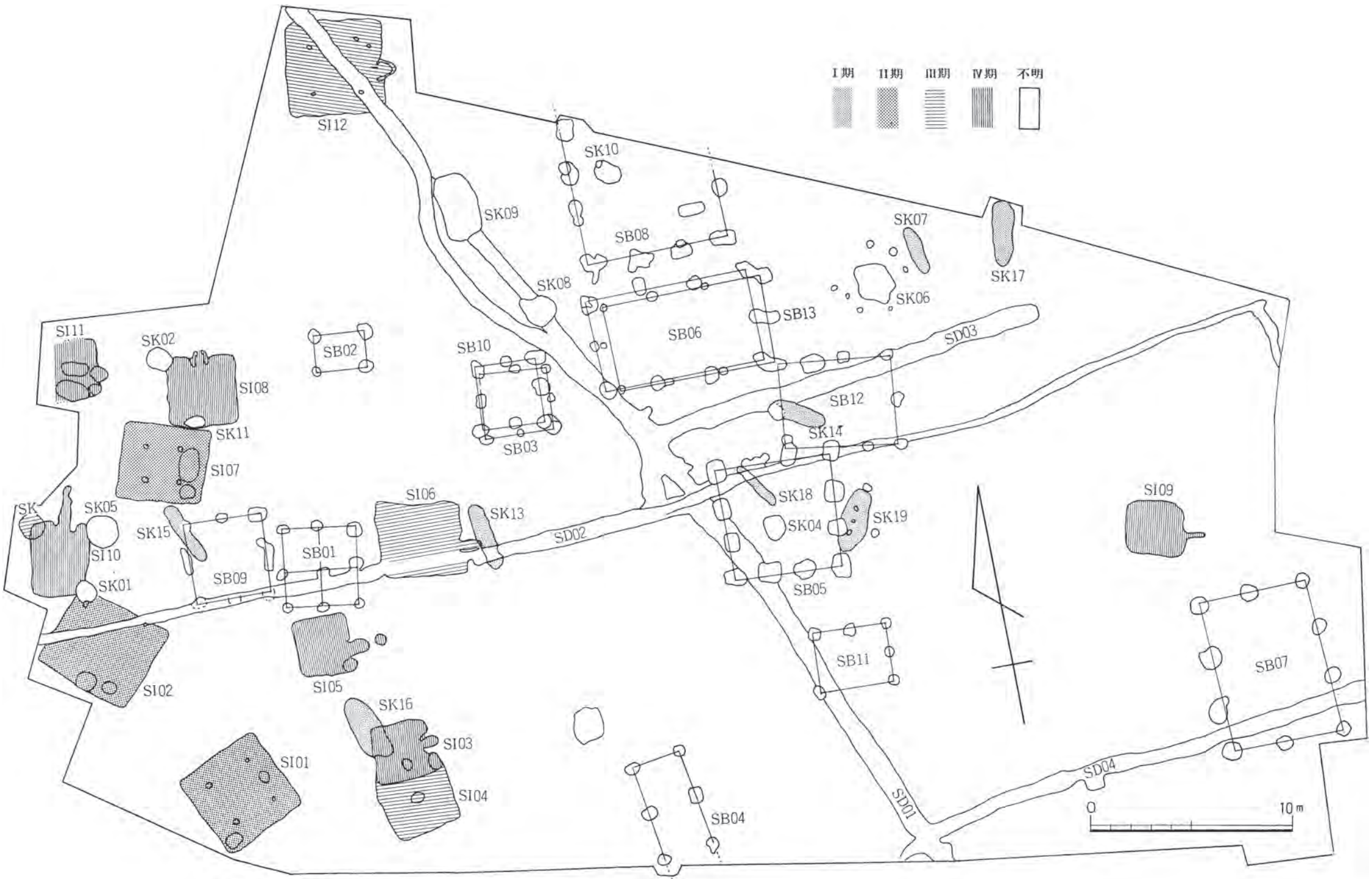
不明……１～６・８～11号土坑，１～４号溝跡

以上のように分れるが，竪穴住居跡・土坑の中には，床面遺物などの時期判定資料に欠けるものも含まれ，遺構相互の切り合い関係や遺構内堆積土，その中に含まれる遺物・竪穴住居跡の配置・形状・カマドの形状などを考慮して最も妥当と思われる分類をした。また時期不明の掘立柱建物跡・土坑・溝跡などは，他の遺構や同類の遺構との切り合い状態，及び配置などによって，所属時期の上限・下限，相互の前後関係などがわかっているものもある。それらについては，後に述べることにする。以下時期毎にまとめを行いたい。

Ⅰ期溝状土坑として，形態的にも配置にもある程度のまとまりが見られるため，ほぼ同一時期の遺構群と考えられる。Ⅲ期以降の遺構に切られているため，Ⅱ期の遺構に伴うか，あるいはそれ以前のものと言うことができよう。しかし，遺構内の堆積土の状態，あるいはその中にⅡ期以降の遺物が全く含まれないということから，より古く位置付けられる可能性が強いため，Ⅰ期として分類した。

これらの土坑は，形状･堆積土の状況などを観察すると，いわゆる「溝状土坑」「Ｔピット」「溝状ピット」あるいは単なる「土坑」として従来報告されているものの仲間として捉えられよう。今回の調査では，この類に属するものは８基検出され，位置関係を見ると，Ａグループ（13・15・16号土坑）とＢグループ（７・14・17・18・19号土坑）との２つのグループに分かれる。Ａグループは調査区西側，Ｂグループは中央より東側に分布し，Ｂグループはさらに長軸の傾きによって，７・14・18号土坑と17・19号土坑とに分かれる。方位は第１表に示したとおりである。地形的に見ると，調査区の西部と東南部では遺構検出面のレベル差が約50㎝あり，西部が高く東南部から南部にかけて下っている。地形の傾きに対して，土坑の長軸が傾斜の方向を向くのが６基，傾斜の方向に直交するのが２基である。次いで土坑の形態から見ると，ａ～ｃ類に分類することができた。ｃ類のみはａ・ｂ類に比べてややかけ離れた形であるが，１基だけなので溝状土坑として取り扱った。

これらの土坑の性格については，現在「落し穴」「墓壙」その他の説があるが，「落し穴」説が最も有力な説であるように見受けられる。その中でも当遺跡のものは，その形態から見ると，ｃ類を除き北日本に現在検出例の多い，いわゆる「溝状土坑」の範疇に含まれるものである。今井康博の分類によると「Ⅰ形態」（今井康博1976），今村啓爾のＥ型（今村啓爾1973）に含まれるであろう。この形態の土坑は，前述のように北日本，特に岩手・北海道等に報告例が多く，その



第62図　遺構時期区分図

所属時期は，縄文早期末あるいは縄文中期～後期という位置付けが行われているが，本遺跡では伴出遺物もなく，他の遺構の切り合い関係から判断すると，奈良時代以前ということしかいえない。この種の遺構を「猟場における落し穴」という説に従えば，周辺の遺跡に関連が求められよう。そこで周辺２㎞以内で現在確認されている遺跡を見ると，ここで言うⅡ期以前では先土器時代，縄文時代前期前葉・後期・晩期，弥生時代，古墳時代にそれぞれ属する遺跡が所在している。その中で古墳時代に属する遺跡は多いが，他はいずれも１～２遺跡程度である。表面調査によるものがほとんどなので，詳細は不明である。

Ⅱ期　古墳時代中期後半に位置付けられる土師器を伴う１・２・７号住居跡である。これら３軒の住居跡は調査区の西側部に集中して確認され，ほぼ等間隔の距離を隔てて所在している。３軒ともプランは整った方形を呈し，４本の主柱穴は対角線上にあり，対角線の交点を中心として描いた円周上にいずれも乗っている。カマドは認められず，住居跡の中央部から大きく片寄った位置に床面を掘り窪めて地床炉を有する。このうち１号・７号住居跡においては，炉が北寄りの主柱穴を結んだ線外に存在する。さらに，その反対側の南東隅に貯蔵穴状のピットを有することは，炉と貯蔵穴状ピットとの関連性はまだ薄いものと考えられる。床面積は20㎡前後を測り，本遺跡内で検出された竪穴住居跡の内では上位を占めるものである。

Ⅱ期とⅢ期以降の竪穴住居跡の違いはカマドの付設である。さらに，Ⅱ期住居跡と比べると，Ⅳ期の住居跡に見られるカマドと，すぐ脇にある貯蔵穴状ピットとの一体化による厨房スペースの分離などという相違も指摘されよう。

関東地方においては，和泉期の後半に至って初期的なカマドが住居跡に付設され，鬼高Ⅱ式期において各住居跡にカマドが見られるようになることが報告されている。このことは，柿沼によって和泉式期後半～鬼高期に関する論考の中でも述べられており，甑形土器の機能上の変化がカマドの出現と密接な関係を有していることを指摘している（柿沼幹夫1976）。この中ですでにカマド付設している埼玉県駒堀遺跡出土の甑形土器（和泉Ⅱ式）は，本遺跡の７号住居跡出土の砲弾形をした甑形土器に類似している。これに対して埼玉県高井遺跡では「いずれもカマドが付設されず炉に留まっていたが，検出された３個の甑は和泉Ⅰ式よりも機能的に進んでいる点を看取できた」といわれ（吉川国男ほか1966），また鬼高Ⅰ式期においても住居跡内のカマドの普及率は3/4の割合であったことが報告されている。

東北南部におけるこの時期の住居跡例としては県内の上高野遺跡２号住居跡・下入ノ内遺跡・宮城県岩切鴻ノ巣遺跡１・２号住居跡がある。これらの各住居跡は，本遺跡のⅡ期と同時期か若干古く位置付けられているにもかかわらず，カマドが付設されている。特に岩切鴻ノ巣遺跡ではカマド出現の初現的なものとして捉えられている。また，上高野遺跡２号住居跡は，床面積が97.02㎡と大型で張り出しピットを有しており，本遺跡Ⅱ期より一路期新しく位置付けられる板

倉前Ｂ遺跡２号住居跡に類似する。以上の事実は，南小泉式第２段階の初期の頃から，カマドが波及しつつあり，その波及のあり方は一定でないことを示すものであろう。

Ⅲ期　ロクロ土師器以前の第２群土器を伴出する竪穴住居跡と，Ⅳ期の住居跡に切られている12号土坑が含まれる。住居跡は３軒検出されており，配置は調査区中央部に南北にほぼ並んでいる。方位も大体似通っておりカマドを持つもの２軒（６・12号住居跡）はいずれも東向きにカマドを付設している。平面形は方形で整っており，12号住居跡は今回検出された住居跡中で最も大きい部類に属するが，３軒の大きさの平均値を見るとⅡ期，Ⅵ期の中間の規模である。柱穴はいずれも主柱穴と思われるものを有するが，４本のもの（６・12号住居跡）と１本のもの（４号住居跡）がある。Ⅱ期の柱穴よりは浅く細い。カマドは煙道の長いものとそうでないものがあるが，構造はしっかりしたものである。貯蔵穴状のピットはいずれも認められなかった。全体的にみると，規模・柱穴その他の構造は，Ⅱ期とⅣ期との中間的なものと言うことができる。構築時期は奈良時代と考えられる。

12号土坑はⅣ期の住居跡に切られているが，その形態はⅣ期の住居跡を切っている他の円形土坑に類似する。しかし，土坑内堆積土・断面形など若干相違する点も見られ，あるいはⅡ期以前に含められるものかも知れない。性格機能については不明である。

Ⅳ期　ロクロ土師器（第３群土器）を伴う竪穴住居跡群で，８世紀後半から９世紀前半に位置付けられる。６軒検出され，プランは方形ないし隅丸方形に近い不整形を呈する。分布を見ると調査区の西側の住居跡集中地区に，５軒が検出され，１軒は東部に離れて位置している。これらの６軒はいずれもカマドを持つが，カマドの向きによって北向き（８・10号住居跡）と東向き（３・５・９・11号住居跡）の２方向のグループがある。住居跡の規模は，一番大きな８号住居跡でも3.40×3.20mと，Ⅱ・Ⅲ期の住居跡に比べてかなり小さく，また，細長い形のものが現われてくる（５・10号住居跡）。平面プランは不整形のものが多く，雑な造りが一般的である。各期別の竪穴住居跡の規模（平均値）は，次のとおりである。

Ⅱ期：4.49×4.18m　　Ⅲ期：3.80×3.52m　　Ⅳ期：3.14×2.80m

カマドは煙道部の発達しているもの（９・10号住居跡）と，そうでないもののグループがあるが，３号住居跡のように袖部の芯として土器を埋設するものもあるように，カマド自体の構造はかなりしっかりしたものが多い。さらに10号住居跡のように，支脚と思われる立石が住居跡周壁より外側にあるものなど，燃焼部が周壁より外側へつき出す傾向が強い。また貯蔵穴状のピットは６軒中４軒に見られるが，すべてカマドに対しては右側にある。後述するカマド位置と同様に，このⅣ期の住居跡構築の原則の１つであろう。また，柱穴と思われるピットは６軒とも不明確であり，床面は全体に軟調である。特徴を述べると以上のようになるが，全てが同時に存在したかは疑問であり，調査範囲に制約があるため分類は差し控えたい。ただ遺物の面からは，新旧関係

を伴う分類がなされている。

最後にⅢ・Ⅳ期を通じて住居跡の主軸方位とカマド位置の関係を観察することにする。住居跡でカマドのある辺の中心軸を主軸とすると，その方位が東向きの場合は，カマドは主軸上かあるいは主軸より右側，主軸が北向きの場合は，主軸近くあるいはわずかに右に位置する。他の報告を例にとると，主軸方位が北から東南向きの住居跡ではカマドが主軸上かそれより右側が一般的で，これが北から北西方向に主軸を向けた場合は，カマドが主軸の左側にくるのが原則的になるようである（柿沼幹夫1979）。当遺跡でも，カマドの向きは全て北から東南向きの間に入り，その範囲内では他の報告例の原則に合致する。

第７表　竪穴住居跡一覧表

住居 No.	大きさ(m) 長軸	大きさ(m) 短軸	床面積 (m^2)	主軸方向	カマド向き	地床炉	柱穴
01	4.44	4.38	19.45	N24°W		東辺側主柱穴間	４本
02	4.83	(4.41)	21.30	N42°E		南西辺側	
03	2.92	2.76	8.06	N 4°50′W	東辺		
04	(2.59)	(2.54)	6.58	N11°W			１本
05	2.84	2.67	7.58	N 2°30′W	東辺		
06	4.02	3.47	13.95	N 6°20′E	東辺		３本
07	4.21	3.76	15.83	N19°30′E		北辺側主柱穴間	４本
08	3.40	3.20	10.88	N 8°E	北辺		
09	2.87	2.68	7.69	N11°40′E	東辺		
10	(3.60)	2,68	9.65	N15°30′E	北辺		
11	(3.20)	—	—	—	東辺		
12	(4.80)	4.56	21.89	N 7°E	東辺		４本

注　カッコ内の数字は現存の長さ，もしくは面積をあらわす。

時期不明の遺構　掘立柱建物跡はその性格上時期を決定できない難点があり，本遺跡において検出された13棟の場合も，時期を判断するための出土遺物などもみられず不明である。これらをふまえて遺構の切り合いおよび方位・配置などから類推すれば下記のようになる。

方位を基準とすると，磁北に対して①０°～２°以内が，５・６・11・13・18号建物跡，②３°～６°以内が１・２・７号建物跡，③９°～10°以内が，３・４・10号建物跡，④30°以上が12号建物跡と，４群に分類される。このうち６号・８号は隣棟間隔が狭く同時存在の可能性は薄い。また，３号・10号建物跡と６号・13号建物跡との二時期にわたる建替えによる関連性を含めて再構成すると，①３・５・６・９・10・11・13号建物跡，②１・２・７号建物跡，③４・８・12号建物跡

となる。このうちの①群の建物跡は調査中央部から西側にＬ字形に配されている。また竪穴住居跡との切り合い関係が全く見られないことは，それまでの竪穴住居跡を主とする生活の場から違った場への移動，またはⅢ期・Ⅳ期の竪穴住居跡群との同時存在の可能性も考えられる。畿内では掘立柱建物跡の集落は７世紀にすでに成立しているとのことである。しかし本遺跡では９世紀頃の竪穴住居跡がまだ，存在しており，今後この竪穴住居跡と掘立柱建物跡との相互関連も追求せねばならないものであろう。

Ⅰ期・Ⅲ期に含まれるもの以外の土坑（１～６・８～11号土坑）については，Ⅳ期の住居跡を切っているものがいくつかあるために，第３群土器の時期（平安時代）以降に位置付けられる可能性が強いが，溝跡に切られていることや堆積土の観察からすると，Ⅳ期の住居跡ともさほどの時間差は感じられない。これらの10基の土坑は，形態によって大きく２つの類別が可能である。すなわち，円筒形で深いもの（２・５・８号土坑）と，円形・楕円形ないしは不整形の平面プランで，断面形が鍋底形や擂り鉢形を呈し浅いもの（１・３・４・６・９～11号土坑）とに分かれる。円筒形のグループは，Ⅲ期に属した12号土坑にきわめて類似している。分布は，３・４・６・８・９号土坑のように住居跡群から離れているものと，そうでないものとがある。性格・機能については明らかにできなかった。

第８表　掘立柱建物跡一覧表

建物跡	方　位	規　模	間　尺	面　積	備　考
１号	Ｎ 4°50′Ｅ	２間×２間　(3.68×3.98m)	６　尺	14.65m^2	
２号	Ｎ ６°Ｅ	１　×１　(1.78×2.33　)	６～８	4.15	束柱有り倉庫か
３号	Ｎ10°Ｅ	２　×２　(3.3　×3.3　)	５～６	10.89	10号に重複
４号	Ｎ 9°30′Ｗ	２　×１？　(2.52×4.72　)	８		
５号	Ｎ ２°Ｅ	３　×３　(5.4　×5.4　)	６	29.16	
６号	Ｎ ２°Ｅ	３　×２　(8.0　×4.56　)	７～８	36.48	13と重複
７号	Ｎ 3°40′Ｅ	２　×３　(7.68×7.44　)	８	57.14	
８号	Ｎ ０°	３　×３？	７～８		
９号	Ｎ 1°30′Ｅ	２　×２　(3.84×3.54　)	６	13.59	
10号	Ｎ10°Ｅ	２　×２　(3.2　×3.2　)	５～６	10.24	３号と重複
11号	Ｎ 1°15′Ｅ	１　×１　(3.62×2.89　)	９～12	10.46	
12号	Ｎ30°50′Ｅ	３　×２　(3.02×4.95　)	６～８	13.86	５・６号より旧
13号	Ｎ ２°Ｅ	３　×２　(2.1　×4.0　)	４～５	8.4	６号と重複

参　考　文　献

氏家和典・大場恒一　1954「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史８』東北史学会
氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』東北史学会
鈴木敬治他　1962『二十万分の一福島県地図説明書』福島県商工労働部開発課
田辺昭三　1966『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
藤田定市　1966「白河市南堀切遺跡の土師器」『福島考古７号』福島考古学会
桑原滋郎　1969「ロクロ土師器について」『歴史38』東北史学会
阿武隈川第四紀研究グループ　1968「須賀川―白河付近の第四系」『第四紀№13』第四紀総合研究会
吉川国夫他　1969『高井遺跡』埼玉県遺跡調査会
佐々木茂槙・桑原滋郎　1971『長根窯跡』涌谷町教育委員会
古泉　弘　1972「函館空港遺跡群第４地点第81・84号住居址の調査」『先史８』駒沢大学考古学研究会
今村啓爾　1973『霧ケ丘』霧ケ丘遺跡調査団
岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一他　1974「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告（Ⅰ）（宮城県文化財調査報告書第35集）』宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
田中正能他　1974『太田遺跡（郡山市文化財調査報告書第20集）』郡山市教育委員会
渡辺泰伸他　1974『富沢窯跡』古窯跡研究会
石野博信　1975「考古学からみた古代日本の住居」『家』社会思想社
木本元治・寺島文隆　1975「金重谷地遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』福島県教育委員会・日本道路公団
高橋一夫　1975「和泉・鬼高期の諸問題」『原始・古代社会研究（２）』校倉書房
宮城県教育庁文化財保護課　1975『宮前遺跡（宮城県文化財調査報告書第38集）』
小笠原好彦　1976「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
柿沼幹夫　1976「甑形土器の一考察」『埼玉考古15』埼玉考古学会
高倉敏明　1976「古墳時代の土師器を中心として」『福島県における土師器編年試論』福島県考古学会
宮沢寛・今井康博　1976「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題――いわゆる落し穴について――」『調査研究集録』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
笹森健一他　1978『川崎遺跡（第３次）・長宮遺跡発掘調査報告書』上福岡市教育委員会
仙台市教育委員会　1978『史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報』
仙台市教育委員会　1978『南小泉遺跡範囲確認調査報告書（仙台市文化財調査報告書第13集）』
玉川一郎・大越道正　1978「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討―特に２号住居跡出土の杯形土器を中心として」『しのぶ考古７』しのぶ考古学会
根本信孝　1978『南堀切・高山・道南北試掘調査概報』白河市教育委員会
福島県教育委員会　1978『伊達西部条理遺構発掘調査概報Ⅱ』
宮城県多賀城跡調査研究所　1978『伊治城跡Ⅰ（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊）』
目黒吉明地　1978「佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
柿沼幹夫　1979『下田・諏訪（埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集）』埼玉県教育委員会
久保哲三他　1979『権現山北遺跡』宇都宮市教育委員会
高木和夫・大越忠士1979「板倉前Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
日高努・山内幹夫　1979「佐平林遺跡Ⅵ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第

74集)』福島県教育委員会・(財) 福島県文化センター
東北学院大学考古学研究部　1979「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故12』
福島県教育委員会　1979『下入の内遺跡現地説明資料』

第2編　佐 平 林 遺 跡（Ⅶ区）

遺跡記号　ＨＩ－ＳＢⅦ
所 在 地　西白河郡東村大字上野出島字佐平林
時代・種類　奈良・平安時代－集落跡，中世
調査期間　昭和54年６月18日～７月18日
発掘担当者　目黒吉明
調 査 員　日高　努　　大越道正
　　芳賀英一　　安田　稔
協力機関　東村教育委員会

第１章　調　査　経　過

第１節　位　置　と　地　形

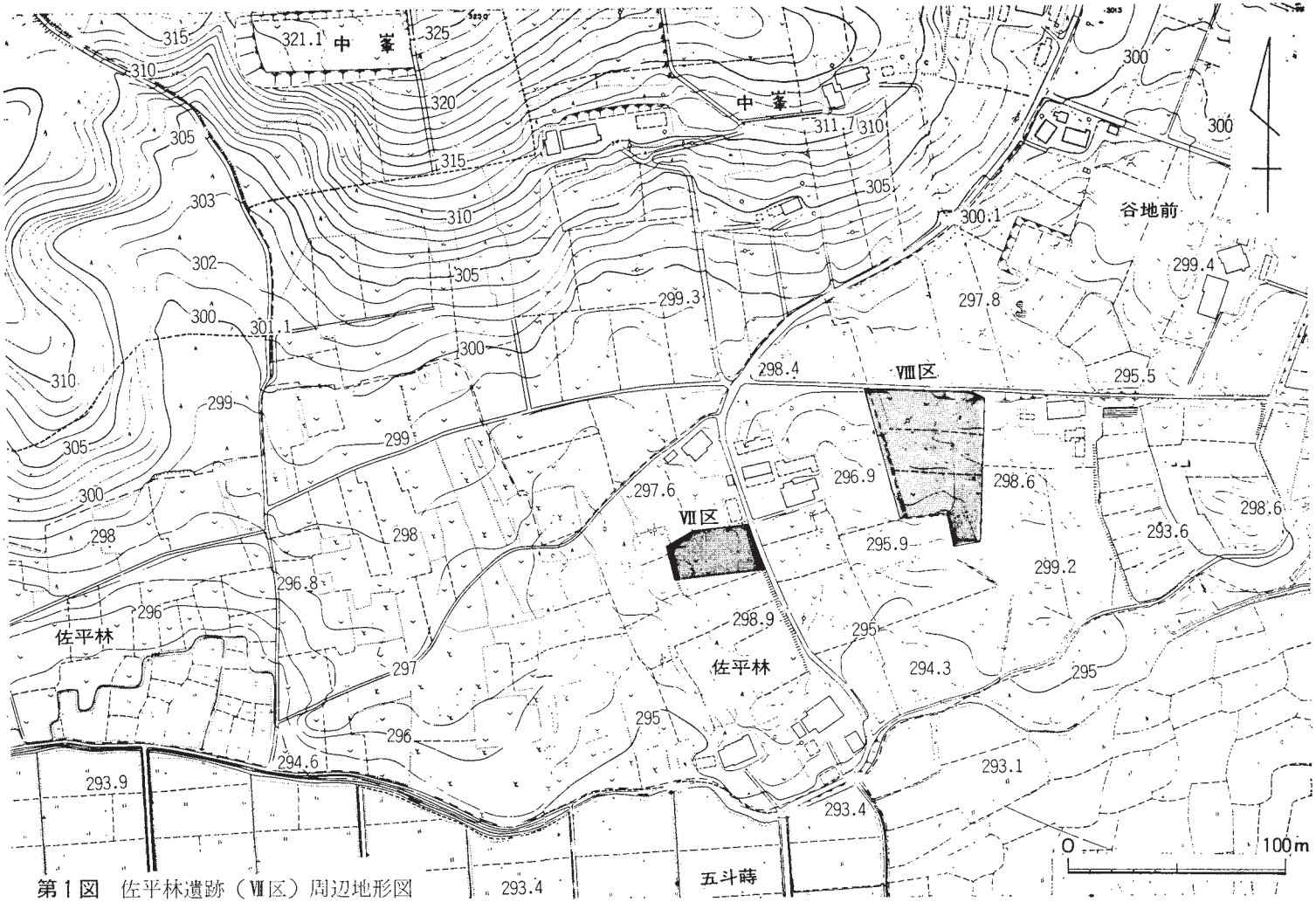
佐平林遺跡は，西白河郡東村大字上野出島字佐平林を中心として所在する遺跡である。その面積は約80,000㎡の広がりをもち，東西に長い不定楕円形状を示している。南面には東西方向に東流する矢武川の流域があり，背面には標高約320m前後の丘陵が連なっている。この丘陵から約1.5㎞を隔てて，阿武隈川が東流し，やがて石川町付近から北流する。遺跡の立地する丘陵麓部は300m前後の標高を持つ平坦地で，南へ緩傾斜しており，この緩斜面には矢武川の流路に直交する南北方向の小規模な谷地が形成され，矢武川の浸蝕作用とあいまって出入のある段丘地形が形成されている。佐平林遺跡も矢武川北岸の沖積面に続く浸蝕谷によって形成された舌状の緩丘陵が三箇所ほど南へ張り出している。

佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区は東側の舌状の丘陵に位置し，同じく佐平林遺跡Ⅴ区は中央舌状丘陵に位置している（母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ）。また，佐平林遺跡Ⅵ区は西側の舌状丘陵の南部分である（母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ）。当佐平林遺跡Ⅶ区は，同遺跡Ⅴ区の北辺に接続する遺跡部分を占めている。現況では東側と南側の二面は道路で区画され，西側は道路面より50㎝ほど低い畠で区画され，道路面との比高約２ｍをもつ平坦な長方形の台状地となっている。調査面積は東西約40m，南北約20mの約700㎡の部分である。

調査区内は，30㎝程の厚さをもつ耕作土の直下が地山のロームとなっており，遺構の検出面は浅く，竪穴住居跡等も床面とわずかな壁部分を残して削平されている。南辺は舌状台地を，ほぼ垂直に切り落して道路が作られ，急傾斜の法面は上辺に黒色土を残して，全面にロームが露出している。東側の斜面にもロームが露出しており，斜めに削り取られているように観察されたが，調査を進めるにつれて，法面からも遺構が検出されたことから，後世の地形変化は遺構面を一部残して行われていることが確認された。西側は台地面より一段低い畑になっているが斜面からの遺構は検出できなかった。前年度に行った試掘調査の結果から，一段低い畑は約１ｍ程度の黒色土の堆積が知られている。北側は地目境の小さな段差を持つ境界があったが，調査区とのレベル差はほとんどなく平坦である。

第２節　調　査　経　過

昭和54年度の母畑事業の工事実施計画が確定し，その結果佐平林地区は，54年度の工事実施区



第1図　佐平林遺跡（Ⅶ区）周辺地形図

域に繰り込まれた。板倉部落から谷地前に至る直線道路は，佐平林遺跡の中央を横断して東西に延びており，この道路の南側に佐平林遺跡の三つの突出部分がある。昭和52･53年度にかけて工事施工前に佐平林遺跡Ⅰ～Ⅵ区として発掘調査を行ってきたが，54年度工事実施地区は，この道路北側の地域であり，道路北側の佐平林遺跡全域が含まれた。54年２月８日に県教育委員会と東北農政局母畑開拓建設事業所との間で，埋蔵文化財の保存協議が行われた。佐平林遺跡に関しては，盛土部分を多くして，削平部分を極力小さくすることで遺跡保存を計ることを基本として協議が行われ，約60,000㎡の遺跡面積のうち，佐平林遺跡Ⅶ区（700㎡）同Ⅷ区（2,500㎡）の発掘調査を行うことになった。

昭和54年度の母畑地区における調査予定遺跡は９遺跡を数え，東村だけで４遺跡５地区が予定されたため，遺跡単位の調査計画をたてるまえに，地域的にまとまりを持ついくつかのブロックに分けて，ブロックごとに調査計画を検討した。東村の遺跡については，佐平林遺跡Ⅶ区･Ⅷ区，谷地前遺跡，西原遺跡，干草場遺跡の５遺跡を一つのブロックとし，調査面積，作物の状況，作業員の配置等を考慮して，佐平林遺跡Ⅶ区を最初の調査箇所に設定した。

６月18日　重機を使用して表土排除を行う。約400㎡の表土を排除。

６月19日　午前中重機を使用，東部分から遺構検出作業を開始する。１号住居跡，１号溝，土坑２基を検出，「叶」の墨書銘をもつ土師器杯底部が出土。

６月20日　標準点を移動しベンチマークを設定する。標高299.42ｍをＢＭとする。

６月21日　遺構検出作業，１号溝の掘込み，１・２号土坑の精査，現場事務所のプレハブ設置。

６月26日　１号溝の延長の有無を確認するため西側斜面にトレンチ設定，羽口片出土。

６月29日　東斜面遺構検出作業，２号住居跡検出，１号掘立柱建物跡検出，２号住居跡より鉄製品出土。

７月に入り各遺構の精査・実測を行う。佐平林遺跡Ⅶ区の調査と併行して，谷地前遺跡・西原遺跡の調査準備を進める。

７月５日　西側斜面トレンチを掘り下げた結果，３・４号住居跡を検出。北西斜面の精査を行う。３号住居跡は４号住居跡に切られていることが判明した。

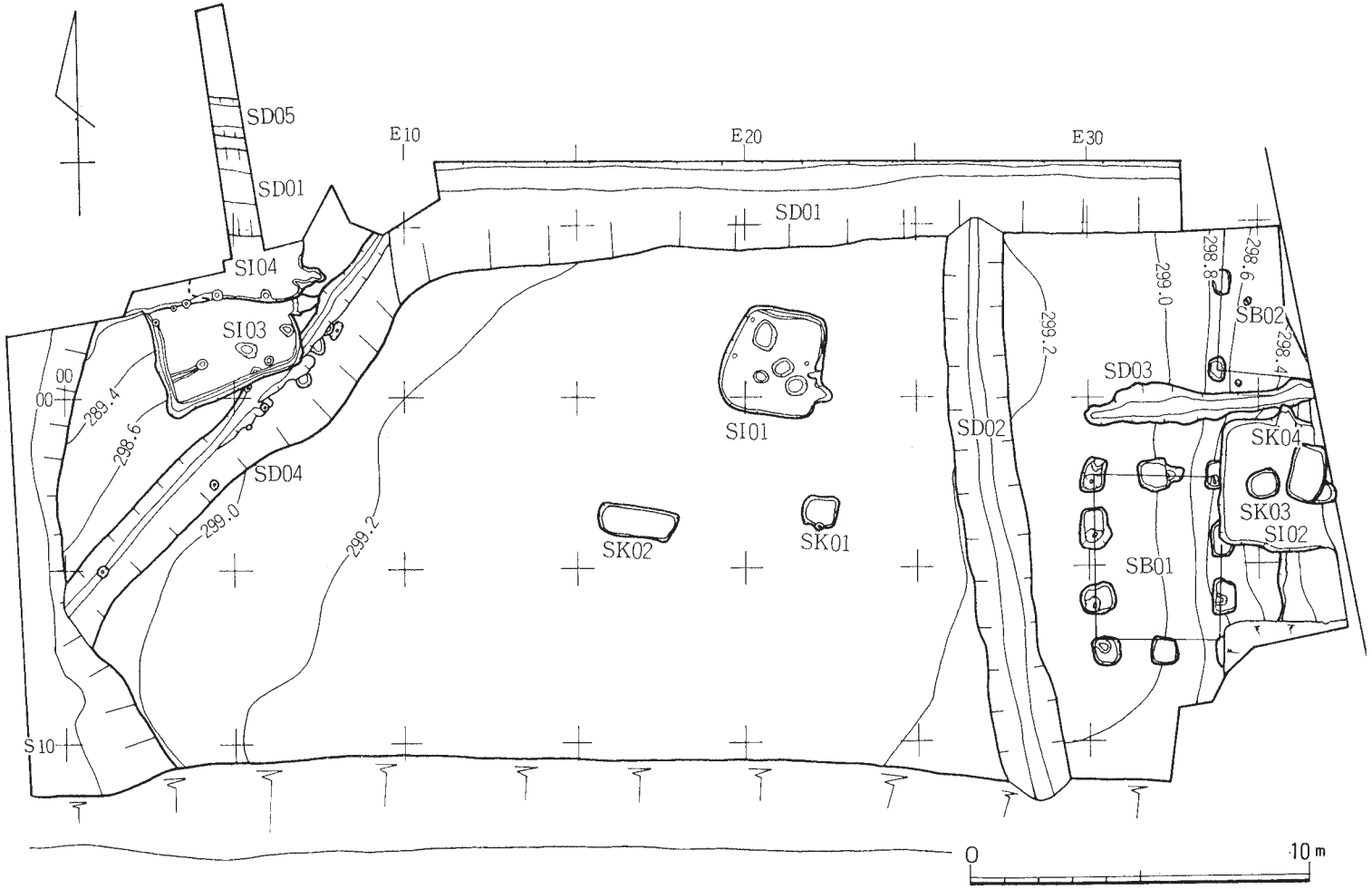
７月６日　全体図を作成する。

７月10日　３・４号住居跡カマド断ち割りを行う。３号住居跡カマドより土師器杯出土。

７月16日　３・４号住居跡平面図作成。北西斜面部分は調査を終了する。

７月17日　２号住居跡貼り床断ち割りを行ったところ，貼り床下より３・４号土坑を検出。

７月18日　３・４号土坑平面図を作成し，Ⅶ区の調査を完了する。



第2図　佐平林遺跡Ⅶ区遺構配置図

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　竪 穴 住 居 跡

調査区内において検出された竪穴住居跡は４軒である。その中で輪郭を捉えることができたものは１号住居跡のみで，２号住居跡は東側を道路によって削平され，３・４号住居跡は北側を桑の根と，溝によって撹乱されるという状況で，総じて保存状態はよくなかった。

１号住居跡　ＳＩ01

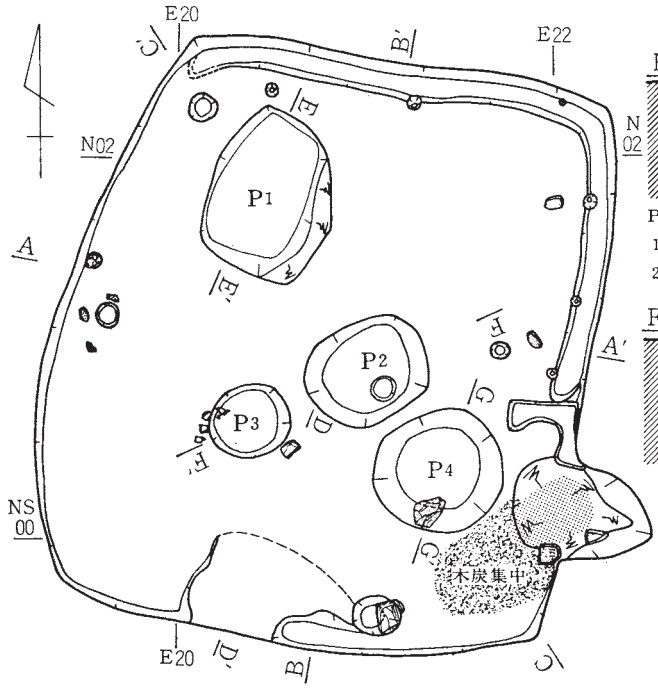
遺　　構（第３・４図，図版３・４）

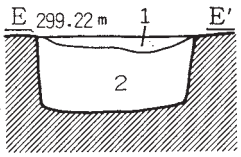
本住居跡は，発掘調査区中央平坦部やや１号溝寄りのところで検出された。検出面は，黄褐色ローム層上面であり，ローム層を掘り込んで構築されている。

住居跡プランは，東西2.8m，南北3.1mのほぼ隅丸方形を呈し，床面は一部に凹凸がみられるものの比較的堅くしまっている。南壁中央部には，黄褐色ロームを壁より床面に傾斜させて堅く貼りつけた入口部施設とも考えられるものが検出されている。壁高は約20cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。北壁北面コーナーからカマドにかけて，幅15cm，床面よりの深さ約５cmの周溝がめぐっている。住居跡内部には大小15のピットが検出されている。いずれも主柱穴と考えるには問題が残る。P_1～P_4までの大型ピットは，いずれも壁が垂直に立ち上がり，底面平坦という似かよった形状を呈するもので，覆土は人為堆積と考えられ，堆積土上層には黄褐色ローム混じりの黒色土が堅く貼りかためられている。これらのピットは遺物等の検出に乏しく，性格等は不明であるが，住居廃棄以前に構築されたものと考えることができよう。

住居跡内堆積土層は，概ね自然堆積を呈しているが，西壁寄りに焼土混じり土の投げ込み等の人為堆積が認められる。

カマドは，東壁東南コーナー寄りに壁を掘り込んで構築されている。焚口部の幅は約50cmで，燃焼部はやや窪み，緩やかな傾斜を保ちながら奥壁へ向かって立ち上がっている。底面はかなり赤変していて比較的堅い。袖の遺存状態はあまり良くはないが，左袖は粘土を袖材として「コ」の字形に，また右袖は袖心に花崗岩の切石を用いて粘土で固めて構築されている。また燃焼部やや右寄りには，砂岩の河原石を埋め込んだ支脚が検出されている。煙道はほとんど発達していないが，カマド末端部にわずかではあるが張り出した部分が認められ，緩やかな傾斜を持つ煙出し部を形成していたと思われる。住居跡東南コーナーには，カマドに接して木炭が集中して検出されている。

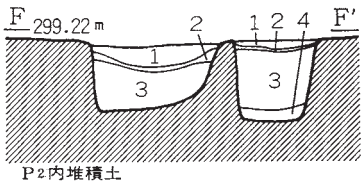




P1内堆積土

1　黒褐色土(粘性強く硬くしまる)

2　赤褐色土(ローム粒を多量含む)



P2内堆積土

1　黒褐色土(粘性強く硬くしまる)

2　灰褐色土(粘土粒を含む)

3　暗黄褐色土(ロームブロック粒を多量含む)

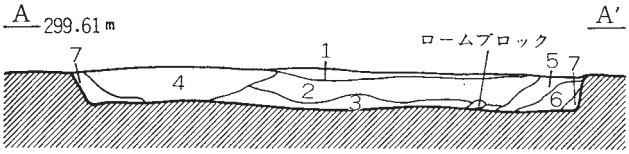
P3内堆積土

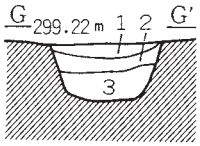
1　黒褐色土(焼土粒を少量含む)

2　灰褐色土(粘質)

3　黄褐色土(ローム粒を含み軟質)

4　黄褐色土(ロームブロックを多量含む)





住居跡内堆積土

1　暗褐色土(軟質で粘性あまりない)

2　暗黄褐色土(焼土粒とローム粒を多量含む)

3　灰暗黄褐色土(焼土粒とローム粒を少量含む)

4　暗褐色土(ローム粒を少量含む)

5　黒褐色土(焼土粒を少量含む)

6　灰黄褐色土(カマドの灰とローム粒を含む)

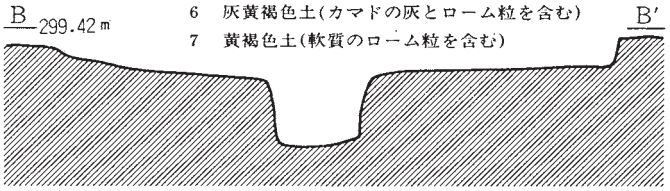
7　黄褐色土(軟質のローム粒を含む)

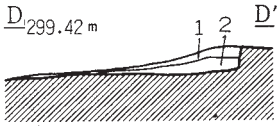
P4内堆積土

1　黒褐色土(焼土粒を少量含む)

2　灰褐色土(粘土塊を多量含む)

3　黄褐色土(ロームブロックを少量含む)

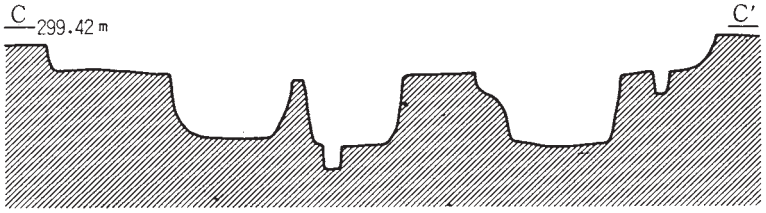




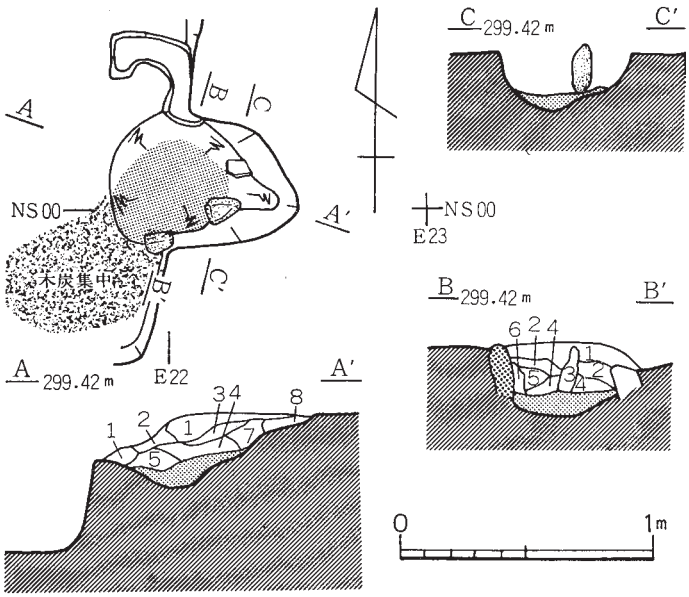
住居跡内堆積土 (D－D')

1　黄褐色土(ロームブロックを硬く貼りつけてある)

2　暗褐色土(軟質でローム粒を少量含む)

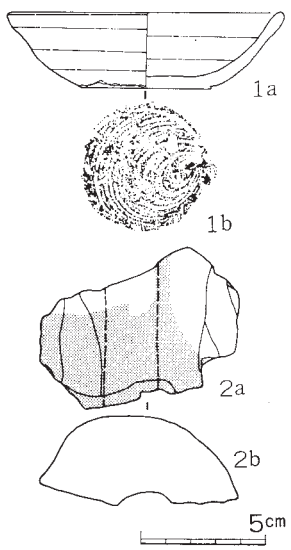


第3図　1号住居跡



カマド内堆積土
1　黄褐色土(ローム粒を含む)
2　暗褐色土(焼土・木炭を含む)
3　灰赤褐色土(焼土・木炭を多量含む)
4　暗褐色土(木炭を少量含む)
5　赤褐色土(焼土を多量含む)
6　淡赤褐色土(砂質で焼土を含む)
7　暗赤褐色土(焼土を少量含む)
8　黄褐色土(焼土を少量含む)

第４図　１号住居跡カマド



第５図　１号住居跡出土土師器・羽口

遺　物（第５・６図，図版18）

本住居跡からの出土遺物は，ほとんどが住居跡覆土内のもので，数も少なく，土師器･フイゴ羽口･縄文土器・弥生式土器破片，若干の鉄滓などである。

〔土　師　器〕

土師器は，杯・甕の破片が出土しているが，図示した杯以外の破片は小さく，全体の器形をうかがえる資料に乏しい。ほとんどがロクロ成形のもので，再調整を施したものが多く，図示できなかったが，墨書土器１点がある。

杯１（第５図１）本遺構で唯一の図示可能な完形の土師器である。住居跡南壁寄りの地区で床面より若干浮いた状態で出土した。ロクロ成形によるもので，内外面の再調整は認められない。器面は淡褐色を呈し，胎土に微砂粒を含んでいる。比較的焼きは良い。底部の切り離し技法は回転糸切りによるもので法量は，器高３cm，口径11cm，底部径5.2cmを測り，口縁端がやや丸みをおびる特色がある。

この他の土師器は，ロクロ成形によるものの，ほとんどが再調整をうけ，内面黒色処理を施したものが多く，本例は１号住居跡出土土師器の中でも異質である。いわゆる「須恵系土器」（桑原1976）に近いものであろう。

〔土　製　品〕

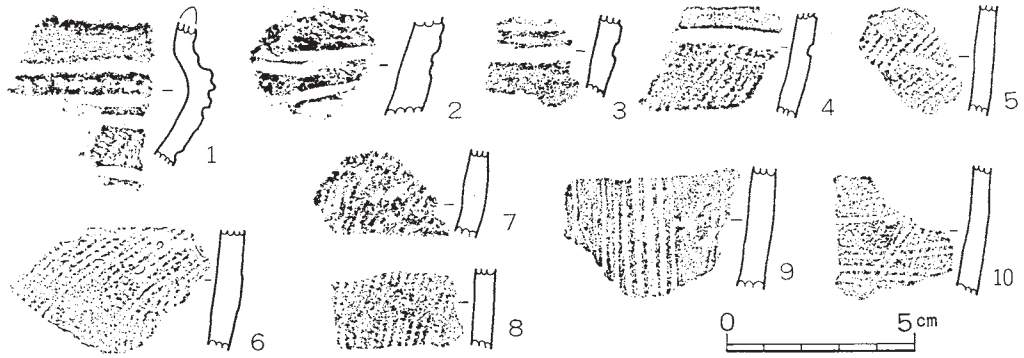
羽口１（第５図２）住居跡内の覆土中からは，鉄滓片が若干出土しているが，製鉄に使用されたと推定されるフイゴの羽口が１点検出された。先端部付近の破片で，内外面ともに淡灰褐色を呈しており，外面の一部に融解がみられる。

〔その他の遺物〕

住居跡覆土中より，若干の縄文晩期土器片，弥生式土器片が出土している。いずれも小破片ではあるが，覆土上層だけではなく，一部床面付近からの出土もあり，住居跡覆土堆積の複雑さを物語っている。以下，各時代ごとに説明しよう。

縄文土器　晩期大洞C_2式に比定される浅鉢形土器破片が３点出土している。第６図１・３の体部文様帯上部には，この時期の特徴である浮線・沈線間の列点刺突がみられる。２は，深鉢形土器口縁近くの破片であるが，小破片のため文様は不明である。

弥生式土器　弥生式土器は総計７点出土しており，いずれも中期の前半でも古い段階に位置づけられるものである。縄文をもつものと，櫛状施文具による条痕が施文されたものとがある。第６図４は，おそらく筒形に近い器形を成すものと思われ，太い沈線が２列横位にめぐっている。縄文・条痕をもつものは，いずれも体部破片である。縄文原体は，いずれもＬＲの撚りである。太い沈線による文様をもつこと，条痕の存在から，御代田式までさかのぼる可能性もある。



第６図　１号住居跡出土遺物拓影

ま　と　め

１号住居跡の遺構遺存状況は，比較的良好であったが，遺物の出土は極めて少なかった。床面出土遺物が明確ではなく，カマド内出土の遺物より判断すれば，遺構廃棄時期は，ロクロ土師器使用の段階と考えることができよう。住居跡内部で検出された４基のピットは，出土遺物も少なく，性格等は言及できない。しかし，住居跡廃絶以前に人為的に埋められていることは，土層観察により明確であり，さらに１号住居跡内部にのみ発見され，他の地区には検出されていないことから，１号住居跡と関連するピットであることは十分に予想されよう。ピットの形状から，貯蔵穴とも考えられるが，確証はない。

遺物の中で前述した土師器杯は，近年問題となっているいわゆる「須恵系土器」に近いものであろう。住居跡内出土の土師器は，大方がロクロ成形後に再調整が施されているが，本例は無調整であり，異質である。

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（第７・８図，図版５・６・17）

本遺構は，発掘区の東端に位置し地山ローム面にて検出された住居跡で，２号建物跡，３号溝跡と重複関係を有しており，２号建物跡よりも新しく３号溝より古い遺構である。規模は南北辺3.8m，東西辺は住居跡東側が道路によって破壊されているため不明であるが，現存長3.4mほどを測る。ただ南東隅でのP_1の位置と壁がわずかながら屈曲を見せ始めることからして，全体のプランは一辺3.8m程度の方形になるものと推定される。

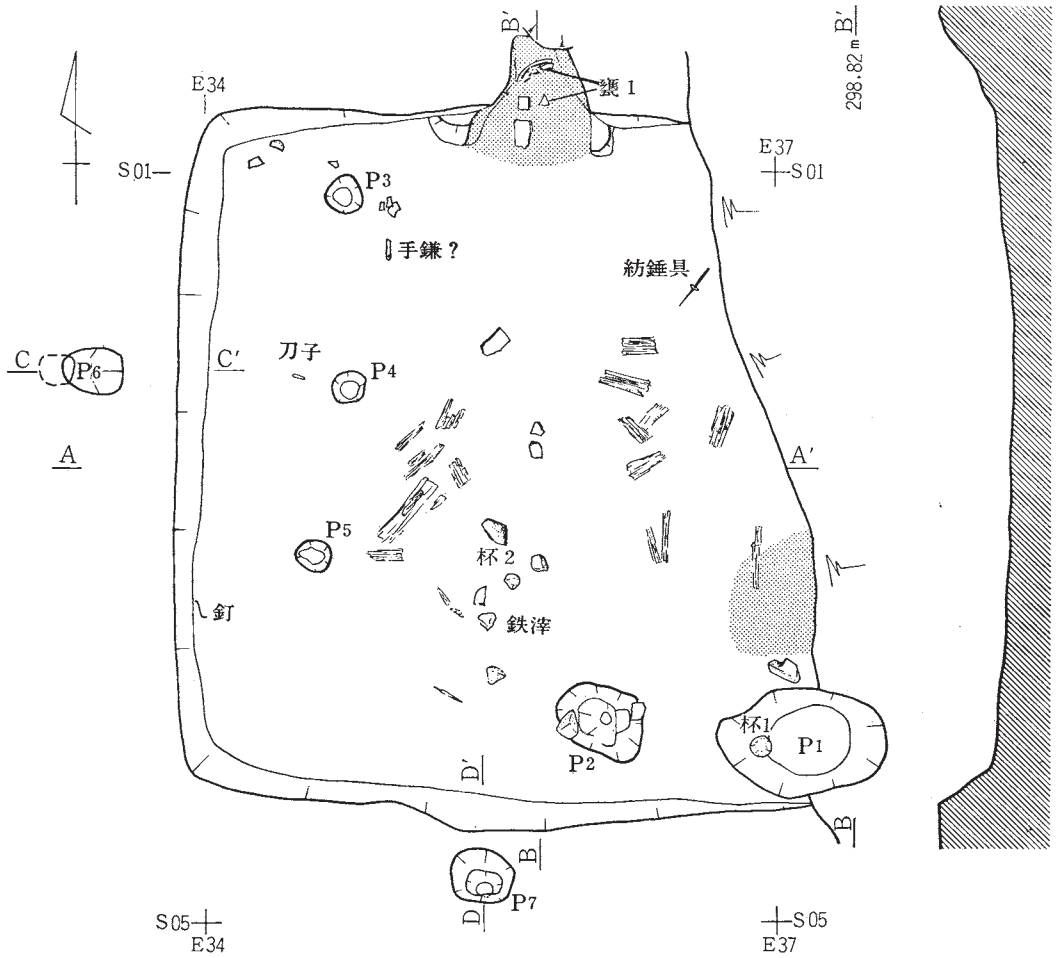
堆積土は，いわゆる将棋倒し状の堆積状況を示し，西側斜面上からの流れ込み土であることがわかる。また土質はローム粒を含む軟質の黒色土が主体であるが，床面上には随所に木炭・焼土が散在していた。

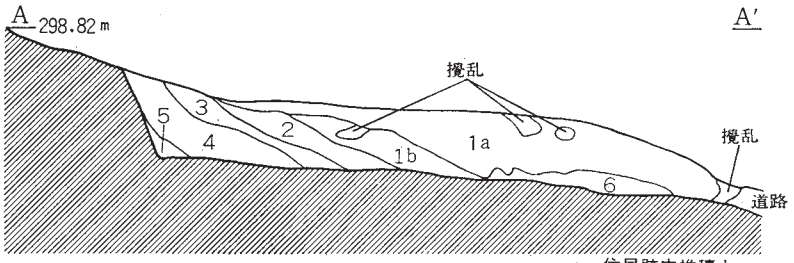
壁は，斜面上方の西壁が最もよく残存しており，その高さ50cmを測るが，東側にいくにつれ低くなり，東壁は道路によって破壊されている。壁の立ち上がり具合は，壁面の崩落があったためかやや傾斜をもっている。

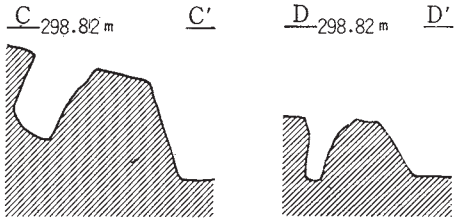
床面は，ハードローム（Ⅳｂ層）を直に床としているが，中央東寄りでは一部（ＳＫ04上）貼り床となっている。床面全体は斜面下方に向かって若干の傾斜をみせており，また前述貼り床の部分は下部の土坑内堆積土の沈下によってか床面が多少沈み込んでいる。

カマドは，北壁のほぼ中央に位置し，壁を20cm程度抉り込んで構築している。焚口部幅は約60cmで，燃焼部は窪まず緩い傾斜を保ちながら立ち上がり奥壁へと向かっている。袖は幅10cm，長さ20cm，高さ10cmと貧弱で，袖材は焼土を混じえたロームにて構築している。この北カマドに加え，住居跡南東部でP_1の北側に隣接した部分に床面が強く焼けた焼土の範囲を確認した。大半が道路によって破壊されているが，床面の焼け具合と床面に設置された河原石の存在からカマドの可能性が強いものと考えられる。

この住居跡に伴うと思われるピットは全部で８個検出された。P_1は南壁沿い東寄りに位置し，長径90cm，短径60cmのほぼ楕円形である。壁から底面への移行は明瞭ではなく舟底形に近いもので，堆積土の状態から開口して使用されたと考えられ，貯蔵穴の機能が妥当かと思われる。P_2は，P_1の西側近くにあり最大径約50cmを測るやや小型で不整形のピットである。壁から床面にかけては擂り鉢状に落ち込んでいる。P_3～P_5は西壁沿いに検出されたピットであるが，いずれも径18～20cm，深さ７～10cmを測る円形の小ピットである。配置からみれば柱穴ともいえるところであるが，埋土（黒色土を混入したローム）と深さから疑問の残るところである。P_6・P_7は住居跡外にて検出されたが，ピットの傾きの延長がそれぞれ住居跡内に向かっており，当住居跡に伴う柱穴の可能性が考えられるピットである。





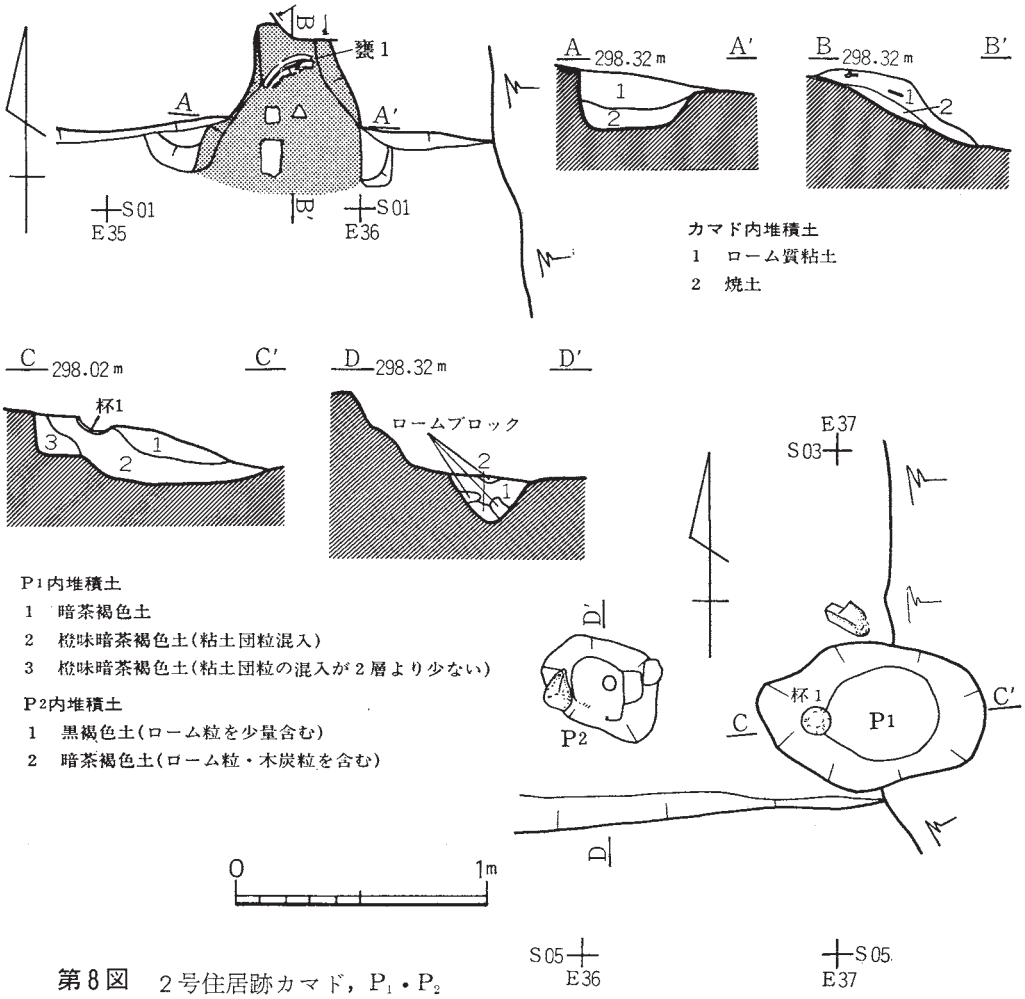


住居跡内堆積土

1a　暗褐色土(ローム粒混入)
1b　暗褐色土(1a よりローム粒多い)
2　暗黄褐色土(ローム団粒少量混入)
3　暗褐色土(1a に近いがソフト)
4　黒褐色土(ローム混入)
5　黒味暗黄茶褐色土(ローム団粒混入)
6　焼土・木炭

0　2m

第7図　2号住居跡



第８図　２号住居跡カマド，P_1・P_2

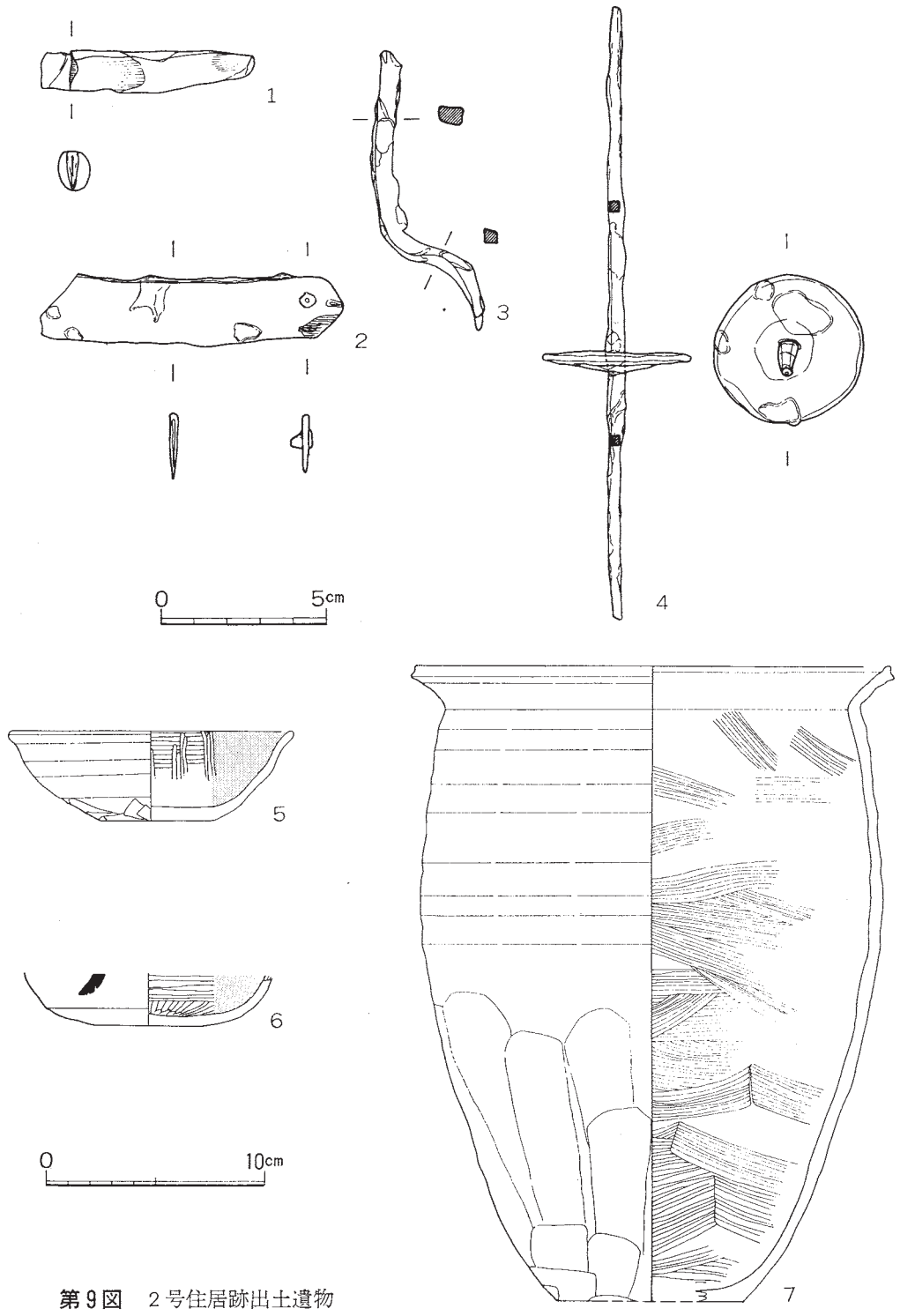
遺　　物（第９図，図版18）

当住居跡に伴う遺物は住居跡内全般に散在しているが，カマド内の土師器甕，住居跡中央部の須恵器甕（外面平行タタキ），中央南寄りの鉄滓といったように，各ブロックとしてとらえられる出土状況を示している。

〔土　師　器〕

杯１（第９図５）　P_1検出面から出土した遺物である。ロクロ成形で口径13.2cm，底径5.4cm，器高4.2cmを測る。調整は，体部外面から底部にかけ手持ちヘラケズリ，内面はヘラミガキされ黒色処理されているが，使用時に再酸化したとみられ内黒の大半が消失している。

杯２（第９図６）　住居跡中央やや南寄りから検出された杯で，体部下半から底部にかけての破片である。ロクロ成形で，調整は体部外面下端から底部にかけて回転ヘラケズリ，内面は放射



第9図　2号住居跡出土遺物

状のヘラミガキで，黒色処理されている。

甕１（第９図７）　カマド内と住居跡中央から検出した破片とが接合した遺物で，口縁部から底部にかけ約1/3程度欠損している。各法量は推定で口径21.5cm，底径8.5cm，器高は29cmである。成形にはロクロを使用しており頸部から口縁部への立ち上がりは大きく外傾し，口唇部は稜をつくりだしている。調整は，体部下半から底部の周縁にかかる外面は手持ちヘラケズリ，方向は縦のケズリが基本的であるが，底部の周縁にかぎっては横方向のケズリとなっている。内面は頸部の下方から底部の全面にヘラナデ調整が施されている。

〔鉄　製　品〕

刀子（第９図１）　西壁寄り中央やや北側に検出された刀子で，柄の部分から刃部の一部にかけて残存している。柄は木質部がまだ残っており，その径約１cm強であるが上面を平坦に仕上げている。刃部は幅１cmである。

釘（第９図３）　西壁沿い中央やや南側に検出された。曲がっているが残存長10cmで頭部を欠損している。断面形は基部で一辺が５㎜程度の四角形をなし先端にいくにつれ細くなる。

紡錘具（第９図４）　北カマド前東寄りから出土したもので双方の紡茎先端を欠損している。直径4.5cm，厚さ0.5cmの紡輪に残存軸長18.5cmの紡茎がとりついている。軸の断面は角の滑らかな四角形をしており，一方から紡輪を貫いてとりつけられたことがうかがえる。

用途不明鉄製品（第９図２）　北カマド前西寄りから検出された鉄製品で幅がせまく薄い板状のものである。幅1.8cm，長さは一方が欠落して不明であるが残存長は9.2cmである。断面は鋭角な三角形で片方が刃部と思われる。先端は角がとれているが三角形に近い形をし，片側から鋲がうちこまれており，鋲の周辺には繊維質の付着の痕跡がうかがえる。この鉄製品は，これらの形態的特徴から手鎌となる可能性が強いと思われる。

ま　と　め

当住居跡では，カマドと考えられる部分を二箇所検出した。この二つのカマドを，仮に北カマド・南カマドとすれば，北カマドではカマド内部と住居跡中央から検出された土師器甕が接合したこと，南カマドでは隣接している貯蔵穴状ピット（P_1）が住居廃絶後に埋まっていることの２点から，住居廃絶直前には双方のカマドが同時に使用されていたと考えられる。

遺物にはロクロ成形の土師器杯・甕があり，一応当住居跡の年代を平安時代としておく。

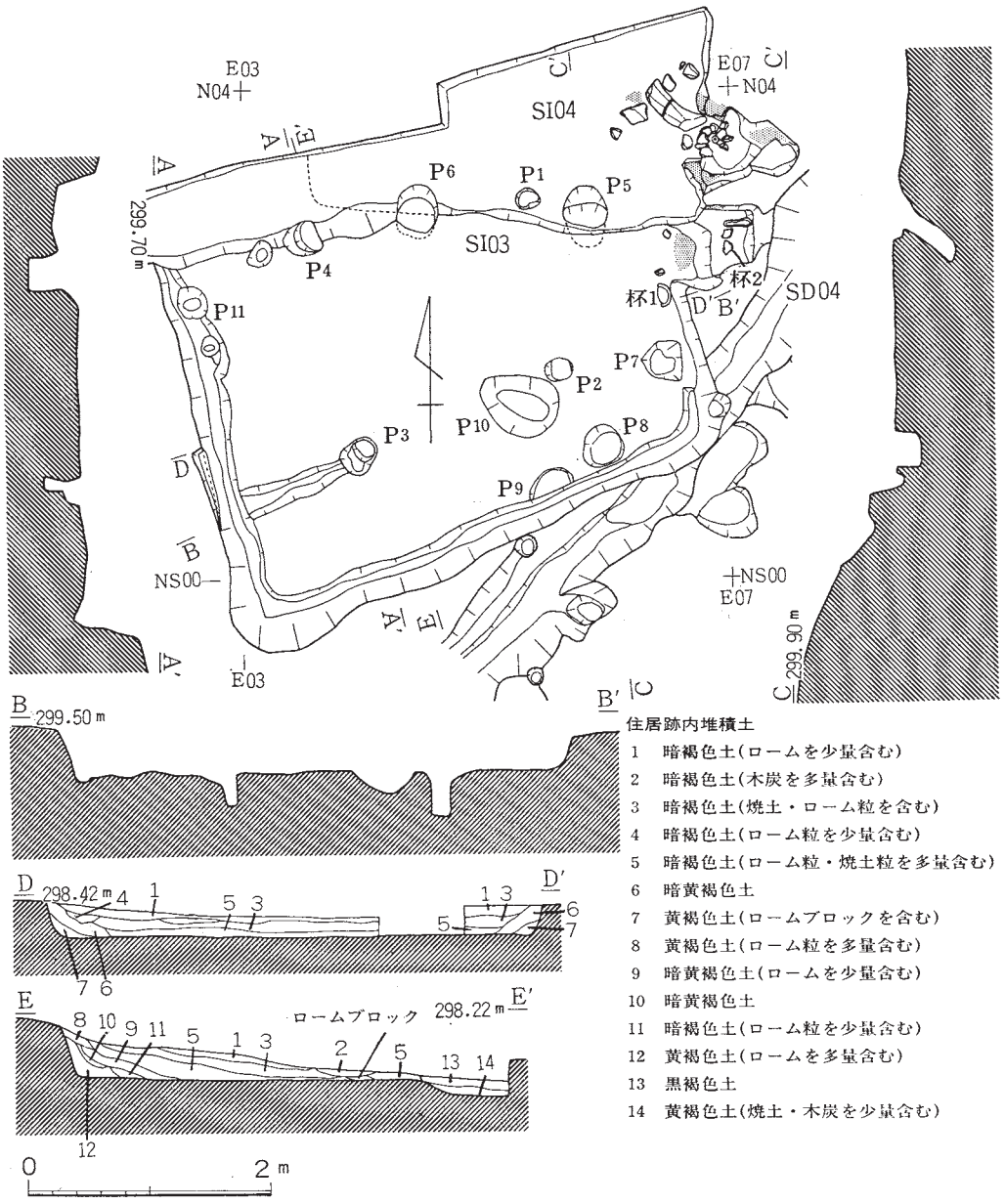
３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（第10・11図，図版７・８・９）

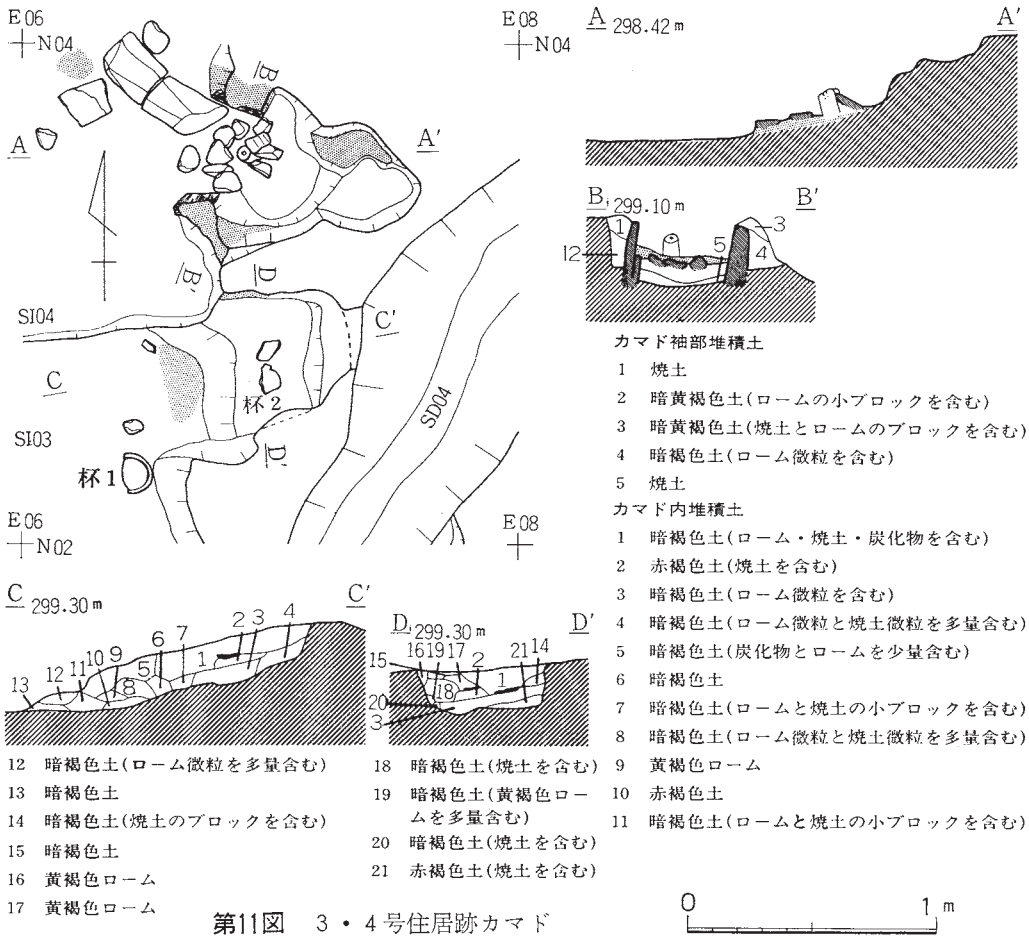
調査区北西隅の斜面に位置する。南東コーナーは４号溝完掘後に検出され，北半分は４号住居跡によって切られていた。東辺の長さは4.20ｍを測り，ほぼ４ｍ前後の方形の平面プランを呈し

ていたと思われる。堆積土は壁際に壁面崩壊土と考えられるローム層があり，他は将棋倒し状の堆積状況を示している。このことから，遺構内堆積は自然堆積と思われ，その様子は南北セクションで顕著に観察することができる。

床面は地山ローム面をそのまま床面とし，若干の凹凸はみられるが，しまっている。壁際には幅約20cm前後の周溝がまわり，残りのよい南壁で周溝から55cmの壁高を保っている。柱穴はその



第10図　3・4号住居跡



第11図　３・４号住居跡カマド

配置関係からP_1～P_4と思われ，その深さは順に17cm，38cm，23cm，40cmを測る。その他に床面で５箇所（P_7～P_{11}）のピットを確認しているが，埋土がP_{10}（若干焼土を含む）を除いてはローム粒を含む単層であるため，その性格を捉えることはできない。これらの他にP_3から周溝までを結ぶ溝が検出されたが，その性格は不明である。

カマドは東壁のほぼ中央に位置していたと思われるが，左側の一部は４号住居跡の東南コーナーによって削り取られている。燃焼部は緩やかな傾斜を持ち，焚口部から奥壁に向かって約70cmで急に立ち上がる。カマド内には，天井部崩壊土と思われるロームブロックを含む暗褐色土が堆積し，焼土はそれほど多く見られない。燃焼部・奥壁などもあまり焼けておらず，長期間使用されたとは思われない。カマドの中央を通る軸線の傾きはN82°Eで，住居跡南壁の傾きとほぼ一致する。

遺　　物（第12図，図版18）

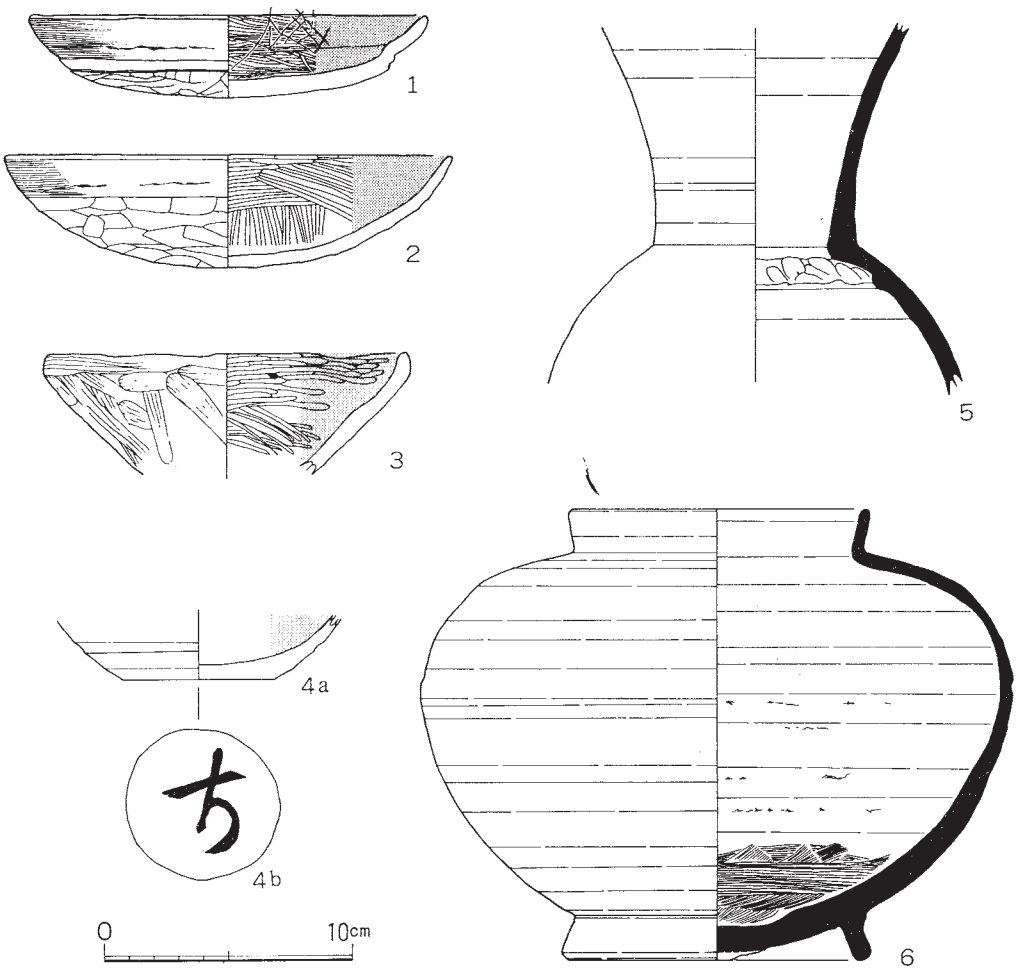
住居跡検出面で土師器杯２点，堆積土５層上面で須恵器壺１点，カマド右脇，カマド内堆積土

よりそれぞれ土師器杯１点が出土している。出土状況から，確実に住居跡に伴うと考えられる遺物は，カマドより出土した杯２点である。

〔土　師　器〕

杯１（第12図１）　カマド右脇の床面から出土した。口縁の一部を欠いているが，ほぼ完形品である。体部中央に段があり，沈線が周っている。口縁部はヨコナデ，底部は不定方向のヘラケズリ調整をうける。内面中央にも括れがあり，内彎気味に立ち上がって口縁部まで至る。底部を一定方向，体部から口縁にかけては，右から左方向に向けて順々にヘラミガキ調整が施され，黒色処理されている。口縁部内面には判読できない線刻があり，外面には巻き上げ痕が観察される。口径16cm，高さ3.3cmである。

杯２（第12図２）　カマド内天井部崩壊土下より出土した。全体の約2/3の破片である。丸底



第12図　３号住居跡出土遺物

を呈し，体部から口縁にかけて内彎しながらゆるやかに立ち上がる。口縁部ヨコナデ，底部は不定方向のヘラケズリ調整をうける。内面は底部を一定方向，体部から口縁にかけては右から左方向に向けて順々にヘラミガキ調整が施され，黒色処理されている。口縁部外面に，わずかに巻き上げ痕が観察される。推定口径18cm，高さ4.5cmである。

杯３（第12図３）　住居跡プラン検出時に出土した。全体の約1/4破片から復元実測した。体部は直線的に外傾し，口縁端に至って直立する。口縁部はわずかの幅でヨコナデ，体部は不定方向のヘラケズリ調整をうける。内面は底部を不定方向，口縁部を横方向にヘラミガキ調整を施し，黒色処理されている。推定口径14.5cmである。

杯４（第12図４）　住居跡プラン検出時に出土した。体部下半から底部にかけての破片でロクロを使用している。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ調整を行っているため，切り離し技法は不明である。底部に「方」と読める墨書がある。内面は一定方向の緻密なヘラミガキ調整が施され，黒色処理されている。底径６cmである。

〔須　恵　器〕

壺１（第12図５）　南西コーナー寄りの５層上面で出土した。頸部から肩部にかけての破片で，長頸でなだらかな肩部を持つ。内外面ロクロ調整である。頸部と体部の接合部には内面に段がつき，指で押さえた痕跡がある。胎土は緻密でオリーブ灰色を呈し，焼成もよい。

壺２（第12図６）南西コーナー寄りの５層より出土した。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。やや外方へ傾く短い口縁となだらかな肩部を持ち，きれいに彎曲しながら底部に至る。高台は貼り付けによるものでやや開いている。内外面とも口縁から体部上半まではロクロ調整を行い，体部下半から底部にかけては，外面に回転ヘラケズリ調整，内面にヘラナデ調整を行っている。高台はロクロ調整されている。内面にかすかではあるが巻き上げ痕が観察される。胎土は緻密で灰色を呈し，焼成もよい。口径12cm，高さ18㎜，最大径23.7cm，底部高台径12.4cmである。

ま　と　め

３号住居跡は北半部を４号住居跡によって切られた状態で検出され，全体の構造を明確に捉えることはできなかった。南西コーナー部はややふくらみを持っているが，これは後に壁面が崩れたもので，本来は整った隅丸方形のプランを有していたと思われる。カマドは左袖部にあたると思われる部分を４号住居跡によって切られていたが，右袖部も検出されず，初めから袖を持たず，住居壁をそのまま焚口部として利用していた可能性がある。住居跡の年代を推定できる資料は，カマドより出土したロクロ未使用の杯２点で，その特徴は栗囪式および国分寺下層式に包括されるものである。住居跡内より出土した須恵器壺２点は，床面より10cm程度浮いており，住居跡廃絶後に流れ込んだものと思われる。

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（第10・11図，図版７・10）

調査区西南隅の斜面で検出した。北半分を１号溝に切られ，さらに桑の根によって撹乱をうけているため，残存しているのは北東コーナーのみである。北東コーナーは３号住居跡を切っている。残存状態がわるいため明確に堆積土と判断できるものは，焼土・木炭を含む14層のみで，遺構内全体の堆積状況を観察することはできない。床面は地山ローム面をそのまま床として使用し，締まっている。壁高は検出面から，南辺で残存部５㎝，カマド脇で30㎝を測る。床面で２個のピット（P_5・P_6）が検出されている。両ピットとも住居内から住居外に向けて掘り込まれており，対になってはいるが，柱痕は分離できず，本遺構の柱穴と断定することはできない。

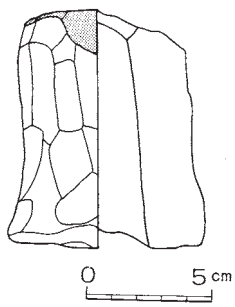
カマドは東南コーナー寄りの東壁に設置され，両袖間95㎝，焚口部から燃焼部奥壁まで94㎝を測る。カマド前面の床は固くしまり，多量の木炭が厚さ５㎝程度堆積していた。カマド内にはローム粒を含む天井部・袖等の崩壊土が堆積し，両袖内部・燃焼部奥壁はよく焼けていた。カマド先端にはロームを含む焼土が堆積しており，煙出し部と考えられる。燃焼部には石が敷かれ中央には支脚が設置されている。また，カマド前には長さ50㎝，幅18㎝，厚さ12㎝を測る凝灰岩の切り石が二つに割れて検出された。この凝灰岩は上面に火をうけた痕跡があり，おそらく両袖先端に掛け渡し焚口部を構成していた石材が転落し折れたものと考えられる。袖石には扁平な石が使用されており，焚口部は幅37㎝，高さ約20㎝と推定される。燃焼部内の焼け具合に加え底面の敷石下の土まで焼けていることから，頻繁に使用されたものであろう。カマドの中央を通る軸線はＳ75° Ｅで住居跡南壁の傾きとほぼ一致する。

遺　　物（第13図，図版18）

本住居跡から出土した遺物は少量で，完形品はなく，図示できるものはカマドに設置された支脚だけである。

〔土　製　品〕

羽口（第13図）　カマド内から出土したもので支脚として転用している。上部は火をうけてはじけ，中央部がやや窪み下部に向かって広がっている。外面全体にヘラケズリ調整後，ヘラナデ調整を行っている。現存高9.5㎝，底径7.8㎝である。



第13図　４号住居跡出土羽口

ま　と　め

４号住居跡は南東コーナーしか検出されず全体の構造は把握できなかった。堆積土およびカマド内からの遺物には，回転糸切り技法の痕跡をもつ高台杯があり，また３号住居跡を切っていることから住居跡の時期を平安時代としておく。

第２節　掘立柱建物跡

今回の調査で掘立柱建物跡は発掘区の東部分から２棟検出された。このうち確実に掘立柱建物跡といえるのは１号建物跡１棟のみである。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（第14図，図版11・12）

調査区の東側で斜面の肩部に位置し検出面はローム面である。東西２間，南北３間の南北棟であるが，東側柱列のP_8・P_9は建物跡よりも新しい２号住居跡によって掘形の一部を破壊されている。また南東の隅柱P_6は，最近の土取りによって掘形の大半が削り取られている。各柱間寸法は，東側柱列北から1.75m＋1.95m＋1.40m，西側柱列北から1.90m＋1.75m＋1.55m，南側柱列西から1.85m＋1.50m，北側柱列西から1.75m＋1.90mで，各柱間に多少の長短はあるが基本的に６尺を柱間寸法として設計されたものと考えられる。ただ南側柱列と北に１間目との柱間は他の柱間よりも短い。

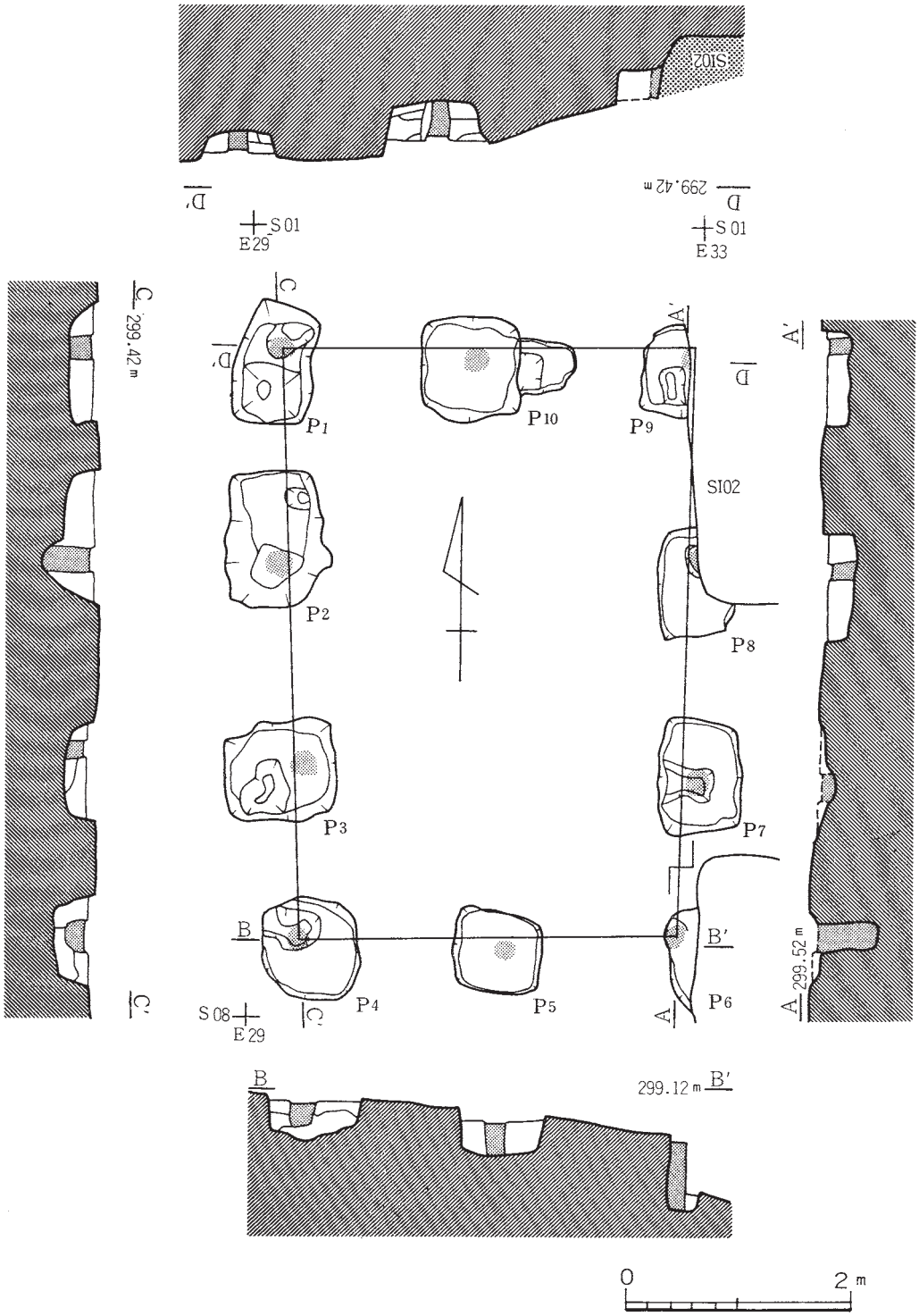
掘形は方形を基本としており検出面から30～40㎝掘り窪めているが，南側柱列から１間目の柱穴P_3・P_7は相対的に浅い。このことは柱間寸法の短さと相俟って上屋構造になんらかの変化があったことを示唆していると考えられる。柱は柱痕から推察するに径20㎝程度の丸柱であったと思われる。西側柱列を通る軸線は，ほぼ磁北と一致する。

遺　　物

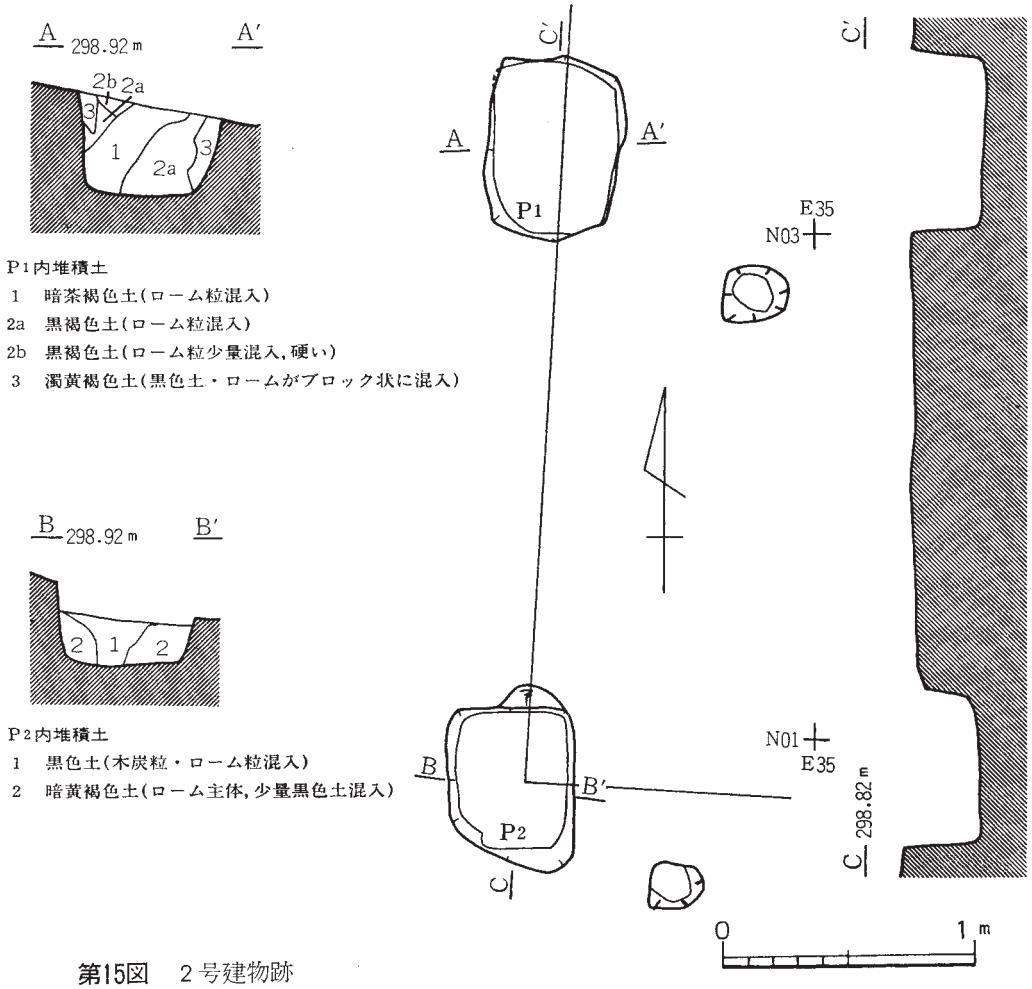
P_7～P_9の埋土から土師器の杯と甕の小片が数点出土している。このなかでP_7から検出した土師器杯の小片は，体部下半の破片であるが外面にロクロナデと思われる痕跡を残している。他は甕類の破片であるが，明瞭にロクロ使用とみられる破片はない。

ま　と　め

この建物跡は，西側柱列よりも東側柱列のほうがレベル的に各掘形が低く掘り込まれている。このことは当初から土地を改変することなく斜面上に建てたものとしてとらえられる。規模は前述のとおり２間×３間の建物跡で側柱式である。また出土遺物からその所属時期を大まかに平安時代としておくが，ただ同じくロクロ土師器を伴出する２号住居跡によって切られているため，平安時代としてもかなり限定された期間のなかで考えられよう。この種の同じ規模の建物跡は，後続して調査した佐平林Ⅷ区で７棟と数多く検出されている。佐平林Ⅶ区とⅧ区とは矢武川から入り込む小規模な谷地を中間にはさみこんで相対する地形となっているため，双方を含めた建物群の考察が必要かと思われる。


SI02
D'
S 01
E 29
299.42m
D
S 01
E 33
C
299.42m
C'
P1
P10
P9
A'
D
D'
SI02
P2
P8
P3
P7
B
B'
P4
P5
P6
A
A'
299.52m
C
C'
S 08
E 29
B
299.12m
B'
0
2m

第14図　1号建物跡



第15図　２号建物跡

２号建物跡　ＳＢ02（第15図）

東斜面下方，３号溝の北側に検出されたもので，当初は単独の土坑としてとり扱ったが，精査の結果柱痕をもつことが判明したため，２基の土坑を柱穴とし建物跡とした。この建物跡は南北に並ぶ柱穴２個のみの検出で，北側は調査区外に東側は道路に向かって削平が著しいためか柱穴の検出はなく，あるいは南北にのびる柱列としての可能性もあるが，ここでは掘立柱建物跡のなかで報告しておく。

掘形は東西辺約50cm，南北辺約70cmを測るやや隅丸の方形である。深さは斜面上下でやや異なるが平均して約30cm程度である。底面は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。埋土はロームを含む黒褐色土が主体であり，P_2の断面では中央に柱痕と考えられる土層を確認した。

掘形の間隔は中心で2.5ｍを測る。この距離で南・西両方行に折り返しても柱穴がみあたらないことから，P_2を南西の隅柱として北・東にプランは延びるものと思われる。またこの２個の掘形の南東に隣接して直径20～25cm，深さ10～20cmの小ピットが各々検出された。この小ピットは検出された位置関係から当建物跡に含めてとらえておきたい。

遺物は皆無で所属時期は不明である。

第３節　土坑・その他

土坑４基，溝５条が検出されているので，ここではこれらをまとめて報告する。土坑はそれぞれ異なった形態を持っている。溝は調査区外に連続するものであるが，限定された調査区であるために事実の報告に止めたいと思う。

土　　坑

１号土坑　ＳＫ01（第16図，図版13）

調査区のほぼ中央で，１号住居跡の南側に位置する。検出面は地山ローム面で南側一部が撹乱されている。南北90cm，東西106cmの長方形で，検出面から底面までの深さは14cmを測る。底面には凹凸があるが，壁の立ち上がりは急である。堆積土は黒色土を基本とし，木炭・ローム粒の混入差によって３層に分けることができる。

本遺構の堆積状況は遺存部が薄く，人為的なものか自然的なものか判断はできない。また出土遺物がないため遺構の年代も不明である。

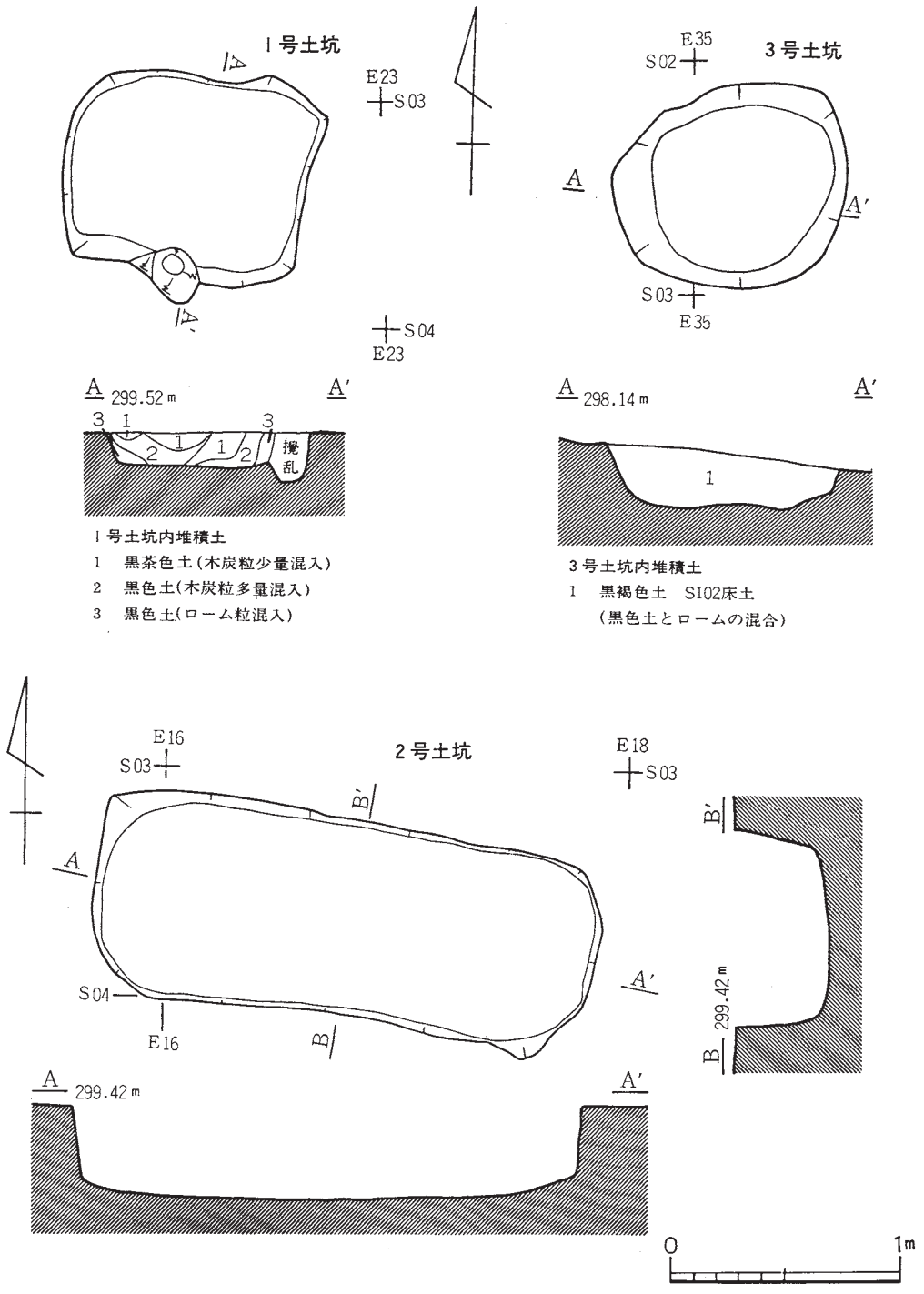
２号土坑　ＳＫ02（第16図，図版14）

調査区中央の平坦部で検出した。検出面は地山ローム面で，東西220cm，南北84cmの大きさを持ち，検出面から底面までの深さは40cmを測る。底面は平坦で壁は垂直に近く掘り込まれている。堆積土は黄褐色ロームブロックを含む単層でしまりが強い。遺物はロクロ使用の土師器がごく少量出土している。

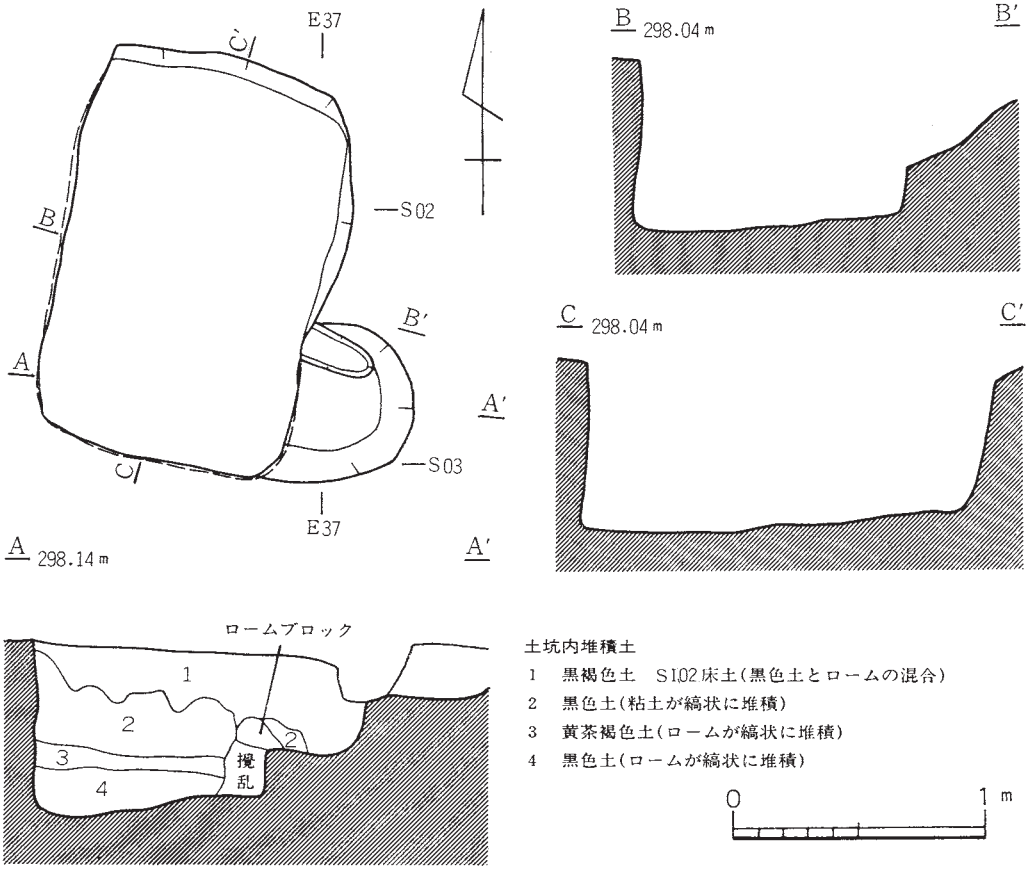
先に述べたように堆積土は単層で，人為的に一気に埋められたと考えられる。堆積土中より出土した遺物は遺構の上限年代を示すと考えられ，破片ではあるが，回転ヘラケズリ調整の施されている杯が出土していることから，本土坑は平安時代以降の遺構と考えられる。

３号土坑　ＳＫ03（第16図，図版15・17）

２号住居跡の床下から検出された土坑で，平面形は直径約１ｍの不整円形を呈している。底面は平坦で，壁はやや傾斜をもって立ち上がっている。底面と壁との境は明瞭な区画はみられない。堆積土は黒色土の少量混入したロームの単層で，遺物の混入はなかった。当遺構の時期の下


１号土坑
E23
S03
S04
E23
A
A′
299.52ｍ
撹乱
１号土坑内堆積土
1　黒茶色土（木炭粒少量混入）
2　黒色土（木炭粒多量混入）
3　黒色土（ローム粒混入）
E35
S02
３号土坑
S03
E35
298.14ｍ
３号土坑内堆積土
1　黒褐色土　SI02床土
（黒色土とロームの混合）
２号土坑
E16
S03
S04
E16
B
B′
E18
S03
299.42ｍ
0
1m

第16図　１～３号土坑



第17図 4号土坑

限は2号住居跡によっておさえられるが，上限は不明である。あるいは2号住居跡構築時に掘り込まれた可能性もありうる。

4号土坑 SK04（第17図，図版16・17）

3号土坑と同じく2号住居跡の床下から検出した土坑である。平面形は長軸1.6m，短軸1.1mを測る長方形である。底面は平坦で，壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。埋土は粘土あるいはロームが混入した黒色土とロームが互層に堆積しており，人為的に埋められたものと判断される。また堆積土の最上層には2号住居跡構築時に貼り床した際叩き込んだ土層が確認された。土坑の南東側に円形に近い窪みがあるが，これも住居跡構築の際に掘り込まれたものと考えられる。

出土遺物は堆積土内から須恵器甕・蓋，土師器甕・杯類の破片が検出された。とくに土師器杯はロクロ成形で回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリ調整とが混在している。このことから4号土坑の時代を平安時代としておくが，その時期は1号建物跡と大きな隔たりはないと考えられる。

溝　　跡

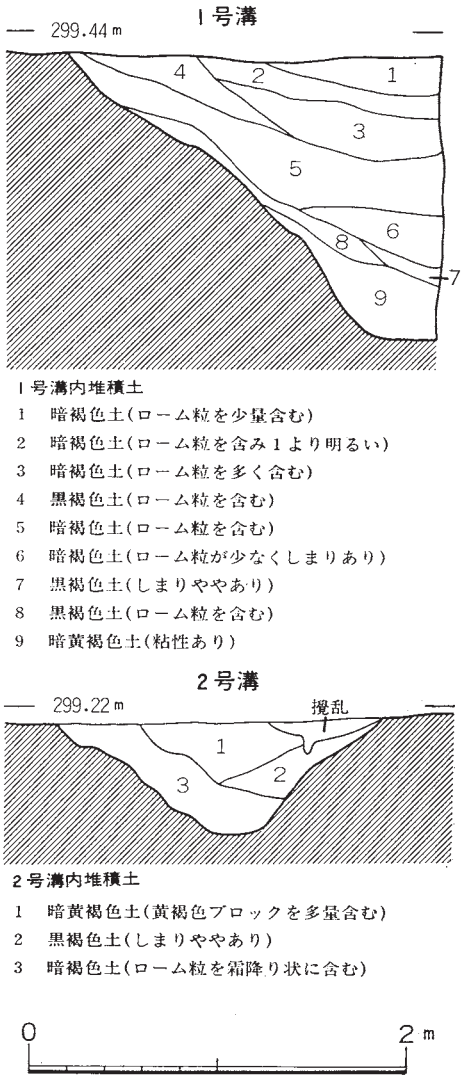
１号溝跡　ＳＤ01（第18図）

調査区北辺に平行し，２号溝を切った状態で検出した。溝の南半分のみ検出した。東端で発掘区北辺から南側上端まで２ｍ，西側Ｅ－11グリッドのラインで3.6ｍを測る。溝断面は台形を逆さにした形になると思われ，下端が発掘区北辺から20～25㎝の幅で上端に平行して走っている。検出面からの深さは東端で1.24ｍ，西端で1.41ｍを測るが，レベル的には東側が西側に比べて若干低くなっている。堆積土は，暗褐色を主体とした土がレンズ状に堆積しており，自然堆積と思われる。発掘区外の東西に延びていく溝であるが，西側はサブトレンチを入れた結果，北側にカーブしていくものと考えられる。

遺物はすべて流れ込みと考えられるもので，須恵器破片少量，土師器杯・甕破片が出土している。土師器杯はロクロを使用している。堆積土からみて，水の流れていた形跡はない。

２号溝跡　ＳＤ02（第18図）

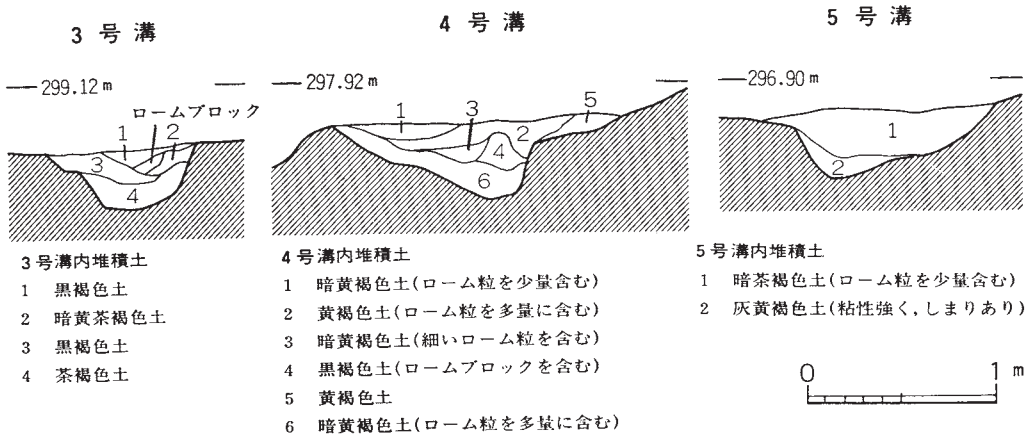
１号掘立柱建物跡の西に検出された溝で，ほぼ南北方向に走る。この溝は昭和52年度佐平林遺跡Ｖ区において検出された２号溝跡の延長であるが，Ｖ区から南はすでに開発によって現存していない。また北側は発掘区北側を走る１号溝によって切られている。



第18図　１・２号溝断面図

形状は北側で断面が「Ｖ」字形に近い薬研堀であるが，南にいくに従い底面に平坦部ができてくる。幅は1.5～２ｍ，深さは0.5～0.7ｍで溝の底面は南に向かってやや傾斜している。埋土は自然堆積で滞水した状況は観察されなかった。

遺物は堆積土中より須恵器甕破片２点と，ロクロ土師器杯の破片２点が検出されている。所属時期は佐平林Ｖ区の報告において平安時代以降のものとしたが，今回１号溝跡と切られている状況から，さらに限定された時期が言えそうである。



第19図　３・４・５号溝断面図

３号溝跡　ＳＤ03（第19図）

東側斜面で１号建物跡と２号住居跡の北側に検出された溝である。検出面はローム面で一部２号住居跡のカマド先端部を壊して掘り込まれている。溝は東西に長く西側においては終結するが東側では道路によって寸断されている。総長6.5m，幅0.6m程度であるが西側の北壁は壁の崩落が著しく最大幅1.2mと広くなっている。底面から壁への移行は明瞭な角をもたずに立ち上がっている。埋土はローム粒を混じえた黒褐色土が主体で，自然堆積である。溝底面の土層の観察では，恒常的に水が流れた様子は見られなかった。

遺物は堆積土中から土師器杯・甕類の破片が検出されている。このなかで時期の下る遺物はロクロ土師器であるが，いずれも時期決定の資料となり得るものではない。この溝の所属時期，年代については上限は２号住居跡によっておさえられるが，下限は不明である。ただ堆積土の特徴は，４号溝と類似しており，そう下降する時期の溝とは考え難い。

４号溝跡　ＳＤ04（第19図）

本遺構は，調査区西寄りの斜面上部にて検出した。溝の長さは，調査区外へ延びているために不明であるが，検出面での平均上幅1.5m，深さ0.4mを測る緩やかな「Ｖ」字状を呈する溝である。溝の方位は，Ｎ35°Ｅを測り，底面は北東へいくに従い，緩やかに下降している。

本溝は，土層観察を基準にすれば，３号住居跡よりは新しく，１号溝よりは古く構築されたと考えることができよう。また，溝底面での砂質土層の堆積は，不明瞭であり，水の流れた形跡は認めがたい。３号住居跡付近を中心に溝の上端に柱穴状のピットがいくつかみられるが，本来溝に伴っていたものかどうか判然としない。

遺物としては，土師器甕・杯の小破片が堆積土中より検出されている。

５号溝跡　ＳＤ05（第19図）

調査区北西隅のサブトレンチで検出したが，上部の撹乱が激しく検出面は下がる。上幅１ｍ前後の溝跡で，同トレンチ内１号溝と平行に走っている。溝断面は「Ｖ」字状を呈し，検出面からの深さは30㎝前後である。埋土は２層に分かれ，上層は軟質の黒色土が厚く堆積し，下層にはややグライ化した土層が薄くみられた。

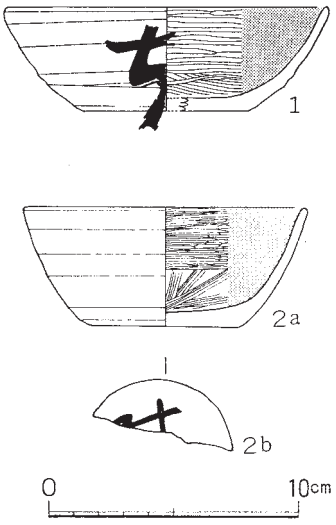
遺物は出土せず，切り合い関係も不明のため，遺構の年代を限定することはできない。

そ　の　他

表土出土の遺物には，土師器・須恵器破片がある。図示できたものは土師器の杯破片で，いずれも1/3ほどの破片を復元実測したものである。

杯１（第20図１）　ロクロを使用したもので，若干内彎しながら立ち上がる。底部下端外面と底部全面に回転ヘラケズリ調整を行い，切り離し技法は不明である。内面は底部を一定方向，体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキ調整を施し，黒色処理されている。推定口径約13㎝，高さ4.2㎝，体部外面に判読不明な墨書がある。

杯２（第20図２）　ロクロを使用したもので，直線的に急に立ち上がる。底部下端外面と底部全面に回転ヘラケズリ調整を行い，切り離し技法は不明である。内面は底部を放射状，体部から口縁部を横方向にヘラミガキ調整を施し，黒色処理されている。推定口径11.3㎝，高さ4.3㎝である。



第20図　表土出土遺物

両者とも墨書を持ち，杯１は体部に，杯２は底部に墨書されている。杯２のものは「叶」と読むことができる。特に杯２は墨書・形態・調整の面で，佐平林遺跡Ⅴ区４号溝跡より出土した杯１と酷似しており，同一製作者によるものと思われる。

このほかに図示できなかったものとして少破片の土師器甕・杯がある。大部分はロクロを使用したものであるが，甕破片の中にはロクロ未使用のものも若干含まれる。須恵器は叩きを有する甕体部破片が多く，他の器種はあまりみられない。

第3章　考　　察

佐平林遺跡Ⅶ区は南側に位置するⅤ区と一連の遺跡であり，検出された遺構・遺物の両地区間の関連も深いと考えられる。従ってここでは，Ⅶ区だけではなく，Ⅴ区と合わせ見ながら考察を進めていく。

第1節　遺物について

今回の調査で出土した遺物には，土師器・須恵器・陶器などの土器類と鉄製の紡錘具・刀子・釘・用途不明鉄製品，そして羽口がある。鉄製品は2号住居跡からまとまって出土し，羽口は1号住居跡から鉄滓をともない，4号住居跡からは支脚として出土している。

須恵器は壺しか出土しておらず，点数も少ないため分類をさけ，ここでは図示できた土師器杯を中心に分類を行う。器種は杯・甕の2種である。Ⅴ区の報告に従い，ロクロ成形によらないⅠ群土器と，ロクロ成形のⅡ群土器とに分ける。

第Ⅰ群土器　杯のみであり，次のように分類できる。

A類：器高が低く，内外面に軽い段を有する丸底の杯である。外面は口縁部ヨコナデ，底部から段までをヘラケズリ調整，内面はヘラミガキ後黒色処理している。

B類：体部に段を持たない丸底の杯である。外面は口縁部ヨコナデ，底部から体部にかけてヘラケズリ調整，内面はヘラミガキ後黒色処理している。

C類：体部が直線的に外傾して立ち上がり，口縁端部が直立する。平底になると思われる。外面は口縁部ヨコナデ，体部をヘラケズリ調整，内面はヘラミガキ後黒色処理している。

第Ⅱ群土器　杯・甕の2種があるが，甕は1点のため分類は行わない。

A類：ロクロ成形後体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ再調整をうけるもので，器高の高いA_1類と，器高の低いA_2類とに分けられる。

B類：ロクロ成形後，体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ再調整をうけるものである。

C類：小型で回転糸切り痕を有し，内外面ロクロ痕のみで黒色処理を行わないものである。

ⅠA類は内面に括れがある点，ⅠB類は外面の沈線による段が省略されている点が，以前に出土したものと異なってはいるが，ひとつの形態として見た場合，大きくはずれるものではなく，

また成形技法，調整技法の面では佐平林遺跡Ⅴ区，谷地前Ｃ遺跡で出土した杯と同様である。従って本遺跡におけるＩＡ・Ｂ類は，谷地前Ｃ遺跡で分類されたＩＡ群土器の範疇に収まると考えられる。

母畑地区発掘報告Ⅱの中では，ハケメ調整を主体とする長胴の甕と，器高が高く外面に段を有する杯が共伴した下原２号住居跡から，器高が低く外面に段を有する杯と平底を呈する杯が共伴した出磐山３号住居跡までの土器と，桑原滋郎（1976）による砂押川出土土器の分類を比較し，下原２号住居跡出土土器と出磐山３号住居跡の中間に位置すると考えられる谷地前Ｃ遺跡ＩＡ群土器を８世紀中葉前後を中心とする時期としている（1978）。以上のことを考えれば，谷地前Ｃ遺跡ＩＡ群土器の範疇に入ると考えられる本遺跡ＩＡ・Ｂ類にも，この年代を与えることができる。

ＩＣ類は形態的に特異であるが，内面に見られるヘラミガキは国分寺下層式の土器によく見られるものである。従ってＩＡ･Ｂ類と時間的な差はそれほどないと思われるが，断定はできない。

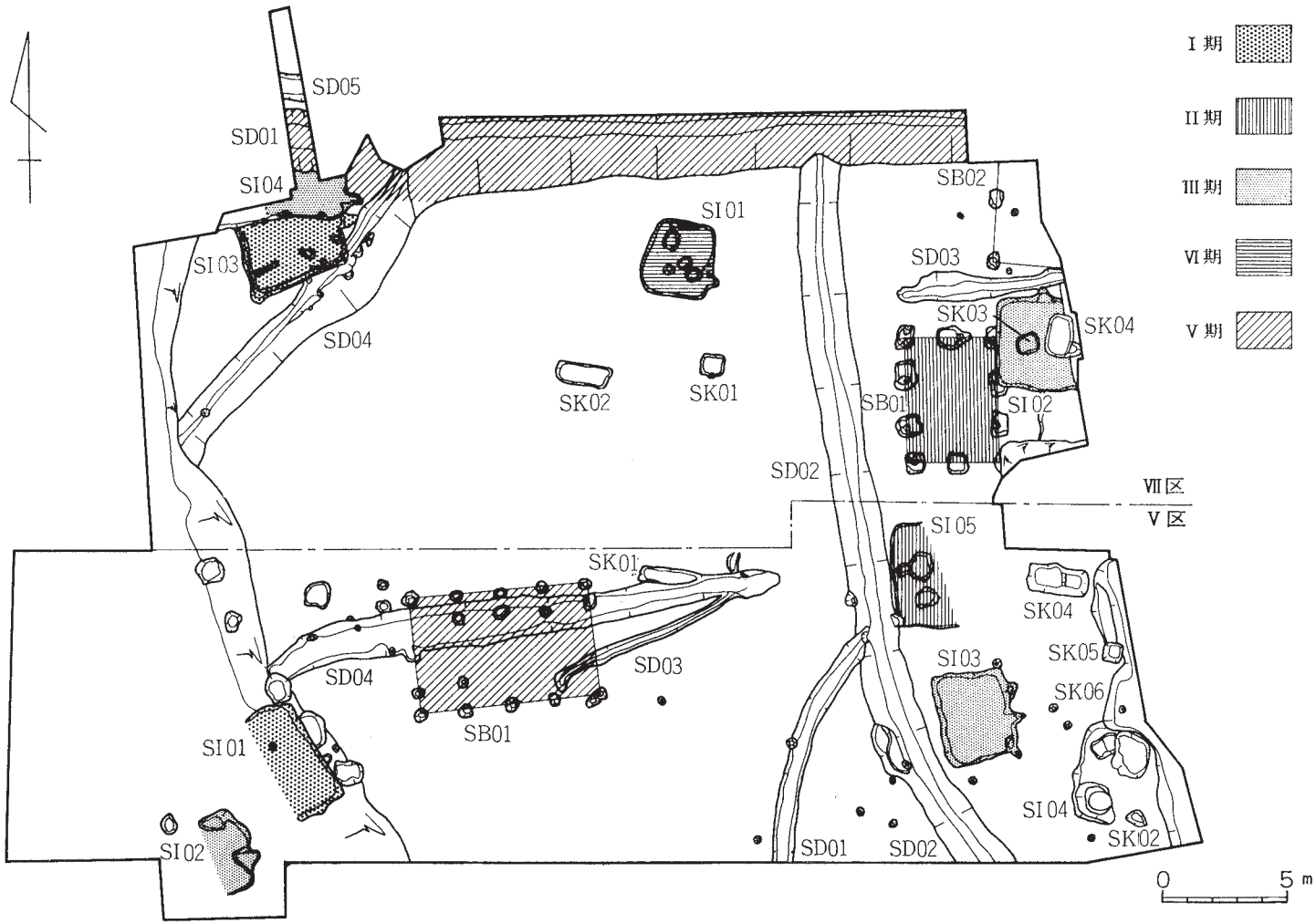
Ⅱ群土器は，佐平林遺跡Ⅴ区出土のものと類似し，同じ分類基準をもって分類することが可能である。報告によれば，須恵器との共伴関係などからⅡＡ→ⅡＢの流れが考えられている。Ⅶ区においても，再調整の簡略化および，ⅡＡ類よりⅡＢ類のほうが底径が小さくなる傾向が観察されるなど，ⅡＡ→ⅡＢの流れは妥当であると思われる。

年代については，本遺跡内での確実な須恵器との共伴例がないため，明確にはできないが，Ⅴ区報告に従えば，ⅡＡ類は９世紀前半の年代が考えられ，ⅡＢ類には９世紀後半以降の年代が考えられる。

ⅡＣ類とした回転糸切り痕を有し無調整の土器と，須恵器壺に関しては年代を推定できる資料が得られていない。ただ，回転糸切り痕を有し無調整の杯に関しては，桑原滋郎による須恵系土器に関する研究があり，その範疇に入るものであるとすれば10～11世紀の年代があてられる。須恵器に関しては，『陶邑Ⅰ』において，骨蔵器などでよく用いられた有蓋短頸壺は，Ⅳ期式に入って生産が開始されたのではないかといわれ，出土状況からして，本遺跡の須恵器壺は８世紀中葉以降のものと考えることができる。

第２節　遺構について

Ⅶ区は，佐平林遺跡の中央部にあって南に舌状に張り出す台地上に位置している。昭和52年度に調査した佐平林Ⅴ区はⅦ区の南側にあたる。このⅤ区を含め南側は遺跡の範囲に入っていたにもかかわらず，すでに昭和52年度の圃場整備によって未調整のまま大幅な地形の変更を受け，永遠に不明となってしまった。従ってここではⅦ区として限定された調査区域について，検出された遺構に若干の検討を加え，あわせてⅤ区との関連を述べることとする。



第21図　佐平林遺跡Ⅴ・Ⅶ区遺構時期区分図

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡２棟，土坑４基，溝５条である。竪穴住居跡は，その所属時期が奈良時代から平安時代に至るものであるが，すべて同時に存在したわけではなく，主に伴出遺物から３時期に区分できる。Ⅰ期に属する住居跡としては，Ⅰ群土器を伴出する３号住居跡が，Ⅱ期のものはⅡ群土器を伴出する２・４号住居跡，Ⅲ期はⅡＡ・Ｂ類よりも後出すると考えられる糸切り無調整の土師器杯を伴出する１号住居跡がそれぞれあげられる。

掘立柱建物跡で，規模・構造等が明確に把握できたのは１号建物跡のみである。この建物跡の時期は，掘形埋土内から検出された遺物と，２号住居跡との重複関係から，ロクロ土師器使用段階前半期の中でも極めて限定された時期が与えられる。また規模は，２間×３間の南北棟で，佐平林Ⅷ区から検出された建物跡群の第Ⅰ期のものと共通している。地形的にはⅦ区とⅧ区は，矢武川から北に入り込む小浸蝕谷によって東西に分割されているが，建物跡の規模や時期は両地区を含めたうえでとらえられそうである。

土坑は，時期の判別については困難を伴うが，大半が堆積土内から細片ではあるがロクロ土師器が伴出しているので，これらの遺物が時期の上限として考えられる。３・４号土坑については，重複関係から２号住居跡より以前の時期とすることができる。ただ３号土坑については，堆積土がわずかの黒色土を混入したロームであり固くしまっていることから，単独の土坑というよりは，２号住居跡のなかで考えた方がよい土坑である。この土坑のなかで明らかに人為堆積をなすものは，２・４号土坑があげられる。両者の形態的な相異は多少あるものの，垂直に近い壁と平坦な底面という点では共通している。

溝は５条検出されたが，これらの溝は３号溝を除いて重複関係を有し，２・４号溝が１号溝より古い溝であることが判明している。また土層断面の観察では長時間滞水した形跡がなく，恐らくは空堀的な性格であったと考えられる。２号溝は，Ⅴ区の同じく２号溝と連続することが調査の時点で判明した。先の報告ではこの溝の時期を平安時代としているが，今回の調査においても平安時代を下る遺物の検出はなく，後述する１号溝に切られている点から時期の位置づけは妥当なものと考えられる。また４号溝は形態的に２号溝と共通している点と，１号溝に切られ３号住居跡を切っている点から，ほぼ２号溝と同時期のものとして差し支えない。これら両者を壊して掘り込まれた１号溝は，当然２・４号溝よりも後出するものである。この溝は，発掘区の関係で溝の南半分しか検出されなかったが，調査区の北端に位置し，折り返して復元すれば溝は幅約４ｍ，深さ1.4mの大きな薬研堀となる。東西方向に走るこの溝は，Ⅴ・Ⅶ区ののる南に張り出した台地を中央やや北寄りの部分で南北に分割切断している。これらの規模と位置からすれば，単なる土地の区割のみならず多分に防御的な意味あいも含まれると解釈するのが妥当であろう。

今回の検出された遺構の分布の主体は東西両斜面にある。この特徴はⅤ区についてもいえるこ

とである。ここでⅤ，Ⅶ区で検出された遺構を総計してみると，竪穴住居跡９軒，掘立柱建物跡３棟，土坑10基，溝８条を数える。これら遺構を，伴出した遺物と遺構の重複関係から，時期別に分類したのが第21図である。第Ⅰ期のものは西斜面に２軒（Ⅴ区・ＳＩ01，Ⅶ区・ＳＩ03）検出された。恐らく伴出遺物から奈良時代の中頃に位置づけられる。Ⅱ期のものはロクロ使用時期前半代前葉に位置づけられる住居跡１軒（Ⅴ区・ＳＩ05）建物跡１棟（Ⅶ区・ＳＢ02）で東斜面のみに検出された。Ⅲ期はロクロ土師器使用段階でもⅡ期より後出する（土師器杯の調整技法に手持ちヘラケズリ技法が入る段階）住居跡４軒（Ⅴ区・ＳＩ02・03，Ⅶ区・ＳＩ02・04）があてられる。Ⅳ期は今回調査区中央部に検出された１軒（Ⅶ区・ＳＩ01）のみであり，平安時代後半期に位置づけられる。Ⅴ期は前述遺構より後出すると思われる遺構全てを含む。ここで考えられるのはⅤ区検出の建物跡とⅦ区の１号溝である。ただ，Ⅴ区１・２・４号溝とⅦ区２・４号溝は平安時代に位置づけられるが，Ⅰ期よりは後出するがⅡ期の前か後かは未だ不明である。さてこのⅤ期遺構からは，目立った遺物は検出されていないが，遺構の重複関係から平安時代を遡ることはないと考えられる。ところで，一方表土からではあるが，中世陶器と考えられる破片が検出されている。短絡的には結びつかないが，遺物のなかで下限を示す遺物であり，これより新しい遺物は検出されていないことから，Ⅴ期の範囲のなかで考慮すべき遺物であろう。

以上，Ⅰ期からⅤ期に属する遺構についてまとめた。佐平林遺跡は，現在までの発掘調査によって古墳時代後期と奈良・平安時代の遺構・遺物が数地点に亘って検出されている。その時期的な分布は，多くは同地点内に複合して検出されるのが通例であったが，Ⅴ区・Ⅶ区に限っていえば，他の地点よりも多少の時間的断続はあるにしても比較的接近した時期の継続としてとらえられる。特に，Ⅴ区以南は断定できないが，古墳時代後期とした佐平林式の遺構・遺物は全く検出されず，当時の居住空間としては利用されなかった可能性が強い。昭和52年度の調査によって，80,000㎡を一括して一つの遺跡としたが，矢武川左岸に立地するこの遺跡は，微地形的に北に入り込む小浸蝕谷によって幾つかに分割される。埋蔵されている遺構・遺物の分布，あるいは密集度の様相は，微地形と微妙に関連しているといえよう。

参 考 文 献

３編末尾に記載

第３編　佐 平 林 遺 跡（Ⅷ区）

遺跡記号　ＨＩ－ＳＢⅧ
所在地　西白河郡東村大字上野出島字佐平林・谷地前
時代・種類　古墳(後期)・奈良・平安時代－集落跡
調査期間　昭和54年９月６日～11月７日
発掘担当者　目黒吉明
調査員　日高　努　　大越道正
橋本博幸　　安田　稔
協力員　菅野順子（東北学院大学生）
協力機関　東村教育委員会

第１章　調　査　経　過

第１節　位置と地形

佐平林遺跡Ⅷ区は，西白河郡東村大字上野出島字佐平林・谷地前に所在する。佐平林遺跡は全体の遺跡面積が約80,000㎡の広がりを持つ遺跡であり，当Ⅷ区は遺跡の東部分約2,500㎡の区域である。佐平林遺跡は，東流する矢武川北岸にある丘陵の南に面した麓部に展開している。この丘陵は標高320m前後の稜線を持ち，北斜面は阿武隈川右岸の河岸段丘に続いている。また，丘陵の南斜面中腹から頂上部にかけては，52年度に発掘調査を行った赤根久保遺跡，53年度に調査した笊内古墳群が所在する。丘陵の南斜面裾部には，標高約300mを上限とした緩斜面が東西に広がり，谷地前Ａ～Ｃ遺跡，板倉前Ａ・Ｂ遺跡，西原遺跡などの古墳時代から平安時代にかけての集落跡が連続している。これらの集落跡は，現在までの発掘調査の結果から見ると，集落跡内における住居跡群相互の時代差があることが多いことが知られており，これは矢武川左岸の自然立地条件から重複して集落が営まれた状況を示しているといえよう。現在の集落は，板倉前Ａ・Ｂ遺跡に重複して村落が存在するのみで，他の遺跡部分には集落がなく，１・２軒の民家が散在しているだけである。佐平林遺跡は，東西に約470m，南北に約200mを測り，全体の平面形は東西に長い不整形な楕円状を示し，矢武川に面して３つの微高地が舌状に張り出している。この微高地の各間に挟まれて矢武川沖積面とあまり比高差をもたない沢が入り込み現在水田として利用されている。

当調査区Ⅷ区は，佐平林遺跡の東部分にあたり，南に張り出した舌状台地の基部に位置している。調査区は52年度に調査したⅠ～Ⅳ区の北西側にあたり，舌状台地の西斜面の北半分を占めている。調査区の東側は個人の水田造成のため約２mの削平をうけており，法面ローム露頭には遺構の断面が観察され，遺跡の一部がすでに破壊されたことが予想される。

調査区域は全面的に南西方向に緩傾斜しており，最近整地されている。北東隅は，旧地表面を約70㎝程削平し，南西方向に盛土している。削平を受けた部分はローム層が起耕され，遺構はローム層に掘り込まれた下部のみが残存していた。

中央部から南西部にかけては，ロームの混入した耕作土の下層に黒色土の層があり，遺構はこの黒色土層から検出されている。特に中央部から南の方向にかけての黒色土の堆積は厚く，１mを超える堆積が見られる。この付近一帯は，ローム層上に３層の基本層が堆積することが前回までの一連の調査で確認され，基本層序が撹乱されていないところでは縄文の遺構はⅢ層（茶褐色土）を，７世紀に中心をおく土師器の遺構はⅡ層（黒色土）を切り込んでつくられていることを

確認している。今回の調査では，土師器を伴出する数時期の遺構が黒色土上面で検出された。このなかで最も古いものは６世紀代のもので，黒色土の堆積が６世紀以前に遡ることが判明した。しかしながら，一方黒色土上面もまた削平を受けていることは否めない事実であるため黒色土が一時期に堆積したとは考えられず，今後黒色土の細分を検討し，考古学的に年代を考定するとともに，さらに関連諸科学からの検討もなされなければならないと考えている。

第２節　調　査　経　過

９月５日　調査予定地区の煙草収穫が終り，本日から字佐平林，字谷地前にまたがる約2,500㎡を対象に，佐平林遺跡Ⅷ区として調査を開始する。西原遺跡の調査現場から発掘器材を搬入し，調査区の南縁沿いに20×２ｍのトレンチを設定する。結果，調査区の中央部が沢状の窪地であることが確認された。

９月７日　重機を使用して表土の排除を行う。中央部の東寄りに２軒の大型竪穴住居跡を検出。

９月11日　重機による排土作業を終了。発掘地区に10ｍを基本とする基準杭を設定する。基準線は磁北から１°30′東へ偏している。調査区の北部から中央部にかけての遺構検出作業を進める。

９月12日　ベンチマークを設定する。標高298.30ｍを測定。

９月17日　切り合い関係を持つ遺構の掘り込みを優先させる。遺跡教室の開催について東村教育委員会と打ち合わせを行う。

10月１日　昨日からの台風のため，掘り込んだ遺構の排水作業で半日を費やす。

10月２日　中央部の黒色土部分の遺構検出作業を急ぐ。遺構の切り合いが複雑で全体を検出するのに手間取る。

10月５日　第１回遺跡教室を開催する。東村立小野田小学校児童60名が参加。

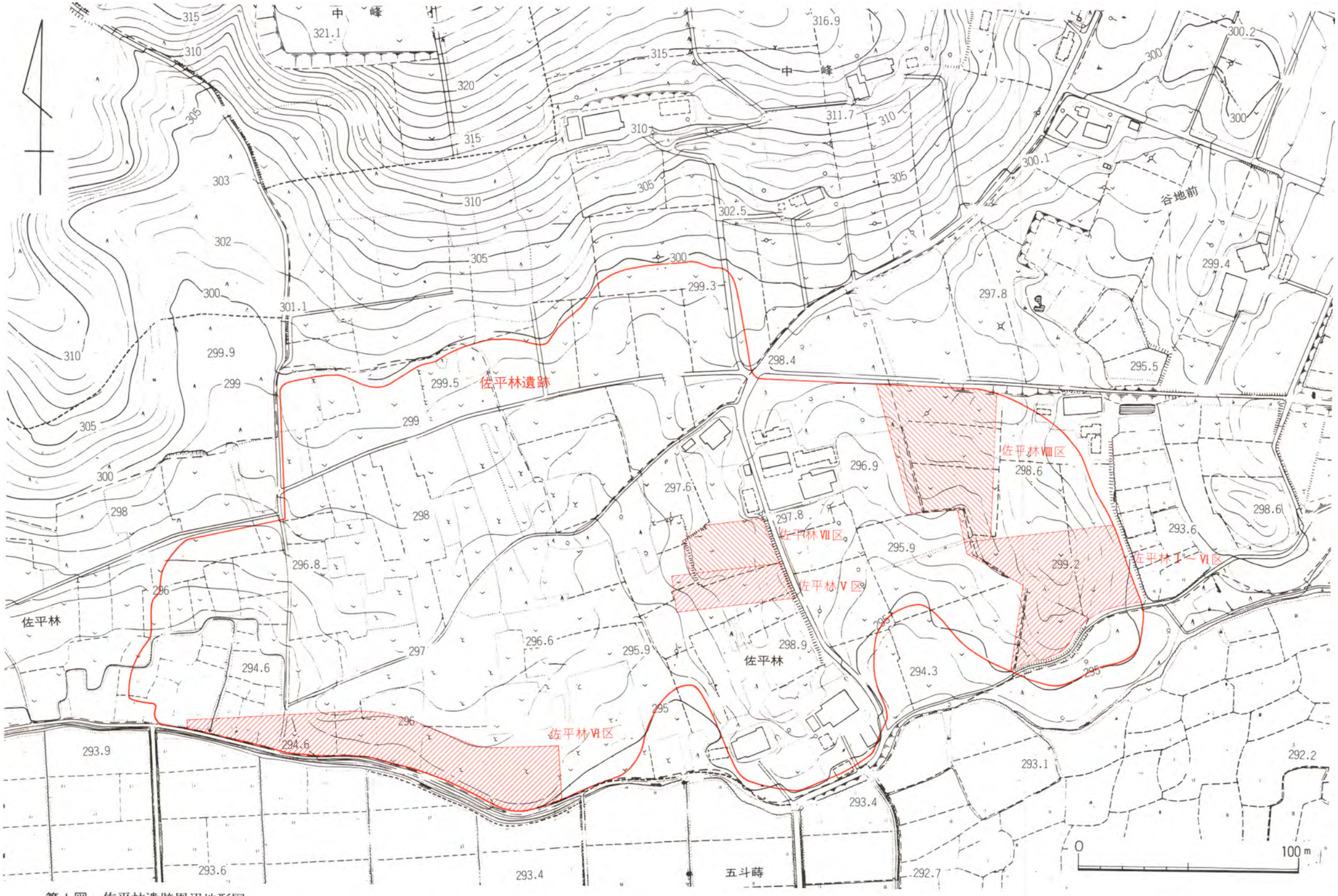
10日８日　連日の降雨で排水作業に多くの時間を費やす。第２回遺跡教室開催の件で東村教育委員会と打ち合わせを行う。

10月16日　航空測量を実施する。調査日程の関係で谷地前Ｃ遺跡と同時に航空測量を行ったため，約２割の遺構は未調査の段階であった。

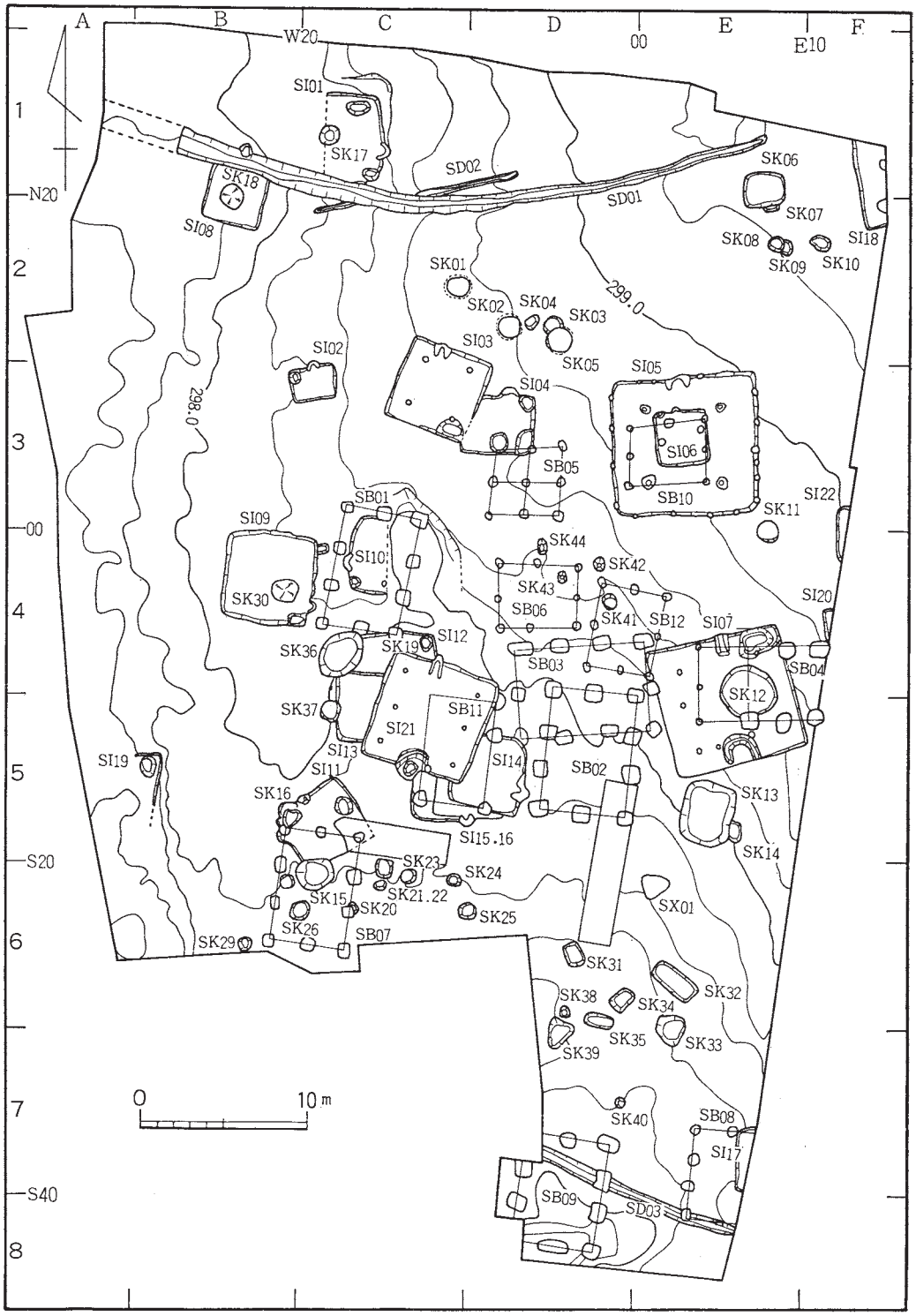
10月29日　発掘器材の一部を除き大半を遺物とともに撤収する。

11月１日　10月中に調査を終了する予定でいたが，調査の最終段階になって，12号・13号住居と，14号・15号・16号住居が切り合う下層から大型の住居跡（ＳＩ21）が検出されたため，急遽予定を延長する。

11月６日　佐平林遺跡Ⅷ区の調査を完了する。調査面積2,500㎡，調査日数47日であった。



第１図　佐平林遺跡周辺地形図



第２図　佐平林遺跡（Ⅷ区）遺構配置図

第2章　遺構と遺物

第1節　竪穴住居跡

今回の調査で竪穴住居跡は総計22軒検出された。分布は調査範囲の中央部から東部分にかけて多く検出されている。この部分は南に向かって黒色土の堆積がみられるところで，東西に較べわずかではあるが低くなっている。住居跡は単独で検出されたものは少なく，必ずといっていいぐらい他の遺構と重複している。加えて後世の削平も手伝って，遺存の状況は悪い。これらの住居跡は伴出した遺物から，古墳時代後期のものと，奈良～平安時代のものとに大きく分類される。

1号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（第３図，図版２）

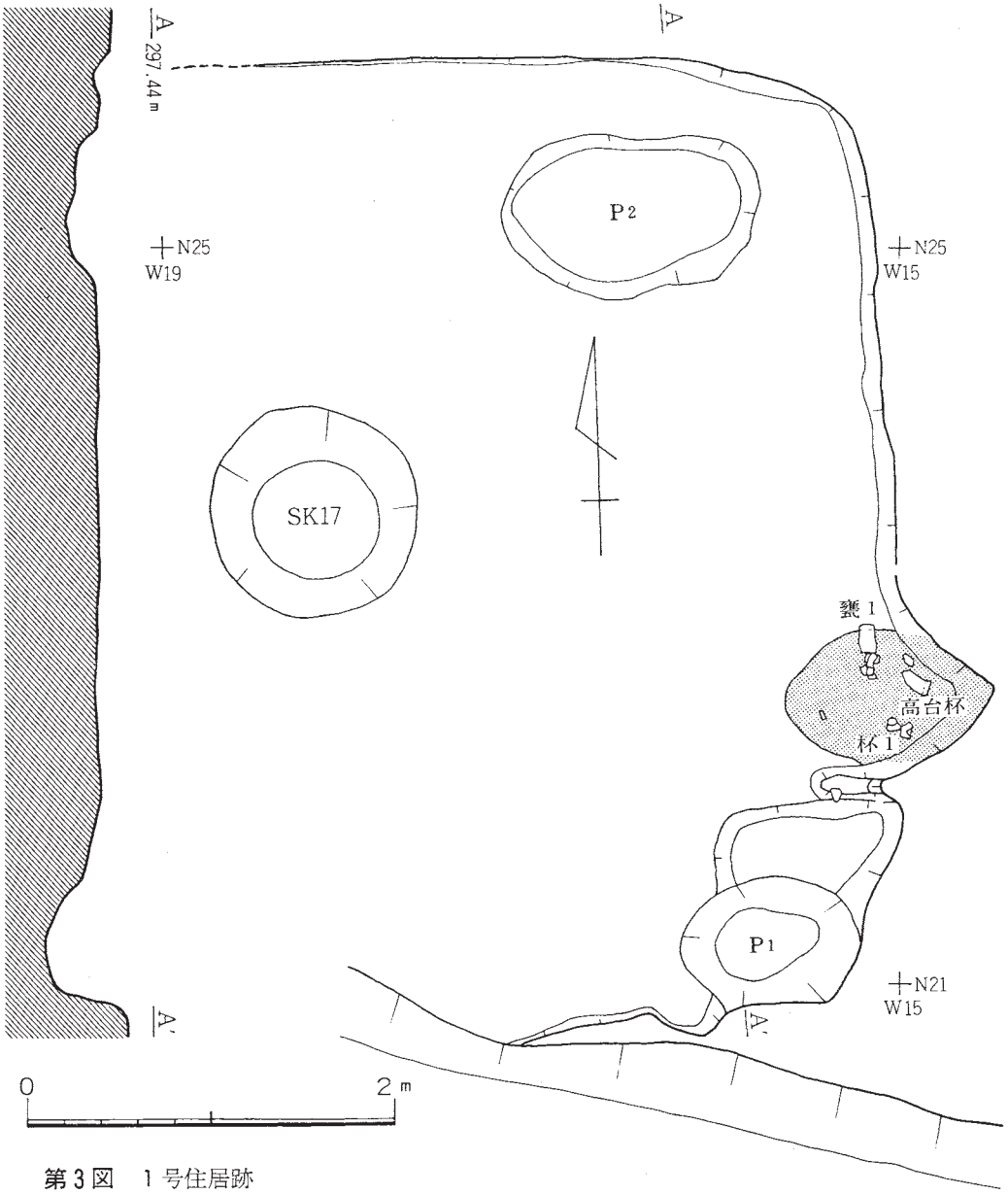
調査区域の最も北側において検出された遺構であり，確認面は黒褐色土上面である。住居跡内堆積土と確認面の土質が似通っており，確認するのは非常に困難であった。住居跡西半部は削平のため明確にプランを捉えられなかった。本住居跡は１号溝と17号土坑が重複しており，それぞれ本住居跡の南側壁，床面のほぼ中央部分を切っている。遺構内堆積土は茶褐色土とロームの微粒を含む黒褐色土の２層である。平面形は，東西辺が不明であるが，南北辺は5.25ｍを測り，東壁にカマドを持つやや隅丸の方形を呈しているものと思われる。床面はカマド付近が割合固くしまっているが，他はやや軟弱である。壁は東辺で最大高15㎝を測るが，西へ移行するに従い削平度が大きくなり住居跡中央部以西では消失してしまう。

カマドは東壁中央より南側に位置しており，全体の約1/2が東壁外に張り出している。遺存状態が悪く両袖部は基底部を若干残すだけであるが，火熱を受け赤変している部分より推定して，焚口部幅約40㎝，東壁付近で65㎝，奥行１ｍ前後を測る。赤変部分はそれほど固くはなっておらず，長時間使用されたものとは思われない。煙道は検出されなかったが，東壁より張り出した部分が煙出し部をなしていたものと考えられる。

柱穴・周溝は検出されなかったが，カマドの南側において東西100㎝，南北70㎜，深さ30㎝の貯蔵穴状ピットと床面西側において東西140㎝，南北110㎝の平面楕円形を呈し，深さは20㎝を測る断面皿状のピットと合わせて２個のピットが検出された。

遺　　物（第４図）

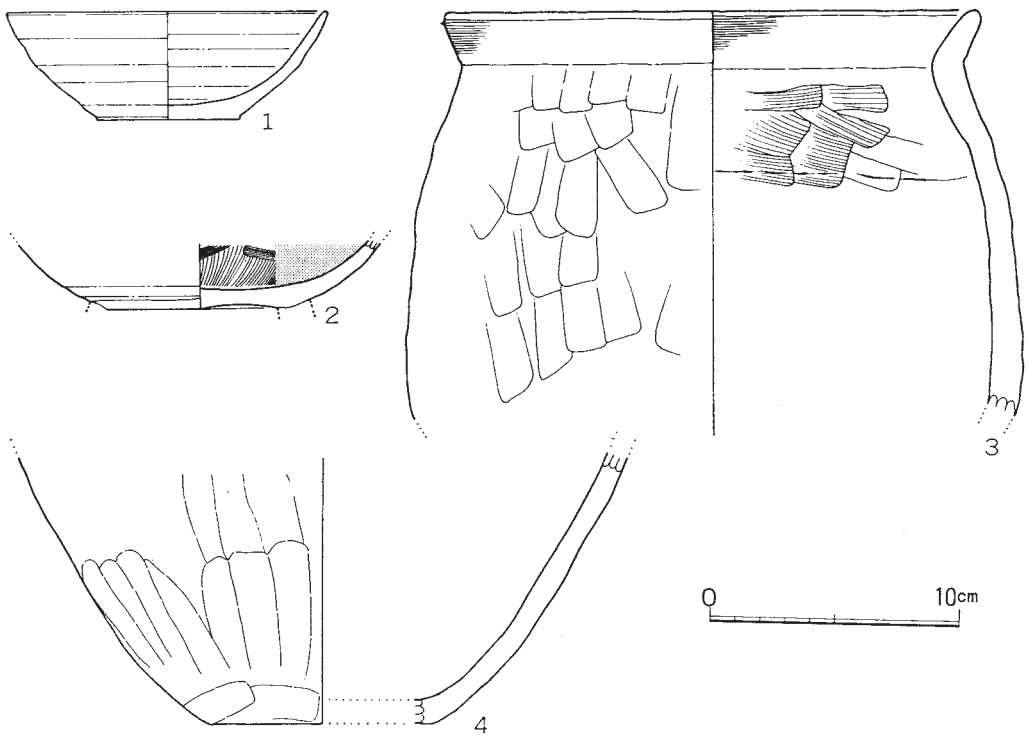
本住居跡の堆積土中やカマド内埋土・底面から土師器・須恵器の破片が多く出土したが，復元できるようなものは非常に少なかった。以下図化できた土師器４点について説明を加える。



第３図　１号住居跡

〔土　師　器〕

杯（第４図１）　カマド燃焼部底面より出土した。遺存度は口縁部は全体の1/8，体部から底部にかけては1/4である。ロクロ成形によるもので，底部切り離しは回転糸切りである。内外面ともロクロによるナデが顕著に観察されるが，再調整はなされていない。また黒色処理もされていない。法量は推定口径12.8cm，底径5.8cm，器高4.3cmを測る。



第４図　１号住居跡出土土師器

高台杯（第４図２）　杯同様カマド底面より検出された遺物で，高台が付された杯であり，底部から体部下半にかけて残存する1/3を復元実測した。杯はロクロにより成形されており，底部には回転糸切りの切り離し痕を残す。内面調整はヘラミガキが施されているようであり，さらに黒色処理している。

甕１（第４図３）　カマド底面より検出された。二次加熱を受け器肌が非常に荒れているが，口縁部から体部にかけ1/5が残存する。体部は内彎しながら立ち上がり，短く外反する口縁部に移行する。器面調整は，口縁部は内外面ともヨコナデが施されており，体部外面はヘラケズリ，内面は横方向のヘラナデがそれぞれ加えられている。推定口径21.4cm，体部最大径24.6cm，現存高16.2cmを測る最大径を体部にもつ甕である。胎土は砂粒を多く含む。

甕２（第４図４）　住居跡内堆積土中より検出された。体部下半から底部にかけて約1/3が現存するだけであるが，現存高10.6cm，推定底径９cmを測ることができる。外面調整はヘラケズリ，内面はヘラナデが施されている。

ま　と　め

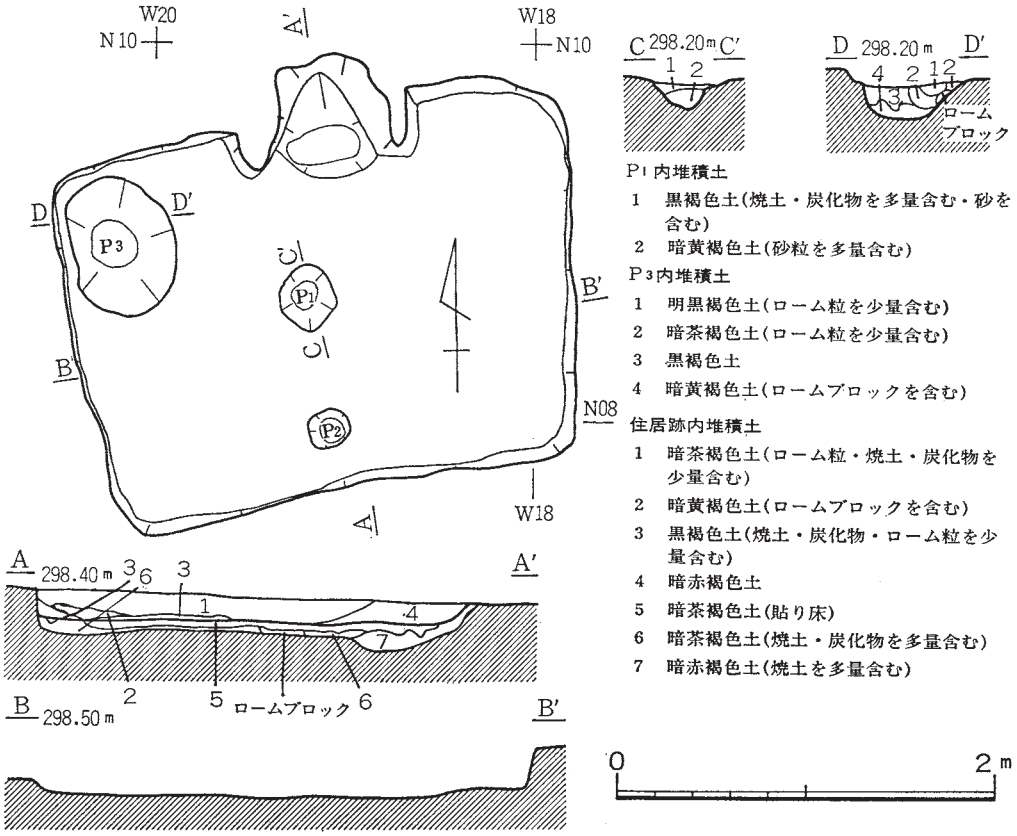
本住居跡は１号溝跡や17号土坑などに切られているほか，西半が削平により原形を留めていないためプランを明確に捉えることができなかった。柱穴や周溝は伴わない住居跡である。本住居

跡の所属時期は，カマド内から出土した土師器からみてロクロ土師器使用段階でも後半に位置づけられるものと思われる。

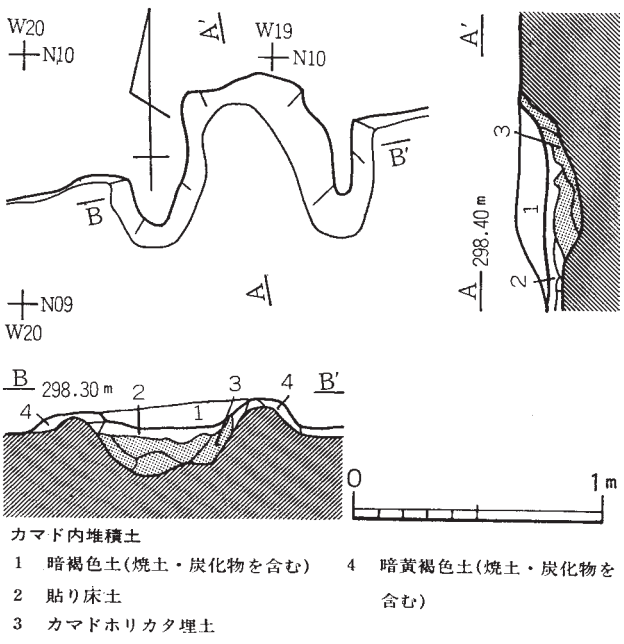
２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（第５・６図，図版３）

Ｂ・Ｃ－３グリッド内のローム面において，単独で検出された住居跡で，３号住居跡の3.5m西側に位置している。平面プランは，東辺1.85m，西辺1.9m，南辺2.25m，北辺2.65mを測るややゆがんだ方形を呈する。壁は若干西側に傾斜しているところで検出されたため，東壁では20cmを測るが西壁では３cm前後と低く，南北両壁は西に向かって高さを減じる。住居跡内堆積土は大別すると３層に分類できる。大部分は暗茶褐色土の堆積で，壁際・床面上には２層の暗黄褐色土，３層の黒褐色土が堆積している。床面は２面検出された。新しい床面をⅡ期とし，古い方の床面をⅠ期としたが双方の床面間には暗茶褐色土の間層が入り込む。Ⅱ期の床面は，黒褐色土混じりの暗黄褐色土を入れ敲きしめた貼り床でほぼ平坦である。中央部とカマド付近は割合堅いが，



第５図　２号住居跡



第6図 2号住居跡カマド

部幅は約50cm，奥壁まで55cmを測る。

ピットはⅡ期床面では検出されなかったが，Ⅰ期床面においては3個確認された。いずれも深さ20cm前後と浅く，柱穴とは考えられない。

遺　物（第7・8図，図版29・40）

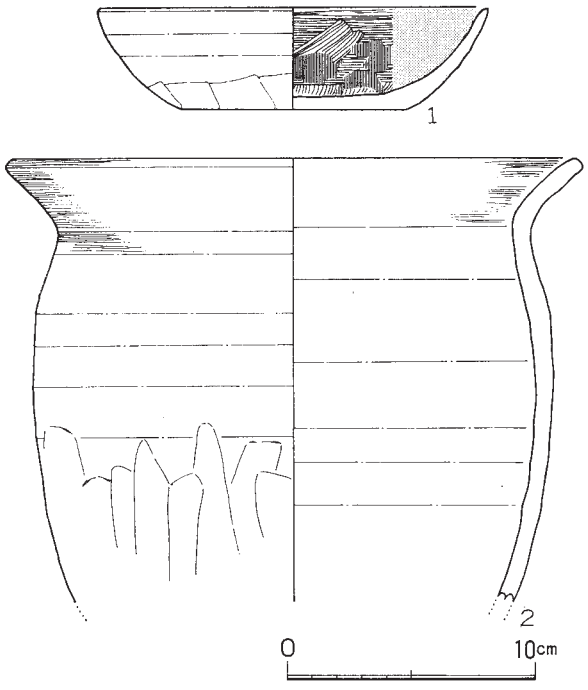
Ⅰ期に伴うと考えられる遺物はなかったが，Ⅱ期における床面から土師器杯，カマド奥壁で帯金具（丸鞆）各1点が出土した。その他堆積土中より土師器・須恵器片が出土している。

〔土　師　器〕

杯（第7図1）　Ⅱ期の床面直上で検出された。全体の1/2が残存する。推定口径15.6cm，底径9cm，器高4.1cmを測る。ロクロ成形によるものであり，底部は平底で大きく，体部は丸みをもっ

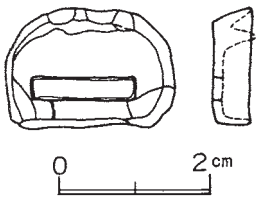
壁際はそれほどでない。Ⅰ期の床面は，Ⅱ期の床面の約5cm下から検出されたものであり，Ⅱ期床面より堅いが非常に凹凸が多い。部分的に赤変しているところがある。

カマドは煙道をもたない構造で，北壁やや東寄りに構築されている。Ⅱ期のカマドは，前段階で利用されていたカマドを修復し使用している。Ⅰ期床面におけるカマドは，北壁よりやや張り出して構築されている。袖は作り付けであり，底面はピット状にやや窪んだ状態を呈しており，奥壁は約30°の角度をもって立ち上がる。焚口



第7図 2号住居跡出土土師器

て立ち上がる。調整は外面底部から体部下端には手持ちヘラケズリが加えられており，内面底部は一定方向，体部は横方向のヘラミガキが施されている。口縁部にはヨコナデが観察される。さらに内面は黒色処理され，漆の被膜が部分的に付着している。



第８図　２号住居跡出土帯金具

甕（第７図２）　住居跡埋土内より検出された。口縁部から体部下半にかけて残存する1/4を復元実測した。体部はやや内彎気味に立ち上がり，「く」の字状に外反する口縁部に至る。内外面ともロクロ痕が顕著に観察され，体部下半外面にはヘラケズリが加えられている。推定口径23㎝，現存高17.9㎝を測る。器肉は７㎜とほぼ均一である。胎土は若干砂粒を含み，良好な焼きである。

〔そ　の　他〕

帯金具（第８図）　Ⅱ期のカマド奥壁に密着した状態で検出された丸鞆で，銅製のものに漆を塗り仕上げている。縦1.6㎝，横2.2㎝，幅５㎜を測る小型のものである。下部には縦３㎜，横13㎜の長方形の窓を有する。また裏面には三角状に３個の突起がある。遺存状態は非常に悪い。

ま　と　め

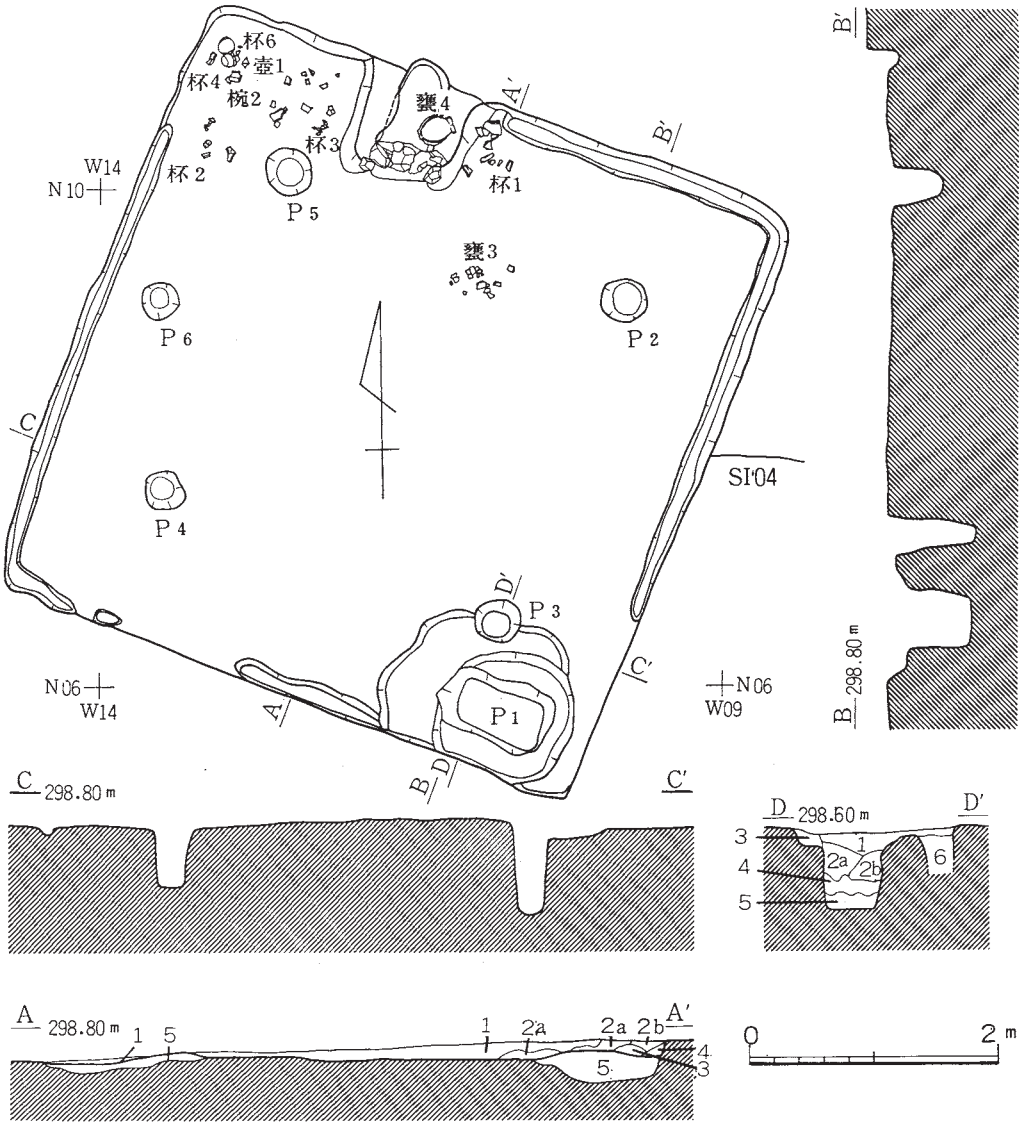
本住居跡は，北壁にカマドをもつ調査区中最も小さい住居跡である。床面が２面あることから建て替えの可能性が考えられる。Ⅰ期の遺物はないが，Ⅱ期の使用年代は床面直上出土の杯などから見て，ロクロ土師器の時期のなかでも前半に位置づけられる。

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（第９・10図）

２号住居跡と５号住居跡の中間において４号住居跡に東壁の一部を切られた状態で検出された。確認面は地山ローム層である。南西に若干傾斜した所に位置し，後世の削平によって南部の床面はすでに露出していた部分もあった。平面プランは，東西5.10m，南北5.04mの方形のプランを呈している。堆積土は，最も深い北側で18㎝を測る。大部分は暗茶褐色土であり，壁付近においては黒褐色土，暗黄褐色土が折り重なるように堆積している。

床面中央部は地山ローム層を利用し床としているが，壁付近は四周とも住居跡の掘形に，黒色土小ブロックやロームブロック混じりの暗黄褐色土を入れ，貼り床にしている。割合固くしまっており，凹凸もあまりなく平坦な床面で，床面積は22㎡である。また，カマド付近の床面上には炭化材がかなり散らばっており，床面が若干赤変している部分もみられた。壁面は北壁で約18㎝，東西両壁においても３～15㎝を測り急な立ち上がりをみせるが，南壁は削平のためほとんど遺存していない。南壁の一部，北西・南東コーナー部分を除いて幅10～20㎝，深さ５～10㎝の溝がまわる。住居跡の各コーナーを結ぶ対角線上には４本の柱穴があり，南東コーナーには貯蔵穴状



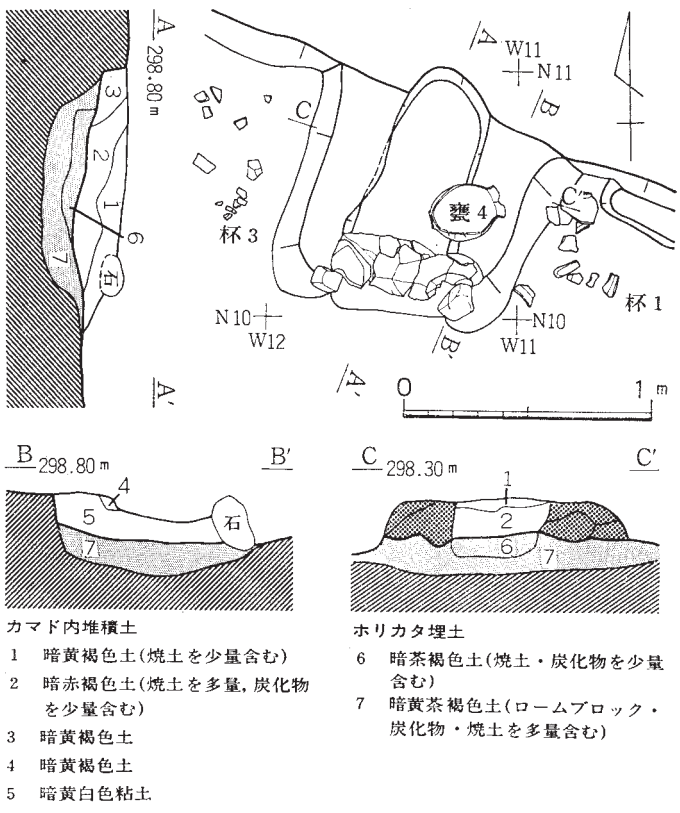
住居跡内堆積土

1　暗茶褐色土(焼土・炭化物を少量，ローム粒を多量含む)
2a　暗茶褐色土(焼土・炭化物を少量，遺物を多量含む)
2b　明茶褐色土(焼土・炭化物を少量含む)
3　黒褐色土(焼土・炭化物を少量，遺物を多量含む)
4　暗黄褐色土(焼土・炭化物を少量含む)
5　暗黄褐色土

Pi 内堆積土

1　暗茶褐色土(炭化物・ローム粒を少量含む)
2a　黒褐色土(ローム粒・ローム小ブロックを少量含む)
2b　黒褐色土(ローム粒を多量含む)
3　暗黄褐色土(炭化物を少量含む)
4　暗茶褐色土(ローム粒・炭化物・焼土を少量含む)
5　暗黄褐色土(ローム粒・炭化物・焼土を少量含む)
6　暗黄褐色土(ローム粒を少量含む)

第9図　3号住居跡



第10図　３号住居跡カマド

ピットが１個ある。その他西壁付近に小ピット１個を検出した。柱穴は床面上で径30cm前後，深さ40～75cmを測る。貯蔵穴状ピットは上面削平を受けているが，ピットの周囲に土手状の高まりを持つ有堤ピットと思われる。この土手の内側はいったん床面より下がって10～20cmの幅で平坦になり，その中に長径90cm，短径50cm，深さ50cmの箱形を呈するピットがある。このピットの埋土は，ローム粒や焼土，炭化物などを若干含む黒褐色土，暗茶褐色土である。

カマドは北壁中央よりやや西側に位置し，上部が削平された状態で検出された。袖部は灰白色粘土によって構築され，袖の先端には細長い袖石が立ててある。燃焼部では袖石付近に凝灰岩が検出された。この凝灰岩は長さ60cm，幅23cm，厚さ10cmの板石で幾つかに割れていたが，これは焚口の天井部を構成していたものが転落し崩壊したものと考えられる。焚口部幅は約40cmで，奥壁までは95cmと燃焼部はやや長く北壁より若干突き出て，底面は皿状を呈している。煙道は検出されなかったが，遺存状態からみてカマドは煙道をもたない構造であろうと思われる。

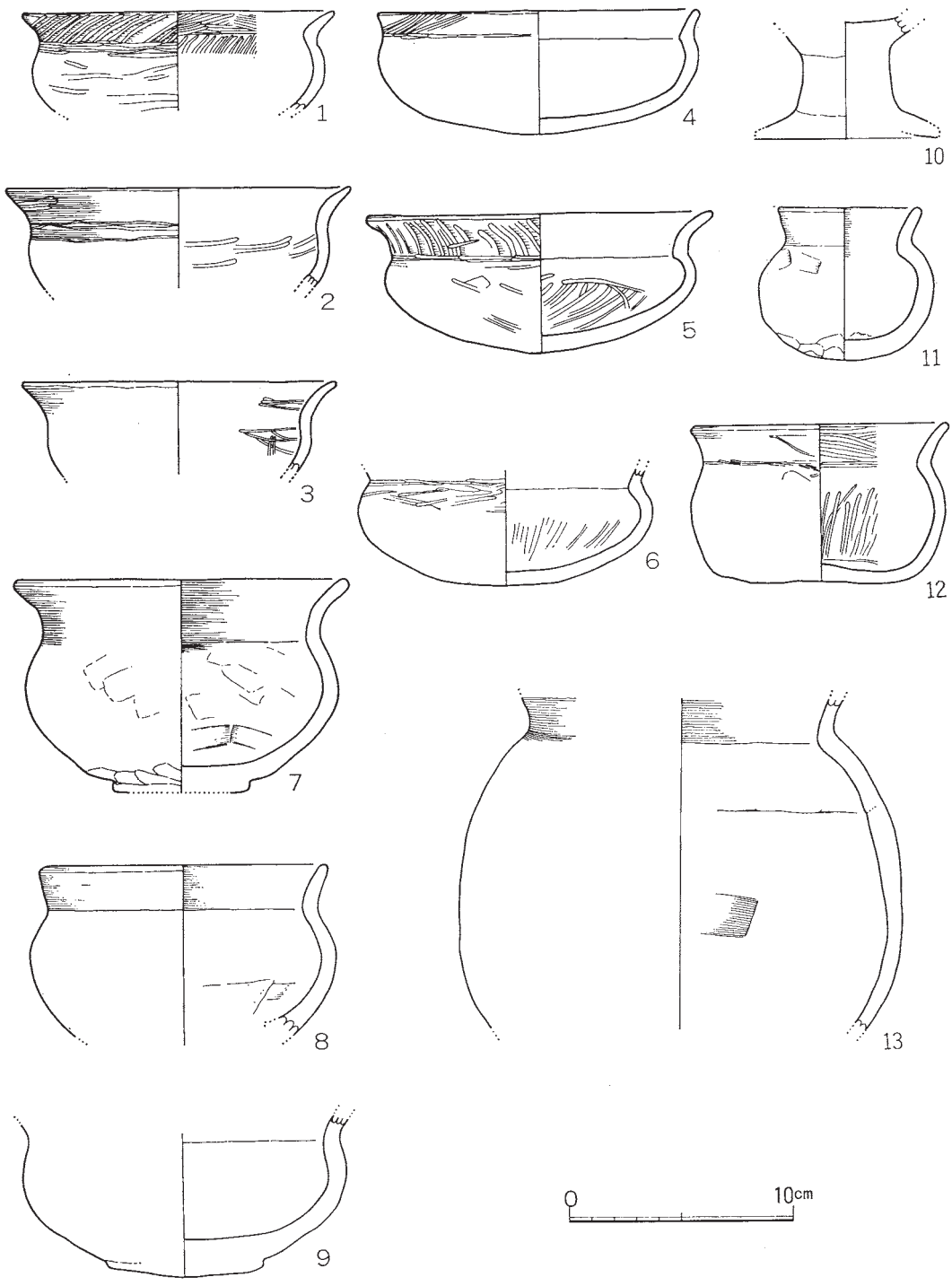
遺　　物（第11・12図，図版29）

本住居跡の遺物出土状況は，カマド周辺，北西コーナー付近の床面上，あるいはP_1上面で個体数にして十数点検出された。

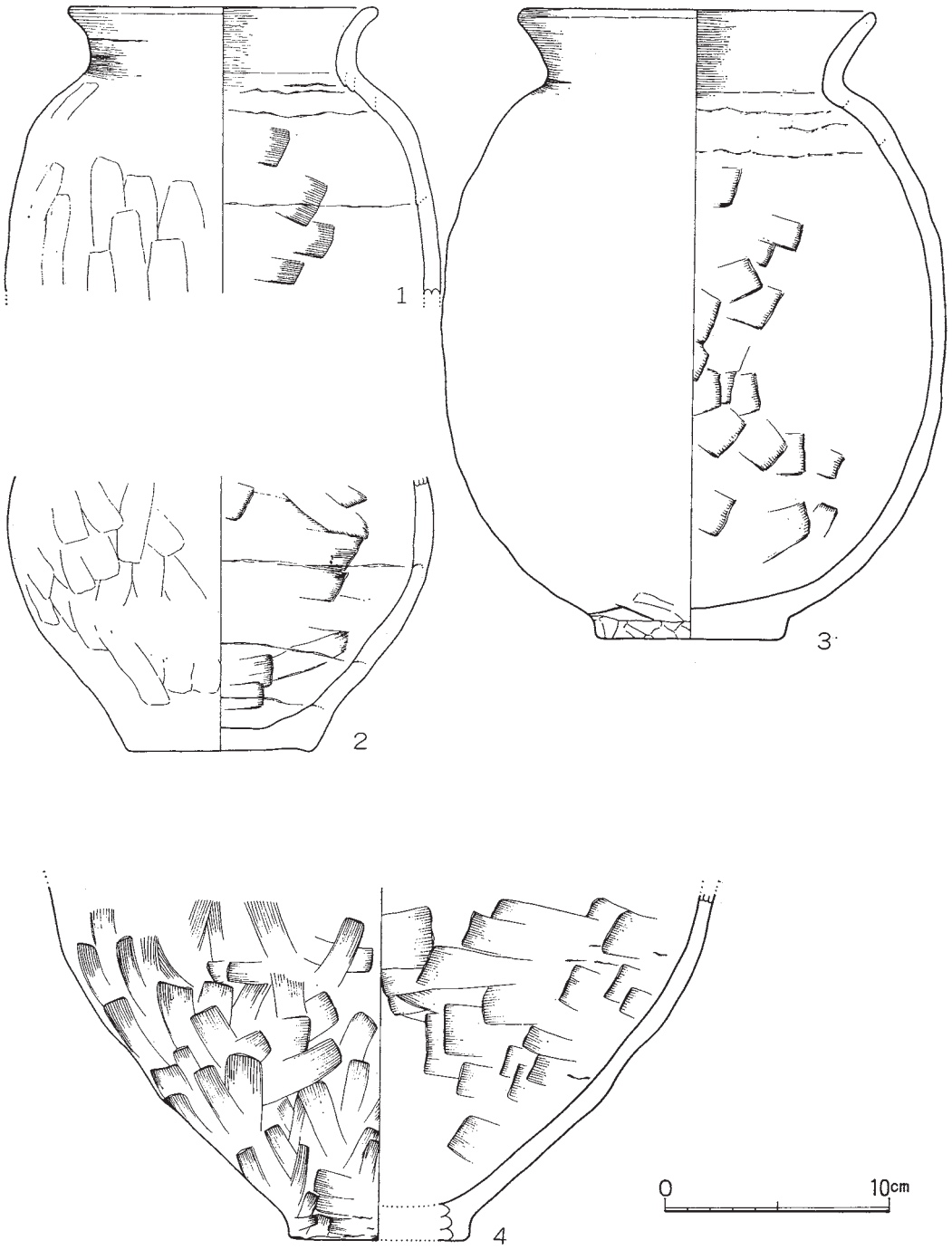
〔土　師　器〕

杯１（第11図１）　カマドの西側床面上で検出された杯で，口縁部から体部にかけ1/4が現存する。脂土が緻密であり，焼成は良好な土器である。器形は，体部は内彎気味に立ち上がり，頸部内面に稜線を形成し，外反する口縁部に至る。器画調整は全面ヘラミガキが明瞭に観察される。

外面口縁部はヨコナデの後斜方向のミガキ，体部は横方向のミガキであり，内面口縁部は横方向



第11図　3号住居跡出土土師器



第12図　３号住居跡出土土師器

のミガキ，頸部から体部は縦方向のミガキがそれぞれ施されている。法量は推定口径13.9cm，現存高4.4cmを測る。

杯２（第11図２）　西壁沿いの床面上から検出されたものであり，口縁部から体部にかけて現存する1/4を復元実測した。遺存状態は悪く内外面とも器肌が荒れている。やや丸みをもって立ち上がる体部より外反する口縁部に至るが，その際頸部内面に不明瞭ではあるが稜が観察される。調整は全面ヘラミガキが施されている。推定口径15.3cm，現存高4.4cmを測る。色調は内外面とも赤褐色を呈している。

杯３（第11図３）　カマド左袖付近の床面上で検出された遺物で，口縁部から体部にかけて現存する約1/5を復元実測した。体部は丸みをもって立ち上がり，口縁部は大きく外反する。調整は内外面ヘラミガキを行っている。また仕上げの段階で内外両面に，赤褐色の化粧土を塗っているようである。法量は推定口径14cm，現存高４cmを測る。

杯４（第11図４）　北西コーナー部検出土器群中最も壁寄りから出土した遺物であり，全体の1/2が現存する。推定口径は14.2cm，器高5.5cmを測る。器肉は底部から体部上半までは６㎜とほぼ均一であるが，口縁部は４㎜弱とやや薄くなる。器形は，丸底の底部より内彎しながら立ち上がり，短く外反する口縁部に至る。その際頸部内面には明瞭に稜を形成する。調整は内外面ともに摩滅が著しいが，外面口縁部は斜方向のヘラミガキ，体部は横方向のヘラミガキ，底部はヘラケズリの後ヘラミガキを施し，内面は全面ヘラミガキを施している。また，内外面ともに赤褐色の化粧土が，部分的に観察される。

杯５（第11図５）　有堤ピット上面で検出された遺物で，全体の3/5が残存する。胎土は緻密であり，色調は内外面ともに赤褐色を呈している。口径15.4cm，器高6.2cmを測り，器肉は底部がやや厚く８㎜，体部から口縁部は５㎜前後を測る。底部は丸底であり，体部は内彎しながら立ち上がり，頸部で内面に稜を形成する。頸部から口縁端部は，直立気味に立ち上がった後外反する。調整は内外面とも全面ヘラミガキが丁寧に行われている。外面のヘラミガキ方向は底部は不定方向，体部は横方向，口縁部は横方向の後斜方向である。内面のヘラミガキ方向は底部は放射状，体部上半から口縁部は横方向と思われるが，器肌が荒れているため不明瞭である。外面底部から体部下半には，ミガキを行う前のヘラケズリ痕が明瞭ではないが観察される。

杯６（第11図６）　北西コーナー部の土器群中において検出された遺物であり，口縁部と体部の一部を欠く。内外面とも器肌の荒れが激しく観察が困難であるが，器面調整は内外面ともにヘラミガキ再調整が行われているようである。器形は，底部は丸底で丸みをもって立ち上がり，頸部において若干つぼまり，口縁部は外反しながら開く。法量は残存口縁部径12.2cm，残存高5.2cmを測る。色調は内外面とも赤褐色を呈している。

椀１（第11図７）　P_1埋土内検出の土器であり，全体の1/2が現存する。口径14.8cm，底径６cm，

器高9.5cmを測る。底部は平底であるが，体部よりやや突出気味に形成されている。体部は内彎しながら丸みをもって立ち上がり，頸部内外面に稜線をつくり外反する口縁部に移行する。器面調整は，外面口縁部から頸部にはヨコナデ，体部もナデが施されているようであり，体部下端にはヘラケズリ痕が観察される。内面口縁部から体部上半はヨコナデ，体部下半から底部はヘラナデが施されている。胎土は緻密であり焼成は良好である。

椀２（第11図８）　北西コーナー部床面上で検出された遺物であり，口縁部から体部下半にかけて残存する約1/3を復元実測した。器肌は二次加熱を受けたものとみられ，外面は荒れが著しい。器形は，体部は内彎しながら立ち上がり，直線的に外反する口縁部に至る。調整は，外面は不明瞭であるが，内面口縁部はヨコナデ，体部はヘラナデが施されている。推定口径12.8cm，現存高6.6cmを測る。器肉は７㎜とほぼ均一である。

椀３（第11図９）　P_1上面において検出された。口縁部のすべてと，頸部から体部にかけて約1/3を欠損している。底部は平底であるがやや不安定である。体部は内彎しながら立ち上がり，外傾する頸部に至る。椀１と同様の器形を呈しているものと思われる。法量は，口径は不明であるが，体部最大径は14.3cm，底径6.9cm，現存高は７㎝を測る。器肉は８㎜前後とやや厚手である。

壺１（第11図11）　北西コーナー部検出土器のひとつであり，壺２におおわれるような状態で出土した。口縁部を若干欠くがほぼ完形の小型の壺である。口径6.4cm，体部最大径7.8cm，器高6.6cmを測る。器肉は厚く底部で９㎜，口縁部で５㎜を測る。器形は，丸底の底部から球状に内彎して立ち上がり，直線的に外傾して口縁部に至る。外面調整は，底部はヘラケズリ，体部はナデ，口縁部はヨコナデが施され，内面調整は底部から体部上半はヘラナデ，口縁部はヨコナデが施されている。胎土は緻密であり，色調は暗黄褐色を呈している。体部内外面と底部外面の一部には，黒斑が観察される。

壺２（第11図12）　北西コーナー付近で壺１と重なった状態で出土した遺物であり，ほぼ完形品である。口径11.4cm，底径６㎝，器高7.1cmを測る。底部は若干上げ底を呈しており，体部は内彎しながら立ち上がり頸部に至る。口縁部は外反するが，その際頸部において括れを呈し内側には稜線を成す。調整は，外面は摩滅が著しく調整不明な部分もあるが，底部から体部下端にかけてはヘラケズリの痕跡があり，口縁部はヨコナデの後ヘラミガキが施されている。内面は全面ヘラミガキである。色調は内外面ともにくすんだ赤褐色を呈しており，二次加熱を受けている。

高杯（第11図10）　P_1の埋土上面で検出された遺物であり，杯部の底部から脚部全体にかけ1/3が残存する。胎土は緻密であり色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。遺存状態が悪く明確に器形を捉えることは困難であるが，脚はずんどう形を呈しており，それに短く開く裾部がつく。器面調整は，ヘラミガキが内外面に施されているようであるが不明瞭である。法量は脚部上端（杯部との接点）径は４㎝，下端は4.8cm，裾部は推定8.2cm，残存高は5.1cmを測る。

甕１（第12図１）　カマドの右袖付近において検出された遺物であり，口縁部から体部上半にかけての1/4を復元実測した。推定口径13.8cm，現存高12.8cm，体部最大径19.3cmを測り，最大径を体部中央にもつ甕である。器肉は７㎜と均一である。体部上半はやや内彎気味に立ち上がり，肩部では若干の張りを持っている。口縁部は外反しながら立ち上がる。器画調整は，外面口縁部から頸部には丁寧にヨコナデが施されており，肩部はナデ，体部はヘラケズリが施されている。内面は，口縁部はヨコナデ，体部は横方向のヘラナデである。また内面体部上半から頸部にかけては，積み上げの痕跡が顕著に残っている。

甕２（第12図２）　カマドの南東方向床面から検出された遺物で，体部中央から底部にかけて現存する1/2を復元実測した。体部最大径19cm，底径8.2cm，現存高12.1cmを測る。器形は，平底の底部より体部は内彎気味に立ち上がる。器面調整は，外面は体部下端から体部中央までヘラケズリが施されており，内面は横方向のヘラナデが行われている。また，積み上げ痕が明瞭に観察される。胎土は砂粒を若干含み，色調は淡赤褐色を呈するが部分的に黒斑がみられる。

甕３（第12図３）　カマド右袖部において横転した状態で検出された遺物で，約3/5が現存する。器形は約１cmほど凸状に突き出たやや上げ底風の底部より，体部は丸みをもって立ち上がり，若干張りをみせる頸部を経て外反する口縁部に至る。器面調整は外面口縁部から肩部にかけてはヨコナデ，体部はナデ，体部下端にはヘラで押さえつけたような痕跡が観察される。内面は口縁部はヨコナデ，肩部から底部にはヘラナデが施されている。また肩部には積み上げの痕跡が顕著に残っている。推定口径は16cm，体部最大径22.4cm，底径８cm，器高28cmを測る。器肉は体部中央が５㎜とやや薄いが，他は８㎜前後を測る。胎土・焼成は良好である。色調は内外面とも淡赤褐色を呈しており，体部下半外面には一部黒斑がみられる。

甕４（第11図13）　住居跡埋土内から検出された，頸部の一部と体部の約1/2が残存する甕である。口縁端部と底部は遺存しない。頸部径13.6cm，体部最大径19.7cm，現存高14.7cmを測る。体部は球状を呈しており，外反して立ち上がる口縁部に移行する。調整は内外面とも，口縁部はヨコナデ，体部はナデが施されている。部分的にヘラナデの痕跡や積み上げ痕も観察される。

甕５（第12図４）　P_1上面で検出された遺物で，体部下半から底部にかけて残存する1/2を復元実測した。体部径29.6cm，底径7.8cm，現存高15.5cmを測る。平底を呈し，体部は外傾しながら立ち上がる。器面調整は内外面ともナデが施されている。また内面には数段の積み上げ痕が観察される。胎土は砂粒を若干含むが焼きは良い。

ま　と　め

本住居跡は，４号住居跡に切られ，削平が著しいため床面が露出していた部分もあったが，明確にプランをとらえることができた。北壁にカマドをもち，南東コーナー部に有堤ピットを有し，対角線上に４本の柱穴をもつ整然とした住居跡である。床面上においてかなりの炭化材が出土し，

また赤変している床面もみられることから，火災にあった可能性が強い。

遺物は土師器のみであるが，多量に検出された。器形も杯・高杯・椀・小型壺・甕など多種多様であり，図化できたものはほとんどが床面上，あるいはP_1上面で検出されている。本住居跡の年代は，出土した土師器の器形・技法から，古墳時代後期に位置づけられるものと思われる。

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（第13・14図）

調査区のＣ・Ｄ－３グリッド内で検出された。北西コーナーが３号住居跡の東壁と，また南東コーナー部で５号掘立柱建物跡とそれぞれ重複している。新旧関係は，４号住居跡が３号住居跡を切っており，５号掘立柱建物跡が４号住居跡を切っている。確認面は地山ローム層である。平面プランは，カマドが北壁の東よりに構築された東辺3.34m，南辺4.04m，西辺3.32m，北辺4.20mを測る東西が若干長い方形を呈している。遺構内埋土堆積状況は大別すると３層に分類でき，暗褐色土と暗茶褐色土がレンズ状堆積を示し，壁付近に黄褐色土が堆積している。床面は地山ローム層をそのまま敲きしめて床としている。あまり凹凸もなく平坦である。床面の南東コーナー部には東西115cm，南北約170cm，高さ10cmの上面平坦な台状の高まりがあるが，これは床面上に明褐色土を入れて構築している。壁は上部がかなり削平されているものの，残りの良い所で20cmを測ることができる。ほぼ真っ直ぐに立ち上がっている。

カマドは北壁より約1/2を張り出して構築しているが，袖部は右袖の基底部だけの検出であり，どのようにつくられていたかは不明である。燃焼部は，加熱により赤変し非常にかたい。煙道は上面が削平されており明瞭ではないが，溝状につき出たものが煙道の残存部と考えられる。

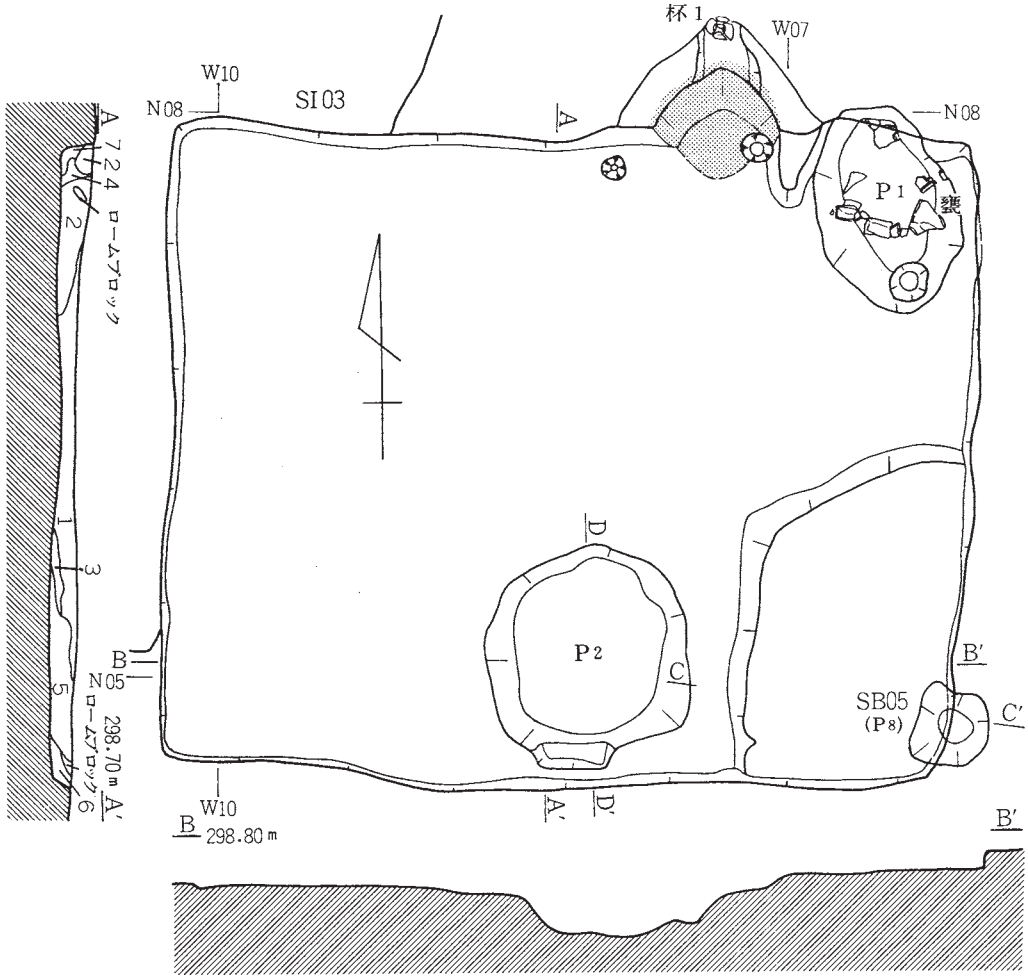
カマドの右側には長径約115cm，短径約70cm，深さ30cmのやや袋状を呈し，底面は擂鉢状の貯蔵穴と考えられるP_1がある。埋土は流れ込みによる自然堆積と判断され，出土した遺物や白色粘土塊も流れ込みの状態を示している。また南壁付近の中央には径約110cm，深さ約15cmの皿状のP_2がある。周溝や柱穴は検出されなかった。

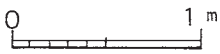
遺　　物〔第15図，図版29〕

遺物は，堆積土中から土師器片，須恵器片が多く出土しているほか，カマド煙道部やP_1から復元実測できる土師器杯や甕が出土した。

〔土　師　器〕

杯１（第15図１）　カマド煙道部において検出された杯であり，口縁部から体部の1/3を欠損する。口径13.9cm，底径6.4cm，器高4.4cmを測る。ロクロ成形によるもので，外面底部から体部下端は回転ヘラケズリ再調整が加えられており，体部下半から口縁部にはロクロによるナデが施されている。内面は黒色処理されてはいるが，その前段階に施されているミガキやナデの方向は



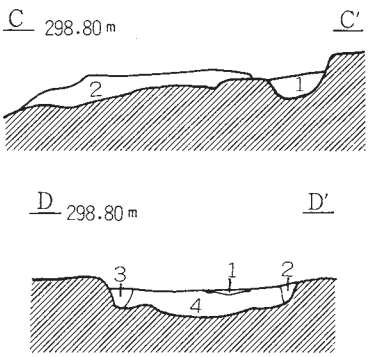


住居跡内堆積土

1　暗褐色土(しまり・粘性)
2　明褐色土(しまり・粘性)
3　明茶褐色土(ロームをブロック状に含む)
4　攪乱層
5　暗茶褐色土(木炭・焼土を含む)
6　暗褐色土(しまり・粘性あり)
7　黄褐色土(しまり・粘性あり)

P2内堆積土

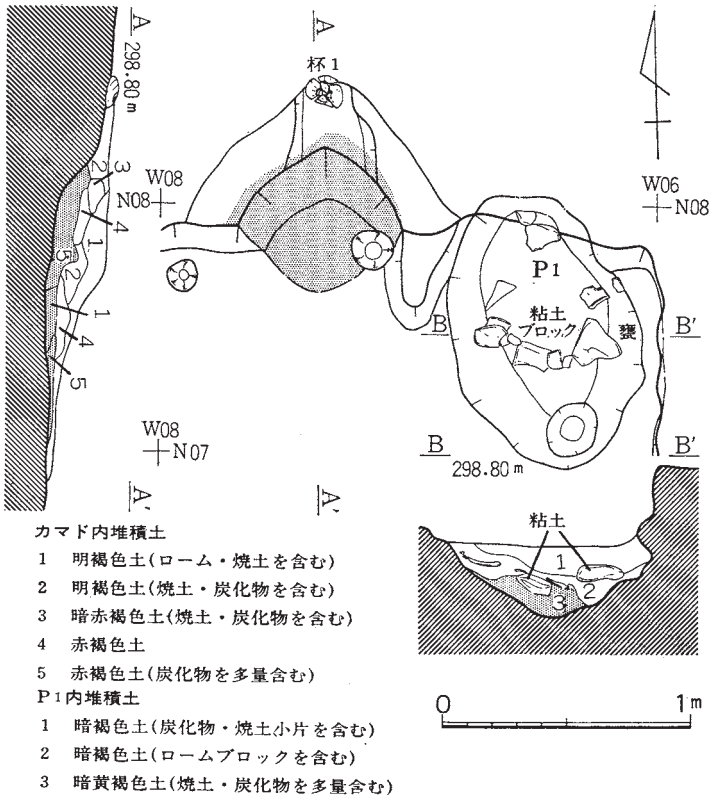
1　黒褐色土(焼土・炭化物を多量含む)
2　暗赤褐色土(炭化物・焼土を多量含む)
3　暗黄褐色土(炭化物を含む，SB05のP7埋土)
4　黄褐色土(焼土・炭化物・ロームブロックを含む)



P8内堆積土

1　暗茶褐色土(黒色土ブロック・炭化物を多量含む)
2　暗黄褐色ローム(黒褐色土ブロック・砂を含む)

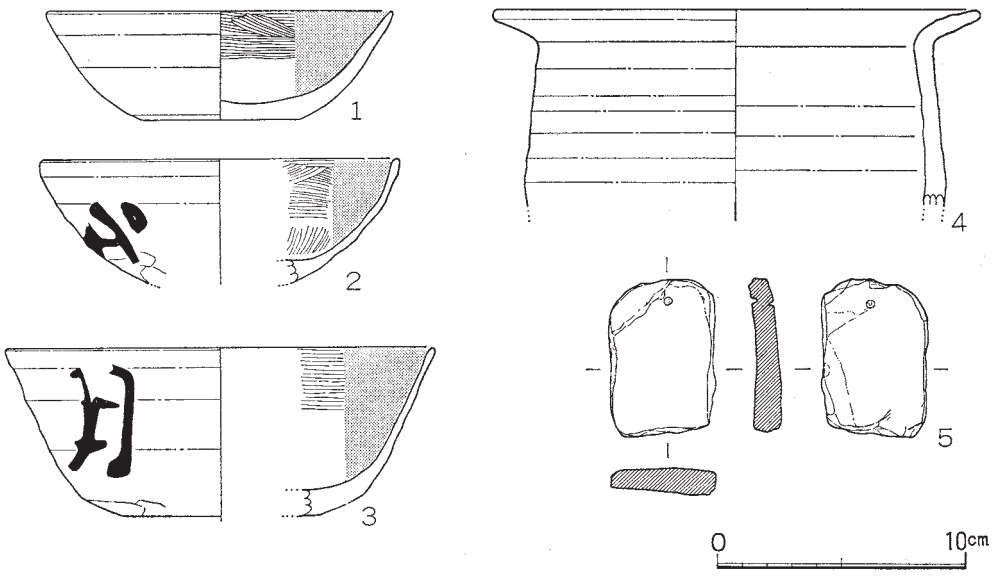
第13図　4号住居跡



第14図　４号住居跡カマド・貯蔵穴

不明瞭である。器形は平底の底部より体部はやや丸みをもって立ち上がり，直線的に立つ口縁部に至る。胎土に若干砂粒を含むが焼成は良好である。二次加熱を受けたものと思われ，赤変や器肌の荒れが部分的に観察される。

杯２（第15図２）　住居跡内堆積土中より出土したもので口縁部から体部下端にかけて残存する約1/5を復元実測した。ロクロ成形による内面黒色処理された杯である。体部はやや丸みをもって内彎気味に立ち上がる。



第15図　４号住居跡出土土師器・砥石

器面調整は，外面はロクロによるナデであるが，内面は全面ヘラミガキ再調整が施されている。底部から体部下半は放射状のミガキ，体部上半から口縁部は横方向のミガキがそれぞれ行われている。法量は推定口径15.5cm，現存高５cmを測るものである。体部外面に墨書があるが，部分的なため判読はできない。

杯３（第15図３）　P_1埋土内より検出された。全体の1/3を復元実測した。杯２とほぼ同様のつくりであるが，底部から体部下端には手持ちヘラケズリが行われており，体部立ち上がりは直線的である。推定口径17.2cm，底径８cm，器高6.8cmを測る大形の杯である。器肉は底部は１cmと厚いが，体部から口縁部は３mmと非常に薄い。胎土・焼成は良好である。体部外面の口縁部から体部中央にかけて「月」と判読できる墨書がある。

甕（第15図４）　P_1埋土内から検出された遺物で，口縁部から体部上半にかけて残存する1/4を図化した。体部はやや内彎気味に立ち上がり，大きく開く口縁部に至る。器面調整は内外面ともロクロによるナデが施されている。推定口径19.4cm，現存高８cmを測る。

〔そ　の　他〕

砥石（第15図５）　本住居跡検出面から出土した。長さ6.2cm，幅4.1cm，厚さ約９mmを測る不整方形を呈した砥石であり，石質は粘板石である。片側両面には完通しない径２mm前後の穴がある。滑らかな研磨面は，表裏両面と側面片側にみられる。

ま　と　め

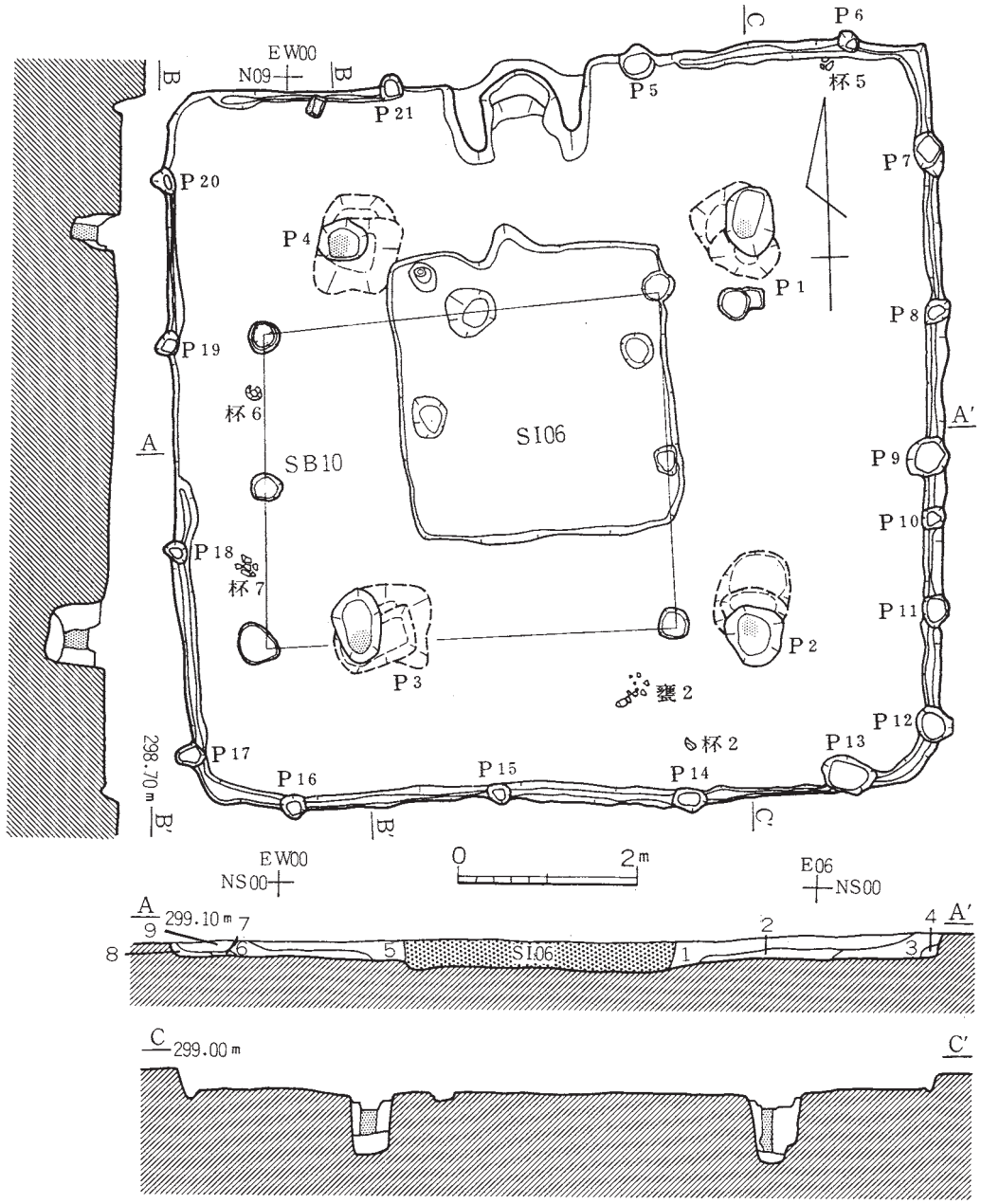
本住居跡は３号住居跡を切り，５号掘立柱建物跡に切られた状態で検出され，北壁にカマドをもつ住居跡である。南東コーナー部には台床が構築され他の住居跡とは異質な構造をもつ。遺構の年代はP_1出土の土師器が考定資料となるが，いずれもロクロ成形によるものであり，表杉ノ入式期の範疇で捉えられる。

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（第16・17図，図版４）

調査区Ｅ－３グリッドにおいて，６号住居跡，10号掘立柱建物跡と重複して検出され，その新旧関係は，10号掘立柱建物跡が最も新しく，次いで６号住居跡，５号住居跡となっている。重複関係にはあるものの，すべて５号住居跡プラン内での切り合いで，住居跡全体の規模を捉えるうえでは支障となっていない。検出面は地山ローム面で標高299.00m付近に位置する住居跡である。

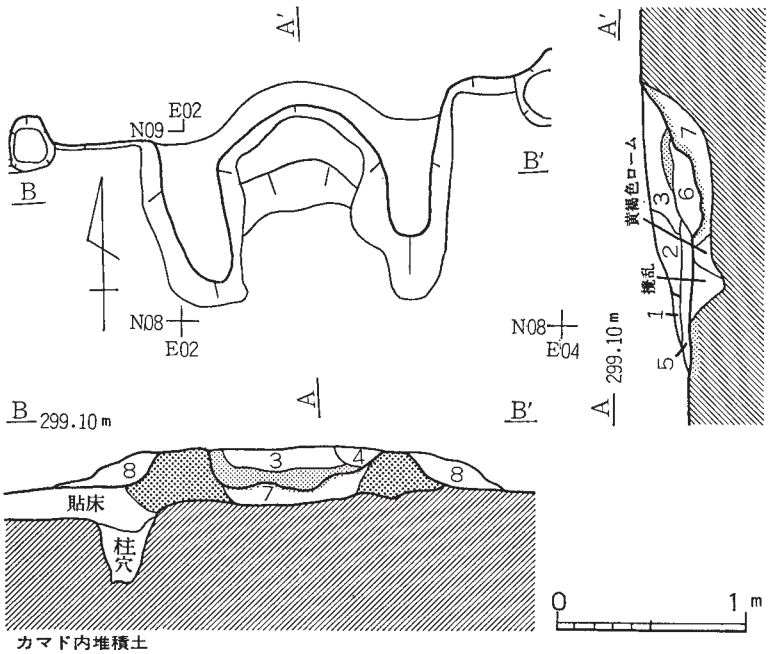
遺構内堆積土は，６号住居跡のため中央部分は不明であるが，壁際から将棋倒し状の堆積がみられ，基本的には自然堆積と考えられる。床面は黄褐色ロームを入れたたきしめたもので，カマド周辺のみ，茶褐色で比較的大粒の砂粒を含む土を床土としていた。特にカマド周辺部はしまりが強い。



住居跡内堆積土

1　茶褐色土（ローム微粒を含む）
2　暗褐色土（ローム微粒を含む）
3　黒褐色土（ローム微粒を含む）
4　暗黄褐色ローム
5　茶褐色土（ローム微粒を含む）
6　暗褐色土（ローム微粒と黒褐色土を含む）
7　暗褐色土（ローム微粒を含む）
8　暗褐色土（ロームを多量含み，やや明るい）
9　暗褐色土（ローム微粒を多量に含む）

第16図　5号住居跡



カマド内堆積土

1　暗褐色土
2　茶褐色土(小石を含む)
3　茶褐色土(小石を多量含む)
4　茶褐色土(小石を含む)
5　茶褐色土(焼土・小石を多量含む)
6　黄褐色ローム(火をうけている)
7　茶褐色土(小砂利まじりの粘土)
8　カマド堆積土流れ込み

第17図　5号住居跡カマド

遺構平面プランは，東辺8.20m，南辺8.0m，西辺7.90m，北辺8.50mの方形を呈し，北辺と南辺の中点を通る軸線の傾きは，磁北にほぼ一致する。本調査区において最も大型で，壁柱穴を有する唯一の住居跡である。壁高は北東コーナー付近が最も残りがよく約35cmを測り，南西コーナーにいくにつれ浅くなり，最も低い部分で５cm程である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。カマドは北辺に位置し，小石を含む茶褐色砂質土で構築されており，遺存状況は比較的良好である。壁より，右袖90cm，左袖87cm住居跡内へ張り出している。袖幅は右袖46cm，左袖55cmで左袖がやや幅広く構築されている。燃焼部は中央に軽い傾斜の段がつき，奥壁は住居跡北壁のラインで立ち上がっている。

柱穴は住居跡対角線上に４個と，東壁に６個，南壁に４個，西壁に４個，北壁に４個確認されている。対角線上に位置する主柱穴と考えられる４個は，２回の建て替えがあり，Ⅰ期・Ⅱ期の柱穴はⅢ期床面の黄褐色ロームを外した時点で検出されている。掘形平面形は，Ⅰ期のものは一辺１m前後，Ⅱ期のものは一辺70cm前後の方形を呈し，Ⅲ期のものは径40～50cmの円形に近い不整形で，新しくなるにつれ掘形が小さくなっていることがわかる。埋土はいずれの時期も黄褐色ロームを基調としている。柱痕はⅢ期の掘形において検出され，西側の２本は20cm，東側の２本は15cmの丸柱である。壁柱穴は各コーナーをはさんで２本，各壁の中間に２m前後の間隔をおい

第１表　５号住居跡壁柱穴深度表

ピットNo.	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}
深さ(cm)	28.8	34.6	29.5	21.9	39.8	21.5	21.8	66.0	56.5	17.9	25.5	23.9	32.6	31.6	43.2	29.5	42.3	60.8

て２本の，一辺４本を基準としているが，東辺では６本確認され，建て替えか，あるいは何らかの施設が設けられていたとも考えられる。各柱穴の大きさは，径20～45cmの間でばらつきがあるが，20cm程度のものが多くみられる。床面からの深さは第１表の通りである。

遺　　物（第18～20図，図版30・39・40）

堆積土中および床面より出土している。床面出土の遺物は，住居跡全体に散在して検出され，一ケ所に集中しているようなことはなかった。特に土師器は，ロクロ使用のものとロクロ未使用のものとが混在し，これまでの出土状態とは異なった様相である。さらに須恵器も共伴しており相互の編年上の位置，年代等を考えるうえで良好な資料になると思われる。

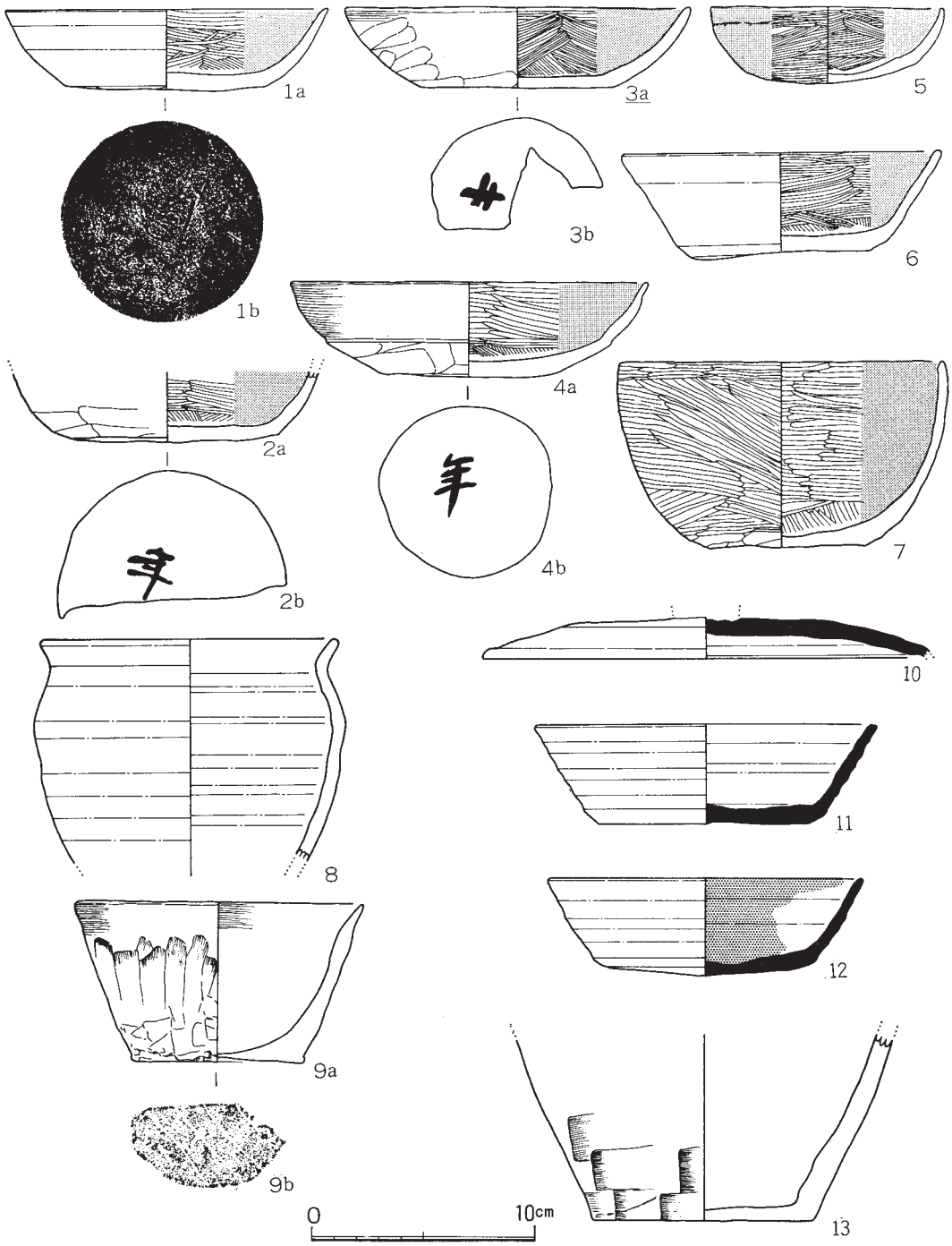
〔土　師　器〕

杯１（第18図１）　住居跡東側の床面で検出され，口縁部が1/3程欠損している。ロクロ成形によるもので，底部墨書の部分に回転糸切り痕がわずかに認められる。外面底部は手持ちヘラケズリ，体部はロクロ調整であるが，ロクロによる凹凸はみられない。内面は，底部に一定方向，口縁部に横方向のヘラミガキを施し，黒色処理している。底面内部には，わずかにロクロによる凹凸があるが，底部に切り離し痕がなければロクロ未使用のものと判別しにくい杯である。法量は，推定口径14.3cm，底径8.8cm，器高3.6cmを測る。底部の墨書は「山」と読むことができる。

杯２（第18図２）　住居跡南側の床面において出土したロクロ未使用の杯で，底部から体部下端にかけての1/2程の破片である。平底風を呈し，内彎しながら立ち上がって口縁部に至ると思われる。調整は外面に手持ちヘラケズリを行い，内面は一定方向のヘラミガキの後，黒色処理している。外面には，ケズリによって底部と体部を区切る軽い稜が形成されている。底径は約10.2cmを測り，底部に「年」と読める墨書がある。

杯３（第18図３）　住居跡堆積土中より出土した杯で，1/4の破片である。平底を呈し，体部外面は手持ちヘラケズリ，内面は底部に一定方向，口縁部に横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。器面ではロクロ痕が観察されず，ロクロ未使用と考えられるが，底部と体部の境に，比較的明瞭な稜を有していることから，ロクロ使用の可能性もある。図上推定口径15.2cm，底径8.4cm，器高3.6cmを測るが，感触ではひとまわり小さくなると思われる。底部に判読できない墨書がある。

杯４（第18図４）　カマド右脇において出土したが，床面より若干浮いた状態であった。口縁部のみ1/2程欠損している。ロクロ未使用と考えられ，平底の底部から内彎しながら立ち上がって口縁部に至る。体部外面には段を有している。調整は，外面が口縁部から段までをヨコナデ，段から底部に丁重な手持ちヘラケズリを行い，内面は底部を一定方向，口縁部に横方向のヘラミガキを行った後，黒色処理している。法量は，推定口径15.8cm，底径8.0cm，器高4.2cmを測る。胎土は精選されており，焼成も良好である。底部には「年」と読める墨書がある。



第18図　5号住居跡出土土師器・須恵器

杯５（第18図５）　北東コーナーの床面において検出された完形品である。ロクロ未使用で丸底を呈し，内外面とも黒色処理を施した杯である。調整は，内外面とも底部は一定方向，体部から口縁部にかけて横方向の細いヘラミガキを施しているが，外面には，器面全体にヘラケズリによる凹凸がみられ，内面体部下方にはヨコナデによる軽い括れがみられる。外面体部と口縁部に積み上げ痕が残っている。法量は口径10.2㎝，器高3.4㎝を測る。

杯６（第18図６）　住居跡西側の床面において，杯１と近接して検出されている。ロクロ成形によるもので，全体の1/3を欠損している。底部から体部下端の外面に回転ヘラケズリ再調整を行い，内面は底部を一定方向，口縁部から体部にかけて横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。ロクロによる凹凸が少なく，分厚い杯である。器面は二次焼成のため，脆弱になっている。法量は，口径14.2㎝，底径8.0㎝，器高4.4㎝を測る。

椀１（第18図７）　住居跡西壁近くの床面で検出されたほぼ完形の椀である。ロクロ未使用であるが，平底を呈し，底部から内彎しながら立ち上がって口縁部に至る。杯類に比べて器高が高い。調整は外面が，口縁部から体部にかけて斜め方向のヘラミガキを行い，底部から体部下端に手持ちヘラケズリを加えている。内面は，底部に一定方向，体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキを行い，その後黒色処理を施している。法量は口径14.3㎝，底径6.8㎝，器高8.2㎝を測る。焼成は良好である。

甕１（第18図８）　カマド左脇の袖崩壊土中より出土したもので，1/4の破片を復元実測した。ロクロを使用し，肩部において最大径を測る。口縁部は「く」の字状を呈し，内外面ともロクロ調整を行っている。推定口径13.2㎝で，器高もほぼ口径と同じ長さになると思われる。

甕２（第18図13）　住居跡南側の床面に密着して出土している。長胴になると思われるが，上半分は欠損している。調整は内外面ともヘラナデを行っており，残存部においては，ロクロ痕を観察することはできない。底部から体部の一部に火をうけた痕跡がみられる。底径9.3㎝を測り，焼成良好な甕である。

鉢（第18図９）　カマド右脇の袖崩壊土下部から出土し，全体の1/2が残存している。胴部が直線的に開くもので，口縁部断面が三角形を呈している。外面は，口縁部をヨコナデ，体部は縦方向のヘラナデ調整を行い，内面は口縁部ヨコナデ，体部ナデ調整である。胎土に砂粒を含む粗い作りの土器である。底部には木葉痕を有している。推定口径12.9㎝，底径7.5㎝，器高7.1㎝を測る。

〔須　恵　器〕

転用硯（第18図10）　蓋を転用したものである。南西コーナー部堆積土中出土で，1/3程の破片である。天井部は回転ヘラケズリを施し，宝珠つまみが付くと思われる。端部はわずかに折り返されている。内面全体には墨がしみついており，中央部は磨り減っている。口径は20㎝程にな

るものと思われる。

杯１（第18図11）　堆積土中より出土し，底部は1/2，体部から口縁部は3/4程欠損している。底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整を施し，底部中央において，わずかに回転ヘラ切り痕を観察することができる。色調は淡褐色を呈し，やや厚みのある土器である。法量は推定口径15.2cm，底径9.3cm，器高５cmを測る。

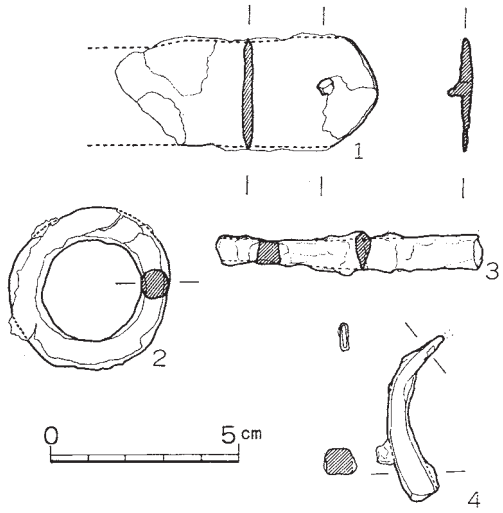
杯２（第18図12）　堆積土中より出土し，全体の1/2程欠損している。底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整を行い，底部切り離し技法は不明である。内面に樹脂状の付着物が全面にみられる。色調は，須恵器杯１と同様であるが，二次焼成のため一部赤褐色化している。法量は，口径14.0cm，底径9.2cm，器高4.4cmを測る。

〔鉄製品・その他〕

刀子（第19図３）　残存長７cm。刃部は幅９mmの断面三角形を呈し，茎部は幅６mmで断面長方形である。茎部は2.6cm程残っている。堆積土中出土である。

手鎌（第19図１）　残存長７cm，幅2.7cmを測る。形態から図面下側が刃部にあたると思われる。木部接合のための鋲が残存している。堆積土中出土である。

用途不明鉄製品１（第19図２）　直径4.2cmのリング状を呈し，断面は直径７mmの円形である。住居跡南西の貼り床内より出土している。

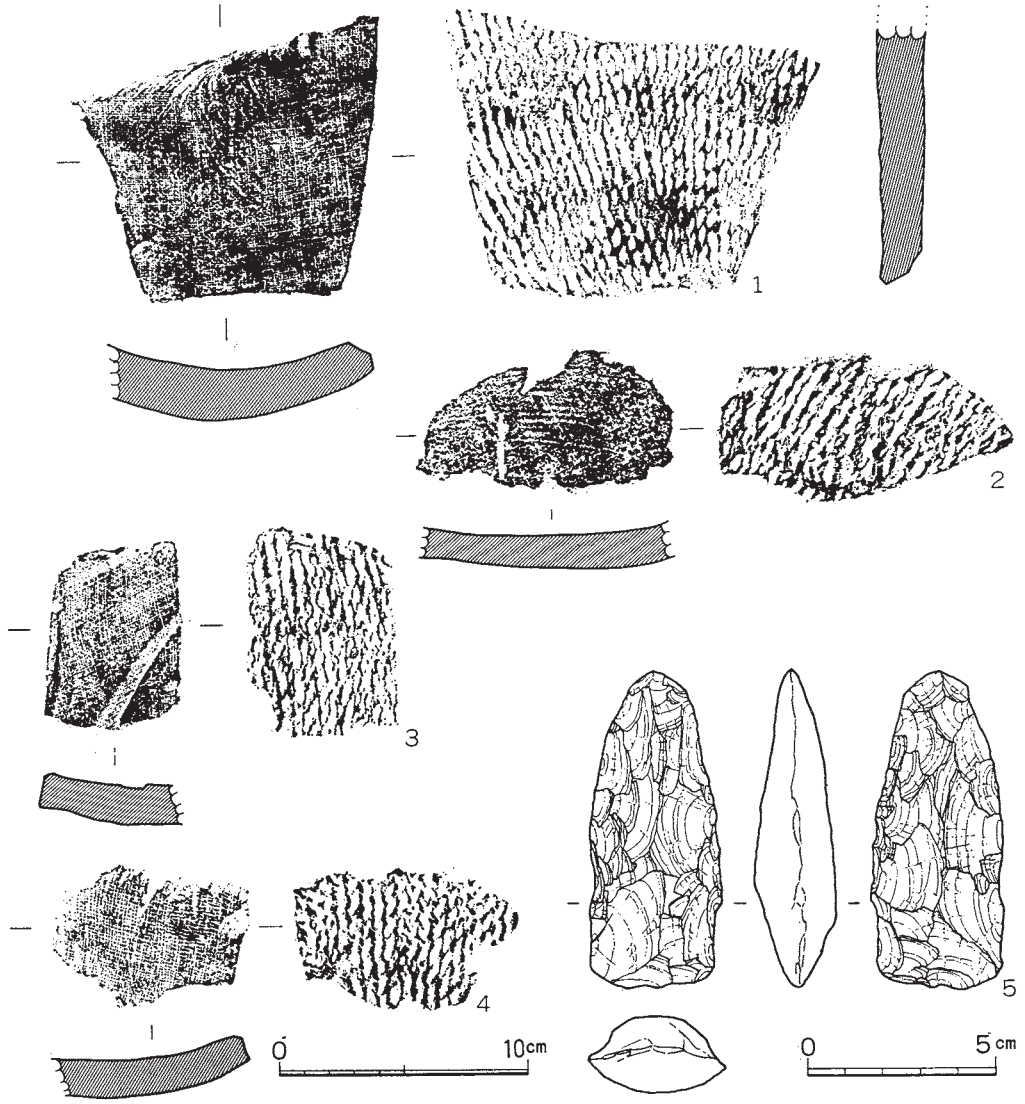


第19図　５号住居跡出土鉄製品

用途不明鉄製品２（第19図４）　残存長4.4cmである。断面は１辺６cmの方形で，先端にいくに従って平らになり，末端は刃部になっていた可能性がある。堆積土中出土である。

瓦（第20図１～４）　平瓦の破片で計４点出土している。すべて堆積土内より出土したもので側面と端面を残すものが２点（第20図１・３）側面のみ残すものが１点（第20図４）出土している。20図１は凹面において明瞭に面取りが行われているが，３・４は形式的に行われているだけである。いずれも凹面は平織りの布目痕，凸面は１段撚りＬを使用した縄叩き痕が認められる。色調は橙味黄褐色で焼成は良好とはいえない。

石篦状石器（第20図５）住居跡P_{11}埋土内より出土している。両面ともほぼ全面に剝離が施され，加工によって中央に稜が走っている。長二等辺三角形の形態を持ち，三角形底辺部に刃部をつくり出し，刃部のみ，つくり出しの際の剝離によって中央の稜線が消失している。石質は凝灰岩質で，摩滅が激しい。



第20図　５号住居跡出土瓦・石器

ま と め

５号住居跡は床面積68㎡で，本調査区において最も大型の住居跡である。柱穴掘形から，２回の建て替えが認められるが，図示した遺物のほとんどは，最終時期の床面において出土したもので，同時期の一括資料とすることが可能である。ただ住居跡に３時期の変遷があるように，土器にも漸進的な要素が数多くみられ，過渡的な様相を示しているということができる。以前の２期でも同じような様相を呈していたであろう。出土遺物はその形態から，国分寺下層式の範疇に収まると考えられるものが多く出土しているが，ロクロ成形による土器がみられることを考え合わせれば，国分寺下層式から表杉ノ入式への移行期にあたる資料と考えることができる。

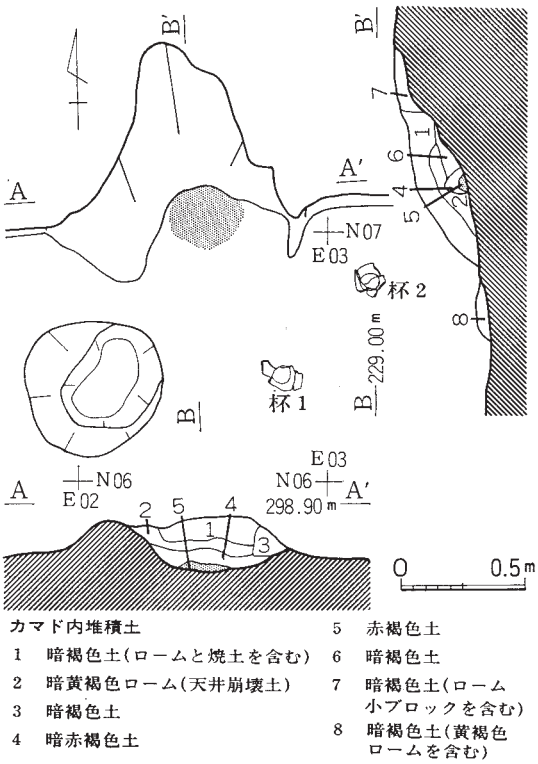
６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構（第21・22図，図版５）

Ｅ－３グリッドにおいて，５号住居跡プラン内に存在し，５号住居跡より新しく，10号掘立柱建物跡によって東壁の一部を破壊されている。当住居跡のセクションベルトによって確認されたもので，全体プランは５号住居跡床面近くで捉えることができた。平面プランは北辺にカマドを有す一辺３ｍの方形で，調査区でも小型の住居跡で，南辺と北辺の中点を通る軸線の傾きは，ほぼ磁北と一致する。遺構内堆積土は，暗褐色土と茶褐色土が主体となっており，壁際は将棋倒し状，中央はレンズ状の堆積をしめし，自然の営力によって埋没したものと考えられる。壁残存高は30～35cm程で，５号住居跡床面を５～10cm程掘り込んでいる。南辺，北辺の壁面は若干崩落しているが，その他は垂直に掘り込まれている。床面は地山ローム面をそのまま床面とし，さほどしまりはなく，若干の凹凸がある。

カマドは残存状態が悪く，燃焼部奥壁と煙出しの一部と思われる部分しか検出されず，袖部もわずかな痕跡をとどめるだけであったため，全体の規模を明確に捉えることはできなかった。

床面において３個のピットを確認している。P_1は径25cm程の不整形で深さ16cmを測る。隅に柱痕状の掘り込みがあるが，しまりがなく，底面まで掘りきれず，木根の撹乱と思われる。P_2は径35cmで深さ21.6cm，P_3は径40cm程で深さ17.2cmである。



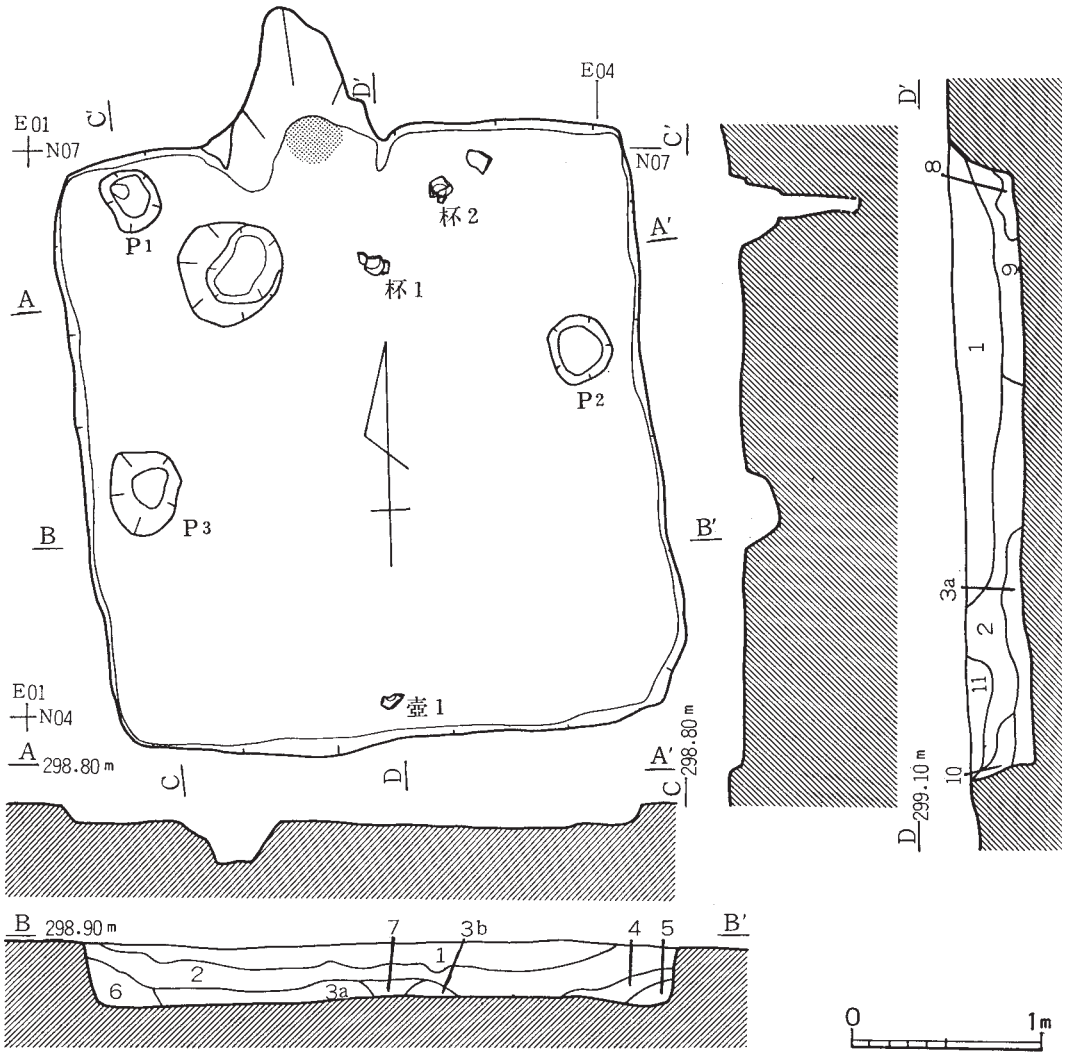
第21図　６号住居跡カマド

遺　　物（第23図，図版31）

遺物は堆積土中および床面より出土しているが，記述の通り，本住居跡は重複関係にあることから，堆積土上層の遺物は５号住居跡からの混入の可能性が考えられる。図示できたものは土師器３点，須恵器１点である。

〔土　師　器〕

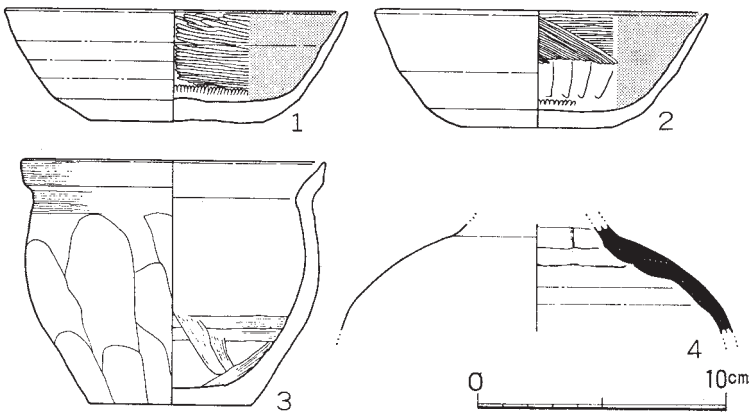
杯１（第23図１）　床面より出土したもので，完形に近い。ロクロ成形によるが，底部切り離し技法は不明である。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整が加えられている。体部下半部は丸みを帯びており，上半はわずかに内彎しながら立ち上がっている。内面は底部に



住居跡内堆積土

1　暗褐色土(ローム微粒を霜降り状に含む，しまりあり)
2　茶褐色土(ローム微粒と小ブロックを少量含む，しまりあり)
3a　暗褐色土((1)より暗く，粘性がややある)
3b　暗褐色土(ローム細ブロックを含む，粘性あり)
4　茶褐色土(焼土小ブロックと炭化物を含む)
5　暗褐色土(炭化物を含む)
6　暗褐色土(焼土微粒を含む)
7　茶褐色土(ローム微粒を多量含む)
8　黄褐色土(ローム焼土を含む)
9　暗褐色土(茶褐色土を含む，しまりあり)
10　茶褐色土(黄褐色ローム小ブロックを含む)
11　茶褐色土(ローム微粒を霜降り状に含む，しまりあり)

第22図　6号住居跡



第23図　6号住居跡出土土師器・須恵器

放射状，体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキ調整を施し，黒色処理している。口径13.7cm，底径6.9cm，器高4.5cmを測る。焼成は良好である。

杯２（第23図２）　床面より出土したもので，完形に近い。ロクロ成形によるが，底部切り離し技法は不明である。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整が加えられている。体部下端には，ヘラケズリによるわずかな稜がつき，杯１よりもやや直線的に外傾している。内面は，底部から体部下半にかけて放射状に，ナデに似たミガキ調整を行い，口縁部には横方向のヘラミガキを行っている。内面は黒色処理を施している。口径13.3cm，底径６cm，器高4.7cmを測る。

甕（第23図３）　床面より出土したもので，口縁部半分程が欠損している。ロクロを使用したもので，特に口縁部に顕著なロクロ痕がみられる。外面は体部中央を縦方向，底部近くは横方向のヘラケズリ調整を行っている。底部は軽くなでた程度である。内面は底部から体部下半にかけてナデ調整を行い，上半はロクロ調整である。法量は，推定口径12.1cm，底径6.6cm，器高9.8cmで小型の甕である。土器表面は二次焼成のため脆弱になっている。

〔須　恵　器〕

壺（第23図４）　堆積土内から検出された肩部の破片である。頸部内面には段があり，指圧痕とそのうえにナデ調整がみられるため，成形時には口縁部と胴部とを別々にひきだし，接合したことが読みとれる。現存高4.3cm，推定頸部径５cmで，丸みをもった肩になると考えられる。

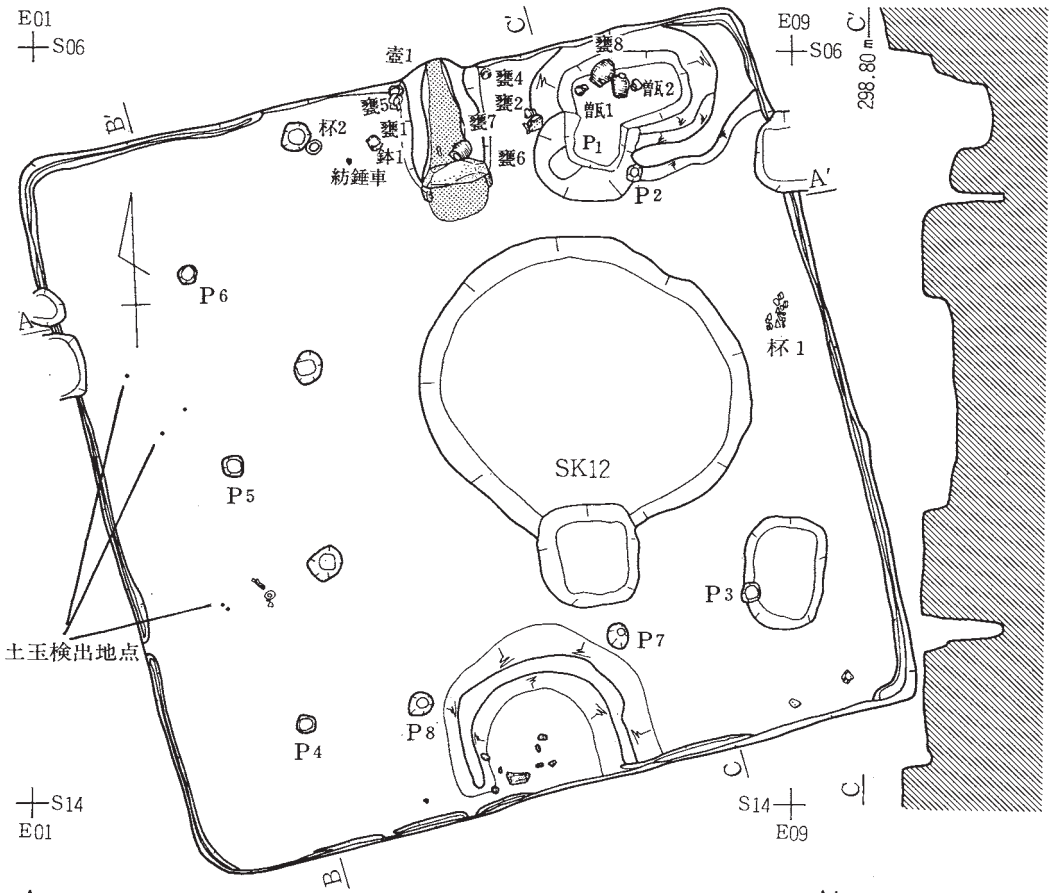
ま　と　め

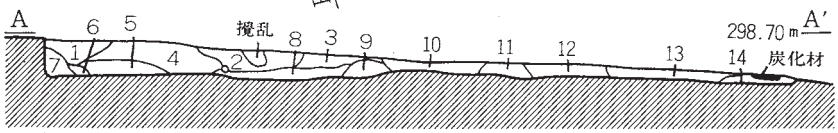
６号住居跡は北壁にカマドをもつ小型の住居跡で，柱穴・周溝は検出されていない。遺構の年代は，遺物の特徴からロクロ土師器使用時期として捉えられるが，遺構の重複関係と土師器杯底部調整から，ロクロ土師器使用時期のなかでも５号住居跡よりは後出する前半代としておく。

７号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（第24～27図，図版６～９）

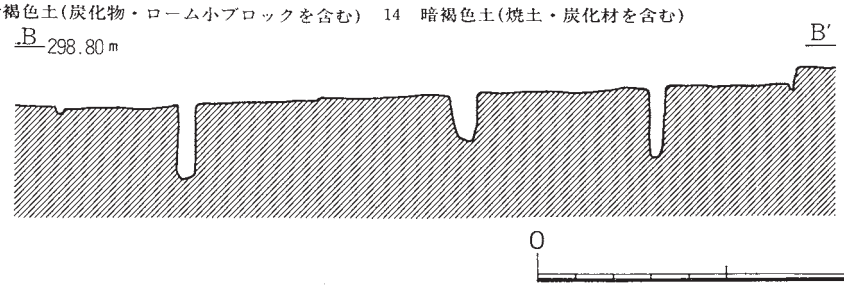
Ｅ－４からＥ－５グリッドにかけて検出された住居跡で，重複関係にある３・４・12号建物跡，12号土坑のなかで最も古い遺構である。プランはほぼ方形に近く１辺８ｍを測るが，東壁のみは





住居跡内堆積土

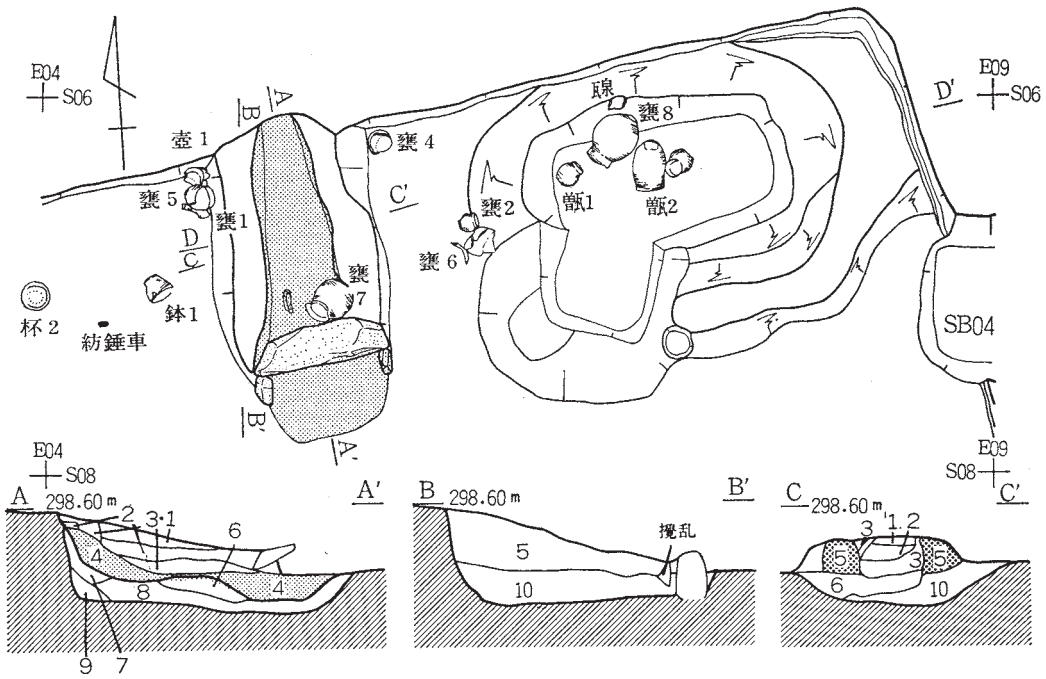
1　茶褐色土(焼土・炭化物を少量含む)
2　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)
3　茶褐色土(ローム微粒と黒色土を含む)
4　茶褐色土(ローム微粒と黒色土を含む)
5　茶褐色土(ローム微粒を多量含む)
6　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)
7　暗褐色土(炭化物・ローム小ブロックを含む)
8　暗褐色土(焼土・ローム微粒を多量，炭化物を含む)
9　茶褐色土(ローム・焼土微粒を多量含む)
10　暗褐色土(ローム微粒・炭化物を含む)
11　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)
12　暗褐色土(焼土・炭化物を含む)
13　暗褐色土(黄褐色ロームを多量含む)
14　暗褐色土(焼土・炭化材を含む)



第24図　7号住居跡

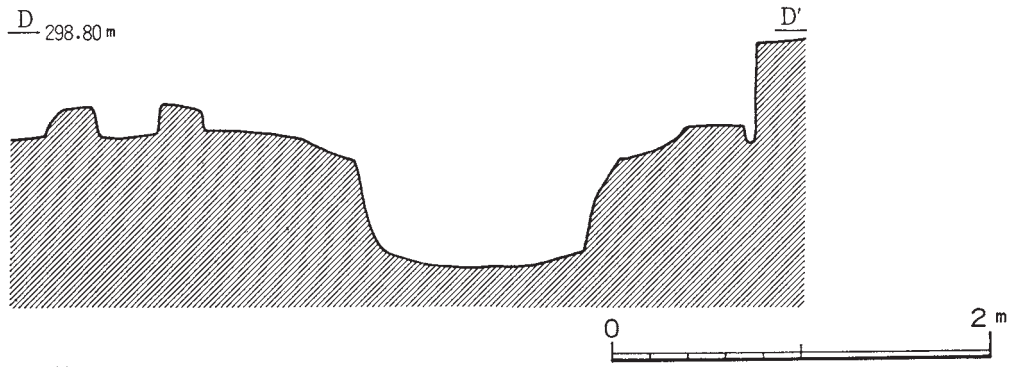
7.5mと短い。住居内堆積土はローム粒を混入した粒子の均一な黒褐色土が主体で，壁周辺には崩落土と思われる軟質のロームが堆積している。床面付近には焼土と多量の木炭が散乱していた。

壁は垂直に近い角度で立ち上がっており，遺存状況は北東コーナーで最も良く壁高45cmを測るが，西壁に移行するにつれ削平が著しく南西側では床面が露出する部分もみられた。床面はほぼ平坦でロームを直に床面としているが，西壁付近では黒色土を混じえたロームを部分的にたたき



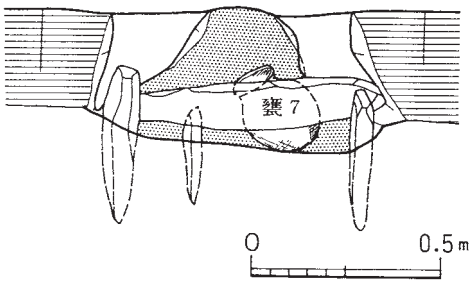
カマド内堆積土

1 暗茶褐色土(ロームと粘土を少量含む)
2 赤味暗茶褐色土(木炭・焼土を含む軟質)
3 白味黄褐色土(砂質粘土)
4 焼土
5 赤茶色土(粘土，焼けている)
6 赤味黄茶褐色土(焼土とローム粒を含む)
7 暗褐色土(粘土)
8 茶褐色土(ロームブロックを多量，焼土粒を少量含む)
9 暗茶褐色土(焼土粒を含む)
10 黄褐色土(ロームブロックを含む)



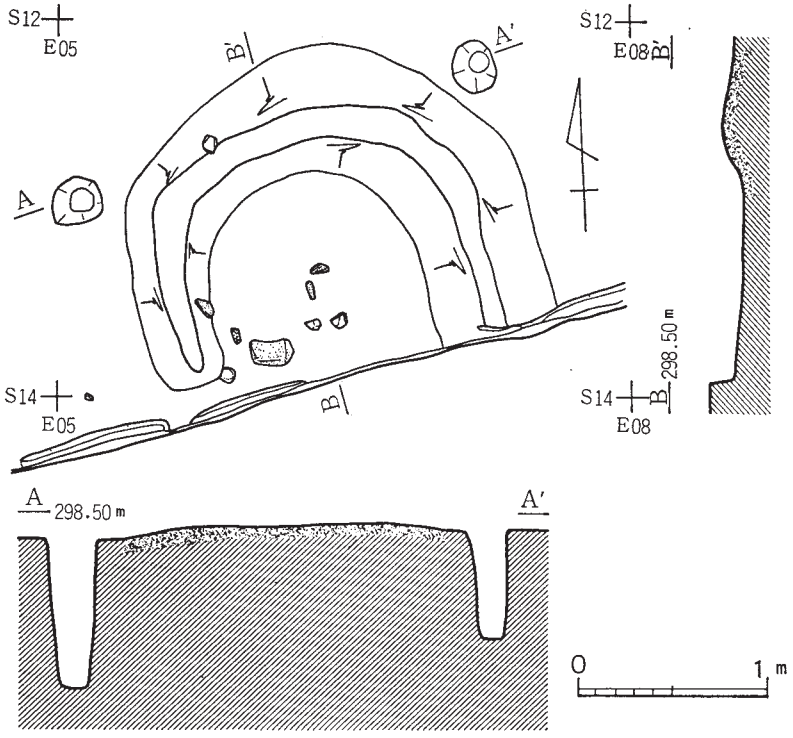
第25図 7号住居跡カマド・貯蔵穴

こんでいる。遺存度は，主に住居跡東半を４号建物跡と12号土坑とによって1/2程度破壊されているため良好とはいえない。周溝は幅・深さとも約10cm程度で，カマド付近と周堤部付近を除いてはほぼ壁沿いに巡る。



第26図　７号住居跡カマド

カマドは北壁中央やや東寄りに検出された。規模は両袖間0.9m，焚口から煙道先端まで1.7mで北壁をわずかに抉り込み煙道の先端がとりつき，燃焼部と煙道自体は住居内に張り出している。袖は黄茶褐色粘土を材料とし，幅25～30cm，長さ1.2mを測り，先端部には長さ40cmの凝灰岩を埋め込んでいる。この袖石の北側に両袖にかかる状態で扁平な凝灰岩割石が検出されたが，本来この石は袖石の上にかけ渡され焚口部を構成していたと考えられる。焚口の幅は57cmを測る。焚口部から奥に向かって約50cmのところに支石と思われる割石がカマド軸線からやや西寄りに埋め込まれていた。やはり凝灰岩である。カマドの焼け具合はこの焚口部を含め支石の奥20cmまでが最も焼けている部分である。従って燃焼部は焚口部から奥へ60cm入り込む。火床面は焚口から徐々に窪まり袖石間でやや平坦となる。後燃焼部の奥に向かって緩やかに登り再度平坦になって住居跡壁際で急激に立ち上がる。燃焼部奥壁から住居跡壁際まではさほど焼けておらず，また底面が先端にいくに従い狭まっているため住居内に張り出すカマド内部全体を燃焼部とすることはできず，機能的にはカマド内を燃焼部と煙道部に区切ることができる。またカマド下部には東西辺1.1m，



第27図　７号住居跡周堤部

南北辺1.4m，床面からの深さ20cmを測る不整楕円形のカマド掘形を検出した。底面は舟底形で壁の立ち上がりは緩やかである。このカマドの煙道と焚口を結ぶ軸線は北壁に対し垂直にはとりつかず，むしろ住居跡の中心点に向かっているといってよい。

ピットの検出は総計８個を数える。P_1はカマド東脇に検出された貯蔵穴と考えられるピットである。長軸1.4m，短軸0.8mで東西に長い長方形の掘り込みで深さは70cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面は急峻に立ち上がるが，底面から60cm上がったところから幅約30cmの緩斜面が周囲に取りつく。埋土は２層に分けられる自然堆積層であるが上・下層とも木炭粒を混入している。P_2～P_8は形状・位置等から柱穴と考えられるピットである。P_2・P_3・P_4・P_6は径20cm，深さ75～85cm，P_5は径20cm，深さ50cmで前記のピットより浅い。また南壁沿いに検出されたP_7・P_8は径約25cmとやや広く，深さはP_7で57cm，P_8で20cmを測る。

住居跡の南壁中央には佐平林Ⅰ区～Ⅳ区で周堤部とよんだ半円状の高まりが検出された。南壁から住居跡内に張り出し，全体の規模は東西辺2.1m，南北辺1.7mを測る。周堤は，床面からの高さ５～８cmで東側壁付近が最も高く，幅は40～60cmで北側が多少肥大気味である。床面から周堤にかけてはかたく踏み固められているが，周堀部内は軟らかく，踏まれた様子はない。

遺　　物（第28～30図，図版31～33）

土師器は，カマドからP_1にかけて集中して検出された。住居跡内の床面からも検出されているが疎らに散見するのみである。ただ南壁の周堤部内には大小の河原石が多く検出され，なかには明らかに加工あるいは使用したと思われる凹石の様なものも含まれている。

〔土　師　器〕

杯１（第28図１）　P_1南側床面から検出された大型の丸底杯で，全体の1/3程度を欠損している。口径24cm，器高７cm。胎土は極めて精選され密で，色調は赤茶褐色を呈し内外面とも部分的に黒斑がみうけられる。底部から口縁部への立ち上がりは，頸部で一旦直立気味に立ち上がった後大きく外反して口唇に至る。その際頸部内面に鈍重ではあるが稜線をつくる。器面調整は全面ヘラミガキであるが，前段階として口縁部外面にヨコナデ，底部外面にヘラケズリの痕跡がみられる。

杯２（第28図２）　カマド西側床面から正立の状態で検出された丸底の杯で完形品である。口径14.8cm，器高5.6cm，色調は橙味赤褐色を呈しているが，器面の剝落した部分では黄褐色となり，器表面の色調は化粧土の塗布によるものと考えられる。外面にはわずかの黒斑がある。頸部の立ち上がりは杯１と同様であるが，口縁部内面で若干の膨らみがあるもののほぼ直線的に外傾し口唇に至る。頸部内外面には不明瞭ながらも幾分かの稜線がみられ，底部外面には小さな範囲で平坦面が観察される。器画調整は全面ヘラミガキである。

杯３（第28図３）　住居跡南西区堆積土内から検出された遺物で，口縁部から体部にかかる1/4

程度の破片である。現存高４㎝，推定口径15.7㎝，頸部で一旦わずかに括れた後やや外反する口縁となるが，括れる際頸部外面に稜線を形成する。底部は欠損しているが丸底になると思われる。器面調整は全面ヘラミガキで，器表面の色調は，杯２と同じく化粧土の塗布によって橙味赤褐色を呈している。

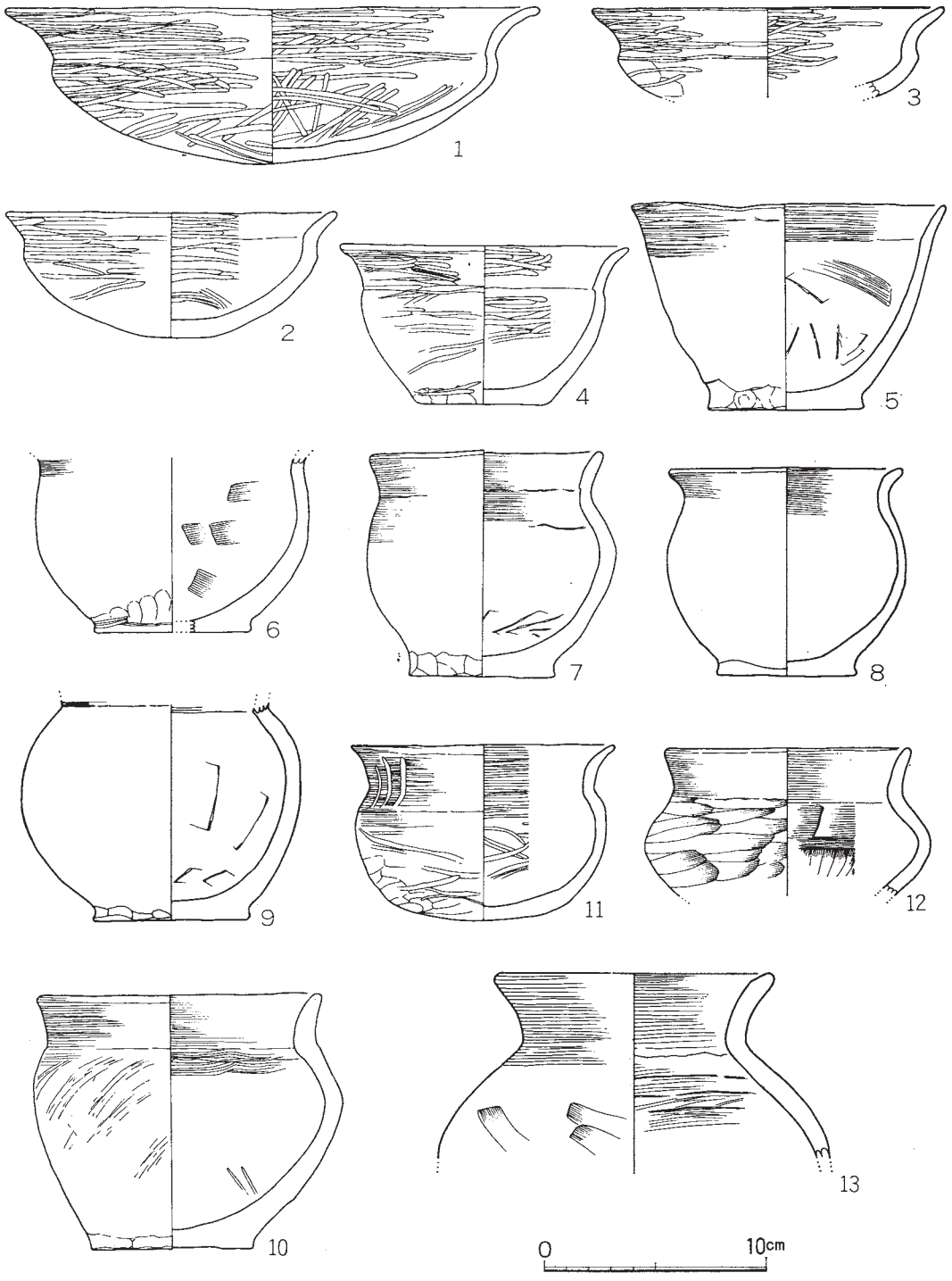
鉢１（第28図５）　カマド西脇床面から検出された遺物で，口縁から体部にかけて約1/4を欠損する。口径14.2㎝，底径７㎝，器高9.5㎝を測り，胎土には砂粒が多く混入し，色調は茶褐色で部分的に火を受け肌荒れが見られる。底部は平底で，わずかに直立した後若干丸みをもちながら立ち上がり口縁部で外傾して開く。器面調整は，内外面とも口縁部はヨコナデ，体部は外面でナデ，内面はヘラナデ及びナデが加えられている。底部には木葉痕を残す。

鉢２（第28図４）　住居跡北西区床面上層から検出された遺物で，大部分の口縁部と体部の一部を欠損している。底径６㎝，器高7.2㎝，推定口径13㎝を測る。底部には多少の凹凸がみられあまり座りがよいとはいえない。この底部にやや丸みをもった体部が直接とりつき，頸部でわずかに括れた後外反して口縁部となる。頸部内外面には不明瞭な稜線がみられる。胎土は鉢１と異なり精選され密で，内面色調は本来黒色であったと思われるが再酸化のためか黒色が消失している。器面調整は，底部外面を除く全面がヘラミガキ，底部外面はヘラケズリとなるが，体部下半のミガキの下地にはヘラケズリの痕跡がみられる。

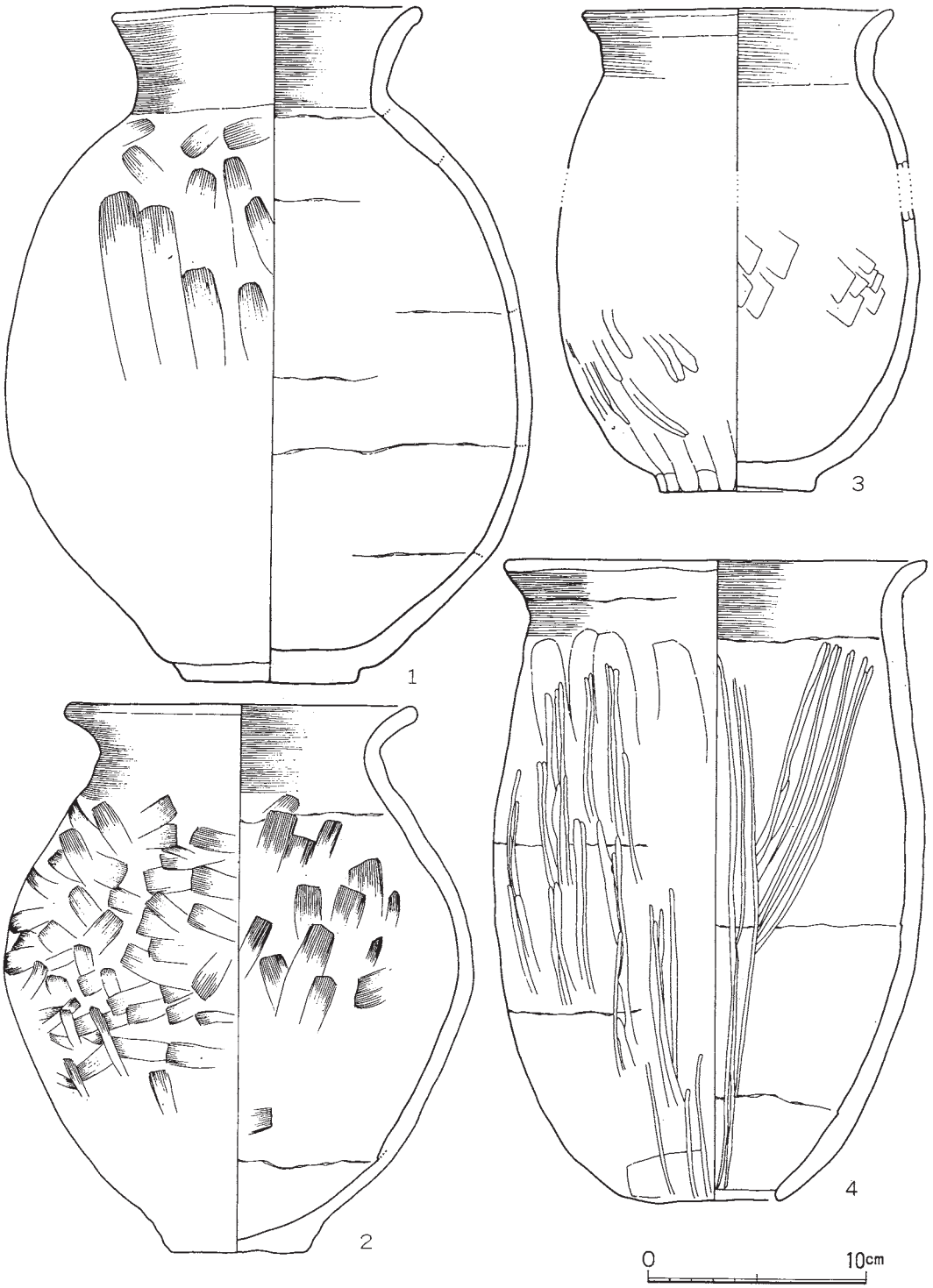
甕１（第28図６）　カマド左袖基部に接して検出された小型甕で，床面から出土した。遺存度は悪く底部から体部上半にかかる破片で，現存高7.8㎝，推定底径７㎝を測る。底部は平底で，体部は多少丸みをもって立ち上がっている。色調は黒味暗茶褐色で，器面は全面ナデ調整が施されている。ナデの方向は不定方向であるが，わずかに残っている頸部にはヨコナデ痕がみられ，恐らく口縁部はヨコナデと考えられる。脂土には砂粒を多く含む。

甕２（第28図７）　カマド東側，P_1の西縁から検出された小型甕で完形品である。口径10.5㎝，底径6.5㎝，器高10㎝を測る。底部は平底で中央部がわずかに窪み，体部は丸みをもって立ち上がり，頸部で一旦括れた後外傾して口唇に至る。器面調整は，内外面とも口縁部ヨコナデ，体部がナデであるが，体部内面はヘラナデが併用されている。底部外面には木葉痕を残す。色調は，外面赤味茶褐色で内面は大部分黒ずんでいる。胎土は砂粒の混入が多い。

甕３（第28図８）　南壁に取り付いている周堤部付近床面から検出された小型甕で，口縁部から体部の一部を欠損している。口径10.5㎝，底径６㎝，器高9.2㎝。立ち上がり具合は甕２とほぼ共通しているが，口縁部がやや外反する点で相異があり，器肉も４㎜程度で比較的薄い。器面調整は再酸化を受け肌荒れが著しく観察が困難であるが，口縁部内外面ともヨコナデの痕跡がうかがえる。底部には木葉痕が残る。胎土は砂粒を多く含み粗く，色調は再酸化をうけ赤変している。



第28図　7号住居跡出土土師器



第29図　７号住居跡出土土師器

甕４（第28図９）　カマド右袖基部床面から検出された小型甕で，口縁部のすべてと体部の一部を欠損している。底径７㎝，現存高9.7㎝。器形はやや壺形に近く，底部は平底で，体部は丸みをもって立ち上がり頸部で括れる。外面調整は器面の荒れが著しく不明瞭であるが，わずかに残った頸部ではヨコナデである。内面はヘラナデ及びナデが加えられる。胎土には砂粒が多く混入し，色調は，内面で黒褐色，外面では再酸化のためか赤変している。

甕５（第28図10）　カマド左袖基部で甕１の上から検出された小型甕で，約3/4の口縁部と体部の上半部1/2弱を欠損している。底径7.2㎝，器高12.4㎝，推定口径12.6㎝。底部は径４㎝の範囲でわずかに窪んでおり，体部は丸みをもって立ち上がる。頸部で一旦括れ反傾して口縁となるが，その際頸部内面に不明瞭な稜をつくる。外面調整は，口縁部ヨコナデ，体部はナデが基本であるが，体部上半には軽いケズリが入る。内面は口縁部ヨコナデ，体部はナデである。胎土には砂粒が多く混入し，色調は内面黒味茶褐色，外面では茶褐色となるが一部再酸化され赤変した部分がある。底部外面には木葉痕を残す。

甕６（第29図３）　カマド東側，P_1西縁に検出された甕で，底部から体部下半にかかる部分と口縁部から頸部にかかる部分の破片で体部の中間部が欠落し，両者が直接接合するものではない。底径7.5㎝，推定口径14.2㎝を測り，器高は推定で23㎝を上回らないと考えられる。最大径は体部の半ばやや下位にあり16.5㎝を測る。頸部は多少括れ，一旦直立気みに立ち上がった後短く外傾して口縁部をなす。器面調整は，口縁部内外面ともヨコナデ，体部内面はナデ及びヘラナデ，外面はナデが基本であるが，体部下半外面には疎らなミガキが加わる。胎土には砂粒が混入しているが小型甕の胎土より混入率が少ない。

甕７（第29図２）　カマド焼成部内より検出された遺物で，口縁部の一部と胴部の下半を1/2弱欠損している。口径15㎝，底径6.2㎝，器高25㎝を測り，最大径は21.5㎝で胴部半ばにある。器面調整は，口縁部内外面ともヨコナデ，胴部はナデとなるが，胴部内面下半には下地にヘラナデ痕がうかがえる。また内面には，成形時における粘土紐の積み上げの痕跡が観察される。

甕８（第29図１）P_1埋土内から検出された大型甕で，口縁部と胴部下半の極一部を欠損しているのみでほぼ完形品である。口径14㎝，底径7.8㎝，器高31㎝，頸部径11.4㎝を測り，胴部最大径は半ばやや下位にあり24㎝である。胴部最大径と頸部径の比からいえば，形態的には壺に近い特徴を示す。胴部下半は火を受けているため器面の荒れが著しい。調整は，内面とも口縁部がヨコナデ，胴部がナデである。胎土には砂粒の混入がみられ，胴部内面には成形時の粘土紐積み上げ痕が観察される。

甕９（第28図13）　P_1堆積土内から検出された遺物で，胴部下半以下を欠損している。口径12.5㎝，現存高8.3㎝を測る。頸部から口縁部の立ち上がりは，頸部で一旦直立したのち外傾する。器面調整は，内外面とも口縁部から頸部にかけヨコナデ，体部外面上半は不定方向のナデである

が，内面は器面の剝落が顕著で不明である。色調は暗茶褐色を呈すが，片面のみ赤化しており火を受けたものと思われる。

甑１（第30図１）　P_1堆積土内から検出された無底式の小型甑で，完形品である。口径９cm，器高13.4cm，頸部径8.2cm。壺形土器の底部を焼成後取り除いたもので，底部孔は不整円形で最大径4.8cmを測る。器面調整は，口縁部内外面と胴部外面はヘラミガキ，胴部内面はヘラナデとなるが，体部外面下端部はヘラケズリされている。色調は橙味黄褐色で，胎土には砂粒を混入しているが，それほど粗くはない。

甑２（第29図４）　P_1堆積土内から検出された無底式の甑で，口縁部と体部上半，底部孔周辺の極一部を欠損しているのみである。口径19.4cm，器高29.4cmで長胴の甕形を呈し，底部孔径は6.4cmを測る。外面調整は口縁部ヨコナデ，胴部がヘラケズリ後縦方向の疎らなヘラミガキ，内面はナデの後外面と同じく疎らな縦方向のヘラミガキが施される。色調は黒味暗茶褐色で，胎土には砂粒が混入しているが器表面の調整によって粒子は沈み込んでいる。

壺１（第28図11）　カマド左袖基部脇に検出された小型丸底壺で，床面から多少浮いた状態で出土した完形品である。この遺物は形態的には杯に近いものであるが，頸部の括れから体部の空間が杯形よりは閉鎖的になるため壺として記しておく。口径11.8cm，器高８cm，丸みをもった体部から一旦頸部で括れ外反して口縁となる。器面調整は，外面が口縁部でヨコナデ，底部から体部にかけてはヘラケズリの後疎らなミガキが加わる。内面は口縁部ヨコナデ，体部はヘラミガキである。胎土は精選され密で，色調は器表面が黄橙色，器肉内が黄褐色となる。

壺２（第28図12）　住居跡南西区床面から出土した小型壺で，口縁部から胴部上半にかかる破片である。胴部は張りが強く，いわゆる算盤玉状に近い形態であると思われる。頸部の括れは稜線をもたずなめらかで，口縁部は直線的に外傾する。胴部最大径及び口径は図上復元で各々12.8cm，11cmを測り，現存高は6.6cmである。器画調整は内外面とも体部がナデ，口縁部はヨコナデとなる。

〔須　恵　器〕

椀（第30図３）　P_1の検出面でほぼ床面と同じ高さで出土した遺物で，体部の約1/4を残存している。現存高5.7cmで，体部最大径9.5cmを推定する。体部上半には径1.5cmの孔が焼成前に穿たれている。底部は丸底になると思われるが，大分器面の罅ぜが著しい。体部には降灰による釉が流れ，その流れによって正立で焼成されたことがわかる。

蓋（第30図２）　住居跡南西区床面から検出された遺物で，図化に無理があり信憑性に欠けるが，須恵器が伴出する例は僅少であるのであえて図示しておく。口縁部から天井部にかかる小破片で，現存高3.4cmを測り，口径は14cm内外に収まると考えられる。天井部と口縁部との境には鋭い稜をもち，口縁部はやや外に開き気味である。口縁端部は丸く収められ，内面にはわずかな

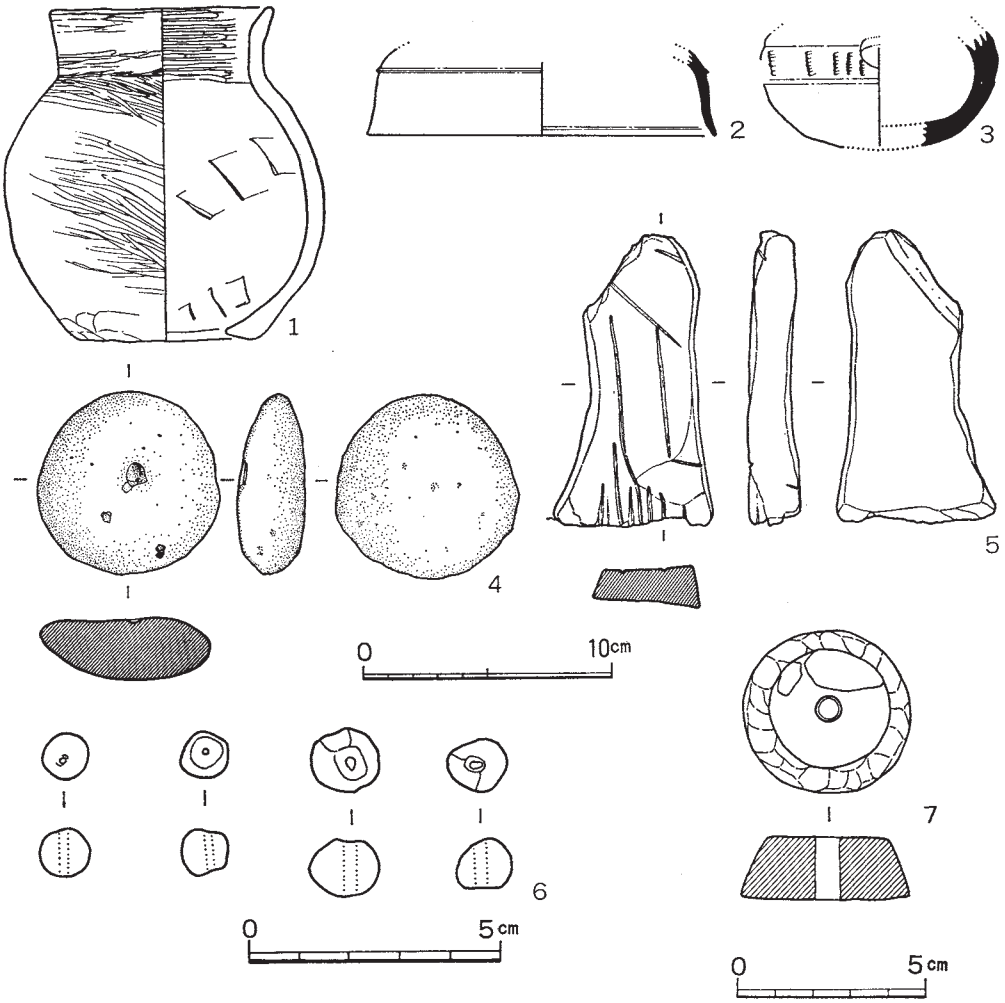
段がみられる。器肉は口縁部で３㎜，天井部で５㎜と比較的薄手である。

〔土　製　品〕

土製丸玉（第30図６）　計５個の土製丸玉が住居跡西半中央部付近床面上から検出された。そのうち，図示できたのは４点である。形状は径８～11㎜の不整の球形をなし，径１～２㎜の孔が貫通している。形状，貫通孔ともにそれほど規格性はない。表面は１点のみ橙味赤褐色をしているが，他はすべてやや光沢のある黒色を呈している。

〔石　製　品〕

紡錘車（第30図７）　カマド西側床面から検出された遺物で，上面と下面の一部を欠損している。円錐台の形状を呈し，短径3.2cm，長径4.5cm，高さ1.7cmを測る。上・下両面ともわずかの膨



第30図　７号住居跡出土土師器・須恵器・土製品・石製品

らみがあり，中央部には径７㎜弱の孔が一孔貫通している。石質は滑石製で，側面では縦位の面取り痕が数多く観察される。全般によく研磨され表面は滑らかである。

砥石（第30図５）　住居跡南東区の南壁近くに床面よりやや浮いて検出された。石質は硬砂岩で，両端を欠損している。現存長11.8cm，最大幅6.4cm，厚さ2.1cmを測り欠損部を除いて全面に使用痕が認められ，ことに片面には断面Ｖ字形をした細い擦り切り状の使用痕が数条みられる。

凹石（第30図４）　南壁にある周堤部内から検出されたもので，平面形は不整円形を呈している。石質は安山岩製で，最大径7.3cm，厚さ2.8cmを測る。片面中央部には径１cm弱，深さ２㎜程度のわずかに窪んだ箇所がみられる。

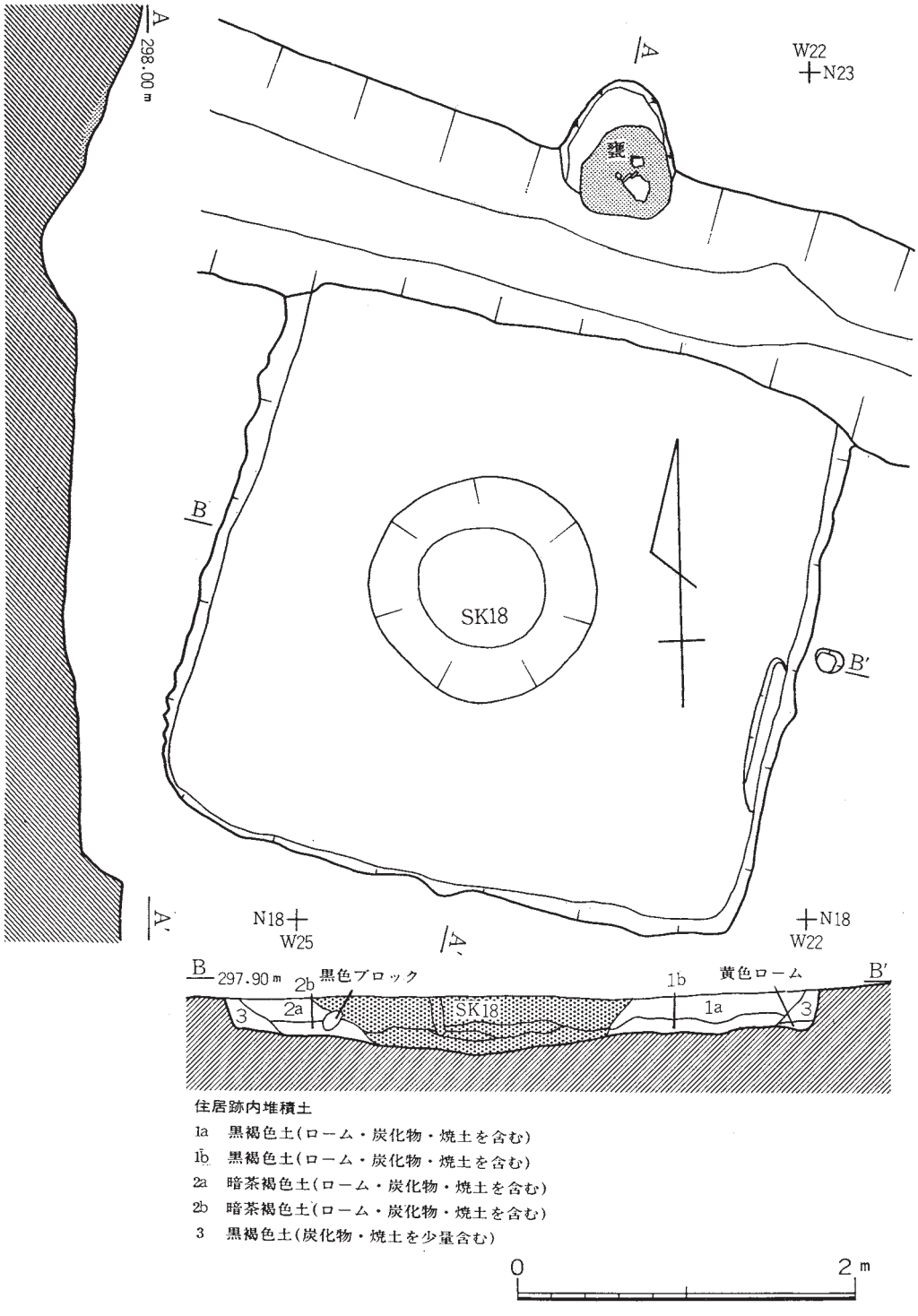
ま　と　め

当住居跡の規模は調査区のなかでは大型の部類に入り，52年度に調査した佐平林遺跡（Ⅰ～Ⅳ区）に検出された４号住居跡と規模・構造とも類似した面をもっている。また火災にあっていることも同様であり，住居跡内に検出された木炭は住居跡の中心に向かう放射状を呈し，建築部材の姿を比較的良く残している。周堤部における遺物の出土状況は，前回の４号住居跡では多量の杯片が散乱していたのに対し，今回は周堤内に河原石等が多く検出された点で相異がみられる。ただ周堤内は他の床面に対し軟質で踏み固められたとは考えられず，通常の生活空間からは分離される面を覗かせている。今回カマドの基底面までの調査によって，カマド設置箇所をあらかじめ掘り窪め（カマド掘形）カマドを構築していることが判明した。柱穴は21号住居跡と構造的には同じで，対角線上が主柱穴，中間の柱穴と周堤部脇との柱穴は補助的な支柱穴としてとらえられる。当住居跡の時期は出土遺物から古墳時代の後期に位置づけられるが，焼失家屋であることから３号住居跡とⅠ～Ⅳ区の一連の焼失家屋と併存した可能性が強いといえる。

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（第31図）

調査区のＢ－１・２グリッド内において検出された。本住居跡北側は１号溝によって切られており，北壁は遺存しておらず，カマドも基底面を残しほとんどが破壊されている。また住居跡中央部は18号土坑によって切られている。検出面はやや西側に傾斜している所で，Ⅱ層の黒褐色土とⅣ層の地山ローム層が境をなす地点にあたり，西壁は黒褐色土を掘り込んで壁としている。南北の長さは不明であるが東西は3.5ｍを測り，隅丸方形を呈していることが確認された。埋土はローム粒を多く含む黒褐色土，暗茶褐色土と，壁際の黒褐色土が自然堆積の状態を示している。床面は地山ロームを敲きしめて床としているが割合凹凸が激しい。壁高は約20cm残存しており，３壁とも外傾しながら立ち上がっている。柱穴・周溝は検出されなかった。カマドは１号溝の北壁面にカマド燃焼部の基底面だけが残存していた。上部構造は不明である。


A
298.00m
A
W22
N23
竈
B
SK18
B'
A'
N18
W25
N18
W22
B
297.90m
2b
黒色ブロック
1b
黄色ローム
B'
3
2a
SK18
1a
3
住居跡内堆積土
1a 黒褐色土(ローム・炭化物・焼土を含む)
1b 黒褐色土(ローム・炭化物・焼土を含む)
2a 暗茶褐色土(ローム・炭化物・焼土を含む)
2b 暗茶褐色土(ローム・炭化物・焼土を含む)
3 黒褐色土(炭化物・焼土を少量含む)
0
2m

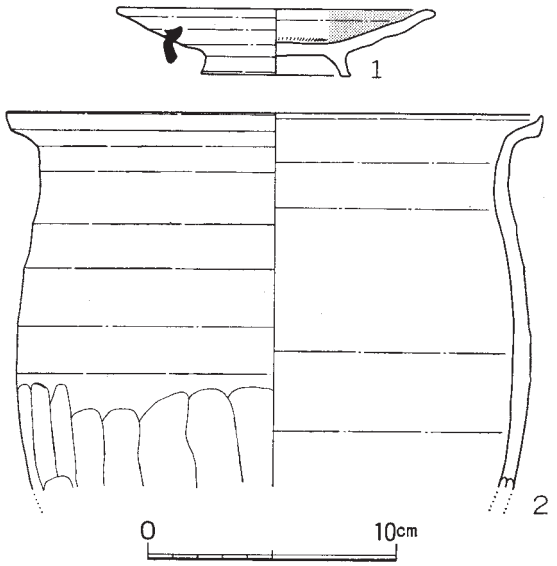
第31図　8号住居跡

遺　　物（第32図）

本住居跡から出土した遺物には土師器片（杯・甕など），須恵器杯片などがあるが，なかでも図化することができた床面直上出土の土師器高台付皿や，カマド基底面から出土した土師器甕片は，時期を比定するには好資料である。

〔土　師　器〕

高台付皿（第32図１）　東壁よりの床面直上で検出した遺物であり，全体の1/3を復元実測した。皿部はロクロによって成形されたもので，体部は大きく外反する。高台は高さ８㎜の付高台であり，高台貼付後，高台の内外面にロクロによるナデを施している。調整は，外面はロクロナデであり，内面は底部から体部上半にかけて放射状のヘラミガキを行い，口縁部に横方向ヘラミガキを施し，さらに黒色処理をしている。部分的にではあるが，体部上半にはロクロ成形時のナデが観察される。胎土・焼成は良好である。体部外面に墨書があるが，部分的なため判読できない。



第32図　８号住居跡出土土師器

甕（第32図２）　カマド基底面上で検出された遺物であり，口縁部から体部下半にかけての約1/5を復元実測した。推定口径21.5㎝，残存高15㎝を測る最大径が口縁部にある甕であり，器厚は５～７㎜を測る。体部は丸みを持って立ち上がり，体部上端ではほぼ真っ直ぐに立ち，大きく外反する口縁部に至る。口縁端部は垂直につまみあげられている。調整は体部下半外面に手持ちヘラケズリ再調整が施されているほかは，内外面ともロクロ回転によるナデ調整が視察される。胎土は砂粒を割合多く含むが焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈している。

ま　と　め

本住居跡は，１号溝や18号土坑と重複関係にあり遺存状態は良くない。柱穴・周溝は検出されなかった。所属時期は，本住居跡に伴う遺物が非常に少なかったが，床面直上出土の台付皿やカマド基底面出土の甕片などが表杉ノ入式期に属するものであることが判明し，平安時代に位置づけることができた。

９号住居跡　ＳＩ09

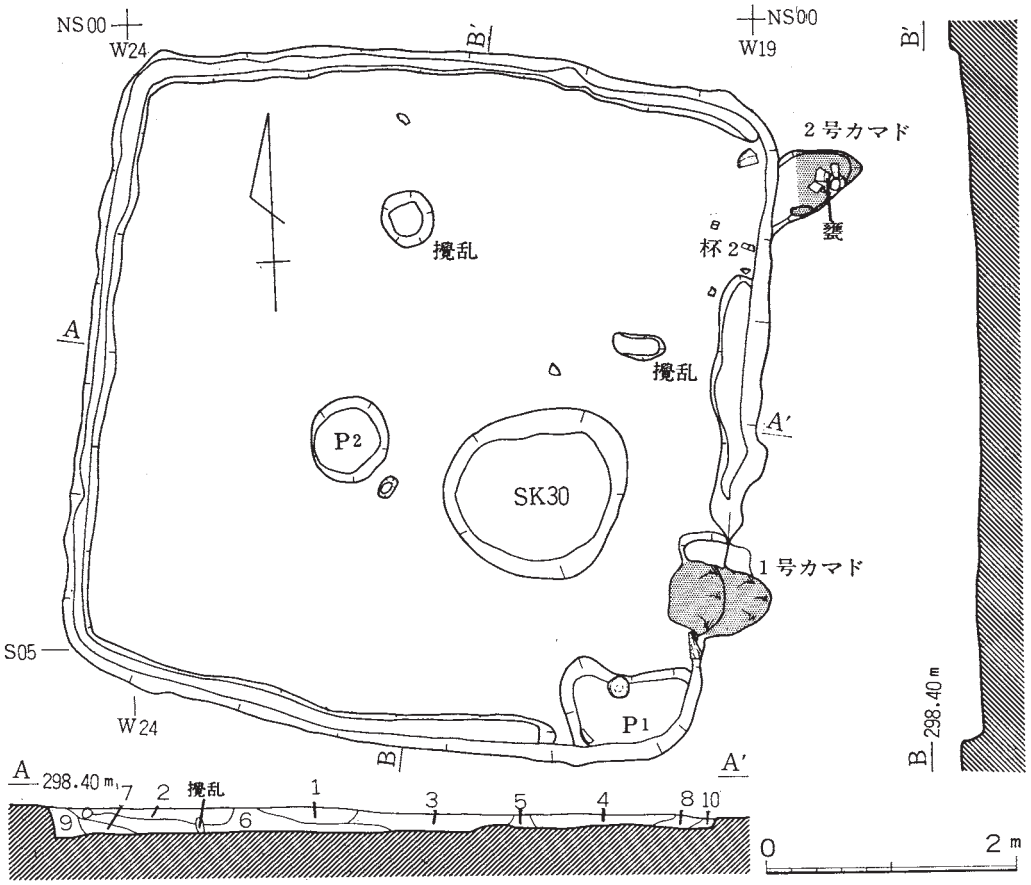
遺　　構（第33図，図版10）

Ｂ－３からＣ－３グリッドにかけて位置しローム面にて検出された住居跡である。重複している

30号土坑より古い遺構で床面の一部が30号土坑によって破壊されている。プランは東西辺5.35m，南北辺（壁長）約５ｍを測るが中央部の南北長は5.55mとわずかに長く，若干南北に胴が張る形となる。堆積土は10～20cmで薄く，ローム微粒を含む暗褐色土が主体の自然堆積層である。

壁の遺存度は良好といえず上部を相当削平されていることから，壁面の傾斜度も推測し難い。床面は全般に平坦であるが北半壁寄りの部分は比較的軟質の感を受けた。同壁沿いには幅約15cmの周溝が東壁を除いて全周する。東壁では中央部にやや幅広い周溝がとりつく。

カマドは東壁の北側と南側とに１基ずつ計２基が検出された。北カマド（２号）は壁から70cm外に突出し，検出面から火床面までは深さ８cmを測る。火床面が確認されたのは奥の部分だけで



住居跡内堆積土

1　暗褐色土(ローム・焼土を少量含む)
2　暗褐色土(ローム・炭化物を含む)
3　暗褐色土(ローム微粒を含む)
4　暗褐色土(炭化物・ロームを含む)
5　暗黄褐色土(ローム微粒を多量含む)
6　暗黄褐色土(炭化物・焼土を含む)
7　暗褐色土(炭化物・黒褐色土を含む)
8　暗褐色土(炭化物・ロームを含む)
9　暗黒褐色土(ローム微粒を含む)
10　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)

第33図　９号住居跡

手前壁際には確認されず，壁面及び床面も焼けていない。南カマド（１号）もやはりコーナー付近に位置しているが，２号カマドよりはやや内側に寄っている。燃焼部幅は60cm程度で壁を45cm抉り込んで構築しているが，燃焼部から奥壁への移行は明瞭ではなく傾斜も緩やかである。袖は左袖のみ確認された。幅25cm，長さ40cmで壁に取り付いており，袖材には粘土を使用している。全般に貧弱であり右袖にあたる部分には凝灰岩の扁平な石が検出されたのみである。

ピットは計２個検出された。P_1は南カマド脇で住居跡の南東コーナー部に位置している。0.6×１ｍの不整形で深さは約20cmである。埋土には焼土粒が多量に混入していた。P_2は住居跡中央部やや西寄りにあり直径70cm，深さ23cmを測る円形に近いピットである。底面は舟底形で壁の傾斜は比較的緩く，埋土は灰味がかった茶褐色土の単一層である。他に柱穴と思われるようなピットは検出されなかった。

遺　　物（第34・35図，図版33・39・40）

遺物は，東壁に構築された２基のカマド付近と住居跡南西区に多く検出された。また当住居跡の堆積土は上部が削平され，特に東側を除く三方は10cm程度と薄く，床面からの出土遺物と堆積土内からの出土遺物と時間差は少ないと考えられる。

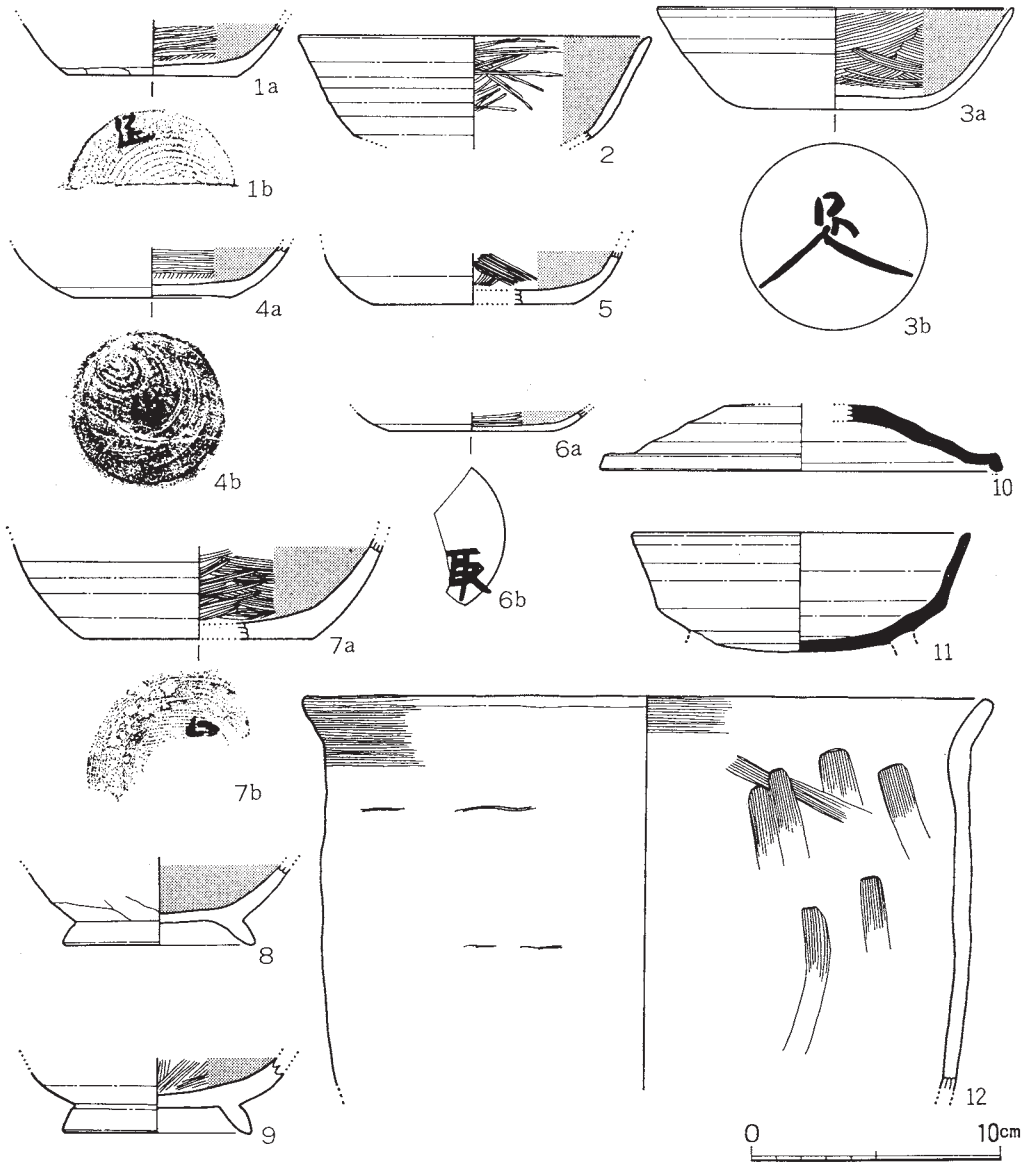
〔土　師　器〕

杯１（第34図１）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，底部から体部下端にかかる破片である。現存高2.2cm，推定底径6.8cm。ロクロ成形で，底部切り離し技法は回転糸切りである。外面調整は底部周縁に回転ヘラケズリ，体部下端には回転ヘラケズリの後手持ちヘラケズリが加えられている。内面はヘラミガキで黒色処理されている。底部でのミガキ方向は一定方向である。また底部外面には「足」の墨書がみられる。

杯２（第34図２）　２号カマド前床面から検出された遺物で，体部の一部と底部の全部を欠損している。口径14cm，現存高4.2cmを測る。ロクロ成形で，外面調整は体部下半から回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。

杯３（第34図３）　１号カマド脇床面から検出された遺物で，口縁部を1/2程度欠損している。口径14.2cm，底径7.8cm，器高４cmを測る。ロクロ成形で，外面調整は底部から体部下半にかけ回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。ミガキの方向は底部が放射状，体部横方向である。底部から体部への境界は不明瞭で丸みをもって削られている。底部外面には「足」の墨書がみられる。

杯４（第34図４）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，底部から体部下半にかかる遺物である。現存高2.5cm，底径6.2cm。ロクロ成形で，切り離し技法は回転糸切りである。外面調整は底部周縁から体部下端が回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキされ黒色処理されている。ミガキ方向は一定方向で，底部外面には「山」の墨書があり，その上にヘラミガキ様に×印が描か



第34図　9号住居跡出土土師器・須恵器

れている。

杯５（第34図５）　東壁南カマド右脇から検出された遺物で，底部から体部下端にかかる破片である。現存高２cm，推定底径7.8cmを測る。ロクロ成形で，外面調整は底部から体部下半にかけ回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されているが，再酸化のためか黒色が消失している。底部ミガキ方向は一定方向である。

杯６（第34図６）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，底部から体部下端にかかる

小破片である。ロクロ成形で現存高0.8cm，推定底径6.5cmを測り，器肉は２～３㎜と極めて薄い。外面調整は底部から体部下端が回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。ミガキの方向は一定方向で単位は極めて細い。底部外面には「取」の墨書がある。

杯７（第34図７）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，底部から体部下半にかかる破片である。現存高3.8cm，推定底径９cm。ロクロ成形で，底部切り離し技法は静止糸切りである。外面調整は底部周縁と体部下半を回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキされ黒色処理されている。ミガキの方向は底面が一定方向，体部が横方向となる。底部外面には大半が欠損した墨書がある。残っている部分は「口」であるが，これで完結することはなく杯１同様「足」になる可能性が多分に強いと考えられる。

高台杯１（第34図８）　住居跡南西区撹乱土内から検出された遺物で，高台部から体部下半にかかる破片である。高台径7.8cm，現存高3.2cm。成形，調整技法等は高台杯２と同様であるが，杯部体部外面下端に手持ちヘラケズリが施されている点と，外面色調が高台杯２が赤味茶褐色であるのに対し暗茶褐色になる点で相異がみられる。

高台杯２（第34図９）　住居跡北西区床面上層から検出された遺物で，高台部から体部下半にかかる破片である。高台部径7.6cm，現存高３cm。ロクロ成形で高台部は貼り付けである。杯部の切り離しは静止糸切り，内面調整はヘラミガキで黒色処理されている。ミガキ方向は不定方向で，単位は不明瞭である。胎土は杯類に比べ砂粒の混入がやや多い。

甕（第34図12）　２号カマド内から検出された遺物で，口縁部から体部にかかる破片である。体部の立ち上がり具合から，やや長胴の甕になると考えられる。口縁部は直線的に外傾している。成形は粘土紐の積み上げによるもので，内外面にその痕跡がうかがえる。外面調整は口縁部がヨコナデ，体部は縦位のヘラケズリ，内面は口縁部ヨコナデ，体部が不定方向のナデとなる。胎土には砂粒が含まれている。

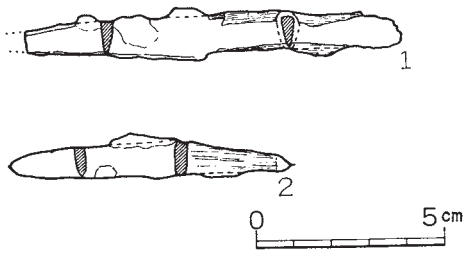
〔須　恵　器〕

蓋（第34図10）　住居跡南堆積土内から検出された小破片である。現存高2.7cm，推定基部径16cmを測る。天井部は上面で平坦となる形態のもので，カエリはみられず，口縁端部はやや外傾し丸く仕上げられている。

高台杯（第34図11）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，杯部のみ約1/4が残存している。現存高4.7cm，推定口径13.5cm，高台貼り付け部径９cmを測る。杯部形態は底部がやや丸みをもっており高台があるために底部と体部の区別はつけやすいが，高台が欠落した状態では明瞭ではない。体部の立ち上がりは，底部から約1/3のところで急激に傾斜角を増して立ち上がっており，その際に体部の内外面に明瞭な稜線をつくる。底部外面の調整は回転ヘラケズリとなっている。色調は灰白色で，胎土には砂粒の混入がやや多くみられる。

〔鉄　製　品〕

刀子１（第35図１）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，全長7.6cmを測る。身は長さ3.6cm，茎の部分４cmを測り木質部を残している。小型の刀子で，刃部はわずかに内彎気味である。切先では刃部の鋭利な面が観察されるが他の部分ではやや潰れている。



第35図　９号住居跡出土鉄製品

刀子２（第35図２）　住居跡南東区床面から検出された遺物で切先をわずかに欠損している。身の現存長4.8cm，茎５cmを測り茎に対し身の部分が短い。茎には木質部が残存している。身は反りがなく先端にいくに従い徐々に直線的に細くなる。

ま　と　め

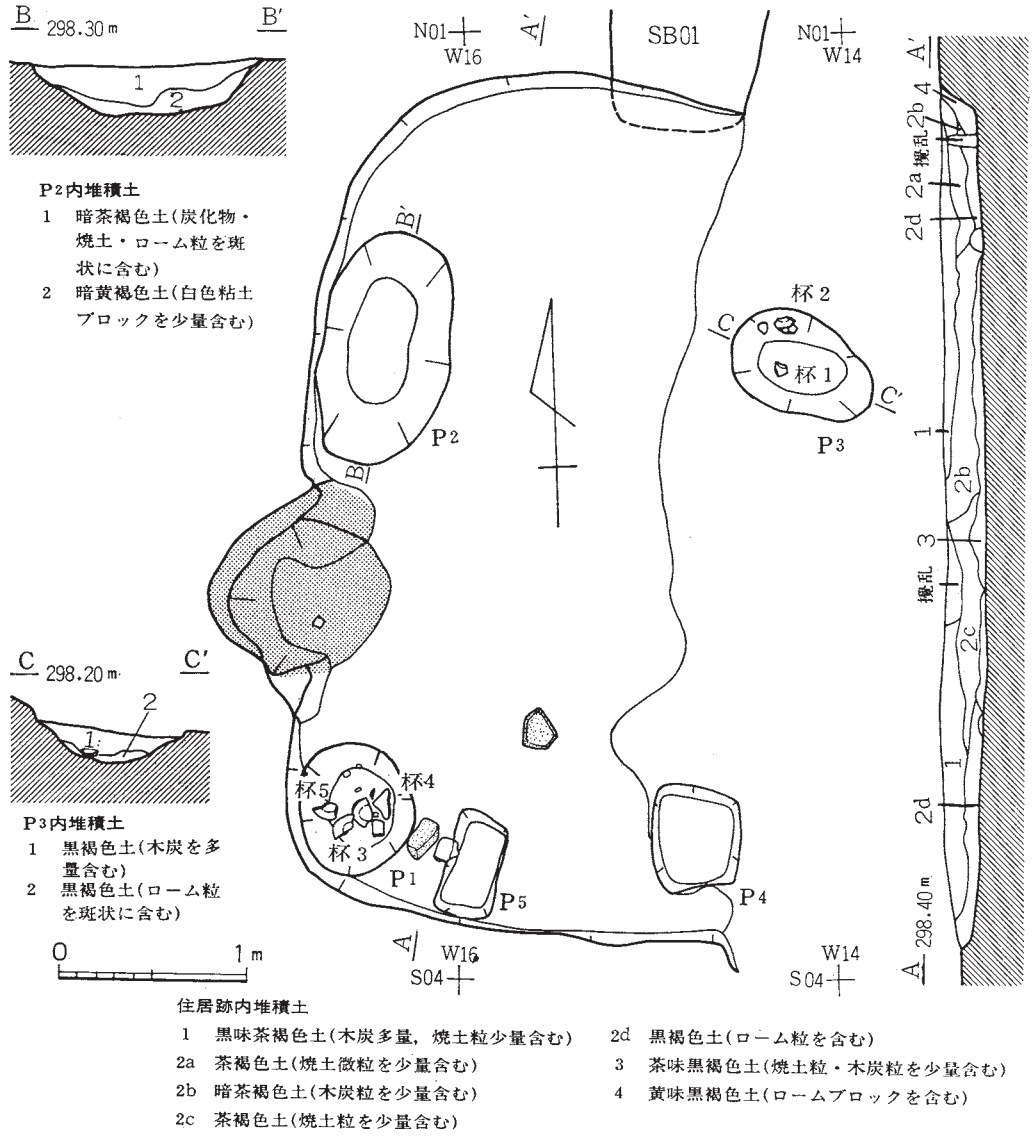
当住居跡では東壁に２基のカマドが検出されたが，同時期に併存したものではなく焼面の範囲によって２号カマドが古く，１号カマドが新しいことが判明した。出土遺物，特に杯・高台杯類は，底部切り離し技法に糸切り手法が使われ，底部周縁と体部下端に大半が回転ヘラケズリ調整が施される。また内面のミガキは一定方向を基本としているが，なかに方向の乱れたものが入り込んでいる。これらの特徴はロクロ土師器の中でも前半代の時期としてとらえられるもので，当住居跡も同様の時期と考えられる。

10号住居跡　ＳＩ10

遺　　構（第36図，図版11）

Ｃ－２・３グリッド内において１号掘立柱建物跡を切る状態で検出された。確認面はⅡ層黒土上面である。本住居跡の東半は削平により原形を留めていない。平面プランは西辺4.4ｍを測るが，東・南・北辺は不明である。残存壁高は６～18cmを測りやや傾斜気味に立ち上がる。住居跡内堆積土はほぼ３層に分けられる。１層の最終堆積土層は暗茶褐色土であり，２層は茶褐色土が中央に厚く堆積し，３層は黒褐色土が床面上あるいは壁際に堆積している。レンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積と思われる。床面カマド付近は割合よくしまっているが，壁際はやや軟弱である。

ピットは５個確認された。P_1はカマドの南側，南西コーナー部で検出された径65cm，深さ20cmの擂り鉢状を呈するもので，中からは土師器杯や須恵器破片が出土した。P_2はカマドの東側で検出された楕円形を呈するピットであり，長径125cm，短径70cm，深さ25cmを測るものである。またP_3は削平された部分で検出されたものであり，長径80cm，短径50cm，深さ20cm前後を測るものであるが，中から出土した遺物がP_1出土のものと類似していることから本住居跡に伴うものと考え



第36図　10号住居跡

られる。他に南壁付近でP_4・P_5が検出されている。柱穴と考えられるピットは確認されなかった。

カマドは，西壁やや南よりに位置している。約1/2が壁より張り，出して構築されているが，全体的に遺存状態は悪い。焚口部幅約50cm，奥行約65cmを測る。カマド内堆積土にも焼土の混入量が少なく，床面がそれほど堅くなっていないことなどから，比較的短時間の使用と考えられる。

遺　　物（第37図，図版33・34・40）

本住居跡の堆積土中，あるいはP_1・P_8などから相当数の土師器・須恵器破片が出土したが，本住

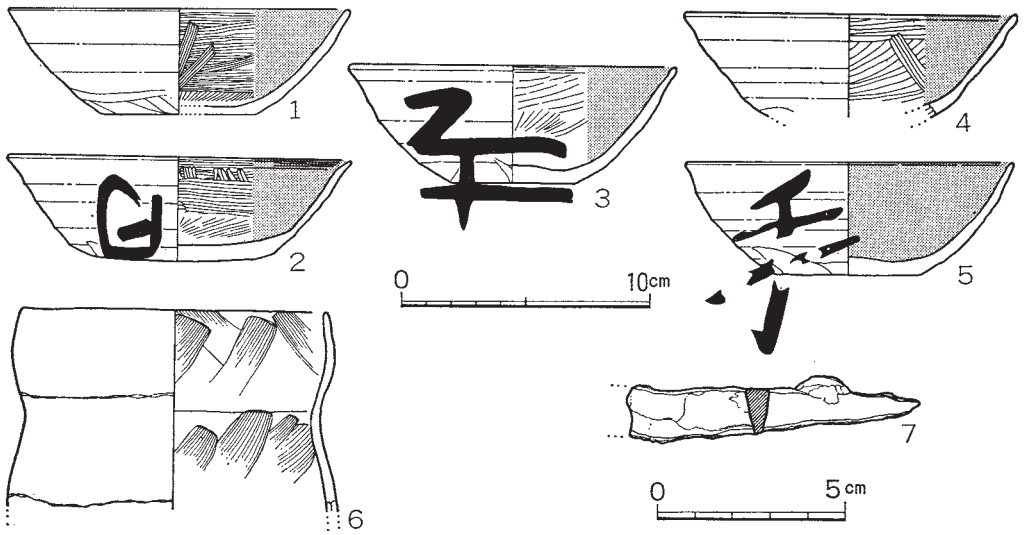
居跡に伴うと考えられるものはP_1・P_3出土の土器である。また堆積土中からは，刀子が１点出土した。

〔土　師　器〕

杯１（第37図１）　P_3埋土内より出土した遺物であるが，遺存状態は悪い。平底を呈し，体部は外反しながら緩やかに立ち上がる。外面調整は，底部から体部下端は手持ちによるヘラケズリが施されており，他はロクロ調整である。内面は，底部は放射状のヘラミガキが施され中央部が盛り上がった状態を示し，体部から口縁部には横位のヘラミガキが加えられている。その後黒色処理している。推定口径13.6cm，底径6.2cm，器高4.3cmを測る。

杯２（第37図３）　杯１同様P_3埋土内より検出された。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口径13.2cm，底径5.2cm，器高4.7cmを測る。ロクロ成形によるもので，平底の底部から体部は丸みをもって立ち上がり，直線的にのびる口縁部に至る。調整は，体部外面下端は手持ちヘラケズリ，内面は底部が放射状，体部から口縁部は横方向のヘラミガキが施され，黒色処理されている。胎土は精選され，焼成は良好で，外面には体部から底部にかけて「午」の墨書がある。

杯３（第37図２）　P_1埋土内から検出された遺物で，口縁部から体部にかけて約1/3を欠損する。平底を呈し，体部は緩やかに立ち上がり口縁部でわずかに外反する。外面の調整は，底部から体部下端には手持ちヘラケズリが加えられており，他はロクロによる調整である。内面は，不明瞭ではあるが底部は放射状，体部から口縁部は横位のヘラミガキが施され，黒色処理されている。体部外面下端から底部にかけて黒斑があり，また「日」の墨書がある。口径13.8cm，底径6.3cm，器高4.2cmを測る。器肉は，底部では７㎜を測るが体部から口縁部は２㎜前後と非常に薄い。



第37図　10号住居跡出土土師器・鉄製品

杯４（第37図５）　P_1埋土内より検出。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。平底を呈し，体部は丸みをもって立ち上がる。調整は，外面で底部から体部下端にかけ手持ちヘラケズリ，内面は不明瞭なミガキと黒色処理がなされている。口径13.1cm，底径5.8cm，器高4.5cmを測り，体部外面には「手」と判読できる墨書がある。

杯５（第37図４）　P_1埋土内から出土した遺物で，口縁部から体部にかけて残存する1/4を復元実測した。体部はやや丸みをもって立ち上がる。体部外面下端には手持ちヘラケズリが施されているようであり，他はロクロ痕が顕著である。内面は全面ヘラミガキが加えられている。法量は推定口径13.2cm，現存高4.1cmを測る。

甕（第37図６）　P_1埋土内から出土の破片とカマド付近から出土の破片が接合した。口縁部から体部にかけ1/3が現存するが，非常に粗雑な作りで遺存状態は悪い。推定口径12.2cm，現存高８cmを測り，器肉は３㎜前後と均一である。調整は外面がナデ，内面はナデのほか指圧痕が観察される。成形は粘土紐の積み上げ痕により器面は二次加熱を受け荒れている。

〔鉄　製　品〕

刀子（第37図７）　住居跡内堆積土中より出土した。柄部とまち部だけの残存である。現存長は7.8cmであり柄部は長さ7.3cm，厚さ0.5cmを測り，幅はまちのところで1.4cm，先端で0.7cmと徐々に幅を減じる。

ま　と　め

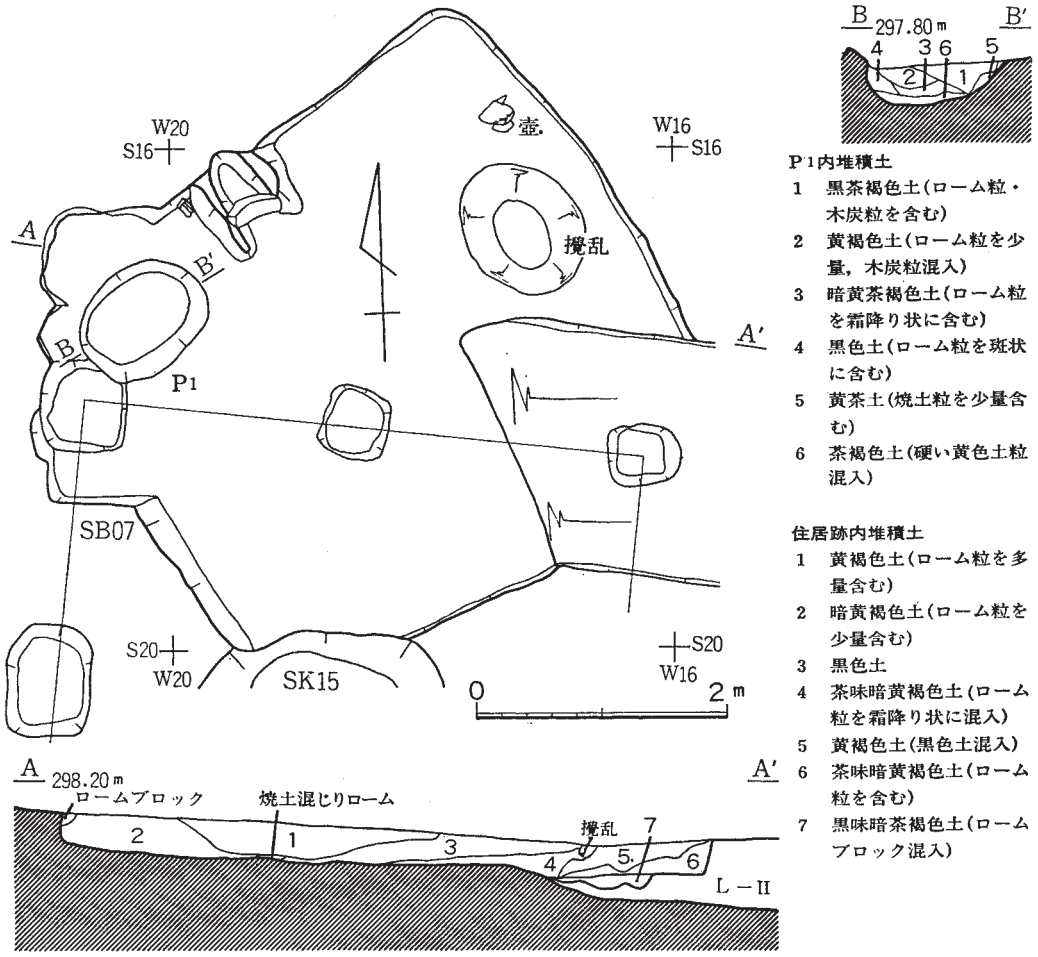
本住居跡は，東側が削平されており西半部のみの残存で西側にカマドをもつ住居跡である。住居跡の年代は，本遺構に伴うと考えられるP_1・P_3出土の土師器杯がロクロ成形による土器であり，大半が体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が施されている点などからみて，表杉ノ入式期に属するものと考えられる。従って本住居跡の年代は，平安時代に位置づけられよう。

11号住居跡　ＳＩ11

遺　　構（第38図，図版12）

昭和53年度遺跡調査課の試掘調査によって所在が確認されていた住居跡であるが，今回の調査ではＢ・Ｃ－５グリッドにかけて検出された。検出面は西半ではローム面，東半では基本層位Ⅱ層上面である。当住居跡は，７号建物跡，15・16号土坑と重複関係を有しているが，これらすべての遺構に切られている。プランは一辺4.5ｍを測るほぼ方形である。埋土は粒子の均一な土質でレンズ状の堆積をしめしており自然堆積と考えられる。

壁は東コーナーと北東壁の一部を試掘トレンチで，南コーナーと北西壁の一部を15・16号土坑によって破壊されている。立ち上がりはほぼ垂直であるが，北東壁では他の壁面に比べ若干傾斜をもつ。床面は平坦で西半はローム面を直に床面としているが，東半はローム地山面が傾斜して



第38図　11号住居跡

いるためかロームブロックを混入した黒色土を入れ貼り床としている。

カマドは北西壁の中央にとりついている。袖は幅40cm弱，長さ75cmであるが右袖のほうが15cm強で短い。袖材は黄白色粘土のみで石等は使用していない。袖の先端部付近にはやや扁平な凝灰岩割石が両袖に架かっており，恐らくは焚口部を構成していたと考えられる。その幅約30cmである。焚口部は特別掘り窪めた様子もなく住居外に向かって緩やかに立ち上がっている。

ピットはカマド左脇に１個検出された。長軸105cm，短軸40.5cm，深さ33cmを測る楕円形のピットで，埋土は粘質土と黒色土が流れ込んでいる。床面は舟底形で壁面への移行は滑らかである。周溝および柱穴状のピットは検出されなかった。

遺　　物（第39図，図版34）

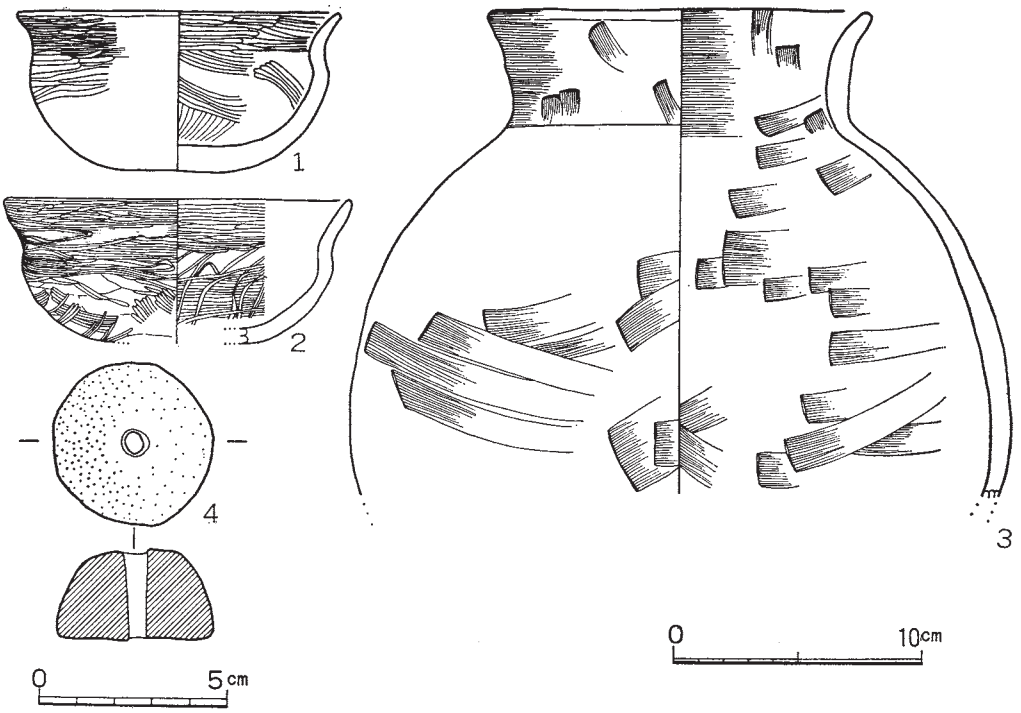
住居跡に伴うと考えられる遺物は，カマド付近の床面とP_1内，それにカマド東側床土内から検

出されたが図化できたのは４点で，堆積土内出土の遺物を加えても出土量は少量である。これに昭和53年度の試掘調査の際６号トレンチから検出された土師器杯（今回の調査で当住居跡の遺物であることが判った）を加え，図化できた遺物は計５点となる。

〔土　師　器〕

杯１（第39図１）　昭和53年度の試掘調査における第６号トレンチから検出された丸底杯であるが，調査時に11号住居跡床面出土のものであることが判明した。口径13cm，器高6.4cmを測る。体部から口縁部の一部を欠損しており，体部から口縁部への移行は滑らかで，頸部内外面に稜線はみられない。器画調整は全面ヘラミガキであるが，外面の底部から体部下半はミガキが疎らで，下地のヘラケズリ痕が観察される。全般に端正に仕上げられており，胎土に含まれている微細な砂粒は器表面から沈み込んでいる。色調は赤茶褐色を呈している。

杯２（第39図２）　カマド東側の床土内から検出された丸底の杯で，口縁から底部にかけ約2/3を欠損している。現存高5.8cm，推定口径14cmを測る。底部から丸みをもって立ち上がった外形線は頸部で一旦括れた後やや外傾して口縁となる。頸部の括れは弱いもので明瞭な稜線は観察されない。器画調整は全面ヘラミガキであるが，ミガキの前段階として底部外面にヘラケズリ，口縁部外面にヨコナデの痕跡がうかがえる。



第39図　11号住居跡出土土師器・紡錘車

壺（第39図３）　住居跡の北東区東壁寄り床面上で検出された壺で，底部から胴部上半にかけ欠損している。口径15.2cm，頸部径13.6cm，現存高19.4cmを測り，最大径は肩の流れからすると胴部の半ばあたりにあるものと推定される。色調は黄褐色を呈し胴部外面には部分的に黒斑がある。器面調整は，口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は不定方向のナデ，内面はヘラナデ後ナデとなっている。

〔土　製　品〕

紡錘車（第39図４）　住居跡北東区の堆積層第３層内から検出された土製の紡錘車である。最大径4.2cm，高さ1.8cmで中央に径５㎜程度の孔が貫通している。孔は焼成前にあけられたもので，一方が広く他方がわずかに狭っており，外面は端正に磨かれている。

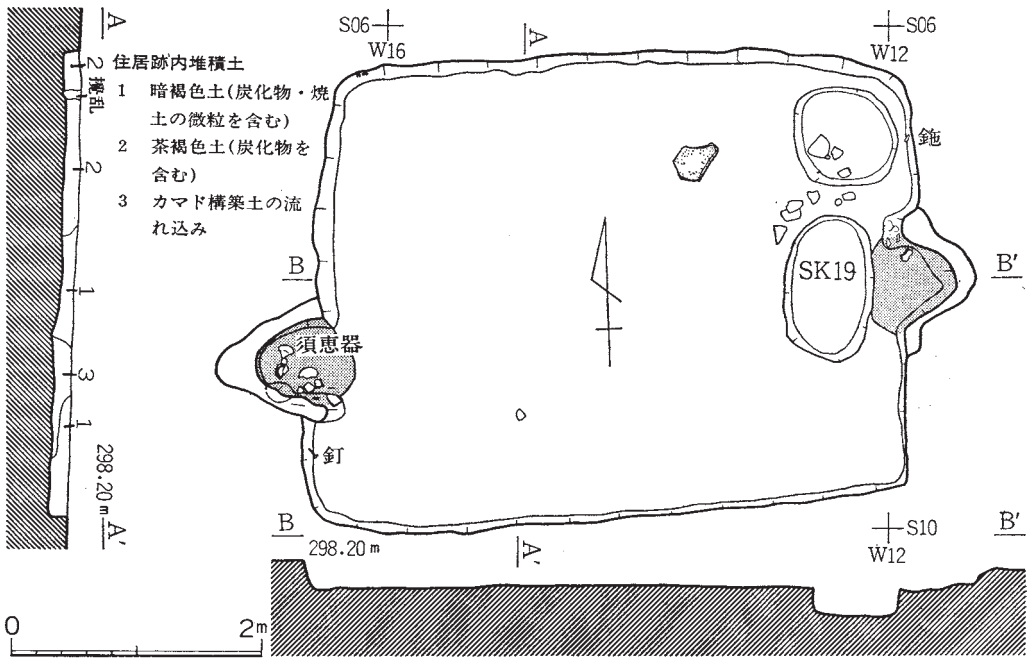
ま　と　め

当住居跡は，この時期に検出される住居跡のなかでは比較的小型の部類に属する。また内部施設についてもカマドや貯蔵穴の形態に退化した面もみられるが，遺物は３・７号住居跡等から検出された遺物と同類で，時期は古墳時代後期としておさえられる。

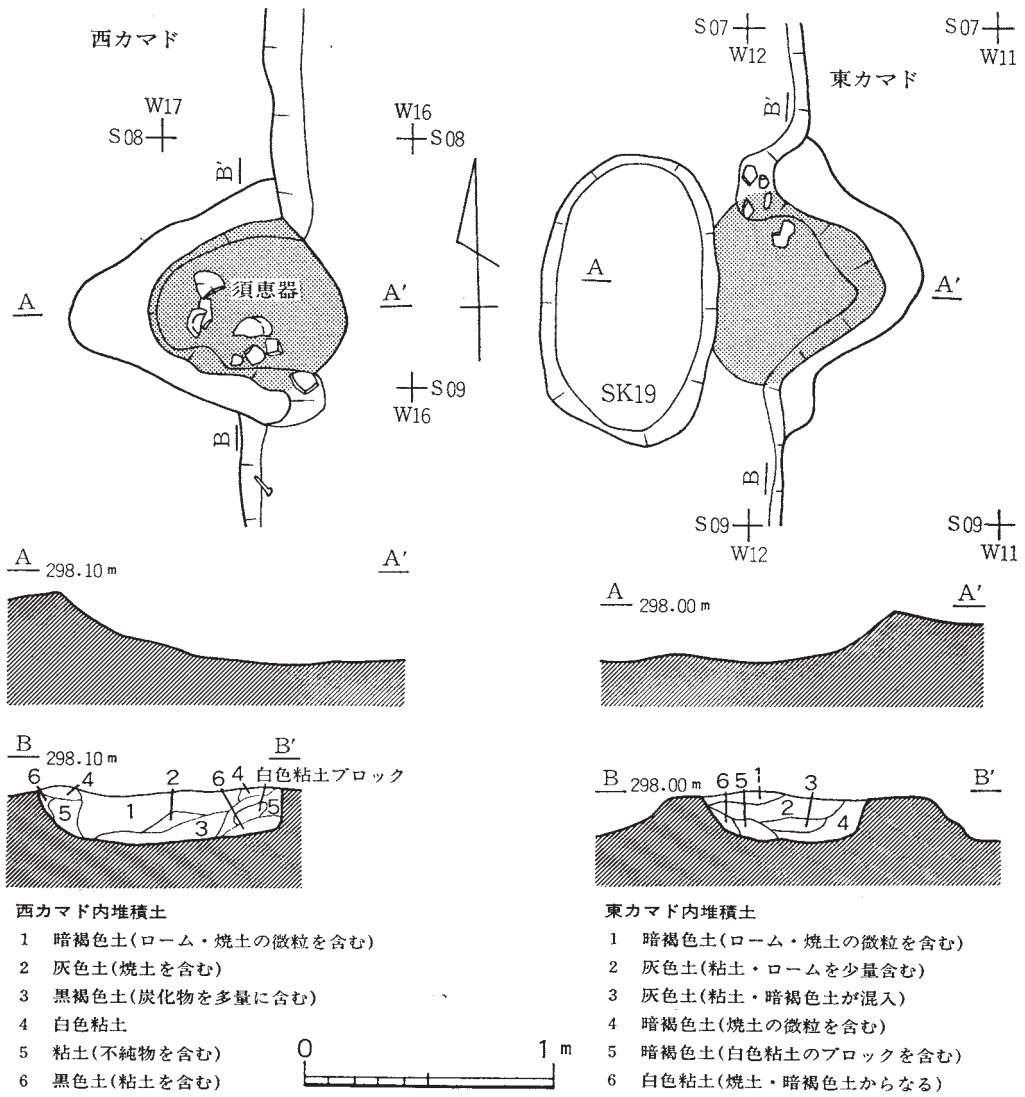
12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構（第40・41図，図版13）

Ｃ－４グリッドに位置する住居跡で大半が黒色土層上面にて検出された。プランは東西4.8m，



第40図　12号住居跡



第41図　12号住居跡カマド

南北3.7mで東西に長い長方形を呈す。当住居跡は，13・21号住居跡，１号建物跡，19・36号土坑と重複しており，その関係は19号土坑よりも古く他のすべての遺構より新しい関係である。

住居跡内堆積土は，焼土・木炭粒を含んだ黒褐色ないし茶褐色土で自然堆積層である。壁は高さ約15cmを測り，傾斜度は70～80度である。床面は黒色土を踏み固め貼り床としている。

カマドは東壁と南壁に計２基検出された。東カマドは東壁中央に位置し本体の大部分は住居外に張り出している。焚口幅65cm，奥壁まで約65cmを測り，カマド周囲は黄白色粘土を使用し燃焼部壁及び奥壁としている。袖部は燃焼部壁がわずかに張り出した程度で左側にのみ検出された。西カマドは西壁やや南寄りに設置されている。焚口部幅55cm，奥壁まで約78cmを測り，東カマド

に比べ細長い形態である。燃焼部壁，奥壁，袖部のつくりは東カマドに類似している。

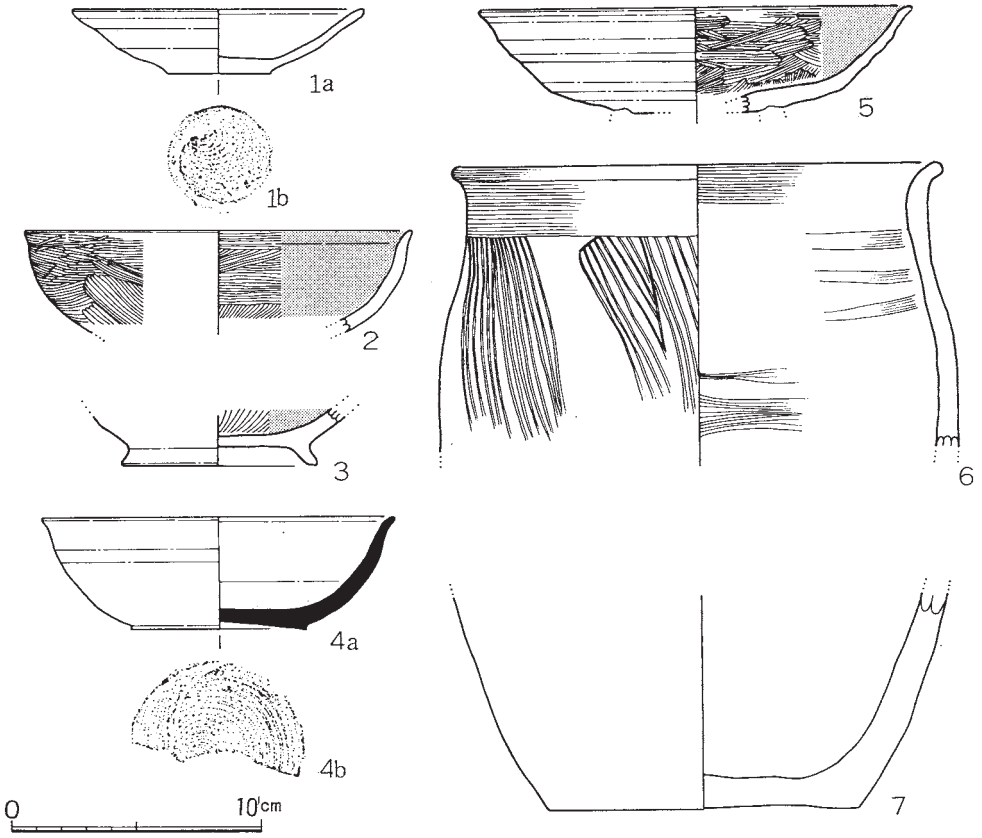
ピットは北東コーナーに１基確認された。直径80cmのほぼ円形で深さは18cmを測る。底面から壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は暗褐色土で，カマドからの流れ込みと思われる焼土・木炭粒を多く混入している。

遺　　物（第42・43図，図版34・40）

当住居跡に伴う遺物は，東西両カマド内と東カマド北脇からの出土量が多い。大半が土師器であるが，なかに鞴の羽口や鉄滓なども検出されている。

〔土　師　器〕

杯１（第42図２）　住居跡南東区の床面上層から検出された遺物で，体部下半から口縁部にかかる約1/4弱の破片である。現存高5.2cm，推定口径15.4cmを測り，器肉は５㎜程度である。成形にはロクロを使用しており，器画調整は内外面ともヘラミガキされ，内面のみ黒色処理されている。



第42図　12号住居跡出土土師器・須恵器

杯２（第42図１）　住居跡南西区の堆積土第１層内から検出された遺物で，体部下半から口縁部にかけ大半を欠損している。底径4.1cm，器高2.6cm，推定口径11.5cmを測る。ロクロ成形で，底部切り離し技法が回転糸切りで，調整を受けていない。器肉は３㎜程度と薄く，体部は直線的に外傾し口縁にいたる。

高台杯１（第42図５）　住居跡南東区床面から検出された遺物で，約1/4弱の破片である。推定口径17.2cm，現存高4.2cmを測る。高台部は欠落しているため計測は不可能であるが，貼り付け部分の痕跡から径約６cm強と推定できる。外面調整は体部下半がヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。

高台杯２（第42図３）　住居跡南西区床面上層から検出された遺物で，底部から体部下半にかかる破片である。現存高２cm，高台径7.8cm，高台部の高さ0.8cmを測る。成形はロクロで，回転糸切り技法によって切り離した後，高台部を貼り付けている。内面調整はヘラミガキで黒色処理されたと思われるが，二次焼成により黒色が消失している。

甕１（第42図６）　西カマド掘形から検出された遺物で，口縁部から体部にかかる破片である。外面調整は，口縁部がヨコナデ体部は縦位のハケメである。内面は，口縁部ヨコナデ，体部はナデが施されている。

甕２（第42図７）　東カマド内から検出された遺物で底部から体部にかかる破片である。現存高8.4cm，推定底径12.4cmで，体部下半外面には手持ちヘラケズリが加えられ，底部外面には木葉痕を有す。内面調整はヘラナデもしくはナデであるが，器面が摩滅しているため判然としない。

この甕はロクロ土師器に伴う甕形土器のなかでは底径の比が大である。

〔須　恵　器〕

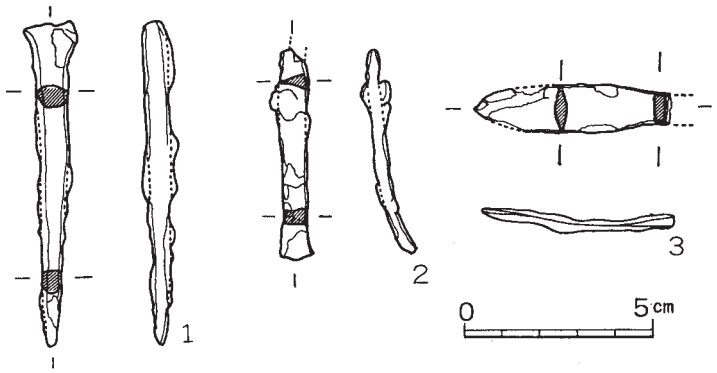
杯（第42図４）　西カマド内から検出された遺物で，約1/2を欠損する。口径14cm，底径6.9cm，器高4.5cmを測る。底部切り離し技法は回転糸切りで，その後調整はされていない。体部は丸みをもって立ち上がるが，口縁はやや外方に引き出し端部としている。この遺物は色調が橙味黄褐色を呈しており酸化焔焼成とみられるが，カマド内部の検出のため使用時における再酸化の可能性が強い。

〔土　製　品〕

ここでいう土製品は鞴の羽口のみである。東カマド北脇から４片検出されたが接合せず，いずれも図化が困難なものである。胎土には砂を多量に混入し，色調は橙味茶褐色であるがなかには外面の約半分に溶解した鉄分が多孔質の器面に浸透している破片が１点ある。

〔鉄　製　品〕

釘（第43図１）　西カマド南脇床面から検出された遺物で，全長8.5cmを測る。先端は断面がやや尖っているが，幹部は断面方形となる。頭部はやや扁平になっているが，折頭式の頭部が欠



第43図　12号住居跡出土鉄製品

損したものと考えられる。

銛（第43図３）　東壁際で床面より12cm浮いて検出された遺物である。基部の先端を欠損し，現存長５cmを測る。刃部の最大幅1.3cm，長さ3.7cmで，柳葉状を呈しやや反りがあるが，一部刃毀れがみられる。基部は幅９㎜，厚さ２㎜で，断面形はやや扁平な長方形となっている。

用途不明鉄製品（第43図２）　住居跡北東部床面から検出された遺物である。幅８㎜で，両端が欠けており現存長5.4cmを測る。断面形は鋭角な三角形をしており，幅は狭いが刀子となる可能性が強い。

この他に製品はないが鉄滓が比較的多く出土しているので報告しておく。検出箇所は，床面あるいはカマド内であるが，特に西カマド内に多い。大半が小塊であるが，西カマド内から検出された鉄滓のなかに径15cmで一見鍋底状を呈した大型のものもある。

ま　と　め

当住居跡は，二基のカマドが同時に使用されており，出土遺物も鞴羽口，鉄滓など，一般の住居跡とは異なる特徴をもつため，住居跡というよりは工房址的な性格が強いと考えられる。

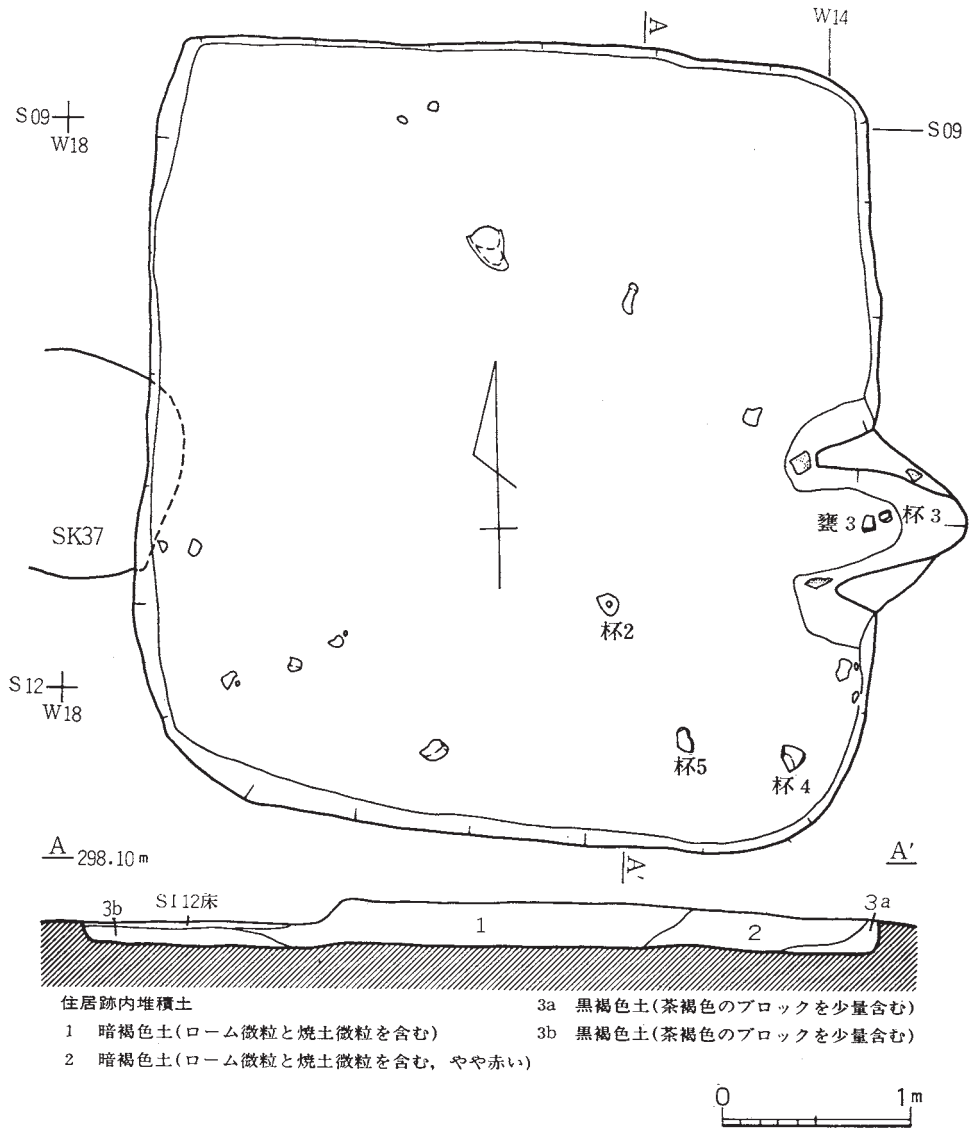
出土遺物の様相は，ロクロ土師器使用段階の中頃としてとらえられるが，重複関係にあり同様の時期内としてとらえられる13号住居跡よりは新しい。一方堆積土内には糸切り無調整の土師器杯が検出されていることからも13号住居跡より後出することが裏付けられよう。

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（第44・45図，図版14）

Ｃ－４・５グリッドにかけ黒色土上面にて検出された住居跡で，重複関係にある12号住居跡より古く21号住居跡，36・37号土坑よりも新しい遺構である。プランはほぼ方形を呈しているが，東西辺3.8m，南北辺4.2mと多少東西に長い。

住居跡内埋土は自然堆積層で中央部に茶褐色土，壁際には黒褐色土が流れ込んでいる。色調は全体的に12号住居跡と較べわずかに明るい。壁は現存高20cmを測るが北壁は12号住居跡に上部を破壊され10cm程度となっている。壁面傾斜度は60～80度である。床面は平坦で黒褐色土を貼り床としており，カマド付近が特に固い。

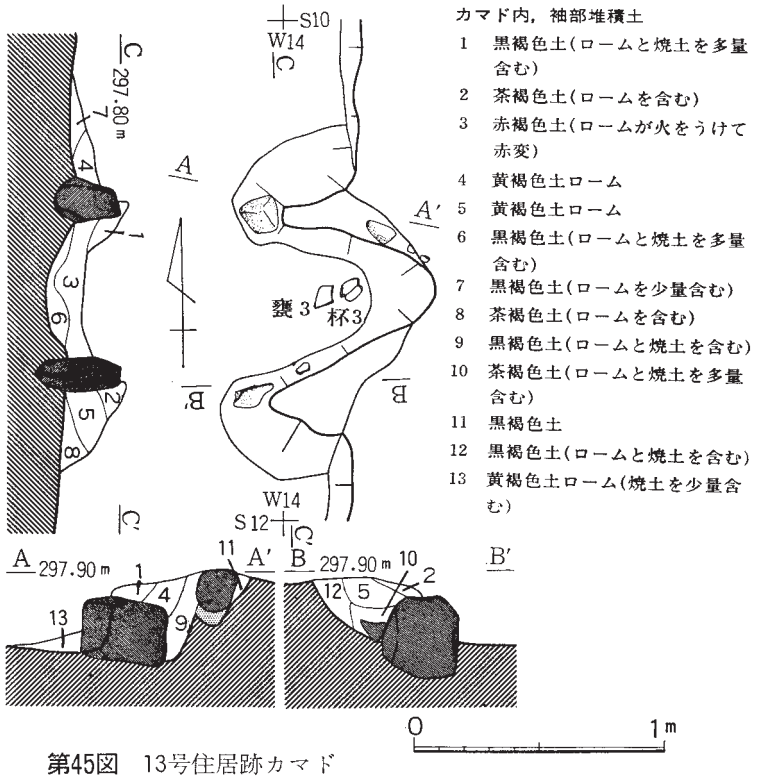


第44図　13号住居跡

カマドは東壁中央やや南よりに検出された。焚口部幅60cm，カマド先端まで90cm程度を測り約半分は住居外に張り出している。袖は幅約40cm，長さ45cmで，ロームと黒色土を袖材とし先端部には割石を使用している。

遺　　物（第46図，図版34）

当住居跡に伴うと考えられる遺物は，カマド及びその周辺部にも最も多く検出されたが，特殊な遺物として埋土から平瓦の小片が１点と貼り床内から同じく小片で鞴の羽口１点が，また埋土内から先端が鋭利な釘と思われる鉄製品の小片が検出されている。



第45図　13号住居跡カマド

杯１（第46図１）　貼り床内から検出された遺物で，体部下半から口縁部にかけて約1/4弱が残存しているロクロ成形の杯である。現存高4.3cm，復元口径13.7cmを測る。内面の調整はヘラミガキ及び黒色処理されている。体部下半外面には墨書があるが欠損部にかかっているため「本」とも想定できるが，判読は困難である。

杯２（第46図２）　杯１同様貼り床内から検出された遺物で，体部下半から口縁部にかけ約2/3が欠損している。器高４cm，底径６cm，推定口径13cmを測る。ロクロによる成形で，体部はわずかに丸みをもって外傾する。外面調整は底部から体部下端にかけ手持ちヘラケズリ，内面ヘラミガキで黒色処理されている。切り離し技法は調整のため不明である。体部外面に判読不可能な墨書が，底部外面には「×」のヘラ記号がみられる。

杯３（第46図３）　カマド内から検出された遺物で，底部から体部下半にかかる破片である。ロクロ成形で，底径5.8cm，現存高2.5cmを測る。外面調整は回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理がなされている。ミガキの方向は底部で放射状となるが，その単位は不明瞭である。

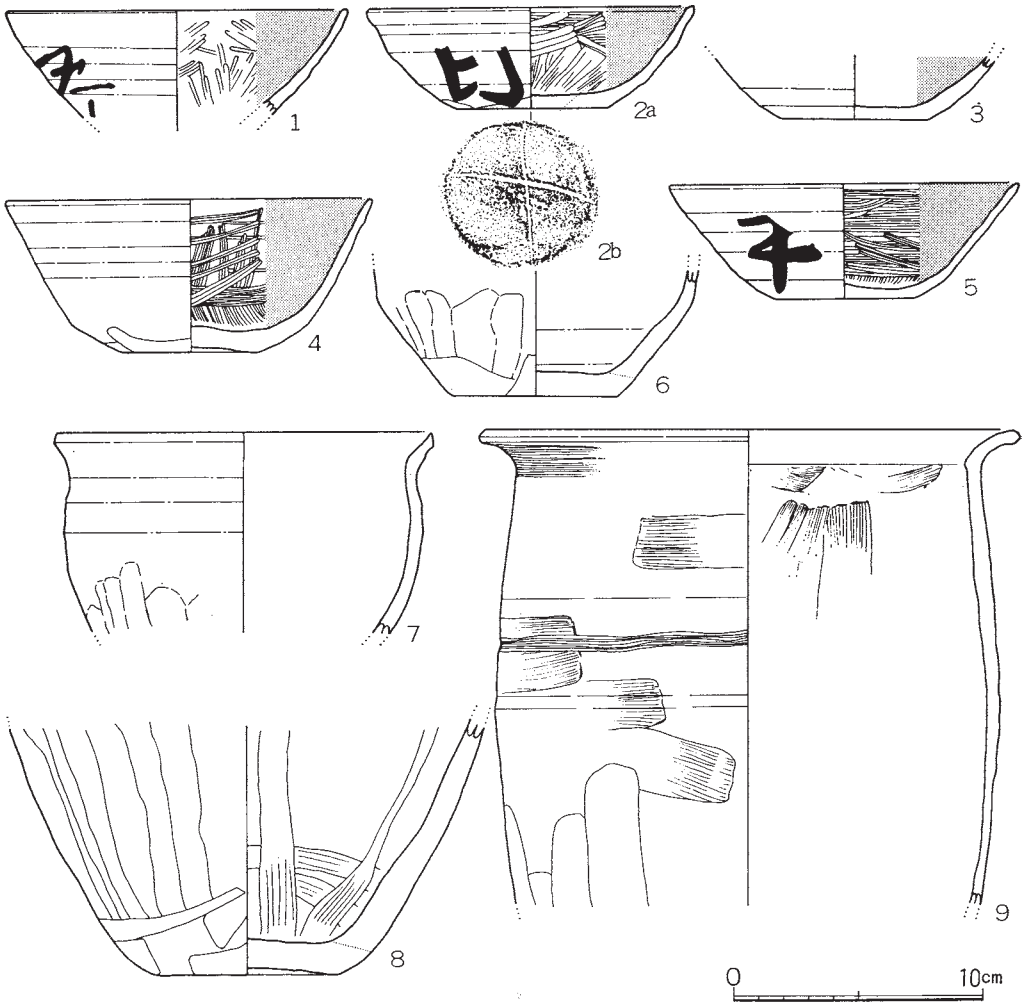
杯４（第46図４）　カマドの南脇床面から検出された遺物で，口縁から体部下半にかけ約3/4を欠損している。ロクロ成形で底部切り離し技法はヘラ切りである。口径14.6cm，器高6.2cm，底径5.3cmを測る。外面調整は底部から体部下半にかけ手持ちヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。ミガキの方向は底部が放射状，体部では横方向が基本である。この杯は，他の一般に見うけられるものよりも深く，口径に比して底径が小さい。

杯５（第46図５）　カマド付近の貼り床内から検出された遺物で，体部半ばから口縁部にかけ約1/2弱を欠損する。ロクロ成形で，口径14cm，底径5.4cm，器高4.6cmを測る。外面調整は底部から体部にかけ回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理されている。ミガキの方向は底部が

放射状，体部は横方向である。体部外面には墨書がみられるが欠損部があるため文字を断定することは困難である。

甕１（第46図６）　貼り床内から検出された遺物で，底部から体部下半にかかる破片である。ロクロ使用で底径6.6cm，現存高５cmを測る。外面調整は縦方向のヘラケズリの後体部下端に横方向のケズリを加えている。底部から外傾して約４cm立ち上がるがその後直立気味に延びて体部をなすと推定され，比較的小型の甕になると考えられる。

甕２（第46図７）　住居跡内堆積土内から検出された遺物で，口縁部から体部上半にかかる破片である。ロクロ使用の甕で，器高7.8cm，推定口径15cmを測る。口縁端部は明瞭な稜をもって引き出され，頸部でわずかに括れる。外面調整は体部下半はヘラケズリである。内面には粘土紐



第46図　13号住居跡出土土師器

の接合部と考えられる痕跡が認められることから，成形はマキアゲ，ミズビキ法と思われる。形態・色調・胎土など甕１と非常に近似した特徴を有す。

甕３（第46図９）　床面から検出された遺物であるが，14号住居跡床面から検出した遺物と接合したものである。口縁部から体部下半の一部まで残存しているが，全体的に約1/2強欠損している。成形は粘土紐の積みあげと考えられ，口径21.5㎝，残存高22.0㎝を測る。口縁端部が丸くおさめられ，頸部でわずかに括れる長胴の甕である。外面調整は，口縁部ヨコナデ，胴部上半が不定方向のナデ，胴部下半でヘラケズリとなっている。内面では，口縁部ヨコナデ，胴部は不定方向のナデである。

甕４（第46図８）　床面とカマド内から検出された遺物とが接合したもので，底部から体部下半部にかけて残存している。底径7.3㎝，現存高10㎝を測る。外面調整は，縦方向のケズリの後体部下端のみ横方向のケズリを加えている。内面は不定方向のナデであるが，部分的に縦方向の指ナデの痕跡がうかがえる。

ま　と　め

当住居跡の出土遺物は，土師器の杯・小型甕・長胴甕によって構成されている。これらの土器の大半は成形にロクロを使用しており，広義の表杉ノ入式のなかでとらえられる。就中，杯は調整痕として回転のヘラケズリと手持ちヘラケズリの両技法が混在し，量的には手持ちヘラケズリ技法のほうが上回っている。それに内面のヘラミガキの方向は放射状となる。これらの特徴をもつ土師器はロクロ土師器使用段階の中頃に位置づけられ，住居跡の時期も同様に考えたい。また床面出土の甕形土器の破片が14号住居跡の床面出土のそれと接合したことから，同時期の存在も考えられる。

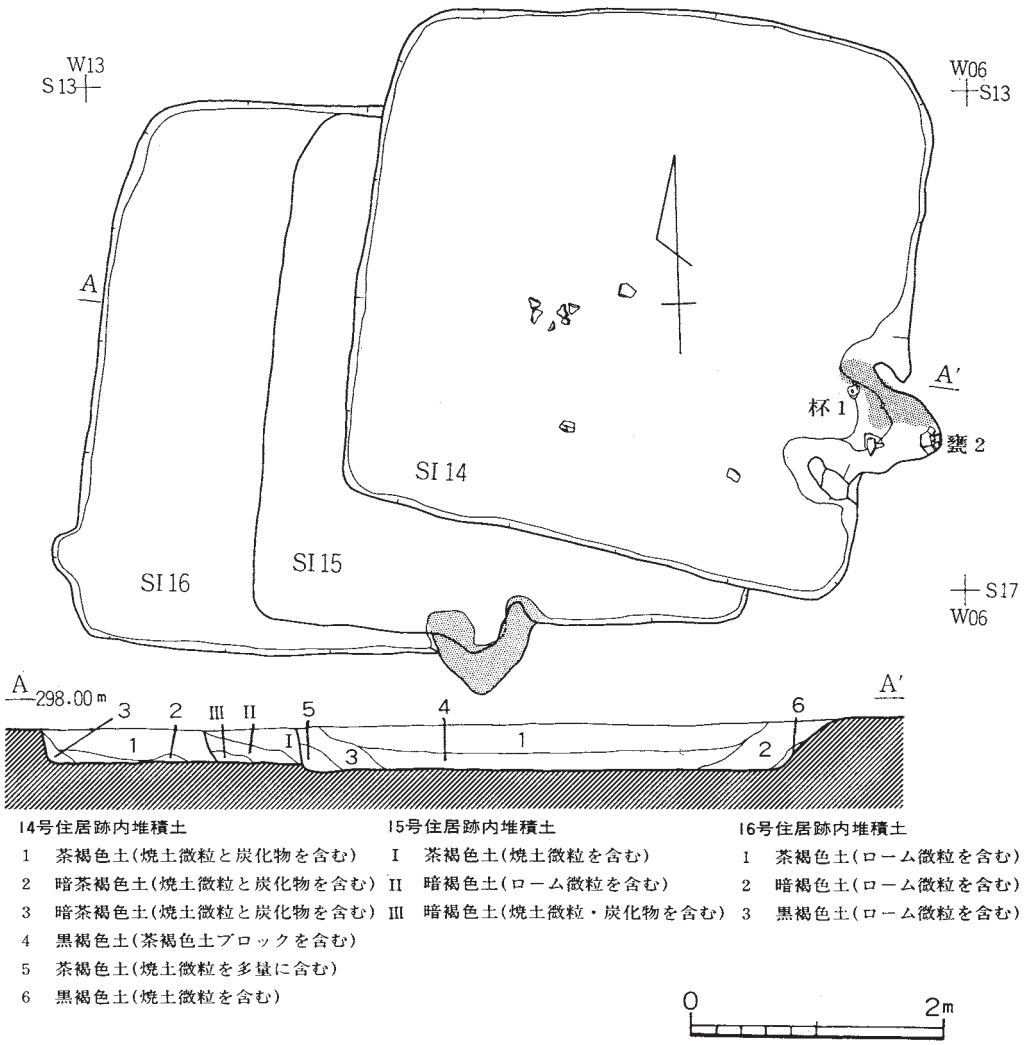
14号住居跡　ＳＩ14

遺　　構〔第47図，図版15〕

Ｃ・Ｄ－４グリッドにおいて，黒褐色土層面で確認された住居跡である15・16・21号住居跡，11号掘立柱建物跡と重複しているが，当住居跡が最も新しいため，住居跡全体のプランを確認することができた。

遺構内堆積土は暗褐色土を基本とし，炭化物・焼土の含みぐあいから６層に細分することができる。内４層は壁際の将棋倒し状の堆積土で，残り２層は中央のレンズ状の堆積土である。このことから当住居跡は自然の営力によって埋没したと考えられる。床面は３～４㎝の厚さでロームを貼り，平坦に固くたたきしめられており，堆積土とは明確な違いをもって分離できた。

平面プランは，東西４ｍ，南北3.8ｍの方形であるが，北東コーナー部の崩壊が激しく，やや不整形になっている。壁高は，切り合い関係を捉えるため上面をやや削ったが，35～40㎝を測り，



第47図　14・15・16号住居跡

北東コーナー部を除いてほぼ垂直に立ち上がっている。

カマドは東壁に位置している。大部分が崩壊した状態で検出され，カマド構築土もほとんど検出されず，燃焼部底面が若干みられる程度であった。ただ煙出し部にあたると思われる部分に，土師器の長胴の甕がつぶれた状態で検出され，わずかにカマドの形態を知ることができる。以上のことから，幅50cm前後の焚口を持ち，住居跡壁を燃焼部奥壁とし，奥壁からやや傾斜を持って煙出しに至る形態を持っていたものと考えられる。カマドの他にピット，周溝などは検出されていない。

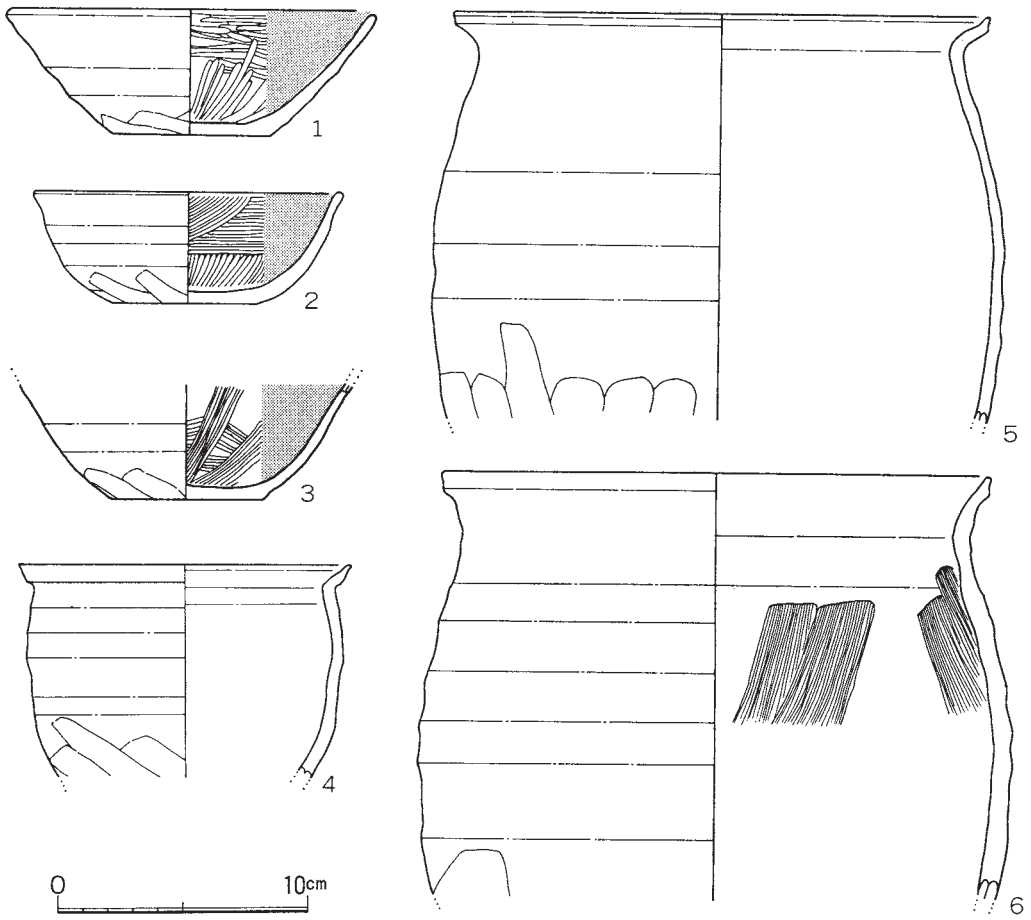
残りのよい南辺の傾きは，東西を基準として14°北に偏している。なお，21号住居跡・11号掘立柱建物跡は，床面を取り外した時点で検出された。

遺　　物（第48図）

堆積土・床面より多くの遺物が出土しているが，ほとんどが破片で，復元できるものは床面・カマド内のものに集中している。土師器が圧倒的に多く，須恵器は甕体部破片が少量みられる程度である。

杯１（第48図２）　カマド内より出土し，口縁の一部を欠損している。ロクロ成形によるもので，底部から内彎気味に立ち上がり，全体的に丸みを持っている。調整は底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリを行い，内面は底部を放射状，体部から口縁部に横方向のヘラミガキを施し，黒色処理している。底部切り離し技法は不明である。法量は，口径12.3cm，底径5.6cm，器高5.6cmを測る。

杯２（第48図１）　床面より出土し，全体の1/3を欠損している。ロクロ成形によるもので，底部から直線的に外傾して口縁部に至る。底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を行い，



第48図　14号住居跡出土土師器

内面は底部に放射状，体部から口縁に横方向のヘラミガキを施し，黒色処理している。底部切り離し技法は不明である。法量は，口径14.5cm，底径６cm，器高５cmを測る。

杯３（第48図３）　床面より出土し，体部の2/3を欠損している。ロクロ成形によるもので，底部切り離し技法は不明である。調整は，底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を行い，内面は，体部に横方向のヘラミガキを施した後，底部から放射状のヘラミガキを行い，黒色処理している。底径は６cmを測り，胎土・焼成とも，杯２に酷似している。

甕１（第48図４）　床面より出土し，口縁部から体部にかけての1/4程の破片である。ロクロ成形によるもので，口縁部が「く」の字状に引き出している。体部下半外面に手持ちヘラケズリ調整を行っている。推定口径13.2cmを測る。

甕２（第48図６）　カマド煙出し部に使用したと考えられ，体部下半を欠損している。ロクロを使用し，軽く外反する口縁部を有している。最大径を胴部に有し，丸みをもって張り出している休部下半外面にヘラケズリ調整，体部内面に縦方向のヘラナデ調整を行っている。推定口径21.8cmを測る。

甕３（第48図５）　床面より出土し，1/3程の破片を復元実測した。ロクロを使用し，「く」の字状に外反する口縁部を有している。最大径を胴部に有し，丸みを持って張り出している。体部下半外面にヘラケズリ調整を行っている。甕２に比べ，硬質で器厚が一定している。推定口径21.2cmを測る。

ま　と　め

本住居跡は，黒褐色土面で検出されたもので，３軒の重複関係にあるなかで最も新しい住居跡である。カマドはかなり崩壊していたが，床面は貼り床がよく残っていた。出土遺物はすべてロクロ成形によるもので，杯底部の調整などから，表杉ノ入式でも新しい時期のものと考えることができる。

15号住居跡　ＳＩ15

遺　　構（第47図）

14・16・21号住居跡・11号建物跡と重複して検出された住居跡で，14号住居跡より古く16号住居跡より新しく，21号住居跡・11号掘立柱建物跡は住居跡床面下から検出されている。

遺構内堆積土は壁際でしか観察できないが，将棋倒し状を呈しており，自然堆積の可能性が強い。床面は暗褐色土で若干しまりがあり，焼土を含んでいる。平面プランは一辺４ｍ前後の方形で，南辺にカマドを有している。床面レベルは，14号住居跡よりも５cm程高く，16号住居跡と同レベルである。残存壁高は25cm程で，西南コーナーの一部は16号住居跡の北壁と重なっている。

カマドは南壁のほぼ中央に位置し，14号住居跡同様かなり崩壊した状態で検出された。残存部

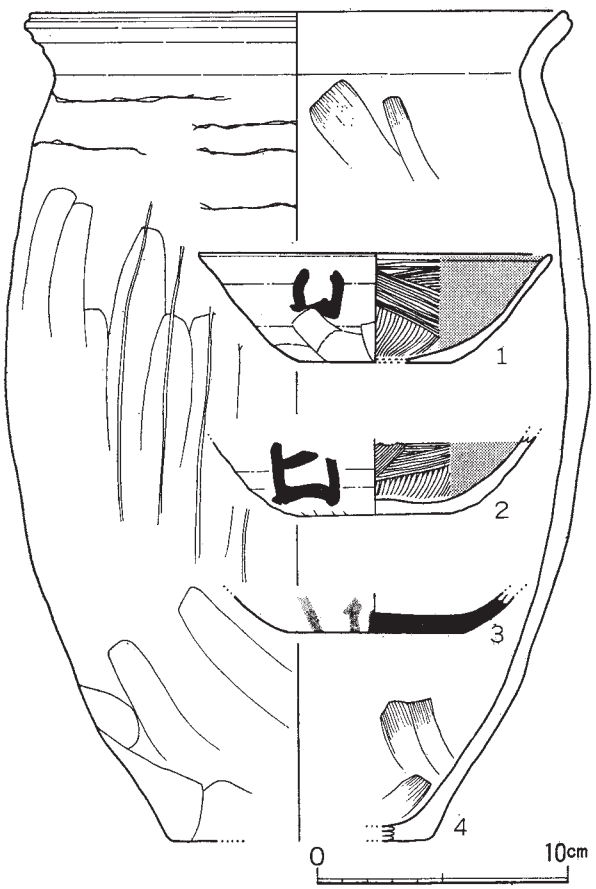
分は燃焼部奥壁から煙出し部と思われ，堆積土上層に若干ではあるが天井部崩壊土と思われる黄褐色ロームが見られる。明確に袖部と思われるものは検出されていないが，ローム微粒を含む茶褐色土の張り出し部分が存在している。周溝・ピット等は検出されていない。

遺　　物（第49図，図版35）

重複関係によって残存状態が悪かったせいか，完形品は出土していない。図示したものはすべて破片であるが，甕は接合が進み，全体を窺うことができる。

〔土　師　器〕

杯１（第49図１）　埋土より出土したもので，破片を復元実測した。ロクロ成形によるもので体部下半に丸みをもち，体部から口縁にかけては直線的である。底部から体部下半に手持ちヘラケズリを行い，内面はヘラミガキの後黒色処理している。底部の切り離し技法は不明である。体部外面に判読できない墨書がある。推定口径14cm，底径６cm，器高4.3cmを測る。



第49図　15号住居跡出土土師器・須恵器

杯２（第49図２）　埋土より出土し，底部から体部にかけての1/2程の破片である。ロクロ成形によるもので，底部からやや丸みを持って立ち上がっている。回転ヘラ切りによってロクロから切り離され，底部のみ軽い手持ちヘラケズリを行っている。内面は放射状，体部に横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。底部の切り離し技法は不明である。体部外面には墨書がみられ，「日」となる可能性が強い。底径6.5cmを測る。

甕１（第49図４）　床上面より出土し，底部の一部を欠損している。ロクロを使用し，なだらかな「く」の字状を呈す口縁部を持つ。最大径を胴部に有しているが，口径との差はそれほど大きくはない。体部外面には縦方向のヘラケズリ，内面はヘラナデ調整を行い体部外面には積み上げ痕が残っている。口径約21.2cm，器高33cmを測る。

〔須　恵　器〕

杯１（第49図３）　埋土より出土した底部の1/4を残す破片である。底部から体部下半に回転ヘラケズリ調整を行い，底部と体部の境が明瞭でない。外面に火襷が見られる。

ま　と　め

本住居跡は３軒の住居跡と重複していたため，西側と南側の一部しか検出できなかった。出土遺物もほとんどが堆積土中で，住居跡の所属時期は明確ではない。ただ，破片においても，ほとんどがロクロ使用のものであることから，表杉ノ入式期に属すものと考えられる。

16号住居跡　ＳＩ16

遺　　構（第47図）

14・15号住居跡に切られて検出されている。西壁近くの床面下からは，11号掘立柱建物跡の南西隅柱が確認され，北西コーナーは21号住居跡張り出しピットの一部を切っている。

遺構内埋土堆積状況は，住居跡西側1/3ほどでしか視察できないため，自然か人為堆積か判然としない。床面は，ロームブロックを含む黒褐色土をたたきしめたもので，しまりが強い。床面レベルは15号住居跡と同じであるが，床構築土の違いによって識別することができる。住居跡北西コーナー付近において，床面より若干浮いた位置に狭い範囲で焼土が検出されている。

平面プランは，残在している西壁から推測するならば，一辺4.20ｍの方形を呈し，15号住居跡より一回り大きな住居跡と考えられるが，15号住居跡カマド東側ではプランが確認できなかったため，南北に長いプランになる可能性もある。壁残存高は，残りのよい北西コーナーから西壁にかけて約26㎝を測り，南壁付近では16㎝程度である。

床面では周溝・ピットは確認できず，付随すると思われるカマドも検出されていない。

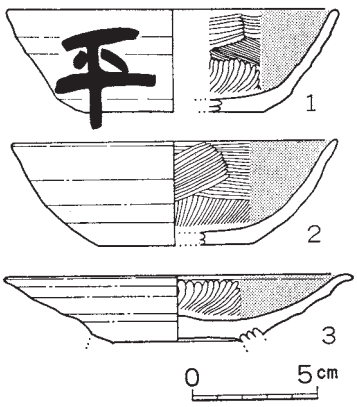
遺　　物（第50図，図版35）

土師器・須恵器が少量出土しているが，須恵器は小破片で数も少なく，実測できるものは出土していない。図示した土師器は，床面・床上面・貼り床内より出土したものである。

〔土　師　器〕

杯１（第50図１）　貼り床内より出土し，全体の1/3が欠損している。ロクロ成形によるもので，底部にわずかに回転ヘラ切り痕が観察される。底部外面には手持ちヘラケズリ調整を行い，内面は底部に放射状，体部から口縁部にかけて横方向に順次ヘラミガキを施した後，黒色処理している。口径13.2㎝，底径7.1㎝，器高4.1㎝を測る。体部外面に「平」と読める墨書がある。

杯２（第50図２）　床上面より出土した底部から口縁部にかけての破片である。ロクロ成形によるもので，底部の切り離し技法は不明である。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整を行い，後に底部のみ手持ちヘラケズリ調整を加えている。内面は底部を放射状，体部から口縁



第50図　16号住居跡出土師器

部にかけて横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。推定口径13cm，底径６cm，器高4.1cmを測る。

高台付皿（第50図３）　床面より出土し，高台は剝落している。ロクロ成形によるもので，底部の切り離し技法は不明である。底部は回転ヘラケズリ調整を行い，高台貼り付け時に，底部周縁にロクロナデを行っている。内面は放射状のヘラミガキを施した後，黒色処理している。焼成良好で硬質である。口径13.9cmを測る。

ま　と　め

本住居跡は重複関係のため，西側の一部しか検出されなかった。遺構の年代は床面より出土した土師器が推定資料となるが，出土土器はロクロを使用したもので表杉ノ入式に属するものである。従って16号住居跡の年代は平安時代と考えられるが，遺構の重複関係から同時代の14・15号住居跡よりは前出することがいえる。

17号住居跡　ＳＩ17

遺　　構（第69図）

調査区南側に飛び出したＥ－７グリッドにおいて検出されている。検出面は，北側が黒褐色土，南側が黄褐色ロームである。東側の半分以上は開田のために削平され，住居跡を取り囲む８号掘立柱建物跡との重複部分も破壊されているため，その新旧関係は不明である。

残存壁高は高い所で20cm，低い所で４cm程で，高い部分の壁面は垂直に掘り込まれている。遺構内堆積土は，ローム粒を含む黒褐色土の単一層のみで，断定はできぬが自然堆積の可能性が強い。床面は，検出面同様北側が黒褐色土で，南側は黄褐色ロームであるが，双方の境界付近にロームブロックを含む黒褐色土の部分が認められた。平面プランは，残存部分から3.60m前後の方形を呈すると思われる。

遺　　物

床面より須恵器甕の体部破片２点，土師器甕の体部破片２点が出土している。須恵器は２点とも外面に平行たたきを有するものである，土師器は摩滅しているがロクロ未使用のものと思われる。

ま　と　め

本住居跡は半分以上を削平され残存状態が悪く，柱穴・周溝・カマド等も検出されなかった。

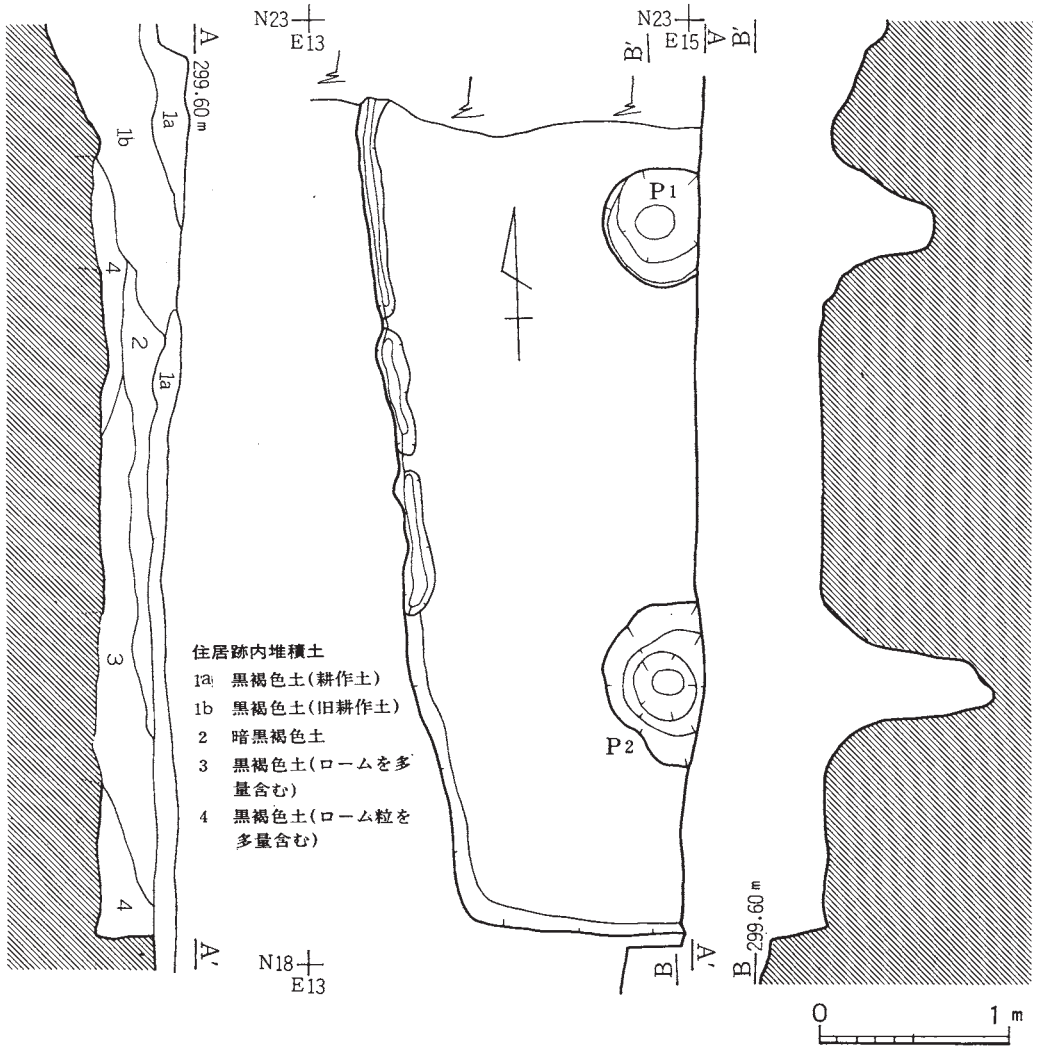
所属時期は，重複関係が明確でなく，出土遺物も破片４点であるため，明らかにすることはできなかった。

18号住居跡　ＳＩ18

遺　　構（第51図）

調査区Ｆ－１・２グリッド内で検出された住居跡であるが，全体の大半が調査区外のため全容をつかむことはできなかった。また北壁は，調査区北側の農道によって撹乱され消滅している。検出面はローム層上面である。平面プランは，ほぼ方形になると思われるが，部分的な検出のため規模は不明である。西壁の現存長は4.4mを測る。堆積土はローム粒を多く含む黒褐色土が全面に堆積している。

床面は地山ロームをたたきしめそのまま床として利用しており，凹凸もなく平坦である。壁は

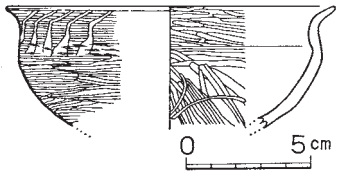


第51図　18号住居跡

残存状態の良好な所で25cm前後を測るが，ほとんどない部分もある。やや外方に広がりながら立ち上がる。周溝は西壁北よりで検出されたが，これは部分的なものとみられ，南壁部分にはない。柱穴は２本検出された。南側の柱穴は径約135cm，深さ100cm，北側の柱穴は径約110cm，深さ60cmを測る，カマドや貯蔵穴状ピットなどは検出されなかった。

遺　　物（第52図）

遺物は覆土内より土師器片が数点検出されたが，次に図化できた杯について説明を加える。



第52図　18号住居跡出土土師器

杯（第52図）　口縁部から体部にかけて残存する1/4を図化した。胎土は緻密であり色は赤褐色を呈しているが，器面内外は仕上げの段階で黒褐色を呈するものを塗り処理している。器形は丸みをもって立ち上がる体部からほぼ直立する頸部に至り，外反する口縁部に移行する。その際頸部内外面に稜を形成する。調整は全面ヘラミガキが丁寧に施されている。法量は推定口径13.2cm，現存高4.9cmを測る。

ま　と　め

住居跡の規模は，大半が調査できなかったため全貌を捕えることはできなかった。ただ検出された柱穴と壁との間隔は１ｍ前後であることから１辺が５ｍを大幅に上回らない規模であろうことがいえる。柱穴の断面形状は漏斗状を呈している。前述の計測値は床面レベルでのもので柱穴全体を代表するものではなく，実際に柱の据えられた部分では径30～40cmを測る。

当住居跡の時期は，床面直上から検出された土師器杯によって古墳時代後期とすることができる。床面密着の資料ではないが，他に新しい時期の遺物が混入していないことから，ほぼこの時期が妥当かと考えられよう。

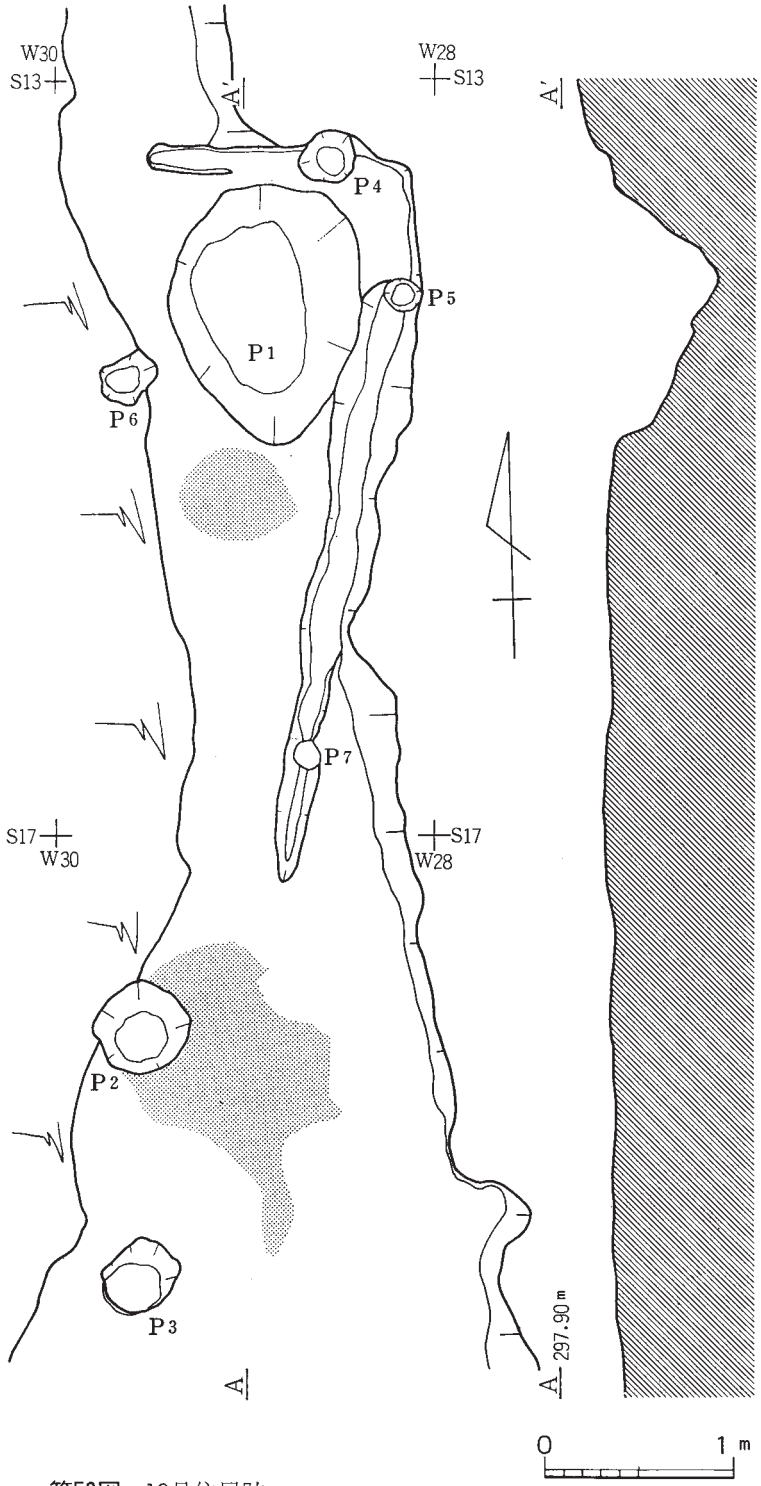
19号住居跡　ＳＩ19

遺　　構（第53図）

Ｂ－５グリッド西側で検出された住居跡である。調査区西側は全体的に耕作による大幅な削平をうけており，住居跡北東コーナーから東辺，北辺の一部しか確認できなかった。検出面は地山ローム面で，ローム面上層はすべて撹乱土である。

遺構内堆積土は，比較的残りのよい部分で一層のみ確認でき，しまりのある暗黄褐色土であった。床面は北東コーナー付近でわずかに確認され，暗黄褐色のローム面を床面としている。残存壁高は，高い所で24cmを測り，西および南へいくにつれ徐々に低くなり，北辺で1.40m，南辺で3.25mいった所で消失している。

床面が残存している部分では，周溝と思われる溝が認められ，床面からの深さ３～４cmの深さで壁際をまわっている。住居跡に伴うピットはP_1・P_4～P_7の５個が考えられる。P_1は卵形を呈するもので長軸137cm，短軸100cm，床面からの深さ約30cmのピットである。壁際のP_4・P_5・P_7は



第53図　19号住居跡

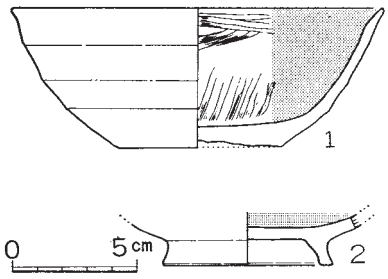
壁柱穴とも考えられるが，P_6とあわせて，P_1と関連を持つなんらかの施設となる可能性もあり，明確にその性格を捕えることは困難である。北側のP_2・P_3は，床面が飛んでいたため掘り込み面がわからず，住居跡に伴うかどうかは不明である。P_2～P_7の検出面からの深さは，P_2から順に24cm，12cm，26cm，14cm，70cm，22cmである。P_6周辺に焼土の広がりがみられたが，破壊が激しくカマドとは限定できない。

遺　　物

（第54図，図版35）

当住居跡は，先にも述べた通り，残存状態がきわめて悪く，遺物はほとんどが住居跡プラン内における撹乱土中より出土したもので，住居跡埋土および床面より出土したものは少数である。図示したものは土師器２点で，床面出土のものである。

杯１（第54図１）　ロクロを使用したもので，ほぼ完形品である。底部



第54図　19号住居跡出土土師器

から体部下半に回転ヘラケズリ調整を行っているため，切り離し技法は不明である。内面は底部を一定方向，体部から口縁部に横方向のヘラミガキを施し，黒色処理している。口径14.6cm，底径6.3cm，器高5.6cmを測り，比較的口径が広く器高の高いもので，その分底径が小さく感じられる。胎土は砂っぽい感じのもので表面は脆弱である。

高台杯１（第54図２）　底部と高台部のみ残存している。底部は回転ヘラケズリ調整と思われるが，高台付着の際のロクロナデによって不鮮明になっている。内面は黒色処理を施しているが調整は摩滅のため不明である。杯１同様砂っぽい胎土で，表面は脆弱である。高台径は5.2cmを測る。

以上19号住居跡は遺存状態が悪く，住居跡に伴う遺物が少ないため，明確にその所属時期を捕えることはできないが，土師器杯底部などの破片をみると，すべて回転ヘラケズリ調整を施すものである。また須恵器杯においても，回転ヘラケズリ調整を施したものが出土していることから，本住居跡は平安時代初頭以降の年代が考えられる。

20号住居跡　ＳＩ20

５号住居跡の東側で大部分が開畑により削り取られた状態で，北西コーナー部分だけが検出された。確認された時には，床面はほとんど露出しており，遺存状態は極めて悪い住居跡であったが床面には多く焼土が確認された。周溝・柱穴等も検出されず，伴出遺物もないため遺構の所属時期は不明である。

21号住居跡　ＳＩ21

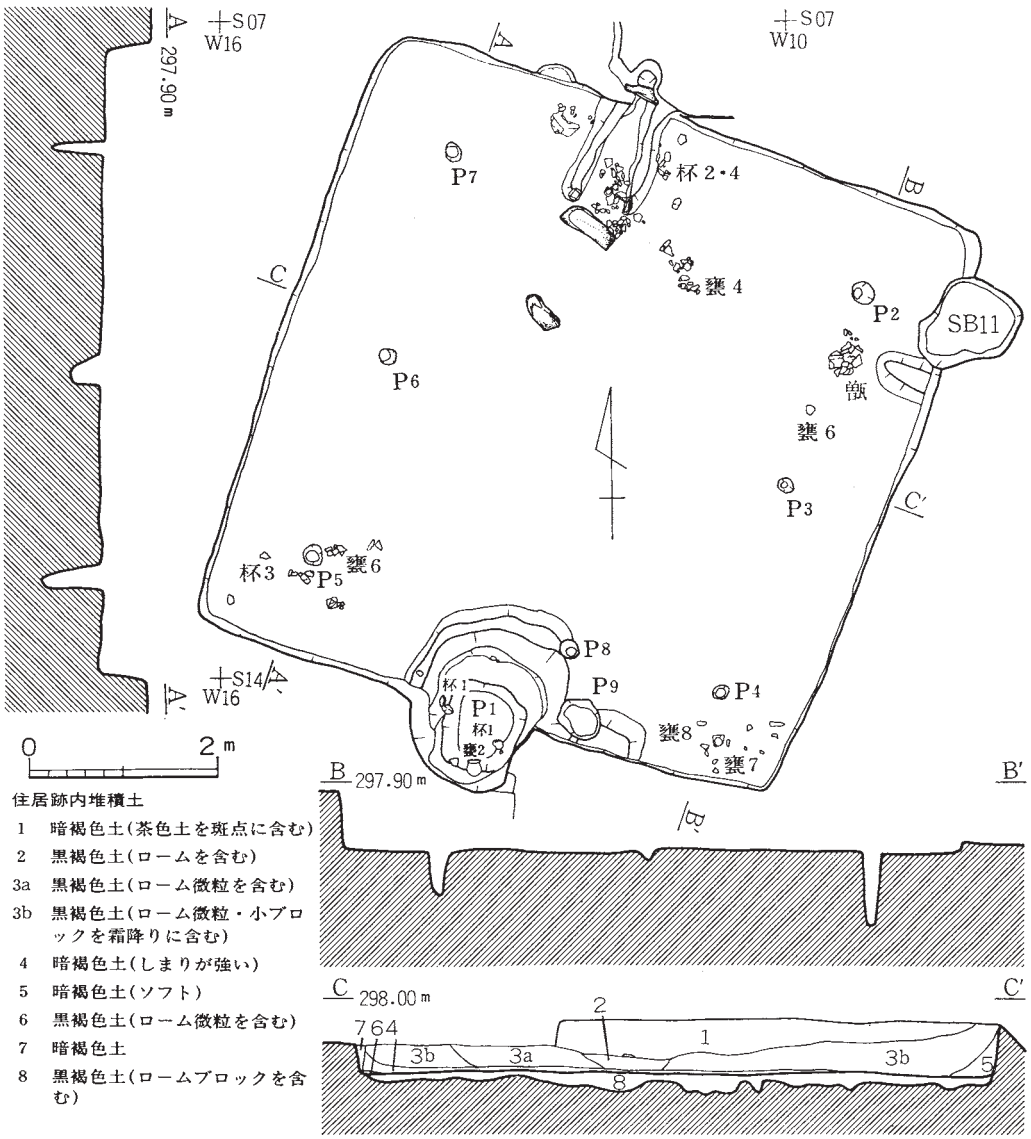
遺　　構（第55～57図，図版16～18）

Ｃ・Ｄ－４・５グリッドにかけて検出された住居跡で，重複関係にある12～16号住居跡，11号建物跡，19号土坑のいずれよりも古い遺構である。検出面は第Ⅱ層黒色土。プランは一辺が6.7mを測る方形である。住居跡内堆積土は大きく４層に別けられ自然堆積を示すレンズ状の流れ込みを呈している。

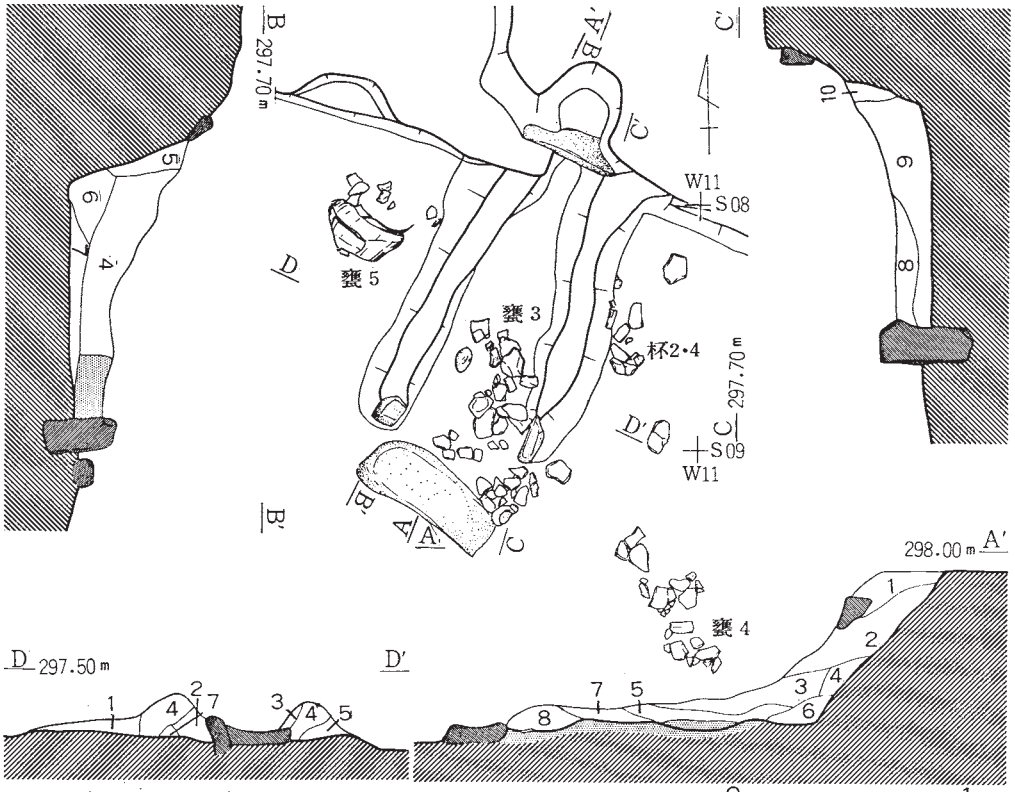
壁は重複している遺構によって大部分が破壊されているが，破壊をまぬがれた北東部では壁高60cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は住居跡掘形底面を不規則に掘り窪めた後，黒色土にロームを混入した土を叩き込んで床面としている。

カマドは北壁中央やや西寄りに検出された。規模は両袖最大幅85cm，焚口から煙道先端まで170cmを測る。袖は平均幅約20cm，長さ右袖110cm，左袖115cmで壁にとりつき，先端部には花崗

岩の割り石を立てて焚口部を構成している。袖材は黄褐色粘土が基調である。焚口部は，幅50cmで，高さは袖右の床面からの高さからして約15cmと推定される。カマド前面にて片面の焼けている扁平な花崗岩が検出されたが，この石は本来焚口部の天井石として機能していたものであろう。焼成部は焚口部から奥へ60cm入り込んだ範囲である。燃焼部底面はわずかに窪み奥壁でなだらかに立ち上がる。その後底面はしばらく水平に移行し先端部で傾斜角約50度をもって登る。カマド先端部は壁を50cm抉り込んでつくられ，先端部検出面から10cm下った位置に扁平な花崗岩を埋め



第55図　21号住居跡



カマド内，袖部堆積土（B－B′，C－C′，D－D′）

1　暗褐色土(ロームと焼土を含む)
2　暗褐色土(焼土を含む)
3　暗黄褐色土(暗褐色土を含む)
4　暗黄褐色土(焼土と黒色土を含む)
5　黄褐色土
6　暗黄褐色土
7　黄褐色土(焼土と黒色土を含む)
8　黄褐色土(焼土を多量含む)
9　暗褐色土(焼土微量と黒色土を含む)
10　黄褐色土

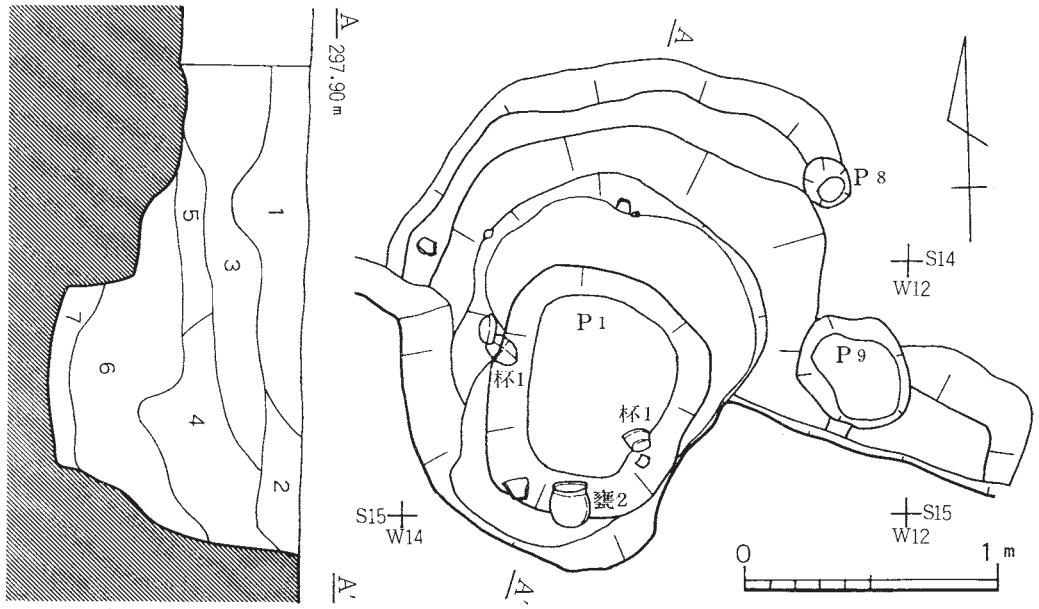
カマド内堆積土（A－A′）

1　暗褐色土(ローム微粒を含む)
2　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)
3　黄褐色土(焼土を少量含む)
4　黒褐色土(ローム・焼土小ブロックを少量含む)
5　暗褐色土(ローム微粒を含む)
6　黒褐色土(焼土小ブロックを少量含む)
7　暗褐色土(ローム微粒を少量含む)
8　黒褐色土(ローム・焼土微粒を含む)

第56図　21号住居跡カマド

込んでいる。

ピットは総計９個検出された。P_1は南壁の中央に位置し，形状は長辺90cm，短辺80cmを測る不整方形で，深さは床面から55cm，住居跡検出面から103cmを測る。ピットの周縁には最大幅25cmの平坦面が断続的に巡る。さらに平坦部の外周には床面からの高さ４cmの土手状の高まりが取り巻いている。P_2～P_8は柱穴と考えられるピットである。直径20cm弱で住居跡対角線上にのる四隅の柱穴が深さ50～80cmと深く，他の柱穴は10～30cmと浅い。P_9はP_1の東側壁近くにあり，径50cmを測る不整の円形を呈している。このピットは後述する突出部を一部切っており，埋土も他のピットよりも軟質であるため単なる撹乱の可能性が強い。



P1内堆積土

1　暗褐色土(ローム微粒・炭化物を含む)
2　暗褐色土(ローム微粒を多量含む)
3　暗褐色土(ロームブロック・黒色土を含む)
4　暗褐色土(ローム微粒・ロームブロックを含む)
5　暗褐色土(ローム微粒を少量含む)
6　黒褐色土(ローム微粒を少量含む)
7　茶褐色土(ロームブロックを少量含む)

第57図　21号住居跡張り出しピット（P_1）

東壁北寄りとP_1東側には壁から住居跡内に向かって突出した土手状の高まりを検出した。法量は東壁のものが，幅約50cm，長さ60cm，高さ６cm，南壁のものが幅80cm，長さ45cm，高さ４cm程度である。

遺　　物（第58～60図，図版35・36）

遺物は主にカマドとカマドに対面するP_1内及び北西コーナー部を除く三隅に検出された。須恵器等の伴出はなく土師器ばかりの出土であった。

〔土　師　器〕

杯１（第58図１）　P_1堆積土内から検出された丸底杯で，口縁部の一部を欠損している。口径14cm，器高5.7cm。頸部から口縁部の立ち上がりは，一旦やや内傾したのち外に開いて端部に至る。器画調整は全面ヘラミガキであるが，底部の外面はミガキが粗雑なため下地にヘラケズリの痕跡がうかがえる。ミガキの方向は基本的に底部内面が放射状，他は横位である。色調は橙味黄褐色で，胎土は若干の砂粒を含むが精選され密である。

杯２（第58図２）　カマド右袖脇床面から検出された遺物で，底部から口縁部にかかる全体の約1/2が現存する。現存高６cm，推定口径14.4cm。丸底の杯で頸部で一旦括れをみせるがのち外傾

して口縁部となる。括れ部の外面には稜をもつ。器面調整は全面ヘラミガキであるが，前段階は口縁部がナデ，体部外面がヘラケズリとなっている。胎土は精選され密で，色調は橙味赤褐色をおびている。内面の剝落が著しい。

杯３（第58図３）　住居跡南西部コーナー床面から検出された遺物で，底部から口縁部にかかる1/4弱を残している。現存高5.3cm，推定口径13.3cm。丸底の底部から丸味をもって立ち上がり頸部で一旦括れ，外傾して口縁に至る。括れる際下部には明瞭な稜線をつくる。器面調整は全面ヘラミガキであるが，下地として口縁部外面にヨコナデの痕跡がうかがえ，また底部外面はミガキも極めて疎らになるためケズリの痕跡が明瞭に観察される。ミガキの方向は大部分横方向であるが，口縁部のみ縦方向となる。胎土は精選され密で，色調は赤褐色を呈している。

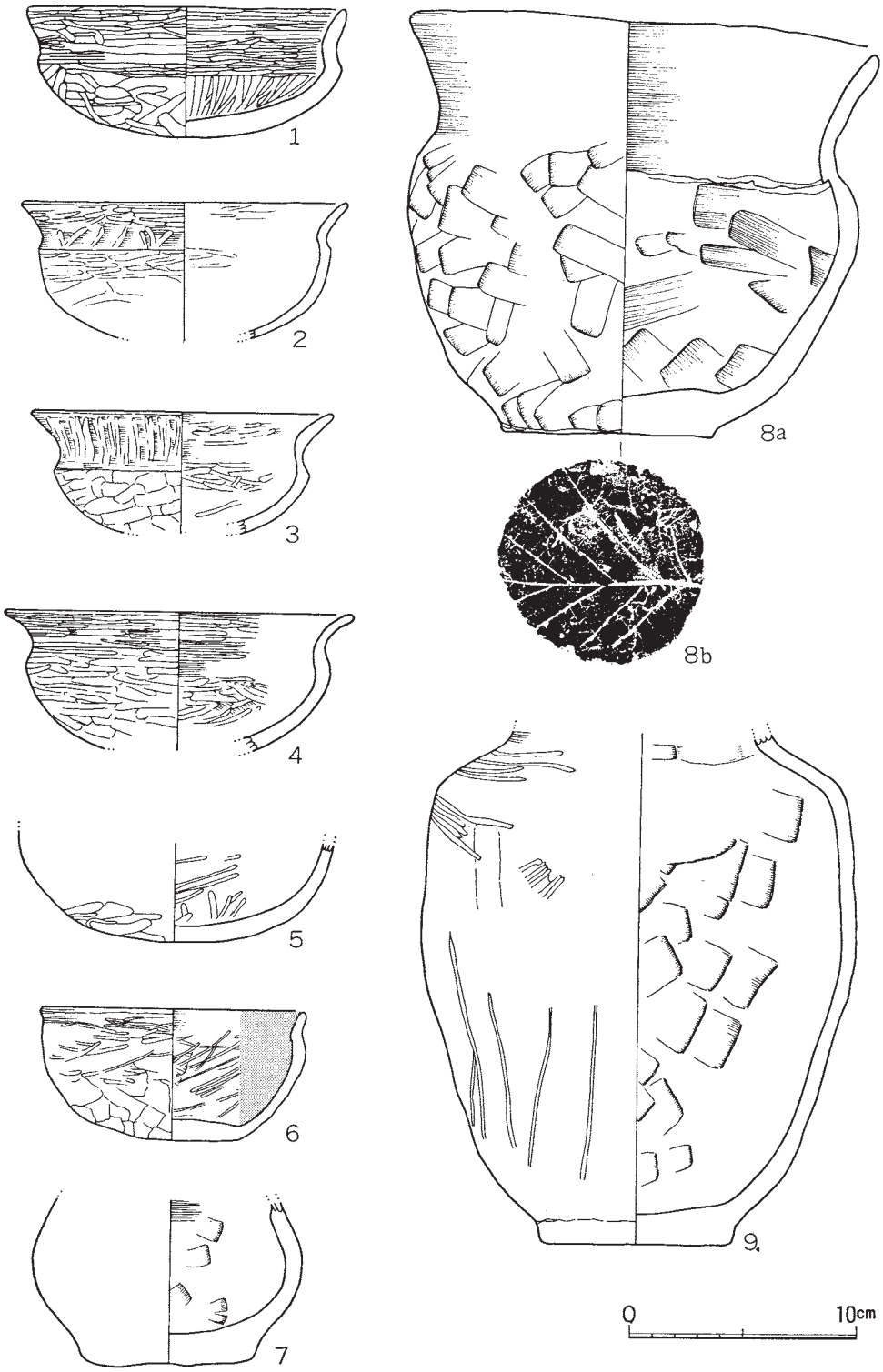
杯４（第58図４）　カマド右袖付近出土の破片と北東コーナーに検出された破片とが接合したもので，底部から口縁部にかけ約1/5が残存している。現存高６cm，推定口径15.4cm。他の杯と同様頸部で一旦括れるが，稜線はそれほど顕著ではない。頸部内面に不明瞭な稜線をもつ。器面調整は全面ヘラミガキであるが，口縁部内外面に前段階としてのヨコナデ痕がある。胎土は密で，色調は赤褐色を呈す。

杯５（第58図５）　住居跡北西区埋土内から検出された底部から体部にかかる丸底杯である。現存高4.9cm。器画調整は全面ヘラミガキがみられるが，底部外面はミガキが極めて疎らなためヘラケズリの痕跡がみられる。胎土は密で，色調は赤褐色であるが底部外面には全面に黒斑がみられる。

杯６（第58図６）　P_1堆積土内から検出された遺物で，体部から口縁部にかけ一部欠損している。口径11.7cm，器高5.7cm。多少扁平な丸底から内彎気味に立ち上がり，口縁部は短く若干外傾する。器面調整は底部外面を除き全面ヘラケズリで内面は黒色処理されている。底面はヘラケズリのままである。外面の色調は大部分黒斑で被われているが，一部黄褐色を呈している。胎土は赤味をおびた杯類（杯２～５）よりは粗い。

甕１（第58図７）　カマド付近から検出された小型甕で，底部と体部から頸部にかけて1/4を残存する。体部は膨みをもっている。底径7.5cm，現存高7.3cmであるが小型の甕としても背丈がやや低いと思われる。底部は中央部がやや窪んだ平底で，器画調整は全面ナデであるが，内面ではヘラナデ痕もうかがえる。器表面は再酸化の痕跡を幾分残しており，色調は赤味がかるが内面は黒味暗茶褐色である。胎土は杯類に較べ粗い。

甕２（第60図１）　P_1堆積土内から検出された甕で完形品である。口径14.5cm，底径7.5cm，器高16.8cm。最大径は胴部中央にあるが口縁部との差はさほどではない。器面調整は，内外面とも口縁部がヨコナデ，胴部がナデである。器表面は再酸化され若干赤味をおびており，内面には黒色の付着物がある。胎土には砂粒が混入し粗い。

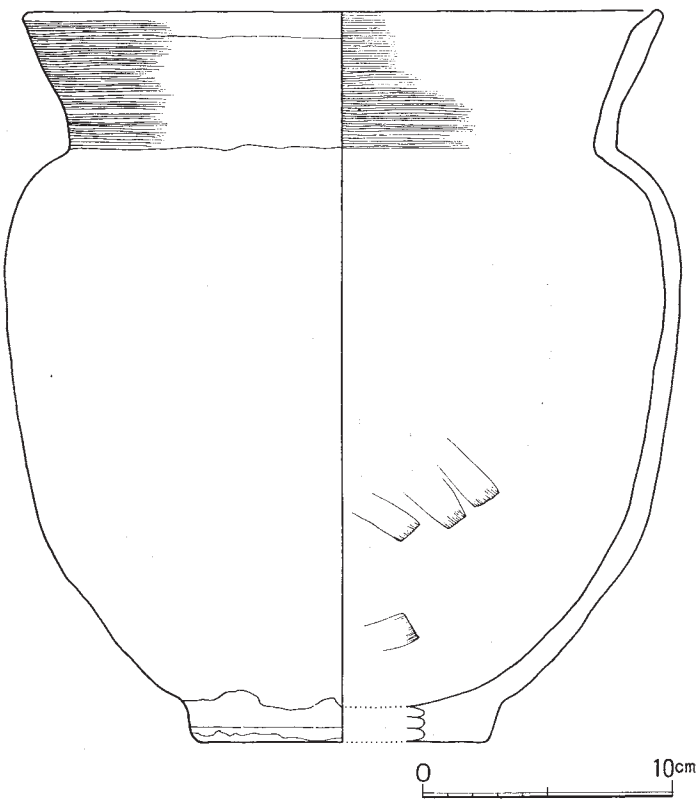


第58図　21号住居跡出土土師器

甕３（第60図２）　カマド焼成部に検出された遺物で，胴部の一部を欠損している。口径16cm，底径8.5cm，器高20.5cm，最大径は胴部中央やや上方にあり18cmを測る。底部は木葉痕をもち中央部が窪んでいる平底で，胴部は丸味をもっているが，肩がやや上がり気味なため胴部が多少長めの印象をもつ。頸部は大きく括れ，口縁部は直線的に外傾して開く。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ，胴部は外面でナデののちヘラミガキ，内面がヘラナデ及びナデである。胎土には比較的砂粒が含まれているが，器表面の調整によって粒子が沈み込んでいる。

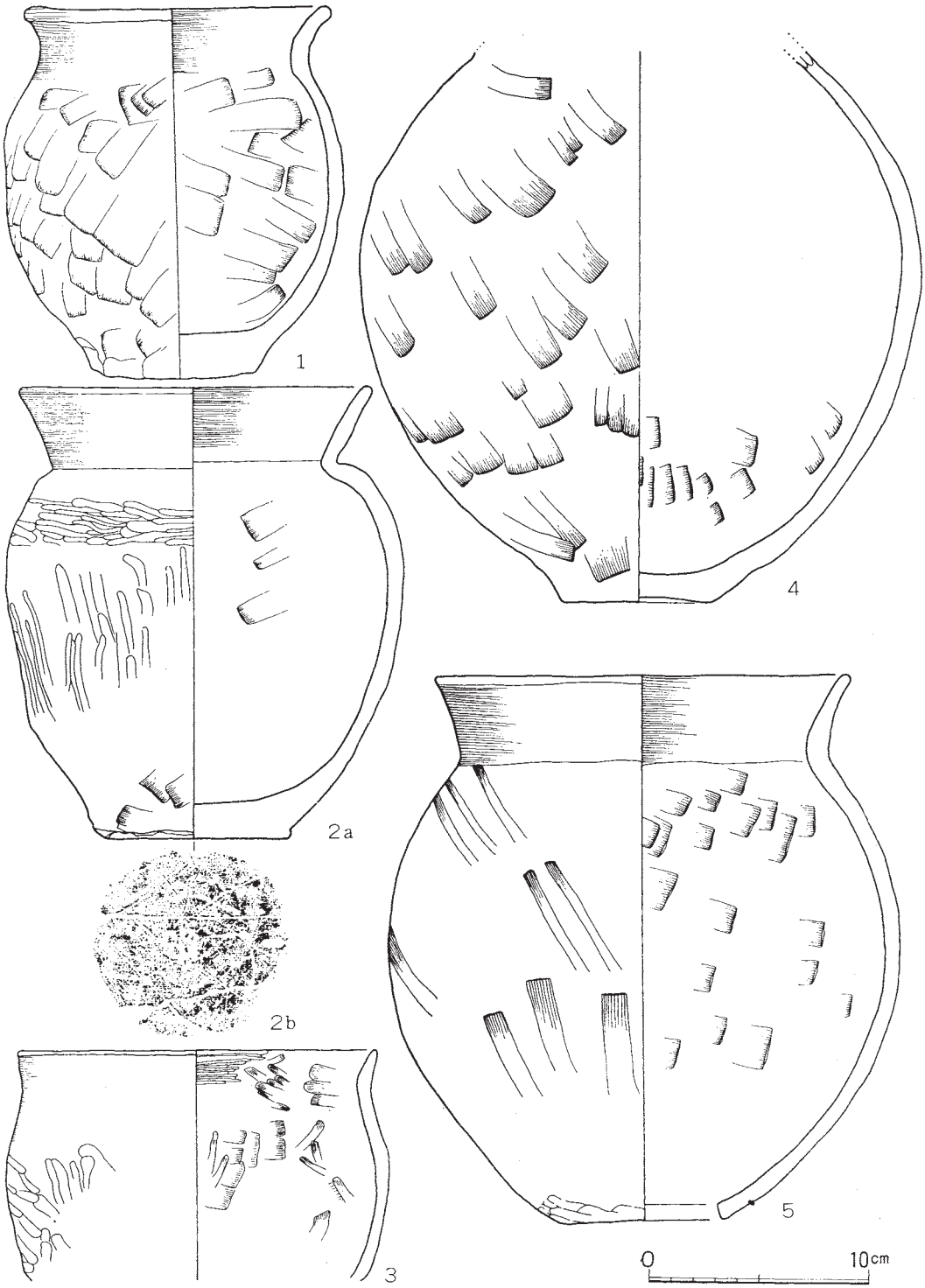
甕４（第60図４）　カマド東脇床面から検出された遺物で，胴部上半から口縁部にかけ欠損している。底径6.7cm，現存高25cmで，胴部最大径は25.4cmを測る。底部は全般に皿状に窪み，胴部は球形に近い膨らみをもつ。器画調整は，内外面ともナデ調整であるが，体部外面下半にはヘラケズリの痕跡もみられる。全体的に調整は端正で，器表面の砂粒は沈み込んでいる。内面の色調は黄褐色であるが，外面は暗く一部では黒斑がある。

甕５（第59図）　カマド西脇床面から検出された遺物で，底部から休部下半にかけ1/2を，体部上端と口縁部1/2を欠損する。口径25.5cm，底径11.5cm，器高29.3cm。最大径は肩部にあり27cmを測る。頸部の括れは躇著で，外傾して口縁となるが，比較的長い。器面調整は，内外面とも口縁部がヨコナデ，胴部がナデである。頸部内面にはケズリや細いミガキ様のあとがみられるが，これは恐らく頸部と胴部の接合時の痕跡と考えられる。色調は全般に黒味を帯びた暗茶褐色を呈している。



第59図　21号住居跡出土土師器

甕６（第58図９）　住居跡北東コーナーと南西コーナーから出土した破片とが接合した資料で，体部の1/3と頸部から口縁部にかけ欠損している。底径８cm，現存高22.5cm。やや肩の張った器形で最大径は胴部半ばにあると推定される。器面調整は，外面はナデが基本であるが肩部付近にヘラケズリが，胴部に疎らなミガキ様



第60図　21号住居跡出土土師器

の痕跡が斜方向，縦方向に走る。内面はナデ及びヘラナデである。底部の木葉痕は，ケズリとナデによって大部分消し去られている。色調は黒褐色であるが，一部茶褐色の部分もある。

甕７（第58図８）　住居跡南東コーナー床面から検出された遺物で，胴部と口縁部の一部を欠損する。口径20.5cm，底径9.2cm，器高18.5cmで，最大径は口縁部にある。底部は中央部がわずかに窪み木葉痕を有す。全体的に片下りで均整がとれていない。頸部は一旦括れるが極端ではない。口縁部は長くわずかに外反して立ち上がる。器面調整は，口縁部内外面ともヨコナデ，体部外面がナデ，内面はナデ及びヘラナデである。色調は外面で橙味黄褐色，内面では黄褐色を呈している。成形は粘土紐の積み上げと思われる。頸部内面に不規則な稜線が巡り，胴部と口縁部とを接合したことがわかる。

甕８（第60図３）　住居跡南東コーナー床面から検出した遺物で，口縁部から体部上半にかかる破片である。現存高10.5cm，推定口径16.4cmで，最大径は体部の上半にあり17.3cmを測るが，口縁部・頸部との差はさほどではない。従って口縁部から体部への移行は滑らかである。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ，体部は頸部付近でナデ，体部半ばでケズリの後双方に粗雑な斜あるいは縦方向のミガキが入る。内面は，口縁部から頸部付近がヨコナデ後横位のミガキ，体部はナデの後粗雑な縦方向のミガキが加わる。色調は黒褐色を呈している。

甑（第60図５）　住居跡北東コーナーに検出された無底式の甑でほぼ完形である。口径18.7cm，器高24.8cm，底部孔径7.2cmで，最大径は胴部半ばにあり23cmを測る。頸部外面での括れは差程ではないが，内面では明瞭な稜線をつくっている。口縁部は一旦直立気味に立ち上った後，外反して口唇に至る。器面調整は，外面で口縁部がヨコナデ，胴部がナデで下端にのみケズリが入る。内面は口縁部がヨコナデ，胴部がヘラナデ及びナデである。色調は黄褐色で胴部に一部黒斑があり，底部孔は成形の段階でつくり出されている。

ま　と　め

遺構面では，南壁にとりついた張り出しピット（P_1）が特徴的な施設としてあげられる。これは住居跡内堆積土から通して観察した土層断面では自然の流れ込み土が連続しており，住居使用時に開口して機能していたことを表わしている。設置箇所や形態に多少の差異があるが，ここでは７号住居跡P_1と同様の用途を果たしたものと考えておく。柱穴も７号住居跡同様対角線上に乗るものは深く，他の柱穴は浅いという特徴を示す。この深さの相異は，主柱穴と支柱穴とのちがいによるものと思われる。当住居跡は床面からの出土遺物によって古墳時代後期に位置づけられる。しかしながら遺物の様相は，３・７号住居跡等から出土した土器群に較べ，土器組成・形態等にわずかながらもその特徴に差異が認められる。同じく古墳時代の後期として大きくとらえることができるが，当住居跡は３・７号住居跡などよりは後出する可能性が強い。

22号住居跡　ＳＩ22

20号住居跡の北側約４ｍの地点で検出されたもので，20号住居跡と同様に開畑のため大部分が削り取られた住居跡である。床面がほぼ露出した状態で，全体の1/4程度が確認された。西辺の長さが３ｍを測ることから，プランは，３ｍ前後の隅丸方形を呈するものと思われる。カマド・周溝・柱穴などは検出されなかった。また本住居跡に伴う遺物はみられず，所属時期は不明である。

第２節　掘立柱建物跡

調査区内での検出総数は12棟である。これら建物跡は，規模の大きい２間×３間のものと，小規模で２間×２間のものとに類別される。重複関係から後者の建物跡が前者よりも時間的には後出する。分布は住居跡同様調査区中央部に多い。

１号建物跡　ＳＢ01（第61図，図版19・20）

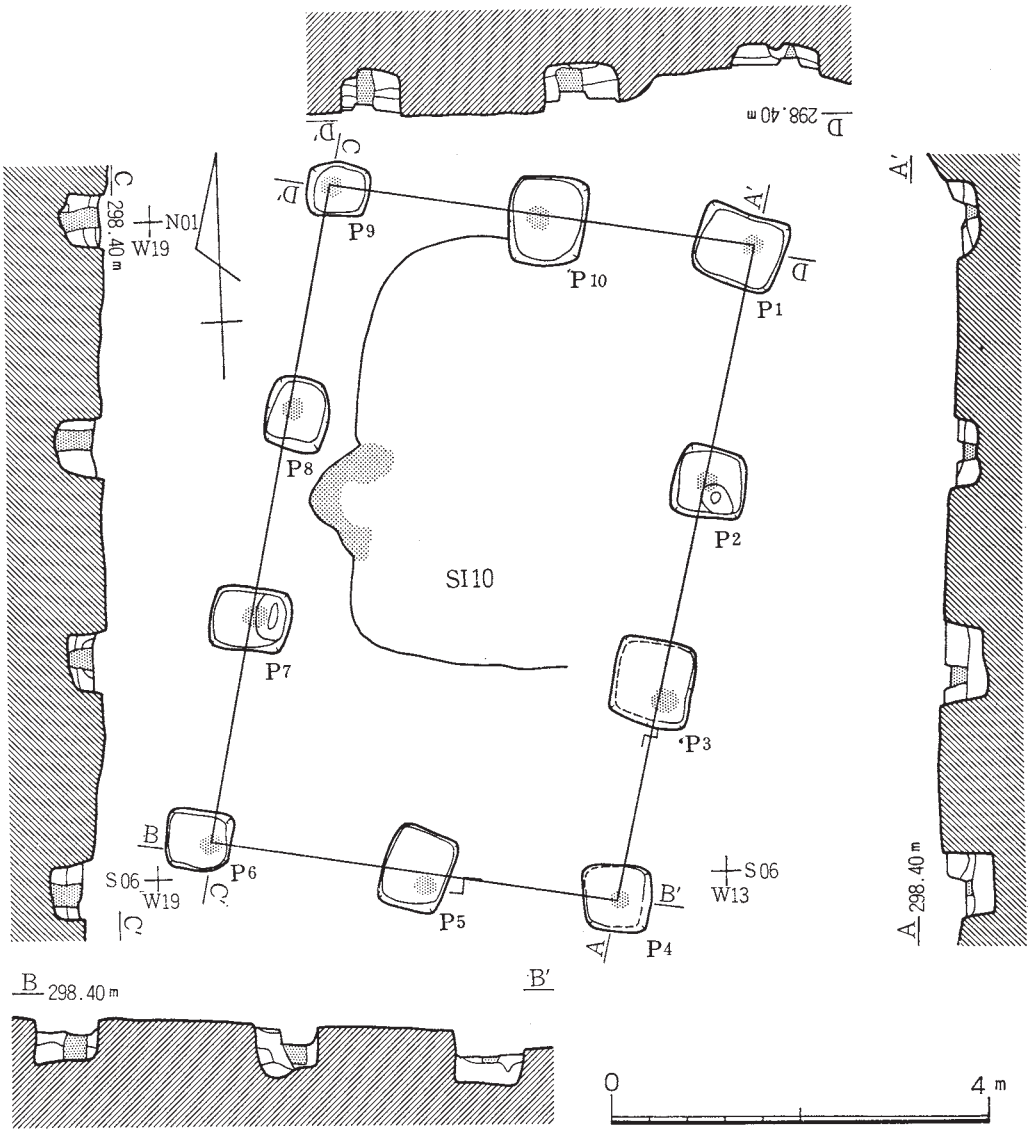
Ｃ－３・４グリッドの黒色土（Ⅱ層）と地山ローム層（Ⅳ層）の境界付近で検出された，東西２間，南北３間の南北棟である。北側柱列の中央の掘形は10号住居跡に，東側柱列の南端の掘形は12号住居跡に切られている。また南側柱列の中央の掘形は，36号土坑を切っている。建物の方向は東側柱列の柱痕を通る軸線でＮ－13°－Ｅを示している。柱間は，検出された柱痕から東側柱列で7.08m（北から2.54m＋2.38m＋2.16m），西側柱列で7.10m（北から2.38m＋2.24m＋2.48m），南側柱列で4.34m（東から2.04m＋2.30m），北側柱列で4.50m（東から2.26m＋2.24m）を測る。各間尺には若干差異はあるものの桁行は８尺，梁行は７尺半と考えられる。掘形は70～90㎝の方形を基本として箱形に掘り込まれており，埋土は，ローム粒を混入した黒褐色土，暗黄褐色土などを敲き込んでいる。柱は柱痕から判断して径約25㎝の丸柱であると考えられる。

２号建物跡　ＳＢ02（第62図，図版21）

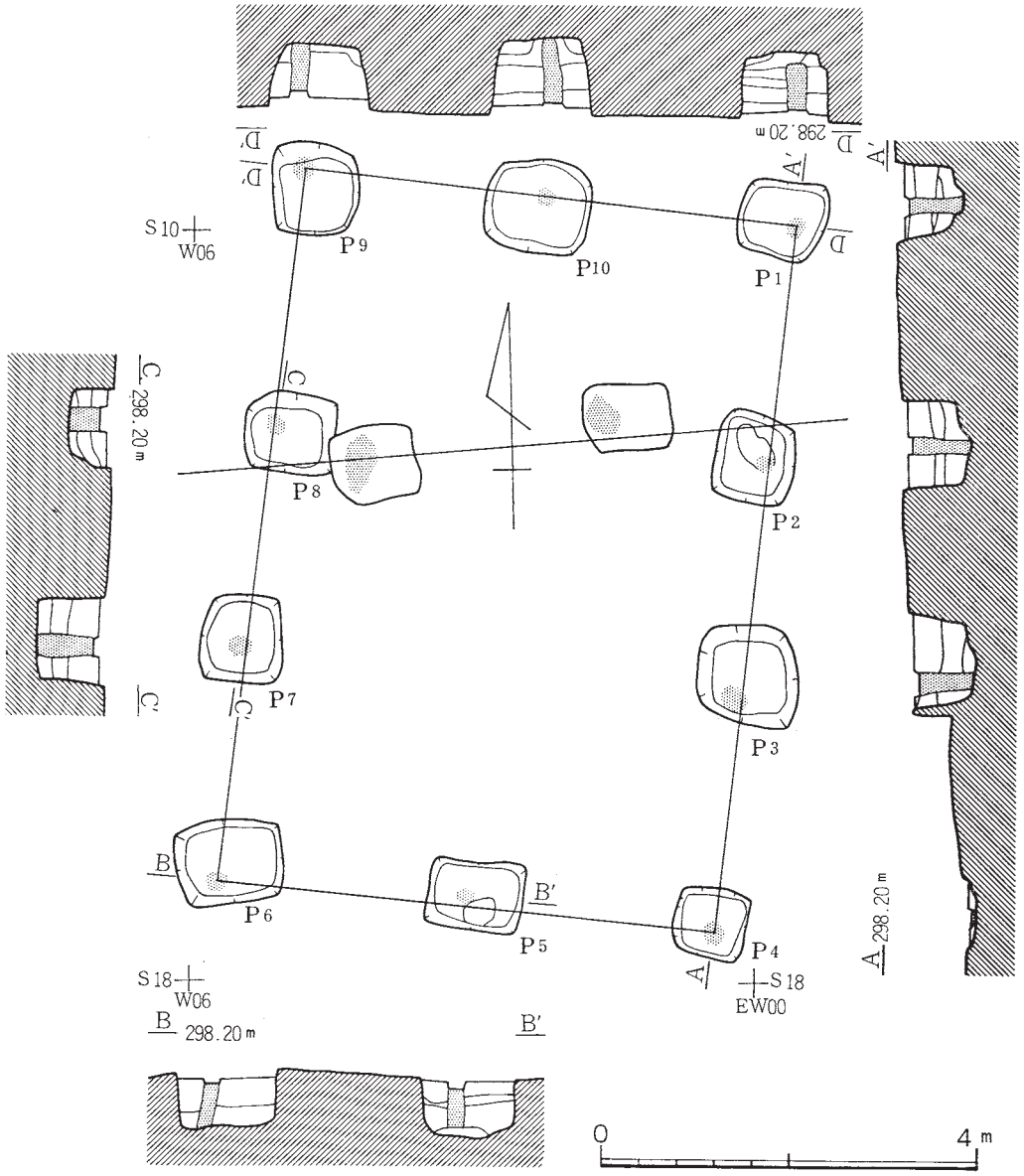
Ｄ－４・５グリッド内のⅡ層上面で，３号建物跡に切られた状態で検出された。東西２間×南北３間の南北に長い建物跡である。全体の規模は東辺が7.6m，西辺が7.6m，南辺が5.28m，北辺が5.28mを測る。各柱間寸法は，東側柱列で北から2.52m＋2.52m＋2.56m，西側柱列で北から2.72m＋2.4m＋2.48m，南側柱列で東より2.64m＋2.64m，北側柱列で東より2.64m＋2.64mを測る。桁行は８尺，梁行は９尺間隔に設計されたものと思われる。東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ－７°－Ｅである。

掘形は一辺80～110cmの方形もしくは長方形の整った形であり，深さは50～80cmを測る。埋土は黄褐色土・茶褐色土・黒褐色土が互層をなしており，割合しまりのある埋土である。柱は径20cm前後の円柱が使用されている。

本建物跡は，３号建物跡との重複関係から下限が，また出土遺物から上限がおさえられる。出土遺物はいわゆる国分寺下層式期に属し，３号建物跡がロクロ土師器の前半期としてとらえられているため，当建物跡の時期は，この間に位置づけられる。



第61図　１号建物跡

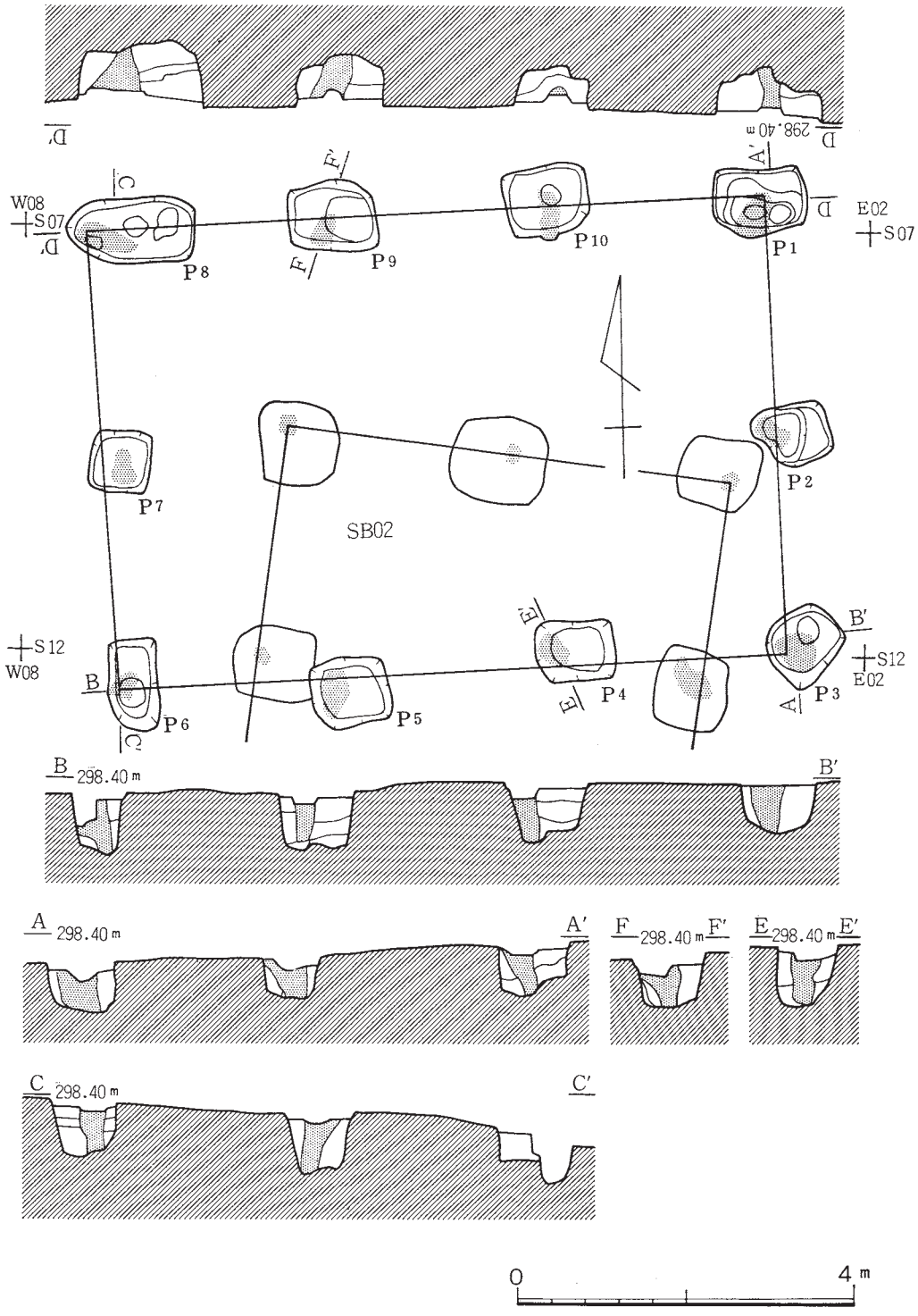


第62図　２号建物跡

なお，昭和53年度の本遺跡の試掘調査の際に，第５トレンチ内で検出された柱穴が，本建物跡の東側柱列の南端の柱穴であることが確認された。

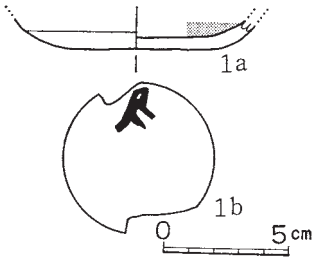
３号建物跡　ＳＢ03（第63・64図，図版21）

Ｄ－４・５グリッドからＥ－４・５グリッドにかけ検出された建物跡である。東西３間，南北


W08
S07
E02
S07
S12
W08
S12
E02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
SB02
298.40m
298.40m
298.40m
298.40m
298.40m
0
4m

第63図　3号建物跡

２間の東西棟で，重複関係にある７号住居跡，２号建物跡より新しく，14号住居跡よりも古い。北側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ－88°－Ｅである。各柱間寸法は北側柱列西から2.6m＋2.52m＋2.48m，南側柱列西から2.36m＋2.68m＋2.84m，東側柱列北から2.76m＋2.40m，西側柱列北から2.52m＋2.88mを測るが，この建物跡は抜き取り痕を有しており柱痕が相当乱れているため，計測値に多少の変動があることは否めない。柱痕及び抜き取り痕には多量の焼土粒と木炭片がみられたことから，火災にみまわれた後柱を抜き去ったものと考えられる。抜き取り方向は南・西方向に多く見られる。



第64図　３号建物跡出土土師器

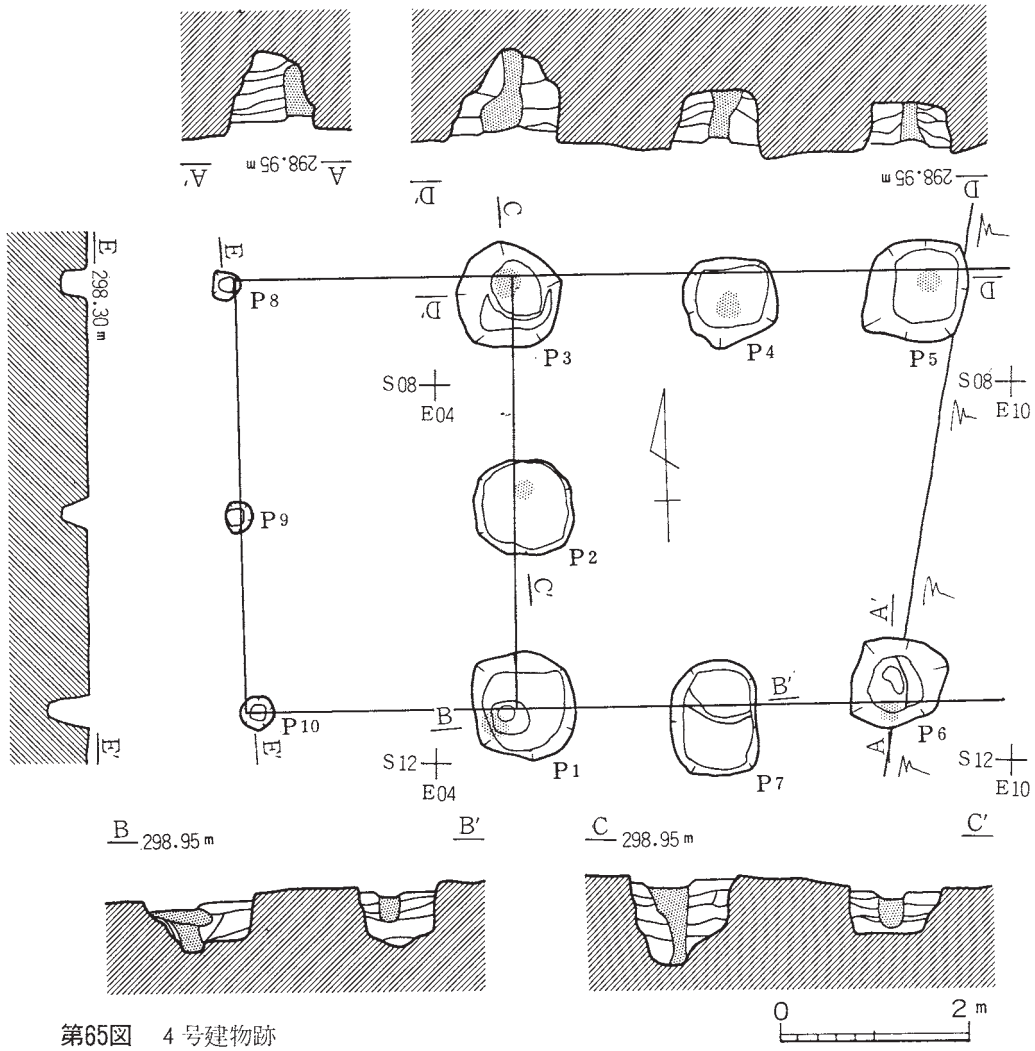
各掘形の検出面は，P_1～P_3，P_{10}はローム面，その他は黒色土面である。大きさは１辺が70～90cm程度の方形もしくは長方形を呈しているが，特に隅柱であるP_1・P_6・P_8は他の掘形に比べ長く，掘形の深さは検出面から50～70cmを測る。

遺物は土師器・須恵器片が掘形内から検出されたが，このなかで時期的に最も新しい遺物はロクロ使用の内黒土師器杯である。底部の破片で，調整技法は内面には一定方向へのヘラミガキ外面には回転ヘラケズリを行っており，判読不可能な墨書がある。（第64図１）

当建物跡の時期は，重複している遺構のなかで比較的時期の近接している２号建物跡から上限が，14号住居跡から下限がおさえられる。双方の遺構ともロクロ土師器を伴出しているため時期は相当限定される。前述の遺物が当建物跡の上限を示す資料となり得るが，この遺物も前後の遺構から伴出している遺物の間に位置付けられることから，ほぼこのロクロ土師器杯の使用された時期を当建物跡の時期として差し支えないと考えられる。

４号建物跡　ＳＢ04（第65図，図版22）

Ｅ－４・５グリッドからＦ－４・５グリッドにかけローム面にて検出された建物跡である。規模は，東側が畑の造成によって切り落とされているため，東西の間数が明確でないが２間以上を数え，南北は２間で終る。構造は西面に廂をもつ東西棟で，重複関係にある７号住居跡，12号土坑より新しい。北側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ－89°－Ｅである。母屋各柱間寸法は，北側柱列西から2.00m＋2.20m，南側柱列西から2.10m＋2.10m，西側柱列北から2.30m＋2.10mで，廂部は西側柱列から３mの位置に取り付き，北から2.50m＋2.10mを測る。当建物跡もまた３号建物跡と同様多量の焼土・木炭の入った抜き取り痕をもっている。母屋掘形は１辺が0.8～1.2mの方形ないし長方形で，検出面からの深さは0.5～1.0m弱を測る。廂部の掘形は，７号住居跡床面精査時に検出したもので，径約30cmの円形である。柱の太さは抜き取り痕によって不明瞭ではあるが，径15～20cmの丸柱と推定される。

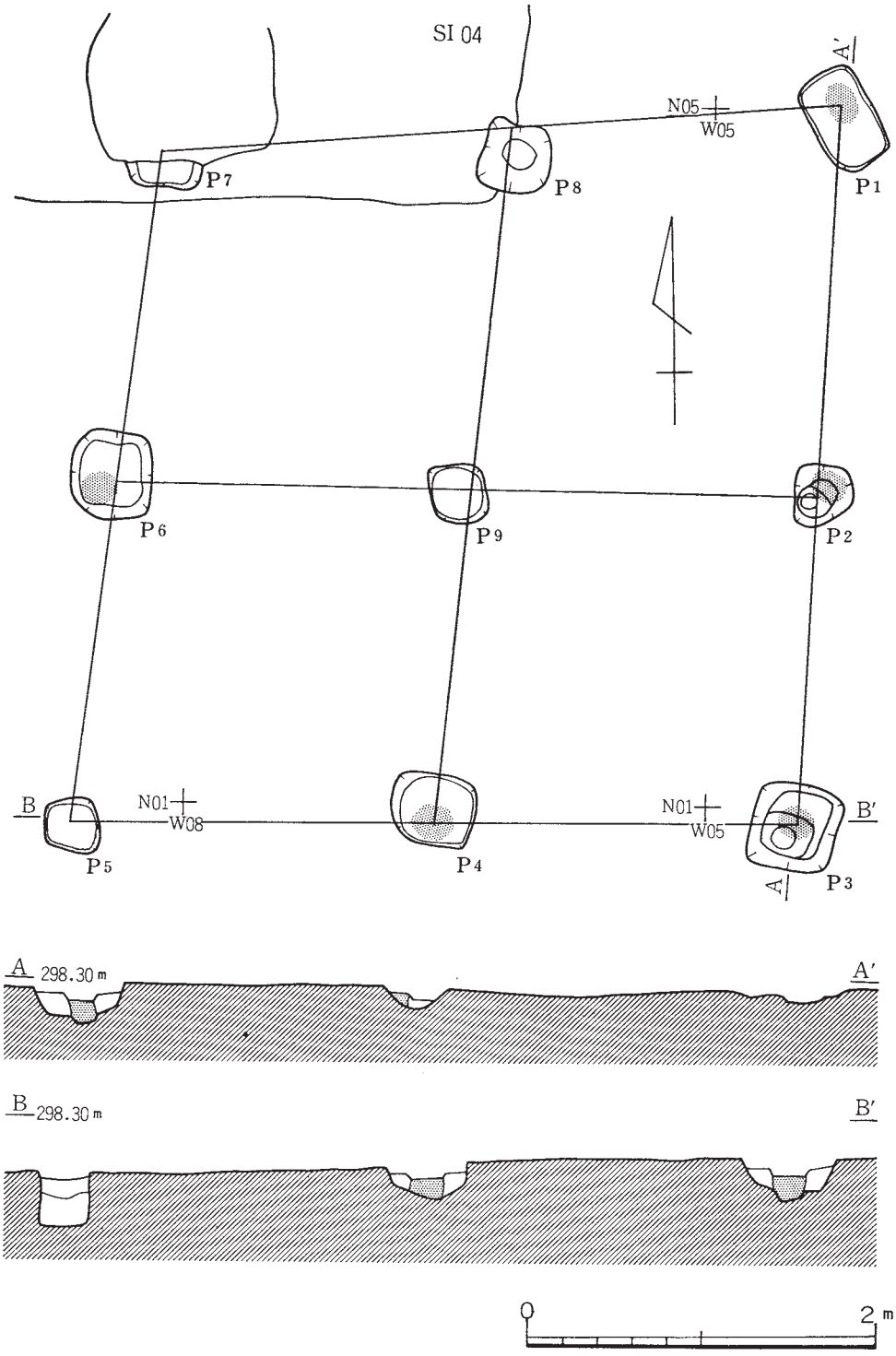


第65図　4号建物跡

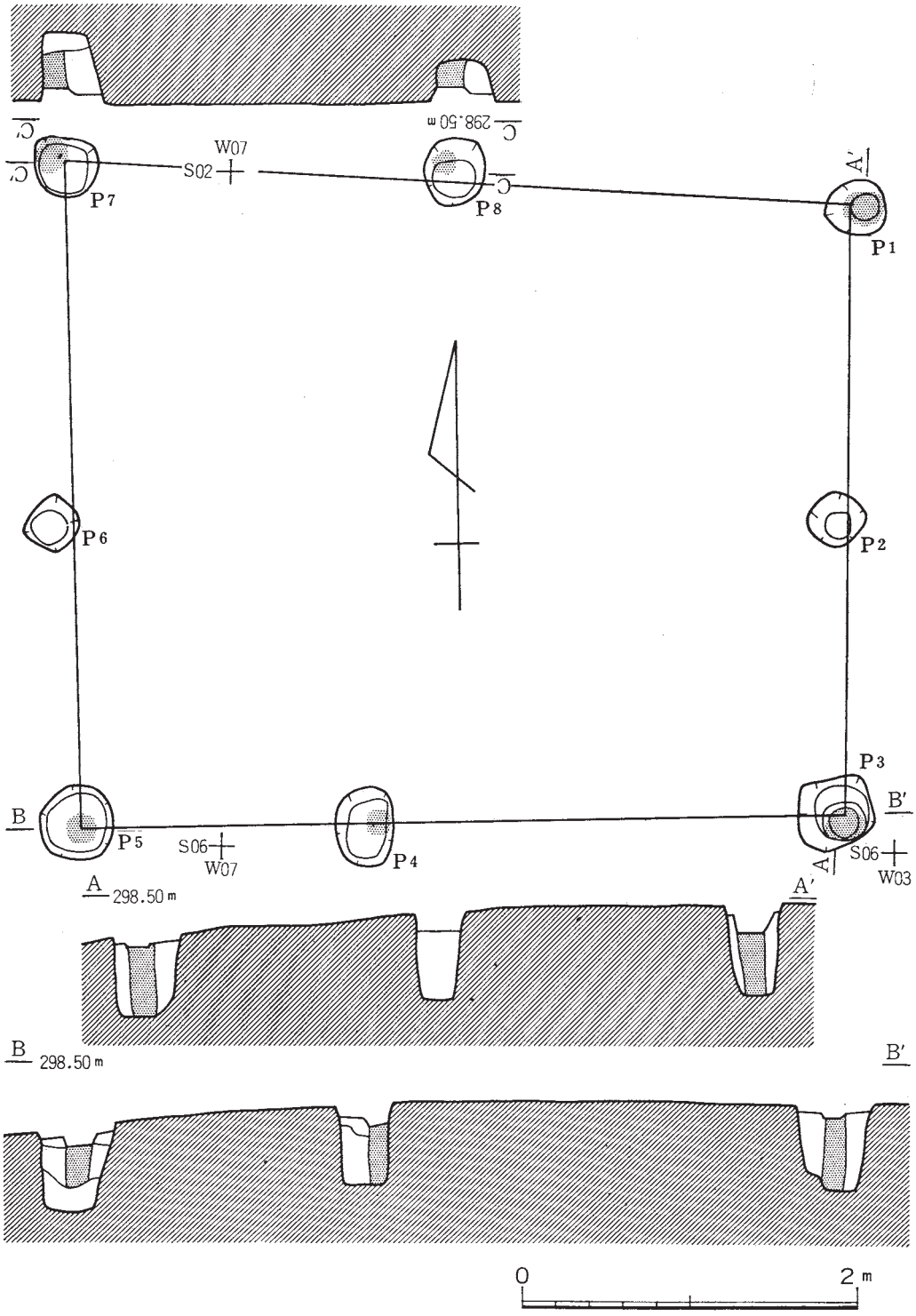
当建物跡の時期は，回転ヘラケズリの調整痕をもった土師器杯を伴出した12号土坑との重複関係と，掘形内からロクロ土師器が検出されていることの２点に加え，棟通りを同じくする３号建物跡同様火災を受け，後に柱の抜き取りを行っていることから，ロクロ土師器使用の段階でも２号建物跡，12号土坑よりは新しい時期で，３号建物跡と同時に存在していたと推定できる。

５号建物跡　ＳＢ05（第66図，図版23・24）

Ｄ－３グリッド内で４号住居跡の南東辺を切る状態で検出された。東西２間×南北２間の総柱の建物跡である。柱痕が検出されなかった掘形もあるが，柱間寸法は東側柱列で4.14m（北から2.20m＋1.94m），南側柱列で4.15m（東から2.08m＋2.07m），西側柱列で3.80m（南から1.93m＋


SI 04
A'
N05
W05
P7
P8
P1
P6
P9
P2
B
N01
W08
N01
W05
B'
P5
P4
A
P3
A
298.30m
A'
B
298.30m
B'
0
2m

第66図　5号建物跡


C
C'
298.50m
W07
S02
P7
P8
A'
P1
P6
P2
P3
B
B'
P5
S06
W07
P4
S06
W03
A
298.50m
A'
B
298.50m
B'
0
2m

第67図　6号建物跡

1.87m），北側柱列で3.90m（西から2.10m＋1.80m）を測る。寸法はまちまちであり形はかなりゆがんでいる。また掘形も一定していない。確認された柱痕によると，柱材の直径は15～20㎝程度の材料が使用されていたものと思われる。

本建物跡の年代は，建物跡に伴う遺物がなくはっきりしないが，重複している４号住居跡は平安時代に位置づけられる遺構と考えられるので，平安時代を溯るとは考えられない。

６号建物跡　ＳＢ06（第67図，図版24）

５号建物跡の南側３m，12号建物跡の西側１mと隣接した位置において検出された。規模は２間×２間で東辺が3.66m，南辺が4.52m，西辺が４m，北辺が4.82mである。整然とした方形は呈しておらず，かなりの歪みを見せる。掘形は径30～50㎝の不整円形を呈している。若干南に傾斜しているところに構築されているため深さはやや違うが，確認面からは50㎝を測る。柱痕が検出できなかったものもあり，明確な柱間寸法を出せない部分もあるが，東側柱列は北から1.84m＋1.82m，南側柱列で東から2.76m＋1.76m，西側柱列で南から1.82m＋2.18m，北側柱列で西から2.32m＋2.50mとなるが統一性に欠け，間尺は各間とも不規則である。柱痕は15～20㎝の円形を呈していることから，丸柱を用いていたものと思われる。

本建物跡は，検出された遺物がなく，重複関係もないため時期は不明である。

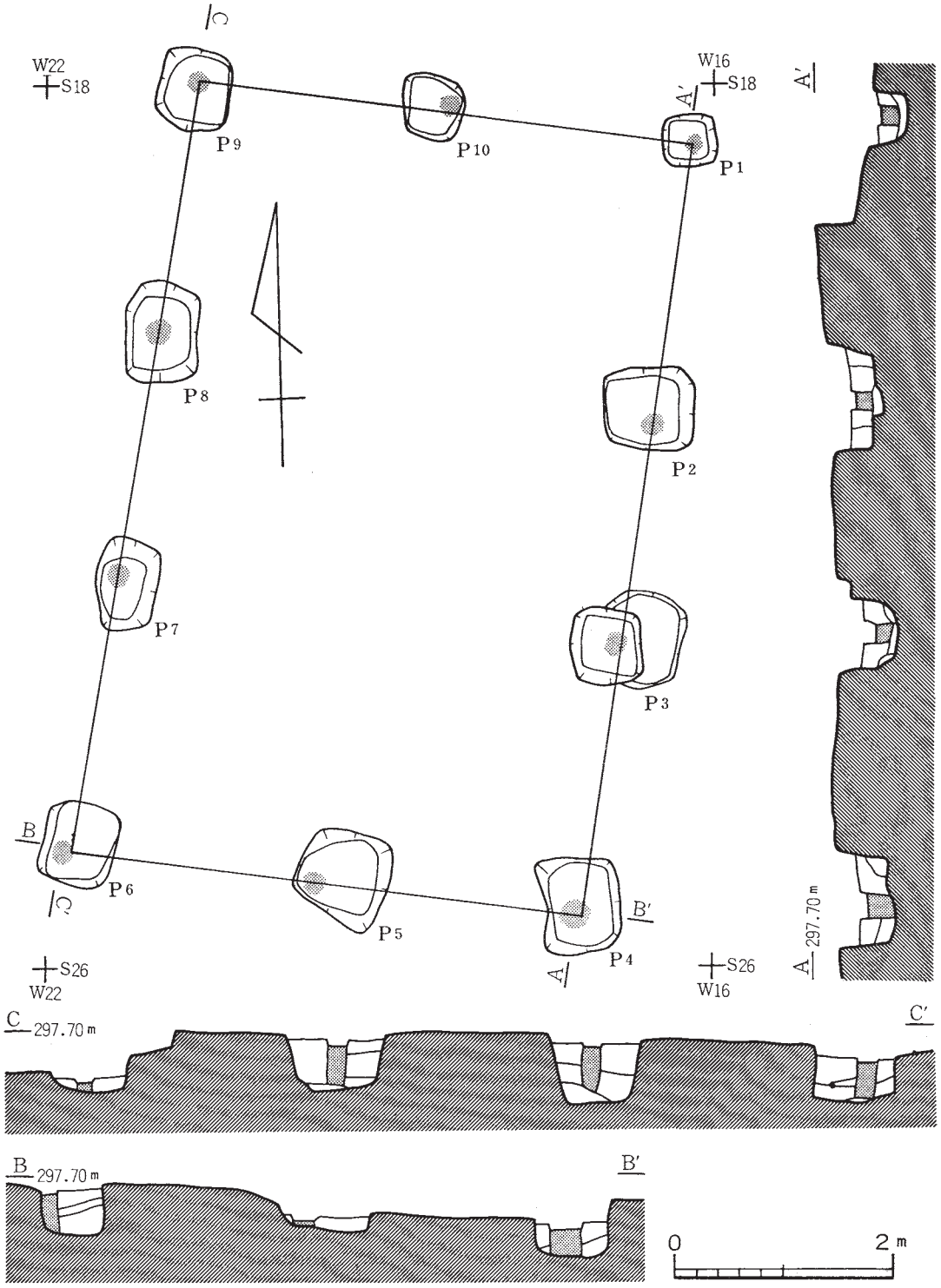
７号建物跡　ＳＢ07（第68図，図版25）

調査区西南隅において，西側柱列は地山ローム面で，その他は黒褐色土層面で検出された。本調査区６グリッド列以南は土坑が数多く検出されたが，掘形埋土は黄褐色ロームの微粒およびブロックを含んでいたため，比較的容易に識別することができた。北側柱列は11号住居跡を対角に切る形で検出され，P_3掘形は20号土坑によって上面を切られていた。

東西２間，南北３間の南北棟で，すべての掘形から柱痕が検出された。柱痕は細いもので16㎝，太いもので25㎝の直径を測るが，大半は20㎝弱の丸柱である。掘形は一辺70㎝前後の方形を呈しているが，北側柱列だけは検出面が下がったため若干小さくなっている。検出面から掘形底面までの深さは約50㎝で，埋土は基本的に暗褐色土と黄褐色ロームの互層である。地山ローム面で検出された掘形では，掘形壁がしっかりしているためか，埋土のしまりが強く，黒褐色土層面で検出された掘形埋土は若干しまりが弱いように感じられた。

柱間寸法は東側柱列北より2.55m＋2.20m＋2.30m，南側柱列東より2.26m＋2.24m，西側柱列南より2.58m＋2.00m＋2.47m，北側柱列西より2.35m＋2.26mで東辺と西辺の長さは7.05mで一致し，平面形もほぼ長方形を呈する。東側柱列を通る軸線の傾きはＮ－10°－Ｅである。

当建物跡は11号住居跡より新しく，P_2掘形より谷地前Ｃ遺跡において国分寺下層式に共伴する

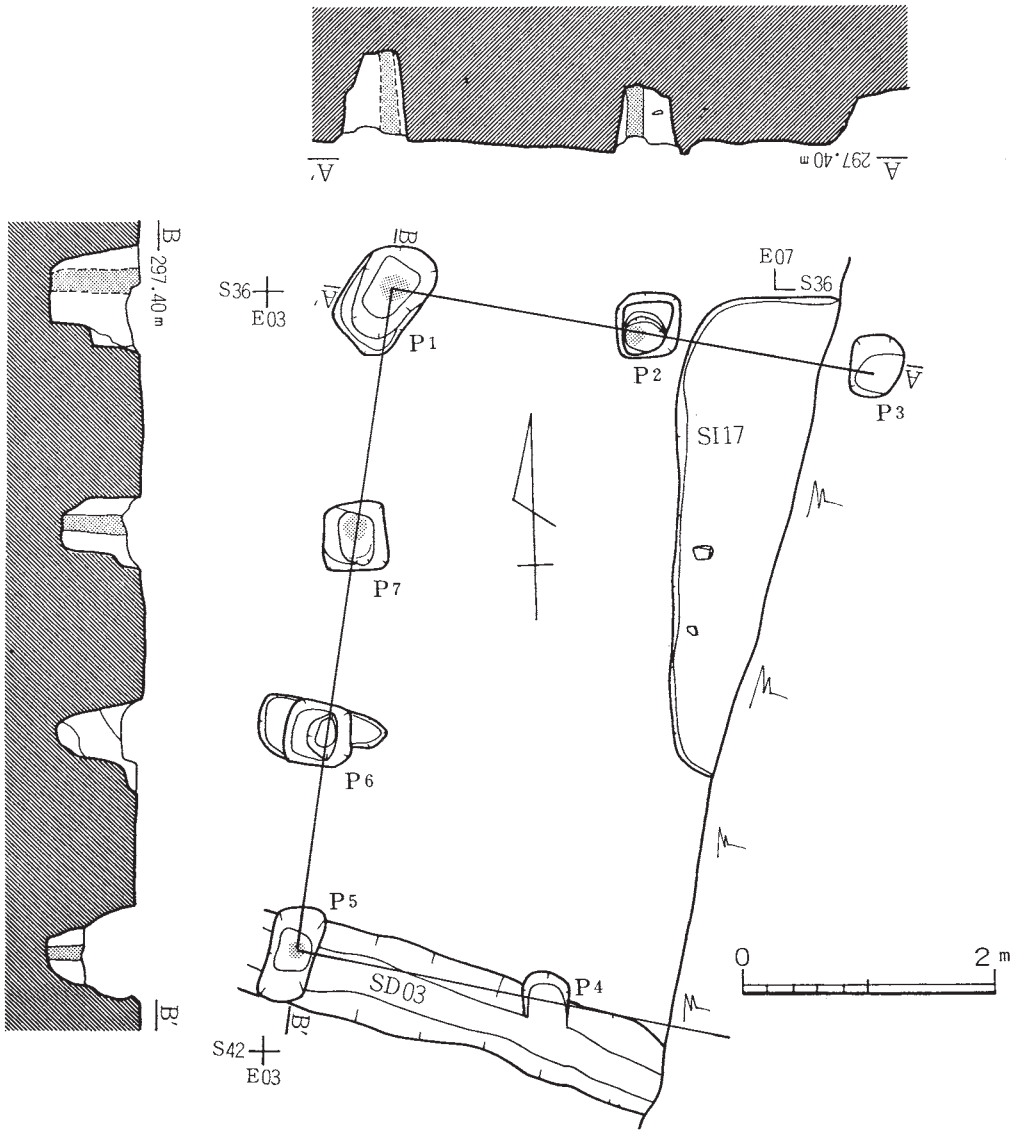

W22
S18
W16
S18
P9
P10
P1
P8
P2
P7
P3
P6
P5
P4
S26
W22
S26
W16
297.70m
297.70m
0
2m

第68図　7号建物跡

両面黒色処理を施した小形杯が出土しており，奈良時代以降の年代が考えられる。

８号建物跡　ＳＢ08（第69図，図版26）

調査区東南のＥ－７グリッドにおいて黒褐色土層面で検出された。P_3掘形と17号住居跡は重複していたと思われるが，すでにこの部分は開田の際の削平によって破壊され辛うじてP_3底面部が検出されたもので，新旧関係をつかまえることはできなかった。P_4・P_5掘形は３号溝によって切られ，P_4は掘形の大部分を，P_5は掘形上半部を破壊されている。



第69図　８号建物跡

他の建物跡の規模からみて，東西２間，南北３間の南北棟と思われるが，東側柱列部が削平され，全部で７個の掘形しか確認されなかったため，東側に軒数がふえる可能性もある。柱痕は４つの掘形で確認され，直径12～14cmの比較的細い丸柱である。掘形は残りのよいもので一辺約50cmの方形を呈し，全体的に底面にいくに従い幅が狭くなっていく。検出面から掘形底面までの深さは約70cmで，埋土は黒褐色土または暗褐色土の単層が多い。

柱間寸法は，柱痕の検出できなかったものは掘形中央にあわせて計測した結果，北側柱列西より1.95m＋1.90m，南側柱列２m，西側柱列南より1.75m＋1.63m＋1.92mを測る。西側柱列を通る軸緑の傾きはN－7°－Eである。

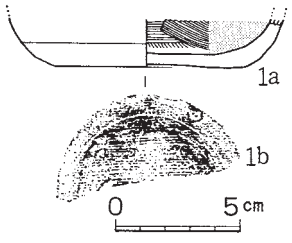
当建物跡掘形からは小破片ではあるが，ロクロ使用の土師器杯とロクロ未使用の土師器甕が出土しており，調整などの観察から奈良時代～平安時代の建物跡と考えられる。

９号建物跡　ＳＢ09（第70・71図，図版27）

調査区南端のＤ－７・８グリッドにおいてP_1・P_2・P_4・P_8・P_9掘形は黒褐色土層面で検出され，南側柱列は大幅な削平をうけていたが，P_5・P_6の２つの掘形が地山ローム面でわずかに確認された。P_3掘形は３号溝によって大部分を破壊されている。また南西隅は，桑が植えられているため調査することができなかった。

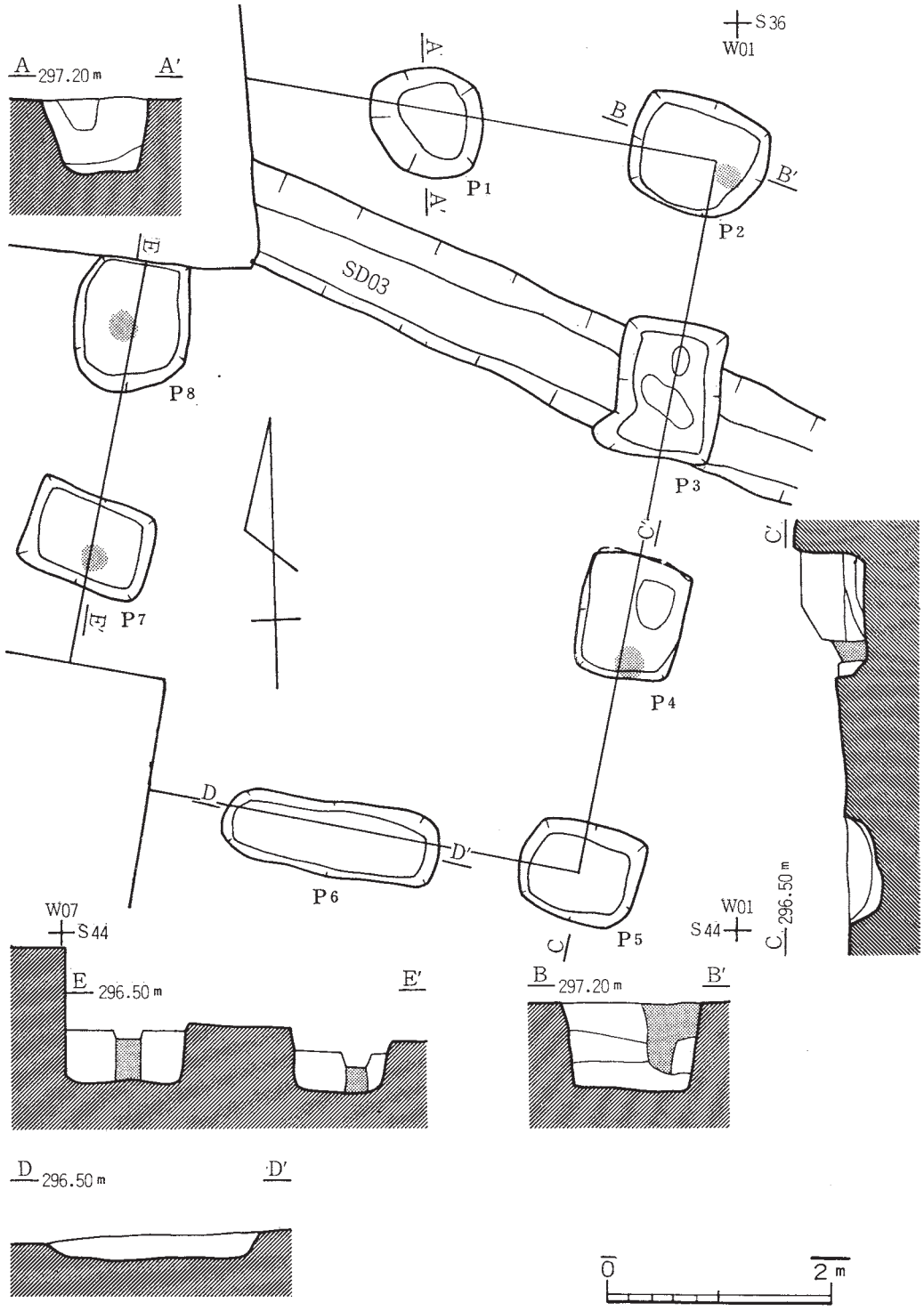
全部で８個の掘形しか確認されていないが，東西２間，南北３間の南北棟であると思われる。柱痕は４つの掘形で検出され，いずれも直径25cmを測る丸柱である。掘形は形の整っているもので90×110cmの大きさを持ち，検出面から掘形底面までの深さは残りのよいもので76cmである。埋土は黒褐色のロームブロック混入土を基本とするが，P_5・P_6掘形では他と異なり黄褐色ロームの埋土が見られた。

全体規模は，掘形すべてが検出されておらず，柱痕も確認できなかったものが多かったため正確に捉えることはできないが，東辺で6.30m，北辺で５m前後になると思われ，柱間寸法は桁行では2.10mを基準とし，梁行ではそれよりも50cm前後広くなっている。東側柱列の傾きは，約10°東に偏している。



第70図　９号建物跡出土土師器

当建物跡は，掘形規模も大きく整ったものである。また掘形自体が大きいため，柱間が狭いように感じられるが，柱痕で計測すると約７尺と幅を持って等間隔で配置されていたことが窺われ，計画性の強い建物跡であったと考えられる。図示できたものは，ロクロ使用のもので静止糸切り技法によってロクロから切り離され，体部下端から底部周縁にかけ回転ヘラケズリ調整を行うものである。内面は一定方向のヘラミガキが施され，黒色処理されて


S36
W01
A
297.20m
A'
P1
B
B'
P2
SD03
P8
P3
P7
C
C'
P4
D
D'
P6
P5
W07
S44
W01
S44
296.50m
E
E'
B
297.20m
B'
D
296.50m
D'
0
2m

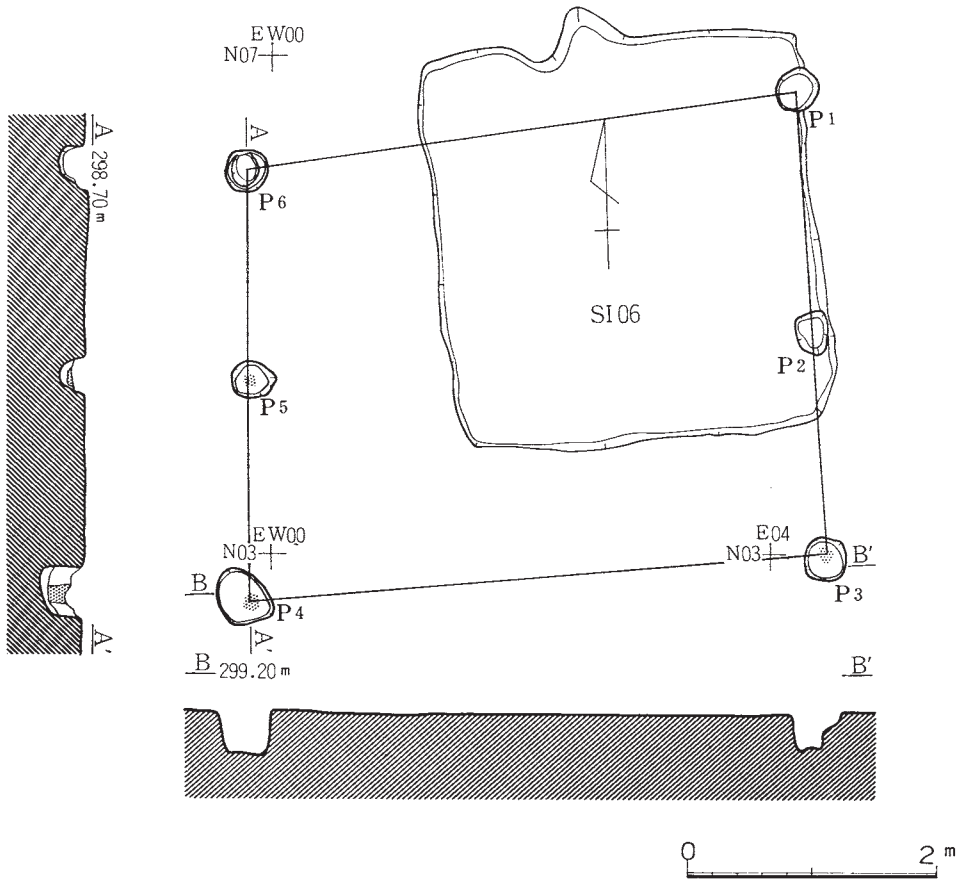
第71図　9号建物跡

いたと思われる（第70図）。この他の破片においては，国分寺下層式に比定されると思われるロクロ未使用で丸底の杯破片が，比較的多くみられる。須恵器は甕体部が３点出土しているが，年代を限定することはできない。したがって，土師器から当建物跡の年代を考えるならば，奈良時代以降の時期が想定される。

10号建物跡　ＳＢ10（第72図）

Ｅ－３グリッドにおいて，５・６号住居跡と重複関係を持って検出された。すべての掘形が住居跡内に存在したが，先に住居跡プランを検出したため，その規模を確認したのは住居跡床面であった。住居跡との新旧関係は，掘形が６号住居跡の壁をこわして構築されていることから，建物跡のほうが住居跡よりも新しいと考えられる。

検出された掘形からは東西１間，南北２間の建物跡であるが，南北辺より東西辺のほうが長く，東西も２間であった可能性がある。各掘形は円形に近いが不整形で，35cm前後の径を持っている。



第72図　10号建物跡

検出面からの深さはすべて30㎝以内で，中間の掘形はやや浅くなっている。柱痕は，３つの掘形より検出され13㎝程の細い丸柱である。隅柱を規準に各辺を計測すると，東辺3.75m，南辺4.60m，西辺3.47m，北辺4.45mとなり，平面形は北辺を上辺とする台形に近い形になる。西側柱列の軸線はほぼ磁北にのり，東側柱列の軸線は南北を基準に３°西へ，北側柱列の軸線は東西を基準に７°北へ偏している。

当建物跡から遺物は出土していないが，５・６号住居跡との切り合い関係から，住居跡より新しく，ロクロ土師器使用時期の後半以降とみられる。

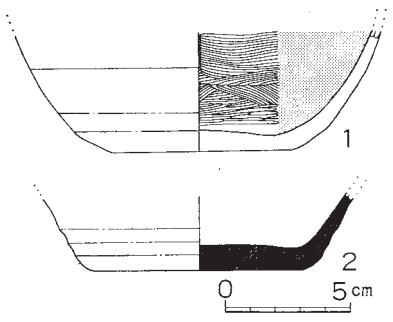
11号建物跡　ＳＢ11（第73・74図）

調査区中央の遺構密集部で検出されている。当遺構は14・15・16・21号住居跡，27号土坑と重複関係にあり，その新旧関係は，古い順から21号住居跡→11号建物跡→14・15・16号住居跡，27号土坑となる。

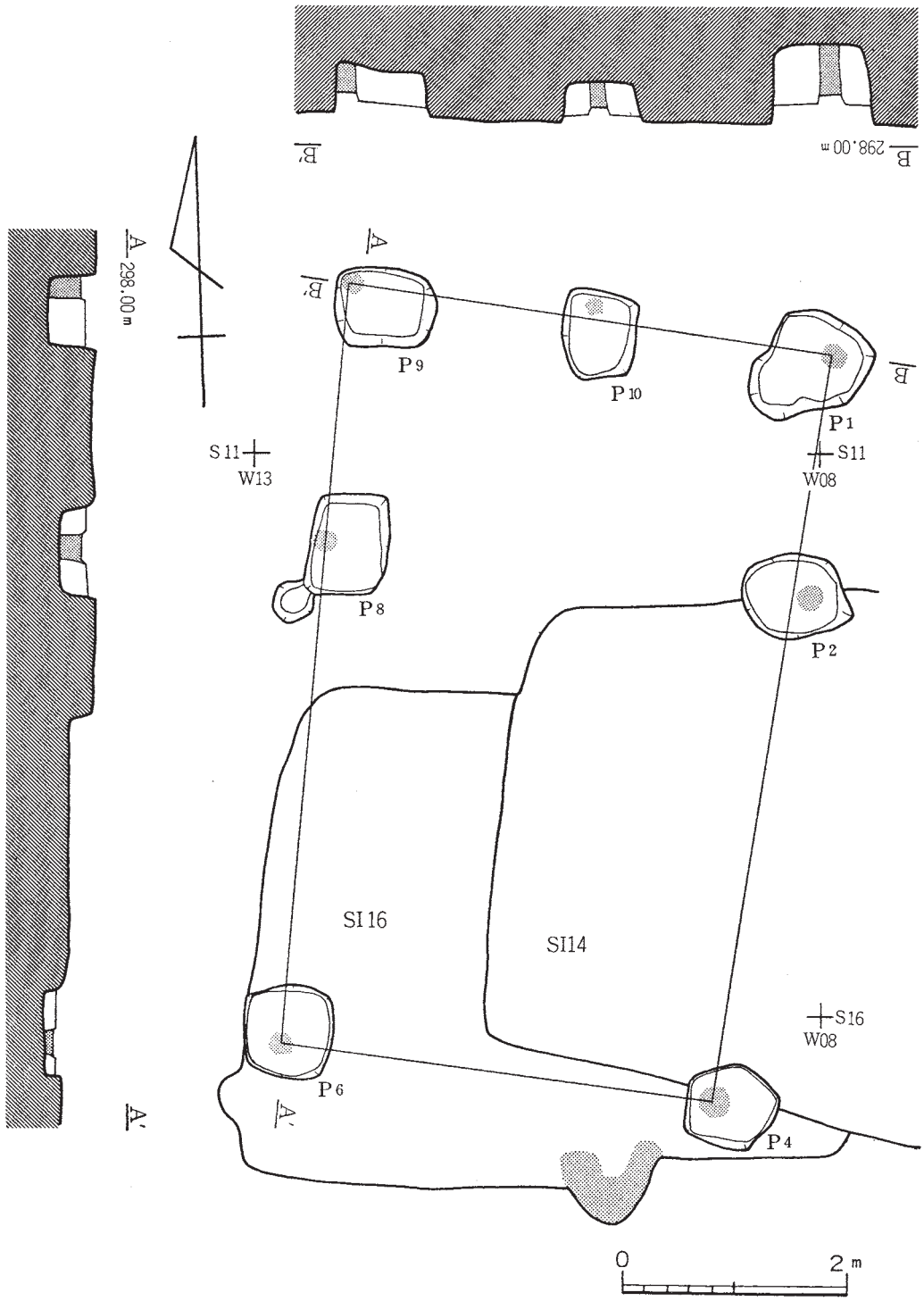
東西２間，南北３間の南北棟と考えられるが，確認された掘形は合計７個で，３個は住居跡によって完全に破壊されている。柱痕は検出されたすべての掘形で確認され，20㎝前後の丸柱と考えられる。掘形は70×90㎝の長方形を基本としているが，南側柱列の掘形は重複の関係で検出面が下がったため正方形に近く，ひとまわり小さくなっている。検出面からの深さは30㎝～70㎝の間でばらつきがあるが，北側柱列では両隅の柱が深く，重複部分でも隅柱のみ検出されていることを考えるならば，意図的に隅の掘形を深く掘り込んで柱を据えたものと考えられる。

隅柱を基準に各辺を計測すると，東辺6.70m，南辺3.85m，西辺6.75m，北辺4.30mとなり，南側柱列のみ２m未満の柱間寸法になると考えられる。西側柱列の軸線は７°，東側柱列の軸線は10°東に偏している。

当建物跡掘形よりいずれも杯・甕類の破片であるが，土師器・須恵器が出土している。杯類に限っていえば土師器では，ロクロ未使用の平底風丸底の杯，内外面黒色の杯，ロクロ成形で回転ヘラケズリ調整を施した杯（第73図１）が，また須恵器では底部全面にのみ回転ヘラケズリ調整を施した杯（第73図２）が各々出土している。第73図１の土師器杯は，深型で内面のミガキ方向も一定方向とロクロ土師器のなかでも古い段階でとらえられ，加えて多賀城分類（岡田・桑原1974）でいうところの１b類または７類に比定される須恵器杯を考慮すれば，当建物跡の造営された年代としては８世紀後半を上限とした時期が考えられる。



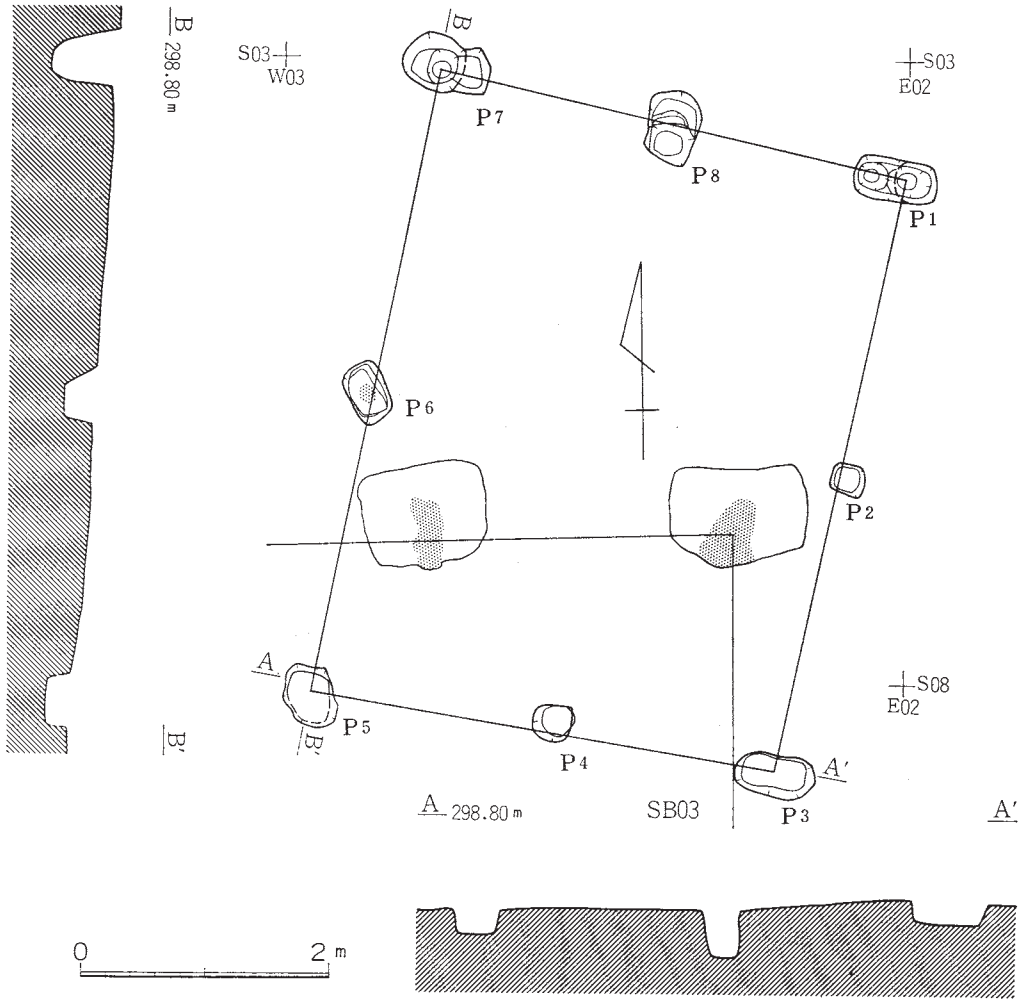
第73図　11号建物跡出土
土師器・須恵器


B
298.00m
B'
A
298.00m
A'
A
B'
P9
P10
P1
B
S11
W13
S11
W08
P8
P2
SI16
SI14
S16
W08
P6
A'
P4
0
2m

第74図　11号建物跡

12号建物跡　ＳＢ12（第75図）

７号住居跡の北西コーナー部分において，７号住居跡を切るかたちで検出された建物跡である。建物の方向は，東側柱列を結ぶ軸線ではＮ－13°－Ｅを示す。建物跡の規模は２間×２間であり，東西3.9m，南北5.0mとやや南北に長い。掘形は９個すべて確認されたが形は一定しておらず，深さも確認面から16～50cmとまちまちである。北側柱列は３本ともに掘形が２つあり，切り合った状態で検出されたため，建て替えの可能性も考えられる。この建物跡は７号住居跡より遡りえず，また３号建物跡と併存したものでないことは明白である。出土遺物もなく，３号建物跡の前あるいは後の時期決定については不明といわざるを得ない。



第75図　12号建物跡

第３節　土　　坑

今回の発掘調査区域内からは43基の土坑が検出された。これらの土坑がどのように機能していたかは明確にできないが，規模や形態のうえでいくつかに分類されることから，これら土坑について詳細なデータを表記し，若干の説明を加えたい。

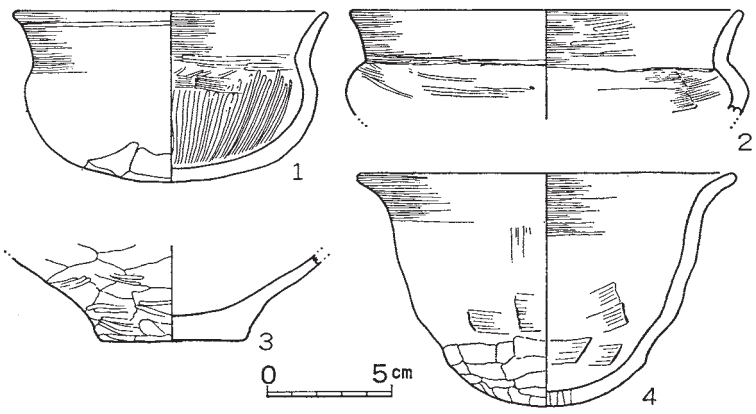
なお，表中における土坑の順番は調査時に付した番号順に記し，図は伴出した遺物から時期別を基本としたが第89・90図の中では版組みの関係上多少時期が前後した土坑がある。所属時期の不明なものについては番号順とした。本文中における遺構の説明は，出土した遺物や重複関係から限定される時期等について記し，土層注記については表記した。

１号土坑　ＳＫ01（第76・88図，図版36）

３号住居跡の北側3.5ｍの地点の地山ローム層上において検出された円形の土坑である。確認面における平面プランは東西130㎝，南北130㎝であり，底面は確認面よりやや大きく東西153㎝，南北156㎝を測る。深さは約75㎝で，いわゆる袋状を呈する土坑である。堆積土は，暗黄褐色土や黒褐色土などが交互に堆積しており，人為的に埋められた可能性が強く，堆積土内からは土師器が数点出土した。器形は杯・壺・甑などであり，時期は古墳時代後期に比定されるものと考えられる。

次に図化できた遺物４点について説明を加える。

杯１（第76図１）　堆積土内から検出された遺物であり，全体の1/2が残存している。口径12.6㎝，器高6.8㎝を測り，器厚は６㎜前後である。底部は丸底であり，体部は内彎しながら立ち上がり，ややつぼみ頸部に至る。口縁部は頸部より外反して立ち上がるが，その際頸部内外面に不明瞭であるが稜を形成する。器面調整は外面底部から体部にかけてはヘラケズリ，頸部から口縁部はヨコナデの後ヘラミガキが施されている。内面は底部から頸部までヘラミガキ，口縁部はヨコナデが施されている。胎土は緻密であり，割合丁



第76図　１号土坑出土土師器

寧につくられている。色調は内外面とも赤褐色を呈している。

杯２（第76図２）　堆積土内より検出されたものであり，口縁部から体部にかけて1/5のみと遺存状態は悪い。推定口径は15.8cm，残存高４cmを測る。底部の状態は欠損しているため不明であるが，体部は丸味をもって立ち上がり内彎する頸部に至る。口縁部は外反して開く。調整は外面口縁部はヨコナデであり，頸部から体部にかけてはヘラミガキを施している。内面口縁部はヨコナデの後ヘラミガキ，体部は不明瞭ではあるがヨコナデを施しているようである。内面口縁部と頸部の境には明瞭な稜が観察される。胎土・焼成とも良好であり，色調は赤褐色を呈している。

壺（第76図３）　底部から体部下端にかけての遺物で，器形は不明瞭であるが，一応壺に分類しておく。胎土は，緻密で焼成も良好であり，色調は赤褐色を呈している。内面調整は摩滅のため不明であるが，外面にはヘラケズリが施されている。

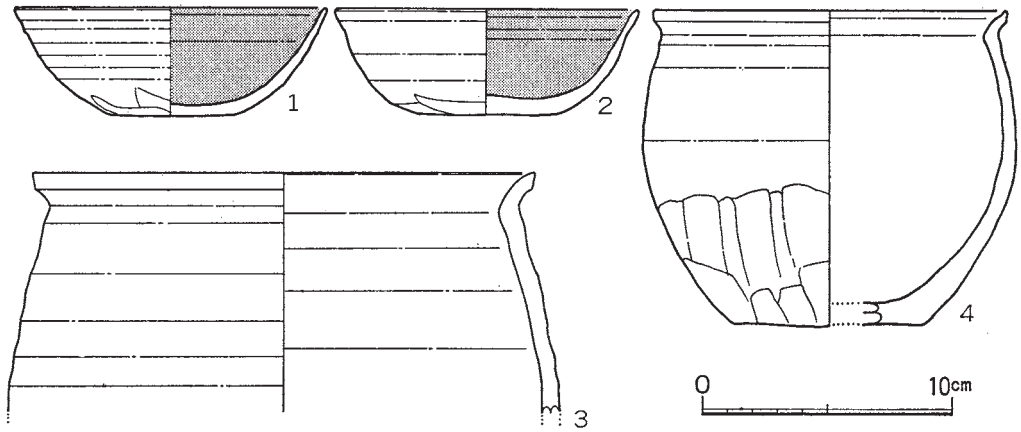
甑（第76図４）　全体の1/3が検出された。推定口径15.2cm，器高9.4cmの底面に内側から焼成前にあけられた数個の穴を有する多孔式の甑である。器厚は６㎜強を測る。器形は，丸底の底部からやや丸味をもって立ち上がり，外反する口縁部に至る。調整は，外面口縁部はヨコナデ，体部はヘラナデ，体部下半から底部はヘラケズリを施している。内面は口縁部ヨコナデ，体部から底部はヘラナデが施されている。

３号土坑　ＳＫ03（第77・89図，図版28・37）

２号土坑の1.5m東側で５号土坑と重複関係にある。確認面は地山ローム層で，新旧関係は３号土坑が５号土坑を切っている。平面プランは東西116cm，南北100cmの不整円形であり，深さは16cmを測る断面形皿状を呈する土坑である。埋土堆積状況は，暗茶褐色土・暗黄褐色土がほぼレンズ状の堆積を示している。遺物には土師器杯・甕のほか須恵器甕片などがあり，流れ込んだ状態で検出された。以下図化できた出土遺物について説明を加えるが，本土坑の時期を比定するならば，表杉ノ入式に属するロクロ成形の土器であることから，平安時代に位置づけられるものと考えられる。

杯１（第77図１）　土坑内南側隅の１層下面より出土した遺物で，体部から口縁部にかけて約1/5が欠損している。口径12.5cm，底径５cm，器高4.3cmを測り，内面は黒色処理のされた杯である。器厚は４㎜前後であり，口縁部はやや細く２㎜強を測る。成形はロクロによるが底部切り離し技法は不明である。器形は，底部から丸味をもって大きく外傾しながら立ち上がる。調整は，外面底部から体部下端は手持ちヘラケズリ再調整が施され，内面は不明瞭であるが全面ヘラミガキを行っている。また体部外面に墨書と思われるものがあるが，薄いため判読できない。

杯２（第77図２）　杯１のすぐ脇で検出された遺物で，全体の3/5が残存する。法量は口径12.1cm，底径5.4cm，高さ4.2cmを測る。器厚は底部から体部にかけては５～７㎜，口縁部では３㎜



第77図　３号土坑出土土師器

を測る。底部からやや丸味をもって立ち上がり，体部上端で若干くびれ口縁部に至る。成形調整は，杯１と同様である。

甕１（第77図３）　土坑内西側堆積土中より検出された遺物で，口縁部から体部上半にかけての約1/4を復元実測した。推定口径20cm，残存体部最大径22cm，残存高9.6cmを測る。ロクロによって成形されたものである。体部上半部はやや内彎ぎみに立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口縁部に至る。口縁端部はほぼ垂直に立つ。

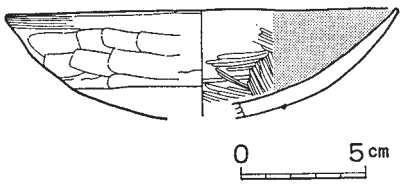
甕２（第77図４）　堆積土内から出土した遺物で，全体の1/4を復元実測した。摩滅が著しく遺存状態は悪い。ロクロによって成形された割合小型の甕であり，推定口径14cm，体部長大径14.8cm，底径7.6cm，高さ12.5cmを測る。器厚は底部から口縁部にいくに従い細くなり，底部では１cm前後，口縁部では５㎜を測る。体部は平底の底部より内彎ぎみに立ち上がり，甕１同様「く」の字状に屈曲して口縁部に至り，口唇部には稜を有す。調整は体部下半外面にヘラケズリ再調整がみられ，上半にはロクロ痕がある。内面は摩滅のため調整は不明である。

10号土坑　ＳＫ10（第78・91図）

Ｅ－２グリッド内のローム層上面において検出された。付近には東側2.5ｍに18号住居跡，西側2.5ｍには６～９号土坑が位置している。東西110cm，南北94cmの不整形を呈し，深さ20cm前後である。断面は皿状を呈するが底面は凹凸が激しい。堆積土は暗褐色土であり，ローム粒・焼土の混入が非常に多い。遺物は堆積土内より土師器甕・杯片が出土した。

杯（第78図）　堆積土内より検出された内黒土師器である。全体の1/5が現存する。平底風の丸底を呈する杯であり，体部はやや丸味をもって立ち上がり口縁部に至る。その際，体部下端には不明瞭であるが稜を形成する。器面調整は，外面は底部から体部上半までヘラケズリ，口縁部

はヨコナデで，内面は全面ヘラミガキが加えられている。体部外面には積み上げの痕跡が観察され，また底部には黒斑がみられる。



第78図　10号土坑出土土師器

本土坑は，堆積土内に焼土が多く混入していたが，壁面や底面は火気を受けた形跡がなく焼土は遺構構築後に投げ込まれたと考えられる。また，出土遺物は堆積土内よりであり，本土坑の明確な所属時期・性格は不明である。

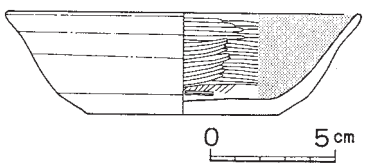
12号土坑　ＳＫ12（第89図，図版28）

Ｅ－４・６グリッドにかけ検出された土坑である。重複関係にある７号住居跡より新しく，４号建物跡よりも古い。直径3.2～3.5mのほぼ円形を呈する土坑で，検出面からの最大深度は0.6mを測る。底面は若干東に向かって傾斜しており，壁面の傾斜度は50～70度である。堆積土は自然堆積と考えられる黒褐色土が主体である。堆積土内からは土師器・須恵器片の小破片が数多く検出された。このなかではロクロ土師器が最も新しい資料である。とりわけロクロ土師器のなかで杯は底部から体部下端の破片で調整痕が確認できる破片は13点を数える。これらの破片の調整は外面が回転ヘラケズリ，内面が一定方向のミガキであるが，なかに一片のみ手持ちヘラケズリと思われる調整痕をもつ小破片がある。須恵器杯の調整では，観察可能総数６片のうち回転ヘラケズリが主体である。この６片中，静止糸切り後体部下端を回転ヘラケズリ調整するもの１点，他はすべて底部を全面回転ヘラケズリしている。これらのことから当土坑の時期は，前述した遺構の重複関係と出土遺物から，２号建物跡と近接した時期と考えられる。

13号土坑　ＳＫ13（第79・89図）

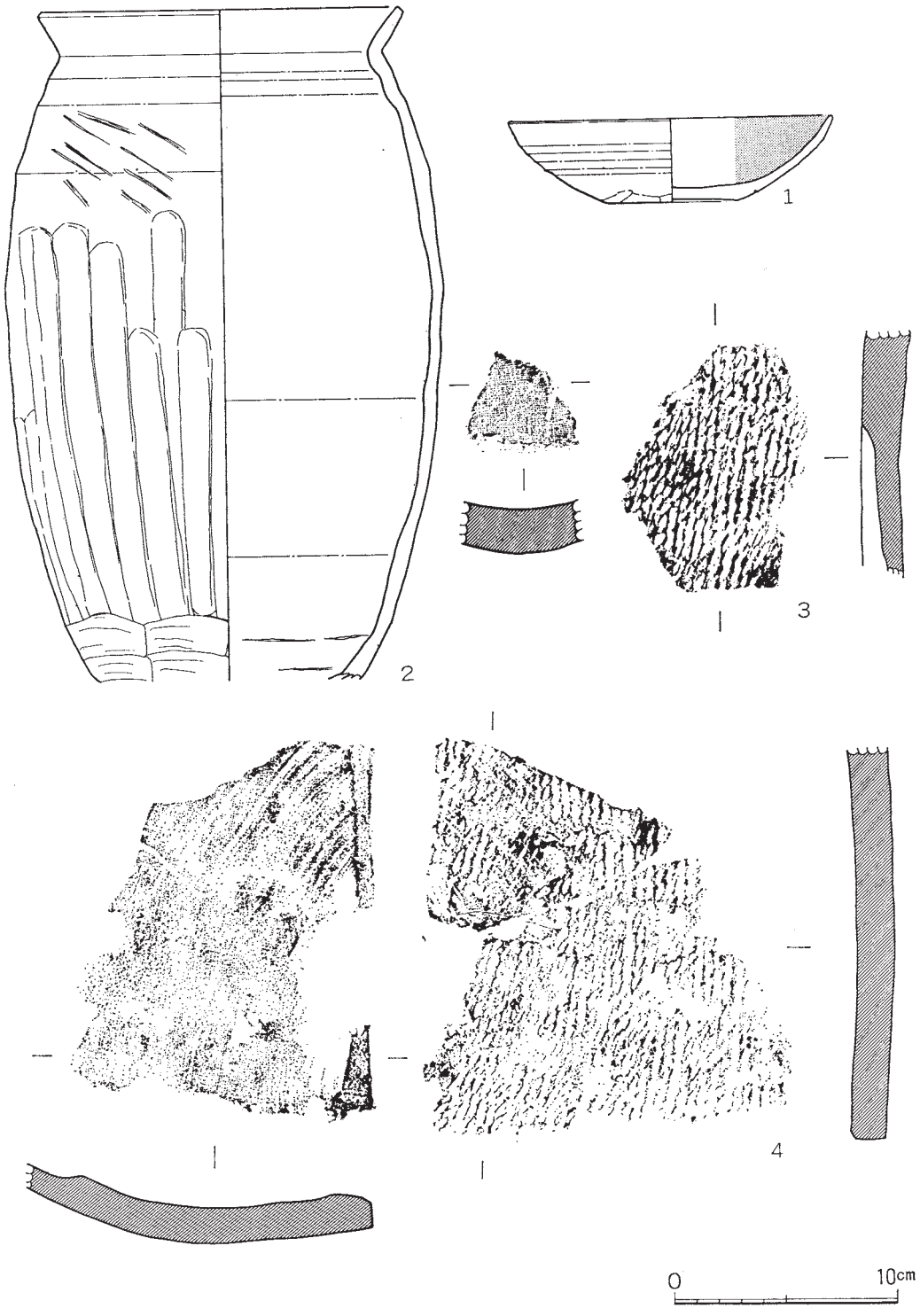
Ｅ－５グリッドにおいて，７号住居跡の南側で確認された。検出面は東側が地山ローム面，西側が黒褐色土面で，標高298mに位置している。東側の一部は，14号土坑によって切られている。

堆積土は大きく３層にわかれ，壁付近から順次堆積したことが知られ，自然の営力によって埋没したものと思われる。検出面からの深さは北側が最も深く85cmを測り，南側では40cm程である。ローム面を掘り込んで底面としており，北西部分に，長軸1.35mの楕円形状に５cm程深く掘り込まれた箇所がある。平面プランは隅丸の長方形と考えられ，長辺が3.70m，短辺2.90mである。



第79図　13号土坑出土土師器

出土遺物は，埋土より須恵器，土師器が出土している。須恵器は杯・蓋・甕があるが，いずれも小破片で実測可能なものは出土していない。土師器は杯・甕があり，杯１点



第80図　15号土坑出土土師器

のみ実測が可能であった。

杯（第79図）　口縁部から底部にかけて約1/2が現存している。口径14cm，底径7.6cm，器高4.1cmをはかり，成形にはロクロを使用している。底部全面と体部下端に回転ヘラケズリ調整を行い，内面では口縁部から体部にかけて横方向，底部に一定方向のヘラミガキを施し，黒色処理している。

ロクロ使用の土師器は，実測できた１点のみで，その他の破片はすべてロクロ未使用のものである。従ってロクロ土師器杯は，本土坑の上限年代を示す資料と考えられ，所属時期は破片などから，表杉ノ入式前半代のなかでも比較的早い時期でとらえられる。

15号土坑　ＳＫ15（第80・90図）

Ｃ－６グリッド北西隅に検出された土坑である。11号住居跡と重複し住居跡の南コーナー部を破壊し掘り込まれている。プランは直径約２ｍ強の不整円形で，検出面からの深さ0.6ｍを測る。堆積土は全体的にローム粒・ブロックを多く含む人為堆積土である。底面はなだらかに窪んでおり，壁面の傾斜角は50～70度である。遺物は検出面から土師器杯，第２層から土師器甕，平瓦，第６層下部から平瓦が検出された。

杯（第80図１）　体部から口縁部にかけ1/4強を欠損している。口径は復元で14.5cm，器高3.8cmを測る。ロクロ成形で，調整は外面が体部下半から底部全面にかけ手持ちヘラケズリ，内面は黒色処理されているが摩滅が著しく調整痕は不明である。

甕（第80図２）　口縁部から体部下半にかけて約1/3が現存している。現存高等30cm，復元口径16.3cmで，ロクロを使用しているが，体部外面の上半部にはかすかにタタキ目の跡が観察されるため，マキアゲ・ミズビキによる成形と考えられる。体部下半からの調整は縦方向のヘラケズリが基本で，体部下端に横方向のヘラケズリが入る。

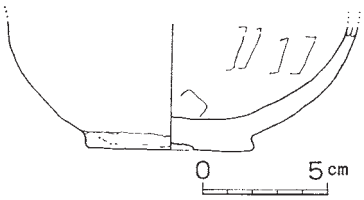
瓦（第80図３・４）　破片で計２点のみであるが，１点は側面と端面の一部を残している。厚さ1.6cmと薄く，色調は橙味黄褐色で，焼成は良好とはいえない。凸面は１段撚りＬを使用した縄叩き，凹面には平織りの布目痕が認められる。側面及び端面と凹面周縁は面取りがなされてある。

この土坑の時期は，ロクロ成形で手持ちヘラケズリ調整をもつ土師器杯によって，ロクロ土師器使用時期の中頃と考えられる。

16号土坑　ＳＫ16（第81・91図，図版28）

Ｂ－５～Ｃ－５グリッドにかけ検出された土坑で，11号住居跡の北西壁を切って掘り込まれている。径約１ｍの不整円形で，検出面から底面まで30cmを測るやや袋状の土坑である。堆積土は粒

子の均一な黒色土で，底面には多少の凹凸がみられる。出土遺物は底面から土師器甕・壺の破片が５点検出された。このなかで図化できたのは壺と考えられるもの１点だけである。



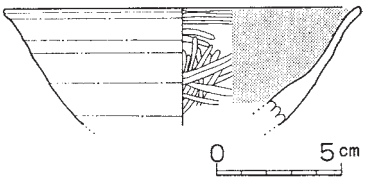
第81図　16号土坑出土土師器

壺（第81図）　底面から検出された胴部下半から底部にかけての破片である。現存高５cm，底部径6.6cmの平底で，中央部が径２cmほど窪んでいる。器面調整は内面がヘラナデ，外面がナデであるが底部外面の調整は粗雑である。

本土坑から検出された遺物の特徴は３・７号住居跡等の遺物と極めて類似しており，重複している11号住居跡の遺物もまた同様である。従って前述した重複関係によって11号住居跡より新しい土坑であるが，伴出遺物からみてさほど時期差はないと考えられる。一応ここでは古墳時代後期のものとしておく。

17号土坑　ＳＫ17（第82・92図）

１号住居跡を切っている，東西113cm，南北115cm，深さ43cmを測る円筒形に近い土坑で，底面は平底であり，壁はやや開き気味に立ち上がる。堆積土は自然堆積で，遺物は流れ込みの様相を示している。いずれも小破片であるが，土師器甕・杯片が出土している。そのうち杯１点が復元図化できた。



第82図　17号土坑出土土師器

杯（第82図）　堆積土内より検出された内黒土師器で，口縁部から体部下端にかけて残存する約1/4を復元実測した。ロクロ成形によるもので，推定口径14.3cm，残存高4.2cmを測る。器肉は体部下半は９㎜前後と厚いが，体部上半から口縁部は３㎜と極端に薄くなる。体部はやや丸味をもって立ち上がり，若干外反する口縁部に至る。器面調整は外面はロクロ痕が顕著に観察され，内面には全面ヘラミガキが施されている。

本土坑は１号住居跡を壊し，円筒形に掘り込まれたものであるが，どのような性格をもつものか不明である。重複関係から，表杉ノ入式期以降の時期にあてはめることはできるが，正確な時期決定は，遺構に伴うと考えられる遺物がないので明確ではない。

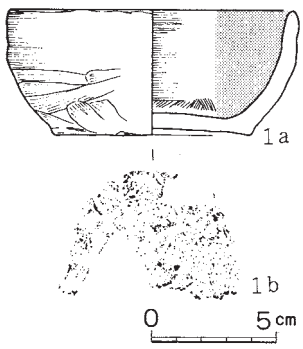
27号土坑　ＳＫ27（第83・93図，図版36）

Ｄ－５グリッドの北西部に検出された土坑である。直径約65cmの不整円形で，深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で，壁の傾斜角は70～80度と比較的急峻である。堆積土は黒褐色土を主体とした自然堆積層で，土師器片６片が検出された。多くは小破片だが１点のみ小型の土師器が第２層か

ら出土しているので，鉢として報告しておく。

鉢（第83図１）　底部から口縁部にかけ約1/2強が欠損している。器高５㎝，底径7.7㎝，口径は図上復元で11.3㎝を測る。器面調整は，内外面とも口縁部がヨコナデ，体部下半が不定方向のナデで，底部外面には木葉痕がみられる。成形はマキアゲと思われる。

この遺物は少なくともロクロ土師器よりは先行する特徴をもっているが，当土坑が11号建物跡を切っていることから，時期はロクロ土師器使用時期以降とすることができる。



第83図　27号土坑出土土師器

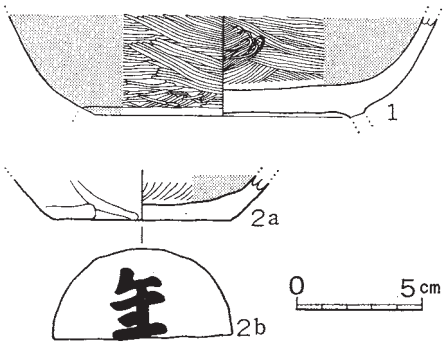
31号土坑　ＳＫ31（第84・90図）

Ｄ－６グリッドのほぼ中央において検出された土坑である。堆積土は茶褐色土で上下２層にわかれ，細かいロームブロックを含み，堆積に若干の乱れが観察されることから人為堆積と考えられる。平面形は方形を呈し，長辺が1.30m，短辺が1.00mである。底面は地山ローム面で硬くしまっており，南辺に接して深く掘り込まれた部分がある。検出面からの深さは，平均して25㎝前後で，前述の掘り込み部はさらに13㎝程深くなっている。残存壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物は堆積土中より，須恵器と土師器が出土しており，量的には土師器が多い。図示できたものは土師器２点のみで，須恵器では実測可能なものは出土していない。

杯（第84図２）　底部の1/2程の破片である。外面の調整は，手持ちヘラケズリを行った後，ヘラミガキを行っている。内面は，一定方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。平底を呈しているが，ロクロ未使用の可能性が強い。底部には「年」と読める墨書がある。底径は７㎝を測る。

高台杯（第84図１）　底部から体部にかけての破片で，底部は1/2程残存し，高台は剝落している。ロクロ成形の後，内外面に底部は一定方向，体部は横方向のヘラミガキを施し，両面黒色処理を行っている。高台は付け高台で底部に貼り付けのための溝が切られている。体部外面の下端には軽い稜を有しているが，内面にはなく，底部からゆるやかに立ち上がっている。高台貼り付け部の内径は10㎝である。本土坑からは，図示したものの他に，ロクロ使用し底部に丁重なケズリ調整を施した土師器・須恵器杯が出土しており，所属時期については平安時代前半の年代が考えられる。



第84図　31号土坑出土土師器

36号土坑　ＳＫ36（第85・86・90図，図版28・37・38・40）

本土坑は，12・13号住居跡と１号掘立柱建物跡に切られた状態で検出された。長径3.05m，短径2.10m，深さ0.68mを測る。平面プランは楕円形であり，断面形は鍋底状を呈する大型の土坑である。堆積土は暗茶褐色土が大部分をしめるが，黒褐色土が底面付近に，また南側壁面から底面にかけては白色粘土の堆積が見られる。本土坑の堆積土（５～８層）内や底面直上からは多量の土師器（杯・甕），須恵器（杯・甕），その他鉄鏃・環状鉄製品などが出土した。

次に本土坑内出土遺物の中で，図化できたものについて報告する。

〔土　師　器〕

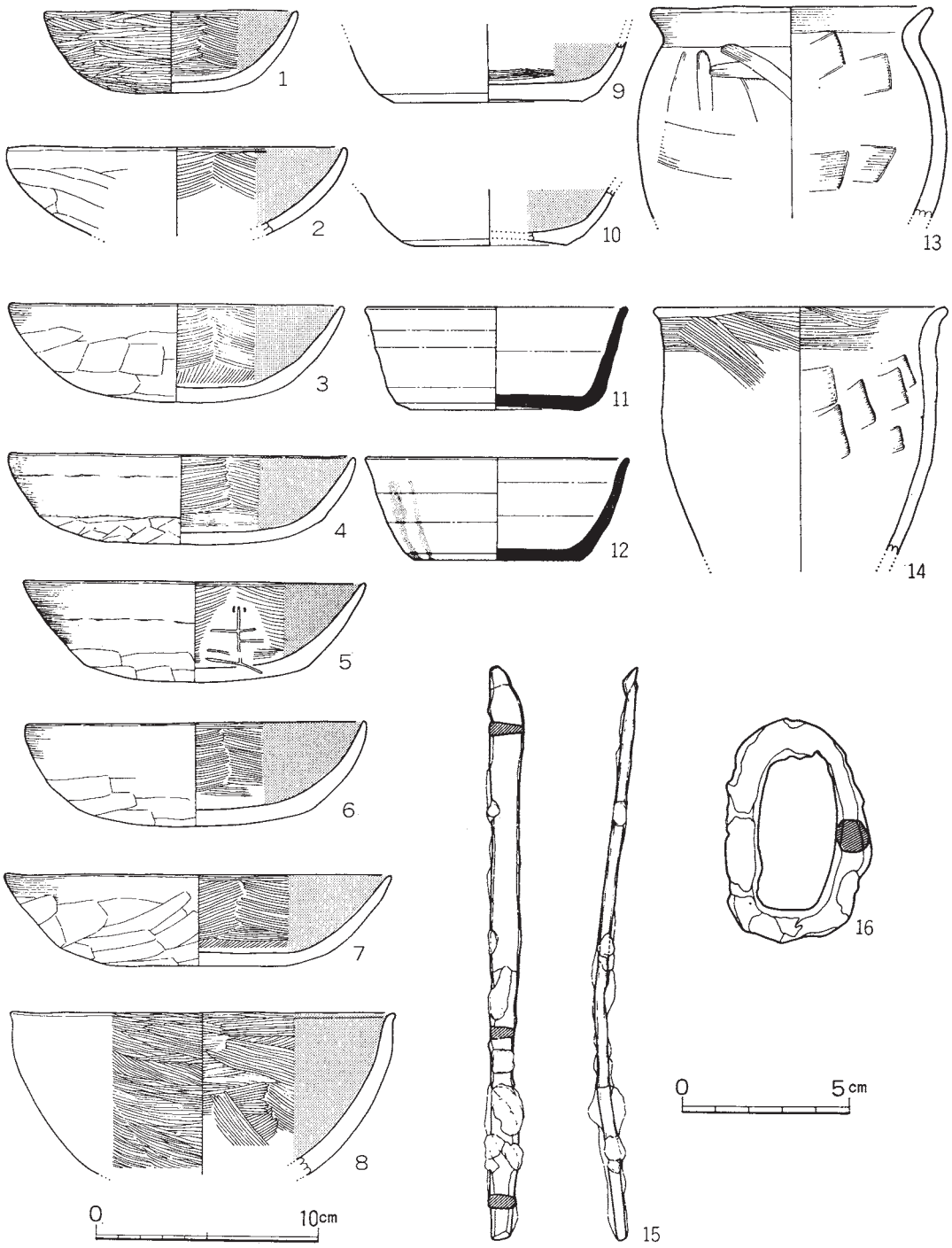
杯１（第85図１）　白色粘土上で検出された遺物で，口径11.4cm，器高3.7cmを測る丸底の杯である。体部は内彎しながら丸味をもって立ち上がり口縁部に至る。器肉は底部・体部で５～６㎜を測るが，口縁部は３㎜とやや薄くなる。外面調整は，底部から体部にかけてヘラケズリの後不定方向のヘラミガキを施し，口縁部には横位のヘラミガキを加えている。内面は，底部は一方向，体部から口縁部は横位のヘラミガキが全面に施され，黒色処理している。完形品であり，胎土・焼成とも良好な土器である。

杯２（第85図２）　本遺構埋土内から検出された土器であり，口縁部から体部にかけて残存する1/6を復元実測した。体部は内彎気味に立ち上がり，直立する口縁部に至る。外面調整は体部上端までヘラケズリが行われており，口縁部はヨコナデが施されている。内面は全面ヘラミガキが施されている。推定口径15.3cm，現存高４cmを測る。

杯３（第85図３）　本土坑底面の北隅の土器群内より出土した遺物であり，全体の1/2を欠損している。口径15cm，器高4.4cmを測る平底風丸底の杯である。体部は丸味をもって外反しながら立ち上がる。内外面の調整は，器面が荒れているため明瞭でない部分もあるが，外面底部から体部上端までヘラケズリ，口縁部はヨコナデを施しているようである。内面は全面ヘラミガキで黒色処理している。部分的に有機物が付着している。胎土は砂粒を多く含んでおり，焼成もあまり良くない。

杯４（第85図４）　埋土内から検出された完形品で，口径15.5cm，器高４cmの丸底の杯である。底部から体部に移行する部分には不明瞭ではあるが稜を有しており，そこから丸味をもって立ち上がり口縁部に至る。外面口縁部には，粘土紐巻き上げの痕跡が観察される。器肉は底部から体部にかけては５㎜強を測り，口縁部は２㎜前後である。調整は，外面底部から体部下端はヘラケズリ，体部下半から口縁部まではヨコナデを施している。内面は，全面ヘラミガキが施されており，黒色処理している。

杯５（第85図５）　本遺構内の最も西側において，白色粘土上から出土した。全体の4/5を現存



第85図　36号土坑出土土師器・須恵器・鉄製品

する内黒の杯である。口径15.3cm，器高4.5cmを測る平底風の丸底を呈する。やや丸味のある底部と体部の境界には稜があり，そこから若干内彎気味に立ち上がる。器肉は６～８㎜であり，口縁部は３㎜弱と薄く，体部外面には積み上げの痕跡が観察される。外面調整は，底部から体部下端は手持ちヘラケズリであり，休部中央より上部から口縁部にかけては，ヨコナデを施している。内面は全面ヘラミガキを施しているようであるが，方向は不明瞭である。胎土・焼成は良好である。体部内面には「半」の線刻がある。

杯６（第85図６）　本遺構内南側で検出した白色粘土上から出土した土器で，全体の1/3を現存する。推定口径15.2cm，器高4.6cmを測る内面黒色処理された杯である。底部は平底風の丸底であり，体部は底部から内彎気味に立ち上がり直立する口縁部に至る。器肉は５～８㎜を測る。口縁部はほとんど欠損しているが２㎜前後と思われる。内外面調整は摩滅が著しいため明瞭ではないが，外面は底部から体部中央にかけて手持ちヘラケズリ，口縁部はヨコナデを施している。内面は全面ヘラミガキ。胎土は良好な土器である。

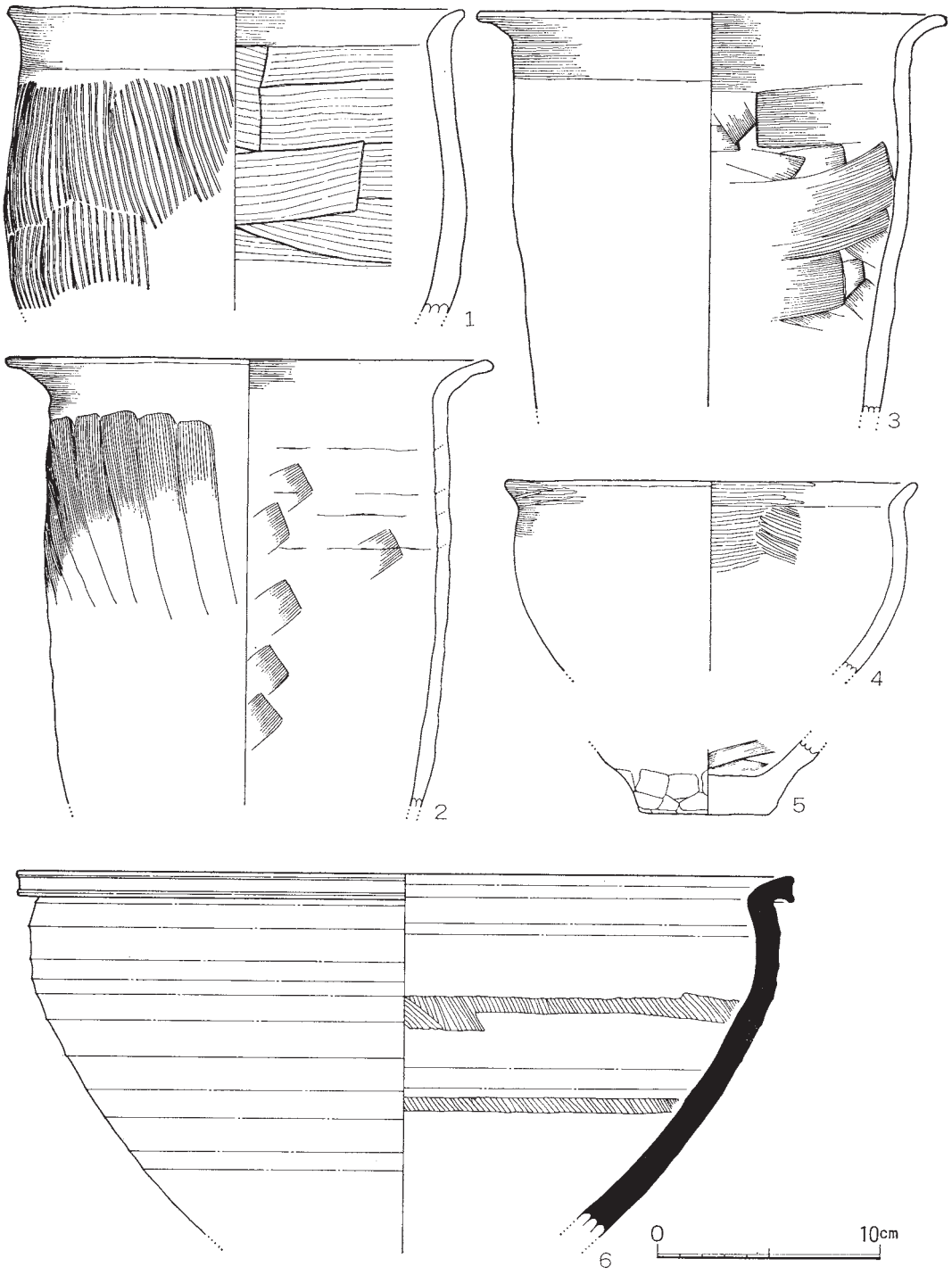
杯７（第85図７）　口径17.3cm，器高4.1cm，底径7.9cmを測る内面黒色処理された杯であり，口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。底部は平底で，体部は底部より丸昧をもって外傾し口縁部に至る。外面調整は，口縁部はヨコナデ，体部から底部全面は手持ちヘラケズリを施している。内面は全面ヘラミガキである。胎土は割合砂粒を多く含んでいるが，焼成は良好である。

杯８（第85図９）　北側底面隅で検出された土器のひとつである。体部下端から底部まで現存する1/2を復元実測した。内外面ともやや器肌が荒れている。体部上半から口縁部は欠損しているため口径は不明であるが，現存高は2.7cm，底径は8.5cmを測り若干上げ底を呈している。外面調整は，底部から体部下端は回転ヘラケズリを施しているが，その上は摩滅のため不明である。内面は底部は一方向，体部は横方向へのヘラミガキが丹念に施され，黒色処理している。

杯９（第85図10）　本遺構の底面から検出された遺物であり，体部下端から底部にかけて1/4弱残存する内面黒色処理された杯である。器面調整は，体部下端外面から底部は回転ヘラケズリ，体部はロクロ回転によるナデが施され，底部はやや上げ底になっている。内面は全面ヘラミガキを行っているようであるが，器肌が荒れているため明瞭ではない。ロクロ回転は右廻りである。法量は現存高2.5cm，推定底径6.8cmを測る。

椀１（第85図８）　埋土内から出土した内黒の椀で，口縁部から体部下半にかけて1/4が残存する。体部は内彎気味に立ち上がり，外反する口縁端部に至る。調整は内外面とも横位のヘラミガキが丁寧に施されている。体部外面には積み上げ痕が部分的に観察される。推定口径17.2cm，現存高7.3cmを測る。

甕１（第85図13）　本遺構東側壁面にはりついた状態で検出された遺物で，口縁部から体部にかけて約1/2残存する。推定口径12.6cm，体部最大径13.8cm，現存高9.7cmであり，最大径を体部



第86図　36号土坑出土土師器・須恵器

にもつ甕である。体部は内彎しながら立ち上がり，外反する口縁部に至る。口縁部の調整はヨコナデ，体部はヘラナデが施されているが，器肌は内外面ともかなり荒れている。胎土には石英粒を割合多く含み，つくりは粗製である。

甕２（第85図14）　須恵器鉢１と重なった状態で出土した。口縁部から体部にかけて1/3現存するだけで，底部は欠損している。推定口径13.1㎝，現存高11㎝であり，最大径を口縁部にもつ小型甕である。体部下半はやや丸味をもって立ち上がり，立直する体部上半を経て，短く外反する口縁部に至る。外面調整は，摩滅が著しく口縁部のヨコナデ調整以外は不明であるが，内面は口縁部がヨコナデ，体部にはヘラナデが施されている。全体につくりは粗製で，色調は内外面とも暗褐色を呈している。

甕３（第86図１）　本遺構内東側底面中央に集中して出土した破片数点が接合された。口縁部から体部上半にかけて約1/3現存する。推定口径20.4㎝，現存高13.6㎝，体部最大径20.6㎝を測る。体部器肉は８～12㎜，口縁部は５㎜前後を測る。体部は内彎しながら立ち上がり，内面に稜を成す頸部をへて，短く外反する口縁部に至る。外面調整は，口縁部はヨコナデ，体部は縦方向の刷毛目が施されており，内面は口縁部にはヨコナデ，体部は横位のヘラナデがそれぞれ加えられている。色調は淡赤褐色を呈しており，全体につくりは粗製である。

甕４（第86図２）北側隅底面に散在していた土器片数点が接合された遺物であり，口縁部から体部にかけて現存する約1/2を復元実測した。推定口径21.8㎝，現存高20㎝であり，器肉は５～７㎜を測る最大径を口縁部にもつ甕である。頸部には不明瞭ではあるが稜を有する部分もあり，口縁部は大きく外傾して立ち上がる。器面調整は，外面口縁部はヨコナデ，体部は縦方向のヘラナデ，内面口縁部はヨコナデ，体部には横方向のヘラナデが施されている。また内面には積み上げの痕跡が観察される。胎土には割合多く石英粒を混入し，焼成は良好である。色調は内外面とも灰白色を呈している。

甕５（第86図３）　土師器杯７と重なる状態で検出された遺物で，口縁部は1/4，体部は1/6残存する。体部は直線的に立ち上がり，外反する口縁部に至る。器面調整は甕４とほぼ同じである。法量は推定口径21㎝，現存高17.8㎝を測る。

甕６（第86図５）　甕３の北側で検出された遺物で，底部から体部下端にかけてのみの残存である。摩滅が著しく遺存状態は良くない。底径5.8㎝，現存高3.3㎝を測る。底部には不明瞭であるが木葉痕が観察される。調整は，内外面にはヘラナデが施され，体部下端にはヘラなどで押さえつけたような痕跡がある。

鉢１（第86図４）　本遺構の北西部底面で検出された遺物で，口縁部から体部下半にかけて1/6残存する。体部は内彎気味に立ち上がり，ほぼ直立する頸部を経て外反する口縁部に至るが，その際，頸部には稜を形成する。推定口径18.4㎝，現存高8.5㎝，器肉は７㎜前後を測る。外面調

整は，口縁部は横位のヘラミガキ，頸部はヨコナデが施されており，体部上半は横方向，下半が縦方向のヘラケズリを行っている。内面は全面横位のヘラミガキの後黒色処理している。体部下半には黒斑がみられる。

〔須　恵　器〕

杯１（第85図11）　本遺構内西側にある白色粘土上で検出された。全体の1/2現存する。胎土・焼成は良好な土器であり，色調は内面と外面底部は灰白色，体部外面は黒褐色を呈している。底部は若干上げ底であり，体部は底部からやや外方に直線的に立ち上がり，外反する口縁部に至る。調整は，外面で底部と体部下端が回転ヘラケズリが施されており，切り離し技法は不明である。法量は推定口径11.8cm，器高4.6cm，底径7.6cmを測る。

杯２（第85図12）　杯１同様白色粘土上で検出された。体部から口縁部にかけて約1/2を欠損する。平底の底部より体部はやや丸味をもって立ち上がる。内外面ともロクロ調整であり，外面底部から体部下端には回転ヘラケズリが施されている。法量は推定口径11.8cm，器高4.6cm，底径7.5cmと杯１と同様の形態である。外面体部から底部にかけては焼成時の火襷が全面にみられる。

鉢１（第86図６）　東南隅の６層内より土師器甕２の上に重なった状態で出土した。口縁部から体部にかけて約1/5残存する。体部は大きく外傾し，上端でやや内彎気味に立ち上がり，外方に短くひき出された口縁部に至る。内外面ともロクロ回転によるナデが顕著であり，また外面体部下半には回転ヘラケズリ，内面には部分的にロクロ以前のナデが観察される。推定口径34.8cm，現存高16.3cmを測る。割合丁寧につくられた鉢である。

〔鉄　製　品〕

鉄鏃（第85図15）　本遺構のほぼ中央底面で検出された，片刃の尖根式鉄鏃である。現存長は17cmを測り，そのうち茎と思われる部分は約４cmを測る。長さに対して刃部は非常に小さく，先端に片刃のみを付したものである。刃部の長さは2.4cm，幅は１cmを測る断面三角形を呈したものである。

用途不明鉄製品（第85図16）　杯４と重なった状態で検出された，用途不明の環状を呈する鉄製品である。長径6.6cm，短径4.3cmを測り，幅は１cm前後を測る断面円形を成すものである。錆化が著しく遺存状態は良くない。

ま　と　め

本土坑は，12・13号住居跡や１号建物跡と重複関係にあり，本遺構が最も古いものである。埋土や底面からは多量の土師器・須恵器ほか鉄製品が出土した。一括出土した土器は，ロクロ未使用の土師器とロクロ使用の土師器が共伴しているが，所属時期は，ロクロ未使用の土師器が大半を占めなかでも杯は国分寺下層式で捉えられる資料であることから，国分寺下層式期でも新しい時期に位置づけられるものと思われる。

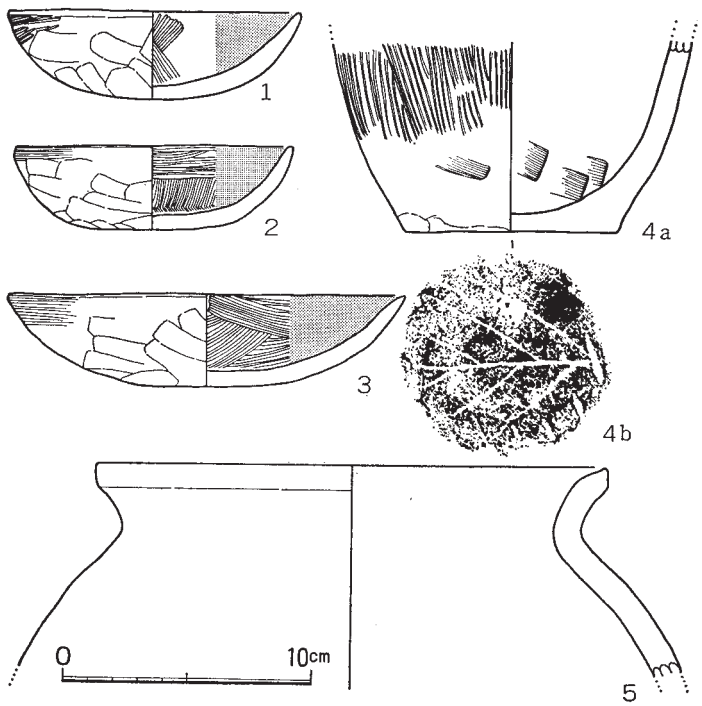
39号土坑　ＳＫ39（第87・90図，図版38）

土坑が散存する調査区南側のＤ－６・７グリッドで確認されたもので，38号土坑と近接している。堆積土は暗褐色土を基本に４層にわかれ，自然堆積の可能性が強い。検出面からの深さは，深い部分で40cm，浅い部分で22cmである。底面は地山ローム面で丸みを持っており，凹凸は少ない。残存壁は，西側が垂直に近く掘り込まれているが，他は緩やかな傾斜で立ち上がっている。平面形は南北に長い不整形で，東西で最も長い部分は1.40m，南北で最も長い部分が1.94mを測る。

出土遺物はほとんどが堆積土中のもので，土師器が主体をしめ，図示できたものは以下の５点である。

杯１（第87図１）　ロクロ未使用の完形品である。外面は口縁部がヨコナデ後ヘラケズリ，体部から底部にかけてヘラケズリを行い平底風を呈している。内面は口縁部がヨコナデ後横方向のヘラミガキ，底部は一定方形のヘラミガキを施し黒色処理を行っている。内面の底部と体部の継ぎ目にわずかな括れがあり，そこを境に亀裂が走っている。体部から口縁部は底部から内彎して立ち上がっている。口径は10.8cm，器高は3.5cmである。

杯２（第87図２）　ロクロ未使用のもので，底部から口縁部にかけての1/4程の破片を復元実測した。丸底を呈すと思われ，体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる小型の杯である。調整は内外面ともヘラミガキ調整であるが，２次焼成をうけ，外面はヘラミガキが飛んで，ヘラケズリ痕が観察される。内面は黒色処理を行っているが，これも２次焼成のため一部消失している。推定口径11.7cm，器高3.5cmである。



第87図　39号土坑出土土師器

杯３（第87図３）　ロクロ未使用のもので1/3の破片を復元実測した。比較的小さな平底風の底部を持ち，

やや内彎しながら緩やかに外傾して口縁部に至る。調整は外面が，口縁部ヨコナデ，体部から底部にかけてヘラケズリを行い，内面はヘラミガキの後黒色処理を施している。推定口径16㎝，器高3.8㎝である。内面底部には，「午」と判読できる焼成後刻まれた線刻文字がある。

甕１（第87図５）　口縁部から肩部にかけての1/3程の破片を復元実測した。内外面ともにロクロ調整によるもので，内面に縦方向のわずかな擦痕が観察される。焼成は良好で堅緻である。推定口径は20.4㎝である。

甕２（第87図４）　底部から体部にかけての破片である。調整は外面がハケメ，内面が指とヘラによるナデを行っており，底部外面には木葉痕がみられ，底径は８㎝である。

本土坑から出土した土師器は，破片を含めロクロ使用のものとロクロ未使用のものに分けられる。ロクロ使用のものは，底部に丁重なヘラケズリ再調整を施したもので，ロクロ未使用のものは，丸底で体部に段を持たないものである。ロクロ未使用のものはその特徴から国分寺下層式に比定される。ロクロ使用のものについては，ロクロ土師器のなかでも初源的な要素をもつと考えられる。従って本土坑の時期については奈良時代～平安時代初頭の年代を考えたい。

ま　と　め

以上，調査時に付した番号に従い，主な土掛こついて説明を加えてきた。これらの土坑は，形状からみると円形・方形・不整形（円形・方形のいずれにも属しない。）に分類され，また規模や断面形によって以下のように細分される。

円形土坑……径１ｍを超えるもので，底面は平底や鍋底状を呈する。断面形はフラスコ状円筒形や円筒形のものがある。断面フラスコ状円筒形を呈するものは，確認面におけるプランと底面プランが正円に近い形となる。堆積土は暗茶褐色土，黒褐色土が主体をなす。

小型円形土坑……径１ｍ未満のもので，底面が平底や鍋底状をなし，ほとんどが断面円筒形を呈している。

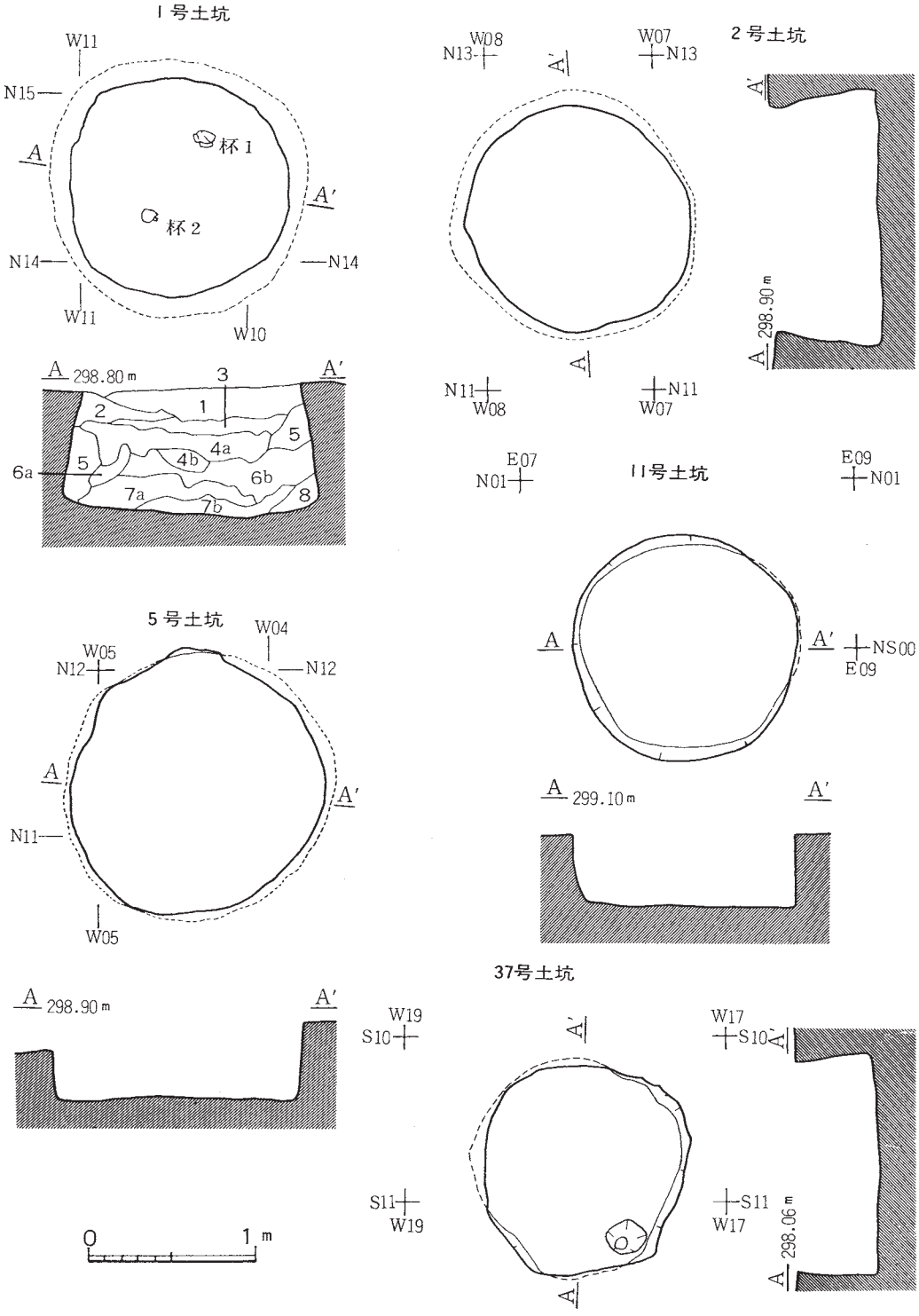
方形土坑……大型のものは一辺３ｍを超えるものがあるが，小型のものは一辺１ｍ前後である。ほとんどがコーナー部隅丸となり，断面形は箱形を呈するものである。

長方形土坑……数は少なく，長軸290×短軸124㎝のものと長軸193×短軸64㎝の２基である。断面形は皿状に近い形を呈しており，コーナーは隅丸となる。

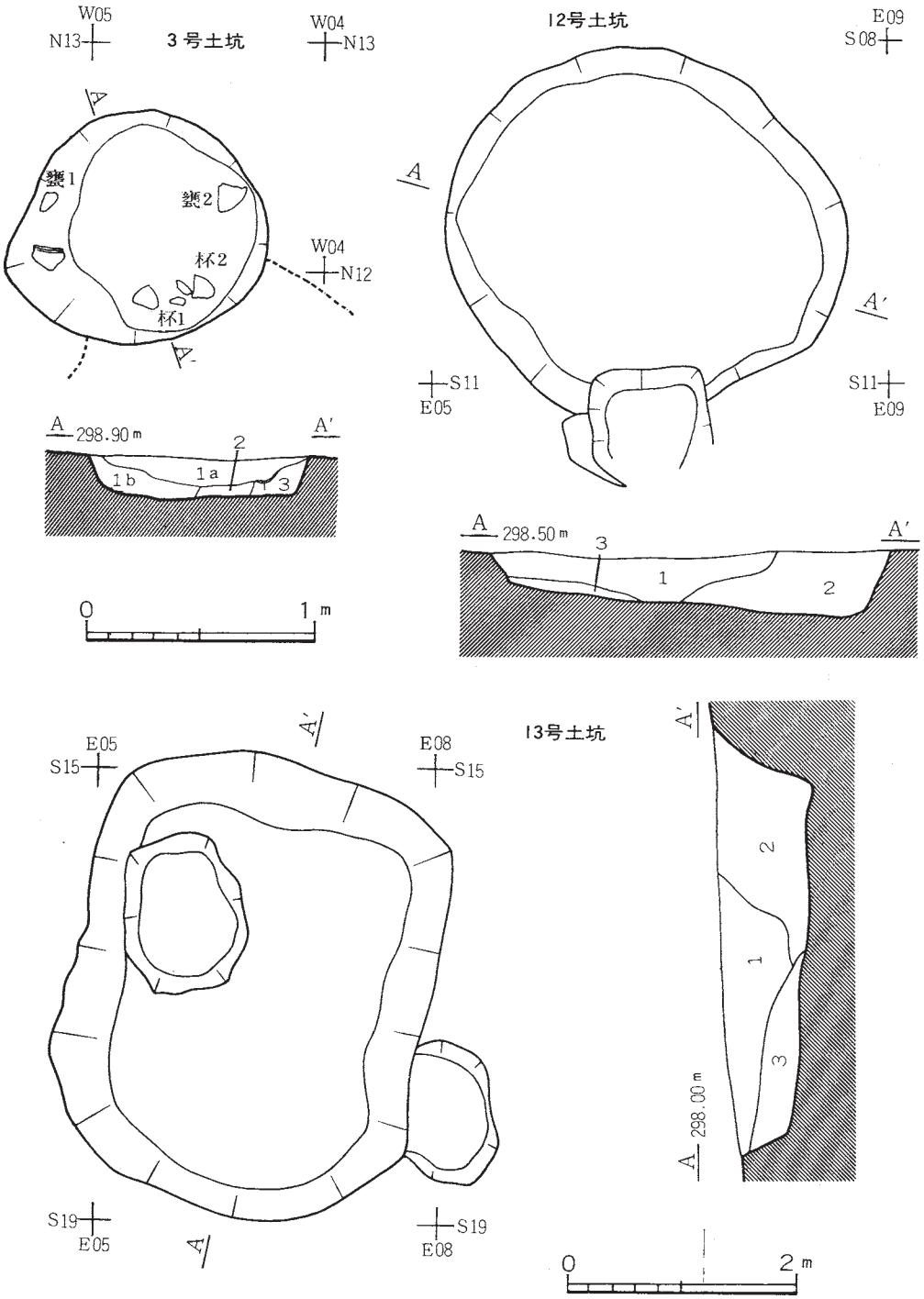
楕円形土坑……大小ある。大型のものは長軸３ｍを超えるもので，小型のものは長軸１ｍ前後である。断面が円筒形や鍋底状を呈する。

不整形土坑……上記のいずれにも属さない土坑で，規模などもまちまちであり共通性に欠ける。

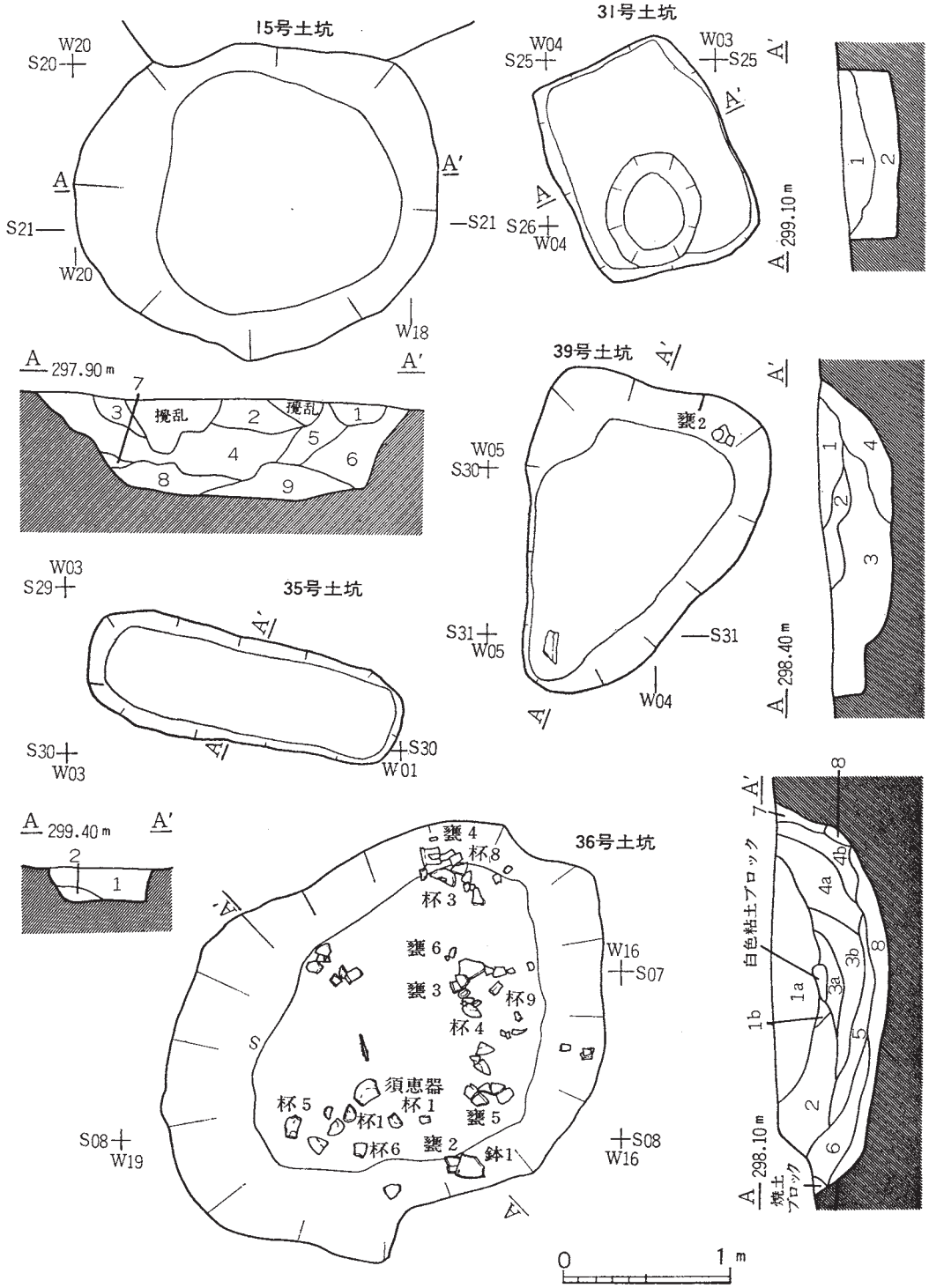
これらの土坑は総数43基を数え，調査区内ほぼ全域にわたって検出されている。この中で断面フラスコ状円筒形を呈する円形土坑は，調査区の北側に集中して検出された。この土坑は，前に調査された佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区においても多数検出され，ロクロ使用痔期以前の遺構であること



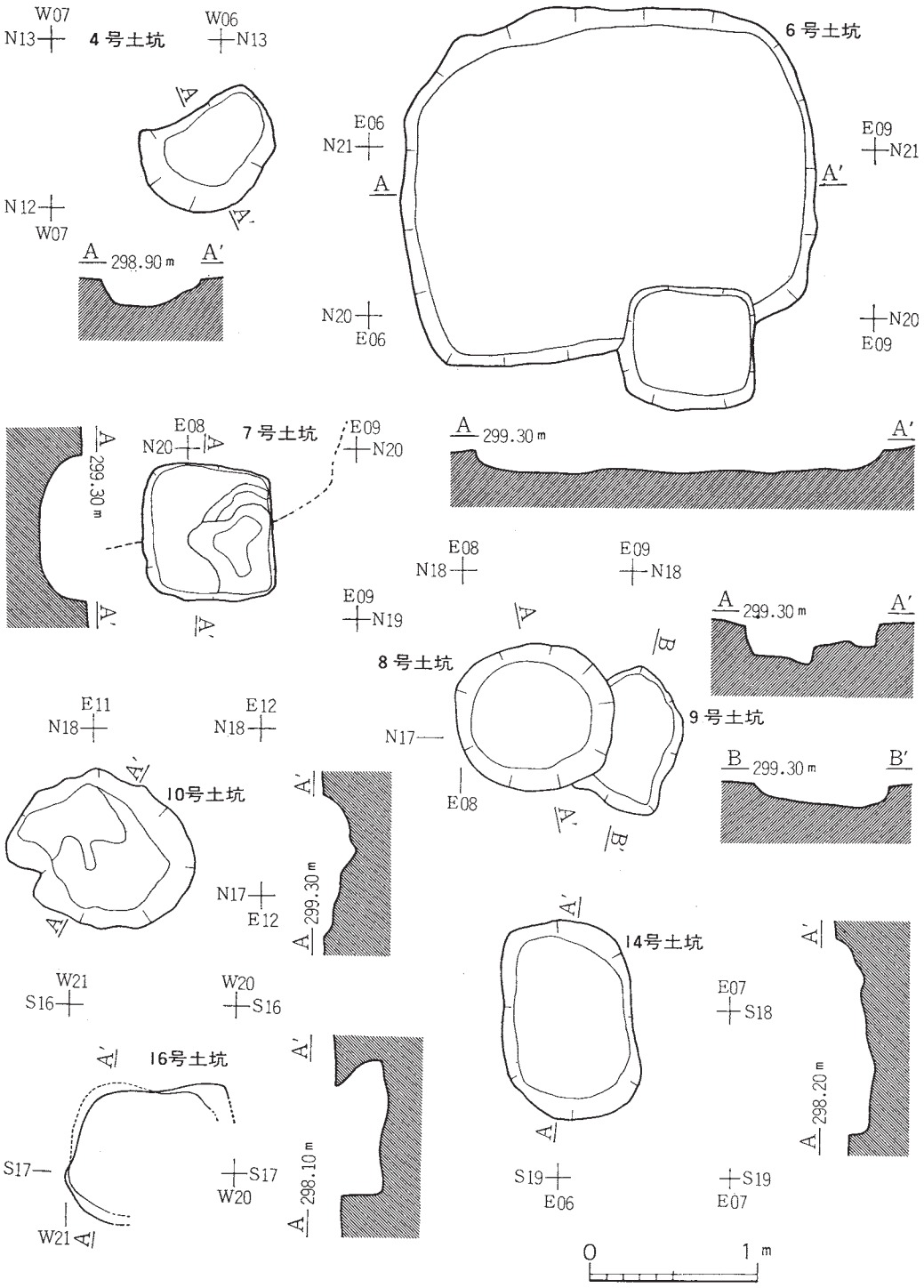
第88図　1・2・5・11・37号土坑



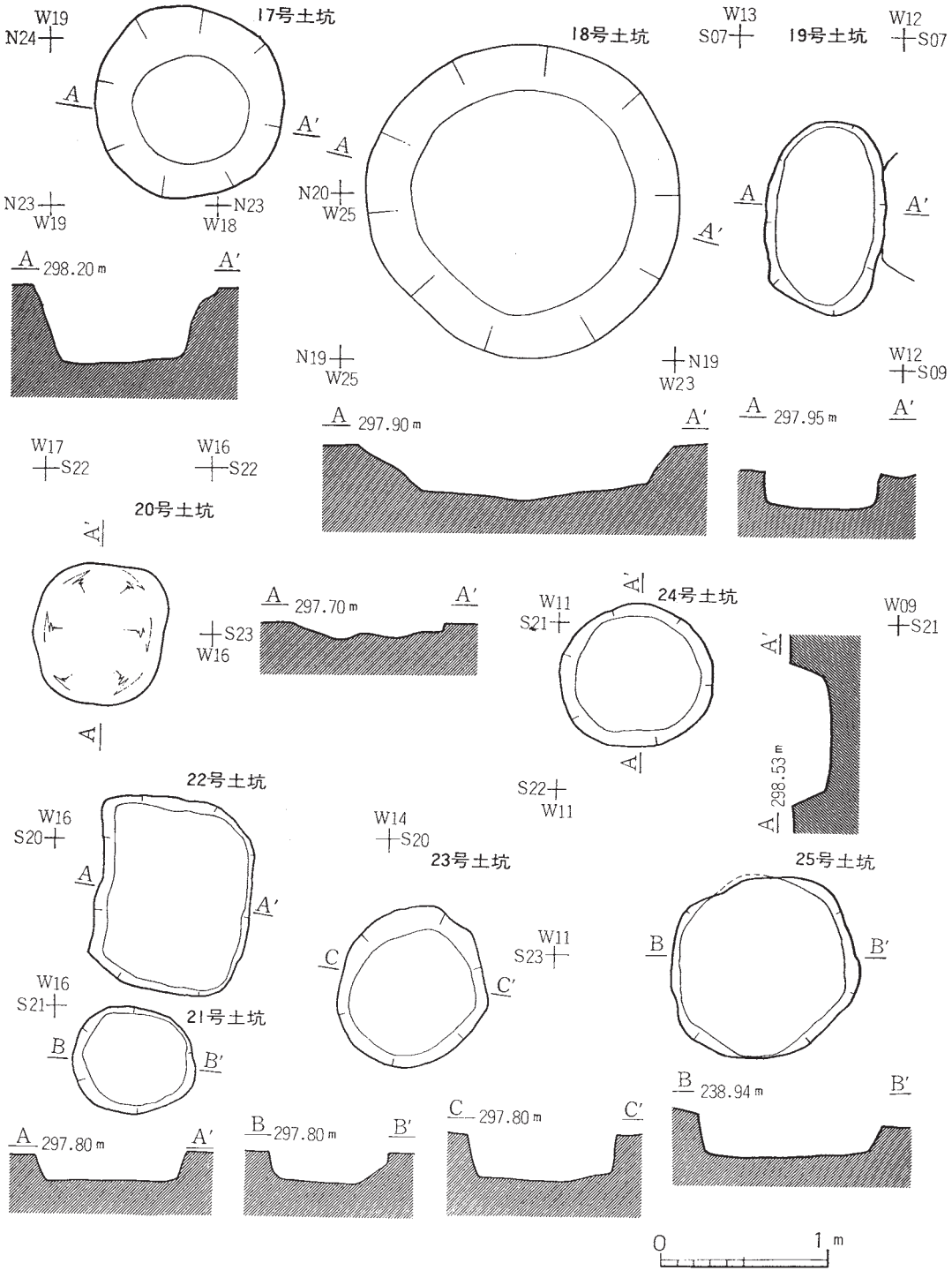
第89図　3・12・13号土坑



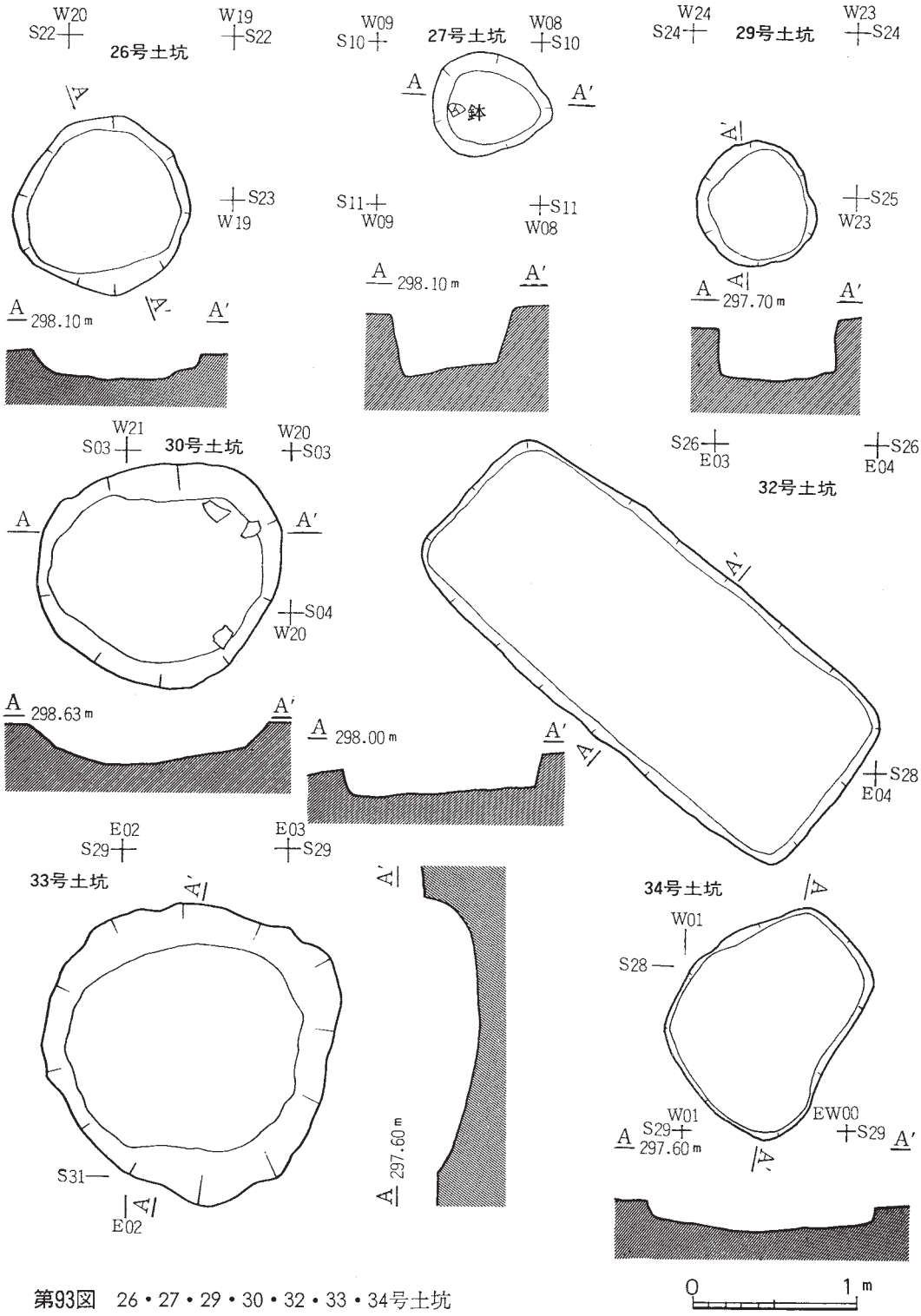
第90図　15・31・35・36・39号土坑



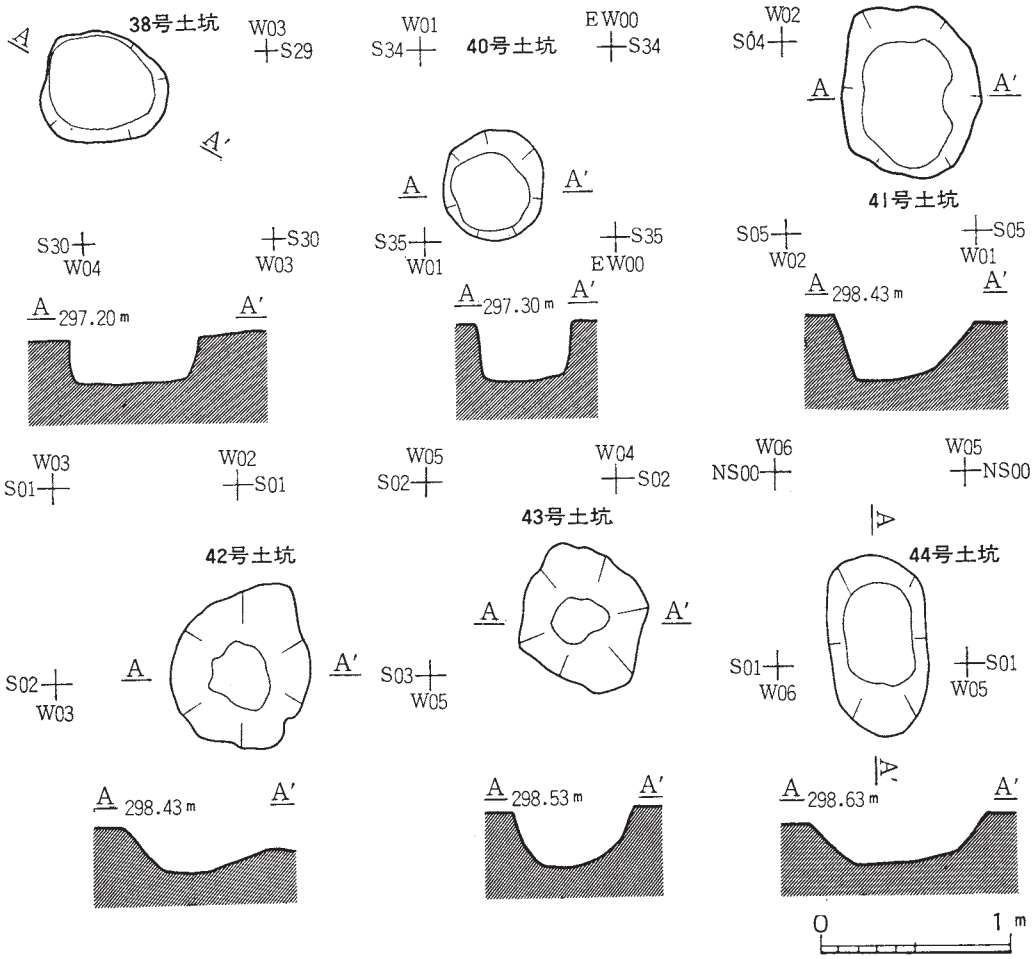
第91図　４・６～10・14・16号土坑



第92図　17～25号土坑



第93図　26・27・29・30・32・33・34号土坑



第94図　38・40～44号土坑

第2表　主な土坑内堆積土

土坑番号	土　坑　内　堆　積　土
1号	1層…暗茶褐色土　2層…黄褐色土　3層…黒褐色土　4a層…暗黄褐色土　4b層…暗黄褐色土 5層…黒褐色土　6a層…黒色土　7a層…暗黄褐色土　7b層…暗黄褐色土　8層…黒褐色土
2号	1a層…暗茶褐色土　1b層…暗茶褐色土　2層…暗黄褐色土　3層…暗茶褐色土
12号	1層…黒褐色土　2層…黒褐色土　3層…黒色土
13号	1層…茶褐色土　2層…茶褐色土　3層…黒褐色土
15号	1層…暗褐色土　2層…暗黄褐色土　3層…茶褐色土　4層…暗黄褐色土　5層…茶褐色土 6層…黒褐色土　7層…灰白色土ローム　8層…暗褐色土　9層…黒褐色土
31号	1層…黒味茶褐色土　2層…茶褐色土
36号	1a層…暗茶褐色土　1b層…暗茶褐色土　2層…暗黄褐色土　3a層…暗茶褐色土 3b層…暗茶褐色土　4a層…暗茶褐色土　4b層…暗茶褐色土　5層…暗黄褐色土　6層…黒褐色土 7層…暗茶褐色土　8層…黒褐色土
39号	1層…茶褐色土　2層…暗褐色土　3層…暗褐色土　4層…暗褐色土

第３表　土坑形態分類表

円形土坑（径１mを超えるもの）
- フラスコ状円筒形……１．２．５．11．37
- 円筒形……12．17．25
- 鍋底状……３．15．18．26．30．33

小型円形土坑（径１m未満のもの）
- 円筒形……16．21．23．24．27．29．38．40
- 鍋底状……８．20

方形
- 箱形……６．７．13．22．31

長方形
- 箱形……32．35

楕円形
- 円筒形……19
- 鍋底状……14．36．44

不整形……４．９．10．34．39．41．42．43

第４表　土坑一覧表

土坑番号	図番号	平面形	断面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	出土遺物	重複関係	時期
１号	88	円形	フラスコ状円筒形	130×127	76	土師器（杯，甕，甕）		引田式（佐平林式）
２号	88	円形	フラスコ状円筒形	134×135	63			
３号	89	円形	鍋底状	116×100	16	土師器（杯，甕）須恵器（甕片）	５号土坑を切る。	表杉ノ入式
４号	91	不整形	鍋底状	82×57	16			
５号	88	円形	フラスコ状円筒形	150×155	44		３号土坑に切られる	
６号	91	方形	箱形	247×205	13		７号土坑に切られる	
７号	91	方形	箱形（底面凹凸有）	77×80	17		６号土坑を切る。	
８号	91	円形	鍋底状	94×88	21		９号土坑を切る。	
９号	91	不整形	皿状	55×90	13		８号土坑に切られる	
10号	91	不整形	皿状（凹有）	110×94	20	土師器（杯）		
11号	88	円形	フラスコ状円筒形	132×133	42			
12号	89	円形	円筒形	173×163	44	土師器（杯，甕片）	４号建物跡に切られ７号住居跡を切る。	
13号	89	方形	箱形（底面に小ピット有）	310×395	76	土師器（杯，甕）須恵器片	14号土坑に切られる	
14号	91	楕円形	鍋底状	75×118	17		13号土坑を切る。	
15号	90	円形	鍋底状	215×190	60	瓦片，土師器（杯，甕）	11号住居跡を切る。	表杉ノ入式
16号	91	円形	円筒形	90×80	30	土師器（甕）	11号住居跡を切る。	引田式（佐平林式）
17号	92	円形	円筒形	113×115	43	土師器（杯）	１号住居跡を切る。	表杉ノ入式
18号	92	円形	鍋底状	187×188	36		８号住居跡を切る。	
19号	92	楕円形	円筒形	70×116	24		12号住居跡を切る。	
20号	92	円形	皿状	78×75	5			

土坑番号	図番号	平面形	断面形	大きさ(cm)	深さ(cm)	出土遺物	重複関係	時期
21号	29	円形	円筒形	73×65	18			
22号	92	方形	箱形	85×117	18			
23号	92	円形	円筒形	90×97	27			
24号	92	円形	円筒形	90×86	23			
25号	92	円形	円筒形	110×108	22			
26号	93	円形	鍋底状	106×110	19			
27号	93	円形	円筒形	72×64	36	土師器（杯）		表杉ノ入式
28号	欠番	——	——	——	—	——	——	——
29号	93	円形	円筒形	68×76	31	土師器（甕）		
30号	93	円形	鍋底状	147×137	25		9号住居跡を切る。	
31号	90	方形	箱形（凹有）	104×136	33	土師器（杯，甕）		
32号	93	長方形	箱形	290×124	17			
33号	93	円形	鍋底状	174×183	29			
34号	93	不整形	皿状	132×100	16			
35号	90	長方形	箱形	193×64	20			
36号	90	楕円形	鍋底状	305×210	68	土師器（杯，甕），須恵器（杯，甕）刀子	12・13号住居跡と1号建物跡に切られる	国分寺下層式
37号	88	円形	フラスコ状円筒形	119×125	48		13号住居跡に切られる。	
38号	94	円形	円筒形	67×59	24			
39号	90	不整形	鍋底状	146×196	40	土師器（杯，甕）		国分寺下層式
40号	94	円形	円筒形	52×58	30			
41号	94	不整形	鍋底状	74×87	32			
42号	94	不整形	鍋底状	73×82	20			
43号	94	不整形	鍋底状	65×75	30			
44号	94	楕円形	鍋底状	52×95	23			

が確認されている。今回検出した1号土坑からも引田式併行の土器が，堆積土内や底面付近から出土しており，それより新しい時期の遺物が混入していないことから，この種の土坑は引田式期に属するものと考えられる。また36・39号土坑以外には，ロクロ未使用とロクロ使用の土器が共伴した遺構は検出されなかったが，この2基から出土した遺物は，今後この時期を検討するうえにおいて貴重な資料となろう。

主な土坑について説明を加えてきたが，時期・性格等が判明した土坑はわずかで大部分は不明な点が多い。

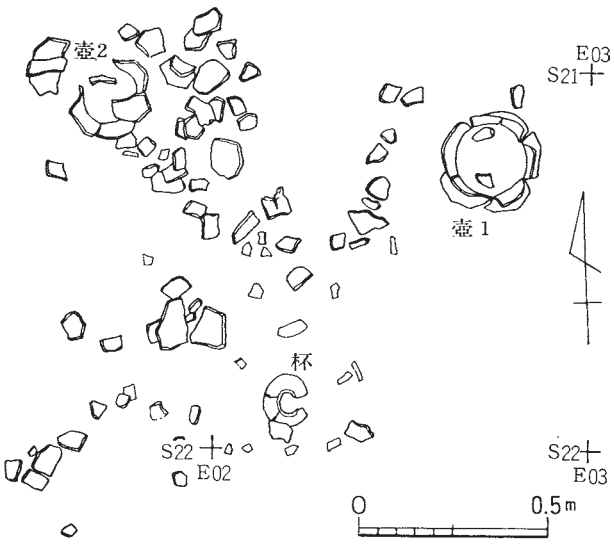
第4節　その他の遺構・遺物

ここでは調査区内に検出された住居跡・建物跡・土坑以外の遺構で，E－6グリッド北西よりに検出された土師器の密集地点と，調査区北側と南側から検出された溝3条，それに表土から出土した遺物を報告する。

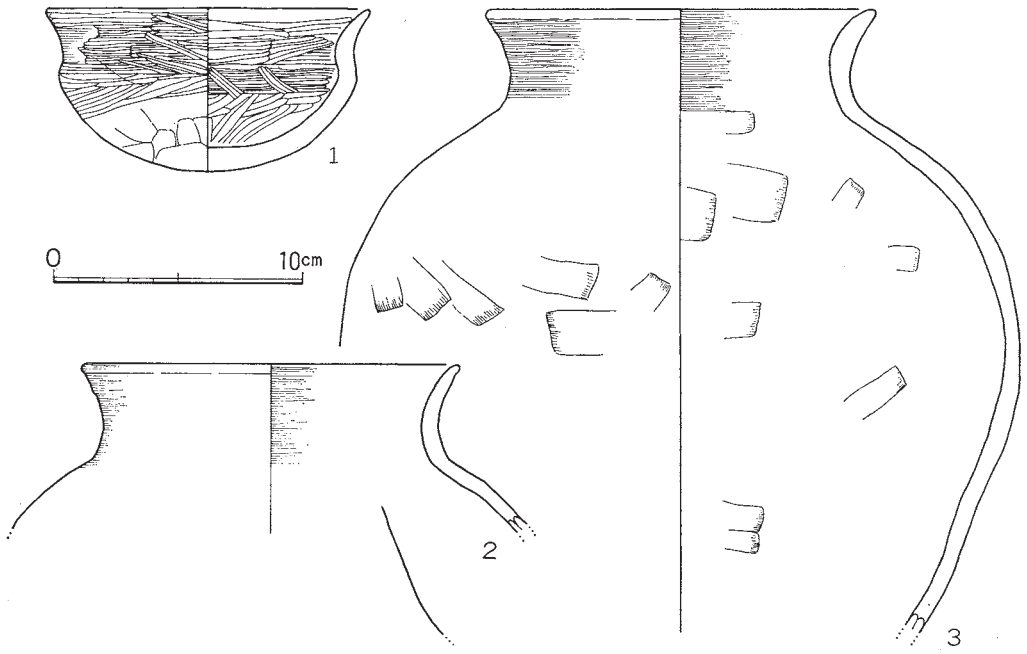
Ｅ－６グリッド土師器密集地点（第95・96図，図版39）

Ｅ－６グリッドの北西部に径２ｍ程度の範囲のなかに土師器が集中して検出された部分である。検出面は黒色土上面であるが，土器の隙間に入り込んだ土色はわずかに褐色がかって観察された。遺物は，杯・甕・壺類の破片であるがこのなかで図化できた杯１点と壺２点について記しておく。

杯（第96図１）　倒立の状態で検出された土師器杯で，底部と口縁の一部をわずかに欠損している。丸底で，口径13cm，器高6.7cmを測る。頸部では僅かな稜線がみられ，一旦括れたのち外反して口縁となる。調整は全面ヘラミガキであるが，ミガキの疎らな底部外面にはヘラケズリ，口縁部外面にはヨコナデがみられる。内面器壁は剝落が多く，底部外面には黒斑がある。



第95図　Ｅ－６グリッド土師器出土状況



第96図　Ｅ－６グリッド出土土師器

壺１（第96図２）　口縁部から頸部にかかる破片で，現存高6.7cm，口径15cmを測る。肩は撫で肩で，頸部で一旦直立した後外反して口縁となる。調整は内外面とも口縁部がヨコナデ，頸部下端以下はナデとなっている。

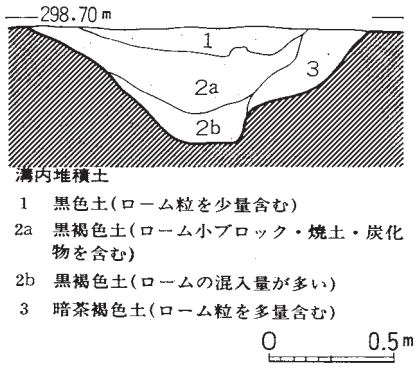
壺２（第96図３）　底部と胴部の約半分を欠損している。現存高25cm，口径15.5cmで，胴部の最大径は器高の半ばより上位にあり27.2cmを測る。頸部から口縁部への立ち上がりは壺１と同じくやや直立気味に伸びた後外反する。調整は口縁部がヨコナデ，胴部はナデが基本となっている。

これらの遺物の特徴は，３・７号住居跡等で出土した遺物と形態的に類似しており，その時期を古墳時代の後期とすることができる。当遺構は，土器の隙間に入り込んだ土質と遺構検出面が直接当時の生活面とは考えられないことから，多分に浅い掘り込みがあったものと推測される。

溝　　跡

１号溝跡　ＳＤ01（第97図）

発掘区の北側で確認された溝跡で，南へやや緩い弧を描きながら東西方向に走る。東側では黒色土の堆積も厚く遺存度も良好で，黒色土を掘り込んでつくられていることが確認されるが，西側では耕作がローム層まで達し遺存状況は悪く西端（Ｅ－１グリッド）に至ってついには立ち消えてしまう。溝の西端では幅1.6m，深さ0.8m程度を測る断面「Ｖ」字形を呈している。堆積土はローム粒を含んだ黒色土の自然堆積層であるが，下層ではロームの混入が多く，粘性も強くなる。遺物は堆積土内から土師器・須恵器の破片が検出されているが，最も新しい時期の遺物は糸切り無調整の土師器杯である。



第97図　１号溝

一方遺構の重複関係は１・８号住居跡，２号溝跡よりも新しく，とりわけ糸切り無調整の土師器杯を伴出した１号住居跡を切っている。従って出土遺物から時期を決定することは困難である。一応当溝跡の時期をロクロ土師器使用時期後半以後としておく。

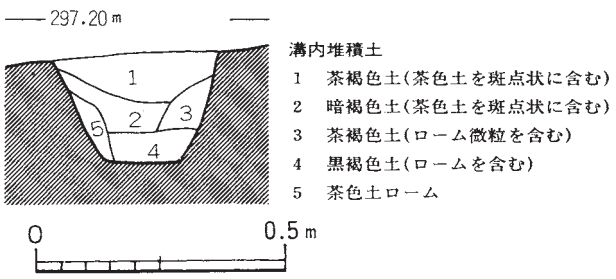
２号溝跡　ＳＤ02

発掘区の北側に検出された溝跡で，幅約40cm，深さ20cm前後で全長12mを測る。１号住居跡の東側で１号溝跡と交叉し，東北東から西南西へ直線的にのびている。堆積土は軟質な黒色土で埋土からみる限り水の流れた形跡はない。出土遺物も皆無で時期は不明である。

３号溝跡　ＳＤ03（第98図）

発掘区南端にて検出された溝跡で，幅50～90cm，深さ45～60cmを測るが西側部分がより深い。検出面は黒色土（Ｌ－Ⅱ）面で８・９号掘立柱建物跡を切っており，西北西から東南東方向への

びる溝底面はほぼ平坦で，断面形は逆台形である。堆積土はＬ－Ⅱよりも若干明るい色調の黒褐色土で自然堆積層である。検出された遺物のなかに糸切り無調整の土師器杯があるため，１号溝同様ロクロ土師器の使用時期後半以降に機能した溝と考えられる。



第98図　３号溝

表土出土の遺物（第99・100図，図版37）

ここでは発掘調査区内で，表土（Ｌ－Ⅰ）から検出された遺物をとりあつかう。調査区全体を一辺10ｍ単位のグリッドに分割し，北西隅から東西列をアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ……），南北列をアラビア数字（１・２・３……）としてグリッド名を付したが，遺物の収納についてはこの区割に従った。

遺物は，主に土師器であるがなかに須恵器も幾分混入する。これらの遺物の時期は，調査区内で検出された遺構の時期にそれぞれ該当するものである。多くは小破片であるが，なかに図示可能な遺物も数点あり，特にこれらの遺物について以下記述しておく。

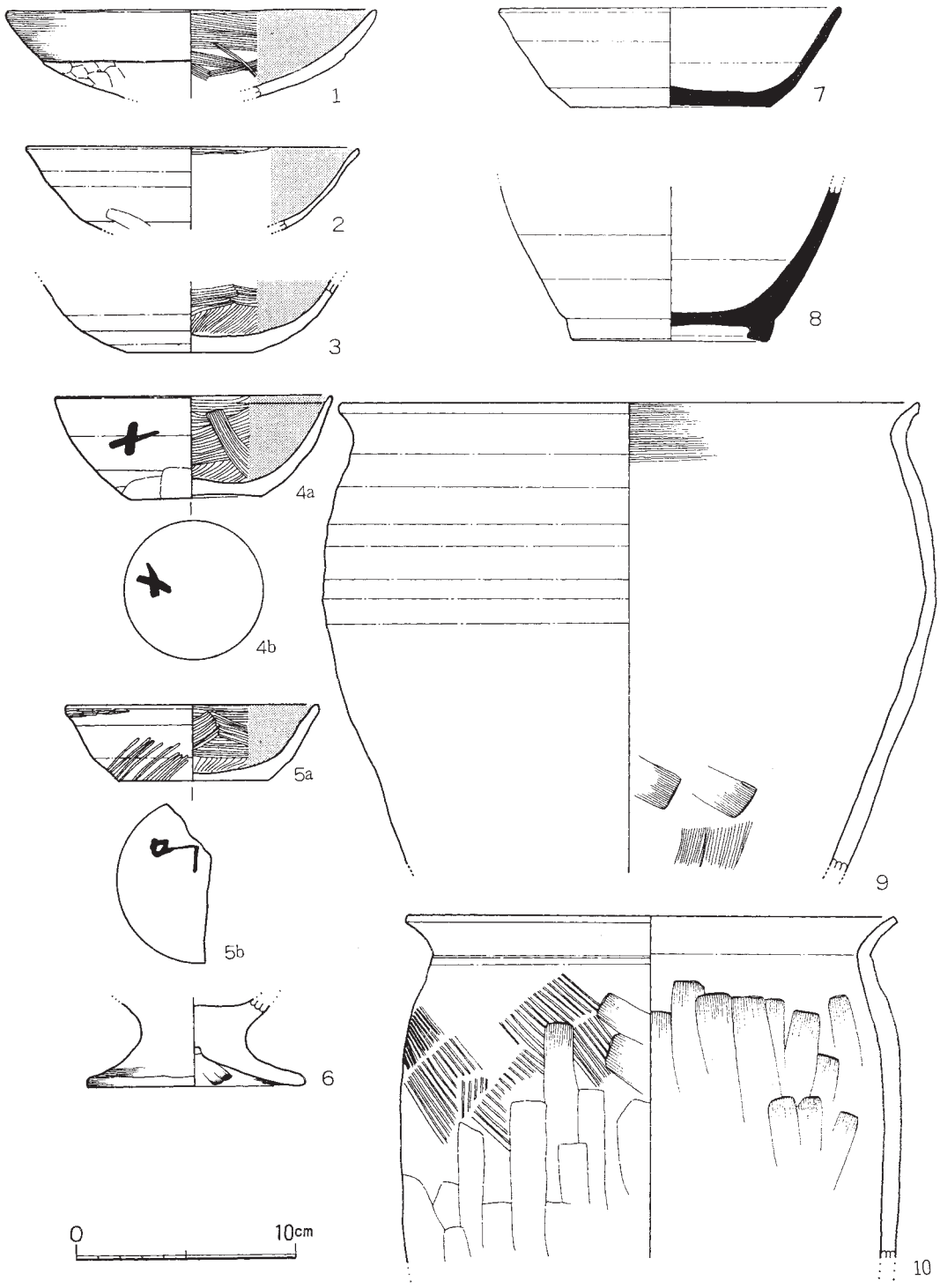
〔土　師　器〕

杯１（第99図１）　Ｅ－３・Ｅ－４グリッドから出土した破片が接合したもので，体部から口縁部にかけて全体の1/2が残存している。丸底を呈すると思われ，口縁部がやや開きぎみに外傾している。外面の口縁部と体部の境には段が形成されているが，内面にはみられない。調整は，口縁部にヨコナデ，体部に不定方向のヘラケズリを行い，内面には横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。口径16.8㎝を測る。

杯２（第99図２）　Ｃ－５グリッドから出土したもので，体部から口縁部にかけての破片である。ロクロ成形によるもので，外面の体部下半に，わずかに手持ちヘラケズリ調整が観察される。内面には横方向のヘラミガキ調整を施した後，黒色処理している。推定口径15㎝を測る。

杯３（第99図３）　Ｃ－３グリッドから出土したもので，底部から体部下半にかけての破片である。ロクロ成形によるものであるが，体部下半から底部にかけて雑な回転ヘラケズリ調整が行われているため，底部切り離し技法は不明である。内面は底部に放射状，体部に横方向のヘラミガキを施した後，黒色処理している。底径5.7㎝を測る。

杯４（第99図４）　Ａ－２グリッドより出土し，口縁部のみ3/4程欠損している。ロクロ成形によるもので，底部からやや丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。底部に回転ヘラケズリ，体部下半に手持ちヘラケズリ調整を行い，底部の切り離し技法は不明である。内面は，底部が放射状，



第99図　表土出土土師器・須恵器

体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキを施しているが，最終的に底部から体部にかけてもう一度一定方向のヘラミガキを加えている。内面は黒色処理を行っている。法量は，推定口径12.5cm，器高4.6cm，底径5.9cmを測る。体部と底部の２箇所に，判読不可能な墨書がみられる。

杯５（第99図５）　Ｆ－３グリッドから検出された遺物で，口縁部から底部にかかる約1/3を残存している。器高3.5cm，口径，底径は推定で各々11.5cm，6.8cmを測る。ロクロ成形で，平底の底部から体部は直線的に開く。調整は，外面では底部全面から体部半ばにかけ回転ヘラケズリ，後体部下端から口縁部にかけヘラミガキが加わる。内面は全面ヘラミガキされ，黒色処理されている。ミガキの方向は，外面では斜位あるいは横位であり，内面では底部が放射状，体部が斜位・横位となる。底部外面には「叶」の墨書がある。ロクロ成形で外面までミガキが入る杯は数少なく，佐平林Ⅶ区で検出されたやはり「叶」の墨書をもつ杯と形態的にも共通性をもっている。

高台杯（第99図６）　Ｇ－５グリッドから検出された遺物で，杯部と裾部の一部を欠損している。現存高４cm，裾部径10cm，脚部径4.7cmを測る。脚部は太く短く，裾部は大きく開く，全体的に器高が低くずんぐりしている。器画調整は，両面とも裾部がヨコナデ，脚部はナデとなっている。わずかに残った杯部の内面ではヘラミガキが施されている。色調は橙味明茶色で，胎土は精選され密である。

甕１（第99図９）　Ｇ－４グリッド内で検出されたロクロ使用の甕であり，口縁部から体部にかけ1/3残存する。推定口径26.2cm，体部最大径27.6cm，現存高21.3cmを測る。器肉は下方にいくにしたがい厚さを増す。体部は内彎しながら立ち上がり，短く外反する口縁部に移行する。体部下半はかなり器肌が荒れているが，器画調整は内外面ともにロクロ使用の痕跡が顕著に観察され，また体部下半の外面にはヘラケズリ，内面にはヘラナデが施されているようである。胎土は若干砂粒を含むが焼きは良好である。二次焼成を受けている。

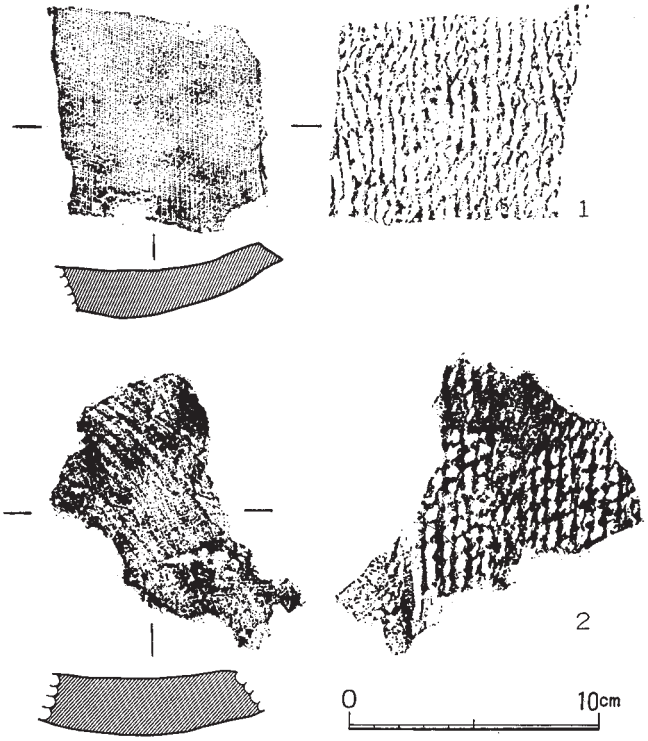
甕２（第99図10）　Ｅ－３グリッド内で検出された。口縁部から体部にかけて残存する約1/4を復元実測した。体部は直線的に立ち上がり，やや内彎気味の頸部を経て外反する口縁部に至る。

口縁端部は面取りされている。器画調整は，体部外面は縦方向のヘラケズリを加えているが，上半には成形時のタタキの痕が明瞭に観察される。頸部から口縁部は両面とも，ロクロ使用の痕跡が顕著である。体部内面には縦方向のナデがみられる。法量は推定口径22.2cm，体部最大径22.5cm，現存高15.3cmを測る。

〔須恵器・その他〕

杯（第99図７）　Ｅ－３グリッドから検出された遺物で，体部下半から口縁部にかけ2/3が欠損している。底径９cm，器高4.5cm，推定口径15.5cmを測る。平底で，体部は直線的に開く。口径に比べ底径の比は大きい。調整は，底部全面と体部下端にかけ回転ヘラケズリが加わる。ロクロ回転方向は左である。

長頸壺（第99図８）　Ｂ－２グリッド内で検出された遺物で，体部下半から底部にかけて1/4程残存する。底部には高さ１cm，幅１cmの高台が付されており，内外面ともロクロによるナデが明瞭に観察される。胎土は砂粒を多く含んでいるが焼きは良く，色調は暗灰色を呈している。正立の状態で焼成されたのか，底部内面には降灰がみられる。底径９cm，現存高７cmを測る。



第100図　表土出土瓦

瓦（第100図１・２）　平瓦の破片で計２点を数える。１点は表採で，他の１点はＧ－４グリッドから検出された。いずれも凹面は平織りの布目痕，凸面は１段撚りＬを使用した縄叩きである。色調は橙味黄褐色であるが瓦１は黄味が強い。

第３章　考　　察

佐平林遺跡Ⅷ区の位置は・昭和52年度調査したⅠ～Ⅳ区の北西部にあたる。この部分は東西両側が矢武川から入り込む小浸蝕谷によって，あたかも矢武川に突き出た舌状台地の感を呈している。今回の調査地点はこの台地上の北西部四半分を占める。前回の調査は台地の南半分の調査であり，残りの北半分の調査によって古代の集落構造や土地利用状況等の全貌が把握できるところであったが，昭和53年度個人の水田造成によって北東部四半分が破壊され，今後全貌を把握することが不可能となってしまった。本章ではできるだけ前回調査地区（Ⅰ～Ⅳ区）の調査成果を踏まえ，当Ⅷ区の調査成果と問題点について触れたい。

第１節　遺物について

調査区内で検出された遺物は，土師器・須恵器が主体を占め，加えて少量の鉄製品・石製品等も検出されているが，ここでは特に土器群について若干の考察を加えることとする。土器群の各名称は便宜的に古墳時代後期のものをⅠ群土器，奈良・平安時代で非ロクロ成形のものをⅡ群土器，ロクロ成形によるものをⅢ群土器と呼称した。

古墳時代後期の遺物

Ⅰ群土器

土師器杯・鉢・甕・壺・椀，須恵器楊・蓋によって構成される。須恵器は図化したもののいずれも細片で，各１点のみの検出であったことから分類は行わない。以下土師器を各器形別に分類するにあたって，ここでは昭和52年度の母畑の報告書Ⅱ（以下母畑Ⅱとする）との煩雑さを避けるため，主に形態の特徴によって分類した方法の延長で一応分類し，新たに加わった特徴をもつ類について追加記載しておく。

杯　底部から口縁部まで遺存しているものはすべて基本的に丸底である。調整技法は全面ヘラミガキであるが，ミガキの疎らな部分では口縁部内外面がヨコナデ，体部下半から底部の外面はヘラケズリ痕が施されているのが一般的であり共通性をもっている。分類した杯の他に３号住居跡から出土した杯１・４・６があげられる。これらは形態的に　１）口縁部が短く外傾する。２）頸部内外面に稜線をもつ。３）やや浅型となる。という点で特徴をもつ。

なお母畑Ⅱで分類した，平底風丸底で頸部の括れが大きいH類は今回の調査で２点検出された。

形態的特徴が頸部の括れによって体部の空間がより閉鎖的になることから，小型の広口壺としてとらえたほうがより適切であると考えられたため，壺の項でとりあげることとする。

鉢　２点のみの検出でいずれも形態的にはＡ類に属す。しかし，今回精選された胎土によって成形され，調整技法にミガキが施されるものが加わり精製と粗製との別があることが判明した。

甕　甕は完形品が少ないため観察が部分的にならざるをえないが，分類表に該当するもの以外に４類検出されている。

中型で胴部に丸味をもつタイプ。21－２

胴部の中央部に最大幅を有し，算盤珠を天地にやや引き延した形状を呈すタイプ。７－７

胴部が膨らまず，肩部にやや張りをもつタイプ。７－６

肩部にやや張りをもつことは同じであるが，底部径・頸部径とも大きいタイプ。21－５・６

調整技法はナデが基調で部位によってヨコナデや不定方向のナデ，あるいはヘラナデが施される。また個体によってはヘラミガキが疎らに加わるものもある。

壺　前述したように母畑Ⅱで杯Ｈ類としたものに該当する２点と，やはり小型であるが該当しない２点，計４点が検出されている。以下該当しない２点について述べておく。

底部欠損のため前回の分類から外れるが，胴部が算盤珠状を呈し口縁が外傾するもの。７－２

ＡⅠ類に近いものであるが，ミニチュアといってもよい大きさのものである。３－１

一般に小型壺はヘラミガキされるのが通例であったが上述の二つのタイプはナデ調整を基本としている。今回は大型・中型品で明瞭に壺といえるものが見当たらず，壺に近い形であっても甕として分類した。

甑　大型のもの２個体と比較的小振りなもの２個体，計４個体検出された。うち小振りなもの１点を除く他の３点は無底式の甑であるが，孔は焼成前７－２，21と焼成後７－１にあけられたもの二者がある。残り１点は新しく加わった要素で多孔式のものである。なお７号住居跡から検出された大型無底式甑は基本的に甕形であるが長胴形を呈しており後出する長胴甕のタイプに極めて類似することを付記しておく。

以上５種が母畑Ⅱにおいて報告された器種すべてであるが，この他に新たに加わった器種２種類がある。

椀　３号住居跡から３点検出されている。平底で一般的な杯類に較べ厚手でやや大振りである。調整技法もミガキが入らずナデ調整が基調となっている。この器種は前後の型式においても管見に入らず，特異な器形といえる。

高杯　３号住居跡と表土から計２点検出されたが，いずれも杯部が欠損し全容がつかめない。脚部は棒状の短脚でナデ調整によって仕上げられている。胎土は砂粒の混入も少なく非常によく精選されており，色調は赤褐色を呈している。

第5表　第Ⅰ群土器分類表

杯

A類　丸底で頸部内多面に稜線を有する。

Ⅰ　口縁部は直線的に外傾する。SK1-2

Ⅱ　口縁部は外反し体部上半の肩が張る。7-1

Ⅲ　口縁部が短く直立した後に外反する。3-5

B類　丸底でA類に比べ稜線が頸部下端に移行する。

Ⅰ　口縁部が外反する。7-3，21-1・2・3

Ⅱ　口縁部がやや直立気味に立ち上がる。

C類　丸底で頸部外面に明瞭な稜線がみられない。

Ⅰ　内面の頸部に強い稜線を有する。

Ⅱ　内外面の頸部に僅かに稜線を有する。11-1・2，21-4，SK1-1

D類　丸底で頸部にくびれをもたず口縁部がわずかに開く。

Ⅰ　口縁部は短く開き頸部外面に稜をもたない。7-2

Ⅱ　口縁部の開きがⅠに比べ小さい。21-6

E類　丸底で頸部にくびれ無く，口縁部の開きが大きい。

Ⅰ　内面に稜線を有し口縁部は緩やかに外反。18-1

Ⅱ　体部上半より口縁部まで，やや斜め直線的に外傾し立ち上がる。3-2・3

F類　丸底で口縁部は短く内傾する。

G類　丸底で体部はわずかに丸味をもって外傾しながら立ち上がりそのまま口縁部に至る。

H類　————

Ⅰ類　平底の小型杯である。

注　□の数字は，住居跡番号を表わし，整数は本文中の説明番号を記した。SK□は土坑番号である。

鉢

A類　小型平底で頸部のくびれは明瞭である。口縁部は外反する。7-1・2

B類　大型平底で頸部のくびれは小さく，口縁部は短く外反する。

甕

A類　小型平底で球形状の胴部を有する。7-1・4，21-1

Ⅰ　口縁部立ち上がりが直立気味である。7-2・3・5

Ⅱ　口縁部は短くやや外傾する。

Ⅲ　口縁部はⅡに比べて長い立ち上がりを有する。

B類　平底で大型甕の中では胴部がやや球形に近い。3-3・4　21-4

C類　平底で口縁部がやや直立気味に立ち上がり，胴部の張りが下半にまでみられる。7-6・8　11-1

D類　口縁部は直立し，上部でやや外反する。肩部は特に観察されない。7-9

E類　B・C類に比べナデ肩である。21-8

F類　口縁部はやや短く外反し，D類同様肩部はみられず胴部最大径を下半部に有する。

壺

A類　丸底である。

Ⅰ　口縁部立ち上がりがやや外傾する。3-11・12　7-1・2

Ⅱ　口縁部立ち上がりが直立気味。

Ⅲ　頸部のくびれが顕著でやや胴長を呈する。

B類　平底である。

Ⅰ　口縁部立ち上がりが直立する。

Ⅱ　口縁部立ち上がりが外反し肩部はいかり型。

C類　頸部のくびれが「く」字状を呈する。

D類　平底で口縁部の立ち上がりが直立後，外反する。胴部は球形に近い。

Ⅰ群土器は今回新たに検出されたものを加え土師器は計７種，須恵器は２種の構成になった。上記の分類は多少分類基準に統一性が欠け全体的な把握と部分的な把握を同時に行っている点で分類を煩雑にしている感がある。とりあえず母畑Ⅱとの共通項を出すために分類基準を踏襲したが，今後再度整理し分類にあたらなければならないと考えている。

それにしてもこのⅠ群土器は前後する型式に較べ，器種あるいは一器種内でのバラエティーが非常に豊富である。人間の行動の所産である遺物の群は常に新旧の要素を内包していることは否めない事実であり，この土器群も例外ではない。前出的な要素あるいは後出的な要素の内在は各器種内の変化の幅にある程度比例しているといってもよく，この点からいえば型式的な変遷をたどるうえで良好な土器群といえる。新旧要素の抽出は第１編西原遺跡の論考に詳細に述べられているので改めて論ずる必要性もないが，ただここで佐平林遺跡Ⅷ区において新しく加わった要素をあげておく。それは，１）土器組成に土師器高杯と須恵器蓋・椀が加わったことと，２）杯ＢⅠ類に該当するものが特定の遺構から数点検出されたことの２点である。

１）須恵器２点はいずれも細片で確実な時期の検討には不適当であるため検討は差し控えておくが，ただ蓋は天井部と口縁部との境に稜をもつことから，陶邑編年でいうⅠ～Ⅲ期の前半まででおさえられることだけ記しておく。高杯は棒状短脚で杯部が欠損しているが，脚部の形状からいえば住社式期以降の土器群に加わるもので後出的な要素ということができる。

２）土師器杯ＢⅠ類は稜線が頸部下端に移行し，それにつれて口縁部から頸部の長さが長くなる特徴をもつ。これは住社式期以降にみられる有段丸底杯に発展する要素を多分にもっていると考えられる。特に21号住居跡では図化した５点のうち３点までこの特徴を有しており，後述する遺構とあわせ新しい要素を多分に盛り込んでいる。さらにこの中の杯１は後出する型式に最も近い存在と考えられる。

上記した２点は土師器についてみれば，いずれもⅠ群土器のなかで後出的な特徴といえる。母畑Ⅱでは佐平林Ⅰ群土器を中心に古墳時代後半の土器群を「南小泉式→上高野資料→佐平林Ⅰ群土器一住社式」という編年上の流れを指摘した。今回Ⅷ区において検出されたⅠ群土器はⅠ～Ⅳ区のⅠ群土器と同時期のものとしてとらえられる。今回の土器群もまた前述の編年的流れを妥当ならしめる検出状況を示している。やはり前型式の南小泉式とは隔たりをもつ土器群であることは，個々の器種の相異点を上高野の資料と佐平林式との間に西原遺跡Ⅰ群土器と板倉前Ｂ遺跡の古墳時代後期に位置づけられる土器群の介在によって型式学的に円滑な流れをみいだすことから明らかであり，すでに西原遺跡の論考に詳しい。さて後続する住社式との関係であるが，前述した土器の様相のなかに後出的な特徴をもつ，換言すれば住社式に近い特徴をもつといえる土器類が多少ではあるが検出されてきつつある。特に杯ＢⅠ類にみられる特徴は，佐平林Ⅰ群土器に後続すると考えられる太田遺跡（郡山市）４号住居跡や舞台遺跡（天栄村）12号住居跡で検出され

た前出的な特徴をもつ杯類と近似するため，時間的には継続したものとしてとらえることができよう。ただこの太田遺跡の場合内面が黒色処理される杯類が大半を占めているのが一つの特徴であるが，佐平林の場合Ⅰ～Ⅳ区の７号住居跡から１点と，Ⅷ区の21号住居跡から１点，計２点のみであり，黒色処理技法の点からいえば内黒土師器の混入率が少ない舞台遺跡１号住居跡により近いものとすることができる。しかしながら黒色処理の技法が一時期に普遍化するのか，ある程度幅をもつ時間のなかでしだいに普遍化するのか今のところ不明であり，いまだ二者を安易に連続させてよいものか確証に欠ける面が多い。

とにかく，前回佐平林Ⅰ群土器をもって佐平林式とし，編年上の位置を南小泉式と住社式との間に介在させより住社式に近い型式とした提示は，同佐平林遺跡Ⅷ区と西原・板倉前Ｂ遺跡の調査によって，より妥当性をおびるものとなったといえそうである。さてこの佐平林式に対する実年代の考定であるが今回の調査においても直接根拠となる資料が得られなかったため，母畑Ⅱの報告に従い６世紀中頃として実年代を考えておきたい。ただ傍証としてあげた上高野２号住居跡出土の杯形土器の検討の際に論拠の一つとなった須恵器の杯に対しては，その後の指摘や検討の結果たしかに受部や口唇端部の形状は陶邑編年におけるⅡ期の第１・第２段階と共通する面はもっているが，Ⅱ期の蓋杯が大振りになる傾向にはあてはまらず，むしろⅠ期の特徴に近いと考えられ，６世紀の初頭と位置づけた上高野の年代は多少遡りうる可能性もでてきたということを，筆者の一人として多少場違いな面もあるがこの場をかりて記しておく。従って母畑Ⅱの段階で考定した年代も遡らせて考えなければならぬところであるが，昭和53年度の板倉前Ｂの調査によって得られた資料の介在により，佐平林式の実年代はそう大きく変動するものとは考えられず，現時点では多少上限が遡りうる可能性を含むものであることを指摘するにとどめておく。

奈良・平安時代の遺物

Ⅱ 群 土 器

歴史時代に入る土器群であるが，冒頭に述べたようになかでも土師器にロクロ技術がまだ導入されないものである。前もって断っておくが，５号住居跡・36号土坑出土土器群は非ロクロとロクロ土師器が共伴しているため，伴出した須恵器は土器群構成要素ではあるが分類の対象外としておく。分類の対象とした遺物は，土師器杯・椀・鉢・甕である。

杯１類：底部が丸底のもの

ａ　体部外面に段あるいは稜を有し，口縁部にヨコナデが施されるもの。

ｂ　体部外面に段あるいは稜を形成せず，底部から体部上半にヘラケズリ，口縁部にヨコナデが施されるもの。

ｃ　体部外面に段あるいは稜を形成せず，ヘラケズリ後全面ヘラミガキが施されるもの。

杯２類：底部が平底のもの

ａ　体部外面に段あるいは稜を有し，口縁部にヨコナデが施されるもの。

ｂ　体部外面に段あるいは稜を形成せず，底部から体部外面上半までヘラケズリで口縁部にヨコナデが施されるもの。

椀　類：平底を呈し，体部外面には底部から体部下端にヘラケズリ，それ以上口縁部に至るまではヘラミガキが施され，内面にもヘラミガキが加えられる。

鉢１類：体部が直線的に開くもので，体部外面に縦方向のヘラナデ，口縁部にヨコナデが施され，底部に木葉痕を有する。

鉢２類：体部は内彎気味に立ち上がり，短く外反する口縁をもつもの。

甕１類：長胴形のもの。

甕２類：小形の丸味を帯びた体部を呈するもの

以上分類したが，これらⅡ群土器を伴出した遺構に５号住居跡，36号・39号土坑があげられる。遺構ごとの出土状況をみると以下のようになる。

５号住居跡　杯１ｃ・２ａ・２ｂ類，椀，鉢１類，甕２類

36 号 土 坑　杯１ａ・１ｂ・１ｃ・２ｂ類，鉢２類，甕１・２類

39 号 土 坑　杯１ｂ・２ｂ類

各３遺構から出土した土器は，杯・椀・鉢・甕の器形で構成される。他にも共伴する器種があると思われるが，当地区から出土した資料で補うことはできなかった。これら検出された土器を数量的にみれば，圧倒的多数を占めるものは土師器杯であり，他の器種は少ない。以下Ⅱ群土器を相対的に質・量とも豊富な土師器杯を中心にみていくことにする。

土師器杯は前述の分類からすれば，底部の形態から２種，それに体部外面の形態と調整技法を加味すると５種に分類される。各類が出土した遺構は上記したが，さらに細かい特徴を加えて記せば次のようになる。

１ａ類は36号土坑から出土したもので，それぞれ所謂有段丸底杯のように明瞭に段を有するものはなく，段を有したとしても体部外面下端にその痕跡だけを残すものである。

１ｂ類は36号・39土坑から出土しているが，39号土坑のものはやや厚手で小型である。

１ｃ類は５号住居跡・36号土坑から出土し双方とも小型であるが，５号住居跡出土のものは内外面とも黒色処理が施されている。

２ａ類は５号住居跡から出土したもので，有段丸底杯の底部のみを平底化した例である。

２ｂ類は５号住居跡，36号・39号土坑から出土している。平底のものを２類とし，ａ・ｂの相異点を体部外面に観察される段・稜の有無によったが，平底の底部形態のなかでも底部周縁のラインが明瞭なものと不明瞭なものとがみられ，５号住居跡・39号土坑には明瞭なものが含まれている。

このように５種に分類した杯は，2a 類を欠くものの他のすべての類が36号土坑から出土した杯によってまかなわれる。36号土坑の遺物は，出土状況から一時期に投棄された一括遺物であり，佐平林Ⅷ区Ⅱ群土器の土師器杯は，ほぼ36号土坑出土の杯類に集約されるといってもよいであろう。この一括遺物も分類の基準となった形態的側面を細々と観察すれば，型式学的に連続する先後関係に置換することが可能であるが，まず大枠で編年上の位置を確認しておきたい。

第１に成形技法の点からいえば，すべてロクロ使用の痕跡はみられずロクロ土師器以前の段階に入る。

第２に形態の特徴であるが，体部外面と底部との２点に顕著にみられる。前者では体部半ばに稜もしくは段の有るものと無いものとの２種があり，後者では丸底・平底・平底ではあるが底部周縁のラインが不明瞭で丸味をもって体部に移行する形態をもつもの，の３種がある。体部の稜は，５号住居跡から出土した有段で平底の杯を除けば，基本的には丸底といわれるものに稜・段があり，平底化するに従い稜・段が消滅していく傾向にあるといえる。この２点の形態的特徴から，有段丸底杯と非ロクロで平底杯の双方の特徴を含む中間の位置を与えることができよう。

第３に器面の調整からであるが，内面の調整はすべてヘラミガキされるのに対し，外面ではヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラミガキと３種ある。この調整技法は，有段丸底杯から平底杯に至るまで多用され，技法によって先後関係を論ずるまでには未だ至ってはいないが，ただ傾向として稜・段を有する杯はその稜もしくは段によってつくられる境界線より以下はヘラケズリ，以上はヨコナデが施され，稜・段を有さない杯は底部から口縁部付近にかけヘラケズリ（ヘラケズリされるものは口縁部にヨコナデの痕跡を残すものがある）かヘラミガキされる。特にヘラミガキされるものには口径が10㎝前後の小型杯に多いという，ある程度形態的側面と器面調整技法が相関性をもっていることが指摘できる。

さて，東北南半における土師器は，氏家の提唱した７型式分類（氏家1957）によって編年され，その後いくつかの細部の検討がなされたにせよ土師器編年の底流として定着した感がある。この型式編年を基礎として福島県内の土師器の編年を試みたものに高倉・木本試案（1976）があげられる。この型式編年に対照すれば，Ⅱ群土器の杯は氏家の国分寺下層式，高倉の第Ⅴ群土器にあてはめて考えることが可能である。

しかしながら，近年当課が行ってきた阿武隈川東岸，特に矢武川沿岸付近を中心とする調査において，上記の編年体系のなかで前後関係は基本的に変らないまでも，各型式間の中間的様相を示すものや，中間的様相の摘出のなかで前後の新旧両要素を包摂する可能性のあるものが認識されつつあり，一部は消極的ではあるが報告文のなかで掲載した。そのひとつに，ここでとりあげたⅡ群土器に関連の深いものとして谷地前Ｃ遺跡（玉川・山内：1978）２号住居跡出土の土器群がある。この土器群は氏家や桑原（1972）のいう栗囲式や国分寺下層式の中間形態をとる土器群

であるが，その後の調査においても数例（達中久保遺跡２・５・６・51・53・59号住居跡，佐平林遺跡Ⅴ区１号住居跡，同Ⅳ区３号住居跡等）検出され，ひとつの土器群として成り立ち得る可能性を強めている。

栗囲式終末から国分寺下層式をへて表杉ノ入式に至る土師器の変遷は，福島県中通り南半の場合，１）谷地前Ｃ遺跡２号住居跡を契機とした有段（稜）丸底杯から，２）当遺跡36号土坑にみる無段．稜の丸底杯をへて，３）５号住居跡出土の非ロクロ平底杯に至ると考えられる。４）そしてこの後にロクロ土師器杯を位置づけることによって有段丸底杯からロクロ技術が導入された平底杯に至る形態的変化の過程をより円滑にとらえることができる。土師器杯を内部変化における変遷過程で考えるならば１）～４）の流れは，理論的に妥当であると考えられるが，遺構内での出土状況は必ずしも各特徴をもつ杯類が単独で検出されることはなく，むしろ非ロクロ杯１）～３）は前後２種の形態的特徴をもつ杯類が共伴する例が多い。この出土の様相は，他面から１）～３）の変遷の妥当性を裏付けている。さて，４）にあげたロクロ土師器杯であるが，下原遺跡７号ピットや佐平林遺跡（Ⅰ～Ⅳ区）36号土坑の報告で非ロクロ土師器杯と伴出する事例が知られるようになった。今回の調査でも，当遺跡５号住居跡，36号土坑，谷地前Ｃ遺跡25・27号住居跡とその類例を増加してきている。佐平林Ⅷ区において５号住居跡と36号土坑の時間的な前後関係は土器組成からみるに，36号土坑の土器群がわずかに５号住居跡よりも先行することがいえる。これらの事例から考えればロクロ技術の導入は３）～４）への直線的流れとはとらえられず，複雑な様相を示していることがわかる。ロクロ技術は，すでに既存の技術として須恵器製作にその威力を発揮しているわけであるからして土師器の内部的熟成をまたなくてもロクロ技術は導入でき得たはずである。自明のことであるが技術のみが一人歩きするはずもなく，やはりロクロ技術を駆使した須恵器製作集団と伝統的な土師器製作集団との交流を前提としなければこの問題は解決しえないと考えられる。従って８世期後半と考えられている国分寺下層式に並行する当遺跡のⅡ群土器の時期にロクロ土師器が混入してきた事実は，当時における歴史的背景を考えるうえで非常に興味深いことである。翻って，非ロクロ土師器とロクロ土師器の混在する出土状況や，この期のロクロ土師器の形態，製作技術等の検討は，当時の製作集団の動態に少なからずも迫りうるひとつの方法ではないかと考えられる。

Ⅲ 群 土 器

Ⅱ群土器と同じく歴史時代に入る土器群である。遺構内での出土状況が一部共伴している事実も認められたが，土師器にロクロ技術が導入されたものを総称してⅢ群土器とした。なお須恵器については器種・数量とも少ないため分類は行わないこととする。

ロクロ使用の土器杯に関しては切り離し技法からⅠ～Ⅳ類に，再調整技法からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４類に分けることができる。

第６表　第Ⅲ群杯形土器分類表

〔底部切り離し技法からの分類〕

Ⅰ類　ロクロからの切り離しが，回転糸切りによるもの

Ⅱ類　ロクロからの切り離しが，回転ヘラ切りによるもの

Ⅲ類　ロクロからの切り離しが，静止糸切りによるもの

Ⅳ類　ロクロからの切り離しが，その後の調整によって不明なもの

〔再調整技法からの分類〕

Ａ類　再調整をうけないもの

Ｂ類　体下半もしくは下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施すもの

Ｃ類　体下端から底部周縁に回転ヘラケズリを施すもの

Ｄ類　体下半もしくは下端から底部全面に回転ヘラケズリを施すもの

これらの上記した要素で分類すると，ＩＡ類，ＩＢ類，ＩＣ類，ⅡＢ類，ⅢＣ類，ⅣＢ類，ⅣＤ類の７種類が認められる。

ＩＡ類　１号住居跡カマド内より出土したもので，同じカマド内より粗製の甕および，回転糸切り痕を有す高台付皿，カマド脇ピットよりロクロ使用の甕が出土している。

ＩＢ類　５号住居跡より出土したもので，ロクロ未使用の杯，ⅣＤ類の杯が共伴し，堆積土内ではあるが，多賀城で分類された１ｂ類（回転ヘラ切り後，回転ヘラケズリ調整）の須恵器杯が出土している。甕については，ロクロ使用の小形のものと，ロクロ未使用と思われる長胴甕の下半部が出土している。

ＩＣ類　９号住居跡堆積土中出土のものが多いが，９号住居跡は残存状態が悪く堆積土もうすかったことから，堆積土中のものは床面上層のものとすることができる。上層ではⅢＣ類，床面からⅣＤ類が出土し，甕においては，カマド内よりロクロ未使用の粗製のものが出土している。

ⅡＢ類　13号･15号･16号住居跡から出土し，15号は堆積土内，13号･16号は床面出土である。13号ではⅣＢ類，ⅣＤ類杯が共伴し，16号住居跡では底部切り離し技法がナデ調整によって不明な高台付皿が共伴している。

ⅢＣ類　９号住居跡，９号掘立柱建物跡より出土している。９号住居跡においてはＩＣ類の通りであるが，９号掘立柱建物跡では，ロクロ未使用の杯破片がみられる。

ⅣＢ類　２号・10号・13号・14号住居跡より出土している。２号・13号・14号ではロクロ使用の甕が出土している。

ⅣＤ類　５号・６号・９号・13号住居跡より出土している。５号・９号・13号住居跡はそれぞれＩＢ類，ＩＣ類，ⅡＢ類の通りで，６号住居跡ではロクロ使用の小形の甕が出土している。

以上のことをまとめてみると，1Ｂ類：ⅣＤ類，ＩＣ類：ⅢＣ類：ⅣＤ類，ⅡＢ類：ⅣＢ類：

ⅣＤ類の３組の共伴例と，ⅣＢ類だけで構成されるものと，ⅣＤ類だけで構成されるものがある。

ＩＢ類：ⅣＤ類の組み合わせは，５号住居跡においてみられるもので，５号住居跡はロクロ未使用の土師器を主体とする組成を持っている。ロクロ未使用の杯は，東北南半の編年（氏家和典：1969）にあえて従えば国分寺下層式に比定されるもので，平底を呈する杯が出土していることから，国分寺下層式でも新しい時期のものとすることができる。ＩＢ類の杯（第18図１）もロクロを使用しているとはいえ，調整技法・器形などの面からは，ロクロ未使用の土器からの流れを汲み取ることができ，回転糸切りで切り離されてはいるが，ロクロ土師器でも初源的なものであると考えることができる。また２号住居跡出土のⅣＢ類（第７図１）についても同様のことを考えることができる。ⅣＤ類（第18図６）については，その器形から須恵器的な要素をもつものと考えられ，埋土より出土した１ｂ類杯と底部調整が類似することから，これもロクロ土師器でも初源的な様相を呈しているということができる。

ＩＣ類：ⅢＣ類：ⅣＤ類の組み合わせは９号住居跡においてみられるものであるが，堆積土中より出土したものも多く，共伴例とはしたが明確さに欠ける点がある。しかし，ＩＣ類とⅣＤ類の共伴は西原遺跡８号住居跡でみられることから，佐平林遺跡においても共伴していた可能性がある。ＩＣ類，ⅢＣ類は糸切り痕を有すものであるが，体下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整を行うものである。多賀城で分類された須恵器にみる底部切り離し技法の分類によれば回転ヘラ切りが先行し，やや遅れて回転糸切りが導入されることが知られている。しかし土師器においては，ＩＢ類の杯にみるように，ロクロ土師器の初源的なものにも回転糸切りが認められることから，回転糸切り技法自体は，早くから存在していたものと思われる。９号住居跡においては，ＩＣ類，ⅢＣ類，ⅣＤ類が共伴したと考えられるが，９号住居跡より古いと考えられる６号住居跡および，鏡石町仏具壇遺跡のように，ⅣＤ類のみが出土する住居跡が存在することを考えると，一般的にはⅣＤ類がＩＣ類，ⅢＣ類よりはやや先行するものと考えることが可能である。

ⅡＢ類：ⅣＢ類：ⅣＤ類の組み合わせは，13号住居跡において認められるものである。ⅣＢ類ⅥＤ類の組み合わせは，赤根久保遺跡１号住居跡でも確認されており，その他に回転糸切り無調整の杯が出土している。またⅡＢ類とⅣＤ類の組み合わせも赤根久保遺跡12号土坑において認められている。この組み合わせのものは，赤根久保遺跡のものも含めて，すべて底径が口径の1/2以下のもので，ロクロからの切り離し部分の面積を小さくし，その分再調整の省略化を考えたものとすることが可能である。

ⅣＢ類だけで構成される住居跡は10号・14号住居跡で，10号住居跡では破片においてもすべて手持ちヘラケズリ調整のものばかりであるが，14号住居跡では破片に回転ヘラケズリ調整を施すものが少量みられる。

ⅣＤ類だけで構成される住居跡は６号住居跡で，遺物の量は少ないが，破片においても同様である。

次に内面のヘラミガキ調整を観察してみると，各組み合わせごとに，それぞれ特徴を有していることが知られる。

ＩＢ類：ⅣＤ類では，先にも述べたようにロクロ未使用の土器からの影響がみられるもので，底部を一定方向，体部を横方向に行うものである。また底部を一定方向に行った場合，体部と底部の境にむらができるためか，最終的にその境部分に，他のミガキよりやや密にヘラミガキを行っている。

ＩＣ類：ⅢＣ類：ⅣＤ類では，ＩＣ類・ⅢＣ類が底部を一定方向，体部を横方向に行うもので，ⅣＤ類では，底部を放射状に行った後，さらに軽く一定方向にも行い，体部を横方向に行っている。

ⅡＢ類：ⅣＢ顆：ⅣＤ類では，底部を放射状に行う点では一致している。ただ体部ではやや異．なり，ⅣＢ類・ⅣＤ類では，ミガキの前にヘラ状の工具でロクロを利用した調整を行っており，その分ミガキもやや雑になっている。ⅣＢ類では他と同様に横方向のミガキを行っている。

ⅣＢ類だけでは，底部を放射状，体部を横方向に行うもので，底部の放射状ミガキが体部にまで延びるものがある。

ⅣＤ類だけでは，底部を放射状に行った後，さらに一定方向に行い，体部を横方向に行っている。

以上のように，底部に一定方向のミガキを入念に行うものから，放射状のミガキと一定方向のミガキを組み合わせるもの，放射状のミガキだけを行うものの３タイプがみられ，内面調整においても，外面調整と同じように省略化の方向に向かっていることがわかる。

ロクロ土師器については，小笠原好彦（1976），桑原滋郎（1969）らによって，再調整の有無およびその技法からの分類が行われており，時代が下がるにしたがって，手数を省略する傾向があるとし，最終的には回転糸切り無調整のものに変化するとされている。このことは福島県内の最近の調査結果からみても妥当性の高いものとすることができる。ここではそのことを軸として，出土したロクロ土師器について，各分類ごとの前後関係について触れてみたいと思う。

佐平林Ⅷ区で分類された７種類は上述のことからみると，ＩＢ類（第18図１）・ⅣＢ類の一部（第７図１）→ⅣＤ類→ＩＣ類・ⅢＣ類→ⅣＤ類の一部（第46図５）・ⅡＢ類・ⅣＢ類→ＩＡ類の流れを考えることが可能である。

ＩＢ類・ⅣＢ類の一部は，上記したようにロクロ未使用期のものにロクロが導入されたものと考えることができ，ロクロ土師器でもやや異質な感じをうけるものである。年代については遅くとも８世紀後半の年代が与えられるものであろう。

ⅣＤ類については，時間的にかなりの幅を有していることがわかるが，底径が大きく，内面に一定方向の密なヘラミガキを行う仏具壇遺跡タイプのものは，谷地前Ｃ遺跡13号住居跡では多賀城で分類された６ｂ類の須恵器杯が共伴し，さらに，当遺跡36号土坑でも１ｂ類の須恵器杯が共伴していることから，８世紀後半を中心とした時期と考えることができる。これに対して底形が小さく内面に放射状のヘラミガキを行う赤根久保遺跡，当遺跡13号住居跡（第46図５）タイプのものは，ⅣＤ類の中でも調整が省略されたものと考えることができ，仏具壇遺跡タイプより時期の下るものと考えることができる。赤根久保遺跡の考察にしたがえば，９世紀中葉～後半にかけてのものとすることが可能である。

９号住居跡のＩＣ類：ⅢＣ類：ⅣＤ類の組み合わせは，内面のヘラミガキから，仏具壇遺跡タイプのⅣＤ類に後続するものと思われる。また９号住居跡より出土した，底部に回転ヘラケズリを行う須恵器高台杯（第34図11）は，宮城県伊治城跡，宮城県大衡村亀岡遺跡においてみられ，伊治城跡では８世紀後半から９世紀中頃，亀岡遺跡では８世紀後半から９世紀後半にかけてのものとしており，当住居跡の高台杯も，その年代の幅で考えることができる。

ⅡＢ類・ⅣＢ類については，内面底部にロクロによる凹凸を残すものが多く，放射状のヘラミガキをみても体部まで引き延ばすものがみられ，その分体部と底部の境付近の調整を省略化していることが窺える。年代については，福島市腰浜廃寺２区貯蔵穴などにおいて，回転糸切り無調整のものとの共伴が知られ，金重谷地９号住居跡などでは，いわゆる須恵系土器と思われる杯と共伴していることなどから，９世紀後半から10世紀代までを考えることができる。

ＩＡ類は，須恵系土器的なものであるが，胎土が粗く焼成も土師器に近い感じのものである。この土器を土師器として捉えた場合，土師器のうちで最も手順の省略されたものということになり，出土土師器の中で，最も新しいものとすることができる。

甕については，完形品になるものはなく，明確な分類はやや困難であり，ここでは若干の傾向だけにとどめておきたいと思う。甕には大きく分けて，長胴のものと小形のものがあり，最大径を口縁部に有するものが多く，体部にあるものでも，口径と大きな差を持たないようである。

長胴のものは14号・15号住居跡でみられるが，調整を観察すると，15号住居跡を切っている14号住居跡出土のものは，内外面とも体部上半から口縁部までにロクロ痕がみられ，体部下半の外面にヘラケズリ，内面にナデ調整がみられるものである。これに対して15号住居跡のものは，口縁部付近にのみロクロ痕がみられ，体部外面はヘラケズリ，内面にナデ調整がみられる。個体数が少なく断言はでき難いが，時期が下るにつれ，長胴の甕においてもロクロ使用の範囲が広がり，調整が省略されていく傾向にあるのではないかと考えられる。

小形甕は，当遺跡においてロクロ土師器でも初期の段階にあたる５号・６号住居跡から，ロクロ使用度の高いものが出土している。このことから，小形甕については早い時期からロクロ使用

のものが出現したと思われ，長胴甕のロクロ使用初期にみられるような，ロクロ使用のものとロクロ未使用のものが混在するようなことは少ないように思われる。

最後に土師器杯に認められた墨書，線刻文字について触れてみたい。墨書で判読可能なものには，「年」，「山」，「足」，「月」，「午」，「手」，「本」，「取」，「平」，「月」，があり，その他に記号と思われるバツ印がある。線刻文字では「年」と，明確ではないが「半」と読めるものがある。すべてのものについてその意味を明らかにすることはできないが，文字自体の意味からすれば，「年」は穀物，みのり，などの意味があり，「月」は重ねておおう，「半」はわかつの意味を有している。「年」については，墨書された土器が日常供膳具である杯で，住居跡から出土したものであることを考えると，穀物の豊穣を祈願したというよりは，穀物に対する感謝の意を表わしたものと思われ，「半」についてもその意味から，穀物に関係したもののようにうけとられる。「月」はその意味から，土器を重ねたとも，なにかを覆ったとも取れるが，土器に対して逆さに書かれているところから，あるものを覆ったとみることも可能ではある。

墨書自体の意味からはやや離れるが，「年」は５号住居跡におけるロクロ未使用のものにみられるもので，それに後続すると思われる９号住居跡では「年」に変わって「足」が多くなっている。なお「山」は両住居跡から出土している。

また９号住居跡の「山」の墨書を有する土師器杯には，底部を十字に走るヘラミガキが観察されるが，ミガキ様の×印はヘラ記号によくみられるものと同一の意味をもったものと理解される。

以上，Ⅰ群～Ⅲ群土器を総括してみてきたが，古墳時代から平安時代にかけて使用された土師器の流れのなかで，東北南半における杯形土器に関しては二つの画期があると考えられる。一つは住社式から顕著になる須恵器蓋杯を模した所謂模倣杯が大数を占めてくることであり，もう一つは土師器の製作工程のなかにロクロ技術が導入されることである。この二つの画期をみていくうえで，須恵器の存在をみのがすことはできない。土師器の変遷とりわけ杯形土器の変遷には視点のひとつとして求心的存在としての位置を与えることが可能であり，以下この視点でみていく限り，第１の画期の前段は弥生式土器の特徴が淘汰されていく段階（第１段階），第１と第２の画期の間は須恵器の形態的な側面の影響を受ける段階（第２段階），第２の画期以降は土師器が須恵器化していく段階（第３段階）としてとらえられ，最終的には須恵器に同化していく過程といえるであろう。

今回佐平林遺跡で検出されたⅠ～Ⅲ群の杯形土器はそれぞれ第１段階の終末に，Ⅱ群土器は第２段階の終末に，Ⅲ群土器は第３段階に位置づけられ，Ⅲ群のなかでも最も古い杯類は上述した第２の画期にあてはめて考えることができよう。

第2節　遺構について

調査区において検出された遺構は，竪穴住居跡22，掘立柱建物跡12，土坑43，溝３，特殊遺構（Ｅ－６グリッド土師器密集地点）１を数える。遺構には，その性格から機能していた時間の幅をもつ遺構が数多く含まれているため，一律に時期を区切ることは困難であるが，主に伴出した遺物を根拠とし，それに重複関係に示される層位的裏付けによって下記の時期のいずれかに位置づけた。

Ⅰａ期：母畑報告Ⅱで提唱した佐平林式（従来の引田式後半部）の遺物を伴出する時期で，古墳時代後期（６世紀中頃）に位置づけられる。

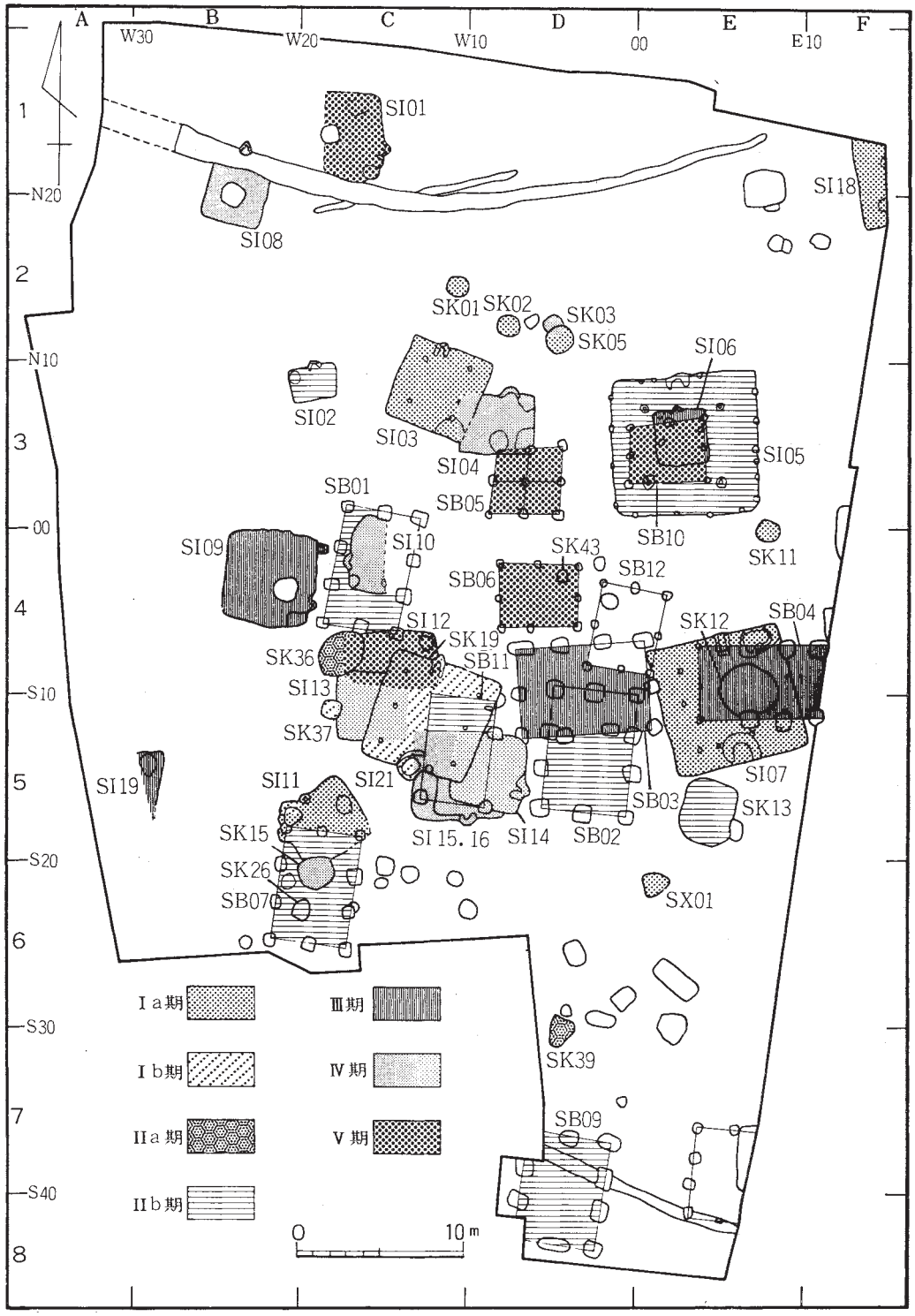
Ⅰｂ期：大きくは佐平林式期としてとらえられるが，Ⅰａ期の遺物よりはやや後出する特徴をもつ遺物が混入している。

Ⅱａ期：非ロクロ土師器にロクロ土師器が混入してくる時期（８世紀後葉）で，従来の表杉ノ入式の初源期にあたる。

Ⅱｂ期：Ⅱａと同様の時期であるが，土師器杯の特徴にⅡａよりも明確に平底になる杯が伴出してくる。

第7表　遺構時期分類表

時　期	竪穴住居跡〔ＳＩ〕	掘立柱建物跡〔ＳＢ〕	土　　坑〔ＳＫ〕	特殊遺構〔ＳＸ〕	溝〔ＳＤ〕
Ⅰa	3.7.11.18		1.2.5.11	1	
Ⅰb	21		16.37		
Ⅱa			36.39		
Ⅱb	2.5	1.2.7.9.11	12.13		
Ⅲ	6.9.19	3.4			
Ⅳ	4.8.10.13.14.15.16		3.15		
Ⅴ	1.12	5.6.10			
不明	17.20.22	8.12	4.6.7.8.9.10.14.17.18 19.20.21.22.23.24.25.26.27 29.30.31.32.33.34.35.38.40 41.42.43.44		1.2.3



第101図　佐平林遺跡（Ⅷ区）遺構時期区分図

Ⅲ　期：ロクロ技術による土師器生産が軌道にのる時期で，土師器杯の底部の調整に回転ヘラケズリが施されるタイプで構成される。県内でいう仏具壇期に相当する。

Ⅳ　期：土師器杯の調整に手持ちヘラケズリ技法が入る時期（９世紀後半～10世紀）にあたる。

Ⅴ　期：ロクロ土師器でも糸切り無調整の土師器杯が伴出する時期（10世紀後半以降）である。

以上，７期に時期を細分し，これらの遺構の構造・分布・性格等にふれ若干の検討を加えたい。

竪穴住居跡

住居跡は新しい時期の遺構や，後世の耕作等によって著しく原形をとどめないものがあり，検出総数22軒のうち全体の規模・構造等が把握できるのは15軒前後である。

住居跡の形態は一般に方形を基本としているが，各辺の長さの相異によって多少形態が崩れるもの，胴張りのもの（９号住居跡），長方形のもの（４・８・12号住居跡），といった変化が見られる。この相異は，時期別住居跡群のなかで散発的にしかみうけられなく，普遍的な傾向を指摘するまでには至っていない。

住居跡の規模は，７ｍを超える大型のもの（５・７・21号住居跡），５ｍ前後から７ｍ弱でおさまる中型のもの（３・９住居跡），５ｍ未満の小型のもの（２・４・６・８・10・11～18号住居跡），と相対的に大中小と三つに類型される。しかし竪穴住居跡として一般的な大きさは，前類型の小型のもののなかに包括され，所謂小型といわれる住居跡は３ｍ未満であるⅡ期に属する２号住居跡１棟だけであった。一般的な住居跡は各期ともにみられ普遍的であるが，大型の住居跡はⅠとⅡ期だけである。

方位は，一応表中において記載したが，カマドを持つ辺とその対辺のそれぞれの中点を結ぶ軸線が磁北から何度偏しているかで表わした。従って方位の差はカマドの位置によって変わり，単に住居跡プランの一辺を基準とした計測値では表現できず，住居内の空間利用や地形・社会的背景と合せて検討されるべき性格のものであろう。

床面は，土を入れ整地した貼り床と地山をそのまま床面とした直床とに分けられるが，これは佐平林Ⅷ区の場合３・５号住居跡と数時期に亘って床面がある場合とを除き，住居掘形がロームまで達している場合には直床とし，達しない場合は主にロームと黒色土とを入れて貼り床としている。従って，１？・７・10・11号住居跡は，斜面に構築されたために斜面下方内にあたる床面の一部はローム面まで掘り込めず，その部分にのみ貼り床をしている。この範疇からはずれる３・５号住居跡は特殊なもので，３号住居跡は中央部を残し周縁部を一旦掘り込み貼り床としており，５号住居跡は砂質土で床面全体，特にカマド周辺に多く貼り床している。

柱穴の検出された住居跡は，３・５・７・18・21号住居跡の５軒で，柱穴の総数は４本と６本

第８表　竪穴住居跡一覧表

時期	住居番号	住居跡規模 cm	主軸方位	柱穴数	カマドの位置・形態	貯蔵穴 長径×短径×深さ，形態	その他付属施設
Ⅰa	03	510×504	N-24°30′-E	4	北壁　A′	90×50×50　長方形	
	07	800×800	N-13°30′-W	6(2)	北壁　A	140×80×70　長方形	周堤部
	11	450×450	N-34°30′-W	—	北西壁　A′	105×40.5×30　楕円形	
	18	？×440	N-7°30′-W（西壁）	4？			
Ⅰb	21	670×670	N-21°30′-E	6(1)	北壁　A	90×80×55	周堤部
Ⅱb	02	190×265	N-7°-W	—	北壁　B	75×53×17　楕円形	
	05	820×850	N-4°30′-W	4(18)	北壁　B		
Ⅲ	06	300×300	N-2°-W	—	北壁　B		
	09	535×555	S-81°30′-E	—	東壁　B	100×60×20　長方形	
	19		N-11°30′-W（東壁）	—		137×100×30	
Ⅳ	04	334×420	N-0°30′-W	—	北壁　B	115×70×30　楕円形	ベット状遺構
	08	350×？	N-15°30′-E	—	北壁　B		
	10	500×450	S-79°30′-E	—	西壁　B	径65　不成円 124×70×25　楕円形	
	13	380×420	S-85°30′-E	—	東壁　B′		
	14	400×380	S-81°30′-E	—	東壁　B		
	15	400×400	S-7°-W	—	南壁　B		
	16	420×420	N-8°30′-E（西壁）	—			
Ⅴ	01	？×525	S-86°30′-E	—	東壁　B	100×70×30　楕円形	
	12	480×370	N-88°30′-E	—	東，西壁B	径80×18　不成円	
不明	17		N-4°-E（西壁）	—			
	20		N-2°30′-W（西壁）	—			
	22		N-4°-E（西壁）	—			

・住居跡主軸方位は，カマドを有する辺の中点と対辺の中点とを結ぶ軸線が磁北から何度偏しているかを表した。

・カマドの形態は，A；燃焼部と煙道が住居跡内にとりこまれているもの，A′；カマド全体が住居跡内にとりこまれている状態は同様であるがAよりも燃焼部と煙道が未分化なもの，B；煙道をもたず燃焼部の一部が住居跡壁を抉って構築されているもの，B′；構造はBと同じであるが袖に石材を使用しているもの，である。

のがある。総じて大型の住居跡は６本，中型から小型の住居跡は４本と相異があるが，これも基本的な主柱穴は４本といえる。なんとなれば柱穴が６本検出されているのは，Ⅰ期に属する７・21号住居跡２軒であるが，中央の相対する２本の柱は他の柱穴に較べ浅く補助的な支柱として考えられるからである。柱痕と掘形が明確に区分できたのはⅡ期に属する５号住居跡だけである。他の住居跡の柱穴は細く明瞭に分離できない。恐らく柱穴の規模と柱の太さの相異はあまりなかったものと考えられる。ただ３号住居跡に関しては北東部の柱穴の掘形自体は径30㎝を測るが，床面上でとらえた直径は18㎝と小さく，これが本来の柱の太さに近いものであったと考えられる。柱穴がみられるのはⅡ期までで，それ以降は住居跡の小型化にともなってか，みられなくなる。

前記の５号住居跡では，主柱穴の他に周壁沿いに壁柱穴が一辺４本を基本として検出された。当住居跡は主柱穴に２回の建て替えがみられ，検出された壁柱穴は最後の時期に伴うものである。カマド部の精査の際，カマド下から同じく壁柱穴と考えられる掘形が検出されており，最終期以前にも壁柱穴が伴っていた可能性が強い。この主柱穴と壁柱穴の組合せは，前年達中久保遺跡（石川町）で検出された１号建物跡の構造と共通する面をもっている。建物跡の構造は，１間×１間に３間×４間の側柱がとりつくやや東西に長い四面廂の建物跡である。片や５号住居跡は竪穴住居跡であるが，上屋の構造は主柱穴とそれをとりまく壁柱穴の配置から見た場合，ほぼ同様の構造になると考えられる。時期的な問題は残るにせよ，壁柱穴を伴う竪穴住居跡の構造が達中久保遺跡１号建物跡に連なる系譜をもつといえるのではなかろうか。なお近辺の遺跡の中に，壁柱穴を持つ住居跡の例として板倉前遺跡に１軒，谷地前Ｃ遺跡に２軒検出されていることを付け加えておく。

カマドの形態は，煙道をもつものともたないものとに分類できる。煙道をもつものはⅠ期に属する７・21号であるが，通常の住居外に煙道が延びる構造ではなく，カマド全体を住居内に取り込みその中で焚口部，燃焼部，煙道部と機能を分化し，煙り出しの機能をもった先端部のみ壁面を抉り込み住居外に出している。構築方法も，袖部や焚口部天井部等に石材を用い堅固である。３号住居跡のカマドも貧弱ではあるが，これに類似する。Ⅱ期以降のカマドは上部の削平があって明らかではないが，燃焼部と煙道が分化せず，燃焼部自体住居跡壁を切って屋外にやや張り出してつくられていることから，燃焼部の奥壁の立ち上がりが煙り出しに近い機能を果たしたと考えられる。袖にしても貧弱で，なかには石材を使用したカマド（13号住居跡）もみうけられるが，大半はわずかにとりついているか全く無いもののいずれかである。カマド設置箇所は，Ⅰ・Ⅱ期は北辺に，Ⅲ期以降は東辺が数多く，まれに南・西辺にもみられる。

周溝は，３・５・７・９号住居跡に検出された。４軒と数少なく，大型・中型の住居跡だけで，小型の住居跡，特にⅡ期以降の住居跡にはみられない傾向がある。周溝は壁面との関係も考慮し

なければならぬが，最もよく遺存していた７号住居跡東壁では，周溝から壁面が垂直に立ち上がり，壁面の凹凸もないことから何か遍平なもので押さえられていたと思われ，周溝にあたる部分に板材等が打ち込まれ，壁面の補強をなしていた可能性も考えられる。

貯蔵穴はⅠ期からⅤ期までいずれの時期にもみられるが，形態的に時期差がうかがえる。大きく異なるのはⅠ期とⅡ期以降で，Ⅰ期のものは設置箇所はカマド脇かカマド対面にあり，平面形が隅丸方形と円形に近いものとがあるが，いずれも壁を垂直に近く深く掘り込んでいる。Ⅱ期以降のものは，設置箇所がカマド付近と限定され，規模も小さく掘り込みも浅くなる傾向にある。これらの貯蔵穴からの遺物の出土状況は，前者が転落あるいは流れ込みの状態を示しているのに対し，後者は当然その場に置かれるべくしてあった状況を示している。これは貯蔵穴の機能を考えるうえで重要な要素になると考えられる。

その他の付属施設には，Ⅰ期にしかみられない周堤部がある。これは先に佐平林Ⅰ～Ⅳ区の調査でも検出されていた遺構で，床面からわずかに盛り上がり，床面同様の固さをもっている小規模な土手状の高まりである。検出箇所・状況は貯蔵穴の周囲を巡るものや，カマドの設置される対辺に馬蹄状に巡るもの，あるいは直線状に延びるものと幾つかの種類があるが，共通していえる機能は床面を区切ることである。床面を区切るということは取りも直さず生活空間を仕切ることであり，その結果周堤部内が貯蔵穴となったり，床面と同レベルでありながら踏まれた形跡がない状況を呈しているともいえる。特に壁面に取り付く周堤部のみに後者の例が多く，佐平林Ⅰ～Ⅳ区でも２例検出され今回で３例目となる。いずれも周堤部内の土質の状況は同一で踏みしまりがないが，出土する遺物の種類や状況が各々異なる。Ⅰ～Ⅳ区４号住居跡では周堤部およびその付近に土師杯片が数多く検出され，８号住居跡では少なからず撹乱されていたため判然としないが土玉が検出されている。今回Ⅷ区の７号住居跡では大小の河原石が底面に密着して検出され，なかに明らかに中央が凹んでいるものが混入していた。これらの状況は住居廃棄時もしくは廃棄直後の時期の様相であるため，果たして周堤部の機能を論じるうえで遺物の出土状況が有力な手がかりとなるか否か現在のところ釈然としない。また直線上に延びるものは現在のところ柱穴を結ぶ線と壁面との間にしか検出されず，この空間の間仕切り的役目を果したと考えられる。

以上，住居跡の全体的な側面と付属の施設について記したが，多少時期的な特徴についてふれてみたい。

Ⅰａ期の住居跡は４軒検出された。調査区自体佐平林Ⅰ～Ⅳ区から検出された時期を同じくする７軒の住居跡が立地する西斜面の延長にあたる。Ⅰ～Ⅳ区の住居跡配置は，１軒の大型住居跡の周囲に小型の住居跡が取り囲み，暗に一群を構成するかのような配置をしている。今回は軒数が少なく，また調査区の東側が個人の開田によって削土され全貌は明らかではないが，大型の住居跡（７号）を中心に小型の住居跡（３・11・18号）が配されていると見ることも可能である。

とすれば，大型住居跡を核とした群構成単位集団が考えられよう。

Ⅰｂ期は21号住居跡１軒である。Ⅰａ期のものに比較し大きな相異点は，貯蔵穴の形態が張り出しピットに変化するという点である。機能的には貯蔵穴の項で記したように遺物の出土状況からⅠａ期のものと同様のものとしてとらえられる。貯蔵穴を屋外に張り出させることは，屋内の床面積が広がることを意味している。加えて７号住居跡では，住居跡全体の面積が60㎡，柱穴に囲まれた面積が23㎡を測り，21号住居跡では各々44㎡，21㎡を測る。住居跡全体の面積の差に較べ柱穴で囲まれた部分の面積の差は２㎡と少なく，この差は住居跡の空間利用の有効性の差に置き換えてとらえられ，21号住居跡の合理性がうかがえる。

Ⅱ期はⅡｂ期にのみ住居跡（２・５号住居跡）を位置づけたが，Ⅱａ，Ⅱｂの時期差は僅少で，むしろ２号住居跡における前時期の床面の存在，５号住居跡の２回建て替えからみれば後述する如く，Ⅱｂ期の住居跡の前半期はⅡａ期と時間的に重なるものと考えられる。２号住居跡は東西2.7m×南北２mと小規模な住居跡である。小規模な住居跡については土間説あるいは妻屋説等あるが，いずれにしても現時点では論拠となるところがない。５号住居跡は一辺８～8.5mを測る大規模なものである。今回Ⅱｂ期の住居跡は，調査区において大小両極の住居跡２軒のみの検出でこの２軒の住居跡で当時期の全体像を充足するとは毛頭考えてはいない。ところで近辺の遺跡でⅡ期と同時期と考えられる住居跡は，佐平林Ⅰ～Ⅳ区で１軒（12号住居跡），谷地前Ｃ遺跡で２軒（25・27号住居跡）が検出されているが，この範囲でみる限り規模・内部施設等住居跡間相互の差が大きいといわざるをえない。

Ⅲ期　この時期から調査区内の住居跡の規模は小型になり定形化する兆しがみられる。検出されたのは３軒であるが，そのうち全体を把握できるのは２軒である。特に９号住居跡では通常の方形ではなく多少南北に胴張り状になる。また柱穴と周溝との相関関係がいえる住居跡が多いが，当住居跡は柱穴が検出されず，周溝のみの検出であった。

Ⅳ期　この時期の住居跡は７軒と各時期間で最も数が多い。しかしながら手持ちヘラケズリ調整を有する土師器杯を時期決定の基準としたため，多いところで３軒の住居跡が切り合う部分もみられⅣ期という時期が時間的に相当幅をもつことを示唆している。しかしながら13号と14号住居跡出土の甕が接合したことと，８号と16号の高台付皿の類似性による土器の共通性から，微視的にみて最大数４軒は越えなかったものと考えられる。規模の点では１辺が４m前後となり，柱穴，周溝とも検出されなくなる。Ⅲ期における定形化の兆しが顕在化してくる傾向にあり，分布は，標高98～298mの位置に集中している。この中で特異なのは，４号住居跡における台上の高まりとしてとらえたベッド状遺構である。この遺構はロクロ土師器使用時期全般にみても，類例の数少ない遺構と考えられる。一般的には弥生時代中期から古墳時代中期頃まで西日本を中心にみられ，踏みしまりが少ないことや出土遺物から，その機能を寝所，物置場として推定している

説もある。当４号住居跡のベッド状遺構は，踏みしまりが少ないことはいえるが出土遺物は皆無であり，今のところ機能を推定できる根拠が少ない。いずれにしても，カマド脇に検出されたロクロ土師器の住居跡にしては多少深めの貯蔵穴と内部から検出された良質の粘土とを合わせ，今後類例をまって検討しなければならない点である。

Ⅴ期に属するものは１号と12号住居跡があげられるが，12号住居跡は第２章で触れたように工房跡的性格が強いもので，本来住居跡としてとらえられるものは１号住居跡のみである。この住居跡は西半を削り取られ住居プランの全体を把握できないが，南北壁の状態から形状の乱れがみられ，また床面も軟弱であること等，方形を呈した通常の竪穴住居跡という概念からすればかなり推退した感を覚える。この時期の類例として近辺では，今年度調査した佐平林Ⅶ区に１軒，前年度調査分の同じく佐平林Ⅵ区に２軒検出されている。数少ない例であるがいずれも形態が不揃いで，造りも全般に粗雑になる傾向をもつといえる。12号住居跡は，土器の組成からみるに１号住居跡よりもわずかに遡りうる要素をもっている。住居跡というよりは，１）カマドを２つ備えていること，２）カマド内床面から鉄滓の出土量が多いこと，３）同じく鞴羽口が出土していること等の特徴から小鍛冶的な工房跡と考えられよう。

掘立柱建物跡

調査区内において建物跡は計12棟検出された。大半が中央部に集中してみられ，２棟が調査区南端に位置している。しかしながら調査区の南西部は未調査のままで，あるいはこの地点に数棟の建物跡が検出される可能性もある。

集落跡において，建物跡の同時存在を証明しうることは至難であり，結局は建物跡の配置・規模・棟方向・掘形等の共通性や，まれに検出される遺物とか他の時期の判明する遺構との重複関係等々によって時期を推定していかざるを得ない。ここでも他に有力な手がかりとなる根拠が薄いため，上記の方法によって遺構の時期を検討してみたい。

建物跡は，規模・形態によって２群に分類することができる。

Ⅰ群：２間×３間の規模をもつ建物跡である。この中で棟方向によって二つに細分できる。

Ⅰａ：南北棟……1･2･7･8(？)9･11号建物跡　　Ⅰｂ：東西棟……3･4(？)号建物跡

Ⅱ群：２間×２間の規模をもつ建物跡である。この中で柱列構造によって二つに細分できる。

Ⅱａ：総柱式……５号建物跡　　Ⅱｂ：側柱式……６・10・12号建物跡

以上大きく２群，細分して４群になる。

配置関係は，重複しているものを除き，そう近接した建物跡は少ないが，なかに３号・６号・11号建物跡は，近接した位置関係をもっている。その間隔は１ｍ強を測るが軒を考えた場合共存は無理と考えざるを得ない。

第9表　掘立柱建物跡一覧表

群別	建物番号	規模	柱列構造	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	桁行	梁行	棟方向	方位	柱穴掘方	柱痕径	備考
		間		m	m	m	m			cm	cm	
1a	1号	2×3	側柱	2.16～2.54	2.04～2.30	7.08 7.10	4.34 4.50	南北棟	N-13°-E	方形 70～90	25前後	SI10.12に切られ，SK36を切る。
	2号	2×3	側柱	2.40～2.56	2.64	7.60 7.60	5.28 5.28	南北棟	N- 7°-E	方形 80～110	20前後	SB03に切られる。
	7号	2×3	側柱	2.00～2.55	2.24～2.35	7.05 7.05	4.51 4.61	南北棟	N-9°30′-E	方形 70前後	16～25	SK20に切られ，SI11を切る。
	9号	2×3	側柱	2.10	2.60	—	—	南北棟	N-10°-E	方形 90～110	25	SD03に切られる
	11号	2×3	側柱	—	—	6.70 6.75	3.85 4.30	南北棟	N-10°-E	方形 70～90	20	SI14.15.16とSK27に切られ，SI21を切る。
1b	3号	3×2	側柱	2.36～2.84	2.40～2.88	7.60 7.88	5.16 7.88	東西棟	N-88°-E	方形 70～90	20～25	SI14に切られ，SI07とSB02を切る。
2a	5号	2×2	総柱	1.87～2.20	1.80～2.10	4.14 3.90	4.15 3.90	—	—	方形・円形 30～50	15～20	SI04を切る。西側に廂をもつ。
2b	6号	2×2	側柱	1.76～2.76	1.50～1.84	4.52 4.58	3.66 4.0	—	—	円形 30～50	15～20	
	10号	2×2	側柱	—	—	4.45 4 60	3.75 3.47	—	—	円形 35前後	13	SI05･06を切る。
	12号	2×2	側柱	—	—	5.0	3.9	南北棟	N-13°-E	長方形 35～50	15前後	SI07を切る。SB03と併存しない。
不明	4号	2＋2×2	側柱	2.00～2.20	2.10～2.30	—	4.40	東西棟	N-89°-E	方形・長方形 80～120	15～20	SI07とSK12を切る。
	8号	2(?)×3	側柱	1.63～1.92	1.90～1.95	5.3	—	南北棟	N- 7°-E	方形 50	12～14	SD03に切られる。

注　方位は，側柱列の柱痕を通る軸線を基準として，磁北からの偏度を記した。

建物跡の中で直接の重複関係をもつものは2/3，もたないもの1/3である。以下重複関係をもつ建物跡を群ごとにみていきたい。

第10表　掘立柱建物跡重複関係（不等号は新旧関係を表す。新＞旧）

Ⅰa群　1号建物跡＜10号住居跡
　　＞36号土坑
　　2号建物跡＜3号建物跡
　　7号建物跡＞11号住居跡
　　11号建物跡＜14～16号住居跡
　　＞21号住居跡

Ⅱa群　5号建物跡＞4号住居跡

Ⅰb群　3号建物跡＜14号住居跡
　　＞7号住居跡，2号建物跡

Ⅱb群　10号建物跡＞6号住居跡

所属群不確定建物跡
　　4号建物跡＞7号住居跡，12号土坑
　　12号建物跡＞7号住居跡

以上の関係からこれらの建物跡は古墳時代後期（第Ⅰ期の遺構群）よりは遡り得ないことがいえる。またある程度時期の接近した遺構の重複関係によって，上限と下限とが押さえられ，時間幅をもつことは当然であるが，極めて限定された時期に位置づけられる建物跡がⅠａ群に１棟（１号），Ⅰｂ群に１棟（３号），計２棟あることが判明した。遺構群の時期別でいうならば，１号建物跡はⅠａ期とⅣ期の間に，３号建物跡は１号建物跡とⅣ期の間に位置づけられる。Ⅱ群のａ・ｂについても上限が設定され，それぞれⅤ期以降，Ⅲ期以降としてとらえられる。

出土遺物はⅡ群建物跡の掘形からは皆無であったが，Ⅰ群の各建物跡の掘形からは少量検出されている。これらの遺物には建物ごとにロクロ土師器が混入している。しかしロクロ土師器でも特に杯類は，必ずといっていいほど回転ヘラケズリ調整技法を伴う。

掘形の規模や間尺の相異は，Ⅰ群とⅡ群とで明瞭に一線が引ける。Ⅰ群は一辺0.6～１ｍ強の方形もしくは長方形に掘り込み，間尺は細かい数値まで等しくならないが一応の縄張り程度は考えられる。Ⅱ群においては掘形も小規模で，間尺も乱れ，各側柱列を通る軸線によってつくられるプランも相当の歪みをみせている。

さて，建物跡の先後関係は，以上あげてきた諸点によってⅠａ→Ⅰｂ→Ⅱａ・Ⅱｂの流れが考えられる。各群時間的な経過に置き換えられたが，ⅠａとⅠｂとⅡａ・Ⅱｂとの時間幅は前者の方が短期間としてとらえられる。Ⅰａ，Ⅱａ・Ⅱｂについては直接に共存を論証する根拠に少なからず欠けるが，Ⅰｂ群については４号建物跡を加え，さらに，火災に遭遇し類焼していることと，柱痕に抜き取り痕がみられることから共存関係をもつ建物跡であることがいえる。これまで建物跡を便宜的にⅠ群・Ⅱ群としてきたが遺構時期別にすればⅠ群はⅡｂ～Ⅲ期に，Ⅱ群はⅤ期として考えられる。

土　　坑

土坑の形態分類や時期区分等は，第２章第３節において述べてきたので，ここではその機能面について若干触れたい。

土坑の機能としては墓，廃棄，採掘等が考えられ，堆積土の状況や内部施設，検出される遺物の出土状況等によってどの横能を果たしたか推定，位置づけされる。しかしながら土坑には時期や機能的側面を論じるうえで，いずれの要件をも兼ね備えない土坑が数多く検出されるのが常であり，当佐平林Ⅷ区においても同様といえる。検出総数の割には数少ないが以下にあげる数基の土坑については幾分性格づけが可能な土坑である。

Ⅰａ期　円形状もしくはフラスコ状の土坑である。４基検出されているが，規模等に多少の相異がみられる。佐平林Ⅵ区で６基，Ⅰ～Ⅳ区で18基検出され，今回のを合せると29基にのぼる。

土坑内埋土の堆積状況は，自然堆積，人為堆積いずれの土坑もある。またまれに土器が出土す

るものがあるが，その状況は埋納されたのではなく混入したと理解される。ところで北関東における，栃木日産遺跡では住居跡と近接した位置関係にある同タイプの土坑を貯蔵穴としている。また，同じく栃木県の上敷遺跡でも検出されており，ここからは炭化した「ヒエ」が出土したことからやはり貯蔵穴としている。当調査区の土坑の堆積土の状況は，かならずしも埋める必要がなかったことを表わし，墓坑という線では考えられないことから，現時点では貯蔵穴としてとらえておきたい。

Ⅰｂ期　この期に属すものとして２基（16・37号）あげた。根拠に16号土坑の出土遺物からみた時期設定とⅠａ期の11号住居跡を切っている事実からであり，37号は形態的に16号土坑と類似するからである。形態的には多少崩れているが，基本はⅠａ期の土坑と同様でⅠａ期の退化形態としてとらえたい。また機能も同じく貯蔵穴として考えられる。

Ⅱａ期　36号・39号土坑の２基が検出されている。埋土堆積状況は，一部36号土坑の上層が自然堆積であることを除けば基本的には人為堆積と考えられる土層である。両者とも遺物は人為堆積層に含まれていたもので，出土状況は極めて不規則である。従ってこの土坑を廃棄の場所としてとらえておきたい。特に36号土坑は，一旦短期間に廃棄の場所として使用された後放置されたものであろう。

Ⅱｂ期　12・13号土坑があげられる。Ⅱａ期の土坑と異なり，堆積土の状況は一見自然的な堆積を示す。出土遺物は12号土坑の方が数量的に多いが，いずれも細片が多く流れ込みの出土状況を呈している。Ⅱａ期同様廃棄の場所としてとらえられるが，埋土の堆積状況の相異はⅡａ期の土坑が短時間の使用であることに対し，当期の土坑は比較的長時間開口し結果的に廃棄の場所となったことによるものであると考えられる。

Ⅳ期　３・15号土坑の２基があげられる。堆積土の状況は二者とも人為堆積であり，３号土坑は埋土にロームブロック・焼土・木炭・破壊された遺物等混入しており廃棄の場所としてとらえられるが，15号土坑は土坑を掘り込んだ後一気に埋めている。埋土はロームに黒色土が混入した土で遺物が数点検出された。廃棄の場所としては，埋め方が不自然であり疑問が残る。

各期における遺構相互間の関係について

Ⅰ期　ａ，ｂ両期の時間的・形態的差は多少みられるが，住居跡と貯蔵穴と考えられる土坑とから成ることは変わらない。住居跡内にも独自の貯蔵穴が必ずといっていい程掘り込まれており，屋内と屋外の貯蔵穴が共存していたことになる。この二者の共存は，貯蔵する“もの”の相異による形の差とか，あるいは各住居跡に居住する人々の共有物か占有物かの質の差とかいった問題を想起させる。勿論住居跡内における貯蔵物は，貯蔵した“もの”は以然不明であるが，住居に住む人々の占有物であったと考えられる。屋外の貯蔵穴に関しては，今日の調査では断定するだ

けの根拠は得られなかった。ただⅠ～Ⅳ区における住居跡と土坑群の分布は前述の観点から考えるとき良好な資料といえる。この地区は北部を除く三方が自然地形によって区切られるという比較的限定された地域で，西斜面における住居跡の分布状態と，頂部から南東斜面における貯蔵穴の分布状況とは，ほぼ当時の集落形態を残していると考えられるからである。土坑の分布に規則性はないものの重複関係を有していないことから土坑自体の時間差を問題にする根拠はなく，栃木日産遺跡のように住居跡に付属したと考えられる住居関係はもたず，特定の住居跡と土坑とがかかわり合うことを証明するのも難しいことから，屋外の貯蔵穴と貯蔵物とは佐平林Ⅰ～Ⅳ区の住居群の場合，共有物としての性格が強いといえるのではないだろうか。ただ隣接したⅧ区では分布が住居跡の近辺にあり，一概に佐平林Ⅰ～Ⅳ区の性格が普遍性をもつとはいえず検討の余地が残される。

Ⅱ期　この時期は竪穴住居跡の項でも述べたが，36号土坑と１号建物跡との重複関係から共存することはなく，二度建て替えられている５号住居跡存続期間を軸として前後に数パーセントの共存関係をもつ時期に各々位置づけられる。従って相互関係の可能性が考えられるのは竪穴住居跡と土坑，竪穴住居跡と建物跡との組み合わせである。

さてこれらの遺構のなかで，２号住居跡カマドからは帯金具（丸鞆）が，５号住居跡からは住居跡廃棄直後に流れ込んだ状況で平瓦が検出されている。いずれも，この時代の一般的集落からは検出されない特殊な遺物といってよい。二つの遺物を個々に取り上げた場合，偶然の作用としての可能性も考えられるが，二軒の住居跡から検出された事実から，単に偶然性として処理することはできず，むしろ遺物の性格を考慮し，第Ⅱの時期に居住していた人々と関連づけて考えていかなければならない。又，５号住居跡からは多数の墨書土器，加えて須恵器の蓋を転用した硯も検出されている。この事実は，少なくとも，５号住居跡を介在させて，識字階層の人間を想起させなければならない。さらに前述の二つの遺物と合わせ考えてみれば，識字階層からもう一歩進んで，ある特定の官人層を想定するのは困難なことであろうか。

一方，建物跡の性格はいまだ未解決な部分が多く今後の課題といわなければならないが，ただ，Ⅱｂ期になって忽然と建物群が出現する状況は，建物群を内部発生と見るより，むしろ異文化の流入といった外的要因にあったととらえた方が，より妥当性をもつといえそうである。

さて，当遺跡では凹面布目，凸面縄叩きの平瓦が５号・13号住居跡，15号土坑，表土からそれぞれ検出されている。これらの遺構はすべてロクロ土師器が伴う段階のものであるが，なかで最も古く位置づけられる遺構はⅡｂ期とした５号住居跡であり，これより以前の遺構からの瓦の出土はない。５号住居跡からの出土状況は，床面から多少浮いた状態で検出され住居廃絶後間も無く流れ込んだものと考えられ，時期的には非ロクロとロクロ土師器が混在する５号住居跡と同時期と推定できる。また先に調査した佐平林Ⅰ～Ⅳ区36号土坑においても，非ロクロとロクロ土師

器が混在するなかに同質の瓦が伴出している。この平瓦は泉崎村に所在する関和久遺跡と上町遺跡からも出土している。時に白河郡家の擬定地として継続調査が行われている関和久遺跡では平瓦の分類がなされており，近年来調査を実施している担当者から，当遺跡出土の平瓦は関和久遺跡で分類した５類と同種同類であるとの言をえた。従ってⅡ期以降の当遺跡の村落は，関和久遺跡と何らかの関連があると考えられるが，就中Ⅱ期における前述した帯金具や転用硯の出土，それに多数の掘立柱建物跡の検出等の事例と周辺の村落形態等も総合し今後追究していかなければならない問題である。

Ⅲ期　Ⅱｂ期の住居跡と建物跡との組合わせはⅢ期になっても存続する。住居跡は伴出する土器群の様相が竪穴自体でわずかの相異をみせているため，時間的な前後関係が考えられる余地を残しているが，基本的にはⅡ期の延長線上でとらえている。この期の建物跡は，焼失したあと柱を抜き取っているが，調査区内ではこの建物跡に替るものが検出されず，建物自体の機能が不用になったのか建物跡を所有あるいは使用していた人が，他の地域に移動したのか，限定された地点の調査であることから現時点で論求することは困難である。

Ⅳ期　竪穴住居跡の項でも述べたが，同類の土器組成を伴出する住居跡の重複から，他の時期に較べ時間幅のある時期とされる。住居跡７軒，土坑２基で構成されるが，前期と大きく異なるのは，建物跡群が欠落することである。住居跡内の施設は，一般に時代が下るごとに省略化の傾向にあり，又，当調査区内におけるⅢ期の住居跡の規模は，小型に定型化する。ここで問題点としたいのは貯蔵形態と貯蔵物である。貯蔵物の収奪側面はさて置き，Ⅰ期における貯蔵形態とは住居跡内の貯蔵穴の状態と，外部に検出された土坑が，廃棄の場所としての機能であったことから相異が見られる。勿論内部的な条件―たとえば住居跡内の貯蔵施設が床面ではなくて，床面より上に設置されるとか，屋外の貯蔵穴が倉庫としての掘立柱建物跡―を整備すれば解決されないこともない。しかしながら，Ⅰ期Ⅱ期と明らかに相異するのは，大規模な住居跡を核として構成された村落ではなく，比較的規模が定型化した住居跡によって村落が形成されてくるという点である。Ⅳ期という時期は，土師器の編年上からいえば，ロクロ土師器使用段階でも中頃に位置づけられる土器群を伴出する遺構群から成っている。土器編年上の位置を絶対年代に換置する根拠は今のところ薄いと言わざるをえない。一方，東北地方南半における土師器研究の趨勢としてはロクロ土師器使用の年代の幅を大まかに言って，奈良時代後半から平安時代としている。Ⅳ期の根拠とした土師器杯の調整に手持ちヘラケズリが加わる段階を，約300年間というロクロ土師器使用期間の半ばにおいて考えることが可能で，その年代を須恵器の共伴関係も含めてみた場合９世紀後半から10世紀にかかる時期と類推できる。村落構成の変化は，その村落にかかわる人間の紐帯の変質として考えることができる。考古学的な調査によって得られた住居跡の規模や分布の知見は，短絡的に人間の内的な動向に結びつかないにしても，行動の結果は遺跡に刻まれたさま

ざまな現象面に残される。Ⅱ期とⅣ期の現象面の差を当時の化外の地における律令体制の浸透，定着崩壊過程と合わせて考えることは必ずしも無理ではあるまい。

Ⅴ期　住居跡１，工房跡１，掘立柱建物跡３で構成されるとしたが，建物跡は５号建物跡の時期をⅣ期に属する４号住居跡を切っている事実からⅤ期（以降）とし，それに規模等の類似する建物跡を同期としたため，あるいは時期の前後する可能性も含まれている。その為，他の時期に比べ，遺構相互間の有機的関係が相対的に不明瞭である。回転糸切り無調整の土師器杯は，ロクロ土師器の中でも最も新しい段階に位置付けられている。佐平林Ⅷ区と周辺からの類例は，住居跡の項において挙げた３軒が数えられる。Ⅳ期において定型化した住居跡の規模はこの時期において再び不定型となり，構造についても退化していく傾向にある。これまでの発掘例において，遺構・遺物の絶対数が少ないのは，調査地点が限られていることも一つの原因であるが，他の側面から言えば一般に言われるように，農村の居住形態が竪穴住居跡から掘立柱建物跡へ移行していく段階にあったからではないかと推測できる。

これまで，遺構相互間の関連を概括して取り上げてきたが，限定された発掘の資料で多少飛躍した面も多い。今後近辺の遺跡や他の類例を詳細に検討し，普遍的か特殊的か充分に検討していかなければならないと考えている。

参　考　文　献

氏家和典・大場恒一　1954「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史８』東北史学会
氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』東北史学会
鈴木敬治他　1962『二十万分の一福島県地図説明書』福島県商工労働部開発課
田辺昭三　1966『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
藤田定市　1966「白河市南堀切遺跡の土師器」『福島考古７号』福島考古学会
桑原滋郎　1969「ロクロ土師器について」『歴史38』東北史学会
阿武隈川第四紀研究グループ　1968「須賀川―白河付近の第四系」『第四紀№13』第四紀総合研究会
吉川国夫他　1969『高井遺跡』埼玉県遺跡調査会
佐々木茂槙・桑原滋郎　1971『長根窯跡』涌谷町教育委員会
岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一他　1974「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告（Ⅰ）（宮城県文化財調査報告書第35集）』
宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
田中正能他　1974『太田遺跡（郡山市文化財調査報告書第20集）』郡山市教育委員会
渡辺泰伸他　1974『富沢窯跡』古窯跡研究会
石野博信　1975「考古学からみた古代日本の住居」『家』社会思想社
木本元治・寺島文隆　1975「金重谷地遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』
福島県教育委員会・日本道路公団
高橋一夫　1975「和泉・鬼高期の諸問題」『原始・古代社会研究（２）』校倉書房
宮城県教育庁文化財保護課　1975『宮前遺跡（宮城県文化財調査報告書第38集）』

馬目順一　1975「仏具壇遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』
福島県教育委員会・日本道路公団
鈴木啓　1975「下原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』
福島県教育委員会・日本道路公団
鈴木啓・木本元治　1975「出磐山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』
福島県教育委員会・日本道路公団
桑原滋郎　1976「須恵器系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
小笠原好彦　1976「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
高倉敏明　1976「古墳時代の土師器を中心として」『福島県における土師器編年試論』福島県考古学会
笠森健一他　1978『川崎遺跡（第３次）・長宮遺跡発掘調査報告書』上福岡市教育員会
仙台市教育委員会　1978『史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報』
仙台市教育委員会　1978『南小泉遺跡範囲確認調査報告書（仙台市文化財調査報告書第13集）』
木本元治　1978「下原遺跡，７号ピット出土の土器について」『しのぶ考古７』
玉川一郎・山内幹夫　1978「谷地前Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
玉川一郎・大越道正　1978「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討」『しのぶ考古７』しのぶ考古学会
根本信孝　1978『南堀切・高山・道南北試掘調査概報』白河市教育委員会
福島県教育委員会　1978『伊達西部条理遺構発掘調査概報Ⅱ』
宮城県多賀城跡調査研究所　1978『伊治城跡Ⅰ（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊）』
目黒吉明他　1978「佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
柿沼幹夫　1979『下田・諏訪（埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集）』埼玉県教育委員会
久保哲三他　1979『権現山北遺跡』宇都宮市教育委員会
高木和夫・大越忠士　1979「板倉前Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
日高努・山内幹夫　1979「佐平林遺跡Ⅵ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』
福島県教育委員会・(財) 福島県文化センター
阿部正行・大越道正　1979「達中久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
東北学院大学考古学研究部　1979「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故12』
福島県教育委員会　1979『下入の内遺跡現地説明会資料』
駒沢大学考古学研究部　1979「栃木日産遺跡」『先史７』
木本元治他　1979『関和久遺跡Ⅶ』（福島県文化財調査報告書第71集）

第4編　谷地前C遺跡

遺跡記号　ＨＩ－ＹＭ・Ｃ
所在地　西白河郡東村大字上野出島字谷地前
時代・種類　旧石器時代－遺物包含層
古墳時代－墓場
奈良・平安時代－集落跡
調査期間　昭和54年７月10日～10月25日
発掘担当者　目黒吉明
調査員　阿部正行　　玉川一郎
橋本博幸　　芳賀英一
安田　稔　　阿部俊夫
協力員　仲田茂司（同志社大学学生）
協力機関　東村教育委員会

第１章　調　査　経　過

第１節　位　置　と　地　形

谷地前Ｃ遺跡は，西白河郡東村大字上野出島字谷地前に所在する。阿武隈川と矢武川とにはさまれた，略東西方向に広がる河岸段丘面の中で，矢武川によって形成された沖積面に近い南端の部分は，浸食が顕著なため段丘崖は急崖を呈さず，傾斜面となって沖積面に移行する。矢武川の北岸部では，この傾斜面が古墳時代以降集落として利用されており，本遺跡から西方には，佐平林遺跡・板倉前Ｂ遺跡・西原遺跡などがあり，小規模な開折谷によって遺跡間は寸断されるものの，ほぼ連続した遺跡の広がりが見られる。本遺跡東方も開折谷を間に入れて横山遺跡・宇井遺跡などが隣接して所在しており，実際は遺跡間の境界を見い出すのが困難な程遺跡が密集しているといっても過言ではない。

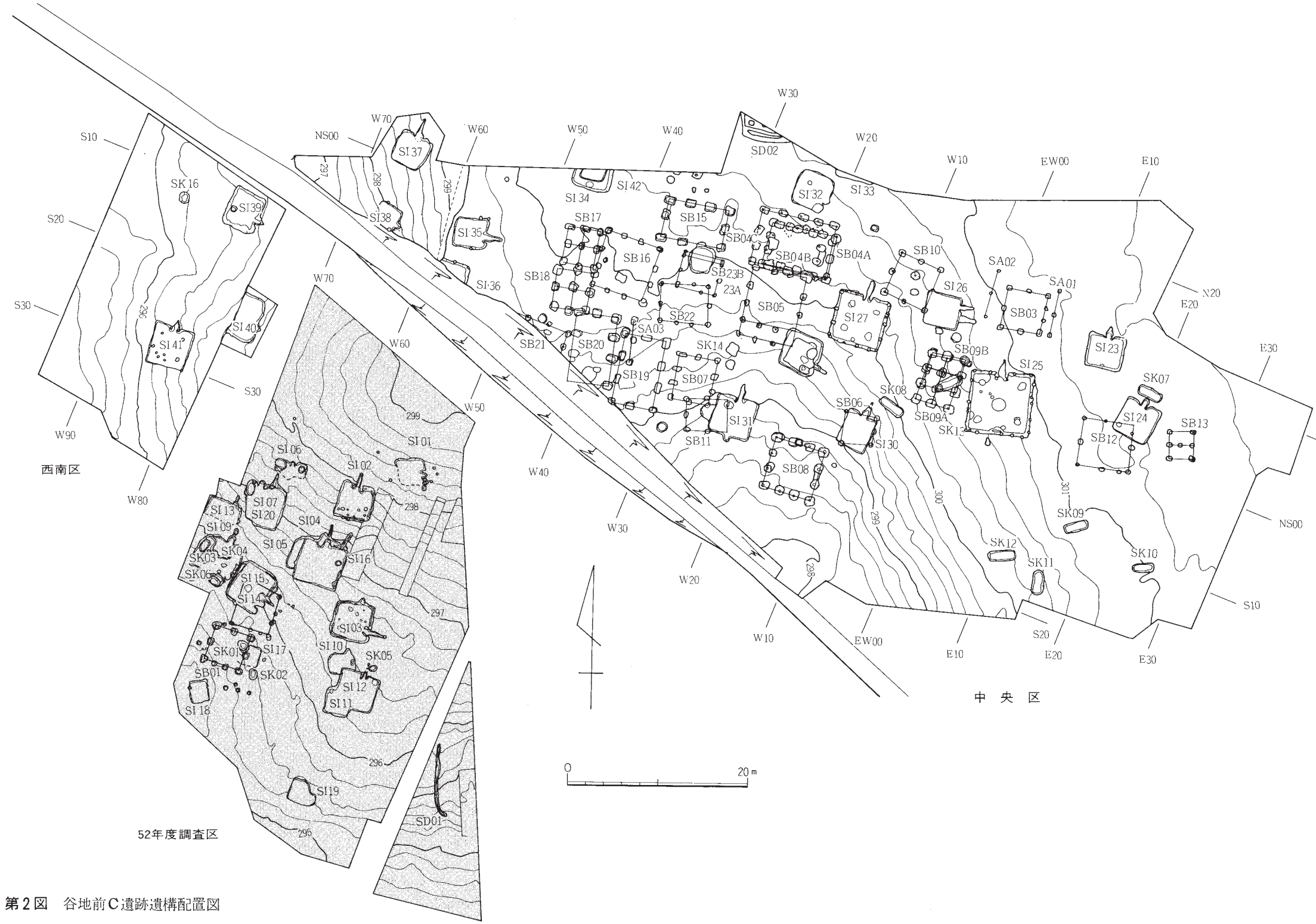
谷地前Ｃ遺跡については，試掘調査が全域について実施されておらず，正確な遺構の広がりが確認されていないが，遺物の散布する範囲は東西170m，南北180mにわたっており，約25,000㎡程の範囲が遺跡と考えられる。ただし西端部は谷地前Ｂ遺跡と連続しており，これらを一連の遺跡と見れば，数万㎡の広い遺跡として捉えられる可能性がある。遺物の散布域は標高295～302mの段丘面緩傾斜地にあり，東側は現在土取り場となっているが，旧来は残丘状の丘陵で画され，西端は小さな開折谷によって画されている。

遺跡の立地する段丘面は，郡山盆地における西の内段丘面に対比されるが，谷地部には表土下に，この地域の基本的な堆積層序である有機質に富んだ黒ボク土に近い黒色土（Ⅱ層），粘性のある茶褐色土（Ⅲ層），汚れたソフトローム（Ⅳ層）の堆積層が認められる。しかし斜面上部ではⅡ・Ⅲ層が欠落し，表土下に直接Ⅳ層が露呈する。今回の調査では，Ⅱ層上面に奈良・平安時代の遺物を含む包含層が検出され，しかもこの期の遺構はⅡ層上面から掘り込まれたことが判明したので，少なくともⅡ層の形成が奈良時代ごろまでにはほぼ終了していたものと思われる。なおⅣ層ソフトローム以下は，Ⅴ層ハードロームを約２m程はさんで砂層へと移行するが，Ⅳ層以下のローム層は，白河C_2ロームに比定されるものである。

第２節　調　査　経　過

谷地前Ｃ遺跡は，昭和52年度に県文化センター遺跡調査課が実施した分布調査によって発見された遺跡である。矢武川北岸部は母畑地区総合農地開発事業では16工区の工事予定区にあたり，

第1図　谷地前C遺跡周辺地形図



第2図　谷地前C遺跡遺構配置図

昭和52年度には，遺跡の中央を東西に走る道路の南側部が開発される計画が母畑事業所により提示さ，削平される約2,500㎡について発掘調査を実施し，住居跡22軒，掘立柱建物跡２棟，土坑６基を検出し，遺跡が奈良・平安時代の集落跡であることが判明し，成果については『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』で公表している。しかし開発は種々の事情で延期され，調査区は埋戻して畑地として継続利用されていた。

昭和54年度に入り，16工区の工事予定区に谷地前Ｃ遺跡が再び該当することになった。今回の計画は，遺跡の西方約100ｍ程まで完成している幹線道路を延長し，その南側部分を開発する内容であり，工法上削平が避けられない未調査部約3,000㎡について発掘調査を実施することとしたが，この範囲は52年度調査区の西側と，道路をはさんだ北側の２地点にわたり，谷地前Ｃ遺跡の遺物散布範囲から見れば南側約1/2に該当する。

今回の調査は，区域中央部に桑園が含まれており，作物の関係で全体を一度に調査することが不可能なため，桑園の東側を前半，西側を後半に分けて実施した。52年度調査区の西側部分も作物の関係で後半に調査を実施し，この部分は54年度調査西南区として扱った。今回の実質的な調査面積は約4,000㎡に及び，52年度調査の2,500㎡をあわせると，約6,000㎡が調査されたことになる。

調査は７月10日に開始し，10月25日まで延70日間を費したが，その経過は次の通りである。

７月10日～13日　桑園東側部分の表土剝ぎ作業と遺構検出作業を行う。表土剝ぎは重機を導入した。調査区東端部での表土および検出面より旧石器時代の石核が数点出土し，遺跡が先土器時代の包含層を下部に有している可能性がでてくる。

７月16日　遺構検出作業に並行し，重複の確認の終了した遺構については精査を開始する。

７月18日　ほぼ全体の遺構数が把握できたので，遺構番号を登録する。同一遺跡での２次調査であるとの観点から，今回検出した遺構は，52年検出の遺構番号の継続番号とした。住居跡に比べ掘立柱建物が多いのが特徴である。

８月29日　桑園東側部分の奈良・平安時代の遺構の調査をほぼ終了し，航空写真測量を行う。午後から旧石器時代の包含層の調査に着手した。

９月12日　西南区の表土剝ぎ開始。住居跡３軒，土坑１基を検出。桑園東側部分の掘立柱建物跡の掘形断ち割り作業などを並行して実施している。

９月26日　桑園部分の表土剝ぎ開始。掘立柱建物跡新たに10棟前後を検出した。

10月２日　桑園から西側地域での精査開始。

10月17日　西側地域での精査ほぼ終了。２度目の航空写真測量を実施した。午後より遺構細部の補足調査開始

10月25日　一部の補足調査を行い，谷地前Ｃ遺跡54年度の調査を完了する。

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　旧石器時代の遺物包含層

谷地前Ｃ遺跡の今回の調査は，昭和52年度に続く第二次調査という性格があるが，前回の調査で確認されていた奈良・平安時代の集落跡という遺跡の性格を再確認した他，新たにローム層内部に旧石器時代の遺物が包含されている事実が判明し，これらについても調査を実施した。

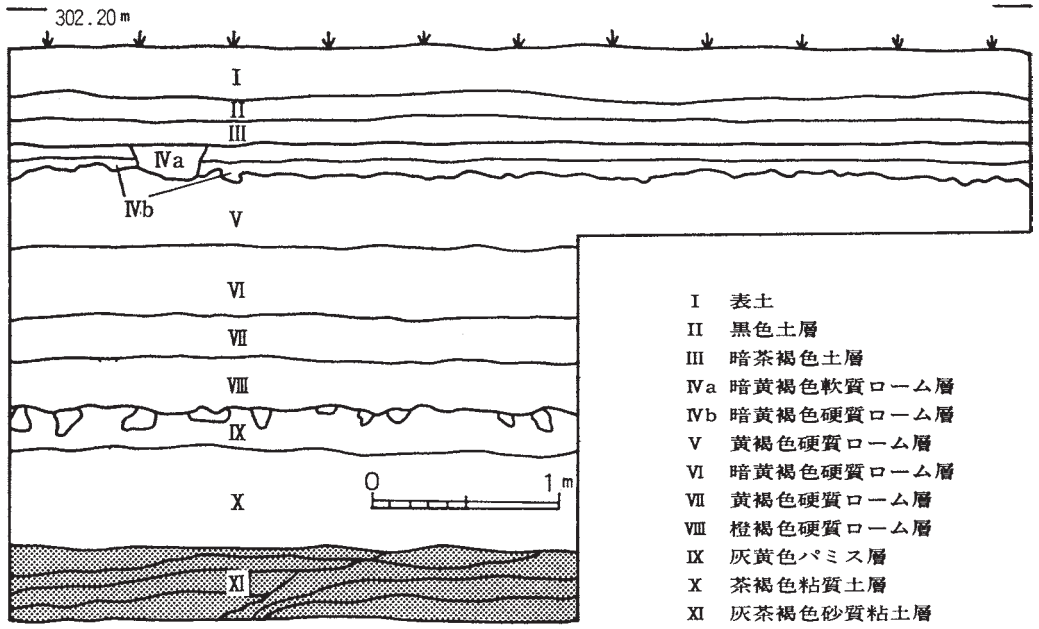
旧石器時代の遺物包含層は，今回の調査区では東端部に位置しており，その広がりも限定されていて，ほぼ全域の調査を行った。

１．調 査 の 方 法

本遺跡における旧石器時代の遺物存在は，25号住居跡検出作業の段階で確認された。発掘調査は，25号住居跡を中心にグリッド方式で行ったが，発掘対象部分に10×10ｍの方眼を設定し，さらにその中で任意に２×２ｍのテストピットを設定して，遺物の分布状況を検討したうえで，10×10ｍの大グリッド単位で発掘調査を行い，さらに出土遺物の記録化にあたっては，この10×10ｍのグリッド内部を２×２ｍの小グリッドに区画してその能率化をはかった。出土遺物は，全て出土位置・レベル・層位の記録を行ない，ハードローム層上面においては，炭化物粒の平面分布図を作成した。遺物の出土は，後述するようにⅣａ層からⅤ層上面まで認められたが，遺物の検出が認められなくなってからはⅤ層をさらに約20㎝ほど掘り下げ，そして発掘区域内に２×２ｍのテストピットを設けて，下層における石器文化が存在しないことを確かめて遺物検出作業を終了した。土層観察は，Ａ・Ｂ区の境，Ⅱ・Ⅲ区の境の各ライン上で行い，ＢⅢ区北東コーナーでは，深掘りを行って土壌サンプリングを実施して，全ての作業を終了した。

２．層　　序

旧石器時代の遺物が包含されていた地点は，今回調査した地区の東端部を中心とした狭い範囲である。この地点は西側に小規模な開折谷をひかえ，南方の矢武川流域の沖積面に舌状に張り出した，緩い斜面に移行する接点部にあたる。遺物はこの接点部付近の，標高302ｍ前後の比較的平坦な部分に狭い分布をしており，斜面部分までは拡がらない。谷地前Ｃ遺跡においても，特に谷地部には現表土層から地山ローム面までに，黒色土（Ⅱ層），暗茶褐色土（Ⅲ層），暗黄褐色ソフトローム（Ⅳ層），黄白色ないし黄褐色ローム（Ⅴ～Ⅷ），砂層の順で，この地域の基本的な土層堆積が認められる。このうち，Ⅱ層は下部に縄文時代早期～前期初頭の遺物を包含しており，Ⅱ層より上位は主として沖積世の火山灰に由来する堆積層であるものと考えられる。遺跡内部では台地の上位面に移るとⅡ・Ⅲ層の層厚は薄く，あるいは後世の撹乱によって表土下にⅣ層が直



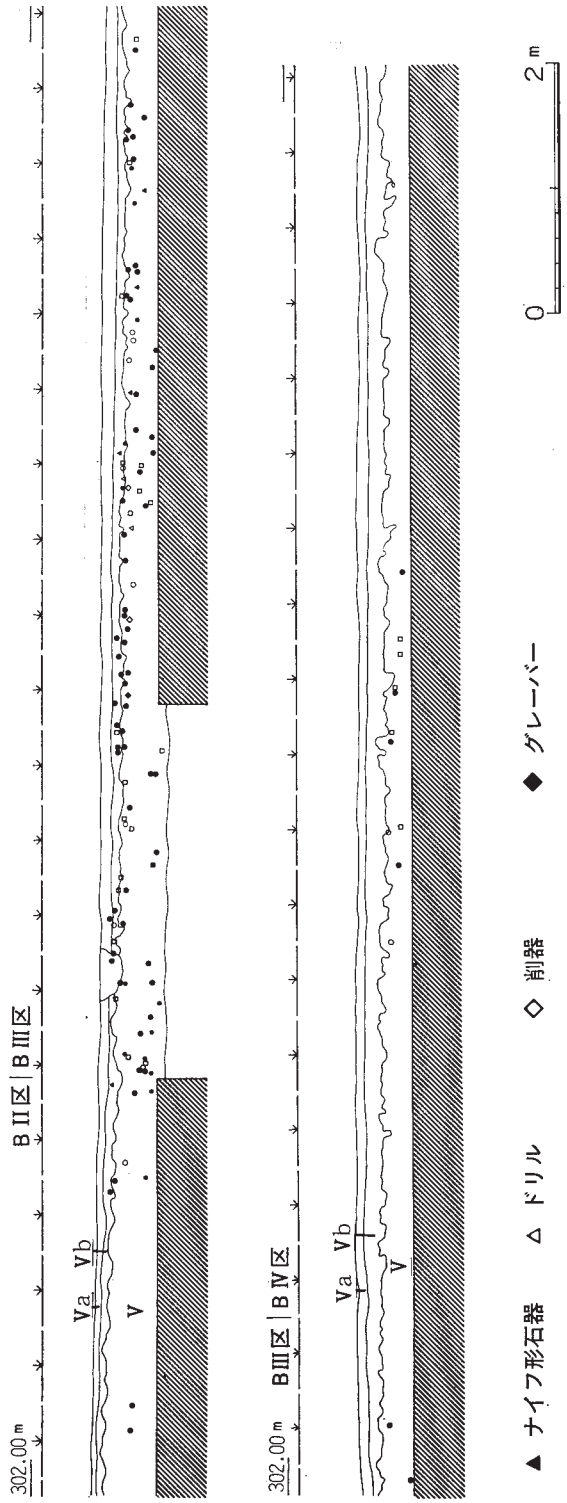
第３図　谷地前Ｃ遺跡層序

接露呈する部分が多い。Ⅳ層以下は黄白色ないし黄褐色のローム層であり，その最上層である暗黄褐色ソフトローム層（Ⅳ層）は厚さ15cm前後の薄層であるが，Ⅲ層との層理面に接する上半部は粘土化し，有機質による汚れが見られ下部のパサパサしたローム部と分層される。上位をⅣａ層，下位をⅣｂ層と区分した。本遺跡における旧石器時代の遺物はⅣａ層からⅣｂ層の上位面に出土しており，谷地前Ｃ遺跡Ⅳｂ文化層と呼んだ遺物包含層である。Ⅴ層以下は灰黄褐色ハードローム層が約1.2mの厚さで堆積し，下層の砂層へと続く。これらは下位に薄いパミス帯（Ⅸ層）をはさんでおり，色調などから２層に分層されるが，無遺物層である。鈴木敬治によれば，Ⅳ層を含めたこれらのローム層は白河C_2ロームと考えられ，北関東地方の宝積等ロームに相当するものである。現在これらのロームの重鉱物分析が進展中である。

３．遺物の出土状況

出土遺物のなかで原位置の明らかなものの総数は126点であり，石器の種類及び石質は第１表に示す通りである。これらの分布状況をみるとＡⅢ・ＢⅢ・ＣⅡ・ＣⅢ・ＤⅢ・ＢⅣの各グリットに比較的濃密に石器の分布する部分が認められる。本遺跡ではこの石器の集中する部分を「ブロック」と呼称し，それぞれを第１ブロック～第６ブロックとした。各ブロックの内容に関しては後述するが，こうした石器の集中部分とともに炭化物粒分布の記録化によって，数ケ所の炭化物粒集中部分が観察されたが，それぞれの集中部分は，平面分布，垂直分布とともに，石器の分布と重なりあうものが多く，両者が有機的に関連をもっていることを物語っている。石器分布の

なかで，各母岩別，あるいは石質ごとの遺物分布を観察してみると，各ブロックごとの内容に差異や，石質のかたよりがみられ，また，同一母岩と考えられる石器のブロック間の移動がほとんど看取されないところから，各ブロックの独立性要素がかなり強いものと判断したい。石器の垂直分布は第４図に示したように，Ｂ列の土層図の中で投影させた。この図の中では一部にⅤ層での分布がみられるようになっているが，これはＢ列区に比較してＢⅣ区・Ｄ列区の方が斜面下位にあるための現象であって，実際には，Ⅳａ層・Ⅳｂ層に分布しているものである。各ブロックの垂直分布の形状は概ね長楕円形をしているものと判断される。ブロック内の各石器群を最少限での一群の資料を考えた場合，その垂直分布は我々が細別した自然層の中では，１枚の中での分布にとどまらず，２・３の層にまたがって検出されている。これは，土層の堆積が，自然条件下では一定でないところからの当然の帰結であり，また自然環境



第４図　Ｂ列における遺物垂直分布図

下，あるいは動植物の影響による石器の浮沈も当然背後には考慮しなければならない。従って，本遺跡の旧石器時代文化層は，遺物の分布がⅣａ層からⅤ層にかけて分布しているが，これをいくつかの文化層に細別することの意義には極めて乏しく，我々は，垂直分布の最大幅であるⅣｂ層を本来の文化層と解釈し，この文化層を「谷地前ＣⅣｂ文化層」と呼びたい。次に，６ケ所のブロックの内容について記述してみよう。

第１ブロック　ＢⅡ区北西からＢⅢ区東北端にかけて分布しており，ＡⅡ区で確認された２点も，このブロックに含めておいた。資料点数は８点あり，石質の構成は，玉髄９点，桂質頁岩７点，細粒凝灰岩２点となっており，西半部に玉髄，東半部に硅質頁岩が主に分布している。石器の構成は，石核２点，剥片13点，砕片２点，たたき石１点からなる。石核２点は，それぞれ玉髄・細粒凝灰岩のものであり，玉髄製の石核は，第17図18に示したもので，同一ブロック内の剥片第15図48と接合する。ブロック内の剥片・砕片は，この石核と同一の母岩と判断される資料であり，剥片の中では，第７図15・21のように石核調整剥片と考えられるものがその多くを占めている。他ブロックからは，これと母岩を同一とするものの資料は，検出されなかった。

第２ブロック　ＢⅢ区西北部を中心に分布するものを第２ブロックとした。このブロックは，一部を24号住居跡，13号掘立柱建物跡，７号土坑によって遺物の広がりの一部が破壊されており，本来はもう少し広がりをもっていたものと考えられる。資料点数は31点あり，石質のうちわけは，玉髄17点，黒曜石５点，細粒凝灰岩４点，硅質頁岩３点，細粒砂岩・花崗岩それぞれ１点となっている。また，石器の構成は，ナイフ形石器１点（第６図１，玉髄製），ドリル２点（同図６・７，ともに玉髄製），彫器１点（同図９，玉髄製），削器１点（同図８，黒曜石製），石核８点，剥片13点，砕片２点，たたき石２点（うち１点は第17図61），花崗岩の破砕礫１点であり，ナイフ形石器・ドリル・削器・たたき石は，ＢⅢ区中央部の遺物の集中している部分から発見されており，彫器は，ブロック西端より発見されている。２点のドリルは，近接して出土しており，観察から同一の母岩のものと考えられる。８点の石核のうちわけは，玉髄５点，細粒凝灰岩２点，硅質頁岩１点であり，玉髄のものは，ブロック内部に，同一母岩と思れるものが散見されるが，細粒凝灰岩，硅質頁岩（細粒凝灰岩のものは第12図32，硅質頁岩第14図51）は，ブロック内に，母岩を同一とする剥片・砕片が全く存在せず，また他のブロック内にも認めがたい。黒曜石の資料は，前述の削器の周囲に分布し，第８図25・30・33に図示しておいた。

第３ブロック　ＣⅡ区南端からＣⅡ区北部に分布するブロックであり，南西部を23号住居跡が破壊している。資料総数は９点と少なく分布状況も散漫であり，石質の構成は，玉髄５点，細粒凝灰岩３点，硅質頁岩１点，石器構成は，石核２点，剥片６点，たたき石１点となっている。石核は，玉髄製のものと細粒凝灰岩製のものがあり剥片の中では玉髄製のものが多いが，第２ブロックの玉髄製の石器に比べて第３ブロックのものは，白色不透明な玉髄を用いたものが多い。第３

ブロック出土の玉髄製の剥片のうち１点は，第７図11に示しておいた。

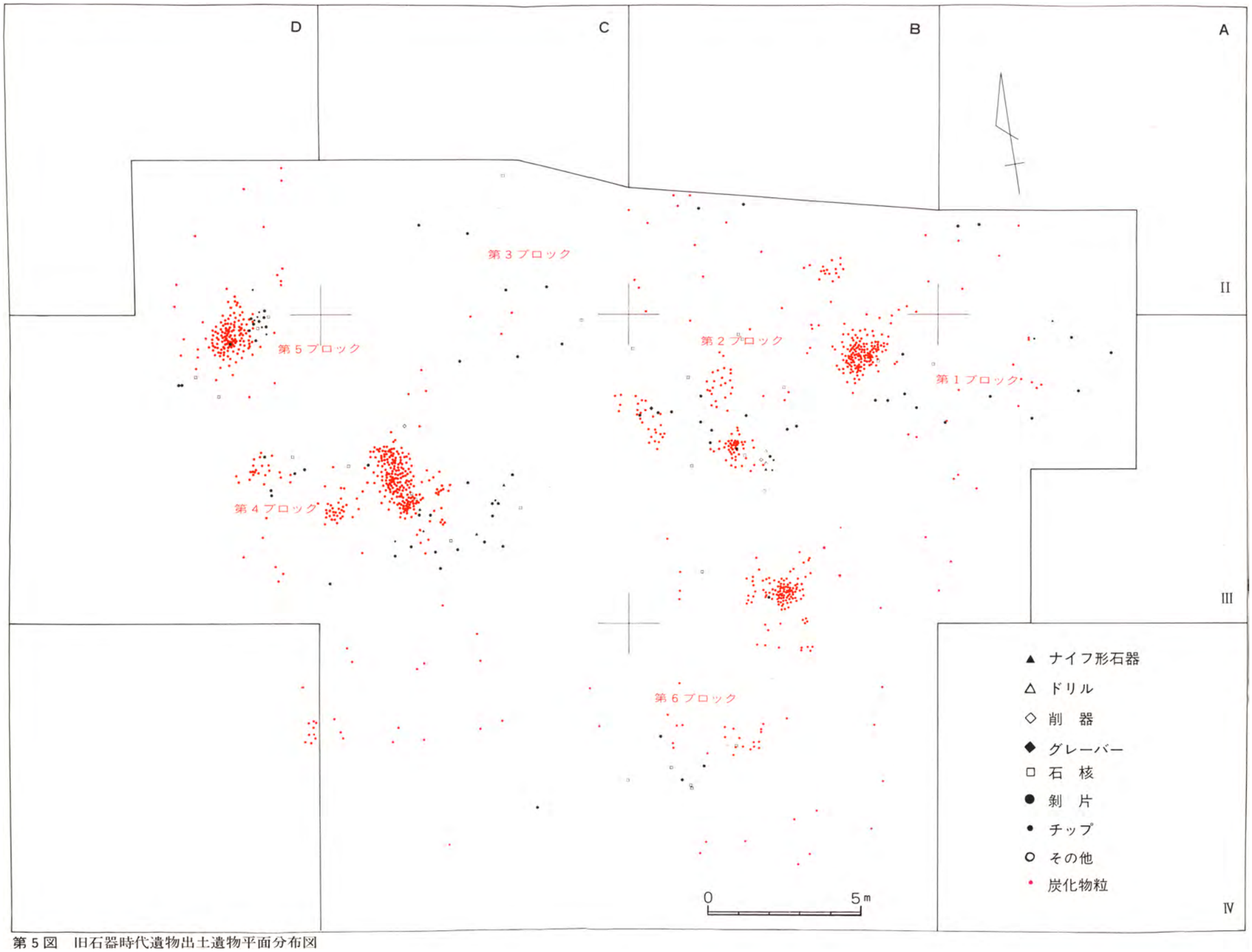
第４ブロック　ＣⅢ区南西半からＤⅢ区にかけて分布するものであり，一部を23号住居跡・25号住居跡・12号掘立柱建物跡によって破壊されている。資料総数は35点であり，石質別の構成をみると，細粒凝灰岩18点，硅質頁岩10点，玉髄７点となっており，細粒凝灰岩のものが約半数を占めている。石器構成は，ナイフ形石器３点（第６図２細粒凝灰岩製，同図３・４硅質頁岩製），削器破片１点（玉髄製），石核４点（玉髄製２点，硅質頁岩製２点第11図45），剥片21点（細粒凝灰岩12点，硅質頁岩５点，玉髄４点）である。第４ブロックから出土した細粒凝灰岩製石器の多くは，第９図に示した風化の激しいもので，母岩を同一と考えられる資料である。たたき石は，第16図57，第17図58に示すものが出土しており，ともに細粒凝灰岩製である。

第５ブロック　ＤⅡ区・ＤⅢ区の境東半部に分布しており，資料点数は21点であるが，かなり狭い部分に密集して発見されている。石質の構成は，玉髄９点，硅質頁岩７点，細粒凝灰岩４点，花崗岩１点（礫破片）であり，石器構成は，石核４点，剥片10点，砕片６点，礫破片１点となっており，石核は，３点が細粒凝灰岩製，１点が玉髄製の小さな残核である。剥片･砕片は16点で，玉髄製８点，頁岩製７点，細粒凝灰岩製１点となっており，頁岩製のものは，第８図22・31に示した。本ブロックの遺物が集中している部分の土を水洗いしたところ，微細な砕片がかなり検出されたところをみると，物集中部分で剥片剥離作業が行なわれたとみることができよう。

第６ブロック　ＢⅣ区西半から，ＣⅣ区の一部にかけて分布し，分布状況は，比較的散漫である。資料点数は11点であり，石質構成は，硅質頁岩５点，玉髄３点，細粒凝灰岩２点，細粒砂岩１点（たたき石）で，石器構成は，削器１点（第６図10玉髄製），石核５点（硅質頁岩４点第10図39，第14図52，細粒凝灰岩１点），剥片３点（頁岩２点，玉髄１点），たたき石２点（第16図54細粒凝灰岩，第17図54細粒砂岩）となっている。総体的に石核の比率が高く，また，すべての石核・剥片ともに，母岩を別々にしている特徴があり，他ブロックに比べて第６ブロックは，やや性格を異にするものではないかと考えている。特に，第６ブロックにおいては，剥片剥離作業が行なわれた形跡がみられないことを指摘しておきたい。

４．炭化物粒の分布

炭化物粒は，Ⅳｂ層からⅤ層の上面において検出作業を行い図化したが，これによると遺跡内には，大きくみて５ケ所の炭化物粒の分布する地区が観察される。これを判断すると，第１・２・４・５ブロックの遺物分布と多少のずれはあるものの，ほとんど重なるように分布するものと，第２ブロックの東南部に検出されたもののように，全く遺物が同時に検出されないものの２通りの炭化物粒の分布がみられる。遺物の分布と炭化物粒の分布がかなり密接な関係をもっていることがこれによって指摘されるが，また同時に第３ブロック・第６ブロックのように，遺物の分布がみられるものの，炭化物粒の分布がほとんど認められないものもある。



第５図　旧石器時代遺物出土遺物平面分布図

５．遺　　物（第６～17図，図版68～72）

谷地前Ｃ遺跡で確認された旧石器時代の文化層は，ほぼ１枚と考えられる。

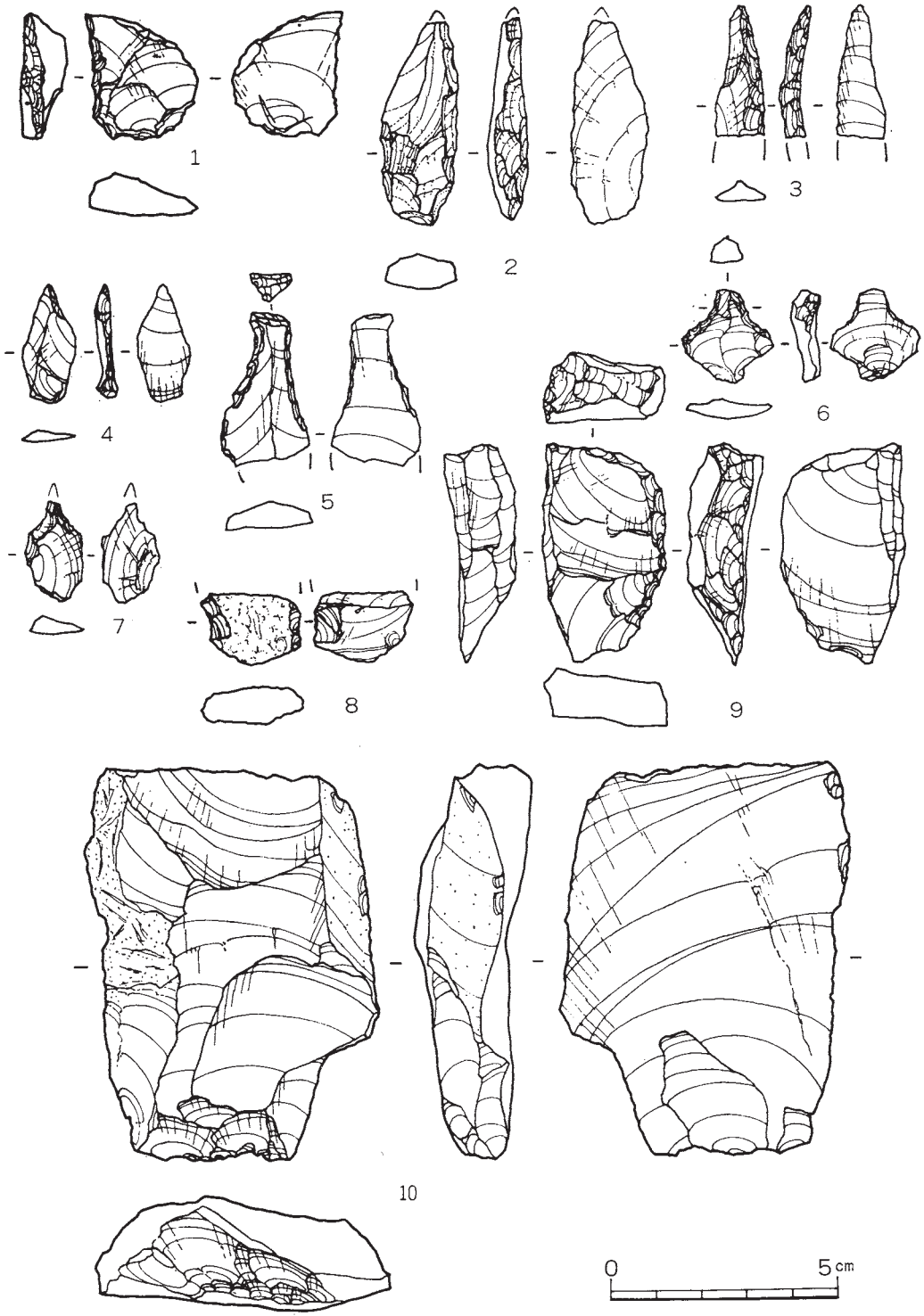
ナイフ形石器（第６図１～４）　ナイフ形石器は，４点出土している。１は玉髄製であり，先端部を欠失している。縦長剝片を利用して両側縁に主要剝離面方向からの急斜なブランティング加工を行っている。２の石質は，細粒凝灰岩製であるが，磨滅が激しく，なかなか剝離を観察することが容易でないが，幅広の剝片を利用して右側縁及び左側縁下半に，やや粗雑なブランティング加工を行っているものである。３は先端部の破片であり，縦長剝片先端を石器先端として，右側縁にブランティング加工を行い，左側縁に刃部を形成するもので，石質は珪質頁岩製である。４は珪質頁岩製の小形のナイフ形石器であり，ブランティング加工は基部周辺及び右側縁に行われ，先端部が尖がるものである。

ドリル（第６図６・７）　玉髄製の小形のドリルが２点検出されている。いずれも先端部が欠失しているが，６は縦長剝片の基部付近を利用して，剝片の長軸方向に先端部をつくりだしたものであり，７は剝片の側縁に先端部をつくりだしたものである。

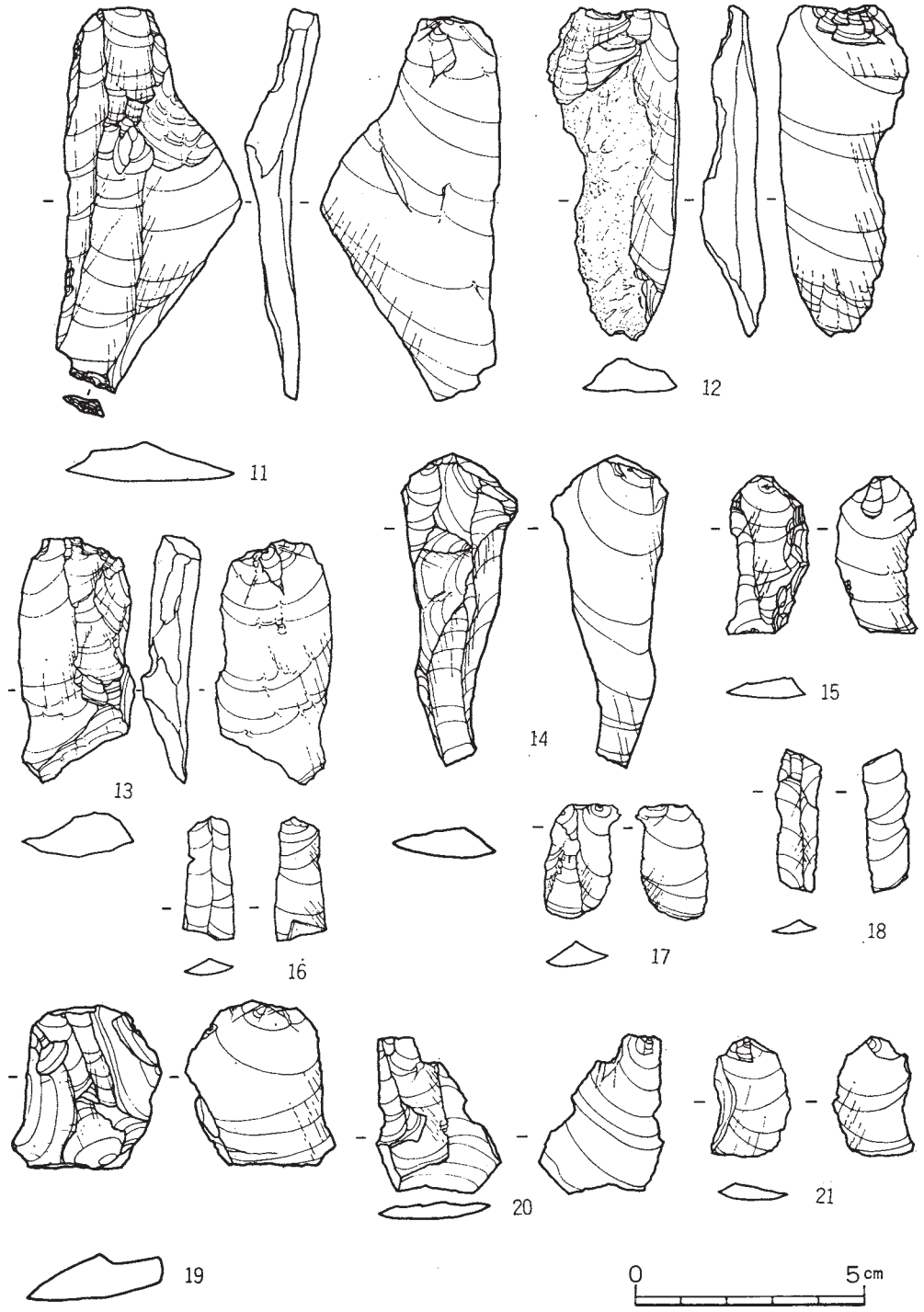
彫器（第６図５・９）　９は幅広な縦長剝片を利用し，周縁に調整加工を行ったのち，剝片基部付近に横方向の小剝離によって打面を形成し，４度の打撃を左側縁に加えて刃部を作り出したものである。刃部は，やや主要剝離両側にあらわれている。５は一部欠失しているものの，縦長剝片を素材として周縁に調整加工を行い，先端部に細かな剝離を加えて刃部を作り出しているものである。いずれも玉髄製の彫器である。

削器（第６図８・10）　削器は２点出土しており，８は黒曜石製の削器で両側縁に刃部を作り出したものであろう。10は玉髄製の削器であり，剝片基部のバルブを除去して，基部の部分に刃部を作り出したものである。

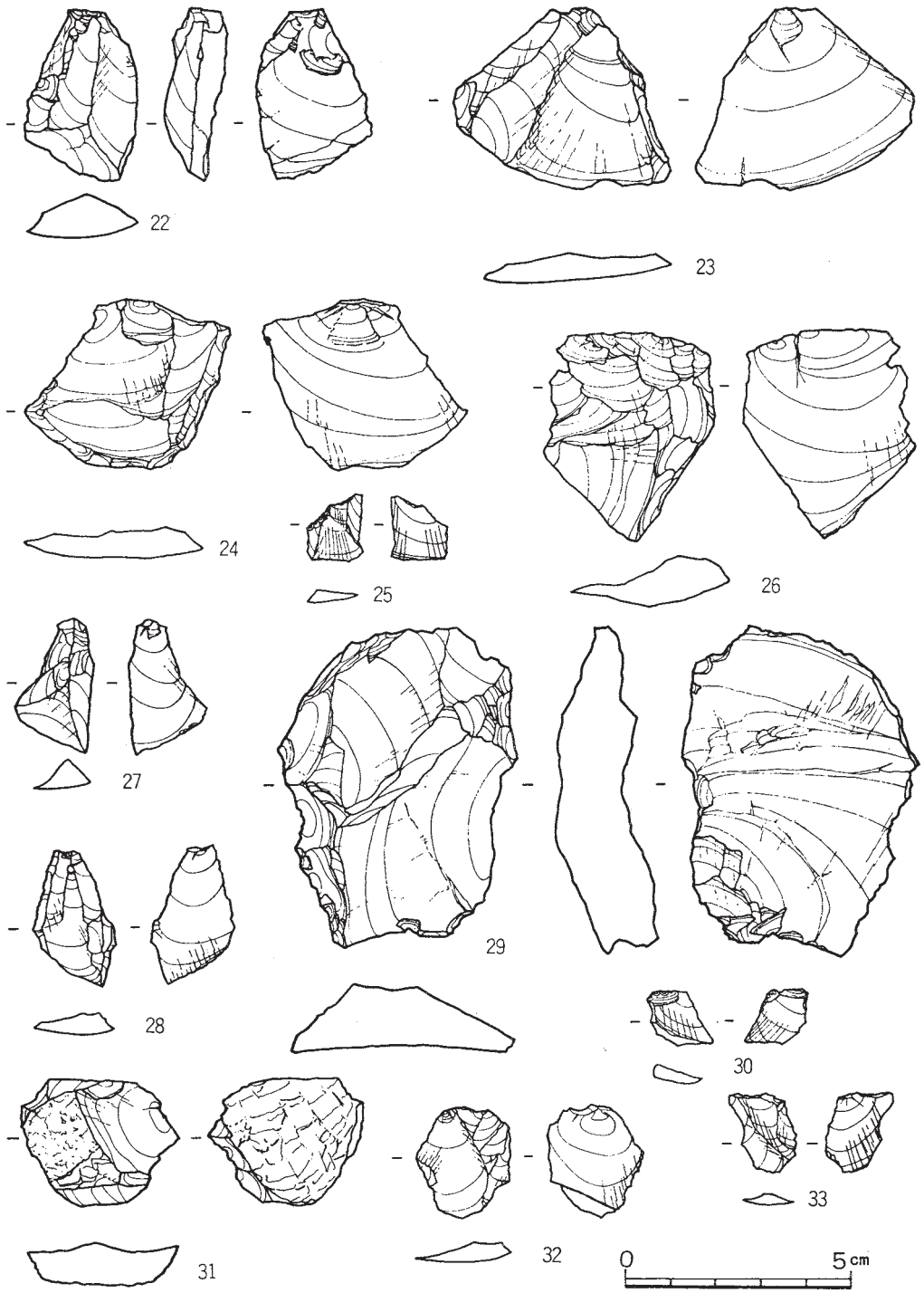
石核（第10～14図）　石核は総数26点出土しており，形成をもとにいくつかに分類できる。打面の位置からすれば，単設のものと，両設の打面をもつものに分けられ，さらに，47・48のように打面を90°ほど移動させた打面転移を行っている石核も認められる。さらに，両設打面をもつものの中には打面再生を行っているものも観察され，本遺跡の剝片剝離技術には，かなりのバラエティがあるのが理解できよう。29は珪質頁岩製の両設打面を有する石核であり，比較的小形の縦長剝片が剝離されている。剝片剝離作業は打点を細かく左右に移動させており，180°の打面転移が行われている。41は玉髄製のものである。平坦な打面を上下２ケ所に設けており，縦長剝片を得るための剝片剝離作業は，石核表面に集中している。裏面では，幅広の剝片が剝離されているが，石核の再調整剝離とも考えられよう。側面には調整剝離が行われ，石核幅に比べて厚さの薄い形状を成している。42・43はそれぞれ一部に原礫面を残しており，42は両設打面，43は単設の打面を有する。42の場合には，側面においては上下からの剝片剝離が観察され，また打面再生



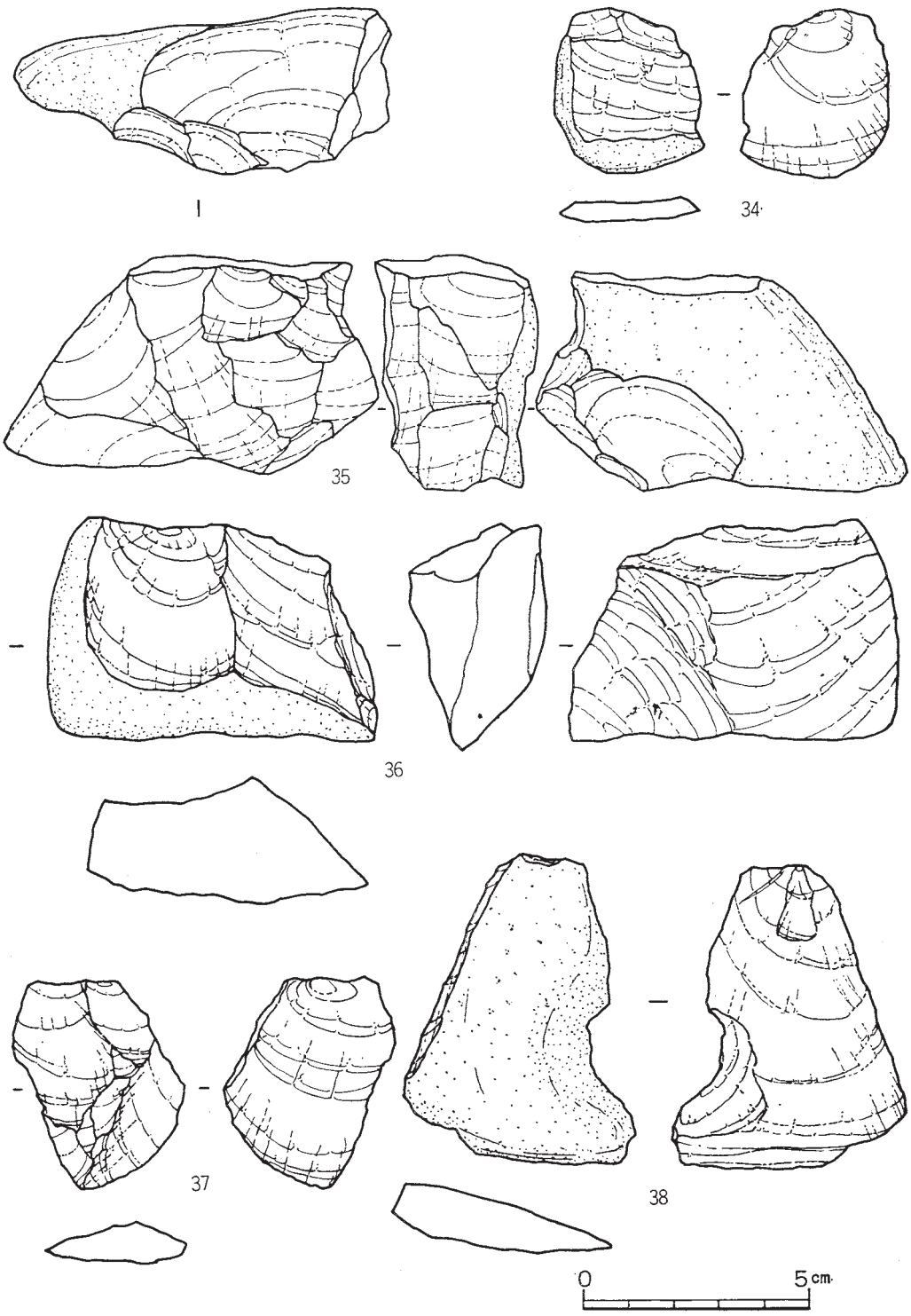
第6図　旧石器時代の石器（ナイフ形石器・彫器・削器・ドリル）



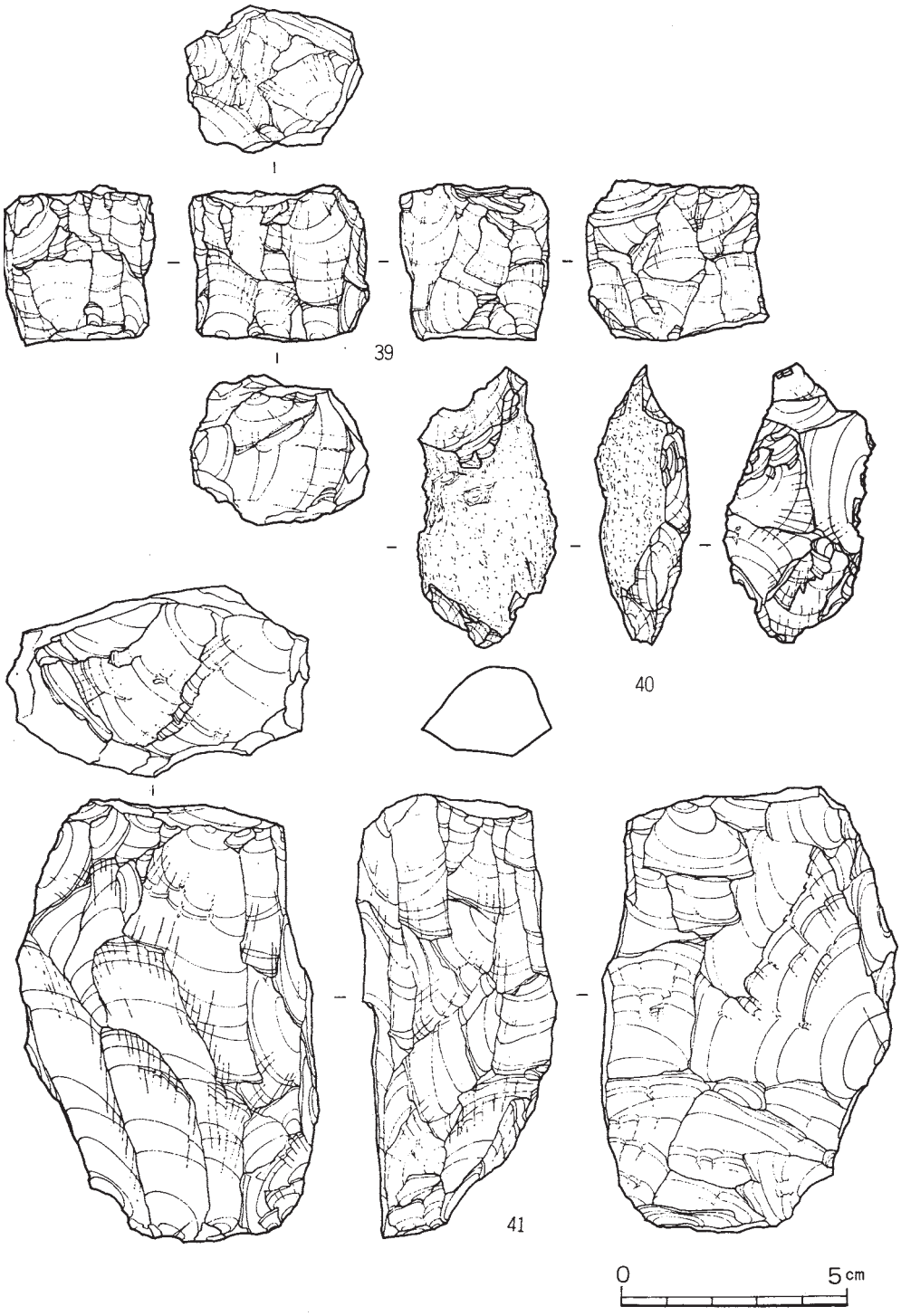
第７図　旧石器時代の石器（剝片）



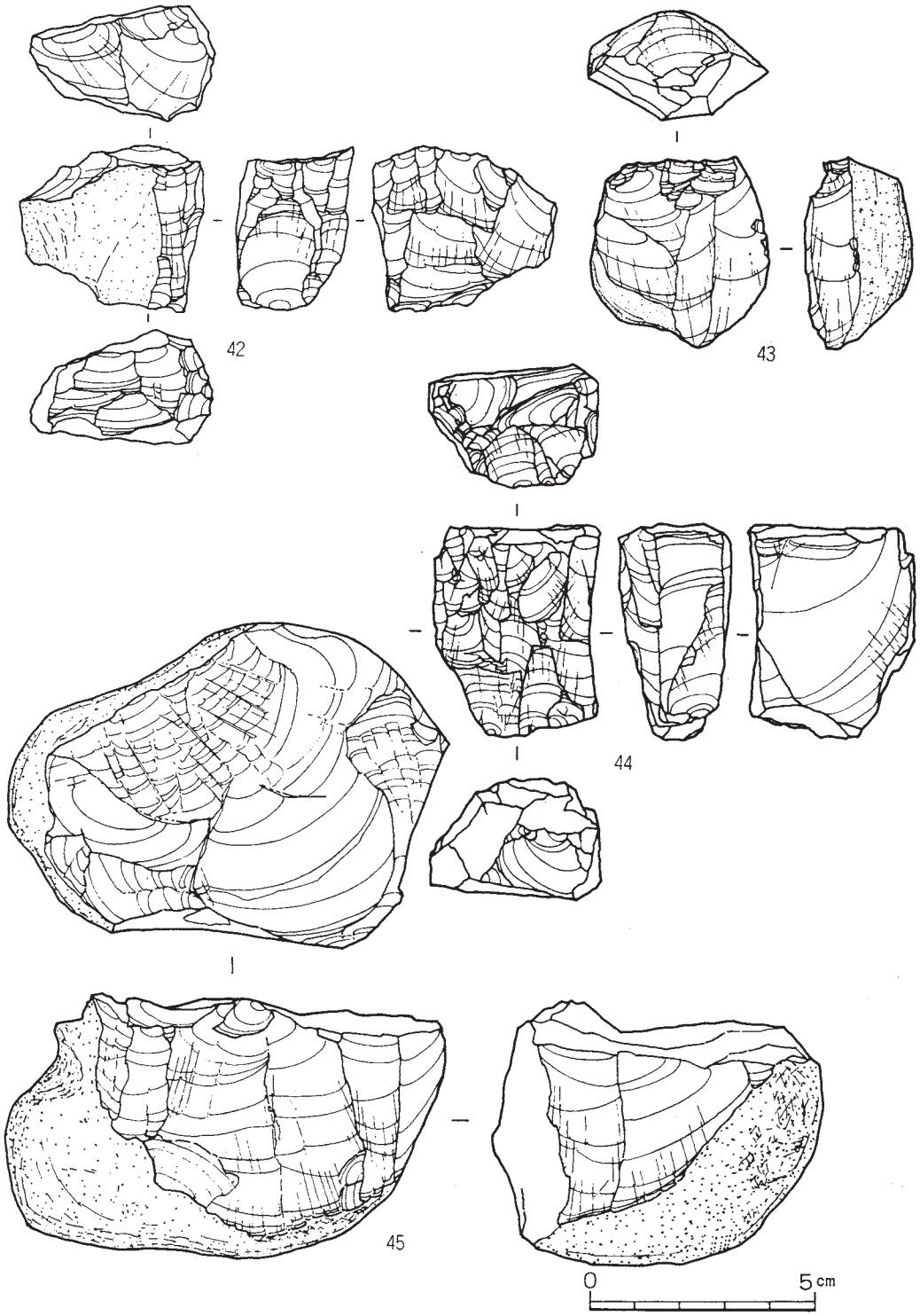
第8図　旧石器時代の石器（剝片）



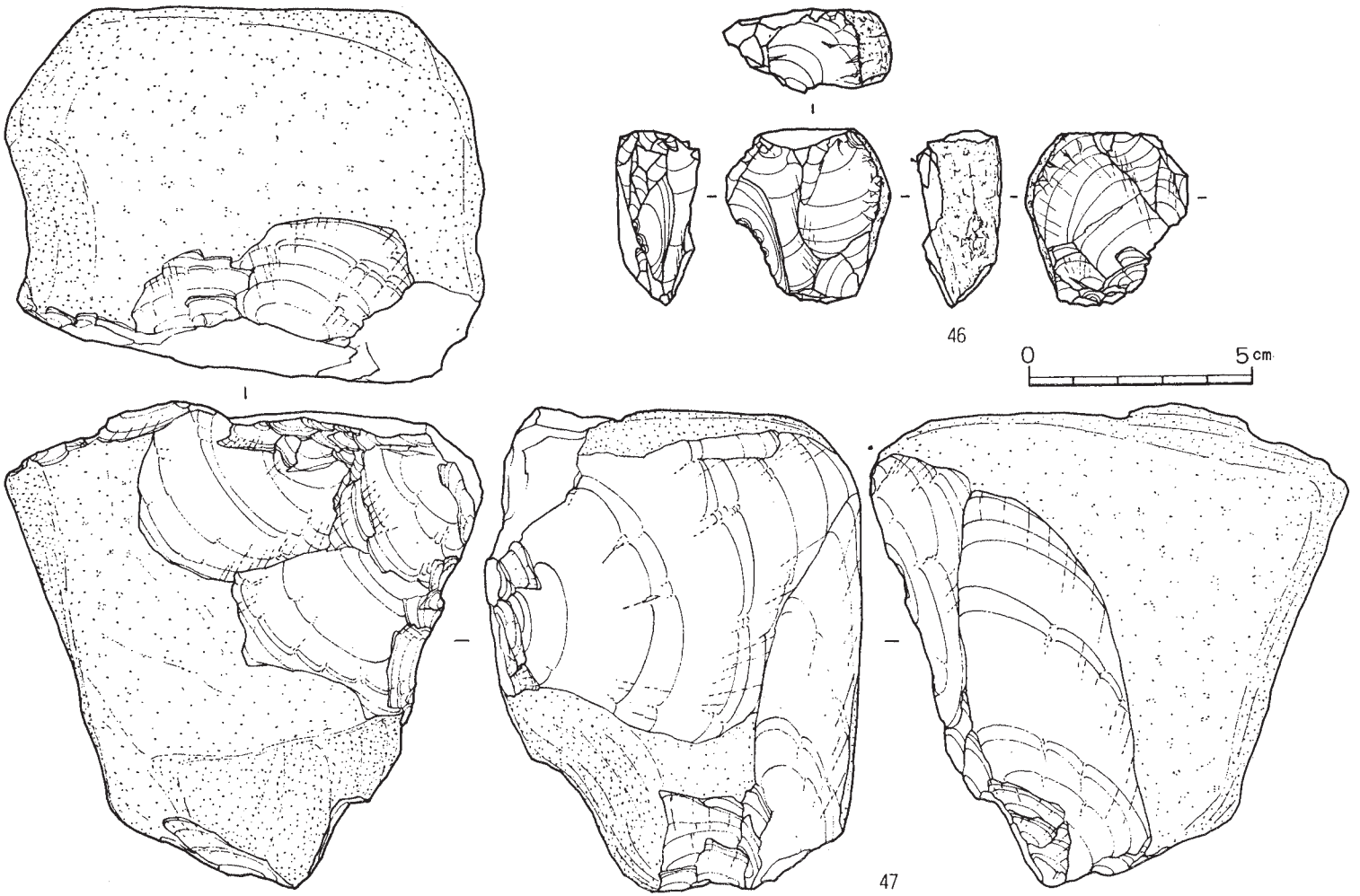
第９図　旧石器時代の石器（石核・剥片）



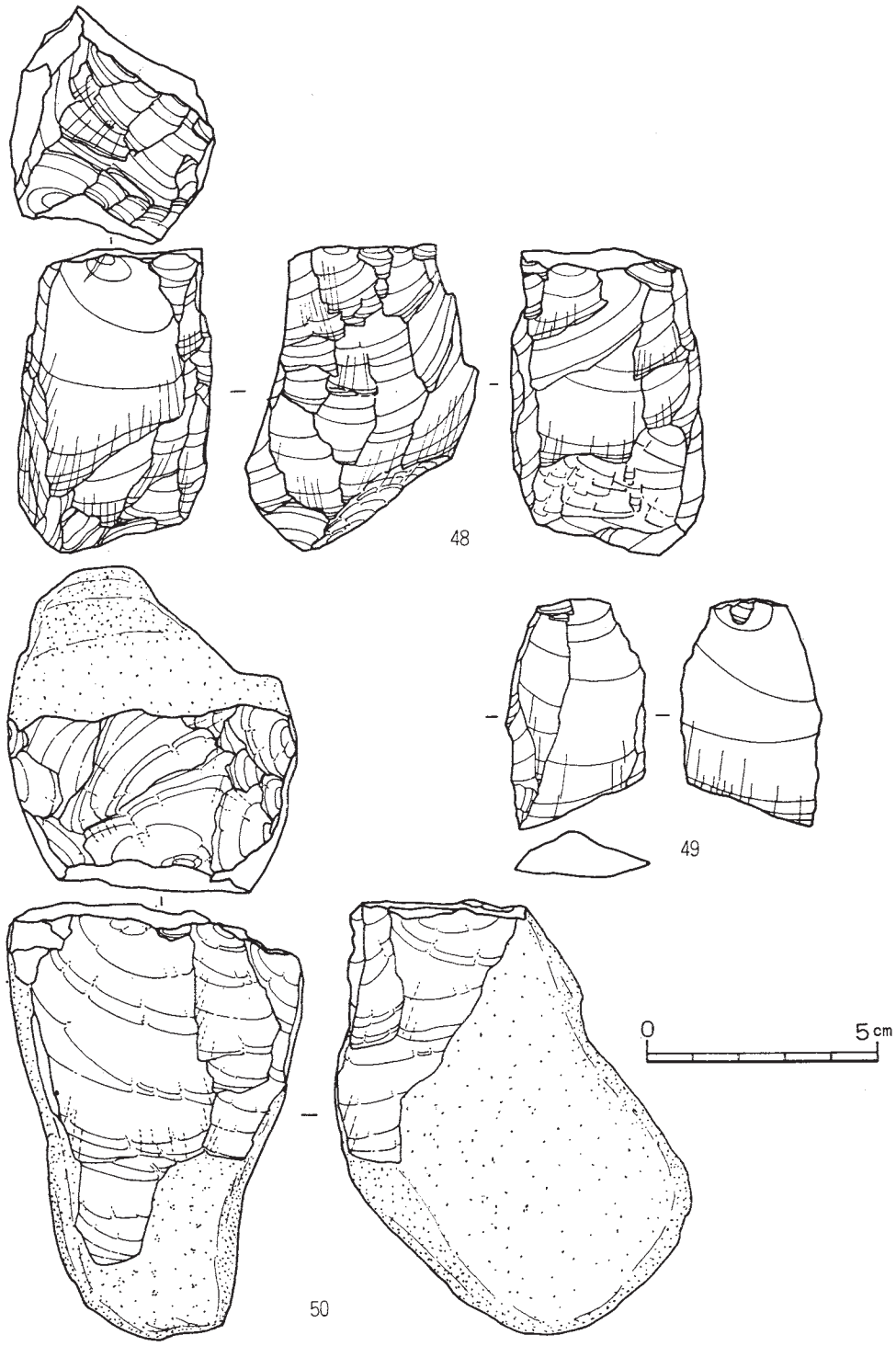
第10図　旧石器時代の石器（石核）



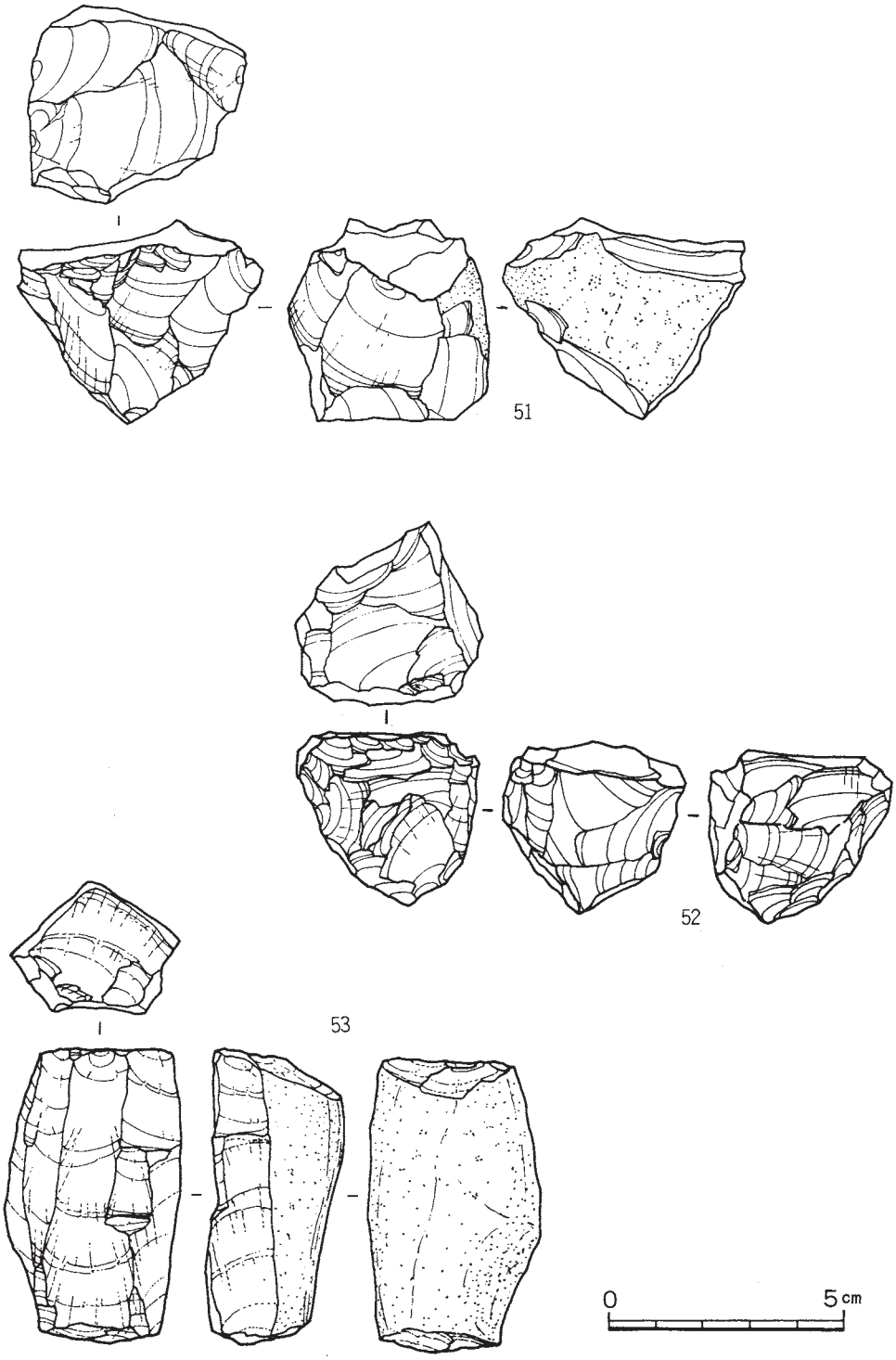
第11図　旧石器時代の石器（石核）



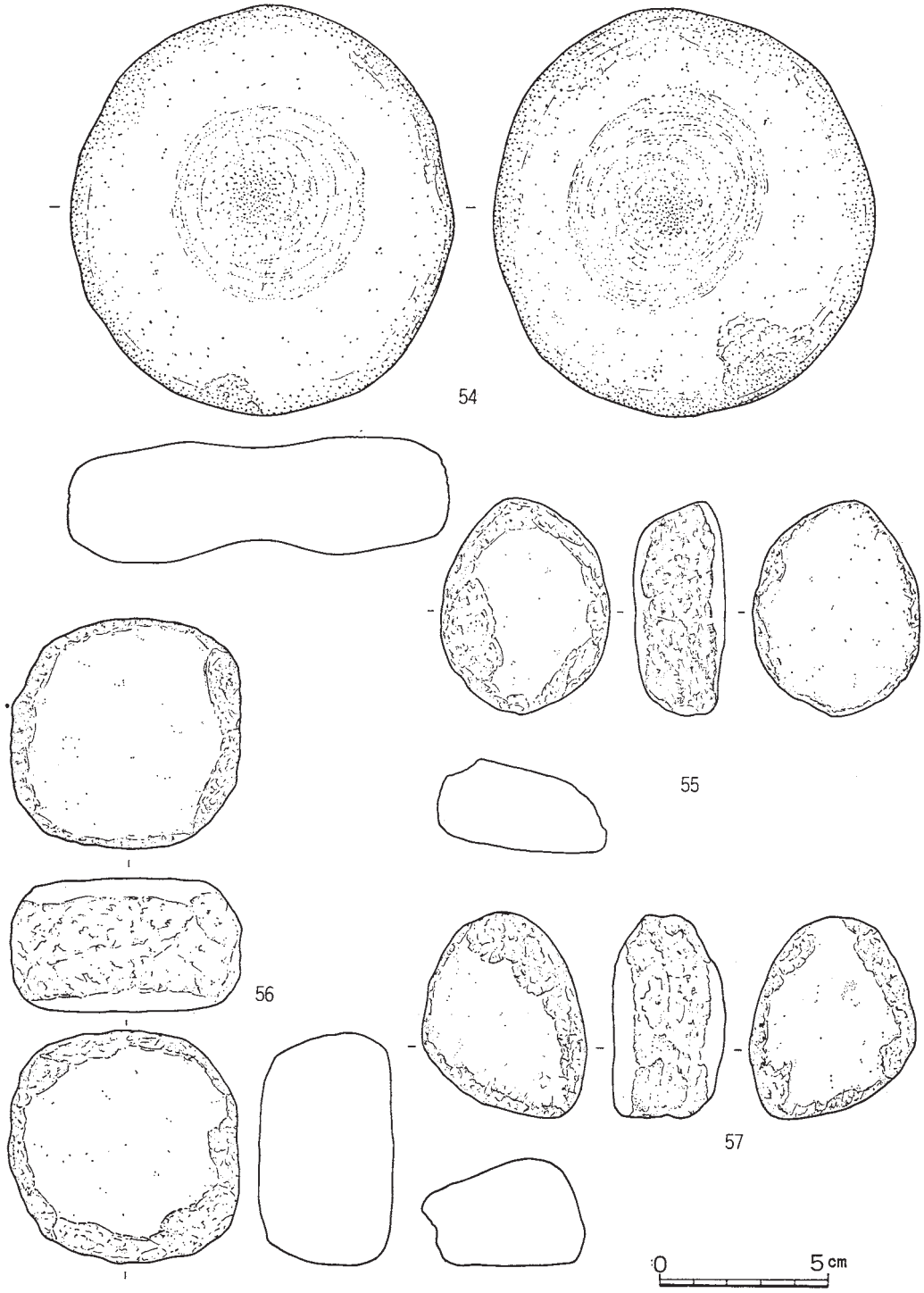
第12図　旧石器時代の石器（石核）



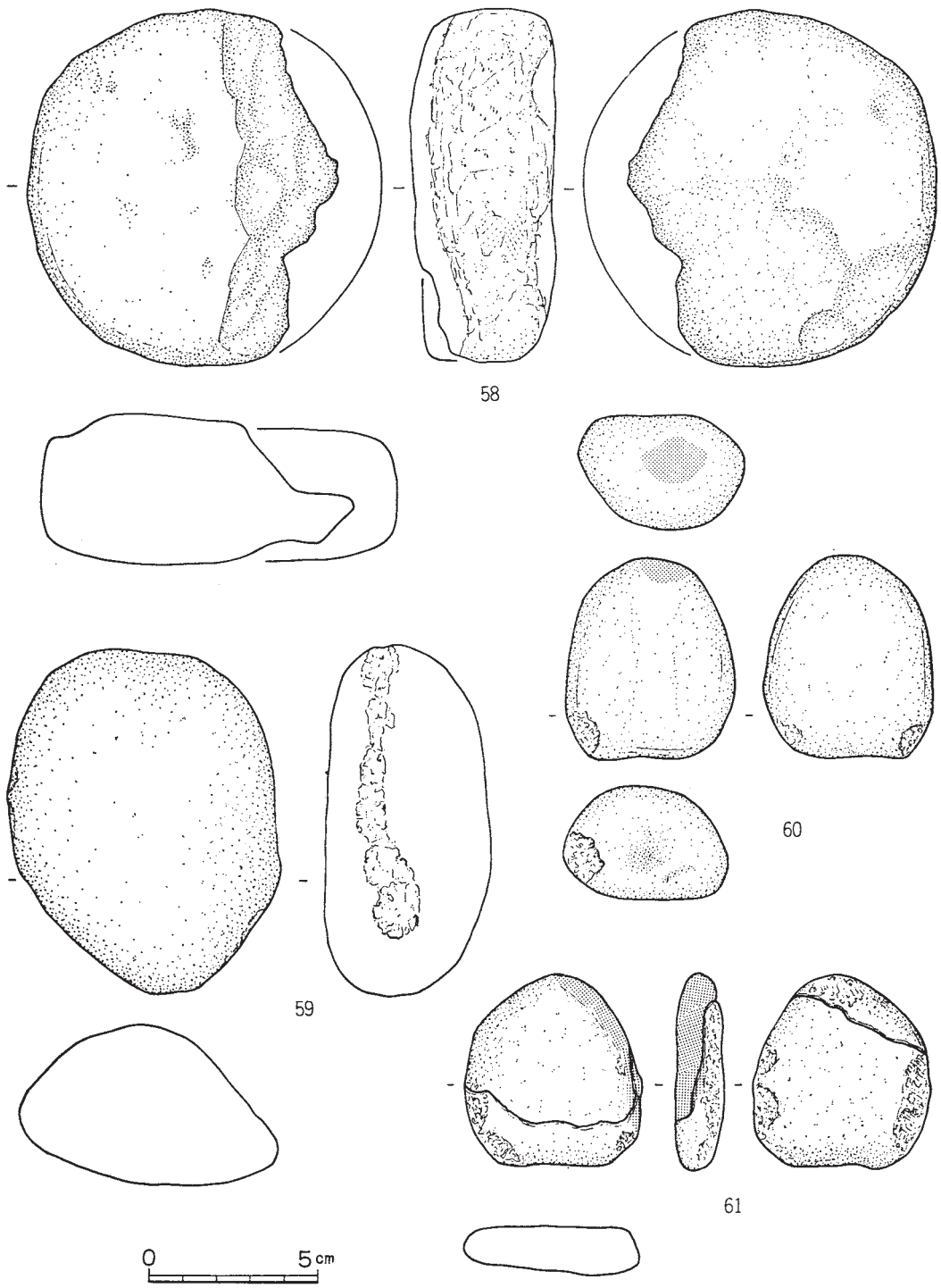
第13図　旧石器時代の石器（石核・剥片）



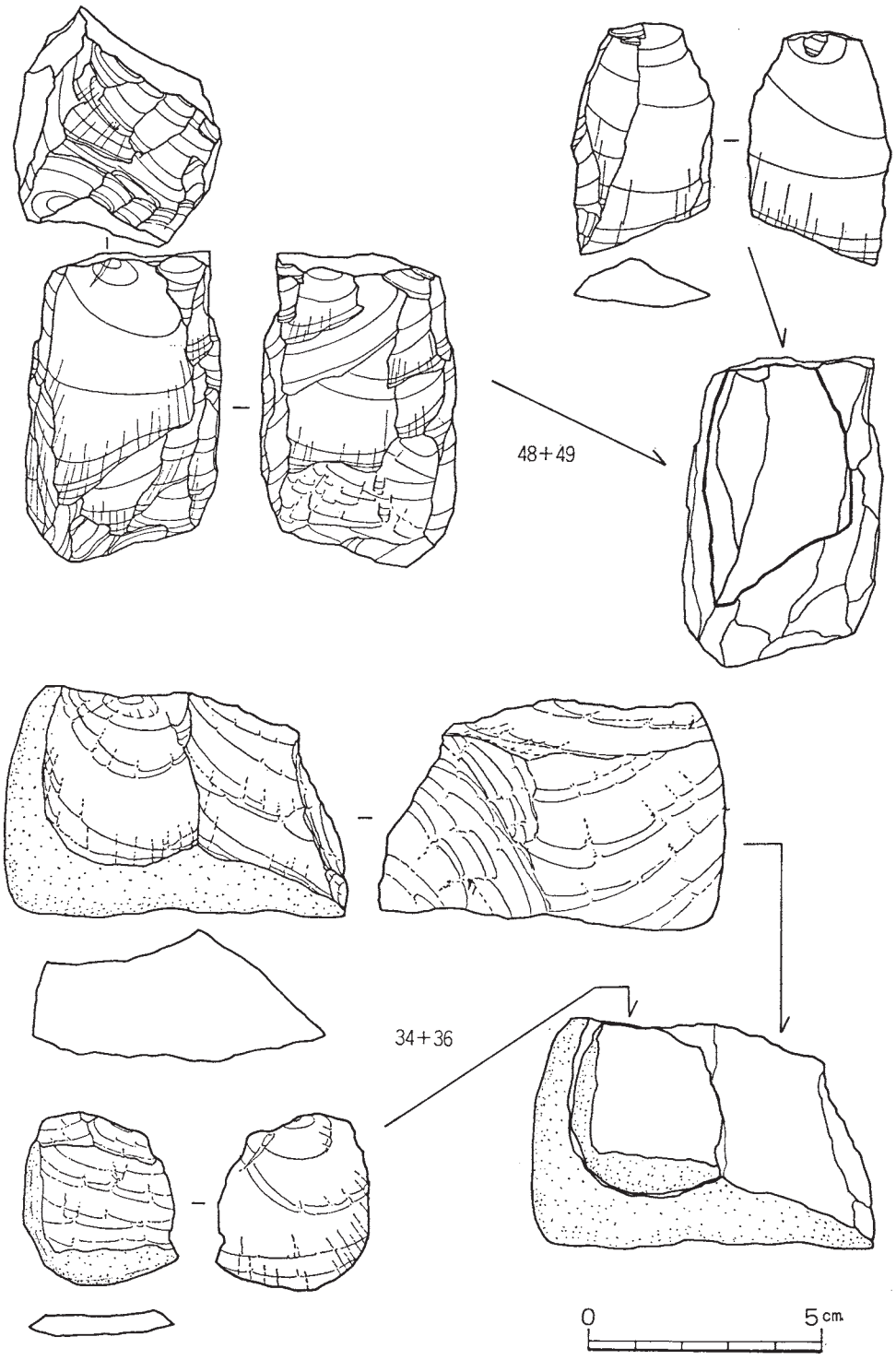
第14図　旧石器時代の石器（石核）



第15図　旧石器時代の石器（磨石・たたき石）



第16図　旧石器時代の石器（磨石・たたき石）



第17図　旧石器時代の石器接合資料

が行われている形跡が認められる。44は玉髄製の石核であるが，打面を上下２ケ所に設けているものの，剝片剝離作業面は表面及び両側縁であり，打点を左右に移動させ剝片剝離を行うことによって，幅に比べて厚さの薄い形状を成したものである。45・46は珪質頁岩製，47は細粒凝灰岩製のものであり，47では幅広の剝片が剝離されているが，打面の90°転移が行われている。その他，珪質頁岩製の例では剝離面を打面として，盛んに打面転移が行われている。

剝片（第７～９図）　剝片は縦長のものと，幅広のものがみられる。幅広なものは石核の観察から，打面調整，打面再生によって生じたものが多いものと判断されよう。19・23・24・26・29・31は，打面調整，打面再生剝片と考えられよう。第９図に示したものは，母岩を同一にする資料である。細粒凝灰岩製であり，礫面を残す石核から単設の打面を設けて，幅広の剝片や，礫面を一部に残した剝片を剝離している。なお，34･36は，第17図に示したように接合する資料である。

磨石・たたき石（第15・16図）　谷地前Ｃ遺跡の石器組成の中で特徴的なのは，磨石・たたき石が存在することである。素材には，59が細粒砂岩を用いているほかは，いずれも細粒凝灰岩である。54は表裏いずれも中央部に窪みを有し，周縁がタタキをうけており，一見して縄文時代のタタキ石とみまちがうものである。その他はいずれも周縁にタタキ痕を有するものであり，表裏とも磨耗しているが，顕著に面取りのある磨耗面は，スクリーントーンにて示した。

第２節　竪 穴 住 居 跡

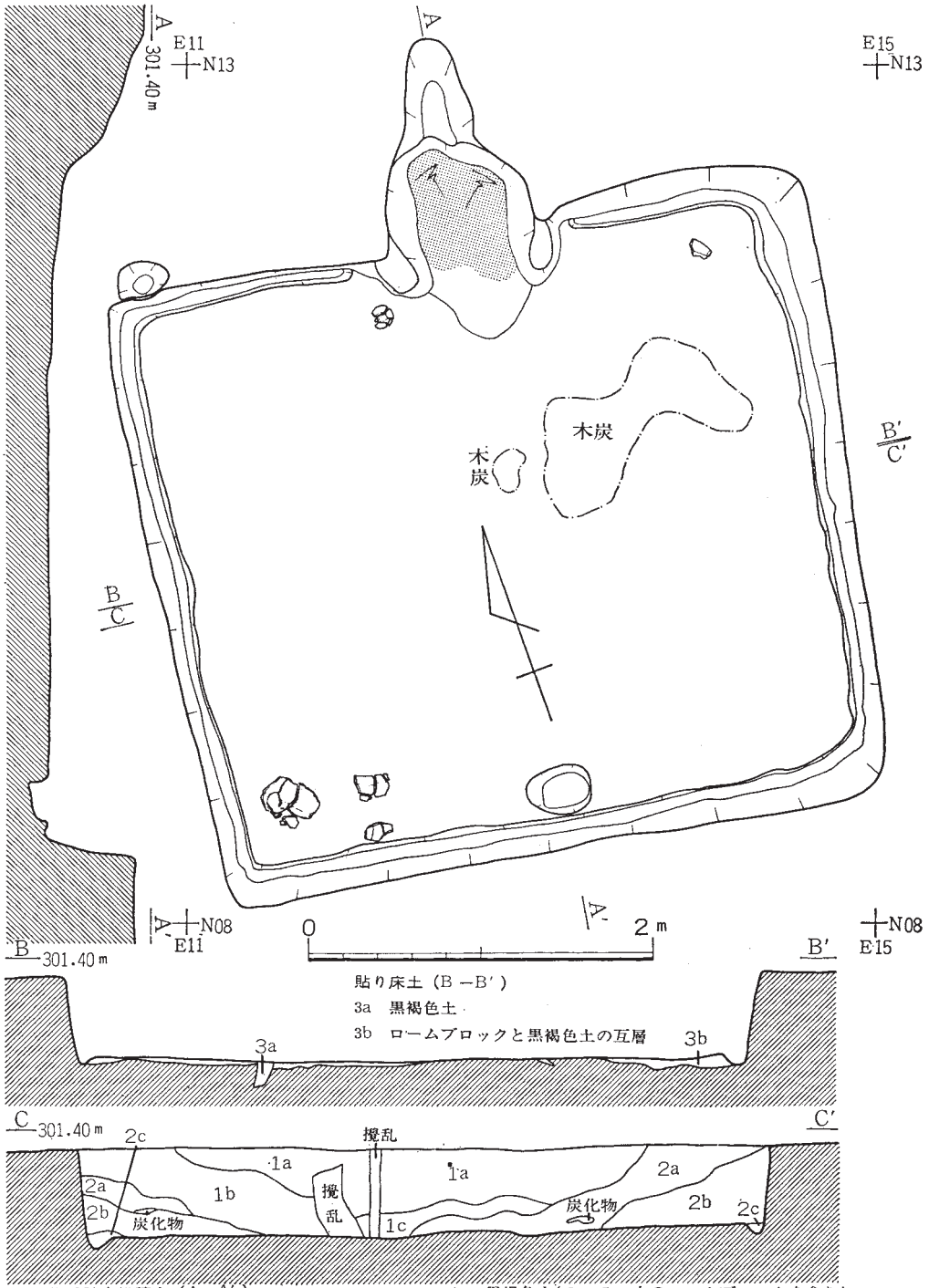
今回の調査で検出された住居跡は20軒にのぼる。そのうち１軒は南辺の一部を確認しただけであり，54年度工事区外に位置するため精査は実施しなかった。また工事区外の桑畑に北側約1/2がのびている重複した２軒の住居跡は，地権者の承諾が得られず，工区内にあたる南側部分だけ発掘せざるを得なかった。したがって全容の判明した住居跡は17軒ということになる。これらは出土した遺物などから，奈良・平安時代に位置づけられるものである。

なお昭和52年度の調査では22軒のほぼ同時期の住居跡が検出されているので，今回検出の住居跡にはこれに継続する遺構番号を付している。23号住居跡（ＳＩ23）～42号住居跡（ＳＩ42）が今年度検出された住居跡となる。

23号住居跡　ＳＩ23

遺　　構（第18図，図版13）

本住居跡は，調査区東北端付近の黒色土層下ローム層上面において検出された。遺構内堆積土層は，大別して３層を確認することができたが，各層ともロームブロックや木炭を多量に含んでおり，人為堆積と考えられる。



住居跡内堆積土（A－A'）

1a　黒褐色土（ローム粒子を少量含む）

1b　黒褐色土（1aより黒味強く，ロームブロックを含む）

1c　黒褐色土（３～５㎝大のロームブロックを含む）

2a　黄褐色土（黒褐色土とロームの混合土）

2b　黄褐色土（2aよりロームが少ない）

2c　黄褐色土（2aよりローム多い）

第18図　23号住居跡

遺構プランは，北壁中央部にカマドを有する東西4.1m，南北3.6mの方形を呈する。住居跡内部には，四周に幅８cm，床面よりの深さ８cmの周溝が巡っている。周溝は土層観察をもとにすれば，住居廃棄以前は埋められていた可能性が強い。ピットは南壁中央部に径30cm，深さ15cmの規模をもつものと，北西コーナーの住居跡に隣接して柱穴状のピットが１基検出されただけであり，主柱穴と考えられるものは確認されなかった。P_1は住居入口と何らかの関連のあるものと考えておきたい。床面は住居跡中央部分を除いて，ロームブロックと黒色土によって貼り床されており，表面は固く踏み固められている。

カマドは，北壁中央部に壁を掘り込んで構築されているが，天井部は崩壊しており，両袖および燃焼部・煙道部が残存している。焚口部の幅は約65cmを測り，燃焼部はやや窪んでおり，底面は固く赤変している。奥壁は，ゆるやかに立ち上り，煙道部へと続いている。煙道部の長さは約60cmあり，先端へ向かってゆるやかに立ちあがっており，煙出し等の施設はみられない。カマド主軸の方位は，N10° Eである。

遺　　物（第19図，図版81）

本住居跡内からの遺物は，堆積土居中にほとんどみられず，カマド内や，床面より若干の遺物の出土があっただけであった。図化した資料は非ロクロ成形の土師器杯・甕３点だけであるが，カマド内出土資料にロクロ成形による土師器杯破片がある。

〔土　師　器〕

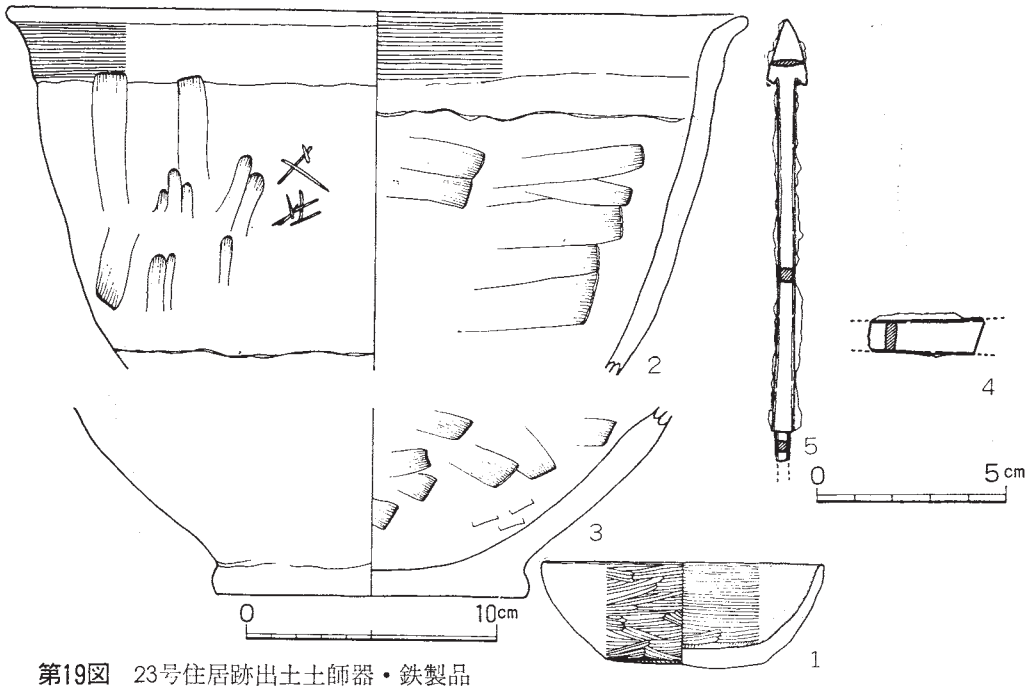
杯１（第19図１）　カマド付近の床面上より出土した完形の杯である。口径11.0cm，器高は4.2cmを測り，体部から口縁にかけてやや内彎する器形を呈し，底部は平底である。内・外面，底部とも丹念にヘラミガキが施されており，内面は黒色処理され，漆の付着がみられる非ロクロ成形の杯である。

甕１（第19図２）　住居跡南西コーナー付近の床面より出土した甕であり，体部破片が欠失しており，1/3ほどの破片より復元実測した。口縁端が外反し，体部はあまりふくらみをもたずに底部にいたるものと考えられる。口縁部は，内面ともにヨコナデが行われており，体部内・外面にはヘラナデが行われている。内面には，粘土紐積み痕が明瞭に残っている。体部には，ヘラによるものと考えられる線刻がみとめられるが，文字なのか記号であるのか判断できない。

甕２（第19図３）　甕１に近接して床面上から出土した甕の底部付近の破片である。底部が外へ張り出し，体部下半で大きくふくらんで丸みをもつ器形を呈するものと考えられる。器面はヘラナデによる調整が行われている。底部には木葉痕を有する。

〔鉄　製　品〕

刀子（第19図４）　堆積土上層より出土した刀子破片であり，小破片のために形状は予測しがたいが，茎の部分であろう。



第19図　23号住居跡出土土師器・鉄製品

鉄鏃（第19図５）　有茎の尖根式の三角形を呈する鉄鏃であり，現存部の長さは11.7㎝を測る。茎の長さがかなり長く，断面形は四角に作られている。先端部幅は1.0㎝，長さ1.7㎝，厚さ0.2㎝を測る。篦代部分の先端が欠失している。

ま　と　め

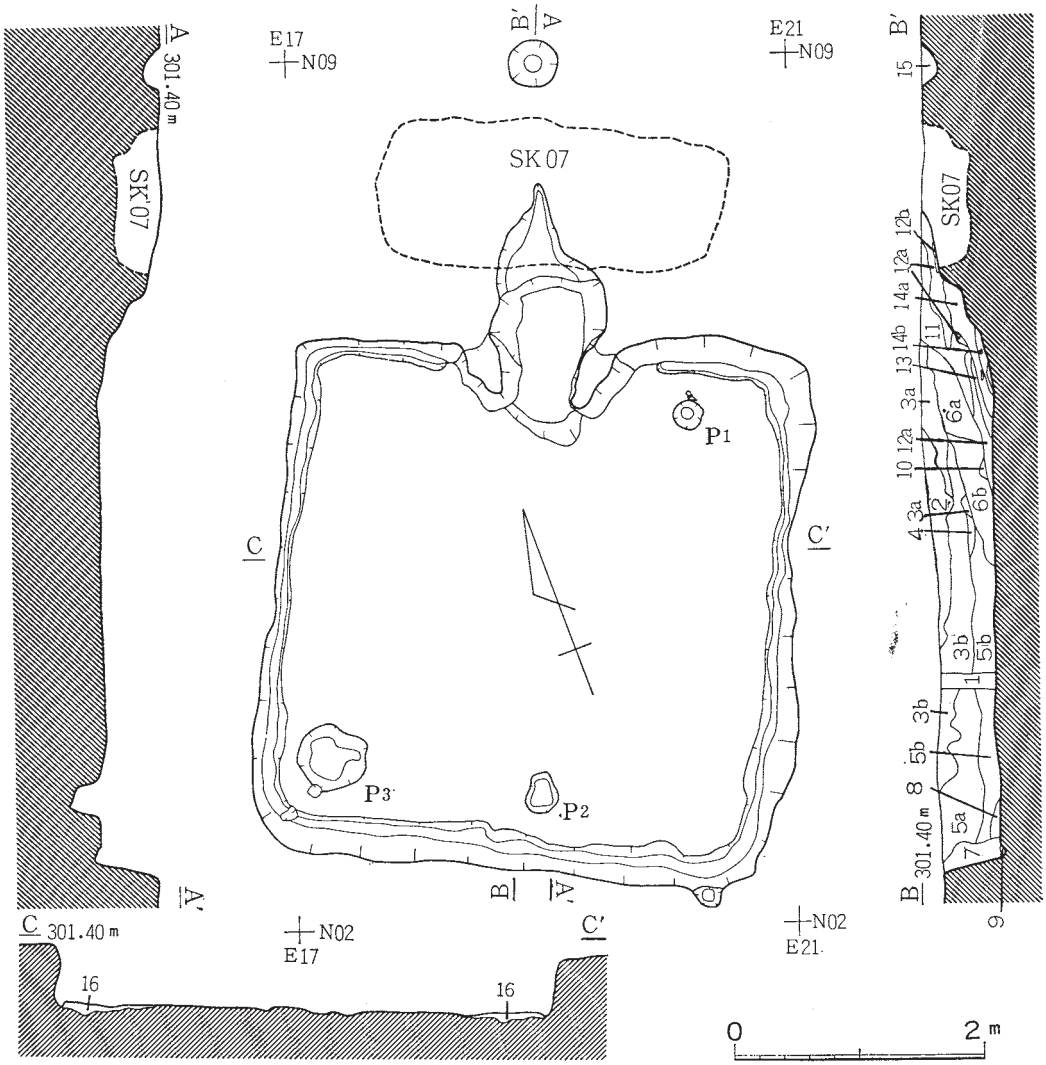
23号住居跡は北壁にカマドを有する住居跡である。住居跡内堆積土にロームがブロック状に混入し，人為的に埋められた可能性がある。遺物の量は少ないが，土師器甕はすべて非ロクロ成形であるものの，杯にはカマド内出土資料にロクロ成形の杯破片があり，これらの様相は奈良時代末葉の土師器組成と思われる。したがって本住居跡の年代も，ほぼこの頃に比定できよう。

24号住居跡　ＳＩ24

遺　　構（第20図，図版14）

本遺構は，谷地前Ｃ遺跡において最も東端に位置する住居跡であり，ＳＢ12とＳＫ07と一部で重複あるいは隣接している。新旧関係は，ＳＫ07を切って本住居跡を構築しているので両者の関係は明白であるが，ＳＢ12との関係においては，住居跡確認面において，ＳＢ12の柱のあるべき位置に柱穴と考えられるものが確認されたものの，土層観察によっても柱穴の掘形は確認できず，ＳＢ12との新旧関係にはいささか躊躇せざるをえない。

住居跡内堆積土層は，16層に分けられたが，大別してカマド付近の自然流入堆積のものと，住



住居跡内堆積土

1　黒褐色土(SB12の柱穴)
2　黒褐色土(ローム粒子少量含む)
3a　茶褐色土(若干のローム・灰白色砂質粘土を含む)
3b　茶褐色土(ロームわずかに含む)
4　褐色土(ローム粒子わずかに含む)
5a　黄褐色土(褐色土主体・ローム粒子・小ブロックを多量含む)
5b　黄褐色土(ローム粒・小ブロックを多量含む)
6a　黒褐色土(灰白色砂質粘土を少量含む)
6b　黒褐色土(黄色ローム粒を少量含む)
7　黒褐色土(黄褐色土と斑状に混合)
8　灰白色砂質粘土(小ブロックを少量含む)
9　黄色土(黒褐色土少量含む)
10　灰白色砂質粘土
11　黒褐色土(ローム粒を極少量含む)
12a　灰白色砂質土(黒色土・焼土を多量含む)
12b　灰白色砂質土
13　褐色土(ローム・灰白色土・焼土を若干含む)
14a　暗赤褐色焼土(灰白色砂質土混合)
14b　暗赤褐色焼土(14aより朱色味の強い焼土)
15　黄褐色土(黒褐色土と黄褐色ロームの混合土　焼土・炭クズを少量含む)

貼り床土

16　ロームブロックと黒色土の互層

第20図　24号住居跡

居跡内自然流入堆積のものとに分けることができよう。土層観察からみた埋没のプロセスは，カマド付近の堆積―→住居跡内の堆積ということが考えられる。前者は砂質の土層を主体とするが，後者は，ローム粒をふくんだ褐色土が中心である。

遺構プランは，北壁にカマドを有し，東西4.2m，南北4.5mの規模の方形を呈している。住居跡内部には，四周の壁に沿って幅15cm，床面よりの深さ５cmの周溝がめぐり，また３ケ所のピットが検出されている。ピットは，位置から考えて主柱穴とすることはできない。床面は，かたく踏みしめられており，周溝寄りの部分に黄褐色土による貼り床の部分が確認されている。壁は急斜に立ちあがり，南壁中央部分での床面から遺構確認面までの高さは，約45cmをはかる。

カマドは，北壁中央部分に壁を掘りくぼめて構築されており，天井部は崩壊しているが，燃焼部・煙道部がかなり良好に残っている。焚口部幅は約40cmであり，袖は粘土で構築されている。燃焼部は床面を多少掘りくぼめ，奥壁はやや急に立ちあがり煙道部へと続いている。さらにＳＫ07の北側に，直径35cmほどの円形の煙出しピットが存在する。

遺　　物（第21図，図版73・82）

遺物は，住居跡堆積土内や，カマド内から若干の土師器が出土している程度であり，その他煙道部から鉄鏃が１点出土しているが，概して遺物の出土量は少ない。

〔土　師　器〕

杯１（第21図１）　体部上半の欠失したロクロ成形による杯破片である。回転糸切りによる底部切り離し痕をそのまま残し，体部下端には，回転ヘラケズリ再調整が加えられている。内面は，微細なヘラミガキが加えられた後，黒色処理されている。全体のプロポーションは，体部上半の欠失のため不明であるが，底径7.2cmで，ややあげ底ぎみの底部をもち，体部が若干外へ開く形をするものであろう。床面からの出土である。

杯２（第21図２）　ロクロ成形による杯であり，住居跡堆積土中出土のものと，カマド焼土内出土の破片が接合しており，全体の2/3ほどが現存している。底部全面から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されており，底部切り離し技法は観察できない。内面はヘラミガキが行われ，黒色処理が施されている。口径13.6cm，底径7.0cm，高さ5.0cmを測り，底部から口縁へ向かって外へ開く器形を呈し，口縁端がやや外反している。底部には「足」の墨書がある。

甕１（第21図３）　住居跡堆積土中より出土した甕の底部付近の破片である。成形技法は，ロクロによらず，内・外面ともヘラケズリ調整が行われている。底径約10cmを測り，体部にややふくらみを有するものと考えられる。

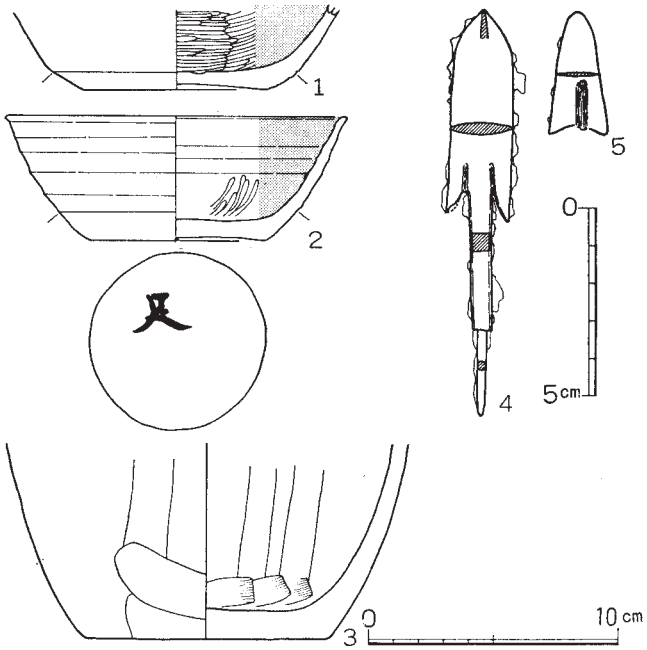
甕２（第21図４）　カマド焼土中より出土したものであり，全体の1/4ほどの破片から復元実測を行った。口縁部が著しく外反し，体部中央部がふくらむ器形を呈する。口縁部はヨコナデされ，体部は，縦方向のヘラケズリ調整を行った後，ヨコナデされている。口縁部屈曲する部分は，

成形の際に指頭によっておさえた痕跡が残っている。

〔鉄　製　品〕

鉄鏃１（第21図５）　カマド煙道部から出土した鏃身が五角形を呈する有茎の鉄鏃である。全長は10.8cmを測り，鏃身が全長の約半分あり，箆被の断面は四角形である。

鉄鏃２（第21図６）　住居跡覆土上層より出土した無茎の鉄鏃である。木質の付着がみられ鏃身先端は，丸みをおびる。全長3.2cmを測る。



第21図　24号居跡出土土師器・鉄製品

ま　と　め

本住居跡はＳＫ07・ＳＢ12と重複関係にあり，古墳時代と思われるＳＫ07よりは新しいが，ＳＢ12との新旧関係は明らかにできなかった。床面出土の遺物が少ないが，床面およびカマド内出土の土師器杯は，ロクロ成形で回転ヘラケズリ再調整を施しており，平安時代初頭に位置づけられるものである。よって本住居跡の年代もこれらの遺物の年代に比定されよう。

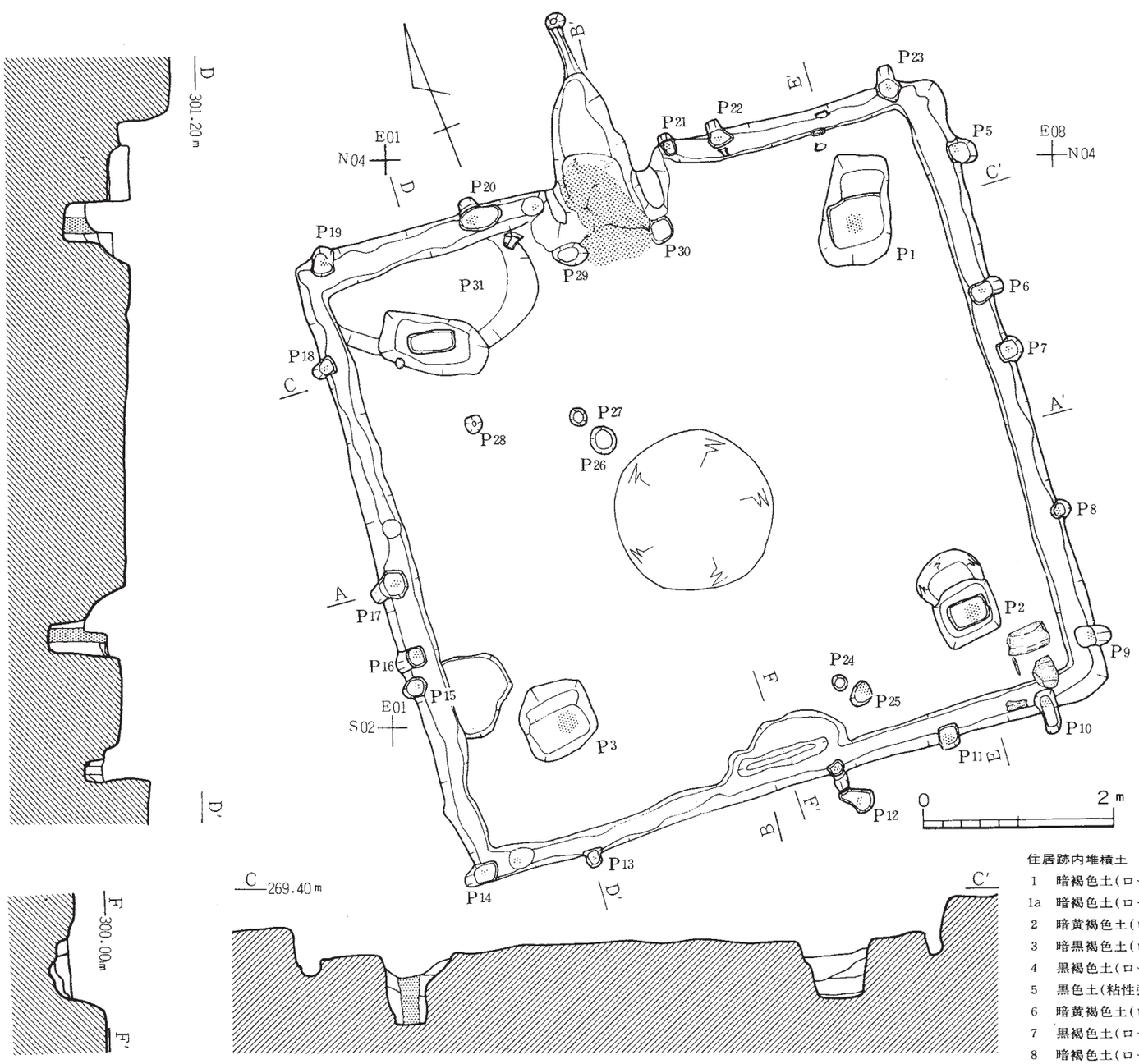
25号住居跡　ＳＩ25

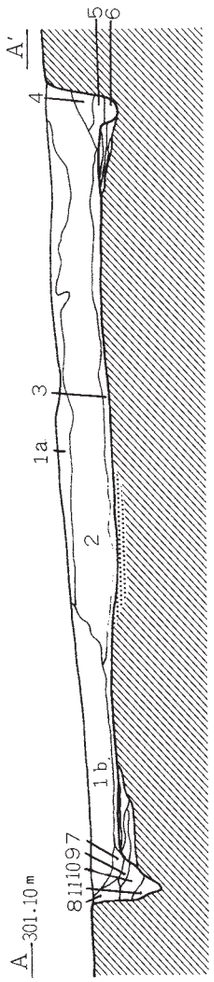
遺　　構（第22・23図，図版15・16）

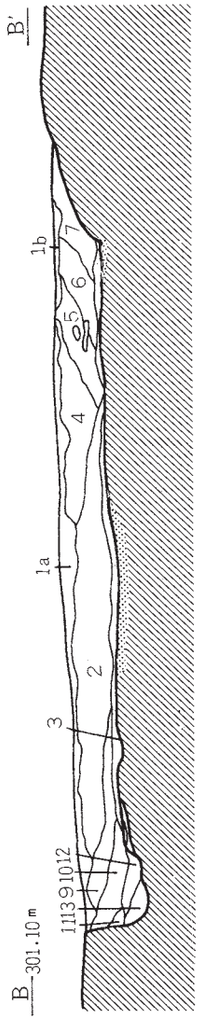
調査区東部の標高300.8m付近に位置する住居跡であり，ＳＢ09Ａ・Ｂと近接して黄褐色ローム層上面で検出された。遺存状態のかなり良好な大形の住居跡である。

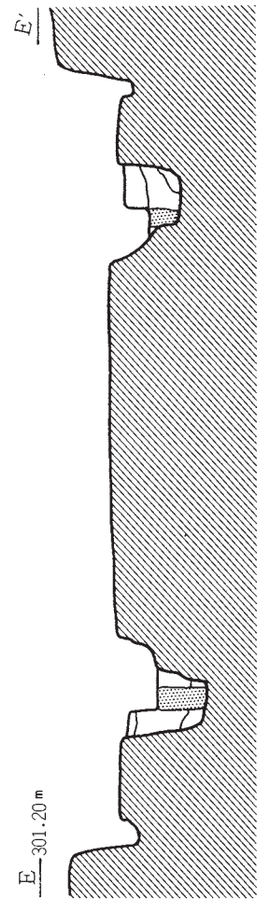
住居跡内堆積土層は，かなり細別されたが，大きくみて，壁際に分布する壁崩壊土層と住居跡内に広く分布する１層暗褐色土層，２層暗黄褐色土層と，床面上に分布する暗褐色土層に分けられよう。これらは，概ね自然流入堆積と考えられるが，一部に焼土・遺物等の投げ込みと判断される部分も確認されている。

遺構は，北壁中央部にカマドを有する東西7.0m，南北6.8mのほぼ方形のプランを呈する。住居内壁際の四周には，幅20cm，床面よりの深さ10cmの周溝がめぐっている。床面から遺構確認面までの深さは，北東コーナー付近で約55cm，南西コーナー付近で約30cmを測り，また各周壁には，22ケ所の壁柱穴が確認されている。壁柱穴のほとんどは，直径10cmほどの円形の柱痕を確認する









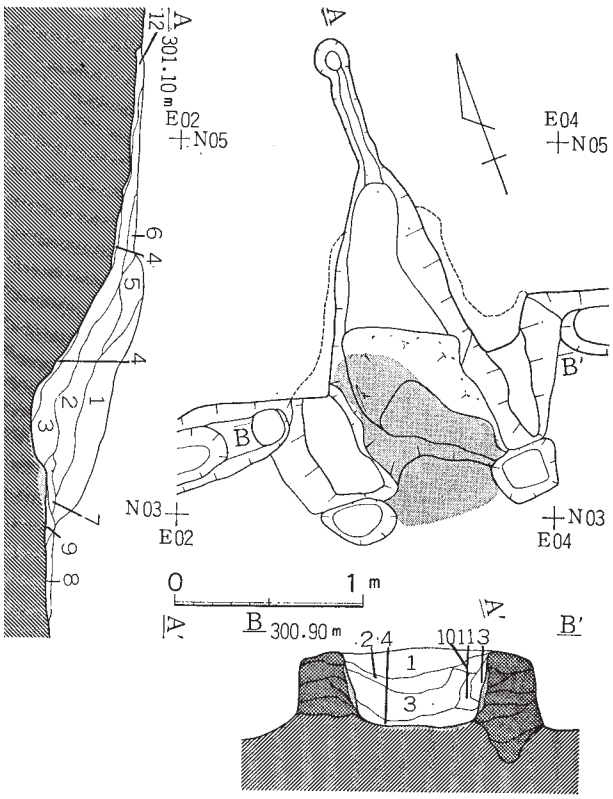
第22図　25号住居跡

住居跡内堆積土
1　暗褐色土(ローム粒を少量含み,比較的かたい)
1a　暗褐色土(ローム粒を多量含む)
2　暗黄褐色土(ロームブロックを多量含み,ざらつく)
3　暗黒褐色土(ローム粒を少量含み,しまりがある)
4　黒褐色土(ローム粒を少量含む,軟質)
5　黒色土(粘性強い)
6　暗黄褐色土(ロームブロックを多量含む)
7　黒褐色土(ローム粒をほとんど含まず,しまりなし)
8　暗褐色土(ローム粒を少量含む,粒子微細)
9　黒色土(粘性強い)
10　暗黄褐色土(ロームブロックを多量含む)
11　黄褐色土(ロームブロックを含む)

住居跡内堆積土 (B－B′)
1　暗褐色土(ローム粒を少量含み,比較的かたい)
1a　暗褐色土(ローム粒を多量含む)
2　暗黄褐色土(ロームブロックを多量含み,ざらつく)
3　暗黒褐色土(ローム粒を少量含み,しまりがある)
4　黄褐色土(ロームブロックを多量含み,かたい)
5　暗黄褐色土(ロームブロックを多量含み,やわらかい)
6　黄褐色土(ロームブロック・焼土・灰の粒子を多量含む)
7　暗褐色土(ローム粒を少量含み,やわらかい)
8　灰赤褐色土(焼土・灰を多量含み,かたくしまる)
9　暗褐色土(ローム粒を少量含み,比較的しまりがある)
10　暗黒色土(ローム粒を少量含み,やわらかい)
11　暗黄褐色土(ローム粒を含み,やわらかい)
12　暗黄褐色土(ロームブロックを含み,粘性がある)
13　暗黄褐色土(ローム粒を多量含み,粘性強い)

ことができたが，掘形は，基底面が角ばる方形を呈するものが多い。各柱穴間の長さや設置されている位置にもかなりのばらつきがみられ，対応する壁間においても，対角線上には位置していない。

主柱穴は，４ケ所確認され，柱痕もP_4を除いてそれぞれ検出することができたが，掘形の重複が，いずれのピットにも認められた。これによって，本住居跡は，１度の建て替えがあったものと解釈される。各柱穴の掘形は方形を呈しており，直径20cmほどの柱痕が確認されている。P_1の新しいほうの掘形の規模は，一辺が70cmの方形を呈し，床面よりの深さは70cmを測り，P_2は一辺60cm，深さ65cm，P_3は一辺75×50cm，深さ80cm，P_4は一辺110×60cm，深さ70cmをそれぞれ測る。



カマド内堆積土
1　黒色土(焼土粒を少量含む)
2　暗赤褐色土(焼土の粒子を少量含む)
3　赤褐色土(焼土の粒子を多量含み木炭も少量含む)
4　暗黄褐色土(木炭を少量含む)
5　黄褐色土(粘土質砂層)
6　暗黒色土
7　灰黄褐色土(灰を多量含む)
8　灰黄褐色土(焼土・灰・ローム粒子を多量含む)
9　灰赤褐色土(焼土・灰を多量含む)
10　暗赤色土(細かい焼土粒を多量含む)
11　暗黄色土(ローム粒子を多量含む)
12　暗黄褐色土(焼土を少量含む)

第23図　25号住居跡カマド

住居跡中央部分には直径1.6ｍの，円形の床面より８cmほど窪んだ部分が観察された。熱をうけてかなりかたく赤変しており，木炭の分布も認められた。この部分での火の使用を物語っているものと思われる。北西コーナー付近には，上面が貼り床された状態で，皿状のピットが検出された。柱穴との関係から，建て替えされる前の住居跡のものと考えられるが，性格等は不明である。また，南壁ほぼ中央部分の周溝に隣接して，不整の半円形を呈するピットと，底面に長さ1.0m，幅20cmの細長いピットが検出された。土層観察によっても，上面が貼り床されていたとは認められず，P_{12}とともに住居入口に関係する施設と考えるのが妥当であろう。細長いピットは，はしごなどの入口施設との関連を十分に予想させるものである。ちなみに，南壁中央

部分での床面と遺構確認面との高さは30cmを測る。その他，住居跡内には，P_{24}～P_{28}のように直径10cmほどの円形のピットが検出されているが，それらはいずれも深さ５cm内外のものである。カマドは，北壁のほぼ中央部分に検出されている。両袖とも砂質の粘土によって構築されている。焚口部幅は65cmを測り，両袖前面にP_{29}・P_{30}の小さなピットが付設されている。燃焼部はやや床面より掘り窪められており，底面は著しく焼けている。奥壁はゆるやかに立ち上がり，煙道部へと続いているが，煙道部は燃焼部近くでかなりの幅をもち，そして先端部が狭くなるという構造であり，先端部に向かって高くなるという傾向を示している。カマドは掘形を設定し，黄褐色ロームを貼りつけて構築してあり，両袖下には不整のピットが設けられていることが判明している。カマド軸線はほぼ磁北を指している。

床面は，周溝寄りの部分が貼り床されており，それ以外は極めて固く踏みかためられている。西壁やや南寄りの部分ではロームブロック，東南コーナー付近では花崗岩の切石と焼土・土師器の投げ込みと思われる部分が検出されている。

遺　　物（第24図，図版73）

本住居跡内からの遺物の出土は，土師器杯・甕破片・須恵器破片・円礫等多数にのぼるが，住居跡堆積土中よりの細かい破片が多く，図示できるものは住居跡の大きさの割には少なかった。

〔土　師　器〕

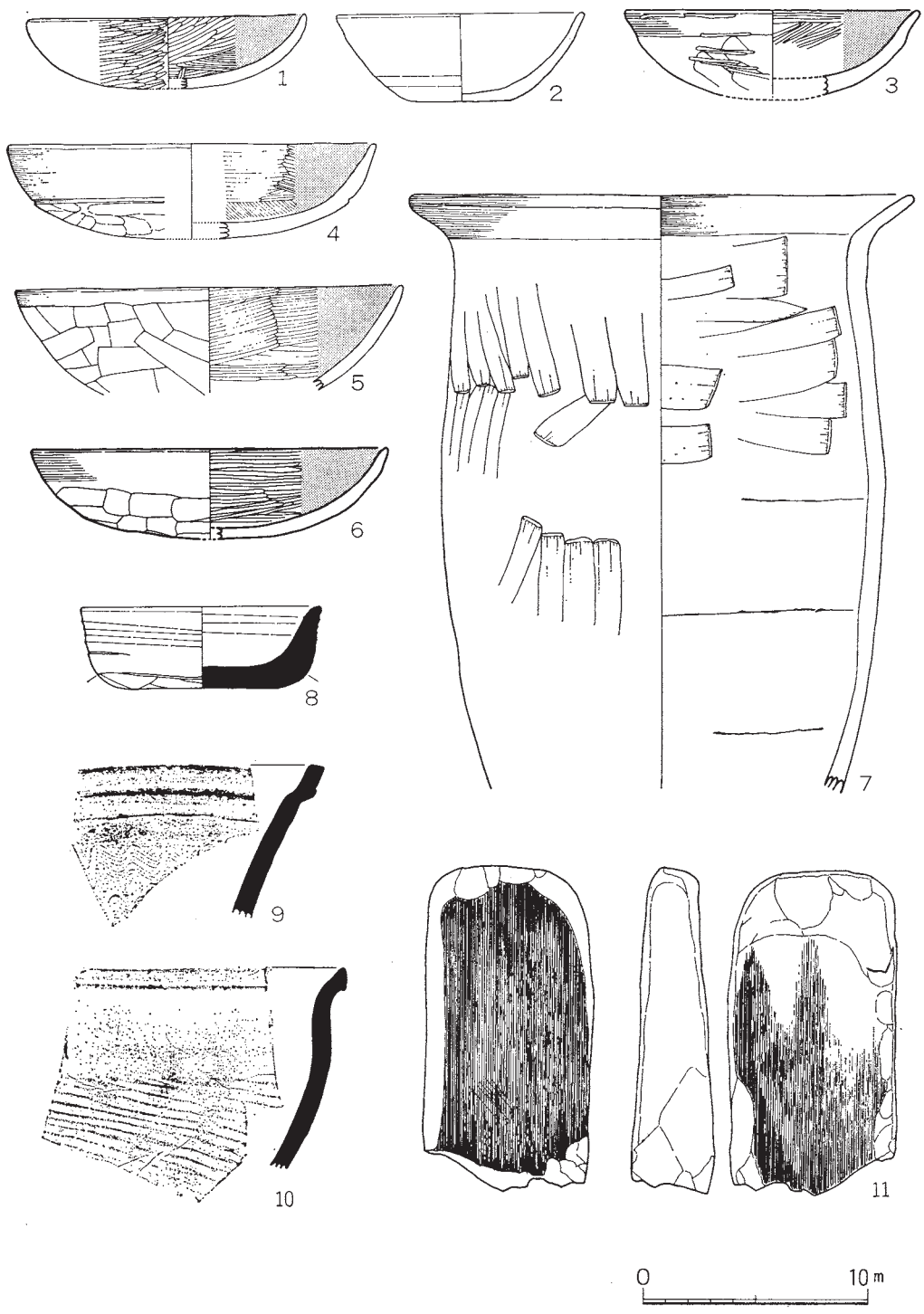
杯１（第24図１）　住居跡堆積土中より出土した土師器杯である。内外面・底部とも器面調整は細かなヘラミガキが行われており，ヘラミガキ後全面にわたって黒色処理が施されている。体部内彎する器形を呈し，口径12.4cm，底径5.3cm，高さ3.2cmを測る。

杯２（第24図２）　カマド内から出土したロクロ成形による杯であり，全体の1/3ほどの大きさより復元実測を行った。器面調整は体部下端に回転ヘラケズリが加えられており，また底部は手持ちヘラケズリ再調整が行われている，口径11cm，底径4.6cm，高さ3.9cmを測る。

杯３（第24図３）　住居跡堆積土２層より出土した杯であり，口縁から体部にかけての1/3ほどが現存している。おそらく丸底を呈するものと思われ，体部はヘラケズリ後部分的にヘラミガキが行われており，口縁はヨコナデを施し，一部ヘラミガキが行われている。内面は丁寧にヘラミガキ調整が施されている。口径12.8cm，推定高4.0cmを測る。

杯４（第24図４）　床面出土の丸底を呈する杯破片である。全体の1/3ほどが現存しており，休部中央にやや角張った段をもつものである。口縁はやや内彎ぎみに立ち上り，調整は口縁部がヨコナデ，体部は手持ちヘラケズリ，また内面はヘラミガキを行ったのち，黒色処理が行われている。推定口径15.4cm，高さ4.2cmを測る。焼成はかなり良い。

杯５（第24図５）　住居跡堆積土３層より出土した杯であり，底部付近が欠失している。やや内彎ぎみに立ち上がる器形を成すもので，口縁部付近にヨコナデを行い，体部は手持ちヘラケズ



第24図　25号住居跡出土土師器・須恵器・砥石

リ再調整を行っている。内面は細かなヘラミガキを行い，黒色処理が施されている。推定口径17cmを測り，体部器面の荒れが激しい。

杯６（第24図６）　東壁際の住居跡堆積土３層より出土した杯破片である。底部丸底を呈し，体部がやや内彎する器形を呈する。口縁部はヨコナデされ，体部は手持ちヘラケズリ調整が行われ，内面は横方向の細かいヘラミガキを行ったのち，黒色処理が施されている。口径15.4cm，高さ4.0cmを測り，焼成はかなり良い。

甕（第24図７）　東南コーナーの焼土，花崗岩切石の投げ込み部分から出土した甕であり，底部付近を欠失している。口縁は外反し，体部はふくらみをもたない。器面調整は，口縁部内外面ともヨコナデが行われ，体部はヘラナデが行われている。また体部内面には，粘土紐積みあげ痕が残っている。現存部での高さは26.2cm，口径22.5cmを測る。

〔須　恵　器〕

杯（第24図８）　住居跡北西部分の床面より出土した須恵器杯である。約半分ほどが現存しており，比較的厚手の作りである。底部は手持ちヘラケズリ再調整が行われており，口縁がやや直立する器形を呈する。口径10.5cm，底径6.5cm，高さ3.6cmを測る。

甕１（第24図９）　２層より出土した大甕の口縁部破片である。口縁上端を平坦に作り出し，口縁下に波状文が２段みられる。焼成かなり良く堅緻である。

甕２（第24図10）　２層より出土した須恵器甕口縁部破片である。口縁はやや屈曲して口端がやや尖る。体部に叩き目を有し，内面にはあて具痕が残っている。全体的に灰白色を呈し，焼成は，あまり良くなく，器面のザラつきが著しい。

〔石　製　品〕

砥石（第24図11）　床面出土の砂岩製の砥石であり，表裏とも彎曲して窪み，側面とあわせて３面が使用されている。

ま　と　め

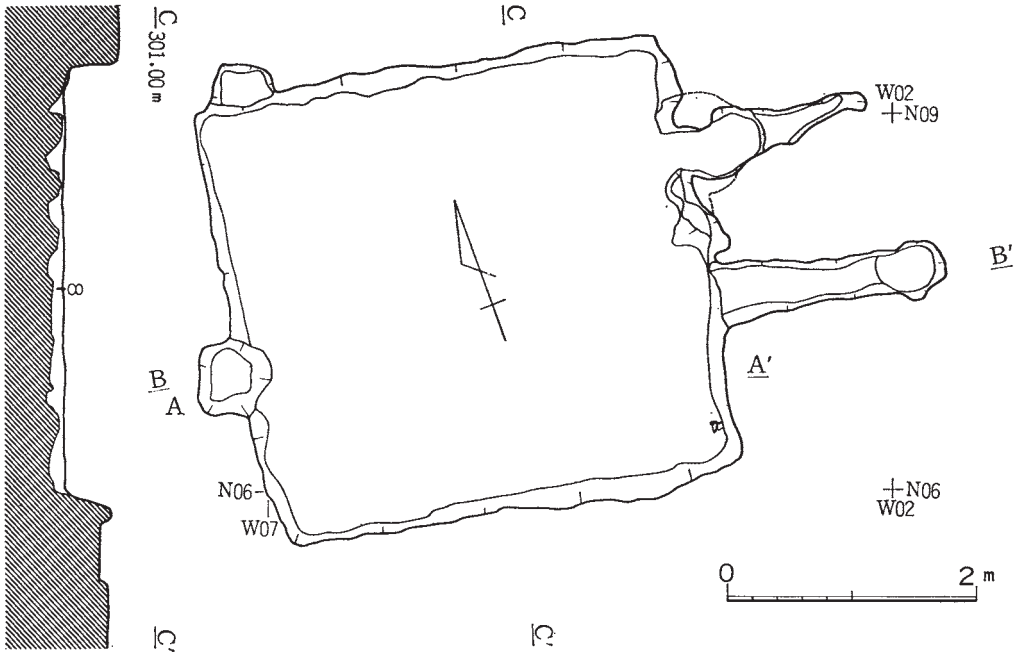
25号住居跡は１辺７ｍ前後の方形を呈し，谷地前Ｃ遺跡で検出された住居跡の中では最大の平面規模を有す住居跡である。その構造も整然とした掘形を有す４ケ所の主柱穴や，各壁面に検出された壁柱穴など，本遺跡の多くの住居跡に比較すると特異なものといえる。しかも主柱穴は掘形の重複があり，少なくとも１度建て替えのあったことがわかる。

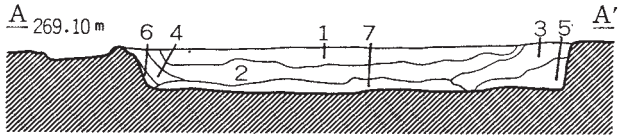
床面出土の資料は大半が非ロクロ成形による土師器であり，杯および甕の特徴は本遺跡２号住居跡出土土師器に類似するものと，若干後出的な要素を含むものである。また１点ながらロクロ成形による土師器杯がカマド内部より出土しており，住居の建て替えの事実を考えると，本遺構の機能した年代は他の住居跡に比べ，暗があるものと思われる。その中心は遺物相から見て奈良時代後半前後と考えたい。

26号住居跡　ＳＩ26

遺　　構（第25図，図版17・18）

本住居跡は発掘区中央の比較的平坦な所に位置し，地山ロームを掘り込んで造られている。ＳＢ10の掘形によって，西北コーナーと西壁中央部を切られているが，遺存状況はほぼ良好である。住居跡内堆積土は６層認められた。１・２層は黄褐色土ブロックが混じる暗褐色土で，ほぼ





住居跡内堆積土

1　暗褐色土(黄褐色土のブロックを含む)
2　暗褐色土(黄褐色土のブロックを含む，1より黄褐色土粒子を多量含む)
3　黒色土(黄褐色土のブロックを含む)
4　黒色土
5　暗褐色土(やや明るい黄褐色土のブロック・粒子を含む)
6　褐色土(壁の崩壊土)
7　暗褐色土(黄褐色土のブロック・粒子を含む，2より黒色土ブロックを多量含む)

貼床土

8　暗黄褐色土(暗褐色土を含む)

第25図　26号住居跡

遺構全体を覆う。３層は黄褐色土が混じる黒色土であり，４層は黒色土の単一層である。５層は褐色土で壁の崩壊土である。６層は黄褐色土ブロック，粒子を含む暗褐色土で，床面全体を覆う。壁際において将棋倒し状に堆積しているので，自然堆積と考えられる。

平面形は各辺とも多少出入りがあるが方形を呈し，隅はほぼ直角である。規模は南北約3.7m，東西約3.9m，床面積約12.3㎡を測るが，当遺跡においては比較的小型である。北辺中点と南辺中点を結ぶ軸線の傾きは，N12°Eである。壁は全体に約40cmの高さで遺存し，立ち上がりは急である。床面は平坦であったが，断ち割りの結果，住居跡の掘形は凹凸が激しく，ロームと茶褐色土の互層を叩きしめて貼り床としていた。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出できなかった。

カマドは新旧２つが検出された。古い方のカマドは，東壁の中央部に付設されている。右袖は完全に破壊され，左袖は新しい方のカマド右袖の基部としてわずかに残存している。住居跡の壁面を奥壁とし，砂入り灰白色粘土により袖部を継ぎ足している。天井部崩壊土にもわずかに砂入り灰白色粘土が認められる。奥壁は約10cmと低いが立ち上がりは急な勾配である。その上に取り付いた煙道は幅約30cm，長さ約140cmの溝状に掘り込まれたものである。約15°の傾きをもって高くなり，径約40cm，深さ約10cmの煙出しピットに連続する。

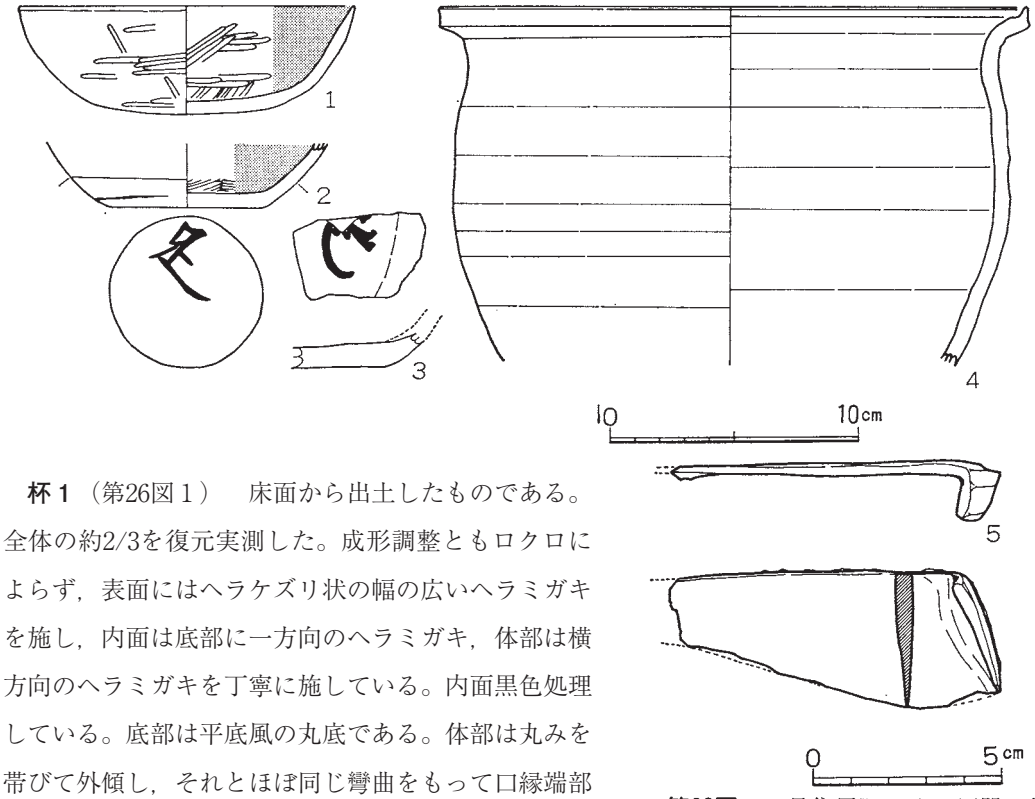
新しいカマドは東壁の北寄りに付設されている。既述のように古い方のカマド左袖を右袖の基部としている。燃焼部本体は壁の一部をえぐり取り，側壁に砂入り灰白色粘土を貼り付けており，本体は完全に壁外に張り出ている。砂入り灰白色粘土は，カマド内堆積土にもみられる。燃焼部は幅約45cm，奥行約80cmである。奥壁は約10cmと低いが立ち上がりは急である。その上に取り付いた煙道は，長さ約60cmと比較的短く，幅は末端に行くにしたがってすぼまる。また急な勾配で末端部に向かって高くなり，わずかにピット状をなした煙出しに連続する。

遺　　物（第26図，図版73・81）

遺物は旧カマド内から土師器甕破片，床面から土師器および須恵器杯破片・甕破片が出土している。そのうち旧カマド内出土の土師器甕片と床面出土の土師器杯片を図化した。堆積土内からは流れ込みの状態で土師器および須恵器杯破片・甕破片が多数出土しているが，いずれも小片のため図化できるものはない。なお堆積土１層中より鉄鎌が１点出土している。

〔土　師　器〕

甕（第26図４）　旧カマド内から出土したものである。口縁部から胴部上半部にかけての破片を復元実測したものである。残存部を観察する限りでは，内外面ともロクロによるナデを施している。口縁端部はつまみ上げており，内面にはそれによって生じた凹線が明瞭である。胴部は上半部において膨らみを有する。胴部と頸部の境は明瞭でない。頸部屈曲はかなり強く，口縁端部はほぼ垂直に立ち上がる。推定口径23.8cm，残存部最大胴径22.4cm，残存高14.0cmを測る。胎土には金雲母を含む。



第26図　26号住居跡出土土師器・鉄製品

杯１（第26図１）　床面から出土したものである。全体の約2/3を復元実測した。成形調整ともロクロによらず，表面にはヘラケズリ状の幅の広いヘラミガキを施し，内面は底部に一方向のヘラミガキ，体部は横方向のヘラミガキを丁寧に施している。内面黒色処理している。底部は平底風の丸底である。体部は丸みを帯びて外傾し，それとほぼ同じ彎曲をもって口縁端部に至る。法量は口径13.4cm，高さ4.3cmを測る。

杯２（第26図２）　床面直上から出土したロクロ成形による土師器杯底部破片である。口縁部を欠損しているが，外面は体部下端から底部全面を回転ヘラケズリ再調整しており，内面はヘラミガキ後黒色処理している。外面底部に「足」の墨書がある。底径6.3cm，残存高2.7cmを測る。

〔鉄　製　品〕

鉄鎌（第26図５）　堆積土１層から出土した。身部先端側を欠損している。残存長8.5cm，身部最大幅3.5cm，最小幅1.8cmである。基部は折り曲げられている。

ま　と　め

26号住居跡は10号掘立柱建物跡の掘形に切られており，それよりも古い。東壁に２つのカマドを検出できた。これらは遺存状態から中央部分のカマドを取り壊し，その北隣りに新しくカマドを構築したことが確認できる。床面から出土した土師器杯はロクロを使用していないのに対し，カマド内出土の土師器甕はロクロ調整によっている。これらの資料は，土師器におけるロクロ使用を考える上で興味深く，住居跡の年代を決定するには，遺構に伴う出土遺物が少ないが，前述のロクロ未使用の土師器杯とロクロ調整による土師器甕の共伴状況より奈良時代末から平安時代にかけてのものと考えられる。

27号住居跡　ＳＩ27

遺　　構（第27・28図，図版19・20・21）

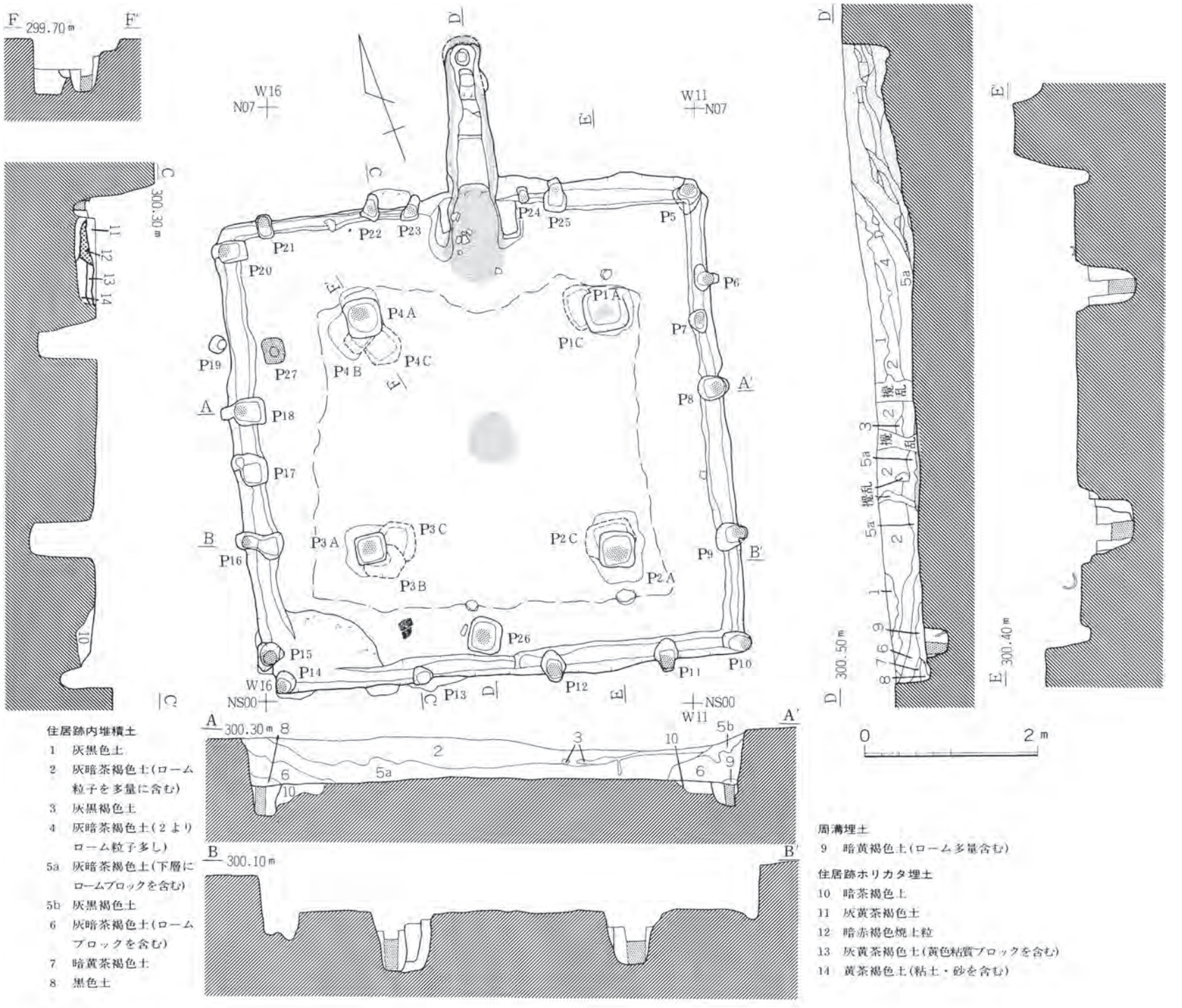
北辺中央部にカマドを有す方形の住居跡である。地山ローム面で平面プランを確認した。遺構そのものの重複はないが，北東コーナー外方にＳＢ10南・西側柱列掘形が隣接しており，軒の張り出しを考えるとＳＢ10とは重複した可能性が大である。

遺構内には８層の住居跡堆積土が認められた。１～４層は遺構中央部に厚く堆積しており，５ａ層によって床面の全域が埋まった後に堆積が進行したものである。５ａ層は壁際を残し，床面を直接覆う堆積土で，遺構内堆積土としては最も分布が広い。６～９層は壁際に将棋倒し状に堆積し，下部は床面を直接覆っている。これらの遺構内堆積土は，１層が有機質を多量に含んだ黒色土である以外，黒褐色ないし黄褐色を呈すローム粒を含むシルト質土である。堆積状況は，壁面から中央部に徐々に堆積が進行した典型的な将棋倒し状であり，自然の営力によって埋没したものであろう。

住居跡は緩い南斜面に掘削されているため，南壁の遺存が不良であるが，北辺では検出面から床面までの深さが最大70㎝もあり，壁面も垂直に近く掘り込まれている。各辺は，東辺で5.62m，南辺5.74m，西辺5.55m，北辺5.80mと規模の面でも大型である。コーナー部と各辺には，壁面に喰い込んで直立する壁柱穴が21ケ所見られた。北辺の中点と南辺の中点を結んだ軸線の傾きはＮ11°Ｅを示し，床面積は30.0㎡を測る。

床面は平坦で，非常に堅緻に踏み固められているが，主柱穴に囲まれる住居跡中央部は地山面を直接床面としており，壁面に沿った約１m幅は，溝状の住居跡掘削面上に黒色土をわずかに含む黄褐色ロームで貼り床している。床面中央部にはわずかな床面の窪みが見られ，この部分は直径55㎝の範囲で直接焼土化している。カマド部分を除いて各壁際に幅20㎝前後の周溝が確認されたが，貼り床土を切り込んで地山面まで掘り込まれており，深さは床面より10～20㎝ある。床面構築後に新たに周溝を築いたことが明確である。

住居跡の対角線上に４ケ所の主柱穴がある。いずれも２ないし３個の掘形の重複があり，最も新しいものは１辺40㎝前後の方形の掘形を有し，それぞれに直径15～20㎝の柱痕が遺存していた。掘形は床面より65～70㎝程の深さがあり，柱痕は掘形底面に直接据えられた痕跡を示している。各柱痕の中心をとった柱間寸法はP_{1A}・P_{2A}間で2.85m，P_{2A}・P_{3A}間で2.90m，P_{3A}・P_{4A}間で2.72m，P_{4A}・P_{1A}間では2.85mある。P_1・P_2では２つ，P_3・P_4では３つの掘形の重複が認められたが，P_{3B}・P_{4B}は最初の掘形であるP_{3A}・P_{4A}の柱抜きとり痕と思われ，本住居跡は１回の柱建て替えがあったものと判断される。P_{1B}・P_{2B}が残存しないのは，建て替え時の柱掘形によって完全に破壊されたためであろう。なお当初の掘形と思われるP_{1C}・P_{2C}・P_{3C}・P_{4C}の掘形位置は，



住居跡内堆積土

1 灰黒色土
2 灰暗茶褐色土(ローム粒子を多量に含む)
3 灰黒褐色土
4 灰暗茶褐色土(2よりローム粒子多し)
5a 灰暗茶褐色土(下層にロームブロックを含む)
5b 灰黒褐色土
6 灰暗茶褐色土(ロームブロックを含む)
7 暗黄茶褐色土
8 黒色土

周溝埋土

9 暗黄褐色土(ローム多量含む)

住居跡ホリカタ埋土

10 暗茶褐色土
11 灰黄茶褐色土
12 暗赤褐色焼土粒
13 灰黄茶褐色土(黄色粘質ブロックを含む)
14 黄茶褐色土(粘土・砂を含む)

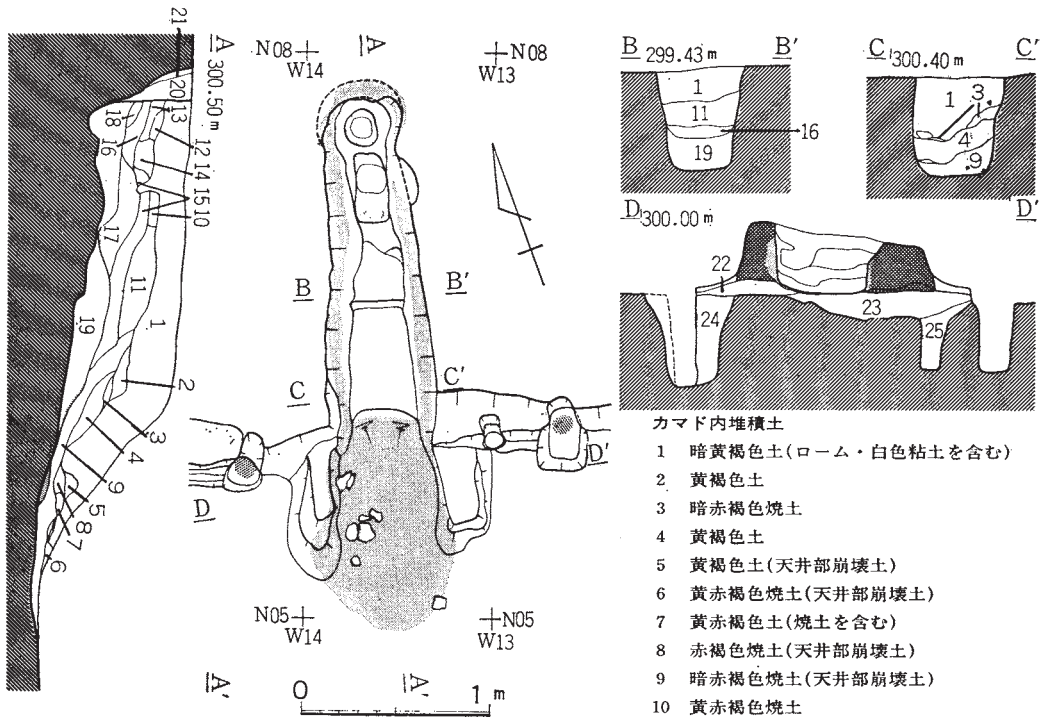
第27図　27号住居跡

P_{1A}・P_{2A}・P_{3A}・P_{4A}の柱位置より住居跡中心側に偏しており，建て替え時に若干柱間を拡げた可能性がある。

四辺の壁面に喰い込んだ壁柱穴は21箇所あるが，P_{19}だけは壁外部に振り込まれている。小規模ながら掘形と柱痕が分離できたものが大半であり，基底面での平面形は四角形に近いものが多いが円形を呈すものもある。東・南・西辺では両コーナーの間に，P_7とP_{17}を除けば0.80～1.65m間隔で，それぞれ３つの柱穴があり，４間の柱間を有すものと考えられるが，柱間寸法に大きなバラつきがある。北辺ではカマド両脇に２つずつ左右対称な地点に柱穴があるが，西側のP_{21}に対応する柱穴が東側には見られない。したがって各辺に対応する柱穴を結んだ線は住居跡の軸線と大半が一致しない。

住居跡床面内にP_{26}・P_{27}の２つのピットがある。P_{26}は柱痕が遺存しており，床面で検出されたことから見て本住居跡に伴う柱穴と思われるが，P_{27}は内部に焼土がつまっていた。

カマドは北辺の中央に付設されており，壁面より北に1.96mの長さの煙道がある。袖部は砂を



カマド内堆積土
1　暗黄褐色土(ローム・白色粘土を含む)
2　黄褐色土
3　暗赤褐色焼土
4　黄褐色土
5　黄褐色土(天井部崩壊土)
6　黄赤褐色焼土(天井部崩壊土)
7　黄赤褐色土(焼土を含む)
8　赤褐色焼土(天井部崩壊土)
9　暗赤褐色焼土(天井部崩壊土)
10　黄赤褐色焼土
11　灰黒褐色土
12　黒褐色土(焼土を含む)
13　暗黄褐色土(黄色粘土・焼土を含む)
14　黄赤褐色焼土(黒褐色土を含む)
15　黄橙色焼土
16　灰赤褐色焼土
17　灰黄橙色焼土(焼土多量含む)
18　黒色土(焼土・木炭粒を含む)
19　暗黄褐色土(ロームを多量含む)
煙道部ホリカタ埋土
20　暗黄褐色土(壁面に焼土)
21　黄白色粘土
カマド燃焼部ホリカタ埋土
22　暗黄褐色粘土
23　暗黄褐色土(焼土ブロックを含む)
柱穴埋土
24　暗黄褐色土(焼土ブロックを含む)

第28図　27号住居跡カマド

含む粘土で構築されており，壁面より左・右袖で55cmの長さで遺存している。焚口部は幅55cmあり，燃焼部底面は全面強度に赤変硬化している。煙道は最大幅60cm，最大の深さは住居跡北壁部で約60cmあり，底面は先端に約12°高い傾斜がある。煙出し部は深さ５cm程のピット状を呈す。煙道両側壁と先端部は焼土化が顕著である。

遺　　物（第29図，図版74）

遺物は堆積土各層と床面および床面直上部から土師器・須恵器が，主として破片状態で出土した。堆積土中の土器は全て破片であるが，床面密着の遺物と接合するものがある。床面ではカマド燃焼部底面付近に甕破片が集中して出土した他，P_1北側に小型甕底部，P_{26}西側に土師器杯１と砥石，さらに西約70cmの地点に須恵器甕体部破片，北辺のカマド西側の周溝内にロクロ土師器杯底部破片が出土した。なおP_2南側には床面より３cm浮いて土師器鉢２完形品が出土している。

〔土　師　器〕

杯・甕・鉢の３器種が見られるが大半が破片である。次の６点が図化できた。

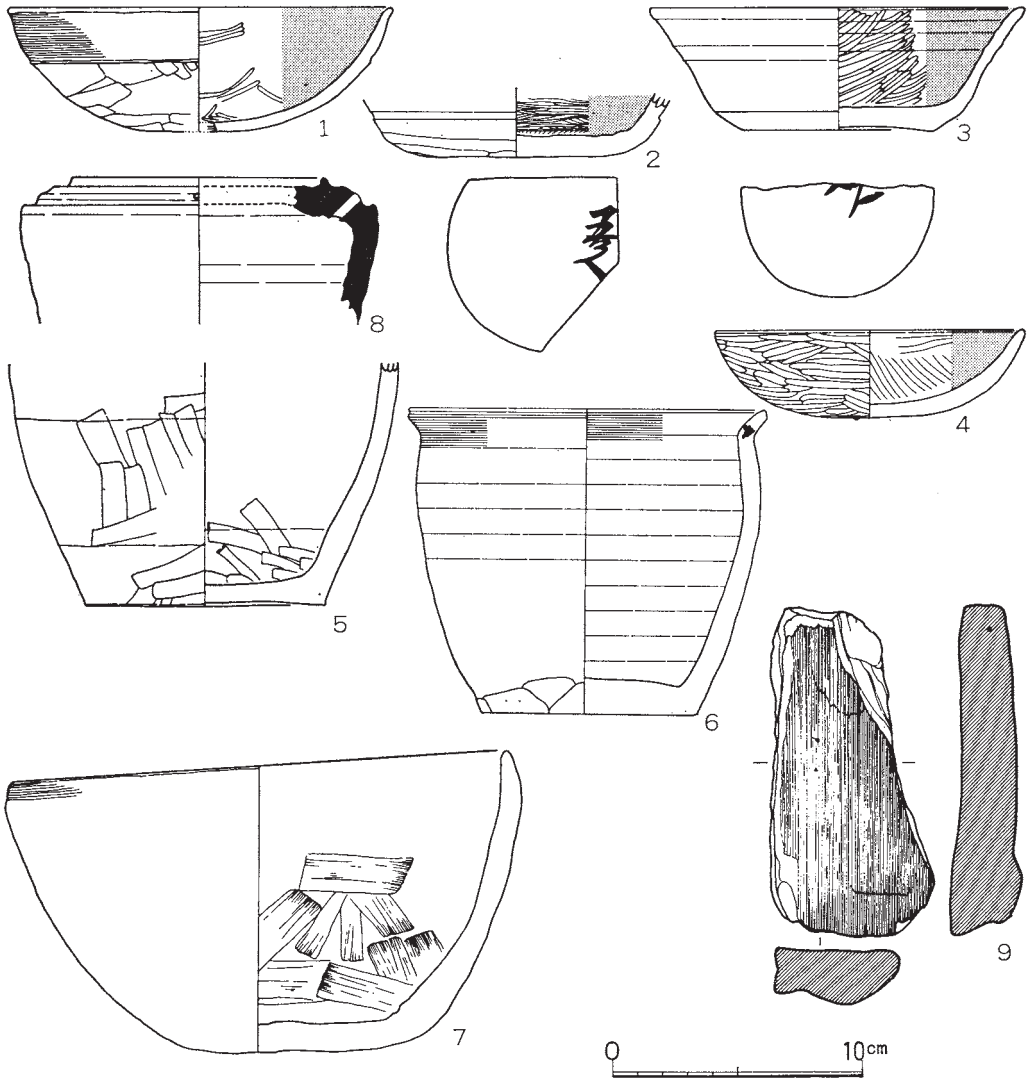
杯１（第29図１）　堆積土１層出土の内黒丸底杯である。外面は口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリしており，口縁下端にヨコナデによって生じた軽い段がある。内面はヘラミガキ後黒色処理される。復元口縁径15.2cm，高さ5.0cm前後と思われる。

杯２（第29図２）　堆積土２層出土のロクロ成形による内黒土師器杯底部破片である。ヘラ切りと思われる痕跡が遺存しており，ヘラ切り後一部手持ちヘラケズリ調整を施した後に，底部外縁を約1/2と体部下端にかけて回転ヘラケズリし，さらに底・体部の変換点を手持ちヘラケズリしている。したがって底部から体部への移行は明瞭な稜線を呈さない。体部下半に沈線による段がある。内面は底部を間隔１㎜前後の一方向ヘラミガキし，黒色処理している。外面底部に「吾人」の墨書がある。

杯３（第29図３）　周溝内出土のロクロ土師器内黒杯である。外反する口縁に広い底部を有す。底部全面と体部下端を回転ヘラケズリしていて，底部切り離し技法はわからない。内面は杯１同様に密なヘラミガキを施した後に黒色処理している。復元口縁径15.0cm，底径7.5cm，高さ4.9cmを測る。外面底部に墨書があり，欠損して判読不明であるが，字体が杯２の「吾人」に酷似している。

杯４（第29図４）　床面出土の，ほぼ完形の両面黒色処理された丸底杯である。口縁は内彎気味で両面をヘラミガキしている。口縁径12.3cm，高さ3.5cmである。

その他に図化できない杯破片が，堆積土中約20個体，床面約13個体が数えられるが，両者ともにロクロ成形のものと，非ロクロ成形のものを含んでいる。その個体数の比率は堆積土では５：１，床面では３：１である。両者ともにロクロ成形のものは，例外なく回転ヘラケズリ再調整が認められ，非ロクロ成形のものは杯１・杯４に類似した器形や技法上の特徴があるが，後者には



第29図　27号住居跡出土土師器・須恵器・砥石

丸底の他平底状に平坦面が形成された底部破片が，８割前後の高率で認められる。なお，壁柱穴P_{10}からは杯３に類似したロクロ土師器杯破片，P_{20}からは杯１に類似した非ロクロ土師器杯破片が出土している。

甕　図化できる資料がないが，大型のものと小型のものとが破片で確認できる。個体数は口縁部で数えて，堆積土中に７個体前後，床面・カマド内資料に８個体前後あったものと思われる。両者に口縁をロクロで成形したものと，ロクロを用いないものがあり，その比率は床面で８：３，堆積土で７：２と分類した。ロクロ成形のものは小型の甕に多く，口縁で「く」の字状や緩い外反を呈し，口唇部に画取りされた平坦面がめぐる。体部下半はヘラケズリされたものと思われる。ロクロを用いないものは長胴の体部から口縁部が外反するが，外反部が長いものと，５㎜前後の

短いものがある。口縁部は内外ヨコナデされ，体部はヘラケズリ後一部ナデ調整をうけるものと，縦方向のハケメ調整をうけるものがある。

鉢１（第29図６）　床面出土のほぼ完形の鉢である。ロクロ成形によっており，口縁は「く」の字状に外反し，口唇部に平坦面を形成する。底部付近にヘラケズリ痕がある。口縁径14.3cm，底径8.6cm，高さ12.1cmある。小形甕として分類するのが妥当かもしれない。

鉢２（第29図７）　床直上から出土した鉢で，完形品である。丸底状の平底と，口縁部が内彎する特徴がある。外面の口縁を狭いヨコナデ，体部・底部を不定方向のヘラナデ，内面をヘラナデで仕上げている。胎土に砂粒を多く含む。口縁径20.0cm，高さ11.5cmある。

その他内面を黒色処理した鉢底部破片が１点出土しているが，成形にロクロは使用してない。

〔須　恵　器〕

甕８個体の体部破片16片と杯底部破片１片，硯と思われる異形土器破片１片がある。甕体部破片は外面に平行叩き目を例外なく残すが，内面は１個体に同心円文がある他，無文に調整されている。杯破片は堆積土３層から出土しており，底部を手持ちヘラケズリした痕跡がみられる。

硯（第29図８）　肩部に張りのある壺形土器のような器形を呈し，断面三角形の稜線が４条付加されている。最上段の稜線内側は，沈線状の海部と思われる窪みが一周するが，内側の陸部は完全に欠損している。肩部に外から内に焼成前に穿孔した直径５㎜の小孔が１つ残存している。肩部の最大径は復元して14cm前後になるものと思われる。円面硯の一種と考えたい。

砥石（第29図９）　床面から出土した絹雲母片自然礫を利用した砥石である。１面だけ研磨面として利用している。最大長13.0cm，最大幅6.4cm，厚さ2.6cmを測る。

ま　と　め

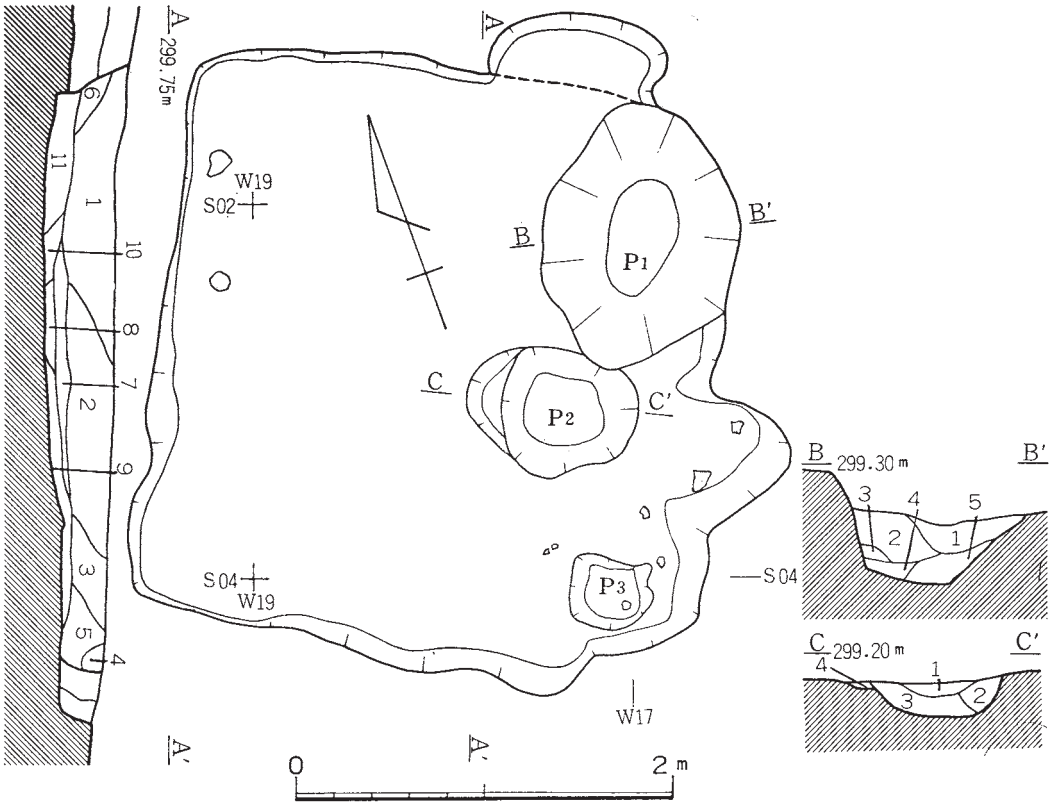
27号住居跡は一辺5.7m 前後の北壁にカマドを有す大型の住居跡であった。住居跡の構造はＳＩ25と酷似した点が多く，遺跡内での特別な意義を有す住居跡と思われる。４ケ所の主柱穴は掘形に重複が見られ，少なくとも１度は主柱穴の建て直しがあったことがわかる。

床面出土の資料は土師器・須恵器の破片が主体であるが，土師器杯には非ロクロ成形のものとロクロ成形のものが共存しており，当地域におけるロクロ土師器出現期の様相も提示しているものと考えられる。したがって，これらの土師器の在り方から住居跡の機能した中心的年代は，奈良時代後半前後と想定できよう。

28号住居跡　ＳＩ28

遺　　構（第30図，図版22）

28号住居跡は29号住居跡の堆積土内に完全に重複し，29号住居跡精査中に検出された。堆積状況は，炭化物を含む７層（第30図Ａ－Ａ′）を境に２段階に堆積している。上下とも基本的には将



住居跡内堆積土(A－A′)
1　暗褐色土(ロームの小ブロックと微粒を霜降り状に含む)
2　暗褐色土(ローム微粒を霜降り状に含む，炭化物・焼土微粒を含む)
3　暗褐色土(2よりやや明るい)
4　暗褐色土(ローム微粒を多く含む)
5　暗褐色土(ローム微粒を霜降り状に含む)
6　暗褐色土(4と同じ)
7　黒褐色土(炭化物を多く含む)
8　暗褐色土(ローム微粒を含む)
9　暗褐色土(ローム微粒を多く含む)
10　暗褐色土(ローム微粒・黒色土を含む)
11　暗褐色土(ローム微粒・小ブロックを含む)

P1内堆積土（B－B′）
1　暗褐色土(ロームブロックを含む)
2　暗褐色土(大粒のロームブロックを多く含む)
3　黄褐色土(ロームを含む)
4　黒褐色土(ロームブロックを含む)
5　暗褐色土(ローム微粒霜降り状・焼土小ブロックを含む)

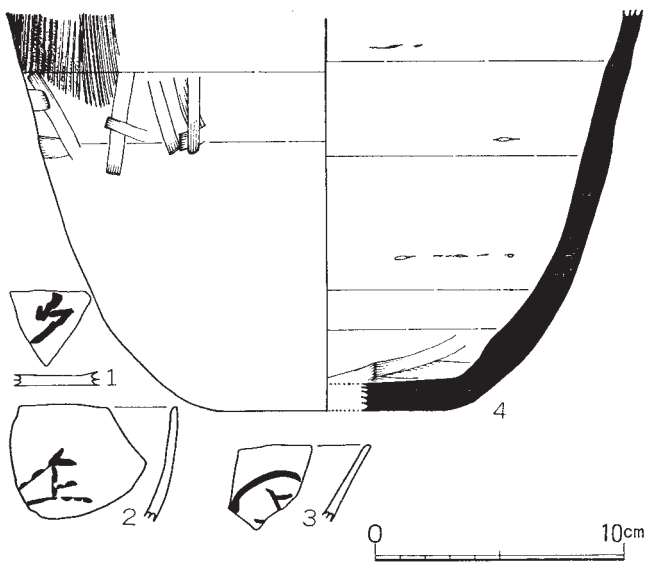
P2内堆積土（C－C′）
1　暗褐色土(焼土とローム小ブロックを含む)
2　暗褐色土(ローム小ブロックを含む)
3　黒褐色土(ローム微粒を含む)
4　暗褐色土(ロームブロックを含む)

第30図　28号住居跡

棋倒し状を呈しているが，人為堆積の可能性がある。床面はカマド前部から住居跡中央部は固くしまっていたが，壁近くは地山ローム面をそのまま使用したと思われ，やや軟調であった。

遺構は東辺南よりにカマドを持つ一辺３m弱の隅丸で，南辺と北辺の中点を通る軸線の傾きはN27°Eを測る。住居跡北東及び南東コーナーで３個のピットを検出した。P_1は直径１～1.4mの楕円形を呈するもので深さ40cmを測り，住居跡プランに比べても大形のものである。P_2は直径

60～70cmの不整円形で深さ20cmである。P_3は，29号住居跡ピットと重複する一辺約40cmの方形に近い平面形で，深さ13cmと他に比べて浅い。カマドは29号住居跡カマドの上面で検出され，住居跡東壁を掘り込んで構築され，袖部は検出されなかった。カマド堆積土内には，天井部崩壊土と思われるロームが間層として堆積し，その下に焼土が詰まっていた。底面は床面レベルとほぼ同レベルで燃焼部奥壁まで続き，斜めに立ち上がっていく。住居跡壁延長線部分で底面幅40cm，燃焼部奥壁高40cmを測る。



第31図　28号住居跡出土土師器・須恵器

遺　　物（第31図）

出土遺物はすべて破片で床面出土のものはみられず，ほとんどが住居跡堆積土内より出土したもので，その他に少量のピット内堆積土出土のものがある。

〔須　恵　器〕

甕（第31図４）　堆積土内出土のもので，体部から底部にかけての破片である。外面は体部上半に叩きを施し，下半から底部にかけてナデ調整を行っている。内面は，体部にロクロ調整，体部下端にナデ調整を行っている。全体的に丸みを持つ長胴の甕になると思われる。

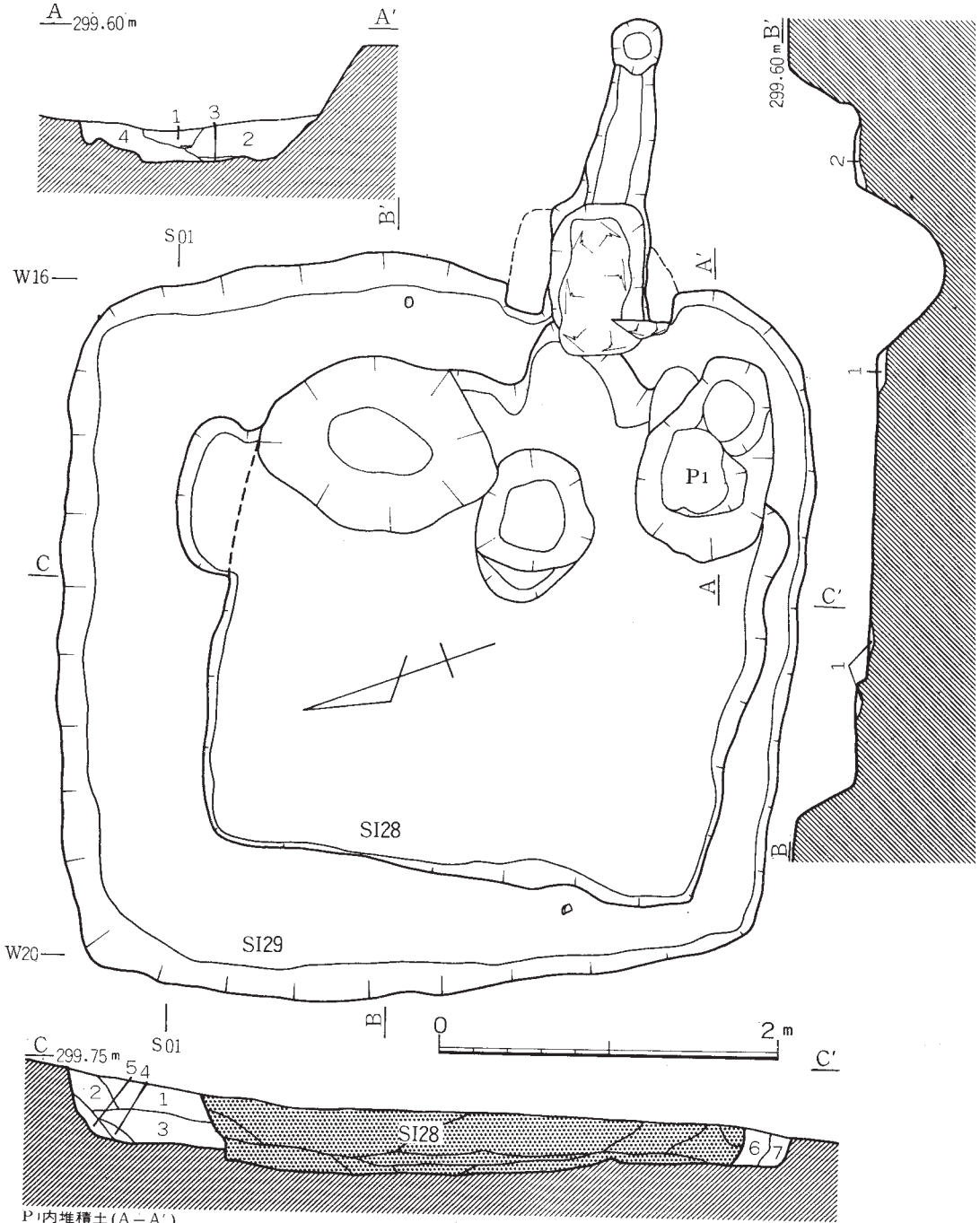
ま　と　め

当遺構は本調査区において小型の部類に入る住居跡で，柱穴および周溝は検出されていない。遺物は破片のみであるが，かなりの数にのぼり，住居跡全体から散在的に検出されており，住居跡廃絶後に廃棄された可能性が考えられる。このことから遺構の所属時期については，明確に捉えることはできないが，出土遺物をみる限り，ロクロ使用の土師器が多く，回転ヘラケズリ，手持ちヘラケズリ調整を加えた杯が混在していることから，平安時代のものと考えることができる。

29号住居跡　ＳＩ29

遺　　構（第32図，図版22）

調整区ほぼ中央の５号掘立柱建物跡南側で検出されている。28号住居跡に切られているが，28号住居跡は29号住居跡プラン内に存在するため四壁は完存し，住居跡の全体規模は捉えられる。



P1内堆積土(A－A′)

1　灰黒褐色土
2　灰暗茶褐色土(粘土質ロームブロックを多量含む,木炭含有)
3　灰暗茶褐色土(木炭・焼土粒を含む)
4　灰暗茶褐色土(２と同じ)

住居跡内堆積土（C －C′）

1　黒褐色土(ローム粒子を含む)
2　暗褐色土(ローム粒子を含む)
3　黒褐色土(茶褐色土を含む)
4　暗褐色土(茶褐色土を含む)
5　暗褐色土(ローム微粒を多く含む)
6　黒褐色土(ローム微粒を含む)
7　黒褐色土(ローム微粒・焼土を含む)

第32図　29号住居跡

検出面はほぼ地山ローム面であるが，南側プランは黒褐色土層面であるため，他の部分より若干検出面が下がっている。このことから残存壁高も北側が高く49～37㎝を測り・南側で23～11㎝である。堆積土はセクションベルトから，壁周縁部のみ観察することができ，壁際から将棋倒し状を呈していることから，自然堆積であると思われる。

平面プランは一辺3.8～3.9mの隅丸方形を呈するが，北西コーナーにややふくらみを持っている。床面の大半を28号住居跡によって破壊されているが，カマド前方の床面遺存部は固くしまっていた。また，東半部の床面遺存部には厚さ５㎝程の貼り床面があり，カマド前方から住居跡中央にかけて貼り床されていた可能性がある。壁周辺は，地山ローム面をそのまま床として使用している。南東コーナーカマド脇では長軸1.2m，短軸78㎝，床面からの深さ31㎝を測るピットを検出し，底面に凹凸はあるが，その位置から貯蔵穴と思われる。

カマドは東壁の南東コーナー寄りにあり，長い煙道を持つものである。燃焼部は壁を掘り込んで構築され，底面は床面レベルより若干低く掘りくぼめられている。袖は黄褐色砂質土を持って構築し，住居跡内にあまり張り出さないことから，焚口も壁面に近かったことが伺える。焚口部から燃焼部奥壁までは長さ70㎝を測り，レベル差を持って86㎝の長さの煙道が延び，深さ22㎝の煙出しに達している。焚口部から煙出し部先端までの全体の長さは1.84mである。カマド中央を通る軸線の傾きはＮ22° Ｅで，住居跡南辺の傾きとほぼ同じである。

30号住居跡　ＳＩ30

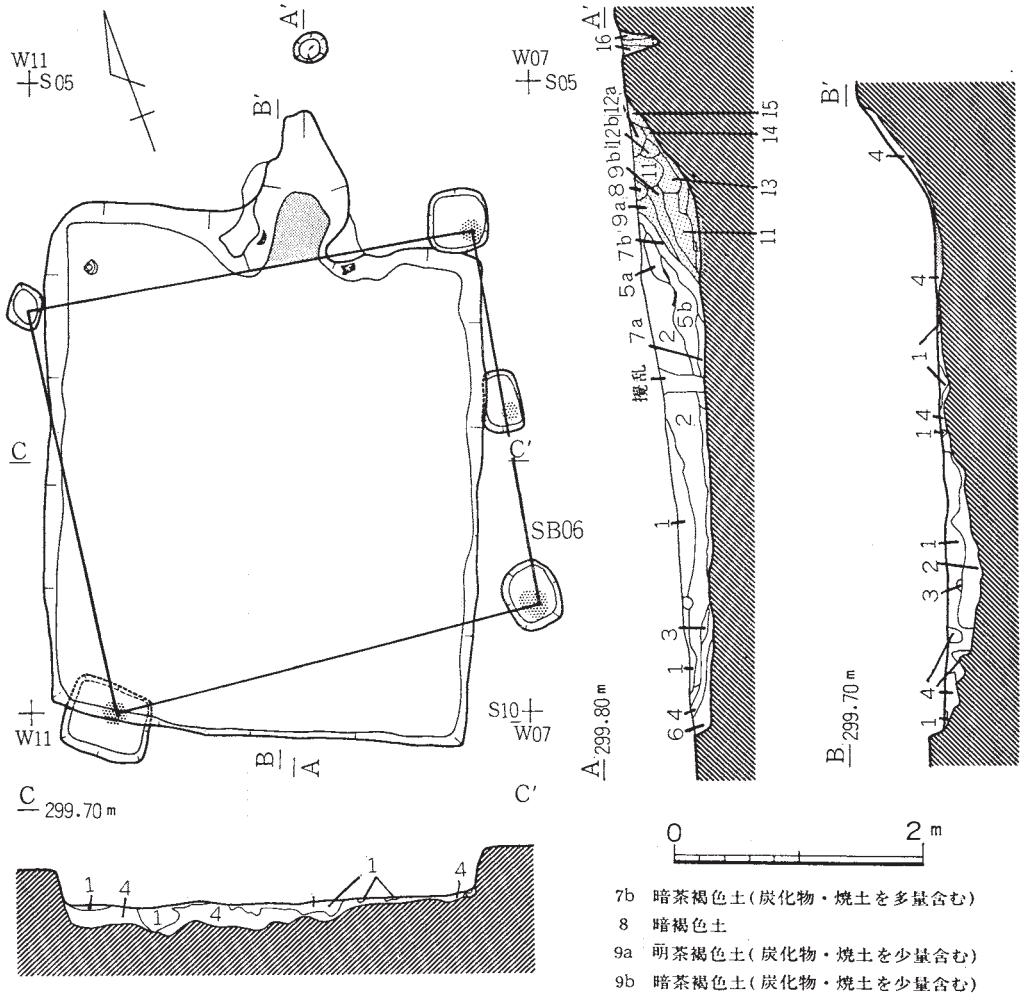
遺　　構（第33図，図版23）

調査区域のほぼ中央，やや南側に傾斜している斜面において検出された。確認面においてプランを明確にとらえることができたが，ちょうど地境として植えられていた桑の根によって，東壁は若干撹乱されていた。本住居跡は６号掘立柱建物跡を切った状態で検出された。

プランは北壁中央よりやや東側にカマドをもつ東西3.5m，南北4.2mの南北に長い方形を呈している。長辺の中軸線の傾きはＮ21° Ｅである。堆積土はローム粒を多く含んだ暗茶褐色土が大部分で，床上に黒褐色土，壁際にローム粒やロームブロックを多く含んだ暗黄褐色土がレンズ状の自然堆積を示している。床面は地山であるローム層（掘形）をたたきしめ床として利用している。若干南側に傾斜しているが，あまり凹凸もなくほぼ平坦であり，カマド付近と中央部は非常に固い。床面積は12.0㎡である。壁は本住居跡が斜面にあるため北と南では遺存状態が異なり，北壁は約45㎝，南壁は10㎝，東壁は北で55㎝，南で10㎝，西壁は北で50㎝，南で10㎝を測る。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北壁中央よりやや東側で検出された。壁外にカマド本体の2/3ほど張り出して付設している。両袖の遺存状態はあまり良くないが，袖は暗灰色粘土で構築しており，土師器甕で補強

している。両袖とも長さ約45cm，底面幅約30cmを測る。また焚口部幅は55cm，燃焼部奥壁までの長さは約80cmを測り，奥壁は35°の角度で立ち上がる。内壁と燃焼部底面は火熱により赤変し硬化している。煙道は不明瞭であるがカマドの北30cmの所に，径23cm，深さ26cmの煙出し部と思われるピットがある。周溝・柱穴・貯蔵穴状ピットなどは検出されなかった。



住居跡内堆積土

1　暗茶褐色土(炭化物を少量含む)
2　明茶褐色土(遺物を多量含む)
3　暗褐色土
4　黒褐色土(炭化物・焼土粒を含む)
5a　暗黄茶褐色土(炭化物を少量含む)
5b　暗黄茶褐色土(炭化物を少量含む)
6　暗黄褐色土(炭化物を含む)
7a　暗茶褐色土(炭化物を含む)
7b　暗茶褐色土(炭化物・焼土を多量含む)
8　暗褐色土
9a　明茶褐色土(炭化物・焼土を少量含む)
9b　暗茶褐色土(炭化物・焼土を少量含む)
10　暗茶褐色土(炭化物・焼土を9aより多量含む)
11　暗黄褐色土(下方に焼土ブロックを多量,炭化物を少量含む)
12a　暗赤褐色土(灰白色粘土と炭化物を多量含む)
12b　暗赤褐色土(灰白色粘土と炭化物を多量含む)
13　明赤褐色土(炭化物を多量含む)
14　暗赤褐色土(炭化物を多量含む)
15　暗黄茶褐色土(ローム小ブロックを多量含む)
16　暗茶褐色土(焼土・炭化物を多量含む)

第33図　30号住居跡

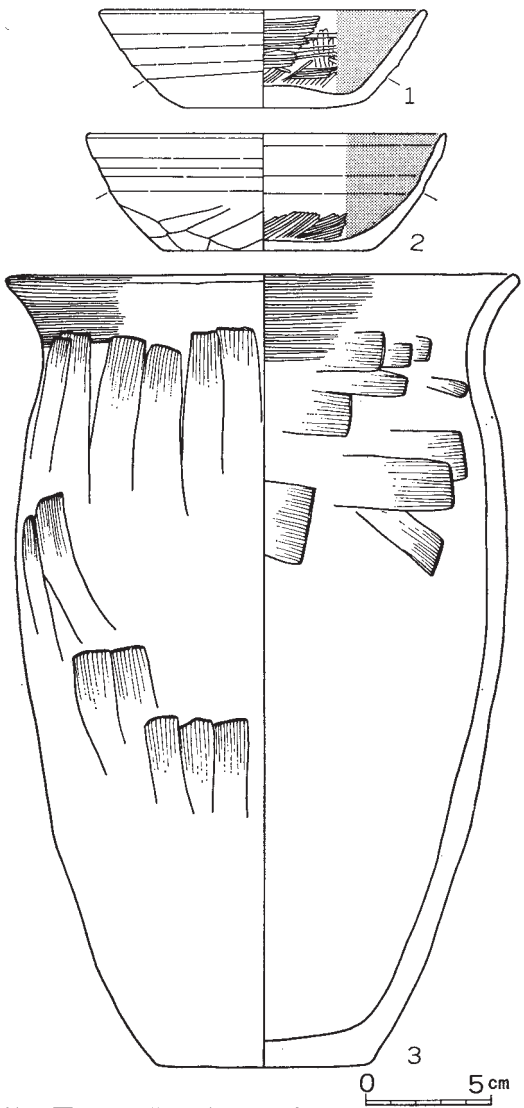
遺　　物（第34図，図版74）

遺物はカマドの西側床面上より内面黒色処理された土師器杯や，カマド袖内から土師器甕破片などが出土した。またカマド堆積土内や住居跡堆積土内から，土師器杯・甕破片が十数点出土している。図化できた３点について説明を加える。

〔土　師　器〕

杯１（第34図１）　本住居跡西壁付近の床面上より検出された遺物であり，全体の2/3が現存する。口径13cm，底径6.8cm，器高3.9cmを測る。ロクロ成形による杯であり，体部はやや丸みを持って立ち上がり直線的にのびる口縁部に至る。調整は，外面底部から体部下半にかけては回転ヘラケズリ，体部上半から口縁部はロクロによるナデが不明瞭ではあるが観察される。内面は全面ヘラミガキ再調整が施されており，さらに黒色処理している。

杯２（第34図２）　カマド覆土内より検出された遺物であり，全体の1/2を復元実測した。器高に対してやや広目の底部よりやや丸みをもって立ちあがり，直線的に立つ口縁部に至る。調整は外面底部から体部下端には手持ちヘラケズリ再調整が施され，体部上半から口縁部にはロクロによるナデが明瞭に観察される。内面は全面ヘラミガキ調整が施されているが，口縁部から体部下半にかけては，前段階のロクロによるナデが部分的にみられる。また，黒色処理が行われている。推定口径は14.3cm，底径8.0cm，器高4.7cmを測る。



第34図　30号住居跡出土土師器

甕（第34図３）　カマド右袖の補強に使用されていた土器であり，体部上半から底部にかけて1/2を欠損する。再酸化されており，体部中央から下面は非常に器肌があれている。色調は淡赤褐色を呈している。法量は口径20.5cm，底径8.4cm，高さ31.6cmを測り，最大径を口縁端部にもつ長胴の甕である。底部より若干丸みをもって立ち上がり，頸部でまっすぐに立ち外反する口縁部に至る。調整は外面体部上半は縦方向のヘラナデ，口縁部はヨコナデが施されており，内面体部

上半は横方向のヘラナデ，口縁部は外面同様ヨコナデが行われている。胎土は砂粒を割合多く含むが，焼成は良い土器である。

ま　と　め

本住居跡は６号建物跡と重複関係にあり，６号建物跡を切っている。柱穴・周溝・貯蔵穴などの確認できない住居跡である。本住居跡の時期は，床面から出土した土師器杯やカマド袖内出土の土師器甕などからみて，平安時代初頭に位置づけられるものと考える。

31号住居跡　ＳＩ31

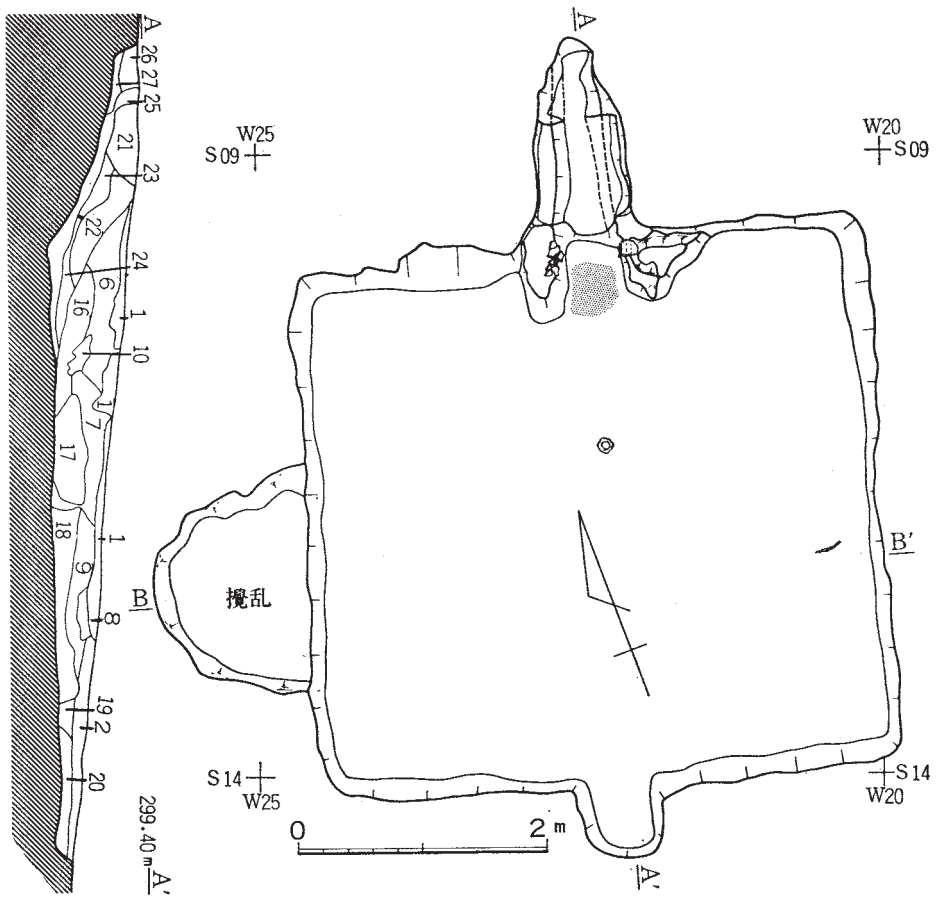
遺　　構（第35図，図版24・25）

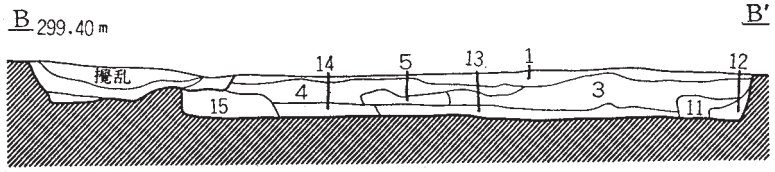
本住居跡は発掘区中央の斜面下端に位置する。遺跡全体が，標高299m付近から傾斜するにしたがって，ローム層の上に黒色土が堆積する状態を示しているが，本住居跡はこの黒色土を掘り込んで作られている。11号建物跡（ＳＢ11）と重複しているが，検出時において住居跡内堆積土および床面に建物跡の柱穴を明確には確認できず，新旧関係は不明である。また西壁を撹乱土坑によって切られているが，破壊は僅かで全体によく遺存している。

各堆積土は基本的に暗褐色を呈するが，しまりの強弱と暗褐色土，黄褐色土のブロックないし粒子の混入状況によって20層に細分できる。遺構が北に高い斜面に立地しているため，北側からの流入によって，廃棄後早い時期に埋没したと考えられ，明確な堆積状況を示さない。

平面形は方形を呈し，南辺中央に張り出しをもつ。隅はやや丸みがある。規模は南北約4.4m，東西4.7mであり，床面積は約18.9㎡を測る。北辺の中点と南辺の中点を結ぶ軸線の傾きはＮ17°Ｅである。壁は北壁約65cm，南壁約15cmと南に浅くなっている。北壁と東壁は急な立ち上がりであるが，南壁と西壁は緩い勾配をもつ。床面は南側一部を除いて，黒色土の混じった黄色粘質土を固く叩きしめ貼り床としている。床面南側は貼り床土を検出できず，柔らかい暗褐色土（Ⅲ層）が直接床面となっている。南辺中央にある張り出しは，住居跡に伴うものであろうが，その性格は不明である。

カマドは北辺中央部に付設されている。右袖と煙道の一部が崩壊しているが，遺存状態は良好である。カマド内堆積土は21～27層である。21～25層が砂入りの灰白色粘土をベースとした煙道天井部崩壊土であり，そのうち25層は火熱で赤く焼けたものである。26・27層は煙出し内の堆積土であると思われる。カマド内堆積土の上部から，住居跡内の堆積土が始まっていることから，住居跡廃棄の時点もしくは廃棄後早い時期に，カマド天井部が崩壊していたことが伺える。住居跡壁面を燃焼部奥壁とし，砂入りの灰白色粘土による袖部を継ぎ足している。煙道部は黒色土を刳り抜いて作られている。さらに袖部と同じ砂入りの灰白色粒土を用いて天井部を構築している。





住居跡内堆積土

1 暗黄色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 暗褐色土ブロック
6 暗褐色土(黄褐色土粒子わずかに含む)
7 暗黄褐色土
8 褐色土
9 暗褐色土
10 暗褐色土(黄褐色土粒子を含む)
11 暗褐色土(黄褐色土粒子を含む)
12 暗褐色土(黄褐色土粒子を多く含む)
13 暗褐色土
14 暗褐色土
15 暗褐色土(小ブロック状に黄褐色土混入)
16 暗褐色土(黄褐色土粒子を含む)
17 褐色土
18 暗褐色土
19 暗褐色土
20 暗褐色土
21 黄褐色粘質土(下部に灰白色砂を含む)
22 灰黒褐色土(下部に灰白色砂を含む)
23 黄褐色土と灰白色砂混合土
24 灰黄白色砂
25 暗赤褐色焼土
26 暗茶褐色土(焼土粒を含む)
27 暗茶褐色土(焼土粒を含む)

第35図 31号住居跡

両袖内側には土師器甕破片を張り付けているが，補強に用いられたものと思われる。右袖は長さ約55cm，幅約60cm，左袖は長さ約80cm，幅約35cmである。燃焼部には38×43cmの範囲で赤色硬化した部分がある。燃焼部奥壁は約40°の緩い勾配で立ち上がり，その上に煙道が取り付いている。煙道は幅約30cm，長さ約150cmで，約20°の緩い勾配で先端にいくにしたがって高くなっている。当遺跡で一般的に見られるような煙出しピットは確認できない。カマド長軸の傾きは，Ｎ17°Ｅで住居跡の軸線にのる。

遺　　物（第36図，図版75・81）

遺物は床面から須恵器高台杯１点，カマドからは袖部に使用された状態で土師器甕破片が数点出土している。堆積土内からは，床面から約５cm浮いて刀子１点，その他流れ込みの状態で土師器および須恵器の杯・甕破片が多数出土している。

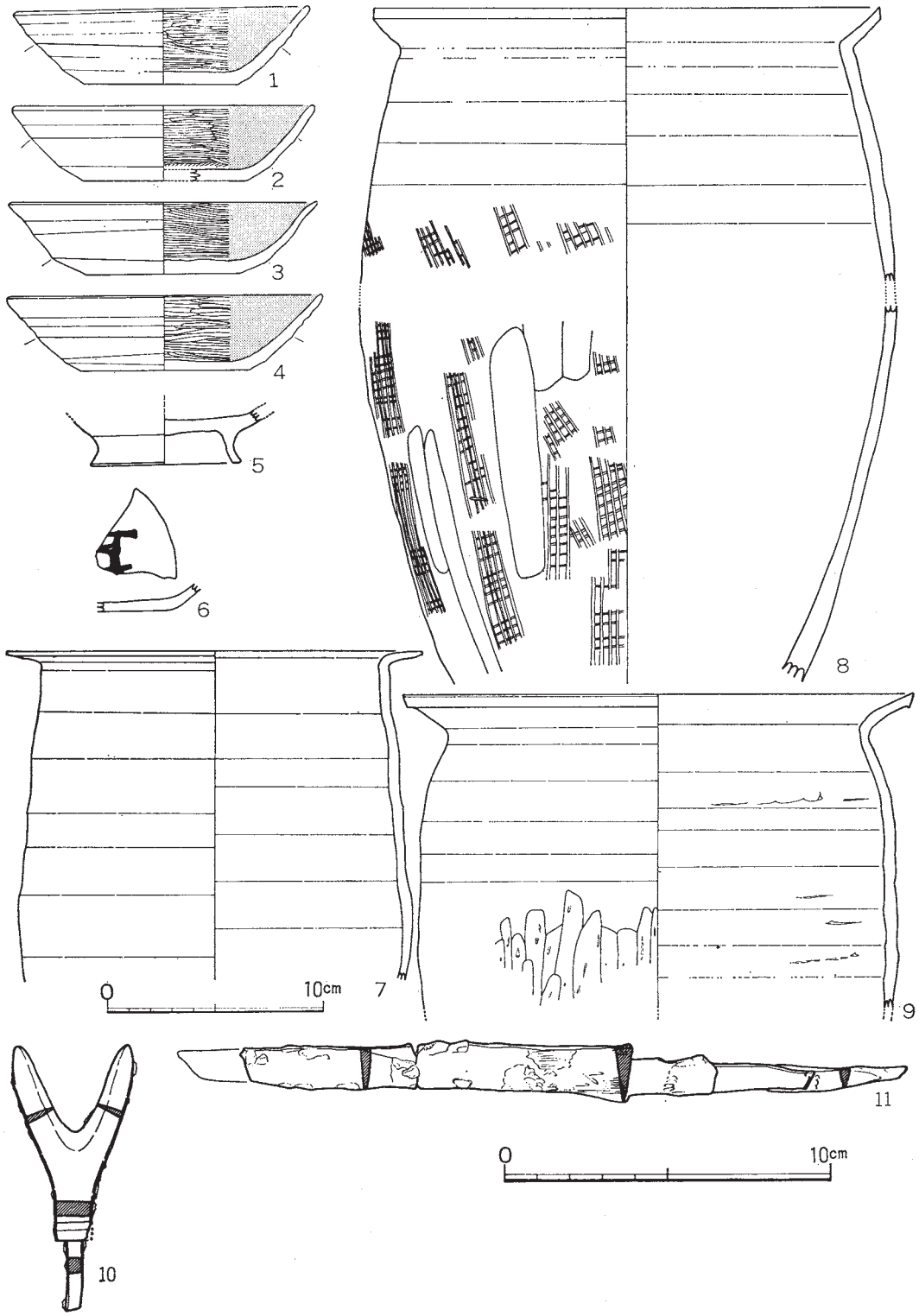
〔土　師　器〕

杯１（第36図１）　第２層から出土したものである。一部欠けているがほぼ完形である。底部および体部下半に右回りの回転ヘラケズリ再調整を施し，底部切り離しは不明である。内面は底部に一方向のヘラミガキを施し，さらに体部に斜めおよび横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。体部はほぼ直線的に傾き，口縁端部までいたる。法量は口径13.7cm，底径7.0cm，高さ3.5cm，体部の長さは4.8cmで，傾きは約48°である。

杯２（第36図２）　第３層から出土したものである。全体の約1/4を復元実測した。底部および体部下半に回転ヘラケズリ再調整を施す。ロクロ方向，底部切り離しとも不明である。内面は底部に一方向のヘラミガキ，さらに体部を横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。体部は回転ヘラケズリ再調整の施された部分までほぼ直線的に，以上丸みを帯びて外傾する。法量は推定口径14cm，推定底径7.5cm，高さ3.5cmである。体部の長さは4.6cmで，傾きは約50°である。

杯３（第36図３）　堆積土の中から出土したものである。全体の約1/4を欠いている。底部および体部下半にロクロ方向左回りの回転ヘラケズリ再調整を施し，底部切り離しは不明である。内面は底部に一方向のヘラミガキを施し，さらに体部を斜めおよび横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。体部は回転ヘラケズリ再調整の施された所までほぼ直線的に，以上は丸みを帯びて外傾し口縁部にいたってやや広がる。法量は口径14.0cm，底径7.0cm，高さ3.4cmである。体部の長さは５cm，傾きは約40°である。

杯４（第36図４）堆積土から出土したもので，全体の約１／２を復元実測した。底部および体部下半に回転ヘラケズリ再調整を施し，底部切り離しは不明である。内面は底部に一方向のヘラミガキを施し，さらに体部を横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。体部はヘラケズリの及んでいる所まで直線的に，それ以上はやや丸みを帯びて外傾する。法量は推定口径14.5cm，



第36図　31号住居跡出土土師器・鉄製品

推定底径7.3cm，高さ3.5cmである。体部の長さは4.8cm，傾きは48°である。

甕１（第36図８）　カマド左袖部に張り付いた状態で出土した。胴部の一部と底部が失われている。体部下半には格子叩き目を施した後一部に縦方向のヘラケズリを行っている。体部上半は一部で格子叩き目が消えた状態で施されている。口縁端部は面取りされ，明瞭な稜が観察される。内面は上半をロクロナデによっているが，下半は不明である。推定口径23cm，残存部の高さ35cm前後と考えられる。

甕２（第36図７）　カマド左袖に張り付いた状態で出土した。口縁部から体部にかけての破片を復元実測した。内外面とも工具によるロクロナデによっている。ロクロの方向は不明である。口縁部が直角に屈曲しているのが特徴である。推定口径19.1cm，胴部最大径は18.0cm前後であろう。全体に器壁が薄く，胎土・焼成とも不良である。

甕３（第36図９）　住居跡堆積土中から出土したロクロ成形による甕である。体部下半を欠くが，口縁部は「く」字状に外反し，口唇部はわずかに下方に引き出され，垂直に近い面取りをうけている。体部上半はロクロナデ，下半部は縦方向のヘラケズリ調整をうける。口縁径23.4cm，残存高14.5cmである。

〔須　恵　器〕

高台杯（第36図５）　床面から出土した唯一の遺物である。わずかに底部と高台のみが残存する。底部切り離しはヘラ切りであり，再調整の痕跡は認められない。内面にヘラミガキ調整等は看取できない。色調は暗褐色を呈し，胎土は粗悪である。焼成・胎土からは，土師器とも思える。

〔鉄　製　品〕

鉄鏃（第36図10）　住居跡堆積土中から出土した有茎雁股式鉄鏃である。茎の一部を欠損している。刃部先端幅3.5cm，残存長8.1cmを測る。

刀子（第36図11）　床面から約５cmの堆積土の中から出土した。比較的良く残存しているが，切先の一部を欠く。現存長20.1cm，茎部長7.4cm，現刃長12.7cm，背幅0.5cmである。茎部・刃部ともに断面は三角形を呈す。茎部は一度折れた後，再び錆によって接合している。茎部・刃部ともに一部木質が付着している。

ま　と　め

11号建物跡との新旧関係は確認できなかったが，全体に良好な状態で遺構検出できた。南辺中央の張り出しはその性格が不明であり，今後類例の増加を待ちたい。遺物は比較的多く出土している。特に図示した土師器杯はすべて堆積土中より出土したものであるが，ほとんど口径と底径と高さの比率が約４：２：１であり，成形・調整等も酷似している点が注目される。刀子は当遺跡で他にも出土例があり，当遺跡の性格を知る手掛かりとして興味深い。本住居跡の年代は，出土遺物がすべてロクロを使用し，しかも回転によるヘラケズリ再調整をうけている点から見て，平安時代初期のものと考えられる。

32号住居跡　ＳＩ32

遺　　構（第37・38図，図版26・27）

本住居跡は発掘区中央，４号建物跡（ＳＢ04）の北隣りに位置している。他の遺構との重複はみられない。カマドは一部を残して破壊され，遺構全体が後世に削平された可能性もある。住居跡内の堆積土は６層に細分できる。１層はほぼ遺構全体を覆う暗褐色土である。２層と３層も遺構全体を覆う状態で堆積している。共に暗褐色土であるが，３層の方が黄褐色土を含むため，２層と区別した。４・５層とも地山ロームを含んでおり，壁の崩壊土と考えられる。自然堆積である。

平面形は隅丸方形である。規模は各辺が約3.6m，床面積12.3㎡を測り，当遺跡では比較的小型である。北辺の中点と南辺の中点を結ぶ軸線の傾きは，Ｎ23°Ｅである。壁は平均的に約15cm前後と低い。床面は平坦であるが，住居跡掘形は周縁部において凹凸が激しい。その周縁部に黒色土の混じったロームによる貼り床がなされている。床面中央部にはほとんど貼り床土を検出できなかった。東南のコーナーに径約50cm，深さ約40cmのピットがある。中から土師器杯・甕などが多量に出土し貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴は住居跡使用時にもある程度堆積していた状況を伺えるが，ほとんどは住居跡と共に自然堆積したと思われる。周溝・柱穴等は検出できなかった。

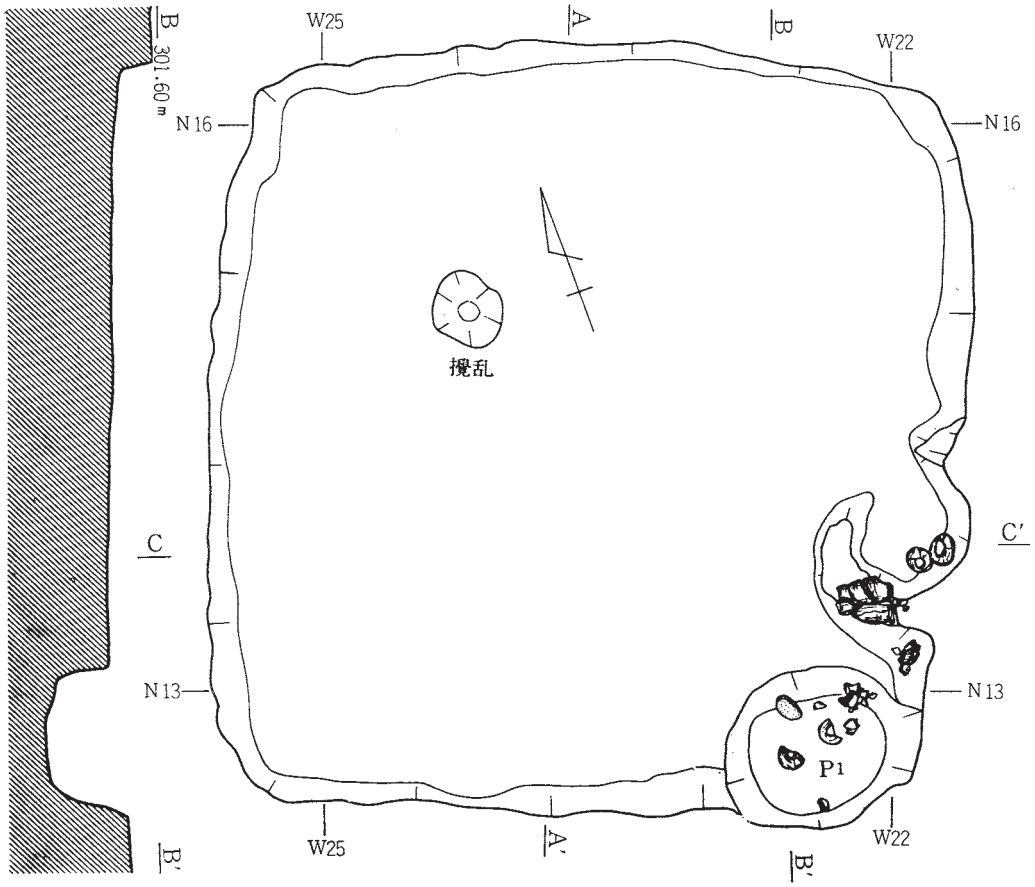
カマドは東壁南寄りに検出された。両袖部の一部を残すのみで，残存状態はきわめて悪い。袖部は黄褐色土で構築されていたものと思われる。土師器杯が燃焼部床面から，土師器甕が右袖部に張り付いた状態で出土している。

遺　　物（第39図，図版75・76・81）

遺物はカマド部分と貯蔵穴内からまとまって出土している。土師器がほとんどで，須恵器は数点のみである。須恵器はいずれも小破片のため図化できない。

杯１（第39図６）　貯蔵穴底面から約10cm浮き上がった状態で出土したものである。全体の約1/2を復元実測した。底部および体部下端に左回り回転ヘラケズリ再調整を施す。底部切り離しは不明である。体部にはロクロナデが粗く施されており，器面に凹凸が著しい。内面は底部に放射状のヘラミガキ，さらに体部には横方向のヘラミガキに，一部で縦方向のヘラミガキを重ねている。ヘラミガキは全体に粗い。内面黒色処理している。体部は回転ナデによって凹凸が著しいが，全体に丸みを帯びて外傾し，口縁端部にいたる。法量は口径14.5cm，底径6.6cm，高さ4.3cmを測る。体部の長さ5.7cm，傾き約48°である。

杯２（第39図５）　貯蔵穴内，杯１と同じレベルから出土したものである。全体の約1/2を復元実測した。底部および体部下半に手持ちヘラケズリ再調整を施すが，ナデを加えているため，

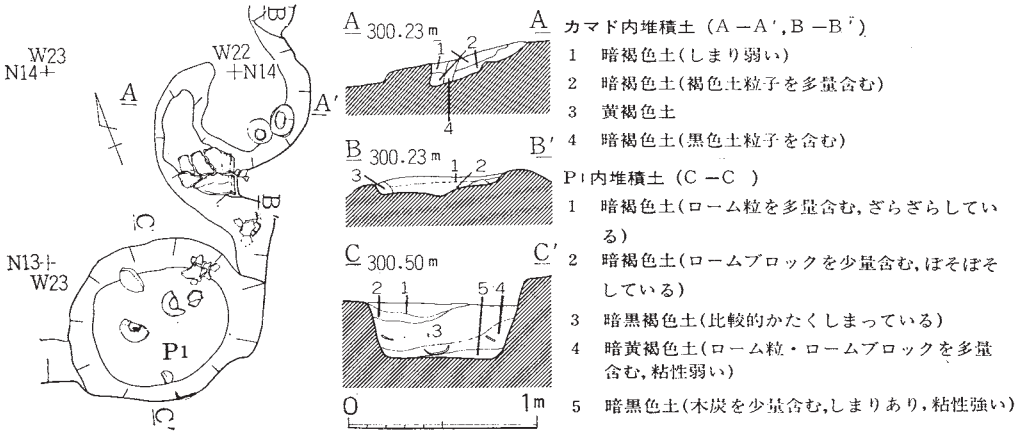


住居跡内堆積土

1　暗褐色土
2　暗褐色土(黄褐色土粒子を少量含む)
3　暗褐色土(黄褐色土粒子を多量含む)
4　暗褐色土(黒色土及び黄褐色土粒子を多量含む)
5　暗褐色土(黄褐色土粒子を少量含む)
6　暗黄褐色土(貼床土)

0　2m

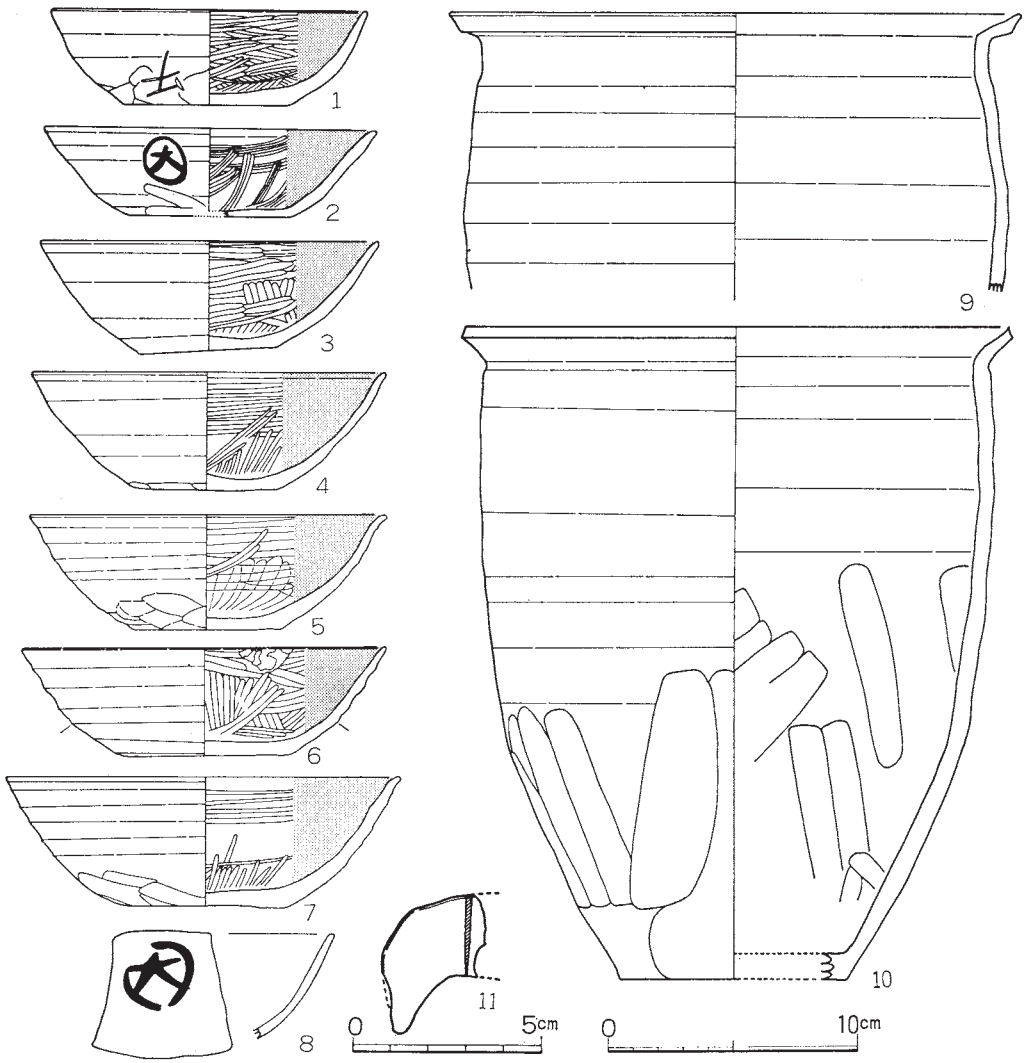
第37図　32号住居跡



カマド内堆積土（A－A′，B－B′）
1 暗褐色土(しまり弱い)
2 暗褐色土(褐色土粒子を多量含む)
3 黄褐色土
4 暗褐色土(黒色土粒子を含む)

P1内堆積土（C－C′）
1 暗褐色土(ローム粒を多量含む，ざらざらしている)
2 暗褐色土(ロームブロックを少量含む，ほそぼそしている)
3 暗黒褐色土(比較的かたくしまっている)
4 暗黄褐色土(ローム粒・ロームブロックを多量含む，粘性弱い)
5 暗黒色土(木炭を少量含む，しまりあり，粘性強い)

第38図 32号住居跡カマド



第39図 32号住居跡出土土師器・鉄製品

その痕跡は不明瞭である。内面は底部に放射状のヘラミガキを施し，さらに体部に横方向のヘラミガキを加える。内面黒色処理している。手持ちヘラケズリしているため，底部と体部の境は明瞭でない。体部は器面にやや凹凸があるが，全体に丸みを帯びて外傾し，口縁端部までいたる。法量は口径14.0cm，底径5.5cm，高さ4.8cmである。体部の長さは6.2cmで，約48°傾く。

杯３（第39図２）　貯蔵穴内の堆積土から出土したものである。底部はほとんど失われ，体部の約1/3を復元実測した。底部および体部下半に手持ちヘラケズリ再調整を施している。底部切り離しは不明である。残存する体部内面では，斜めおよび横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理を施している。手持ちヘラケズリ再調整のため，底部と体部の境がやや不明瞭である。体部はほぼ直線的に外傾し，口縁端部にいたる。体部に「㊧」の墨書がある。推定口径13.2cm，推定底径6.4cm，高さ3.5cmを測る。体部の長さは4.8cmで，約45°傾くように思われる。

杯４（第39図３）　カマド燃焼部から出土したものである。一部を欠いているがほぼ完形である。底部のみ手持ちヘラケズリ再調整をしている。底部切り離しは不明である。体部は丁寧なロクロナデを行い，器面は整っている。内面は底部に放射状ヘラミガキを施し，さらに体部に横方向のヘラミガキを加えている。内面黒色処理しているが，一部再酸化されている。底部は小さく，体部は丸みを帯びて外傾する。法量は口径13.5cm，底径5.5cm，高さ4.3cmである。

杯５（第39図４）　カマド袖部から出土したものである。全体の約1/4を復元実測した。底部に手持ちヘラケズリ再調整を施しているが，さらにナデを加えているため，痕跡は不明瞭である。再調整の及ばない部分があり，底部切り離しはヘラ切りによっている。体部には丁寧なロクロナデが施されている。法量は，推定口径14.1cm，推定底径5.8cm，高さ4.7cmである。

杯６（第39図１）　カマド燃焼部から出土した完形の杯である。底部と体部下半に手持ちヘラケズリを行っており，底部切り離しは不明である。内面は底部に不定方向のヘラミガキ，さらに体部は横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。体部は手持ちヘラケズリをした部分がほぼ直線的に傾き，以上は丸みを帯びて口縁端部にいたる。体部下端には「午」の線刻がある。法量は口径12.6cm，底径6.5cm，高さ3.8cmである。

杯７（第39図７）　住居跡内堆積土から出土したものである。約1/4を欠いている。底部および体部下半に手持ちヘラケズリ再調整を施しており，底部切り離しは不明である。体部には粗い回転ナデを施しており，器面に凹凸が著しい。内面は底部に放射状ヘラミガキ，さらに体部を横方向のヘラミガキで仕上げ，黒色処理している。底部は小さく，手持ちヘラケズリ再調整のため底部と体部の境はやや不明瞭である。体部は粗いロクロナデによる凹凸はあるが，全体に丸みを帯びて外傾する。法量は口径15.7cm，底径6.3cm，高さ5.1cmである。

甕１（第39図10）　カマド袖部から出土したものである。全体の約1/3を復元実測したものである。底部はほとんど残存していない。体部はロクロナデの後，底部ま近くで横方向のヘラケズリ，

さらに下半全体に縦方向のヘラケズリを行っている。内面はロクロナデの後，ヘラ状工具によってナデを施している。ロクロ方向は右回りである。口縁部は急に屈曲し，端部は面取りしている。法量は口径21.5cm，推定底径9.0cm，高さは26.0cmである。

甕２（第39図９）　住居跡内堆積土から出土している。口縁部から体部にかけての破片を復元実測したものである。内外面ともロクロナデを施している。ロクロの方向は不明である。口縁部はほぼ直角に屈曲し，さらに立ち上がって段をなす。口縁端部は丸くおさめている。口縁部内側は外側の段に対応せず，頸部との境に急な変化点を持つだけである。頸部と体部の境は内外面とも明瞭でない。推定口径は23cm前後である。

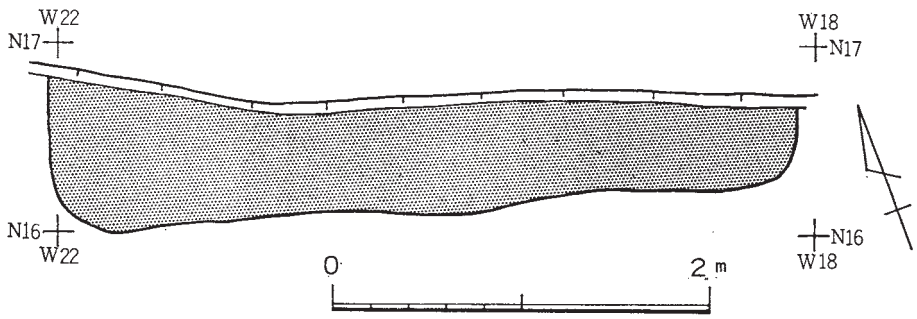
ま と め

32号住居跡は，東南のコーナーに貯蔵穴をもつ住居跡である。カマドがほとんど破壊されているのをはじめ，遺存状況は良くない。

遺物はカマド部分と貯蔵穴からまとまって出土している。これらの遺物はロクロ成形であるが，貯蔵穴から出土した１点の杯は回転ヘラケズリ再調整をうけるが，これ以外の杯は全てヘラケズリ再調整をうけており，底径が小さくなる点などからＳＩ31出土の杯に比べ後続する土師群と思われる。したがってこれらの遺物から見れば，本住居跡の年代は平安時代に位置づけられよう。

33号住居跡　ＳＩ33

32号住居跡の北東部に位置する住居跡で，調査区の北端に南辺部を検出したが，遺構の大半は調査区外に拡がっているものと思われる。南辺の長さは4.2mあり，遺構内にはロームを含んだ暗茶褐色土が認められる。工事区外にある住居跡であり，精査は行わなかった。検出面からは遺物が採集されなかった。

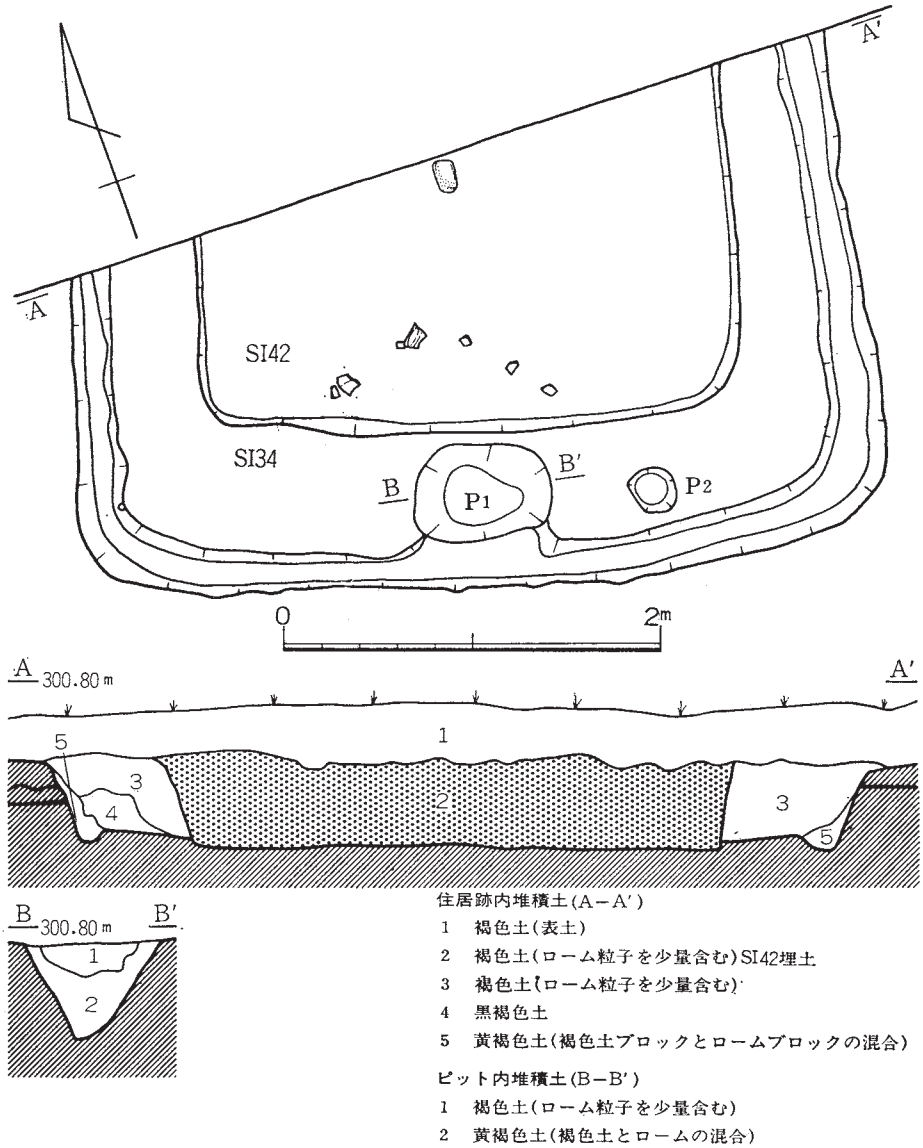


第40図　33号住居跡

34号住居跡　ＳＩ34

遺　　構（第41図，図版28）

調査区域中央部からやや西側寄りで検出された。遺構北半は調査区域外の桑園にかかるため，南半についてのみ発掘を行った。遺構内に42号住居跡がある。床面を破壊されており，本遺構のほうが古い住居跡である。堆積土は，厚さ約40cmの表土層下に３層認められる。東・西辺付近に分布する暗褐色土・黄褐色土と壁沿いに分布し，剝落した壁土の一部と思われる黄褐色土である。



第41図　34号・42号住居跡

後世の削平を受けており，遺構の残存は良好でない。

全体の判明した南辺は4.28mある。コーナーは緩くカーブし，全体で方形を呈するものと考えられる。床面は地山であるローム面を利用し，中央に向かって若干傾斜していたと思われるが・42号住居跡に床面を破壊されているため確認できない。壁面は，床面から約35cmの高さがあり直立する。調査した部分全域の壁面に沿って幅約15cm，深さ約10cmの周溝が認められた。ピットは，南辺中央付近２ケ所で検出された。P_1は径60～70cm，深さ約50cmの楕円形である。褐色土・黄褐色土２層の堆積土が認められるP_2は，径約25cm前後の浅く掘り窪められたピットである。カマドの有無や付設位置は不明である。南辺の中点に直交させた軸線の傾きはＮ14° Ｅを測る。

ま と め

堆積土中からロクロ成形による土師器杯破片が数片出土したが，床面に伴う遺物がなく・本遺構の時期は不明であるが，平安時代とみられる42号住居跡に床面を破壊されているところから，平安時代以前に位置づけられる。

35号住居跡　ＳＩ35

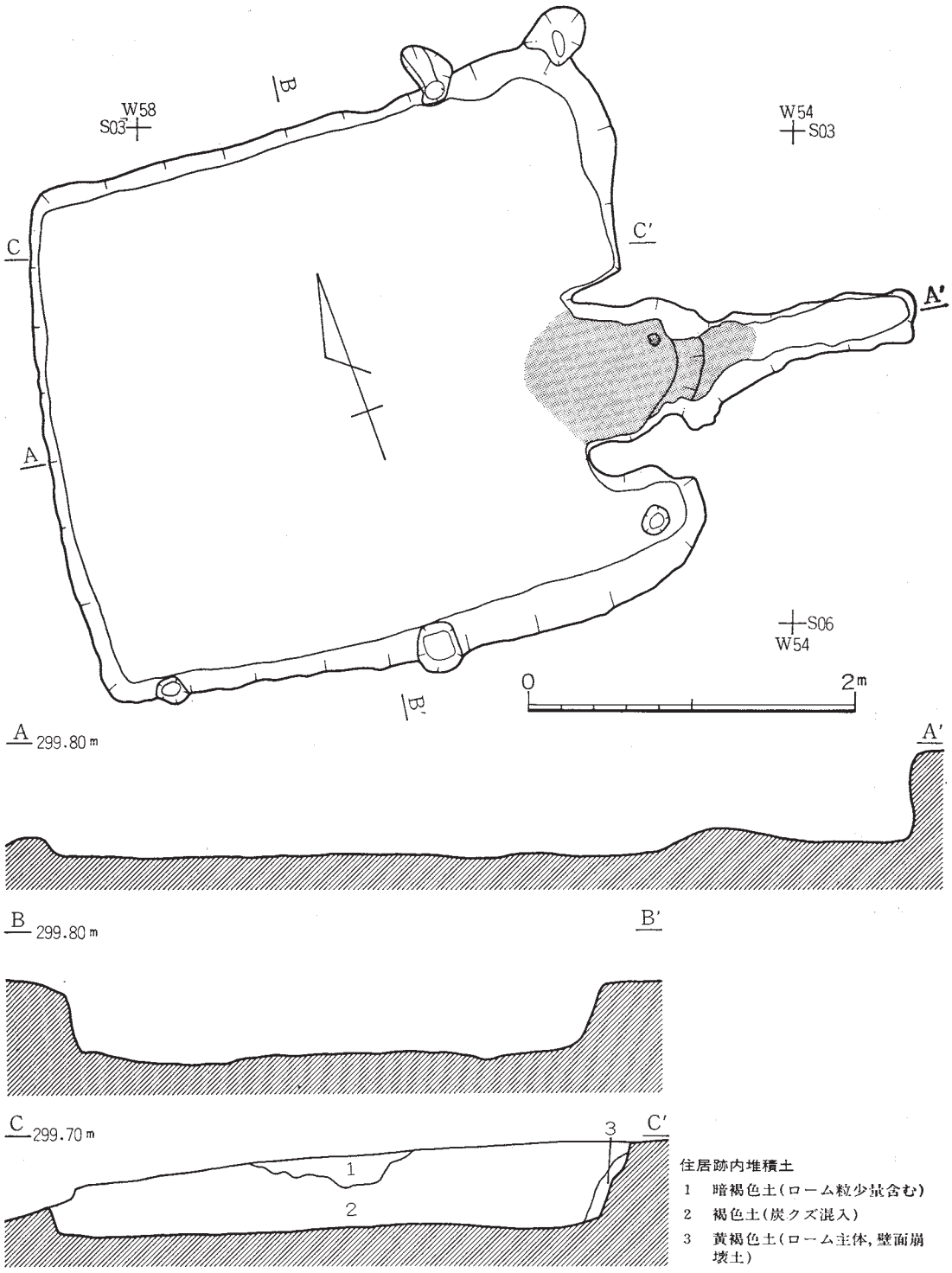
遺　　構（第42図，図版29）

35号住居跡は調査区の西寄りの地点で検出された。西壁間際で地境の段となるが，壁面は辛うじて完存していた。遺構内には２層の堆積土が認められたが，木炭を含む褐色土の２層がその大半を占めている。検出面における住居跡のプランはほぼ方形を呈し，東西3.8m，南北3.5mを測り，床面積は12.3㎡の規模をもつ。壁面は東壁が斜面上位に位置するためにやや高く約50cm，南壁は下位に位置し約15cm，北壁と南壁は約40cmである。床面はロームを直接床面とし，ほぼ水平で周溝はない。ピットはカマド右側に１ケ所，南壁中央部と南西隅付近に１ケ所検出され壁柱穴かと思われる。北東隅付近の壁面にある２ケ所のピットは木の恨による撹乱である。

カマドは東壁の中央やや南寄りの地点に付設されている。ロームを用いており，壁面から左袖で35cm，右袖で50cm遺存していて，両袖先端での焚口幅は75cmである。燃焼部は壁面を掘り込んでおり，外方に深さ45cm程の煙道がとりついている。煙道を燃焼部奥の段のついた部分からとして計測すると1.30mある。煙道底面は先端にわずかに高く，煙出し部は深さ10cm程のピット状を呈す。燃焼部から煙道前端にかけて底面の強い焼土化を観察した。

遺　　物（第43図，図版76）

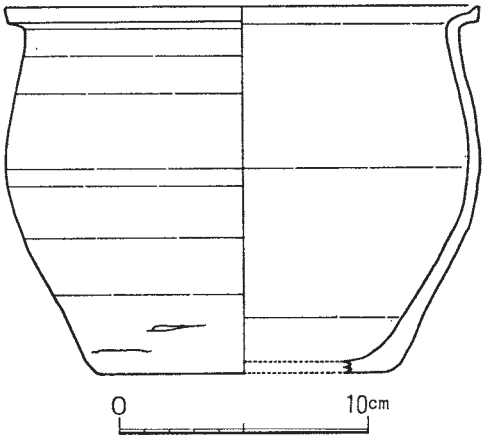
遺物は，大部分が堆積土中から破片状態で出土した土師器である。遺構に伴うものとしては，床面から出土した外面に平行叩き目・内面に同心円あて具痕を有する須恵器甕破片とカマド煙道部から甕の底部と思われる土師器破片各１点を出土している。


W58
S03
W54
S03
B
B'
C
C'
A
A'
S06
W54
0
2m
A 299.80m
A'
B 299.80m
B'
C 299.70m
C'
3
1
2
住居跡内堆積土
1　暗褐色土(ローム粒少量含む)
2　褐色土(炭クズ混入)
3　黄褐色土(ローム主体,壁面崩壊土)

第42図　35号住居跡

〔土　師　器〕

甕（第43図）　遺構南半の堆積土から出土した小型の甕で全体の約1/3が遺存している。内面に粘土接合痕が観察されるが，最終的に内外面ともロクロナデにより仕上げられている。体部中央で最大の張りをみせ，頸部は「く」の字状に強く屈曲し，口縁部は短く引き出されている。口唇部は，外傾ぎみにほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。２次加熱を受け内外面とも赤みを帯びた褐色を呈するが焼成は良好である。復元実測による口径19.0cm，底径12.1cm，器高14.7cmを測る。



第43図　35号住居跡出土土師器

ま　と　め

本住居跡は東辺にカマドを有す住居跡であるが，周溝や確実な柱穴が検出できなかった。遺物が少なく，遺構の年代も確実ではないが，底面から出土した須恵器甕破片と堆積土中から出土したロクロナデを加えた土師器甕からみて平安時代に位置づけられよう。

36号住居跡　ＳＩ36

遺　　構（第44図，図版30・31）

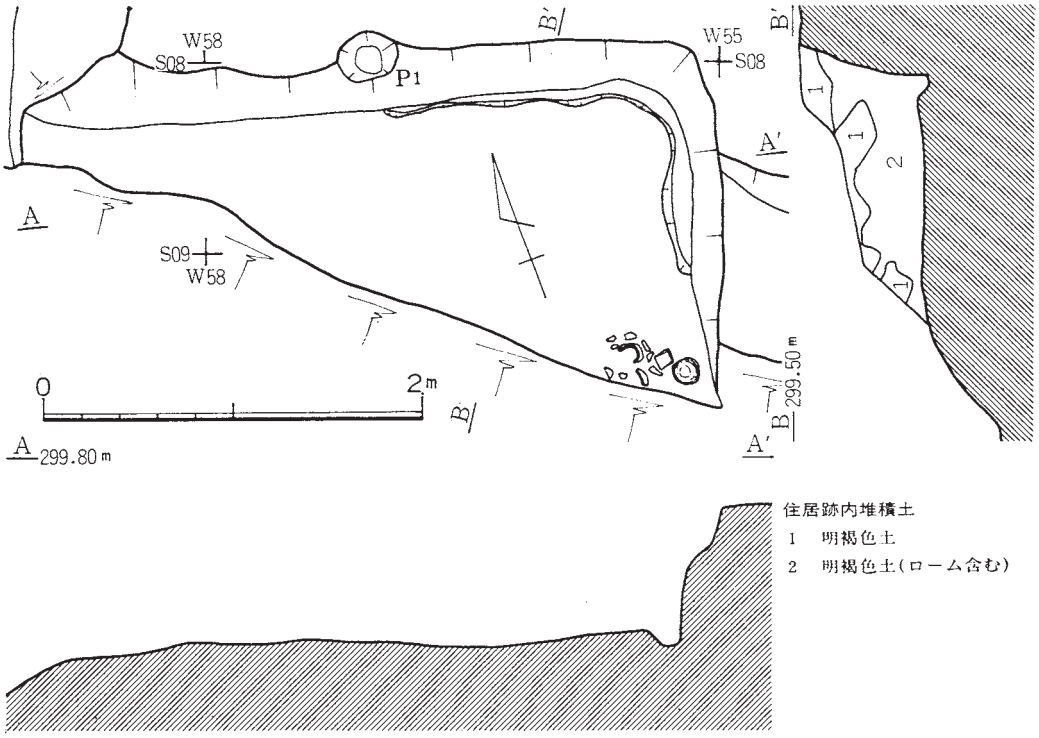
35号住居跡の南方に位置する住居跡である。遺構の大半を道路によって削除され，東・北辺の一部を残すだけで，全体規模が明らかでない。北辺が3.7m，東辺が1.9m遺存しているが，壁高は東壁で70cmと深い住居跡である。床面は北東コーナー付近にわずかな遺存部がある。ローム面を直接床面としているが，北壁に沿った部分に木炭が集中して検出された浅い周溝がある。遺構内堆積土は２層に区分できたが，下層ほどローム粒子を多く含んでいるだけで，顕著な違いがない。北壁の遺存部ほぼ中央に直径20cm，深さ60cmのピットが１ケ所検出された。壁柱穴となる可能性がある。遺存部がわずかであり，カマドについては不明である。

遺　　物（第45図，図版76・81）

出土した遺物の量は多くない。堆積土中からは，平行叩き目を持つ須恵器破片を含め土器片約15点，北東コーナー寄りの東壁沿いの床面からは鉄製品および土師器破片約30点が出土した。土器片はいずれも破片状態で出土している。床面の土師器杯破片はすべてロクロ成形，内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

〔土　師　器〕

杯（第45図１）　東壁の北東コーナー付近の床面から出土した。口縁部の一部を欠くが，ほぼ



第44図　36号住居跡

完形でロクロ成形によるものである。底部から体部下半まで回転ヘラケズリ再調整されており，底部切り離し痕が観察できない。底部中央はいくらか窪んでいる。内面は，放射状ヘラミガキの後横方向のヘラミガキを加え，黒色処理されている。２次加熱を受けたと思われ，色調は赤みを帯びた褐色を示す。

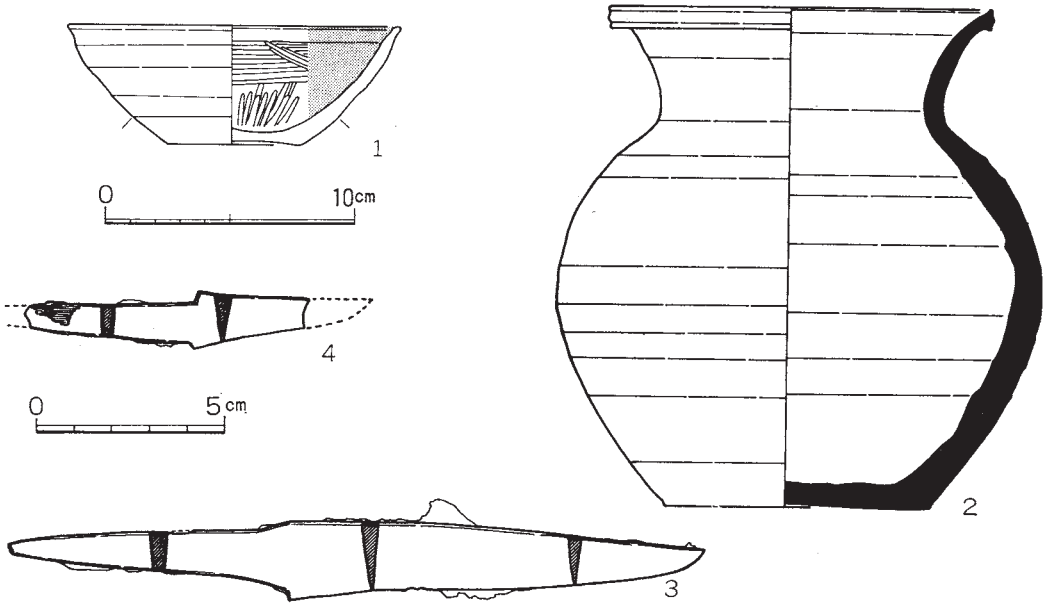
〔須　恵　器〕

壺（第45図２）　東壁の北東コーナー付近の床面から出土した。口縁から体部にかけて約1/2が遺存している。体部上半で膨らみを有し，全体で球形を呈する壺と考えられる。口縁部はやや直立気味に外傾し，口唇部は，垂直に近い面取りをうけている。最終的に内外面ともロクロによる仕上げのナデを加えられている。底部外面は手持ちのヘラケズリで調整されている。底径10.7cm，器高20.0cmを測り，復元実測による口径は15.4cmである。

〔鉄　製　品〕

刀子１（第45図３）　東壁付近の床面から錆化した状態で出土した。切先から茎先までよく残っており，完形である。平棟平造りの刀子で刃部の断面は二等辺三角形を呈する。全長18.4cm，うち茎部7.4cmを測る。刀身幅，棟幅は刃部中央部付近で幅1.8cm，厚さ0.7cmである。刃部中央部に木質が遺存しており，鞘の一部と思われる。

刀子２（第45図４）　刀子１と同じく東壁付近の床面から出土した。錆化が進行している。刃部・茎部の一部を欠損するが南関の平棟平造りの刀子である。刃部断面は二等辺三角形を呈す。現存長7.3cm，内茎部4.5cm，最大刃部幅1.2cm，厚さ0.4cmを測る。茎部に残る木質部は，柄の一部と思われる。



第45図　36号住居跡土師器・須恵器・鉄製品

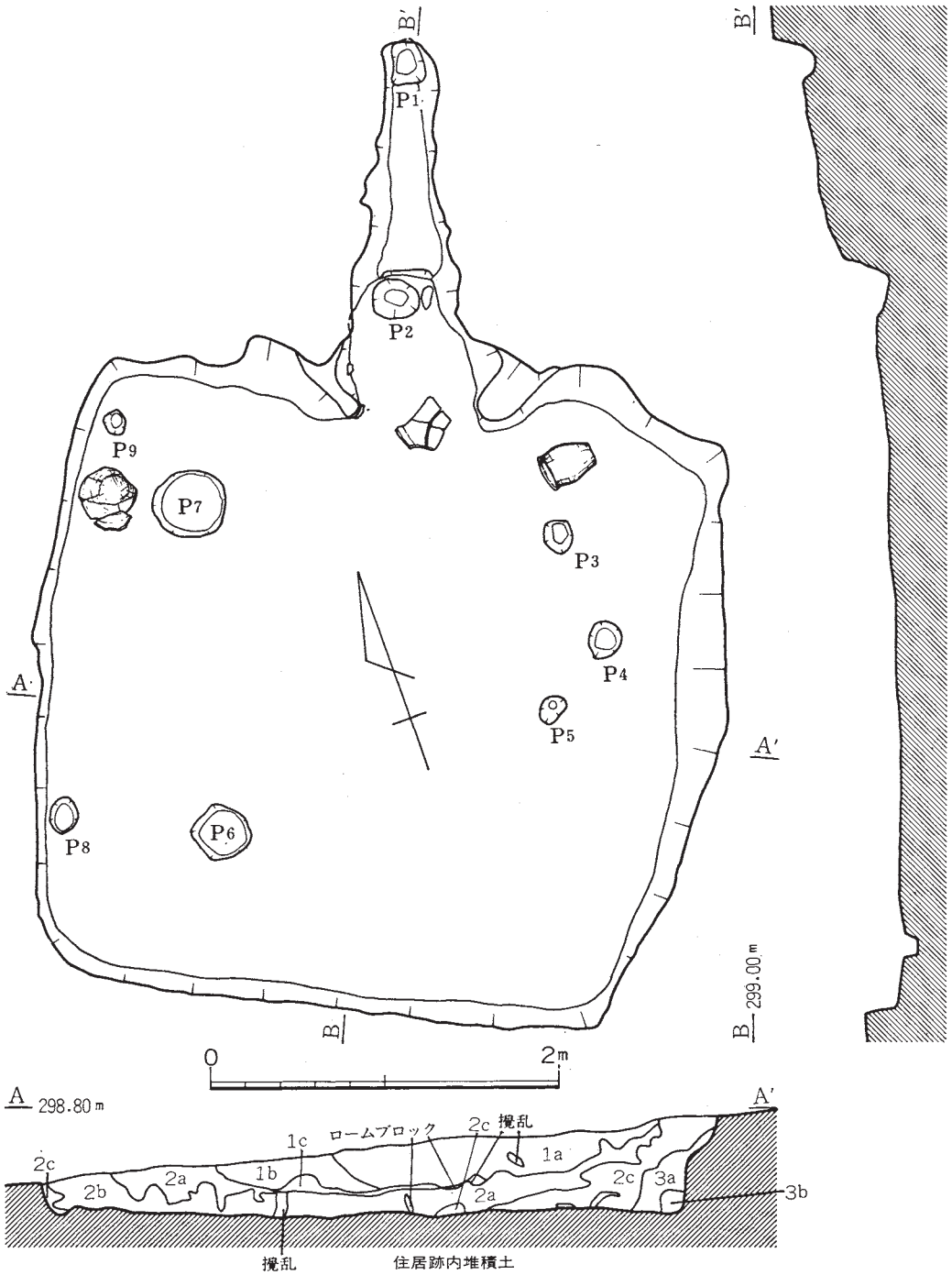
ま　と　め

36号住居跡は遺構の大半が道路によって破壊されており，全体規模・構造が明らかでない。床面出土の遺物には，土師器・須恵器・刀子と，遺存部が狭い割にはバラエティーに富んだ遺物があった。土師器杯はすべてロクロ成形によるもので，回転ヘラケズリ再調整をうけており，これらの遺物の特徴から見て，本住居跡の年代は平安時代と考えられる。

37号住居跡　ＳＩ37

遺　　構（第46図，図版32・33）

調査区域の西側，台地が一段落して傾斜する面の北端で検出された。35・36・38号住居跡に隣接し，遺構の残存は良好である。堆積土は基本的に３層に分かれ，さらに各層は細分化される。１層は，東辺付近から遺構中央部にかけて分布する黒褐色土である。下層ほど炭化物を含み，色調に濃淡がある。２層は遺構全域に分布し，床面を直接覆う暗茶褐色土・暗褐色土・茶褐色土であり，ロームブロックが混入している。１・２層は全体的に細かい粒子で，粘性があり．硬くし


B′
P1
P2
P9
P7
P3
P4
P5
P8
P6
A
A′
B
B′
299.00m
0
2m
A
298.80m
A′
2c
1c
ロームブロック
2c
攪乱
1a
2b
2a
1b
2a
2c
3a
3b
攪乱
住居跡内堆積土
1a　淡黒褐色土(炭化物を含む)
1b　明黒褐色土
1c　黒褐色土(炭化物を含む)
2a　暗茶褐色土(炭化物・焼土を含む)
2b　暗褐色土
2c　茶褐色土
3a　暗黄褐色土
3b　黄褐色土

第46図　37号住居跡

まっている。３層は東辺沿いに分布する暗黄褐色土・黄褐色土である。黄褐色土は硬くしまったロームであり，壁の剝落土と思われる。

住居跡の平面プランは，北辺3.55m，東辺3.4m，南辺3.1m，西辺3.4mの方形を呈する。北辺は北東コーナで緩いカーブを有し，カマドをはさんでほぼ一線に結びつく。壁は，各周とも急な立ち上がりを示す。床面からの高さは，北・東壁で50～55cm前後，南・西壁で約25cmである。床面は，地山ローム面を直接床面としているが，やや軟調であり，ほぼ水平を保つ。ピットは，６ケ所で確認した。深さは，いずれも５～10cm前後で比較的浅い。P_3・P_7は，カマドの南北中軸線を中心としてほぼ対称に位置しており，柱穴と考えられるが，他のピットは不規則的に所在しており，柱穴の可能性は薄い。周溝は検出されなかった。床面積は，11.6㎡あり，南・北辺の中点を結ぶ軸線の傾きは，N28° Eである。

カマドは，北辺中央部，やや東寄りに粘土で構築されている。両袖は北壁より右袖で35cm，左袖で35cm内側に遺存しており，焚口幅は70cmを測る。袖部には土師器甕破片を補強材に用いている。燃焼部は70×85cm前後を測り，床面から約５cm掘り込まれている。燃焼部は北壁から約45cm外側へ掘り込んでおり，燃焼部奥壁と煙道部の段差は約20cmある。この部分から長さ1.07mの煙道部がとりつき，先端は底面より深さ８cmのピットとなっている。燃焼部後端部に直径25cm前後，深さ７cmのピットがあるが，燃焼部への雨水の流入を防ぐ水溜めと思われる。燃焼部底面のほぼ全面に焼土を認めた。

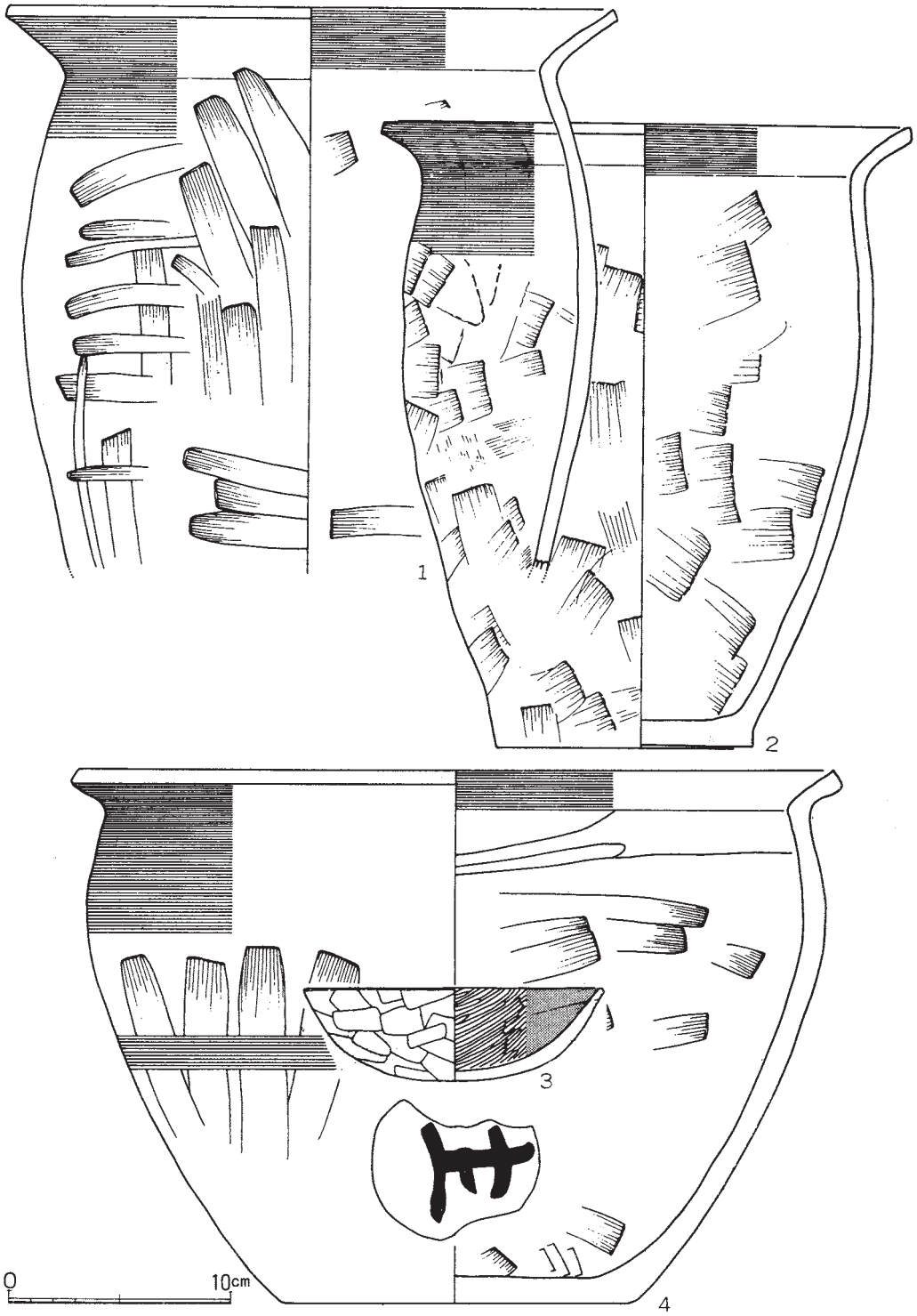
遺　　物（第47図，図版77）

遺物は，北東コーナ付近の床面直上に横倒しとなった土師器長胴甕をはじめ，北西コーナ付近の床面にも土師器甕が底部を下にし，体部が潰れた状態で出土した。またカマド内部からは，土師器甕が破片状態で出土しており，カマド周辺に遺物の集中がみられた。堆積土中出土の２片の須恵器以外は全て土師器である。

〔土　師　器〕

甕１（第47図４）　北西コーナ付近の床面直上から出土した甕である。口縁部から体部の一部を欠損している。全体の約1/2が現存する。底部より丸みをもって立ち上がり，肩部で若干の張りをみせる。頸部内で稜をつくり，「く」の字状に強く外反して，短く強く引き出された口唇部に至る。底径15.8cm，器高は23.9cmを測り，口径は推定で34.4cmある。口縁部をロクロナデし，体部内外面はヘラナデして仕上げている。

甕２（第47図１）　カマド左袖の燃焼部から出土した。口縁部から体部の一部が現存する。体部は緩い丸みをもって立ち上がり，全体でやや縦長の長胴型を呈するものとみられる。頸部の内面で稜を形成し，口縁部は「く」の字状に外傾する。口唇部は，ほぼ垂直の面取りをうけている。復元口縁径27.2cm，残存高25.0cmである。体部内外面ともヘラナデを施し，頸部から口縁部にか



第47図　37号住居跡出土土師器

けてはロクロナデにより仕上げられているが，体部下半にヘラケズリ痕がわずかに観察される。

甕３（第47図２）　北東コーナー付近の床面から出土した完形の長胴甕である。体部は丸みをもって立ち上がり，体部上半に緩い膨らみを有する。頸部の内面に稜をつくり，口縁部は「く」の字状に外反する。体部の内外面はヘラナデされ頸部から口縁部にかけてはロクロナデにより仕上げられている。口径23.8cm，底径11.5cm，器高27.9cmを測る。

杯１（第47図３）　東辺寄りの床面から出土した丸底の杯である。底部からなだらかに内彎気味に口縁部に至る。全体の約1/3が遺存しているが，復元口縁径13.5cm，高さ4.1cmを測る。外面は口縁部に幅の狭いヨコナデ部分が見られるが，全面にわたりヘラケズリされており，内面はヘラミガキ後黒色処理されている。外面に墨書痕が認められるが，判読不明である。

ま　と　め

本住居跡は，斜面で検出された関係もあり，一部後世の削平を受けているが，遺布状態は良好である。柱穴らしきピットを２個確認できたが，断定はできない。本住居跡の時期は，床面から出土した木葉痕を有する土師器甕破片や非ロクロ成形の土師器杯からみて奈良時代に位置づけられる可能性が強い。

38号住居跡　ＳＩ38

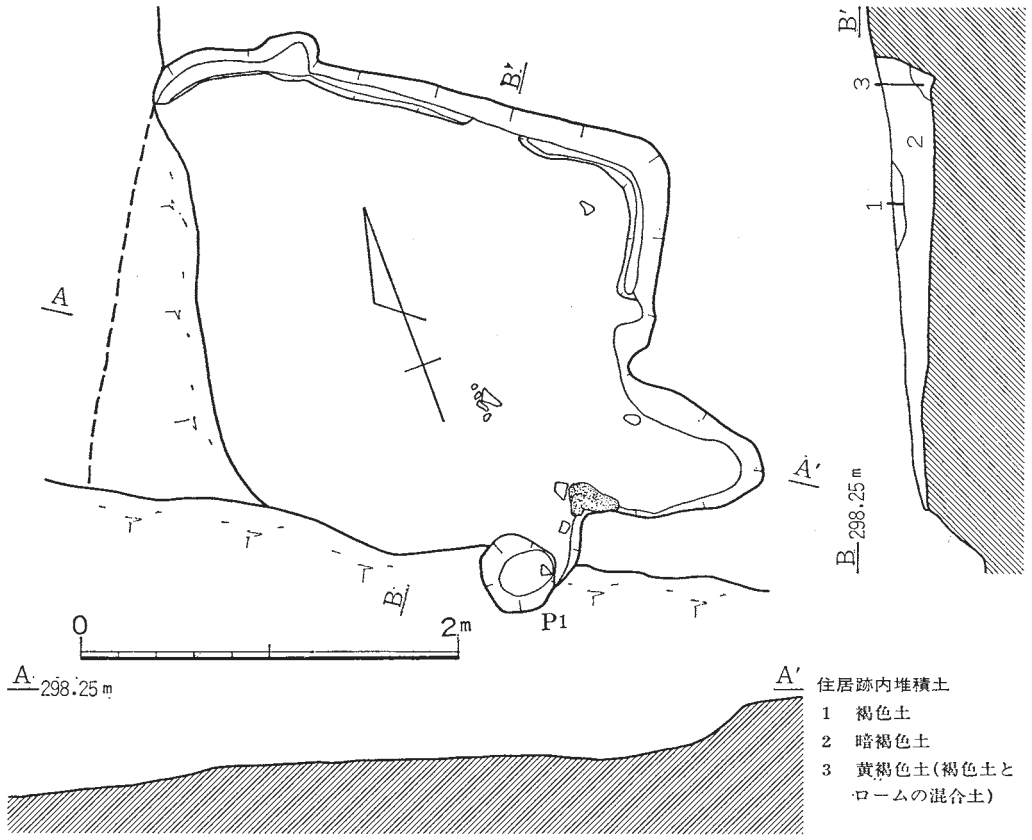
遺　　構（第48図，図版34）

38号住居跡は調査区西部の斜面に位置し，床面西側と南側の一部が道路によって削除された状態で検出された。検出層位はソフトローム面である。堆積土は暗褐色土の２層が大部分を占める。平面プランは，南壁と西壁が欠損しているため確認できないが北辺は約2.8ｍあり，東辺も貯蔵穴の位置からして同じ程度の長さと推定され，ほぼ１辺３ｍ弱の方形を呈していたものと思われる。床面はロームを叩きしめて固くしている。壁面の遺存高は最大30cmと浅い。東～北壁下に幅10cm，深さ５cm前後の浅い周溝を検出している。

カマドは東辺の中央に付設されている。袖部は遺存せず，燃焼部が東壁より外側に約90cm張り出して構築され，煙道部はない。東壁部での焚口幅は約50cmあり，右側のコーナー部には長さ30cm程の花崗岩が底面に据えられており，袖部の機能をはたしたものと考えられるが，袖部や天井部の構築材が遺存せず，構造に不明な点が多い。燃焼部のほぼ全面に弱い焼土を認めた。なおカマド右側の住居跡南東隅には，径40cm，深さ20cm程のピットが検出されており，位置関係から見て貯蔵穴の可能性が強い。北辺に直交させた軸線はＮ37° Ｅを示す。

遺　　物（第49図）

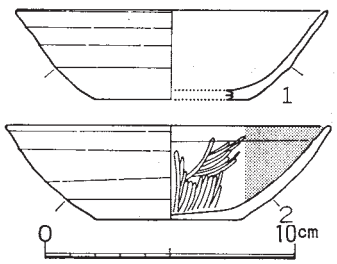
出土遺物はわずかにカマド周辺部から土師器杯・甕破片が出土した程度である。



第48図　38号住居跡

〔土　師　器〕

杯１（第49図１）　カマド内から出土したロクロ成形による杯である。口縁部から底部にかけて全体の約1/4が遺存している。口径12.4cm，底径6.1cm，器高3.1cmと推定される。外面底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ再調整され，内面は，磨滅により明瞭さを欠くが，わずかにヘラミガキ痕が観察される。再酸化され黒色が消失しているものと思われる。



第49図　38号住居跡出土土師器

杯２（第49図２）　遺構南半の堆積土中から出土した。全体の約1/2が遺存する。ロクロ成形による杯で，口径は推定12.9cm，底径5.8cm，器高3.8cmを測る。外面は底部から体部下半まで回転ヘラケズリ，内面は放射状ヘラミガキ後黒色処理されている。

ま　と　め

本遺構の一部は削平され遺存していない。周溝・貯蔵穴は検出されたが，柱穴は認められない。堆積土および床面出土の土師器杯はロクロ成形であり，カマドに明確な袖部がなく，燃焼部だけ

住居外に張り出す特徴があった。回転ヘラケズリ再調整を施していることから，遺構の年代は平安時代に位置づけられる。

39号住居跡　ＳＩ39

遺　　構（第50図，図版35）

調査区域の西南区北側で検出された。40・41号住居跡に隣接する。堆積土は５層からなるが，黒褐色土が大半を占める。カマド周辺には小石大のロームが混入した暗褐色土が分布している。各層は，遺構中央部に向かって堆積しており，自然堆積土と考えられる。

遺構平面プランは，北辺3.58m，東辺4.19m，南辺3.73m，西辺4.33mの方形である。東辺はカマドをはさんで，南北で一線に結びつかない。北東・北西コーナはほぼ直角に近いが，南東・南西コーナは緩くカーブしている。壁は，各周とも急な立ち上がりを示し，特に南辺において顕著である。高さは床面から40～50cm前後を測る。床面は，地山ローム面を利用し，硬くたたきしめられている。北辺付近を除けば，全体的に平坦である。床面積は15.3㎡である。周溝は西辺北側から北辺・東辺北側にかけて検出された。幅10～15cm前後，深さ約10cmである。南辺では浅い窪みが認められるが，明確な周溝に見えない。ピットは南東コーナー・西辺付近２ケ所で検出された。P_1は径70～85cm前後の楕円形，P_2は径50cmの不整円形である。P_1は位置的に貯蔵穴と思われる。P_2はわずかに窪められたピットである。南･北辺の中点を通した軸線の傾きはＮ23° Ｅである。

カマドは東辺やや南側寄りに付設されている。住居跡内部に右袖が40cm，左袖が25cmの長さで遺存するが，焚口から燃焼部奥壁まで約95cmを測る。奥壁は東辺から約25cm外側へ張り出している。燃焼部奥壁は緩やかに立ち上がり，煙道に続いたものと思われるが，立ち上がりの状況から考えると，煙道のなかった可能性が強い。燃焼部中央に２個の支脚石がある。

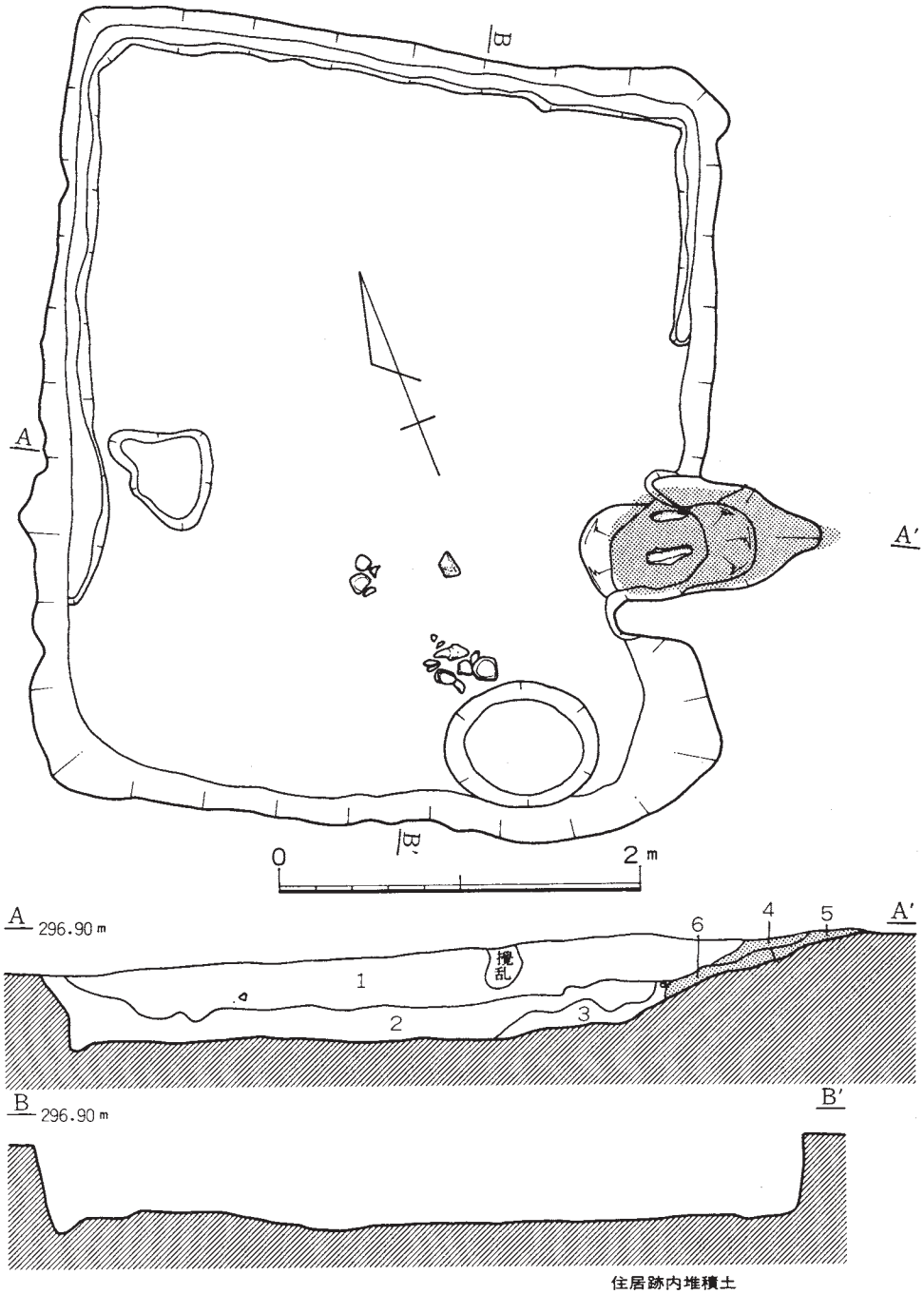
遺　　物（第51図，図版77・81）

覆土からは土師器，須恵器が破片状態で出土している。遺構に伴う遺物は遺構中央部から東辺寄りの床面に集中して出土した土師器杯・甕の破片であるが，主として杯は床面から，甕はカマド内から出土した。須恵器はカマド内に混在していた蓋破片１点だけである。

〔土　師　器〕

杯１（第51図１）　南西コーナ付近の堆積土中より出土したロクロ成形による杯である。口縁部から体部の1/4が遺存する。推定口径15.8cm，残存高5.4cmを測る。外面の残存部には再調整痕の残る部分がなく，調整技法の検討ができない。内面はヘラミガキ後黒色処理している。

杯２（第51図２）　床面から出土したロクロ成形によるほぼ完形の杯である。外面が底部全体と体部下端にかけ回転ヘラケズリ再調整を施し，内面はヘラミガキ後黒色処理している。底部の内面に「キ」と読める線刻がある。口径13.4cm，底部5.8cm，高さ4.6cm。


B
A
A′
B′
0
2 m
A 296.90 m
A′
4
5
6
撹乱
1
2
3
B 296.90 m
B′
住居跡内堆積土
1　黒褐色土
2　黒褐色土(ローム粒を含む)
3　暗褐色土
4　暗赤褐色土
5　赤褐色土
6　黄褐色土

第50図　39号住居跡

杯３（第51図３）　遺構西端の堆積土中から出土した。ロクロ成形による杯で，底部の一部と体部の一部が遺存している。外面は底部から体部下端まで回転ヘラケズリ再調整を施しており，ロクロ切り離し痕が観察できない。内面は底部放射状ヘラミガキ後黒色処理している。体部下端に判読できない線刻がある。底径7.0cm，残高5.4cmを測る。

杯４（第51図４）　堆積土から出土したロクロ成形の杯である。底部と体部の一部，全体の約1/3が遺存する。底部と体部下端は回転ヘラケズリ再調整されているが，ヘラ切りによると思われる段が形成されている。内面は底部を一方向のヘラミガキ後，黒色処理している。底径7.0cm，残存高5.5cmを測る。

杯５（第51図７）　床面から出土したロクロ成形の杯で，体部の一部と底部1/2が遺存する。底部から体部下端まで回転ヘラケズリ再調整を施す。内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部内外面に線刻があり，内面「女」，外面「キ」と判読される。底径6.6cm，口径13.4cm，器高3.5cmを測る。

高台皿１（第51図５）　床面から出土したロクロ成形による高台皿である。約1/2が遺存しており，高台部径6.8cm，推定口径14.4cm，器高2.8cmを測る。器肌の荒れが著しく，内面の調整は不明瞭であるが，黒色処理され，わずかに放射状ヘラミガキ痕が認められる。高台は付高台であり，最終的にはロクロナデして仕上げているが，底部に回転ヘラケズリ痕が観察されるので，皿部は高台がつく前段階に回転ヘラケズリ調整されたものと考えられる。

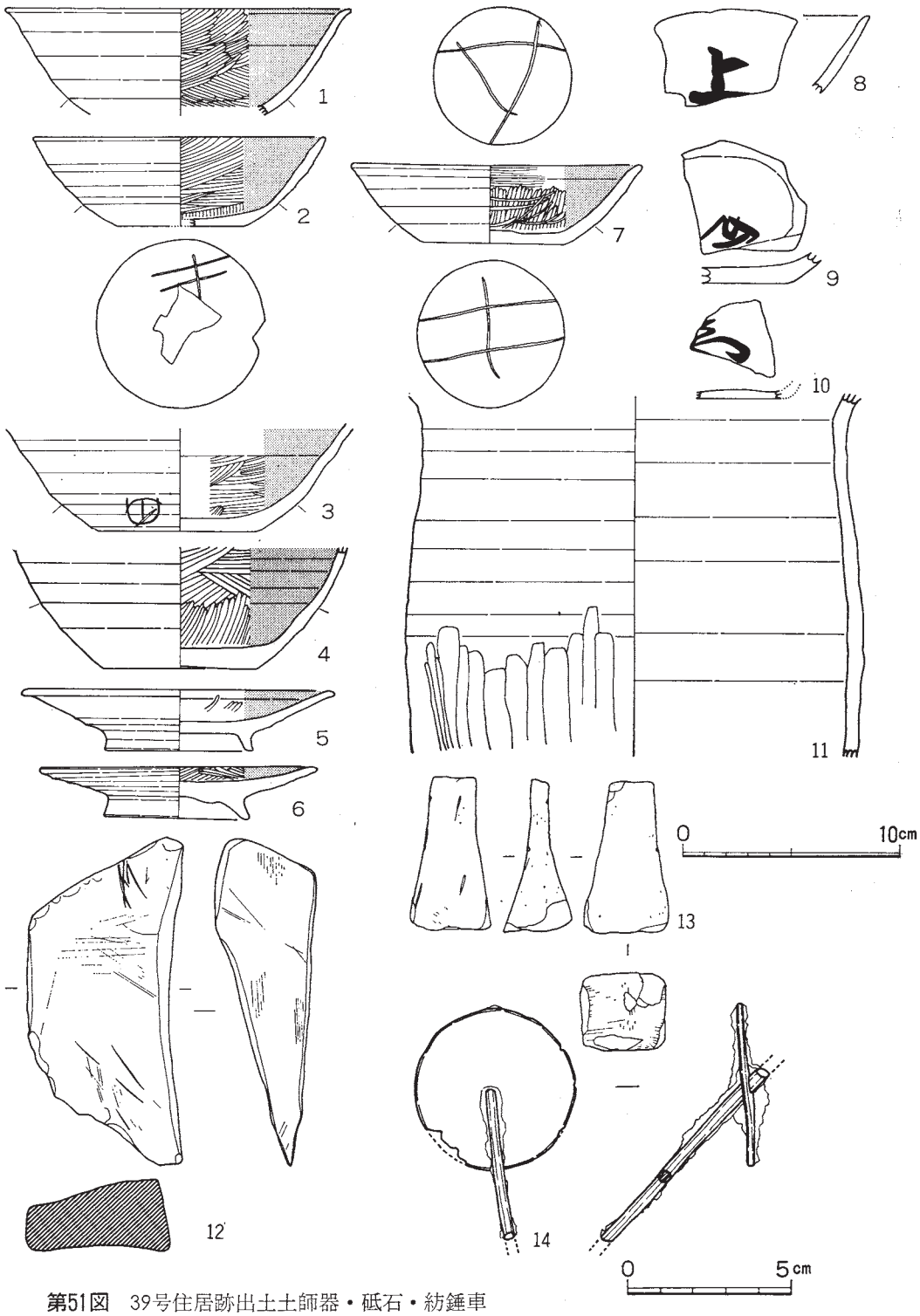
高台皿２（第51図６）　床面から出土した完形品であるが付高台であり，高台をつけた後に外面全体をロクロナデしている。内面はヘラミガキ後黒色処理している。高台径6.7cm，口径12.8cm，器高2.4cmを測る。

甕１（第51図11）　カマド内より出土した。口縁部・底部を欠損し，全体の約1/4が遺存する。ロクロ成形である。体部は丸みを帯びて立ち上がり，頸部に弱いくびれをもって外傾する。体部上半で若干膨らみ，全体で長胴型を呈すると思われる。調整は内外ともロクロナデを施し，体部下半外面はさらに縦方向のヘラケズリを加える。残存高10.5cm。

その他全形は復元できないが，墨書を有す土師器杯破片が３片ある。杯６・７は底部に，杯８は体部に墨書されている。３片ともに回転ヘラケズリ再調整痕がある。杯６は判読不能。杯７は２字あるものと思われるが，１字は「ア」と読める。杯８は「上」と読める。

〔鉄　製　品〕

鉄製紡錘車（第51図14）　カマド左袖付近の東壁下半に貼りつくように出土した。円盤と軸棒の一部が遺存している。円盤の厚さ0.2cm，径4.8cmを測り，軸棒は太さ約0.4cm，残存する長さ約12cmである。



第51図　39号住居跡出土土師器・砥石・紡錘車

〔その他の遺物〕

砥石１（第51図13）　床面から出土した。最大長7.0cm，最大幅3.9cmで，厚さは最大で3.0cm，最小で0.8cmを測る。五面に利用痕があり，一部に鉄製利器によるとみられるやや深い切り込み痕が観察される。四面は研磨により磨滅し，滑らかで丸みを帯びている。石質は泥岩である。

砥石２（第51図12）　床面から出土した。最大長15.1cm，最大幅6.5cmで，厚さは最大4.6cm，最小0.2cmを測る。五面を利用し，全面に無数の利用痕が観察される。一部に鉄製利器による深い切り込み痕が認められる。表面は全体的に研磨により窪むように磨滅し，滑らかである。石質は粘板岩である。

ま　と　め

本遺構の遺存状態は良好であり，明確にプランを把握できた。ただしカマド両袖は撹乱が著しい。柱穴は検出されなかったが，貯蔵穴・周溝を確認できた。本住居跡の時期は床面から出土した回転ヘラケズリ再調整を加えた土師器杯などからみて，平安時代に位置づけられる。

40号住居跡　ＳＩ40

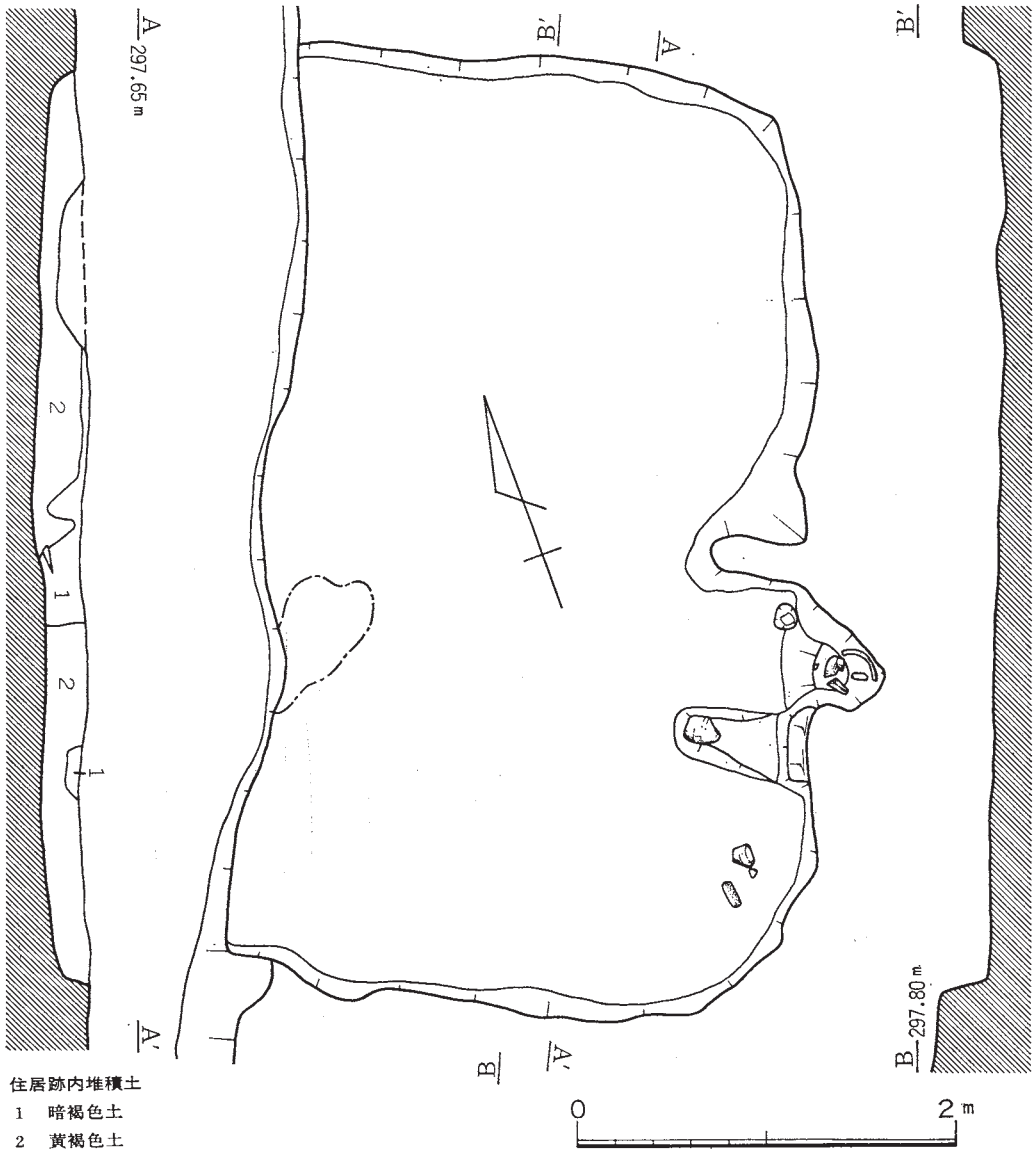
遺　　構（第52図，図版36）

40号住居跡は，南西地区東部で検出された。西半部は開畑時に削平されて完全に消滅している。堆積土は桑樹の撹乱部分を除くとすべて黄褐色土層が占めている。西半部が破壊されていて全体規模はつかめないが，東壁は南北約５ｍ遺存しており，１辺５ｍ前後の住居跡と推定される。床面は，構築の際にロームを掘り込み，その後褐色土を入れ貼り床を行ったものであるが，あまり叩きしめられておらず床面の検出はかなり困難であった。なお周溝・柱穴等の床面施設は確認できなかった。

カマドは東壁やや南寄りに位置している。右袖は台風の際に崩壊し，残存しているのは左袖のみであるが，粘土質の土を用いており住居内へ50cm程張り出している。カマド中央には段が形成されているが，ほぼ壁ラインに位置していることから，カマド構築の際に住居壁を，カマド燃焼部奥壁として利用したと考えられる。壁ラインから住居外へ40cm程掘り込まれた煙出しと思われる突出部がある。貯蔵穴は確認できなかったが，あるいはカマド右側の住居跡南東隅のやや窪んでいる箇所がそうであったかも知れない。なお住居跡内各所より焼土・炭化物が検出され，中央付近には灰白色砂質粘土がみられた。

遺　　物（第53図，図版79・81）

遺物の量は多いが，大部分は堆積土中から出土した土師器・須恵器破片である。遺構に伴う遺物は，主としてカマド内出土の土師器甕と南東コーナー付近の床面に散乱した土師器杯・甕破片である。なお北東コーナー付近の堆積土から鉄滓が出土している。土器は４点を図化した。



第52図　40号住居跡

〔土　師　器〕

杯１（第53図１）　住居跡堆積土中から出土したロクロ成形の杯で，底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ再調整を加えており，全体の約1/2が遺存している。内面は磨滅著しく調整痕不明であるが，ヘラミガキ後黒色処理されたものと思われる。復元実測による底径5.4cm，口径12.3cm，器高4.1cmを測る。体部外面に墨書痕を認めるが，判読できない。

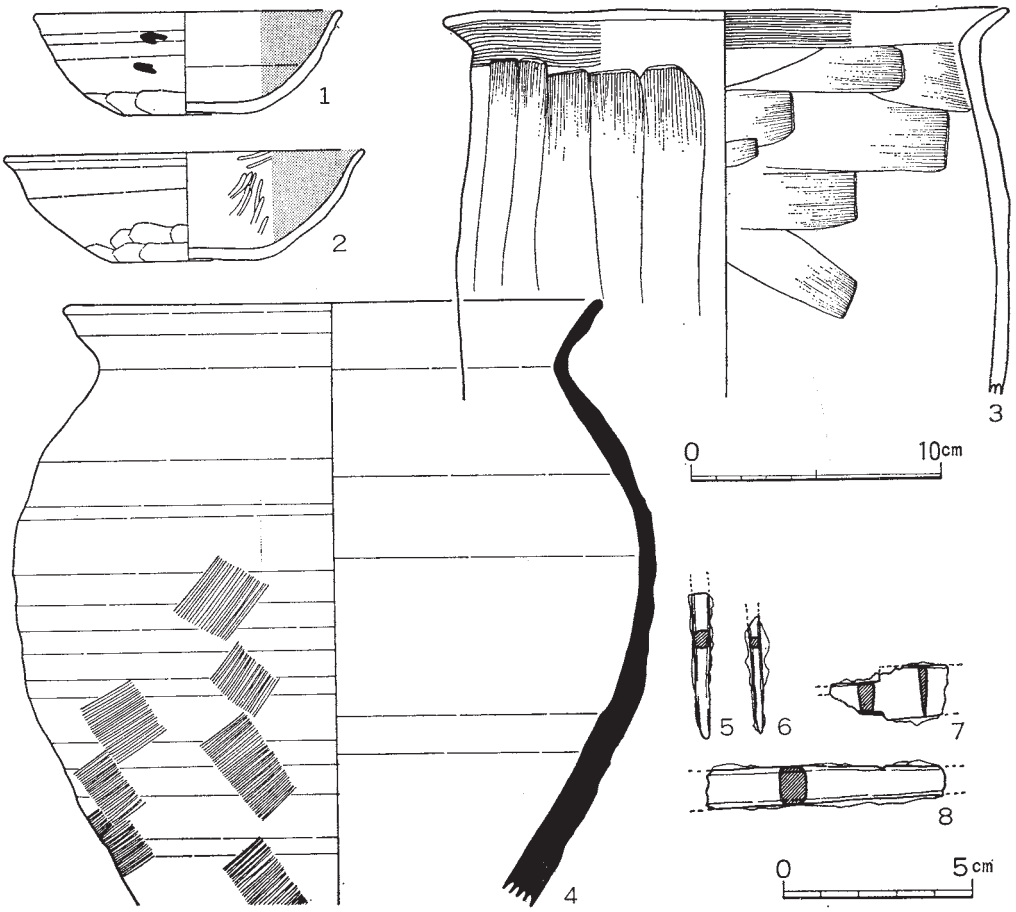
杯２（第53図２）　南東コーナー付近の床面から出土したロクロ成形の杯で，体部の一部を欠

損し，全体の2/3が遺存している。底径5.9cm，口径14.4cm，器高4.3cmを測る。器肌は著しく荒れていて，明確さを欠くが，底部から体部下半は回転ヘラケズリ再調整を施したと思われる。内面はわずかにヘラミガキ痕が認められ，黒色処理されている。

甕（第53図３）　カマド煙道部内から出土した。体部の下半と底部を欠損し，全体の約1/3が遺存する。口径22.6cm，残存高14.5cmを測る。体部はやや内彎気味に立ち上がり，体部下半に若干の張りを持つ。頸部は強く「く」の字状に外傾し口縁部に至る。口唇部は丸く調整されている。全体で長胴型を呈するものと思われる。外面は，体部を縦方向のヘラナデ，頸部から口縁部にかけてはヨコナデにより調整されている。内面も口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデされている。

〔須　恵　器〕

甕（第53図４）　南東コーナー付近の床面から出土した。口縁部から体部の一部が遺存し，全体の約1/4を復元実測した。体部上半で丸みを帯びた張りを持ち，頸部で「く」の字状に外反する。外面の体部下半に平行叩き目が認められるが，口縁部はロクロナデによって仕上げている。復元



第53図　40号住居跡出土土師器・須恵器・鉄製品

口縁径21.6cm，残存高24.2cmを測る。

〔鉄　製　品〕

鉄鏃１（第53図５）　遺構北半の堆積土中から出土した。鉄鏃の茎の一部と思われる。3.8cmが遺存している。断面は４㎜前後の方形である。

鉄鏃２（第53図６）　遺構北半の堆積土中から出土した。鉄鏃の茎の一部と思われる。3.1cmが遺存し，断面は約２㎜の方形である。

刀子１（第53図７）　遺構北半の堆積土中から出土した。平棟平造りの刀子と思われるが，茎部と刀身の大半を欠損している。刃部の断面は二等辺三角形を呈し，浅い刃関がある。現存長3.2cm，うち茎部1.4cmを測る。刃部幅1.4cm，厚さ0.2cmである。

刀子２（第53図８）　遺構北半の堆積土中から出土した。刀子の茎部の一部と思われ，現存長6.3cmを測る。

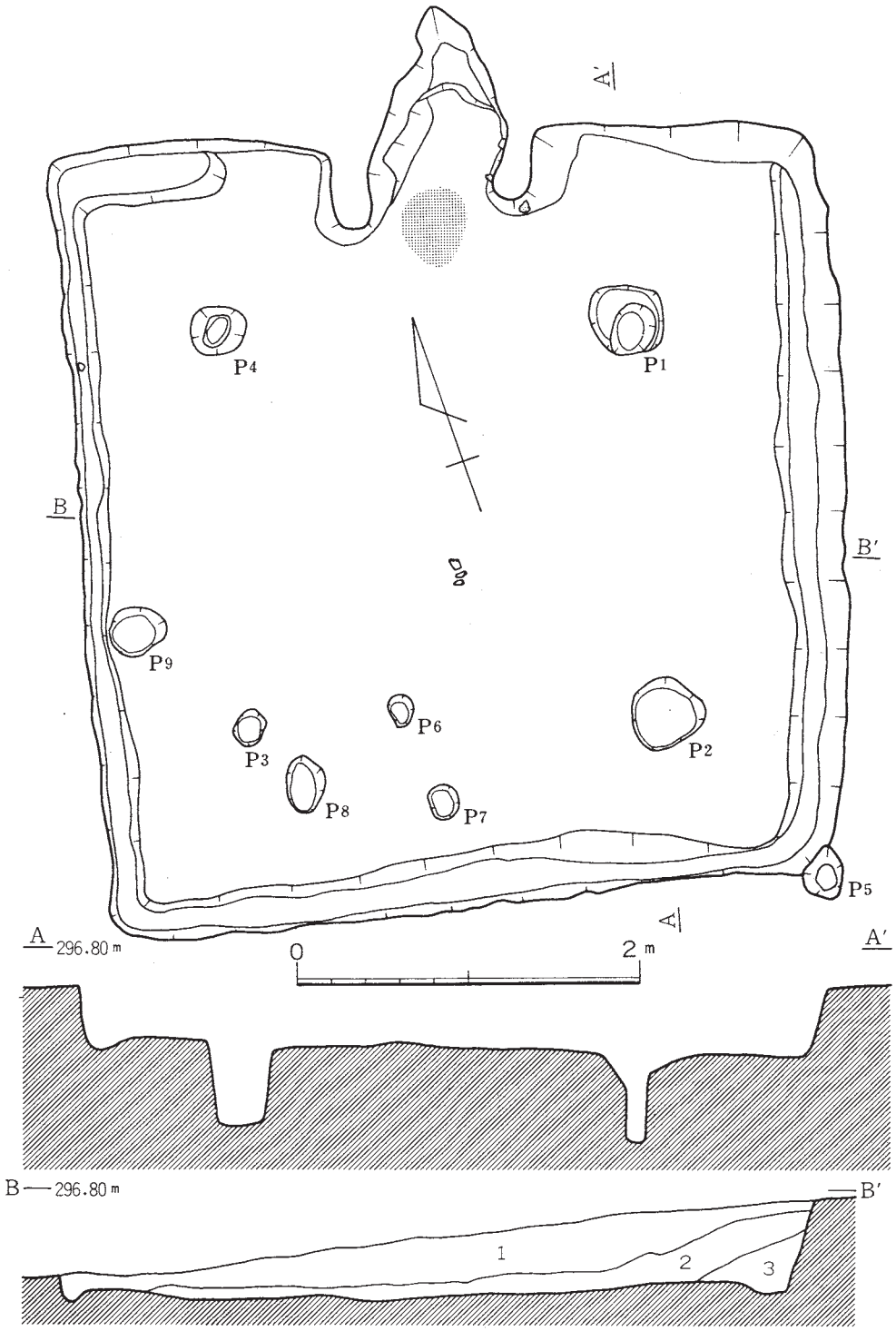
ま　と　め

本遺構の西半は削平され遺存していない他，カマド周辺を中心に木根により撹乱され，遺存状態は良好でなかった。遺物の大部分は堆積土中から出土しており，遺構に伴う遺物の量はさして多くないが，床面から出土した土師器杯・須恵器甕から，平安時代に位置づけられる遺構であろう。

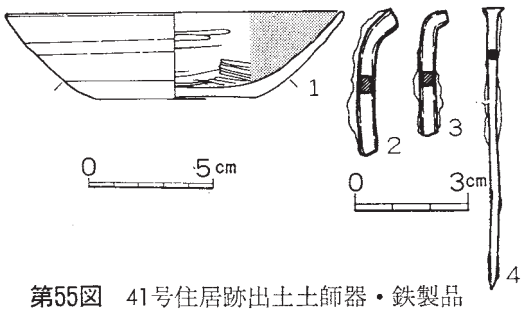
41号住居跡　ＳＩ41

遺　　構（第54図，図版37）

41号住居跡は，南西地区南側の西傾斜面で，40号住居跡のすぐ南西側より検出された。検出層位はローム面である。堆積土は１層がロームを含む明褐色土で，地山と似ており，検出はやや困難であった。２層の黄褐色土・３層のロームを多量に含む黄褐色土の順に自然的な堆積状態を示している。遺構平面プランは，東西約4.5m，南北約4.7mの方形を呈し，床面積17.3㎡ほどの中規模な住居跡といえる。床面はロームを直接床としており，あまり固くない。周溝は東・南・西の壁面直下では確認できたが北側は不明瞭である。柱穴状のピットは３個検出され，各々深さは床面より50cm前後である。カマドは北壁中央部に位置している。上半部は削られていたが，両袖が遺存しており，住居内へ40～45cm程張り出している。燃焼部奥壁は両袖の先端を結ぶ線から80cm奥で段が形成されている部分と思われる。奥壁から45cm程住居外へ振り込まれた部分が煙出しにあたると考えられる。焚口部は袖残存状態から，高さ30cm，幅60cm程であったと推定される。カマド内の上層を除く大部分は，暗赤褐色の焼土が充塡していた。なお床面南西部の小ピットはかなり不明瞭なものであるが，壁面南東隅のピットは，かなり深く，壁柱穴の可能性も考えられる。南・北辺の中点を結んだ軸線の傾きはＮ17° Ｅである。


A
A′
B
B′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
296.80m
0
2m
296.80m
1
2
3
住居跡内堆積土
1 明褐色土(ローム含む)
2 黄褐色土
3 黄褐色土(ローム含む)

第54図 41号住居跡



第55図　41号住居跡出土土師器・鉄製品

遺　　物（第55図，図版79・81）

遺物はすべて破片状態で出土した。土師器破片・須恵器破片であるが，遺構に伴うものは，カマド燃焼部から煙道部にかけて散乱した土師器甕破片のみである。甕破片は，赤褐色を呈す個体と淡褐色を呈す個体があり，いずれも体部外面にヘラナデが加えられている。

〔土　師　器〕

杯（第55図１）　遺構北半の堆積土中から出土した。口縁部から底部にかけて全体の約1/3が遺存している。ロクロ成形である。外面は，底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ再調整され，内面はわずかにヘラミガキ痕が観察される。黒色処理されている。

〔鉄　製　品〕

釘（第55図４）　堆積土から出土した。錆化が進行しているが，完形品で，長さが7.4cmある。

不明鉄製品（第55図２・３）　堆積土中から錆化した状態で出土した。２片あるが同一個体と思われる。それぞれ長さ3.5cm，4.0cmの破片で環状金具の一部と思われる。

ま　と　め

本遺構は，斜面に位置する関係から後世の削平を受け，遺存状態は良くなかった。遺構に伴う遺物は，カマドから出土した土師器甕片のみであり手がかりに欠けるが，堆積土から回転ヘラケズリ再調整を受けた内黒土師器を出土しているところから，本遺構の時期は平安時代に位置づけられる。

42号住居跡　ＳＩ42

遺　　構（第41図，図版28）

34号住居跡内部に重複した住居跡であり，34号住居跡床面を破壊して構築されている。北半部が調査区外にのびているため，南半部だけ調査した。南辺の全体と東・西辺の一部を検出した。南辺は2.75mの長さがあり，方形プランを呈すものとすれば小型の住居跡となろう。壁面は34号住居跡床面からは約５cm程しかないが，検出面からの深さは50cm前後ある。遺構内にはローム粒を含む褐色土が単層状態で堆積していた。床面はローム面を直接床面としており平坦である。周溝や柱穴は調査した中には確認されなかった。南辺の中点に直交させた軸線の傾きはＮ14°Ｅを測る。

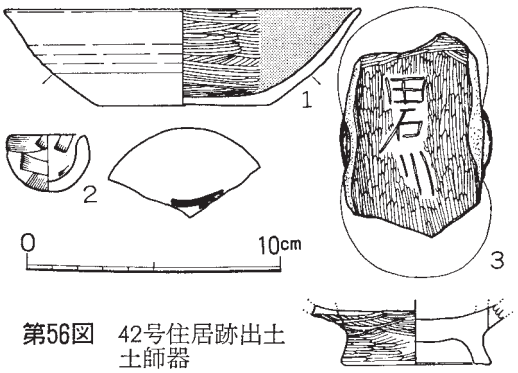
遺　　物（第56図，図版78）

遺物は堆積土中からは土師器杯・甕破片が出土した他，床面直上から手捏ね土器や土師器杯・

甕破片が出土した。まとまった出土状況を呈したものはなく，全て破片である。

〔土　師　器〕

耳皿（第56図３）　床面直上から出土した内外面黒色処理された耳皿の底部破片である。ロクロ成形後高台内側を除きヘラミガキしている。高台は付高台である。残存高2.1cm，高台部径5.9cmを測る。皿部内面に「田石川」の線刻がある。



第56図　42号住居跡出土土師器

手捏ね土器（第56図２）　床面近くから出土した完形である。底部は丸底で口径3.1cm，器高2.2cmを測る。

杯（第56図１）　堆積土から出土したロクロ成形による杯である。口縁から底部にかけて1/4遺存している。口径13.8cm，底径6.7cm，器高3.8cm前後と推定される。底部から体部下半部を回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキ後黒色処理される。底部に墨書があるが判読できない。

ま　と　め

本遺構はＳＩ34を切り込んで構築された住居跡である。遺構の北半が調査区外にあり，全体の構造が明らかにできないが，一辺３ｍ弱の小規模な住居跡であると推定される。床面に確実に伴う遺物がないが，堆積土，床面直上から出土した土師器杯破片は，全てロクロ成形によっており底部は回転ヘラケズリ再調整をうけている。これらの土器の特徴から本遺構は奈良～平安時代に位置づけられよう。「田石川」の線刻文字のある耳皿は，極めて重要な意義を有す土器である。

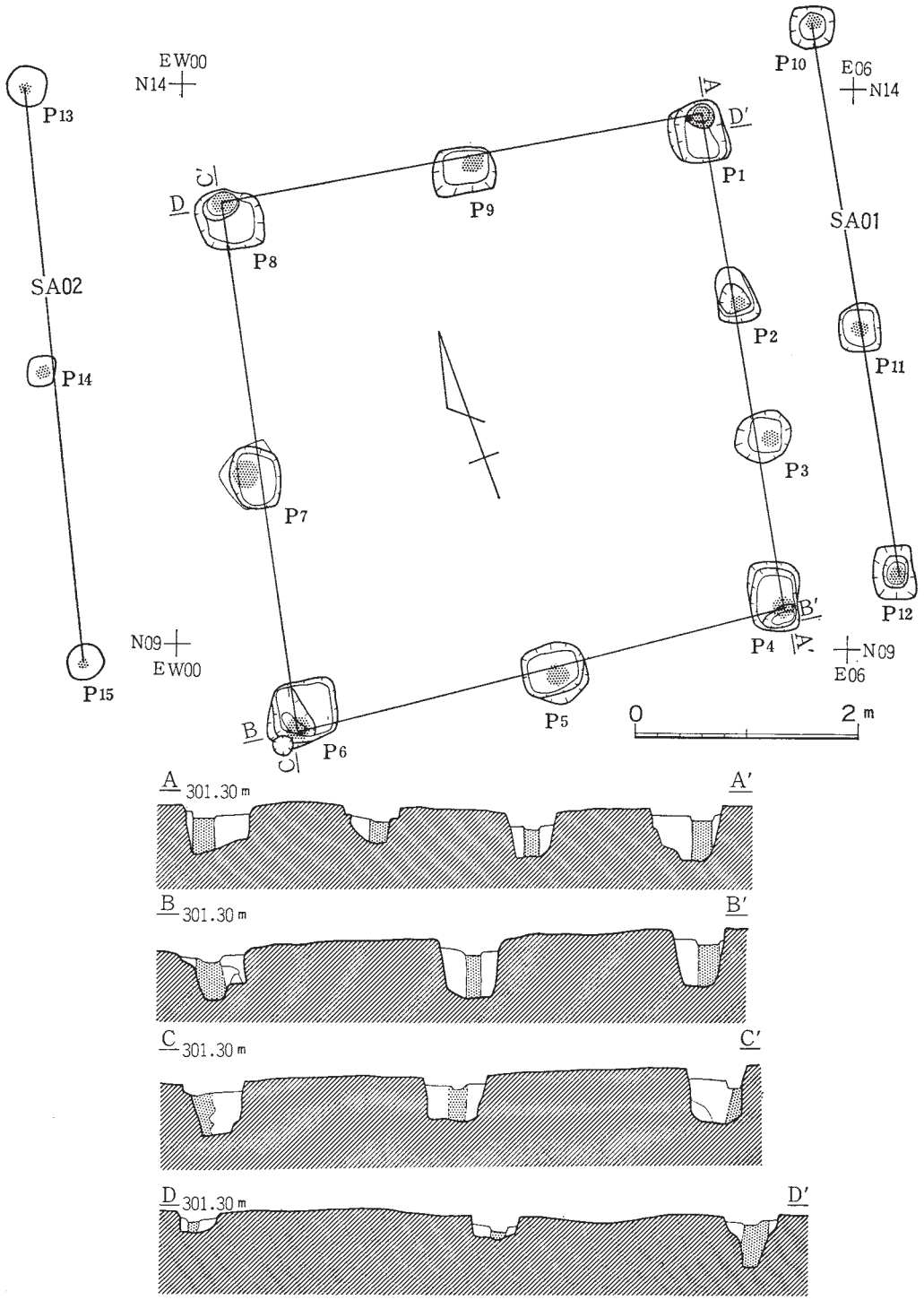
第３節　掘立柱建物跡

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は，同一地点で建て替えられた建物跡を含め26棟ある。検出遺構としては最大の数にのぼるが，そのうち２棟は調査区の北端部にホリカタの一部が検出されただけであり，全体の精査ができなかった。これらの建物跡は，調査区の中央部に集中して検出されており，谷地前Ｃ遺跡の奈良・平安時代集落を理解する上で最も重要な資料となった。

昭和52年の調査では２棟の建物跡が検出されており，今年度検出の建物跡は３号建物跡（ＳＢ03）～24号建物跡（ＳＢ24）となる。

３号建物跡　ＳＢ03（第57図，図版40）

東西２間・南北２間の中ヌキの建物跡であるが，東側柱列だけ３間と変則的な柱間構造をとっている。東西両側柱列の両外側に，それぞれ３個の掘形が並ぶＳＡ01・02掘立柱柱列があるが，


EW00
N14
P13
SA02
P14
P15
N09
EW00
P8
P9
P1
P10
E06
N14
SA01
P2
P11
P3
P7
P12
P4
N09
E06
P5
P6
0
2m
A
301.30m
A′
B
301.30m
B′
C
301.30m
C′
D
301.30m
D′

第57図　３号建物跡

南・北側柱列の延長軸線に対応せず，別個の遺構であるものと考えたい。

掘形は一辺50～60㎝の方形もしくは長方形を基本形としているが，P_2・P_3は不整形である。全ての掘形に直径20㎝弱の柱痕が遺存しており，これらを基準とした各辺の全体の長さは，東側柱列で4.48m，南側柱列4.50m，西側柱列4.75m，北側柱列4.40mを測る。各側柱列での柱間寸法は，東側柱列が北から1.70＋1.20＋1.54m，南側柱列が東から2.14＋2.36m，西側柱列が南から2.30＋2.45m，北側柱列が西から2.28＋2.12mである。東側柱列での軸線の傾きはＮ11°Ｅである。

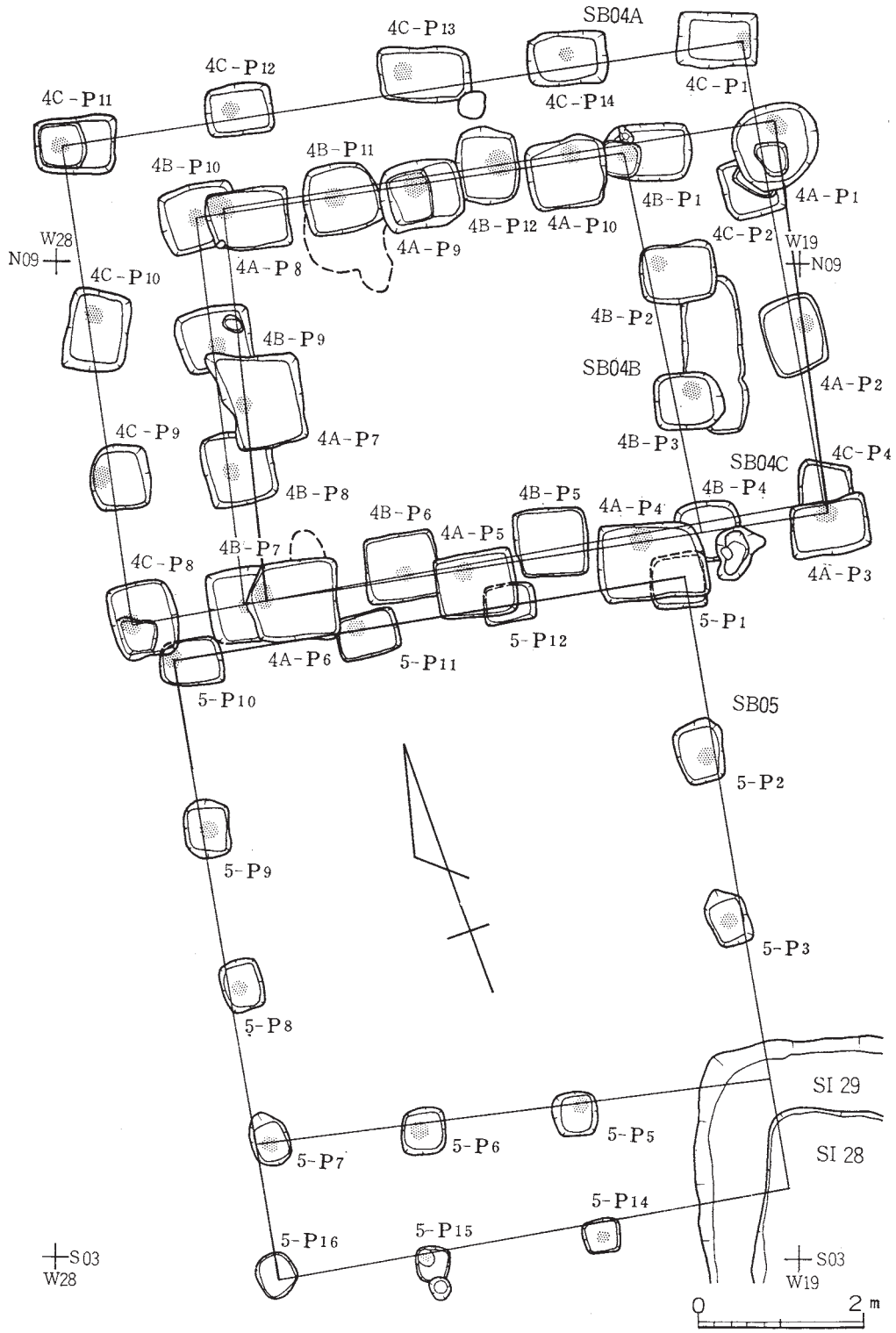
P_4・P_6・P_8・P_{11}より土師器・須恵器破片が数片出土しているが，いずれも小破片で技法的な観察ができない。土師器破片には内外面ヘラミガキ・黒色処理された非ロクロ成形の杯破片がある。

４号建物跡　ＳＢ04Ａ・Ｂ・Ｃ（第58・59図，図版41～43）

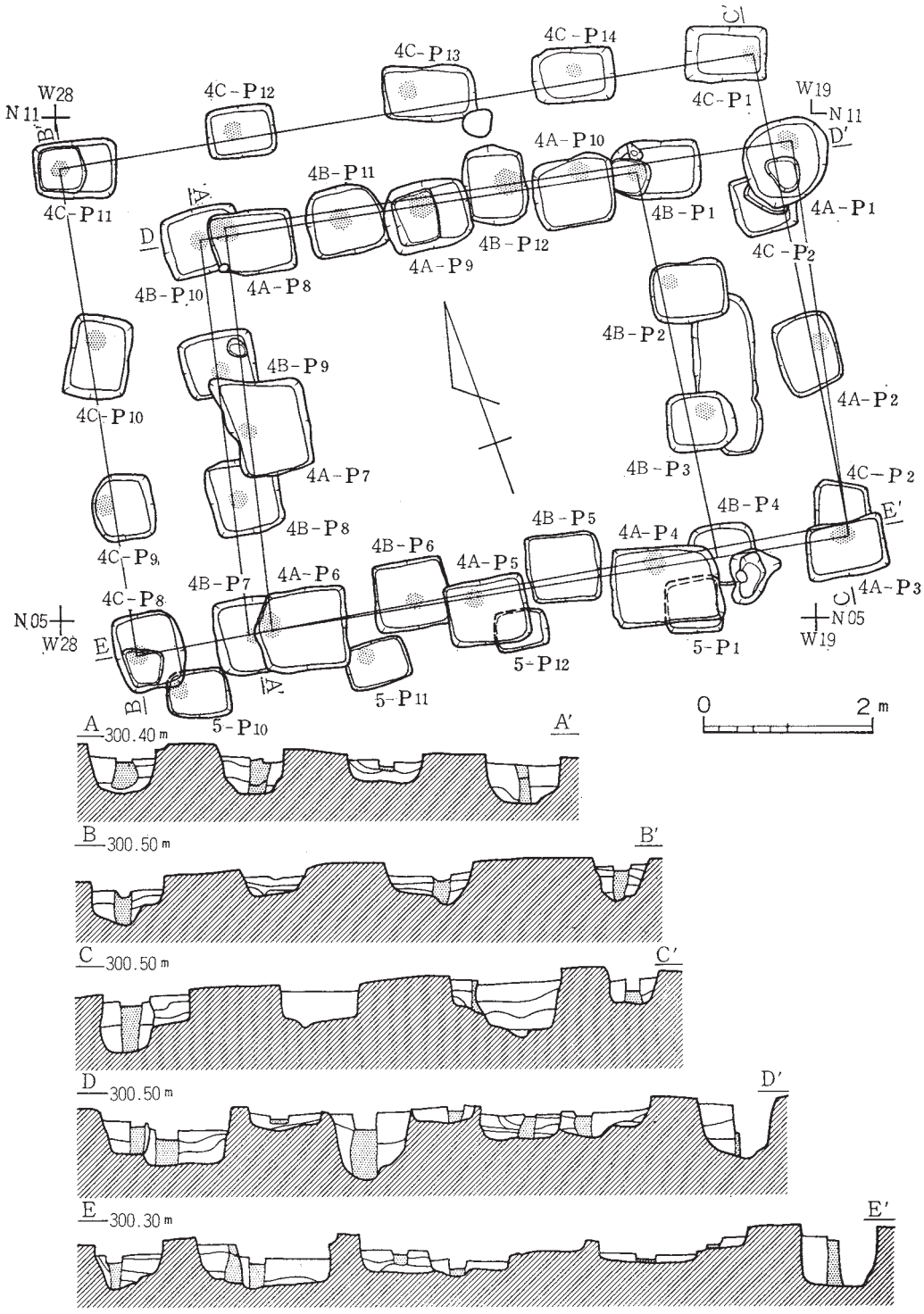
調査区中央部の谷地形の最も奥まった地点に位置する建物跡で，同一地点で３時期の建て替えのあった建物跡と思われる。掘形の新旧関係から新しいものから04Ａ・04Ｂ・04Ｃ建物跡とした。南側柱列に各建物跡の掘形のほぼ連続した重複が見られる他，この部分でＳＢ05建物跡北側柱列掘形とも重複し，最も古いＳＢ04ＣがＳＢ05を切っている。

ＳＢ04Ａ建物跡　東西３間・南北２間の建物跡である。ＳＢ04Ｂ・ＳＢ04Ｃ掘形を壊しているが，全掘形に柱痕が確認されており，３棟の中では最も新しい建物跡である。掘形は04Ａ－P_1が丸い他は，１辺が１m前後の東西にやや長い方形を呈している。掘形の検出面からの深さは，北側柱列では60㎝前後と深く，南側柱列では40㎝と浅いが，底面レベルはほぼ同一レベルである。柱痕は直径約20㎝前後のものが大半である。各柱痕は軸線上に並び，全体の規模は，東側柱列が4.70m，南側柱列6.82m，西側柱列4.74m，北側柱列で6.70mある。柱間寸法は，東側柱列が北から2.40＋2.30m，南側柱列が東から2.22＋2.20＋2.40m，西側柱列が南から2.34＋2.40m，北側柱列が西から2.30＋1.90＋2.50mあり，北側柱列の一部を除き７～８尺前後の柱間で設計された建物跡と思われる。東側柱列の磁北からの傾きはＮ11°Ｅである。掘形内出土遺物は，30片前後の土師器杯・甕の小破片であるが，04Ａ－P_2にはロクロ成形で底部から体部にかけて回転ヘラケズリ再調整をうけた杯が見られる。

ＳＢ04Ｂ建物跡　東西３間・南北３間の東西にやや長い建物跡である。ＳＢ04Ａ掘形に壊されているが，大半の掘形は全形が伺える。一辺90㎝前後の方形の掘形が多かったものと思われる。04Ｂ－P_4・P_5を除いて柱痕が確認できた。直径は20㎝弱である。東南コーナーの04Ｂ－P_4に柱痕が遺存しないため，東・南辺の柱通りが判然としないが，04Ｂ－P_2・P_3・P_5の中心を通る線を柱筋と見れば，全体は東側柱列で4.70m，南側柱列5.70m，西側柱列4.70m，北側柱列5.20mを


SB04A
4C-P13
4C-P12
4C-P11
4C-P14
4C-P1
4B-P11
4B-P10
4B-P1
4A-P1
4B-P12
4A-P10
4C-P2
W28
N09
4A-P9
4A-P8
W19
N09
4C-P10
4B-P2
4B-P9
SB04B
4A-P2
4C-P9
4A-P7
4B-P3
SB04C
4C-P4
4B-P8
4B-P5
4B-P4
4B-P6
4A-P4
4A-P5
4B-P7
4C-P8
4A-P3
5-P1
5-P12
4A-P6
5-P11
5-P10
SB05
5-P2
5-P9
5-P3
5-P8
SI 29
5-P5
5-P6
SI 28
5-P7
5-P14
5-P16
5-P15
S03
W28
S03
W19
0
2m

第58図　４・５号建物跡


W28
N11
W19
N11
N05
W28
N05
W19
4C-P1
4C-P2
4C-P10
4C-P11
4C-P12
4C-P13
4C-P14
4A-P1
4A-P2
4A-P3
4A-P4
4A-P5
4A-P6
4A-P7
4A-P8
4A-P9
4A-P10
4B-P1
4B-P2
4B-P3
4B-P4
4B-P5
4B-P6
4B-P7
4B-P8
4B-P9
4B-P10
4B-P11
4B-P12
4C-P9
4C-P8
5-P1
5-P10
5-P11
5-P12
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
300.40m
300.50m
300.50m
300.30m
0
2m

第59図　4号建物跡

測り，台形に近い平面形を呈する。各側柱列での柱間寸法は，東側柱列が北から1.30＋1.60＋1.80m，南側柱列は東から1.90（？）＋1.90（？）＋1.90m，西側柱列は南から1.60＋1.55＋1.55m，北側柱列が西から1.70＋2.00＋1.50mあり，寸法にバラつきがある。東側柱列の柱筋が不明確なので，西側柱列の軸線を測れば，磁北よりＮ12°Ｅに偏している。掘形内から少量の土師器破片が出土しているが，技法的に特徴のわかる破片がない。杯はロクロ成形の破片が２片出土している。

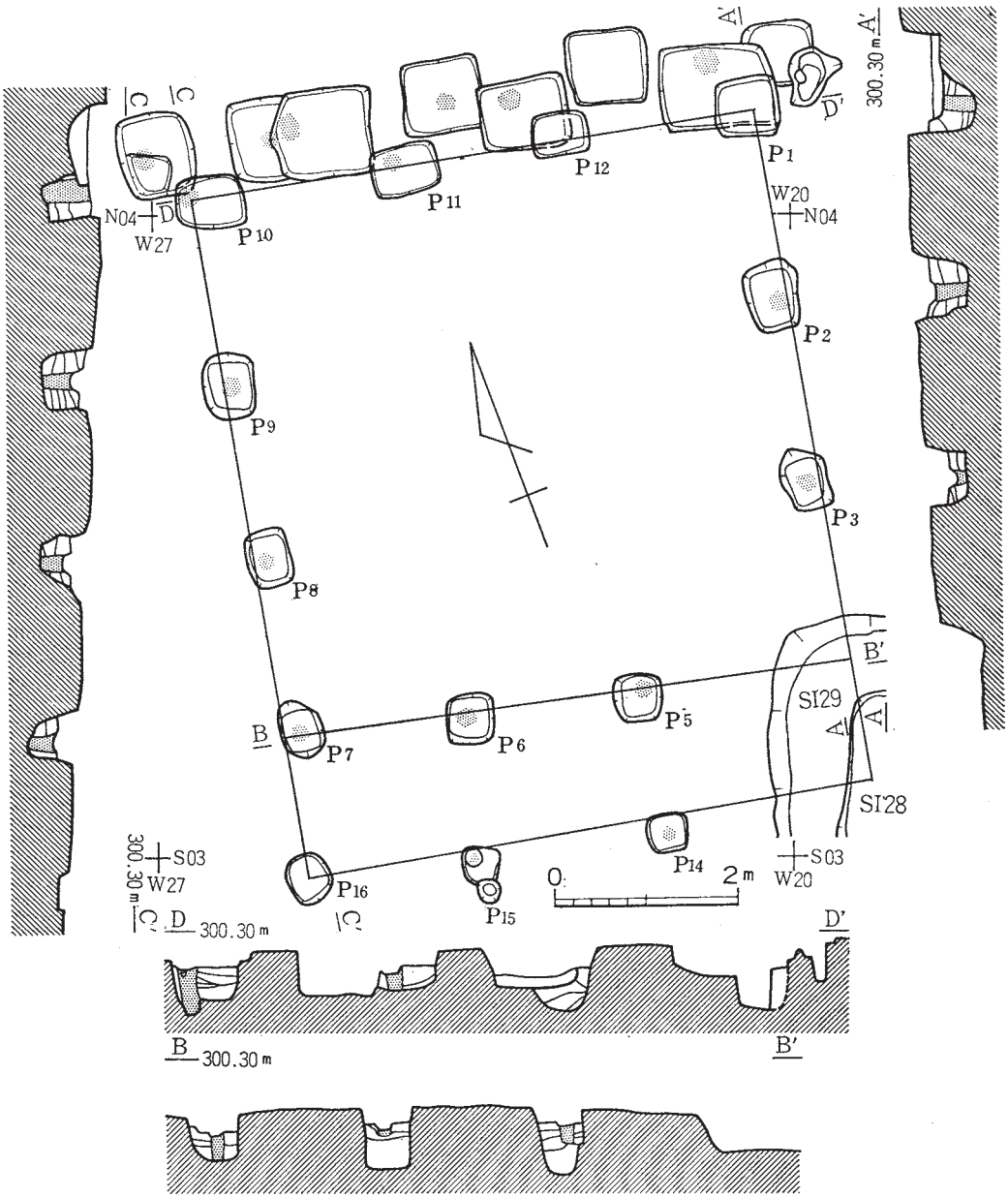
ＳＢ04Ｃ建物跡　東西４間・南北３間の東西に長い建物跡である。東・南側柱列ではＳＢ04Ａ・04Ｂ掘形と重複し，完全に破壊した掘形もあるが，西・北側柱列は重複がなく，各掘形は完存している。したがって東・南側柱列は正確な全体の長さが不明であるが，西側柱列で5.80m，北側柱列で8.30mを測ることができる。西・北側柱列での各柱間寸法は，西側柱列が南から1.80＋1.90＋2.10m，北側柱列が西から2.10＋2.10＋2.00＋2.10mと，６ないし７尺の柱間で設計されたものと思われる。西側柱列の柱痕を通る軸線はＮ11°Ｅを示す。各掘形は長辺１ｍ前後，短辺0.6m前後の長方形を呈し，柱痕内に白色粘土粒を含む点で，ＳＢ04Ａ・04Ｂと顕著な違いがある。掘形内部から５片の土師器破片が出土しているが，２片の杯・３片の甕破片ともに非ロクロ成形の土器と判断される。

ＳＢ04Ａ・04Ｂ・04Ｃの３棟の建物跡は，それぞれに規模が異なり，しかも柱抜きとり痕が見られず，廃絶後直ちに建て直したものでない可能性はあるが，ほぼ同一地点で重複しており，一応建て替えられた建物跡と見ておく。

５号建物跡　ＳＢ05（第58・60図，図版41）

ＳＢ04Ａ・04Ｂ・04Ｃ建物跡に北側柱列の掘形の一部を破壊されているが，ＳＢ04各掘形よりも深く，下部は遺存している。東南コーナーの掘形が28・29号住居跡によって切られている。東西３間・南北３間の建物跡で，南辺に１間の庇が付設されたものと思われる。各掘形は一辺50㎝前後の方形を呈す小規模なもので，大半に柱痕が遺存している。

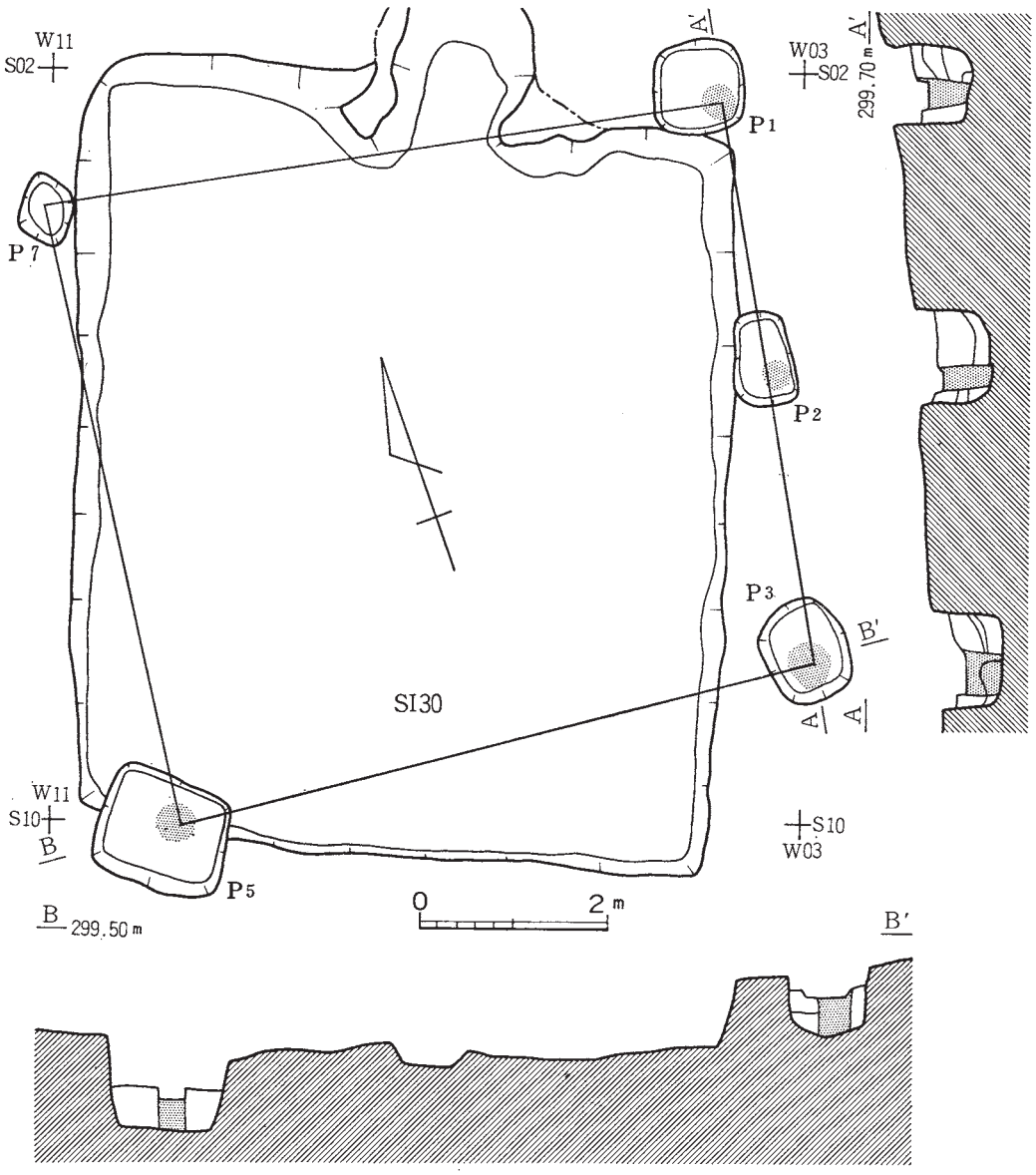
遺存した柱痕をもとに各側柱列の全体の長さを示せば，東側柱列6.20m，南側柱列5.90m，西側柱列5.95m，北側柱列6.10mとなるが，庇部分は南に1.60m張り出している。各柱間の寸法は，東側柱列で北から2.20（？）＋2.00＋2.00m，南側柱列で東から2.10（？）＋1.95＋1.85m，西側柱列で南から1.90＋1.95十2.10m，北側柱列で西から2.20十1.95（？）＋1.95（？）ｍを測る。庇部分は東から2.10(？）＋2.10＋1.65(？）mある。全般的に６ないし７尺前後の柱間と考えられる。P_6・P_8から土師器破片が３片出土しているが，甕２片は非ロクロ成形であり，杯破片は内黒の杯であるが，技法が判別できない。西側柱列各掘形の柱痕を通る軸繰はＮ10°Ｅを示す。



第60図　5号建物跡

6号建物跡　SB06（第61図）

30号住居跡と重複し，切られた状態で検出された建物跡である。東西２間・南北２間の建物跡と思われるが，３個の柱穴は30号住居跡に完全に食われており，検出できなかった。柱間は柱痕を検出できなかったものもあり明確でない部分もあるが，東辺で3.0m，南辺で3.45m，西辺で



第61図　６号建物跡

3.35m，北辺で3.1mを測る。東辺における柱間寸法は1.45＋1.55mであり，間尺はほぼ５尺である。東側柱列での軸線の傾きはＮ10°Ｅであり，東に傾く。掘形は50cm前後の隅丸方形を呈しており，深さは35～40cmを測る。柱痕は４本検出され，径15～25cmを測る丸柱であることが確認された。

この建物跡の時期は，出土遺物がないため不明であるが，平安時代の遺物を出土したＳＩ30に掘形を破壊されており，新しくても平安時代を下る遺構ではない。

7号建物跡　ＳＢ07（第62図）

東西２間・南北３間の建物跡であり，西側にＳＢ19，東南にＳＩ31が近接し，また，南側柱列の一部が，ＳＢ11と重複している。切り合い関係は，ＳＢ07のほうがＳＢ11より新しい。各掘形は，一辺が50㎝ほどの方形プランを呈するが，P_7～P_9においては，それぞれ柱の抜き取りによるものと考えられる別の掘形が重複している。いずれの掘形とも直径15㎝ほどの円形の柱痕が検出されたが，柱痕をもとにした各側柱列の全体規模は，東側柱列5.05m，南側柱列4.05m，西側柱列4.95m，北側柱列4.35mであり，各側柱列は直交せず，また各柱間寸法は，東側柱列で北から1.75＋1.65＋1.60m，南側柱列で東から2.0＋2.05m，西側柱列で南から1.75＋1.60＋1.65m，北側柱列で西から2.10＋2.20mを測る。西側柱列における軸線の方位は，Ｎ９°Ｅを測る。かなり斜面地に構築された建物跡である。

掘形内からは，若干の土師器破片，須恵器破片が検出された。土師器破片には甕の体部のものが多いが，一部にロクロ使用の杯破片が認められる。

8号建物跡　ＳＢ08

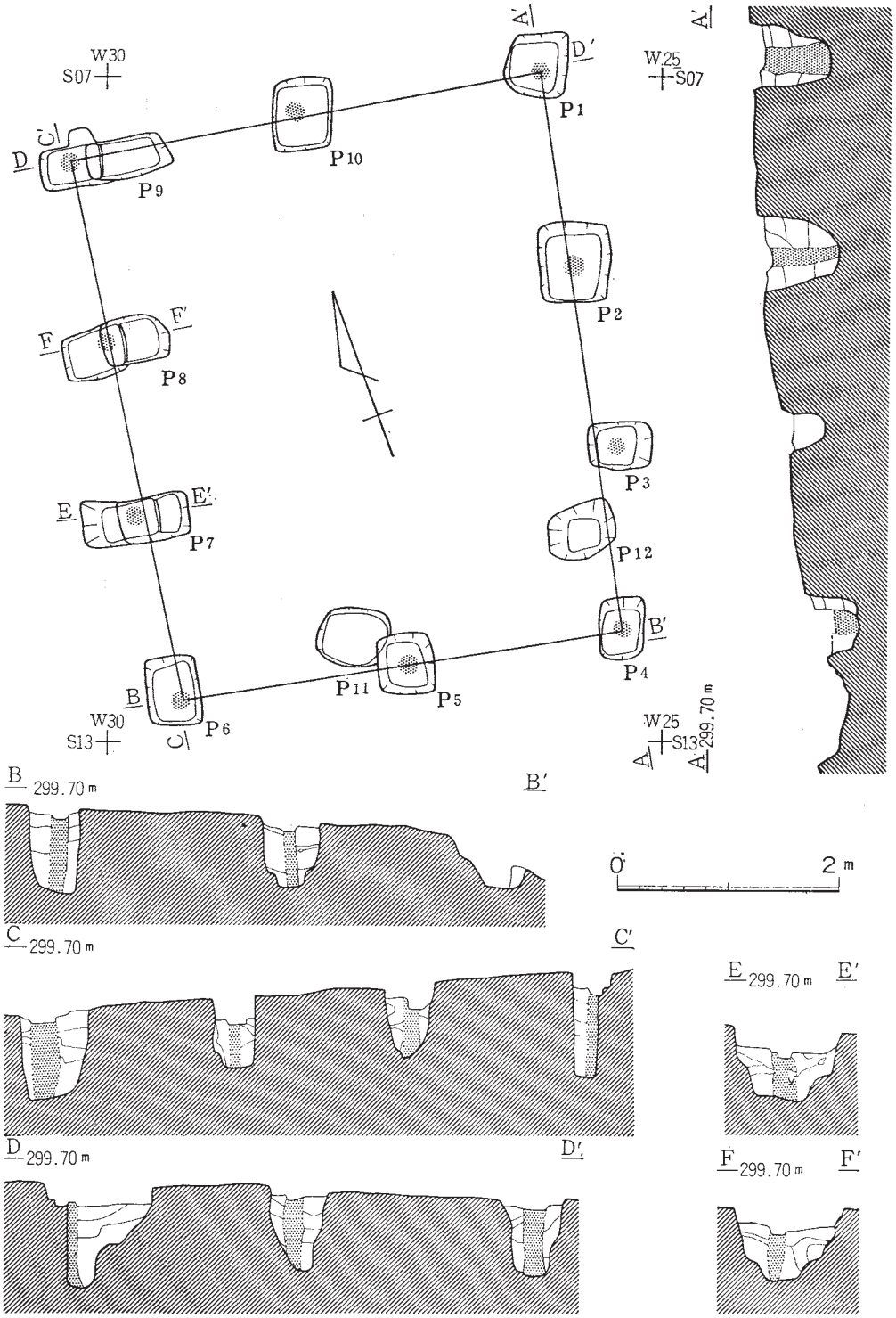
遺　　構（第63図，図版44〕

調査区域中央部南端の斜面で検出された，東西３間・南北３間の建物跡である。すべての掘形を確認でき，建物の規模をつかむことができた。P_1・P_8・P_{10}・P_{11}・P_{12}の５個は，掘形が重複しており，建物自体に建て替えの可能性がある。ただし他の掘形には重複関係が認められず，建て替えを断定することはできない。各掘形のプランは，一辺0.8m～１m前後の隅丸方形，方形を基本とするが，P_9はやや小型の掘形である。検出面からの深さは最大でP_7約70㎝，最小でP_4約45㎝を測る。掘形は垂直に近く掘り込まれ，掘形底面のレベルはほぼ水平に近い。堆積土は，褐色土，暗褐色土，暗黄褐色土の３層が観察された。

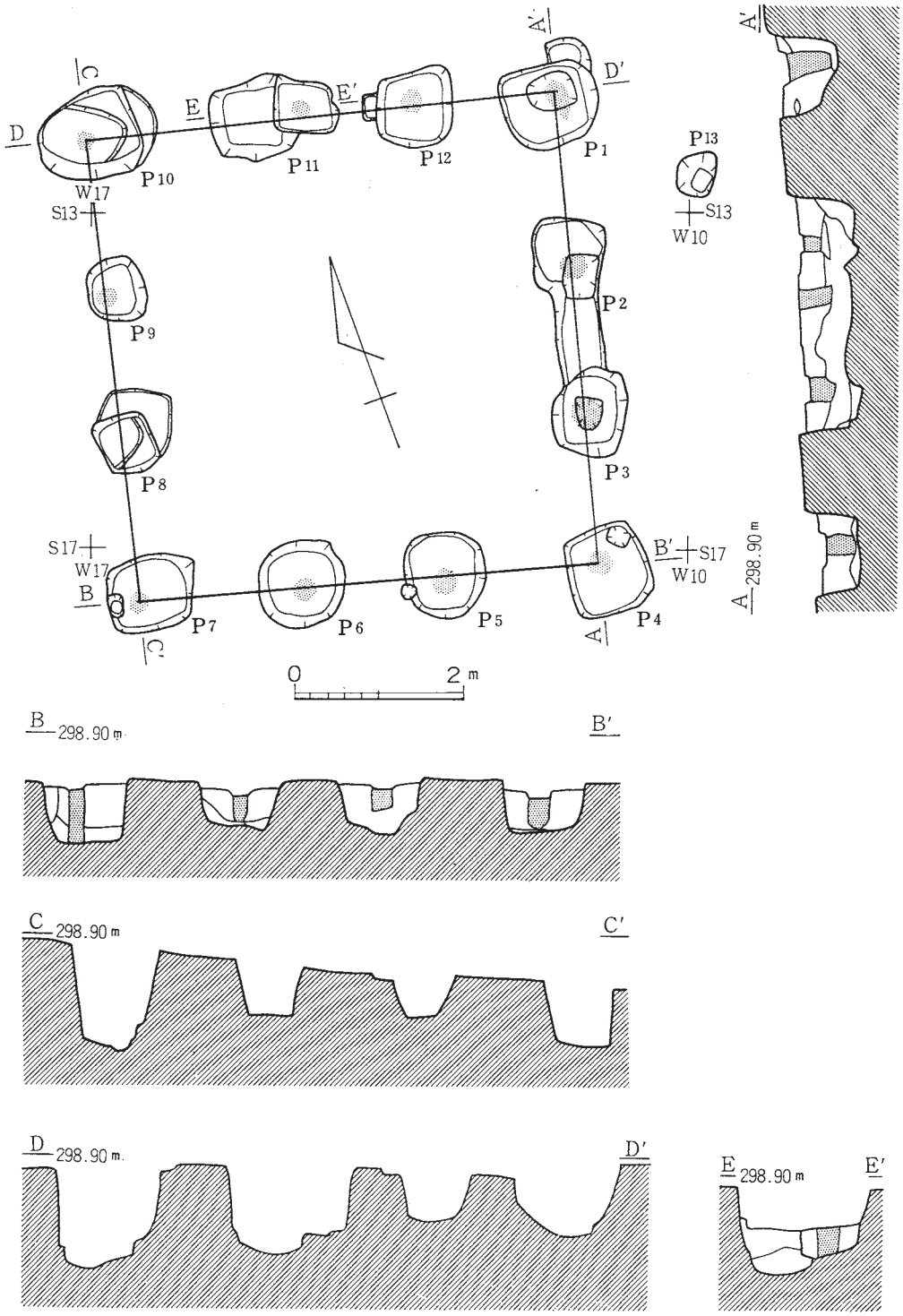
すべての掘形で直径20㎝前後の柱痕を検出した。柱痕の中心をとった各側柱列の長さは，東側柱列5.60m，南側柱列5.48m，西側柱列5.52m，北側柱列5.52mで，全体でほぼ正方形のプランを呈する。各柱間の長さは，東側柱列2.08＋1.74＋1.78m，南側柱列1.88m＋1.66m＋1.94m，西側柱列1.96＋1.66＋1.90m，北側柱列2.52＋1.28＋1.72mである。各柱間の寸法は基本的に1.80m（６尺）と考えられるが，ばらつきが多い。東側柱列で測った傾きは，Ｎ15°Ｅである。

遺　　物（第64図，図版82）

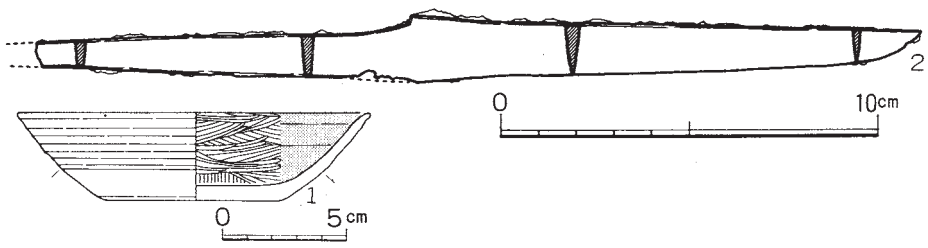
すべての掘形で遺物を検出した。遺物の量は極めて多い。大半が土師器片である。杯は，ロクロ成形後内面をヘラミガキ，黒色処理により調整されている。甕には頸部から口縁部にかけてロクロ目を有するものが含まれている。須恵器片は，P_2・P_7・P_8・P_{10}・P_{11}・P_{12}から十数片が


W30
S07
W25
S07
A
A'
D
D'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
F
F'
E
E'
B
B'
W30
S13
W25
S13
299.70m
0
2m
299.70m
299.70m
299.70m
299.70m

第62図　7号建物跡


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
W17
S13
S17
W10
0
2 m
298.90 m

第63図　8号建物跡



第64図　８号建物跡出土土師器・鉄製品

出土した。全体的には，P_1・P_{10}・P_{11}に遺物が集中するが，P_3・P_9からの出土遺物はごく少量である。

〔鉄　製　品〕

刀子（第64図２）　P_{11}埋土内から錆化した状態で出土した。茎と刃の一部を欠損しているが，ほぼ完形である。平棟平造りである。断面は，刀身が二等辺三角形を，茎が方形を呈する。刃と棟は切先に向かってわずかに傾斜している。刃関が観察される。現存長23.4cm，うち茎部9.9cm，最大刀身幅1.7cm，最大横幅0.4cmを測る。

〔土　師　器〕

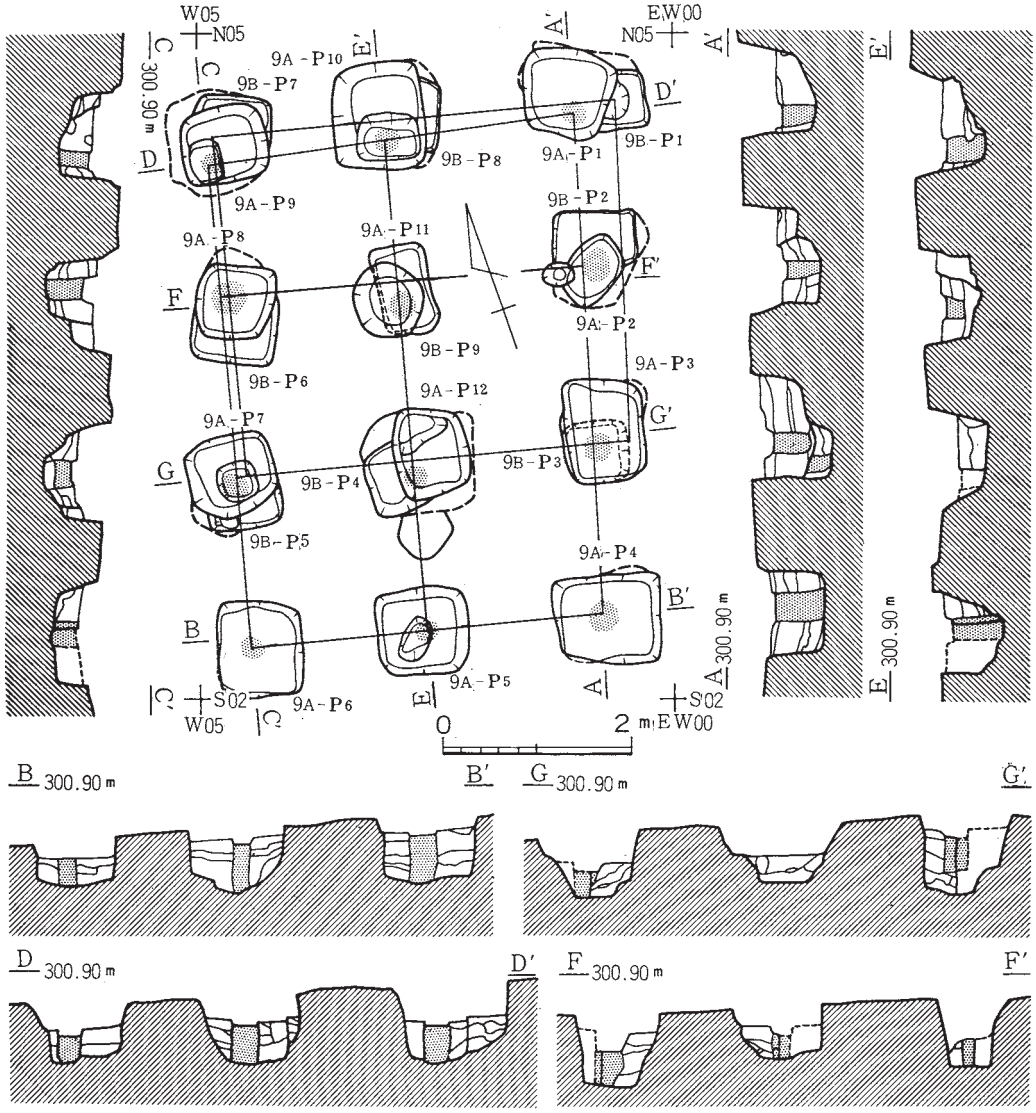
杯（第64図１）　P_{10}埋土内から出土した。口縁部から底部にかけて全体の約1/2が遺存し，ロクロ成形である。底径6.0cm，器高4.5cmを測り，復元実測による口径は14.1cmである。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリを施し，内面はヘラミガキ後黒色処理されている。色調は褐色を呈する。焼成は良好である。ロクロ回転方向は，右回り。ロクロ切離しは不明。

本遺構は，東西３間・南北３間，各柱間６尺の正方形の規模を持つ中ヌキの建物跡と考えられる。P_{11}から出土した刀子１点は，建物構築に際して何らかの祭礼的儀礼との関連を示すものと思われる。掘形の一部に重複関係が認められるところから，建て替えの可能性もあるが，結論づけることはできない。本遺構の時期は，掘形から出土した土師器片・須恵器片からみて平安時代に比定できる。

９号建物跡　ＳＢ09Ａ・Ｂ（第65・66図，図版45・82）

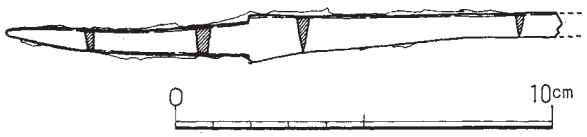
25号住居跡西壁外に検出された建物跡である。13号土坑を掘形が破壊している他，25号住居跡とも軒の張り出しを考えると重複している可能性がある。掘形の重複から，東西２間・南北２間の建物を，東西２間・南北３間の建物に建て替えたものと判断した。前者をＳＢ09Ｂ，後者をＳＢ09Ａ建物跡とした。

ＳＢ09Ａ建物跡　東西２間・南北３間のベタ柱の建物跡である。掘形は一辺１ｍ前後の方形を呈すが，09Ａ－P_2・P_{11}は規模も小さく，P_{11}は円形である。P_{11}・P_{12}の掘形底面が浅い他，各側



第65図　9号建物跡

柱列掘形は検出面下60～70cmを測り，底面レベルもほぼ同一である。各掘形に柱痕が遺存しているので，柱痕の中心をとった側柱列の全体の長さは，東側柱列で5.32m，南側柱列で3.74m，西側柱列で5.15m，北側柱列で3.85mあり，各柱間寸法は，東側柱列北から1.68＋1.85＋1.80m，南側柱列東から1.88＋1.86m，西側柱列南から1.75＋1.90＋1.50m，北側柱列西から1.85十2.00mを測る。バラつきがあるが6尺前後の柱間である。東側柱列の柱痕を通る軸線はN16°Eを示す。09A－P_2・P_7以外の掘形から土師器・須恵器破片が約50片出土しているが，P_1・P_4・P_6・P_{11}出土の土師器杯にロクロが使用されている。P_{10}掘形埋土からは第66図の刀子が出土している。切先を欠くが，残存長14.6cmあり，両関が見られる。刃部は内彎気味に遺存しており，相当使用され



第66図　９号建物跡出土鉄製品

た刀子と思われる。

ＳＢ09Ｂ建物跡　東西２間・南北２間のベタ柱の建物跡である。ＳＢ09Ａ－P_4・P_5・P_6以外の掘形とほぼ同一地点で重複し，09Ｂ－P_3以外は掘形底面に達する破壊をうけ，正確な柱間構造が明確でない。

ＳＢ09Ａ掘形と同一地点で重複している点を重視すれば，柱間寸法にも大きな相違点はなかったものと思われ，各側柱列での全体規模は一辺3.9m前後の方形を呈し各柱間も1.95m程度の６尺５寸前後で計画されものであろう。側柱列の軸線の方向も，ＳＢ09Ａ建物跡と近似したものであったと判断される。

掘形内から10片程の土師器小破片が出土しているが，杯破片にはロクロ使用部の破片は見られないものの，甕口縁部破片にはロクロを使用した痕跡が確認できた。

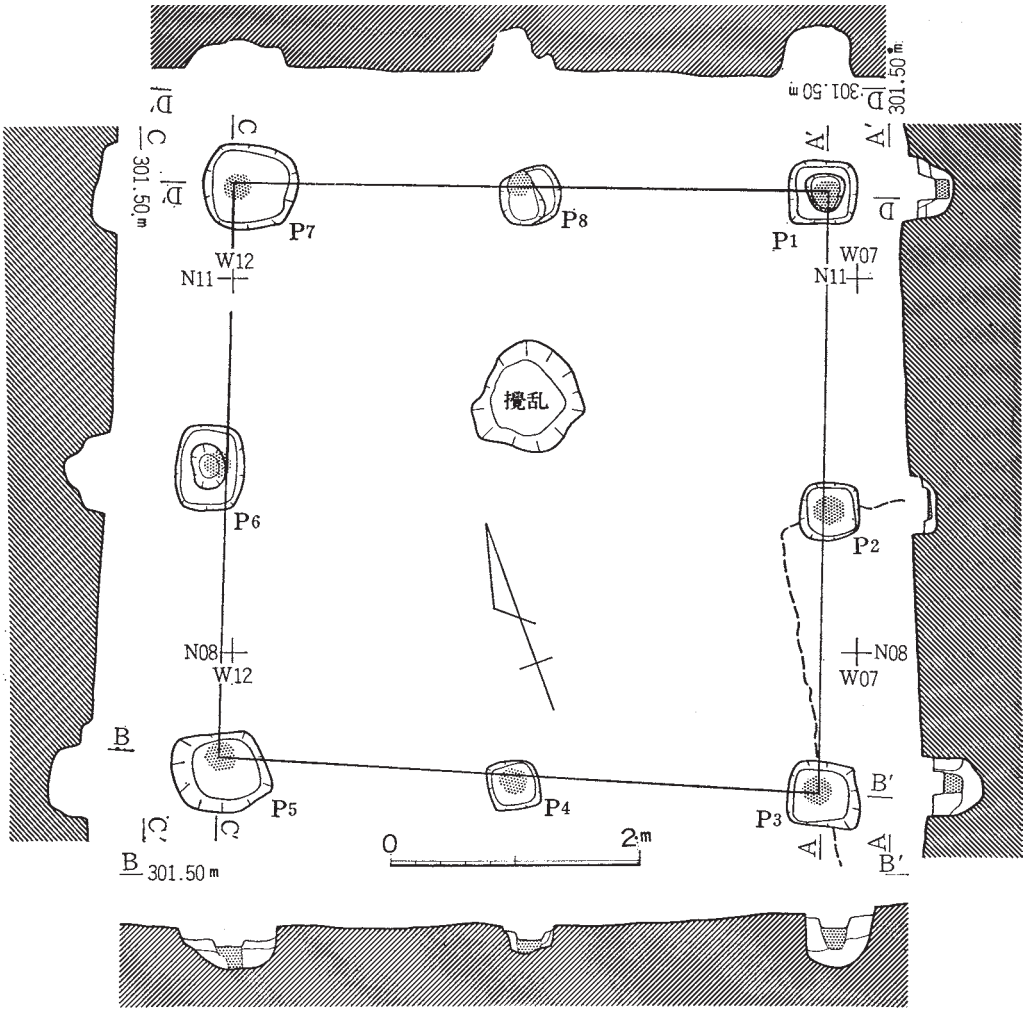
ＳＢ09Ａ・09Ｂ２棟の建物跡は同一掘形で重複しており，２間×２間のＳＢ09Ｂから２間×３間のＳＢ09Ａ南北棟に建て替えられた遺構であることは明白である。しかし建て替えにあたっては，規模は拡大しているものの，ベタ柱の建物跡としては共通した構造を有しており，建物跡の有した目的・性格には変更がなかったものと思われる。なおＳＢ09Ｂ－P_2には掘形内に柱痕が遺存しており，建て替えにあたっては，柱を完全には抜きとらない状態で作業が実施されたものと判断せざるを得ない。

10号建物跡　ＳＢ10（第67図，図版46）

東西２間・南北２間の中ヌキの建物跡である。ＳＩ26と重複関係にあり，またＳＩ27と近接している。ＳＩ26との切り合い関係は，P_2・P_3がそれぞれＳＩ26北・西辺を住居跡内堆積土と共に切り込んでおり，ＳＢ10のほうが新しい。ＳＩ27とは軒の張り出しを考えると重複した可能性が強いが，前後を断定できない。

各掘形は，一辺が約50cm前後の方形を呈しているが，形態や規模に多少のバラつきがみられる。全ての掘形で柱痕が確認されたが，柱痕をもとにした各側柱列の全体長は，東側柱列4.70m，南側柱列4.75m・西側柱列4.60m，北側柱列4.70mであり，やや西側柱列が短かく，また柱間寸法は東側柱列で北から2.50＋2.25m，南側柱列で東から2.45＋2.35m，西側柱列で南から2.35＋2.25m，北側柱列で西より2.25m＋2.45mを測る。東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ16°Ｅを示す。

掘形内からは，若干の土師器杯破片，須恵器杯破片が出土しているが，土師器杯破片は，ロクロ使用のものはみられない。

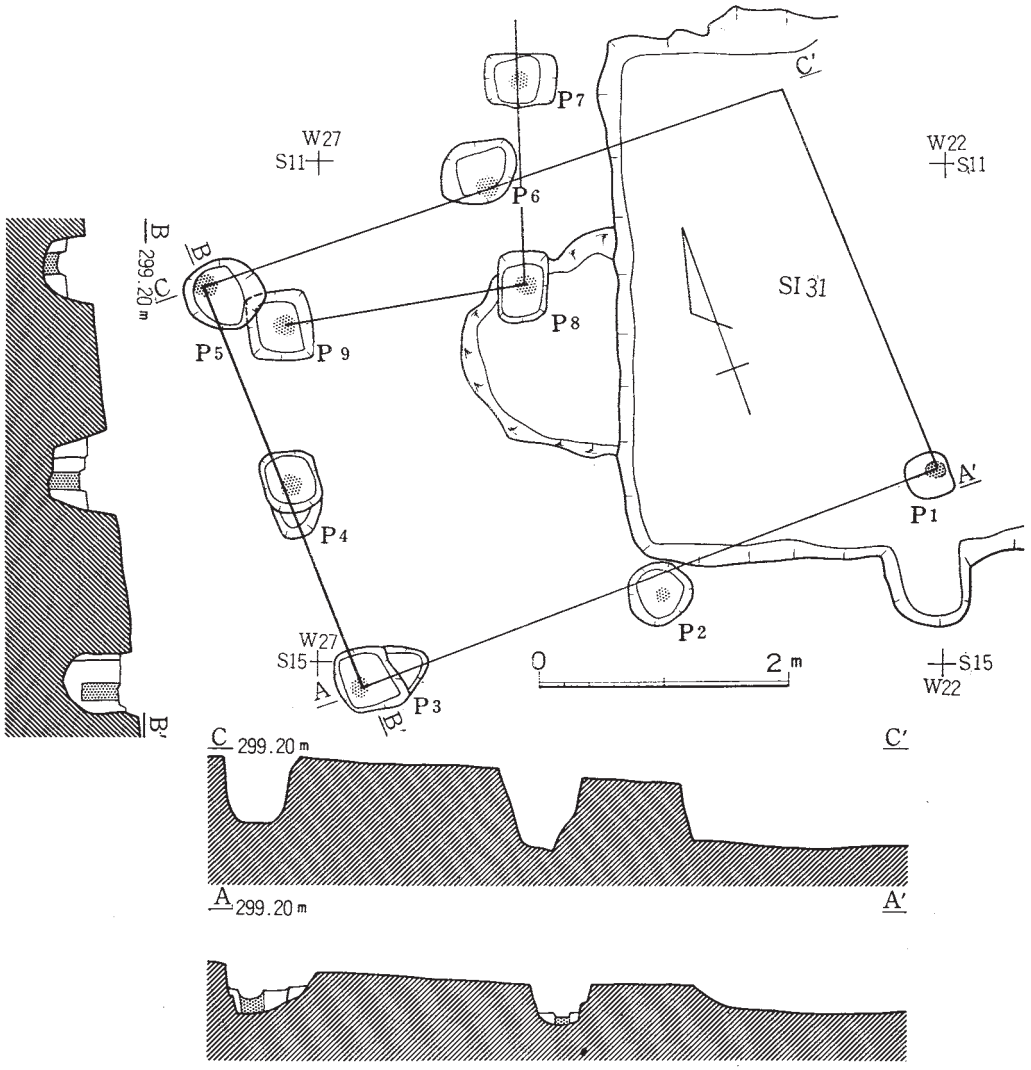


第67図　10号建物跡

11号建物跡　ＳＢ11（第68図）

東側柱列の掘形が31号住居跡に破壊され，全体規模が不明であるが，東西２間・南北２間の，中ヌキの建物跡と考えられる。また北西の隅柱P_5が７号建物跡南側柱列掘形と重複し，これを壊しているので，ＳＩ31よりは古く，ＳＢ07よりは新しい遺構と見ることができる。

31号住居跡床面で検出された掘形底面が辛じて遺存していたP_1を南西の隅柱と考えれば，南側柱列で4.90m，西側柱列で3.48mを測り，２間×２間ながら桁行の間尺が長い東西棟ということができる。柱間寸法のわかるのは，南側柱列で東から2.40＋2.50m，西側柱列で南から1.74＋1.74cm，北側柱列では西からの１間分が2.40mである。西側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはＮ１°Ｅである。



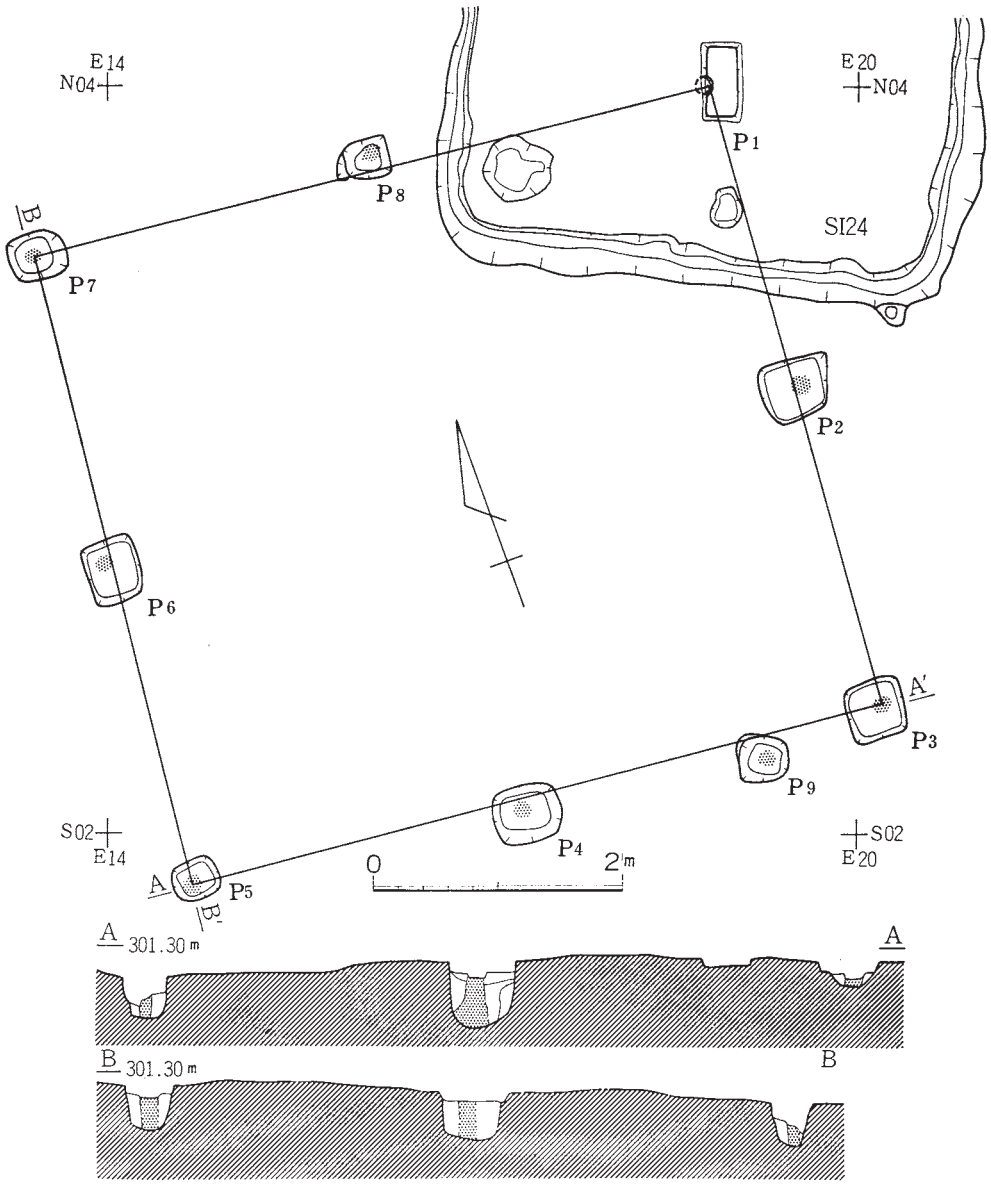
第68図　11号建物跡

各掘形は１辺40～50cmの方形を基本とするが，P_2・P_5などは円形に近く，深さは北側柱列で60cm前後である。遺存した掘形の全てに直径20cm弱の円形の柱痕を認めた。

P_5・P_6から数片の土師器破片が出土したが，甕破片であり年代を推定できるものはない。

12号建物跡　ＳＢ12（第69図）

東西２間・南北２間の建物跡である。ＳＩ24と重複しているが，ＳＩ24の項でも述べたようにP_1が本建物跡の柱穴とするには疑問が残る。各掘形は，一辺50cmほどの方形のプランを呈しており，各掘形で直径15cmほどの円形の柱痕が確認できた。柱痕をもとにした各側柱列の全体長は，



第69図　12号建物跡

東側柱列で5.20m，南側柱列で5.70m，西側柱列で5.20m，北側柱列で5.50mと幾分か東西に長くなり，各側柱列はほぼ直交する。柱間寸法は，東側柱列で，一応P_1を柱痕と仮定した場合北から2.50＋2.65m，南側柱列では，P_9が不規則に位置しており，これを無視すれば東から3.00＋2.70m，西側柱列で南より2.65＋2.50m，北側柱列で西から2.80＋2.70mを測る。西側柱列の軸線は，N 11° Eを示す。

各掘形内の出土遺物なし。

13号建物跡　ＳＢ13（第70図，図版47）

調査区域の東側で検出された建物跡である24号住居跡・12号建物跡と隣接する。24号住居跡とは軒の張り出しを考えると遺構の重複の可能性もあるが，断言できない。７個の柱穴を検出し，全体の規模をつかむことができた。

規模は，東西２間・南北１間であるが，中央に支柱と思われる掘形があり，ベタ柱の建物跡である。東側柱列をとった軸線の傾きは，Ｎ１°Ｅである。

柱痕の中心を通る各側柱列の長さは，東側柱列2.95m，南側柱列2.65m，西側柱列3.05m，北側柱列2.70mを測る。柱間寸法は，東側柱列北から1.40＋1.55m，西側柱列北から1.40＋1.65m，中央柱列西から1.35＋1.35mである。南・北柱列８尺，東・西柱列10尺で計画されているものと思われる。各柱列は，すべて一線にのり，柱列の出入は認められない。本遺跡での建物跡の中では特異な構造の小規模な建物跡である。

各柱穴は，一辺40～50cm前後の方形を呈するが，中央のP_7は他に比べやや小型である。柱穴内埋土は，ロームの混入した黄褐色土と少量のローム粒子を含む黒褐色土を主体とする。検出面から柱穴底面までの深さは，深い所で約45cmであるが，ほぼ30～40cm前後である。底面は，水平になるものは少なく，いくらか傾斜している。すべての柱穴で，直径15～20cm前後の柱痕を検出した。柱材は，底面に直接据えられているが，P_3では底面から約５cmほど浮いて柱材を据えているのが観察される。痕跡から見て丸材を用いたものであろう。

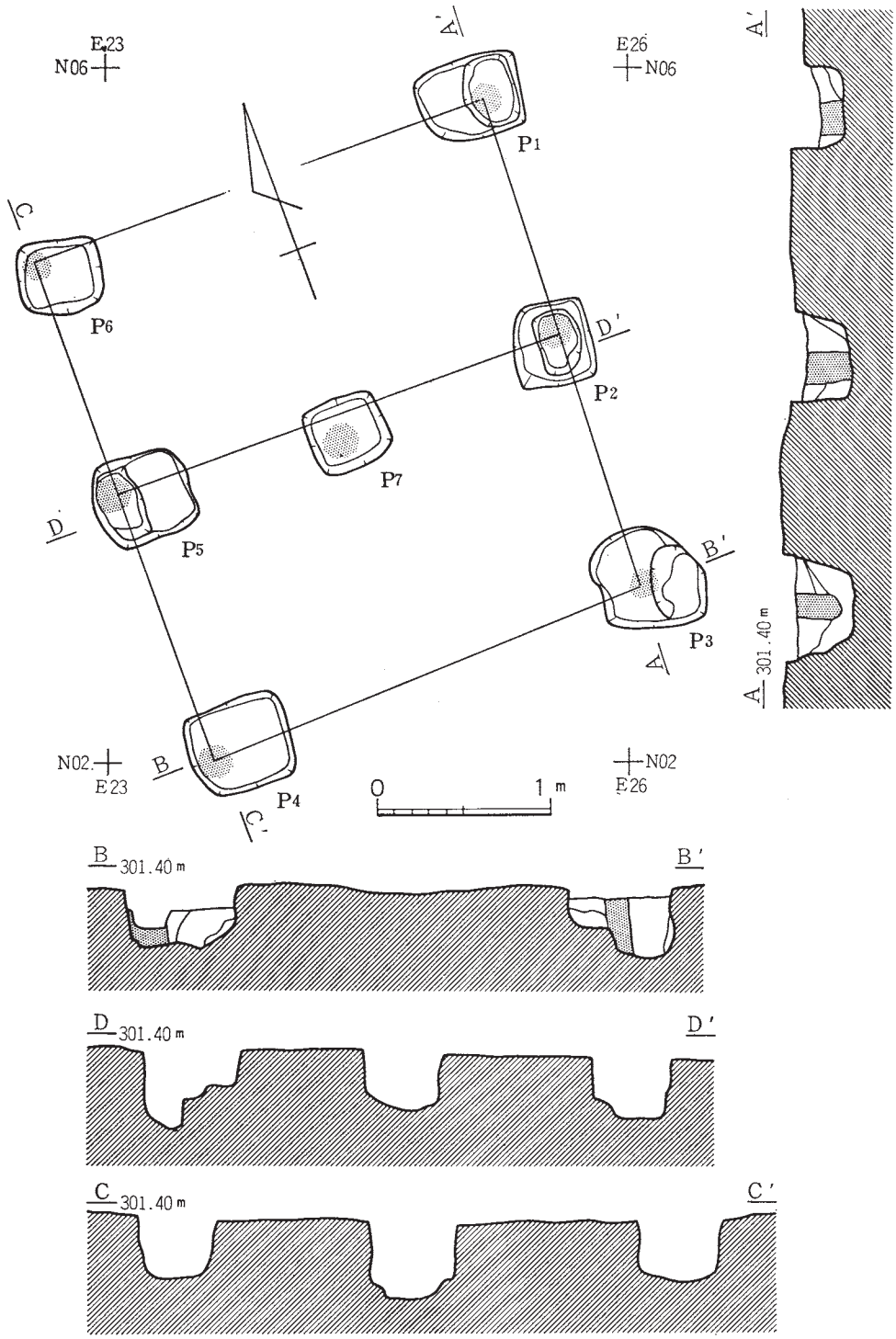
時期は，出土遺物がないため不明である。

14号建物跡　ＳＢ14（第71図）

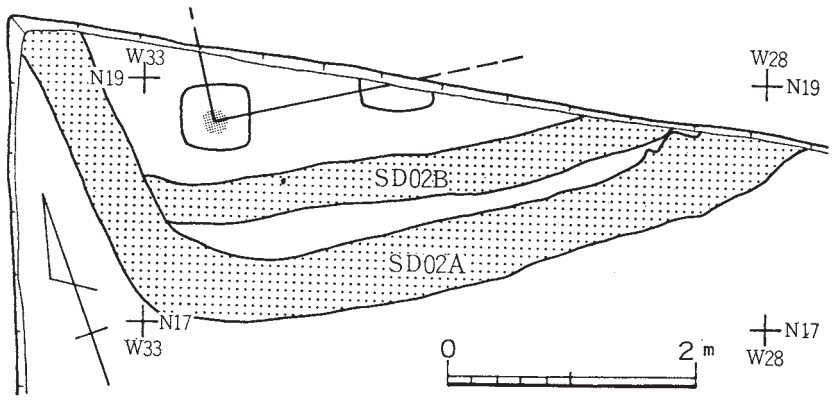
32号住居跡の北西部，調査区北端に南側柱列と思われる２ケ所の掘形が検出されたので，14号建物跡とした。主要な遺構部分は調査区外に所在するものと思われ，工事区に入らないため精査しなかった。

検出された掘形は南側柱列の西から２つ分の掘形と思われるが，全体構造・柱間寸法など全て不明である。南西コーナー部にあたる掘形は一辺50cmの方形で，直径20cmの柱痕を有している。

なおこの掘形の南および西側には幅約50cmで，Ｌ字形に屈曲する溝状の遺構が検出されている。南側ではＬ字形に連続する溝の内側に，これに切られた状態で幅約30cmの細い溝状遺構がる。ＳＢ14との位置関係から見て，雨落ち溝の可能性が強い。Ｌ字状に屈曲する溝を２Ａ号溝跡（ＳＤ02Ａ），内側の溝を２Ｂ号溝跡（ＳＤ02Ｂ）とした。これらの溝跡も工事区外に続いており，全体の構造が不明である。


E23
N06
E26
N06
N02
E23
N02
E26
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
0
1 m
A 301.40 m
B 301.40 m
C 301.40 m
D 301.40 m

第70図　13号建物跡



第71図　14号建物跡・２号溝跡

15号建物跡　ＳＢ15（第72図，図版48）

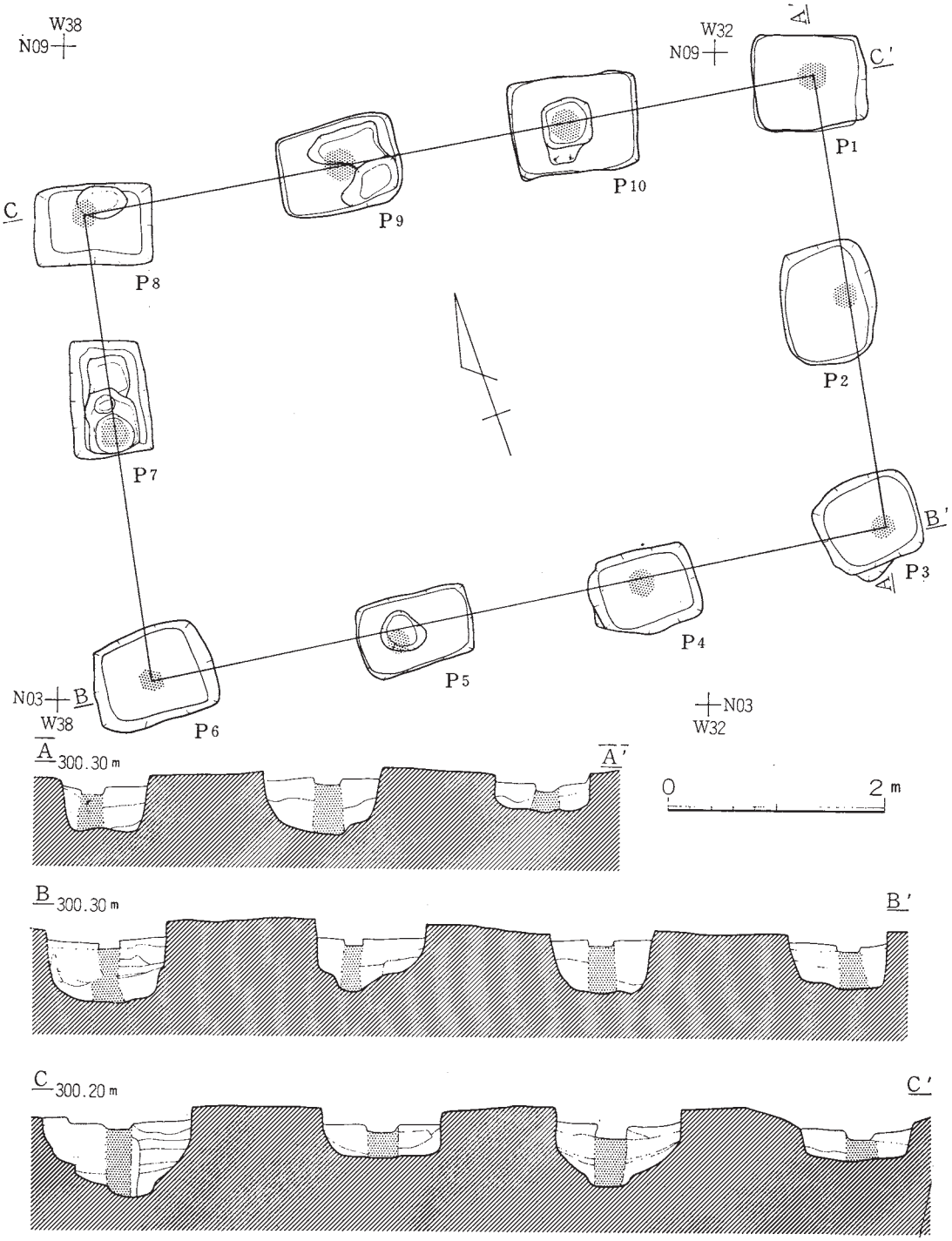
ＳＢ04建物跡西側に検出された，東西３間・南北２間の中ヌキの東西棟建物跡である。掘形自体での重複はなく，単一期の建物跡であるが，P_4がＳＫ15北壁を壊して掘り込まれている他，ＳＢ16，ＳＢ23Ａ・Ｂと軒の張り出しを考えると重複している可能性がある。各掘形は長辺１ｍ，短辺0.7ｍ前後の長方形を基本とし，全ての掘形に直径25㎝程の柱痕が遺存していた。掘形は検出面下40㎝前後のものと，70㎝前後のものがあり，深いものは柱を据える底面に２段になった掘り込みを有している。

各柱痕を通る側柱列全体の長さは，東側柱列で4.20ｍ，南側柱列で6.90ｍ，西側柱列で4.30ｍ，北側柱列で6.90ｍを測り，各柱間寸法は，東側柱列が北から2.04＋2.16ｍ，南側柱列が東から2.30＋2.30＋2.30ｍ，西側柱列が南から2.30＋2.00ｍ，西側柱列が西から2.50＋2.10＋2.30ｍある。東側柱列の各柱痕を通る軸線の傾きは，Ｎ10°Ｅを測る。

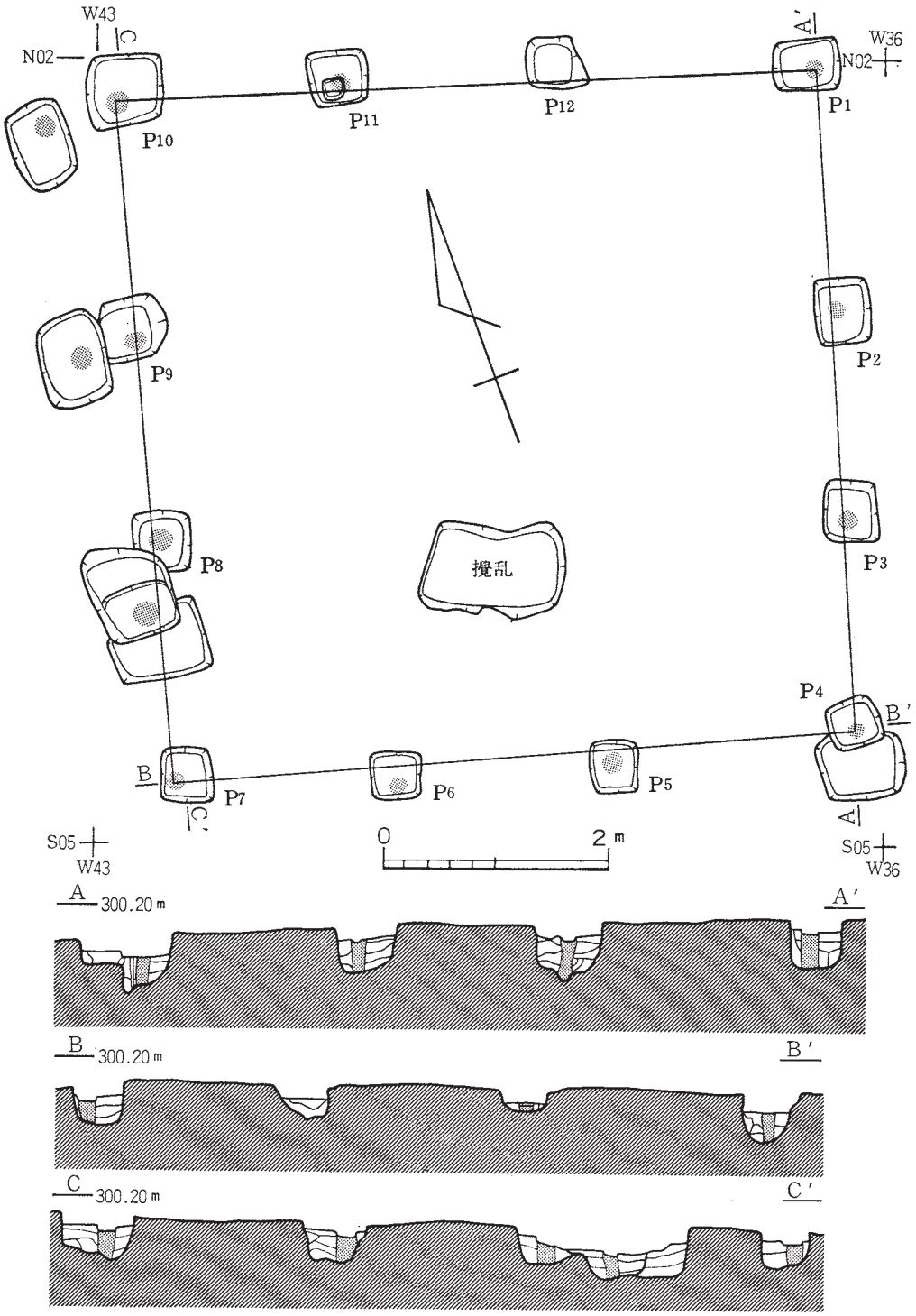
P_7・P_{10}掘形より土師器破片が５点出土しているが，甕・杯ともにロクロ成形された痕跡があり，杯では体部下端から底部の全面を回転ヘラケズリ再調整している。

16号建物跡　ＳＢ16（第73図，図版49）

東西３間・南北３間の中ヌキの建物跡である。西側柱列の２つの掘形がＳＢ17東側柱列掘形によって切られている他，ＳＢ18東側柱列が南西コーナー部で重複している。各掘形は一辺50㎝前後の方形を呈し，検出面からの深さは40㎝程度のものが多い。P_{12}を除いて直径15㎝前後の柱痕が遺存していた。各柱痕をもとに側柱列の全体規模・柱間寸法を計測すると，東側柱列が全体で5.93ｍ，柱間が北から2.15＋1.88＋1.90ｍ，南側柱列が全体で6.50ｍ，柱間が東から2.20＋1.90＋


W38
N09
W32
N09
A
A'
C
C'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
B
B'
N03
W38
N03
W32
A 300.30m
A'
0
2m
B 300.30m
B'
C 300.20m
C'

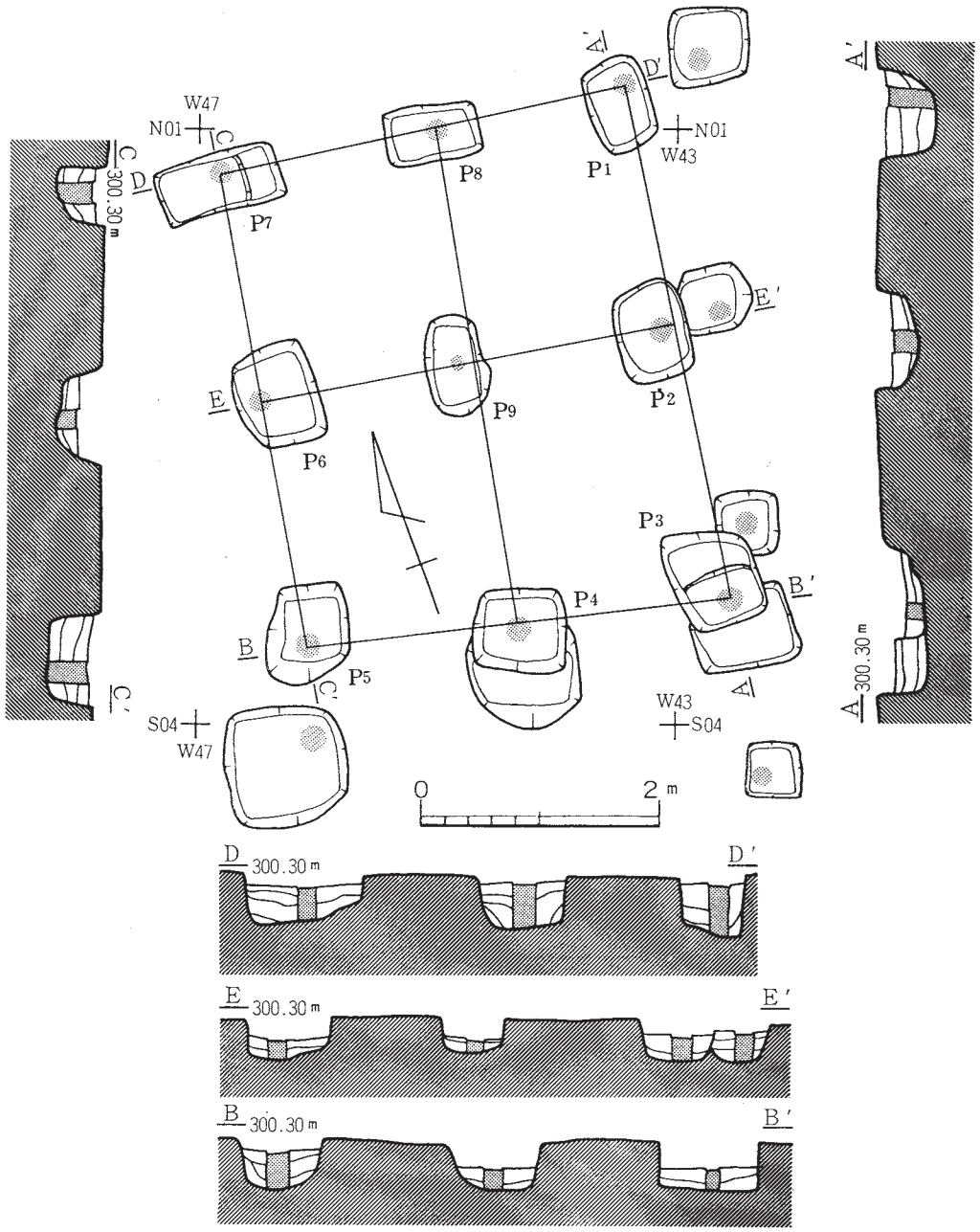
第72図　15号建物跡


W43
N02
C
C'
P10
P11
P12
A'
W36
N02
P1
P9
P2
P8
撹乱
P3
P4
B'
B
P7
P6
P5
A
S05
W43
0
2 m
S05
W36
A
300.20 m
A'
B
300.20 m
B'
C
300.20 m
C'

第73図　16号建物跡

1.95m，西側柱列が全体で6.05m，柱間が南から2.15＋1.80＋2.10m，北側柱列は全体で6.15m，柱間は西から1.95＋2.10（？）＋2.10（？）mある。正方形に近い平面プランである。東側柱列での軸綿はN12°Eを示す。

掘形内から12片の土師器と１片の須恵器が出土している。土師器杯破片は非ロクロ成形の外部



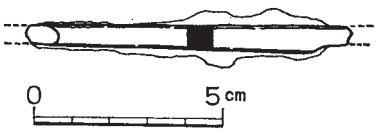
第74図　17号建物跡

外部に軽い段をもつものが４片と，ロクロ成形で体部下端から底部全面を回転ヘラケズリした杯が１点出土している。

17号建物跡　ＳＢ17（第74・75図，図版50・82）

東西２間・南北２間のベタ柱の建物跡である。東側柱列がＳＢ16西側柱列掘形を，南側柱列がＳＢ18北側柱列を切って掘り込まれており，ＳＢ16・18よりも新しい建物跡である。各掘形は長辺80㎝・短辺50㎝前後の長方形を基本としているが，南側柱列の掘形が方形に近い特徴がある。全ての掘形で直径20㎝弱の柱痕が確認された。掘形の検出面からの深さは約40㎝である。遺存した柱痕から各側柱列の全体規模および柱間寸法を割り出すと，東側柱列が全体で4.40m，柱間北から2.05＋2.35m，南側柱列が全体で3.50m，柱間東から1.75＋1.75m，西側柱列が全体で4.05m，柱間南から2.05＋2.00m，北側柱列が全体で3.40m，柱間が西から1.80＋1.60mを測る。南北方向にわずかに長い平面形を呈するが，各側柱列にゆがみが見られる。東側柱列で測った軸線の傾きはＮ10° Ｅである。

掘形内から13片の土師器と２片の須恵器が出土している。土師器ではロクロ成形による甕および杯破片にはロクロ成形痕の見られるものがあり，杯には底部から体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施されている。なおP7埋土から，第75図に示した鉄釘あるいは鉄鏃茎残片と思われる鉄器破片が出土している。残存長8.5㎝，断面は径７㎜の方形である。



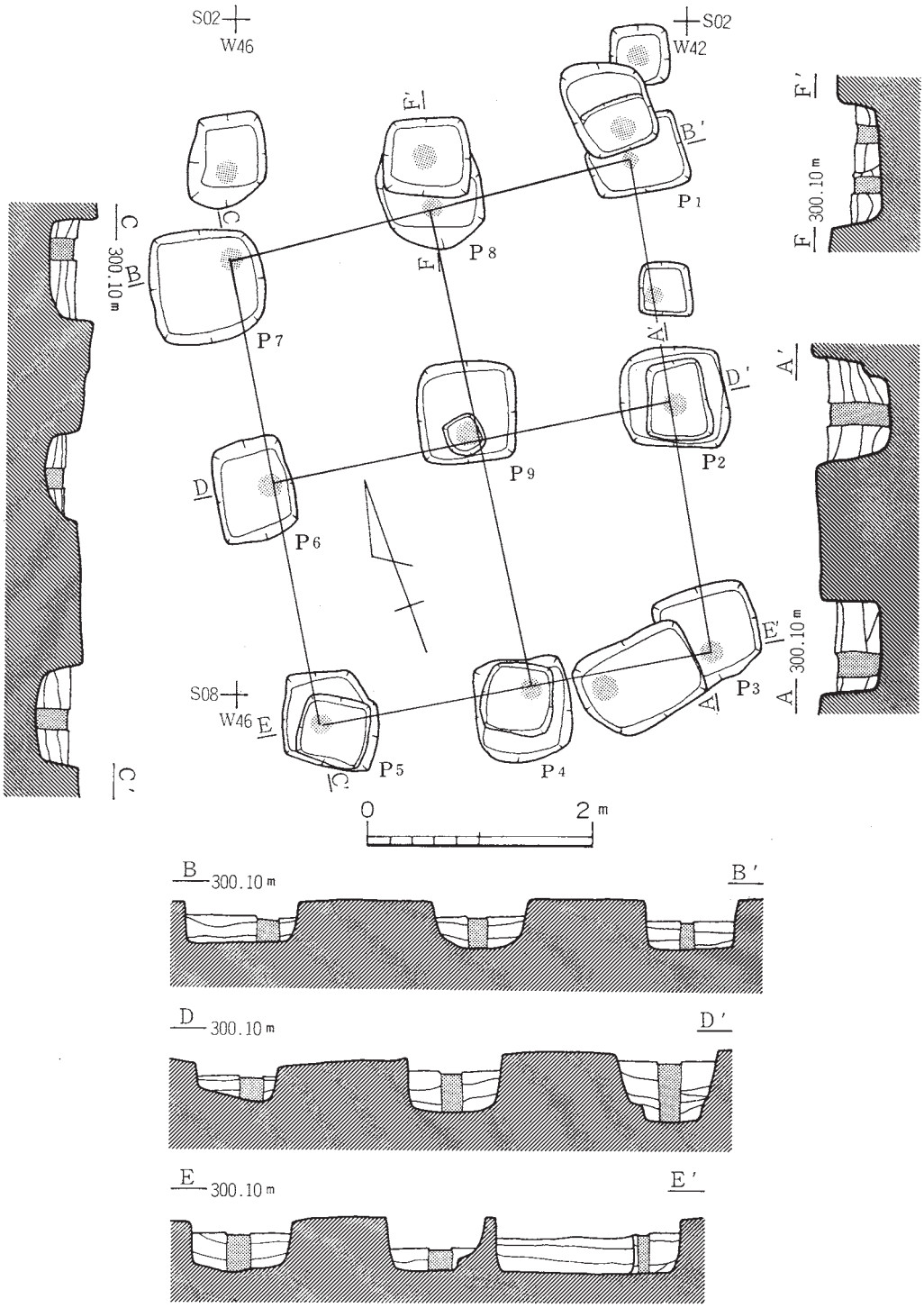
第75図 17号建物跡出土鉄製品

18号建物跡　ＳＢ18（第76図，図版50）

東西２間・南北２間のベタ柱の建物跡である。北側柱列をＳＢ17南側柱列に，南側柱列をＳＢ20北側柱列に壊されており，ＳＢ17・20よりは古い建物跡である。ＳＢ16南東コーナーの掘形も東側柱列内にあり，ＳＢ16とも重複しているが，先後関係は切り合いからは判断できない。

各掘形は一辺90㎝前後の方形を基調としているが，規模や形態に比較的バラつきが見られる。全ての掘形で柱痕が確認できたが，柱痕をもとにした各側柱列の全体長は，東側柱列で4.45m，南側柱列で3.50m，西側柱列で4.20m，北側柱列で3.65mと南北にいくらか長く，各側柱列は直交しない。柱間寸法は，東側柱列で北から2.20＋2.25m，南側柱列で東から1.60＋1.90m，西側柱列で南から2.15＋2.05m，北側柱列で西から1.85＋1.80mを測る。東西は６尺，南北は７尺で計画された可能性が強い。東側柱列での軸線はＮ11° Ｅを呈す。

掘形内から10片の土師器片が出土しているが，杯にはロクロ使用の破片があるが，調整痕は観察できない。甕体部破片にはロクロ痕の遺存するものがない。

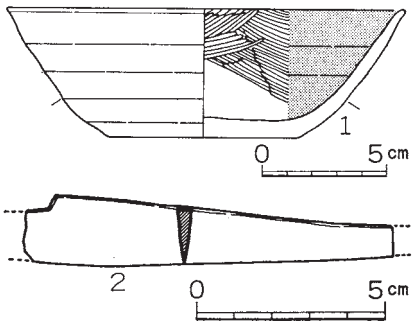

S02
W46
S02
W42
S08
W46
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
300.10m
0
2m

第76図　18号建物跡

19号建物跡　ＳＢ19（第77・78図，図版51・76・82）

東西２間・南北３間の中ヌキの南北棟である。掘形自体の重複はないが，西側に位置するＳＢ20とは軒の張り出しを考えると重複関係にあるものと思われる。南西コーナーのP_6が道路によって一部破壊されている。各掘形は長辺１ｍ，短辺70㎝前後の長方形が基本であり，斜面上方の掘形では検出面下約50㎝程の掘り込みがある。全ての掘形に柱痕が遺存しているが，直径は20㎝前後のものが大半である。柱痕から各側柱列の長さを求めると，東側柱列7.30m，南側柱列4.95m，西側柱列7.50m，北側柱列4.75mあり，各柱間寸法は，東側柱列北から2.45＋2.20＋2.65m，南側柱列東から2.75＋2.20m，西側柱列南から2.15＋2.50＋2.35m，北側柱列西から2.25＋2.50mとなる。柱間には相当なバラつきが認められる。東側柱列を通る軸線はＮ８°Ｅを示す。

各掘形から土師器破片約50片と，須恵器破片３片が出土している。P_3埋土中には第77図１に示したロクロ成形による内黒土師器杯１個体が，ほぼ完形品の状態で出土している。口縁径16.0㎝，底径7.5㎝，高さ5.1㎝あり，体部下端から底部全面を回転ヘラケズリ再調整している。内面はヘラミガキ後黒色処理である。その他調整技法のわかる杯には回転ヘラケズリ痕が認められる。須恵器は高台のついた瓶底部と甕体部小破片である。



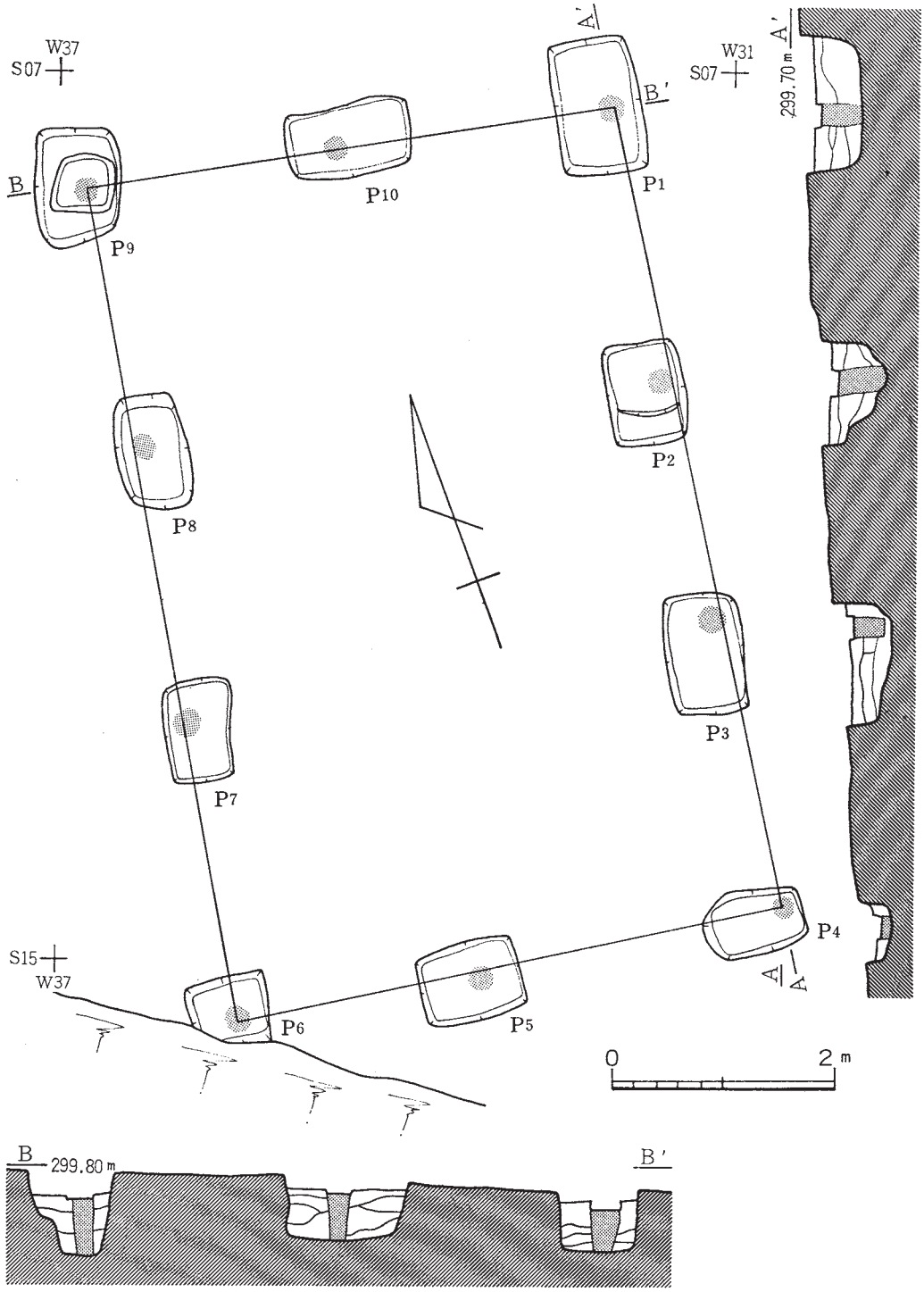
第77図　19号建物跡出土土師器・鉄製品

さらにP_3中からは，第77図２に示した鉄器残片が出土した。刀子刃部破片であり，全長10.0㎝ある。

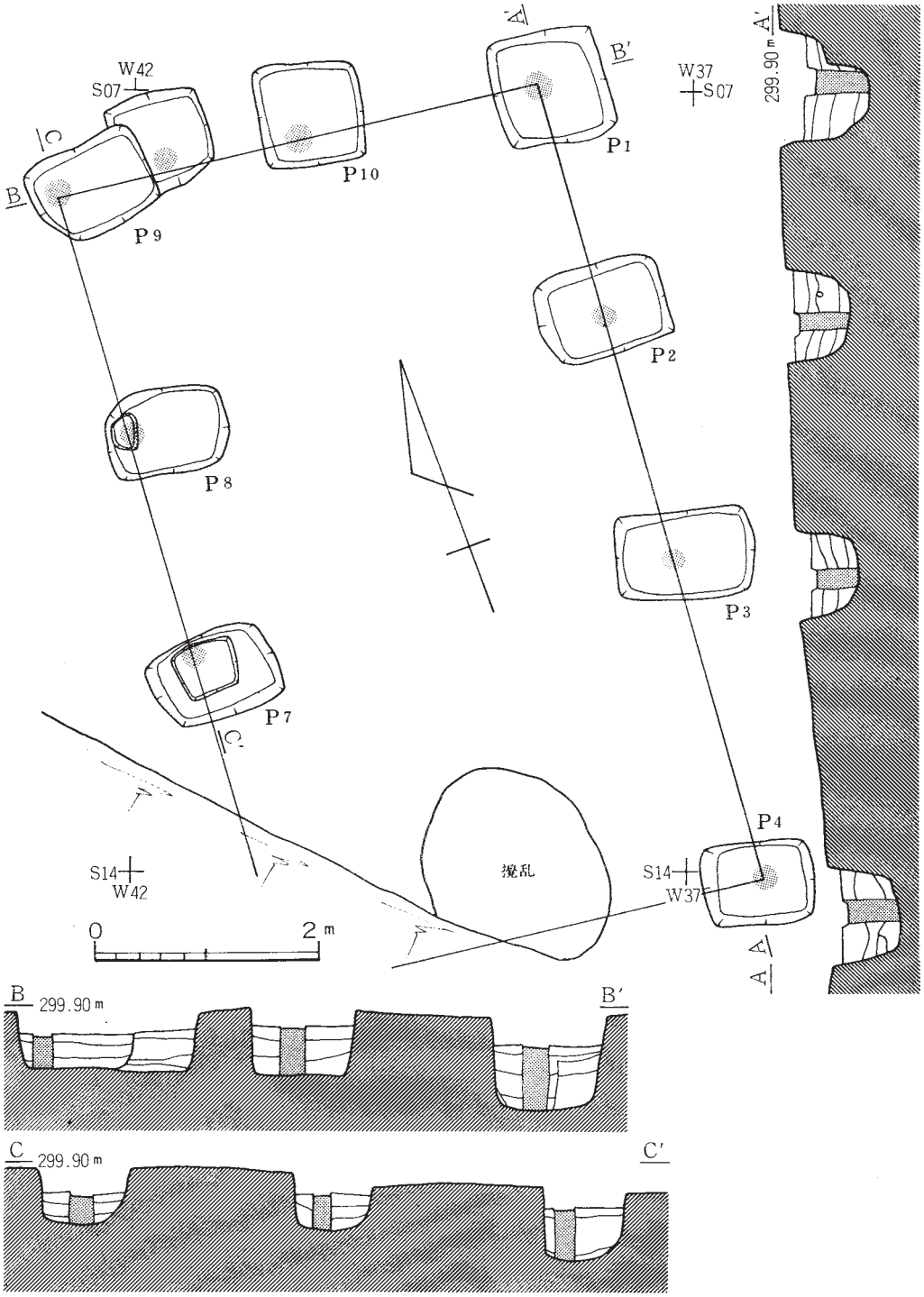
20号建物跡　ＳＢ20（第79図，図版52）

19号建物跡の西隣りに位置しており，北側柱列がＳＢ18東南コーナーの掘形を切っている他，掘形の切り合いはないがＳＢ19・21とは軒の張り出しから見て重複していた可能性がある。南側柱列中央部の掘形が位置する地点が撹乱をうけ，さらに南西コーナーの隅柱も道路によって壊滅していて確実ではないが，東西２間・南北３間の南北に長い建物跡と考えられる。

遺存した掘形は長辺110㎝，短辺80㎝前後の長方形を基本としているが，正方形に近いものもある。底面は検出面から50㎝ないし80㎝とバラつきがある。遺存掘形の全てに直径20㎝前後の柱痕を認めた。P_4が南東コーナーの隅柱と考えて各側柱列の全体の長さを求めると，東側柱列で7.30m，南・西側柱列は不明，北側柱列は4.35mを測る。各柱間寸法は，東側柱列が北から2.10＋2.25＋2.95m，西側柱列は北側２間分が南から2.00＋2.20m，北側柱列が西から2.15＋2.20mある。


W37
S07
W31
S07
A
A'
B
B'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
299.70m
S15
W37
0
2m
299.80m

第78図　19号建物跡


A
A'
B
B'
C
C'
W42
S07
W37
S07
299.90m
P1
P2
P3
P4
P7
P8
P9
P10
S14
W42
S14
W37
攪乱
0
2m
299.90m
299.90m

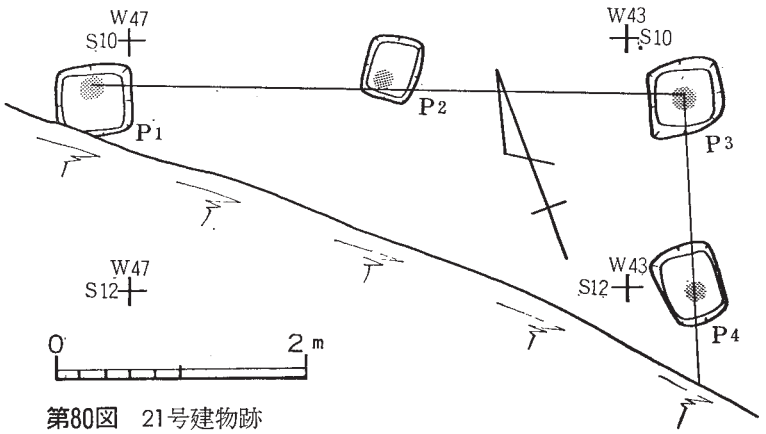
第79図　20号建物跡

７尺程度の柱間が多い中で，P_3・P_4間は10尺前後と隔たりがある。東側柱列柱痕を通る軸線は，Ｎ４°Ｅを示す。

各掘形内より土師器20片，須恵器１片が出土しているが，土師器杯はロクロ成形によるものが多く，再調整痕の観察できる１片は，体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施している。P_{10}には高台付杯底部小破片が１点ある。須恵器は無文の甕体部破片である。

21号建物跡　ＳＢ21（第80図）

遺構の主要部は道路によって破壊され，全体の規模は明らかになしえない。北東の隅柱を中心として東側柱列１間分と北側柱列２間分の４個の掘形を検出した。位置関係から見て20号建物跡とは先後の重複関係にある。



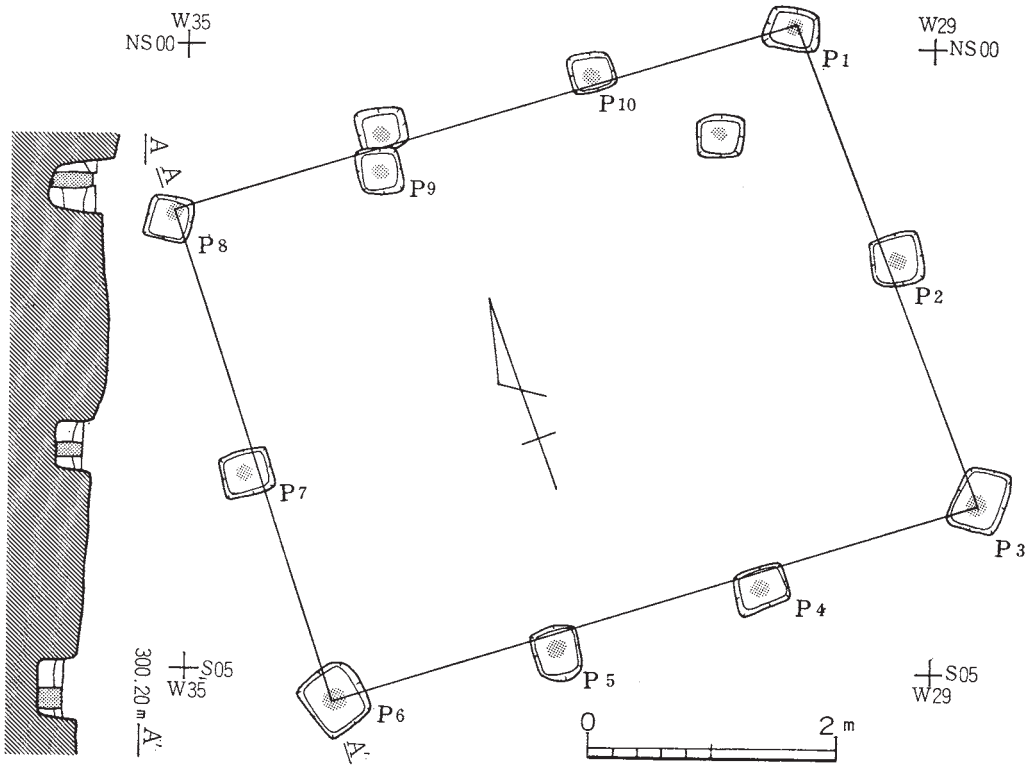
第80図　21号建物跡

４個の掘形は一辺50cm前後の方形を呈し，直径20cm弱の柱痕の遺存が認められた。北側柱列での２間分の全長は4.75mあり，柱間は西から2.35＋2.40mを測る。東側柱列の２個の柱痕間は1.05mであり，これを通る軸線の傾きはＮ17°Ｅを示す。掘形内からの出土遺物はなかった。

22号建物跡　ＳＢ22（第81図，図版53）

北側柱列の掘形が23号Ａ建物跡の南側柱列の掘形を切っており，23号Ａ建物跡よりも新しい建物跡である。また16号建物跡とは掘形の直接的な切り合いはないが，軒の張り出しを考えると重複した可能性が強い。一辺40cm前後の小規模な方形の掘形で構成され，全ての掘形に直径15cm前後の柱痕を認めた。掘形の検出面からの深さも，最大40cm前後と浅いものが多い。

平面形は東西３間・南北２間の中ヌキの東西棟である。四隅の柱痕を棟通りとして実線で結ぶと，各辺の中間に位置する掘形の柱痕は，全て外部に10cm前後とび出していて，一線上に位置しない。各側柱列の全体の長さは，東側柱列で4.10m，南側柱列で5.35m，西側柱列で4.10m，北側柱列で5.20mあり，全体規模は正整な長方形に近い。各柱間寸法は，東側柱列が西から2.05＋2.05m，南側柱列が東から1.85＋1.65＋1.85m，西側柱列が南から1.95＋2.15m，北側柱列が西から1.80＋1.75＋1.65mある。P_1・P_8の柱痕を結んだ東側柱列での軸線はＮ１°Ｗを示している。



第81図　22号建物跡

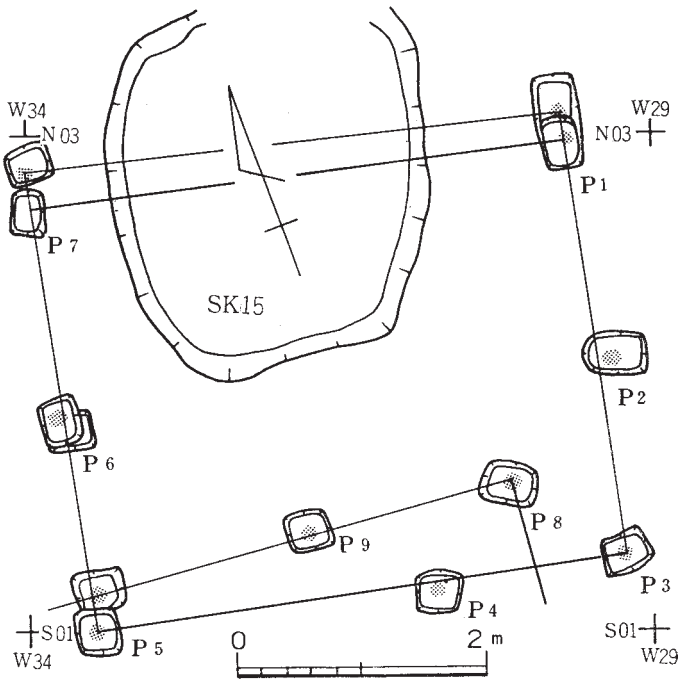
P_4から土師器甕体部破片が１片出土しているが，外面はヘラケズリ調整をうけている。

23号建物跡　ＳＢ23Ａ・Ｂ（第82図，図版53）

南西の隅柱にあたる掘形が22号建物跡北側柱列掘形によって切られていて，22号建物跡よりは古い建物跡であるが，ＳＫ15セクションベルトに検出された掘形が本遺構に伴うものであればＳＫ15よりも新しい建物跡になる。西・北側柱例の掘形の中に，ほぼ同一の地点で重複した掘形が認められるので，間尺をわずかにせばめた建て替えがあったものと判断した。

ＳＢ23Ａ建物跡　北側柱列中央部の掘形の所在に不安が残るが，東西２間・南北２間の東西にやや長い中ヌキの建物跡と思われる。北東コーナーの隅柱が，23号Ｂ建物跡掘形を切って南側に掘り込まれており，同様な関係は掘形自体の切り合いはないものの北西コーナーの隅柱でも認められる。恐らく23号Ｂ建物跡を南北方向の柱間を若干短く設計して建て替えたものであろう。各掘形は一辺30cm前後の方形もしくは長方形を呈し，23Ａ－P_7を除いて全ての掘形に直径

10cm内外の柱痕が認められた。掘形，柱痕ともに非常に小型である。各側柱列全体の長さは，東側柱列で3.35m，南側柱列で4.25m，西・北側柱列は隅柱にあたる23A－P_7に柱痕が分離できず不確実であるがそれぞれ3.50m，4.30m前後と推定される。各柱間寸法は，東側柱列が北から1.80＋1.55m，南側柱列が東から1.50＋2.75m，西側柱列が1.75＋1.75（？）m，北側柱列が2.15（？）＋2.15（？）mと推定される。南側柱列の中央の柱が東に極度に偏している。23A－P_1と23A－P_3の柱痕を結んだ東側柱列の軸線はN13°Eを示す。掘形内の出土遺物はなかった。



第82図　23号建物跡

ＳＢ23Ｂ建物跡　遺存する掘形は北東および北西コーナーに位置する掘形と，西側柱列中央の掘形３ケ所であり，他の掘形は23号Ａ掘形と完全な重複があったものと思われる。

遺存した掘形から見ると，本建物跡は南北２間・東西２間の中ヌキの建物跡であり，ＳＢ23Ａ建物跡に比べ東・西両側柱列が北側に約20cm長いだけで，柱構造は相似たものであったと思われる。東西4.25m，南北3.55m前後の規模であろう。残存した掘形内からの出土遺物はなかった。

24号建物跡　ＳＢ24

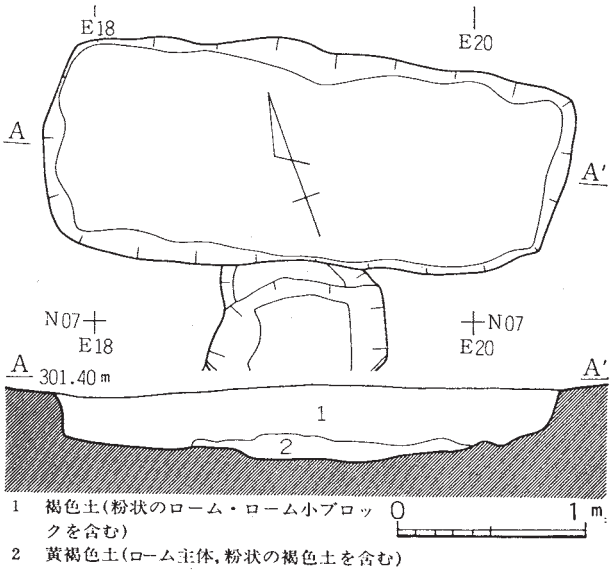
ＳＢ15建物跡北側の調査区際に２個の掘形が部分的ながら検出されており，ＳＢ24建物跡とした。遺構の主要部は調査区外に所在するものと思われ，全体的な構造は皆目不明である。２個の掘形は南側柱列のコーナーおよび西へ１間分の掘形であり，コーナーに位置する掘形は一辺１ｍ前後の方形と推定され，直径20cmの柱痕が確認できた。掘形内部の検査は行っていない。

第４節　土　　坑

土坑は10基検出されており，昭和52年度に確認した６基の土坑を含めると，谷地前Ｃ遺跡全体で16基を数えることとなった。これらの遺構にも52年度からの連続番号を付しているため，今回検出土坑は，７号土坑（ＳＫ07）～16号土坑（ＳＫ16）に該当する。伴出遺物が少なく，時期を明らかにできるものがわずかであるが，縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代に比定できるものと考えられる。

７号土坑　ＳＫ07（第83図，図版54）

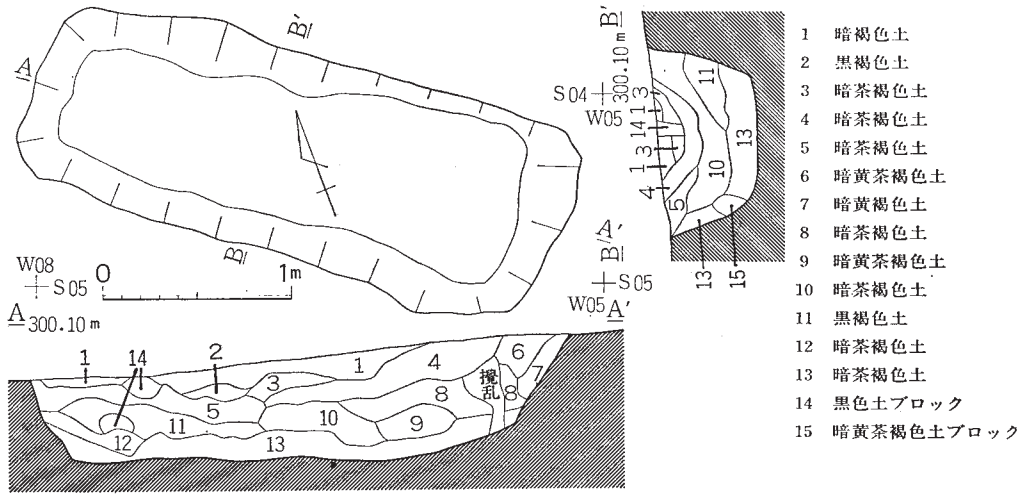
発掘区東部で24号住居跡のカマド煙道部に切られた状態で検出された。検出面Ⅳ層はソフトローム層である。西北西―東南東に長い隅丸長方形を呈し幅1.2m，長さ2.8m，深さ30～40cmを測る。堆積土は２層に区分できるが褐色土の１層が大部分を占め，黄褐色土の２層は底部に若干みられるに過ぎない。褐色土層はほぼ均質に粉状のロームやローム小ブロックを含んでおり，人為的推積のように思われる。長軸はＮ66°Ｅを示す。出土遺物はない。



第83図　７号土坑

８号土坑　ＳＫ08（第84図，図版55）

30号住居跡と９号建物跡の中間にあり，標高300ｍの等高線上に位置する。遺構確認面はⅤ層地山ローム層であり，ちょうど地境部分の南西に傾斜している所で検出された。平面プランは東西2.9m，南北10.5m，底面では東西2.45m，南北65cmの，西側がやや狭くなる隈丸長方形であり，深さは東側で55cm，西側で45cmを測る。底面に若干凹凸がみられるが舟底型を呈しており，壁は割合大きく外傾する。埋土は暗茶褐色土が主体をなし，部分的に黒褐色土の間層が入り，壁際に高い堆積状態を呈しているが，各層はブロック状に狭い分布をしており，人為的な堆積土と考えられる。長軸の方位はＮ54°Ｅを測る。遺構内からの出土遺物はない。



第84図　8号土坑

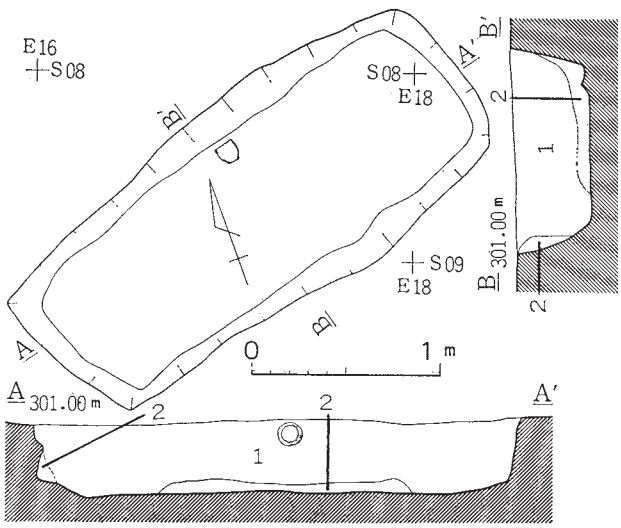
9号土坑　SK09（第85図，図版56・57）

発掘区東部で検出された。幅1.1m，長さ3.2m，深さ40cmの隅丸長方形を呈す。長軸はN105°Eに掘り込まれている。遺構内にはほぼ均質にローム粒子を含む黒褐色土1層と，底面付近にロームを多量に含んだ褐色土2層の堆積がみられた。1層が遺構内での大半をしめる堆積土であり，状況から判断して人為的に埋められた可能性が強い。

遺構中央部の北壁際で，検出面下2～3cmの1層中から，横倒しとなった土師器鉢完形品が1点出土した。遺構底面からは25cm浮いており，1層を埋める過程で納置した遺物と思われる。

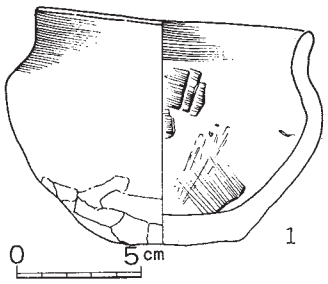
〔土　師　器〕

鉢（第86図）　口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。体部上半部で肩の張りがあり，内彎して直立した口縁を有す。最大径はこの体部上半にある。口縁部内外面はヨコナデ，体部は外面の上半をナデ，下半から底部にかけてヘラケズリ，内面をヘ



第85図　9号土坑

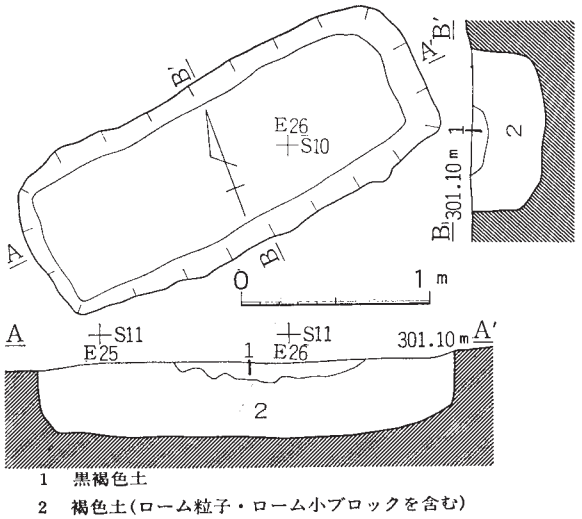
ラナデしている。口縁径11.8cm，底径5.7cm，高さ9.1cmあり，最大径は体部上半で12.8cmある。器形や製作技法上の特徴から古墳時代の遺物，佐平林式として考えている土師器に比定される。



第86図　９号土坑出土土師器

10号土坑　ＳＫ10（第87図，図版58）

ＳＫ09の東南部に検出された土坑である。幅90cm，長さ2.25m，深さ30cmを測り，東西に長い隅丸長方形を呈している。底面は平坦であり，遺構内には検出面に厚さ１cm前後の黒褐色土がわずかに認められた他は，ロームをわずかに含んだ褐色土がほぼ全面に堆積していて，単層堆積と考えられる。状況からは人為堆積と考えざるを得ない。長軸はＮ66°Ｅを示す。出土遺物はない。



1　黒褐色土
2　褐色土（ローム粒子・ローム小ブロックを含む）

第87図　10号土坑

11号土坑　ＳＫ11（第88図，図版59）

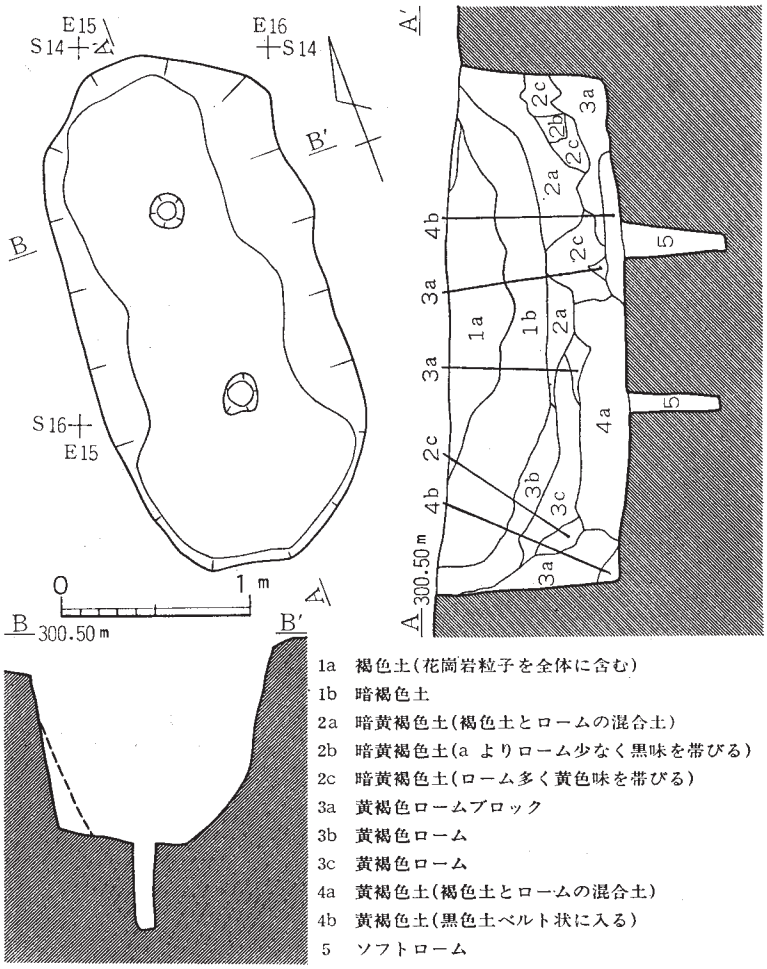
調査区東側部分の西南に傾斜する斜面上に，ＳＫ12に隣接して検出された土坑である。平面形は，長楕円形を呈し，長軸方向はほぼ磁北に一致する。底面に直径15cm，底面よりの深さ45cmほどの２ケ所のピットを有する特徴がある。遺構内土層堆積状況は，自然流入堆積を示しており，堆積土上層には，本遺跡での基本層位であるⅡ層に比定される黒色土の堆積が認められ，このことから11号土坑の所属時期は，今回確認された他の土坑とは異なり，調査区東端部において，黒色土下部よりわずかではあるが縄文土器が出土していることとも考え合せて，縄文時代のものと考えておきたい。他遺跡例などから見ておそらく陥穴状土坑と考えられる。遺構の規模は，長軸2.7m，短軸1.35m，底面までの深さ0.9mである。遺構内からの出土遺物は全くなかった。

12号土坑　ＳＫ12（第89図，図版60）

ＳＫ11北西部に検出された土坑である。東西に長い隅丸長方形の平面プランを有し，幅1.15m長さ3.05m，深さ30～40cmを測る。長軸はＮ101°Ｅを示す。遺構内には２層の堆積土が確認でき

たが，ロームの混入度の違いによる分層であり，基本的には単層と考えられる。したがって本遺構も人為堆積の可能性が大である。

１層中に須恵器甕体部小破片が１点出土している。外面に平行叩き目が遺存するが，特徴的なものがなく，年代の否定は不可能と言わざるを得ない。



第88図　11号土坑

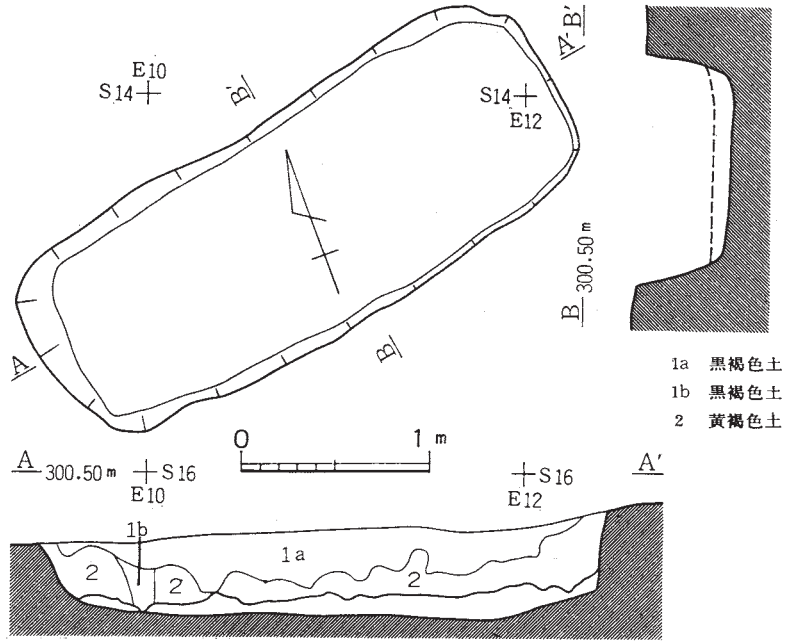
13号土坑　ＳＫ13

（第90図，図版61･62）

ＳＢ09Ａ・Ｂと重複しており，09Ａ－P_1，09Ｂ－P_1，09Ａ－P_{12}，09Ｂ－P_4掘形によって両端を破壊されている。残存部で測ると長辺3.05m，短辺1.45mの長方形の土坑であり，底面は長辺2.95m，短辺0.7mの，長方形の２段の掘り込みがある。検出面からの深さは中央で0.85m，段のつくテラス部分で0.55mを測る。遺構内には５層の褐色土とロームブロックの混在した堆積層が認められたが，水平堆積層と思われ，ロームの混入状況などから人為的に埋められたと判断できる。長軸はＮ68°Ｅ前後を示す。遺構内に形跡はないが，下段の掘り込みは木棺を据えた可能性が強い。遺構内から出土した遺物はない。

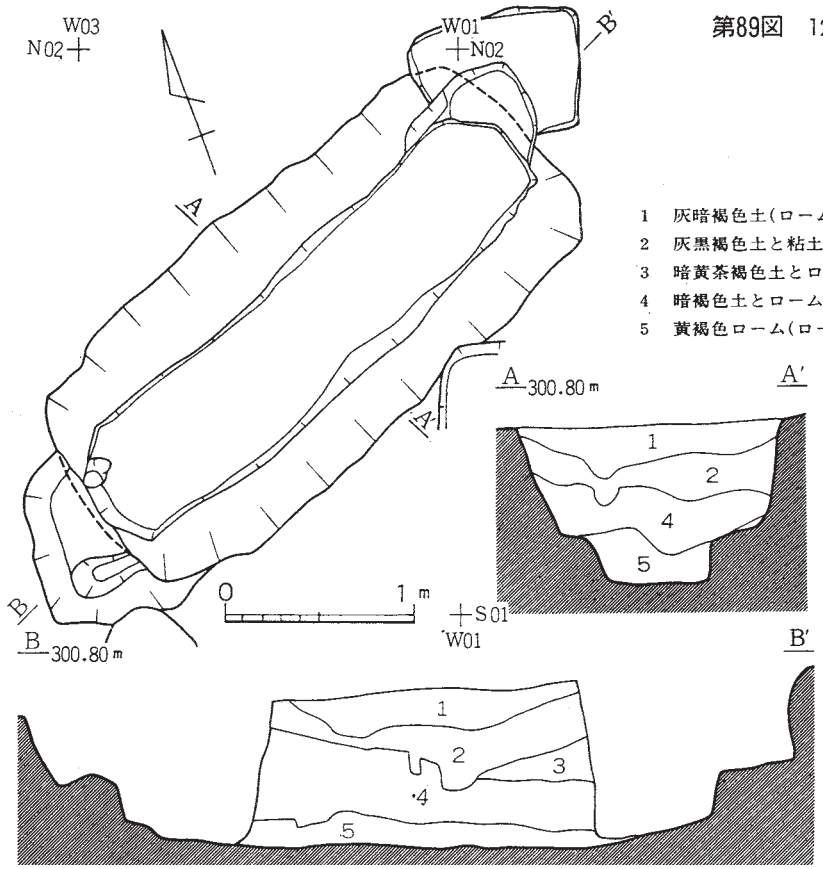
14号土坑　ＳＫ14（第91図，図版63）

ＳＢ05南側柱列より２m程南の地点に検出された，一辺1.2mのほぼ正方形の土坑である。検出面からの深さは最大32cmあるが，遺構内には茶褐色土が充満し，壁際および底面に黄褐色土，黒褐色土が薄く見られた。堆積土がわずかで堆積要因が判断できないが，１層は均質な粒の細か



1a　黒褐色土(下部ほどローム粒子を多く含む)
1b　黒褐色土(1a よりローム多い)
2　黄褐色土(黒褐色土とロームの混合土)

第89図　12号土坑

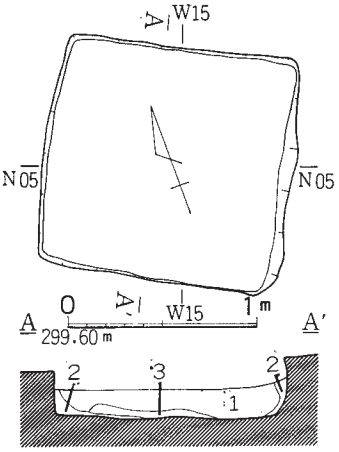


1　灰暗褐色土(ロームブロックを含む)
2　灰黒褐色土と粘土質ロームブロックの互層
3　暗黄茶褐色土とロームの互層(ローム主体)
4　暗褐色土とロームの互層
5　黄褐色ローム(ローム主体)

第90図　13号土坑

な茶褐色土であり，自然堆積した可能性が強い。南・北辺の中点をとった軸線はN28°Eを測る。

１層中から土師器破片６片，須恵器甕体部破片１片，３層中から土師器破片４片が出土した。１層出土の土師器にはロクロ成形の甕破片が１片ある他，全て非ロクロ成形による土師器である。３層には口縁下端に沈線状の段を有す内黒土師器杯破片が１片あり，奈良時代以降の土坑であることは間違いない。

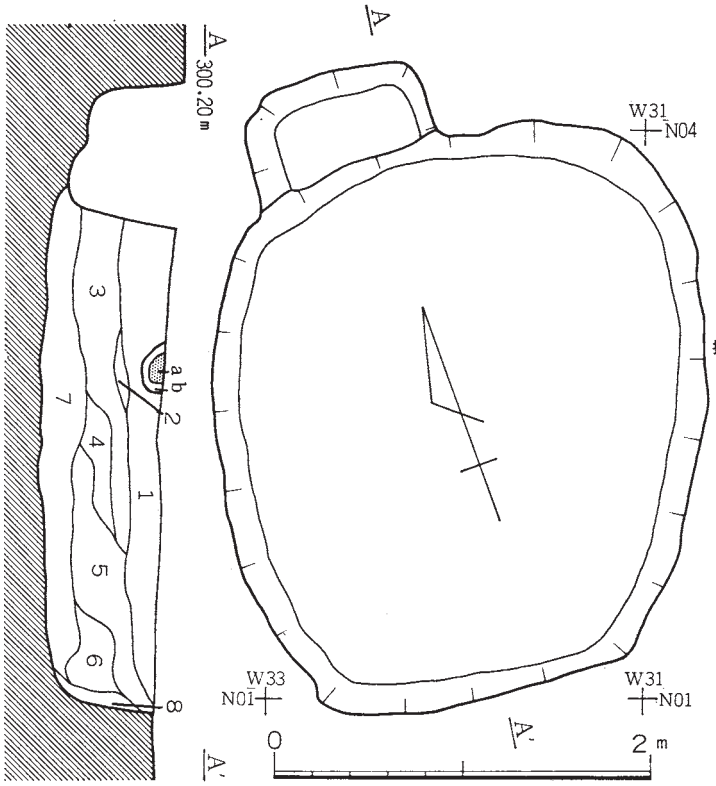


1　茶褐色土
2　黄褐色土
3　黒褐色土

第91図　14号土坑

15号土坑　ＳＫ15（第92図，図版65）

ＳＢ15・ＳＢ23と重複している。ＳＢ15 P_4には北壁の一部を壊されている他，堆積土１層中にＳＢ23 P_8と思われる柱痕のある掘形がセクション面に確認されており，ＳＢ23にも切られている可能性がある。東西2.6m，南北3.05mの不整な円形

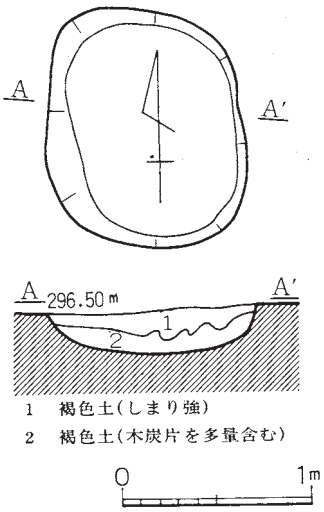


掘方内堆積土
a　灰黒褐色土(柱痕？)
b　灰黒褐色土と黄褐色ロームの互層

土坑内堆積土
1　灰黒色土(ローム粒わずかに含む)
2　灰黒色土(１より黒味強し)
3　灰暗黒褐色土(ローム粒・ロームブロック多量に含む)
4　灰黒色土(ローム粒わずかに含む)
5　灰暗黒褐色土(ローム粒・ロームブロック多量に含む)
6　灰黒色土(ローム粒わずかに含む)
7　灰暗黒褐色土(ローム粒・ロームブロックまばらに含む)
暗茶褐色土(ロームブロック多量に含む，壁面崩壊土)

第92図　15号土坑

を呈し，検出面からの深さは最大65cmある。遺構内に９層の堆積層が分離できたが，黒色土ないし黒褐色土を主体としており，堆積状況から見て自然に埋没した遺構であると判断される。底面は地山掘形面であり，踏み固められた痕跡が認められなかった。遺構内から出土した遺物はない。



第93図　16号土坑

16号土坑　ＳＫ16（第93図，図版64）

西南区の西端に検出された土坑である。東西1.05m，南北1.28mの，南北にやや長い円形の土坑であり，検出面からの深さは22cmある。底面は鍋底状を呈す。土坑内には粘性のある褐色土が堆積していたが，下層に木炭の顕著な分布が認められ，２層に分層できた。堆積成因は不明である。

１・２層から土師器小破片が数点出土したが，甕破片であり遺構の年代を考定できない。

第５節　その他の遺構と遺物

その他の遺構としては掘立柱柱列・溝跡の他，調査区中央の遺構検出面にあたる黒色土層（Ⅱ層）上面に，奈良・平安時代の土器片が比較的多量に出土しており，当時の生活面と有機的関連のある遺物包含層と考えて調査した。

掘立柱柱列

内部に柱痕を有す掘形が，南北方向にほぼ同間隔で並ぶ遺構である。３列確認され，それぞれ１号掘立柱柱列（ＳＡ01），２号掘立柱柱列（ＳＡ02），３号掘立柱柱列（ＳＡ03）とした。

ＳＡ01柱列　ＳＢ03東側柱列から東へ約1.1m離れ，ＳＢ03と同方位のＮ11°Ｅの軸線上に位置する。３基の掘形で構成される。掘形は一辺40cm前後の方形を呈し，全てに直径10cm程の柱痕が認められた。柱痕をとった全体の長さは5.00mあり，柱間は南から2.25＋2.75mを測る。掘形内の出土遺物なし。

ＳＡ02柱列　ＳＢ03西側柱列から1.7m西へ離れ，Ｎ14°Ｅの軸線にのる３基の掘形列である。掘形は直径30cm前後の円形で，内部に直径10cm前後の細い柱痕が遺存している。全体で5.10mあり，柱間は南から2.60＋2.50mを測る。掘形は30cm前後の深さである。掘形内の出土遺物なし。

ＳＡ03柱列　ＳＢ19北側柱列に直交し，建物内部に２つ，外部に１つの掘形が，主軸をＮ４°Ｅに向けて並んでいる。掘形は一辺70cm前後の方形ないし長方形を呈し，直径20cm弱の柱痕が確認

できた。深さは40～50cmある。柱痕をとった全体の長さ4.70m，柱間は南から2.45＋2.25mある。軸線方向が西隣りのＳＢ20東側柱列にほぼ合致し，両端の柱痕がＳＢ20北側柱列の延長線およびP_3・P_7の延長線上にあり，ＳＢ20に関連のある柱列の可能性がある。掘形内出土の遺物はない。

溝　　跡

14号建物跡の西および南側柱列外方に検出された溝跡があるが，調査区の北端部の工区外の地点にあたり，内部の精査を実施してないため，全体規模が不明である。位置関係から見て14号建物跡の雨落満となる可能性が強い。14号建物跡の報告で触れておいた，ＳＤ02Ａ・02Ｂがこれである。

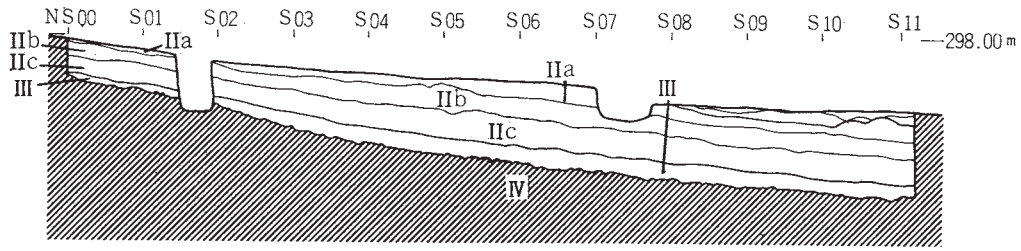
黒色土遺物包含層

08号建物跡の位置する付近は，南から北に向って入り込んだ谷地形を呈すが，この付近には地山のローム面上層に，黒色土が堆積している。その広がりは，北はＳＩ28・29南辺部から，東・西両端はＳＢ08東側柱列付近からＳＩ31西辺部付近まで見られ，南は道路を越えて矢武川の沖積面へと続くものと思われる。この層の最上層のうち，ＳＢ08を中心とした狭い範囲に奈良・平安時代に比定される土師器・破片が包含されていたので，中央区遺物包含層とした。

またＳＩ39の位置する西南区の北側部分は西南方向から北に入り込んだ谷状の微地形を呈し，この部分にも黒色土の堆積が見られた。その分布は西南区の北半と，道路を越えた北側の，ＳＩ36西側で顕著であった。このうちＳＩ39周辺の部分に奈良・平安時代に比定できる土師器・須恵器片が包含されていた。西南区遺物包含層とした。

中央区遺物包含層（第94・95図，図版66・67・79・80・82）

層序　この付近での黒色土は，表土直下に露呈するが，土性・土色などから３層の分層ができる。上からⅡａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ層としたが，各層は20～30cm前後の層厚を有し，斜面下方に厚い自然

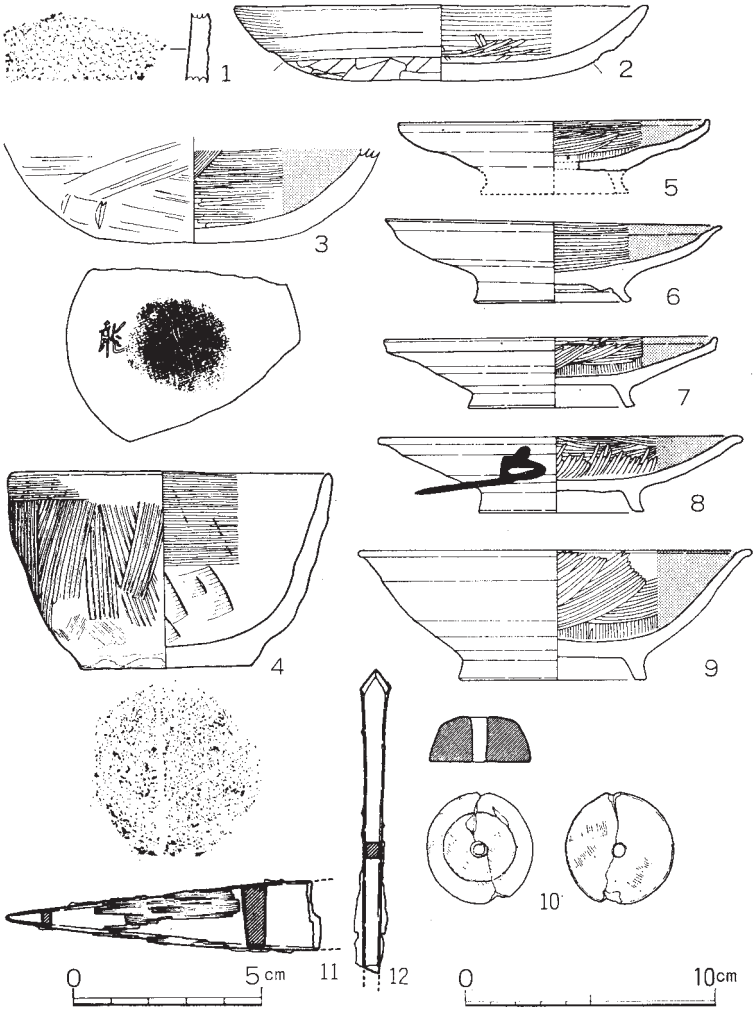


第94図　中央区遺物包含層土層断面図

流入による堆積を示している。Ⅱｃ層下位には粘性の強い茶褐色土（Ⅲ層），ソフトローム（Ⅳ層）の順で，この付近一帯に認められる基本的な堆積関係が確認できた。遺物が包含されるのは，Ⅱａ層の上面部にあり，斜面下方では焼土粒，木炭などの混在するⅡ$_1$・Ⅱ$_2$層と分離した層がこれにあたる。Ⅱ$_1$･Ⅱａ層との相違点は，焼土の混在にあり，Ⅱａ層の上面を整地した可能性もあるが，両層の層理面は漸移的であり，Ⅱａ層が自然に形成される過程で２次的な焼土等の廃棄があったものと思われる。

遺物の出土状況　遺物はⅡａ層の上面からほとんどレベル差なく出土した。出土量はⅡ層でも焼土を含むⅡ$_1$・Ⅱ$_2$層に集中する傾向があり，中でもＳＢ08南側柱列の南方部の直径３ｍ前後の範囲で顕著であった。しかしその外縁部でもわずかながらⅡａ層上部から遺物の出土があった。遺物は土師器・須恵器が細片状態で出土し，特定の出土状況は観察できなかった。中に土師器鉢の口縁の一部を欠損した土器と，石製紡錘車１点が混在していた。なおⅡｂ層は無遺物層であるが，Ⅱｃ層からは縄文前期に比定される土器片が５片出土しており，黒色土最下層の形成が縄文時代前期以前であることが推定できるようになった。

遺物　出土した遺物は，縄文土器･土師器･須恵器・石製紡錘車・鉄器残片である。縄文土器は５片あるが同一個体の破片である。第95図１に示したが胎土



第95図　中央区遺物包含層出土遺物

に繊維を含み，組紐が地文である。縄文前期初頭に比定されよう。

土師器・須恵器はⅡa層に包含された主体となる遺物である。接合した破片も１片と数えると，土師器734片，須恵器105片ある。器種や技法的な内訳は次の通りである。

第１表　中央区遺物包含層出土土師器破片数一覧表

器種	破片		数	器形，技法上の特徴とその内訳
杯	非ロクロ	口縁部	60 (2)	口縁下端に沈線による段を有するもの(11) 口縁下端に段がなく体部との変換屈曲点のあるもの(20) 口縁下端に段がなく内彎するもの(13) 内外両面ヘラミガキ黒色処理するもの(12) 丸底(19) 平底状に平坦面のある底部(9)
		体・底部	83	
	ロクロ	口縁部	39	底部全面を回転ヘラケズリ再調整するもの(26) 底部全面を手持ちヘラケズリ再調整するもの(7) 内面非黒色処理(2)
		体部	46	
		底部	37	
高台杯	ロクロ	口縁部	11 (5)	
		底部	2	
甕・鉢	口縁部		28 (1)	ロクロ成形の口縁部(13) 非ロクロ成形の口縁部(14)
	体部		399	体部破片のうちハケメ調整されるもの(31)
	底部		29	底部ヘラケズリ調整(9) 底部木葉痕(14)
計			734	

(註)　破片数欄カッコ内の数値は図化できた土器片の点数を示す。

西南区遺物包含層（第96図，図版80・82）

層序　西南区での黒色土の堆積は，全体で約30cm前後と，中央区のそれに比べて薄い。単一の土性，土色を呈しており分層できなかった。下層は粘性のある暗褐色土（Ⅲ層）を間にはさんで，ソフトローム層（Ⅳ層）へと移行するが，この地点でのⅣ層は鉄分を多く含んで茶褐色を呈している。沖積面との接点付近にあり何度かの冠水をうけたためと思われる。

遺物出土状況　遺物の出土した地点はＳＩ39周辺の直径５ｍ前後の範囲であり，比較的集中して出土した。出土層位はⅡ層最上層面で，ＳＩ39もこの面で平面プランが検出されている。遺物は土師器・須恵器が全て破片状態で出土し，状況に特別な背景を見てとれなかった。

遺物　出土遺物には土師器・須恵器・砥石・鉄器残片がある。中央区同様に土師器は非ロクロ成

第２表　西南区遺物包含層出土土師器破片数一覧表

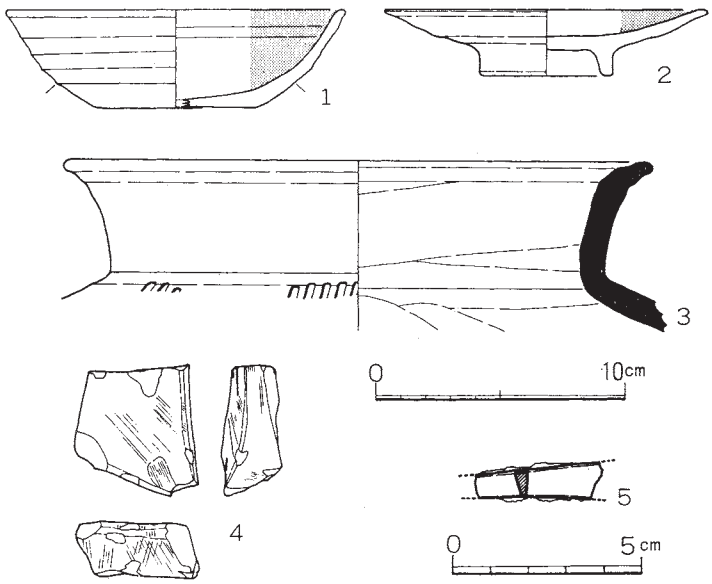
器種	破片		数	器形，成形技法上の特徴とその内訳
杯	非ロクロ	口縁部	5	口縁下端に段を有すもの(1)
		体・底部	2	底部は丸底
	ロクロ	口縁部	50 (1)	底部全面を回転ヘラケズリ再調整するもの(29)
		体部	94	底部全面を手持ちヘラケズリ再調整するもの(5)
		底部	57	内面は全て黒色処理
高台杯	ロクロ	口縁部	1	
		底部	9	底部全面回転ヘラケズリ再調整後付高台
甕・鉢	口縁部		13	ロクロ成形の口縁部(7)　非ロクロ成形の口縁部(6)
	体部		396	体部破片のうちハケメ調整されるもの(11)
	底部		16	底部ヘラケズリ調整(12)　底部木葉痕(1)
計			643	

(註)　破片数欄カッコ内の数値は図化できた土器片の点数を示す。

形・ロクロ成形のものが混在している。器種および技法上の内訳は上表の通りである。

土師器杯ではロクロ成形による杯が主体を占め，さらに底部破片で観察すると回転ヘラケズリ再調整をうけるものが全体の90％にあたる特徴が指摘できよう。最終的な調整痕の遺存するものの中には底部切り離し痕の観察できるものが１片もない。

砥石（第96図４）は凝灰岩



第96図　西南区遺物包含層出土遺物

製のもので，表裏および両側面が相当な磨滅をうけている他，側端面には刃傷がついている。

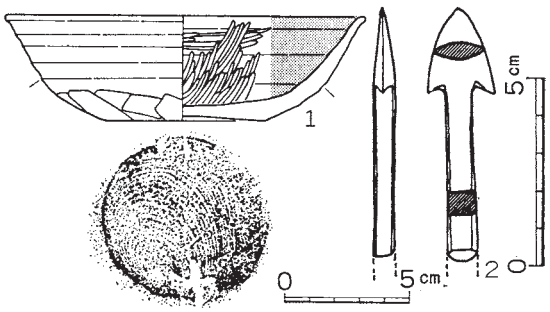
鉄器残片（第96図５）は刀子の茎部残片であろう。残存長3.4cm，断面は幅７㎜，厚さ３㎜の長方形である。

その他の遺物（第97・98図）

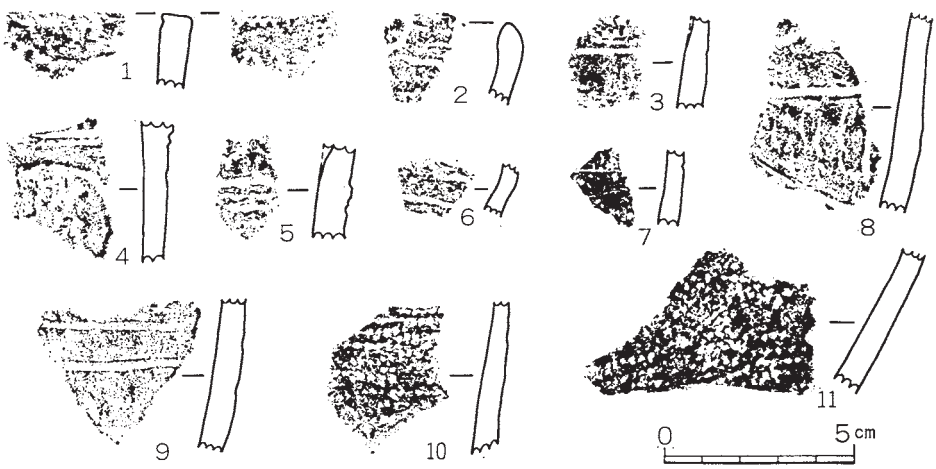
上述した遺構以外から出土した遺物として小ピット出土の土師器杯１点と，表土層から出土した縄文土器破片・土師器破片・鉄器残片がある。第97図１の内黒土師器杯は，ＳＩ35の北方の調査区北端に近い地点で検出され，直径20cm前後，深さ15cm程の円形の小ピット内に，つめ込まれたような状態で出土した。小規模な単独ピットであり，性格が不明な遺構である。第97図１は口縁の一部を欠くが体部中央に屈曲点のある杯で，回転糸切り手法でロクロから切り離した後に，体部下端にのみ手持ちヘラケズリ再調整を施している。内面は，痕跡の不明瞭なヘラミガキをうけ黒色処理されている。口縁径14.5cm，底径6.2cm，高さ4.2cmある。

第97図２は表土出土鉄鏃である。鏃身は三角形を呈し，長さ4.5cmの茎が遺存している。

第98図に示した縄文土器破片は，調査区の東端部に遺存したⅡ層の中から検出した土器片である。田戸上層式に比定されるものであろう。



第97図　その他の遺物



第98図　調査区東端部遺物包含層出土の縄文土器

第３表　谷地前Ｃ遺跡検出住居跡一覧表

遺構	遺構期	平面形	規模（東西×南北）	床面積	主軸	カマド 有無	カマド 位置	柱穴	備考
ＳＩ01	Ⅳ以降	方形？	3.1m×不明	不明	磁北	有	東辺中央		
ＳＩ02	Ⅰ	方形	4.0m×4.1m	14.1㎡	N20°E	有	北辺中央		
ＳＩ03	Ⅲ	方形	4.0m×3.9m	14.1㎡	N 8°E	有	東辺中央		
ＳＩ04	Ⅳ	方形	5.0m×4.8m	24.0㎡	N15°E	有	北辺中央		ＳＩ05を切る
ＳＩ05	Ⅲ	不明	不明×3.6m	不明	不明	不明	不明		
ＳＩ06	Ⅰ	方形？	3.6m×不明	不明	N14°E	有	北辺中央		
ＳＩ07	Ⅳ	不明	4.6m×不明	不明	N15°E	有	北辺西寄り		ＳＩ20を切る
ＳＩ08	Ⅴ	方形	3.9m×4.5m	15.0㎡	N36°E	有	東辺南寄り		ＳＩ21・22を切る
ＳＩ09	Ⅴ	方形	3.2m×2.8m	8.5㎡	N 9°E	有	北辺中央		ＳＩ14・15を切る
ＳＩ10	Ⅳ以降	隅丸台形	2.4m×2.6m	5.2㎡	N 5°W	有	北辺東寄り		ＳＩ11・12を切る
ＳＩ11	Ⅳ以降	方形	2.9m×2.8m	7.8㎡	N14°E	有	北辺西寄り		ＳＩ12を切る
ＳＩ12	Ⅳ以降	方形	4.4m×3.7m	15.5㎡	N19°E	有	北辺中央	主柱穴２	
ＳＩ13	Ⅳ	方形？	3.6m×不明	不明	N23°E	有	北辺東寄り		
ＳＩ14	Ⅴ	方形	3.1m×3.4m	9.0㎡	N37°E	有	東辺中央		ＳＩ15を切る
ＳＩ15	Ⅴ以降	方形	不明×3.9m	不明	不明	不明	不明		
ＳＩ16	Ⅵ	方形？	3.1m×5.1？m	不明	N30°E	有	北辺東寄り		ＳＩ04を切る
ＳＩ17	不明	方形	2.5m×2.1m	不明	不明	無	不明		
ＳＩ18	不明	方形	2.0m×2.3m	4.2㎡	N 6°W	無	不明		
ＳＩ19	不明	隅丸方形	3.0m×2.2m	不明	N50°E	無	不明		
ＳＩ20	Ⅳ	方形？	不明×4.6m	不明	N25°E	有	北辺中央		
ＳＩ21	Ⅴ以降	隅丸方形？	不明×3.8m	不明	不明	無	不明		
ＳＩ22	Ⅴ以降	不明	不明	不明	不明	有	北東コーナー東辺北寄り		
ＳＩ23	Ⅲ	方形	4.1m×3.6m	12.9㎡	N10°E	有	北辺中央	壁柱穴１	
ＳＩ24	Ⅴ	方形	4.2m×4.5m	14.0㎡	N25°E	有	北辺中央		
ＳＩ25	Ⅱ	方形	7.0m×6.8m	40.9㎡	N 6°E	有	北辺中央	主柱穴４ 壁柱穴22	
ＳＩ26	Ⅱ	方形	3.9m×3.7m	12.3㎡	N12°E	有	東辺（２つ）		
ＳＩ27	Ⅱ	方形	5.7m×5.8m	30.0㎡	N11°E	有	北辺中央	主柱穴４ 壁柱穴21	ＳＢ05を切る
ＳＩ28	Ⅴ以降	方形	3.1m×3.2m	8.5㎡	N27°E	有	東辺南寄り		ＳＩ29を切る
ＳＩ29	Ⅳ	方形	4.4m×4.4m	15.0㎡	N22°E	有	東辺南寄り		

遺構	遺構期	平面形	規模（東西×南北）	床面積	主軸	カマド		柱穴	備考
						有無	位置		
SI30	Ⅳ	方形	3.5m×4.2m	12.0m²	N21°E	有	北辺中央		SB06を切る
SI31	Ⅳ	方形	4.7m×4.4m	18.9m²	N17°E	有	北辺中央		
SI32	Ⅴ	方形	4.0m×4.1m	12.3m²	N23°E	有	東辺南方		
SI33	不明	方形	不明×4.2m	不明	不明	不明	不明		
SI34	Ⅳ	方形	4.3m×不明	不明	N14°E	不明	不明		
SI35	不明	方形	3.8m×3.5m	12.30m²	N 7°E	有	東辺南方	壁柱穴2	
SI36	Ⅳ	方形	3.7m×不明	不明	不明	不明	不明	壁柱穴1	
SI37	Ⅱ	方形	3.9m×3.8m	11.6m²	N28°E	有	北辺中央	主柱穴2	
SI38	Ⅳ	方形	2.8m以上×不明	不明	N37°E	有	東辺中央		
SI39	Ⅳ	方形	3.8m×4.4m	15.3m²	N23°E	有	東辺南方		
SI40	Ⅴ	方形	不明×5.0m以上	不明	N27°E	有	東辺南方		
SI41	Ⅳ	方形	4.5m×4.7m	17.3m²	N17°E	有	北辺中央	主柱穴3 壁柱穴2	
SI42	Ⅳ	方形	2.9m×不明	不明	N14°E	不明	不明		SI34を切る

第4表　谷地前C遺跡検出掘立柱建物跡一覧表

遺構	遺構期	柱間構造		全体規模			主軸方位	ホリカタ形態	柱痕直径	備考
		東西	南北	東西	南北	面積				
SB01		南3 北2	2	3.96m	3.96m	15.7m²	N21°E	方形	10～18cm	
SB02		2	東3 西2	4.35m	4.55m	19.8m²	N14°E	方形	9～25cm	
SB03		2	東3 西2	4.50m	4.75m	21.4m²	N11°E	方形	13～24cm	
SB04 A	Ⅱ～Ⅳ	3	2	6.85m	4.61m	31.6m²	N11°E	方形	22～29cm	04Bの建て替え
B	Ⅱ～Ⅳ	3	3	5.80m	4.72m	27.4m²	N11°E	方形	20～32cm	04Cの建て替え
C	Ⅱ～Ⅳ	4	3	8.32m	5.92m	49.3m²	N10°E	方形	16～26cm	05を切る
SB05	Ⅰ	3	3	5.90m	6.20m	36.6m²	N 9°E	方形	16～20cm	南に1間分の庇あり
SB06	Ⅳ以前	2	2	6.90m	6.05m	41.7m²	N10°E	方形	28～46cm	
SB07	Ⅳ	2	3	4.02m	5.06m	20.3m²	N12°E	方形	17～19cm	
SB08		3	3	5.48m	5.62m	30.8m²	N15°E	方形	18～38cm	
SB09 A		2	3	3.74m	5.32m	19.9m²	N16°E	方形	20～36cm	09Bの建て替えベタ柱
B		2	2	3.78m	3.54m	13.4m²？	N16°E？	方形	20～36cm？	ベタ柱
SB10	Ⅱ以降	2	2	4.77m	4.75m	22.7m²	N21°E	方形	20～24cm	
SB11	Ⅲ以前	2？	2？	4.92m？	3.43m？	16.9m²？	N 1°W	方形	11～19cm	

遺構	遺構期	柱間構造		全体規模			主軸方位	ホリカタ形態	柱痕直径	備考
		東西	南北	東西	南北	面積				
ＳＢ12	Ⅴ以前	2	2	5.70m	5.17m	29.5m²	Ｎ 4°Ｅ	方形	12～16cm	
ＳＢ13		1	2	2.67m	2.93m	7.8m²	Ｎ 1°Ｅ	方形	14～20cm	ベタ柱
ＳＢ14		不明	不明	不明	不明	不明	Ｎ 7°Ｅ	不明	18cm	
ＳＢ15		3	2	6.88m	4.20m	28.9m²	Ｎ10°Ｅ	方形	22～29cm	
ＳＢ16	Ⅰ	3	3	6.20m	5.80m	36.0m²	Ｎ16°Ｅ	方形	12～22cm	
ＳＢ17		2	2	3.52m	4.40m	15.5m²	Ｎ 8°Ｅ	方形	18～20cm	16・18を切るベタ柱
ＳＢ18		2	2	3.50m	4.46m	15.6m²	Ｎ10°Ｅ	方形	12～20cm	ベタ柱
ＳＢ19		2	3	4.80m	7.34m	35.2m²	Ｎ 8°Ｅ	方形	19～24cm	
ＳＢ20		2	3	4.36m	7.34m	32.0m²	Ｎ 4°Ｅ	方形	18～24cm	16・18を切る
ＳＢ21		2？	不明	4.74m	不明	不明	Ｎ13°Ｅ	方形	14～20cm	
ＳＢ22		3	2	5.38m	4.08m	22.0m²	Ｎ 1°Ｅ	方形	12～16cm	
ＳＢ23Ａ		2	2	4.26m	3.56m	15.2m²	Ｎ13°Ｅ	方形	10～14cm	23Ｂの建て替え？
Ｂ		2	2	4.26m	3.40m	14.5m²	Ｎ13°Ｅ	方形	10～14cm	

註　遺構期は切り合いから確実なものだけを区分した。

第３章　考　　察

谷地前Ｃ遺跡の調査の成果については第２章で詳しく触れた。昭和52年度の調査では，奈良・平安時代に比定される遺構・遺物が検出され，本遺跡が奈良・平安時代の集落遺跡であるとの観点で，その位置づけを行っている（玉川一郎他1978）。本年度の調査でも，この時代の遺構・遺物が追加され，集落としての広がりが改めて問題になったが，今まで予想しなかった旧石器時代，縄文時代，古墳時代に比定される遺構・遺物が検出され，複合遺跡として位置づけすべき新たな所見が得られた。ここでは，昭和52年度の成果を踏まえて，各時代ごとに若干の考察を行ってみたい。なお昭和52年度調査内容については「母畑Ⅱ」として記述する。

第１節　旧石器時代の遺物包含層と遺物について

谷地前Ｃ遺跡から出土した石器群は，出土層位・遺物平面分布の検討から単一の文化層の一群としてとらえることのできるものであり，ひいては，東北地方南部の該期の文化内容を考える上で，重要な知見をもたらすものと考えている。以下谷地前Ｃ遺跡での遺物の分布，剥片剥離技術，そして編年的位置づけについて考察し，問題点を指摘しておきたい。

1. 遺 物 の 分 布

旧石器時代の遺跡から検出される遺物は，遺跡の中で散在するのではなく，ある程度のまとまりを示して発見される。この平面的な遺物分布のまとまりは，ブロック（明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団1969）とかユニット（小林達雄他1971）と呼称して，遺跡の構造や人間の行動様式を把握する重要な単位として理解されている。本遺跡における石器群の分布には，だいたい６ケ所の集中する部分を観察することができる。それらを第１ブロックから第６ブロックと呼んで特徴を述べよう。

第１ブロック　発掘区東端部に確認されたもので，石核２点とその他剥片から構成される。遺物の集中状況はやや散漫であり，石材は玉髄を中心として，一部に硅質頁岩がみられる。

第２ブロック　第１ブロックの５ｍほど西に位置しており，総計30点からなるブロックであり，石器としては，ナイフ形石器・彫器・削器・ドリルがあり，各種の石核や剥片・たたき石から構成される。石材は，玉髄を主体として，細粒凝灰岩・硅質頁岩・黒曜石からなる。

第３ブロック　ＣⅡ区・ＣⅢ区の境に中心をもち，石核２点，剥片８点から構成されるが，遺物

の分布は，比較的散漫であり，石材は全て玉髄である。

第４ブロック　ＣⅢ区西南部および，一部ＤⅣ区に分布し，ナイフ形石器３点，削器１点，石核４点，剥片21点，その他砕片・磨石・たたき石から構成される。剥片自体は総じて小型のものが多く，石材の中ではほとんどが細粒凝灰岩で占められ，次いで硅質頁岩・玉髄のものが混入している。細粒凝灰岩のものは，ほぼ同一母岩のものと考えられる。

第５ブロック　ＤⅡ区，ＤⅢ区の境に分布しており，石核５点，剥片９点，その他砕片からなる。剥片には調整剥片が多く，石材では，硅質頁岩のものがほとんどであり，その他に玉髄・花崗岩がみられる。第５ブロックの一部の掘り出された土を水洗いしたところ，調査の段階では見失ってしまうような，微細な砕片を検出している。

第６ブロック　ＢⅣ区西端に広がるものであり，石核５点，剥片４点，窪みを有するたたき石からなる。石材には，玉髄・硅質頁岩・細粒砂岩がある。石核のうち２点は硅質頁岩のものであるが，２点の石核から剥離されたと考えられる剥片は，このブロック中にはみあたらない。

以上の６ケ所の石器群の集中の他に，約５ケ所の炭化物粒の集中するところが確認されている。第１ブロック付近，第２・４・５の各ブロックの中，第６ブロック付近の５ケ所である。炭化物粒の検出作業は，第Ⅴ席上面で行ったのであるが，谷地前Ｃ遺跡の場合には，石器群の集中と密接した関係にあることが理解され，また出土傾向としては，ほぼ円形に近い形を呈するものである。炭化物粒の分布は，石器群の分布，礫群などとともに，遺跡における人間の行動様式を考える上で重要な位置を占めるものであるが，本遺跡の場合には，短期間の火の使用を物語っているものと解釈したい。

以上６ケ所のブロックは，少なくとも何らかの形での谷地前Ｃ遺跡内部における生活行為の結果をあらわしているものと考えられよう。本遺跡より出土した石器の中で大きなウェイトを占めるのは，剥片と石核とであり，道具としての石器の数は極めて貧弱である出土総数の約半数を剥片が占め，約1/5を石核が占めている。母岩別資料の分析が最終結論を導きだす段階まで作業が至っていないので，速断は回避したいが，母岩別資料の遺跡内部での動きの中でブロック内部においては，顕著なものをみせているが，あるブロックから，他のブロックへの石核・剥片の移動といった動向が，ほとんど看取されない点は，大きな特徴としてあげなければならない。さらに，各母岩別の接合作業を行った上で，極めて接合する資料が少なく，さらに一母岩の資料点数が絶対的に少ない。これらのことは，遺跡内部での各ブロックが，谷地前Ｃ遺跡の場合には独立性が高く，さらに石器・石核の他地区への移動がかなりあったものと理解される。もちろん，第６ブロックを除いて，各ブロックとも石器製作の作業が行なわれていることはいうまでもない。第６ブロックの場合には，石器製作が行われたことを物語ることに乏しく，石核は全てブロック内部での石器製作にかかわらずに，遺棄されたものである。しかし，最近の該期の遺跡の調査の中で，

掘り出された土を水洗いすることによって微細な砕片が検出されていることや，なかには全く遺物の出土しない部分に，砕片が多く検出された例もあることなどから，各ブロックの性格を安易に規定してしまうことは避けよう。

2．石器群の編年

石器製作の各プロセスの中で，重要な位置を占めるものは，何といっても，剥片剥離技術であろう。一般的にみて剥片剥離技術は，石核のみから判断されるものではなく，石器の接合，母岩別資料の解析を通して評価されるものであるが，前述しているように，本遺跡の場合には石核への接合資料に乏しい難点がある。ここでは，あえて石核を通して，剥片剥離技術の記述を進めようと思うが，資料の危険性を念頭においた上で，石核より判断できる可能な点の指摘にとどめておくものである。

第5表　出土石器種類別組成表

器　種	点　数	%
ナイフ形石器	5	4.0
削器	2	1.6
彫器	2	1.6
ドリル	2	1.6
石核	26	20.6
剥片	66	52.3
砕片	13	10.3
たたき石	5	4.0
磨石	2	1.6
礫	3	2.4
合　計	126	100

第6表　出土石器石質別組成表

石　質	点　数	%
玉髄	50	39.6
硅質頁岩	34	26.9
細粒凝灰岩	33	26.1
黒曜石	5	4.0
細粒砂岩	2	1.7
花崗岩	2	1.7
合　計	126	100

本遺跡の石核には，単設の平坦な打面をもち一方向から剥片を剥離したもの，両設の打面をもち２方向から剥片剥離を行ったもの（なおこの場合，交互に上下から剥離するものではない），打面を盛んに転移して剥片剥離を行ったものと大きく分けて３種類のものがみられる。また，打面調整，再生や石核側面調整が行われているものがみうけられるのも特徴のひとつである。また，主要な剥片剥離作業面の反対側では，剥片剥離作業が行われていなかったり，自然面であったりする例がいくつかみられる。そのために，幅に比べて厚さが薄い形状を呈するのである。総じて縦長剥片を得ているが，細粒砂岩を用いたものの中に横長の剥片を得ているグループがある。さらに，調整剥片や再生剥片の中には，横長を呈するものがある。石器組成は，ナイフ形石器・彫器・削器・ドリルからなる。また，磨石・たたき石が重要な位置を占める点は注目される。県内の旧石器時代遺跡の中では，これだけの点数が出土したことははじめてのことであり，東日本の中では静岡県池端前遺跡の例が著名であり，東北地方の中では，山形県横道遺跡（加藤稔他1963），岩手県大台野遺跡（菊地強一1975）などの例が知られている。たたき石は，周縁にたたき痕をもつものが多く，この

部分が作業面となっていることを示しているが，用途についてはなかなか判断がつかないもので全体的に面取りのされているものは，ハンマーストーンとしての機能を考案するよりも，むしろ植物質の食料処理や，骨角の断ち割り，骨角器の製作などに用いられたものとも考えられる。１点の，両面に窪みをもつたたき石は，縄文時代に多くみられるクボミ石と何ら大差ないものである。形態の相似が機能の相似を必ずしも示さないことはいうまでもないが，作業面が周縁とともに，両面の窪んだ部分であることは，異なる時代において似かよった用途に用いられたものと推定することもできるであろう。本遺跡出土の磨石・たたき石の用途には，植物質の食料処理や骨角の断ち割りあるいは骨角器製作を十分に考えさせるものである。

ナイフ形石器は縦長剝片を用いて製作されており，側縁の一部に刃部を残し，周縁・先端・基部に調整剝離が加えられており，茂呂系のナイフ形石器として理解されているものである。欠損品もあり多くは判断できかねるが，先端が尖がるように作出されている。背面基部加工はみられないが，先端部の調整剝離の中に錯向剝離がみられる特徴がある。多くは，剝片先端部を石器先端としている。ただ１点だけではあるが細粒凝灰岩製の，幅広の横長剝片を用いたナイフ形石器が１点出土している点は注目されよう。また，石器組成の上で，日本海側の該期遺跡の中で，安定した位置を占めているエンドスクレパーが，全く検出されていない点は特筆される。本遺跡の削器の中には，剝片のバルブを除去して，その部分に刃部を作成するものがあるが，これも特徴のひとつであろう。

県内における旧石器時代の遺跡として代表的なものには，鏡石町成田遺跡・いわき市輪山遺跡・大畑Ｋ地点・桑折町平林遺跡・会津若松市小石ケ浜遺跡・高郷村塩坪遺跡等が知られている。成田遺跡の資料は，周知のように基部を丸く作出する調整加工に特徴があるナイフ形石器を主体としており，山形県岩井沢遺跡（加藤稔他1973）と関連をもつものと考えられる。谷地前Ｃ遺跡のナイフ形石器は茂呂系と考えられるものであり，剝片剝離技術の中には「砂川型刃器技法」（戸沢充則1968）に類するものがみられる特徴がある。こうした特徴を有するものは，周辺地域の中で比較する資料に乏しいが，山形県横道遺跡の資料が本遺跡例と近似しよう。横道遺跡の資料の中にも砂川型刃器技法に類するものがみられるが，石刃技法に基調をおくものが多いように思える。谷地前Ｃ遺跡の中では，真正の石刃技法とされるものは，ほとんどみあたらない。日本海側と太平洋側との石器の系統の大きな差異が背後にあるものと思われる。

これらの遺物は県内においては，耶麻郡高郷村塩坪遺跡との関連が十分に予想される資料である。塩坪遺跡は，昭和46年東北大学考古学研究室・高郷村教育委員会によって発掘調査が行われたが，最近，藤原妃敏氏によって石器の一部が公表された。塩坪遺跡は，以前から茂呂系のナイフ形石器と杉久保系のナイフ形石器が出土していることが報じられていたが，藤原氏によればナイフ形石器は砂川遺跡のものに近似し，砂川型の剝片剝離技術がみられるとのことである。ナイ

フ形石器の中で，剥片の基部を先端としている特徴のあるものに注意したい。塩坪遺跡の資料は，剥片剥離の技術の点で，本遺跡の例に近接したものと考えられるが，本遺跡の剥片剥離技術の中で縦長剥片を得るものと，横長剥片を得るものとが存在している大きな差異が認められる。これは，両遺跡間の差が地域的な系統の差に由来すると考えるよりも，谷地前Ｃ遺跡の石器群が塩坪遺跡のものに先行することを示しているものと考えたい。ナイフ形石器に関しても塩坪遺跡の例は，本遺跡のものよりは後出のものと思われる。今後こうした観点を踏えて，県内未報告資料の切実な公表を望んで，比較検討を行っていきたいと考えている。

第２節　縄文時代の遺構と遺物について

縄文時代の遺物は，主として調査区東端部のローム層上面にわずかに遺存したⅡ層最下面に包含されていた10片程の土器片である。文様の特徴から縄文早期田戸上層式に比定されるが，谷地前Ｃ遺跡がこの時期に何らかの生活の舞台になっていたことは疑えない。遺物採集地点が東端に偏しており，土取り場として破壊された地点に遺跡の中心があった可能性が強い。

中央区遺物包含層のⅡ層下部（ⅡＣ層）からは５片の縄文土器が出土したが，組紐を地文としており縄文前期初頭に比定される。前期初頭にも何らかの関わりを想定せざるを得ないが，実体は皆目不明である。なお遺跡周辺の基本的な堆積土層序区分に関して，縄文時代の遺物包含層はソフトローム面を被う粘性のある暗茶褐色土（Ⅲ層）にあるという大まかな予想をしていたが，今回の調査の所見から見るかぎり，少なくとも早期以降の遺物はⅡ層内に包まれると考えざるを得ない。したがってⅡ層黒色土の形成は，縄文時代以降に進行したものであろうと見て，従来の見解を一部変更しておく。

伴出遺物がなく，確実に縄文時代の遺構とするには判断の材料に欠けるが，土坑底面に２ケ所の小ピットをもつＳＫ11がこの時代の遺構であろうと思われる。平面形・規模などからすれば，同時に検出された後述する古墳時代の土坑に類似するが，底面の小ピットや，遺構内の堆積土が自然堆積状況を呈し，かつ堆積土に基本層序Ⅱ層に比定される黒色土が入り込んでいる点，さらに長軸が南北方向を示すなどの諸要素で，古墳時代の土坑とはやはり区別して考えるべき遺構であろう。構造的な面から見れば，近年「陥し穴状土坑」などと称される，獣の補獲を目的とした陥し穴である可能性が強い。この種の土坑は，郡山市柿内戸遺跡（木本元治他1977），田島町寺前遺跡（玉川一郎他1980）などで類例が知られるようになった他，本遺跡と同時に調査した東村西原遺跡では，溝状ピットとした構造の面で相違点があるものの，「陥し穴」と考えられる遺構例がある。いずれも伴出遺物がなく年代比定が課題として残されているが，柿内戸遺跡では土坑内から縄文前期土器小破片や石器が出土した例もあり，縄文時代の遺構とするのが妥当な見方と

思われる。本遺跡では縄文早期～前期初頭にかけての遺物が周辺から出土しており，現在の時点ではこの時期と関連する可能性が最も強い。西原遺跡の「溝状ピット」の堆積土上半部には，本遺跡ＳＫ11同様に，基本層序Ⅱ層に比定できる黒色土の自然堆積が認められたことを付記しておく。「陥し穴状土坑」は群在するのが一般的なようであり，本遺跡でも調査区域外に数多くの遺構の存在する可能性が充分にある。

第３節　古墳時代の遺構と遺物について

古墳時代に比定できる遺構は，ＳＫ07～10・12・13の６基の土坑である。これらの土坑はいずれも長辺2.5～３ｍ，短辺１ｍ前後の隅丸長方形の平面プランを有しており，遺構内は人為的に埋められたと思われる堆積状況を呈している他，長軸の方位にバラつきはあるが，略東西方向に掘り込まれた共通した特徴がある。こうした特徴から見れば，この種の土坑群が比較的幅の狭い時間内に構築された遺構であると見るのが順当であろう。

全ての遺構に遺物が共伴したわけではないが，ＳＫ09では埋土中に土師器鉢の完形品が納置された状況で出土している。形態や技法上の特徴から見れば，この鉢は佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区の調査で検出された８号住居跡出土の鉢に酷似しており，佐平林式土器の範疇で考えることのできる資料である。したがって，これらの土坑が年代的に幅の狭い間に構築された遺構であろうとの推論が正しい限り，その年代は佐平林式土師器の年代，すなわち６世紀中葉前後の時期が考えられよう。

ところでＳＫ13は，後述するように奈良時代末葉以降平安時代初頭にかけて構築されたと考えられるＳＢ09掘立柱建物跡に破壊された土坑であり，古墳時代の遺構とする可能性の一端を提示した土坑であるが，この土坑だけは底面に１段低い長方形の掘り込みがあり，遺構内にその痕跡はないものの，古墳の内部主体に見られる如く，木棺を納めた可能性が強い。人為的に埋められている点と併せて墓坑と解釈するのが妥当なように思われる。ＳＫ13以外の土坑では底面の段はなく，木棺を埋納した可能性は一段階薄れるが，土坑の規模や人為堆積という点を重視すれば，やはり同様な墓坑として性格を把えたいと思う。同様な例は郡山市教育委員会が調査した阿弥陀壇古墳群（佐藤千春他1978）があり，ここでは検出された23基の中の１基にだけ７世紀初頭～前半の年代の考えられる円頭大刀が出土しているが，大半は副葬品のない墓坑である。

谷地前Ｃ遺跡のこれらの土坑は，調査区の東端の舌状の台地縁辺に集中した分布をしており，土坑間の間隔や周溝のない点などを考慮すれば，封土を有す古墳とは明らかに区別されるものであろうし，副葬品のないことを考えれば，被葬者の身分も，一般集落民に近い人達であったものと思われる。この時期に比定される集落遺跡は西方約300ｍに位置する佐平林遺跡をあげることができるが，地理的にみても，現時点で最も関連する確率が高いのはこの遺跡以外にない。恐ら

くは佐平林遺跡を日常の生産の場とした人々が，死後の基域として選定したのがこの谷地前Ｃ遺跡であり，６世紀中葉前後の墓地として谷地前Ｃ遺跡の土坑群を評価するのも大きな誤りではあるまい。

第４節　奈良・平安時代の遺構と遺物について

谷地前Ｃ遺跡の主たる遺跡の性格は，奈良・平安時代における集落遺跡であることが昭和52年度の調査の段階で明らかとなっていたが，報告の通り，今年度の２次調査でもこの時代の集落の広がりが確認され，多くの遺構と遺物が検出された。これらの遺構や遺物は，谷地前Ｃ遺跡という１つの遺跡の中で歴史的な意義を有するものであり，ここではこれらの成果を踏まえて，前回調査地区と関連づけた考察をしてみたい。

１．奈良・平安時代の遺物の分類

奈良・平安時代に位置づけられる遺物には，土師器・須恵器・鉄器・石製品がある。それぞれについて遺跡全体の中での在り方を検討する。

〔土師器の分類〕

遺物の主体となるもので，前回同様，杯・高台杯・鉢・甕の他に，新たに高台皿・耳杯が追加された。ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものの２群に大別される。

杯　非ロクロ成形の杯（杯Ａ類）とロクロ成形の杯（杯Ｂ類）に分けるのは前回同様であるが，増加類型があるので次のように分類する。

杯Ａ類　非ロクロ成形による杯である。形態上の特徴から次のように細分する。

Ⅰ類　口縁下端に軽い段あるいは沈線による軽い段を有す丸底の杯である。口縁部をヨコナデするもの（Ⅰａ類）とヘラケズリするもの（Ⅰｂ類）がある。

Ⅱ類　口縁下端に軽い段を有し，平底風丸底を呈す杯である。全て破片で出土している。

Ⅲ類　口縁下端がヘラケズリされることによって軽い変換点を有す丸底の杯である。口縁部はヨコナデされる。

Ⅳ類　口縁下端がヘラケズリされることによって軽い変換点を有す平底風丸底の杯である。口縁部はヨコナデされる。

Ⅴ類　体部に段や稜がなく，なだらかに内彎する口縁を有す丸底の杯である。口縁部に幅の狭いヨコナデ痕を残し，下半は底部までヘラケズリされるもの（Ⅴａ類）と，全面ヘラミガキされるもの（Ⅴｂ類）がある。

Ⅶ類　体部に段や稜がなく，なだらかに内彎する口縁を有す平底の杯である。Ⅴ類の技法との特徴と同様にⅥａ類・Ⅵｂ類とに分けるが，Ⅵｂ類は内面だけ黒色処理される

Ⅵｂ$_1$と，両面黒色処理されるⅥｂ$_2$とに細分できる。

Ⅶ類　平底で口縁部が直立する杯である。外面口縁部をヨコナデ，体部をヘラナデする。

杯Ｂ類　ロクロ成形による杯を本類とする。分類は昭和52年度報告と基本的には変化しないが次の２つの要素で分類した。

（底部切り離し技法からの分類）

Ⅰ類　ロクロからの切り離しが，回転ヘラ切りによるもの。

Ⅱ類　ロクロからの切り離しが，回転糸切りによるもの。

Ⅲ類　ロクロからの切り離しが，その後の調整によって不明なもの。

（再調整技法からの分類）

ａ類　回転ヘラケズリが底部全面から体部下端にかけて施されるもの。

ｂ類　回転ヘラケズリが体部下端に施されるもの。

ｃ類　手持ちヘラケズリが底部全面から体部下端にかけて施されるもの。

ｄ類　手持ちヘラケズリが底部全面に施されるもの。

ｅ類　手持ちヘラケズリが体部下端に施されるもの。

ｆ類　回転ヘラケズリが底部全面から体部下端にかけて施された後，底部や体部下端にヘラミガキを加えるもの。

ｇ類　手持ちヘラケズリが底部全面から体部下端にかけて施された後，底部や体部下端にヘラミガキを加えるもの。

以上の２要素から分類される個々の杯は，これらの組み合わせで表記される。今回の資料の中に認められた類型は次の各類型である。

（図化資料）Ⅰｄ類，Ⅱｂ類，Ⅲａ類，Ⅲｃ類，Ⅲｄ類

（破片も含めた資料）Ⅰｄ類，Ⅰｆ類，Ⅱｂ類，Ⅱｅ類，Ⅲａ類，Ⅲｃ類，Ⅲｄ類，Ⅲｇ類

高台杯　確実な高台杯として確認できるのは中央区遺物包含層から出土した１点だけである。低い付高台に，口唇の外反する杯が組み合わさったもので，内面は底部を放射状のヘラミガキ後黒色処理している。これ以外では高台部破片があるが，高台皿との区別が明らかでない。

高台皿　高台皿として明らかなものは，図化した７点がある。器形および技法的な要素から次のように分類した。全てロクロ成形である。

Ⅰ類　低い付高台に直線状に外傾する皿が付加されたもので，口唇部が直立するもの。内面は黒色処理されるが，底部を一方向のヘラミガキするものと放射状ヘラミガキするものとがある。

Ⅱ類　低い付高台に内彎気味に外傾する皿が付加されたもので，口唇部が緩く外反する特徴がある。内面は黒色処理されるが，底部を一方向のヘラミガキするもの，放射状のヘラミ

ガキするもの，調整痕の不明なものがある。皿外面底部は，高台を付加する前段階に回転ヘラケズリ再調整されるものが多い。

耳杯　1点出土している。底部破片であるがロクロ成形であり，内外両面をヘラケズリ後，黒色処理している。高台は低い付高台であり，高台杯・皿に類似した形状を呈す。

鉢　小型甕との区別が明らかでないが，破片では相当な数があるものと思われる。

鉢A類　非ロクロ成形のものである。

Ⅰ類　平底の植木鉢形を呈すもので，外面をヘラナデ調整されるもの（Ⅰａ類）と，ハケメ調整されるもの（Ⅰｂ類）とがある。

Ⅱ類　丸底風平底を呈し，外面をヘラナデ調整されるもの。

鉢B類　ロクロ成形のものである。

Ⅰ類　ロクロ成形で，口縁部が「く」字状に外反する。高さ15cm以下のもの。

Ⅱ類　鉄鉢状を呈し，ロクロ成形後内外面にヘラミガキ調整をうけるもの。

甕　破片状態で出土するものが大半であり，全体的な器形・技法の知れるものが以外と少ない。図化できた資料を中心に，次のように分類する。

甕A類　非ロクロ成形の甕を本類とした。

Ⅰ類　口縁部が緩く外反し，最大径を口縁部にもつ長胴形を呈するもので，外面体部をハケメ調整するもの（Ⅰａ類）とヘラナデ調整するもの（Ⅰｂ類）とがある。

Ⅱ類　体部が球形に近い，丸胴の甕である。外面体部をハケメ調整するもの（Ⅱａ類）とヘラケズリ調整するもの（Ⅱｂ類）がある。

Ⅲ類　口縁部が短く丸みをもって外反する長胴の甕である。体部はヘラナデやヘラケズリ調整をうける。

甕B類　ロクロ成形の甕を本類とした。

Ⅰ類　「く」の字状に外反する口縁を有し，体部をヘラナデ調整するが，口縁部だけロクロ調整するもので，長胴形のもの（Ⅰａ類）と，口縁径が大きく鉢状の器形を呈するもの（Ⅰｂ類）がある。

Ⅱ類　「く」の字状に外反する口縁を有すもので，体部に叩き目を有するもの。

Ⅲ類　「く」の字状に外反する口縁を有し，体部上半をロクロ成形，下半をヘラケズリ調整するもので，口唇部が面取りされるもの（Ⅲａ類）と，水平に外反し口唇部を丸くおさめるもの（Ⅲｂ類）とがある。

Ⅳ類　小型の甕に分類されるもので，高さが20cm以下のものを本類とした。口縁部は「く」の字状に外反し，Ⅲ類と共通した特徴があるが，口唇端が直立気味に引き出される。高さの点で鉢B類と区別される。

〔須恵器の分類〕

破片状態で出土したものが大半である。杯・高台杯・甕の他に硯と思われる異形須恵器があるが，土器類の中では１割に満たない資料である。杯と甕について次のように分類した。

杯　図化できたのは１点だけであるが破片は何片かある。ただし破片は平底杯という以外技法が観察できない破片である。

Ⅰ類　丸底風平底を呈す肉厚の杯である。底部から体部下端を手持ちヘラケズリ調整しており，底・体部の変換点が不明瞭である。体部は直立する。

Ⅱ類　昭和52年度に出土したヘラ切り無調整の杯を本類としておく。

甕　破片は相当あるが，全体形がわかるものは１点だけである。

Ⅰ類　口縁部が直線的に外傾し，口唇下端に凸帯の巡るもので，頸部に２段の波状文がある。

Ⅱ類　口縁部が丸みをもって外反し，体部に平行叩き目を有すもの。

Ⅲ類　口縁部が丸みをもって外反し，口唇部が上下に引き出されたもの。平底で，無文仕上げである。

Ⅳ類　頸部の括れがなく，口縁部が短く外反する鉢形に近いもの。体部は平行叩き目が観察される。

高台杯　底部破片であるが，１点だけ出土している。赤褐色を呈しているが内面に重ね焼きを行った変色部がある。底部はヘラ切り無調整のまま短い高台が付加されている。高台の形態は土師器高台杯・皿に酷似している。

硯　異形の須恵器破片が１点出土している。

〔鉄器の分類〕

破片状態のものを含めて25点の出土があった。内訳は鉄鎌・鉄製紡錘車・刀子・鉄鏃・鉄釘・不明鉄製品である。

鉄鎌　26号住居跡出土の１点だけである。農具としての本遺跡初例となるが，県内の出土例としても数は少ない。

鉄製紡錘車　39号住居跡から出土した１点だけである。

刀子　鉄製品の中では最も出土量が多く，確実なもので７点，茎破片と思われるものを含めると10点前後の個体があるものと思われる。関部の特徴から分類すれば次の通りである。

Ⅰ類　両関の刀子で４点ある。31・36・40号住居跡および９Ａ号建物跡掘形内から各１点ずつ出土している。

Ⅱ類　棟部にだけ関の形成される片関の刀子である。８・19号建物跡掘形内から１点ずつ計２点出土している。

Ⅲ類　刃部にだけ関の形成される片関の刀子である。36号住居跡から１点出土している。

鉄鏃　刃部形態のわかるものが６点あるが，茎部分と思われる破片を含めると10個体前後の資料となる。６点について次のように分類した。

Ⅰ類　無茎長三角形式鉄鏃。24号住居跡出土の１点である。

Ⅱ類　有茎定角式鉄鏃。中央区遺物包含層出土の１点である。

Ⅲ類　棘箆被三角形式鉄鏃。23号住居跡出土１点と表採資料１点がある。

Ⅳ類　棘箆被柳葉式鉄鏃。逆刺のあるタイプである。24号住居跡の１点が該当する。

Ⅴ類　有茎雁股式鉄鏃。31号住居跡出土の１点である。

鉄釘　41号住居跡から確実なものが１点出土している。

不明鉄製品　破片状態の鉄器の大半がこれであるがその多くは刀子および鉄鏃残片と思われる。

〔石製品の分類〕

石製品としては石製紡錘車と砥石がある。資料点数が少なく分類しないが，材質は次の通りである。

石製紡錘車　凝灰岩１点

砥石　絹雲母片岩１点，砂岩１点，粘板岩１点，泥岩２点

以上，今回の調査によって得られたそれぞれの遺物について分類を行った。これらの分類は，基本的には昭和52年度報告内容と大きな相違点がないが，細部で若干の分類基準の変更があり，谷地前Ｃ遺跡全体の遺物相を考察する上では統一的な理解が充分でない恐れがあるので，改めてこれらを今回の分類基準で分類した。こうして分類した土師器の，各遺構内での伴出関係を示したのが第７表である。

２．土師器・須恵器の組成と編年的位置づけ

次に分類されたこれらの資料の中から，本遺跡での奈良・平安時代遺構期区分を行う上で最大の指標となる土師器・須恵器の編年的位置づけを考察したい。

ところで52年度報告の中では，各遺構に伴った土師器杯の技法的特徴を主な要素とし，本遺跡の土師器の様相を，ロクロ成形によらない土師器群と，ロクロ成形による土師器群に２大別し，さらに前者を２段階，後者を３段階に細別したのであるが，今回の調査の結果は，第７表に明らかなように，非ロクロ成形の土師器とロクロ成形の土師器が共伴する遺構が検出されたり，ロクロ成形の土師器の組成などにも前回の区分では本遺跡での土師器のスムーズな変遷が充分に説明できないなどの点が認められるので，今回は住居跡床面出土資料を中心として次の６群土器に分別した。

第Ⅰ群土器　52年度調査の２号住居跡出土遺物に代表される，全て非ロクロ成形の土師器群である。杯ＡⅠａ・ＡⅠｂ類，鉢ＡⅠａ類，甕ＡⅠａ・ＡⅡｂ類の他，６号住居跡の甕ＡⅡａ類も本群土器に含められることは母畑Ⅱで触れた。２・６号住居跡が該当するが，今回調査遺構の中に

は本群土器だけで構成される遺構がない。母畑Ⅱ第Ⅰ群土器である。

第Ⅱ群土器　25・26・27・37号住居跡出土遺物を本群とする。25号住居跡では床面資料の中に，Ⅰ群土器を構成する杯が含まれており，これらの中ではⅠ群土器により近い様相を呈しているが，図化されない床面出土の破片に外面に段のない杯や，底部の中央に平坦面の形成される平底風の底部破片が相当含まれているなど，むしろ27号住居跡出土の土器様相に近いものであり，本群に含めた。杯ＡⅠａ・ＡⅢ・ＡⅤａ・ＡⅤｂ・ＢⅢａ類，鉢ＡⅡ・ＢⅠ類，甕ＡⅠｂ・ＢⅠａ・ＢⅠｂ類などが本群土器を構成する。25号住居跡では須恵器杯Ⅰ類が共伴している。技術的にはロクロ・非ロクロ技術が同時存在している。

第Ⅲ群土器　３・５・23号住居跡出土遺物を本群とする。明らかに平底部分を形成する杯ＡⅥａ・ＡⅥｂ類を特徴とするが，23号住居跡では杯ＢⅡｂ類，甕ＡⅠｂ類の共伴がある。これも技術的にはロクロ・非ロクロが共存している。

第Ⅳ群土器　４・７・13・31・36・39・41号住居跡出土遺物を本群とする。回転ヘラケズリ再調整をうける杯ＢⅢａ類を，ほぼ100％に近い組成とするもので，杯ＢⅢａ類の他，甕ＢⅡ・ＢⅢｂ・ＢⅢ類が共伴している。須恵器では13号住居跡出土のヘラ切り無調整杯の共伴が知られている。母畑ⅡではⅡＡ群土器とした，ものがこれにあたる。

第Ⅴ群土器　８・14・24・30・32・36・38号住居跡出土遺物を本群とする。技法的にはロクロ成形で，回転ヘラケズリ再調整をうける杯ＢⅢａ類と，手持ちヘラケズリ再調整をうける杯ＢⅢｃ・ＢⅢｄ類が共伴するものであり，杯以外では甕ＢⅢａ・ＢⅢｂ・ＢⅢｃ類，鉢ＢⅡ類などが共伴する。母畑ⅡではⅡＢ群土器としたものが本群に該当する。６号土坑でヘラ切り無調整の須恵器杯が共伴した。

第Ⅵ群土器　16号住居跡や今回調査した中央区小ピット出土の土師器などの，底部に回転糸切り痕を残し，体部下端にだけ手持ちヘラケズリ再調整を施す土師器杯を本群の代表的なものとするが，確実な共伴器種が不明である。16号住居跡では高台杯が伴った可能性がある。

以上の６群に大別された土器群は，遺構内での出土点数が少なく，しかも遺構による偏りが顕著なため，一定時期の確実な土器組成とするためには，なお多くの問題がある。しかしながら，これらの土器群は，谷地前Ｃ遺跡での集落の変遷を年代的に跡づける最大の資料であり，不足資料に関しては，他遺跡での調査成果を踏まえて編年的な位置づけを行う。

第Ⅰ群土器は，技法的には非ロクロ成形による土師器群であり，口縁部下端に沈線による段や，軽い段が形成され，内彎する口縁を有する丸頃杯（杯ＡⅠａ・ＡⅠｂ類）を特徴的な構成器種とするもので，最大径を口縁部にもち，緩く外反する長胴甕ＡⅠａ類，球形の胴部を有す甕ＡⅡａ，ＡⅡｂ類，鉢ＡⅠａ類などが組成となる。これらの土師器は，52年度に調査した２号住居跡に典型的な組成が知られるが，今回の調査遺構の中には，本群土器だけを伴出する遺構がなかった。

しかしＳＩ25・27，中央区遺物包含層などでは，本群土器が，後述する第Ⅱ群・Ⅲ群土器などに混在しているものがある。

これらの土器群についての編年的位置づけについては，母畑Ⅱの中で詳述してあるが，杯の特徴などは，広い意味での栗囲式の新しい仲間，あるいは国分寺下層式と称される杯に比定されるものであり，技法的な問題は残るが，桑原滋郎によって分類された，宮城県砂押川出土の杯Ａ（桑原1976）に最も近い資料である。母畑Ⅱではこれらの土器群に年代を与える根拠として，７世紀末葉ないし８世紀初頭に位置づけられる須恵器杯を共伴した宮城県塩沢北遺跡をあげ，本群土器の中でも杯の形態上の特徴が内面に段が残らないなど，いく分後出的な要素を認め，８世紀中葉前後の年代的位置づけを行っている（玉川他1978）。この年代は県内で関和久遺跡の創建期と考えられる，８世紀初頭のロクロ引三重弧文軒平瓦を共伴した矢吹町かに沢窯跡住居跡出土の土師器杯（木本他1977）や，８世紀初頭に比定される須恵器高台杯を共伴した大信村下原遺跡Ａ地点２号住居跡出土土師器（鈴木他1975）などを本群土師器に先行する一群の土器と見る限り，現在でもほぼ妥当な年代ということができよう。

本群土器の類例は，谷地前Ｃ遺跡周辺の石川町達中久保遺跡（大越他1979），板倉前Ｂ遺跡（大越他1979），佐平林遺跡などで住居跡出土資料として知られるようになった。しかし，これらの土器群の中にも明確な実年代を考定できる共伴遺物がなく，年代的位置づけを確定するまでには若干の時間が必要であるが，現在のところ本群土器が谷地前Ｃ遺跡における古代集落の形成時期を示す一群の土器であると見ることができる。類例の知られる上述した遺跡においても土師器の組成は杯・鉢・甕に限定され，高杯や甑が組成から欠落する現象があり，いわゆる古墳時代の土師器の組成とは大きな隔たりが生まれていることを指摘しておく。

第Ⅱ群土器は，土師器杯では第Ⅰ群土器を特徴づけた杯ＡⅠ類が組成の一部を占めており，この点では第Ⅰ群土器との区別が明確でないが，ＳＩ25・27などでは床面出土資料の中には杯ＡⅠ類の確実な伴出がなく，丸底でも体部に段の形成されない杯ＡⅢ・ＡＶａ・ＡＶｂ類が杯の主体となり，図化資料はないものの，平底風丸底を呈す床面出土の杯破片が相当見られるなど，杯が丸底から平底へ移行する過渡的な要素を示す一群である。さらにこれらの中にはロクロ成形による杯ＢⅢａ類，鉢ＢⅡ類，甕ＢⅠａ・ＢⅠｂ類などがセットとして加わる大きな特徴がある。

これら杯に見られる，段が消失する，平底風丸底が形成される，ロクロ成形の土師器が共伴するなどの特徴は，第Ⅰ群土器に比べ型式学的に後出する要素と見ることができるものであろう。杯などの技法的な特徴は広い意味での国分寺下層式土師器に比定することができるが，ロクロ成形の土師器が共伴するものとしては東北地方南半の最も古い一群である。国分寺下層式に比定される土師器にロクロ土師器が伴った例としては大信村下原遺跡７号ピット出土資料が知られていた（木木1978）が，第３編に収録した佐平林遺跡Ⅷ区ＳＩ05・ＳＫ36などでも両者の共伴が確認

されている。佐平林遺跡Ⅷ区ＳＫ36では本群杯ＡⅢａ・ＡＶａ・ＡＶｂ類などと，ＳＩ05では杯ＡⅡ・ＡＶｂ類などに伴出しており組成に若干の時期差が指摘されてはいるが，その内容は本遺跡第Ⅱ群土器に包括できるものである。ＳＫ36ではこれらの土師器群に多賀城で分類された須恵器杯Ｉｂ類（岡田他1975）が共伴しており，多賀城創建期から陸奥国分寺創建時ごろまでの年代が考えられるが，本群土器が第Ｉ群土器よりは後出的な型式学上の特徴を有している点を前提において，８世紀中葉から後半にかけての編年的な位置づけをしておく。

なおＳＩ25床面からは器肉の厚い須恵器杯が共伴している。技法的には多賀城の２ａ類に近いものであるが，相当に在地で生産された可能性があり，これをもって年代を考定するには検討を要すものと考えている。

第Ⅲ群土器は非ロクロ土師器杯でも明らかな平底を呈す，杯ＡⅥａ・ＡⅥｂ類を特徴的な構成器種とするもので，ＳＩ23ではロクロ成形による杯ＢⅡｂ類，甕ＡＩｂ類が共伴している。杯ＡⅥａ類は母畑ⅡＳＩ03で検出され，大信村下原７号ピット資料に類似するものとし，８世紀後半から末葉にかけて関わりをもつ一群と考えられるものである。非ロクロ成形による土師器杯としては最終段階に位置づけることができよう。

第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器はロクロ成形による土師器が組成の中心となる一群の土師器であり，表杉ノ入式として把えられる仲間である。これら３群の土師器の編年的位置づけも母畑Ⅱで詳述し，考え方に変更がないため再論しないが，今回の調査でも遺構の切り合いからこれら３群に相対年代を与えることはできなかった。

第Ⅳ群土器は底部全面から体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整をうける土師器杯ＢⅡａ類が100％近い組成を示すものである。これらは口縁径に対し底径が大きく，内面のヘラミガキが底部を一方向に施す特徴を併せもつものが大半である。一方第Ⅴ群土器は，遺構によっては杯ＢⅢａ類を共伴するが，手持ちヘラケズリ再調整をうける杯ＢⅢｃ・ＢⅢａ類が組成の大きな要素となるものである。そしてこれらの多くは杯ＢⅢａ類に比べ，口縁径に対し底径が小さく，内面のヘラミガキも放射状もしくは痕跡の不明瞭なものとなるなど明らかな相違点を有している。

これら両者に見られる特徴は，一般的に言われるこの時期の須恵器杯の器形の変化に対応するものであり，第Ⅱ・Ⅲ群土器に共伴するロクロ成形の土師器杯が内面を一方向のヘラミガキ調整されたものが大半である点などを考えれば，型式学的にⅣ群→Ⅴ群への相対年代を与えるのは妥当な見方とせざるを得ない。第Ⅳ群土器はＳＩ13で多賀城分類のヘラ切り無調整須恵器杯６ｂ類が共伴しており，ロクロ土師器としては初源的な特徴を認め９世紀初頭，第Ⅴ群土器はＳＫ06で同じく６ｂ類を共伴しているが，底径の小さな６ｂ類であり，後続する一群として９世紀中葉前後の年代を考えるのも母畑Ⅱの通りである。なお第Ⅳ群土器はＳＩ31で外面に叩き目を有す土師器甕ＢⅥ類が共伴しているが，共伴は板倉前Ｂ遺跡１号住居跡でも確認されており，限定される

時期だけに出現する甕であると見ることができよう。

第Ⅶ群土器は遺構内からの確実な出土資料がなく，谷地前Ｃ遺跡の集落内部での位置づけが問題となる土器であるが，10世紀を下るものではあるまい。本遺跡の集落の機能がストップする段階を物語るものとして重要である。

３．土師器に見られた墨書・線刻文字

今回の調査でも土師器杯に多くの墨書・線刻文字が認められた。これら文字の存在は，単に識字階層が実在したことを証明することにとどまらず，遺跡の性格を論ずる資料として重要な遺物と考えられるが，充分な検討ができない。墨書土器では第Ⅱ群土器に伴出した「吾人」，第Ⅳ群土器の「足」など，線刻文字では中央区遺物包含層出土の第Ⅱ群土器に見られる「龍」，ＳＩ42から出土し，第Ⅳ群土器に比定される耳杯に刻まれた「田石川」である。

「龍」は母畑ⅡＳＩ13から２点出土しており，３点目の資料となったが，筆跡など同一人物の手になるものであろう。「田石川」は人名・地名など考えられるものが多いが，古代白河郡における「石川」の地名とすれば，『倭名抄』に見られる「石川郷」を約１世紀さかのぼる文字資料となろう。古代律令制における白河郡とそれを支えた各郷の実体は，なお解明すべき多くの問題があるが，９世紀初頭段階で本遺跡が石川郷に含まれた古代集落であった可能性は大である。今後の検討に期待したい。

４．鉄器・その他の遺物

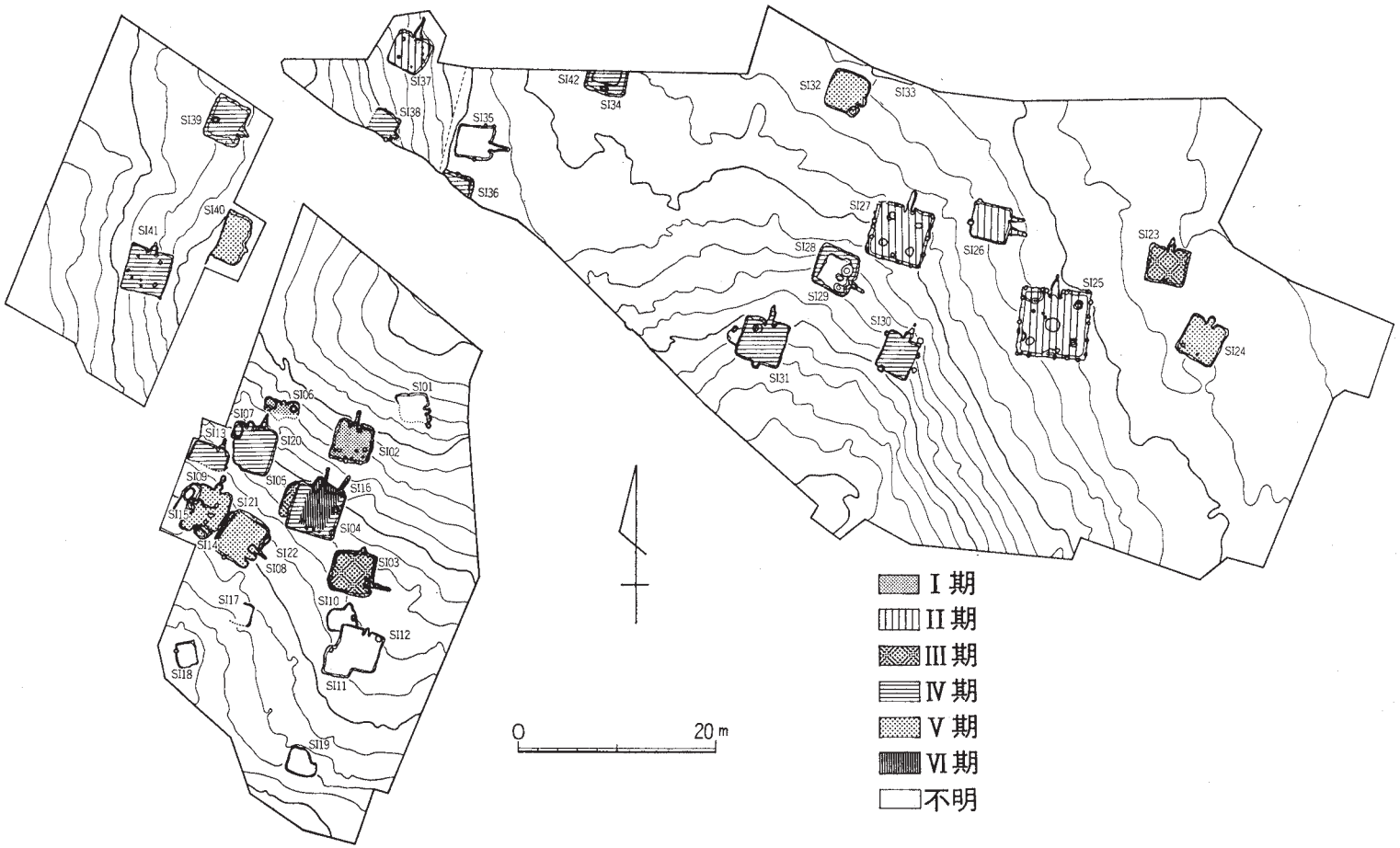
鉄器では鉄鏃・刀子・紡錘車・鉄鎌などが出土したが，52年調査時に出土したものを併せてもその量はわずかである。これらの鉄器類は同時期の他の集落遺跡などで出土する遺物と質・量的に異るものではない。そのうち鉄鏃や刀子などは相当に多くの住居跡から出土しており，集落内でも住居跡単位で所有できたものとも判断されるが，いわゆる農具はＳＩ26出土の鉄鎌１点だけであり，所有形態に相異点があった可能性も考えられる。

５．奈良・平安時代の遺構について

谷地前Ｃ遺跡における奈良・平安時代の遺構は，52年度調査遺構をあわせると，竪穴住居跡42軒，掘立柱建物跡24棟と数基の土坑となる。このうち土坑は確実にこの時代の遺構と判断できるものが少く，集落内での位置づけが不可能であるし，また調査した範囲が遺跡全体の中ではまだまだ部分的なものであり，竪穴住居跡や掘立柱建物跡の集落内部での全体的な位置づけができないという制約もあるが，現時点で考えられる集落の構造について触れておく。

〔竪穴住居跡について〕

42軒の住居跡は，前述した伴出土師器の分類の成果をもとに６期に区分した。ただし確実な共伴遺物のない住居跡もあり，床面出土の土師器破片や，住居跡堆積土出土の遺物なども考慮して時期区分すると次のように分けることができる。



第99図　竪穴住居跡時期区分図

Ⅰ期　第Ⅰ群土器を伴う住居跡（８世紀中葉前後）…ＳＩ02・06

Ⅱ期　第Ⅱ群土器を伴う住居跡（８世紀中葉～後半）…ＳＩ25・26・27・37

Ⅲ期　第Ⅲ群土器を伴う住居跡（８世紀後半～末葉）…ＳＩ03・05・23

Ⅳ期　第Ⅳ群土器を伴う住居跡（９世紀初頭）ＳＩ04・07・13・20・29・30・31・34・36・38・39・41

Ⅴ期　第Ⅴ群土器を伴う住居跡（９世紀中葉）…ＳＩ09・08・14・24・32・40

Ⅶ期　第Ⅵ群土器を伴う住居跡（９世紀後半以降）…ＳＩ16

この他に時期の限定できない住居跡がいくつかあり，52年度調査分については母畑Ⅱで触れているが，今回分についてはＳＩ28がⅣ期と考えられるＳＩ29を切っていることからⅤ期以降に，ＳＩ35は住居跡内出土の土師器破片が全て非ロクロ成形のものであり，Ⅰ～Ⅲ期のいずれかに該当するものと考えられる。各期の特徴を述べれば次のようにまとめることができる。

Ⅰ期　集落形成期であり，遺跡中央の尾根部南斜面に最初の住居が営まれる。北カマドを持つ住居跡であり，２・３軒程度の単位と考えられる。

Ⅱ期　東西の谷頭付近に分散した住居配置をとるらしい。東側のブロックは本遺跡中最大の平面規模の住居跡２軒と小型住居跡１軒の，３軒の住居跡からなるブロックである。

Ⅲ期　尾根部南斜面と東側谷頭の東寄りの２地点に分散する。前者は接近しての２軒のブロックが確実であるが，後者は孤立した立地を示す。

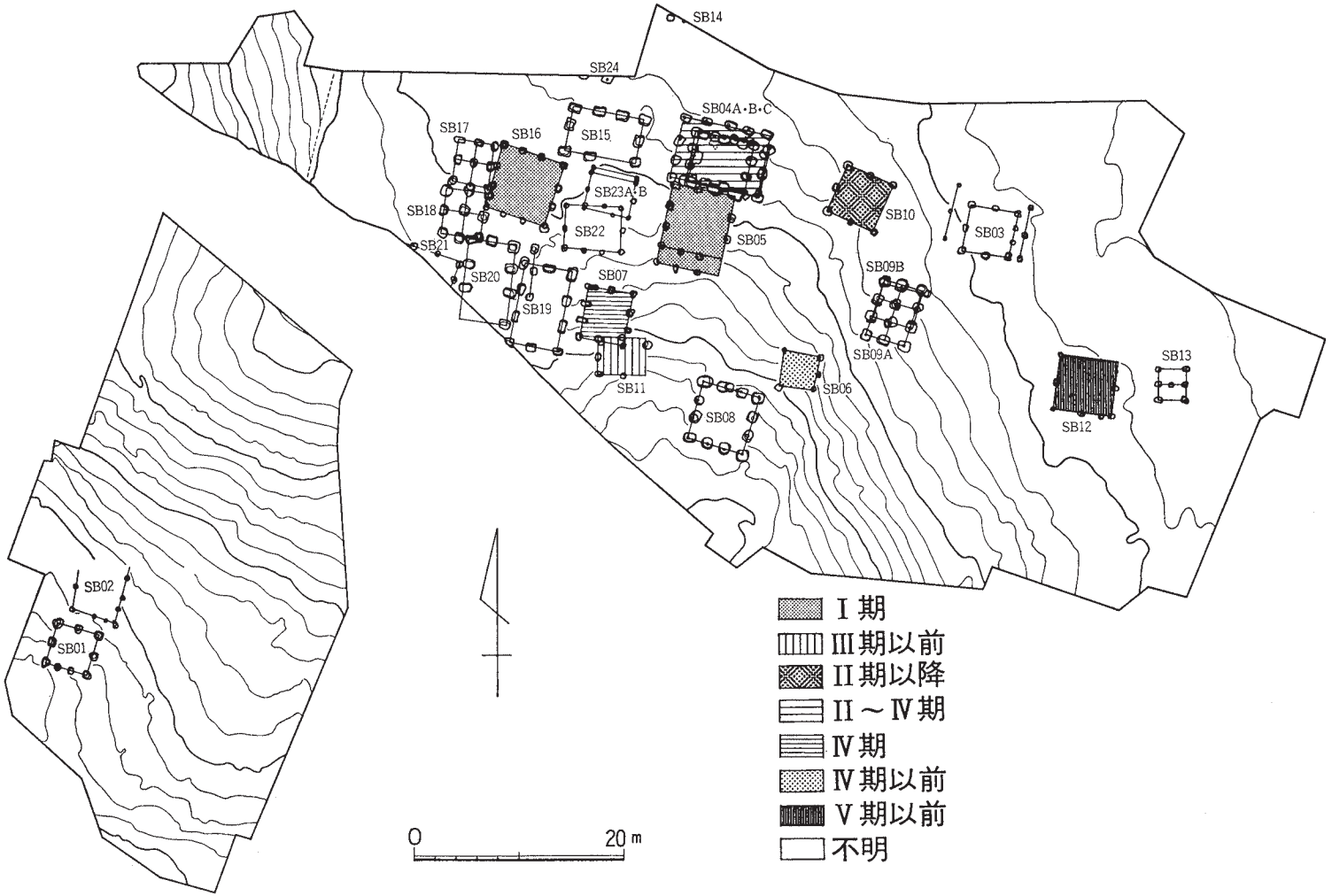
Ⅳ期　１時期としては最も多い12軒の住居跡があるが，ＳＩ07とＳＩ20，ＳＩ34とＳＩ42のように同一地点で重複しており時期差を認めざるを得ない。中央部の屋根部西斜面と東側谷頭部に点在するが，東側谷頭の３軒はⅡ期の住居ブロックの斜面下方に位置し，相似た住居配置をする。

Ⅴ期　７軒の住居跡があるが，Ⅳ期同様に同一地点で重複するものがあり，これも時期差を認めねばならないが，Ⅳ期以前に比べ住居跡がブロック状にまとまらず，点在している。

Ⅵ期　屋根部南斜面のＳＩ16以外，確実な遺構がない。集落としての機能がストップする段階と考えられる。

〔掘立柱建物跡について〕

掘立柱建物跡は全体の規模の判明しないものも含め24棟が検出されている。これらは中央の尾根部南斜面の２棟以外は，東側谷頭付近に集中した分布をする大きな特徴があるが，中でも谷頭西側には重複して建てられた集中地区がある。この集中地区では掘立柱建物跡は重複するものの竪穴住居跡の分布しない地点であり，この点からも集落内部で相当計画的な竪穴住居跡と掘立柱建物跡の選地があったものと判断できる。このことは本遺跡における掘立柱建物跡が，竪穴住居跡と有機的な関連を有す遺構であったことの証左であり，両者が時代を異にする遺構ではなく，ある時期には共存したであろう集落の構成要素と見なければならない。



第100図　掘立柱建物跡時期区分図

ところで掘立柱建物跡はその遺構の性格上，伴出遺物をもって機能した時期を比定することのできるケースは極く稀であり，多くは遺構の切り合いや配置状況などから先後関係を考察しなければならないという制約がある。本遺跡でも同様であり，これらの建物跡全部を竪穴住居跡で考察した６期に区分することはできないが，構造面での共通点を抽出することによって大まかな時期区分を考えたい。構造上の特徴から次のように分類した。

掘形の規模による分類

Ａ群　掘形が一辺50㎝以下のもの　ＳＢ02・03・05・06・10・11・12・13・14・16・21・22・23Ａ・23Ｂ

Ｂ群　掘形が一辺１ｍ前後のもの　ＳＢ01・04Ａ・04Ｂ・04Ｃ・07・08・09Ａ・09Ｂ・15・17・18・19・20

柱間構造による分類

Ⅰ類　１間×２間のベタ柱の建物跡　ＳＢ13

Ⅱ類　２間×２間の中ヌキの建物跡　ＳＢ01・02・03・06・10・11・12・23Ａ・23Ｂ

Ⅲ類　２間×２間のベタ柱の建物跡　ＳＢ09Ｂ・17・18

Ⅳ類　２間×３間の中ヌキの建物跡　ＳＢ04Ａ・07・15・19・20・22

Ⅴ類　２間×３間のベタ柱の建物跡　ＳＢ09Ａ

Ⅵ類　３間×３間の中ヌキの建物跡　ＳＢ04Ｂ・05・08・16

Ⅶ類　３間×４間の中ヌキの建物跡　ＳＢ04Ｃ

さらにこれらは両者の組み合わせで分類すると次の10類型に分類できる。

ＡⅠ類	ＳＢ13	ＢⅢ類	ＳＢ09Ｂ・17・18
ＡⅡ類	ＳＢ02（？）・03・06・10・11・12・22（？）	ＢⅣ類	ＳＢ04Ａ・07・15・19・20
ＡⅣ類	ＳＢ22	ＢⅤ類	ＳＢ09Ａ
ＡⅥ類	ＳＢ05・16	ＢⅥ類	ＳＢ04Ｂ・08
ＢⅡ類	ＳＢ01	ＢⅦ類	ＳＢ04Ｃ

以上分類された各類型は，同一類型で掘形が重複しているものもあり，各類型が一定の時間幅をもって変遷したものとは言えないことは明白であるが，このうちのいくつかは住居跡などの切り合いから，住居跡の６期区分にあてはめることが可能なものもある。先ずＡⅥ類ではＳＢ05がⅡ期に比定されるＳＢ27によって切られている点から，集落形成期のⅠ期の遺構ということができる。ＳＢ16は構造や配置状況から見てＳＢ05と共存した可能性が強い。この点は本遺跡の古代集落が，形成期において既に竪穴住居跡と掘立柱建物跡の共存というパターンが確立していたことを物語るものである。次にＡⅡ類の中ではＳＢ12に不確定な部分があるが，ＳＢ10がⅡ期のＳＩ26を切り，ＳＢ06・11・12がそれぞれⅣ期のＳＩ30・31，Ⅴ期のＳＩ24に切られていることから，ＡⅡ類の多くはⅢ期に比定できる可能性が強い。このように考えると，本遺跡における

掘形規模の小さな掘立柱建物跡は，Ⅰ期からⅢ期にかけて，換言すれば８世紀代に関わりのあった傾向が指摘できそうである。

Ｂ群の掘形規模の大きな建物跡には，遺構の切り合いから時期の限定できるものがない。しかしＳＢ07は掘形埋土中に回転ヘラケズリ再調整をうけたⅣ期に比定できる土師器杯完形品を含んでおり，しかもＳＢ07以外のＢ群の建物跡掘形はⅣ期の土師器は含んでもⅤ期以降の土師器が出土することがない点から見て，大半はⅣ期を中心とした時期に機能した建物跡ではなかろうかと思われる。とすればＳＢ04Ａ・04Ｂ・04Ｃの３回の建て直しや，重複関係にあるＳＢ17・18・19・20などの建て替えが１期内外のうちに進行したと考えざるを得ないが，住居跡の時期区分でも明らかなように，Ⅳ期自体が年代幅を相当に有していると見られる点からして，可能性を否定すべきものでもない。

柱間構造から見るとこれらの建物群はＳＢ09・13・17・18のようにベタ柱構造のものとＳＢ04に代表される中ヌキ構造のものとが知られる。そして中ヌキの建物跡では２間×３間，あるいは３間×４間の平面長方形を呈すものと，２間×２間もしくは３間×３間の平面方形を呈すものとがある。これらの建物跡の機能に関しては判断の材料に欠けるが，ベタ柱の建物跡は官衙遺跡での類例などから倉庫と考えるのが一般的であろう。また中ヌキの建物跡は床面積を見ても竪穴住居跡のそれと比べ同規模か，より上回るものが大半であり，高床式の住居と考えるのが妥当なように思える。掘立柱建物跡の性格を以上のように把えると，具体的な共存遺構は確定できないものの竪穴式の住居と高床式の住居，それに高床式の倉の組み合わせがこの時代の集落の基本単位であったものと規定できよう。

共存を論証する手だてはないが，ＳＢ04は３回の建て替えのあった本遺跡掘立柱建物跡としては３間×４間の最大規模をはかる建物跡であり，これを中心として配置状況を考えると，ある時期の建物配置に１つのパターンのあった可能性が指摘できる。それは東側谷頭付近に位置するＳＢ04と，棟通りを同じくするＳＢ15が東西に並び，谷部両側にＳＢ09・ＳＢ17もしくはＳＢ18が「コ」字状に配された可能性である。これは谷部の最も奥まった地点に高床式の住居と，東西の両側に高床式の倉庫を配したものと換言できるが，それぞれが建て替えをうけたものが多いことなどを考えると確率の高い配置状況と推測できる。ＳＢ04を住居とした集落構成員は，その建物跡の構造から集落内における地位を相当に高度な階層の者であったものと評価したい。

以上谷地前Ｃ遺跡における奈良・平安時代の集落の構造を，竪穴住居跡と掘立柱建物跡の遺構期区分に主眼をおいて考察した。確実なことは，本遺跡における集落が，開始期において竪穴住居と高床構造の住居の組み合わせがあったことがわかるが，その後の両者の有機的な関連をもった変遷については充分に明らかにできなかった面が多い。Ⅳ期・Ⅴ期の土師器の細分の問題などとあわせて，今後の課題としておく。

参 考 文 献

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』東北史学会
戸沢充則　1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊第４巻第１号』東京考古学会
阿武隈川第四紀研究グループ　1968「須賀川―白河付近の第四系」『第四紀№13』第四紀総合研究会
明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団　1969『神奈川県大和市月見野遺跡調査概報』
加藤　稔・佐藤禎宏　1963「山形県横道遺跡略報」『石器時代６号』石器時代研究会
菊地強一　1975「大台野遺跡」『日本の旧石器文化Ⅱ』雄山閣
桑原滋郎　1969「ロクロ土師器について」『歴史38』東北史学会
小林達雄・小田静夫他　1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第４紀研究』第10巻　第４号
藤沼邦彦　1971「塩沢北遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概要（刈田郡蔵王町地区）（宮城県文化財調査報告書第29集）』宮城県教育委員会・日本道路公団
加藤　稔・米地文夫・渋谷孝雄　1973「山形県岩井沢遺跡の研究」『山形考古論集Ⅶ』
岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
馬目順一　1975「仏具壇遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』福島県教育委員会・日本道路公団
鈴木　啓　1975「下原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告（福島県文化財調査報告書第47集）』福島県教育委員会・日本道路公団
桑原滋郎　1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
小笠原好彦　1976「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
高倉敏明　1976「古墳時代の土師器を中心として」『福島県における土師器編年試論』福島県考古学会
木本元治他　1977『関和久遺跡Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第59集）
佐藤千春他　1978「阿弥陀壇古墳群発掘調査」『郡山市埋蔵文化財年報』郡山市教育委員会
木本元治他　1978「柿内戸遺跡」『東北新幹線関係遺跡発掘調査略報Ⅴ（福島県文化財調査報告書第63集）』福島県教育委員会
木本元治　1978「下原遺跡７号ピット出土の土器について」『しのぶ考古７』しのぶ考古学会
玉川一郎・山内幹夫　1978「谷地前Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
宮城県多賀城跡調査研究所　1978『伊治城跡Ⅰ（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊）』
目黒吉明他　1978「佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ（福島県文化財調査報告書第67集）』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
高木和夫・大越忠士　1979「板倉前Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
日高　努・山内幹夫　1979「佐平林遺跡Ⅵ区」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
阿部正行・大越道正　1979「達中久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ（福島県文化財調査報告書第74集）』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
東北学院大学考古学研究部　1979「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故12』
玉川一郎他　1980「田島町寺前遺跡発掘調査概報（福島県文化財調査報告書第87集）』福島県教育委員会

図　版

第1編　西　原　遺　跡

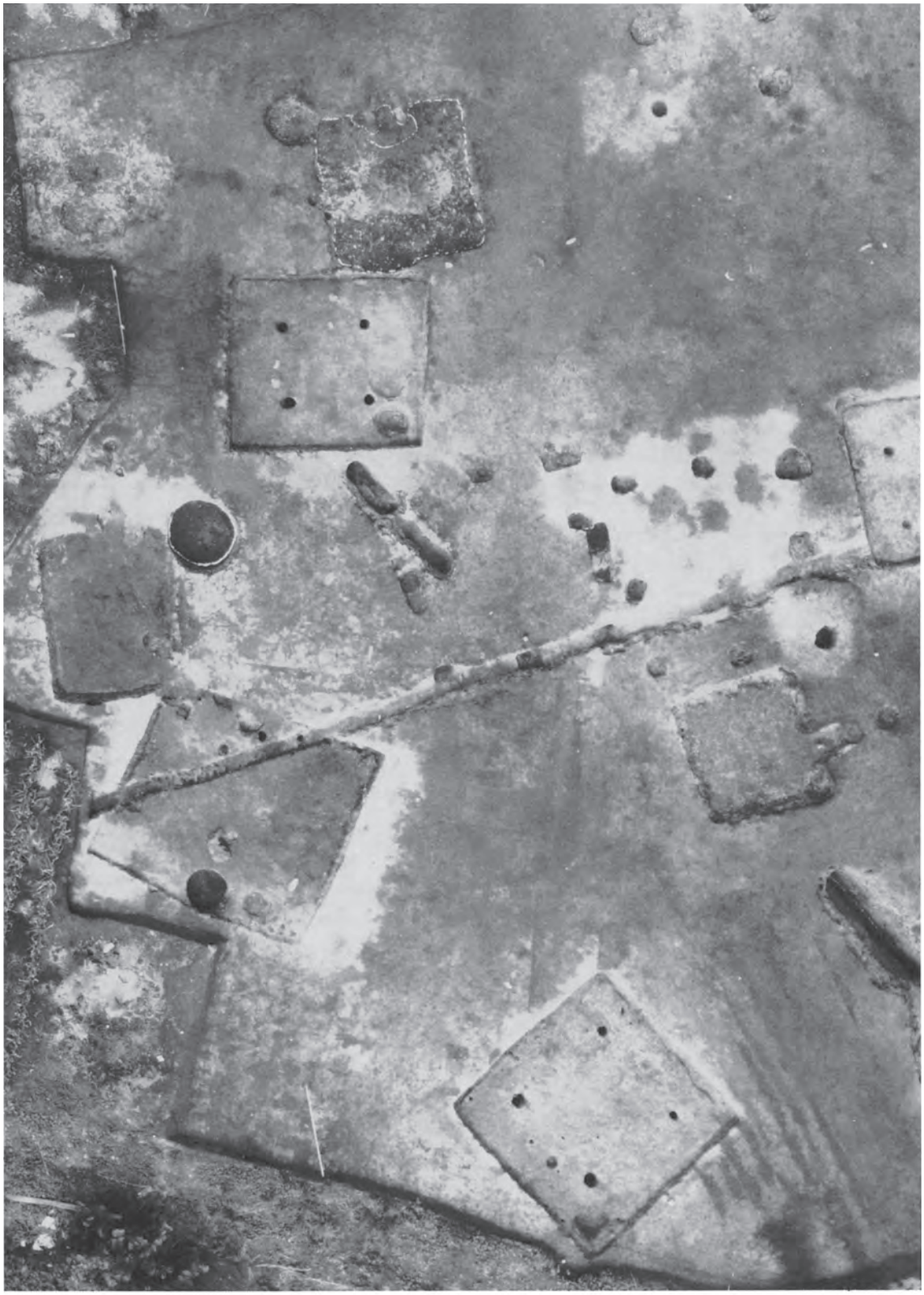
第１編　図版目次

1　西原遺跡遠景（１）…… 3
2　西原遺跡遠景（２）… …… 3
3　西原遺跡全景…… 4
4　西原遺跡調査区西側…… 5
5　１号住居跡検出状況…… 6
6　１号住居跡…… 6
7　１号住居跡内貯蔵穴状ピット…… 7
8　１号住居跡内貯蔵穴状ピットセクション…… 7
9　１号住居跡土師器出土状況…… 8
10　２号住居跡検出状況…… 8
11　２号住居跡…… 8
12　３号住居跡…… 9
13　３号住居跡カマド…… 9
14　３・４号住居跡…… 10
15　５号住居跡…… 10
16　５号住居跡カマド…… 11
17　５号住居跡土師器出土状況…… 11
18　５号住居跡須恵器出土状況…… 11
19　６号住居跡…… 12
20　６号住居跡検出状況…… 12
21　６号住居跡カマド…… 12
22　７号住居跡…… 13
23　７号住居跡土師器出土状況…… 13
24　７号住居跡内ピット（P_6）… …… 14
25　７号住居跡内ピット（P_7）… …… 14
26　７号住居跡内ピット（P_8）… …… 14
27　７・８号住居跡検出状況…… 15
28　８号住居跡カマド…… 15
29　８号住居跡…… 15
30　９号住居跡検出状況…… 16
31　９号住居跡…… 16
32　10号住居跡…… 17
33　10号住居跡カマド…… 17
34　10号住居跡漆器出土状況…… 17
35　11号住居跡…… 18
36　12号住居跡…… 18
37　西原遺跡調査区中央部…… 19
38　１号掘立柱建物跡…… 20
39　２号掘立柱建物跡…… 20
40　３・10号掘立柱建物跡…… 21
41　４号掘立柱建物跡…… 21
42　５号掘立柱建物跡…… 22
43　６・13号掘立柱建物跡…… 22
44　７号掘立柱建物跡…… 23
45　８号掘立柱建物跡…… 23
46　２号土坑…… 24
47　４号土坑…… 24
48　５号土坑…… 24
49　９号土坑…… 25
50　７号土坑…… 25
51　13号土坑…… 25
52　14号土坑…… 25
53　15号土坑…… 26
54　17号土坑セクション…… 26
55　19号土坑…… 26
56　19号土坑セクション…… 26
57　１号住居跡出土土師器…… 27
58　２号住居跡出土土師器・紡錘車…… 28
59　３・４・５号住居跡出土土師器…… 29
60　７号住居跡出土土師器…… 30
61　５・６・８・９・10号住居跡出土土師器・須恵器…… 31
62　３・５・８・10号住居跡出土土師器・須恵器底部と墨書…… 32

1　西原遺跡遠景(1)

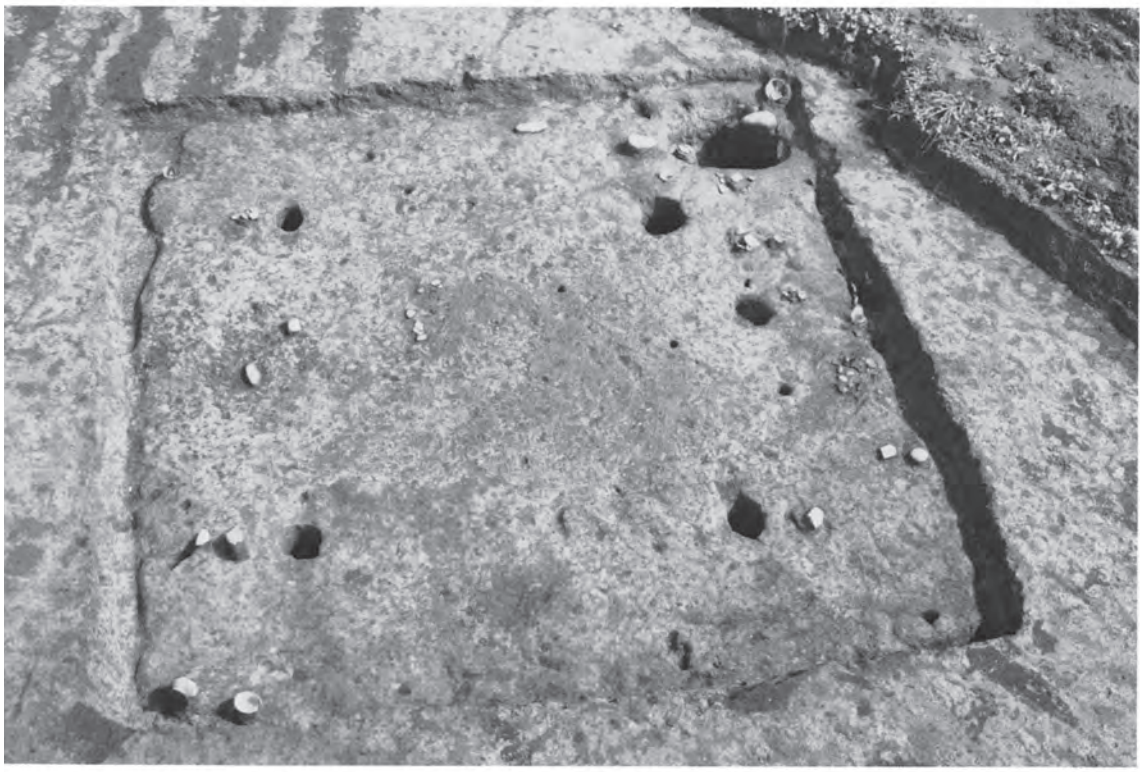
2　西原遺跡遠景(2)

3　西原遺跡全景



4　西原遺跡調査区西側

5　1号住居跡検出状況



6　1号住居跡

7　１号住居跡内
貯蔵穴状ピット

8　１号住居跡内
貯蔵穴状ピットセクション

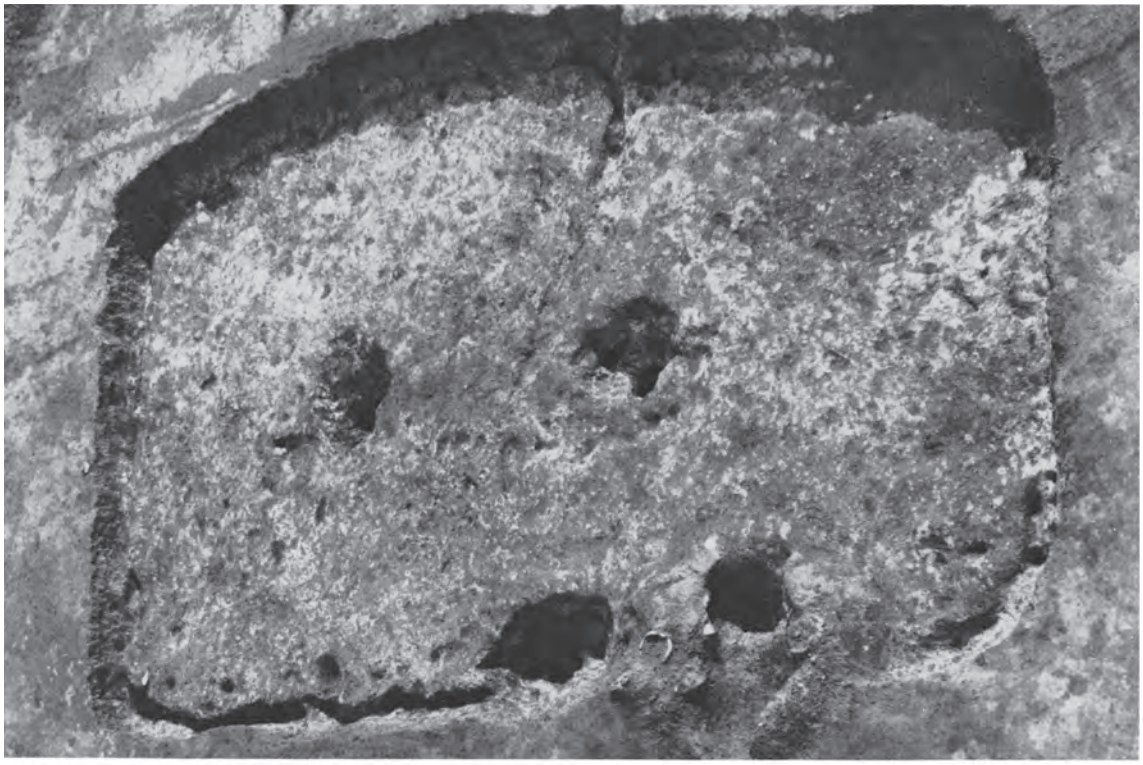
9　１号住居跡
土師器出土状況

10　2号住居跡検出状況

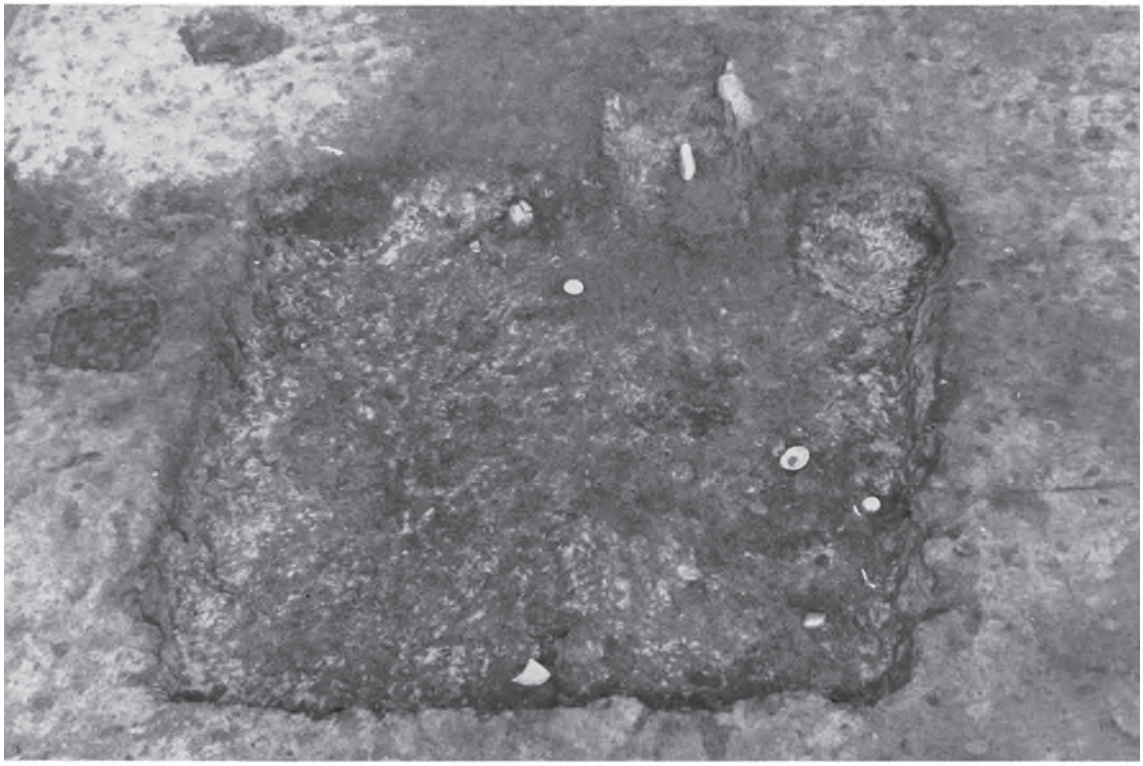
11　2号住居跡

12　３号住居跡

13　３号住居跡カマド



14　3・4号住居跡



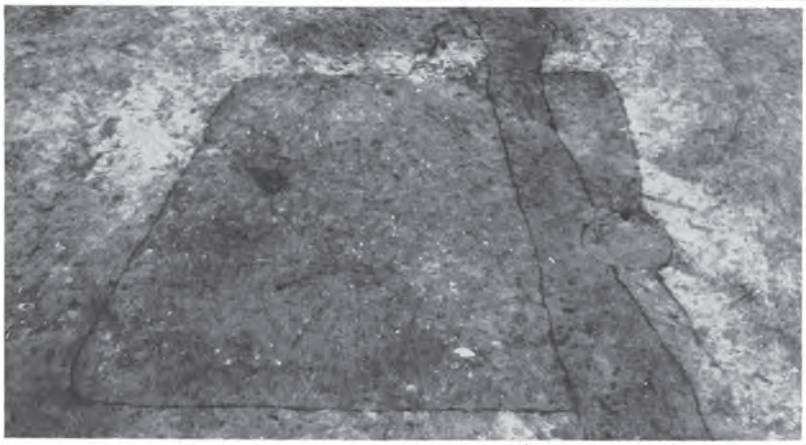
15　5号住居跡

16　5号住居跡カマド

17　5号住居跡
土師器出土状況

18　5号住居跡
須恵器出土状況

19　6号住居跡



20　6号住居跡検出状況

21　6号住居跡カマド

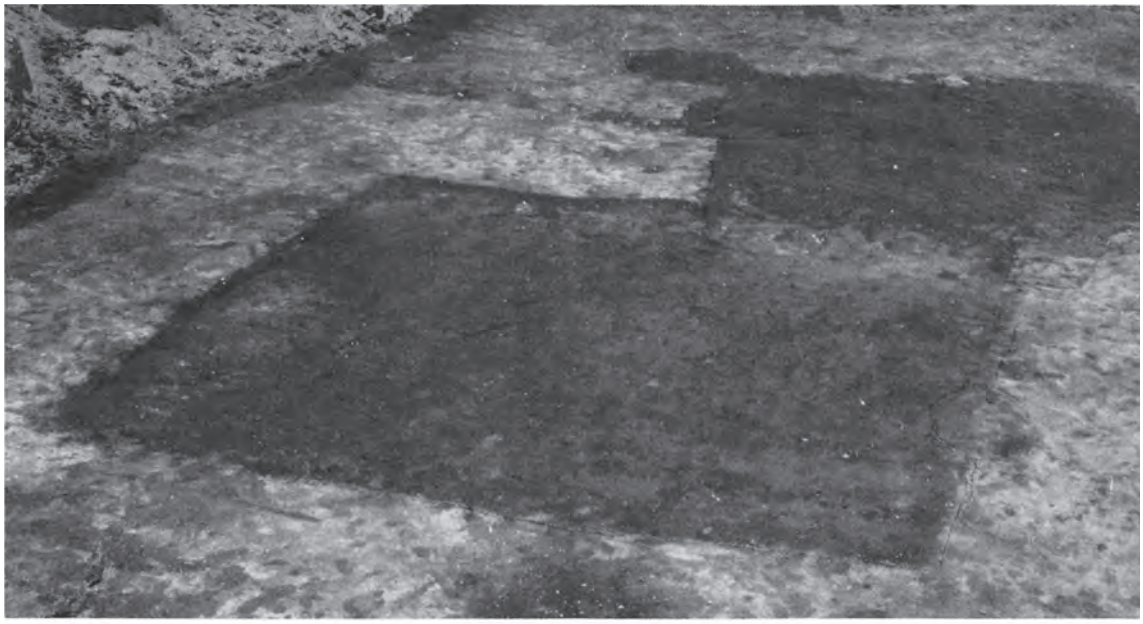
22　７号住居跡

23　７号住居跡土師器出土状況

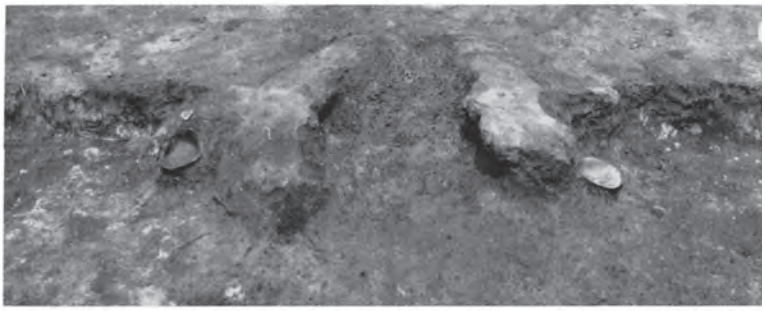
24　7号住居跡内ピット（P6）

25　7号住居跡内ピット（P7）

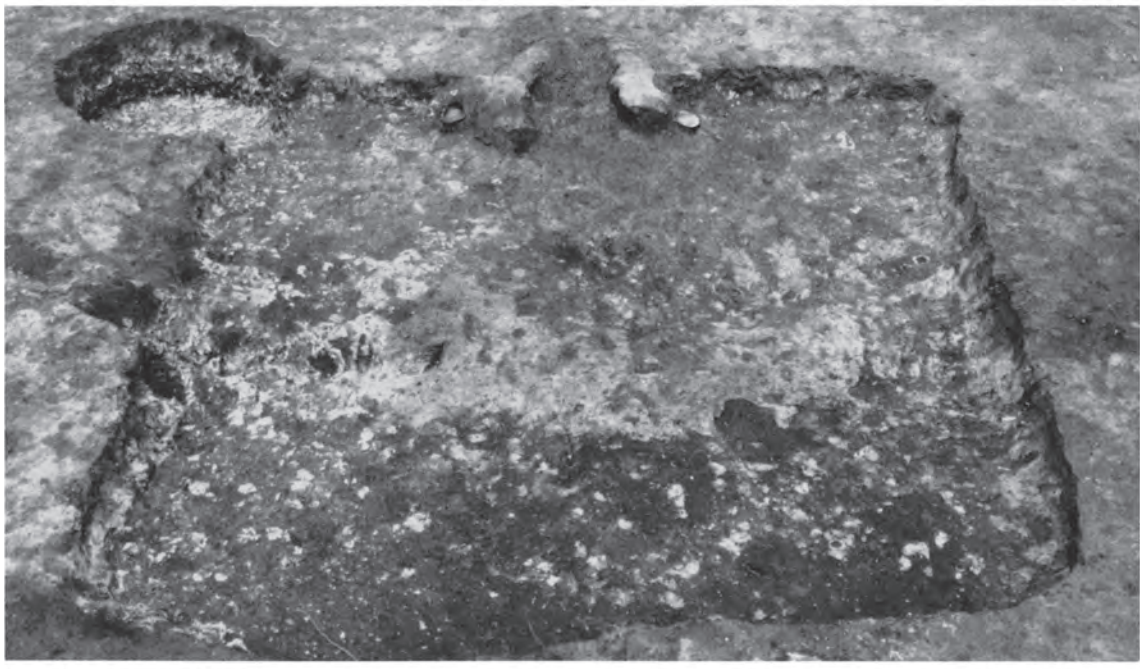
26　7号住居跡内ピット（P8）



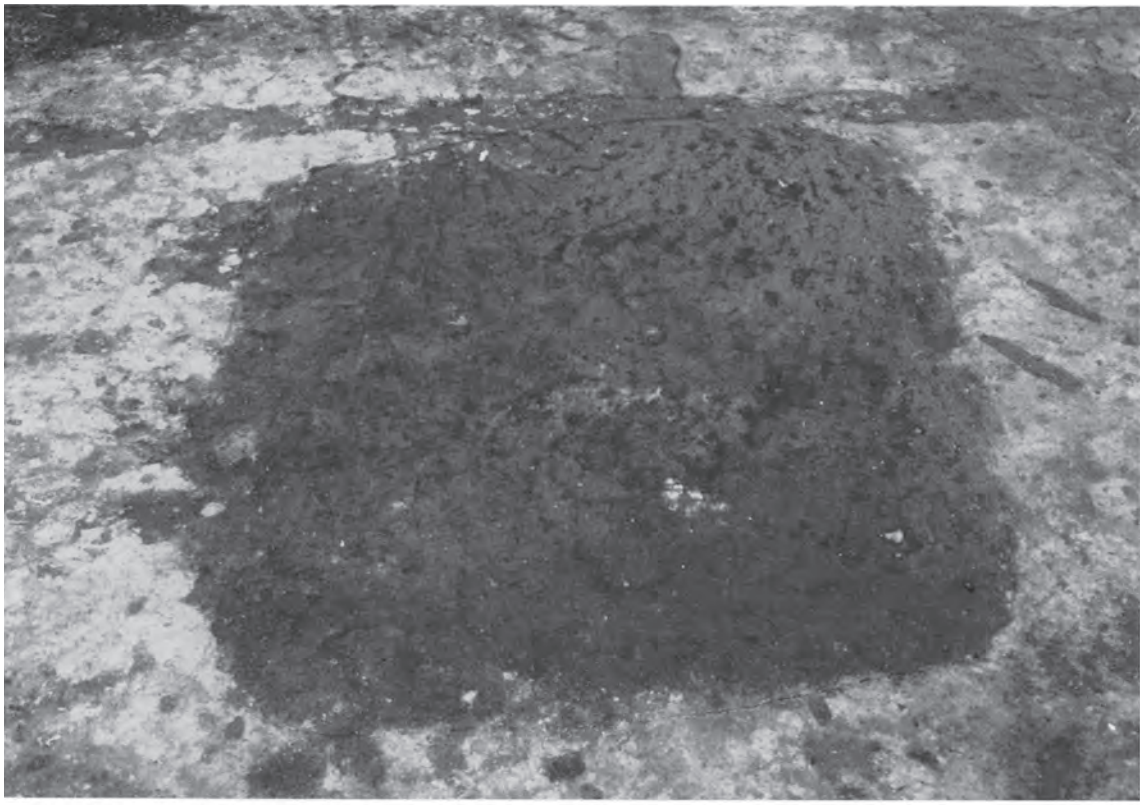
27　７・８号住居跡検出状況



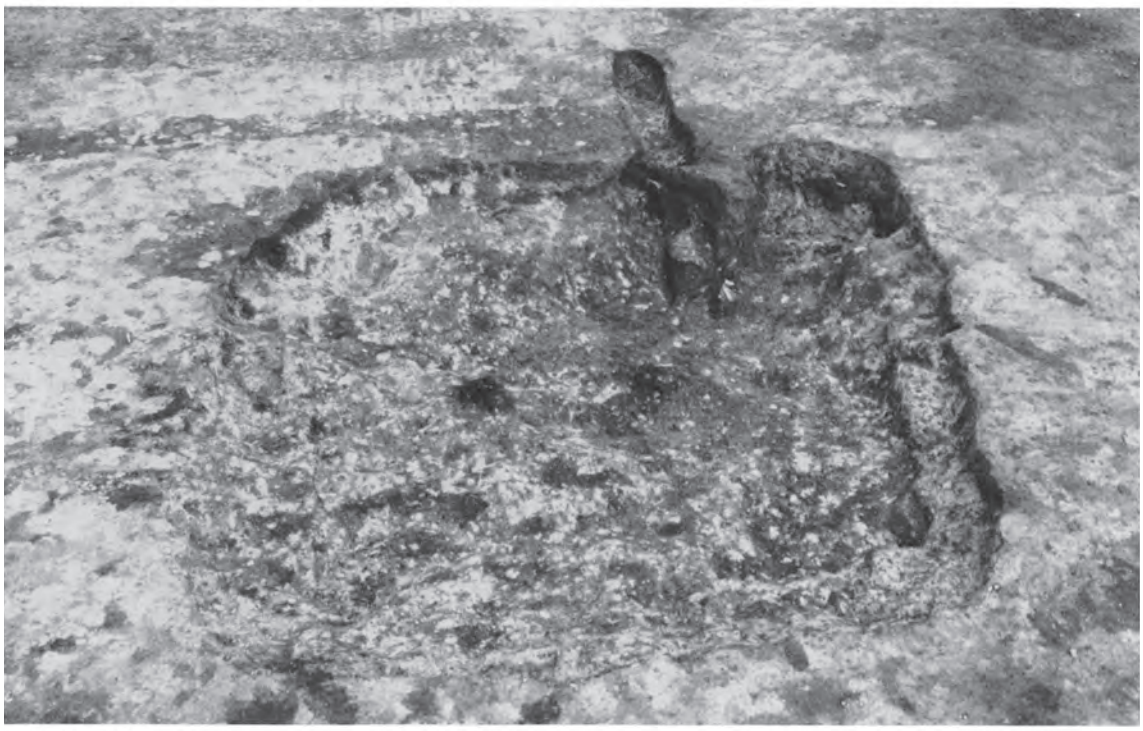
28　８号住居跡カマド



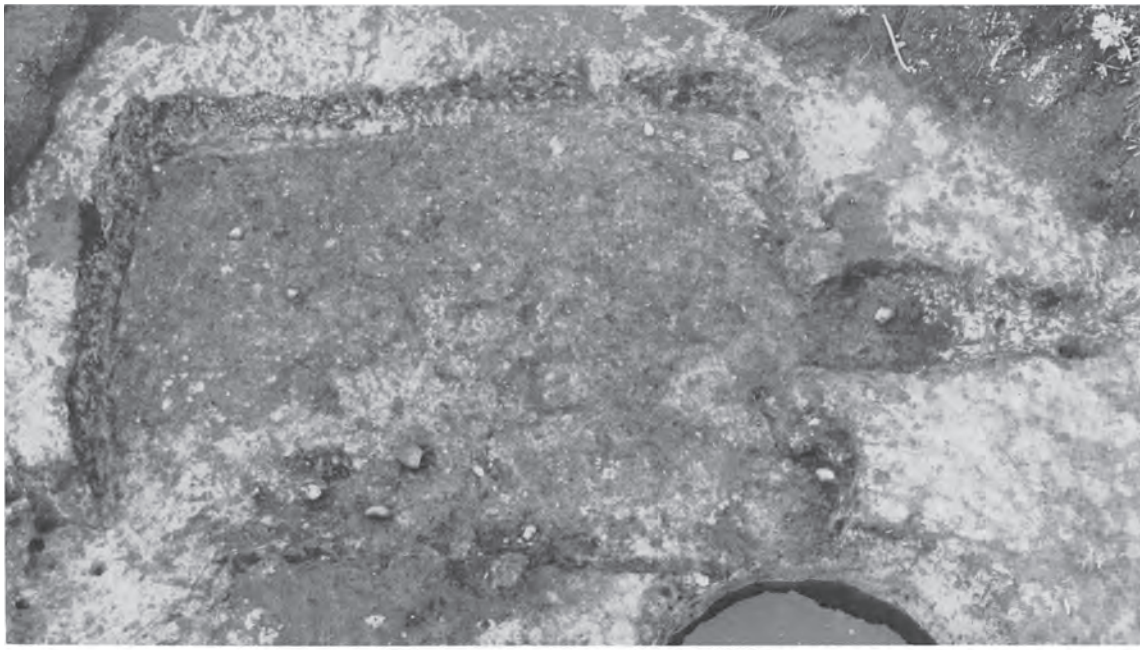
29　８号住居跡



30　9 号住居跡検出状況

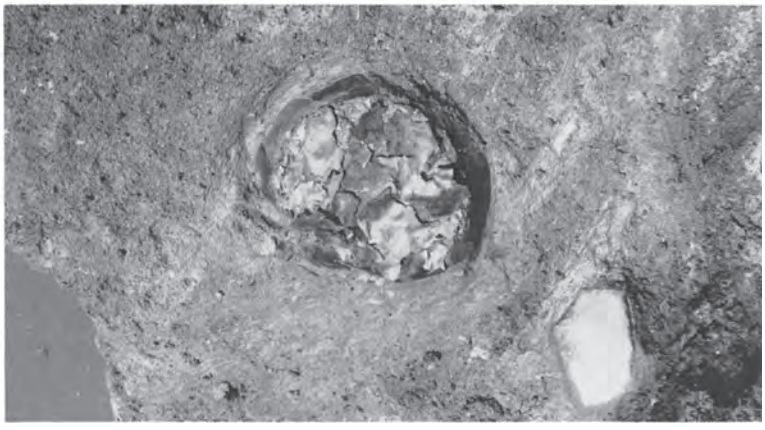


31　9 号住居跡

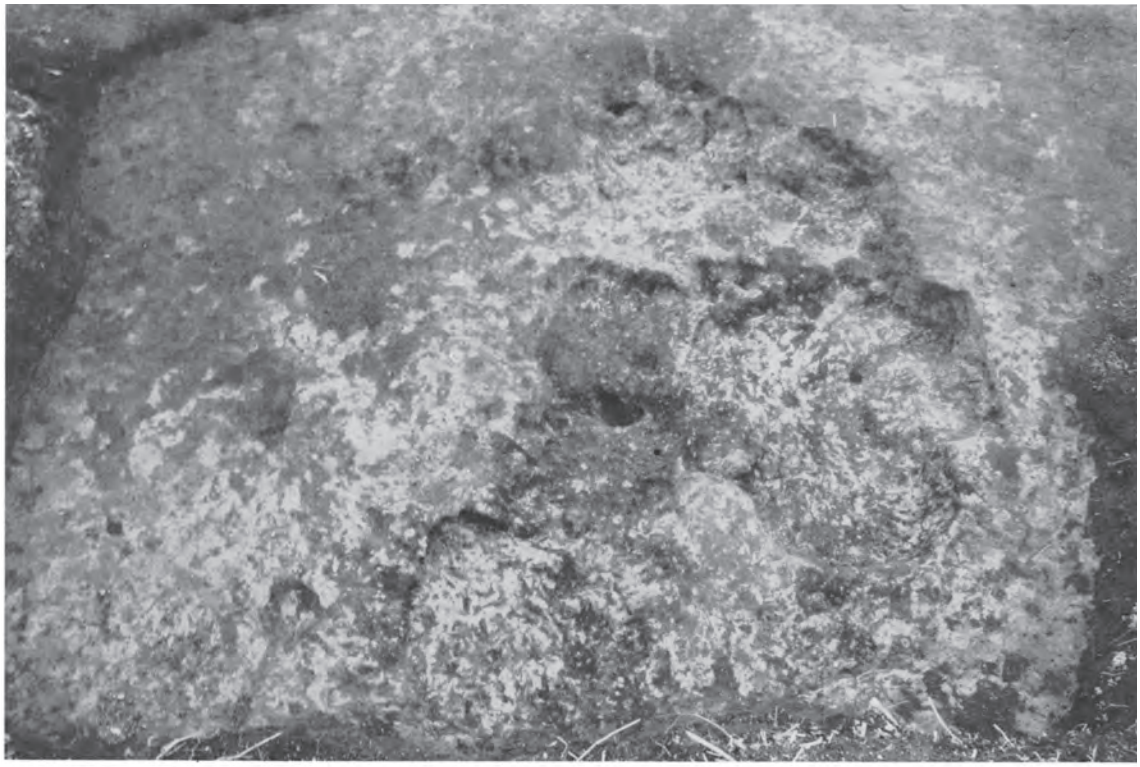


32　10号住居跡

33　10号住居跡カマド

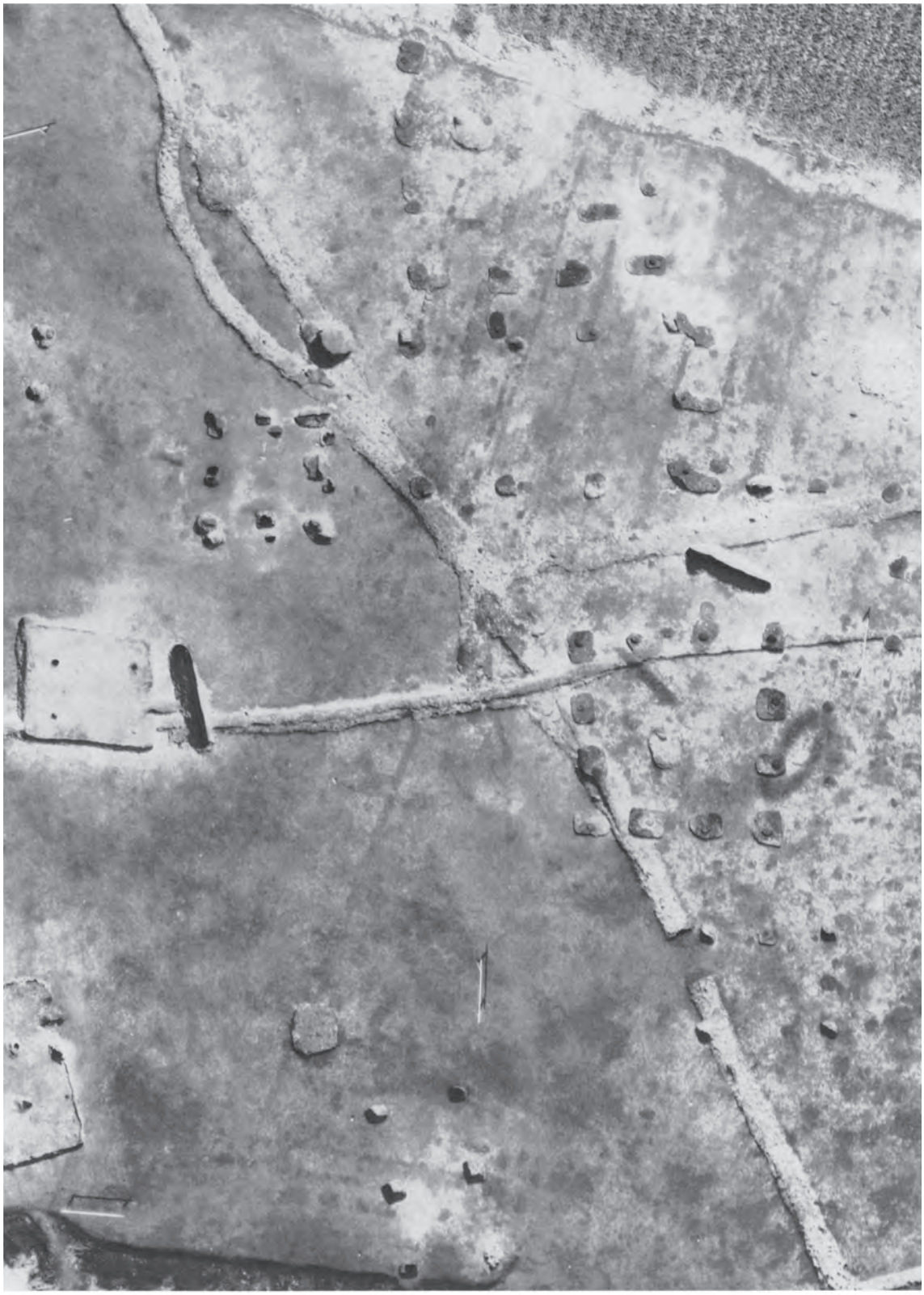


34　10号住居跡
漆器出土状況

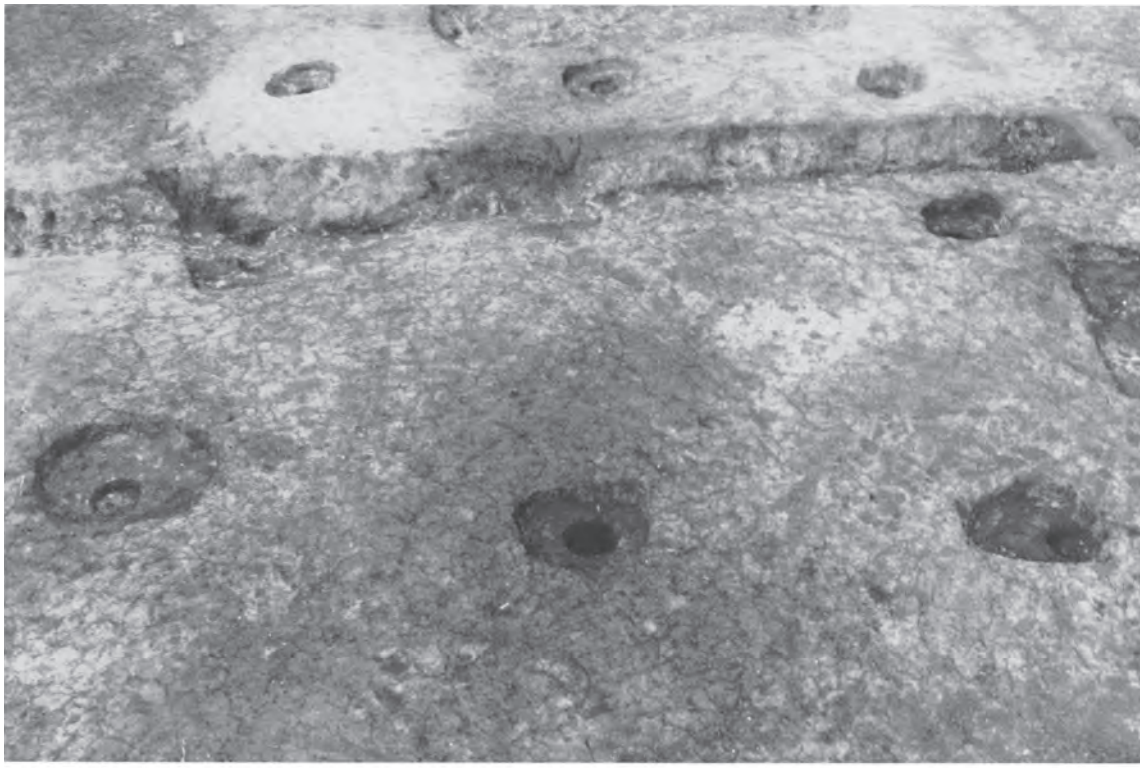


35　11号住居跡

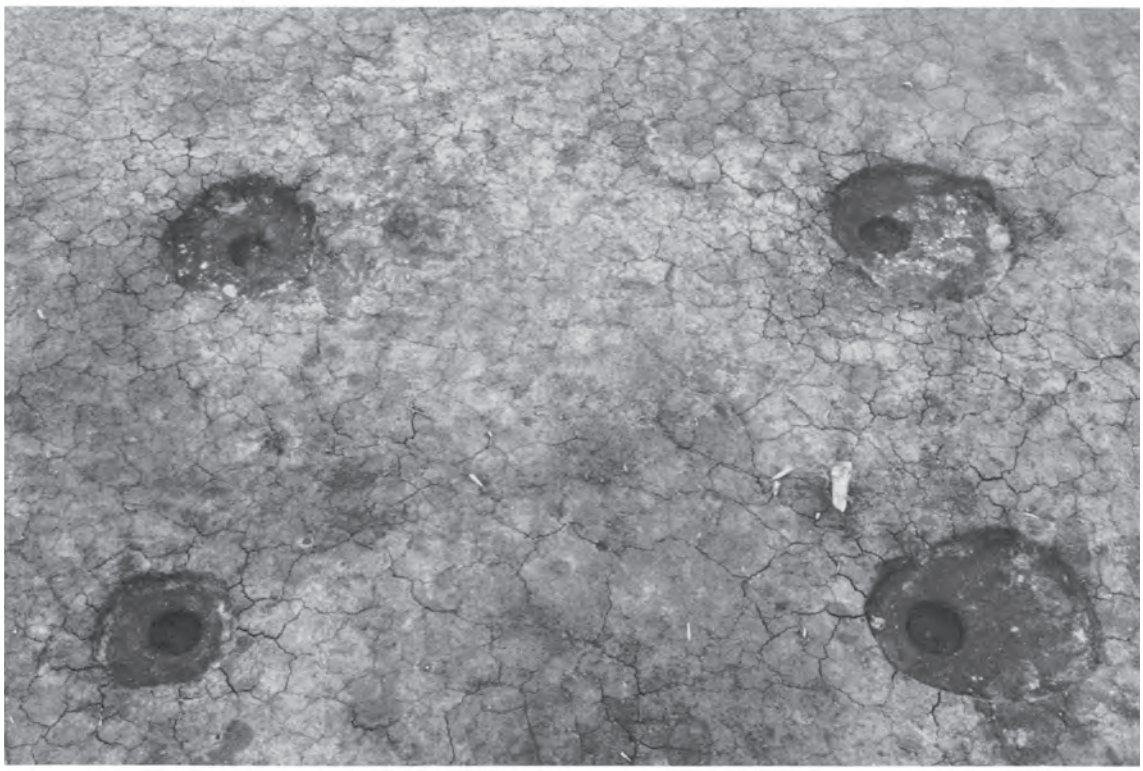
36　12号住居跡



37　西原遺跡調査区中央部



38　1 号掘立柱建物跡



39　2 号掘立柱建物跡

40　3・10号掘立柱建物跡

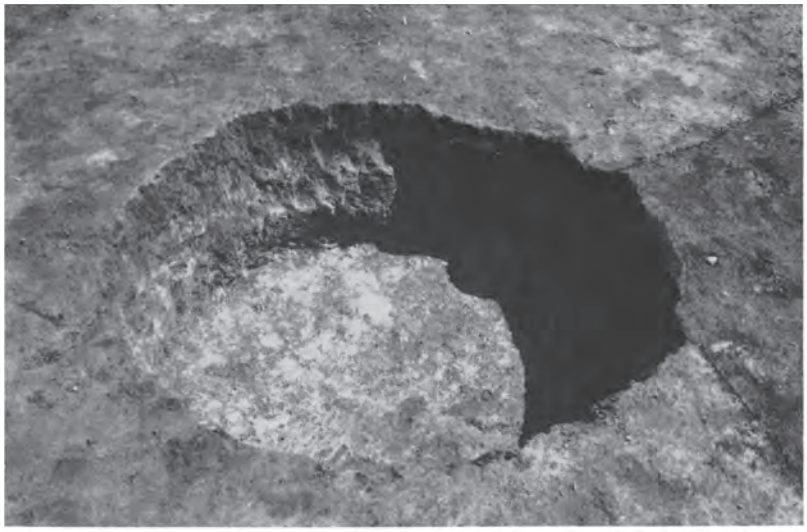
41　4号掘立柱建物跡

42　5号掘立柱建物跡

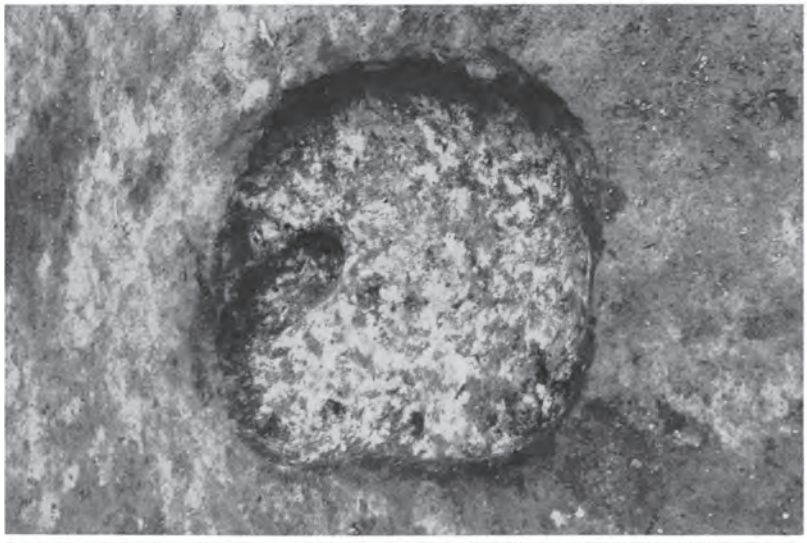
43　6・13号掘立柱建物跡

44　７号掘立柱建物跡

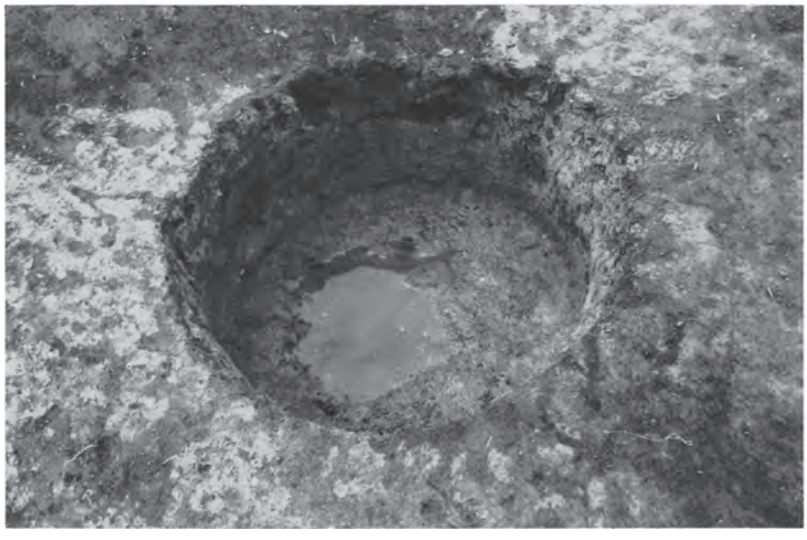
45　８号掘立柱建物跡



46　2 号土坑



47　4 号土坑



48　5 号土坑

49　9号土坑

50　7号土坑

51　13号土坑

52　14号土坑

53　15号土坑

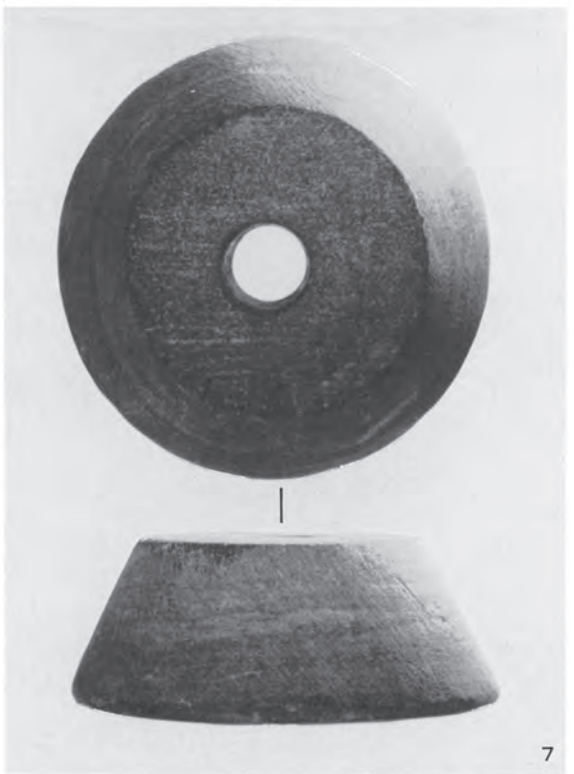
54　17号土坑セクション

55　19号土坑

56　19号土坑セクション

57　１号住居跡出土土師器

１…杯１　２…杯２　３…杯３　４…杯４
５…椀１　６…壺１　７…甕１



58　2号住居跡出土土師器・紡錘車

1…杯1　2…杯2　3…杯3　4…甕3
5…甕2　6…甕1　7…紡錘車

59　3･4･5号住居跡出土土師器

3号住居跡（1…杯2　2…杯1　7…甕2　8…甕3）
4号住居跡（3…杯1）　5号住居跡（4…杯2　5…杯1　6…杯3）

60 7号住居跡出土土師器

1…杯1　2…杯2　3…杯3　4…壺3
5…杯4　6…杯5　7…壺1　8…壺2

61　5･6･8･9･10号住居跡出土土師器・須恵器

5号住居跡（1…須恵器杯1　2…須恵器杯2　3…須恵器杯3）
6号住居跡（9…須恵器甕）　8号住居跡（4…杯1　5…杯2）
9号住居跡（6…杯2　7…杯3）
10号住居跡（8…須恵器高台付杯1）

61　5･6･8･9･10号住居跡出土土師器・須恵器

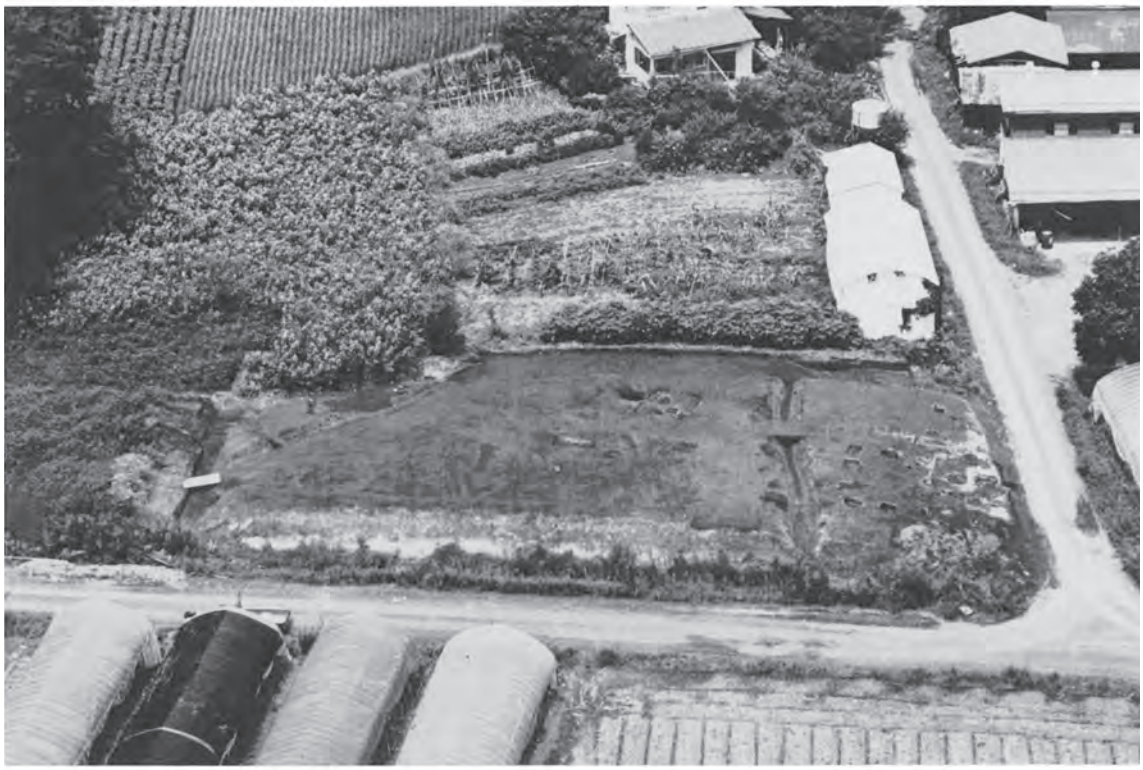
5号住居跡（1…須恵器杯1　2…須恵器杯2　3…須恵器杯3）
6号住居跡（9…須恵器甕）　8号住居跡（4…杯1　5…杯2）
9号住居跡（6…杯2　7…杯3）
10号住居跡（8…須恵器高台付杯1）

第２編　佐 平 林 遺 跡（Ⅶ区）

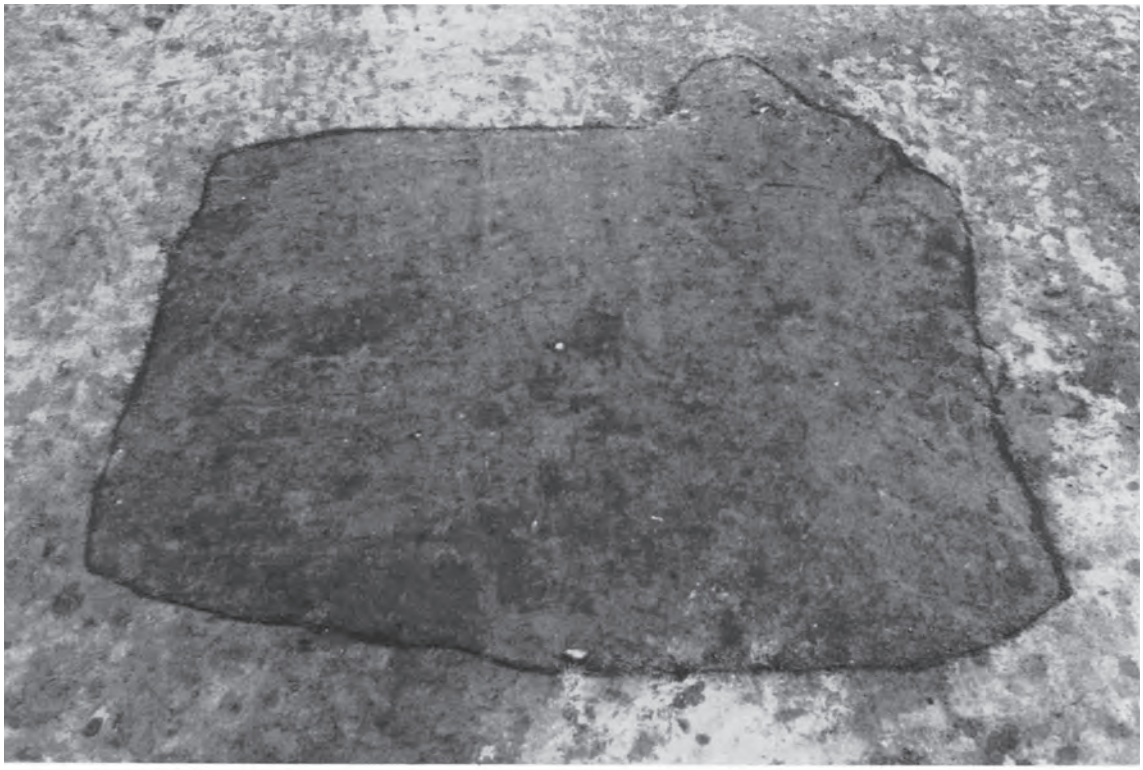
第２編　図版目次

1　佐平林遺跡(Ⅶ区)全景(東より)…… *35*
2　佐平林遺跡(Ⅶ区)全景(南より)…… *35*
3　１号住居跡検出状況…… *36*
4　１号住居跡…… *36*
5　２号住居跡木炭出土状況…… *37*
6　２号住居跡…… *37*
7　３・４号住居跡ピット検出状況…… *38*
8　３号住居跡…… *38*
9　３号住居跡カマド…… *39*
10　４号住居跡カマド…… *39*
11　１号掘立柱建物跡周辺遺構検出状況…… *40*
12　１号掘立柱建物跡…… *40*
13　１号土坑…… *41*
14　２号土坑…… *41*
15　３号土坑…… *41*
16　４号土坑…… *41*
17　２号住居跡，３・４号土坑…… *41*
18　１～４号住居跡出土遺物…… *42*

1　佐平林遺跡（Ⅶ区）全景（東より）



2　佐平林遺跡（Ⅶ区）全景（南より）



3　1号住居跡検出状況

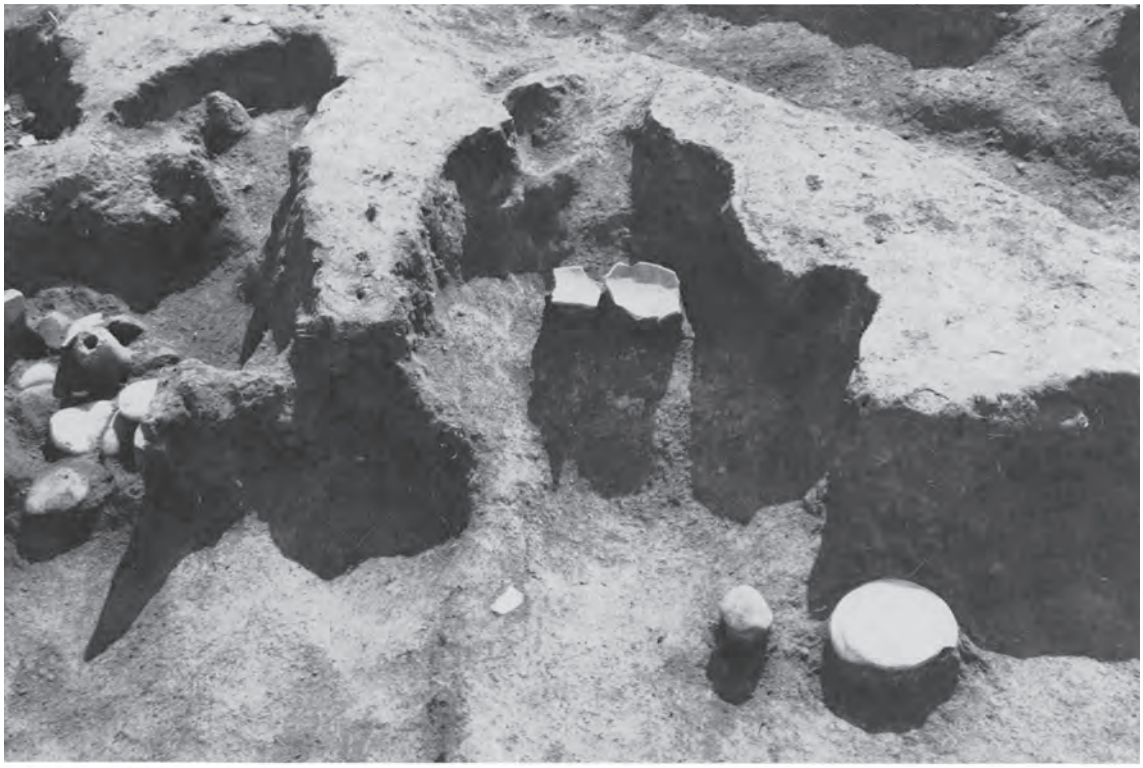
4　1号住居跡

5　２号住居跡木炭出土状況

6　２号住居跡

7　3･4号住居跡ピット検出状況

8　3号住居跡

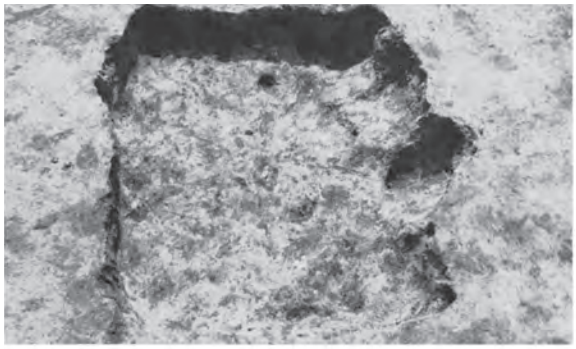


9　３号住居跡カマド

10　４号住居跡カマド

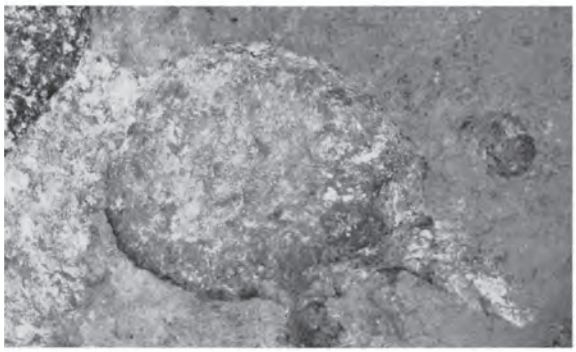
11　1号掘立柱建物跡周辺遺構検出状況

12　1号掘立柱建物跡

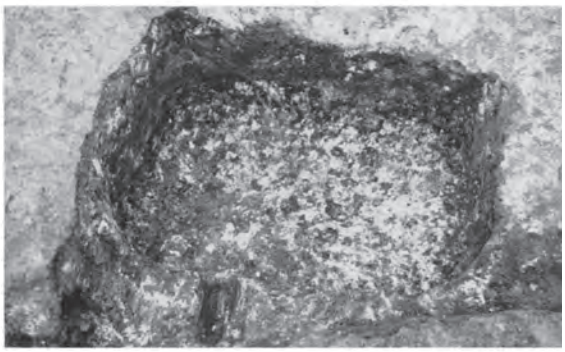


13　１号土坑

14　２号土坑

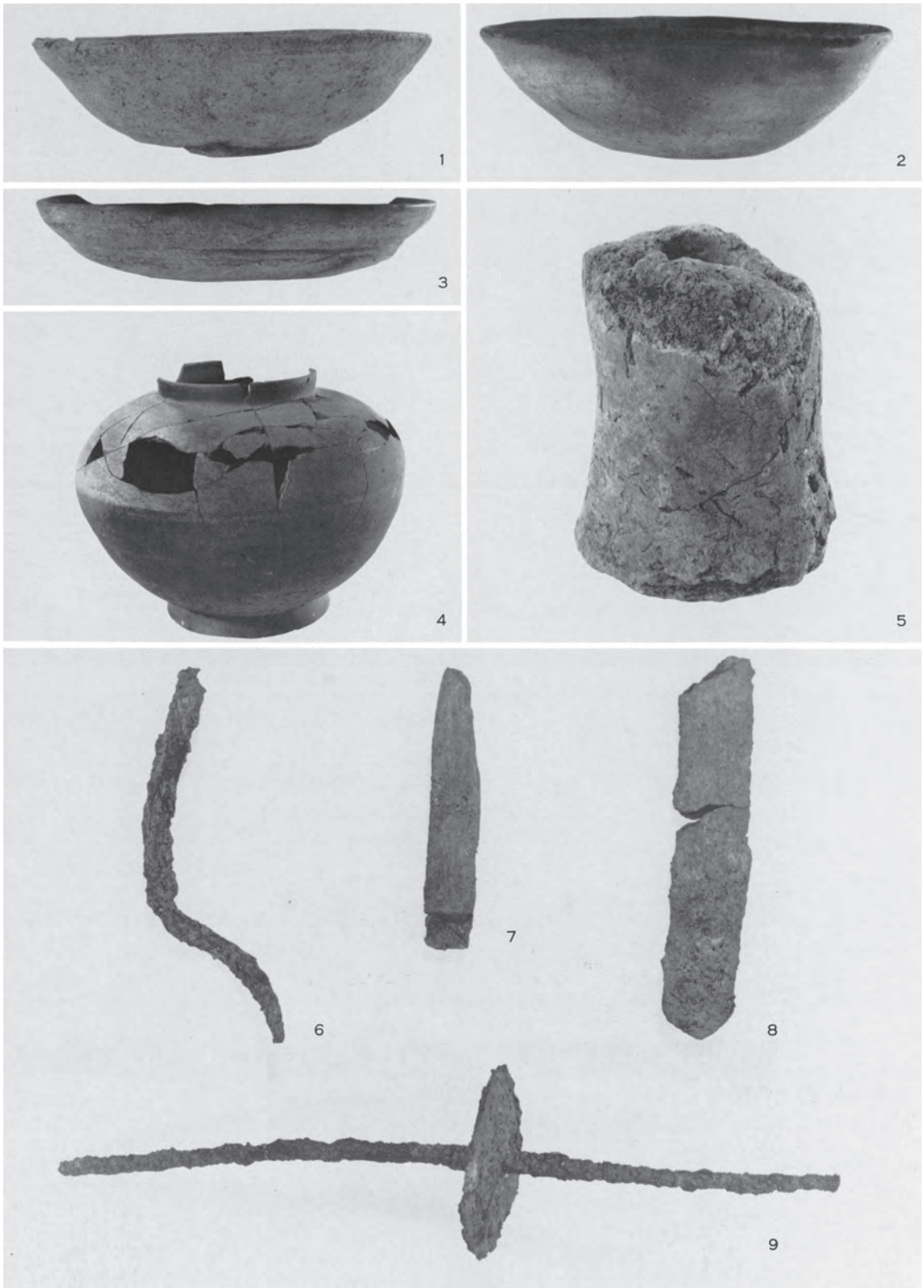


15　３号土坑



16　４号土坑

17　２号住居跡，３･４号土坑



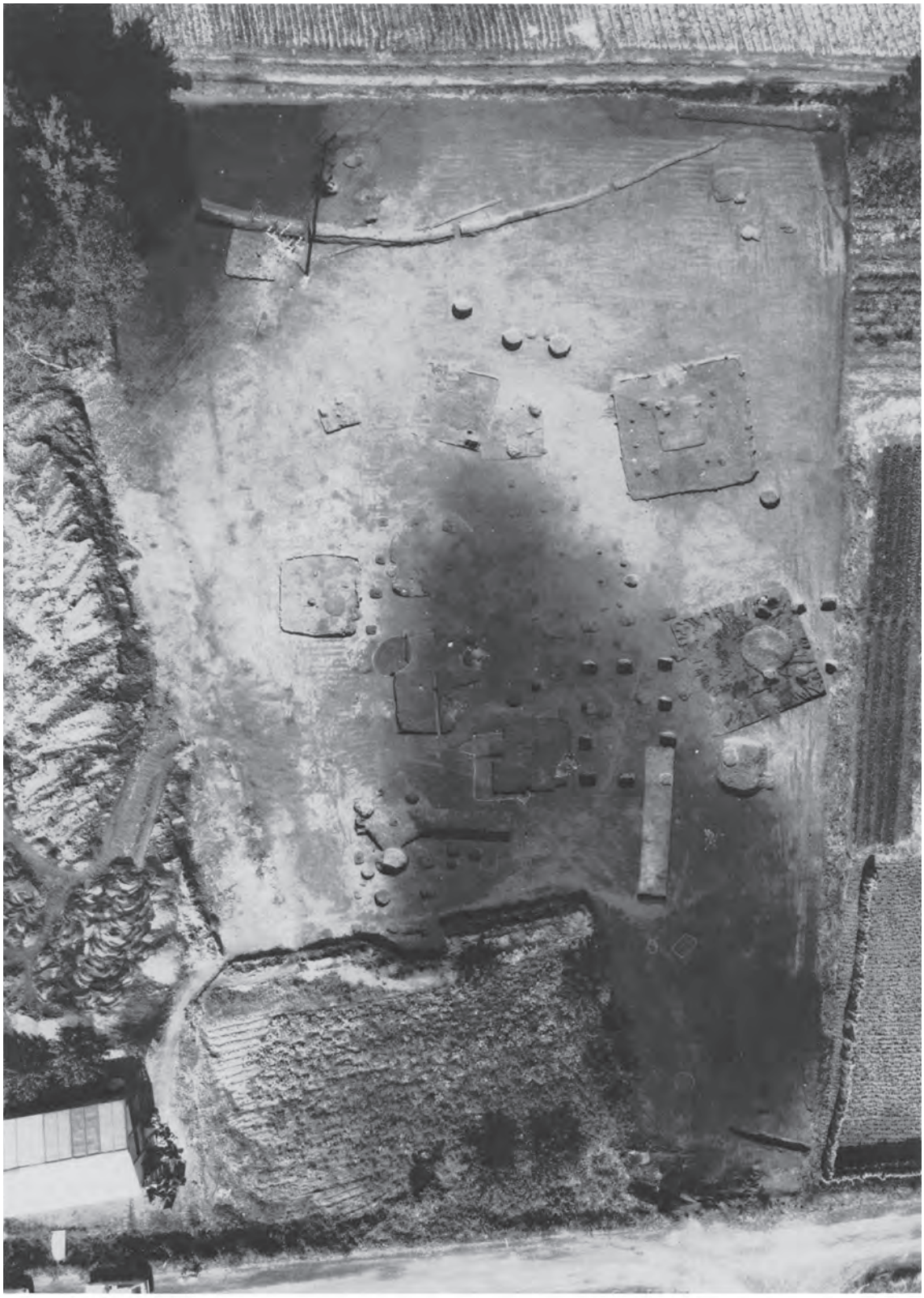
18　1～4号住居跡出土遺物

1号住居跡（1…杯1）　2号住居跡（2…杯1　6…釘　7…刀子
8…用途不明鉄製品　9…紡錘車）　3号住居跡（3…杯1　4…須恵器壺2）
4号住居跡（5…羽口）

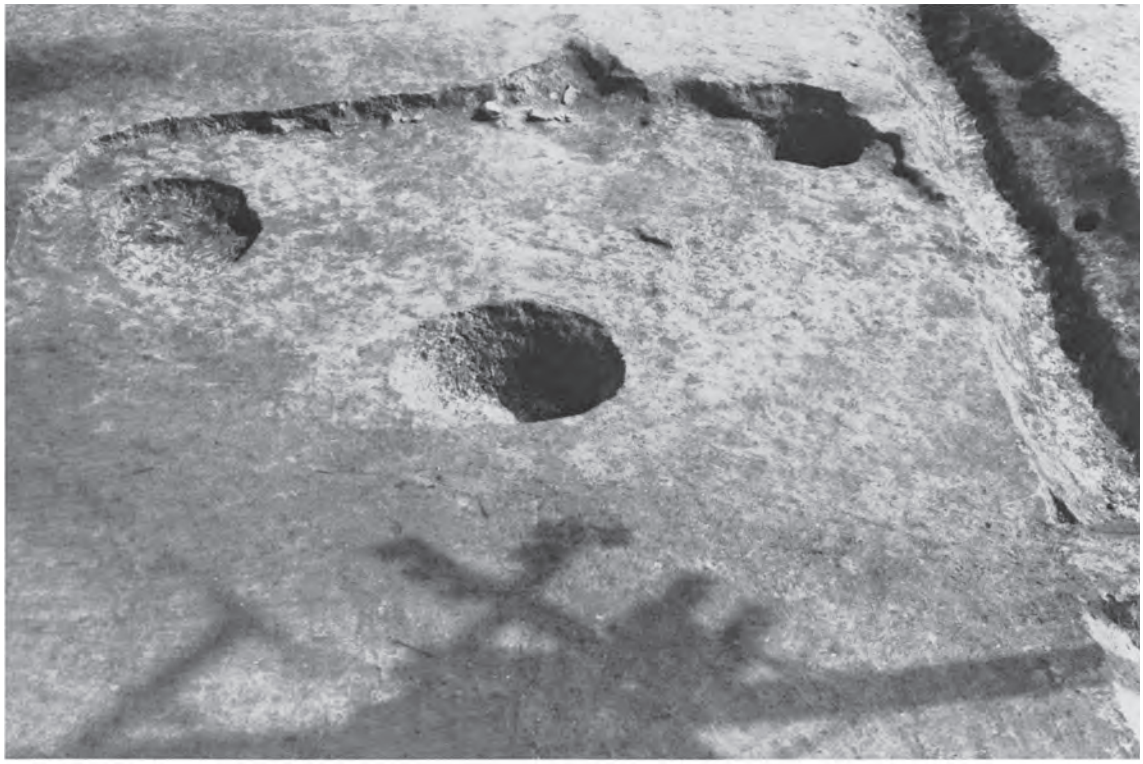
第３編　佐 平 林 遺 跡（Ⅷ区）

第３編　図版目次

1　佐平林遺跡(Ⅷ区)全景…… *45*
2　１号住居跡…… *46*
3　２号住居跡…… *46*
4　５号住居跡…… *47*
5　６号住居跡…… *48*
6　７号住居跡…… *48*
7　７号住居跡…… *49*
8　７号住居跡カマド…… *50*
9　７号住居跡１号ピットセクション…… *50*
10　９号住居跡…… *51*
11　10号住居跡…… *51*
12　11号住居跡…… *52*
13　12号住居跡…… *52*
14　13号住居跡…… *53*
15　14号住居跡…… *53*
16　21号住居跡…… *54*
17　21号住居跡カマド…… *54*
18　21号住居跡内張り出しピット…… *55*
19　１号掘立柱建物跡…… *55*
20　１号掘立柱建物跡…… *56*
21　２・３号掘立柱建物跡…… *57*
22　４号掘立柱建物跡…… *58*
23　５号掘立柱建物跡…… *58*
24　５・６号掘立柱建物跡…… *59*
25　７号掘立柱建物跡…… *60*
26　８号掘立柱建物跡…… *61*
27　９号掘立柱建物跡…… *61*
28　各土坑全景及びセクション…… *62*
29　２・３・４号住居跡出土土師器…… *63*
30　５号住居跡出土土師器・須恵器…… *64*
31　６・７号住居跡出土土師器…… *65*
32　７号住居跡出土遺物…… *66*
33　７・９・10号住居跡出土土師器・石製品…… *67*
34　10～13号住居跡出土土師器・紡錘車…… *68*
35　15・16・19・21号住居跡出土土師器…… *69*
36　21号住居跡，１・27号土坑出土土師器…… *70*
37　３・36号土坑，表土出土土師器…… *71*
38　36・39号土坑出土土師器・須恵器…… *72*
39　Ｅ－６グリッド出土土師器，住居跡内出土墨書土師器…… *73*
40　佐平林Ⅷ区出土帯金具・鉄製品……74



1　佐平林遺跡(Ⅷ区)全景



2　1号住居跡

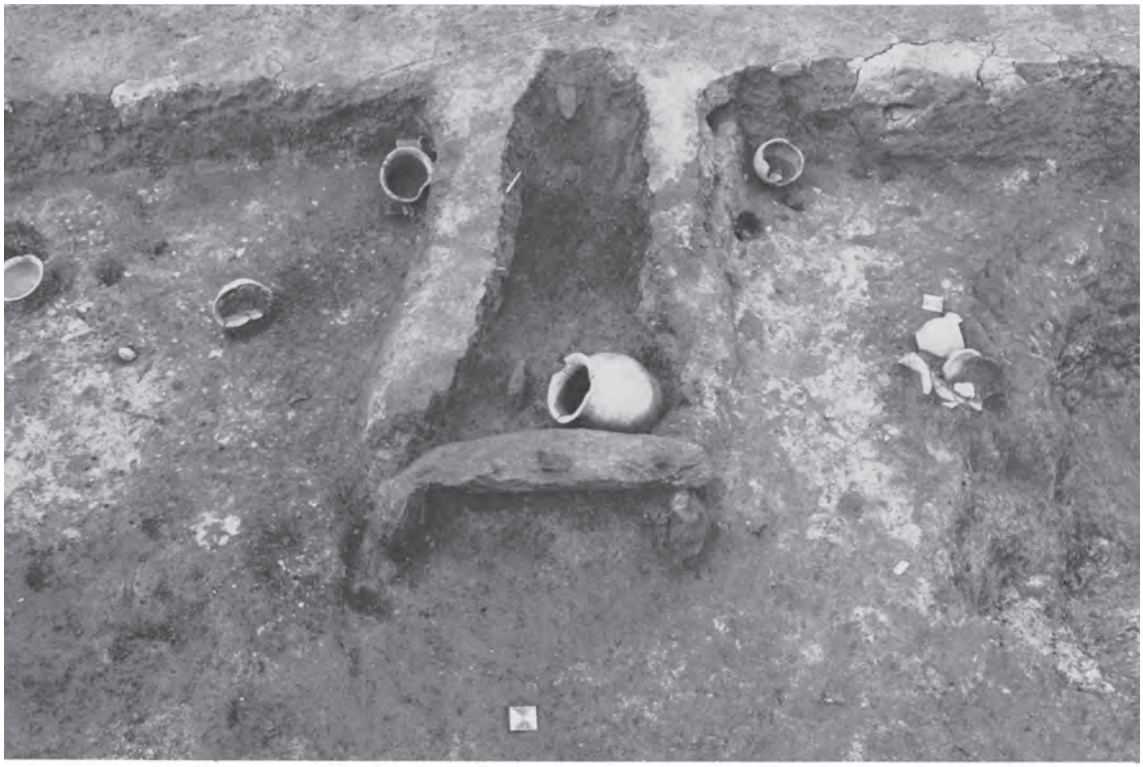
3　2号住居跡

4　５号住居跡

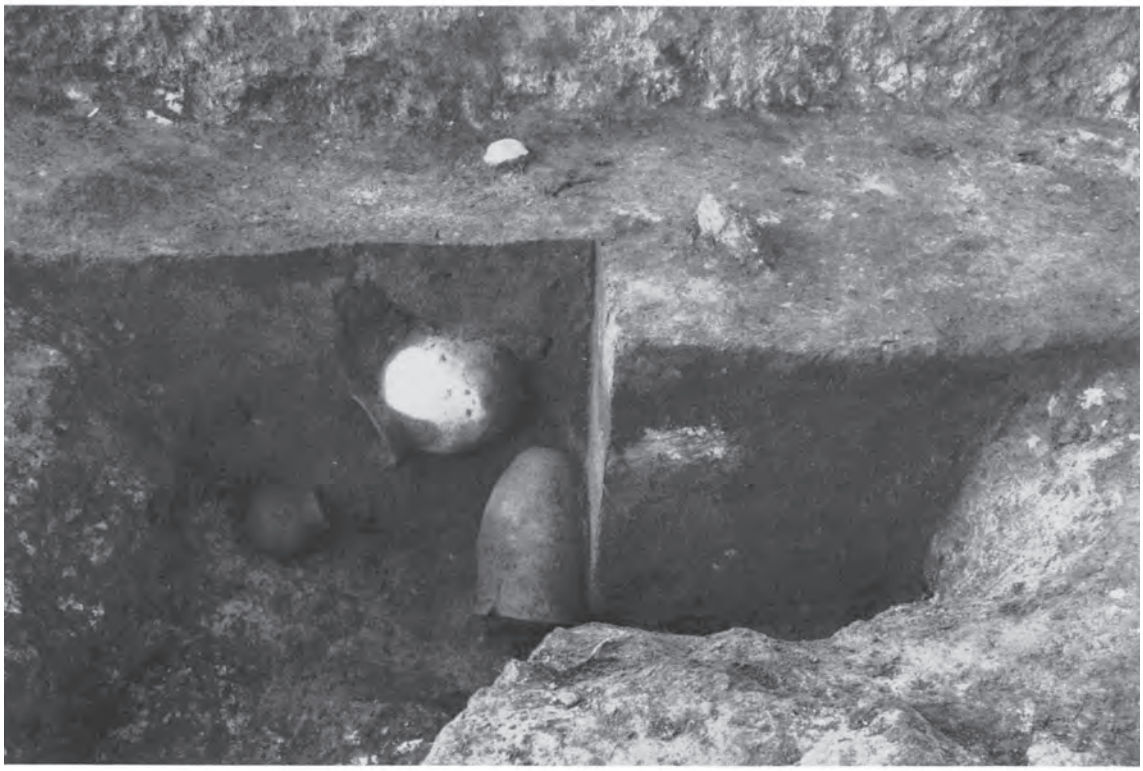
5　6号住居跡

6　7号住居跡

7　７号住居跡



8　7号住居跡カマド

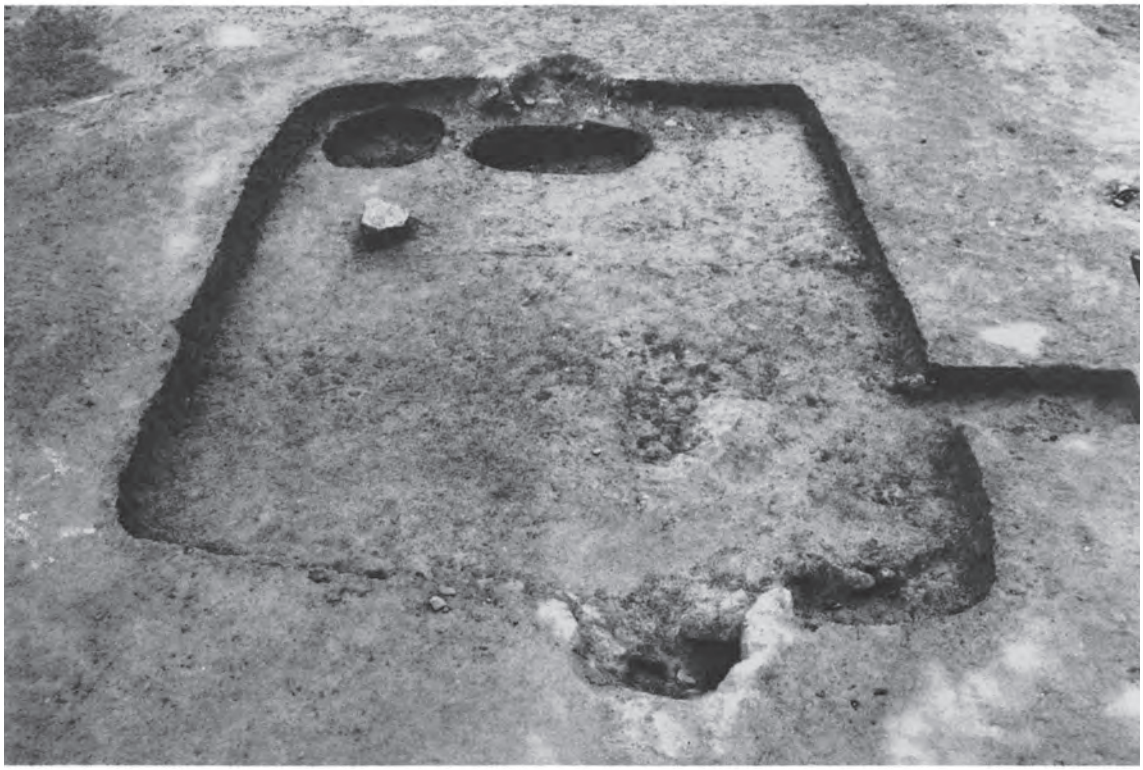


9　7号住居跡1号ピットセクション

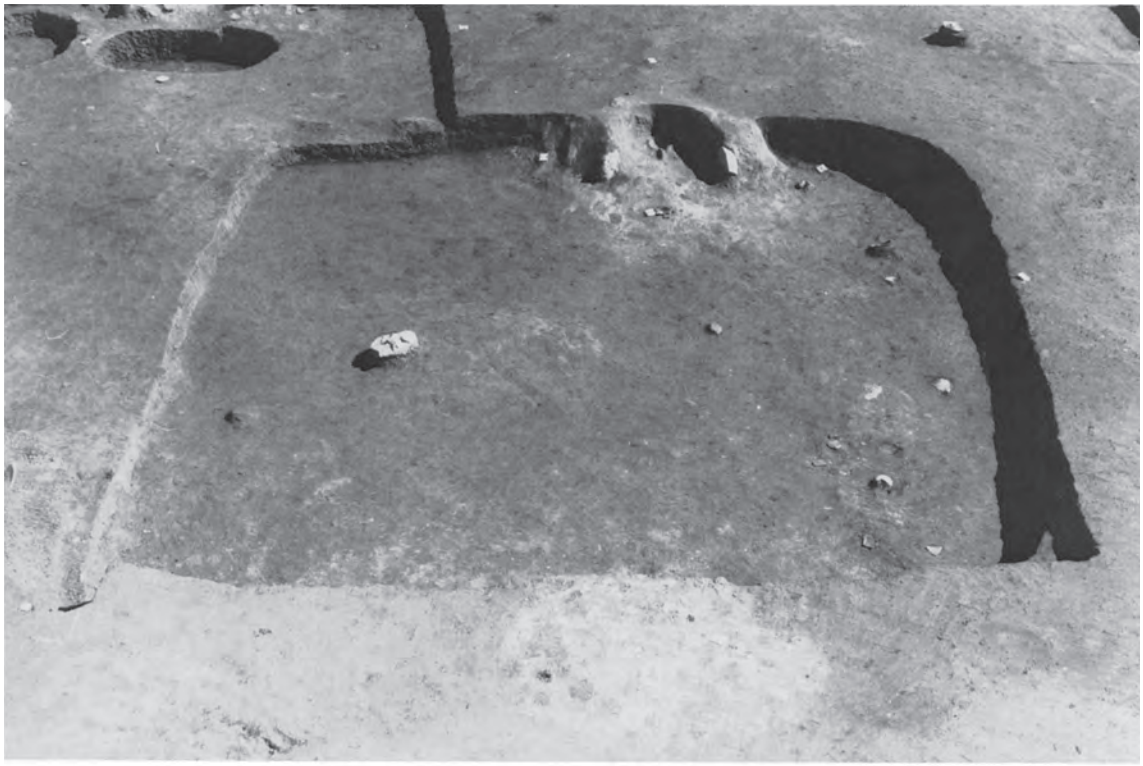
10　９号住居跡

11　10号住居跡

12　11号住居跡

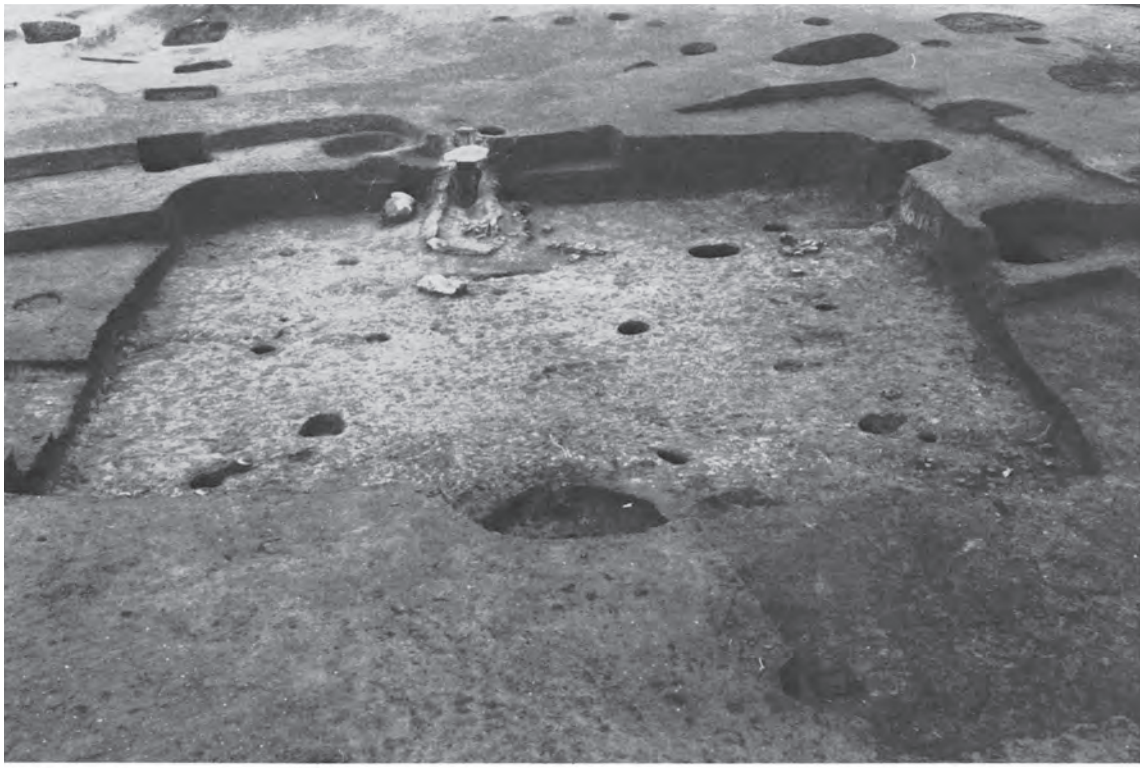


13　12号住居跡



14　13号住居跡

15　14号住居跡



16　21号住居跡

17　21号住居跡カマド

18　21号住居跡内張り出しピット

19　１号掘立柱建物跡

20　1 号掘立柱建物跡

21　2･3号掘立柱建物跡

22　4 号掘立柱建物跡

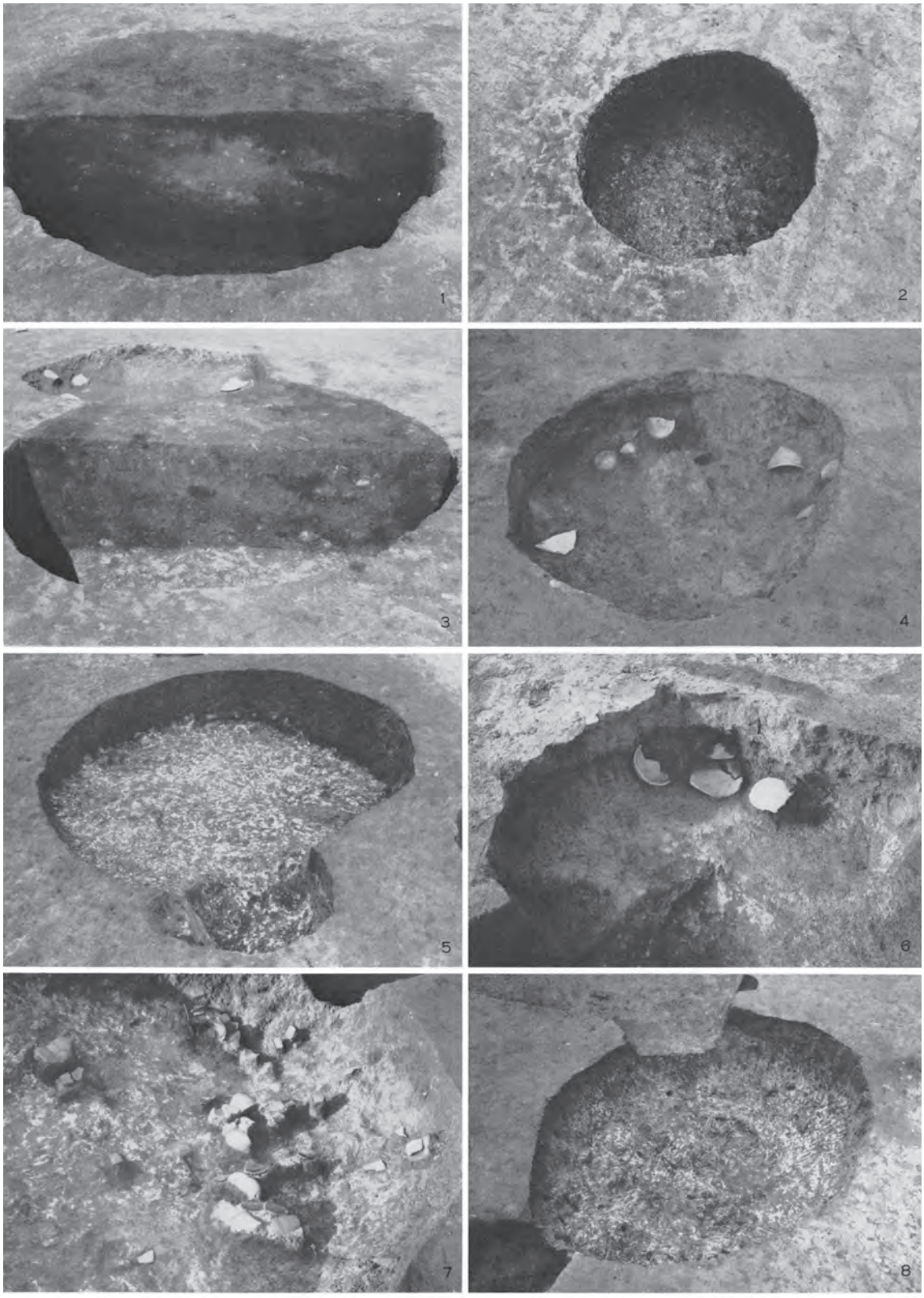
23　5 号掘立柱建物跡

24　5･6号掘立柱建物跡

25　7号掘立柱建物跡

26　８号掘立柱建物跡

27　９号掘立柱建物跡

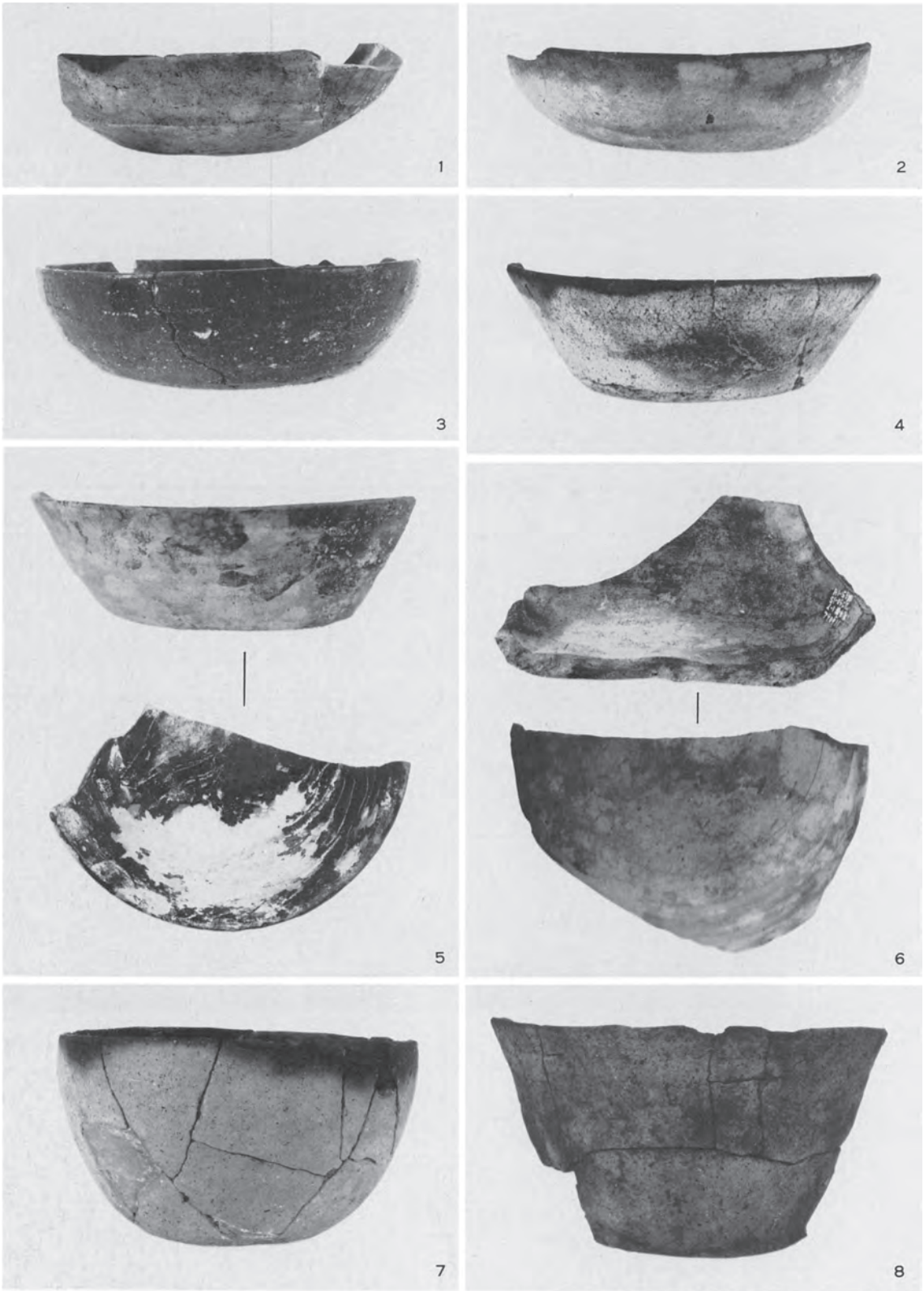


28 各土坑全景及びセクション

1・2…2号土坑　3…5号土坑セクション　4…3号土坑
5…12号土坑　6…16号土坑　7・8…36号土坑

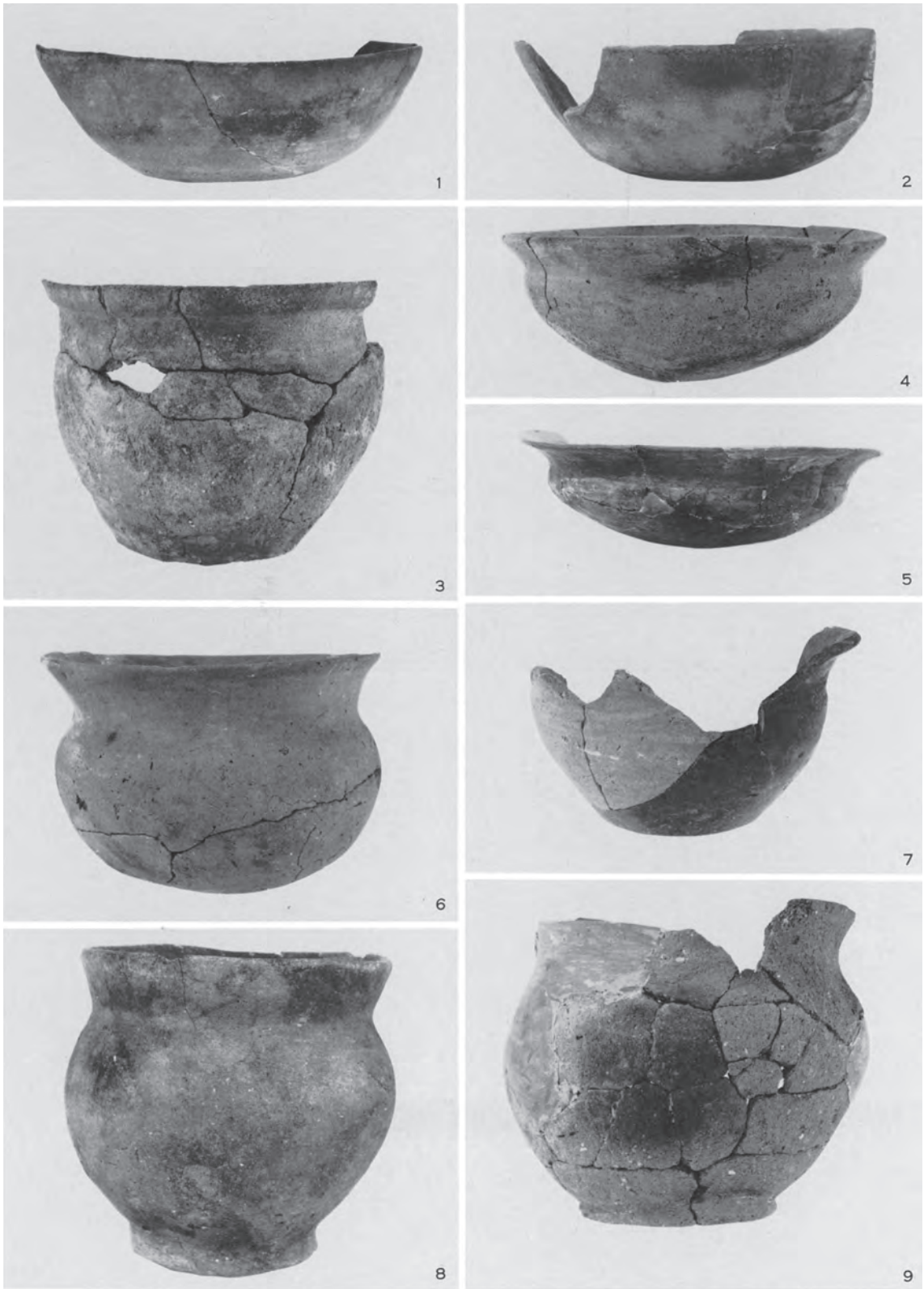
29　2･3･4号住居跡出土土師器

２号住居跡（１…杯１）
３号住居跡（２…杯６　３…壺２　４…壺１
５…椀１　６…杯５　７…甕３）
４号住居跡（８…杯１　９…杯３）



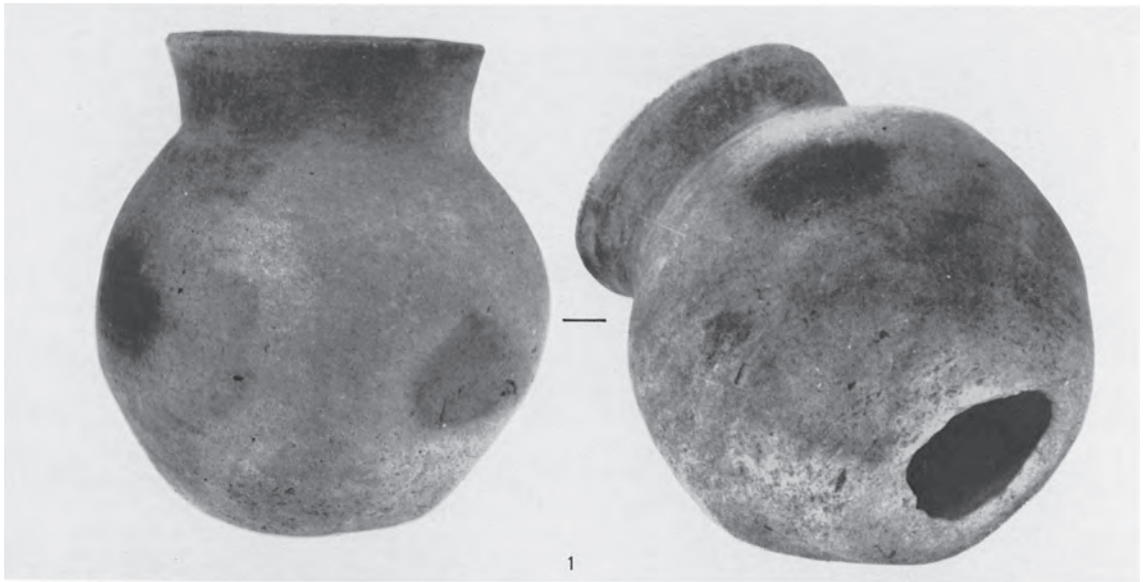
30　5号住居跡出土土師器・須恵器

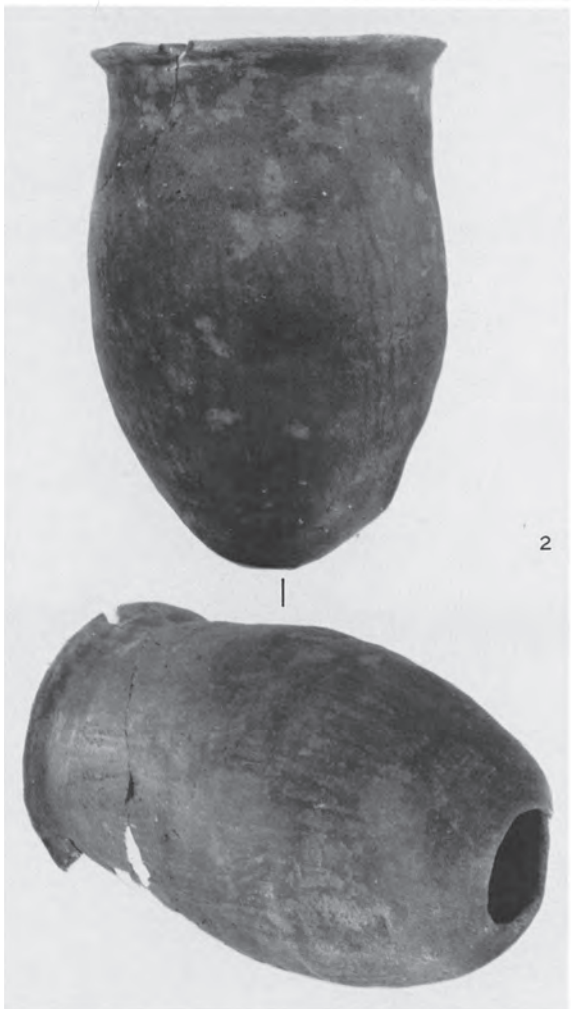
1…杯4　2…杯1　3…杯5　4…杯6　5…須恵器杯2
6…須恵器杯1　7…椀1　8…甕2

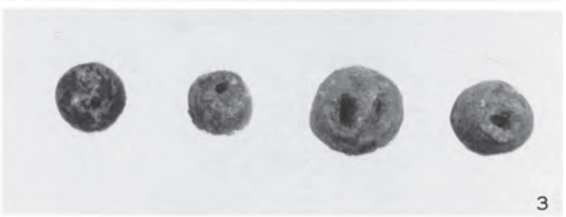


31　6･7号住居跡出土土師器

６号住居跡（１…杯１　２…杯２　３…甕）　７号住居跡（４…杯２　５…杯１　６…壺１　７…鉢２　８…甕２　９…甕３）



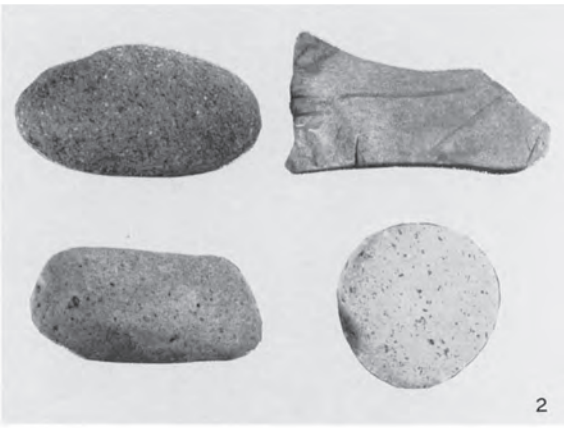




32　7号住居跡出土遺物

1…甕1　2…甕2　3…土製丸玉　4…石製紡錘車

1


2

3

4

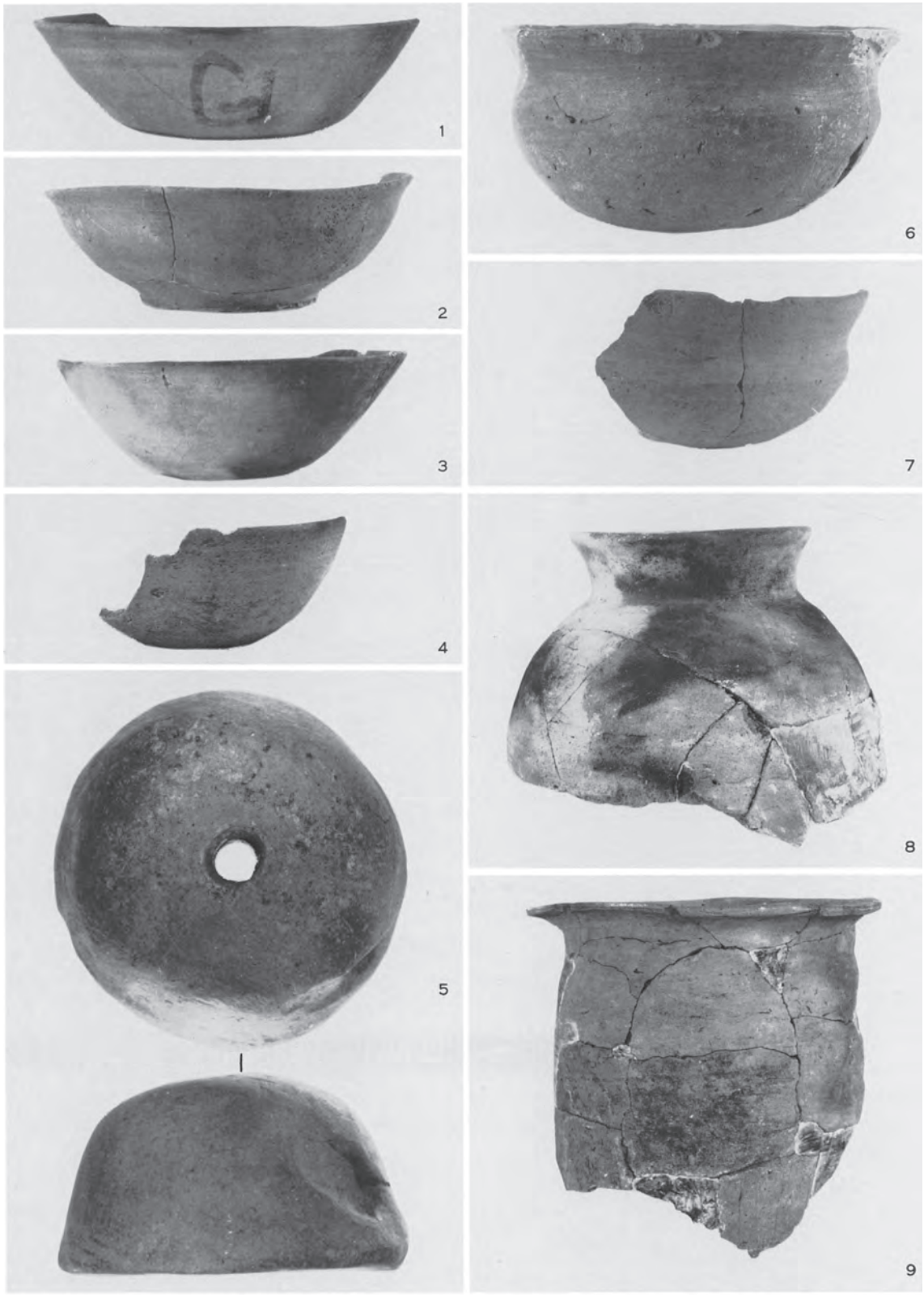
5

6

7

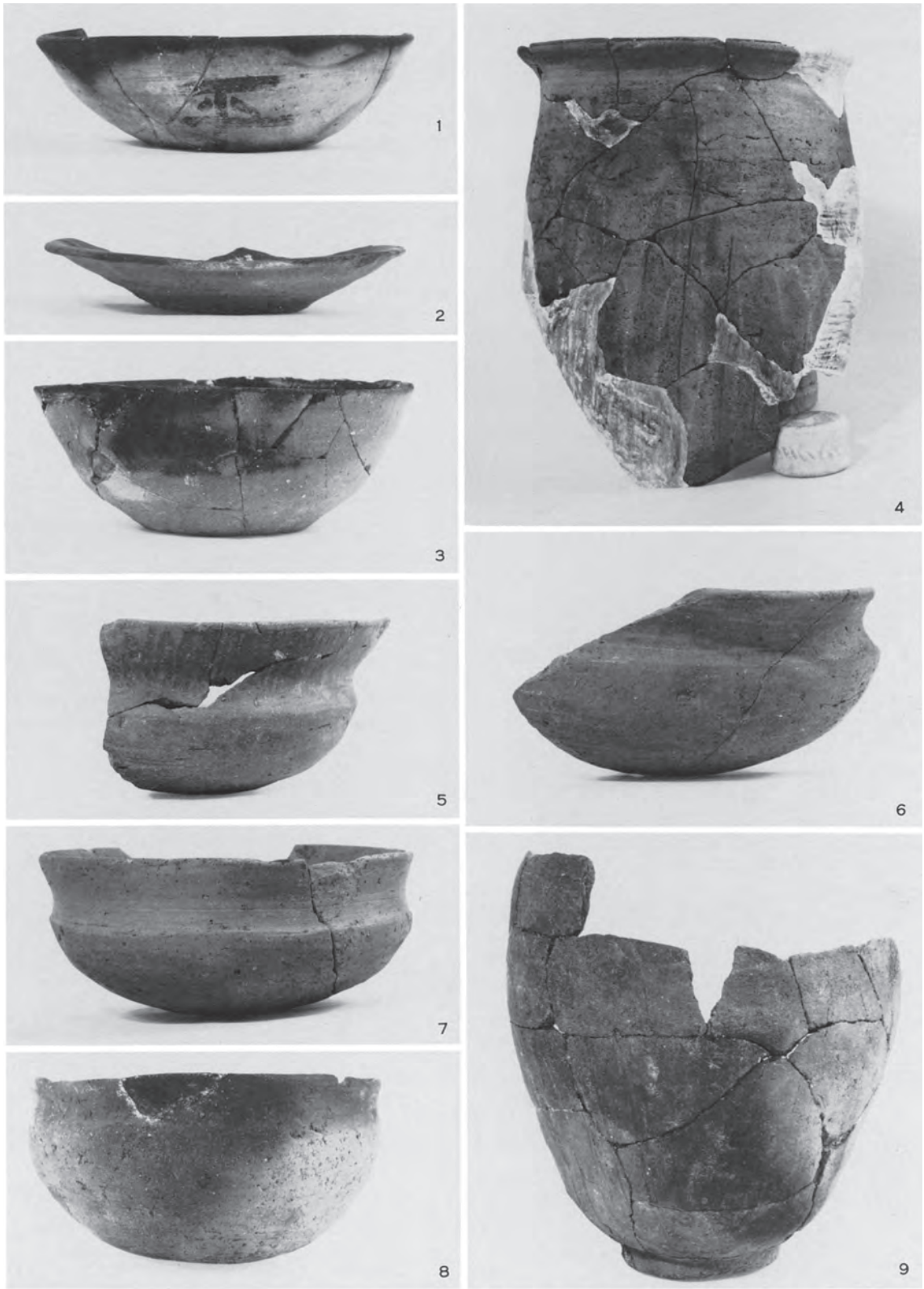
33　7･9･10号住居跡出土土師器・石製品

7号住居跡（1…甕7　2…石製品　3…甕8　4…甕5）
9号住居跡（5…杯3）　10号住居跡（6…杯2　7…杯4）



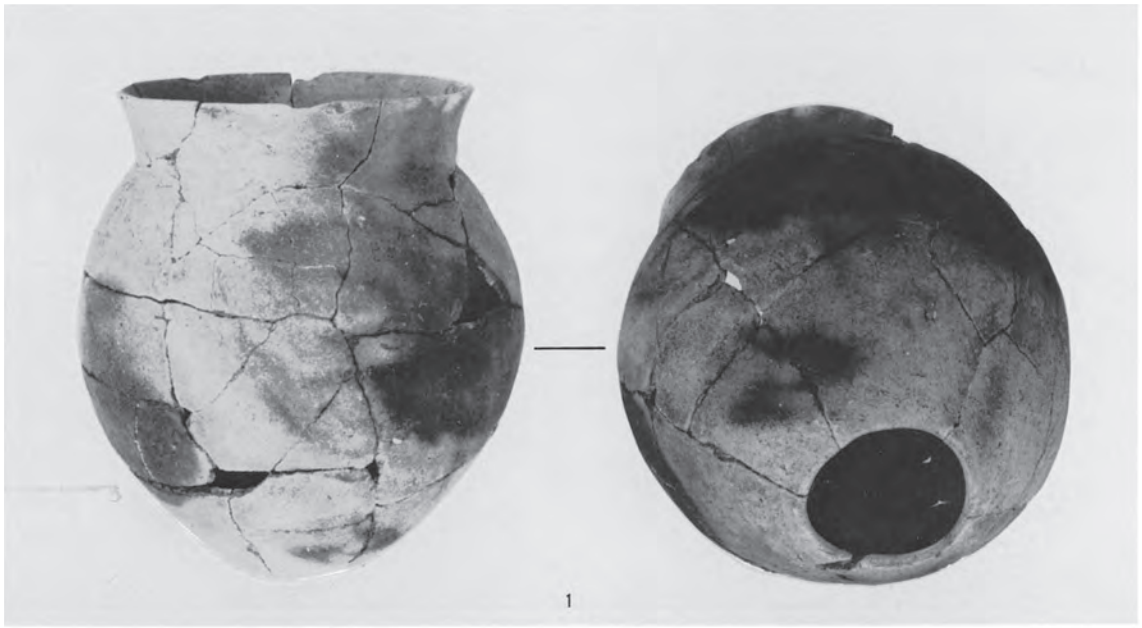
34 10～13号住居跡出土土師器・紡錘車

10号住居跡（1…杯1） 11号住居跡（5…紡錘車 6…杯1 7…杯2 8…壺） 12号住居跡（2…須恵器杯） 13号住居跡（3…杯1 4…杯2 9…甕3）



35　15・16・19・21号住居跡出土土師器

15号住居跡（４…甕１）　16号住居跡（１…杯１　２…高台付皿）
19号住居跡（３…杯１）　21号住居跡（５…杯３　６…杯２　７…杯１
８…杯６　９…甕６）


1

2

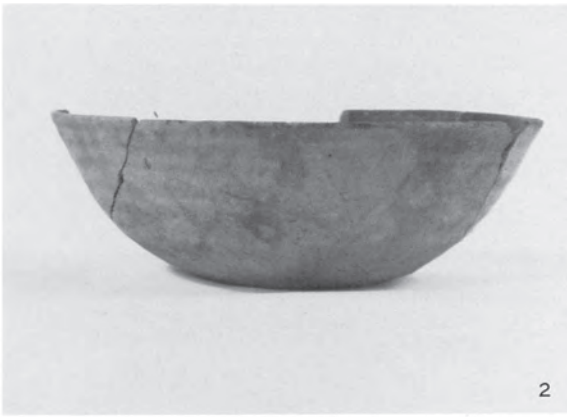
3

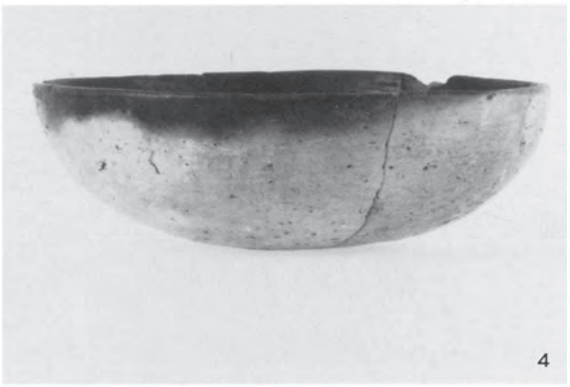
4

5

36 21号住居跡、1・27号土坑出土土師器

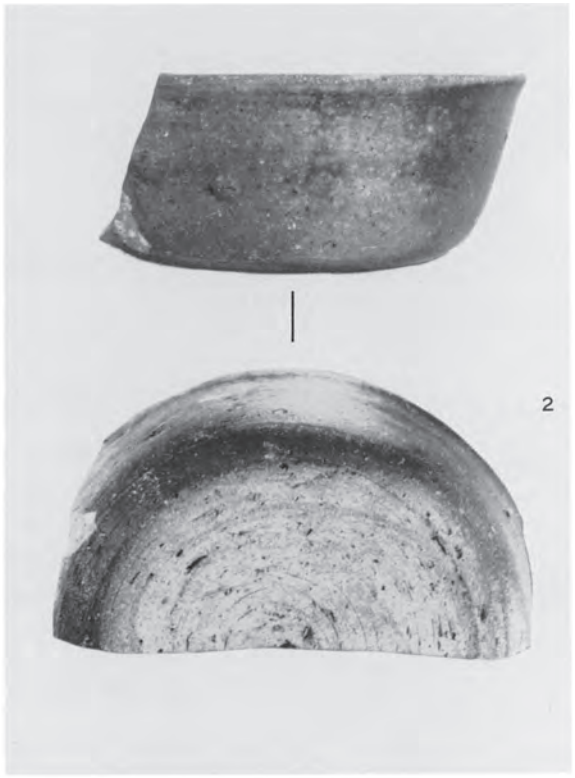
21号住居跡（1…甕　2…甕2　3…甕5）1号土坑（5…杯1）
27号土坑（4…鉢）

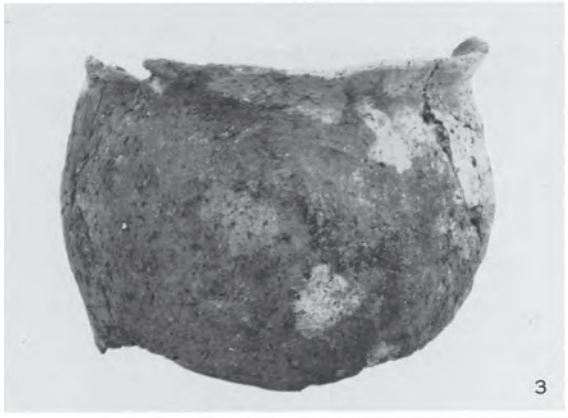




37　3･36号土坑，表土出土土師器

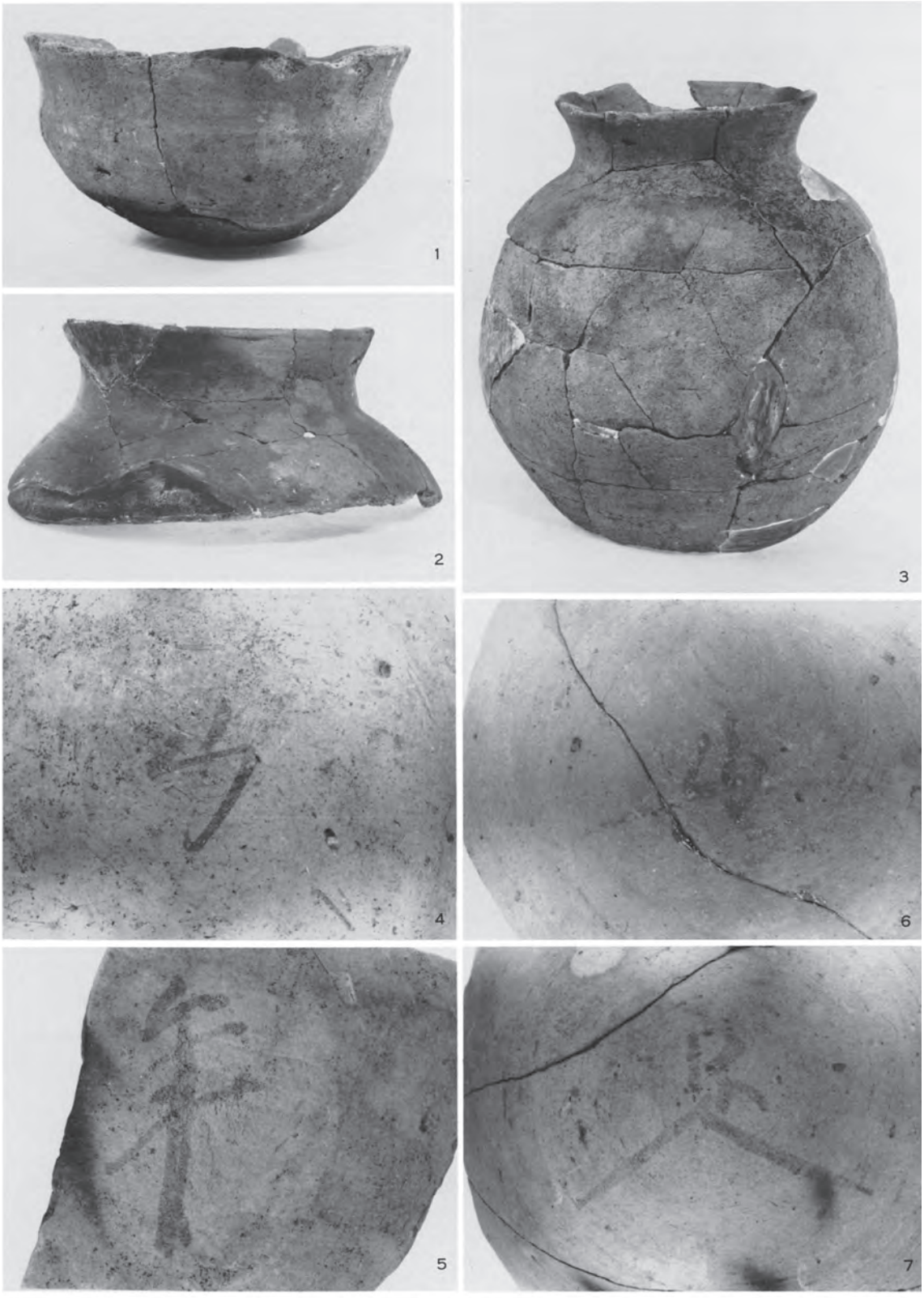
３号土坑（１…杯２　２…杯１）　36号土坑（３…杯７　４…杯１
５…杯３　６…杯４　８…杯５）　表土（７…杯１）



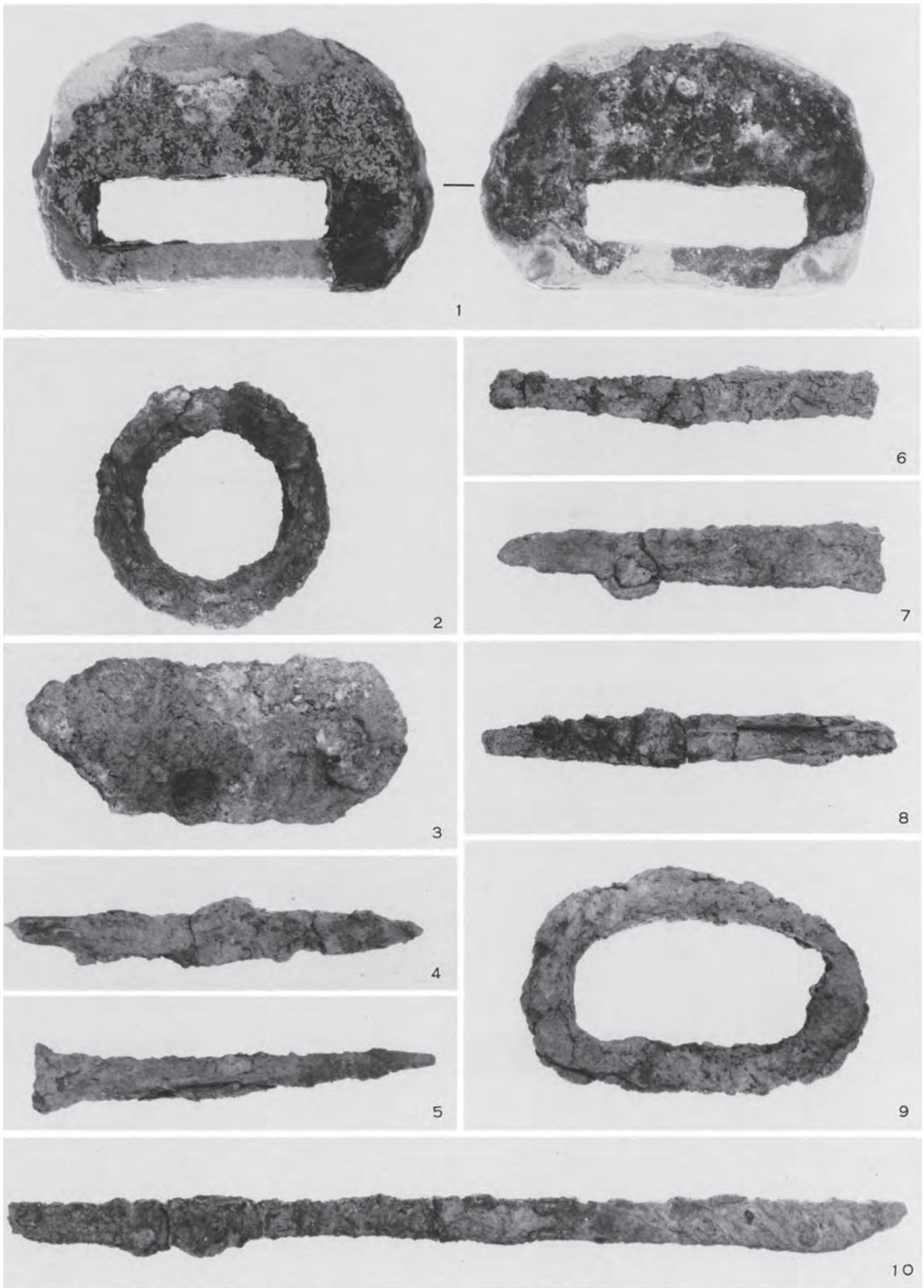


38 36・39号土坑出土土師器・須恵器

36号土坑（1…須恵器杯2　2…須恵器杯1　3…甕2
4…甕4）　39号土坑（5…甕2　6…杯1）



39　Ｅ−6グリッド出土土師器，住居跡内出土墨書土師器　Ｅ－６グリッド（１…杯　２…壺１　３…壺２）５号住居跡（４…杯１　５…杯）　９号住居跡（６…杯４　７…杯３）



40 佐平林Ⅷ区出土帯金具・鉄製品

2号住居跡（1…帯金具） 5号住居跡（2…環状鉄製品 3…手鎌 6…刀子1） 9号住居跡（4…刀子1） 10号住居跡（7…刀子） 12号住居跡（5…釘） 36号土坑（9…環状鉄製品 10…鉄鏃）

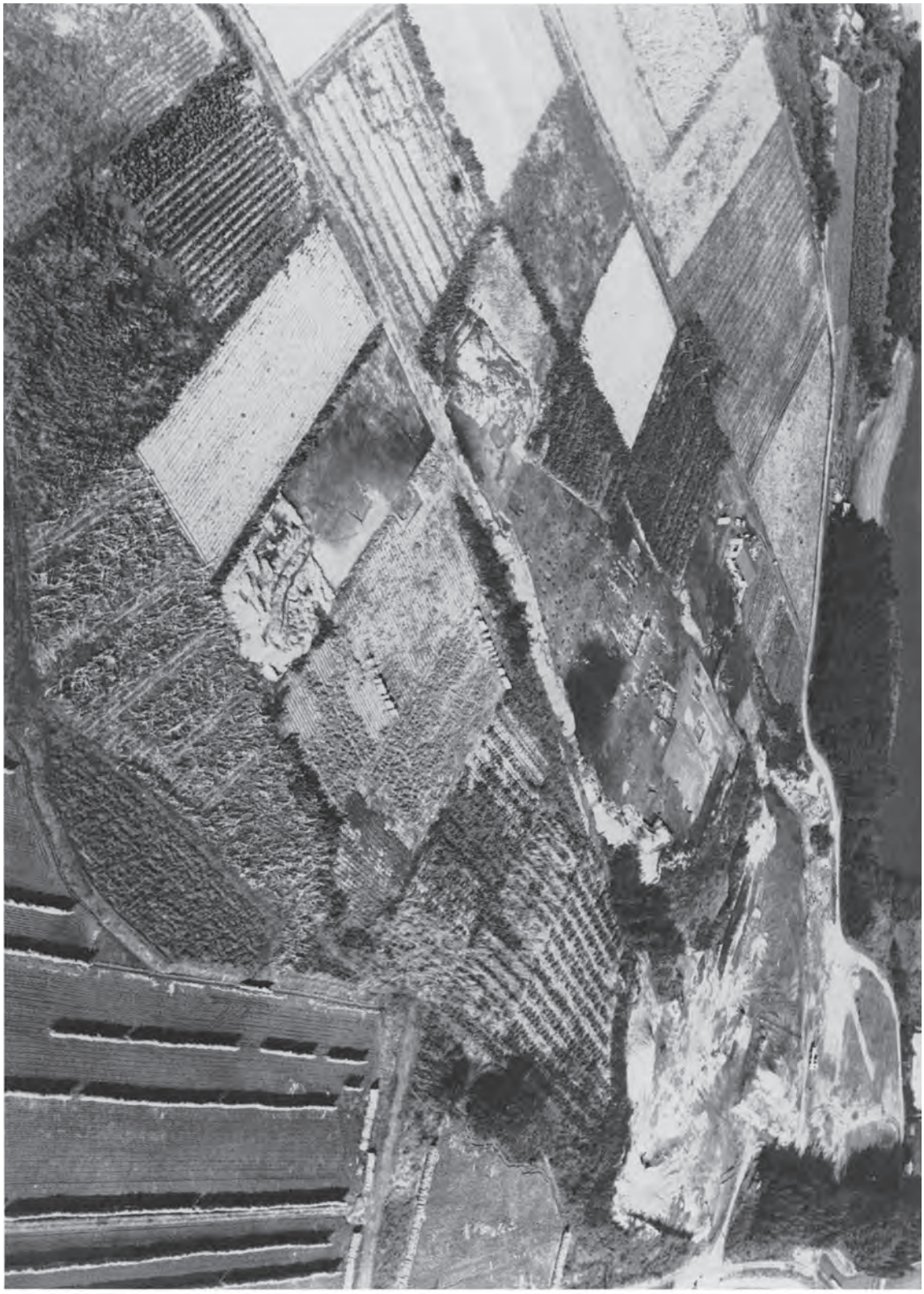
第４編　谷地前Ｃ遺跡

第４編　図版目次

1　谷地前Ｃ遺跡遠景（１）…… *77*
2　谷地前Ｃ遺跡遠景（２）…… *77*
3　谷地前Ｃ遺跡遠景（３）…… *78*
4　谷地前Ｃ遺跡全景（１）…… *79*
5　谷地前Ｃ遺跡全景（２）(西上空より)…… *80*
6　ＢⅢ・ＣⅢ区旧石器時代遺物出土状況…… *81*
7　ＤⅢ区旧石器時代遺物出土状況…… *81*
8　ＢⅣ区旧石器時代遺物出土状況…… *82*
9　ＢⅣ区旧石器時代遺物出土状況(石核・磨石)… *82*
10　ＣⅢ区Ⅳｂ層木炭分布状況…… *83*
11　深掘りグリッド南北セクション…… *83*
12　谷地前Ｃ遺跡主要遺構…… *84*
13　23号住居跡…… *85*
14　24号住居跡…… *85*
15　25号住居跡…… *86*
16　25号住居跡東壁の状況…… *86*
17　26号住居跡…… *87*
18　26号住居跡カマド…… *87*
19　27号住居跡…… *88*
20　27号住居跡カマド…… *88*
21　27号住居跡東壁と主柱穴…… *88*
22　28・29号住居跡…… *89*
23　30号住居跡…… *89*
24　31号住居跡検出状況…… *90*
25　31号住居跡…… *90*
26　32号住居跡…… *91*
27　32号住居跡貯蔵穴状ピット遺物出土状況…… *91*
28　34・42号住居跡…… *92*
29　35号住居跡…… *92*
30　36号住居跡…… *93*
31　36号住居跡遺物出土状況…… *93*
32　37号住居跡…… *94*
33　37号住居跡遺物出土状況…… *94*
34　38号住居跡…… *95*
35　39号住居跡…… *95*
36　40号住居跡…… *96*
37　41号住居跡…… *96*
38　掘立柱建物跡群…… *97*
39　20号掘立柱建物跡周辺…… *97*
40　３号掘立柱建物跡…… *98*
41　４・５号掘立柱建物跡…… *98*
42　４号掘立柱建物跡(南より)…… *99*
43　４号掘立柱建物跡(西より)… …… *99*
44　８号掘立柱建物跡…… *100*
45　９号掘立柱建物跡…… *100*
46　10号掘立柱建物跡…… *101*
47　13号掘立柱建物跡…… *101*
48　15号掘立柱建物跡…… *102*
49　16号掘立柱建物跡…… *102*
50　17・18号掘立柱建物跡…… *103*
51　19号掘立柱建物跡…… *103*
52　20号掘立柱建物跡…… *104*
53　22・23号掘立柱建物跡…… *104*
54　７号土坑…… *105*
55　８号土坑…… *105*
56　９号土坑…… *105*
57　９号土坑土師器出土状況…… *105*
58　10号土坑…… *106*
59　11号土坑…… *106*
60　12号土坑…… *106*
61　13号土坑…… *106*
62　13号土坑(東より)…… *107*
63　14号土坑…… *107*
64　16号土坑…… *107*
65　15号土坑…… *107*
66　中央区遺物包含層遺物出土状況…… *108*
67　中央区遺物包含層紡錘車出土状況…… *108*
68　旧石器時代のナイフ形石器・彫器・ドリル・剝片…… *109*
69　旧石器時代の石核Ⅰ…… *110*
70　旧石器時代の石核Ⅱ…… *110*
71　旧石器時代の石核・剝片…… *111*
72　旧石器時代の磨石・たたき石…… *111*
73　24・25・26号住居跡出土土師器・須恵器…… *112*
74　27・30号住居跡出土土師器…… *113*
75　31・32号住居跡出土土師器…… *114*
76　32・35・36号住居跡，19号掘立柱建物跡出土土師器・須恵器…… *115*
77　37・39号住居跡出土土師器…… *116*
78　42号住居跡出土土師器(耳杯)…… *117*
79　40・41号住居跡，遺物包含層出土土師器…… *118*
80　遺物包含層出土土師器・紡錘車・その他…… *119*
81　23・26・31・32・36・39・40・41号住居跡出土鉄器・鉄製品…… *120*
82　24号住居跡，８・９・17・19号掘立柱建物跡，包含層出土鉄器・鉄製品…… *120*

1　谷地前Ｃ遺跡遠景(1)

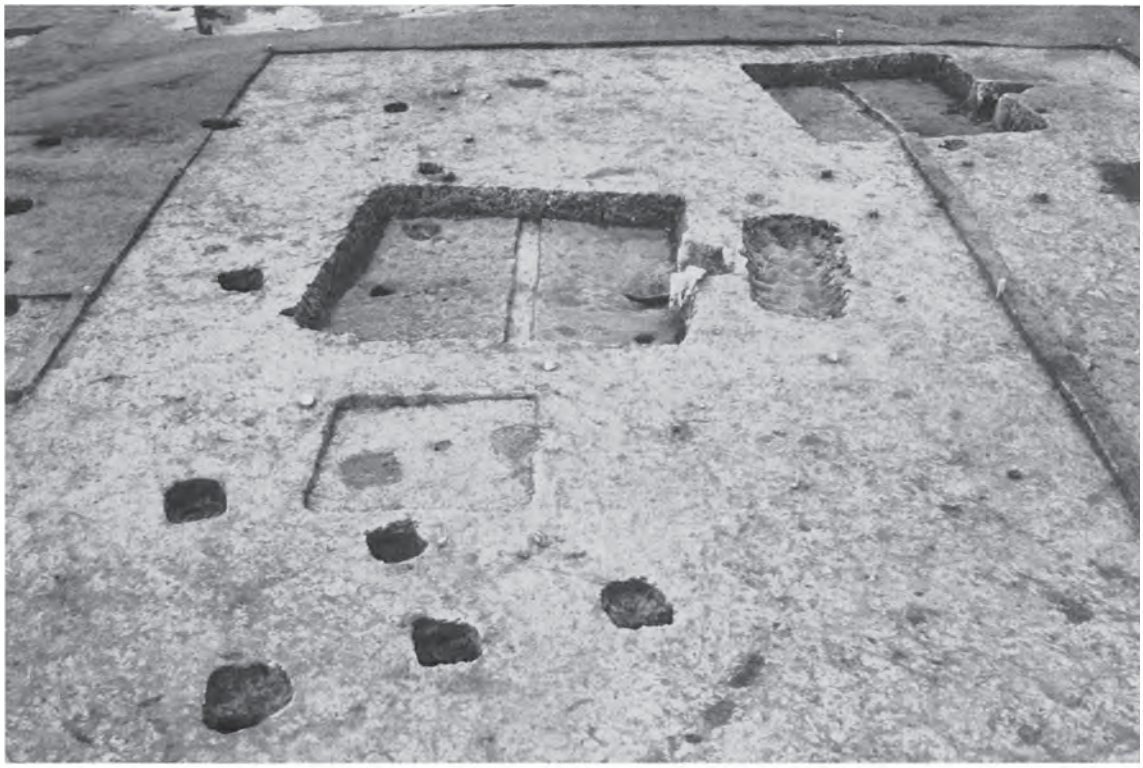
2　谷地前Ｃ遺跡遠景(2)



3　谷地前 C 遺跡遠景(3)

4　谷地前Ｃ遺跡全景(1)

5　谷地前Ｃ遺跡全景(2)　（西上空より）

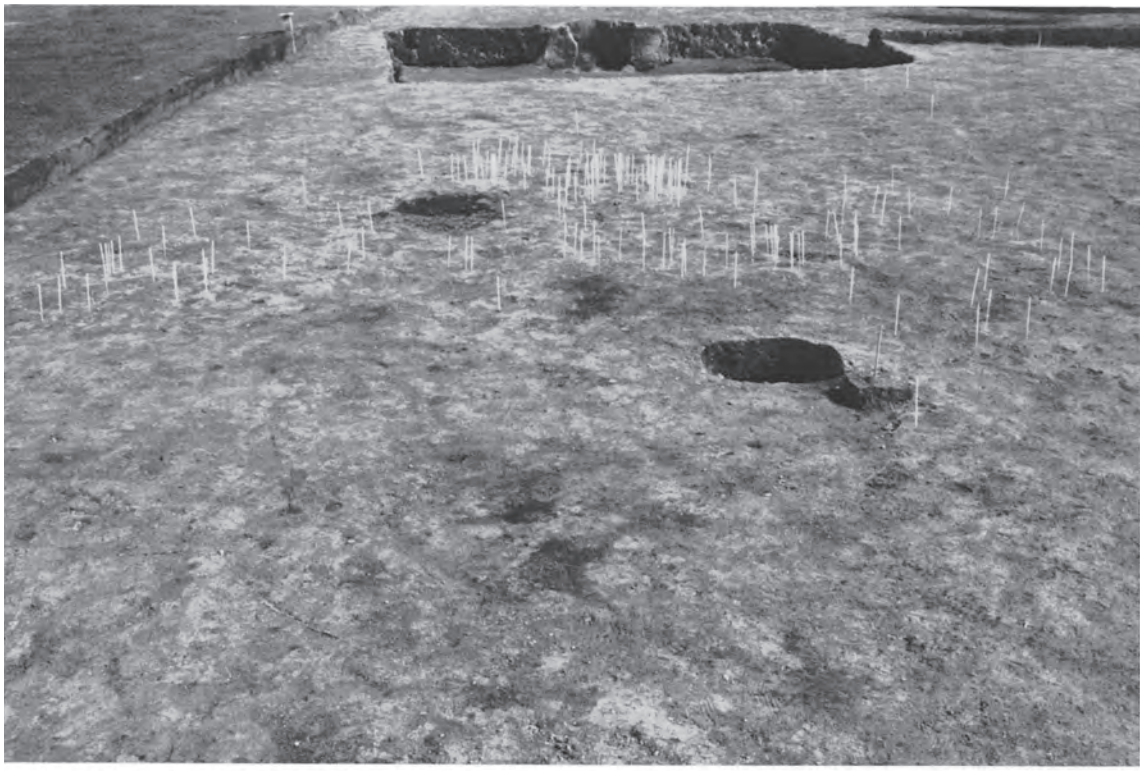


6　ＢⅢ・ＣⅢ区旧石器時代遺物出土状況

7　ＤⅢ区旧石器時代遺物出土状況

8　B Ⅳ区石器時代遺物出土状況

9　B Ⅳ区石器時代遺物出土状況(石核・磨石)



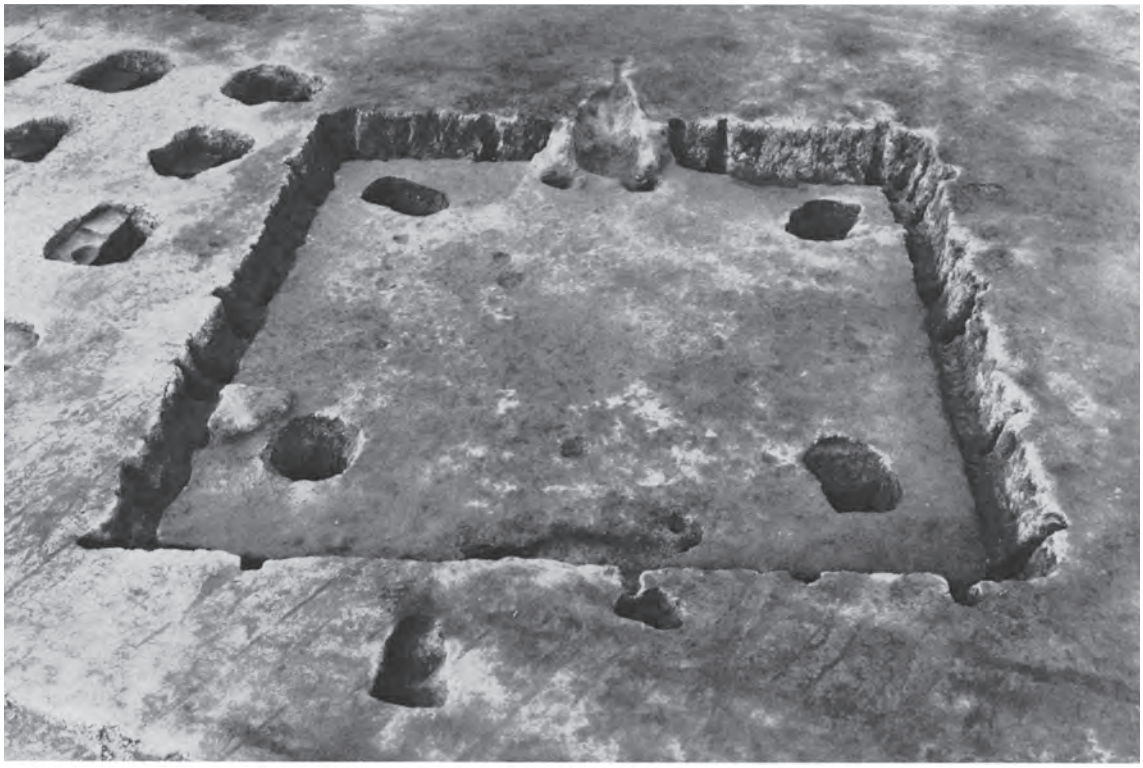
10　ＣⅢ区Ⅳｂ層木炭分布状況

11　深掘りグリッド南北セクション

12　谷地前C遺跡主要遺構

13　23号住居跡

14　24号住居跡

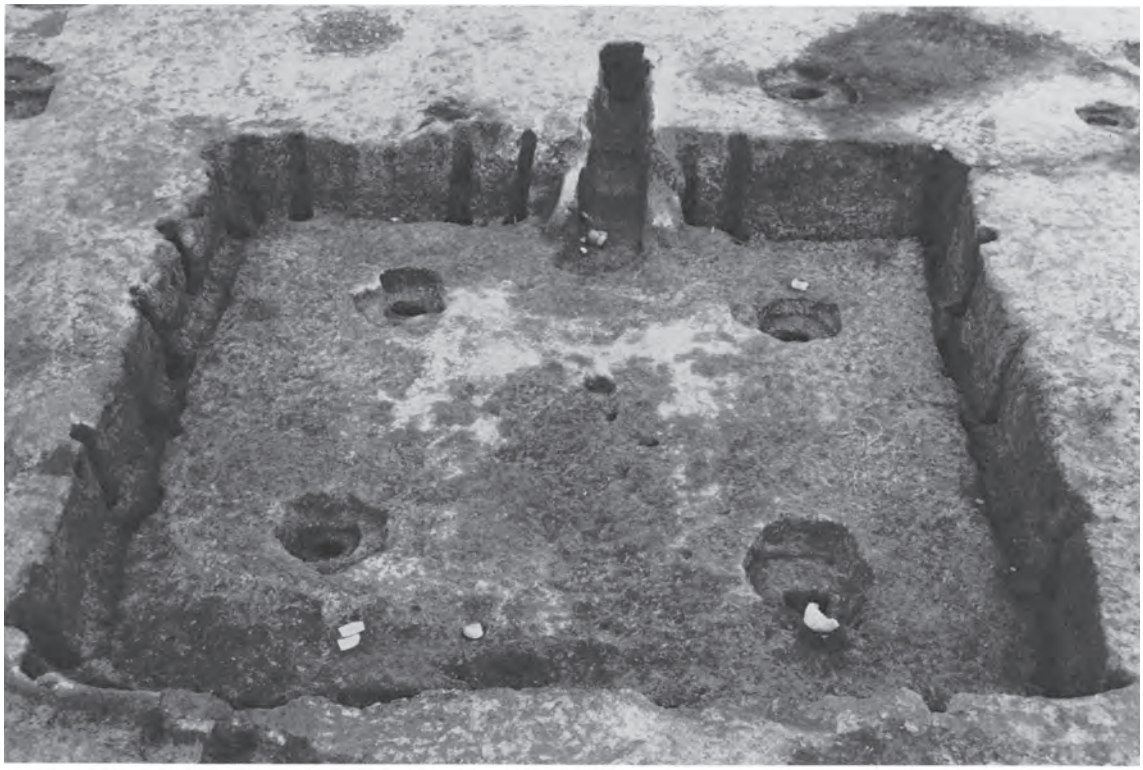


15　25号住居跡

16　25号住居跡東壁の状況

17　26号住居跡

18　26号住居跡カマド



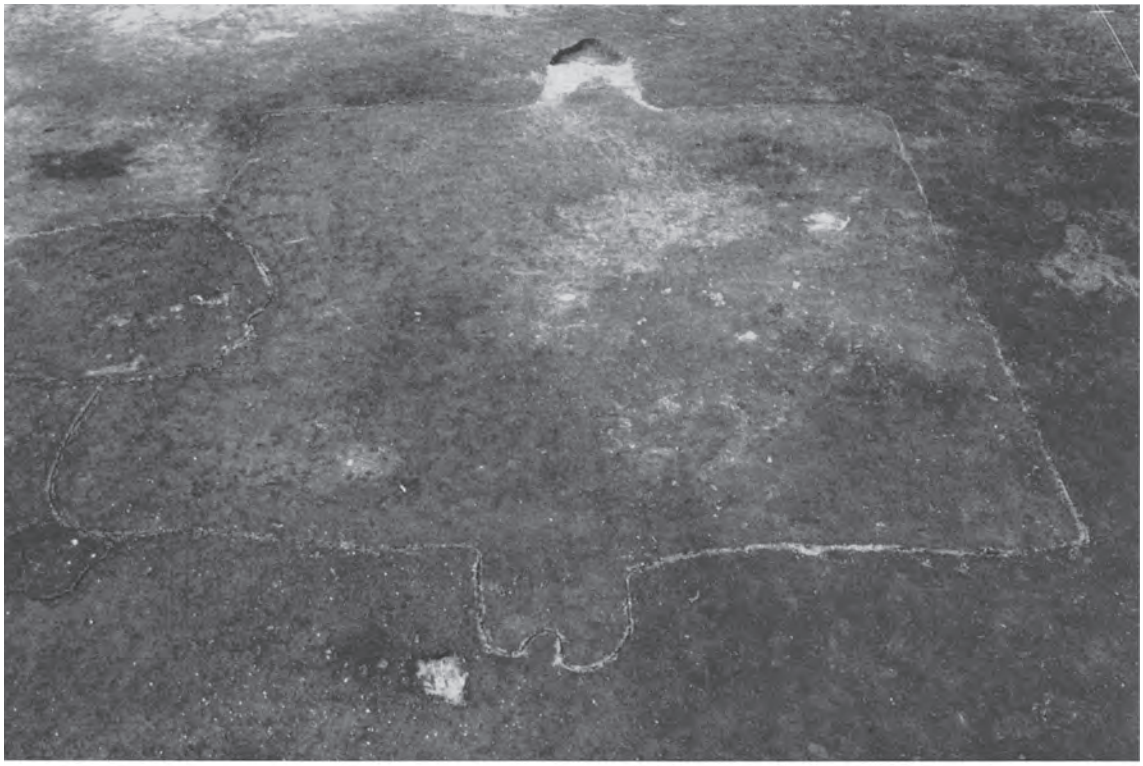
19　27号住居跡

20　27号住居跡カマド

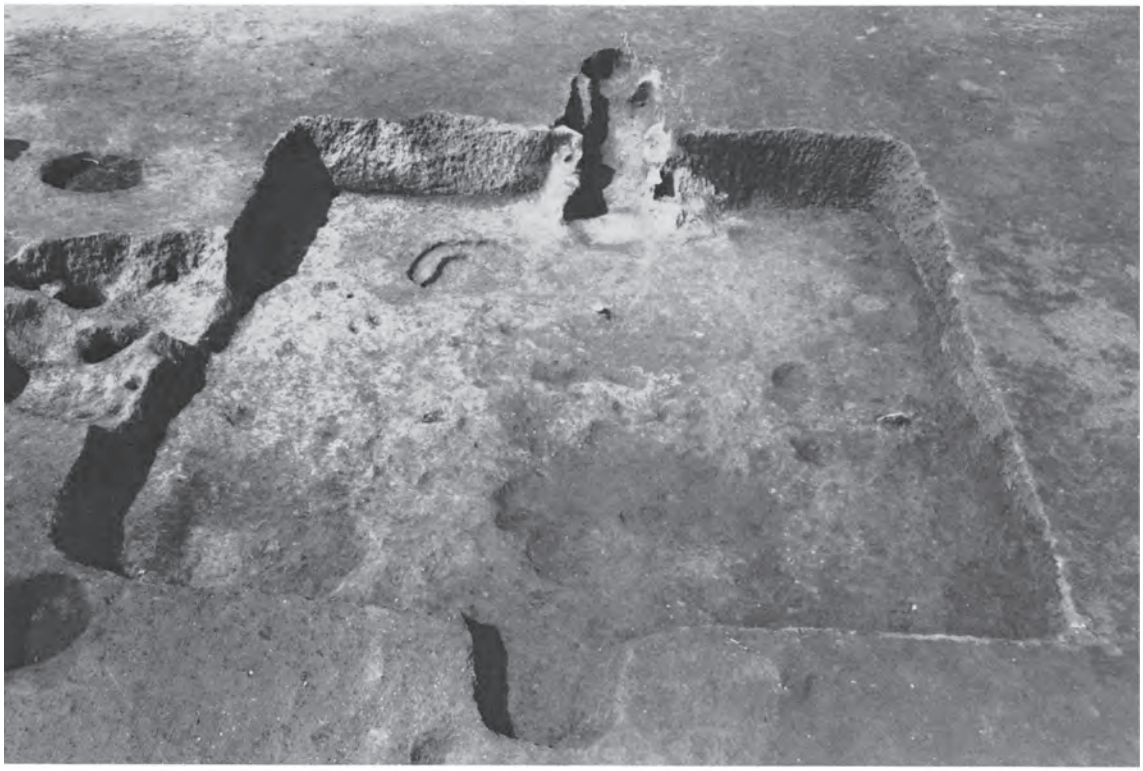
21　27号住居跡東壁と主柱穴

22　28・29号住居跡

23　30号住居跡



24　31号住居跡検出状況

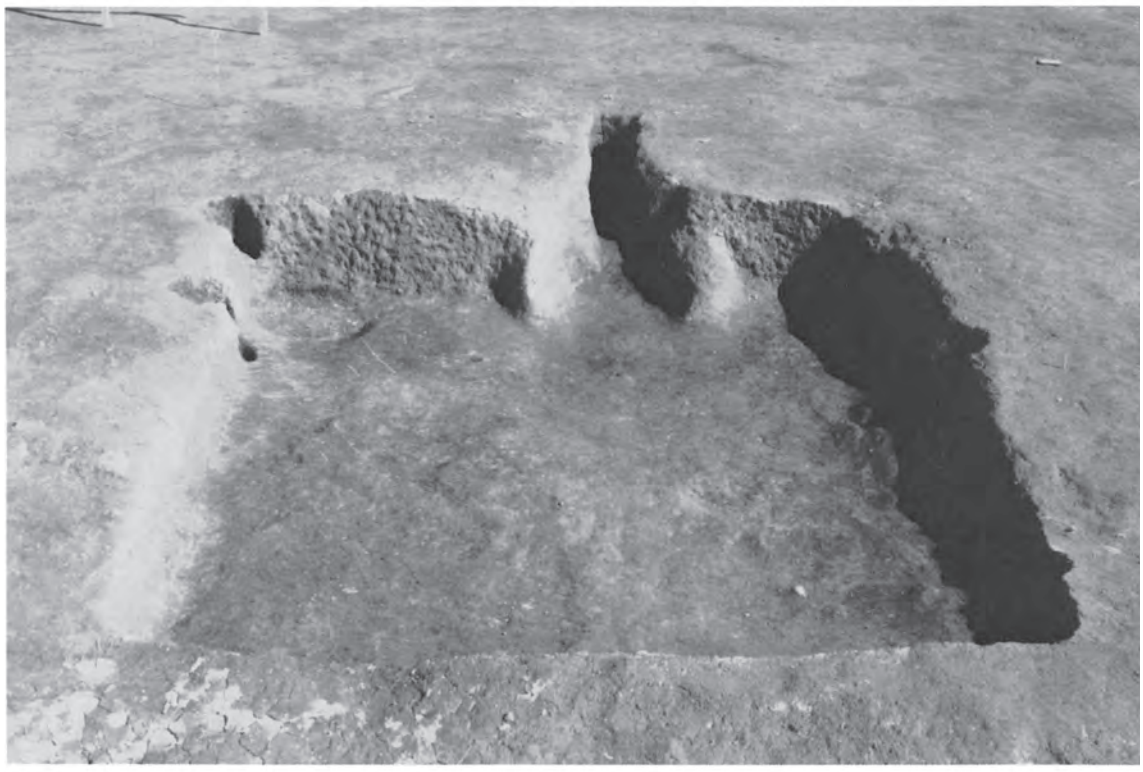


25　31号住居跡

26　32号住居跡

27　32号住居跡貯蔵穴状ピット遺物出土状況

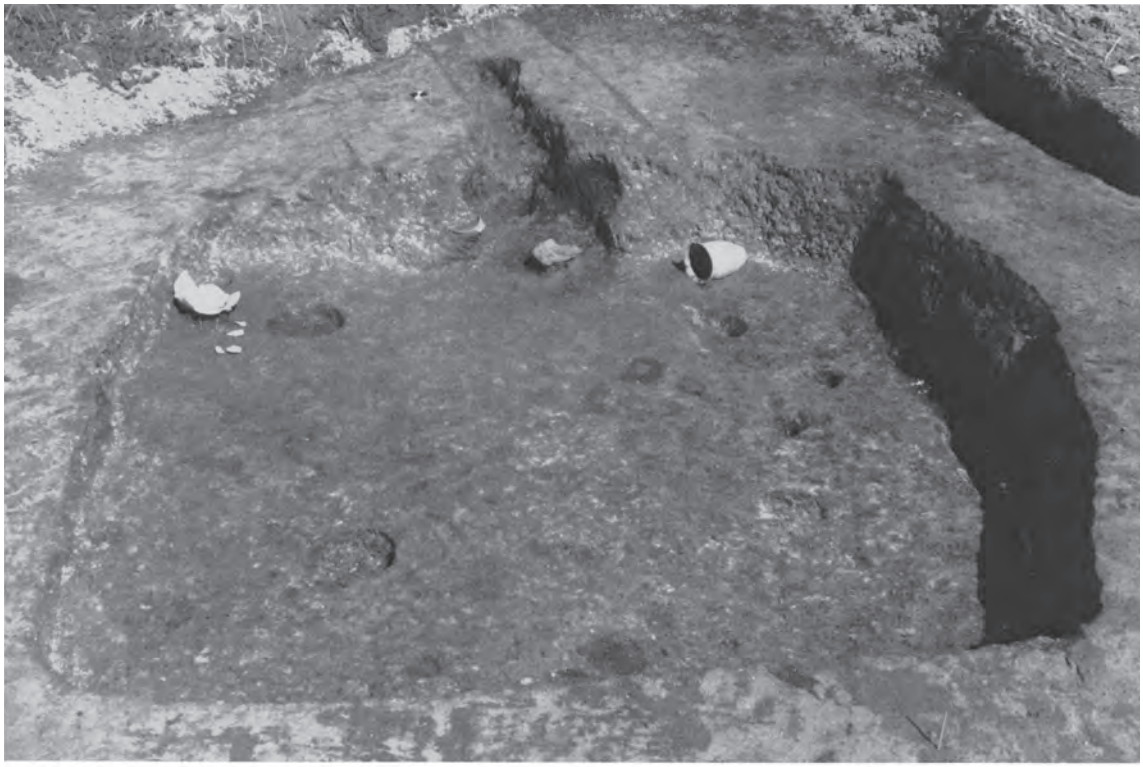
28　34・42号住居跡



29　35号住居跡

30　36号住居跡

31　36号住居跡遺物出土状況



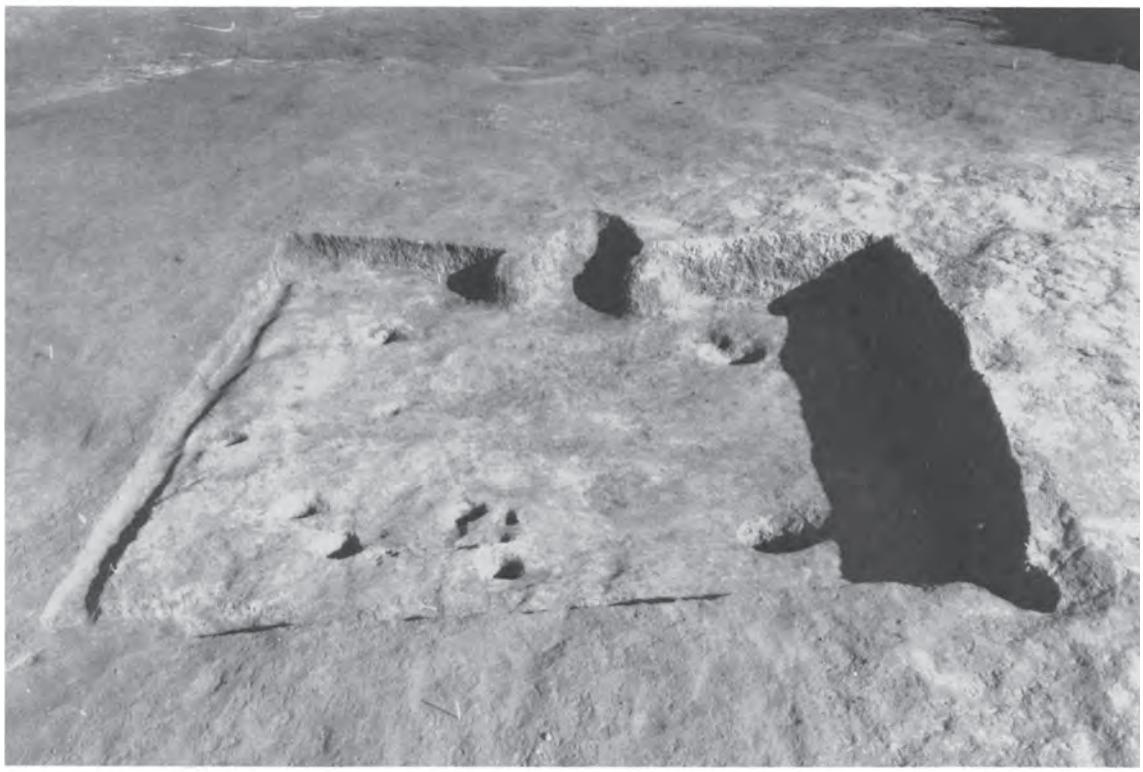
32　37号住居跡

33　37号住居跡遺物出土状況

34　38号住居跡

35　39号住居跡

36 40号住居跡



37 41号住居跡

38　掘立柱建物跡群

39　20号掘立柱建物跡周辺

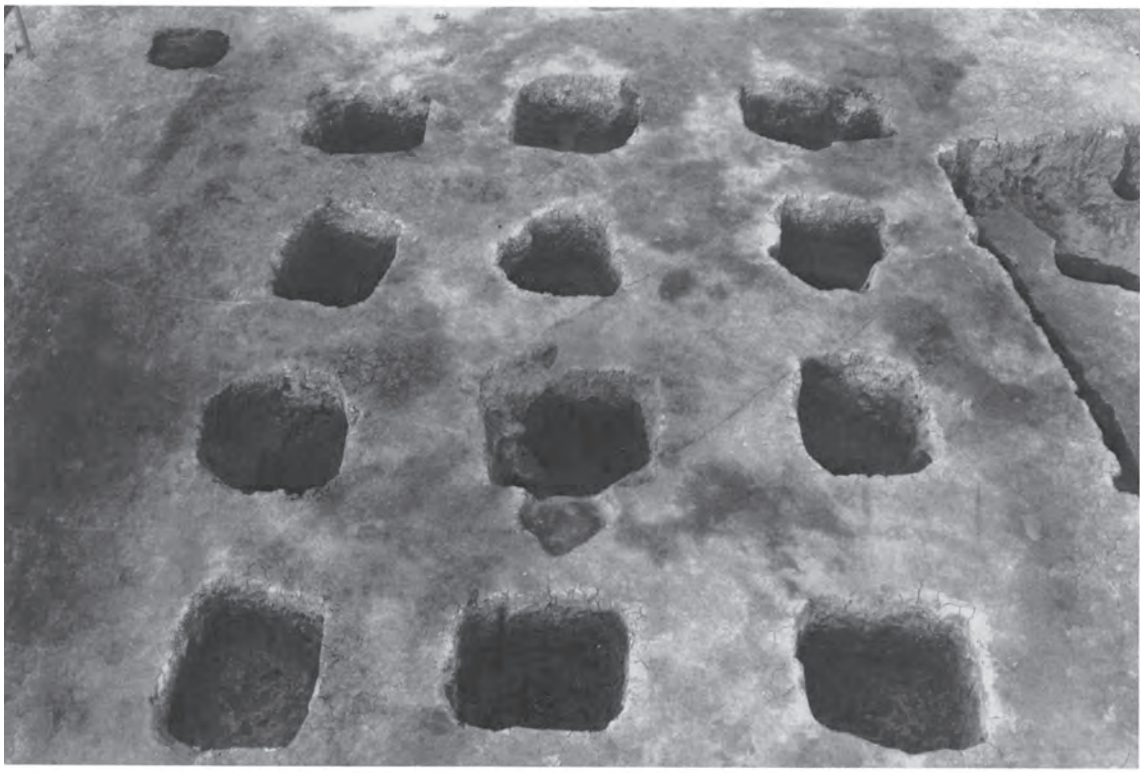
40　3号掘立柱建物跡

41　4･5号掘立柱建物跡

42　４号掘立柱建物跡（南より）

43　４号掘立柱建物跡（西より）

44　8 号掘立柱建物跡



45　9 号掘立柱建物跡

46　10号掘立柱建物跡

47　13号掘立柱建物跡

48 15号掘立柱建物跡

49 16号掘立柱建物跡

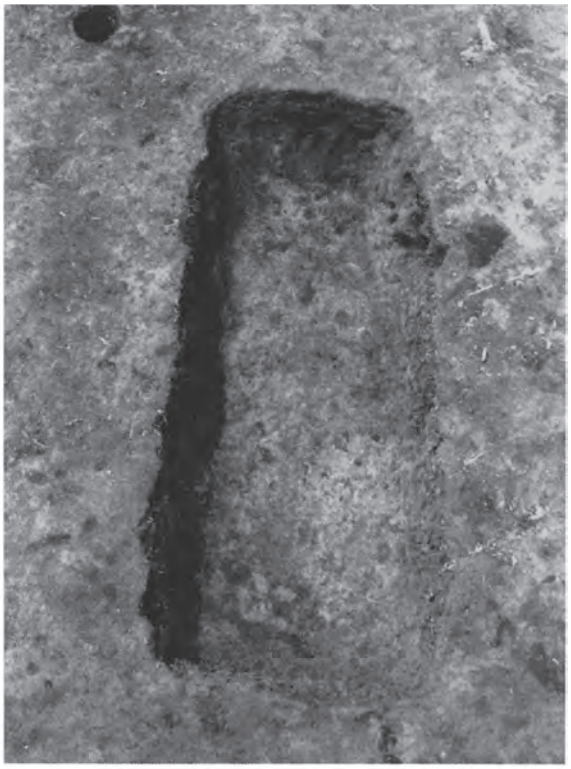
50　17・18号掘立柱建物跡

51　19号掘立柱建物跡

52　20号掘立柱建物跡

53　22・23号掘立柱建物跡

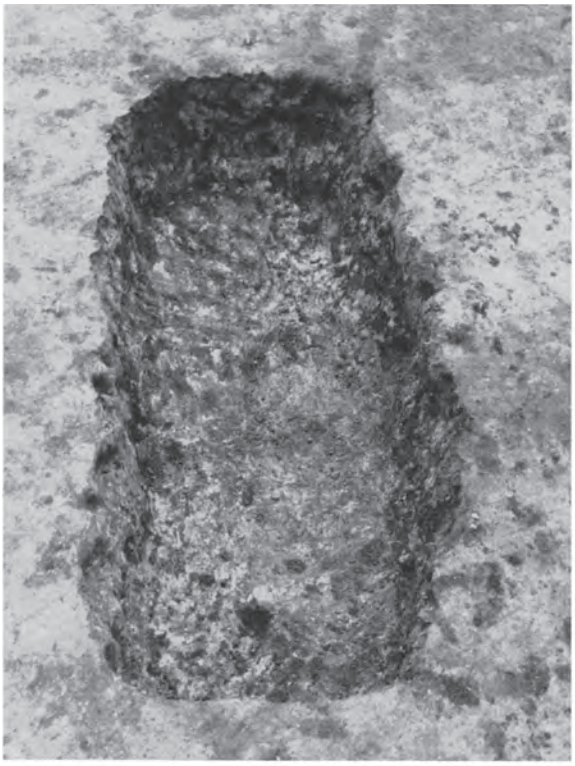
54　７号土坑



55　８号土坑

56　９号土坑

57　９号土坑土師器出土状況

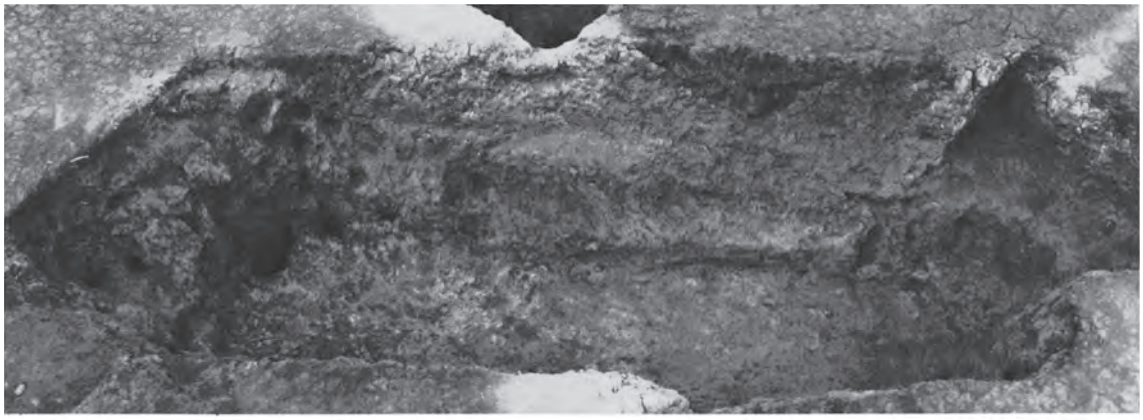


58　10号土坑

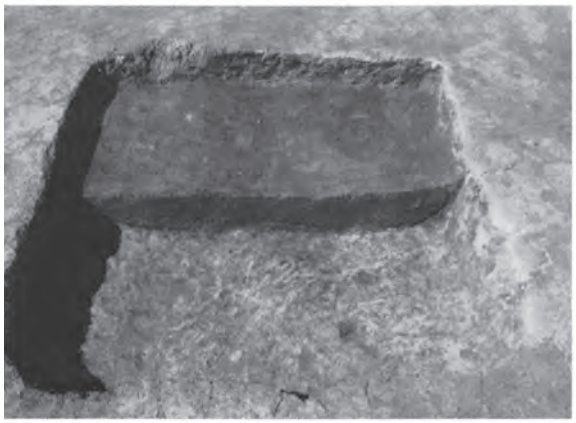
59　11号土坑

60　12号土坑

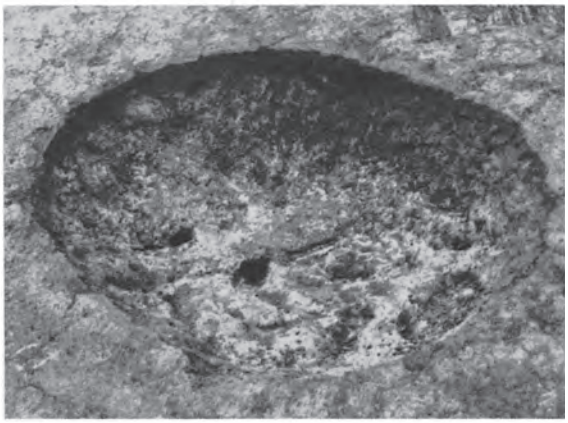
61　13号土坑



62　13号土坑（東より）

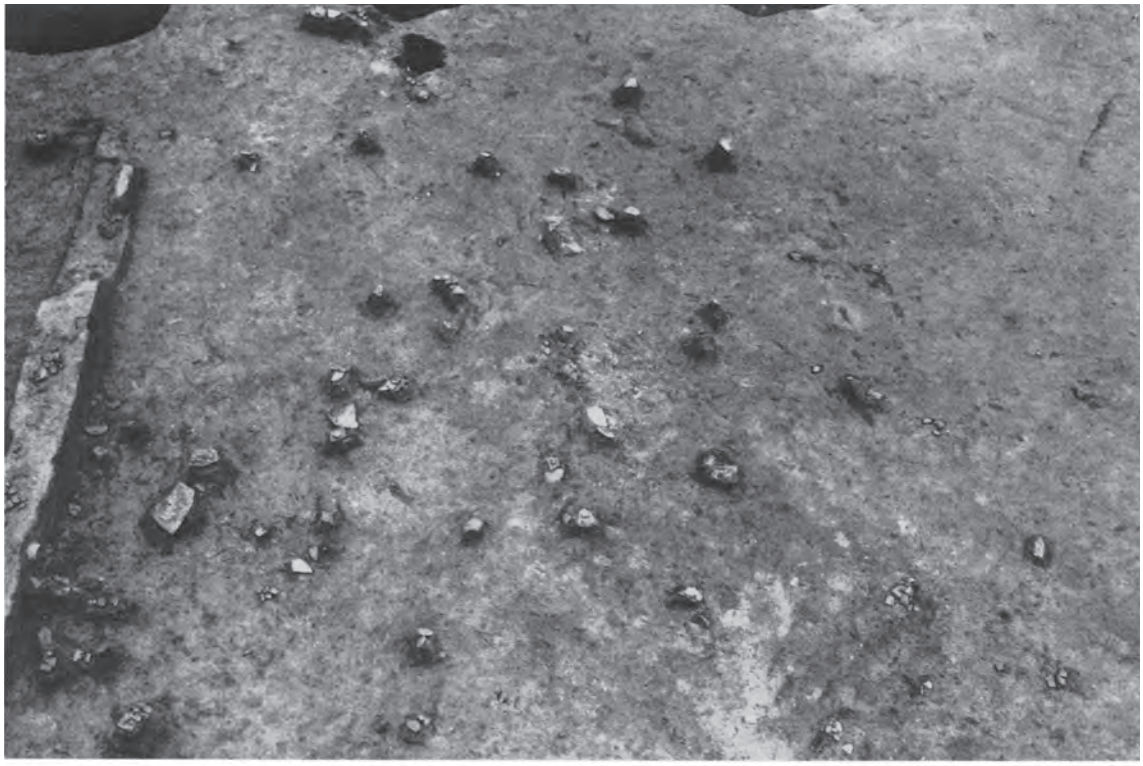


63　14号土坑

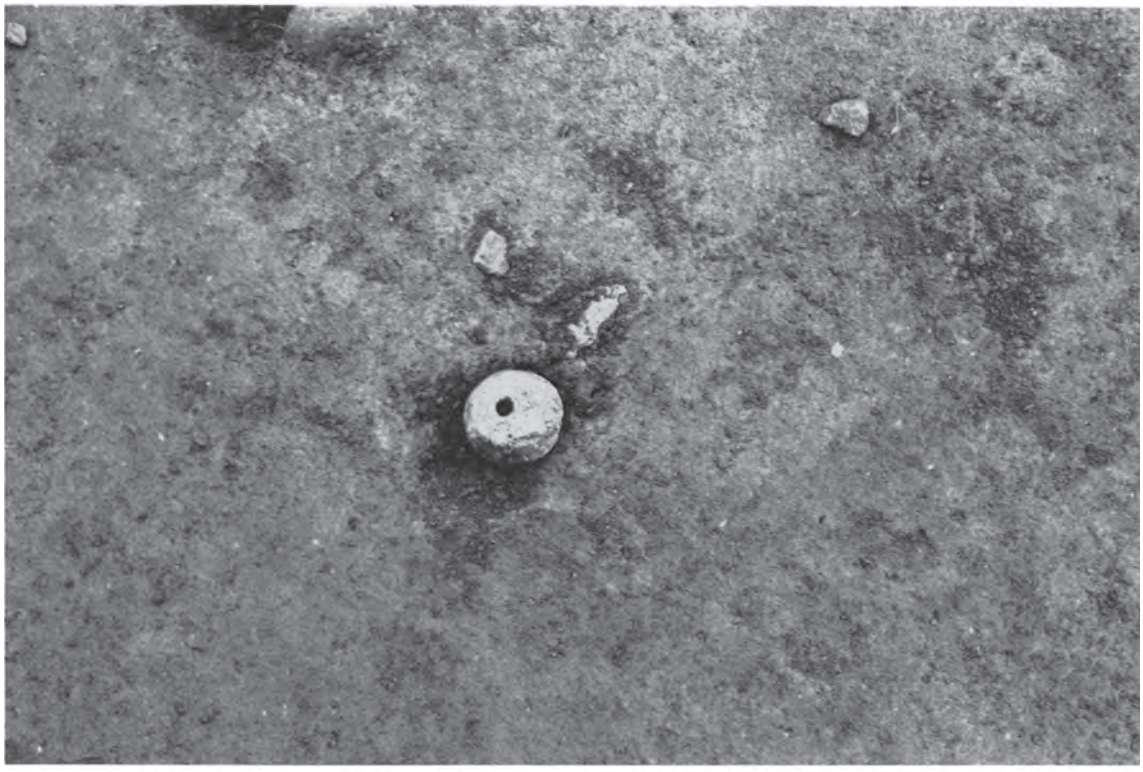


64　16号土坑

65　15号土坑



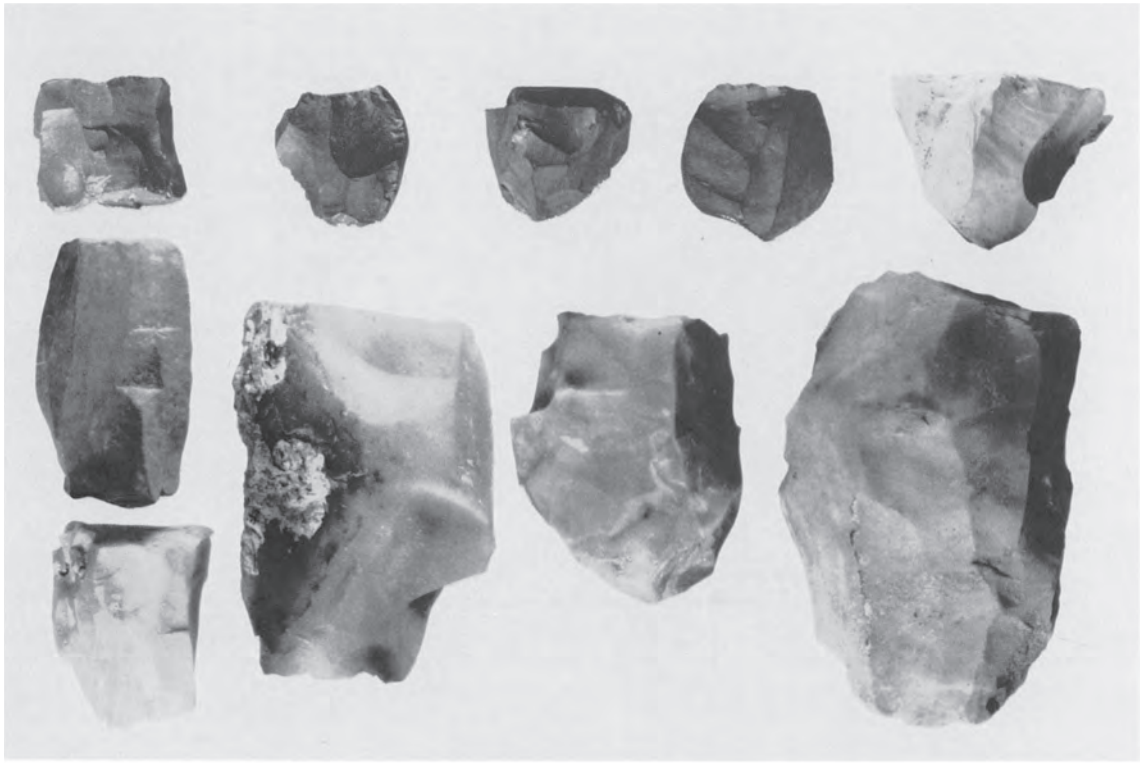
66　中央区遺物包含層遺物出土状況



67　中央区遺物包含層紡錘車出土状況

68　旧石器時代のナイフ形石器・彫器・ドリル・剝片

1・2・3・4 …ナイフ形石器　5・17…彫器
6・7…ドリル　8～16・18～30…剝片

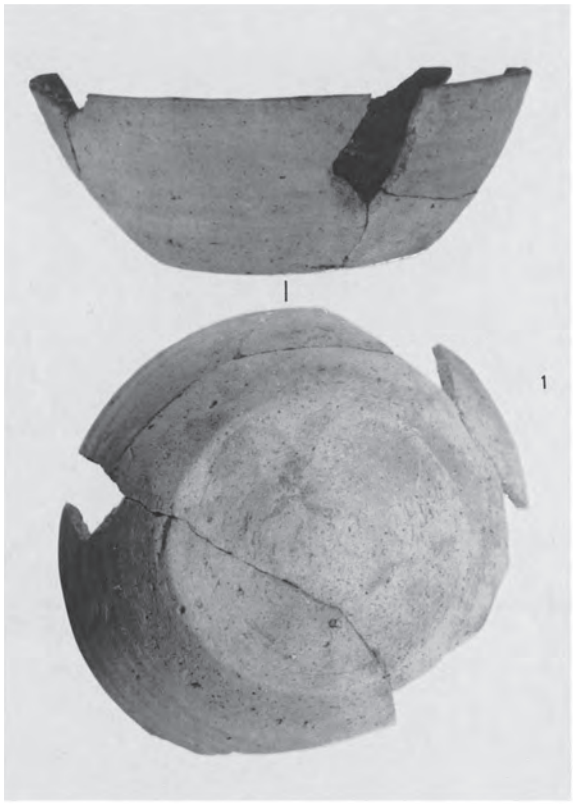


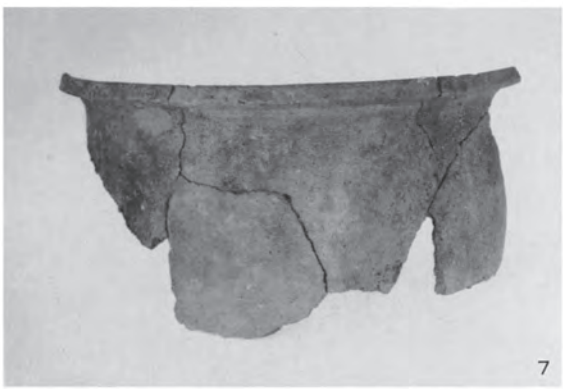
69　旧石器時代の石核 I

70　旧石器時代の石核 II

71　旧石器時代の石核・剝片

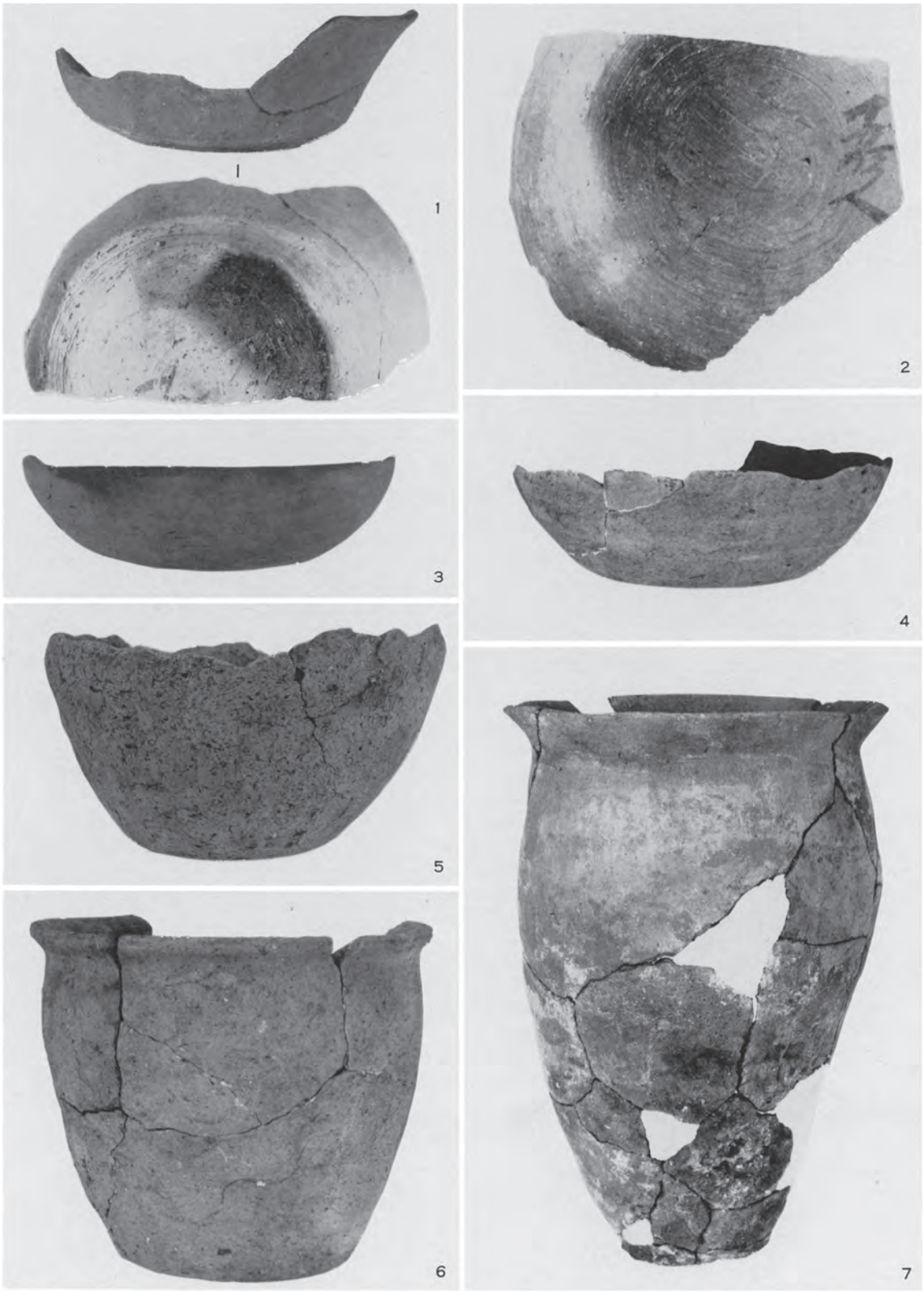
72　旧石器時代の磨石・たたき石





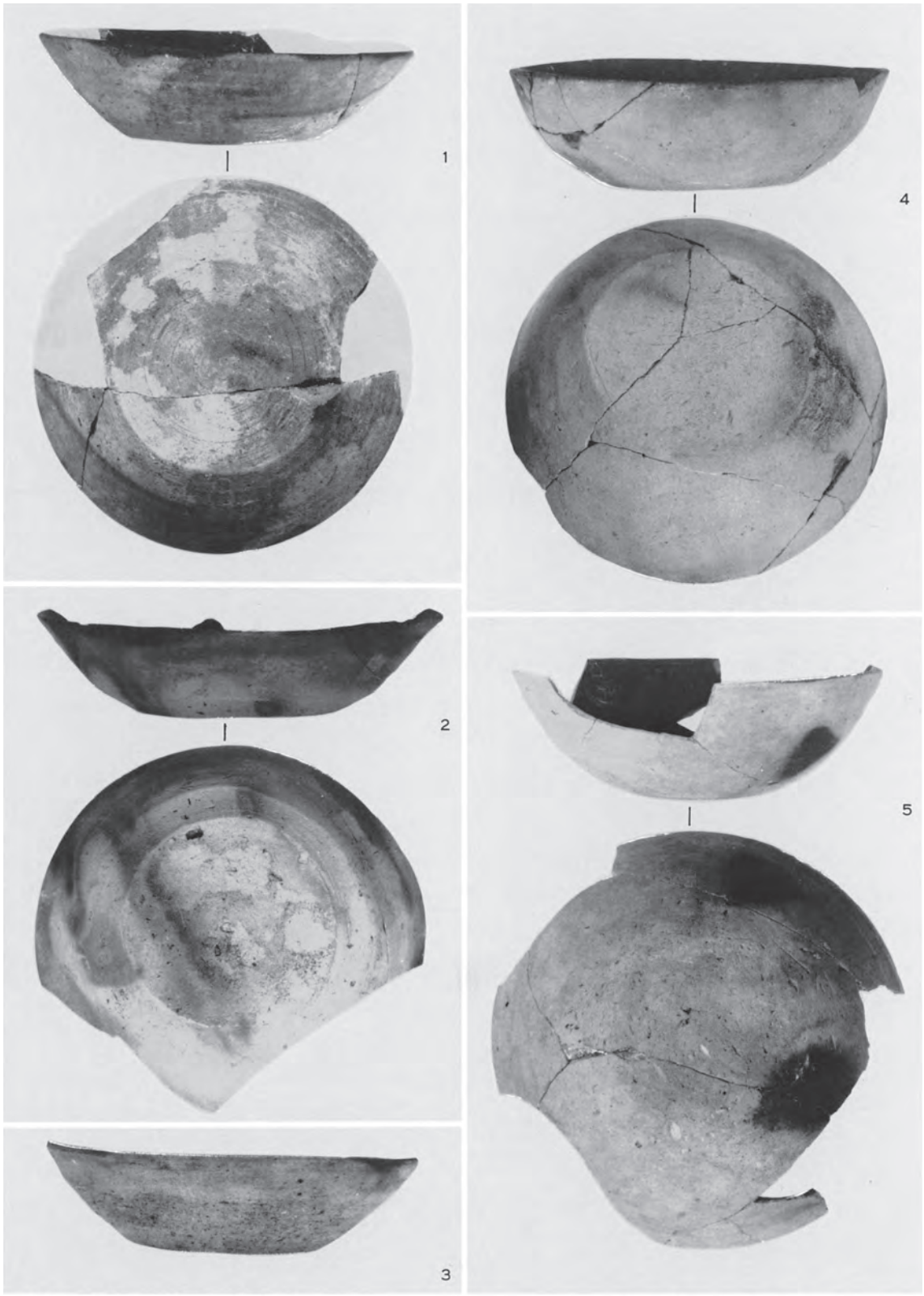
73 24・25・26号住居跡出土土師器・須恵器

24号住居跡（1…杯2　2…杯1）
25号住居跡（3…杯1　4…須恵器杯　5…甕）
26号住居跡（6…杯1　7…甕）



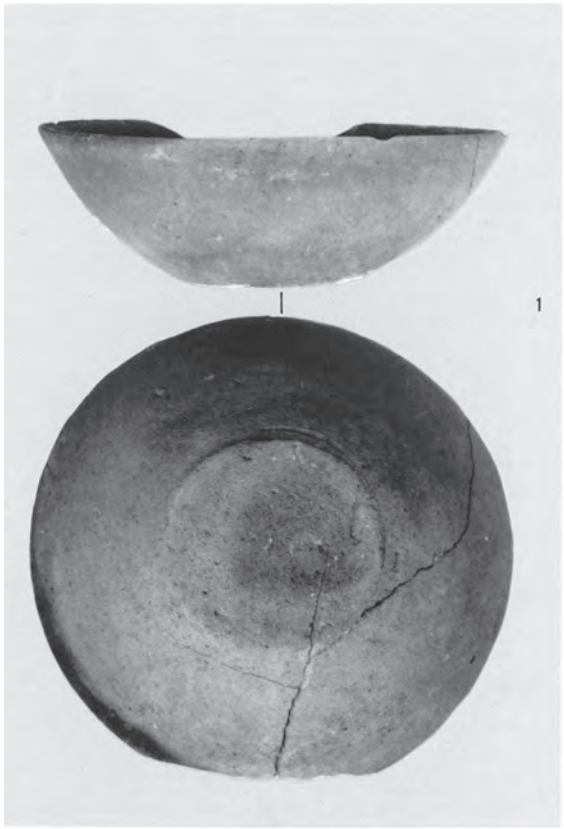
74　27・30号住居跡出土土師器

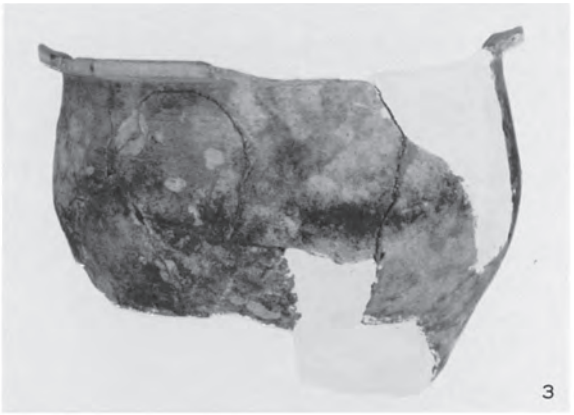
27号住居跡（1…杯３　2…杯２　3…杯４　5…鉢２　6…鉢１）
30号住居跡（4…杯１　7…甕）



75 31・32号住居跡出土土師器

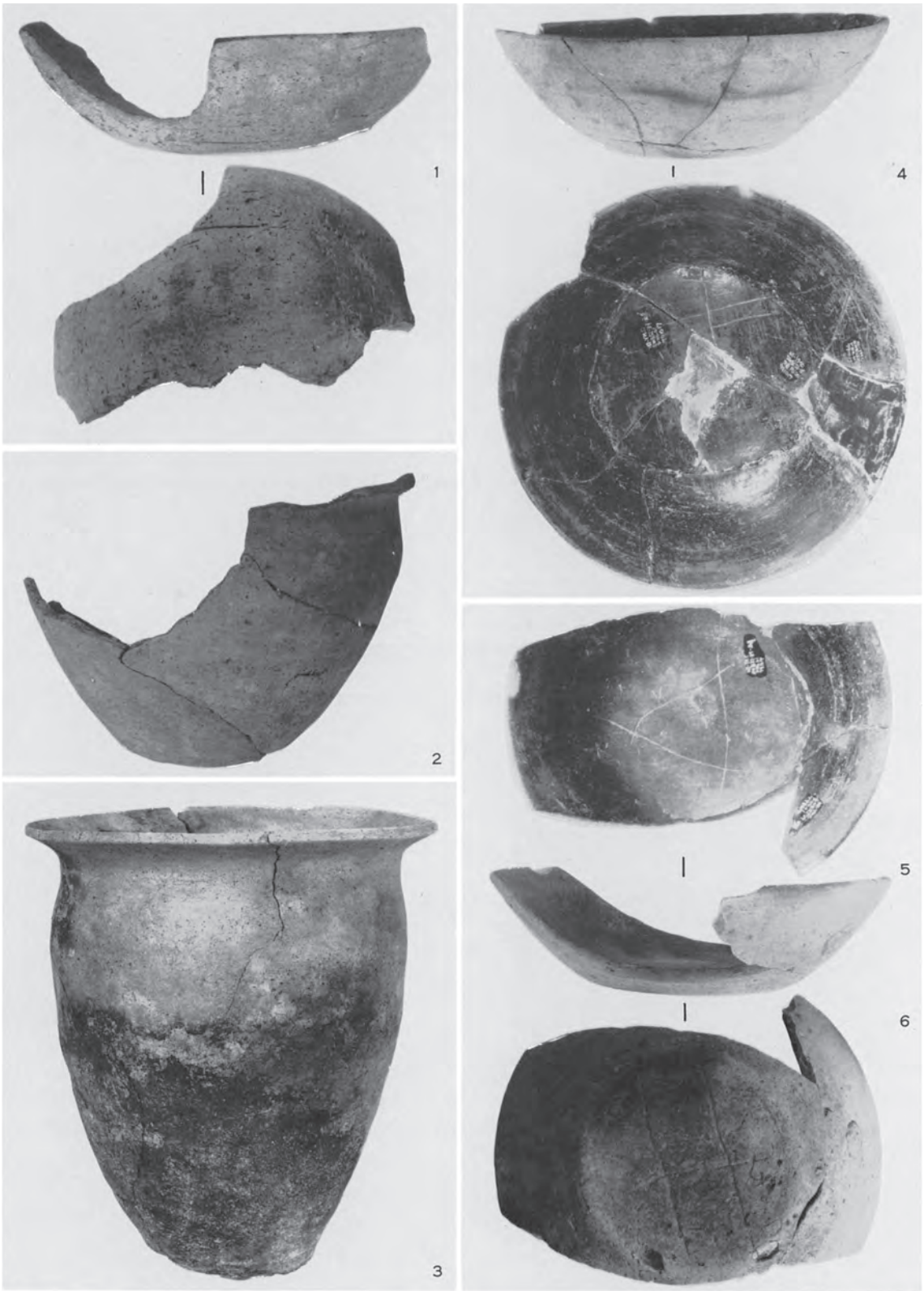
31号住居跡（1…杯1　2…杯3　3…杯2）
32号住居跡（4…杯6　5…杯7）





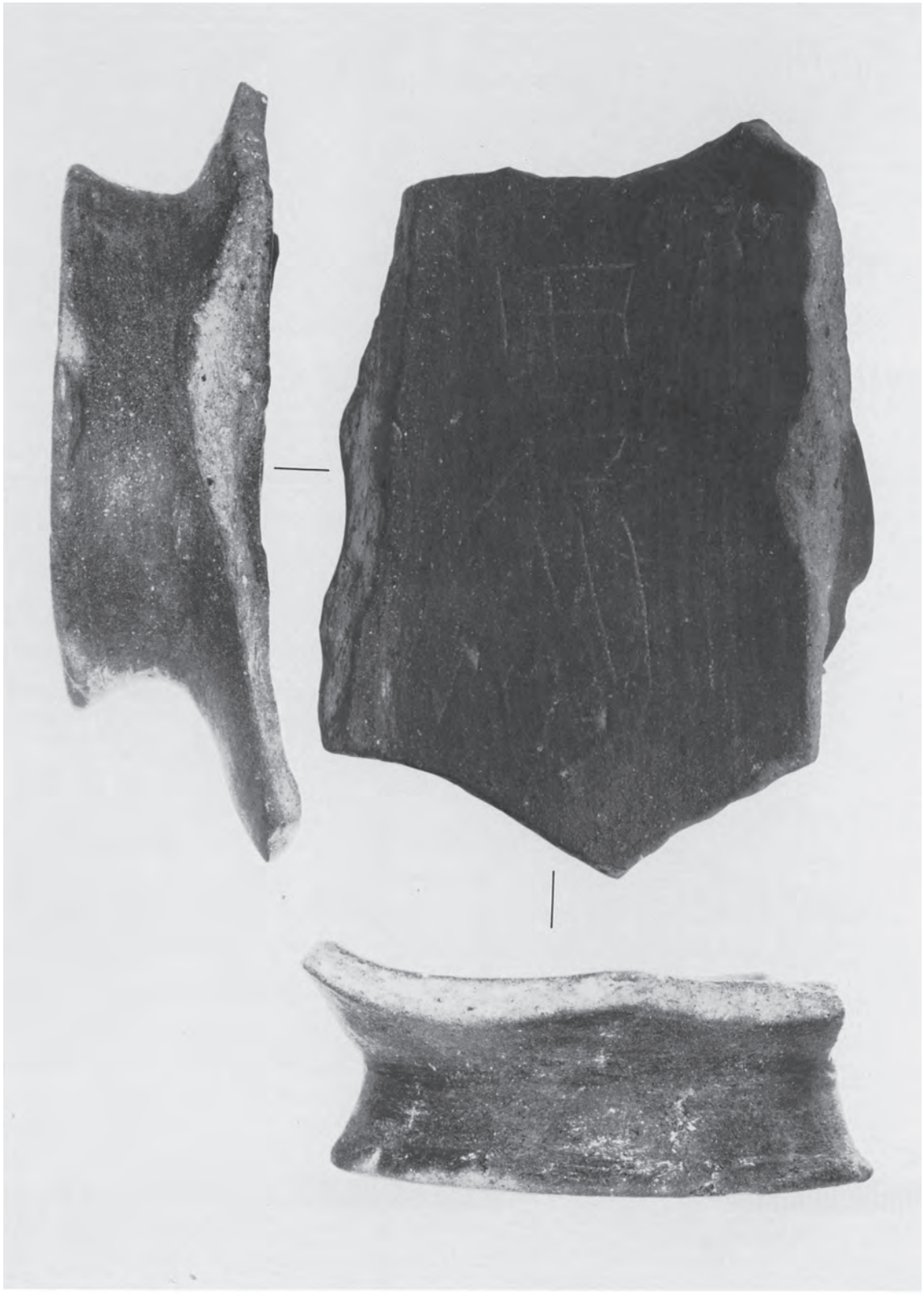
76　32・35・36号住居跡，19号掘立柱建物跡出土土師器・須恵器

32号住居跡（1…杯4　2…甕1）
35号住居跡（3…甕）
36号住居跡（4…杯　5…須恵器壺）
19号建物跡（6…杯）

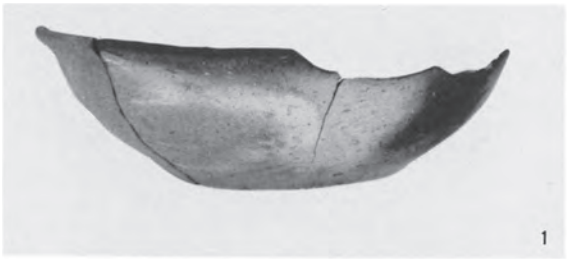


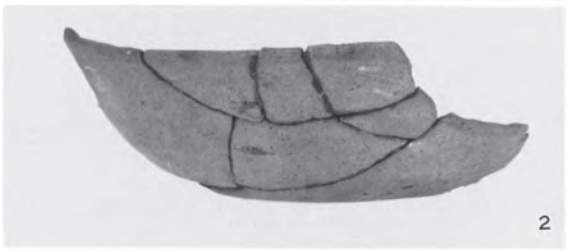
77 37・39号住居跡出土土師器

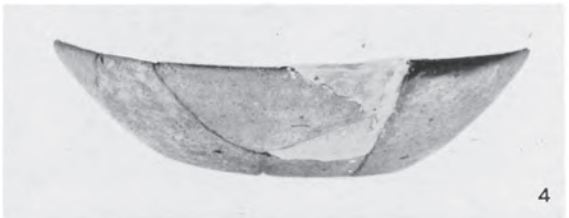
37号住居跡（1…杯1　2…甕1　3…甕3）
39号住居跡（4…杯2　5…杯5）

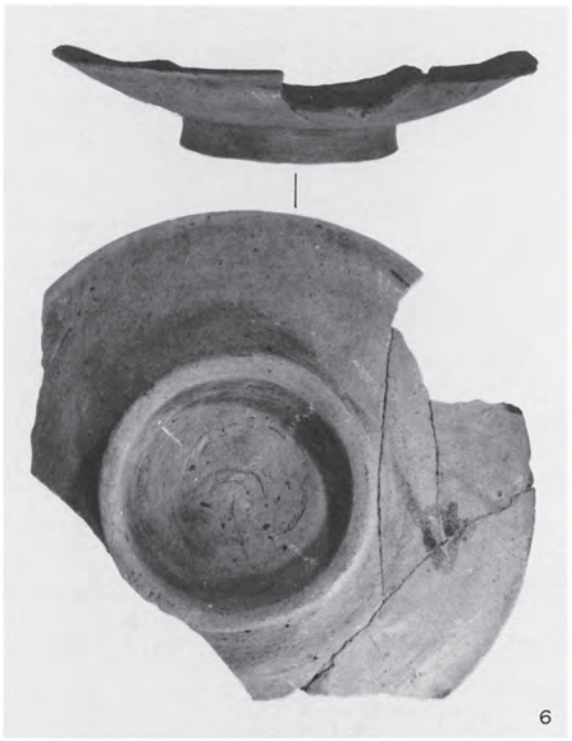


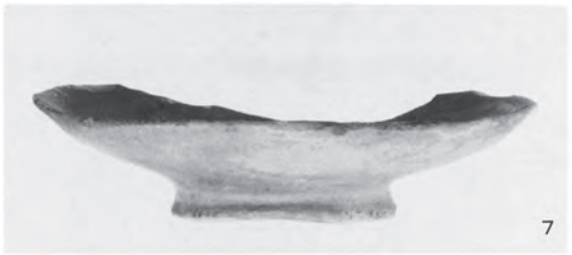
78　42号住居跡出土土師器（耳杯）









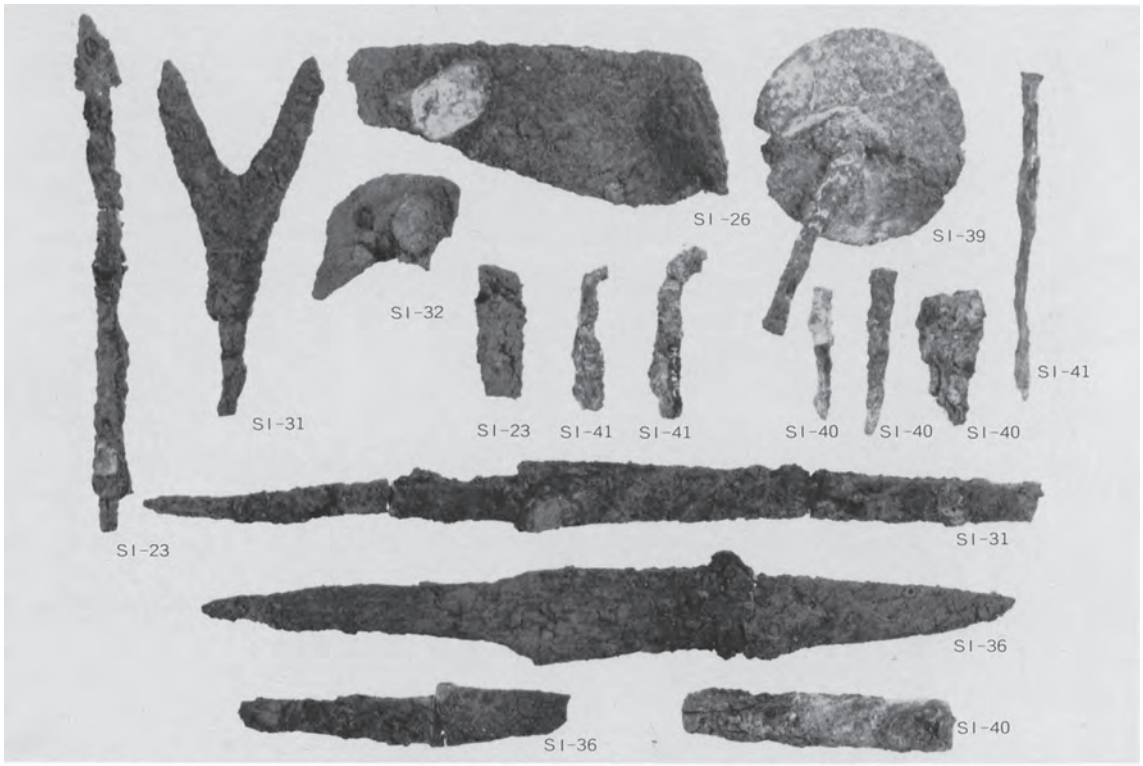


79 40·41号住居跡，遺物包含層出土土師器

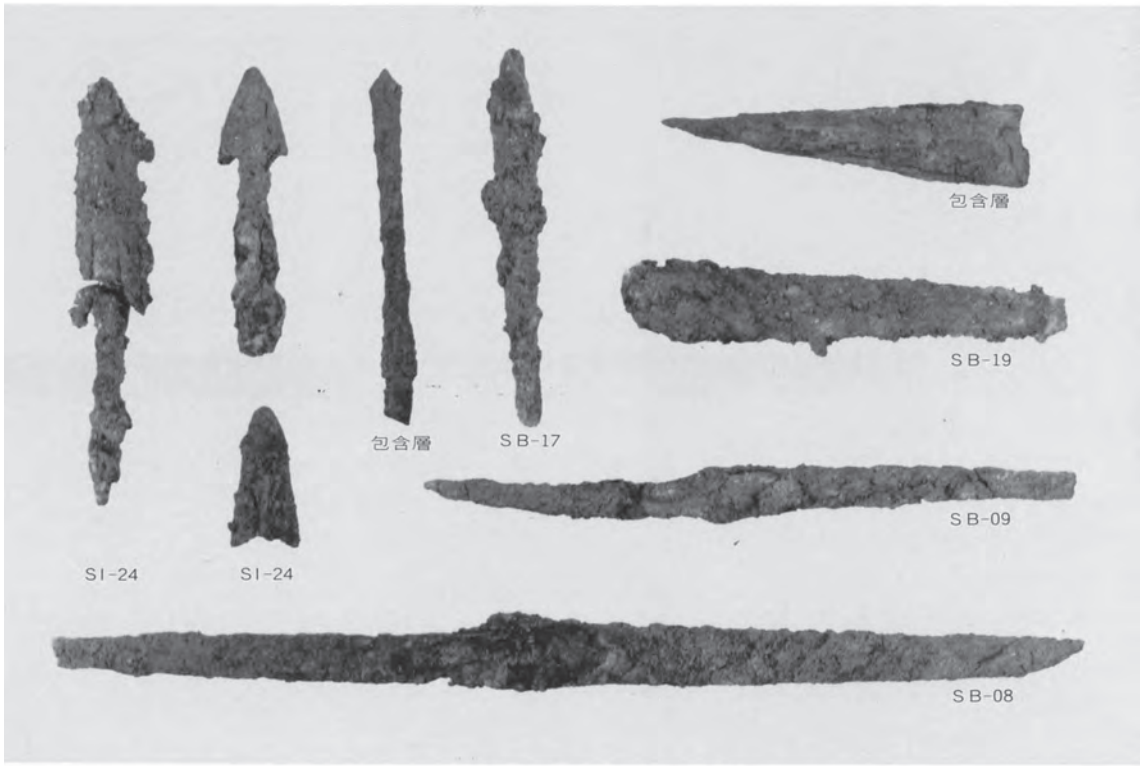
40号住居跡（1…杯2　2…杯1　3…甕）
41号住居跡（4…杯）
中央区遺物包含層（5…杯　6…高台皿　7…高台皿

80　遺物包含層出土土師器・紡錘車・その他

中央区遺物包含層（１…高台皿　２…杯　３…鉢　４…紡錘車）
西南区遺物包含層（５…杯）



81　23・26・31・32・36・39・40・41号住居跡出土鉄器・鉄製品



82　24号住居跡，8・9・17・19号掘立柱建物跡，包含層出土鉄器・鉄製品

福島県文化財調査報告書

国営総合農地開発事業

母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ

昭和55年3月31日　発行

編　　集　財団法人 福島県文化センター（遺跡調査課）

発　　行　福島県教育委員会（〒960）福島市杉妻町2−6

財団法人 福島県文化センター（〒960）福島市春日町5−54

印　　刷　株式会社 山川印刷所（〒960）福島市八木田神明98

図版印刷　㈲ 平電子印刷所（〒976）いわき市平北白土字西ノ内13